

白兔に遺された、最強
と最恐の造られしもの

覇幻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◆◆原作17巻の続きを妄想で書きました！◆◆

【フレイヤ・ファミリア】と【ヘスティア・ファミリア】の戦争遊戯の合意をした後…。

目次

300話までの時系列状況	1
戦争遊戯前（回想含む）	
第1話 白兔、卒倒。	6
第2話 処女神、苦惱。／ 勇者、尋	
問。	12
第3話 劍姫、無自覚。	19
第4話 勇者、期待。	26
第5話 受付嬢、激怒。／ 老神、裁	
決。	31
第6話 白兔、起床。	37
第7話 鍛冶神、推断。	44
第8話 白兔、開封。	50
第9話 侍女長、決心。	57
第10話 白兔、面映。	63
第11話 女神、恐怖。	69
第12話 白兔、熟考。	77
第13話 建築神、感傷。／ 白兔、	
開封Ⅱ。	83
第14話 執事長、回顧。	90
第15話 処女神、賛美。／ 執事、	
分析。	95
第16話 白兔、気落。	101
第17話 処女神、嫉妬。	106
第18話 執事長、宣誓。	115

第19話	栗鼠、蒼白。	121
第20話	栗鼠、宣誓。	127
第21話	栗鼠、歡喜。	133
第22話	妖精劍士、再會。	139
第23話	妖精劍士、告解。	145
第24話	妖精劍士、決意。	151
第25話	正義神、追想。	158
第26話	後輩、見直。	165
第27話	正義神、思慮。	174
第28話	後輩、受入。	181
第29話	正義神、呆然。	187
第30話	後輩、困惑。	194
第31話	正義神、再會。	200

第32話	神々、啞然。	208
第33話	処女神、心配I。	214
第34話	旅神、追憶。	219
第35話	旅神、尋問。	225
第36話	旅神、精算。	236
第37話	万能者、溜息	241
第38話	侍從長、管理。	249
第39話	蠱毒王、侵入	254
第40話	侍從長、尋問。	260
第41話	処女神、襲擊。	266
第42話	処女神、感嘆。	272
第43話	不冷、決心。	280
第44回	不冷、同情。	287

第45話	猛者、疲弊。	294	第58話	応援妖精、狂喜。	389
第46回	猛者、激怒。	301	第59話	麗傑、消沈。	397
第47回	白兔、快調。	309	第60話	蠱毒王、見附。	406
第48回	執事長、再会	315	第61話	悲観者、蒼白。	417
第49話	薬神、独白	324	第62話	悲観者、恐怖。	424
第50話	医神、激怒。	331	第63話	聖女、驚愕。	431
第51話	聖女、後悔	339	第64話	白兔、混乱。	437
第52話	侍従長、面談。	346	第65話	白兔、眠気。	447
第53話	侍従長、説明。	352	第66話	豊穰神、再会。	455
第54話	愚者、号泣。	359	第67話	豊穰神、意欲。	461
第55話	受付嬢、安堵。	369	第68話	老神、焦燥。	468
第56話	麗傑、屈服。	377	第69話	機関長、愚痴。	477
第57話	応援妖精、豹変。	383	第70話	機関長、絶望。	485

第71話	勇者、危惧。	493
第72話	怒蛇、氣絶。	499
第73話	大切断、收拾。	506
第74話	凶狼、自問。	513
第75話	重傑、追惜。	519
第76話	勇者、焦燥。／不冷、予感。	525
第77話	劍姬、満足。	535
第78話	妖精王女、後悔。	543
第79話	妖精王女、回想。	553
第80話	妖精王女、謝意。	561
第81話	妖精王女、墓参。	570
第82話	千妖精、暴走。	581

第83話	千妖精、詰問。	588
第84話	愚者、引越。	598
第85話	愚者、入浴。	603
第86話	老神、不動。	613
第87話	道化神、予感。	619
第88話	道化神、驚愕。	626
第89話	妖精王女、感涙。	633
第90話	千妖精、興奮。	643
第91話	大切断、駄々。	650
第92話	勇者、懺悔。	659
第93話	受付嬢、判明。	669
第94話	聖女、調合。	678
第95話	聖女、歓談。	686

第96話	聖女、逃避。	791	第109話	侍從長、詳說。	867
第97話	猛者、匙投。	785	第110話	執事長、揺動。	861
第98話	猛者、安堵。	775	855		
第99話	女將、折檻。	768	第111話	執事長、祈願。	
第100話	道化神、不安。	760	第112話	正義神、憤激。	
第101話	勇者、驚愕。	753	第113話	妖精劍士、改名。	
第102話	受付嬢、勘付。	742	828		
第103話	重僕、疲弊。	733	第114話	後輩、作製。	837
第104話	泥犬、捕縛。	727	第115話	妖精劍士、稽古。	
第105話	泥犬、恫喝。	718			
第106話	美神、衝動。	711			
第107話	白兔、再会。	701			
第108話	処女神、鎮静。	694	第118話	処女神、提案。	

第129話	正義神、暴露。		961
第128話	正義神、打明。		953
第127話	処女神、戰場。		944
戦争遊戯中（回想含む）			
第126話	処女神、驚愕。		936
第125話	道化神、感動。		928
第124話	旅神、見届。		919
第123話	白兔、緊張。		910
第122話	勇者、失態。		900
第121話	猛者、畏敬。		891
第120話	旅神、準備。		885
／ 白兔、朦朧。			874
第119話	猛者、渋々／		857
	勇者、動揺		

第142話	正義神、墓参。		1063
第141話	執事長、読取。		1056
第140話	象神詩、帰還。		1047
第139話	白兔、発動I。		1036
第138話	処女神、回想。		1028
第137話	道化神、放棄。		1021
第136話	千妖精、唾然。		1013
第135話	勇者、当惑。		1005
第134話	神々、興奮。		999
第133話	猛者、激突。		989
第132話	武神、解説。		983
第131話	美神、口論。		977
第130話	勇者、分析。		967

第143話	白兔、発動Ⅱ		1070
第144話	聖女、診察。		1077
第145話	白兔、発動Ⅲ	/	1083
	侍従		
長、冷静。			
第146話	執事長、諫言。		1095
第147話	愚者、驚愕。		1105
第148話	静寂、畏敬。		1116
第149話	妖精劍士、号泣。		
1125			
第150話	後輩、初対面。		1132
第151話	侍従長、暴露。		1140
第152話	侍従長、助言。		1146
第153話	執事長、談話。		1155
第154話	執事長、解説。		1161
第155話	執事長、感謝。		1168
第156話	白兔、躊躇。		1174
第157話	白兔、号泣。		1181
第158話	処女神、更新Ⅰ。		
1191			
第159話	蠱毒王、余裕。		1198
第160話	勇者、目覚。		1205
第161話	九魔姫、接触。		1214
第162話	主任猫、狼狽。		1222
第163話	凶狼、冷静。		1232
第164話	狡鼠、暴露。		1240
第165話	劍姫、激怒。		1247

第166話	処女神、心配Ⅱ。	1260
第167話	栗鼠、考察。	
第168話	紅花、決断。	
第169話	毒舌女、敗北。	
第170話	狐姫、思案。	
第171話	絶†影、感心。	
第172話	侍従長、委託。	
第173話	侍従長、叱咤。	
第174話	狐姫、決心。	
第175話	静寂、後悔。	
第176話	処女神、歡喜。	
第177話	栗鼠、考案。	

13471338133113221314130612981291128012731267

第178話	栗鼠、疑問。	1358
第179話	鍛冶神、呆然。	1368
第180話	单眼師、我儘 ／鍛冶神、	
我儘。		1374
第181話	象神杖、頭痛。	1384
第182話	象神、従属。	1391
第183話	音痴猫、覚悟。	1402
第184話	黒拳、覚悟。	1408
第185話	黒猫、予感。	1414
第186話	黒猫、恐怖。	1422
第187話	音痴猫、嘆願。	1430
第188話	静寂、完治。	1441
第189話	処女神、傾聴。	1453

第190話	処女神、不知。		1460
第191話	凶狼、絶句。		1469
第192話	主任猫、苦戦。		1478
第193話	劍姫、動揺。		1487
第194話	超凡夫、揉事。		1497
第195話	重傑、抵抗。／九魔姫、 観念。		1508
第196話	主任猫、焦燥。		1520
第197話	麗傑、驚愕。		1529
第198話	麗傑、呆然。		1536
第199話	栗鼠、休憩。		1543
第200話	女将、隆起。		1553
第201話	猛者、問掛。		1562

第202話	千妖精、応援。		1573
第203話	白妖杖、絶句。		1582
第204話	竜娘、応援。／白兔、 突破。		1588
第205話	白兔、英斬。		1598
第206話	白兔、決着。		1605
第207話	白兔、胴上。		1611
第208話	処女神、宣言。		1618
戦争遊戯の後始末			
第209話	勇者、帰還。		1628
第210話	女将、喝入。／白兔、 関。		1635
第211話	道化神、絶句。		1644

第224話	劍姬、衝擊Ⅰ。	
第223話	美神、後処理Ⅴ	
第222話	美神、後処理Ⅳ	
第221話	黒妖劍、待焦。	
第220話	美神、後処理Ⅲ	
第219話	美神、後処理Ⅱ	
第218話	美神、後処理Ⅰ	
第217話	白妖杖、呆然。	
第216話	白妖杖、考慮。	
第215話	美神、感謝。	
第214話	美神、驚愕。	
第213話	劍姬、挙手。	
第212話	道化神、悔恨。	

1751174217331724171717091700168916831675166816591652

第235話	街娘、恩恵。	
第234話	勇者、感謝。	
第233話	勇者、觀察。	
第232話	貴猫、歡喜。	
1806	第231話 侍従長、教育Ⅰ。	
第230話	侍者、決心。	
心。		
第229話	白兔、発動Ⅴ／凶狼、	
第228話	純潔園、安堵。	
第227話	九魔姫、納得。	
第226話	九魔姫、振返。	
第225話	劍姬、不安。	

1844183218231813

17961787 決 1777177117651759

第236話	街娘、呆然。	—	1851	第247話	九魔姫、依頼。	—	1932
第237回	白兔、発動Ⅳ／執事長、感	感	1858	第248話	劍姫、衝撃Ⅱ	—	1938
—	—	—	—	第249話	千妖精、驚愕。	—	1945
第238話	執事長、委託。	—	1866	第250話	千妖精、紹介。	—	1952
第239話	暴喰、感謝。	—	1873	第251話	純潔園、蒼白。	—	1961
第240話	暴喰、安堵。	—	1882	第252話	大切断、感心。	—	1968
第241話	暴喰、恐怖。	—	1891	第253話	侍従長、紹介。	—	1975
第242話	九魔姫、心配。	—	1896	第254話	静寂、事実。	—	1981
第243話	処女神、面談。	—	1903	第255話	静寂、推薦。	—	1987
第244話	道化神、委託。	—	1911	第256話	九魔姫、安心。	—	1993
—	—	—	—	第257話	侍従長、面談Ⅱ	—	2002
日常編（改宗組のその後）	—	—	—	第258話	処女神、回顧。	—	2009
第245話	九魔姫、口論。	—	1919	第259話	処女神、更新Ⅱ	—	2017
第246話	九魔姫、驚愕。	—	1926	—	—	—	—

第260話	執事長、報告。	
第261話	侍從長、招集	
第262話	侍從長、危惧。	
第263話	受付嬢、決心。	
第264話	白兔、準備。	
第265話	悲觀者、謝罪。	
第266話	愚者、接続。	
第267話	愚者、様子見。	
第268話	愚者、感激。	
第269話	愚者、感涙。	
第270話	劍姫、苛々。	
第271話	劍姫、困難。	
第272話	劍姫、入隊。	

2124211621092103209620902083207520672058204820402031

第273話	千妖精、納得。	
第274話	千妖精、修行。	
第275話	千妖精、覚悟。	
第276話	処女神、驚愕。	
第277話	処女神、質問。	
第278話	紅花、驚愕。	
第279話	狡鼠、懷誘。	
第280話	侍從長、考察。	
第281話	侍從長、教示。	
第282話	純潔園、觀戰。	
第283話	純潔園、切替。	
第284話	純潔園、陥落。	
第285話	暴喰、忠告。	

2218220922012193218621802174216621602154214721382131

第286話	侍従長、報告。	2262
第287話	九魔姫、閲覧。	
第288話	女将、苛々。	
第289話	街娘、代弁。	
第290話	白兔、深層。	
第291回	妖精劍士、遭遇。	
第292回	街娘、準備。	
第293回	音痴猫、前向。	
第294回	正義神、稽古。	
第295回	道化神、観戦。	
第296回	侍従長、観察。	
第297回	九魔姫、驚愕。	
230823022294228722802272		22542247224022332226

第298回	正義人、突入。	
第299回	月女神、読書。	
第300回	処女神、心配Ⅲ。	
2332		
日常編(〇〇合流)	※〇〇は一柱または一人とは限りません。	
第301回	義祖母、手紙。	
第302回	義祖母、後悔。	
第303回	軍王子、降伏。	
第304回	軍神、恐怖。	
第305回	義祖母、指示。	
第306回	愛浮呂、疾走。	
第307回	処女神、招集。	
2395238623782367235823502343		23262317

第319回	白兔母、起床。		2497
第318回	侍従長、傍聴。		2491
第317回	侍従長、警告。		2484
第316回	義祖母、対面。		2474
第315回	白兔、号泣II		2466
長、介抱。			
第314回	白兔、発動VI	／	2458
第313回	義祖母、驚愕。		2449
第312回	義祖母、見送。		2438
第311回	義祖母、待望。		2430
第310回	愛浮呂、再会		2420
第309回	月女神、再会。		2412
第308回	象神、驚愕。		2403

第331回	侍従長、手筈。		2597
第330回	万能者、観戦。		2588
第329回	処女神、観戦。		2581
第328回	月女神、恩恵。		2571
第327回	月女神、愕然。		2562
第326回	月女神、請願		2554
第325回	月女神、訪問		2546
第324回	義祖母、決心。		2537
第323回	義祖母、御礼。		2530
第322回	執事長、説明。		2521
第321回	静寂、感動。		2513
2505			
第320回	白兔母、口喧嘩。		

2694	第343話	側近(母)、勘付。	2687
	第342話	受付嬢、安堵。	2680
	第341話	九魔姫、蒼白。	2669
	第340話	道化神、呆然。	2659
	第339話	九魔姫、衝撃。	2649
	第338話	受付嬢、驚愕。	2638
	第337話	白兔母、対面。	2631
	第336話	暴喰、焦燥。	2624
	第335話	暴喰、絶句。	2617
	第334話	暴喰、更新。	2611
	第333話	暴食、納得。	2604
	第332回	暴喰、回想。	

2749	第351話	道化神、觀察。	2757
2742	第350話	側近(父)、対決。	
	第349話	側近(母)、説教。	2732
	第348話	崇拜妹、気付。	2724
2717	第347話	崇拜妹、危機。	
	第346話	側近(父)、葛藤。	
2709	第345話	側近(父)、激昂。	
2701	第344話	側近(母)、謝罪。	

第352話	凶狼、観戦。／侍従長、助	28764
言。		
第353話	狡鼠、賭博。	27712
第354話	勇者、観戦。	27792
第355話	九魔姫、疑問。	27892
第356話	侍従長、勧誘。	27962
第357話	月女神、指導。	28032
日常編（ほのぼの?）		
第358話	街娘、反省。	28112
第359話	絶対悪、回想I	28212
第360話	絶対悪、回想II	28302
第361回	絶対悪、回想III	28392
第362回	絶対悪、回想IV	28472

第363話	静寂、予感。	28562
第364回	静寂、正座。	28652
第365回	静寂、転換。	28752
第366回	静寂、反省。	28832
第367回	静寂、安堵。	28892
第368回	白兔母、昇天。	28952
第369回	処女神、暴露。	29042
第370回	側近（母）、挨拶。	29132
第371回	九魔姫、考慮	29202
第372回	側近（父）、愚痴。	29272
第373回	暴喰、開店。	29372

第374回	女将、突撃。	
第375回	白兔、赤面	
第376回	白兔、羞恥。	
第377回	白兔、発動VII	
第378回	凶狼、謝罪。	
第379回	凶狼、追詰	
第380回	静寂、吃驚。	
第381回	静寂、看破。	
第382回	静寂、衝撃。	
第383回	静寂、説明。	
第384回	白兔母、研修。	
第385回	白兔母、期待。	
第386回	義祖母、面倒。	

3042303530263019301230032994298629802972296429572947

第387回	毒舌女、暴露。	
第388回	毒舌女、自供。	
第389回	絶↑影、質問	
第390回	執事長、提案	
第391回	疫病神、待伏。	
第392回	疫病神、包囲。	
第393回	疫病神、絶望。	
第394回	処女神、達観。	
オラリオ連合の初クエスト(前兆)		
第395回	義祖母、神会。	
第396回	義祖母、疑念。	
第397回	処女神、説教。	
第398回	正義神、会議。	

3131312431173110

31003093308530773069306230563049

第399回	月女神、決心。	
第400回	美神、同情。	
第401回	砂女王、再会	
第402回	砂女王、相談。	
第403回	侍従長、質問。	
第404回	街娘、再会。	
第405回	砂女王、呆然。	
第406回	絶†影、不快。	
第407回	絶†影、同情。	
第408回	狐姫、逃亡。	
第409回	狐姫、恐怖。	
第410回	象神詩、反省。	
第411回	毒舌女、苦惱。	

3231322532163209320031923182317531673159315231443137

第412回	義祖母、準備。	
第413回	処女神、確信。	
第414回	先見神、想定外。	
3257		
第415回	先見神、庇護。	
第416回	先見神、心配。	
第417回	侍従長、考慮。	
第418回	侍従長、期待。	
第419回	栗鼠、補給。	
第420回	栗鼠、觀察。	
第421回	義祖母、決議。	
第422回	栗鼠、進行I	
第423回	栗鼠、進行II	

332033143306329932913285327932733264

32483239

第424話	栗鼠、進行Ⅲ	
第425話	栗鼠、進行Ⅳ	
第426話	栗鼠、進行Ⅴ	
第427話	侍從長、觀察。	
第429話	侍從長、拉致	
第430話	愛浮呂、激怒	
第431話	愚者、打合。	
第432話	道化、愚痴。	

33743369335933523345333833323326

300話までの時系列状況

「フレイヤ・ファミリア」と「ヘスティア・ファミリア」の戦争遊戯の合意をした日を1日目としています。

17巻最後（フレイヤ様回想除く）のヘスティア様の、「戦争遊戯だ！」との宣言からスタートです。

回想も含みますので、かなり時系列がごちゃごちゃになっていますので整理しました。

（自分もわからなくなってきましたので）

日常編（改宗組のその後）までとしています。

●戦争遊戯前

1～5日目はオラリオside, リューside, ロキsideと分かれています。

・1日目

オラリオside 第1話～第18話

リューside アストレア様のところへ向かっている途中。

ロキサイド 第71話〜第75話

・2日目

オラリオサイド 第19話〜第21話・第32話〜第47話

リュルサイド 夜中にアストレア様の住居近くあたりに到着し、夜が明けるの

を待つ。

ロキサイド 第78話〜第82話前半

・3日目

オラリオサイド 第48話〜第70話 第76話〜第79話

リュルサイド 第22話〜第26話前半

ロキサイド 第76話〜第77話

・4日目

オラリオサイド 第84話〜第86話 第93話〜第99話

リュルサイド 第26話後半〜第28話

ロキサイド 第82話後半〜第83話 第87話〜第92話

・5日目

オラリオサイド 第104話〜第112話

リュルサイド 第29話〜第31話

ロキ side

第100話～103話

 ここからは人物ごとの視点となります

・ 6 日目

第113話～第119話

・ 7 日目

第120話～第126話

第138話～第141話

・ 8 日目

第142話～第158話

第166話～第180話

・ 9 日目

第181話～第184話

・ 10 日目

第185話～第188話

・ 11 日目

第189話～第190話

第197話～第198話

●戦争遊戯当日

・14日目

第127話〜第137話

第159話〜第165話

第191話〜第196話

第199話〜第212話

第214話〜第215話

●戦争遊戯の後始末、

245話から日常編（改宗組のその後）

・15日目

第213話、第216話〜第228話

第235話〜第241話

第301話

・16日目

第229話〜第234話

第242話〜第269話

・17日目

第270話～第272話

・18日目

第273話～第281話

第302話

・19日目

第282話～第289話

・20日目

第290話～第291話

第303話～第305話

・21日目

第292話～第293話

・22日目

第294話～第297話

・23日目

第298話～第300話

301話以降は通常通りとします。

戦争遊戯前（回想含む）

第1話 白兔、卒倒。

「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯が「ヘルメス・ファミリア」団長アスファイ立ち会いの元で決まった中、僕と神様は手をつないだまま「フレイヤ・ファミリア」ホームから堂々と出た。

…もう手を放してもいいんだけど、神様がこれでもか、と握ってくるんだよなあ…。

そして、見知った顔が多くいて…、

「ぐはあああー！」

「神様あああー！」

リリが神様を体当たりし、そのまま僕にしがみついで、

「ベル様あああああー！リリは、リリはああああ。」

「ちよ、ちよつと落ち着いて、リリ。神様が。」

続いて春姫さんも…、

「ベル様、ベル様、春姫は春姫は、」

「春姫さんも落ち着いてええええええ！」

ワンワンと泣き始めた…。

「おい、お前ら落ち着けよ…。よう、ベル。迎えに来たぞ。」

「ベル殿、申し訳ございません！」

【ヘステイア・ファミア】のみんなが魅了から解除されたことで僕はホツとした。

「みんな…元に戻ってよかった。本当によかった。」

「すまなかつたな、ベル。ところで何があつたんだ？」

僕は先程の戦争遊戯宣言について説明した。

「はあああああ!?何を考えているのですか!」「フレイヤ・ファミア」ですよ!都市最強派閥ですよ!正気ですか!」

リリがさつきまでワンワンと泣いていたのに、

今は戦争遊戯のことを聞いてキーキー怒っていた。

そこへ突き飛ばされた神様がようやく戻ってきた。

「やい、サポーターくん!よくもやってくれたな!つと仕方がないだろ。そうしないと、フレイヤは同じことをやると言ってるんだからさ。やるしかないさ、コンチクショー!」

「やけにならないでくださいよ…。」

「と、とりあえず一旦ホームへ戻りましょう。」

「そ、そうでございますね。こう沢山人がいますと……」

周囲には魅了から解除された、冒険者たち、神々、一般市民が申し訳なさそうに僕へ視線を向けていた。

「え、えーと。みなさん、僕は気にしていませんので……」

(((気にするよ!)))

「はいはい、解散解散! 僕らは疲れてんだ。さあ、帰るぞー!」

「ちよい待ちや、ドチビ。」

あ、ロキ様だ。

「あー疲れたなー。どつかの無乳派閥は何もできなかつたなー。役に立たなかつたなー。」

ちよつ、神様……。それを言ったら……

「何やおー! このドチビがああああ!」

「役立たなかつただろ! この絶壁がああああ!」

いつもの、神様とロキ様の取っ組み合いが始まった。

「ベル!」

「あ、リユーさん! 無事だったんですね! よかったです。」

よかつた、無事だったんだ。

「ベル、あなたは何もなかったのですね。何があったのか教えてくれませんか。」

「ベル、私も教えて?」

「ア、アイズさん!?!」

な、なんでアイズさんも?

「待て【劍姫】。貴方は【ロキ・ファミリア】でしょう。神ロキと神ヘステイアとは仲が悪いと聞いています。敵対派閥の貴方に教えるわけではないでしょう。」

り、リユースさん?

「…仲は悪くないよ。」

あ、目をそらした。

「あれを見て、そう言えますか!」

指差した先には、神様とロキ様がヴェルフとガレスさんに羽交い締めされていた。

「仲は…悪く…ないよ。そういう貴方は?」

あ、話そらした。

「私? アス…いえ主神様は仲悪くありませんが、何か?」

「嘘だね。」

「嘘やな。」

「「嘘だ!」」

へスティア、ロキ、周囲の神が同時に指摘した。

「なっ！いい、いいじゃありませんか。少なくとも私とベルは深い仲にあります！」
「「なっ！」」

「ちよ、ちよつとリユーさああああん。その発言は誤解を招きますからあああ！」
「おい、坊や。どういうことだい？」

アイシャさん!?

「ベルくくん？どういうことかなあ？」

エイナさんも!?

「どういうこととおお！アルゴノウトくんんん!？」

「はあ…、何が起こっているのよ…。」

そこへタイミング悪く、ティオナさんとティオネさんが割り込んできた。

「はわわわ、うーん…キユ〜。」

僕は…今までの疲労もあり頭がパンクになってしまい気絶してしまった。

「ベルくうううん!？」

「「ベル様あああ!？」」

「お、おい!?!しつかりしろ、ベル!?! こりや駄目だ。運ぶぞ!?!」

「も、申し訳ありません。どいてくださーい!?!」

ああ…みんな、ごめん…。

第2話 処女神、苦惱。／ 猛者、尋問。

「ヘステイア・ファミリア」のホームの神室で、

ボクら神友たちが集まって、今回のことを説明した。

「……なるほどね。そういうことだったのね」

「あのフレイヤがな……。ここまでやってベルを手に入れたかったのか。」

「それでもベルは屈しなかった。ある意味、偉業。だな、これは。」

ヘアアイストス、ミヤハ、タケミカツチが集まって、これまでのことを説明した。長

かったなあ……。いやホントに。

「いや〜大変だったよ。本当に、ヘルメスの助言がなければ駄目だったよ。」

まじ、やばかった。マジで。

「あのヘルメスがな……。信じられんが助かったのは事実だな。」

「なんか裏がありそうだけど……。そういえばヘルメスはどうしたの?」

「今回の戦争遊戯をまとめるため、あちこちやつてもらっているよ。」

いや、今回はマジで感謝してるよ。これで異端児ゼノスの件はチャラに……。

いや、それとこれとは別だーうん。

「しかしヘスティア、今回はアポロンやイシユタルとは違う。圧倒的な不利だぞ。」

「：しようがないよ。ベルくんがやると言った以上ボクはそれを支持するしかないよ。」

「勝ち目はあるの？ロキに頭を下げて協力してもらうしかないわよ。」

「下げたくはないが、ああ！下げたくない！だが、下げるしかないだろうね。けど、下げたくない！」

下げたくないいいいい！

「どつちなのだ：。」

「すまん、ヘスティア。うちにレベル4から5がいれば戦力になれたんだが：。」

「その代わりと言ってなんだが、ポーシヨンや回復薬などは無料で提供しよう。」

おお！

「こちらも武器を無料で提供するわ。ついでに樁も貸し出すわ。」

おおおお！

「ありがとう！持つべきものは神友だね！」

嬉しいよ！本当に：。

「しかし、【猛者】はどうするのだ？レベル7だぞ。」

「それなんだよねー。レベル6なら何とかなるかもしれないけど、レベル7はね：、うーん。」

ベルくんがランクアップするとレベル5になり春姫くんのレベル・ブーストがかかれ
ば互角になるけど、レベル7は…キツイ。

「せめて、『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』がいればこんな状況にならな
かったのにね。」

「ん？そんなに強かったのかい？」

「ああ…、あんたはまだ下界に降りたばかりだものね。ええ、強かったわ。」

レベル7が当たり前のようにゴロゴロいて、レベル8、9もいたわよ。」

「レ、レベル8い!? 9う!？」

レベル7が上限じゃなかったのかい!？」

「ああ、確かに彼らは強かったな。しかしそれでも黒竜には勝てなかった…。」

「ただだけ強いんだよ…。黒竜は…。」

「それよりどうするんだ？今回の状況は黒竜ほどではないにしろ、

圧倒的な不利の状況だぞ。」

「「うーん…。」」

…困った。…本当に困った。

レベル7がそこらへんに出てきて、助けてくれないかなー。



【フレイヤ・ファミリア】 ホームの円卓の間で

緊急招集で、最強戦力を集めた。

「フレイヤ様は？」

「…先程ワインを5本空けて、ようやくお眠りになられた…。」

「あれはひどかった。」

「我らが止めようにも痼癩を起こし。」

「ワインをラツパ飲みをしていたな。」

「あのようなフレイヤ様は初めて見る。」

恋人とケンカして、やけ酒した感じだったな…。

「ク…ククク…我ら女神は…ククク。」

「無理して言葉にするな、ヘグニ。」

「どうする？」

「我が主の仰せだ。戦争遊戯で『ヘスティア・ファミリア』を潰す。それだけだ。」

「簡単だ」「ベル一人だけを警戒すればいい」「ほかは雑魚だ」

「どのような条件だろうが、我らは勝つ。それだけだ。」

しかしフレイヤ様の魅了が解除されるとは、神ヘスティアはそれほどの力を持っているのか…。

見かけにはよらないものだな。

その時、どこかの処女神は盛大なくしゃみをかましていた。

「おい、クソ猪。あの裏切り者の女はどうした？」

「…未だに目覚めん。傷は治っているが、ヘイズの治療を無意識に拒否している。」

「ちっ…。さっさと殺せばいいものを」

「フレイヤ様の仰せだ。絶対に死なせるな、とのことだ」

ベル・クラネル、お前はヘルンの願いに応えられるのか？

「問題は【ロキ・ファミア】だな。【ヘスティア・ファミア】と協力したら厄介だぞ」

「あのドワーフめ」

「俺ら一人一人に拳骨を落としやがって」

「めっちゃ痛かった」

「ククク…【劍姫】…」

「あのクソ狼め…。今度会ったらブチ殺してやる。」

「いずれにしろ、我らは勝たねばならぬ。相手が誰であろうとも」

【ロキ・ファミア】との敵対は避けられぬようだな。

決着をつけるには丁度いいだろう。

あの【三首領】とは長い付き合いだしな…。

我らは戦争遊戯について確認をした後、解散しようとしたが、ヘデインが俺を疑惑の目で見ていた。

「オツタル、何故あの愚兎を我らと共に躰けなかった？」

「…ヘデイン、お前がいるなら問題ないと思っただからだ。」

「本当にそれだけか？」

「何が言いたい…。」

ヘデイン、お前なら分かるだろう？

ベル・クラネルは我らと違い、フレイヤ様のオーズの伴侶となる可能性が高いことを…。

「お前はあの愚兎を傷つけないように見える。そう思うのは俺だけか？」

「確かに」「怪しい」「ヘルンの件もあるしな」「何を隠している？」

「ククク…疑わしきものは罰せり…。」

「クソ猪、フレイヤ様に背く気か？」

「…。」

「貴様ら…俺のフレイヤ様への忠義を疑う気か？」

「そうではないなら、あの愚兎はお前が相手しろ。」

「何だと？」

「恐らくあの愚兎は私と闘う気だろう。だがそれに乗る気はない。」

「おや、ヘディン。」「ビビってんのか？」

「プー」「クスクス」

「…宿敵よ…あの兎はお前が相手しなければならぬ…。」

「黙れ、ヘグニ。戦えば勝とう。だが、万が一のこともある。私の頬を傷つけたように
な」

ヘディン…。お前もベル・クラネルに期待しているのか…。

「…いいだろう。俺がベルの相手をする。」

「手加減するんじゃないぞ。クソ猪。」

ベル・クラネル…この戦争遊戯で見極める。

あいつらが求めた…最後の英雄に値するか否かを。

第3話 劍姫、無自覚。

「ロキ・ファミア」

ドン!

テイオナが机に拳を叩きつけている。

「どういうこと!?!」「ヘスティア・ファミア」には協力しないって!?!」

「テイオナ! 落ち着きなさい。…団長、説明していただけますか?」

「フィン! 納得いく理由を説明しやがれ! このまま舐められたままで終われるかよ!」

テイオナは机に叩きつけ、テイオネはテイオナを宥め、ベートさんは苛ついていた。

「フィン、説明してほしい。私も納得できない。」

私もこんな気持ちになったのは初めて。あの子との思い出をよくも…。

「まーまー、みな落ち着きや〜。」

ロキはみんなを落ち着かせているけど…やはりヘスティア様とは違う。

うん、女神としての格が違いすぎる。

「皆、落ち着いてくれ。確かに「フレイヤ・ファミア」は僕らを、いやオラリオを侮辱した。」

「そうだよ！」「ヘステイア・ファミリア」を別にしても「フレイヤ・ファミリア」との抗争の理由にもなるでしょよ！」

「まず、ギルドのロイマンから連絡があった。「ヘステイア・ファミリア」には協力するな、とのことだ。」

「ん〜これ、ウラノスの神意ではないやろうな。ロイマンの独断やな。」

「なら、従う理由はない。」

何もしていない、何もできなかったのに!?!ふざけないで!?!

「だが、もしそれに従えば今後の遠征は免除するとのことだ。」

「何で従うのさ! フィンらしくもない!」

「テイオナ、遠征にいくらかかるのか知っているのかい? この前のクノツソスの戦いで多くを消費した。次の遠征までの資金で余裕はない。君にその全てを補えるのかい?」

「ぐっ!?!」

「そんなの関係ねえっ! メンツを汚されたんだ。ブツ殺すだけだろ。」

コクコク

「まずリヴェリアが戻ってからにしよう。…だが、先程の意見で君らは納得しないだろうっ。」

「当たり前だよ!」

「あんのクソ野郎どもが…殺す。」

ティオナはわかるけど、ベートさんまでも?…やはり危険だ…。

「僕も【ヘステシア・ファミリア】に協力したい。特にベル・クラネルにはね。けど、ギルドがこう睨みをかけている。よっぽど【フレイヤ・ファミリア】を滅ぼしたくはないね。ロイマンは。」

「まー、ロイマンもいろいろあるからなく。」

もう、我慢できない。

私は、フィンの前へ進んだ。

「そんなの関係ない。フィン、協力しないなら私が【ヘステシア・ファミリア】へ改宗する。」

「「なっ!?!」」

「ちよ、アイズたん!それはあかんで!絶対に認めないで!」

「うるさい、ロキ。ヘステシア様を見習って、女神として。」

ヘステシア様のほうがマシ。本当に。

「うぐっ!?!う、うう〜フィン〜。」

「アイズ、それは本気で言っているのかい?ここまで一緒にやってきた皆を裏切るのかい?」

うっ…それを言われると…。

「アイズ、君が怒るのは理解できる。だが、感情だけで僕らを切らないでくれ。いいね？」

フィン、怒ってる…言い過ぎたかな？

「…ごめんなさい…。」

でも…ベルが…。

「僕の意見を言おう。【ヘスティア・ファミリア】には協力しないが、【フレイヤ・ファミリア】と戦争をする。」

「意味わかんねえぞ！フィン！説明しやがれ！」

「…どうやって邪魔するの？」

そう、【ヘスティア・ファミリア】には協力しないのにどうやって？

「単刀直入に言うのと、【ヘスティア・ファミリア】へ戦争遊戯を仕掛ける」

「…なっ?!」

私は思わず、劍に手をかけた。

「アイズ、話を最後まで聞いてくれ。今回は神フレイヤがベル・クラネルに執着したのが原因だ。なら、それを僕らが掠め取るということだ。」

「なぐるほどな。それはおもしろいわ。フレイヤもドチビも吠え面かくやろうな。ヒヒ

ヒ

「…ヘステイア様を殺すの?」

それは駄目。あの女神様は本当の女神様。殺すのは絶対に許さない。

「いや、〔ロキ・ファミリア〕の傘下に置く。アイズ、僕はね。ベル・クラネルだけじゃない、〔ヘステイア・ファミリア〕の頭腦のリリルカ・アーデ、魔劍鍛冶のヴェルフ・クロツゾ、元〔タケミカツチ・ファミリア〕であり攻守面でバランスがいいヤマト・命、元〔イシユタル・ファミリア〕でレベル・ブーストの疑いがあるサンジヨウノ・春姫、そして〔ヘステイア・ファミリア〕とつながりが強い異端児、^{ゼノス}どれもかなり尖っているし優秀だ。それに神ヘステイアは善神中の善神であり、オラリオからの信頼も上位に入るほど厚い。〔フレイヤ・ファミリア〕と違い、僕は全部欲しい。」

うん、フィンはよくわかつている。ロキとは違う。ロキとは。

「…うち、何かデイスられている気がするんやが、気のせいなん?」

気のせいじゃないよ、事実だよ。

「ん、それなら…いいのかな?」

「…団長、あの小民族をバルツム伴侶として欲しいのではないならいいです。」

「テイオネー、もし欲しいならどうするの?」

メキツ

「「あつ…。」「」

「テイオネ、誓って言うけどそれはない。彼女はベル・クラネルと生死を共にするのとを僕の前で誓ったんだ。非常に惜しいけどね…」

え？何だろう…このムカムカする気持ち…。

「…あの兎、いやクラネルをうちに取り込むならいい。そんなわりクラネルと相部屋させる。あいつは俺が徹底的に鍛えてやる。」

クラネル!? トマト野郎、兎野郎からクラネルにランクアップした!?

相部屋? やはり危険だ…、ベートさんは。ベルに近づけちゃいけない!

「え〜!?! はんたーい。ベートの悪い口がアルゴノウト君に移っちゃうんじゃん。はんた〜いー!」

「私も反対。なので、フィン。その案受け入れる代わりにベルを私と同じ部屋にして。」

「「なっ!?!」」

そう、ベルを鍛えたのは私。この中でベルのことをよく知っているのは私。

なので問題ないはず。

「あかんあかん! アイズたんと同じ部屋!?! そんなのうらやま…ちやう! 絶対にあかん!?!」

「…いいだろう。ただし、リヴェリアの許可を取ってからだ。」

ガッツポーズ。よし、やった。

「「フィン!?!」」

「じゃ、部屋の掃除してくる。」

ふふふ、やった。これでベルと一緒にいられる。あれ？何でそう思ったんだろう…。

ま、いいか。

「「……………」」

第4話 勇者、期待。

アイズがあんなことを言うとはね…。

僕らが長年アイズを見てきて教えてきたけど、あのような反応は全くなかった。

ベル・クラネルと相部屋にしてくれ、と言ってきたけど、意味はわかっているのかな？

いや、わかってないだろうね。

だがこれまでにない、いい傾向だ。

「うわあ…あのアイズが…。」

「相部屋って…意味わかってんのかよ！あいつは！」

「なになに、ベート？やきもち？アイズに対して？またはアルゴノウトくんには？」

「何で、俺がアイズに対してやきもち焼くんか！クラネルは男だ！ふざけんじゃねえ！」

「あー、そつかあ。ベートはレナ一筋だものねえ。」

「ふざけんなあああ！この貧乳バカゾネスがあああ！」

「むっかー！頭きた！今度こそ、狼の輪切りにしてやるー！」

「上等だ！表へ出やがれ！」

テイオナ、ベートがいみ合つて外へ出た。

ロキはまだシヨックから抜けきつてないな。

あ、戻つてきたか。

「……はつ、…フィン!?何で認めたんや!というか、アイスたんもアイスたんや!」

「ロキ、落ち着いてくれ。リヴェリアがそれを認めるわけないだろう…多分。それ以前に、恐らくこの戦争遊戯で僕らは負けるだろう、勘だけどね。」

テイオナが、むつと眉間に皺よせている。「あり得ない」と言いたいんだろうね。

しかし、親指がずつとうずいている。「無理だ。」と。

「リヴェリアが認めないならいいんやけど…。戦争遊戯でうちらだけでなくフレイヤんとも負けるんか?まじか…。ほんに、うちへ入つて欲しかったわー、マジで。ああー、もつたないわー。」

ロキは残念そうに、そう呟いてた。

「はつ!ならドチビンとこへ賭ければ大儲けできるんやないんか?いや…でも…。」

しかし、ベル・クラネルがうちへ入つたとしても今のような成長は望めただろうか?

否だ。

過酷な環境だからこそ、あそこまで上り詰めて光り輝いたのではないだろうか?

うちは「フレイヤ・ファミリア」と違い、堅実に進んでいく方針にある。

ベル・クラネルのような無茶で無謀な冒険へ挑むのは、絶対に認めない。

それに…、彼の容姿や性格から見るとリヴェリアやレフィーヤあたりが構う…いや甘やかしそうだな。うん、間違いない。

アイズが違う意味で嫉妬しそうだな。ははっ…。

ベル・クラネルと同じことをやれ、と言われたら無理だな。

少なくともベル・クラネルとあの黒いミノタウロスとの戦いまでの自分では絶対にできない。

「ベル・クラネルの真似事は君達には荷が重いか？」

『精霊の分身』との戦闘前に僕はアイズ達に鼓舞するため言ったが、やはり自分には無理だ。

荷が重いというより、できない。

ああ…だから、僕たちは『神工の英雄』という枠から抜け出せないんだな…。

彼等彼女等が僕たちを見たら、嗤うだろうな…。

「…団長？」

いけないな…つい感傷に浸ってしまった。

「何だい、テイオネ。」

「団長、質問があるのですが、〔ヘステイア・ファミリア〕の団長のベル・クラネルはレ

ベル4。我々が負ける要素が全くないのですが…。」

わかってないな、ティオネは。

「ティオネ。彼はただのレベル4じゃない。常に格上の敵と単独で戦い、勝ち上がってきた”強者”だ。ただのレベル4で見ると、レベル5、いや6と思つたほうがいい。」

そう、彼は常に格上の敵と単独で戦ってきた。アイズを除き、僕らのように共同で戦ってきたわけじゃない。

…いや、一人いたな。ずっと負け続けてレベル7になつた彼が。

果たして、ベル・クラネルは彼に勝てるのだろうか？もし、勝てたら…。

席を立て、ホームの窓で英雄橋の方向を見て眼を細めた。

「世界は英雄を求めている…か…」

さて、ロキと一緒に「ハスティア・ファミリア」へ行くか。

「ロキ、準備をしてくれ。」「ハスティア・ファミリア」のホームへ行くよ。」

「了解やー。ヒヒヒ、ドチビの吠え面見たるわー。」

ロキはスキップして部屋を出ていった。遊びじゃないんだけどな…。

「団長、私も行きます。」

「ティオネは僕の留守を守ってくれ。ベートとティオナを抑えるのもね。」

「わかりました!!お任せください!」

テイオネは僕を熱烈な視線で見ながら、敬礼してた。

ふう…ベル・クラネルに会ってから半年か…。本当に休ませてくれないよ。今回は何を起こしてくれるのかな？。

せめて、無難なものであってくれ…あ、親指が「無理だ」と言ってるか。はあ…やれやれだ。

だが、ワクワクしている自分がいることは否定しない。

今回の戦争遊戯は、ベル・クラネルが『最後の英雄』に値するか否かを試す、いいきつかけになるな。

楽しみになってきたよ。

第5話 受付嬢、激怒。／老神、裁決。

「ギルドにて」

ドン！

「どういうことですか！あれほどした「フレイヤ・ファミリア」にお咎めなしとは！」

私は恐らく生涯で一番怒っている。ギルド長室で、ギルド長の机に叩きつけている。

上司・同僚、ミイシャもいる。いや、激昂した私を止めるためにいる。

「黙れ。エイナ・チュール。これはギルド総意だ。従え。」

「ギルド総意？神ウラノスの承認は得ているのですか？ギルド長！」

ギルド長にここまで怒鳴ったのは初めてかも…。

「エ、エイナあゝ、お、落ち着いてえ〜」

「チ、チュール、ちよつとは落ち着きなよ…。」

「そ、そうです。エルフにあるまじき振る舞いですよ。」

ミイシャ、先輩たちが止めてくれるけど、やっぱ無理！

だって、神フレイヤにベルくんとのおい出を踏みにじられたんだから！

それをお咎めなし!?私だけじゃないの!?

「いい加減にしろ！ チュール！ 納得できないなら、辞めろ！」

プチン

「…そうですね。そうさせていただきますっ！」

「「え？」」

ギルド長、上司、同僚が目を丸くしていた。ふふふ、痛快。

「こんなこともあるうかと、用意しておりましたっっ！」

ダン！

「「退職届ええええ!!」」

「今までっ！ おっせつわっにつ！ になりましたっ！ ではっ！ 失礼します！」

あー、すつきり。早くこうするべきだったわ。

「「……………はっ！」」

「ま、待ってくれっ、チュール！」

「エ、エイナああ、本気なおお！」

「あ、あんたがいないと仕事が回らないんだよっ！」

上司、ミイシャ、先輩たちが止めに来たが、もう手遅れよっ！

「知りませんっ！ 文句はそ・こ・の・ギルド長様へ言っってくださいっ！」

「き、貴様ーハーフェルフごときでこの私に逆らうと「ロイマン、来い。」…ウ、ウラノ

だが、今回は容認できん。

「ロイマンよ、私の同意なく勝手に行動したな。」

「ち、違うのです！これはオラリオのために…」

ほう？全てを『オラリオのために』と言えば済む、と思うなら大間違いだ。

「ここら辺で灸を据えておくべきだな。」

「黙れ。今回はフレイヤの我儘で起きたこと。ギルドは関係ないことだ。それをお前は私用した。」

「ち、ちが…「黙れ、と我は言った。」…はい…。」

悪あがきは認めん。

「裁きを申し渡す。ロイマンよ、ギルド長解任を命ずる。また全財産もちろん汚職で得た金など全て没収。「ひえええっ…。」…と言いたところだが、これまでのことを考慮して全財産没収「ひいっ…」だけで許す。」

「あの、お、汚職などは…。」

「全て把握してある。これ以上申立てするなら、ギルド長解任及びオラリオ追放を追加するぞ。」

「この程度なら軽いだらう。」

「……………ははーっ、受理いたしまする。」

「だが、「ロキ・ファミリア」へ通達したのは仕方がない。それは許そう。下がれ。」
「……はっ、失礼致します。」

フラフラしとるな、たかが全財産没収だけだろうが。

「フェルズ。」

「すでに回収している。よくもこう、貯めたものだよ」

「……いくらだ？」

「ざっと、1000億ヴァリス」

本当によく貯めたものだ……。2/3にすればよかったかもな。

まあ、今後もまた貯めるだろう。

「それを「ハスティア・ファミリア」に流せ。戦争遊戯に必要なだろう。」

「そうするよ。本当には申し訳ないことをしたよ。会わせる顔がないよ、顔ないけどね。」

「……………」

自分の容姿をネタにするな、笑えんぞ。

「すまない、冗談だ。私からも魔導書などの魔道具をいくつか贈ろうと思う。それしかできないからね。」

「そうだな。しかし、今回はいいきっかけになる。ベル・クラネルには悪いが、今回の戦

争遊戯はベル・クラネルが『最後の英雄』となるか否かで見極められる。」

果たして男神^{ゼウス}・女神^{ヘラ}の眷属たちが超えられなかった壁を超えられるだろうか？
または…。

「ああ、けれどウラノス。私は彼に全てを賭けるよ、あの時にそう決めたんだ。」

800年も生きた賢者、いや愚者にそこまで言わせるとはな…。

大神^{ゼウス}の置き土産、いやベル・クラネルに会って話をしてみたいものだな。

その時は、そう遠くない日になりそうだ。私の勘だな。

第6話 白兔、起床。

「う、う〜ん。」

あれ？ここは…「フレイヤ・ファミリア」じゃなく…「ヘスティア・ファミリア」の僕の部屋だ…。

よかった、夢じゃない。

「べ、ベル様がお目覚めになりました！み、命ちゃん、ヘスティア様を呼んで！」
「承知しました！」

ああ…、やっぱホームはいいなあ…。

「べ、ベル様、お加減はいかがでございましょうか？」

「春姫さん、大丈夫です。僕が倒れてからのくらい経っていますでしょうか？」
「3時間ぐらいでございます。」

その時、僕のお腹からけたましいほどの空腹音が鳴っていた。

ううっ…恥ずかしい…。

「くすっ…、今から何か食べる物を持ってきますね」

「あ、僕もそっちへ行きます。今までのことを説明したいので…。」

「はい、一緒に参りましょう。」

そうしてホームのリビングへ向かったのだが…、春姫さんは僕の3歩後ろをついてきた。

「あの…本当に気にしていませんので、もっと近くに来ませんか？」

「ベル様…ベル様は優しすぎます。あんな、あんなひどいことを貴方にしてしまった私は自分を許せません…。」

春姫さん、すごく罪悪感を感じているなあ…。どうしたらいいんだろう…。

「じゃあ、僕が許しますので隣に来ませんか？ そうしないと許しませんよ。」

「！で、では参ります…。」

ようやく隣にきた春姫さんは尻尾を左右に振りながら嬉しそうだった。

けど、まだ遠慮さを感じるなあ…。

リビングに到着したら、神様たちとリリ、ヴェルフが顔をつき合わせて悩んでいた。

「あ！ベル殿、今から行こうとしてたところですがご覧の有様で…。」

「うくん…、あ！ベルくん、もう大丈夫なのかい？」

「はい、神様。もう大丈夫です。」

「すまぬな、ベル。我らが不甲斐ないばかりで。」

「できるだけの手助けはするわ。」

「この程度は当たり前だろう？」

ミアハ様、ヘファイストス様、タケミカツチ様…。

「いえ、ありがとうございます。手助けしてただいただけであります。」

「ベル様、お詫びはあとで、な、何でもします。ですが、今は戦争遊戯について…。」

リリも深い悔恨が顔に出てるなあ…、後で大丈夫だよと言わないと…。

コンコン

「ん？ 誰だい。こんな時間に」

「私が参りましょう。」

「状況を説明します。今回はかなり、いえ絶望的に厳しいです。ほぼ敗北は確実です。

【ロキ・ファミア】が協力してくれない限り…ですが、ヘスティア様が…」

「ロキにお願いたくはないっ！ 頭を下げたくはないっ！ けど、下げないと駄目だろうね…。

ああっ！ でも下げたくないっ！」

神様、よほどロキ様が嫌いなんだな…。そうなるとアイズさんも…？

「さつきからこの通りなんですよ…ベル様、説得をお願いします。」

「う、うん。神様…。あれ、春姫さん、どなたが来ました？」

春姫さんがおずおずと戻ってきた。あれ…誰かと一緒に…。

「あ、あの皆様。あうっ。」「よくドチビ。えらいことになつとんなあ。ヒヒヒ。」

「ゲツ、ロキ。何しに来たんだよ。」

ロ、ロキ様とフィンさんも？

「やあ、ベル・クラネル。今回は大変だったね。」

「い、いえ。」

「……フィン様、何しに来られたのでしょうか？ご覧の通りリリ達は忙しいのですが。」

リリ、かなり警戒しているなあ。

「いや、大変な時にすまない。…ロキ。」

「おうせやつたな。さくて、ドチビ。うちらは【ヘステイア・ファミリア】へ戦争遊戯を

申し込むでえっ！」

「「な、何イイイイ!?!」」

【ロキ・ファミリア】がうちに戦争遊戯を!?

「もちろん、拒否権はなしやあ！要求は【ヘステイア・ファミリア】をうちのパシリにす

ることや！」

「「なっ!」」

そ、そんな！アイズさんと敵対することに!?

え、でも、パシリ…悪くないかも…。

痛っ！リリ、何するの！

「お、お待ち下さい。こちらは「フレイヤ・ファミリア」からの戦争遊戯が先で……」

「だからこそだ。うちらは「フレイヤ・ファミリア」とは色々あつて戦争遊戯申し込めな
いが、「ヘステイア・ファミリア」との戦争遊戯に横入りできる。それはルール上認めら
れているはずだ。」

「フレイヤ・ファミリア」だけでなく「ロキ・ファミリア」までも？

そんなのますます勝ち目がない！

「……ギルドから通達があつたのですか？」

「さすがに察しいいね。そのとおりだよ。そして、それしか君たちを助ける方法がな
い、と言つておこうかな。」

「……なるほど、そういうことですか。ヘステイア様、受理すべきです！」

リリ!?

「上等だあ！ロキイ、戦争遊戯だ！」

「ドチビい！これで年貢の納め時やあ！」

ヘステイア様ああ!?!わかつているんですかああ!?!

「じゃあ、ウチらは帰るで〜。せいぜい悪あがきしときやあ〜。」

「……できるだけ時間は延ばそう。じゃあ、これで。」

ロキ様とフィンさんはそう言って帰って行った。

「ど、どうするんですか!」「フレイヤ・ファミリア」だけでなく「ロキ・ファミリア」までも…。」

「ギルドは日頃『フレイヤ・ファミリア』と『ロキ・ファミリア』との抗争を避けています。今回は『フレイヤ・ファミリア』へ肩入れしたようですね。はつきり言うとうとギルドは期待できません。」

「ウラノスめええええ…。」

エイナさん…、大丈夫かな…。

「最悪の場合、『ロキ・ファミリア』の傘下に入ってもまだ安全は保証できます。『ロキ・ファミリア』の主神ロキとヘステイア様の仲は悪いですが、団員は『フレイヤ・ファミリア』よりはまだ親交がある方なのでまだマシです。」

うん…まあ…どちらかというところ『ロキ・ファミリア』かな。

けど『フレイヤ・ファミリア』はいい人ばかりだったし…。

「そして、『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』とはベル様を巡って戦う理由ができます。それが今回の狙いです。非常に、本当につ、不本意ですが、勝ちの目が少しは出てきました。」

でも、圧倒的な不利は変わらない…。

特訓しようにもアイズさんの協力は得られないし…。

「メンバーですが、現時点で『フレイヤ・ファミリア』へ挑めるのはベル様だけです…。私達は春姫様のレベル・ブーストがあってもレベル3までしかできませんので却下です。他派閥の協力がどうしても不可欠です。特にレベル4, 5, 6の。」

「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」以外のレベル5, 6というと、椿さんしか思い浮かばない…。

「やらなければならぬことは、多くありますがレベル4, 5, 6の募集・装備強化・戦略の3つですね。最後の戦略は戦争遊戯の舞台が決まってるからになります。」

「手っ取り早いのは、装備強化だな。魔剣は俺が何とかするが、武器や防具は時間がなすぎ。遠征で使用した武器・防具がまだ修復してないんだ。」

「ヴェルフ、それは私達が用意するわ。まずバベルへ向かいますよ。ヘスティア、ヴェルフとベル・クラネルで十分でしょ。」

防具はヴェルフが作ってくれたものがいんだけどなあ…。時間がなあ…。

第7話 鍛冶神、推断。

「はっはっはっは！ヴェル吉よ、何たる様よ！」

「うるせえ！椿、お前もだろが！」

相も変わらずね…、この二人は。

「はいはい、じゃれ合いはここまでにして本格的な装備強化に入りましょうか。」

「…今回は手前も納得できんからのう。特別に譲ってやろうではないか！その鍛冶士と違い、いいものを揃えておるぞ！」

「椿、てめえ！」

「悔しいなら、はよランクアップせんか。そのベル・クラネルと同じようにな。」

「こいつはぶつ壊れてんだ！」「ひどい！ヴェルフ！」

まあ、私も思うわ。ベル・クラネルは異常な速度でランクアップしているものね。

レアスキルであることは間違いないみたいだけど、非常に興味がわくわね…。

「ベル・クラネルを見る限り、軽装あたりで敏捷が生かせるようなものかのう。」

「ああ、そのあたりだな。まずは…。」

なんやかんやと言って、仲いいものねあの二人は。

…嫉妬するわね。いけない、いけない。

そういうえば、ヘステイアは？

「うげつ、この盾は結構するはずだよ。あれもこれも…。」

「これ、いいですね！どのくらいするんです？」

「えーと、1000万ヴァリス以上あつたような…。」

「あ？ま…まじですか…？」

ああ、ヘステイアはうちでバイトしているからある程度目が肥えているものね…。

普通なら絶対に譲らないけど、今回は特別よ。

「ところで、『ラビット・フット白兔の脚』は何が欲しいのかの？先日ラキアが攻めてきた時に、リヴィラで

どっかの鍛冶士が打った、なまくら武器を叩き割った時のお詫びをせねばな。」

「椿！てめえ！」「事実じやろ？あのなまくらは。」

「椿…、それ初耳だけど？何てことをしてんのよ、あんたは。」

「あ…、言うのを忘れとつた。すまん、主神様よ。」

「はあ…、ベル・クラネル。ごめんなさいね。今回とは別に、椿へどんな要望をしてもいいわよ。もちろん無料よ。」

頭が痛くなってきたわ…。まあ、椿のコレは今に始まったことではないけどね。

さて、ベル・クラネルはどんな要望をしてくるのかしら？

「え、あ、あの時の…。でも、僕はヴェルフの打ったものが…。」

「ベル、それは嬉しい。だが、今は時間がないんだ。それに…、意地と仲間を秤にかけるのはやめたんだ。」

ヴェルフ…、成長したわね。

だからといって、鍛冶にのめりすぎないで私を見てほしいわね。

いけない…、何を言っているのかしら。

「そ、それでしたら砕けない大剣が欲しいです。」

「ん？砕けない？不壊属性のか？」「あ…、ベルのあのスキルか…。」

「スキル？どんな内容なの？ヘステイア？」

「あ、うん…。ヘファイストスならいいか、他言無用で頼むよ？」

………。

なるほどね、チャージしてそれを放つか…。

「アポロンの戦争遊戯で、魔法を放ったあれはチャージ、つまり貯めていたのね。」

「なるほどなあ、黒いミノタウロスの戦いの最後で放ったアレは貯めていたのか。」

「あ、はい。そうです…。」「それでも負けたのじゃがな。」

「ぐはあっ!？」

ちよつと、椿。古傷をえぐらないでよ。ほら、凹んでいるんじゃない。

なるほどね……。でも、それなら不壊属性でも耐えられるかどうかわからないわね……。
「ふーむ……不壊属性の武器でやってみぬとわからないな。いくつか作ってやるから試すといい。」

「そうだな……。黒いゴライアスで使ったあの武器でも消し飛んだからな……」

「ヴェルフ、黒いゴライアスって何のこと？」「あつ!？」

「あー18階層のアレか……。ヘファイストス、それもボクが説明するよ。」

……。

「ヘステイア……。だからダンジョンにも潜るなど言ったじゃない。」

「うう……。ごめんよ。罰金取られたんだから勘弁してくれよう。」

全く……。まあダンジョンに飲まれるよりはマシね。

けど、黒大剣か。深層産のドロップアイテム……。まさかウダイオスのドロップアイテム？

なら、生半可なものじゃ駄目ね。

「樁、私も参加するわ。相槌をしなさい。」

「おお！主神様と？何十年ぶりじゃな！」「む……」

「お？ヴェルフ、羨ましいんじゃない？な？どんな気持ちじゃ？ん？」

「樁！てめえ!？」

ヴェルフも後学のために見学させるべきかしら？

「ヴェルフ、貴方も参加しなさい。相槌はまだだけど見ておきなさい。」

「あ、はい！喜んで参加させていただきます！」

うん、いい返事。改宗させたのは、失敗だったかしら…。

レントルにすればよかったかもしれない。

でもヴェルフの決めたことだものね。

ベル・クラネルの大剣についてヴェルフ、椿といろいろ話していたところ、ベル・クラネルを見ると、手を耳に当ててキョロキョロしていた。

どうしたのかしら？

「ベル・クラネル？どうしたのかしら？何かあったの？」

「ベルくん！大丈夫かい？今日は休んだ方がいいんじゃないかな？」

「いえ神様、違います。聞こえませんか？なんか雷のような音が…ゴロゴロと。」

「いや、聞こえぬぞ。」「ベル…今日は休んだほうがいいんじゃないか？」

「ベルくん…疲れてるんだね…帰ろうか？」

雷のような音？…ここは室内よ。しかも外は曇ひとつもないし…。

「いえ、はつきりと聞こえます…。うん、確かにこつちから…」

そつちは…、いえ、まさか。呼んでいるの？彼女が…。

ベル・クラネル…貴方はまさか…。

第8話 白兔、開封。

聞こえる。間違いない。

おじいちゃんが好きだった、雷の音が。

これは、僕を呼んでいる？

神様、ヴェルフはともかく、レベル5で五感が鋭い椿さんでも？

行かなければならない、そんな気がする。

「これは…。」

「開かずの箱じゃな。15年前から置かれていたものじゃ。」

「椿、これは何が入っているんだ？」「開かずだから、手前も知らぬに決まっておろう。」

「ヘアイストス、君は知っているのかい？」

「ええ…【ゼウス・ファミリア】が遺したものよ。」

「…！」

【ゼウス・ファミリア】の!?

「15年前、黒竜に破れたことは知っているわね。そして【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】によってオラリオを追放される前に遺したものよ。」

「しかし、『ゼウス・ファミリア』は黒竜によって全滅されたんですよ？なら何故それがここにあるんですか？」

「…ゼウスの身の回りのお世話をしていた人があるものをここに封印するようお願いされたのよ。再び『ゼウス・ファミリア』が復活するその時までには…。」

「主神様よ。それ、初耳じゃが。」

「『ゼウス・ファミリア』と懇意にしていた、椿の前の先代団長が預かっていたのよ。その先代も当時の闇派閥によって殺されたから、貴方に伝えられていないのは当然だわ。今は私が預かっている形だけだね。」

「そうだったんだ…。」

「ベルくん…例の音はこの箱から聞こえてくるんだよね？」

「はい…だんだん強くなっています。この箱から聞こえます。」

「ゴロゴロと…いつ雷が鳴ってもおかしくないくらいに…。」

「手前は全く聞こえぬが…。」「俺もだ…。」

「ヘステイア、愚問だけどベル・クラネルは他派閥からの改宗ではないよね？」

「当然だけど？それがどうかしたのかい？」

「……いえ、何でもないわ…。すぐにわかることだから…。」

「？」

へファイストス様?どうしたんだろう…?

「しかしな、この箱がね…」

ヴェルフが確認のため、触ろうとしていた。

「やめなさい!」「触るな!ヴェル吉!」

バチツ!!

「あばばばばばば!」

「ヴェルフうう!!」

箱から電撃!?いや雷?魔剣いや…魔箱?

ヴェルフは、電撃にやられて丸焦げ寸前になっていた。

生きているよね…?あ、よかった。生きてる。

「これは『ゼウス・ファミリア』の眷属のみが、開くことができるようになっていたのよ。」

「手前も幾度か触ったり壊そうとしたが、ご覧の有様よ。びくともせんわい。」

「あばばばば…」

「手前もやられたからのう。数分後にしびれはとれるから安心せよ。」

そんな危険な箱なの!?!うう…、怖い。

けど、何故だろう…。触らなければならぬ気がする。

よし、触ろう。音がだんだん大きくなっている。

このまま去ると、マジでヤバいことになりそうな気がする…。

「あー！ベルくん、だめだよ！」

「待ちなさい、ヘスティア。」「へファイストス？」

僕は箱にそつと手のひらを当ててみた。

ゴゴゴゴゴゴ…。

「なっ!?」「…やはりね。」

箱が開いた!? 15年間に開かなかった箱が!?

中には…え？

「メイド?」「あばば…ヴェビド?」「メイドじゃな」「え?メイド?」

僕、まだしびれているヴェルフ、椿さん、神様が

中にいるのは、きれいな黒髪で、むねがおおきいお姉さんのメイドさんがいた。

【「ゼウス・ファミリア」の鍛冶・魔導・神秘持ちの高レベルが作った、魔導人形よ。…

まあ、ゼウスの趣味が少し…いえガツツリと入っているけどね。」

メイド…黒髪…むねがおつきい…。

お祖父ちゃんの好みにドストライクだ。

「…へファイストス。どうしてベルくんがこの箱を開けるんだい?」

「わかっているはずよ、ヘスティア。ベル・クラネルは「ゼウス・ファミリア」の眷属、

いいえ系譜を持っているわ。その箱が開けるのが何よりの証拠よ。」

僕が…【ゼウス・ファミリア】の系譜を!?

じゃ、じゃあ、お父さんとお母さんは【ゼウス・ファミリア】?

お祖父ちゃん…何で教えてくれなかったの?

【ベル・クラネル、貴方の両親は【ゼウス・ファミリア】にいたの?】

【いえ、両親について全く教えてくれませんでしたので…お祖父ちゃんが。】

【お祖父ちゃん…? そう、そういうことなのね…。】

【……………（やはりそうか…。）】

神様とヘファイストス様は何かに気づいたような感じだった。

【樁、これは主神命令よ。ここであったことは一切漏らさないこと。いいわね?】

【ああ、わかるとるよ。主神様よ。】

【あ、何か目覚めるみたいだよ。】「!」「!」「!」

しばらくすると、黒髪のメイドさんがゆっくり目を覚ました。

「お久しぶりです。……私を目覚めさせたのは、貴方ですか? 神ヘファイストス。」

「残念ながら、私じゃないわ。この子よ、メイ。久しぶりね」

「このきれいなメイドのお姉さんの名前がメイ?」

メイド…メイ。安直すぎない？

「初めまして、少年。私は「ゼウス・ファミリア」専属メイドのメイと申します。少年、貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

「ベル…ベル・クラネルです。」

「ベル・クラネル…名前も知らない上、「ゼウス・ファミリア」の恩恵を感じられないのですが…、その真紅の瞳は覚えがあります。」

「…僕はヘファイストス様の言うように、「ゼウス・ファミリア」の系譜を持っているとのことですが、そうなのですか？」

「この箱が開けるということはそうなのでしょね。…ベル・クラネル、大変厚かましいのですが貴方の記憶を見せてくれませんか？そうすればわかるかもしれません。貴方のルーツが。」

僕のルーツ…、お父さんやお母さんのことがわかる？

知りたい…うん、知りたい！

「はい、お願ひします。お父さんもお母さんも知らないのです、それは僕も知りたいです。」

「…」両親を知らない？……わかりました。失礼します。」

顔が間近に!?うわわっ！な、何を!?

「ベルくんっ!?こらっ、君っ！離れるんだー!」

「あ、あのっ！」

「ご心配なく、おでこですのぞ。」

「あ、そうぞぞか。」

うう…：僕は何を勘違いしているんだ！

あ…：おでこが…、冷たいけど気持ちいい。

第9話 侍女長、決心。

目の前の少年は不思議です。

目が覚めてみれば、兎のような少年がいました。

神へファイストスが開いたのではなく、この少年が開いたとのことです。

しかし、「ゼウス・ファミリア」のも感じられないし、名前も心当たりがありません。けど、真紅の瞳は覚えがあります。あのバカ主神と共に色々と醜聞をやらかした、あの困った子の瞳に瓜二つです。

また、この少年の雰囲気も誰かに似ているような気がする。

あの困った子の近くにいた子にいたはずですが…、思い出せません。

無理言つて、記憶を見させてもらうようお願いしました。

「ゼウス・ファミリア」の眷属または系譜を持つ者なら、私はその記憶を覗くことができます。

それが嫌だという子が多くいましたので、お置きき代わりになったのを覚えていません。

記憶を覗かれ、それを多くの人前で暴露して反省させていました。

…そもそもバカ主神と共に、やましいことをやらかすからです。今となつては本当にいい思い出です。

あの子達の魂は無事に転生したのだろうか？

…いけません。今はこの少年に集中しなければ。

もう一度言いますが、この少年が「ゼウス・ファミリア」の系譜を持っているのが不思議です。

団長のマキシムやザル坊は別にしても、バカ主神の影響を少なからず受けた子は煩惱だらけでした。

ですが、この少年は真つ白、純粹無垢を形にしたような子です。

十中八九、この少年を育てたお祖父さんはおそらくバカ主神のゼウスでしょう。だからこそ、この少年が純粹無垢であるのがおかしいのです。

ええ、ありえませんとも。

まあ、記憶を見てみればわかることでしょう。

ですが、長年「ゼウス・ファミリア」に仕えてきた私の勘がそういつています。

この少年は「ゼウス・ファミリア」直系の唯一無二の最後の生き残りだと。

……………!!!!

「そう、そういうことだったのでですね。」

「あ、あの…何かわかりましたでしょうか？」

目の前の少年は不安そうに私を見てそう言った。

「ええ、全てがわかりました。改めて…、初めまして。坊ちやま。」

「「坊ちやま!?!」」

「はい、坊ちやま。貴方は『ゼウス・ファミリア』の眷属ではありませんが、真正正銘『ゼウス・ファミリア』直系の系譜を持つ、この世で存在する唯一無二の最後の生き残りです。」

バカ主神が他で眷属を作っているかどうかわかりませんが、恐らく坊ちやまだけでしょうね。

「やはり、そうだったのね…。」「…やはりね…。」

神ヘファイストス、坊ちやまの主神ヘステイアは何か気づいているようだった。

神ヘファイストスはあのバカ主神を知っているのは当然として、坊ちやまの主神ヘステイアの名前はバカ主神から聞いたことがあります。

確か…「グータラロリ巨乳だが、農の知る限り善神の中で一番じやな。」と言っていました。

坊ちやまの主神がこの方であって本当によかったです。

これが神ヘルメスや神アポロンであつたら、強制的に天界へ送還させて他の善神に改

宗させていました。

ええ、本当に。

「よく…よく今日まで五体満足で生きてくれたのですね…。最初からいてあげられなく申し訳ありません。」

「いえ…貴方は僕の…家族ですか…?」

「魔導人形ですが、ゼウス…いえ元『ゼウス・ファミリア』で長年仕えてきました。僭越ながら家族と言えるかは微妙ですが。」

「いいえ！僕の家族です…：会えて嬉しかったです。ぐずつぐずつ…」

少年…：いえ坊ちやまはそう断言してすすり泣きし始めた。

私はそつと坊ちやまを抱きしめた。ずっと寂しかったでしょうに…。

あのバカ主神は男である坊ちやまを放置するかと思いましたが、意外と可愛がついてましたね。

何も死んだふりして育児放棄することはないでしょうに。

…状況が状況だから仕方がないにしても、坊ちやまに一言残しておけばいいものを。

もし会うことがありましたら、ボコボコにし手足の骨を折り簀巻きにして、神ヘラへ引き渡してやりましょう。

ええ、絶対。

「大丈夫、大丈夫です。坊ちやま。私、メイは坊ちやまのそばに最後までいますから。」
「うつつうつつ、ぐずつぐずつ…お祖父ちゃんがいなくなつてずっと寂しかったんです…。」

しばらく坊ちやまは泣き続けていた。

本当に、本当に…生きてくれてよかったです。

記憶を見る限り、死んでもおかしくない状況がいくらでもありましたからね。

…張本人達は、後でお礼参りしておきましょう。

バカ主神の影響を受けながら純粹無垢であり続けたのは、恐らく母親であるあの方の影響でしょう。

あの困った子の悪いところを受け継いでおらず、丈夫な体や目だけを受け継いでいるのは本当に奇跡に近いです。

あのバカ主神から余計なことを吹き込まれていますが、まあ矯正可能な範囲なので大丈夫でしょう。

問題は坊ちやまを取り巻く彼女たちですが、坊ちやまにふさわしいかどうかを私が見極めましょう。

…どの方も美少女美人ぞろいなのが困ったところです。性格も、まあ悪くありませんし。

これからですね。楽しみになってきました。

バカ主神やあの困った子がそれをもし聞いていたら、血の涙を流していたことでしょう。ふふふ。

一方、母親のあの方が聞いていたらどうしていたでしょうか。

神へらは想像するまでもありませんね。

……天へ還っていった子どもたち、ご安心ください。

坊ちやまは……この子は、私が全身全霊を尽くして最後までお守りします。

第10話 白兔、面映。

うう…恥ずかしい。神様やみんなのいるところで、泣くなんて…。

でも、嬉しい！魔導人形でも僕の家族！

しかもきれいでむねが大きいお姉さん！

「えつと、メイお姉さん。」

「メイとお呼びください。」

「え、でも…。」

「メイとお呼びください。」

「ア、ハイ。わかりました。…メイ。」

どうしてもメイと呼ばせたいんだ…。メイお姉さんでもいいのに…。

「はい、坊ちやま。」

「うん。ところでその呼び方…やめない？僕、もう14歳だよ？」

恥ずかしい！ほら、ヴェルフや神様、椿さん、ヘファイストス様までもニヤニヤして

こちらを見てるし！

「坊ちやま…、成人になるまでは坊ちやまと呼ぶのが【ゼウス・ファミリア】の決まりで

す。」

うそでしょ!? そんな決まりあるの!?

僕、20歳になるまで坊ちやまと呼ばれ続けるの!?

めっちゃ恥ずかしい!

「ハスティア様…:ですネ? 坊ちやま、ベル・クラネルを眷属にしていたいただきありがとうございます。」

あ、話をそらされた…:。ガクツ。

諦めるしかないか…:。

「…ベルくんが「ゼウス・ファミア」だからじゃない。ベルくんだから眷属にしたんだ。それを間違えないように。改めて紹介するね。知っている通り、ボクはハスティアさ、よろしくね、メイくん!」

「ありがたきお言葉感謝します。ハスティア…:元主神ゼウスから聞いたことがあります。こちらもよろしくお願ひいたします。」

「…何を聞いたかは聞かないで okay。本当にあの子は…:困ったものだ。」

神様、ぶんぶんと怒っている…:。

ゼウス様…:, どんな人なんだろう…:。

「さて、メイくん。ベルくんの記憶見たからわかってるかもしれないが、今「フレイヤ・

「ファミリア」の戦争遊戯前はかなりヤバイ状況なんだ。目覚めたばかりで悪いけど、ボク達に協力してくれるかな？」

「もちろんでございます。このメイ、僭越ながら『ゼウス・ファミリア』の指導教官を努めておりましたので少々の戦力になると思います。レベルは推定レベル7上位くらいですね。」

「『ゼウス・ファミリア』の指導教官!? しかもレベル7あ!?!?」

「すごい!メイ、すごすぎる!」

「レベル7なんて、すごい!」

「指導教官ということはお父さんや強い人を指導してきたんだ!」

「色々と教えてもらわなきゃ!」

「ですが、現状では非常に厳しいです。レベル6が7人いて統率が取れている【ロキ・ファミリア】と、レベル7が1人レベル6が3人レベル5が4人いて、個々の力が尖っている【フレイヤ・ファミリア】が相手では、非常に難しいです。少なくともレベル7が後1, 2人、第一級冒険者が数人必要ですね。」

「あー、そうか…オツタルさんがレベル7でメイと互角になったとしても、他の方を抑えられるのは厳しいか…。」

「師匠は僕が相手するとしても…。うーん…。」

レベル7はオツタルさんの他にいないし…。

「あと1, 2人つて…、オラリオにいるレベル7は【フレイヤ・ファミリア】の【猛者】だけじゃぞ。『炎金の四戦士』の内1人は手前が抑えられるとしても、あの4人の連携はレベル6以上じゃから無理じゃぞ。」

アルフリッグさん達かあ…。

【フレイヤ・ファミリア】にいた時、あの方たちの連携にはぐちゃぐちゃに破壊されたなあ…。

回避防御迎撃を同時に行うのはきつかった…。最初は全くできなかつたけど、何とかやれるようになった…。

椿さんに春姫さんのレベル・ブーストをかけるしかないのかな…。

「いいえ。ご心配なく、心当たりがありません。坊ちやまがおられるなら問題ございません。」

「…ふえ？ 僕？」

え？ 何で僕がいるなら問題ないの？

「坊ちやま…貴方は【ゼウス・ファミリア】の系譜だけではありません。父親は【ゼウス・ファミリア】ですが、母親は別です。」

「え？ 二人とも【ゼウス・ファミリア】じゃないの？」

お父さんとお母さんもか「ゼウス・ファミリア」と思った…。

でも、別々だと…色々問題になるんじゃないの？

「ファミリアが別々だと問題になるじゃない…。よく揉めなかったわね…。」

うん、僕もそう思う。あ、でも…アイズさんとなると…：うーん…。

いやいやいや、そんなことを考えている場合じゃない！

「それは仕方ありません。あの困った子…、坊ちやまのお父様がお母様と子作りされたのは黒竜の遠征前ですので私でも気づきませんでした。ご本人たちも、まさか身ごもるとは思わなかったでしょう。ちなみに結婚はしておりません。」

何やってんの!?!お父さんは！

「ほう…なかなかやりおるのう。それで、ベル・クラネルの母方はどこのファミリアじゃ？」

「皆さんもご存知のファミリアでございます。私が「ヘファイストス・ファミリア」へ封印されたように、あのクソ野郎もオラリオ内のあるファミリアで封印されています。」

あのクソ野郎!?!え？メイと同じ魔導人形がもう1人封印されているの？

僕の家族が、もう1人いる！嬉しい！

「まさか…：ベル・クラネルの母方のファミリアって…、そうなの？マジでそうなの？」
へ、ヘファイストス様？かなり顔色が悪くなっていますけど!?!

「はい、神へファイストス。ご察しの通りでございます。…ある意味、【ゼウス・ファミリア】はどっちみち全滅してたかもしれません。」

ちよつ!?メイ!?ひどくない?

黒竜より恐ろしいの!?そのファミリアは。

「へ、へファイストス?どうしてそんなに動揺しているのさ?」

「動揺したくなるわよ!何でよりによつて、そのファミリアの…あの主神の眷属に手を
出してんのよ…。よく生きてられたわね、ゼウス…。」

生きてられた!?え?そんなにヤバいところなの!?

「…主神様よ、どこのファミリアよ。そこは。」

「…封印されているファミリアは知っているわ。そこへ行けばわかるわ…。何て恐ろしいことを仕出かしたのよ…!」

え?何で怯えているの?怖い!?

「はい、あのクソ野郎が封印されているファミリアは、ここ【へファイストス・ファミリア】と双壁をなす…。【ゴブニュ・ファミリア】です。」

第11話 女神、恐怖。

ボクらは今、「ゴブニュ・ファミリア」へ向かっている。

ベルくんの母方のファミリアが遺したものが封印されている、「ゴブニュ・ファミリア」へ。

メイくんは、「知っている神に見られると説明が面倒ですの。」と言つて、頭から脚まですつぽりとフードを被っていた。

そこまで用心することなのかなあ…？

へファミストス、さつきは珍しく怯えていたな。

何でそこまで怯えるのさ…。あの頑固一徹が。

聞いてみよつと。

「ねー、へファミストス。なんでそんなに怯えるのさ？」

「…ベル・クラネルの父が、「ゼウス・ファミリア」はまだわかるわ。けど、その母方が非常に問題なのよ。黒竜の遠征がなかったら、メイの言う通り「ゼウス・ファミリア」は全滅していたわね…。また最悪の場合、オラリオは滅亡してたかもしれないわ…。」

え？マジで？本当に？最強の「ゼウス・ファミリア」が？

オラリオまでも!?!どこのファミリアだよ!?!怖っ!?

「そ、そこまでののかい?母方のファミリアって…、主神は誰だよ!?!」

「…ヘステイア。貴方もよく知っている神よ。天界でゼウス含む多くの神を恐怖のド
ン底へ落とした、あの超絶残酷破壊衝動女(ハイパーウルトラヒステリー)を。」

ま、ま、ま、まさか…:あの子かい…。

へファイストスが怯えるわけだよ…。

けど、いい子なんだけどなー。ゼウスが絡むとろくな事がないだけで…。

そりゃ、ゼウスの眷属があの子の眷属に手を出したことをあの子が知ったら…:うん、
死ぬね。

「ゼウス…:送還、いや…:よく死ななかつたね…。」

「本当よ…:。あの子、ベル・クラネルが生きているのが不思議ね…:。そういえば…:、彼女は、
ベル・クラネルのことを知っているのかしら?彼女の眷属の子なら、彼女の眷属じゃ
ないの?」

そこなんだよなあ。ベルくんの外見と性格はあの子好みのはずなんだけどなー。

「それについてはお答えしましょう。」

「きやつ!」「うわあつ!」

メイくんが後ろから話しかけてきた。

さつきまで前にいたのに!? いつの間に?

さ、さすがレベル7…。

「大変失礼しました。先程の会話を耳にしましたので。神ヘファイストス、黒竜に全滅された後の「ヘラ・ファミリア」の主神：神ヘラの様子、覚えていますでしょうか？」
「ええ…、ゼウスとヘラの両神とも見てられないほど意気消沈してたわね。まあ、ゼウスはその3日後に復活して、大浴場の覗きをしてたけどね。あの時は心配して損した、と多くの女神によって袋叩きにされてたわね。けど、ヘラは「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」に追放されても意気消沈のままだったわね。さすがのフレイヤやロキも話しかけられなかったわ。」

ゼウス：何やってんだよ…。

「私の憶測ですが、神ヘラの精神状態が復活したのは半年前ほどかと思います。」

「え?」「おつそ!」

ええ…：15年間意気消沈してたのかよ…。

まあ、可愛がっていた子たちが全滅されたら凹むのはわかるけど…、そこまで愛してたんだなあ…。

ヘラらしいよ。

「どうして、そんなことわかるの?」

「坊ちやまがゼウスに置いてけぼりされたのは、神ヘラが復活されたためかと思いません。」

「ゼウスは、ベル・クラネルの育児放棄したの!? 何てことをしてんのよ!」

「それは絶対に許せないけど、ヘラが復活したのならゼウスのとこへ行つてベルくんに会つてたんじゃない?」

ヘラが復活したら、真つ先にゼウスんとこへ行くはず。

そしたらベルくんに会つてたはずと思うんだ。

「はい、ヘスティア様の予想の通り、神ヘラは正気を取り戻した時はクソバカ主神のとこへ行つたはずです。けど、神ヘラは恐らくこう耳にしたはずです。「孫と二人で暮らしている」と。」

「あつ…。」

あーあー、なるほどなあ。

ゼウスが育児放棄したのではなく、ベルくんを守るために死んだふりしてたんだな。

そりゃ、孫と二人きりで暮らしていると聞いたたら、多分…いや絶対に勘違いして激怒するんだろうな。

孫は女性で、二人きりで暮らしている…つまり、浮気していると。

あの子、頭に血が上つたら周りの声は耳に入らず、ゼウスの折檻だけしか考えないん

だろうな。

「そしたら、絶対にベルくんも巻き添えになり、死ぬか大怪我するのは間違いないね…。だから、ゼウスは死んだふりをするしかなかったんだな。」

「…理解はできるけど、ベルくんを一人にしたことは許せない！」

「ああ…そういうことね。だから死んだふりするしかなかったのね…。」

「はい、恐らく今は落ち着いており状況を確認されている、かと思えます。坊ちやまが神ヘラの眷属の息子であることはまだ知らないでしょうが、今回の戦争遊戯で知ることになるかと思えます。」

「うん、そしたらヘラはベルくんに会いに来るためオラリオへ来るんだろうね。いいんじゃないかな？あの子、意外と子煩悩だし。」

「ヘスティア…、正気なの？私は嫌よ。ヘラが歩くだけでも民家は全部戸締まりし店は全て畳むくらいよ。それ以前にロキとフレイヤがヘラを絶対にオラリオへ入れさせないわよ。」

ヘラ…、オラリオにいた時に一体何をしたんだよ…。

…ベルくんに会わせるのが怖くなってきたよ。

「意気消沈してた神ヘラを見て、坊ちやまのお母様はゼウスに預けるしかなかったでしょうね。坊ちやまの赤子の頃の記憶を見る限り、坊ちやまを抱えながら「余計なこと

を教えないで！」を何回も念押しされてクソバカ主神に預けていましたね。」

「もし、ヘラがゼウスと同じく早い内に、正気を取り戻していたらどうなっていたのかしら？」

「私の憶測ですが、まず大浴場を覗いたクソバカ主神を折檻し、坊ちやまのお母様のそばに死ぬまで寄り添ってたでしょうね。そして、生まれた坊ちやまをホームの外に出さない上、人の目にさらさず溺愛してたのは間違いないかと。」

「ああ…。」

うん、想像できるね。それはそれでどうなんだろう？

今の方がまだ幸せなのかな…？うーん…。

「しかし、神ヘラが坊ちやまのこれまでのことを知ったら、大変なことが起こるかもしれない。」

「どうしてなの？」

「坊ちやまのこれまで起きたことを知ったら、神ヘラは間違いなく大激怒するでしょうね。」

「あつ…。」

あーあー、確かにやばい。やばすぎる。

ロキはどうでもいいとして、ソーマ…ヘルメス…アポロン…イシユタル…あつ送還さ

れたんだっけ、アレス：イケロス：ルドラ：は5年前に送還されたっけ？そして、フレイヤ…。

あわわ…ヘラに知られたら、送還だけで済まされないような気がする…。

「【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】に追放されオラリオに入れないので、オラリオ内にいる神は大丈夫かもしれませんが、オラリオ外にいる神アポロン、神アレス、神イケロスはただじゃすみませんね。送還だけで済めばまだマシかもしれませんが。」

「……。」

うわあ…。嫌いだけど、アポロン、イケロス…逃げ切れることを祈っているよ。

アレスは…ラキアによって守られているから大丈夫じゃない…：かな？

ラキアが滅亡しなきゃいいけど…。

「まあ、【ゴブニュ・ファミリア】で封印されているあのクソ野郎が坊ちやまの記憶を読み取り、神ヘラへ報告したらの話ですがね。（しかし神アポロン、神イケロスは許せません、絶対にチクリませんが。）」

「…ヘファイストス、ボク【ゴブニュ・ファミリア】へ行くのが怖くなってきたよ。」

「…私もよ。」

ああ…せめて【ゴブニュ・ファミリア】で封印されている彼？彼女？がまともな人で

ありますように……。

第12話 白兔、熟考。

「ようやく、しびれが取れたぜ…。椿、早く言いやがれ！」

「儂は触るな、と言ったぞ。」「もつと早く言えつてんだ！」

ヴェルフ、今の今までしびれてたんだ…。

あれ？メイは…。あ、後ろにいる神様のところにいる。

いつの間に…。全く気づかなかった…。

あ、神様とヘフアイストス様が震えている。

「坊ちやま、いかが致しました？」

「うわっ！いきなり距離詰めないでよ。びつくりするじゃん。ところで神様たちどうしたんですか？」

「気になさらないで下さい。天界での昔話を聞いていたところです。」

「そ、そうなの？…けど神様たち震えていますか…。」

「怖いことを思い出したからでしょう。」

気になるなあ…。けど何故だろう。

お祖父ちゃん顔を思い出してしまった。

「ヤンデレは嫌じゃああああ！」と。

そういうしている内に「ゴブニュ・ファミリア」へ着いた。

「よし、ここじゃ！」

「おい、椿……。何を……」

「なーに、【ゴブニュ・ファミリア】への挨拶として決まりがあるんじゃない。」

「椿、それまたやるの？ いい加減にやめなさいよ……」

「たのもー！ たのもー！」

椿さんは門をドンドン叩きまくっていた。

ええっ！これが挨拶なの!?

【ゴブニュ・ファミリア】の人たちが飛んできて椿さんへ怒鳴っていた。

「うるせえ!! 椿、毎度毎度それを繰り返すな!?!と云ってんだろ！」

「はっはっは！ 単なる挨拶だろうが。」

ライバル派閥同士なのに、仲いいなあ……。それに比べてウチは……。

「おっ！ 【白兔の脚】か。この間は悪かったなあ。」

「うちの主神は【ヘスティア・ファミリア】へ味方すると言ってたんだ。武器と防具が必要

なら言えよ！ 【単眼の巨師】よりいいものを出すぜ！」

「何じゃと！ なら、こっちはそっちよりいいものを出す！ ベル・クラネル、こっちを選べ

！」

「ふぎけんな！椿！【白兔の脚】！こっちを選べ！」

【ゴブニュ・ファミリア】と椿さんがやいやいと話していた。

僕を巻き込まないでほしいんだけど…、半年前と比べたら考えられないなあ…。

「ゴブニュ、久しぶりね。調子はどう？」

「やあ、ゴブニュ。うちのホームの改築ありがとうね！」

「へファイストスにヘスティアか…。」

え？ゴブニュ様？半年ぶりだ…。

門の後にすぐ立っていた。まるで僕たちが来るのをわかっていたような…。

「待っておつたぞ。お前達が来るのはわかっておつた。」

「えっ…。」

「そのメイを引き連れている限り、やはり儂の勘は当たっていたようだな」

「ゴブニュ…、貴方は知ってたの？ベル・クラネルのことを…。」

「父親は知らぬが、そやつの母親は知つとる。」

え？そうなの？

あ、そういえば【アポロン・ファミリア】のホーム改装後に、ゴブニュ様は僕をずつ

と見てたような…。

「ゴブニュ、そうなら、何でもつと早く言わなかったんだよ!」

「言う時期ではなかったからだ。7年前のあの事件がある限りな。」

「……そうね。」

7年前? 一体、何があつたんだろう…?

「神ゴブニュ、お久しぶりでございます。15年ぶりでしょうか?」

「久しいな、メイ。【白兔の脚】はやはりそうなのか?」

「ええ。神ゴブニュ、貴方の考えている通りでございます。」

メイ、ゴブニュ様と面識あるんだ。

あ、最強の【ゼウス・ファミリア】だから、多くの神様と会っているんだ。

ロキ様もフレイヤ様も…?

「はい、そうです。坊ちやま。無乳神とピツチ神については知っております。」

ナンデ!? 僕の考えていることがわかるの?

「メイドの嗜みでございます。」

メイドって、しゅごい……。

「…いや、そんなわけないだろうが。」

「そやつが特別なだけじゃ…。」

ヴェルフと椿さんが呆れてこつちを見ていた。
何でだろう…。

「ところで、神ゴブニユ。あのクソ野郎がいるところはどこでしょうか？」
「やはりあやつも必要か…。こつちじゃ、ついてこい。」

そういつて、ゴブニユ様は地下へ下っていった。

あ…聞こえる。鈴の音が。

かすかな音だけど、下るたびに大きくなっている。

メイの時と同じく…ここにも魔導人形が…？

どんな人なんだろう…。

また、お母さんのファミリアって、どんなファミリアなんだろう…。

お祖父ちゃんはどうして教えてくれなかったんだろう…。

何か事情でもあるのかな…。

「どうかしましたか？坊ちやま。」

「あ、うん…。どうしてお祖父ちゃんはお父さんとお母さんのファミリアについて教えてくれなかったんだろうって、考えていたんだ。」

「恐らく…坊ちやまのお母様は坊ちやまに剣をとらず、普通の人として過ごしてほしかったのでしょう。そのため、ゼ…お祖父様は坊ちやまにご両親のことを教えなかつ

た、と思います。」

「そっか…、でも僕はお祖父ちゃんの手書いた英雄の物語を多く見てきたんだ。それはメイも知っているよね？だから、僕は…英雄になりたい。お母さんには申し訳ないけど、どっちも剣を取るしかなかったんだ。」

うん…、ごめん…お母さん。

「…坊ちやま。なら、英雄になるには多くの苦難を乗り越える必要があります。その覚悟はできていますでしょうか？英雄とは簡単なものではありませんよ？」

「うん、それはわかっているんだ。オラリオへ来てまだ半年だけど、それを思い知らされたんだ。これからも今回の戦争遊戯のような苦難が多く来るだろう、と思うんだ。でも、僕はそれを乗り越えて行きたいんだ。物語に出てくるような英雄に…になりたい。」

「（半年でここまでの苦難は普通ありませんが）わかりました。このメイ、少なくとも坊ちやまの力になりたいと思います。よろしくお願いします。」

「うん…メイ、よろしくね！」

メイが力になってくれるなら、百人力だ。

記憶を全て見られたのは恥ずかしいけど…。

第13話 建築神、感傷。 / 白兔、開封Ⅱ。

儂はやつのいるところまで地下を下っていった。

あれは地下でない困るからな。

「あの…ゴブニユ様…。何故僕の母親を知っているのでしょうか？」

ベル・クラネル…。「白兔の脚」、史上最速のレコードホルダー…か。

「久しいな。あの時の坊主がここまで強くなるとはな。」

「はい！ゴブニユ様、あの時は励ましてくれてありがとうございます！」

「おによ？ゴブニユ、ベル君と会っていたのかい？」

「はい、ゴブニユ様はオラリオへ来て最初に会ってくれた神様です。」

「うちは鍛冶系ファミリアだからな、坊主の希望と合わなかったんじや。」

「だったら、うちに来たらすぐにヘスティアを紹介してあげたのに。」

あの時は、たまたまホームにいたからよかったようなものだ。

ひと目であやつの子と分かったからこそ、儂が対応しなければならなかった。

ゼウスと一緒に思ったが、やつはオラリオへ入れないからな。

半年前、「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯、「アポロン・ファミリア」のホーム

の改築で、3回もベル・クラネルを見たが、本当によく似ている。

あやつがもし生きてたら溺愛するじやろうな…。

…今回のフレイヤはやりすぎだ。

何故そこまでして「白兔の脚」を手に入れてたかったのかはわからぬがな。

ヘラの眷属の子とは知っておったのか？知ってたらあんな行動はせんかつたらうに。

「ゴブニユ様？」

「ああ、すまぬな。…お主は母親によく似とる。それだけだ。」

「僕がお母さんに…？」

「はい、坊ちやまはあの方によく似ています。目の色を除けばまさに瓜二つです。」

そうか…、メイはゼウスのお供であやつのファミリアへ出入りしとったから、会っていたのは不思議ではないな。

目の色はゼウスとこのサポーター譲りか…。

何度も思ったが、よくヘラんとこの子に手を出せたものだ…。

「メイ、お母さんはどんな人だったの？」

「私は両手で数えるほど多く会っていませんが…、非常に優しい方であつたのは間違いないありません。」

確かに、ヘラはあやつを溺愛し絶対的に外へ出さなかつたからの。

あやつはあのファミリアの中で、異端で善心でもあったからのう…。

この少年と同じく、真つ白で不思議な子じやった…。

病に侵されていなければ、双子の姉の「静寂」と共にオラリオを代表する、よき冒険者となつてたであらうに…。

惜しい子じやった…。いかんな、感傷に浸つてしまった。

む…着いたか…、あやつを封印している部屋に…。

「着いたぞ、あそこじや」

とつとと早く持つていつてほしいものじや、正直この危険物は一時も置きたくはないからのう。



リン、リン。

やはり鈴の音が聞こえる。僕の英雄願望と同じ鈴の音が。

けど、少し違う。この音は暖かい感じがする。

メイの時と同じ、懐かしみのある音が。

「あれ…ですか」

「まるで棺桶だな…。」「棺桶じやな…。」

「彼女らしいよ…。」「しかも凶々しいわね…。」

「あのクソ野郎らしいです。」

本当に凶々しい……。吸血鬼が入ってもおかしくないくらい……。

骸骨……スパルトイ!?が多く貼り付けられている……。

……ほ、本物じゃないよね?本物っぽい……。

開けるのが怖くなってきた……。

「どれ、ちよつと……」「よさぬか!」

椿さんが近づこうとした途端、椿さんが炎にくるまれたあああ!

まだ触ってもいないよ!?

「あちちちちいいいい!なんじゃああ、この炎はあああ!」

「うわあ……こつちもか……。」

「この棺桶の3メートル以内に近づこうとしたらああなるんじゃ。」

なにそれ、怖い!

「メイ君の時より凶悪じゃないか!」

「あの神らしいわね……。」

怖いけど、メイの時と同じく行かなければならない気がする……。

行かないと……めちやくちや嫌な予感がする。

「お、おい……ベル……。大丈夫か……。」「大丈夫です、坊ちやまなら。」

怖いけど、行かなきゃ…。

あれ…3メートル内に入ったのに椿さんのようにならない…。

メイの時より懐かしく…温かい気がする…。

「本当にあのファミリアの系譜を持っているんだね…。」

「しかも貴女のファミリアの眷属になるとはね…。神ながら運命を感じてしまうわね…。」

「ホントだよ…。あの子達の眷属の子がベル君とは誰も予想できないじゃないか…。」

神様とヘファイストス様がため息と同時に遠い目をしている。

…何だろう…複雑だ。

そうしている内に棺桶の前に立った。鈴の音が強くなっている。

”早く開ける”とそう言っているように聞こえる。

「じ、じゃあ、行きますよ。えいっ」

メイの時と同じく棺桶に手のひらを当てた。

ゴゴゴゴゴ

棺桶が音と共に開いて、中には…。

「男性?」「執事か?」「執事じゃな。」

スーツを着たかっこいい白髪のお兄さんがいた。

「起きなさい。このクソ野郎が。」

メイがナイフをおじさんに投げつけていた。

「というか、どこに持っていたの!？」

「坊ちやま、メイドの嗜みでございます。」

「そうなの!?!メイドってしゅごい…。」

「いや、何度も言うがそんなわけないだろうが…。」

おじさんは目をつむったまま、そのナイフをすんなり指先で受け止めていた。

「メイ、相変わらず乱暴ですね。品もない。」

「そう言っつて、眼をゆっくりと開けた。」

「オッドアイでかっこいい!」

「貴方に言われたくないです。セバス。」

「このかっこいいおじさんは、セバスさんと言うんだ…。」

「メイ…何の用です。私を目覚めさせるのは「ヘラ・ファミリア」の眷属だけですが、貴方が開けるわけがありません。どんな手を使ったのですか?」

「残念ですが、私ではありません。こちらの方が開いたのです。」

「ヘラ・ファミリア!?!ヘルメス様の言っていた最強派閥の一つ!?!」

お母さん、すごい派閥だったんだ…。

「!?メ、メーテリアお嬢様!?いえ、男性…まさか…。」

おじさんは僕を見て、メーテリアと言った。

メーテリアって誰…?」

「べ、ベル・クラネルです…。初めまして…。」

「…そうですか。貴方が…。これは失礼しました。セバスと言います。」

セバスさん、さつきまで殺すような目つきだったけど、僕を見てすぐ優しい目になった。

「セバス。この方の記憶を見てみなさい。そしたらわかります。」

メイ…セバスさんに対して素っ気ない…。仲悪いのかな…。

「では、失礼します。」

そういって、左手を僕の頭に当てた。

第14話 執事長、回顧。

目覚めてみれば、目の前に胸糞わるいメイドがいた。

今度こそ決着をつけてあげましようと思いましたが、メイの隣にいる少年を見て驚愕しました。

あまりにもメーテリアお嬢様に瓜二つだったので。

そして、瞬時に理解しました。

この少年は間違いなく、メーテリアお嬢様の子供であると。

この少年は、15年前に私がお世話していた「ヘラ・ファミア」の中で、異端であり善心でもあったメーテリアお嬢様に、あまりにもよく似ていました。

あの時のお嬢様は「ゼウス・ファミア」のクソ雑魚サポーターによって妊娠させられていました。

あのクソエロ爺の依頼によって、遠出していたのが間違いでした。

思い出すだけで怒り狂いそうです。

当然、我が主神ヘラはお怒りになると思いましたが、その時黒竜によって娘たちが全滅したのを知った時の主神ヘラは、見てもいられないほど意気消沈していました。あの

時の主神ヘラは初めて見ました。

私はメーテリアお嬢様の最後までいるつもりでしたが、「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」によってオラリオを追放されてしまい、最後までそばに寄り添うことができませんでした。

そう、私達魔導人形には制約がある。オラリオから周辺5キロまでしか動けないことに。

なので最後までついていけないことで、我が身を恨み「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」へ特攻して自爆しよう、かと思いました。

…自爆したほうがよかったかもしれませぬ。

その時、メイが「ヘファイストス・ファミリア」で自ら封印したのを知り、メイは「ゼウス・ファミリア」の復活を諦めてないのを察しました。

なので、私も対抗し「ヘラ・ファミリア」の復活を信じ「ゴブニュ・ファミリア」で自ら封印しました。

神ゴブニュは最後まで嫌そうな顔をしていましたが、「ヘラ・ファミリア」と長い付き合いなので断れなかつたでしょう。

…悪いことをしてしまいましたな。

まさか、封印を解いたのが「ヘラ・ファミリア」の眷属ではなく、メーテリアお嬢様

の一人息子とは夢にも思いませんでした。

本当に驚きました。

おつと…回顧はここまでにしておきましょう。

さて、この方の記憶を見えますか。

【ヘラ・ファミリア】の系譜を持つ者なら見れるはずですよ。

………!!!

「……よく生きてくれてこのセバス、感無量でございます。坊ちやま。」

「貴方も僕の家族なんですよ…。嬉しいですよ！うつつ…」

坊ちやま…あのクソエロ爺に育てられたのに、ここまで純粹無垢で通しているとは…

奇跡ですな。

「泣かないでください。坊ちやま、メーテリアお嬢様に最後までお仕えできなかった私を責めるべきでございませぬ。」

「セバス、それは仕方がないわ。貴方達、魔導人形はオラリオから周辺5キロ以内まで、しか動けない制約があるのだから。ベル・クラネル、メイとセバスを責めないであげてね。」

「ぐすつ…はい、ヘファイストス様。セバスさんもメイも悪くないですよ。僕の…家族に会えて嬉しかったです！」

何とお優しい…、容姿だけでなく性格もメーテリアお嬢様に瓜二つでございますな。「このセバス、メーテリアお嬢様に最後までお仕えできなかった分、坊ちやまに最後までお仕えいたします。」

「ありがとうございます、セバスさん！よろしくお願いします！」

「セバスとお呼びください。またはじいやでも結構です。」

「じ、じゃあ、じい…、いやセバスさんで…。」

「セバスとお呼びください。またはじいやでも結構です。」

「わ、わかりました。セバス…。」

じいやと呼んでほしかったのですが、仕方がありません。

これから、まだまだ時間はたっぷりありますからな。

「はい、坊ちやま。終身お仕えいたします。」

メーテリアお嬢様…天から見ておりますか？

貴方の息子様に最後までお仕えいたします。

「ところで坊ちやまは本当にやめてくれます…？恥ずかしいです…。」

坊ちやまは恥ずかしかったです。本当に仕草までお嬢様に似ておられる…。

「残念でございますが、成人になるまでは坊ちやままたはお嬢様と呼ぶのが「ヘラ・ファミリア」の決まりです。」

「そつちもなの!? うう…恥ずかしい。」

あのクソ雑魚サポーターからは、目の色を受け継いでいるようですが、兎のように可愛らしくて、大変結構でございます。

メーテリアお嬢様とアルフィアお嬢様にかかっていた死の病を受け継いでいないのは…、恐らくあのクソ雑魚サポーターのゴキブリ並の生命力によるものでしょうな。

別の意味で、あのクソ雑魚サポーターには小指の先くらい、感謝してもいいでしょう。こうして、元気でたくましく強くなられているのですから。

「さて…メイ。長年敵対してきた貴方と協力するのは、非常に、残念ながら、ご辞退させていただきます。坊ちやまのためです。そこを間違えませんように。」

「それはこつちのセリフですよ。セバス。」

「全ては坊ちやまのために。」

メイも坊ちやまに相当惚れ込んでいるようですね。仕方がありません。

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】のそれぞれの直系の、唯一無二の最後の生き残りである上、1000年経つてようやく2つの血が1つとなった、ただ一人の方です。方です。

我らの念願がある意味叶ったようなものです。

第15話 処女神、賛美。 / 執事、分析。

「ゼウス・ファミリア」専属メイドのメイくんだけでなく、「ヘラ・ファミリア」専属執事のセバスクンもかあ…。

どえらいことになってきたなー。

「ヘステイア様、元主神ヘラから聞き及んでおります。お目にかかれて光栄です。元「ヘラ・ファミリア」専属執事のセバスと申します。」

「う、うん。よろしくね！セバスクン。…ところで、ヘラからだ、どのようなことを聞いているのかな？セバスクン。」

天界で、キーキーやかましかつたけどお世話好きな子だったな、あの子は。

「はっ、「ぐーたらでどうしようもない女神だけど、天界で私が唯一尊敬する女神」と聞き及んでおります。」

「ぐーたらは認めるけど…、ヘラから尊敬される女神というのは初耳だな…。」

「すごいです！神様！」

（ヘラから尊敬されるのは仕方がないわ。本神はわかかってないけど、ヘステイアは実質オリンポス最強であり神格も天界で1，2を争うほどの善神の女神だもの。あの超絶残

虐破壊衝動女（ハイパーウルトラヒステリー）のヘラをいい子と言っている時点でね
…。）

尊敬!?あの子がボクを?うつそだく。

「それを抜きにしてもヘステシア様、貴方は坊ちやまの記憶を見る限り、長年オラリオを
多くの神々を見てきた私の目でも、女神として最高に位置する大女神でございます。」

「そ、そうかな……。へへへ、おだてないでくれよ。」

非常に恥ずかしい…。ボクは当たり前前のことをやっているんだけどな。

はっ!そうじゃない。

「…ゴホン、セバス君。ベル君の記憶見てわかるけど、今は「フレイヤ・ファミリア」の
戦争遊戯前で大変なことになっているんだ。…目覚めたばかりで悪いけど、ボク達に協
力してくれないかな?」

「もちろんです。このセバス、坊ちやまに粉骨碎身、最後までお仕えいたします。」

「ところで、セバス君…。君はどのくらい強いのかな…?」

メイくんをちらりと見て、多分メイくんと同じくらいだよな…。

そうだよね…。

「そうですね…。そのメイドと同じくらいでしょうか。「ヘラ・ファミリア」の指導教
官であり、推定レベル7ですね。」

「そつちも!?これでレベル7が2人そろつたああああ!」
ほーほーらね。

もう…そのままでも勝てるんじゃないかな…?

「早くも戦力が整つてきたな…。」「椿を貸し出す必要あるのかしら?」

「儂、いらんじゃね?」「い、いります!」

必要だよ!

何せ【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】を相手にしなければいけないだから!



相手は【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】。

15年ぶりですな。

油断はできませんが、坊ちやまを狙うとは万死に値しますな。

特に【フレイヤ・ファミリア】は【ヘラ・ファミリア】にされたことをお忘れでしょうか?

…もう一度徹底的に、完膚なきまでに叩きのめす必要がありますな。

あの時の小僧はもう…いや、まだレベル7ですか。

何をやっているのですか…。不甲斐ない。

なんたる脆弱。

なんたる脆弱。

おっと、いけません。怒るのはいつでもできますからね。

ぼっちゃまの記憶を見る限り…、

【フレイヤ・ファミリア】はレベル7が1枚、レベル6が3枚、レベル5が4枚…。

突き詰められた『個』。

【ロキ・ファミリア】はレベル6が7枚…。

互いを補完し合う『組織』。

…私達、元【ヘラ・ファミリア】と【ゼウス・ファミリア】の下位互換ですな。

その程度しか高みへ行けなかったのですか…。

もう一度言いましょう。

なんたる脆弱。

なんたる脆弱。

もう彼らは当てになりませんな。

半年でここまで駆け上ってきた、坊ちやまを鍛えていった方がまだマシでございませ

な。

レベル4…いえ【フレイヤ・ファミリア】での戦いぶりを見ればレベル5はありそう

ですね。

半年でここまで強くなった方は「ゼウス・ファミリア」や「ヘラ・ファミリア」でも1人もいませんね。

今の坊ちやまと私、メイがいたとしても、ようやく戦いになるレベルですね。やはりあと第一級冒険者が何人か必要ですね。

そして…、坊ちやまを残り時間でどれだけ鍛えられるか、ですね。

「状況は良いとは言えませんが、我ががいてようやく戦いになる程度でしょうか。何人かは戦力が欲しいですね。」

「あとは坊ちやま次第ですね。戦争遊戯が始まるまでどこまで高められるかですね。」
「え?…え?…え?…」

坊ちやまの成長は異常すぎます。おそらくスキルですな。

鍛えるため、スキルを熟知する必要がありますね。

後で神ヘステイアへ聞いてみましょう。

「ベル君! ファイトだよ!」「ベル…頑張れよ…。」

「ベル・クラネル、生き延びてね。」「ベル・クラネル、健闘を祈つとるぞ。」

「みんな、ひどくない!?!」

ふふふ…いい方々に恵まれていますな。

メーテリアお嬢様…、天から見ておりますか？

坊ちやまは良き方に囲まれ、強くたくましく育っております。

坊ちやまは、終生我らがお守りいたしますのでご安心くださいませ。

第16話 白兔、気落。

「……すみませんが、もう一度言ってくれませんか？」

一部始終説明したら、リリが青ざめて頭抱えていた。

「う、うん。僕が実は『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』の系譜を持っていて、そのファミリアの魔導人形……ううん僕の家族がいたんだ。それが、こちらのメイとセバスだよ。」

「メイと言います。よろしくお願いいたします。」

「セバスと言います。よろしくお願いいたします。」

「あ、はい。サンジヨウノ・春姫と申します。よろしくお願いいたします。」

「ヤマト・命と言います。こちらこそよろしくお願いいたします。」

「……リルカ・アーデと言います。よろしくお願いいたします。申し訳ありませんが、『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』については口外されないほうがよろしいかと。」

「ほう?」「ひいいい!」

メイとセバスは、リリへ瞬時迫っていた。

「ちよ、待って！メイ、セバス。リリ、どうしてそういうことを言うの？」

止めなかつたら、リリやばかったかも……。

この二人、僕に対して超過保護すぎない!?

ただでさえ、周りの人が僕に対して過保護なのに!?

「…皆様は7年前の大抗争についてご存知でしょうか？」

大抗争？ヘルメス様より薄っすらと聞いたことがあるような…。

「名前だけはな。」「ヴェルフ殿と同じです。」

「わ、私は全く知りませんが、アイシャさん曰くひどかったと聞いております。」

「僕はヘルメス様より名前だけは聞いているけど…？」

「僕は1年前に降臨したばかりなので、大変だったとしか聞いていないね。」

リリはそれを聞いて、深い溜息を吐いた。

「わかりました…。ただ、ベル様とメイ様とセバス様はショックを受けるかと思います。心の準備はしておいてください…。」

リリは、そう言って7年前の大抗争について語り始めた。

……。

「そうだったのか…。」

「【ゼウス・ファミリア】の【暴喰】と【ヘラ・ファミリア】の【静寂】が…。」

「大抗争の闇派閥の大幹部であり…」

「オラリオ史上最悪の死者を出して…」

「フレイヤ・ファミリア」「ロキ・ファミリア」「アストレア・ファミリア」らによつて討たれた…。」

「はい、あの日々はリリにとつて忘れられない日々です。正に地獄でした。」

リリはつらそうに語っていた、

リリ自身ではなく僕がシヨック受けると思つて。

「ありがとう…。リリ、語つてくれて、本当にありがとう。」

僕の家族が、多くの死者を出したことはつらいけど…。

家族が死んだことは、さすがにシヨックを受けた。

どうして会いに来てくれなかつたんだろう…。

「そうでしたか…。アルフィアお嬢様が…。」

「ザル坊は満足して逝つたでしょうね…。」

デイツクスやジュラのような人ではないことはわかる。

メイもセバスにとつては息子、娘のような存在だよね…。

「坊ちゃん、私見ですが、お二人はオラリオに自分の命を捧げて強くさせようとしたのが目的でございます。もしそれがなければ、オラリオは今も闇派閥によつて蹂躪されてい

たでしょう。」

「同感でございます。お二人はそれぞれ病や毒で余命いくばくもありませんでしたので、未来そして次代の英雄へ受け継ぐために、身を捧げたのでしよう。」

ありがとう…メイ、セバス。

「なので、坊ちやまが気になさることはありません。坊ちやまは【ゼウス・ファミリア】ではなく【ヘラ・ファミリア】でもありません。」

「そうです。坊ちやま、今の貴方は【ヘステティア・ファミリア】の最初の眷属であり団長なのです。」

それはわかっているんだ。

わかっているけど、家族なんだ。

やはり、一度でもいいから会いたかったなあ…。

「なので、リリ様がおっしゃるようには今は【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の名前は出さない方がよろしいかと。」

「そうですね。坊ちやまの評判を下げるようなことは我々も、天へ昇っていったあの子達も望みません。」

メイ…セバス…ありがとう…。

「わかりました…。その代わり、アルフィアさんとザルドさんについて教えてくれませ

んか?」

「心得ました。いくらでも説明いたしましょう。恥ずかしい過去など全て把握しております。」

「本人がいけない以上、全て暴露しても問題はないですからね。」

えつと…そこまでは…。

ごめん…アルフィアさん、ザルドさん、聞いてしまつてすみません。
僕はどうしても家族のことを知りたいんです。

「……さて、サポーターくんのように【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】については口外禁止。それに今日はもう遅い。明日から考えよう!」

「【はー!】」

神様・・・、ありがとうございます。気を遣つてくれて。

「あ、ベルくん!その前にラン・・・いや更新しようか!もしかしたら…、スキルが発現しているかもしれないよ!」

「あ、はい。神様、わかりました。」

【フレイヤ・ファミリア】で相当鍛えられたからランクアップするといいなあ…。

うん、新たな魔法やスキルが発現できたらいいな。

第17話 処女神、嫉妬。

開錠され更新した跡がある…。

しかも、遠征後のステータスも違う…。

さてはフレイヤのやつ、『開錠薬』と『更新薬』使ったな。

『開錠薬』だけでなく『更新薬』までも使うとは、本当にベル君に対して本気なんだな…。

どうしてそこまでして、ベル君にこだわるんだろう…。

…ん?ということは、フレイヤは例のスキルを把握しているということか…?

ベル君は例のスキルを知っている様子はないけど…、フレイヤは隠している…?

まあ、愛の女神が一途な想いに負けたなんてプライドが許さないもんね。

ざまあ。

「…神様?」

「あ、いや何でもないよ。ラン…更新するね。」

おっと、上書きしなければ。隅々までね!

?フレイヤの痕跡を跡形もなく残さないでやる!

!?!?!?

ベル・クラネル

L v. 4

力： S S S 1 5 2 0

耐久： S S S 1 8 2 6

器用： S S S 1 6 8 9

敏捷： S S S 1 7 2 1

魔力： S S S 1 3 5 2

幸運： F

耐異常： G

逃走： I

トータル2500オーバー!?ボクが更新した遠征直後で計算してもトータル460

0オーバー!?

アスファイ君にちよつとだけ聞いたけど…、「フレイヤ・ファミリア」でどれだけポコポコにされたんだよ…。

しかもこれ、オールSSS…。これ、もうレベル5相当じゃないか?

「…神様?どうしました?」

「あ、いやちよつと待っててね…。」

うん、間違いない。ランクアップ可能になっている…。

ああ…もう、ここまで来たら仕方がない…。

どーにもなーれ。

「ベルくん…、おめでどう。ランクアップだよ。」

ベル・クラネル

L v. 5

力： I 0

耐久： I 0

器用： I 0

敏捷： I 0

魔力： I 0

幸運： F↓E

耐異常： G↓F

逃走： I↓H

〈魔法〉

【ファイアボルト】

・速攻魔法

<スキル>

□

【英雄願望】

・能動的行動に対するチャージ実行権。

【闘牛本能】

・猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

□

「えっと…、神様。発展アビリティがありませんが…。」

「え？あ、うん。今回は出なかつたみたいだね。次に期待だね！」

めちやくちやガツカリしている。

そりやあ、あんだだけつらい思いしたのに何も出ないのはキツイよね。

うう…：罪悪感が…。ベル君、本当にごめんよ…。

君のためなんだ！

「…ベル君。ランクアップしても経験値がなければ、発展アビリティが発現しないのはよくあるから、ガツカリしないでね。」

「あ、ハイ。」

うう…：心が痛む。兎の耳があつたら、ペタンとしているんだろうな。

想像したらかわいいな…うへへへ。

はっ！駄目だ駄目だ。

「…今日はもう遅い。ベルくんも寝て明日に備えるんだよ。」

「あ、ハイ。おやすみなさい。」

うん、今日は本当に色々、かなり色々であったからなあ…。

ベルくんはもう第一級冒険者か…まだ半年だよ…。

君は本当にどこまで強くなっているんだい？

ベルくんが自分の部屋へ戻っていったのを確認した後、ベッドへダイブした。

「……ふざけんなよおおお！フレイヤあああああ！」

ベッドの上でジタバタしながら、先程のステータスの本当の写しを取り出した。

ベル・クラネル

L v. 5

力： I 0

耐久： I 0

器用： I 0

敏捷： I 0

魔力： I O

幸運： F ↓ E

耐異常： G ↓ F

逃走： I ↓ H

魅了： I

〈魔法〉

【ファイアボルト】

・ 速攻魔法

〈スキル〉

【憧憬一途】

・ 早熟する。

・ 懸想が続く限り効果持続。

・ 懸想の丈により効果向上

【英雄願望】

・ 能動的行動に対するチャージ実行権。

【闘牛本能】

・ 猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

【兎圀女達】^{ハレム}

・ 女性限定（種族問わず）

・ 自らを慕う女性が多ければ多いほど、全能力の高補正。

・ お互いの信頼が厚ければ厚いほど、お互いの全能力の超高補正。

（※但し、同じファミリア内に限る。）

・ 女性からの愛情が深ければ深いほど、全能力の超高補正。

「魅了って何だよ！ベル君、君はレアコレクターかい!?【兎圀女達】^{ハレム}ってなんだよ！僕は
ずえつたいに認めないぞおお！」

これ、絶対にフレイヤの影響だろ!?それ以外、ありえないだろ！

それにランクアップ後のベルくんは、なんかかつこよかつたなあ・・・。

・・・はっ！ヤ、ヤバイ！魅了されている!?処女神のボクが！

これ、外に出て歩くだけでほぼ魅了してしまうんじゃないか!?

まだ、Iだよ！最低ランクだよ！

特にこのスキルはヤヴァい!?

【兎圀女達】^{ハレム}

・ 女性限定（種族問わず）

・ 自らを慕う女性が多ければ多いほど、全能力の高補正。

・お互いの信頼が厚ければ厚いほど、お互いの全能力の超高補正。
(※但し、同じファミア内に限る。)

・女性からの愛情が深ければ深いほど、全能力の超高補正。
しかも、このスキルは魅了と相性よすぎないかい!?

これ、外へ出ただけでステータスが上がりまくりじゃない!?
まずいまずいまずいまずいまずい。

どうしよう…。魅了を抑えられる手段はボクの権能の1つだけど。

このホームならともかく、オラリオ全体で今回のような真似を何度もできないし…。
困った。本当に困った…。

コンコン

ん?こんな夜更けに誰だい?

「はーい、入ってもいいよー。」

「失礼します。神へスティア。」

お?メイくん、セバスクン?二人揃って…。

「どうしたんだい?何か用かい?」

「神へスティア、誠に申し訳ありませんが坊ちやまのステータスを知りたいのですが。」

「明日から、坊ちやまを徹底的に鍛えます。そのために必要なため教えていただけませ

んでしようか?」

…あー…ベルくんの記憶見たら、長年生きている彼らから見たら異常なものなあ…。

「坊ちやまより先程ランクアップしたという報告は、受けています。」

「戦争遊戯への勝利へかなり近づけたのはいいのですが、まだまだ足りません。」

うーん…。「フレイヤ・ファミア」と「ロキ・ファミア」が相手なものなあ…。

「異常な成長速度はスキルにある、と我々は思いますがどうでしょうか?」

「それに…坊ちやまを見たリリ様、春姫様がうつとりされ腰が砕けておりました。坊ちやまは新たなスキルも発展アビリティも発現しなかつたと言ってますが、真でしょうか?」

この二人には隠せないな…。うん、巻き込んでしまおう!

「察しの通りさ。これがベルくんの本当のステータスだよ。」

こっそりと隠し持ってた、ステータスの写しの羊皮紙を渡した。

第18話 執事長、宣誓。

なるほど、このスキルならあの異常な成長速度にうなずけます。

非常に強力なレアスキルですね。

ですが、同時に脆いスキルでもあります。これは純粹無垢な坊ちやまだけしかできませんね。

魅了、【兔囀女達】…。魅了は神フレイヤ、【兔囀女達】はおそらくあのクソエロ爺の影響ですね。

神フレイヤがきっかけで、発現されたということですね。

しかし、この組み合わせは非常に凶悪ですね。

「どう思うかな？メイくん、セバスくん？」

「長年生きて多くの娘を見てきた私でも、目を疑いますね。」

「同感です。頭が何百年ぶりに痛くなってきました、魔導人形ですが。」

今まで教えてきた娘の中にも団長、アルフィアお嬢様を含めて何人か優秀な娘がいましたが、坊ちやまほどではありませんね。

それ以前に、冒険者になって半年あまりでレベル5はいませんかね。

「神へステイア、教えていただきありがとうございます。」

「このスキルは、坊ちやまに最後まで秘匿された方がよろしいかと。嘘がつけるタイプではありませんので。」

「ボクもそう思うよ……。このスキルはどうしたらいいのかな？」

処女神にとつては、扱いに困るスキルですからね。

「神へステイア、このスキルについては我々にお任せください。」

「我々が最大限まで引き出せるようにしてみせます。」

「そっか！わかったよ、君たちに任せるよ！」

ええ、我々が最大限まで引き出してみせましょう。

へステイア様の神室を出た後、メイに話しかけた。

「メイ、坊ちやまのためにこれまでの因縁を水に流しませんか？」

「奇遇ですね。私もそう思っていたところですよ。」

坊ちやまを鍛えるため、我々が手を組まなければいけませんからね。

「ところで、坊ちやまのスキルを見てどう思いますか？」

「坊ちやまの記憶を見る限りある程度は予想できますが、スキルが発現したのは坊ちやま自身の純粹たる想いや信念が大きな影響を与えている、と私は見ます。」

「同感です。それぞれのスキルの引き出しは容易ですな。特に【兎^ハ困^レ女^ム達】は準備が必要
ですな。」

このスキルを見た時は思わず笑ってしまふところでした。
坊ちやまの願望がそのまま出ていますからね。

「ええ…、うちの子たちが知ったら血の涙を流して、地団太を踏むのは間違いありませ
ん。」

「ははは。そうですね。うちの娘たちが知ったら嫉妬に狂って、絶対に外へ出しません
な。」

…本当に坊ちやまは2年、いえ1年早く生まれるべきだったかもしれませぬ。

その時は彼らによつて可愛がれたのは間違いありません。また同時にかなりしごか
れたでしょうな。

「話は変わりますが、大抗争のことを知った時は驚きました。」

「それだけ彼らはオラリオの冒険者に、失望したのでしようね。仕方がありません。」

「…坊ちやまへ会いに行かなかつたでしょうね、アルフィアお嬢様は。」

「何故、そう思うのです？会つてすぐ去つたかもしれませぬよ？」

ああ…、メイはメーテリアお嬢様とは数える程度しか会つていませんから無理はあり
ませぬね。

「坊ちやまは、あまりにもメーテリアお嬢様に似すぎています。目の色を除く容姿も性格も。この私が見間違えるほどに。」

「……………」

「なので、当時元主神ヘラより、メーテリアお嬢様を溺愛していたアルフィアお嬢様が、もし坊ちやまに会われていたら、間違いなく溺愛して大抗争なんか行かなかったでしょう。」

病気も奇跡が起こって、回復したかもしれないというのに。

本当に不器用な娘です…そして馬鹿な娘です。

「…ザル坊の可愛がりたくなる子ですね、坊ちやまは。もし、坊ちやまに会っていましたらザル坊も恐らく大抗争へ行かなかったでしょうね。」

ああ…、世話好きな彼のことですね。

記憶を見る限り、あのクソエロ爺と一緒にいる時は美味しいものを食べてなかったようですね。

【暴喰】も坊ちやまを知ったら、たらふく美味しいものを食わせていたでしょうに。

…あのクソエロ爺は、誠にいけませんな。

碌なものを食べさせず、碌なことしか教えない上、育児放棄するとは…許せませんな。会うようなことがありましたら、元主神ヘラ直伝の拷問を与えてあげましょう。

いや、拷問した後に元主神ヘラへ引き渡したほうがいいでしょうね。

「非常に残念です。我ら、いえ元『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』が求めていた英雄はすぐそこにいたというのに……」

「セバス、それを言つては仕方がありません。それを知つた今、我々は坊ちやま第一でなければいけません。坊ちやまがしたいこと、願つていることを我々が全力でサポートしていかねければならないのです。」

メイの言う通りです。いけませんね、つい過去に引つ張られていました。

アルフィアお嬢様や『暴喰』は残り命を“未来”に賭けていました。

それを無駄にせず、私達は坊ちやまの未来を支えていかなければいけません。

……アルフィアお嬢様、『暴喰』、せめて心安らかに逝つたことを願います。

「さて、『兎囀女達』については私に考えがありますがいかがでしょうか？」

「拝聴いたしましたしょう。」

……

「なるほど……。悪くありませんね。だとしますと、選抜が必要ですね？」

「ええ、そうですね。まず彼女たちに聞きましよう。まあ、もちろん嫌といえないでしょうね。本人たちが一番望んでいることですから。」

「……数年後には何人増えているんでしょうね。」

「さあ、少なくとも坊ちやまと彼女たち次第ですね。」

楽しみになつてきましたね。ええ、本当に。

「…メイ、私は坊ちやまのために尽くすことを誓いましょう。」

「…セバス、私も貴方と同じく坊ちやまのために尽くすことを誓います。」

「…全ては坊ちやまのために。」

神々の皆様には悪いですが、我々にとっては救界より坊ちやまが第一です。

第19話 栗鼠、蒼白。

昨日はひどかったです。

「ソーマ・ファミリア」時代でもひどかったです、それとは別にしても自己ワーストベストですよ！

フレイヤ様の魅了から解放された挙げ句、ベル様にひどいことをしてしまった記憶が再生されました。

この身を八つ裂きにされても足りません。

また、ベル様にどう償いをしたらいいのかわかりません。

それだけでもリリはいっぱいなのに、さらに「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯でパンクしました。

そりゃ、フレイヤ様に対して思うところはありますが、何も戦争遊戯をすることはないじゃないですか！

かといって、ヘステイア様曰く同じことをしてしまう可能性がある、と言われたらするしかじゃないですか！

また、それだけじゃありません。

ベル様が「ヘファイストス・ファミリア」で「ゼウス・ファミリア」専属メイドのメイ様、「ゴブニュ・ファミリア」で「ヘラ・ファミリア」専属執事のセバス様を封印から解放した、とのことでした。

そのことから、ベル様は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」直系の系譜を持つ、唯一無二の人ということが判明されました。

まさかベル様が、最強と最恐の系譜を受け継いだ人、と誰も予想できるわけじゃないですか！

【勇者】でも神々でも予想できませんよー！こんなのに！

…大抗争を引き起こした方々と同じ家族であることを知られたら、また異端児の時と同じようにオラリオの敵、いえ世界の敵となりかねません。

それだけは避けなければいけません！

幸いセバスさんとメイさんは理解していただけたようでしたが…、ベル様の心痛を考えるとつらいです。

その後、ベル様がランクアップしたとのことでした。

冒険者になって半年すぎで、もう第一級冒険者ですか…。規格外すぎます！

ですが…神室から出たベル様はいつもより五割増し…いえ倍近くかつこよく見ええました。

思わず「抱いてください！」と言いそうになってしまいました。
やばいです。本当にヤヴァイです。

今のベル様と目を合わせて理性が保てるか、自信が持てません。

春姫様はもつとでしようね。昨日、神室から出たベル様を見るだけで腰が抜けていました。そのまま魂が抜けていました。：大丈夫ですか？あのエロ狐は。

リリもベル様が部屋へ戻るのを見届けるまでは、理性がギリギリでした。

やばいです。本当にヤヴァイです。

早朝から、ベル様はメイ様とランクアップのズレを調整するために模擬戦をしていました。

リリはほんの少し前にランクアップしたばかりなのに：【憧憬一途】があることは知っています。早すぎます！

ですが、圧倒的にベル様が負けています。

メイ様は本当にレベル7相当なのです。：

あ、また負けた…。メイ様が改善点をあげていますね。

本当に説明がうまいです。ベル様がわかりやすいように説明しています。

ヘスティア様に聞けば、ベル様の記憶を見てそれを活用したのだろうと。

ん？記憶？……まさか、リリの悪行まで見られているんじゃないでしょうね。

ハハハ…やばいです。本当にヤヴァいです。

模擬戦の途中で、メイさんと交代しセバスさんがベル様の相手をしました。

そして、私と春姫様はメイ様に呼ばれ、共に別室へ向かいました。

「リリ様…、メイ様が私達に何の御用なのでしょうか？」

「わかりません…。ただ、いやな予感がします。ええ、めちやくちやします。」

…ナイフを盗んだことでしょうか、または10階層でベル様に罠をしかけたことでしょうか…。

怖い怖い怖い怖い！

いやな予感と共に、いい予感がするのは何故でしょうか…。

いずれにしろ、ろくな事ではないことは間違いありません。

「…さて、貴方方にここへ連れてきたのは何故か分かりますでしょうか？」

「い、いえ…全く心当たりが…ありません。」

「リリも…同様です…。」

メイ様は、私達を見てそう言っていた。

ですが、リリにはわかりません。

「ありますよね？私はわかっていますよ。」とメイ様の目がそう言っています。

「ここで話したことは口外禁止とします。よろしいですね？」

「は、はい…。」

「坊ちやまが昨晚、ランクアップしたのはご存知ですね？」

「え、ええ。レベル5に上がったと…」

「発展アビリティや新たなスキル、魔法が発現しなかったのを残念がってました。」

あの時のベル様は、凹んでいました。

聞けば「フレイヤ・ファミリア」で死の3歩手前までボコボコにされた毎日だったとのことです。

遠征よりキツイじゃないですか！

それでも発展アビリティや新たなスキル、魔法が発現しなかったのですね。

そりゃ、ガツカリしますよね。

後で、リリがたーっぷりと慰めてあげましょう！ふふふ。

はっ！そんなことを考えている場合じゃありません！

メイ様に集中しないと…。

「ですが…、実は発展アビリティも新たなスキルも発現しています。内容が内容ですから、坊ちやまには知られていません。嘘がつけないお方ですから。」

内容が内容？ま、まさか『憧憬一途』と同じようなスキルが!?

「どのようなものでございましょうっ？」

「こちらになります。」

そういつて、ベル様のステータスの写しを見せてもらった。

第20話 栗鼠、宣誓。

「はあああああ!? 何ですかあああ、これは!？」

「こんつ!？」

何ですか! この発展アビリテイとスキルは!

ベル様は破廉恥です! 助平です!

「静かになさい。坊ちやまに気づかれます。」

「ででででも、これは…。」

「…これらにリリ達とどう関係があるのでしょうか?」

この発展アビリテイとスキルの組み合わせは凶悪です。

オラリオを歩くだけでステータスが上がりまくるでしょう。

ある意味、春姫様の妖術より厄介かもしれません。

なら、何故リリ達をこの場に呼んだのでしょうか?

「このスキルの効果と発展アビリテイの組み合わせは、ご理解できたようですね。リリさん。」

「…それはわかりましたが、それと何の関係があり何故リリ達を呼んだのでしょうか?」

「そ、そうです。何故でございますでしょうか？」

春姫様はまだ理解できてないようだ。

このスキルは…、ベル様の周りに女性が増え続けることを意味します。

それはすなわち、リリ達の立場がなくなってしまうということに！

「リリさんの予想通り、このスキルとアビリティは坊ちやまの周りに女性が増え続けていくことにあります。」

「こんつ!？」

「…そうですね。」

「だからこそ、貴方達が必要なのです。」

「は?」「え?」

何故…、リリ達が必要なのでしょうか？

ますますわかりません！

「…戦略や謀略に長けていても、こちらの分野は不得手のようですね。リリさん。」

「なっ!？」

「答えを言う前に…、貴方達に問きましょう。」

メイ様が、目に殺気をこめて私達を睨んできました。

「ひい!？」「な、なんでございましょう?」

怖いです！ベル様、助けて下さい！

「貴方達は坊ちやま、ベル・クラネルに身も心も全て捧げる気はありますか？」

「は…?」

「確かにこのスキルは坊ちやまの周りに女性が増えれば増えるほど、坊ちやまは強くなります。同時に有象無象の雌豚たちも群がる可能性も高くなります。それを退けるには貴方達が必要なのです。」

「…つまり、リリ達にベル様の防波堤になれ、と？」

「ザツツライト。」

え…?それ、まちですか…。

「あの…防波堤とは具体的に何をすればよろしいでしょうか？」

「リリさんは、わかりますでしょうか？」

「あの…その…それは本気でしようか？本気にしてもいいんですよね？」

「もちろんです。そうでないなら貴方達に声かけませんよ。」

「??」

「…リリ達は、ベル様にひどいことをしてしまいました…。それをして許されるのでしょうか？」

「!!」

そうです。リリ達はフレイヤ様の魅了によつてベル様が「フレイヤ・ファミリア」の眷属と思ひ込ませて、ベル様にひどいことをしてしまいました。

そんな私達が…、ベル様のそばにいることさえ許されるのでしょうか？

「…なるほど、神フレイヤの所業によつて坊ちやまにひどいことをしたことで、責任を感じているようですね。あれは仕方ありません。第一級冒険者でも神々でも逆らえないのですから。この私でも。」

「……。」

「では、リルカ・アーデ。私から問いましょう。かつて神ヘステイアの前で誓つたあの言葉は嘘だったのでしょうか？」

その時、頭に血が上つて怒りのままに心の内をぶつけました。

「っ!?そ…そんなわけ無いでしょう!リリは…リリはっ!ヘステイア様が見捨てても、リリは絶対にベル様を見捨てないっ!たとえ、世界の敵になろうとも!リリはベル様のそばに居続けますっ!」

「なら、答えは明確でしょう。もう一度言います。リルカ・アーデ、貴方はベル・クラネルに身も心も…そして魂も捧げる気はありますでしょうか?」

「ありますっ!ベル様にひどいことをした分、リリはベル様に何っもかも全てっ、捧げます!」

…はっ！つい、言ってしまったあああ！

顔から火が出るほど、恥ずかしい…。

「いい回答です。春姫さん、貴方は？」

「…ご存知と思いますが、春姫はベル様が居なかつたらここに…この世にいません。ベル様は私を救いウィーネ様を助けてくれました。その…多くの女性に囲まれたとしても、春姫はベル様のそばにいたい！あの人と寄り添って生きていきたいです！」

「そうですか。では、サンジヨウノ・春姫、貴方はベル・クラネルに身も心も魂も捧げる気がありますでしょうか？」

「リリ様と同じことを言いますが、春姫は！ベル様に身も心も魂だけでなく全てを捧げて、一生をベル様のために生きること誓います！」

「いい回答です。では、貴方達に防波堤…つまり坊ちやまのための愛人になつていただきます。」

「やややややっぱり！」

「あああいいいじんでございますか！」

やはり！あ、あ、愛人…。

でも、ベル様は意中の方…【劍姫】様がいるのですが…。

「嫌ならいいんですよ。他に候補者はいくらでもいますから…。」

「やります。やらせてください。絶対にやります！」

「願ったり叶ったりです！やらせてください！」

「そうです！このチャンスを絶対に逃してたまるものですか！」

「さて、お二人の気持ちはわかりました。整理しましょう。」

「はい。」

「先程言いましたが、坊ちやまのスキルと発展アビリティは極めて凶悪です。金目当てや権威目当ての雌豚共も多く寄つてきますでしょう。なので、坊ちやまに真実の愛を誓っている女性のみで囲んで、有象無象どもを退けるのが目的です。」

「確かに寄ってくるでしょうね。」

「ベル様は私達で守ります！」

第21話 栗鼠、歡喜。

「し、真実の愛でございませうか……。はううう。」

「春姫様！しつかりしてください！この体たらくではベル様を守れませんよ！」

「はっ！そ、そうでございませうね。ありがとうございます。リリ様。」

「……言つときますが、貴方達二人だけではありませんよ。第一、貴方たちは第一級どころか第二級冒険者にも至つてないじゃないですか。」

「うぐつ！」

痛いところを突いてきますね……。確かにそうです。

しかし。

「ですが、貴方達は他の人にもないものがあります。」

そうです。リリはリリの武器が、春姫様は春姫様の武器があります。

「リリルカ・アーデ、貴方はまだ未熟ですが【ロキ・ファミア】の【勇者】フィン・デイルムナとタメ張るほどの頭脳があります。【勇者】は40代でありその頭脳を磨くのに時間がかかりました。貴方はその分、【勇者】よりは素質があります。なので、徹底的にその頭脳を磨き、坊ちやまのために勝利の道を通きなさい！」

「はいー！」

ええ！ベル様は突っ走りますから、リリは先回りしてベル様のために、最短の勝利の道へ導きます！

【勇者】なんか負けてたまるものですかあああ！

小人族の栄光？はっ！興味ありませんね！ぺっ！

「サンジョウノ・春姫、貴方もまた未熟ですが貴方の妖術は計り知れません。元【ゼウス・ファミリア】や【ヘラ・ファミリア】でもいませんでした。魔力だけを突き詰め、妖術の昇華に力を尽くしなさい。それが坊ちやまのためになるのです！」

「承知しました！」

春姫さんも調子を取り戻しましたね。

やる気が湧いてきました！

ん…、先程メイ様は「貴方達二人だけではない」と言っていました。

ま、まさか…。

「あの…メイ様。質問です。」

「はい、何でしょうか？」

「先程、メイ様は“貴方達二人だけではありません”と言っていました、他の方も…？」

「当たり前でしょう。貴方たちだけでは不足です。」

「うう…っ!」

「まあ、その方たちも貴方達もよく知ってますので心配は無用ですよ。ただし、これは処女神のヘステイア様には口外禁止です。」

「わかりました。その方たちってどちら様でしょうか?」

「そうですね。教えてあげてもいいでしょう、ただし彼女たちの足を引つ張るような真似をしたら…、お仕置きですよ。」

「ひいつ!」

.....

「うう…:ベル様はあちこち粉をかけすぎです!」

「でも、まだ見知った仲と思いますので、まだ大丈夫ではありませんでしょうか?」

それは確かです。でも…:たつたの半年でここまで多くないですか!?

「ああ、リリさん。団員募集は止めた方がいいでしょう。この「ヘステイア・ファミリア」は極秘事項が多いからです。今のメンバーだけでいいでしょう。」

それは確かに。ベル様とのスキル、ヴェルフ様の魔剣、春姫様の妖術、異端児…。

秘密が多すぎます!新団員が入ったとしても秘密が守れるかどうか…。

スパイもいるかもしれませんからね。

「どうせ、これからも増やしていくのですから問題ありません。」

「あの…、団員募集しないのにどうやって増やすのでしょうか？」

「貴方達…ただ坊ちやまを守るだけ、と思っていたのですか？このファミリアは、主神へスティアの影響を受けて貞操感が強いですね。かと言って「ゼウス・ファミリア」のようになつては困るのです。」

「ま、ま、まさか…べ、ベル様の」

「お、お子様を作つてもよろしいのでございませうでしょうか？はわわ…。」

まじですか！よっしやあああああああ！

そ、そうと決まれば服…いや心の準備を…。あうあうあう。

い、いけません！まずはフレイヤ様との戦争遊戯が先です！

ますます、やる気が漲つてきました！

「ふふふ…ベル様の子供…7人は欲しいでございませぬ…。こんつー！」

「このエロ狐！まず、今を乗り切ることが先です！気合入れていきますよ！私は戦争遊戯のため、「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」の戦力を調査してこちらの戦力を調整しなければなりません！」

「はいっ！春姫は今の魔法を使いこなすようにします！」

春姫様もやる気が出てきたようですね。

ベル様は私達を守ります！

（まあ子作りは当分先ですね。何しろ、坊ちやまは精通がまだきておりませんので、子作りどころか性交さえもできませんけどね。今は彼女たちのやる気が出ていますので、言わないでおきましょう。神フレイヤが手出しできなかったのは恐らくそれが原因でしょうね。しかし、あのバカ主神と13年間一緒にいたというのに未精通とは…、元「ゼウス・ファミア」にもいませんでした。坊ちやまの純粹無垢はあのバカ主神の煩惱を凌ぐということでしょうか。…それだけでも『偉業』になると思いますね。）

「同じファミアである私達ができるだけベル様のハーレムの序列の上位に組み込まなければなりません！」

「はいーリリ様…：せ、正室は無理でございましょうか？」

「…：できるだけなら狙いたいですが、あの人でしょう…：非常に不本意ですが。」

「…：ですね。」

正室はあの方で決まりそうですね…。

…いや、もし断れば私達もワンチャンあるのでは!?

いけませんいけません！まず戦争遊戯が先です！

「メイ様は…：今回の戦争遊戯から見て、どのくらいの見立てでしょうか？」

「…：正直にいいますと非常に厳しいです。【猛者】は恐らくレベル8寸前でしよう。坊ちやまだけで勝つ可能性は低いです。他の第一級冒険者も同様です。うまく【口キ・

ファミリア」とぶつかってくれてある程度消耗してくれるといいのですが。」

「…せめてレベル6が3人はほしいところですね。他の団員も油断ができません。」

ええ、非常に厳しいです。椿様、リユー様は恐らくこちらに味方してくれるでしょう。リユー様は都市外におられるアストレア様へ行き、アストレア様を連れてくるか更新してくるとのことです。

5年前はレベル5にランクアップ寸前だと言っていましたので、更新するとランクアップは確実だと言っていました。

戦争遊戯までに間に合えばいいのですが…いえ、間に合ってほしいです！

あと、せめてあと1人レベル5がいれば、春姫様の妖術でレベル6が3人になるのですが…。

オラリオでレベル5というところ、【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】を除けば、【ガネーシャ・ファミリア】団長のシャクティ・ヴァルマ様が有名ですね。

味方になってくれたらいいのですが、立場上中立を守るでしょうね。
困りました、本当に困りました。

第22話 妖精剣士、再会。

私は今、オラリオ外にいるアストレア様の元へ全力で向かっています。

「ヘステイア・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」の戦争遊戯に、「アストレア・ファミリア」が参戦または「ヘステイア・ファミリア」へ改宗してもらうためです。

ベルを：わ、わわ私の愛しい人を助けるために！

彼が倒れた時は焦りましたが、まずはアストレア様の協力が必要と思い小人族のリルカ・アーデへ言伝をお願いしました。

もつと、彼と話をしたかったのですが。シル：いえ神フレイヤのことについても。

今：：気づいたのですが：、アストレア様へどう報告したらいいのだろうか？

「：：考えていませんでした。どうしましょう：。と、とにかく会ってからです！」

どこから説明したらいいのだろうか：。

それはさておき、今の状況では「ヘステイア・ファミリア」は確実に負けます。

あの：：【猛者】には絶対に勝てません。アンドロメダに助けてもらう前にほんの一時で手合わせしただけですが、今の【猛者】は7年前の同じレベル7の【静寂】を明らかに超えています。

また、「黒妖の魔劍」にも勝てません。

勝つにはランクアップして狐人の妖術で立ち向かう必要があります。

そして…あの「劍姫」にも。

あの時、わかりました。ベルの意中の人が「劍姫」であることに。

シルならともかく、あの戦闘中毒にベルを渡してたまるものですか！

（「いや、お前が言うなよ。」「お前が言うな。」「リオンには言われたくないわね！」）

頭の中で誰かが言ってますが、気のせいでしょう。ええ、気のせいですとも！

いけません、急がねばベルが危ない！（棒）

（（無視しやがった（わ）、このボンコツエルフが！））

わ、私はボンコツではない！

ここですか…。

どんな顔して会えばいいのだろう。

どんなことを話したらいいのだろう。

会わせる顔がないのはわかっていて、それでもベルのために会わなければならない。

私の…正義を取り戻してくれただけのためにも。

すーすーはすーすー。

コンコン……………ガチャ

「はい…、どちら様でしょうか？」

誰だ？この子は？…新たな眷属でしょうか。

「…リユー・リオンと言います。アストレア様はご在宅でしょうか？取り次ぎをお願いします。」

「つー…はい…少々お待ち下さい。」

バタン

「……………オラリオを出てからの眷属でしょうか…。」

ドタバタドタバタ…ガチャ

「リユー…ああ…：…本当にリユーなのね…！久しぶりね。」

ああ…アストレア様は本当に変わらない…。

こんな私でも昔と変わらず話してくれている。

私はひざまずいて、アストレア様へ挨拶した。

「お久しぶりです、アストレア様。本来なら顔を合わせることが許されない私ですが、どうか私の話を聞いていただけませんかでしょうか？」

「もちろん、いいわよ。時間はたっぷりあるからゆっくりと話しましょう？さあ…こつちへいらっしやい。」

「申し訳ありません、アストレア様。時間があまりにもなさすぎます。単刀直入にいいます、私と共にオラリオへ戻ってきてくれませんかでしょうか？」

アストレア様は、訝しんでいた。そりや、そうだろう。

オラリオ外へ出ていくようお願いしたのは私なのだから。

「…リユー…、何があつたの？…いえ、いいわ。わかつたわ。オラリオへ向かいましょう。」

「感謝します。アストレア様。…それでそちらの娘は…？」

「ああ、こちらはセシルよ。数年前に眷属にした娘よ。セシル、こちらは私の眷属、リユーよ。」

「……………セシルといいます。」

「リユー・リオンといいます。」

はて？ 機嫌が悪いようだが、私は何かしたのだろうか？

「セシル、悪いけど今すぐ荷物をまとめてオラリオへ向かうわよ。」

「ええっ！ そんな、急に！ そりや、オラリオへ行くのは嬉しいのですが…。」

「リユー、事は一刻を争うのね？」

「はい、アストレア様。申し訳ありませんが、そのとおりです。」

「そんな！ 貴方は…貴方は！ いきなり来てオラリオへ来い、なんて何を考えているので

すか！アストレア様は貴方が来るのをずっと待ち続けていたのに、いきなりオラリオへ来いなんて身勝手すぎませんか！」

「セシル、リユーは私が信頼する娘よ。貴方ももちろん信頼しているけど、今はリユーを信じてあげてくれないかしら？お願い。」

「……………わかりました。準備をします…。」

セシルという娘は私をキツと睨んで奥へ入っていった。

「ごめんなさいね、リユー。セシルは貴方に対して嫉妬しているのよ。」

嫉妬？ああ…なるほど。

「いえ、セシル…さんの言う通りです。私は許されないことをして貴方に会うことさえも許されないのですから身勝手と言われるのは当然です。」

「リユー…、貴方は確かに許されないことをしてしまっただけで、それと同時に多くの人を救い、笑顔を取り戻したのは事実よ。ヘルメスから聞いているわ。」

神ヘルメスが？…そうですか。感謝しなければいけませんね。

「酒場の娘をやっていることも聞いたわよ。染めた髪の毛も似合うし、絶対に可愛いわよね。ふふふ。ああ、早く見てみたいわ！ヘルメスからは「昔より酒場の娘の方が似合っているぜ！」ですって。」

……………前言撤回します。あの神はやはり一回殴らなければなりませんね。ええ、殴り

ます。

いや……私はやりすぎてしまうので……アンドロメダにお願いしましょう。

第23話 妖精剣士、告解。

「…用意してきました。アストレア様……センパイ……」

「セシルさん、私を先輩と呼ぶ必要はない。アストレア様から聞いているかもしれないませんが、私はアストレア様の眷属となる資格はないのだから。」

「っ！貴方は何もわかってない！ええ、ええ、アストレア様から聞いていますとも！確かに貴方は正義にふさわしくないことをした！けど、その度アストレア様は貴方のことを心配して！」

「セシル、そこまでにしなさい。リユー…急ぐよね？」

「はい。セシルさん貴方はレベルいくつですか？」

「まだレベル1です…。」

レベル1なら、私についてくることさえ無理ですか…。

仕方がありません。

「では、私が二人と荷物を担いで行きます。荷物は最低限でいいでしょう。」

「なっ！…私を馬鹿にしているのですか！ついていけますよっ！」

「セシルさん、レベル1と4の差は大きいのです。ついてこられるならついてきなさい」

い。」

「上等ですっ!」

…レベル2以上の冒険者と会ってなかったようですね。

仕方がありません。この周辺とオラリオと比べては気の毒ですから。

「リユー、ほどほどにね?」

「はい。アストレア様は私が抱いていきます。…失礼します。」

「…目をつぶっておくわ。セシル、言つとくけど、早い内に降参することをおすすめするわ。」

予想通り、5分後セシルは大の字になってのびていた。

「こ、ここまでの差があるなんて…。」

「私はまだ2割しか、出していませんが?」

「…癩ですが、連れて行って下さい…。」

「わかりました。落とされないように縛っておきます。…行きますよ。」

全力を出して飛ばしていききました。

「ぎにやあああああああああああ!」

「……………(目をつぶり耳をふさいでいる)」

「オラリオまで後半分ですか。ここで休憩しましょう。」

見晴らしのいい台地でアストレア様と背中に縛ったセシルを下ろした。

「……うう……あっちへ行つて気分を整えてきます…。」

「ふう……。…リユ、強くなつたわね。更新する?」

「アストレア様、申し訳ありませんがお願いします。」

私は五年ぶりに更新した。

「リユ…、ランクアップおめでとう。」

「…！そうですか。」

「リユ…、貴方、恋しているわね。」

「にやつ！なななななな何故、それを!?!」

何故?どうして?いつバレた!?

私は全く話していないのに!?

「なになに！センパイのコイバナですか！アストレア様から聞いてますよ！ガチガチの堅物で恋ができるかどうかと、心配していましたよ!」

セシルが瞬時で戻ってきました。…何ですかこの子は…。

皆がまだ生きてた時のノリそのものです…。

というか、誰がガチガチの堅物ですか！

アストレア様は私のことを、この子に何を語っているのですか！

「セシルさん…私を先輩と呼ぶ必要はないと言いましたが？」

「い・や・でーす。センパイはセンパイですから！」

…皆が生きていたら、この子を歓迎するでしょうね。

それはそれでいいのですが、この子…私を嫌っていたのでは？

「さあさあさあ！センパイ、コイバナをコ・イ・バ・ナを！」

「何でそんなにテンションが高いのですか…。貴方は私を嫌ってなかったのでは？」

「それはそれ、これはこれ。話していただければ許します。」

何でそんなに偉そうなんですか…。

アリーゼと輝夜とライラを合わせて3で割ったような子ですね。

…：…：我ながら言い得て妙ですね。

（「いや、それはない。」「お前の目は節穴か？」「私はあんな馬鹿じゃないわ！」）

頭の中で誰かが言ってますが、気のせいでしょう。

無視です。無視。

「…、恋なんかしていませんよ…。」

「嘘はいけないわ、リユ。」

「センパイ…嘘が下手ですね。」

しまったああああ！

そういうえば、神の前では嘘がつけませんでした！

・・・他の話をして忘れさせましょう。ええ、そうしましょう。

（「あ、コイツ私達のことをネタにする気だ。」「気高い妖精様が何と恥知らずなことを。」
「私はそんな子に育てた覚えはないわよ！」）

あーあーあー、聞こえませんか！

それに、アリーゼ！貴方に育てられた覚えはありません！

「リユー・・・？何しているの？」

はっ！いけないいけない。

「ええと・・・それには・・・今までのことを話す必要がありますが・・・。」

（言い逃れする気ね。）

（そうはさせませんよ。センパイ！）

「・・・そうね。アリーゼ達が全滅した時の状況から教えてくれる？辛いことだけど・・・。」

「・・・。」

「・・・そうでしたね。あの時はそのことを説明できる余裕ではありませんでした・・・。わかりました・・・。」

そうして、私は5年前に「ルドラ・ファミリア」のジユラに嵌められ、ダンジョンの

イレギュラーによって発生した厄災…ジャガーノートによって私以外全滅した経緯を話しました。

「そう…、アリーゼ達はリユーを生かすために天へ昇っていったのね。」

「うっ…、ううっ…：センパイたち…：会いたかったです…。」

「……。」

「リユー…：私が都市外に出た後に、貴方は何をしたのかを教えてください。」

「…：それも語る必要があるのでしょうか？神ヘルメスからおおよそ聞いているのではなかったのでしょうか。」

「リユー…：私は貴方の口から聞きたいの。」

「…っ、わかりました…。」

「…：センパイ…。」

そして…：復讐の炎に身を焦がしたことを…：多くの人を殺害したことを話しました。

第24話 妖精剣士、決意。

「……以上となります。そして私は、シルに……ミア母さんに拾われて現在に至ります。」

「……ありがとう、リユー。辛いことを話してくれて。」

「うっ……うっ……」

私が潰した組織は27，ギルドへ突き出した神は4，多くの死者を出しました。

皮肉なことにそれで『暗黒期』を終わらせることになりましたが……。

しかし【ルドラ・ファミア】ホーム強襲時に、ジュラは確実に殺しておくべきでした。

そうすれば、再びジャガーノートが出てくることはなかったのです。

……ん？ そうなるとベルとあのような仲になることはなかった……？

……………考えないことにしましょう、ええ。

いけません。……気を取り直してアストレア様に向き合いました。

「アストレア様……、私はもうアストレア様の正義に顔向けできません……。」

「リユー……、それは違うわ。確かに貴方は多くの人を殺し、多くの罪を犯した。それは私の責任でもあるわ。」

違う！それは絶対に違う！

貴方のせいではない！私が未熟なせいだっ！

「違いますっ！アストレア様のせいではありませんっ！」

「リユー…、私が都市外へ出る前に貴方へ告げた言葉、覚えている？」

「っ…正義を捨てなさい、…と。」

「その意味はね…「アストレア様自らが奉ずる真理に背き、私の『復讐』の一端を背負っていただく、ことでしょうか？」…そうよ。気づいてくれたのね。」

「いえ…、その、あの…か、彼が教えてくれて気づかせてくれましたので…。」

ああ…言ってしまった…。

ベル…許して下さい…。

「ぐすっ…ぐす…？おお！例の彼ですね！」

「セシル…貴方は黙ってなさい！」

「ひやうっ?!」

「リユー。ヘルメスから聞いたけど、今のオラリオは笑顔でいっぱいだそうね。リユー…貴方は私怨とはいえ、『暗黒期』を終わらせた。それは「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」でも「ガネーシャ・ファミリア」でもできなかった。誰が何を言おうとも、私は貴方のやったことを傲慢に、誇りに思うわよ…リユー。」

「…アストレア様…。ありがとうございます。」

私は、ようやくアストレア様の眷属に戻れたかもしれません…。

「それにリユ、いい人に巡り会えたわね。…それで『豊穰の女主人』に拾われた後のことも聞きたいわ。」

「え？ま、まだ続けるのですか？」

「これ以上は、違う意味で精神力が保ちません！」

「き、今日は、もう遅いですので寝ましょう！」

「あ、センパイ！逃げる気ですね！」

「違う！オラリオへ一刻も向かわなければならぬのです！」

「そうです！決してベルのことを言いたくないわけではないのです！」

「なるほど！愛しの彼に一刻も早く会いたいですね！ひゅー！ひゅー！」

「……セシル、寝られないのなら寝かせてあげましょうか？私はやりすぎてしまうかもしれないので、永遠の眠りになるかもしれません。」

「レ、レベルの後輩に大人気ないですよ、センパイ。アストレア様へお助けください」

「！」

「、この子は…。」

「仕方がないわ。リユ、セシル、続きは明日にしましょう。」

「そうですね。では、お休みなさいーアストレア様、センパイー」

…本当にアリーゼと輝夜とライラを合わせて3で割ったような子です。

結局話さなければならぬのですか…。

どうにか…誤魔化す手はないでしょうか？

（「ねーよ。」「諦めろ。」「誤魔化しちや駄目よ！」）

…ベル、助けてください…。

その時、どこかの兎は盛大なくしやみをかましていた。

そして周囲にかなり心配されていた。

「ああ、リユー。先程のステータスを渡しそびれたわね。はい。」

眠りに就く前に、アストレア様は、私のステータスの写しの羊皮紙を渡してくれました。

「なっ…!?!」

L v. 5

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：I O

狩人：G ↓ E

耐異常：G ↓ E

魔防：I ↓ G

魔導：I

◆ スキル

・妖精星唱（フェアリー・セレナード）

魔法の効果が増幅する。夜の間、強化補正が増幅する。

・精神装填（マインド・ロード）

攻撃時精神力を消費することで『力』を上昇させる。精神力消費量含め、任意発動。

・疾風奮迅（エアロ・マナ）

疾走時、速度が上昇すればするほど攻撃力に補正。

・白兔純愛（ラビット・ラブ）

愛しい人のことを想えば想うほど、全能力超高補正。

発動時に、発展アビリティ『剣士』の一時発現。

発動時に、発展アビリティ『精癒』の一時発現。

◆ 魔法

・ルミノス・ウインド

広域攻撃魔法。風・光属性。

・ノア・ヒール

回復魔法。地形効果。森林地帯における強力補正。

………バレたのはこれかああああ!?

・白兔純愛（ラビット・ラブ）

愛しい人のことを想えば想うほど、全能力超高補正。

発動時に、発展アビリティ『剣士』の一時発現。

発動時に、発展アビリティ『精癒』の一時発現。

とても嬉しいけど…、今この場では嬉しくないっ！

…このスキルは今の私にとって非常に強力ですね。

ベル…ありがとうございます。

アストレア様は私を優しい目で見て、

「リ्यू…、その人の手はとれる?」

「…言ったら寝ていただけます?」

「ええ。」

「はい…、私の手を取れる唯一の男性です。彼を…愛しています…。」

「そう、よかつたわ。リユー、逃しちや駄目よ。じゃあ、お休みなさい。」

…アリーゼと同じことを言いますね。

ええ、逃す気はありません。どんなことがあつても。

ベル、待つててください。もうすぐ駆けつけますので。

ベル…貴方は私の『正義』であり『希望』だ。

あり得ませんが、他の者が貴方を見捨てても、私は決して貴方を一人、死地へ生かせはしない。

私は改めてそう決意し、オラリオの方角を眺めた。

第25話 正義神、追想。

リユーに会えて嬉しかった。

リユーが正義を取り戻してくれて嬉しかった。

そして…、リユーが恋をしてくれて嬉しかった。

セシルと揉めるかと思っただけど、コイバナで解消できそうね。

うまくやれそうだね。よかった。

でも、リユーの彼氏？が気になるわね。

……：時間があつたら、あの子のところへ行つて眷属に入れようかと思っただけど、しばらく先になりそうね。

5年前、リユーを除くあの娘たちが全滅した私は表面上冷静だったけど、内心はズダボロだった。そしてリユーが『復讐』に堕ちるのを分かっている、あの娘を止めることはできなかった。

止めたらリユーは間違いなく立ち直れなくなり、冒険者として…いえエルフとしてでも生きていくことができなかつたでしょう。そして、遠くない日に自決してたでしょう。

ええ、私はそう確信している。

リユーを生かさなければならぬ。

そのため、自分の司る真理『正義』を曲げてあの娘に『正義』を捨てさせるしかなかった。

あの娘の『復讐』に自分を入れて、その罪を分けてもらうために。

そして、オラリオを出た私は自分と同じ境遇に遭ったあの大神の元へ行つた。

自分の眷属をほぼ失ってしまった後はどうしたらいいのか？とアドバイスをもらいに。

本当はあのセクハラ爺のところへ行きたくなかった。本当に。マジで。

そして私は大神：ゼウスに会った。

そしたらあの子がいた。あの白い、兎のような子に。

真つ白だった。

あの子と話をし一緒にいるだけで、私は笑顔を取り戻し私の荒んだ心を癒やしてくれた。

もつと一緒にいたいがため、セクハラ爺を誘つて谷底へ落とした。

てへっ☆

あの子には「お祖父さんはしばらく旅へ出ている」と嘘を言って、しばらくあの子と

二人きりで過ごした。

一緒にいて楽しかった。私のために色々としてくれて嬉しかった。

あの子は恥ずかしがっていたけど、私はあの子が大変愛おしかった。

けど、それも2ヶ月程だった。

あのセクハラ爺が土産と共に帰ってきた。

……忌々しい。さすが、ヘラに幾度かやられても復活するだけはあるわね。

谷底へ突き落とされて何で生きてられるの？

どうして五体満足で悠々と帰ってこられるの？

下界に降りる時、何かズルしてないでしょうね？

あのセクハラ爺と一緒にいると、貞操が危なくなるし旅へ出る決心をした。

あの子を眷属として一緒に連れて行きたかったけど、あのセクハラ爺の方に懐いてい

るようでは得なかった。

…それにあの子には負い目がある。

セクハラ爺にあの子のことを聞いた時、私は泣き、激怒した。

何故、あの子のところへ彼らと呼んでやらなかったのか。

何故、あの子が寂しい思いをしてることを彼らへ伝えてやらなかったのか。

特に【静寂】のアルフィアには！

あのつらく悲しい戦いが起こった原因は、エレボスではない。
ゼウス！全て貴方のせいではないのか！

【暴食】、ザルドの主神である貴方が！

ゼウスは黙って、それらを聞いていた。

「他人に意志を委ねるな。精霊だろうが神々であろうが同じだ。あいつらの物語だ。」

そう言われた時、私は何も言えなかった。

正にそうだった。

しばらく旅をして、自分を見つめ直そう。

アリーゼ達の安らかな眠り：無事に転生していることを祈ろう。

リユートの無事を祈ろう。

そうして私は旅へ出た。

そしてセシルと出会い、色々あつて眷属にした。

セシルにお願いした武器もあるし、しばらくはゆっくりしていた。

ヘルメスから手紙があり、リユートが予想通り『復讐』を実行していた。

疑わしきものを罰し、多くの闇派閥を滅ぼし、邪神を追い詰めていた。

【ロキ・ファミリア】や【フレイヤ・ファミリア】、【ガネーシャ・ファミリア】はリユート

がやっていたことを知っていたが、黙認していた。

自分たちが手出せないことを、リユーが代わりにやってもらっているからだ。

しかし、エルフの王族である「九魔姫」はリユーに加勢しようとし、多くの人に止められたようだ。「勇者」や「重傑」が大怪我を負う程の怒りだったとのこと。

【劍姫】のこともあり断腸の思いで、断念せざるを得なかったようだ。

………ロキはその影響で危うく天界へ送還されそうになったらしい。

多くのファミリアは、助けも妨害もなかった。

ただ、リユーのことを知っている者は陰ながら援助はしていたようだ。

特に、「ヘルメス・ファミリア」のアスフィ・アル・アンドロメダと「ガネーシャ・ファミリア」のシャクティ・ヴァルマは。

本当に、彼女たちの助けはありがたかった。

そうしてしばらくして内、ヘルメスからの手紙があった。

『暗黒期』がリユーの手によって終わった、と。

思わず手紙を落とし、倒れそうになりセシルに支えられた。

リユーが死んだと思った。けど、恩恵は生きている。

リユーの生存を、毎日毎日祈り続けるしかなかった。

神だけ。

またしばらくしている内、ヘルメスの手紙と共にリユーの手紙があった。

嬉しかった。生きてくれて嬉しかった。

手紙の文字の癖は覚えている。リユーは生きている。

立ち止まっている、と手紙に書いていたけど、私はこう書いて送った。

「悩みなさい。今はそれでいい。後悔も悲しみも、全てを手放さず、旅を続けなさい。」
と。

あの娘は少しずつだけど、前へ進み始めている。

何かのきっかけがあれば、『正義』を見つけられる。

私はそう信じている。

そして、あの娘、リユーは先日私の前に現れた。

アリーゼたちがいた時より、目に意志がこもっていた。

アリーゼたちがいた時より、目に正義がこもっていた。

嬉しかった…。

リユーのステータス更新でランクアップしていた。

ステータスを見ればリユーが恋していることが明白だった。

リユーの反応も初々しかった。

アリーゼたちがいたら、終始からっていたでしようね。

リユーがこんなに焦るといふことは、その彼氏に何かあったといふことね。

でも、その彼氏に会って私の目で見定めないとね。

リユーに相応しいかどうか。

リユーと共に支え合っていけるかどうか。

そういえば…、セクハラ爺と一緒にいる、あの子は元気かしら？

余計なことを吹き込まれて、セクハラ爺に染められていないかしら？

本当に心配だわ…。

リユーの件が終わったら、あの子を眷属にするため迎えに行こう。

寂しがつて、泣いていないといいけれど。

待っててね。

ベル。

第26話 後輩、見直。

私はセシル。

正義の女神、アストレア様の眷属です。

今、私はセンパイ…リユーセンパイの背中に担がれてオラリオへ向けて走っています。

目をつぶり耳を塞いでいます。アストレア様もです。

怖い怖い怖い！

「ようやく、オラリオまで後1日で着きます。今日はここで宿をとって休みましょう。」

「は、はい…。」

センパイ、息切れ1つもしてない…。

レベル5つてすごい…。

私達が暮らしていた家からオラリオまで1週間程かかると言うくらいなのに、たったの2日で？

センパイ…すごい！

「ここは…アグリスの町ですか。この間までいましたが、ちょうど隠れ処があったはず

です。

「そこで休みましょう。」

「リ्यू……？この間って？貴方、オラリオにいたはずよね？」

「そうです。センパイはオラリオで、『豊穣の酒場』で働いていたはずですよ。」

「何故、アグリスの町にいたのでしょうか？」

「……。食事が終わってから説明します。何故、アストレア様を急遽オラリオへ連れて行かなければならなかったのか、何故アグリスの町にいたのかを。」

「リ्यू……。」

「つまり、昨夜の話の続きということですね！」

「……………遺憾ながらそうなります……………」

「センパイは苦虫を潰したような顔をしていた。」

「あーあー、駄目ですよ！キレイな顔が台無しです！」

「私は、話の続きが聞きたかった。」

「センパイの生きた証を知りたかった。」

「センパイの正義を知りたかった。」

「私はセンパイが嫌いだった、大嫌いだった。」

アストレア様の正義を汚して多くの人を殺したからだ。

アストレア様は理由がある、と言ってくれたが、私は納得していない。

正義は殺すためにあるんじゃない！

先日、センパイが現れた。

センパイを見た時、すぐわかった。

この人は、正義を汚してなんかいない。

オラリオへ今すぐ行く、と聞いて激昂した。

久々に会ったというのに何だ！

アストレア様がずっと心配されて、貴方の無事を祈っていたというのに！

アストレア様が宥めていなかったら、襲いかかってたかもしれない。

今考えると、無謀なことをしたかもしれない…。

レベル1の私にとって、レベル4は強いと思っていた。

ただ、それだけだ。何らかの工夫をすれば倒せるのでは？と。

でも、違った。

センパイは最低限の荷物とアストレア様を担いで走ってたのに、

私はそのセンパイが米粒になるくらい引き離された。

降参してセンパイに仕方がなく、やむを得ず担がれ走った。

むり。

勝てるわけがない。早々と白旗を上げた。

休憩して私が涼しいところで、胃の中身をリバースしてた時、

「リニュー…、貴方、恋しているわね。」

アストレア様のそのお言葉を聞いて、瞬時で回復して駆けつけた。

センパイは恥ずかしがって、白を切ろうとしていたが明らかに嘘をついていた。

センパイがアストレア様の言う通り、正直者だと知った。

それなのに、何故正義を汚し、人を殺してきたのか、を知りたかった。

そしてセンパイから：「アストレア・ファミリア」のセンパイ達が死んでいった理由

を知り、センパイが『復讐』に身を墮とざるを得なかったのを知った。

悲しかった、悔しかった、私がある場になかったことを。

私がセンパイの立場なら耐えられない。

絶対に後を追おうとするでしょう。

：けど、センパイは『復讐』に身を墮とし、闇派閥を壊滅した。

アストレア様の言う通りだった。

センパイは、高潔で気高いエルフだということ。

そのセンパイが、『復讐』に身を墮とす程の衝撃な出来事だったことに気づいた。

私は恥ずかしかった。

センパイに嫉妬していたことを。

正義を汚したセンパイを見下していたことを。

今なら、センパイをようやくセンパイと見ることが出来る。

食堂でセンパイとアストレア様と夕飯を食べていた。

「久々の外食で、リユーと一緒になのは嬉しいわ。」

「アストレア様と再びこう一緒に食事ができる、とは夢にも思いませんでした。」

アストレア様とセンパイ、本当に嬉しそうだ。

「おい！聞いたか？あの【白兔の脚】がいる【ヘスティア・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の戦争遊戯が起きるってよ！」

「それだけじゃねえぞ！【ロキ・ファミリア】が【ヘスティア・ファミリア】へ戦争遊戯を仕掛けたらしいぞ！こりゃ、【白兔の脚】でも無理だろうよ。明らかに【ヘスティア・ファミリア】の負けだろ。賭けにならねーよ。」

あー、うるさいなー。静かにしてよー。

アストレア様とセンパイが楽しんでいるんだから。

「何だと!?【ロキ・ファミリア】までも!?どういうことだ！」

「あ？なんだ、てめえは？ひいつ！」

「答えろ。どういうことを聞いています。」

「セ、センパイ？」「リ、リユウ？」

「し、知らねえよ！ただ、先程のオラリオからの連絡で、「ロキ・ファミリア」が「ヘステシア・ファミリア」に戦争遊戯を仕掛けてお互い合意したってよ。そ、それだけだよ。」

「…馬鹿な…。【フレイヤ・ファミリア】だけでなく【ロキ・ファミリア】までも!？」

センパイ、すごく動揺している…。

もしかして、センパイの彼氏がいるところって「ヘステシア・ファミリア」？

「も、もういいだろ！その小太刀を下げてくれよ！」

「…すみません。これはお詫びとして酒代にしてください。」

「…あ、ああ。あんた、「ヘステシア・ファミリア」と縁があるのかい？なら、【白兔の脚】に伝えてくれよ。頑張れ、とよ。」

「わかりました。伝えましょう…。すみません、アストレア様、セシル。先に部屋へ戻ります…。」

センパイは青い顔をして部屋へ戻っていった。

「アストレア様…：センパイの彼氏がいるところって…。」

「十中八九、「ヘステシア・ファミリア」でしょうね。恐らくリユウが焦ってたのはこの

ことだわ…。5年前まではヘステイアは下界に降りてなかったから、最近でしょうね。」
「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」って、オラリオの最強派閥ですよ
?」

「…そうよ。でもどうして?」「ヘステイア・ファミリア」に戦争遊戯を?」

アストレア様は考え込んでいた、その背景について。

「センパイ…あつ!センパイの彼氏って「白兔の脚」でしょうか?」

「ええ、そうね。その可能性が高いわね。兎人かしら?」

「おや、先程のねーちゃんの知り合いかい?」「白兔の脚」について知らないのか?」

先程、センパイが脅していた冒険者だ。

「ええ、5年間田舎にいたので情報が入ってないの。久々に出たので知らないわ。」

「あー、そりゃ知らんわな。【白兔の脚】はヒューマンの男性だけ、名前は…いけね忘れ
ちまった。」

ヒューマンなのに白兔?変な人ですわー。

おっと、それをセンパイの前で言ったら、お仕置きされますわ。

「そう…その子について教えてくれる?」

「ああ、いいぜ。酒代もらったからな。そいつはな…。」

【ヘステイア・ファミリア】の【白兔の脚】について教えてもらいました。

食事を終えて部屋へ戻るところです。

「規格外ね…その子。」

「半年間でレベル4ですか…。」

驚きました。センパイの彼氏が冒険者になってたった半年でレベル4…。

「私もオラリオに長くいたけど、そこまで早くレベル4になったことは聞いたことないわ。」

「よほど才能があるんでしようね。」

才能次第ですものね…。はあ…。

「リユーは部屋に戻ったところかしら？」

「そうですね…!!」

「セシル?どうしたの?」

開けようとした部屋の中から…、すすり泣きが聞こえます。

センパイ…。

「センパイが…泣いています。」

「…そう、セシル。部屋へ入りましょう。今、リユーのそばにいてあげられるのは私たちがしかないわ。」

そうです！私たちはファミリアです。
助け合わなければならぬのですから！

第27話 正義神、思慮。

リユーが泣くなんて…、よほどその子のごことが心配なのね。

「うう…。私はどうしたら…。はっ!? すみません、見苦しいところをお見せしました。」

「リユー、いいのよ。辛い時は泣いてもいいのよ。」

「いえ、すみません…。先程は申し訳ありませんでした。」

リユー…見栄はらなくても…。

「センパイ…、センパイの彼氏って「白兔の脚」ですよね?」

「な、何故分かったのですか!?! それにま、まだ彼氏じゃないです。」

「は?」「え?」

え? まだ彼氏じゃない?

リユーが一方的に好きなだけ?

……………ダメね。本当にダメね。

成長したかと思えば、そっちの方はやはりダメだったのね。

「リユー、オラリオに着いたらその子と絶対に会わせなさい。私が仲を取り持ってあげるわ。」

「私も手伝います！センパイ、引いちゃ駄目ですよ！」

絶対に成就させてあげる！

アリーゼたちもそう言うはず！

「ちよ、ちよつと…アストレア様、落ち着いてください。…セシル、貴方は黙ってなさい！」

「いいえ！黙りません！センパイは恋愛に対して奥手でしょう！」

「ぐっ!？」

はあ…、この娘は戦闘しか頭にはわかつていたけど…。

今になって、輝夜の言つてた「ポンコツエルフ」の意味がわかるわ…。

「リユー…、恋愛はね…戦争なのよ。」

「そうですよ！攻めないと駄目なんです！」

「……………その恋愛なんです。今回の…戦争遊戯の原因は…。」

「は?」「え?」

葛藤しているリユー…、初めて見るわ…。

そうじゃなくて、どういうこと!?

恋愛の戦争がオラリオで起こっているの？

一体…何が起きているのよ…。

「リユー…とにかく『豊穰の女主人』で働いてからのことを説明してくれる？」
「わ、わかりました。まずは…」

リユーは半年前までのことを話してくれた。

「…半年前まではこのような平和な感じでした。」

「そう、リユー。そのシルって子に感謝しないといけないわね。…リユー？」

「センパイ？」

「ええ…そうですね。シルには感謝しています。ですが…今は。」

リユー、つらく悲しそうな顔している…。

そのシルって娘に何かあったのね…。

…『豊穰の女主人』へは行ったことはないわね。

そういえば、アリーゼがあその娘さんのことについて何か言ってたわね…。

確か…「人間じゃないような気がする。」と失礼なこと言ってて、叱った覚えあるわ。

…アリーゼの勤は当たるし…はっ!?

まさか…いえ…。もしそうなら…今回の戦争遊戯は…。

「センパイ、それで半年前から何が起ったのでしょうか？先程の【白兔の脚】と関係があるのでしょうか？」

「はい、大いに関係あります。べ…彼が大きく関わっているのです。」

…思ったんだけど、どうして名前を言わないのかしら？「べ」がつく冒険者？

それに…ヘスティア、あのグータラ処女神が男に興味もつかしら？

持たなかつたら眷属にしないよね…うーん。

「…アストレア様？」

「え？ああ、ごめんなさい。話してくれるかしら？」

そして、リユーは半年前から2ヶ月のことを話してくれた。

「…才能があるってすごいんですね…。」

「ふふふ…。セシル、彼に才能はないんですよ。ただ、ひたすらに前を向いて走り続けている、それだけです。そして彼は、常に困難の道 را 走り、格上の冒険者やモンスターを相手にし戦い続けて、勝っているのです。」

リユー…、貴方、恋人の惚気話をしている顔しているわよ…。

はあ…本当に【白兔の脚】の仲を取り持つ必要があるわね。

「そして…その一ヶ月後…彼はオラリオを一旦敵に回してしまいました。」

「!?!」

「ど、どうしてなんですか!？」

「モンスターを…かばったからです。」

「じ、じゃあ【白兔の脚】は『怪物趣味』…?」

「セシル、彼はそのような人じゃない。それは私がよく知っている。そして…彼がかばったモンスターはただのモンスターではありません。人の言葉を喋り…理解することが出来るモンスター『異端児』です。」

「!?!」

喋るモンスターですって!?

そんなの…下界を揺るがす大事件じゃない!

「闇派閥に属する密猟者によって、ダンジョンからオラリオへ出てきた『異端児』たちをダンジョンへ返すため、彼は…悩み…苦しんでいました。」

「そ、それでどうなったんですか!?!」

「彼は『偽善者』になることを選び自分の信念を曲げず、『異端児』を助けることを選びました。その結果、【ロキ・ファミリア】とぶつかることになりました…。(ああ!?!あの時を思い出すと、悔しい! 【劍姫】に負けるとは!?)」

「リ、リユウ?どうしたの?」「セ、センパイ、怖い顔していますよ。」

「はっ!?!すみません。アストレア様、申し訳ありません。私は彼を助けたかった。そのため、【ロキ・ファミリア】の【劍姫】の足止めをしていました。…ですが、レベル6の

彼女になすすべもなく負けました…。」

「…そう。リユーが選んだことなら私は何も言わないわ。それで…どうなったの?」

「そ、そうです!早く続きを!」

「結果的には、『異端児』たちはダンジョンへ帰ることに成功できました。…が、神ヘルメスの策略により一部の『異端児』を生贄に捧げて、ベ…彼を英雄の道へ導こうとしていました。」

「ヘルメス様って、アストレア様に時々会いに来た神ですよ?私、あの神は大嫌いです!」

「ヘルメス…貴方エレボスと同じようなことしてるわよ。」

私は呆れてしまった。7年前、エレボスがやったことと似たようなことを。

今回は『異端児』を利用するなんて…、彼にそこまでの価値を見出したというの?

「でも、ベ…彼はその道を壊し、別の道を選びました。レベル7相当の黒いミノタウロスと一騎打ちにより英雄の道を自ら引き出しました。残念ながら負けてしまいました。彼はそれでも立ち上がりました。」

「すごい!すごいですね!センパイの彼氏は!」

「それで…い、いやまだ私の彼氏じゃないと言ってるでしょう。…ふふふ。」

…どうしたら、レベル7相当の黒いミノタウロスと一騎打ちになるかはわからないわ

…。

でも、あの場にいたオラリオのみんなはわかるといふことね…。
聞いてみないとわからないわね。

…：ヘルメス、貴方の策略を破るといふことは…【白兔の脚】は彼らが求めた英雄と
いふことなの？

リユアの彼氏を別にしても、【白兔の脚】に会いたくなつたわ。

第28話 後輩、受入。

センパイの彼氏、すごい！

才能なくてもここまで強くなれるなんて！

私も諦めず前へ進んでいけば、上級冒険者に…。

…できるかあああああ！

いや、レベル1でミノタウロス強化種を撃破って何よ！

レベル2でレベル3冒険者をタイマンで勝利っておかしくない？

レベル3でレベル7相当の手負いのモンスター…『異端児』と戦闘ってありえないでしよ！

レベル4でレベル4のセンパイたちを殺したモンスター…ジャガーノートをセンパイと共闘して撃破って…しかも手負いのままで深層をさまよいコロシウムを破壊するなんて…フザケテイルノデスカ？

そんな状況で、センパイが惚れてしまうのも無理ありません。

まさに…、『英雄』そのものじゃないですか!?

話を聞くだけで私もときめいてしまうじゃないですか!?

はっ…!? いけません。

センパイに殺される!?

…そもそも今回の戦争遊戯になったのは何ででしょう?

まだ…聞いてないところがありそうですね。

「それで…リユウ。まだ話していいことあるよね?」

「はい…、アストレア様。あります。これから話すことが今回の根幹です。」

それでセンパイは、今回について話してくれた。

「…以上となります。それで私は彼の助けとなりたいために、アストレア様のところへ向かったのです。」

「信じられないわ…。美の女神の、特にフレイヤの魅了が一切効かない子がいるなんて…。」

「【白兔の脚】だけでなく、その人の主神ヘステイアもすごいんですね…。」

美の女神の魅了がどういものかはわからない。

けど、神の力が一切効かないなんて…。

どこまでカッコいいんですか!?! 【白兔の脚】は!

彼の主神であるヘステイア様も、オラリオ全ての魅了を解除するなんて…。

「ハスティアはわかるわ…。ハスティアは元々『美の神』に対する迎撃役…安全装置ですもの。」

「はっ!?ア、アストレア様はハスティア様と仲はいいんでしょうか? いいんですよね?」

「え、ええ。同郷だし、その…仲はいい方よ?」

「やりました!これで主神同士は問題ありませんね!」

「……。」

センパイがガッツポーズ…。

アストレア様も呆れて見ている。

「…はっ!?失礼しました。」

「コホン。…アリーゼが以前言ってたわ。シルつて娘は『本当に人間か?』と。」

「アリーゼが…?」

「リユウの話してくれたことから、確信したわ。フレイヤは、シルという娘の体を利用して『役割演技』をしてたのね。」

『役割演技』?」

「『役割演技』…シルがいえ…神フレイヤも言っていました…。『役割演技』とは何です?」

「…これを言ったら、貴方たちは怒るかもしれないでしょうね。神が『神威』をゼロにし、下界の住人に成りすまし、市井に溶け込んで生活を営むことね。フレイヤはシルという

名で、町娘に成りすましていたのね。」

何て、悪趣味なことを…。

神様は…暇つぶしのために私たちを弄ぶの…!?

「…なるほど。神フレイヤの言っていたのはそれでしたか…。役割が『町娘』で場所は『酒場』と。道理で、同じ職場に元団長【小巨人】のミア母さんや、【戦車の片割れ】のアーニヤが働いており、【女神の戦車】アレンがウロウロしていたのはそうでしたか…。だが、シルがいる時に神フレイヤがいたはずです…まさか!？」

「ええ…恐らくそのシルという娘は実在していた。スキルか魔法等でフレイヤとすり替わっていたでしょうね。」

「…何ということだ…。近くにいた私はそれに気づけなかった…。べ…彼が言っていたシルの偽物がその人で、神フレイヤはシルの名前を借りて成りすましていたということですか…。くそっ!」

センパイが悔しそうにしていた。近くで数年いたのに欠片でさえも気づかなかったことに。

神様って…怖い。

「だとすると…【フレイヤ・ファミリア】ホームで私を助けてくれた、あの人がシルの偽物…いやシル本人…? いや、なら何故私を助けた…?」

「…リユー、これは私の考えだけ…、フレイヤは『白兔の脚』を我が物にしようとしてたよね？」

「え？あ、はい…。」

「はあ…、今回の戦争遊戯の根幹が恋愛にあるのは本当にそうなのね…。」

「え？アストレア様？どういう事でしょうか？」

「ど、どういう事でしょうか？」

アストレア様が呆れたような、照れ臭いような顔をしてそう言つてた。

「恐らく…いえ間違いないわ。フレイヤだけでなくシル本人も『白兔の脚』に本気で恋をしたわね。」

「はあああああ!?!」

「ええつ!?!と、いうことは三角関係?!」

「ま、まあ、そうなるわね…。フレイヤは恋多き神と言われており私も少しは知っているわ…。けどリユーの話の聞いていると、フレイヤは『白兔の脚』に天界でもないほどの本気で、相当入れ込んでいるわね…。非常にまずいわ。」

センパイと私は呆然していた…。

「……ど、どうしたらいいでしょうか？私は…。」

「リユー…。明日の朝に、いえ今すぐオラリオへ向かいましょう。ヘステイアだけでな

く、【白兔の脚】にも今回の背景や事情を聞かないといけないわ。今は一刻を争う時だわ。」

アストレア様が真剣な表情でそう言っていた。

「そ、そうです！センパイ、【白兔の脚】いえ…彼氏に会うべきです！」

「セシル…、そうですね。すみません、私のために。」

センパイはつらそうで、嬉しそうな顔をしていた。

「当然ですよ！センパイ、私達は『ファミリア』なのですから！」

「!!セシル…ありがとう…。」

センパイはそう言って、早々と荷物をまとめ始めていた。

【白兔の脚】 って…どんな人なんだろう…。

それにオラリオ！

センパイには悪いけど、夢見た都市へようやくやく入れる！

第29話 正義神、呆然。

リユーの話聞いて確信した。

フレイヤは「白兔の脚」を『伴侶』と見定めた。

だから、都市全てを敵にしても手に入れたかった。

：以前、フレイヤが伴侶探しのために下界へ降りた話をしたことがある。

当初は世界中を回っていたそうさ。

だが、あの最強最悪の「ヘラ・ファミリア」との抗争で、オラリオに強制的に縛られて伴侶探しを断念せざるを得なかったとのこと。

その『伴侶』が見つかった：、リユーの想い人の「白兔の脚」が。

フレイヤが全てを賭けて、戦争遊戯を仕掛けたのが何よりの証拠。

非常にまずい。自由気ままにしていた彼女が本気になったら：。

しかも、ロキまで？

ロキはまあ、フレイヤの狙ったものを掠め取って笑おう、というのが狙いでしょね。いずれにしろ、一刻も早くオラリオへ向かって「白兔の脚」：「ヘステイア・ファミリア」と合流しないとイケないわ。

…そういえば、まだ名前を聞いてなかったわね…。

まあオラリオへ着いて、直接本人へ聞いたらしいわね。

あら…何故かしら？ベルの顔が浮かんでしまったわ。

あの子は元気かしら？

最近、ベルの顔が浮かぶのが多くなったわね…。

早く迎えに行かないといけないわね。

夜通し飛ばして、ようやくオラリオへ着いた。

「わあ…ここがオラリオなんですわね！」

「ええ…セシル。ここがオラリオです。かつて『アストレア・ファミリア』があったところもここです。」

「もー！センパイ、ダメですよ！『アストレア・ファミリア』は、今！ここに！いるんですから！」

「!!そうですね…すみません。セシル、『アストレア・ファミリア』はここにあり、ですね。」

リユー…、セシル…わずかな期間で打ち解けたようで何よりだわ。

ある意味、「白兔の脚」に感謝しなければならぬわね。うふふ。

「門番は…、【ガネーシャ・ファミリア】ですか。…シャクティがいます。大丈夫でしょう。」

そして、私達はオラリオへ到着した。

「(む…：リオンか) ここは私が対応する。お前らは指定した位置につけ。」

「シャクティ…：久しぶりです。アストレア様、そして新たな眷属セルです。」

「久しぶりね。シャクティ、5年ぶりかしら？」

「アストレア様…：お久しぶりです。リオン、お前は死んだことになっているのだから、堂々とするな。まあ、【ガネーシャ・ファミリア】は周知しているが、他の者が対応したら面倒になっていたぞ。」

シャクティは相変わらずね。元氣そうでよかったわ。

「こつちへ来い。現状を確認したい。」

「すみません。シャクティ、ご迷惑をおかけします。」

そうして、私たちは詰所へ入った。

「リオン…：お前が、いや【アストレア・ファミリア】がオラリオへ戻ったということは【ヘステリア・ファミリア】へ加勢するつもりなのか？」

「そうです。シャクティ、今はどうなっているのですか？【フレイヤ・ファミリア】と【ロ

キ・ファミリア」が「ヘステイア・ファミリア」へ戦争遊戯を仕掛けていることは途中の街で聞きました。」

「……………まだ何も進んでない。」

「え?」「は?」「ふえ?」

あれからかなり時間が経っているというのに?

フレイヤやロキラしくもないわね…。

「どういうことかしら? 神会はもう開いて日程は決まったんじゃないの?」

「それは…「そう!俺がガネーシャだ!シャクテイ、そろそろ休憩しろ!」。」

ガネーシャ…間が悪いわね。

「む!アストレアではないか!5年ぶりだな!元気だったか!」

「ええ久しぶりね、ガネーシャ。貴方も元気そうね。」

「そう!俺がガネーシャだ!」

「センパイ…その神は何なんですか…?」

「しっ!セシル…その神はオラリオの有力派閥の1つ【ガネーシャ・ファミリア】主神です。」

「ええ…?この神が…?」

「すまない…恥をさらすようで…。ガネーシャ、少し黙ってくれないか?」

ひどい扱いようね…ガネーシャ。

それと、まともに返事をしてほしいわ。

「それで、ガネーシャ。私達【アストレア・ファミリア】は【ヘステイア・ファミリア】へ加勢するつもりなの。今の現状を教えてくださいませんか？」

「それは…ガネーシャだ！」

イラツ☆

「ガネーシャ？」

「ハイ！すみません。えーとな、神会は開いたことは開いたんだが…」

「ガネーシャ、お前が説明すると長くなる。なので、私が説明する。だから、あっちへ行つてくれないか？」

「む！そうか、シヤクティ。後は任せたぞ…アストレア、【ガネーシャ・ファミリア】は

【ヘステイア・ファミリア】へ加勢するかどうかを迷っている。ではな！」

ガネーシャ…相変わらずな扱いようね。

「コホン…。すまない、騒がせたな。」

「いえ…。」「あれが有力派閥…。」

「ああ、君はオラリオが初めてか。念の為に言つとくが、主神はアレでもまだまともな方だ。」

「アレがまとも!?! オラリオってコワイ……」

シヤクテイ……うちの新人入りの娘を怖がらせないでくれるかしら?

「シヤクテイ……さっきの話の続きをお願いします。」

「ああ……いや私も聞いて耳を疑ったんだ。その……神フレイヤが体調不良で神会へ全く出てないようだ。だから、神フレイヤの体調が戻り次第開くそうだ。……戦争遊戯の合意から、もう5日目だがな。」

「え? それは本当なの? 当事者なのよね?」

「体調不良……、何があつたのですか?」

「……………二日酔いだ。」

「は?」「え?」「ふえ?」

二日酔い? え? どうしてそうなるの?

「聞いた話だが……私も未だに信じられないんだ……。あの神フレイヤがやけ酒で二日酔い、酔いが冷めたらまたやけ酒……の繰り返しだそうだ……。オツタルたちが止めようにも、癩癩をおこしてどうにもならないそうだ……。」

「……………」

私達はしばらくの間、呆然としてしまった。

フレイヤ……、彼氏とケンカしたみたいなのをしないでちょうだい!

真面目に考えて、夜通し駆け抜けてきた私たちが馬鹿みたいじゃない！

第30話 後輩、困惑。

シャクテイさんの発言を聞いて私達は呆然としてしまった。

「いや、呆然としてしまうのはわかる。私たちも同じだったからな。」

「…そ、そうですか。つまり、今はまだ何も進んでないということでしょうか？」

「そうだ。「アストレア・ファミリア」にとっては丁度よかつたかもしれないな。」

センパイはホツとしていた。

そりや、彼氏のピンチに駆け抜けて着いたらまだ何も進んでなかつたらホツとするよね。

でも…二日酔いって…。彼氏とケンカしてやけ酒か！

神って…アストレア様以外碌な神いないの…？

本当にアストレア様でよかつた。

「ところでシャクテイ、ベ…「ヘステイア・ファミリア」はどうなっていますか？」

「ああ、時間が経つごとに多くのファミリアが集まっている。だが、まあ支援程度だな。相手は「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」だから戦力になりそうなのは少ないだろう。」

「ガネーシャ・ファミリア」は中立を取るつもりなのかしら？」

「…私たちも迷っています。「ヘステイア・ファミリア」、特に「白兔の脚」には深き恩がある。」

恩？何のことだろう…？

「ああ…エニユオ、いえディオニユソスの件ね。」

「はい、「ヘステイア・ファミリア」、特に「白兔の脚」がいなければ私たちは、いえオラリオは消滅していたでしょう。それぐらいの恩がある。」

「…なら、何故「ヘステイア・ファミリア」に加勢しないのです！」

「リオン、私たちはオラリオの治安維持を務めている。戦争遊戯に加勢して敗北したらオラリオの治安維持は誰が務める？「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」がやれるか？門番ならいいかもしれませんが、全部やれるとは思わない。だからだ。」

…そうか。役割というものがあるんだ。

「アストレア様、確認しますが「アストレア・ファミリア」は「ヘステイア・ファミリア」へ加勢するのですね？」

「ええ…、リユーに正義を取り戻させてくれた、深い恩があるわ。それに、ヘステイアにもね。」

「そうですか…。わかりました。「ガネーシャ・ファミリア」はギリギリまで様子見るこ

とになります。すまない、リオン。」

「いえ…貴方たちの役割を忘れていた私が悪いです。すみません。」

シヤクテイさんは本当に助けたいんだ。

けど、オラリオの治安を守らなければならない。

そのために戦争遊戯で犠牲を払うわけにはいかないんだ。

悔しいんだろうな…、つらいんだろうな…。

「ガネーシヤもヘスティアに何かできないか悩んでいるんだ。アレでもな。」

「アレで?」「アレですか…。」「アレが?」

何故、シヤクテイさん程の人がアレな神にいるんだろう…。

「【ヘスティア・ファミリア】で集まっている戦力はわかりますでしょうか?」

「…:…【白兔の脚】はこないだランクアップして、レベル5になった…。」

「【ええっ!】」

早い!早すぎるよ!もう第一級冒険者!?

センパイの彼氏…しゅごい…。

「そ、そうですか(もう追いつかれましたか、でもさすがベルですね。ふふふ)。(顔がにやけているわね。)

(彼氏がランクアップしたら嬉しいでしょうね。)

(リオンのこの顔、初めて見るな…。)

「後は、『ヘファイストス・ファミリア』の『単眼の巨師』の椿、ただだな…。」

「え？それだけですか…。少なすぎる!」

「リオン、お前はアストレア様に更新してもらってレベル5になったのか?」

「え?ええ、よくわかりましたね。」

「あれだけのことをしたら、ランクアップできないのがおかしいだろうが。」

センパイとシャクティさんは顔を見合わせて笑っていた。

長年の戦友つばいなあ…。

「【白兔の脚】がどこかにこもって何か訓練しているようだ。【ヘステティア・ファミリア】以外はわからないようだ。」

「どこかって…、ベ…彼は訓練しているのですか?」

「ああ…知っているのは【ヘステティア・ファミリア】だけだ。今の時間は…まだ訓練している頃だな。夜になるとホームへ戻るようだからその時に行ったらいいだろう。」

「わかりました。そうします。」

「ただ…2日前の夜に訓練帰りの【白兔の脚】を見たが、第一級冒険者となった【白兔の脚】がボロボロになって、『ミアハ・ファミリア』の【悲観者】が肩を貸していた。『むっ

…。」訓練相手はお前と思っただが、違うな。【単眼の巨師】は、ヘファイストス様と【不冷】と共に鍛冶場でこもって武器を作っているから違うだろうな。」

【悲観者】が?…いえ、私ではありません。シャクティたちではありませんよね?」

「ああ、私たちではない。だから誰が稽古をつけているのかがかなり噂になっているんだ。戦争遊戯の相手となった【ロキ・ファミリア】はあり得ないだろう。」

え? レベル5になったセンパイの彼氏が? ボロボロに?

それに【悲観者】って誰ですか?

まさか…浮気? あわわわ…。

うわ、センパイの背後に嫉妬オーラが!?

「(セシルといったか、何を慌てているんだ?) ところで、…リオン。【フレイヤ・ファミリア】に動きがあった。ミアが動いた。」

ミア? センパイの職場の上司の人?

「なっ! ミ、ミア母さんが! どうして!」

「ミアは元フレイヤ・ファミリア団長だ。完全脱退を条件に、正式に参加するという表明があった。」

「そう…フレイヤは本気なのね。」

「いや…癩癩起こす神フレイヤに、匙投げたオツタルたちがミアに泣きついたそうだ…。」

それも昨日にだ。」

「……………」

ええー…締まらないじゃないですか…。

「…フレイヤ……。何をやっているのよ…。」

「そ、そうですか。それならシル…いえ神フレイヤが回復する日も近そうですね。」

「ああ、そうだな。ただ、昨日からあのミアの怒鳴り声が「フレイヤ・ファミア」のホムからずっと聞こえているんだ。近所迷惑だとクレームが入っているんだ…。」

「…うわぁ……………」

ミアという人、強いのかな…って元団長!?

というか最強派閥、本気じゃないですか!

【ヘスティア・ファミア】は大丈夫かなあ…。

第31話 正義神、再会。

フレイヤ…子供じゃないんだからしつかりしてちょうだい！

でも、おかげで私たちも間に合ったからよかったようなものね。

はあ…、締まらないわ。

「シヤクテイ、ありがとうございます。私たちはこれで。」

「さて、リオン。お前は死んだことになっているんだから、名前くらい変えろ。」

「え？そう…いわれても、うーん…。」

ああ、リユーはギルドの要注意一覧に入ってたわね。

しかも死んだことになっているし、名前だけでなく二つ名まで変えたほうがいいかも

ね…。

「シヤクテイ、ヘルメス…〔ヘルメス・ファミリア〕は何をしているの？」

「あくまでも中立をとっているようだが、やや〔ヘステイア・ファミリア〕寄りだな。今

は、戦争遊戯のための場所を考えているようだが、神フレイヤが神会へ来ないから困っ

ているようだ。」

「そう、わかったわ。リユー、セシル。〔ヘルメス・ファミリア〕へ行くわよ。」

「あ、はい。でも…【ヘステシア・ファミリア】へは…。」

「センパイ、シャクテイさんがさつき言つてたじやないですか。夜にならないと戻つてこないって。」

まあ、早く会いたいという気持ちはわかるわ。

夜に行くまでに、現在の状況を把握しとかないといけないわね。

そうして、私たちは詰所を後にして【ヘルメス・ファミリア】へ向かった。

しかし、ヘルメスとアスフィは出かけてたので、ルルネ・ルーイという犬人が対応してくれた。

「アストレア様、お久しぶりです。ヘルメス様とアスフィはちよつと出かけてんだ。」

「そう、どこへ行つたかは知っているかしら？」

「いや、知らないんだ。ただ、3日前に【ヘステシア・ファミリア】へ行つてから何かすごく怯えていたな。」

3日前に？何があつたのかしら？

それにあのヘルメスが怯える？…ますます気になるわ。

「つたく、それもあの【白兔の脚】が弱いくせに「むっ」余計なことをするから、こんなことに「成敗！」がはああああつ！」

「!?!」「…ふっ。」

何事なの!?

ちよつと、リユー……。「ざまあみろ」の表情止めなさい。

どれだけ【白兔の脚】のことが好きなのよ…。

「ルルネ! 貴方は! あの御方より弱っちいくせに何を言っているのですか!」

「あの御方?」

「ま、待つてくれよ! ローリエ!」

「聞けば、貴方は半年前にあの御方がオラリオに来られた時、貴方が勝手に入団面接をして追い出したそうですね! 追い出さなかつたら、今頃私はあの御方と…、おのれ! 許しません! 万死に値します! 死になさい!」

「ぎゃあああああ!」

「ま、待つて! ローリエ!」誰か止めろー!」

「ヘルメス様でもいい! 団長呼べー!」

「……ええー。」

ローリエつて娘、【白兔の脚】にぞっこんのようね。

「と、取り込み中のようね。他のところへ行きましょう。」

「はい、わかりました。」

【白兔の脚】つて、どれだけ人気あるのよ…。

リユーは大丈夫かしら…。

あら？ ホツとしたような…。

ああ、「ヘルメス・ファミリア」に入団していたらあのローリエと…。

はあ…、ここまで恋に夢中になるとは思わなかったわ。

そうなるとうますます【白兔の脚】に会わないとね。

女性を弄ぶ人なら許さないからね！

そして、私たちは知り合いのファミリアを転々と挨拶しながら回っていた。

どこも【フレイヤ・ファミリア】の不評と、【白兔の脚】の人気（特に女性）が凄かった。

リユーはずっと口を尖らせていたわ…。

そして、「ロキ・ファミリア」ホームへ着いた。

「…!? あ、アストレア様!? お久しぶりです！」

「ええ、久しぶりね。ロキに会わせてくれるかしら？」

「し、少々お待ちを！」

門番の子はロキを呼びに行っていた。

「アストレア様…私はいないほうが「ダメですよ！ センパイ」…。」

「リユー…、貴方が気にするのはわかるわ。でも、ロキの神意を知りたいのよ。」

そうしている内にロキが【勇者】を連れて出てきた。

「よー、久しぶりやな！アストレア。元気にしとったかー？」

「ええ、久しぶりね。ところでロキ、フレイヤはどうなってるのよ？」

「あー…。うん、まあ、めちやくちや荒れてるっぽいわ。」

「お久しぶりです、神アストレア。神フレイヤについては、昨日ミアが言っつてようやく落ち着いたみたいです。」

「そう。それに久しぶりね、【勇者】。調子はどうかしら？」

「悪くありませんが、その、アイズが…。」

「聞いてやー！アストレア、うちのアイズたんが…アイズたんがあああ。」

ちよ、ちよつとロキ。泣かないでよ。

「アイズたんが…あのドチビんとこの少年に首つたけなんや！」

え？あの【剣姫】が？嘘でしょ……？

はっ！

いやな予感がして、私はそつと後ろを見た。

…ああ、修羅がいる…。

「セ、センパイ！落ち着いてくださいよ！」

「セシル、私は落ち着いている。そう、落ち着いているとも。」

全然落ち着いていないじゃない!

ここを早く去ったほうが良さそうね。

「口、ロキ。ちよつと用事があるので、これでね。」

「ん? あー…、了解や。ちよつと戦争遊戯に時間がかかるからまだ、大丈夫やで。」

「神アストレア…、そして『疾風』。今の「ヘステイア・ファミリア」は、何かおかしいんです。用心に越したことはないが、気をつけて下さい。」

え…? 貴方が用心するほど…?

「ヘステイア・ファミリア」に、一体何が起こっているのよ…。

「私たちがいますから心配は不要です、【勇者】。それに【劍姫】に伝えてください、彼の傍にいるのは私です、と。」

ちよつと、リユー…!

【劍姫】への宣戦布告の言伝をさりげなくしないでよ!

「ハハハ…、伝えよう。頼むから、本気で殺し合いしないでくれよ…。」

ごめんなさい…【勇者】。

「おのれ! あの戦闘中毒め!」

リユー…、貴方も戦闘中毒じゃない…。

「何か言いましたでしょうか? アストレア様?」

「ひい!？」

もう、これはダメだわ。

【白兔の脚】と結ばれないと自決しかねないわ!

「そ、そろそろ夜ですね。センパイ、「ヘスティア・ファミリア」へ向かいましょう。」

「!ええ!行きましょう!今すぐに!さあ、早く!」

「はいはい、わかったわ。」

もう我慢できない、という感じね。

仕方がない娘ね。

そして、「ヘスティア・ファミリア」ホームに着いた。

「へえー、立派ですね。」

「元々は「アポロン・ファミリア」のホームでした。戦争遊戯で勝利し、ホームを改築したそうです。」

「そう…、ヘスティアらしい暖かさがあるわね。」

そして呼び鈴しようとしたところで、

「あれ?リユースさん?」

あれ…その声は…。

「べ、ベルっ!ようやく戻ってきました!」

ベル………？

「あ、本当に白い兎っぽいですねー。」

白………兎………？

「リユーさん、戻ってきてくれたんですね！嬉しいですよ！」

「はい！ベル！私はランクアップして、ベルと同じレベル5になりました。これで力になれます！」

「ありがとうございます！助かります！」

「いえ！あ、こちらが私の主神のアストレア様と、後輩のセシルです。」

「初めまして！ベル・クラネルと言います……ま………す？」

私は呆然とした。

何故、早く気づかなかったのだろう。

白い兎といえば、あの子のことを浮かべたというのに。

「レア……お姉ちゃん……？」

第32話 神々、啞然。

昨日は本当にいろいろあつたなあ…。

フレイヤの魅了を解除するためバベルの屋上から神威を解放したり…

ロキから戦争遊戯を仕掛けられたり…、

ベル君の家族であるメイ君とセバス君の封印を解いたり…

ベル君がランクアップして、凶悪な発展アビリティとスキルが出たり…。

起きたばかりなのに、昨日のことを考えるだけで疲れた…。

さて、神会へ行つて戦争遊戯の段取りしてこないとなー。

できれば時間を稼いで、ベル君のステータスをギリギリまで上げて、準備を万全に、し
ていておかないといけないからね！

「おはよう。あれ？ベル君は？」

「ベル殿ならメイ殿とセバス殿と中庭におられます。」

「へー、何しているの？」

「ええ…、ランクアップ特有のズレを元に戻すためとセバス様がおっしゃっていまし
た。」

「そっかあ。まあ、最強と最恐の指導教官がいるんだ。大丈夫だろう。」

うん、あの子達のファミリアの指導教官がベル君を鍛えてくれるだろう。

ボクはボクで、やることをやっとなかないと！

「ヴェルフ君は？」

「朝一に【ヘファイストス・ファミリア】へ出かけられました。」

ああ…、ベル君のための武器をヘファイストスと椿くんで作るとか言ってたな。

「君たちの予定は？」

「私はタケミカツチ様のところへ行つて、今回の戦争遊戯について力添えできないかを聞いてきます。」

「リリは春姫様とホームで考えることがあります（メイ様より大事な話があるとのことですが…何でしょう。怖いです。）」

「リリ様と同じでございます。」

「そっか。ボクは神会へ行つて今回の戦争遊戯について話し合いだね。」

「ヘステイア様、できれば時間を稼いでくださいね！ベル様のためにも。」

「わかっているよ、サポーターくん。」

言われなくてもわかっているって。

相手はフレイヤとロキだ。多くのファミリアを集めて対抗しないと！

「じゃあ、ボクは神会へ行ってくるよ。あとは頼んだよ。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

アポロンの時と違い、仮病で誤魔化せないし：困つたなあ。

神会に着くと、すでに多くの神がいた。

「ヘステイア、珍しく早起きじゃない。」

失礼な、ボクだつて起きる時は起きるさ！

あれ？ 椿くんとヴェルフ君と武器作るんじゃないやなかつたのかい？

「…ヘステイア。貴方の言いたいことはわかるわ。作る前にまずベル・クラネルのスキルの特徴について椿とヴェルフで検証しているところよ。それが把握できない限り作れないわよ。」

ベル君のスキルをそこまで検証してくれるのは嬉しいけど、他のファミリアにはバラスさないでくれよ。

まあ、ヘファイストスなら大丈夫と思うけど。

「うん、ありがとう！けど、スキルについては極秘でね。」

「わかっているわよ。」

「ロキから戦争遊戯を仕掛けてくるとは驚いたな。」

「大丈夫なのか？」「フレイヤ・ファミリア」に続き、「ロキ・ファミリア」までも…。」

ミアハ、タケミカツチも来ており心配の声をかけてくれた。

メイ君やセバス君のことを話そうと思っただけ、メイ君とセバス君が

『どこから漏れるかわかりませんので、戦争遊戯開始まではヘアアイスストス様とゴブニユ様以外は話さないでください。勝利のためにも。伝えるのは私たちがします。』
と念押しされたんだ。

「ありがとう……ミアハ。タケミカツチ。今は言えないけど、勝ちの目は何とかあると言っておくよ。」

ごめん……。今は言えないんだ。いろいろと力になってくれているのに。

「……そうか。しかし、必要になったら言うがいい。」

「ああ、命のこともあるしな。」

……ありがとう。

しばらく談話していると、ヘルメスとロキがやってきた。

「よく、ドチビ。よく逃げずに来たな、褒めたるわ！」

「はっ！そつちこそ、その貧相な胸を見せにきたのかい？暇だねえ。」

周りの神々が「お、始まるか。」「またやるのか？飽きないな」と冷やかし始めた。

「なんやとおお！このドチビがあああ！」

「やるかあああ！この絶壁がああああ！」

そして、いつもの取っ組み合いを始めてしまった…。

何やってんだろう…。ボクらは。

しばらくして、ヘルメスがようやく止めてくれた。

「これぐらいでいいんじゃないかい？…残るのはフレイヤ様だけ…。まだのようだね。」

「ゼーはー、あのフレイヤがまだ？後から来るんじゃない？」

「ひーふー、あの腐れおっぱい、何様のつもりやねん…。」

フレイヤがまだ？

ふーん！余裕あるから堂々と来る気だろうね！

「おい…、いくら何でも遅すぎあらへんか？」

「おかしいな…。この時間に来るように言ったはずなんだけど、欠席のわけがないし…。」

「フレイヤって、時間にルーズだっけ？」

予定時間より2時間オーバーしてもフレイヤは来なかった…。

「あー…、どうしようか…。」

ニョルズが頭を抱えて入ってきた。

「あれ？ニオルズじゃない？」

「ニオルズ？どないしたんねん？」

「ニオルズ？予定時間より遅れたみたいだけど、どうしたんだい？」

ニオルズの様子がおかしいみたいだけど、何かあったのかな？

「えーと…、うちの眷属つながりでフレイヤより言伝あったけど…。」

「は？」「え？」「何だって？」

何でニオルズが？

「ちよつと待ちや。何でニオルズんとこの眷属が色ボケの言伝頼まれているんや。」

「正確にいうと、オツタルからミアへ、ミアがうちの眷属クロエに、クロエから俺に伝えてきたんだけど…。」

「は？」「何やねん…。その伝言リレーは…。」

伝言リレーをしている場合かよ！

どうして、直接来ないんだよ！

「それで、ニオルズ。フレイヤ様からの伝言は？」

「ああ…、『体調悪いから延期してちょうだい。』とのことなんだけど…。」

「……。」

僕は唾然としてしまった。

第33話 処女神、心配Ⅰ。

「ふっぎけんなあああ！あんの色ボケがあああ！」

「フレイヤ様にしては珍しいな…。こういう時に体調を崩すなんて。」

うん、おかしい。戦争遊戯の宣言した時のフレイヤはふぎけている様子じゃなかった。

あれは本気モードだった。そのフレイヤが延期…？

「困ったわね…。本当に。はあ…何が起こっているのよ…。」

あ、デメテルだ。

「やあ、デメテル。君も遅れてくるとは珍しいな。」

「…ええ、ヘルメス。ちよつとね。ほら、この前の魅了のことでフレイヤへ一言文句言つてやろうと思つて【フレイヤ・ファミリア】のホームへ単身行つてきたの。」

「ちよ…デメテル…、よつぽどキレたんやな…、まあ。気持ちはわかるわ。」

デメテル…、よつぽど怒つてたんだな…。

デメテルつて、怒ると怖いんだよなー。

あれ？でも怒っている様子じゃないよね…？

「デメテル、どうしたんだい？」「フレイヤ・ファミリア」のホームまで怒鳴り込んだ割には、怒っている様子じゃないよね？」

「ハスティア、聞いて頂戴。私ね、『フレイヤ・ファミリア』のホームへ行ってきたね、いつものどおり門番に追い返されると思う、神威を全開にしてフレイヤに会わせるよう脅したのよ。」

ちよ…、完全にキレてんじゃん…。

「うわあ…、神威を全開って…まあ、いいや。それでどうしたんだい？」

「融通が利かない門番もさすがに折れて、奥へ引込んでフレイヤのところへ聞きにいったのよ。数十分後ぐらいに、血塗れ…いいえ、ワイン塗れになった『猛者』が出てきたのよ。」

「は？」「え？」「何だって？」

ワイン塗れ？え？レベル7の『猛者』が？

「何がどうなったら、ワイン塗れの『猛者』が出てくるんや…。」

「わからないわ…。それでね、『猛者』曰く「神デメテル、現在フレイヤ様の心身ともよくありません。大変お手数で申し訳ありませんが、後日お越しく下さい」と言っていたのだから、私ね「そんなの関係ない！会わせろ！」と限界まで神威を上げて言っちゃったの、てへっ☆」

「何て無謀な…。【猛者】も迷惑だつたらうに…。」

「ちよつと！迷惑つて何よ！…でね、その時【女神の戦車】が「おい！何してやがる！オツタル！またフレイヤ様が痲癩お越しやがった！その女神に構つていられないでこつちを手伝え！」と【猛者】と同じくワイン塗れになつて出てきたの。私、それを見てようやくただ事ではない、と思つたの。」

「何で、痲癩起こすんねん…。というか色ボケが痲癩おこしたの、天界でもこつちでも聞いたことあらへんで…。おい、ニョルズ。そういうのあつたん？」

「い、いや…。初耳だ…。俺も聞いて、シヨック受けているよ…。」

「俺もだよ…。というか、あの【女神の戦車】がワイン塗れ？」

痲癩？あのフレイヤが？

一体…、【フレイヤ・ファミア】のホームで何が起こつているんだよ…。

「そしたら、魔剣あたりをぶつけられてあちこち焦げていた【白妖の魔杖】や、物を投げつけられてボロボロになった【炎金の四戦士】、すすり泣きしていた【黒妖の魔剣】が代わる代わるに出てきたの。…さすがの私も怒るところじゃなかったわ。仕方がないから、そのままこつちへ来たの。」

「「うわあ…、第一級冒険者が…。」」

「…何や…何が起こつているんや…。」

「…フレイヤ様がその調子じゃ、今日は神会開くどころじゃないな。…ロキ、それでも進めるかい？」

「できるか!?こんなんで話し合いするどころやないやろが!」

「そうだよね…。仕方がない、フレイヤ様が出られるようになったら開こう…。」

「えー。」「仕方ない。」「そうだ!何が起こつてるか俺凸してくる。」「

「よせ、天界へ送還されるぞ。」「誰かスクープしてこいよ。」「

神々どもが好き勝手に言っているよ…。

でも…。

「…大丈夫かな、フレイヤのやつ…。」

敵だけど、デメテルの話の聞いたらそれどころじゃないや。

でもベルくんが聞いたら、絶対に見舞いに行くだろうね。あの子は優しい子だから。

あ、そうしたらフレイヤの奴は歓喜するだろうな…。うん。言わないでおこう。

「何や、ドチビ、敵のことを心配する立場じゃあらへんやろ。今日はもう中止や、中止。ドチビもさつさと帰って、はよ寝ろや。じゃ、うちは帰るで〜。」「

「そうだね、ロキ。今日は解散しよう。ヘスティア、フレイヤ様が来れるようになったらまた連絡するよ。」「

ロキのやつ…。早く帰って戦争遊戯の対策を練ろ、ということかよ。

まあ、時間は稼げたからいいとするか。
つと、その前に。

「ミアハ、ちよつといいかい？」

第34話 旅神、追憶。

今日は予想以外のことが起きたよ、本当に。

だがフレイヤ様が回復するまで、何とか時間が稼げそうだ。

しかし…、デメテルの話で「フレイヤ・ファミリア」の第一級冒険者達がフレイヤ様の痲癩による八つ当たりされているって…、何が起こっているんだよ…。

まさかフレイヤ様がベルくんをモノにできなかつたことで、痲癩を起こしてオツタルくんたちに八つ当たりしたとか？

ハハハ…まさか恋人とケンカしてやけ酒して、周囲へ八つ当たりするようなことをフレイヤ様がするわけがないだろ。

もしそうなら、ベルくん恐るべし…。

天界でもないぜ…、そんなの。

さて、ヘステイアは…つと。

「…ということなんだ。ミアハ頼んだよ。」

「了解した。しかしヘステイア。いいのか？」

ん？ヘステイア、ミアハに何を頼んでいるんだ？

「ん、本当はほつといてもいいんだけど、やっぱり気になるんだ。」

「そなたは…、本当に神格者だな。天界でも一二を争うだけの善神だけはある。」

ああ、それは認めるさ。

本来なら大神：いや大女神になっているはずだけど、「面倒くさい」で断つたからなあ…。

しかも、オリンポス十二神筆頭になつてもおかしくないのに、揉めそうになるとディオニュソスにあつさり譲つたくらいだしな。

いや、…あの時から、ヘステイアはディオニュソスのことを危惧してたかもしれないな。

この前のエニユオ、いやディオニュソスの件はヘステイアのつぶやきのおかげで切り抜けた上、眷属であるベル君も決定打となる大きな役割を果たしたしな。

これでベル君はオラリオの全ての冒険者、特に第一級冒険者が認める冒険者になつたな。

本当はまだ隠しておきたかつたけどな。

「やだなー、ミアハ。おだてるなよ。ナーザくんがヤキモチ焼くぜ。」

「?何故、ナーザがヤキモチ焼くのだ?」

ミアハ…もつと女心を知ろうぜ。

「さて、ボクも帰るとしようか。ベルくんに早く会いに行こうっと。」
おっと、今のうちに声かけとくか。

「ヘステイア、ちよつといいかい?」

「何だい、ヘルメス。あ、そうだ。この間はすごく助かったよ、アスフィ君もね。」

「この間? ああ…ヘステイアでなきやフレイヤ様の魅了は解けなかつたさ。感謝するのはこちらだよ。」

本当だよ…、フレイヤ様の『執念』、『執着』を見誤っていたオレの過ちだった。

フレイヤ様は天界でもいなかた『伴侶』…いやベル君を見つけたんだ。

オラリオを、全てを捻じ曲げてでもベル君を手に入れたかつた程の『執念』を…。

ベル君以外はどうなつてもいいという程の『執着』を…。

オレは甘く見ていた。

ヘステイアだけしかできない。

たとえ、同じ処女神であるアルテミスやアテナでもできたかはわからない。

だが、神格が圧倒的に違う。

ヘステイアは破邪の光…すなわち悠久の聖火、『浄化の祭炎』を司る。

だから、フレイヤ様の魅了を祓うことができる、

多くの神々の中ではヘステイアしかない。

恐らくゼウスやヘラでもできないかっただろう。

もう一回言うけど、本当に危ない綱渡りだったなあ…。

「いえ…ヘステイア様のおかげで、ヘルメス様…私達のファミリアだけでなく、オラリオのみんなが元に戻りました。大変感謝いたします。」

アスファイもヘステイアの神威がいかに巨大か、今回でわかっただろうな。

普段の行動がアレだから懸隔が激しいのはわかる…。

ヘステイアも、もうちつと威厳を保持してほしいのに。

そしたらオリンポス筆頭となり、ゼウスとヘラの夫婦喧嘩も少しはなくなっていただろうに。

本当に惜しい、惜しすぎる…。

だけど、そういうところが神も人も…怪物、いや異端児も惹かれていくんだろうな。

ベルくんと同じように…。

子は親に似るといふけど、正にその通りだな。

…ゼウスの置き土産というより、ヘステイアの神徳によるのが大きいかもな。

「それで、ヘルメス？何の用だい？」

「ああ、戦争遊戯について打ち合わせをしようと思つてね。ホームへ行つてもいいかい？」

今回の戦争遊戯は、明らかにフレイヤ様が完全に有利だ。

しかもロキが「ヘステイア・ファミリア」に戦争遊戯を仕掛けるとはな…。

まあ、時間稼ぎまたは「フレイヤ・ファミリア」への牽制だろうね。

せっかくオレが、「ロキ・ファミリア」を「ヘステイア・ファミリア」に付かせるために色々準備していたが、結局無駄になったな。

……ロイマンめ、余計なことを。

まあ、ウラノスからの懲罰があつたみたいなのでヨシとしようか。

全財産没収だつて？ざまあ。

少しでも「ヘステイア・ファミリア」に有利な状況へ持つていかない…。

ベルくんが「フレイヤ・ファミリア」にいてもいいけど、俺としては「ヘステイア・ファミリア」にいたほうが強く輝くと思うんだよなあ。

フレイヤ様には悪いけど。

「え？……うーん。そうだね、行こうか（ヘルメスはゼウスやヘラがいた時に、オラリオにいたんだからメイ君とセバス君との面識はあるから、大丈夫だろう。）」

「？ああ、行こうか。戦力などを考えて場所も選ばないといけないからな。」

「……ヘルメス様。今日は止めません？私、これまでにない程すつごく嫌な予感がするのですが…、本当に。」

アスファイ……？何でそう思うんだ？大丈夫だろう！

あの、ベルくんのことだ。快く受け入れてくれるだろう。

……………そう思ったこともありました。

「ふふふ、神ヘルメス。お久しぶりですね、15年ぶりでしょうか。」

「ははは、どうしましたか？海国の姫である貴方が結構震えていますよ、寒いのですか？おかしいですね、室温がそんなに低いはずはないのですがね。」

何で、ナンデ……いるんだああ！

【ゼウス・ファミリア】 専属メイド……【最強侍従】 メイ！

そして【ヘラ・ファミリア】 専属執事……【最恐執事】 セバス！

第35話 旅神、尋問。

オレたちは、首筋にナイフを突きつけられている。

ヘステイアと共に「ヘステイア・ファミリア」のホームへ入ったら、いきなり拘束させられた。

何だ何だ！と思い、メイの顔を見たら一気に血の気が足の指先まで引いた。

あのような体感、ヘラからの折檻もとい拷問以来だよ…。

現状を説明しよう。

オレの首筋にメイのホウキ仕込刀が、アスフィの首筋にセバスのステツキ仕込剣が突きつけられて正座させられている。

レベル4のアスフィは抵抗しようとしたが、当然レベル7上位相当のセバスにかなうわけがない。

この二人が手を組んだら、「猛者」いや「ゼウス・ファミリア」団長の「傑物」でも勝てるかわからないくらいなのに。

……………詰んだ。

「何だ何だ！…また、ヘルメス様かよ。今度は何をやったのですか？」

「わかりません。メイ殿とセバス殿がいきなりヘルメス様を…。」

「どうせ、ろくでもない事でしょうね。」

「ちよ、ちよつと！メイくん、セバスくん！何しているんだい！ヘルメスは戦争遊戯について…。」

「ヘステイア、いやヘステイア様ああ！助けてええええ！何でもするからああああ！」

「うわあ…、ヘルメスのその必死な表情…天界でのヘラのお置き以来だよ…。」

「そうだよ！それに相当するくらいなんだよ！」

「助けて！お願い！」

「ヘステイア様、これは尋問なのです。」

「そうです。坊ちやまへ仕出かした悪行の数々について、この糞神に色々とお聞きしたいことがあるのですから。」

「ベル君に対する悪行だと…!?よし！許可する！」

「ヘステイアああああ！」

「悪行の数々って…異端児の件だけじゃないんですか!？」

「ふふふ、神ヘルメス。お久しぶりですね、15年ぶりでしょうか。」

「ははは、どうしましたか？海国の姫である貴方が結構震えていますよ、寒いのですか？おかしいですね、室温がそんなに低いはずはないのですがね。」

何で、ナンデ…いるんだあああ！

震えているのはあんたらのせいだよ！

アスファイ、アスファイー！大丈夫か？

あ、俺を涙目でめつちや睨んでいる。

『だから、止めましょうと言ったでしょうが。この馬鹿神が。』

と思ってるんだろうなあ。

「あー、うん。ひ、久しぶりだね。メイ、セバス。な、何故君たちが封印から解放されているのかな？」

「言わなくてもわかるでしょう。唯一無二の最後の生き残りである坊ちやまに決まってるでしょう。」

「わかりきったことを聞くのが貴方の悪い癖ですな。」

やっぱりかー！

彼らを解放できるのはベルくんしかいないからなあ…。

もつと先と思つたんだが…想定外だよ…。

「そ、そうかい。俺はベルくんにも何もしてないぜ？本当だよ。」

（というか、ベルくんはどこにいるんだああ！助けてくれえええ！）

「ああ、神ヘルメス。坊ちやまなら我らの訓練で疲れ果てて既に床についておられま

す。」

「これまでの坊ちやまは睡眠時間が足りません。十分に睡眠をとっていただけ英気を養っていただけない。」

!?

読まれてる！だから、こいつらは苦手なんだ！

「あれ？春姫くんはどうしたんだい？」

「ヘステイア様。春姫さんは私がお願いした所用により、今夜は不在です。ご心配なく。」

「…はい、そうです（まさか、ベル様の安眠のためにベル様の添い寝をしている、と言えないじゃないですか！き、今日は春姫様ですが、明日はリリです！早く新品の下着を買っておかないと…）」

「さて…尋問を始めましょうか。ああ、答えるのは「万能者」だけでいいです。ヘステイア様は、嘘かどうか判断をお願いします。」

「あ、うん（ヘルメス…、信用されてないな…）」

「メイ、神ヘルメスに猿轡をしておきなさい。または声帯をつぶすかに…」

「猿轡でお願いします！」

「「うわあ…扱いに慣れている…。」」

彼らは本気でやる。マジでやる。絶対にやる。

なにせ、やられたのは1，2回じゃないからな。

「まず第一の罪です。五ヶ月前に、坊ちやまが『タケミカツチ・ファミア』による怪物贈呈で18階層へ避難した時です。」

「ぐはあつ！」

「お、おい！命、俺たちはもう気にしてないから！」

「そ、そうです！」

「モルド・ラトロー にぼっちやまへの冒険者によるリンチを依頼したのは、貴方たちです。ね？モルド・ラトローが使用したものは『万能者』、貴方の魔道具です。ね？」

何で知って…あー、ベル君の記憶を見たわけか…。

白を切るより正直に言ったほうがいいか。

アスフィー、俺らの負けだ。正直に言ってくれ。

『覚えていてくださいよ…。』

恨みがましい目でオレを睨んだ。

説教なら後でいくらでも受けるさ。

こいつらのお仕置きに比べたら…雲泥の差さ。

「えっ！あれはヘルメス、君の仕業だったのか！」

「「な、何だつてー!」」

「……………はい、そうです。」

「嘘は言つてないっ! よくもやつてくれたなっ! ヘルメスっ!」

「んーんんんんーん! (ベルくんのためなんだ!)」

「その後の黒いゴライアスは、ヘステイア様の神威が引き金になったとはいえ、よく勝てたものです…。まあ、そのおかげで、リヴィラのならず者共は坊ちやまを見下すようなことをしなくなったのは、非常によいことです。しかし、冒険者のリンチは見逃せません。」

「それは後で精算しましょう。次は、第二の罪です。」

「「え? せ、精算?」」

ひいひいっ!」

「第二の罪は、「イシユタル・ファミリア」の壊滅で坊ちやまを利用したことです。」

「「な、何だつてー!」」

「【イシユタル・ファミリア】へ坊ちやまを放り込み、坊ちやまに執着していた神フレイヤを怒らせて【フレイヤ・ファミリア】をぶつけましたね?」

あー…、お見通しかあ…。

「……………はい、そうです。ただ、ベル・クラネルがあそこまでの行動に及んだのは想

定外でした…。」

「…嘘は言つてない…。何で…そんなことを…したんだい？なあくヘルメス。」

あ、怒つてらつしやる。

「ちよ、ちよつとお待ち下さい！じゃあ、春姫殿の件もヘルメス様が…？」

「いえ、【絶†影】。サンジヨウノ・春姫については全く計算外でした。それは確かです。」
命ちゃんはヘステイアを見て、嘘ではないことを確認したけど…、こりゃあ怒つてい
るな。

タケミカヅチに殴られるのを覚悟しておこう…。

「まあ、大体は予想できます。恐らく、闇派閥の資金源を絶つためでしょうな。」

「!?……………はい、その通りです。」

「二(この二人、有能すぎる…)二」

「続いて第三の罪ですが、これは皆さんご存知の『異端児』の件ですね。第一、坊ちやまをそんなハリボテの英雄の座へ行かせても、数日はもたないでしょう。」

まあ、そうだけど何とかかなると思つたんだよ。

「『異端児』の件でも許さないと思つたんだけど…そもそも何でベルくんにそういうことをしたんだい？」

「恐らく、坊ちやまを【最後の英雄】に押し上げるために、試練のようなものを課したで

しようね。」

「まあ、おかげで坊ちやまが心身と共に急成長したのはいいのですが、急すぎませんか？」

冒険者のリンチやイシュタルの件は確かに認めるよ！

『異端児』の件は、本当にベルくんを関わらせる予定はなかったんだよ！

「多分、神ヘルメスとしては『異端児』で坊ちやまを関わらせる予定はなかったでしょう。」

「坊ちやまの、オラリオでの信用が下がった時に、考えたのでしよう。」

…はい、そのとおりでございます。

「…はああああ。ヘルメス…ボクらが英雄を造ったって意味がないんだよ。英雄とは人々が、世界が求められて、その場面上がった者が英雄になるんじゃないのか？それはわかっているんじゃないのか？」

…わかっているさ。けど、時間がないんだよ！

ダンジョンは待つちゃいけないんだ。

「ダンジョンでしようね。」「ダンジョンですね。」

「…!? そう、もう限界なんだね…。うーん。」

わかってくれてうれしいよ。

なので、そろそろ解放してくれないかな？

「第四の罪に進みましようか？」

「うそだろ!? まだあるの!?!」

そんなバカな! もうないはずだぞ!

「坊ちやまを不埒な道へ引きずり込もうとしたことです。」

「あつ…。」

あーあー、忘れていたよ。ハハハ…。

「皆さんもご存知のように、坊ちやまが神ヘルメスによって18階層の覗き騒動や夜の街へ幾度か連れて行こうとしたのも、非常にいけません。特にイシユタル騒動で、歓楽街で坊ちやまに渡した精力剤は、貴方のですね?」

「アレはお前のかつ!」

「ちよ、ちよつと待つて下さい。それ、私初耳なのですが…。」

「神イシユタルへ『殺生石』を配達した日に坊ちやまと会い、餞別と言いながら精力剤を渡したのです。」

「……………うちの主神が重ね重ね、本当に申し訳ございません…!」

『ホームへ帰ったら折檻しますからね!』

あー、うん。

いくらでもしてくれよ…。

「第五の罪で最後ですので、ご安心ください。神ヘルメス。」

ええー…今度は何だよ…。

「アスファイ姫、「ヘルメス・ファミリア」でルルネ・ルーイという【泥犬】の犬人がいますね？」

「あの…姫はやめていただけですと…。え、ハイ。ルルネは確かにいます。またあの駄犬が何かしましたでしょうか？（あの駄犬、本当にお仕置きしましょうか！ええ！します！）」

「姫は姫ですので…。うちの坊ちやまが半年前に「ヘルメス・ファミリア」へ入団しようとしたのはご存知でしょうか？」

「え？」（え？）

「その様子ではご存知なかったようですね。まあ、【泥犬】に感謝した方がいいかもしれませんか。坊ちやまが「ヘルメス・ファミリア」に入団してましたら、我々が神ヘルメスを送還させたのは確かですから。」

（初耳だぞ！けど、ルルネ、ナイス！）

「…そ、そうですね。聞いておりませんでした。…あの、何故それが罪なのでしょうか？」

「【泥犬】が坊ちやまを才能ナシとこき下ろし、今も見下しているからです。」

「…うちのルルネが大変申し訳ありませんでした！私の教育不足です！」

「「うわあ…（敵に回しちやいけない！）」」

第36話 旅神、精算。

「さて、精算に入りましょうか。」

(ひいひい！)

「ですが、ご安心下さい。罪の軽減がありますので。」

「…それは、ありがとうございます…。」

「まず、イシユタルの件では、神ヘルメスから春姫さんの情報をいただいたことで、春姫さんをギリギリで助け出すことができました。それは第一の罪の相殺となります。」

(よしっ！ポリシーを曲げてまで『殺生石』のことをベル君達へ伝えてよかつたあああ！)

「…納得はできませんが、ヘルメス様の情報がなければ、春姫殿を救い出すことができなかつたのは、事実です…。」

「そして、ラキアが攻めてきた件で神アレスがヘステイア様を攫った時、アスファイ姫のおかげで見つけ出すことができ、少々のトラブルがあつたにしろ、無事に救い出すことができました。それは第二の罪の相殺となります。」

「ありがとうございます…。いえ、あの時は仕方がなかつたと思います。」

（アスフィイイ！でかしたアアア！）

「あー、そういうことがあったねえ。遅くなったけど、ありがとうね。アスフィくん。君が見つけてくれなかったら、アレスに攫われたままだったよ。」

「いえ……こちら申し訳ありませんでした…。」

「数ヶ月程前、坊ちやまがダンジョンでのイレギュラー『ジャガーノート』によって左腕をほぼ破壊され、その治療に必要な治療魔道具の材料を「ヘルメス・ファミリア」が引き集めたことによつて、無事に治療できたことです。それは第三の罪と相殺します。」

（うん、ベルくんのあの時の左腕はやばかった。マジで。）

「あれは本当にやばかったです。ほぼ原型を保つてなかったですね。あの「ゴライアスのマフラー」がなければ、ベル様の左腕は失われたままで、義手を取り付けられていたでしょう。」

「神フレイヤの魅了の解除で、神ヘルメスの急遽の提案及び指示の下で、「ヘルメス・ファミリア」が奔走し、ヘスティア様の神儀の成功を支えてくれました。これは、第四の罪と相殺します。」

（よっしやあああああ！でかした！オレ！よくやった！オレ！）

「うん、それは確かだね。ヘルメスの指示がなければ、アスフィくんも逃げられなかったしボクの神儀も成功できなかっただろうね。…仕方がない。それでチャラにするよ。」

「最後の第五の罪ですか…。さて、どうしましょうか?」

「〔泥犬〕を細切れにするか、目をくり抜き耳と尻尾を切り落としましょうか?」

(ルルネ…、さらばだ。お前のことは忘れないぞ。)

その頃、「ヘルメス・ファミリア」で留守番をしていた犬人は原因不明の悪寒に襲われ、耳をペタンとし尻尾を手で抱えて震えてた。

「あの…大変申し訳ありませんが、その…ルルネはアレですが我々の仲間に必要なので、何卒ご容赦願えませんでしょうか?」

「ふむ…しかし、タダでというわけには行きませんな。」

「そうですね。何らかの代償が必要ですね。」

(あー、それが狙いかー。受け入れるしかないな…。)

「……………ご要望は、何でしょうか?」

(（口出しできない…。怖い…。）)

「そうですね。ああ、そうでした。「ヘルメス・ファミリア」にローリエというエルフの娘さんがいますね?」

「…ローリエですか? ええ、いますけどそれが何か?」

「彼女を「ハスティア・ファミリア」と「ヘルメス・ファミリア」のパイプ役となつていただきたいのです。そして、彼女に頼みたいことがあります、それを全面支援してほしいの

です。」

（何でローリエなんだ？「ハスティア・ファミリア」との接点はないはずだぜ？）

「…その程度なら問題ないのですが、その、ローリエはエルフですので多少の潔癖症があり、（ゴ）迷惑をおかけするかもしれません（ゴ）が…。」

「いえ、ローリエ嬢でなければいけないのです。」

「ええ、坊ちやまのためであり非常に必要な方です。」

「???全く分からない…。まあ、その程度で全部チャラにしてくれるなら安いもんさ。」

「…わかりました。それでよろしくお願いいたします。」

「交渉成立ですね。おめでとうございます。これで貴方たちの罪は消えました。」

「ですが、今後は坊ちやまのためにならないようなことをしますと…、わかっておりますね?。」

「ひいっ！は、はい…わかりました。」

（メイとセバスがいるのに、手を出すわけじゃないじゃないか！）

ようやく猿轡を取ってくれた…。

ああ、自由つていいなあ…。

「では、はい。さて、戦争遊戯について話し合いますでしょうか。」

「少々お待ち下さい。間食と飲み物をお持ちしますので。」

メイとセバスは準備のため、キッチンの方へ向かっていった。

「ヘステイア…言つていいかい？」

「…何だい…？」

「確かにオレがやつてきたことは、悪かった。それは認める。すまなかつた。」

「…いや、もういいよ。ベル君のためにやったことだろ？終わつたことは仕方ないさ。でも、不埒なことに引きずり込まうとしたことは、アウトだけどね！」

「神ヘステイア…、申し訳ありませんでした。ありがとうございます。」

うん…、本当に怖かつた。

「でさ…、何で彼らが解放されているのさ…。」

「たまたまだよ。ヘファイストスのところへ行つたらベル君が、*“呼ばれている”*と言つてメイ君が解放され、メイ君と一緒にゴブニユのところへ行きセバス君が解放されたわけさ。」

「有能すぎますね。メイ様とセバス様は…。」

「マジで怖かつたぞ…。」

「タケミカツチ様に殴つてもらうより効果的でしたね。」

彼らにお仕置きされるくらいなら、タケミカツチに何十発殴られた方がいいさ！

第37話 万能者、溜息

「ヘルメス様…、あの只者ではないメイドと執事は何者でしょうか…。」

「ん？あー、アスフィは会ったことなかったかあ。彼らはね…。」

「それについてはお答えしましょう。アスフィ姫。」

「うおっ！」「ひいっ！」

気配を感じなかった…。びっくりした。

それに、いつの間にか紅茶とお茶菓子までも持ってきている…。

姫はやめてほしい…マジで。本当に。…恥ずかしいから

「我々は、坊ちやまに仕える者でございます。まあ、前の肩書は〔ヘラ・ファミリア〕專屬執事、セバスといいます。」

「私は元〔ゼウス・ファミリア〕專屬メイド、メイといいます。」

……………。

何で、最強と最恐がいるんですか…。

「あー、彼らは魔導人形さ。鍛冶・神秘・魔導の高レベルが造った最高傑作さ。」

!?

「何…ですって…。」

この、人と間違えてもおかしくないのが、魔導人形!?

知りたい! 神秘持ちとして、どういう仕組になっているのかを知りたい!

…というか、レベル4である私より強すぎじゃありません?

「彼らはそれぞれの元ファミアの指導教官で、レベル7上位相当さ。まあ、身体能力だけならレベル8に届くかもしれないね。」

「さすが、神ヘルメス。我々のファミアのパシリになっただけはありますな。」

「くまなくストーリーキングされて、何度か折檻したのが懐かしいですね。」

「マジすんませんでした。」

貴方は何やっているんですか…。

というか、レベル7上位が2人!?

しかも魔導人形! 精巧すぎません!?

彼らの製作者の弟子になりたい…。

「さて、今回の戦争遊戯について話し合いをしようか。というかメイとセバスがいる以上、早くも話が進みそうだな。」

「うん、メイくんとセバスくんのおかげで何とかかなりそうだよ。」

そりゃ、そうでしょうね。

私達を手玉にとり、断罪するくらいね。

…本当に怖かった。

「ですが、ヘステティア様、神ヘルメス。状況はまだ悪いです。」

「ええ。戦争遊戯の場所が決まらない以上、戦力を集めなければなりません。」

「【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】が相手ですものね…。」

「でもさー、フレイヤが来ないから場所を決めようにも決まらないからね。まあ、時間が稼げたからいいようなものだけどさ。」

「ほう？詳しい話を聞かせていただけますかな？」

フレイヤ様が痲癩を起こして【猛者】たちに八つ当たりしているアレですか…。

本当かどうか眉唾ものです。

「なるほど…、そういうことですか。ふむ…探ってみますか。」

「は？」「え？」「何だつて？」

「神ヘルメス。元【ヘラ・ファミリア】は【フレイヤ・ファミリア】と抗争を起こしたのは知っていますね？」

「あ、ああ。あれは一方的だったな…。」

「その関連で、情報収集のため【フレイヤ・ファミリア】ホームを探ったことがありますな。」

「……」

…絶対に敵に回してはいけません。

うちのファミリアのみんなに、強く念押ししておかないと。

「今晚あたりに私が探ってみましょう。メイ、後は頼みます。」

「承知しました。セバス、もし失敗したらその場で自爆して坊ちやまのために身を捧げなさい。」

「「え？自爆？」」

……我がファミリアのためにも、本当にルルネを切り捨てましょうか…。

「あのような者の1万人いえ1億人いようとも、それらの命と坊ちやまと比較になりません。必ず戻りますとも。」

「まあ、いいでしょう。こちらはこちらでいくつかやっておくことがあります。」

「……心強いな、ヘスティア…。」

「……ホントだよ…。」

もう、この二人がいるだけでも十分ではないですか…。

それでも不足なのですか？

…何を目指しているのですか…。

「あ…、言つとくけどヘスティア。俺たちはあくまでも中立を守る。なので戦争遊戯

には表向きで味方できない。けど、陰ながらいくつか助けるよ。」

「ヘルメス、ありがとう。助かるよ。」

「…できればアスフィさんを借りたいんですがね…。」

「すみませんが、リリルカ・アーデ。〔フレイヤ・ファミリア〕と〔ロキ・ファミリア〕が相手では私が味方しても、焼け石に水でしょう。」

イシユタルを狂喜させた、あの狐人の妖術があつたとしてもレベル5。

数分は戦えたとしても、その後は厳しいです…。

それに…これ以上、起爆者のベル・クラネルに関わりたくない！

「戦力かあ…。アイシヤはいるかい？」

「…そうだなあ。「ヘステイア様。必要です。アイシヤ・ベルカは春姫さんの護衛をやっていたみたいです。ただ、「ヘルメス・ファミリア」の面子のためにも、今すぐではなく戦争遊戯ギリギリに参加するという形がいいでしょう。それでは中立になりませんの、ルルネさんあたりを〔ロキ・ファミリア〕へ加勢してはどうでしょうか？」…
「ということをお願いしていいかい？」

「了解したよ。」

「ただ、顔合わせ及び戦略を練りたいので、明日あたりにローリエさんと共にホームへ来ていただけませんかでしょうか？」

「え？あ、はい。分かりました。伝えておきます。」

まあ、彼女も今回で怒り心頭で、いつ爆発してもおかしくありませんからね。なら、参加する形で発散させてもらいましょう。

…抑えるのに疲れますので…、助かります…。

「後は第一級冒険者、特にレベル6が数人ほしいところですね。」

「…君たちがいれば十分じゃないかな…？」

「…ボクもそう思うよ…。」

私もそう思います。

「確かにそうかもしれませんが、これはチャンスなのです。」

「「チャンス？」」

「ええ、ダンジョンもそろそろ限界です。それはおわかりですね？」

「!?…：そうだね。」

「なので、この戦争遊戯で坊ちやま、いえ「ヘスティア・ファミリア」の完全勝利で終わらせて、坊ちやまを中心としたオラリオ連合を作り出す必要があります。」

「「!?」」

「そのため「フレイヤ・ファミリア」及び「ロキ・ファミリア」を従えるには、私とメイ以外が参戦し完勝する必要がどうしてもあるのです。」

「それぐらいしないと、黒竜どころかダンジョンさえも制覇できません。」
「そこまで考えていたのですか…。」

恐ろしい方々です。本当に、敵に、回してはいけません！

「…なるほどね。確かに今回はピンチだけど、今後のためのチャンスでもあるわけだ。」
「フレイヤのことで頭いっぱい、そこまでは考えてなかったよ…。」

「…むむむ。だとしますと、本当に戦力が必要ですね。しかもベル様に対して好意的な方々の。」

…厳しいのではないのですか？

ああ…、だから彼らは非常に厳しいと言ったのですか。

ダンジョン制覇と黒竜討伐に対して。

やはり…私も参加するべきでしょうか？

「ああ、アスファイ姫は魔道具づくりに専念していただきたいのです。人は向き不向きがあるのですから。」

「そうですね。これから必ず必要になりますから、愚者と一緒に。」

……………私の休暇は黒竜討伐後になりそうですね…。

…愚者…一緒に頑張りましょう…。

はあああああああ…。

どこかで元賢者の愚者が身震いしていた。
皮膚の感覚がないはずなのに「??」と首をかしげてた。

第38話 侍従長、管理。

「ヘルメス・ファミリア」に釘を刺した上で、首輪をつけることに成功できました。

神ヘルメスは、私達の恐ろしさを知っていますのでこれ以上の手出しはしてこないでしょう。

ローリエさんは坊ちやまの強化のために、お願いしたい事があるのでそれをやってもらいましょう。

坊ちやまの記憶にある限り、ローリエさんは既に坊ちやまに墮ちています。

「ヘルメス・ファミリア」でなく坊ちやまのために尽くしてくれるでしょう。

また、ローリエさんにも坊ちやまのハーレムにも入っていただきましょう。

坊ちやまの好みにストライクしていますし。問題ありませんね。

セバスは「フレイヤ・ファミリア」ホームに忍び込み、今回の様子を確認してみるとのことです。

まあ、大丈夫でしょう。

セバスのことですから探るだけでなく何かを盗ってくるかいたずらでもしてくるでしょう。

「じゃあ、オレたちはもう帰るから。今後のためにやること多くできたからさ。」

「…お疲れさまでした。何かありましたらローリエを通して言ってください。」

アスフィ姫は大変お疲れのようですね。

あとで、「ゼウス・ファミリア」直伝のマッサージをしてあげましょう。

ダンジョン内であの子たちによくマッサージしてあげたものです。

あのバカ主神にもやってましたね。ほほ、神ヘラの折檻関連ですが。

そうして、神ヘルメスとアスフィ姫は帰っていききました。

「ヘステイア様、報告があります。不在の間に入団希望者が1人出てきました。」

「え？この時期に？誰だい？」

「…ベル様のアドバイザーのエイナ・チュール様です。ヘステイア様。」

坊ちやまの記憶に出てきた、ギルドのアドバイザーの方ですね。

坊ちやまが駆け出しの時から甲斐甲斐しくお世話しており、そして並ならぬ好意を持っている方ですね。

容姿も性格も申し分ありませんし、坊ちやまとの仲も非常に良好です。

「ああ、あのアドバイザーくんかい？何でまたどうして？借金まみれのこのファミリアに？」

「【フレイヤ・ファミリア】にお咎めなしとなったことで、ギルド長と意見がぶつかり堪

忍袋の尾が切れて退職したので、「ヘスティア・ファミリア」へ入りたいとのこと。「……それはまた悪いことをしたね……。しかし今から入ってもらってもレベル1だよ。戦争遊戯があるのに、いいのかなあ……。」

「ヘスティア様、ご心配なく。彼女は入団させるべきです。レベル1でも、彼女の事務処理能力はズバ抜けていますので、「ヘスティア・ファミリア」の事務担当をやっていた方がいいと思います。」

今からだともちろん戦力にはなりません、事務処理能力はオラリオでもずば抜けているのでそこを担当してもらいましょう。

「事務処理能力？あー、ギルドの受付嬢をやっていたものねえ。……そんなに高いの？」

「はい、高いです。ギルドの事務の半分以上を彼女が回しているとのこと。」

「それはすごいね。……ギルドは大丈夫なのかい？」

「【フレイヤ・ファミリア】にお咎めなしにしたり、「ロキ・ファミリア」にうちへ味方するな、と言ったギルドなど、リリは知りません！むしろ、エイナ様は必要です。今までヘスティア様、ベル様がやるべき仕事もリリが担当してました！その分をエイナ様にやっていたできます。リリは戦略などに専念させていただきます！」

「う、うん……。サポーターくん、今まですまなかつたね。そうだね、まず本人と面談が先かな。特にベル君への邪な思いを確認してやる！」

「不要です。」

「……え、でも……。」

「不要です。」

「(怖い…) ……はい、わかりました。ただ入団確定とするけど、アドバイザーくんの話を聞くぐらいはいいよね?」

「はい、それなら問題ございません。」

(エイナ様もベル様にぞつこんと惚れているのは確実です。それでまず、ベル様を裏切ることなどありえませんかでしょう。これで、ようやくリリの負担が軽くなり戦略に集中できます!)

エイナ嬢には今回の戦争遊戯だけでなく、ダンジョン及び黒竜征伐のための遠征のための手続きや軍資金管理などをやってもらいましょう。もちろん、私とセバスの指示及び監視つきですが。

それに、エイナ嬢なら坊ちやまを裏切ることなど皆無ですし、更に坊ちやまのハーレムに入っていたら大丈夫でしょう。ご本人も喜ぶのは間違いないでしょう。

「…俺、部屋を引き払って鍛冶場にこもっていいようかな。ここは女性比率が高すぎる…。これからも増え続けるなら引越すぞ…。」

「まあまあ、ヴェルフ殿。ベル殿の肩身が狭くなるので今のままでいいのでは…。」

「いや、勘だがどんどん増える気がする…。うん、絶対に増える。ベルには悪いが、それ以前に俺の肩身が狭くなるので俺は鍛冶場へ引越す。うん、戦争遊戯が終わった後にも引越しよう。」

「…ヴェルフ様…。」

まあ、そう思うのも仕方ありません。

ヴェルフさんの勘の通り、これからもどんどん増えて…いえ増やしていかなければいけませんからね。坊ちやまの強化のためにも。

ヴェルフさんへのお詫びとして、神ゴブニユへ鍛冶場の拡張依頼をしましょう。金はなんとかなるでしょう。

…む？ 侵入者の気配が…。

【フレイヤ・ファミリア】でしようか？

…坊ちやまの部屋に向かっている？

暗殺でしようか？

すぐに捕らえないといけませんね。ふふふ。

久々に腕がなります。さあ、狩りの時間です。

第39話 蠱毒王、侵入

私はバーチエ・カリフ。

〔カーリー・ファミリア〕の副団長だ。

今、私は〔ヘスティア・ファミリア〕ホームに忍び込んでいる。

テイオナから聞いた、アルゴノウトについて知りたい。

物語に出てくるような英雄に会ってみたい。

聞けば、〔ヘスティア・ファミリア〕の〔白兔の脚〕だそうだ。

アルガナたちがあんなってしまつて、私はどうしたらいいのかわからない。

：今のアルガナなら怖くはないが、それとこれとは別だ。

ただ、クノツソスで聞いた大鐘楼の音。

あの音は私の心はかなり響いた。

今までにない感情が今もグルグルと体中を回っている。

アルガナに聞くと「医者に見てもらえ」とのことだ。

ひどくないか？アルガナこそ、医者に見てほしい。

フィンとかどうのとかを目をうつとりして、つぶやかないでほしい。

別の意味で怖い。

アルゴノウトの物語をティオナに聞かせたせいで、内容を大体知っている。

平凡な男が色々と利用されて、それでも姫を救って英雄になったという話だ。

馬鹿馬鹿しいと思ったが、ティオナと一緒に読み進めるうちに私も毒されてしまった。

……毒を操ると毒されるのか……？

やはり、医者に見てもらうか。

話を戻すが、あの大鐘楼の音は「白兔の脚」が出したそうさ。

近くで見た者に聞くと、「凄かった」とか「英雄のようだった」としか言わない。

……会ってみよう。

会って、今の私の往くべき道を教えてほしい。

見張りもない……。気配も感じない……。

館が広い分、不用心だな。

気配は……下にかなり集まっているな。

強い気配は……こつちか。

……ここか……。

ギィ…、バタン。

む…、誰かというな。狐人か。

隣のやつが【白兔の脚】か。

白い髪で赤い目と聞いてたが、白い髪をしていることからこいつで間違いないようだな。

この距離で起きないとは…、いや薬で眠らせているのか？

何のために？まあ、いい。攫って聞いてみるか。

そう思い、私はこいつの白い髪をつかもうとした。

「そこまでです。声を出したらこの世とお別れになりますよ。」

!?馬鹿な!

全く気配を感じなかったぞ。

私の顔のすぐそこまで近づいているのに…。

それにこの殺気…レベル6…いや7以上!?

オラリオでレベル7は【猛者】しかないはずだぞ!

「坊ちやまは薬で深く眠っておられます。音を立てずこちらへ来ててください。」

そいつはそう言って、私の首を掴み部屋の外へ連れて行こうとした。

…無理だ…。勝てない。私の本能がそう言っている。

それに……こいつ、生きてない？冷たすぎる。

このような者がこの世にいるのか……

世界は広いな……

私は、先程気配が多く集まっていた部屋に移動させられた。

ツインテールの女の子……いや、神か？そうか、こいつが神ヘステイアか。

他はレベル2……雑魚ばかりか。いや、先程の女を除いてだな。

「メイくん、この娘かい？ベル君の部屋に忍び込んだ娘って？」

「アマゾネスか……。元『イシユタル・ファミア』ではないよな？」

「見たこともない顔です……。顔を隠していることは暗殺者でしょうか？」

「それに、この方……強いです。恐らく第一級冒険者かと。」

……団員はこれだけか……。これだけなら逃げられるか……

ぐっ!?

「ちよ、ちよつとメイ君！何しているんだい!？」

「脚の骨を折つただけですが、何か？」

「何かって……やりすぎだよ……君は誰だい？何故ベル君の部屋へ忍び込んだんだい？」

駄目だ……こいつがいる限り、逃げられない……

「ここで自決するか…いや、読まれているな。どうするか…。」

「…君の目を見る限り…、悪い人ではなさそうだね。話してみないかい？」

「この神は…、カーリーよりも神のようだな。」

「ここは正直に言った方がよさそうだ。」

「…私は【カーリー・ファミリア】副団長のバーチェ・カリフだ…。」

「!?あ、あの鬪国の【カーリー・ファミリア】!?」

「確か…殺し合いをしているファミリア、だったか？」

「何故、そのファミリアの副団長がうちに？」

「カーリーかあ、確かパールヴァティーが言ってたなあ。困った子だつて。」

パールヴァティー…？

カーリーから聞いたことあるが、何だったかな…？

「ふむ…【カーリー・ファミリア】ですか…失礼ながらレベルはいくらでしょうか？」

さっきの女が質問してきた。答えられなかったら手をへし折るといふ感じだな…。

「レベル6だ…。」 「「なっ！」」

「やはりそうですか…（今の坊ちやまの訓練相手にはいいかもしれないね）。それで、何故坊ちやまの部屋へ忍び込もうとしたのです？殺気もなかったので暗殺ではないよ

うですか？」

「【白兔の脚】の顔を見たかった…それだけだ。」

「それなら、堂々と会いに来ればいいのに…。」

……そうか…。そうすればよかったのか…。

((ガツカリしている…。こいつ、天然だ…。))

「ふーん…。君は優しい娘だね。殺し合いをしたくないのに、しないと殺されるという顔をしているよ。だから、顔を隠しているのかい？」

!?!…見破られている…。カーリーでさえ、わからなかったのに…。

いや、知ってて知らないフリしてそうだな、カーリーは。

「何故、坊ちやまに会いたいのですか？」

「…【ロキ・ファミリア】のティオナからアルゴノウトがいると聞いた…。クノツソスであいつが大鐘楼の音を出した奴と聞き、興味が湧いたんだ。…どんな奴なのか…どんな顔なのか…どんな考えをしているのかを知りたかった。それだけだ。」

(また、ベル様のファンが増えました…。)

(やはり、明日に鍛冶場へ引越そう。)

(私も【タケミカツチ・ファミリア】ホームへ戻ったほうがいいでしょうか…? いやいや、春姫殿の近くにいないくては…しかし…でも…。)

第40話 侍従長、尋問。

「カーリー・ファミリア」副団長のレベル6、パーチェ・カリフですか。

坊ちやまの記憶にない方ですな。

クノツソスでの戦いで大鐘楼の音を聞いて興味をもったとのことですが、彼女自身でも自分の気持ちに気づいてないようですね。

…これは思わぬ戦力が手に入りそうです。

「んー、そうなら明日に来てくれるかい？ベル君に会わせるからさ。」

「いえ、ヘステイア様。うちに改宗させましょう。」

「え？」「何？」「ええっ！」

「どのような形にしろ、うちに忍びこみ捕らえたからには、こちらが扱おうとも問題ないはずですよ。」

「ゼウス・ファミリア」はともかく、もし「ヘラ・ファミリア」だったら、即・拷・殺ですからね。

「そりゃ、そうだけど…、そもそも彼女自身の気持ちの問題じゃない？」

「では、パーチェ・カリフ。貴方に問います。貴方は今のファミリアに不満を持って

いるのではないでしょうか？顔を隠すといい、その目といい、迷いがあるようですが？」
「……そのとおりだ。私は双子の姉のアルガナがいる。私はアルガナが怖かった。アルガナに殺されるのが嫌だった。だから強くなるしかなかった。」

「……な、何でそんなことを……。」

「鬪国はそういうところだ。殺し合わない生きていけない。」

元バカ主神が言っていましたね。女性限定の修羅の国でと。

ダンジョンもなしに、昇華できるのは殺し合いですか……。

神ヘラが好みそうな国ですね。

「……パールヴァティーに聞いたことがあるよ。カーリーは鬪争でしか、鬪争を通して愛することができない、可哀想な女神だと。」

「(可哀想とかはともかく)……そうだ。カーリーは鬪争の中で、強き戦士を生み出すことしか考えていない神だ。私は殺されるのが嫌だった。だから相手を殺すしかなかった。殺したくなくても、だ。」

「なるほど、だから表情を隠すために顔を隠して、その環境に慣れてしまったのですね。では、何故迷いが？」

「……今の【カーリー・ファミリア】は……恋に溺れている……。」

「は？」「え？」「ほう。」

「ロキ・ファミリア」と「カーリー・ファミリア」に揉め事があって、それで…。」

「ああ…。」

「あんなに怖かったアルガナも、【勇者】フィン・デイルムナによつて負かされて恋に堕ちてしまった…。今は別の意味で怖い…。」

（フィン様は女運がなさそうですね。【怒蛇】のテイオネ様もいますし…。よかったです！あの時のフィン様からの求婚を断つて、リリは大・正・解です！ベル様に一生ついていきます！）

その時、【勇者】は盛大なくしゃみをし、寒気がした。

親指をさすり、何か非常に惜しいことをしてしまったような気になられてしまったとのこと。

「なるほど。闘争だけ突き詰めてきた貴方にとって、恐怖の元凶および目標がなくなつたということですね。そして、これから何を目標にして強くなつたらいいのか、わからなくなつたということですか。」

「…恥ずかしいが、その通りだ…。」

「失礼ですが、貴方は【ロキ・ファミリア】のどなたと戦われたのですか？」

「？テイオナ…テイオナ・ヒリュテだ。」

「【大切断】ですか（女性に負けても惹かれることはないですね）。」

「メイ君…。この子を、うちに改宗させるとしてもこの子の悩みが解消されるとは限らないんじゃない？」

確かに、そうですね。ですが、坊ちやまに会わせて戦い合わせれば見えるかもしれない。せん。

「ええ。ですから、バーチエさんは坊ちやまに興味があります。そうですね？」

「…ああ、ティオナがアルゴノウトと言っている彼に会って聞いてみたい。何のために戦うのかと。」

「なら、戦ってみませんか？」

「「は？」」

坊ちやまは惹きつける力があります。特に女性に対して。

闘いしかない彼女が坊ちやまと戦うことによって、見出すものがあるかも…いえ、あるでしょう。

「ちよ、ちよつと待つてください！ベル様はまだレベル5になったばかりです！こちらレベル6です！かなうわけじゃないですか！」

「リリさん。戦争遊戯の相手は『フレイヤ・ファミリア』のレベル7【猛者】です。レベル6程度倒さなくてどうするのです？」

「無茶苦茶だろ…。」

「それに、私が相手にしてもいいのですが、多くの人との戦いの経験を積む必要があります。リリさん、坊ちやまが冒険者になって半年でここまで来たのです。圧倒的な経験不足です。」

「それはそうですが…。」

「…!!冒険者になって半年で…レベル5…だと?」

「おや、知らなかったのですか。では坊ちやまの戦歴を説明いたしましょう。」

坊ちやまのことを深く調べようとはせず、忍び込んで直接確認するという行動は褒められたものではありませんが、それはそれで好感が持てます。

…使えそうですね。

さて、説明しますか。

「…そういうことだったのか…。知らなかった…。」

「ええ、そうです。」

「…なるほど…。ますます興味を持った。そのメイド…いや貴女の言う通り戦つてみたい。」

「わかりました。では、今から神カーリーのところへ参りましょうか。」

「「え?」」

第41話 処女神、襲撃。

「……」だ。」

バーチエくんが案内されて、メイくんと一緒に

「カーリー・ファミリア」があるメレンへ到着した。

「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」だけでも大変なのに、「カーリー・ファミリア」まで加われば、たまったものじゃないよ！

そりゃ戦力の集中を図るためと言っても、うちは弱小なんだよ！

「…聞くが、本当に行くのか？カーリーがまともにも聞くとは思えないぞ。」

「こういった荒事は久しぶりなので、腕がなまってなければよいのですが。」

なまらなくてもいいよ！ボク、もう寝たいんだけど…。

「〈闘国語で会話〉……………（バーチエ、そいつらは何だ？）」

「〈闘国語で会話〉……………（カーリーに話があるらしい。通せ。）」

「〈闘国語で会話〉……………?!?!?（それはできません。通すなら…ぐああああつ?!?!）」

闘国語で会話しているのを、メイくんが割り込んで門番くんをアイアンクローしたあ

!?

「ちよ、ちよつとメイクくん！何しているんだい!!」

「〈闘国語で会話〉……………（神カーリーに話があると云っているのですが、わかりませんか？殺しますよ。）」

え？闘国語喋れるの？どれだけ優秀なんだよ…。

「〈闘国語で会話〉!?!?! (痛い痛い痛い!!何なんだよ!お前は…ギヤアア!!)」

「〈闘国語で会話〉……………。(口ほどにもありません。さて、バーチエさん進みましようか。)」

「〈闘国語で会話〉……………（あ、ああ。闘国語喋れるのか…。こ、こちらです…。）」

レベル6のバーチエくんが腰を低くしてる…。

そりゃ、怖いよね。ボクも怖いよ!

ベルくんはなんでものを解放したんだ!

そして、多くのアマゾネスくんがメイクくんへ襲いかかり…、全部返り討ちにした…。強すぎるよ…。

死屍累々の光景を目の前にして、ちっこい子が呆れてた。

「…随分暴れたのう。お主らは何者じゃ?バーチエ、何の真似だ?」

あー、この子かあ。パールヴァティーの言つてたカーリーかあ。

「闘争を愛する割にはちっちゃくて可愛い」と言うのも納得だよ。

「…私は案内…だけだ。こちらの…方々がカーリー、お前に話があるそうさ。」

「お初にお目にかかります。神カーリー。【ヘステイア・ファミリア】のメイでございませう。こちらはヘステイア様です。」

おお…まともに紹介してもらったのはこれが初めてかも…。

うへへへ…はっ?!いかんいかん。

「ほう、オラリオを騒がせている【ヘステイア・ファミリア】がうちにか?む…、お主…人間じゃないな?…人形?いや…これは初めて見た。魔導人形か!」

「!?!」

「その通りでございませう。神カーリー。」

「カツカツカツ…、それで何用じゃ?妾に何用じゃ?」

悪党ぶっているなあ…。こんなちっちゃいのに迫力ないよ。

「…何か失礼なことを考えておらぬか?」

「あー、すまないね。カーリー。ボクはヘステイアさ、君のことはパールヴァティーから聞いているよ。」

「うげ…:…パールからか…。こちら聞いておるぞ、オリンポス一のグータラ女神…そしてオリンポス最強の大女神とな。」

うげ…つて、パールヴァティーからはやんちゃや妹のようだと聞いてるんだけどな。グータラ女神つて…まあいいや、事実だけどオリンピックス最強は言い過ぎじゃないかな？

みんな、ボクを過大評価しすぎるよ。

「それで、その大女神が妾に何用じゃ？そちは「フレイヤ・ファミア」と「ロキ・ファミア」との戦争遊戯の準備で、忙しいんじゃないのか？こんなことをやっている場合じゃない、と思うんじゃないか。」

「そうだね！ボクもそう思うよ！」

「ヘスティア様に代わり、このメイが説明いたします。…神カーリー、貴方は『闘争』を司る女神で相違ありませんね？」

「無論！『闘争』こそが我が生きがいよ！」

「ふっ…。」

「貴様！何がおかしい！人形ごときが！……があつ！」

「あーあー、挑発するから…。」

「うわあ…一軒先までぶっ飛ばされているよ…。」

「しーらないつと。」

「ほう…人形にしては強いほう。それでさっきの笑みは何じゃ？言ってみよ。」

「では、遠慮なく。『闘争』を司る神がこんな辺鄙なところで粋がっているとはなんとも侘しい限りですと哀れんでいるのですよ。」

「!!!」

「……カツカツカツ……それで挑発のつもりか？ 皆のもの、やめい。こやつ……恐らくレベル7はあるぞ。アルガナがぶっ飛ばされて、バーチエがおとなしく案内した時点でわかっておったわ。話を戻すが、何用じゃ？」

「神カーリー。闘争を……英雄同士の闘争を見たくありませんか？」

ちよ、ちよつとメイクん!?

当初の目的が違うんじゃないか？

「……ほう……、『闘争』を司る妾に持ちかけるとは……カツカツカツ……面白い。説明してみよ。」

「今回の戦争遊戯は、ただの戦争遊戯ではありません。オラリオ中の、オラリオの強者を、世界の強者を決める戦争遊戯です。その中に『闘争』を司る【カーリー・ファミリア】がいないのはおかしくありませんでしょうか？」

「……………【ヘステティア・ファミリア】に味方しろ、と？」

え？ 違うよね？

ちよつと待って！

「いえ、違います。両方とも加わるのはどうでしょうか、と聞いております。」
「なぬ?」「え?」

ナニイツテルノデスカ?メイサン?

アノー、モシモシ?

第42話 処女神、感嘆。

「そこでボロボロになっているアルガナさんと、そちらのバーチェさんは元々殺し合う予定だったそうですね？」

「…そうじゃ…。」

「それを【ロキ・ファミリア】との諍いで台無しにされたそうですね？」

「…そうじゃよ。あの無乳めが！しかも妾のファミリアがああああ…。」

何だか…可哀想に思えてきたよ。

あー、パールヴァティーの言ってたことがこれかあ…。

「それを決めるのを、今回の戦争遊戯ではどうでしょうか？」

「む…？…カツカツカツ…！面白い！面白すぎるぞ！詳しく聞かせよ！」

「げほっ…、カーリー…うちは【ヘステイア・ファミリア】に借りはないぞ。味方するな

ら【ロキ・ファミリア】だけだ。」

「黙れ、アルガナ。お前はそこのメイドにぶつ飛ばされたのだろうか。【勇者】ごときにうつつを抜かすとは何事だ。恥を知れ！それより、続きじゃ！」

「まず、バーチェさんを【ヘステイア・ファミリア】に、アルガナさんを【ロキ・ファミ

リア」に味方し今回の戦争遊戯で戦い合わせて、多くの人々や神々に見ていただくのです。」

「…なるほどのう…『フレイヤ・ファミリア』を勝たせなければ、『ヘステイア・ファミリア』と『ロキ・ファミリア』になるわけじゃな。そして、どちらが勝とうが妾は英雄同士の『闘争』を、最上級の『闘争』を楽しめるわけじゃな！いいぞ！いいぞ！その話乗った！」

「ま、待て！カーリー！『ヘステイア・ファミリア』に借りはないぞ！それをするならそれ相応の代償が必要だ！」

「む…それもそうじゃな。それについては何を差し出すのじゃな？なあ、ヘステイア。」

え？ボク？

え、えーと。

「その前に。何故、私達がバーチェさんを連れてここへ連れてきたのか、を説明してませんでしたね。」

おお！ナイスだ。メイくん！

「…そういえば、そうじゃな。おい、バーチェ。何したんじゃ？」

「…それは『ヘステイア・ファミリア』団長のベル・クラネルを襲おうとしてました。…です。」

「…何故じゃ?」「バーチエ、お前何考えているんだ?」

「……すまない。」

バーチエくんが可哀想に思えてきたよ…。

「襲おうとしたところを私が捕らえ、処罰しようとしたところで、ここへ連れてきたのです。さあ、落とし前をどうつけてくれるのでしょうか?」

うわあ…メイクくん…怖いよ…。

「それに襲おうとした理由は、ベル・クラネルに興味を持ったとのことです。そうですね? バーチエさん?」

「…はい、そうです…。」

「……………そういったことなら、仕方があるまい。いいだろう。お主の話に乗ろう。」

「何を勘違いしているのですか? そっちではありません。」

「は?」「え?」「何だと?」

え? 違うの!?

「神カーリー、もし貴方のファミリアに襲撃者が来たらどうしますか?」

「そりゃ、殺すに決まっているじゃろうが………あつ!？」

「そうです。バーチエさんの命はこちらにあります。バーチエさんの主神は貴方、神カーリーです。私達はバーチエさんの命をどうしようが問題ありませんが、話を聞けば

今回の話を思いついて提案したわけです。命は有効的に使いませんといけませんからね。」

「「……………」」

(こやつ…農らよりえげつないかのう?)

(…やはり、逆らつてはいけない…)

((怖い…))

さ、さすがが…「ゼウス・ファミリア」専属メイドを長年やったことだけはあるよ…。

「そ、それはそれでいいのじやが、もしアルガナが勝つたら、そちらから何かをいただかないと割に合わんぞ?」

「ふむ…、何をご要望でしょうか?」

「【白兔の脚】…ベル・クラネルをいただこう。」

「なっ!? そんなの「いいでしょう。」ちよ、メイくん!? むぐう!!」

「すみません、神カーリー。ヘステイア様、こちらへ…。」

駄目だ! 絶対に駄目だ! それは飲めないぞ!

第一、メイくんもそうだろう!

『ヘステイア様。ここは飲んだほうがいいかと。万が一、いえ兆が一、負けたとしても神フレイヤが黙っていられないでしょう。』

『それはそうだけど…』

『それにヘステティア様…、【カーリー・ファミリア】の本拠地の『テルスキュラ』はどこにあるかご存知でしょうか？』

『えつと…オラリオからずつと離れた東南にある、半島の国だっけ？』

『ええ、そうです。オラリオ外なら…坊ちやまの母方のあの主神ヘラが動けますね？』

『あつ…！』

『ご理解していただけて何よりです。』

メイくん…すごいよ。

あの子を利用するなんて。

「あー、すまなかつたね。その要望、飲ませてもらうよ。」

「お、おう。ヘステティアは【白兔の脚】こと、ベル・クラネルを溺愛してると聞いたが、あつさり飲んだのう…。」

「ボクらが勝つと信じているからね。（いっばいいっぱいだよ！）」

コンチクショー！

「ああ、神カーリー。」

「な、何じゃ。」

うん、メイくんが怖いよね。

わかるよ、その気持ち。

「参加するなら、『ロキ・ファミリア』との打ち合わせなしで当日の飛び入りをおすすめします。その方が…面白いでしょう?」

「お主…やはりえげつないのう。だが、面白い!カッカツカツ!その話、乗った!」

「では、この話は内密で。もし当日まで漏らしたら、なかつたことにします。」

「うむ、よかろう。」

「では、バーチェさんの改宗をお願いします。」

「は?」

「まだ、バーチェさんの件は終わっておりません。バーチェさんの命はこちらにあります。何をどうしようが問題ないですよ。ここで首をはねても改宗しても同じことです。【ヘステイア・ファミリア】につくなら改宗したほうが効率的であり、取り返す理由ができませんね?」

「…最初からそのつもりじゃったな…。一杯食わされたわ…。」

「さて、どういたします?」

「…惜しいが…、うちにいるよりそちにいたほうが面白いかも。よかろう。バーチェの改宗を認めよう。」

「ありがとうございます。ご理解していただけで嬉しいです。」

すごいよ…メイくん。

メイくんを解放した、ベルくんに感謝しなければいけないね！

「…これで完了じゃ。」

「…カーリー、世話になった…。」

「これで顔隠さんで堂々とできるではないか。よかったな。」

「バーチェ…私は【ロキ・ファミリア】のフィンにつく。戦争遊戯で決着をつけよう。」

「…わかった。」

双子の会話じゃないよなあ。

「さて、帰りましょうか。ヘステイア様、バーチェさん。」

本当に疲れたよ…。

でも実質レベル6のバーチェくんが入ってくれたのは大きいね！

「…私がそちらへいてもいいのだろうか？私は既に多くの同胞の血にまみれている…。」

「バーチェくん。君は生きている。それを忘れちゃいけない。もちろん、君が殺してきた人も。いいね？」

「…神ヘステイア…いや、ヘステイア様。その…よろしく…お願いします…。」

おお…、意外と可愛い娘じゃないか！

あつ！ベルくんが目移りする！

あ、けどあのアビリティとスキルが…。

まさか！メイくんはそれを見込んで…。

うわあ…。

「では、バーチェさんはまず、坊ちやまと戦ってもらいます。その戦いで得るものがあるはずですよ。」

「…はい、わかりました…。ようやく戦えるのか。長かったような気がする…。」

「その後は、私の指導を受けてもらいます。」

「え？」「…何？」

「当たり前でしょう。貴方の生殺与奪権は私にあります。」

「…ヘステイア様、助けてくれませんか…。」

「あー、メイくん。ほどほどにね。」

「わかっております。壊しはしませんよ。」

「(…心配だ…)」

この時、ボクとバーチェくんの気持ちが一体になった。

一気に距離が縮まった気がしたよ！

第43話 不冷、決心。

メイがヘステイア様とバーチエを連れて出ていって、数時間後に戻ってきた。

…無事に戻ってきてよかった。いや、メイがいる時点で大丈夫だな。

「皆様、朗報です。バーチエ・カリフさんが「ヘステイア・ファミリア」へ円満に改宗できました。」

「…あれで…円満…なのかな？」

「……バーチエくん、スルーしようぜ。そうしないとやってられないよ。」

殺し合いが常とするファミリアから、本当に改宗できたのか…すげえな。

戦争遊戯が終わった後になるかと思っただが、めちやくちや早かったな。

「……………そうですね。ヘステイア様。」

「…君とは仲良くやっていけそうだよ、本当に。」

ヘステイア様とバーチエ、数時間前には初対面だったのに、ものすごく距離が縮まっているな。

何があっただんだ…。

「レベル6のバーチエ様が入ってくるとは、これで勝利へ近づけました！あ、リリと言い

ます。レベル2で、「ヘステシア・ファミリア」の参謀をやっています。よろしくお願ひします、バーチエ様！」

「ヤマト・命です。レベル2です。よろしくお願ひします。」

「ヴェルフ・クロツゾだ。あー、下の名前は呼ばないでくれると助かる。よろしくな！」

「…バーチエ・カリフ…です。…よろしくお願ひします…。」

バーチエがヘステシア様の後ろに隠れてる…。

レベル6なのに…。

「あー、少々人見知りな子なんだ。けど、いい子だぜ。みんな仲良くしてくれよ！後は、春姫さんとベルくんと、セバスくんだね！」

「…春姫とは、さっきの…むぐつ『これ以上言いますと、せつかく助かった命がなくなりますよ』…何でもありません…。」

うわ…メイが目止まらぬ速さでバーチエの口を塞ぎやがった…。

そしてヘステシア様が振り返る寸前で、元の位置に…。

魔導人形って、すげえ…。

「？バーチエくん、どうしたんだい？」

「…いえ、セバスとは誰…のことですか？」

「私です。お初にお目にかかります。バーチエ・カリフ殿。」

「「うわあっ!?!」」

…いつの間に戻ったんだ?

「…(こいつも…強い…) バーチエ・カリフ…です。よろしくお願いします…。」

「はい、よろしくお願いたします。」

「セバス、探ってきましたか?」

「ええ。前よりは楽でした。大したことありません。」

…まだ数時間も経っていないぞ…。

『バーチエくん、バーチエくん。』

『何でしょうか? ヘステイア様?』

『彼もメイくんと同じぐらい強いからね。気をつけるんだよ。』

『!?!…あいつも…ですか?』

『うん…、まあさっきの交渉?も平気でできるから…ね。』

『…ヘステイア様…ありがとうございます。気をつけます(逆らってはいけないということですね。わかります)。』

…ヘステイア様とバーチエ、かなり仲良くなっているな…。

「…もう戻ってきたのですか…。早くありませんか?セバス様。」

「警備がザルでしたな。情けないですね、最強派閥の1つとは笑わせるばかりです。」

…相手は「フレイヤ・ファミリア」だぞ…。

俺はあんたらが怖いぞ…。

「ところで、セバス。報告をお願いします。」

「了解です。単刀直入にいいますと、神フレイヤはやけ酒で【猛者】たちに八つ当たりにし、二日酔いで寝込んでますな。」

「「あ？」」

「ああ…坊ちやまとの口喧嘩がきつかけですか。美の女神とあろうものが笑えますね。」

「しかも【猛者】たちも不甲斐ありません。八つ当たりで右往左往にしているのを見た時は、情けなくて涙が出そうでした。魔導人形ですが。」

「「USOダロ？」」

やけ酒？八つ当たり？

もうわけわからんぞ！

『……ヘステイア様』

『……なんだい、バーチエくん。』

『この戦争遊戯…もう勝っているのではないのでしょうか？』

『…ボクもそう思うよ…。けど、彼らはベルくんたちの手で決着をつけるべきだと言っているんだ。』

『…そうですか…。アルガナたちが哀れに思ってきました…。』

…：…ヘスティア様とバーチエ、俺たちと同じくらい仲良くなっているな…。

意外と相性いいかもな、あの二人。

「…すみません。セバス様、詳細をお願いできませんでしょうか…?」

「承知しました。忍びこんだ時、門番に至るまで神フレイヤの痲癩に、右往左往でした。まあ、無理ありません。今まで態度を崩さなかったあの神が、そこらの娘のように泣きわめき、ワインを水のようにラツパ飲みしましたな。そして坊ちやまの悪口をグチグチとこぼし、それに同意した眷属に怒りをぶつけて、不貞寝しましたな。少々理不尽ではないかな、と思いました。眷属たちの話を聞く限り、朝は二日酔いでかなり苦しんだそうですので、明日も欠席でしょう。」

「「彼氏とケンカした後かっ…」」

…：…ヘファイストス様はそんなことはしないよな？

ないよな?…：俺も気をつけよう。

「…本当だったんだね。明日も欠席になりそうだね。まあ、時間は何とか稼げそうだね。」

「そうですね。ただ、神フレイヤはそうなるまで、坊ちやまに本気ということがわかりましたね。」

「……とにかく、「フレイヤ・ファミリア」はそれどころではないとわかっただけで大きな収穫です！セバス様、ありがとうございました！」

「いえいえ、ついでに少々土産を持って参りました。」

「…天下の「フレイヤ・ファミリア」に…恐ろしい方ですね、セバス殿は。」

「…（これで二人…逆らつてはいけない人が増えた…。ここにいて、私は本当に大丈夫なのだろうか？）」

…マジかよ。

ん？土産を持ってきた？

「セバス、土産は何です？」

「土産は、ワインと大剣、鎧、本ですな。ああ、本については持ち主へ明日返しますのでご心配なく。…大剣と鎧はこちらです。メイ、貴方にお返ししましょう。」

「私に？……これは!？」

というか、どこから出したんだ!？」

このサイズ、服には入らないだろう!？」

「ヴェルフ殿、執事の嗜みでございます。」

そんなのあつてたまるか!？」

俺…クロツゾ家にも執事いたが、そこまでじゃなかつたぞ！

メイドもだ！

「……そうですか。それはどちらにありました？」

【猛者】の部屋です。」

「「はあっ!?!」」

「なるほど。グッジョブです、セバス。」

【猛者】の部屋から盗むって…。

もうダメだ。こいつらにはついていけない。

俺は、明日自室を引き払って鍛冶場へ引っ越そう。

ベル、すまん。

第44回 不冷、同情。

「ヴェルフさん、この大剣と鎧は貴方へお渡しします。坊ちやまのための大剣と鎧として、打ち直しをお願いします。」

「それはいいけど…、これは【猛者】の大剣と鎧じゃないのか？」

「いいえ…、元【ゼウス・ファミリア】の【暴食】ザル坊…いえザルドの愛用の大剣と鎧です。」

「!?…：…：そうか。それが元ファミリアのあんたの元に戻ったわけだ。」

「ええ。この大剣と鎧を見る限り、ザル坊は心置きなく天へ昇ったようですね…：…。」

悪いことを言っちゃまったな…。

しかし、この大剣と鎧は…：かなりの業物だな。明日、ヘファイストス様と椿へ見せて打ち直しできるか話し合ってみるか。

「分かった。明日、この大剣と鎧を持って【ヘファイストス・ファミリア】へ行ってくる。」

「ええ、よろしくお願いします。」

「ああ、ヴェルフ殿。少々お待ちを。」

「セバス…：さんか？何だい？」

「この大剣のままでは、あの小僧…【猛者】の愛用の大剣に勝てません。」

このままでも結構の業物だけだな…。

【猛者】の大剣ってあったっけか…？

「忍び込むついでに【猛者】の大剣を見ました。…かなりの大業物でした。【暴食】の大剣では勝てないでしょう。ただ、【猛者】の大剣には【ゴブニュ・ファミア】のサインがありました。そうですね…所用のついでに私が【ゴブニュ・ファミア】へ行つて詳しく聞いてきましょう。」

「セバス、そのついでに鍛冶屋の拡張依頼をお願いします。」

「え？」

何言ってるんだ…？

「…ふむ。なるほど、そういうことですか。わかりました。」

「ええ、そういうことです。ああ、できれば防音をお願いします。」

「そうですね。二人分が住めるよう拡張をお願いします。」

「おい、待て！何を勝手に進めてやがる！」

そうだ。鍛冶屋の持ち主は俺だ。

俺に断りなしで進めるんじゃねえ！

そしたら、メイとセバスが温かい目で俺を見つめやがった。

「よろしいのですか？このままでは、確実に肩身が狭くなりますよ。」

「残念ですが、ヴェルフさんの予想通りほとんどの部屋がその通りとなります。」

ほとん……どだと!?ふざける、ベル!

……明日に引越す予定だったが、その通りにしたほうがよさそうだな。

「ところで、何故二人分なんだ？」

「おや、そこまで説明が必要でしょうか？」

「ある鍛冶派閥の女神様を……」わかった、わかった!これ以上言うな。……なら問題ありませんね。」

ちくしょう!こいつらには永遠に勝てねえ!

……ただ、味方でよかったと非常に、強く、思う。

「わかったよ。何故かは……ベルのためなんだな?」

「はい、坊ちやまのためです。……よければ坊ちやまの新スキルを見ますか?」

「ベルは、スキルが発現しなかったと言ってたぞ……。まさか、また『憧憬一途』のようなスキルか?」

「ほう、ご存知でしたか。ヴェルフ殿ならいいでしょう。言うまでもありませんが、口外無用ですぞ。」

そして、ベルのステータスの写しを見た。

……羨ましいと言ったほうがいいのか、大変だなと言ったほうがいいのか悩むな
…。

…頑張れよ、ベル…。

…この大剣はすごいな。

年季が長いのは見てわかる。そしてそれに比例する耐久…。

レベル7が持つ武器って、このくらいでなければならぬのか？

負けてられないな。

しかし、それでもベルのあのスキルには耐えられるのか？

…一回は耐えられるかもしれない。だが、その後は？

今回の戦争遊戯では使わないで、メイやセバスの言ってたダンジョン制覇…いや黒竜討伐に使ったほうがいいかもな。

あいつの父方のファミリア…【ゼウス・ファミリア】の仇を討つにはうってつけかも
な。

よし！戦争遊戯は使わないで、これを芯にして強化したほうがよさそうだな。

鎧の方は…サイズが問題だな。

一部を切り取ってベルの軽装に使うか？

これも、ヘファイストス様と椿に相談だな。

そのあたりは椿とヘファイストス様と話し合ってみるか。

いや…、戦争遊戯勝利後に「ゴブニュ・ファミリア」と合同で打つのもありだな。へへっ、面白くなってきたぜ。

それにベルのスキル…あれは反則だろ！

羨ましいと思ったが、よくよく考えれば扱いに困るんじゃないのか？

今のベルにとって扱えるのか？

無自覚だろ、あいつ。

……あ、だからメイとセバスがいるか。

マジでベルの部屋以外が女性になるのか…。

………本当に頑張れよ、ベル。

黒竜討伐した後が、あいつの本当の闘いになるかもな。

鍛冶屋を拡張するのは正直嬉しい。

打つスペースも、素材置場も広くなるのはいい。

これからもどんどん入ってくるだろう。

それに…、何より移動するのが面倒くさいからな。

防音設定するのはいいな。

リリスケが「うるさい！」とクレームがよく来るし、どうにかならないかと思ったところだから、ちょうどメイの助言はありがたかった。

……ん？二人分？

…ハハハ、まさかヘファイストス様が来るわけないだろ。

……一応、良からぬものを先輩からもらったものがあるが、処分しておこう。

……何をやっているんだ、俺は。

その前に、今回の戦争遊戯だろうが。

…ダメだな、メイとセバスに任せすぎだ。

あいつらが言ってくただろう、今回はダンジョン制覇と黒竜討伐のための布石だと。

なら、俺でやっておくことは何だ？

武器や防具…そして魔剣を打つことだ。

それに専念しないとダメだ！

ベルのスキルは武器破壊と思って、多くの頑丈な大剣あたりを作っておくか。

不壊属性はいいが、威力に欠けるから通常の大剣にしておいたほうがいいと明日、椿に言ってみるか。

オツタル…【猛者】の大剣が気になるな。この【暴食】の大剣より上とは…、どんな大剣なんだ？

まあ、セバスに任せたら何かわかるだろう。
今頃、この【暴食】の大剣と鎧を盗まれた、【猛者】は怒っているだろうな…。

第45話 猛者、疲弊。

疲れた。

深層にソロで動き回るより疲れた。

フレイヤ様があそこまで痲癩を起こすと思わなかった。

しかもワインをラツパ飲み…、今まではグラスに入れて優雅に飲んでいたというのに。

あれでは、神ロキとは変わらんじゃないか…。

その時、どこかの道化は盛大にくしやみをし、向かいにいたガレスを怒らせていた。

昨日幹部会議をやった後すぐに、フレイヤ様が起きたが盛大に泣き始めた。

「ベルがないー！」「ベルさんはどこー！」

フレイヤ様と、シル様…の時の台詞がごちゃ混ぜになっていた。

あの時は本当に困ったから、一旦幹部を招集して戻った。

そしたら、どこからか取り出したワインを再びラツパ飲みしていたフレイヤ様が

た。

我々は、第一級冒険者は、唾然としてしまった…。

「フレイヤ様、飲みすぎで…ブワァッ！」

「い、いい加減にして…ゴホオッ！」

俺とアレンは、ワインをぶっかけられ、

「し、失礼します。このワインは…ガハァッ！」

ヘディンは、どこに隠し持った魔剣でぶっ飛ばされ、

「フレイヤ様、まず…ぶべっ！」

「ワインを置いて…げはっ！」

「ただけると…ぐへっ！」

「嬉しい…あいたっ！」

周辺の家具を、アルフリッグ、ドヴァリン、ベーリング、グレルにぶっつけられ、

「…あの…その…「うるさーい！」…ううっ、びえええええん！」

ヘグニは、フレイヤ様の怒鳴り声で泣かされて部屋から出ていった…。

付き人のヘイズは、まだヘルンの治療をしていた。

怪我は治っているが、意識が不明でいつ死んでもおかしくないそうだ。

なので、付きっ切りにする必要があるとのことだ。

他の侍従は止めようにも、ヘイズを除く俺たちと同じように、散々な目に遭っていた。そうしたことが3時間続いて、ようやく疲れてお眠りになられた。

「おい…、誰だ。フレイヤ様にワインを薦めた馬鹿は…!」

「…す、すみません! フレイヤ様がこれまでにない、すごい剣幕で「ワインを出して! 早く!」と言われましたので…。」

「…ワインは全てワインセラーに入れろ。鍵は俺が持つ。」

「は、はい。わかりました。」

そして、侍従はワインを全て回収してワインセラーへ移動した。

「オツタル…どうなってやがる!」

「静かにしろ…フレイヤ様が起きてしまう…。」

「さつきよりひどい。」

「痲癩を起こすとは。」

「今までなかったのに。」

「原因は分かっている。」

ああ…、原因は分かっている…。

「「ベル・クラネル!!」」

「…ひつく、ううつ、ひつく…。」

「ヘグニ、いい加減に泣きやめろ。」

ヘデインはヘグニを諫めていた。

「今すぐに」

「戦争遊戯をやつて」

「ベルを取り戻せば」

「解決できるんじゃないか？」

アルフリッグ、ドヴァリン、ベーリング、グレルはそう言つてたが…。

「馬鹿か、貴様らは。神会を通さねば開始できん。それ以前にフレイヤ様が正気に戻つていかないと話にならない。」

「黙れ、羽虫。そのフレイヤ様がこの状況だから困つてんだろが！」

「アレン、少し声を低くしろ。フレイヤ様が目覚めて、またさっきのと繰り返しになったらどうする。」

「くそっ！」

ヘデインの言う通りだ。フレイヤ様が神会へ行つて戦争遊戯の段取りを取らないと進まない。

フレイヤ様の気が済むまで待つしかない…。

そう、俺たちはそう思っていた時があった…。

翌日、起きたら目の前には凄惨たる現場になっていた。

フレイヤ様が持っているマスターキーで…

ワインセラーからワインを十数本持ち出し…

昨日の同じことを繰り返していた…。

本来なら今日は神会で出かけられる日だ。

だが、このような状況では無理だ。

なので、ミアに言伝をお願いした。

「コンの馬つ鹿たれが！ 女一人くらい叱れないのかっ！」

案の定、凄く怒られた。

ずっと頭を下げ続けて、ようやく収まった。

「はあ…クロエ。「ニヤッ!」今の聞いたね？ 神ニヨルズのとこへ行ってきた伝えてきな。」

「何で、ミヤーが…「ああ?」…行ってきますニヤ…。」

すまない…。

「これは貸しにしておくよ。次、同じことを頼みに来たら承知しないからね。」
すまない…。

そしてホームに戻って、再度幹部会議を開いたが…。

「おい…いい加減、フレイヤ様を檻へ入れて主神らしく居座らせろ。」

「前にも言ったが…、薄汚い猫め。」

「恥をしれ、発情猫め。」

「万年発情のド淫乱猫が」

「貴様ごときがあの方の自由を汚すな。」

いつもの罵り合いがまた始まった…。

俺も我慢の限界だ…。

「あの…すみません。」

俺たちは一触即発の状態から、幹部室のドアを振り向いた。

門番が震えた状態で

「か…神デメテルが…お越しになられています…。「フレイヤ様に会わせろ」との一点張りです…、これまでにないほどの、お怒りと共に凄まじいほどの神威を、放っています…

！」

「大変です！か、神デメテルの神威の影響で、ホーム全体が冬になっています！室温がすでに3度を切っており寒さで動けない者も出ています！」

神デメテルが怒っている…？

そういうえば、フレイヤ様が…、

『デメテルは、本気で怒らせるとかなり怖いわよ？…そう、『世界が荒廃してしまうくらいには恐ろしい』とヘルメスが言うくらいなもの。』

まずい…非常にまずい…。

「た、大変です！フレイヤ様がこの寒さで目覚めてしまい、隠していたワインをまた飲んでおられます！」

!?全部取り上げたはずだぞ！

あの方はどこまでワインを隠しているんだ!?

駆けつけると、やはりラツパ飲みしていた。

急いで取り上げたはずみで、ワインをかぶってしまった…。

「俺が…神デメテルの対応をする。お前らはフレイヤ様を見てやってくれ…。」
ますます、冷気が強くなっている…。

第46回 猛者、激怒。

そして神デメテルと対峙した…。

「ヘラ・ファミリア」がまだあつた時に神ヘラに慣れていなかったら、卒倒していただろうな。

そこらにいる奴らと共に…。

「【猛者】、フレイヤに会わせて。」

「神デメテル、現在フレイヤ様の心身ともよくありません。大変お手数で申し訳ありませんが、後日お越しくください。」

「関係ないわ、会わせて。」

さつきより神威が更に強くなった！

ここまでの神格があるとは聞いていないぞ！

いかん…！後ろの奴らもバタバタ倒れ始めた。

どうやったら鎮められるか。

「おい！何してやがる！オツタル！またフレイヤ様が痲癩お越しやがった！その女神に構っていられないでこつちを手伝え！」

俺と同じく、ワイン塗れになったアレンが…。

「ゲホツ…、ゴホツ…、この糞猫が勝手に抜け出すな！」

魔剣で煤まみれになったヘーデインが…。

「おい」「この残念妖精が」

「どさくさ紛れに」「抜け出すな」

物をぶつけられ、ボロボロになっているアルフリッグ、ドヴァリン、ベーリング、ベールが…。

「ひぐつ…ううつ…えぐつ…」

ヘグニが泣いて出てきた。

神デメテルの神威が、ピタッと収まった。

…助かった。

「…ねえ、何が起こっているの？フレイヤに何が起きたの？」

「申し訳ありません。神デメテル、内輪のことですのでご容赦願います。」

ずっと頭を下げ続けて、

「……………わかったわ。詳しいことはあとで聞かせてもらおうわよ？」

ようやく引いてくれた。

フレイヤ様が昨日と同じく、飲み、暴れて、疲れてお眠りになられた…。

疲れた。

深層で魔石狩りした方がまだマシだ。

再び幹部会議をした。

「ワインを全部取り上げた。」

「ベッドの中だけでなくクローゼットも」

「本棚の本の中にもあったぞ。」

「これでマシになるはずだ。」

…まさか、あちこちにワインを隠していたとは。

フレイヤ様らしいイタズラが、このような形で裏目に出るとは思わなかった。

だが、昨日よりはまだマシになるはずだ。

これでは、戦争遊戯になる前に自滅してしまうな。

フレイヤ様が以前のように、戻ってくれるといいのだが…。

「戦争遊戯どころではない。フレイヤ様に元に戻っていただくしかない。」

「どうやってだ？」

「フレイヤ様は痲癩を起こしまくっている。」

「我々がいくら言つても聞いてくれない。」

「ベルを攫つてくるか？」

「馬鹿共が。そもそもその愚兎が原因だろうが。攫つて更に炎上したらどうするのだ？」

また、堂々巡りになってしまった。

無理矢理に抗争でも起こすか…？

「あの…すみません。」

今度は何だ？

もう、これ以上は勘弁してくれ…。

「何だ…？」

「あの、神ミアハが来られまして…この二日酔い防止の薬と睡眠薬を持ってこられました。」

「毒ではないだろうな？」

「神ミアハは神ヘステイアの側だろ？」

「そんなの受け取れるか。その場で捨てればよかつたらうに。」

「…いや、お前ら一応薬神だぞ。そこまではしないだろ？」

神ミアハは、神ディアンケヒトよりまだマシな神と聞いている。
どうするべきか…。

「ヘイズに渡して、毒かどうかを確かめてからフレイヤ様に飲ませたらいいのではない
か？」

「「それだ！」「」

もし、効いたら神ミアハには感謝せねばならないな。

侍従に命じて、二日酔い防止の薬と睡眠薬を飲ませよう。

結局、薬は毒ではないことを確認し、侍従を通して命令しておいた。

フレイヤ様が起きて、二日酔いに苦しんでいたところに飲ませた。

薬が効いてくれて、ぐっすりと寝てくれた。

これで一安心か…。神ミアハには感謝せねばならないな。

むっ…？

何だ…この気配は…。

……………気のせいかな…。

「た、大変です。オツタル様！」

またか…今度は何だ？

「フレイヤ様が先程お目覚めになり、ワインを…」

「馬鹿な！ワインは全部発見して、取り上げたはずだぞ！」

「そ、それが侍従いわく枕元にワインが5本置かれておりまして…侍従共は知らないと言ってますが…。」

……!?!?

先程の気配は侵入者か!?

「緊急事態だ！侵入者が入った。全員へ伝えろ！アレンたちはフレイヤ様をお諫めしろ、と伝えろ！ワインを飲ませるな！毒かもしれん！俺は侵入者を見つけ出す！」

「し、承知いたしました！」

くそっ！

【フレイヤ・ファミリア】 ホームへ…しかも神室まで侵入してくるとは!?

油断していた！

どこだ!?!このファミリアだ!?!

【ヘスティア・ファミリア】 のベルはそんな奴じゃない。

ヤマト・命か!?!いや、レベル2でそこまでの実力はない。

【ロキ・ファミリア】 か？フィンがやりそうだが…ここまでの侵入技術を持つ奴はいたか？

くそっ！どこに隠れている！？

結局、見つからなかったか…。

ワインはワインセラーから取り出したものだった…。鍵は俺が全て持っている。ワインセラーにこじ開けた後はなかった。かなりの腕前だ。

こんな真似ができるのは、オラリオにはいないはず。

フレイヤ様はまた、昨日と同じく、泣き、飲み、暴れて、疲れて、ようやく寝てくれた…。

神ミアハからいただいた薬を飲ませて。

ホーム内の、特に神室内の警備を強化した。

疲れた…。一旦部屋へ戻るか…。

ギイ…バタン。

!?この気配、入られた後がある!?

俺の部屋に!?何と大胆不敵な…。

何か盗られたものは…?!?!

あ…、壁に掛けてあった!ザルドの…【暴食】の…大剣が…な…いい。

漆黒の鎧もだ!?

俺の《覇黒の剣》はある…。武器が目的ではない？

賊の狙いはザルドの大剣!? 何のために!?

ここまで侵入してくるとは何者だ!?

む…? 机の上に手紙が…?

!!!

「くそっ!!」

握りつぶしてザルドの大剣があつた壁に拳で殴りつけた。

壁は大穴を空け、外からの空気が入り込んだ。

その手紙には、

『何たる脆弱』

『何たる情弱』

と書かれていた。

大穴を開けた衝撃で、フレイヤ様がお目覚めになられてしまって、

ワインは飲まなかったが、泣いて暴れて疲れて、ようやく眠ってくれた。

そのため、他の7人から猛抗議される羽目になった。

疲れた…。

第47回 白兔、快調。

久しぶりにぐっすり寝られた。

こここのところ激戦続きだったし、深層での経験で浅い眠りしかできなかったので、本当に久しぶりだった。

こんなに寝られたのは、お祖父ちゃんといた時以来かなあ……。しまった！朝の自主訓練してなかった。

まあ……。メイとセバスが相手してくれるからいいか。

今日も絶対ボロボロだろうな。

あれ……。？僕一人で寝ていたよね？

何だろう？優しく温かいものに包まれたような……。

気のせいかな？

ま、いいか。体もすごくいい調子だし、ご飯食べに行こう！

メイとセバスの指導、非常にわかりやすいので学ぶところが多くて嬉しい！

さすが、お父さんとお母さんの派閥の指導をしてきただけはあるよね！

リビングに着いたら、もうみんなが集まっていた。

「おはようございます！」

「おはようございます。ベル殿！」

「おはよう！ベルくん！」

「お、おはようございます…。べ、ベル様…。」

「おはようございますっ！快眠できたっぽいですねっ！ベル様っ！」

あれ？何で春姫さんが照れてるの？

それにリリ、何で怒っているの？

「坊ちやま、おはようございます。」

「よく寝られましたかな？坊ちやま。」

「…初めまして…。おはよう。」

あ、メイとセバスだ。

…アマゾネスのきれいなお姉さん、…誰？

アイシヤさんの知り合い？

「ああ、坊ちやま。こちらは昨日の新入団員です。バーチエ・カリフさんです。」

え？新入団員？

僕、聞いてないよ!?

あー、昨日は疲れて風呂へ入った後にすぐ寝ちやったから仕方がないかあ…。

「…バーチエ・カリフ…です。よろしく…団長…。」

「あ、はい。初めまして、ベル・クラネルです。よろしくお願ひします！」

「バーチエ殿はレベル6ですが、団長は坊ちやまのままです。」

え？レベル6!?!本当に？

すごい！

あ、でも…、団長が僕で本当にいいのかなあ…。

「それで、坊ちやま。バーチエさんと本気の模擬戦をやっていたいただきます。」

「ただ、少々手続きがいりますので本日の午後からになります。」

レベル5の僕とレベル6のバーチエさんと？

…「フレイヤ・ファミリア」のあの人たちとやり合ってきたんだ。

うん…今の僕の力を試すいい機会だ。

「わかりました。バーチエさん！よろしくお願ひします！」

「…こちらこそ…よろしく…お願ひします…。」

あれ？緊張しているのかな…？

「バーチエさんは少々人見知りですので、これから徐々に慣れていきますのでご心配な

さらないでください。」

バーチエさんは、ビクつとしてた。

……メイ、脅してないよね？

朝食をみんなで食べ終わった後に、メイが今日の予定を教えてくださいました。

「さて、皆様。今日の予定を伝えます。その前に、昨夜坊ちやまが寝た後に、そちらのバーチェ・カリフさんが訪ねにこられました。それで私に対応し、「カーリー・ファミリア」から快く改宗してくれました。」

「か、改宗!?!僕が寝ている間に一体何が起こってたの!?!」

「快く、だつてよ。バーチェくん。」

『言い得て妙ですね…。ヘステイア様。』

あれー？

ヘステイア様とバーチェさん、昨日会ったばかりだよね？

ものすごく親しくなっていない？

「坊ちやま、説明すると時間がかかりますので後で説明いたします。」

「あ、うん。」

「さて、今日の予定ですが坊ちやまは昨日に引き続き、セバスと模擬戦やつてもらいます。そして昼からある場所で、バーチェさんの模擬戦をしていただきます。」

「ある場所？ああー、クノツソスカ。」

「他の方に見られるわけにはいきませんからね。」

クノツソス：そういえば、ギルドはどうなっているのかな？

フレイヤ様の魅了が解けた後、僕が気絶する前にエイナさんの顔が見えたけど、エイナさん：大丈夫かな？

えーとフレイヤ様の魅了が解除されたのが一昨日だから、今日で三日目だけどギルドの方は大丈夫かな…？

その頃、ギルドはエイナ・チュールが抜けた穴があまりにも大きいため、一昨日からずっと夜通しで仕事漬けになっていたとのこと…。

そのため、ギルド職員はエイナ・チュールをクビにした（エイナから退職届を出した）ギルド長を、強い怨恨の視線で周囲から睨まられていた。

ギルド長はその視線を無視し、全財産没収されたシヨックとフレイヤの魅了による対応、エイナ・チュールの抜けた穴をどう埋めるかで胃がかなり荒れていたとのこと。

よく寝たから、今までより体の調子がいい。

いつもより動けそうだ。

メイが作ってくれたドリンクを寝る前に飲んだからかな？

今晚もお願いしよう。いや、毎日お願いしよう。

お父さんたち：「ゼウス・ファミリア」のみんなもよく飲んでいた、と言ってたから。

…もし「ゼウス・ファミリア」がその場にいたら、

『違うーベル、気づけ！』『その性悪メイドに騙されるな！』

と言ったに違いない。

バーチェエさんがレベル6で「カーリー・ファミリア」からの改宗かあ…。

改宗で揉めなかったのかな？

リリも「ソーマ・ファミリア」からの改宗で抗争に近いほど揉めたと聞いたけど、バーチェエさんの方は大丈夫だったのかな？

きつと「カーリー・ファミリア」の主神と眷属の方々がいい人だったんだろうね！

おっと今日の昼から模擬戦するから、それまでセバスさんとの模擬戦で体を温めておかないと！

あ、メイが言ってた。毎朝にステータス更新した方がいいと。

何でだろう？

戦争遊戯まで時間がないので、大して上がらないと思うんだけど…。

まあ、成長期だから一応した方がいいよね。

第48回 執事長、再会

第47回 執事長、再会。

ふう、いい汗をかきました。

坊ちやまは、昨日の今日なのにかなり強くなっていますね。

ただ、経験が浅いため判断が少々遅いですが、それは仕方ありませんね。

それでも速い方ですね。

：何度も思いますが、本当にあのクソ雑魚サポーターの血を引いていますね。

癖や足の疾さがよく似ています。

思わず本気で折檻しそうになりました。

いけませんね。

目の前の坊ちやまは、大の字になって息を整えています。

さて、私は用事を済ませてきましょうか。

「坊ちやま、大丈夫でしょうか？」

「はあ、はあ…あ、うん。セバス、大丈夫だよ。ごめん、待たせて…。」

「申し訳ありませんが、私は所用がありますので自主勉強をしていただけますか？」

「べ、勉強?」

おや、勉強が苦手のようなですね。

エイナ嬢のスパルタ教育が身に沁みているからでしょうか。

ですが、それでは困ります。

「はい、こちらに『フレイヤ・ファミリア』の団員データがありますので、目を通しておいて下さい。」

「え? 『フレイヤ・ファミリア』の…? それって機密データじゃ?」

「昨晚忍びこんで、ステータスを写してきました。」

「何やっているの!? セバス!」

当然でございましょう。

「戦争遊戯をやるにあたっての、基本中の基本でございます。」

「そ、そうなの? 『アポロン・ファミリア』の時はしてなかったけど…。」

「それは仕方ありません。戦争遊戯前の団員は坊ちやましかいませんでした。ですが、当時入団してくれたリリ嬢が大体分析して下さいました。」

「…リリには感謝しかないね。」

本当にあの小人族の娘は優秀ですね。

【勇者】以上の頭脳を持っています。

「セバス…、よく捕まらなかったね。」

「あの程度の警備など、目をつぶってても簡単に忍び込められます。」

（僕がいた時は、鼠一匹も逃げられないような警備だったけど…。）

「それで、坊ちやま。目を通していただけですか？」

「うん！わかったよ！えーと、午後からバーチエさんとの模擬戦だから、それまでに目を通して覚えておくね！」

素直ですね…。

これがアルフィアお嬢様でしたら、「必要ない」の一言でしょうね。

「では、私は所用がございましてので出かけてきます。」

「うん！行つてらっしゃい！気をつけてね！」

…孫ができるというのは、このような気持ちでしょうか。

さて私がオラリオを歩きますと、見知った神に見られると面倒くさいことになり
ますから、誰か同行者が必要ですな。

ヘステイア様とリリ嬢と春姫嬢は、エイナ嬢と「ヘルメス・ファミリア」のお二人と
話し合いますから、駄目ですね。

ヴェルフ殿は…、朝一に「ヘファイストス・ファミリア」へ行きましたから、駄目
ですね。

となると、命嬢しかいませんね。命嬢は…キッチンですか。

「命嬢、少しよろしいでしょうか？」

「あ、はい。セバス殿、どうされましたでしょうか？」

「ええ、出かける場所がありますが同行願えませんがどうか？今、私が見られると面倒くさいことになるからです。」

「承知しました。今、昼の下ごしらえを済ませましたので今からでも可能です。それで、どちらへ行かれるのでしょうか？」

「ミアハ・ファミリア」です。」

「おや、命ではないか。どうしたのだ？カサンドラ以外は、所用で少々出払っているのではないのだが、どうしたのだ？」

「み、命ちゃん…、こんにちは。」

「こんにちは。ミアハ様、カサンドラ殿。こちらの方がミアハ様に用があるとのことです。」

「…フードをかぶっているようだが、どちら様かな？」

…久々ですな。

私は、15年ぶりに会う薬神の前でフードを外した。

「お久しぶりでございます、神ミアハ様。15年ぶりでございますね。」

「!?…セバス…いつ、どうやって…!?そうか…やはりベルは…。」

「はい、ご明察の通りでございます。」

メーテリアお嬢様の時以来でございますね。

「ミ、ミアハ様?こちらの方は…?」

「セバスは…カサンドラ様、初めまして。「ヘスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属執事セバスと申します。お見知りおきを。」…だそうだ。」

「あ、はい。初めまして。カサンドラ・イリオンと言います…。べ、ベルさんの…?」

「はい、そうでございます。さて、神ミアハ様。「ヘスティア・ファミリア」へ協力していただきたいことがございます。こちらのカサンドラ様をお借りできませんでしょうか?」

カサンドラ様の治療だけでなく『予言』も興味ありますが、今は置いておきましょう。

「…いいだろう。もとより「ヘスティア・ファミリア」へ協力するつもりだったんだ。…それだけではないだろう?特に私へはな。」

「はい、神ミアハ様。共に同行をお願いできませんでしょうか?カサンドラ嬢、私が戻るまでお待ちいただけませんか?ああ、命嬢。同行はここまでで結構でございます。お手数をおかけしました。」

「あ、はい。わかりました『カサンドラ様には現状の説明はまだしなくて結構です。準備で忙しいといえれば問題はありません。ただ、カサンドラ様はそのうち「ヘスティア・ファミリア」ホームへ来ていただいて私達から説明します。』…。承知しました。」
今、情報が漏れるのはまだ早いですからね。

「…それで、私をどこへ連れて行くつもりだ?」

「【ミアハ・ファミリア】と双壁を成すところでございます。」

「…あいつと共に私をどうするつもりだ?」

「それは着いてからのお楽しみでございます」

そして、神ミアハを連れて「ディアンケヒト・ファミリア」へ赴きました。

「フハハハハ!ミアハ!何の用だ!?借金の前払いか?」

相変わらず、五月蠅い神ですね。

当時のアルフィアお嬢様が、しかも面するのもわかります。

ふむ、そちらは【戦場の聖女】アミッド・テアサナーレですか。

「…こちらが私とお前に用があるそうだ。」

「む!そうか!何者だ!」

「お久しぶりでございますね。神ディアンケヒト様。」

私は、15年ぶりに会う医神の前でフードを外した。

「!? なっ何でっ!? お前がここにっ!? いるのだああああ!?」

「正当な後継者により、解放されたからでございませよ。ああ、初めまして。【戦場の聖女】アミッド・テアサナーレ様。私は【ヘステイア・ファミリア】団長ベル・クラネル専属執事のセバスと申します。坊ちやまが大変お世話になり、お礼申し上げます。」

「あ、はい。アミッド・テアサナーレです。…え?…彼の専属執事? 坊ちやま?」

「!? アミッド…席を外して「アミッド様も同席させていただきます。」…：儂に…いやミアハと儂に何の用だ…?」

「デ、ディアンケヒト様?」

「単刀直入に言います。【戦場の聖女】アミッド・テアサナーレ様を戦争遊戯が始まるまでに、貸していただきたいのです。ああ、ディアンケヒト様のお好きなお金が必要なら、払います。」

この神は神でありながら、金をぼったくりますからね。

当時、元主神ヘラが膨大な治療費を請求されて激怒し、【ディアンケヒト・ファミリア】を半焼させましたからね。

それ以降、半泣きで適正価格になりましたがね。

「…………ベル・クラネルは…【白兔の脚】は…あいつの息子なのか…?」

「そうでございます。わかりませんか？お二人とも神でしょう？」

一目瞭然でメーテリアお嬢様に瓜二つだというのにわかりませんか？

神ディアンケヒトは目をわざと合わせず見ないようにしてましたが、神ミアハは…。

「……他人の空似かと思っていた。あまりに瓜二つでありすぎたのでな…。」

「……やはりそうか…。気づかないようにしていたのだがなあ。」

神ミアハは天然でしたか…。

「……アミッドに何をさせる気だ…？」

「治療以外の目的がございますか？」

「あの…、治療なら伺い「アミッドは黙っておれ。」…ですが…。」

ふむ、余程大切にされているようだな。

「…【ディアンケヒト・ファミリア】は中立を維持する…。だが、戦争遊戯前にアミッドを貸し出すことは了承しよう。儂も今回のことは、腹に据えかえるのでな。」

「…【ミアハ・ファミリア】は【ヘスティア・ファミリア】に味方する。今回のこととは別にいつも世話になっているからな…。」

「それはありがとうございます。坊ちやまに代わり、お礼申し上げます。では、治療代はいかほどでございますでしょうか？」

「いらん。あいつの息子…ベル・クラネルのためだろう？尚更、受け取れるかつ!？」

「……こちらもだ……。」

(そういえば、彼の左腕の治療の時にディアンケヒト様は、かなり焦っていましたね。また、いつものように強く金額を要求していませんでした。…まるで彼を避けて……いえ贖罪してるかのように……。)

「それは……深くお礼申し上げます。アミツド様、申し訳ありませんが後で私と同行願えませんでしょうか？ 坊ちやまのところへ案内いたしますので。」

「あ、はい。わかりました。準備をしますので失礼します。」

……いい子ですな。

あの娘の治療があれば、アルフィアお嬢様もメーテリアお嬢様の病気が軽減されたかもしれませんね。

第49話 薬神、独白

「……貴様は……儂らを恨んでおるのか……?」「……。」

「いいえ、私は『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』がオラリオを追放された後に、自ら『ゴブニュ・ファミリア』へ封印された身です。恨まれこそはあっても、恨む資格などございません。」

「……ベルは……知っているのか?我らが母親を死なせてしまったことに。」

「いいえ、坊ちやまは自分の出自を、一昨日までは知りませんでした。なので、メーテリアお嬢様がどのように天へ逝かれたのかも知りません。もちろん、私もです。」

メーテリアの病気は私たちが必死で治療していた。

そう、アルフィアとメーテリアの主治医だったのだ。私たちは。

「お二人にお願いがあります。メーテリアお嬢様はどのようにして逝かれたのかを、お聞かせ願えませんでしょうか?」

そうか……セバスは一昨日まで『ゴブニュ・ファミリア』で封印されていたのだな……。

なら、言わなければならぬな。ベルにもな……。

「……儂は、あいつが子供を……ベル・クラネルを産むことに反対だった……。産めば、一気に

病状が進んで死へ一直線になるからだ。」

「だが…、メーテリアは自分の命より…ベルを選んだ。あの真つ白な笑みでな…。」

「儂らは…止めることができなかつた…。当時オラリオから追放するフレイヤとロキへ直談判して、メーテリアをオラリオで治療させるように、とな。フレイヤとロキは『ディアンケヒト・ファミリア』で入院する形で謹慎ならいい、でまとまつたが…あいつはゼウスと共に、自らオラリオをいつの間にか出ていつてしまった。」

あの時は本当に焦つた。当時のメーテリアは子供を産む体力が足りない。

母子と共に危険な状態で、オラリオを出ていつてしまった。

それを知つたフレイヤとロキも、さすがに狼狽していたがな。

「私たちは焦つた…メーテリアにはどうしても薬などの治療が必須だ。なので、『ヘルメス・ファミリア』に依頼して探してもらつた…。」

「ようやく見つけてもらつた時は…すでにベル・クラネルを産んで…病状がもう手遅れになつていた…。」

あの時のメーテリアは私たちを見て、「見つかつちやつた。ごめんなさい。」といつてもどおりの笑みで私たちに謝つていた…。

その時の赤ん坊…いやベルは問題なく健康だった。

まさかあの時の赤ん坊がベルとは、思わなかつた…。

そしてこのオラリオで会うことも…。

「地獄の苦しみで…気が狂ってもおかしくなかった…。だが、メーテリアはいつもの通りの笑みで…赤ん坊だったベルを見つめながら、苦しみに耐えながら安らかに逝った…。」

「儂らは、今でも…後悔している。オラリオで監禁してでも閉じ込めるべきだった…。そうすれば少しは助かったかもしれないからだ！」

「私たちは神だ…。神力を使つてでも治すことはできたかもしれない…。だが、それをすれば、メーテリアと同じく死の病に苦しんでいる人達を別にしてしまう…。それは神としてできなかつた！」

…あの時ほど神としてでも無力であることを悔やんだことはなかつた。

「…そうでございしましたか。お辛いことを語っていただきありがとうございます。先程言いましたが、私はお二人を恨む資格などございせん。」

だが、ベルは…。

「坊ちやまに先程の内容を伝えても、恐らく坊ちやまはお二人を恨むことは皆無でしょう。神ミアハもご存知ですが、坊ちやまはメーテリアお嬢様に瓜二つです。」

…そうであつたな。ベルはそういう子だつた。

この戦争遊戯が終わつた後に、ベルへ言わないといけないな。

「…7年前の大抗争で、アルフィア…あの娘が闇派閥となって被害をもたらしたことを、僕は今でも信じられん。レベル7で病状がいくら抑えられたといってもな。」

「私たちは、大抗争の怪我人や被害者を治療するのに精一杯で、アルフィアのことまで気を回すことができなかった。大聖樹の枝を手に入れても死の病の軽減はわずかだ。」

「アルフィアは…大馬鹿だ。オラリオに来るならまず農らのところへ来るべきだったのだ！」

7年前の大抗争で、アルフィアが私たちの前に姿を現れなかったのはメーテリアのこともあったかもしれない。

せめて、会って話をして止めたかった…。

いや、それでもあの娘は絶対に聞かなかつただろうな。

「…アルフィアは…ベル、いや自分の甥のことを知っていたのか…?」

「坊ちやまの記憶を見る限り、生まれた時にアルフィアお嬢様がいることを 確認しましたので、知ってはいたようです。」

「なら…何故! 会ってやらなかつたのだ!? 甥だぞ!? あれ程愛していた妹の子だぞ!」

「恐らくアルフィアお嬢様は、坊ちやまのために坊ちやまが剣をとらぬ世界にするために、この地オラリオへ自分の命を捧げることを決心したのでしよう。そのため、自分が坊ちやまに会う資格がないと思つたからでしょう。」

「ふざけるな！ たった1人の肉親だぞ！ 資格とか云々とか問題ではない！」

「…ディアンケヒト。 やめよう…。 我々は彼女たちをどっちみち救えなかったのだ。 死の病を治せなかった我々の責任だ…。」

「…何が神だ！ 何が医神だ！ くそがつ！」

…ディアンケヒト…お前も、私と同じく神であることに苦しんでるのだな。

「アルフィアお嬢様とメーテリアお嬢様を苦しませ死なせた死の病ですが…、もしかすると光明が見えたかもしれません。」

「な、何っ!?」 「…それは本当か!？」

死の病への!？」

もし、あれば…多くの苦しんでいる人が助かる！

「大聖樹の枝は、死の病を軽減します。 それは確かですね？」

「ああ、間違いない。 僅かだがな。」

「ただ、材料が足りない。 大聖樹の枝…カドモスの泉…あと1つの何かが必要なのだ。」

そう…大聖樹の枝は大抗争で多く手に入れた…カドモスの泉は51階層へ行けば手に入れる…。

そして、アミツドの神秘持ちで製作できる。

しかし…、それでも足りなかった。 後1つ…何かがあれば治せる可能性が高くなる！

「お二人にお聞きしますが、メーテリアお嬢様の死を看取った日に、坊ちやまを診断いたしましたでしょうか？」

「ああ…。」「うむ…至って健康だったぞ。」

「それはようございしました。気づきませんか？アルフィアお嬢様とメーテリアお嬢様のお母様も死の病にかかって亡くなれたとのこと。死の病は遺伝する場合、坊ちやまにもかかってもおおかしくはありませんでしょうか。」

「!?」

「憶測ですが…、坊ちやまは死の病の抗体を持っているのではないのでしょうか？」

「っ!?!….:L v 2の時18階層から帰還した時も、死の病の前兆はなかった…。」

「…深層から帰還した時もなかった…。」

ベルは…死の病にかからない!?

なら、最後の素材…死の病の抗体があの子の体にあるということになる!

「こ、こうしてはいられん!セ、セバス!今すぐ、ベル・クラネルを…【白兎の脚】をここへ連れてこい!」

「申し訳ありませんが、お断りいたします。戦争遊戯後にお問い合わせいたします。」

「だーっ!?!わかった!【ディアンケヒト・ファミリア】はベル・クラネル…いや【ヘスティア・ファミリア】に味方する!報酬はベル・クラネルの血だ!」

「承知しました。お引き受けいたします。」

「…ディアンケヒト。我らも【ミアハ・ファミア】も手伝おう。」

「当たり前だ！あいつらの…敵討ちだ！少しでも治せる可能性があるなら、突き詰めるのが我らの務めだろうが！」

ようやく…光明が見えてきた！

第50話 医神、激怒。

「セバス……。思ったのだが、ベルがオラリオへ来た時は1人だったとヘステイアから聞いている。ゼウスはどうしたのだ？オラリオ外にいるのか？」

「は？1人？ベル・クラネルはたった1人でオラリオへ来たのか？一体、ゼウスは何をしているのだ!？」

「メーテリアが亡くなった時：ゼウスは赤ん坊だったベル・クラネルを抱いてたはずだぞ！」

もしかして、ミアハが言う通りオラリオへ入れないから、外で待っているのか…？
なら、フレイヤとロキへ取りなしてやらんとな！

謝礼金はたつぷり取るがな！フハハハ！

「単刀直入にいいいますと、半年前に坊ちやまの育児放棄をしました。」

「は？」「な、何だと!？」

い、い、い、育児放棄だと…。

あの娘が苦しんで産んだ子を…ベル・クラネルを!？」

ふざけるなああああ!？」

「どういうことだあああつ?! 説明しろ! セバスつ!」

「あのクソエロ爺は、ここ14年間ほど坊ちやまに碌なものを食べさせず、碌なことしか教えない上で、育児放棄しました。そのきっかけは、おそらく半年前に元主神ヘラが正気に戻ったからでしょうね。」

「……………」

……怒りで言葉が出ないとはこういうことなのだな…。

おのれ、メーテリアの苦しみを何だと思っている!

あの下半身しか能のない爺め!

それでも大神かあああつ!?

「……………ディアンケヒトよ……………」

「お、おう。どうした、ミアハよ。」

「私は猛烈に怒っている。」

「う、うむ。儂もだ。」

ミアハがこんなに怒るのは初めて見るな…。

天界でもなかったな…。

だが、やはり許せん! ゼウス!

「…ゼウスがうちに運び込まれても、ギリギリまで治療してやらん!」

(それでも治療はするのですな。)

「…薬と毒は紙一重ということをゼウスに教えてやろう…。とっておきの毒をゼウスに飲ませてやろう…。」

(なるほど、神ミアハが怒るところなるのですか。勉強になりましたな。)

「…アミッドに強く言っておこう。ベル・クラネルがどんな状態になっても必ず治せ！と。」

あの娘の忘れ形見だ！絶対に死なせてやらん！

死の病の最後の希望だ！絶対に死なせるものか！

「うちの者、皆に伝えておこう。ベルをより構ってやるようにと。」

(一気に過保護になりましたな。まあ、悪い方向になるよりはマシですが。)

思ったのだが、何故アミッドが必要なのだ？

治療と言っていたが…非常に嫌な予感がするのだが…。

「そういえば、何故アミッドが必要なのだ？」

「うむ、気になるな。」

ミアハも、ベル・クラネルと前々から親しかったが、更に拍車がかかったようだな。

そういえば、ベル・クラネルとの初対面はミアハの借金回収がきっかけだったな。

【ヘステイア・ファミリア】という貧乏派閥に入るのはどこの物好きだと思い、見たら

メーテリアに瓜二つのヒューマンの男の子だった。

初めて見た時は焦ってしまった。目を合わせずへスティアを見ることで誤魔化した
が…。

やはりそっくりだった、瓜二つだった。

ただ、メーテリアの子であるということを開けなかった。

聞くのが怖かったのだ。

そのため罪悪感もあり、姿も見ず目も合わせたくなかった。

ただ、ランクアップするごとに大怪我をするのはやめてほしいのだが…。

メーテリアが聞いたら、その都度卒倒するぞ…。

ミノタウロス強化種と戦い、大怪我した時でギルドへ運ばれたのを聞いた時、アミツドを派遣しようかと思つたわ。その後、レベル2になったのを聞いた時腰が抜けたわ。

そして、「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯で、ヒュアキントスとの戦闘で大怪我した時はヒヤつとしたが、勝てたからよかつたようなものだが…。

まあ、そのおかげで大儲けさせてもらったがな！フハハハハ！

…儂の隠しへそくりを全て「へスティア・ファミリア」に賭けたことは、アミツドには黙っておこう…。

その後、揉め事に巻き込まれ大怪我をこしらえたようだが、その度「ミアハ・ファミ

リア」によつて治療されたのを聞いた時は、心底安心した。

ただ、数ヶ月前の深層からの帰還で左腕がめちやくちやになっているのを見た時は、思わず怒鳴つてしまふところだった。

あの不思議な布のおかげで左腕の『組成』が残つてよかつたわ！

でなければ、ミアハのこの「医神の忠犬」と同じ銀の義手を取り付けるとこだったわ！

まあ、その分借金を押し付けける気だがな！フハハハハ！

……いや、やめとこう。

メーテリアが化けて出てきそうな気がする。

おつといかんいかん。

何故、アミッドが必要なのかを聞くとこころだったな。

「フレイヤ・ファミリア」で坊ちやまは死の3歩手前まで痛められたとのことです。」

「死、死、死の3歩手前だとお!？」

「ええ、【フレイヤ・ファミリア】のヘイズ・ベルベット様が坊ちやまを癒やしたそうです。」

あの『満たす煤者達』の顔役の『黄金の魔女』か!？」

死んだような目をした女か!？」

「…それでそなたはベルに何をする気なのだ？」

「神ミアハ。坊ちやまはそのためレベル5へランクアップしました。」

「!?!」

早くないか!?

もう第一級冒険者だぞ!

メーテリア、見てるか!

お前の一人息子が既にあのバカサポーターを超えたぞ!

……待てよ。

【フレイヤ・ファミリア】のヘイズは死の3歩手前までに治したらしいが、

そうなるまでに痛められた、ということだよな?

アミツドは…死の一步手前なら治せるのだが…。

ということとは…まさか…聞いてみよう。

「セバスよ…。まさかなのだが、ベル・クラネルを死の一步手前まで追い詰めて、アミツドに治させようという目的ではないだろうな?」

ない、と言ってくれ!

だが、こやつは【ヘラ・ファミリア】専属執事の…【最恐執事】なのだからな!

「ご明察でございます。さすが、神ディアンケヒトですね。」

やっぱりかあああああ!?

「…セバス。何故そこまでするのだ？確かにベルは成長速度が早い。だが、レベル5からの成長速度はレベル4と比べて遅い。そこまでしてもすぐに成長できるとは思えないのだが…。」

「[フレイヤ・ファミリア]と[ロキ・ファミリア]と戦うにはまだ足りなさすぎます。時間ギリギリまで強くしなければならぬ状況です。どうか、ご理解いただきますようお願いします。」

………仕方がない。

この「最恐執事」セバスが言うほどだ。

そしてセバスが判断し、儂らのところへ来てアミツドの派遣をお願いしてきているのだ。

メーテリアの子、ベル・クラネルを守るためにも…。

そして、アルフィアやメーテリアを死に追いやった死の病を撲滅するためにも…。

「………わかった…。」

「[ディアンケヒト]!？」

「ミアハ、ベル・クラネルは…こいつにとつて第一だ。こいつが死の一步手前まで追い込むほど、強くさせなければならぬというのなら、仕方があるまい。アミツドを派遣し

よう。」

「…そうだな。死なせるわけがないものだな。私も賛同しよう。」
「お二方、ありがとうございます。」

アミツド！頼むぞ！

絶対に死なせるなよ！

第51話 聖女、後悔

「遅くなり…申し訳ありませんでした。準備が整いました。」

「お気になさらず、先程話が終わったばかりですから。アミッド嬢。」

アミッド嬢…。初めて呼ばれました。

照れますね。

「アミッド…、【ディアンケヒト・ファミリア】は「ヘスティア・ファミリア」に味方する。戦争遊戯が終わった後でもだ！」

「承知しました。」

さつきと態度が違うようですが…、まあいいでしょう。

治すからには必ず治します。

「アミッドよ、ベルを頼む…。大怪我負つても、何が何でも治してやってくれ。」

「はい！承知しました！」

ミアハ様をお願いしてきています！

頑張ります！

「…アミッドよ。前から思ったのだが、何故儂とミアハの反応が違うのだ？」

「気のせいです。」

「いや、でも…」

「気のせいです。」

「わ、わかった…。アミッド、ベル・クラネルを死なせるな！いいな、絶対にだぞ！」
ええ、気のせいです。

…しかし、さつきと態度が随分違いますね。

一気に、過保護なおじさんになったような気がします。

「では、アミッド嬢。参りませうか。」

ベル・クラネル専属執事のセバスさん…。何者なんでしょう…？

しかし、ベル・クラネルが坊ちやまと呼ばれているとは…ププツ。

違和感がないのが笑えますね。

「どちらへ行かれるのでしょうか？」

フードを被ったセバスさんが先頭になって歩いて、私はついていった。

そしてダイダロス通りの気配のないところへ入っていった。

すごい…周りの人が気づいてない程の気配を消している…。

本当に何者でしょうか？

「坊ちやまが訓練される場所です。まあ、クノツソスと言えばおわかりでしょうか？」
「！クノツソス…。」

あのバルカが…死んだ場所。

そしてエニユオ、いえ神ディオニュソスの野望の跡…。

今はただの廃墟となり、ギルドが管理しているようですが…。

入っても大丈夫なのでしょうか？

「ところで、アミッド嬢。」

「はい、何でしょうか？」

「先程、私たちの会話を盗み聞きしておりましたね？隣の部屋で聞き耳を立てていたのが丸わかりですよ。」

「!?…何のこと「心拍数が速くなっておりますよ。大丈夫ですか？」…はい、聞いておりました。申し訳ありません。」

…この人……すごく怖い。

あのディアンケヒト様が動揺し、喚き立てないのは非常に珍しかったからです。

つい、気になり準備をしてくる振りをして、隣の部屋で聞き耳を立てていました…。

…私としたことがいけません。

「申し訳ありませんでした。ディアンケヒト様があのような態度になるのは珍しかった

ものですから…。」

ええ、ベル・クラネルのことになると、耳を塞いだり知らない振りをするなど、挙動不審でした。

「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯で怪我するのを見るたびに、喚き散らすくらいでした。

…迷惑でした。

そして、へそくりを全て「ヘステイア・ファミリア」に賭けていたのは、知っていません。

そして、その原因が今日わかりました。

ディアンケヒト様とミアハ様が死なせた大切な人が、メーテリアさん…死の病にかかって逝かれた方。

そして、ベル・クラネルのお母さん、であるというのは驚きました。

…7年前の大抗争の闇派閥の大幹部である「静寂」のアルフィアが…メーテリアさんの双子の姉であり、ベル・クラネルの叔母…。

ディアンケヒト様の怒りも分かる。

何故、甥がベル・クラネルがいるのを分かっているながら、あの抗争で命を散らすこともないでしょう！

それに、ベル・クラネルはお祖父さん…神ゼウス様と2人きりで過ごしたようですが、母親が血のつながった肉親がない、というのはつらいはずです。

残り命が僅かしかなくても会うべきでした！

ミアハ様の言う通り、私たちのところへ来てくれれば私の魔法を使えば、死の病の苦痛を少しでも和らげるはずです！

本当に会いにくるべきでした…。

私もあの抗争で、私の魔法でも救えなかった命が多くありました。

ディアンケヒト様、ミアハ様は神であることがつらいと言っていました。私ですが、【戦場の聖女】なんて大層なものを頂いてますが、あの時救えなかった命が多くあり、その命の家族から責め立てられたことは多くありました。

その都度、聖女なんていらぬ！と思うことも多くありました。

しかし、当時は「ミアハ・ファミリア」のミアハ様やエリスイスに色々と助けられました。

今は落ちぶれていますが…、「ヘステイア・ファミリア」に関わってから復活の兆しが見えてきました。

昔のように話してくれるといいのですが…。

特にミアハ様には。

……いけません。つい、昔を思い出してしまいました。

……私でも治せない死の病を、治せる特効薬の最後のピースを持っているのが、抗体を持つているベル・クラネルですか…。

あの少年は一体何者でしょうか…？

そしてこの方は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」と関係があるようですが、一体何者でしょうか…？

強いというのわかりますが、「猛者」とは少し違うように感じます。

いけません、意識をこっちに向けないと。

「まあ、仕方がありません。おとなしくなったディアンケヒト様はあまり見ませんからね。…アミッド嬢、私が何者かが非常に気になるようですね。そして坊ちやまのことも。」

「!? ……はい。」

「クノツソスに着いたらお教えしましょう。あまり聞かれてはいけない内容ですからね。ああ、言うまでもありませんが、口外無用でお願いします。そうしないと、「ディアンケヒト・ファミリア」が更地になりかねませんからね。」

「絶対に言いません（この人はやる、絶対にやる）！」

……怖すぎる、この人…。

ディアンケヒト様が怯えるのもわかります…。

……とんでもない方と関わってしまいました…。

ですが、死の病の最後の希望を持つベル・クラネルがどんな大怪我を負おうが、必ず治します！

………思いましたが、死の一步手前になるまでつてどんなことをベル・クラネルに課すのでしようか…？

今更、安直に承諾してしまったのを後悔してしまいました…。

………大丈夫でしようか？

第52話 侍従長、面談。

セバスは出かけましたか。

神フレイヤ、いえ「フレイヤ・ファミリア」が自滅による混乱状態にあるのは幸いです。
した。

思ったより時間が稼げそうです。

今晚も忍び込んでもらいましょうか。

坊ちやまは「フレイヤ・ファミリア」の団員データを暗記中ですね。

……勤勉ですね。エイナ嬢に感謝しなければいけませんね。

あの困った子は数分も持たずに逃げ出してしまい、その度お仕置きしたものです。

さて、今日はエイナ嬢の面接ですね。

入団は確定していますからね。ヘスティア様が嫉妬をこじらせない限り。

まあ、大丈夫でしょう。

「メイ様、エイナ様が来られました。」

「はい、わかりました。リリさん、エイナさんとは面接が必要ですので、昨日話した部屋へ通しておいて下さい。」

「承知しました。」

来ましたか。時間通りですね。

へステイア様と共に向かいましょうか。

「やあ、おはよう。アドバイザーくん！」

「神へステイア、おはようございます。エイナ・チュールです。あの、昨日そちらのメイ様にお伝えしましたが、ギルドへ退職届を出したため「へステイア・ファミア」へ入団させていたideきたいのです。」

「うん、おおよそ聞いていますよ。……すまなかつたね。ボクらをかばったせいでギルドをクビになってしまつて。」

「いいえ！頭をお上げ下さい！そもそも、ギルド……いえギルド長ロイマンは日頃から「フレイヤ・ファミア」を鼻負しすぎています。そして私は今回のことにお咎めなしということに納得できず、退職届を提出しました。いつかは出す予定でしたので今回はいいきつかけでした。」

「そつか……。でもそれだけじゃないんだらう？それはついでであり、本当は別にあるとボクは見ているけど？」

「……はい、わかりました。私はベル・クラネル……ベル君のアドバイザーです。この半年

…彼のアドバイサーをやってきました。彼の成長を、レベル4に至るまでの流れをずっと見届けてきました。私は、ただ見てることだけしかできませんでした。そして、あの黒いミノタウロスの戦い、今回の神フレイヤの魅了による件から私はアドバイザーとして自分の無力を痛感しました。ベル君の力にどうしてもなりたいたい、という気持ちが積み重なり、今回に至った経由です。どうか、入団させてもらえませんか！お願いします！」

ふむ、なかなか好感の持てる娘ですね。

リリさんや春姫さんと違うタイプですね。

この方も、また大当たりですね。

「…頭を上げておくれ、アドバイザーくん。君の気持ちは分かった。入団を認めるよ！」
「あ、ありがとうございます！」

「ただし！ベル君のむぐう！『ヘスティア様、私は不要と言いましたよね？』…そこにいるメイ君の指示に従ってくれ…。(ボクは主神なのがいいいい！)」

(すごいです！メイ様、ヘスティア様の行動全て読んでいます！)

(絶対に敵へ回したくはないですね…。味方でよかったです！)

(か、神に…。只者じゃないと思っただけど、あのメイドは何者なの…?)

「さて、エイナ様、いえエイナさんと呼ばせてもらいます。いいですね？」

「は、はい。」

「改めて、私は「ヘステイア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイドのメイと言います。入団おめでとうございます、よろしく願いいたします。」

そして、チラリとリリさんと春姫さんを見た。

「つ、リリルカ・アーデと言います。「ヘステイア・ファミリア」の参謀を努めています。よろしく願いいたします！」

「さ、サンジヨウノ・春姫と言います。「ヘステイア・ファミリア」の…『妖術師です。』よ、妖術師です。よろしく願いいたします！」

「あ、はい。よろしくお願いいたします！」

「では、ヘステイア様。エイナさんに恩恵を刻んで下さい。」

「うん、そうだね。エイナくん、こちらへ来てくれる？」

そう言つてヘステイア様とエイナさんは神室へ入つていった。

「…メイ様。エイナ様も入れるのでしょうか？」

「当たり前でしょう。入れなくてどうするのですか。」

「…いえ全てを言うのですよね？ 内容が内容ですのでギルドへ密告しませんでしょうか？」

ああ、なるほど。そつちですか。

参謀らしく考えていますね。いい傾向です。

「大丈夫です。私の見立てでは絶対に密告したりはしないでしょう、坊ちやまがいる限り。まあ、そのような真似をするなら塵屑にしますのでご心配なく。」

「ちり…そ、そうでございますか。」

「わかりました。リリもエイナ様は全てを知っても裏切らないと見えています。」

リリさんは分かっているようですね。

「はい、終わったよー。ごめんね、アドバイザーくん。スキルも魔法も発現できずに。」

「いえ、こういうものと分かっています。すぐに出るのは稀だと知っていますから。」

「うんうん。さすがにギルドの元受付嬢だね。頼りにしているよ！ただ…『ギロリ』いや、メイ君は非常に、とつても優秀だから指示に従ってね。」

さて、そろそろですね。

「あ、はい。わかりました。あの…『ヘステイアちゃん！バイトの時間だから迎えに来たよー！』…。」

「ええっ?! あー、今日バイトかあ…。ずっと休んでいたからなあ、これ以上休むわけにはいかないし…。仕方がない。行ってくるよ。」

「はい、行ってらっしゃいませ。【フレイヤ・ファミリア】は今のところ手出しはしてこないでしょう。」

「…突っ込みたいことがあるけど、「ハスティアちゃん！」あーもー！何でここまで迎えにくるのかなー。君たちすまないけど、後は頼むよ！特にメイ君！」

「お任せ下さい。全てこのメイが万事努めてみせましょう。」

「うん！じゃあ、行ってくるよー！」

じゃが丸くんの屋台店長へ依頼して時間通りに来てくれました。

さて、エイナさんへ説明しましょうか。

(…まさか、タイミングを計算して呼ばせたのですか…。怖いです！。)

(じゃが丸くんの屋台の店長を呼ばせたのは、もしかしてメイ様ですか…。？ぶるぶる

…。)

(戦争遊戯のファミリア主神が…バイト…？いいのかなあ…？)

第53話 侍従長、説明。

「さて、エイナさん。」

「は、はいっ！」

「単刀直入に言います。貴女は我がファミリアの団長のベル・クラネルを愛していますね？」

「ふえっ!? あ、愛している…? そ、それは…。」

「メイ様メイ様、単刀直入すぎます！」

「そ、そうでございます。だ、段階を踏んでからで…。」

「リリさん、春姫さん、不要です。ほら、エイナさんを見て下さい。」

「「え? あー…。」」

エイナさんは、頬に手をあててクネクネしています。

一目瞭然ですね。

「コホン。いいですか？」

「はっ…、す、すみません。あ、あの愛しているというのは…。」

「エイナさん、こちらに見覚えありませんでしょうか？」

「え？本？いえ、日誌……?!?!? な、な、な、何でそれは神フレイヤが持っているはずじゃ……」
 「おや、疑いますか？で……?!?!? 『ダメだ。私はもうダメだ。この身に流れるエルフの血にあるまじき背徳を……』」

「きゃあああああ!?か、返して！返して！返して下さい！お願いします！後生です！」

「いいでしょう。返します。ただ、私がこれから話すことは「ヘステイア・ファミリア」の極秘事項です。貴女の知りたかった、黒いミノタウロスについても教えてあげます。……もし、これらを密告したり他のファミリアへ漏らしたりするようなら、この日誌の写しを団長そして「ヘルメス・ファミリア」へ渡して重版して世界中へ販売します。」

「わかりましたっ！絶対に漏らしませんっ！密告もしたりしませんっ！誓いますっ！」

（あの本は……、昨夜セバスさんが盗んできた本ですか……。）

（何が書いてあるんでしょうか……。背徳という言葉が非常に気になります……。）

「はい、団長に見つからないよう気をつけてくださいね。」

「ひつく……えつく……どうしてえ、持っているんですかあ……?？」

「【フレイヤ・ファミリア】から盗んできたものです。私でなく他の方ですが。」

「………フ、【フレイヤ・ファミリア】から……?ははは、まさか……でも、これは……うん。私の筆跡……本物……」

「暗記してありますので、続きをいいますでしょうか?『抱いてしまった。担当冒険者につ

…』

「わかりましたわかりました！信じますっ！だから続きを言わないで下さいっ！お願いしますすっ！」

(うわあ……。)

「そうですね。エイナさんが知りたいのはどこからでしょうか？…いえ、坊ちやまの生い立ち全てを説明した方がいいですね。」

「え？あ、はい。そうですね(というか、この人半年前…いえ最近までにはいなかったよね?)」

「ああ、私のことでしたらこれから言うことに含めますので、ご心配いりません。」

「(読まれている!?) わ、わかりました…。」

そして、私は坊ちやまが生まれてから現在に至るまでについてを、話しました。

休憩を挟みながら数時間後、簡潔に丁寧に説明しました。

目の前のエイナさんは机に突っ伏していました。

「半年間だけなのに…情報が…多すぎるよお…濃すぎるよお…。」

「同感です…。でもリリに会う前のベル様のこと、初めて聞きました！」

「春姫もです。なるほど、そうだったんですね！」

「せ、整理させて下さい…。べ、ベル君いえ団長は「ベル君と言った方が、坊ちやまは喜びますよ」…。ベル君は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の系譜を持ち、神ゼウスによつて14年間育てられ…。半年前に神ゼウスが育児放棄したことでオラリオへやってきた…。間もなく「ロキ・ファミリア」の「剣姫」アイズ・ヴァレンシュタインに一目惚れをしたことで「憧憬一途」が発現し、そのため急成長した…。そしてアーデ氏…：ミノタウロス…：18階層の神災…：「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯…：「イシュタル・ファミリア」との騒動…：『ラキア』との騒動…：異端児騒動…：遠征…：深層そしてジャガーノート…：クノツソスでの戦い…：神フレイヤとの魅了騒動…：「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の魔導人形の解放…：そしてベル君のアビリティとスキルですか…。」

ほう、なかなかやりますね。

さすが、ギルドの事務処理を半分回していたくらいの有能さですね。

「お見事です。あの情報量からここまで整理するとはやりますね。」

「あ、い、いえ。そのくらいなら皆、当たり前では…。」

「すみません。当事者のリリでも途中で整理できませんでした。」

「春姫もです。最初で躓いてしまいました。」

「エイナさん、貴女はオラリオでも上位に入るほどの事務処理及び情報整理能力が非常に高いです。自信を持って下さい。」

「……メイさんにそう言われると嬉しいですよ。」

自信がついてきたようで何よりです。

「その貴女にお願いしたいのは、「ヘステティア・ファミリア」の事務処理や財務経理などです。」

「え？あ、はい。あの…私今日入団したばかりなのですが…。」

「ほう？他に漏れるかもしれない？なら、先程の日誌を「わかりましたっ！喜んでお引き受けしますっ！」はい。引き受けてくれて嬉しいですよ。」

「これで多少はリリさんも楽になるでしょう。」

「ただ、アーデ氏は「リリと呼んで下さい」リリさんはその仕事を担当しているのでは…。」

「ええ、エイナ様の言う通り、リリは確かにその仕事を担当していました。ですが、戦略などがリリの専門です。戦略に集中したいのでエイナ様に担当していただきたいのです。」

「わかりました。ただ、確認などで連携を取る必要がありますので、その時はお願ひします。」

「はいっ！よろしくお願ひしますっ！」

リリさんとエイナさんが手を組めば、幅が広くなりますね。

もちろん、春姫さんもですよ。

さて本題に入りましょうか。

「エイナ・チュール。」

「は、はいっ!」

「貴女は坊ちやま、ベル・クラネルに身も心も魂も全て捧げる気はありますか?」

「…日誌のことは別にして、私はベル君が…大好き。彼の事を愛しています…。彼と共に手を携えて歩いていきたい…。私、エイナ・チュールはベル君に全て捧げます。」

「はい、ありがとうございます。リリさんと春姫さんも同様ですので、仲良くして下さいね。そしてエイナさんも明日の夜担当してもらいます。」

「…あの…その…ベル君が…お、襲つてきたら…。」

「その心配はございません。坊ちやまは深層の帰還以来、浅い眠りがずっと続いています。それを克服するには再び深層へ潜るしかありません。なので、今は私が作成した特製ドリンクで深い眠りに落ちていきます。ですが、確実にするために貴女たちに添い寝をしていただきます。」

「そ、そうですか。リリさん、春姫さんよろしくお願いいたします。」

「はい、こちらこそ。」「よろしくお願いたします。」

これで、3人ですね。滑り出しは好調ですね。

や、ん…。

第54話 愚者、号泣。

私は愚者。

これでも800年生きている。

かつて、『賢者の石』を作ったことがある。

その私が…。

メイドの前で椅子に座らせている。

「ふふふ、久しぶりですね。愚者。15年ぶりでしょうか？」

「…ああ、そうだな。」

「いけませんね。無断侵入して盗み聞きするなんて『賢者』の名が泣きますよ?」

「…ああ、そうだな。」

「おや、さつきから同じ返事しかしてませんか? 言語機能まで失ってしまわれたんですか?」

どうして…どうして…。

【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】がいるんだあああああ!

「一言いいかい…、私は盗み聞きする気はなかったんだ…。」

「なら、一言かければよかったですように。」

「貴女が…お前が…！私を有無言わさず拘束して、この部屋に転がしただろうが！しかも透明化させて！」

「それが何か？」

「……………」

このメイド！本当に変わらないっ…！

私がこのメイドと知り合ったのは数百年前…。

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】がいた時からの長い付き合いだ…。

15年前に自ら封印したのを知った時、ホツとしたような寂しいような気持ちだったな…。

「時間が押ししてましたので、それに説明が省けましたでしょうか？」

「…内容が濃すぎて困っている…。」

「……………わかります（この方が『アルテナ』の賢者…ギルドの【幽霊】、そして神ウラノス様の側近）。」

私は現状の報告をしようと思い、【ヘステイア・ファミリア】ホームへ訪問した。フェンスを越えようとしたら、いきなり拘束させられ、猿轡をかませ、透明化させて、この部屋の隅に転がせられた。

エイナ・チュールの面談から始まり：現在に至る。

ベル・クラネルが男神の置き土産とウラノスから聞いていたが、置き土産どころじゃない！

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜をもつ者なんて聞いてないぞ！

【イシユタル・ファミリア】騒動の中心にあつたのがベル・クラネルなんて、神ヘルメスからも聞いてないぞ！

あの神、黙っていたな！

本当に殴ってやる！骨だけど。

本当に濃い半年だな…。

彼はそれが当たり前だと受け止めている…。

彼がある意味心配だ…。

しかも…【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の魔導人形を2体解き放つなんて…。

そしてその2体ともベル・クラネルに絶対の忠誠を誓っているとのこと…。

その時点でこの戦争遊戯、勝っているのではないか？

「聞いていいかい…？」

「いいですよ。私たちの目的ですか？」

「お見通しか…（相変わらずいやな奴だな…）。何の目的だ…？もう勝っているのではないか？」

「賢者であろう者がわかりませんか？ああ、骸骨だから脳がないのですね。仕方ありません。わかりやすく教えて差し上げましょう。」

『うわあ…愚者様に喧嘩売ってますよ…。』

『しかも、あんなに怒っている愚者様、初めて見ます…。』

『ウラノス様に長年仕えてきた側近を、顎で使っている…。』

くそっ！昔からそいつはそうだった！

「この戦争遊戯は布石です。ダンジョン制覇と黒竜討伐のために。」

「!?…そうか。だからここまで用意周到なのだ…。」

「ええ、それに愚者。何故ギルドは「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」を制御できないのです。そこまで無能とは思いませんでした。」

「……………仕方がないだろう。ウラノスは神フレイヤと神ロキが、男神と女神ほどの信用を置いていないんだ。お前なら分かるだろう？」

「はあ……………神ウラノスもあの元バカ主神と同様、役立たずですね。神ウラノスに言うておきなさい。『このメイとセバスは坊ちやま第一。救界なぞ、知ったことか。坊ちやまのやりたいこと全て叶えるのが私たちの望み。そのついでにやってあげるのだからあ

りがたく思え。だから邪魔するな。邪魔したら滅ぼす。」とそう伝えときなさい。」

『…ウ、ウラノス様に…。』

『怖いです…。』

『…私、辞めてよかった…。ミイシャにも辞めるよう薦めたほうがいいかな?』

返す言葉もない…。

「ここ数ヶ月、ベル・クラネルに任せっぱなしだ。

「あと、あの豚は何をしているのです?」

「ウラノスも流石に見過ごせなくなり全財産没収した…。1000億ヴァリスある。」

「せ、1000億ヴァリスっ!」

「あのギルド長…本当にっ…。」

「あわわわ…。」

「そして、それを「ヘスティア・ファミリア」へ渡すようにとのことだ。」

「「なっ!」」

「その程度ですか? 足りませんね。」

「「「へっ!」」」

何故だ? 十分に足りるだろうが!?

「ダンジョン制覇と黒竜討伐のための資金には程遠いです。」

「し、しかしな。」

「あの豚は、私の計算が正しければ…あと1000億ヴァリスをどこかに隠しているはずですよ。」

「…「な、何だってーっ!?!」」

そんなバカな!?!全部探したはずだよ!

「…愚者。あの豚は『アルテナ』で収納魔道具をこっそりと数点購入していました。15年前に私が把握しています。」

「!?!何か物が多いなと思ったが…、そういうことか。分かった。私が…「不要です。」は…?」

「貴方は少々抜けているところがあります。異端児のことといい、クノツソスのことといい…本当に無様です。魔道具を専念して作ることをお勧めしますよ。」

「それができたらそうしてる!だが、周りがそうしてくれないんだあつ!?!特にウラノス、神ヘルメスはああつ!」

(…わかる、わかるわ…。ギルドで働いていた私もそうなのだから…)

『酒場でぐだ巻いている人を想像してしまいました。』

『私もです…。』

「愚者、あなたの本業は何ですか?」

「魔導士であり…魔道具作製者だ…。」

「なら、それに専念しなさい。今は〔ヘスティア・ファミリア〕の地盤硬めですが、私たちも協力しましょう。神ウラノスに『震えて待て』と伝えなさい。」

「……………（ウラノス、すまない）。そうだな、そうした方が良さそうだ…。」

彼らが動くなら一安心だ。私も本業へ戻れるか……………。

よっしゃあああああ！

「それで、目的はわかったがそれにはどうするかは、考えてあるのか？」

「まず、坊ちやまを中心としたオラリオ連合を作ります。」

「ええっ！ベル君を!？」「何だと!？」

「坊ちやまは既にオラリオにとって中心的存在になっています。そして今回の神フレイヤのおかげでさらに注目されています。坊ちやまを中心とすればダンジョン制覇と黒竜討伐も容易になるでしょう。」

「…なるほど、一理ある。異端児もベル・クラネル第一となっている。そして今回でベル・クラネルに注目が集まっている。そういう事か…。」

（ベル君…半年でよくここまで…。…ギルドを辞めてよかった!）

「わかった。君の提案を飲もう。私は魔道具作成に集中しよう。」

「神ウラノスに、エイナさんと同じく退職届をぶつけなさい。そして魔道具作成に集中

して、坊ちやまのために役立てなさい。神ウラノスと豚は私たちがやりましょう。」

「ははは、そうするよ。……神ヘルメスはもう会ったか?」

「昨晚、罪を精算して釘を刺し、首輪をつけました。」

「そうか……もう会ったのか。」

「……ざまあみろ! その様子を見てみたかったな……。」

「精算!?! 釘!?! 首輪!?!」

「こんつ!?!」

「春姫様、エイナ様……後で説明します。」

「エイナ・チュール……。」

「あ、はいっ!」

「ロイマンの暴挙、すまなかった。本当は君を戻したかったが、先程までの話を聞いてそんな気はなくなつたよ。」

「……愚者様、申し訳ありません。私はベル君に一生ついていくと決めましたので。」

「そうか……君たちが羨ましいよ、本当に。」

「若いつて、いいなあ……。」

「1000億ヴァリスはどうする?」

「この地下に金庫室がありましたので、そちらへお願いします。愚者様。」
「わかった。後で届けよう。…メイ。」

「何ですか？」

「セバスは…何してる？」

「【ミアハ・ファミリア】と【ディアンケヒト・ファミリア】の取り込みと坊ちやまの訓練です。」

「ええっ！ 【ディアンケヒト・ファミリア】も!？」

「うわあ…本当にオラリオ連合を作るんですね…。」

「【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】が可哀想に思ってきました…。」
全くだ。この2人がいれば十分だろうに。」

ベル・クラネルの手で決着をつけさせて、オラリオ連合を作りやすいようにしているわけか。

なら私は魔道具を作りまくって、ベル・クラネルの役に立てるよう専念しなければな。
「そうか…私はウラノスのところへ戻って、お前の言葉を伝えて工房に引きこもろう。用があればそつちから来い。」

「言われなくても行きますよ。ご心配なく。」

「そうか、来たら茶くらいは入れてやる。」

「ええ。15年間の話も聞きたいですね。では…賢者。」

「ああ、【最強侍従】。ではな。」

久々に会って、スツキリした。

ベル・クラネル…、君には本当に感謝しかない。

異端児だけでなく、私の孤独も救ってくれたのだから。

さて、ウラノスヘメイの言葉を伝えると共に、エイナ・チユールと同じく退職届をぶつけてくるか。

……………ロイマン、合掌。

第55話 受付嬢、安堵。

私は今、「ヘステイア・ファミリア」のホームにある執務室にいる。

メイド長…、メイさんから命じられた事務と経理をしている。

「リリさん、ここの計算おかしくない？」

「え？そんな馬鹿な…、あつ！この領収書が抜けていました！すみません、リリの失態です。」

仕方がないです。

リリさんは「ヘステイア・ファミリア」の事務・経理・管理・戦略全てを担ったので、漏れるのは当然なのだから。

それに、リリさんも戦略などの整理をしながら私と雑談するくらい、優秀。

うん、頼れる同僚…うん先輩がいて、よりやりがいが出るよ！

「いえ、見つかってよかったです。そのまま出していたら懲罰として罰金を払わざるを得なかったでしょうね。」

「ひえっ…。エイナ様が入団してくれて本当によかったです…。入団早々、事務と経理をお願いして申し訳ありません。」

「レベラーの私が、今できるのはこれだけですし、得意分野ですから気にしないで下さい。それに、ギルドで仕事やっていた時と比べたら、雲泥の差です。ええ、本当に。」

あそこに比べれば、すつとごく楽！しかも、ベル君と同じファミリアだし！

いうことないよね！

「そ、そうですか。心強いです…：ギルドは本当にもつたないことをしましたね。」

「もつたないはともかく、私ありきで回っていたのは、組織的によくないのでいい機会です。」

うん、上司もミイシャも先輩たちも私ばかりに頼つてたからね！

いい機会だよ！

「エイナ様は、ベル様のアドバイザーを担当されたことにより、ダンジョンの上層、中層、下層、深層のことについてはご存知ですよね？」

「うん。参考書はギルドにあるけど、全て頭の中に入っているから、少しは力になれると思うよ。」

「私以外の皆様はそこまで詳しくないので、本当に頼りになります！遠征の時に、アドバイスをいただけると本当にありがたいです！ええ、本当に！」

リリさん…、苦勞しているんだなあ…。

ベル君も覚えようと必死になっているけど、まだまだだよな。

それも…半年でレベル5…もう第一級冒険者になったんだなあ…。

それにあの発展アビリティとスキル…。

うわーうわー。

「あの…エイナ様。話は変わりますが…。」

「(はっ!) うん、何かかな?」

「ベル様を好きになったのは、いつからでしょうか?」

「ぶぼっ! ……異端児のあの黒いミノタウロス…ううんアステリオスさんとの戦いの後にダンジョンへ落ちた時に…です…。」

「ああ、あの時ですか。納得です。リリは…ベル様を罠にはめた後に「ソーマ・ファミリア」の人たちに罠をかけられて…ベル様に助けられた時です…。エイナ様もご存知としますが、リリは冒険者から物や金を奪ってきた、小人族です。あの人に助けられてリリはベル様を、そしてリリ自身を裏切りたくない、そう決めました。」

「リリさん…わかりました。あの…花屋の老夫婦にはもう会いましょうか? あの方々も深く後悔されているそうです。」

「…そこまでご存知でしたか。ええ、遠征後に偶然会いました、姿形を変えてですが。それなりのケジメをつけました。…ですが、いつかは会いに行こうかと思っています。」

リリさんは、もう「ソーマ・ファミリア」の構成員じゃない。

あのファミリアから報復があると思ったんだけど、「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯以降に、神ソーマと共に変わっていったみたいだし、大丈夫みたいね。

そして、リリさんも春姫さんも、ベルくんを好き…ううん愛しているんだなあ…。

私も負けないくらい愛してるんだからね！

うわーうわー！

「…思いましたが、メイ様は規格外ですね…。」

「ええ…、最近解放されたばかりなのに、ベル君の記憶を読み取るだけで全て把握するなんて…。しかも、あの油断できない神ヘルメスや「ヘルメス・ファミリア」を脅し、神ウラノス様の側近である愚者様まで懇意で顎で使うなんて…。」

「しかも、実力もレベル7上位ですものね…。」

（逆らってはいけない！）

私とリリさんは、その時心が1つになった。

うん、仲良くやっていけそうだ。

ミイシャも誘おうかな…。

「あ、あの。お茶とお菓子をお持ちしました。ご休憩いたしませんか？」

あ、春姫さんだ。

元「イシユタル・ファミリア」の構成員であり…レベル・ブーストの妖術を持つ人…。

やはり、あの時の「イシュタル・ファミリア」の疑惑は事実だったんだ！

まさか歓楽街を襲った「フレイヤ・ファミリア」の原因がベル君だったなんて…。

あれ程、歓楽街へ行くなと行つたのに！もう！

…でも燃えてしまったから、まあ今後は大丈夫だよな。

あつたとしても、私たちが絶対に行かせないからね！

「はい、こちらはメイ様が焼いたケーキだそうです。エイナ様。」

「うん、ありがとう。うわあ…美味しそうだね。」

うん……うまい。

私の行きつけのケーキ屋より美味しい！

これだけでも入った甲斐があるよね！

やはりミイシヤも誘うべきだろうか…。

「本当に美味しいですね…。」

「ええ、命ちゃんより手際がよく、きれいでした。」

命…ヤマト・命。元【タケミカツチ・ファミリア】団員。

春姫さんと同郷と聞いているけどね。

今は【ミアハ・ファミリア】へ行つて、その後に【タケミカツチ・ファミリア】へ稽

古へ行っているらしい。

…思ったけど、このファミアリアは女性比率高くない？

ベル君を除けばヴェルフ・クロツゾさんもいるけど、朝一に部屋を出払って鍛冶屋へこもったと聞いたけど、まさか肩身が狭くなるのが嫌で逃げたわけじゃないよね？

今晚あたりに顔合わせするとメイさんが言ってたので、その時に自己紹介して仲良くしていかないと。

ベル君のためにも！

春姫さん…よく見ると美人だしスタイルいいよね…。

胸は…負けているかな？

リリさんも美人だし…。ライバルは多いけど仲良くやっていけるし大丈夫だよね。

私は…うん、負けてないね。

けど…。

「あの…先輩たちに聞きたいのですが…。」

「エイナ様、先輩はやめて下さい。一年も経ってないので…それに私達は『同志』なのですから。」

「そ、そうです。ベル様のためのハ、ハーレム同志です！」

「わ、わかりました。えつと…そ、そのハーレムは事実なのでしょうか？また、毎晩代わる代わる添い寝をすることも…。」

「…ええ、本当です。今日はリリの番です！」

「わ、私は昨晩いたしました。本当にぐっすりと眠っておられました。つい、春姫もつられてしまい寝てしまいました。あんな幸福感は初めてです。はうう〜。」

「そ、そうですか。明日は私の番ですか…。下着を新調した方がいいかな…。」

「…エイナ様。私達は“同志”です。恥ずかしながら…その、そちらの方面は詳しくないので、いい服屋などを教えていただけませんかでしょうか？」

「は、春姫もです！」

「うん！いい服屋もカフェもいいところを知ってるよ。今度一緒に行きましょう！」

「はいっ！」

うん、本当に仲良くやれそうだ。

「仲良くやっていることで、何よりです。」

「ひっ！」「こんっ！」「きゃあっ！」

び、びっくりした。

心配がないなんて…底が見えない人…。

「そろそろ、『ヘルメス・ファミリア』の人たちが来る頃です。準備をしておいて下さい。」

「は、はい。」

【ヘルメス・ファミリア】…のアイシャ・ベルカ、レベル4で【麗傑】。

そして、ローリエさん…二つ名は…うーん。

思い出せない。ギルドの本があればなあ。

彼女らに何の用だろう？ま、まさか彼女たちもベル君のハーレムに…？
何人入れる気なんだろう…。

第56話 麗傑、屈服。

本つ当に頭にくる！

あのクソ野郎どもがっ！

「アイシヤ、落ち着きなさい。」

「あたしは落ち着いてるよっ！それに何でローリエ、あんたまで来るんだ？」

「さあ、ヘルメス様と団長の命令なので（ああ！ベルきゆんのいるところに行ける！嬉し
い！）」

「…そうかい。けど、あたしは「ヘステイア・ファミリア」に何が何でも加勢するよ！あ
んたらがいくらとめようともね。」

「アイシヤ、我々は中立を守らなければいけません。それを忘れないように（「フレイヤ・
ファミリア」の奴らめ！許せん！よくも私のベルきゆんを！私も加勢する！）」

「…おかしいねえ？あんたからのその言葉、本当と思えないが気のせいかねえ？」

「気のせいです。」

「いや、でも」

「気のせいです。」

「そ、そうかい。」

…何だい、こいつは。

そんなのどうでもいい、とにかく【ヘステイア・ファミリア】には加勢しなきゃいけない！

春姫を、あいつを傷つけて忘れさせたあの美神は許せん！

ああ、もう！

イシユタル様といい、神フレイヤといい、本当に何で美の神はろくなやつがないんだ！

…：それに、【ヘステイア・ファミリア】と関係のあるあたしはともかく、何故ローリエなんだ？

こいつは【ヘステイア・ファミリア】との接点はないはずだぞ？

一時おかしかったところはあるが…。

それに…：昨晚、神ヘルメスとアスファイが帰ってきた時の様子がおかしかったな。まるで、とんでもない化け物にあつて怯えてたかのようにだった。

…何があつたんだ…。

「よう、春姫。元気だったか？」

「あ、はい！元氣です！アイシヤ様は…大丈夫でございますでしょうか？」

「見てわかるだろ？あたしのことより自分のことを心配しな。」

「あうっ。」

相変わらずでよかつたよ。

ただ…何だ？女の顔がちらちらと見えるのは気のせいかねえ？

坊やと交わったか？

いや…、まだ処女のはずだ。

「それで私たちを呼んだ用件は何でしょうか？（ベルきゅんはいないのか…。がっかりだ…。）」

「あ、はい。少々お待ち下さい。」

こいつ、ギルドの案内嬢の…確かエイナ・チュールといったか？

何故、ここにいるんだ？

「ちよつと待ちな。そのあんた、確かギルドの案内嬢だろ？何故ここにいるんだい？ギルドが口出してきたというのかい？」

「いいえ、ギルドはクビになりました。本日付けで「ヘステイア・ファミリア」に入団しました。今後共よろしく願います。」

「何だって!？」

「……そうですか。こちらこそよろしくお願いします（ずるい！ずるい！ベルきゆんのそばにいるなんて！私も改宗して「ハスティア・ファミリア」に入る！今晚にでもヘルメス様を脅しますか……）」

その頃、神ヘルメスは背筋に寒気が走り、キョロキョロして周囲を確認して怯えていたとのこと。

どういふことだい？

こいつは確か坊やに気があつたな……。

それか？いや、まさかな……。

「お二方、大変おまたせいたしました。」

「!?」

こいつ!?いつの間に背後に!?気づかなかつたぞ!

「これは大変驚かせて申し訳ありません。「ヘルメス・ファミリア」のアイシャ・ベルカ様、そしてローリエ様。「ハスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイドのメイと申します。お見知りおきを。」

「専属メイドだつて!?おい！チビスケ、春姫、どうなっているんだい！」

「……そうですか（……何……だと!?せ、専属メイド……。なんて羨ましい！私もベルきゆんの専属メイドになりたい!）」

「お静かに願います。アイシヤ様。」

「!?いつの間にあたしの喉元にナイフを!?

このメイド…強い!

レベル5…いや6…まさか7!?

「落ち着いてください。アイシヤ(何!何!このメイド、強くない!?)というかベルきゆんの…専属メイドに何してやがんだああああ!アイシヤ!落ち着きやがれええ!。」

「…あたしが悪かったよ。説明してくれるかい?」

降参しかないだろ、何だよ。このメイドは…。

「さて、説明いたしましょう。今、この場にいる者は団長ベル・クラネルに深い関わりのある者だけです。」

「…ちよつと待ちな。あたしとそいつらはわかる。けど、このローリエは違うだろ?」

「そうですか?では、ローリエ様は退出していただいても結構ですよ。残念ですが、団長…ベル・クラネルに近づける唯一の機会なのですが。」

「……………関わりはあります……………(え!?何で!このメイドが私とベルきゆんのことを知っているの!?どうして!?で、でも…この機会が最後なんて…そんなの嫌だ!)」

「はあ!?!おい、ローリエ!あたしは聞いていないぞ!」

「……………(うるさいよ!アイシヤは黙ってて!)」

何でローリエがあの坊やと接点があるんだ!?

どうなっているんだい!

「退出しないのですね。ああ、その前にこの場で申し上げるとは口外無用でお願いします。でなければ、先程のように喉を搔つ捌かれて人知れず倒れることになります。」

「ひっ!」

(一)、こいつ…本気だ!?)

「………わかつたよ。あんたが只者ではないことはね。それにあんた、長くいるようだが見ない顔だね。何者だい? おい、春姫! チビスケ! 説明しな!」

「…アイシヤ様。メイ様の説明を聞いてあげて下さい。」

「…アイシヤ様、ローリエ様にとつては悪い話ではありません。」

チツ…あたしがいない間に何があつたんだが…。

「いいぜ、説明しなよ。メイドさん。」

「では、説明いたしましたよう。」

そして、あたしは聞いた。

このメイドが何者かで、あの坊やが最強と最恐の系譜を持つ唯一のやつであることに…。

第57話 応援妖精、豹変。

「……昨晚、ヘルメス様たちが怯えて帰ってきたのは、あんたの仕業か？」

「心外ですね。久々にお会いしましたので歓談をしただけですよ。」

（あれが……歓談……？嘘ですよね……？）

ヘルメス様などどうでもいいです。

さっさと送還されてしまえ！

私はベルきゆんに会える最後の機会を逃したくないのだから！

「そうかい。それであたしたちに何をしろと？いや、その前にローリエとあの坊やの関わりを教えてほしいものだね？」

は？何でよ!?

「……貴女には関わりがないことです（黙れよ！脳筋アマゾネスめ!）」

「冷たいね。同じファミアリアじゃないか？」

「……しつこいですよ。アイシャ（何故、お前に言わなきやならないんだー!）」

「ああ、私は「ゼウス・ファミアリア」の系譜を持つものなら、記憶全て読み取れます。なので、貴女と坊ちやまの馴れ初めは全て存じておりますよ。ローリエ様。」

「!? (何…だと…!? ベルキゆんの記憶を…何て羨ましいことを…)」

「それを踏まえてお答えしましょう。ただ、貴女の思うようではないことは前もって伝えます。」

「…………… (え? 思うようなことではない? どういうこと?)」

そしてベルキゆんの私の出会いが、「フレイヤ・ファミア」の【白妖の魔杖】ヘディン・セルランドによる特訓のために、利用されたこと知った…。

「…………… 以上となります。アイシヤ様、ご理解できましたでしょうか?」

「…………… ああ、よくわかったよ。…その……すまないね……ローリエ。皆には黙つといてやるよ。」

『うわあ……、リリはまだそこまで聞いていませんでしたが、【白妖の魔杖】はえげつないことをしますね。』

『ベル君に、女性慣れをさせるためといえ怪物贈呈までやるなんて…。ギルドが知ったら懲罰ものよ。』

『…ローリエ様、おいたわしや…。シヨックでしょうね、あれが作られた救出劇ということに…。』

それがどうした?

そんなの関係ない。

あれは私とベルきゆんの運命の出会いなのだ！

【白妖の魔杖】には感謝しかない！贈り物をしてもいいくらいだ！

その頃、【白妖の魔杖】は神フレイヤの八つ当たりでボロボロになりながら、背筋に寒気が走ったのこと。

メガネのズレを直しながら、冷や汗をかいていた。

「…ロ、ローリエ？」

「ふ、ふふふ。それがどうしましたか？ええ、それが本当にどうしましたか？（何でもありませんよ。どうしましたか？アイシヤ？）」

「「ひっー！」」

「私とベルきゆんの出会いがそうであろうとも……、ベルきゆんへの愛はそんなものでは崩れされはしなああああい！（ええ、そういうことがありました。それが何か？）」

「「ひいっ!？」」

「ちよ、ちよつと待ちなよ！ローリエ！落ち着きなよ！」

「ローリエ様、ローリエ様、本音と建前が逆になっておりますよ。」

「はっ!?!……………殺してくれ…。」

もうダメだ……。

ベルきゅんに知られたら…死ぬしかない…。

「ローリエ様。このメイ、いたく感動いたしました。」

「「は？」」

「……………え？」

「真実を知つてもなお、坊ちやまへの愛を貫くとは素晴らしいです。」

「……………貴女は…わかつてくれるのか…？」

神は……………ここにいたのか……………。

「ええ。そういう貴女を見込んでお願いがあるのです。坊ちやまのために。」

「べ、ベルきゅんのためにだど!? な、何だつてする!」

「「「うわあ……………」」」

「そうだ! 何でもする!」

たとえ、ヘルメス様を殺せと言われたらする!

その頃、神ヘルメスは背筋に先程より強い寒気が走つてうずくまってしまい、そばにいたアスファイがかなり戸惑つて、介抱せざるを得なかつたとのこと。

「アイシヤ様。口外無用でよろしいですね?」

「あ、ああ。もちろんさ。」

「では……………坊ちやまのスキルを…」

「メイ様！それは！」

「駄目です！他のファミリアには！」

「リリさん、エイナさん、お黙りなさい。この方たちは“同志”なのです。」

「!?」

「同志……？坊やのスキルを知りたいけどさ、同志って何のことさね？」

「アイシャ・ベルカ、貴女はベル・クラネルに身も心も捧げる気はありますか？」

「!?私はある！全て捧げたっていい！」

「……あの坊やには深い恩がある。その春姫をあのイシユタル様から、救い出しただけじゃない。この私も、イシユタル様の魅了の呪いに囚われていたんだ。それをあの坊やが、解放してくれたんだ。」

「何……だと……？ふざけんな！」

「アイシャああ！そんな羨ましいことをおお！」

「捧げるつたつて？そんなの、とつくに捧げているさ。あの坊やがあたしを負かしたときからね。それはあんたも見ているだろう？だから、…異端児や遠征へついていったのさ。そしてこれからも、何があるうともね。」

「何を！かっこつけているんですか！貴女は！」

「それは……、私の台詞だあああああ！」

「なるほど、よくわかりました。では、ローリエ様…貴女は…」

「捧げる！何でも、全て捧げる！ベルきゅんのためなら、あのヘルメスの命でも持つてきますー！」

「……………ローリエ、お前……………」

「……………怖い。」

「素晴らしい回答です。ですが、神ヘルメスはあれでも使い道はあります。そのまま泳がせておきなさい。」

「承知しました！メイ様！」

「では、坊ちやまの発展アビリティとスキルですが…」

「そして、メイ様からベルきゅんの発展アビリティ『魅了』とスキルの『兎囀女達』について教えていただいた。」

第58話 応援妖精、狂喜。

「もうランクアップしたのか…。あつという間に追い越されちまったよ。何さね、あたしのトラウマの魅了とそのスキルは。反則じゃないのかい？ねえ、元ギルドの受付嬢さん？」

「私もそう思います。ですが、ベル君のことですから今更でしょう。」

「アイシヤ様。ここは達観したほうが楽になりますよ。」

反則？何を言っている、アイシヤ。

これは我々とベルきゅんのためのスキルじゃないか！

「さて、アイシヤ様。戦争遊戯ですが、貴女は春姫さんの護衛を終始やっていただきたいのです。」

「…レベル7上位のあんたと同格のセバスという人が出張るなら、あたしはいらないんじゃないのか？」

「いいえ、アイシヤ様。この戦争遊戯は、布石なのです。ダンジョン制覇と黒竜討伐のため。」

「!?…なるほどね。だからあたしたちの手で決着をつけないや意味がないということ

ね。いいよ、引き受けたよ。」

「そして、ローリエ様。貴女には…」

「戦争遊戯に参加しろと仰せなのですね！「いいえ、違います。」な、何ですと！」

何故！アイシヤは参加できて私が参加できないんですか！

そんなの…そんなの…。

『急に泣き始めましたよ。この人…。』

『ローリエさんって…こういう方だったのですか…。』

『…あたしも驚いている…。』

『春姫は、もうついていきません…。』

「泣かないでください、ローリエ様。貴女しかできないことをお願いしたいのです。」

「…え…私でしか…できないこと…!?な、何でしょうか!」

「坊ちやまのための、応援組織を作っていただけなのです。」

「…は…」

「応援…組織…ですか?」

「ええ、先程【白妖の魔杖】によって故意に助けられたと言いましたね? 貴女だけでは無いのです。他にも多くいます。」

「…え? 他にも?」

「私の…他にも…?」

「ええ、ですが坊ちやまが人前に出たら、あの発展アビリティが発動しますと暴徒が出かねません。その暴徒が坊ちやまに被害を及ぼすとなると…」

「なるほど! その暴徒共を殲滅するためにですね!」
「違います。」
「え…?」

「違う…?」

「で、では、一体何を…」

「その暴徒をまとめてほしいのです。そう、坊ちやまのための応援組織として。」

「あつー!」

「ええ、特に貴女と同じように助けられた方々は、今の坊ちやまの魅了にかかりやすいでしょう。ですので、前もってその方たちをまとめて組織として作り上げてほしいのです。お願いできますでしょうか?」

「おお…我らと同じ」
「同志」を組織として…。ありがとうございます、メイ様。この素晴らしい任務を与えていただき感謝いたします。」

私と同じ”同志”が他にもいたとは…、集めなければいけない!

ベルきゆんのためにも!

『リリは、あの方と同じ”同志”にされたくないのですが…。』

『リリさん、私もです…。』

『それ以前に、あたしはあいつと同じファミリアであることが不安だよ…。』

『アイシャ様……………。』

「ローリエ様、お引き受けいただき感謝します。なお、計画書はこちらにまとめております。それを「ヘルメス・ファミリア」の事業の1つとして立ち上げて下さい。なお、ローリエ様が中心でなければなりません。」

おお…、計画書までも…。

「…まで私達”同志”のために…。」

『いつの間に…作成したのですか…。』

『…あたし、「ヘステイア・ファミリア」へ改宗したくなってきたよ…。』

『…アイシャさん…この前、改宗したばかりじゃないですか…。』

『…あと1年ですね…。』

「承知いたしました！あ、でも…あのヘルメス様とアスフィがこれについて承諾してくれるかどうか…。」

「ご心配いりません。この計画書をお見せする前に、こちらの手紙を先に見せてあげてください。それだけで承諾してくれるはずです。」

「おお……………至れり尽くせりですね…。ありがとうございます。我が神よ…。」

ああ…私の神はここにいましたか…。

『!?アイシャ様!アイシャ様!ローリエ様の主神はヘルメス様ですよね!』

『もう、あいつの中ではあのメイドが神だろうね…。』

『うわあ……。』

『あの手紙つて…そういうことですよね…。?』

「ああ、ローリエ様。2つお願いしたいことがあるのですが。」

「何でも申しつけてくださいませ!」

「ヘルメス・ファミリア」にルルネ・ルーイという「泥犬」がいますね?」

「あの駄犬が何をしたのでしょうか?」命令とあらば、抹殺してまいります!」

「いいいえ。実はその「泥犬」が、半年前に坊ちやまのそちらへの入団試験を勝手に行つて追い出し、そして今もなお坊ちやまのレベルが上だというのに、見下しているからです。…本当に困っています。」

何……だと…!?

あの…あの…駄犬がああああ!?

「ちよ…あんだ、そんなこと言つたら…「ユルサン…コロス…ルルネ…」ひいつ!」

「ローリエ様、落ち着いて下さい。「ヘルメス・ファミリア」の方針上、アイシャ様がこちら側につくなら、あちら側にも誰かを派遣しなければいけません。その方をルルネ様にしていただきたいのです。確か…「ロキ・ファミリア」と懇意でしたよね?」

「フーツ…フーツ…すみません、取り乱しました。なるほど、そういうことですか。確かにあの駄犬は「ロキ・ファミリア」と親しくしていました。でも、いいのでしょうか？ 敵に塩を送るようなものですが…。」

「ローリエ様、お気遣いいただきありがとうございます。でもこちらについては大丈夫です。そう、坊ちやまの勝利にはローリエ様にかかっております。」

「はっ！このローリエ、命に代えても任務を達成してみせます！」

「……。」

「そして、もう一つは…大丈夫かもしれませんが…。」

「何でも申し付けてくださいませ！」

「ありがとうございます。神ヘルメスと団長アスファイ姫には釘をさしておいたのですが、念の為「ヘルメス・ファミリア」が怪しい動きがないよう、見張っていただきたいのです。そして怪しい動きがあるようなら私、メイまで連絡いただきたいのです」

「承知いたしました。監視して報告いたします！」

アスファイ姫…？

まあ、いい。我が神、そしてベルきゆんに何かをするようなら、許さん！

それが、同じファミリアであろうとも、同胞であろうともだ！

『あの……よろしいのでしょうか？アイシヤ様…。』

『もう、あたしは知らないよ……ああ、知らないとも……。聞かなかったことにするし見なかつたことにするよ……。』

『うわあ……。ファミリア内にスパイ……。しかもこのような形で……。』

『……怖いです……。お二方とも……。ぶるぶる……。』

「ローリエ様、重ね重ねありますがどうぞごさいます。ああ、これはせめてもののお礼です。」

「いえ！……？こちらは何でしょうか？タオル……？シャツ？スプーン？パンツ？」

「坊ちやまの使用済みの「ありがとうございますっ！家宝にいたしますっ！」いえ、必要になりましたら言って下さい。いつでも提供します。」

おお……ベルきゅんの……。

ああ……やはり私の神はここにいました……。

『どおりで、ベル様の洗濯物が少ないと感じました……。』

『あのメイド……そこまでやるのか……。』

（ベル君の……はっ！ダメダメ！）

『その手がありましたか……メイ様……恐るべしですね……。』

「このローリエ！メイ様からの任務を、命に代えても果たしてみますっ！」

「ローリエ様、何度も言いますが坊ちやまの勝利は、貴女にかかっています。お願いいたしますね。」

「はっ！ベルきゅん……いえ、あの御方の勝利のために、このローリエ全てを捧げます！私はこの計画書に目を通して、あのバカ神に許可を取ってきます！これで失礼します！」

「「「……………」」」」

よっしやー！とうとう、あの御方のために命を賭ける時がきた！

さっそくホームの自室へ戻って目を通さねば！

そして私と同じ”同志”を探し出し、あの御方のための応援組織を立ち上げる！

そう…【ベル・クラネル応援組織】を！

第59話 麗傑、消沈。

あたしは凹んでいる。

「……………」

「ア、アイシャ様…大丈夫でございますでしょうか？」

「【ゼウス・ファミリア】が1000年の間、最強と言われた理由がわかった気がします…。」

「ギルドの資料にメイさんのことが載せてなかったのは、何故でしょう…。」

そんなのでもいい。

あの坊やが最強と最恐を受け継いでいるのも、どうでもいい。

いや、どうでもはよくないけどさっきのと比べれば、どうでもいい。

あたしの…所属するファミリアが、どうもこうもダメなファミリアなのは何故だい！

【イシュタル・ファミリア】も問題ありだが、【ヘルメス・ファミリア】はまだマシだと思っただよ！

だが…あのローリエを目にすると、【イシュタル・ファミリア】と違う方向でダメなファミリアじゃないか！

神ヘルメスといいルルネといい…、アスフィやファルガーなどマシなやつはいるがダメじゃないか！

神ヘステイアに、坊やには時が来るまで手を出さないと誓ってでも、改宗すべきだったかねえ…。

いやいや、春姫の『殺生石』のルート監視のためだ。そうだ、うん。

気を取り直そう…。

「さて、ローリエさんへの仕掛けは完了しました。後は勝手にやってくれるでしょう。失敗したらそれはそれで困りませんし。」

「…あんた…、えげつないことをするねえ…。一応あたし、あいつと同じファミアみりアだけだ…。」

「何か問題でも？春姫さんの「殺生石」ルート監視も兼ねて、ちょうどいいではないでしょうか。1つが2，3つに増えただけです。」

「!?あたしもやるのかい!?冗談じゃないよ!」

『『殺生石』ルートだけでなく「ヘルメス・ファミリア」の監視は最初からでしょう。』

くそつ、お見通しかい！

ダメだ、こいつには勝てない。

いや、逆らっちゃいけない。

フリユネや【猛者】と戦ったほうがまだマシだよ！

「ああ、エイナさん。ギルドの資料に載せていないのは当然です。たかが一使用人のことをいちいち記載しません。まあ、載せても力づくでもみ消しますが。」

「……一使用人ですか……？」

「…力づくつて…冗談に聞こえないから怖いです…。」

「ギルド長は、もちろんメイさんをご存知ですよね…。」

【ゼウス・ファミリア】か…あたしがまだ【イシユタル・ファミリア】にいなかった時だな。

ただ、先輩たちからは主神を含めて、お得意様と言つてたな。

そして、一晩で100人斬り達成したというやつもいたね…。

ありや、フカシじゃないかい？

「ああ、あの豚ですか。あの豚が新入りの時はあれほどの豚にはなつてなかったのですが。」

「ええ？そんなんですか？」

「ええ、ほんの中太りでした。常に胃薬を携帯していました。私達がいなくなつてから怠惰に支配されたようですね。いけませんね、本当に。」

（胃薬つて…もしかしてメイさんとセバスさんのせいじゃ…。）

あの豚のことなぞ、どうでもいいよ！

「それよりあんたに聞きたいんだが、さっきの”同僚”…ローリエとは別のやつさ。それはあの坊やのハーレムと考えてもいいんだね？」

「はい、そうなります。」

「そうか。じゃあ、あの坊やを食ってもいいんだね？」

「「!?」」

食う理由が正当化できれば、いいさ。

それにもう食べ頃だしねえ…。

「それは構いませんよ。」

「「ええっ!?!」」

「そうかい、じゃあ。今晚あたりでも…」

「ですが、それは現時点でやめたほうがいいとおすすめますよ。」

へえ? 何だい? そんなにあの坊やが大切かい?

このメイドさんの弱みをつけそうだねえ…。

「何故だい? 理由を聞いていいかい?」

「そうですね。貴女たちにも、いつかは言わなければならぬと思ってきました、いい機会です。いいでしょう、坊ちやまが貴女たちに欲情せず襲うことがない理由を。」

「「「え?」」」

「どういふことだい?」

「簡単なことです。私も知った時、最初は信じられませんでした。坊ちやまは…まだ来ていません。」

「「「は?」」」

「来ていない?」

「ますます、わけわからないよ!」

「わかりませんか? 貴女たち女性に月経が来ると同じように、男性も精通が来ます。」

「「「あつ!」」」

「嘘だろ…そういや、あの坊やはまだ14歳だったっけね。」

「来ててもおかしくはないと思ってたが…、まだなのかい…。」

「なるほど…道理で…。」

「そうか、そういやベルくんはまだ14歳だったよね…。」

「そうだったんですね!」

「だから、貴女が坊ちやまを襲っても、お互い恥をかくだけです。」

「……………あたしが悪かったよ。知らなかったんだ。教えてくれて感謝するよ…。」

「当分お預けか…。」

「坊ちやまが貴女によつて、元〔イシユタル・ファミリア〕ホームへ連れ込まれた時にかつてた、と思つていたのですが。」

「そりや、どういう意味…あつ!？」

「そうか!あの時点で気づくべきだったんだ。」

〔イシユタル・ファミリア〕ホーム内には常にお香が立ち込めている。

興奮と性欲を増進させるような匂いが。

あの坊やを連れ込んだところは、その匂いが一番濃いとこらなんだ。

なのに…、あの坊やは平然としていた。

あの時点で気づくべきだったんだ。フリユネのせいで忘れていたよ!

くそっ!

「それに、坊ちやまの初体験はアイシヤさんをお願いしようと思つています。」

「!?!」

「!?へえ…あんた話がわかるじゃないか?いいよ、引き受けるよ。」

「ええ…耐えればの話ですが。」

「耐えれば…?どういう意味だい?」

「私としては非常に恥ずかしいことですが、所属していた〔ゼウス・ファミリア〕は歓楽街のお得意様と聞いていますでしようか?」

「あたしがいた時は追放した後だったからね。先輩たちからは聞いているよ。」

「その中で……一晩で1000人斬り達成した」というのは聞いたことはありませんでしょうか？」

「「ひゃ、1000人？」」

「……聞いたことあるよ。あれ、フカシじゃなかったのかい？」

「そうであれば、どんなによかったことか。私は「ゼウス・ファミリア」の系譜を持つ者なら、記憶を読み取ることができません。非常に残念ですが、事実です。」

「そうかい……。それと、あの坊やと何の関係があるんだい？」

「坊ちやまの父親が、その本人なのです。」

「「!?!」」

「現実ではありませんが、記憶を見る限り坊ちやまが現在生き延びていることから、その困った子の生命力などを受け継いでいる可能性が非常に高いです。そして、特に精通直後は更に強くなるでしょう。それは貴女もおわかりですよね？」

嘘だろ……あのフカシと違って「一晩で1000人斬り達成した奴」の子が坊やなのか……。

事実だとしたら……あたし一人じゃ耐えられないかもねえ……。

……怖くなってきたよ。

「アイシャ様！リリは非常に本当に残念ですが、ベル様の初めてはお譲りいたします！」
「アイシャさん！」「イシユタル・ファミリア」の戦闘娼婦の腕の見せどころですよ！」
「アイシャ様…、春姫は残念ながらお力になれそうもありません。申し訳ございません。」

「あ、あんたら！あんたたちもやるんだよ！」

こいつら、あたしを見捨てやがった！

もし、あの坊やが「一晩で100人斬り達成した奴」の子だとしたら…やばい！

「アイシャさん、ご心配なく。坊ちやまの初めての時は貴女一人だけではありません。」

「…そうかい。それは本当に助かるよ。それで誰だい？」

「それは戦争遊戯後にわかります。まあ、私の見るところ坊ちやまの精通が来るのは、まだまだ先です。おそらく数年後あたりでしょうか。」

「…その時が来るまで、準備を整えておくよ…。」

…ダンジョン制覇と黒竜討伐が終わった後でも、更なる試練があるのか…。

まあ、悪いことじゃないけどね。

ハーレムの人数は、どのくらい増えるのかねえ…。

二桁ぐらいいかないかと、あたしたちの体が持たないよ。

「ああ、そうです。アイシャさん、お聞きしたいことが…」

このメイドは、絶対に敵へ回しちやいけないね！
サミラたちに強く言っておこう…。

聞きたいことって？

…何だって？何故、そんなことを聞く？

すごく嫌な予感がするよ…。

第60話 蠱毒王、見附。

今、私は数ヶ月前に戦ったクノツソスにいる。

メイ…様によつてすぐに案内されて、ここにいる。

そして、目の前に「白兔の脚」がいる。

「あの、バーチェさん。」

「…何でしょうか、団長。」

「【カーリー・ファミリア】ってどんなところででしょうか？」

「…聞いたことがないのか…いえ、ないのでですか？」

「はい、僕はオラリオへ来て半年しかないので…勉強不足ですみません！」

変なやつだ…。

とても、あの大鐘楼の鐘の音を出したやつとは思えない。

第一級冒険者には見えないな…。

「…殺し合い…です…。」

「えっ？」

「…小さい頃から殺し合いをしてきて…生き残ったのが戦士として認められるところ…」

です…。」

そして、私は一昨日までの「カーリー・ファミリア」について話をした。昨日のことについてはメイ様から口止めされているからな。

「…そうだったのですか。辛いことを聞いてすみません。」

「…いや…気にしてない…。」

「でも、バーチェさんはずっと泣いてきたのではないのでしょうか？」
「!？」

何故…何故…わかる!？」

今日、初めて会ったばかりだぞ！

「バーチェさんが…顔を隠すのは自分の泣き顔を見せたくないだけでなく、相手が自分の手によって死ぬのを見たくないのもあるのではないのでしょうか？」

「…何故…わかる…のですか…?」

「だって…バーチェさん、【カーリー・ファミリア】のことを語る時、目が哀しい色をしていましたので。」

!?! 私としたことが…。

「そして…お姉さんのアルガナさんが怖いと言ってましたが…、お姉さんのことが好き

だから殺したくないのではないのでしょうか？」

馬鹿な……こいつ、心が読めるのか……？」

いや、そんな様子はない……。

「だから……ティオナさんとティオネさんが殺し合いを止めてファミリアを出るといふことを話した時、バーチェさんはホツとしたような寂しいような感じがありました。」

……こいつは……。

「バーチェさんは、独りになるのが怖かったのではないでそうか？」

……この人は……。

「それだけでないです。バーチェさんがティオナさんに英雄譚を語る時、すごく楽しそうな目をしていました。」

……。

「それを聞いて、僕は……。不謹慎ですが羨ましいと思いました。」

「……何故……だ……。」

「僕は半年前まで、お祖父ちゃんと一緒に二人だけで暮らしてきました。そしてお祖父ちゃんが死んだ後、僕の世界は僕だけになったという気持ちにかられました。その気持ちから逃げるためにオラリオへ来たんです。」

「……。」

「でも、バーチエさんは殺し合いをしたと言つても、バーチエさんの周りには強いお姉さんがいて：ファミリアの家族がいる…。それが：羨ましいんです。僕はそういう気持ちになつたことがない。オラリオへ来る前はただ生きる屍になっていました。

バーチエさんはただ失いたくなく…、独りになりたくなく…【カーリー・ファミリア】の皆を生かすために…強くなりつづけるしかなかった…。それが羨ましいんです。あ！す、すみません。何か勝手なことを言っちゃつて。」

「…いえ…それは…当たっています…。私は独りになるのが…怖かつたと思います…。」
この人と話していると…、何故だろう。

この血塗られた心が…清められていくようで、清々しく感じる…。

このような気持ちになつたのは、生まれて初めてだ。

ティオナと話すのと、また違う気持ちだ。

「…団長は…何故…強くなりたいのですか…？」

「最初は、ある人を目標にしました…でも、このオラリオで多くの人達と話し…戦つたり…自分の無力さに泣いたり…多くの出来事がありました。でも…僕の気持ちは…お祖父ちゃんが居たときからずっと変わらない。全てを救う…英雄になりたい。それだけです。」

ああ…この人は私と違う…。

私は怖くて、強くなるしかなかった。

けど、この人は全てを失わないために…救うために、強くなっていつている…。
テイオナがアルゴノウトというのもわかる…。

「坊ちやま、おまたせいたしました。」

「あ、セバス。」「?!（いつの間に…）」

セバス…メイ様と同格の人…。

?誰だ、この女は。

「バーチェ嬢、こちらは『ディアンケヒト・ファミリア』団長のアミッド・テアナサーレ
といます。【戦場の聖女】とも呼ばれております。」

「アミッドです…。よろしく願います。ベルさん、左腕の調子はどうですか?」

「は、はい。絶好調です!」

……………何故、怖がる…?

「では、模擬戦を始めますか。坊ちやま、バーチェ嬢。準備はよろしいでしょうか?」
いけない、集中しなくては。

「はい。」「ああ。」

「…では…、始め!」

強い。

この人は強い。

そして、速い！

「はあああああつー！」

レベル5になったばかりなのに、レベル6の私と同格だと!?

この半年でどんな戦いをしてきたんだ!?

くっ！このままでは…。

【食い殺せ】

【ヴェルグス】

「なっ！付与魔法？ぐっ！ど、毒!?!ぐうううっ！」

これで近づけまい…。

「ファイアボルト！」

なっ！無詠唱魔法だと！

だが…このヴェルグスまでは貫けまい。

このまま押させてもらう！

「…ならー！」

な、何だと！そのまま、私のヴェルグスの中に突っ込んでくるだと！

「わ、わかっているのか！毒だぞ！」

「それが…どうしたんですか！そのくらい…受け止めてやらなくて、何が団長なんですか！その程度もできずに、英雄なんて…なれないっ！」

「！」

「これなら…届く！」

なっ！更に毒の中に突っ込んで…直接私に…

「ファイアボルト！」

「がっ!？」

…ああ、この人は…この方は私と違う…。

心も…強いんだ…。

だがっ！

「私…私は、あの闘国で生き抜いてレベル6になったんだ!…団長、本気で行かせてもらう！」

「はいっ！」

そして私と団長は…私のヴェルグスの、毒の中で殴り合った。

拳、蹴り、肘、膝…武器を使わず、

私のヴェルグスの中でお互い殴り合った。

ただ、団長は私の毒に蝕まれたままでダメージを負い続けている。

そして…

「はああああつー！」

「がふっ…まだだ！」

耐えた！これで！終わりだ！

「ファイアボルトおおお！」

「がはああああつー！」

そのままの体勢で…、ゼロ距離で無詠唱魔法だと！

そんなことをしたら、団長の手も…。

「はああはああ、うっ…。」

焼け焦げてボロボロじゃないですか…。

体のあちこちが、私の毒で焼け爛れているんじゃないですか…。

ああ、でも闘国と違い清々しい気持ちだ。

もつと、この方と戦いたい。

自分の目指すものの何かが見つきりそうだ。

「…っ…まだ、まだです。団長…。」

「はあはあ…、はい。やりましょう。」

「そこま…「失礼しました。どうぞ、続けてください。」…。」

なんだ？あの女！邪魔をするな！

私も…団長も！まだ！やれる！

【食い殺せ】

【ヴェルグス】

「団長…これが私の最大出力です。」

リン リン

何だ？この音は…だが、心地いい。

「…なら、僕もです。」

リン リン

溜めているのか…？

だが、そうはさせない！

「はあああああつ！」

私のヴェルグスを団長の腹へ叩きこんだ！

とつた！

リン　リン

…ああ、やはり耐えたか…。

「あああああつー！」

カウンターの要領で貯めた右腕を、先程やられた箇所と同じところへ打ち込まれた。

「がつー……………」

ああ、痛いなあ。

だが、不思議な気持ちだ。

強い…。

貴方の近くにいれば何かわかるのだろうか？

いや、もうわかっていた。

あの大鐘楼の音を聞いた時点で。

私は求めていた。

カーリーでもなく、アルガナでもなく、闘国でもなく、そしてテイオナでもない。

私が寄り添うことができる、強い雄に。

アルガナの気持ちだが、今になってよくわかる。

メイ様に感謝しなければならぬ。

あの人は、恐らくあの晩私の気持ちに気づいていた。

改宗してよかった。

ヘステイア様もカーリーよりまともで、いい神だ。

団長：貴方とヘステイア様に、死ぬまですつと仕えます。

あちらから駆けつける、銀髪の女が見える。

もう少しこの痛みに浸りたいが：仕方がない。

早く癒やして、団長と戦い：語り合いたい。

第61話 悲観者、蒼白。

命ちゃんがセバスさんと別れて、「タケミカツチ・ファミリア」へ稽古に行ってしばらくしてミアハ様が戻った。

「む、店にいるのはカサンドラか。」

「は、はい。そうです。あの……どうしたのでしょうか？」

「?ああ、いや、ちよつとな。他の者はまだ戻っていないか。」

団長のナーザさんとダフネちゃんは、ポーションの素材を買いにいくためあちこち買い物へでかけている。

「ああ、カサンドラ。今更だが、ベルのことをもつと気にかけてやってくれないか？」

へ?ええええつ!な、何でベベルさんのことが?

「いや、ちよつとな……うん。ベルも苦労しているみたいでな、少し……いやかなり甘やかしてやってくれ。」

「あの……何でそのような事を？」

「……………」 「ひいつ!」

怖い!今のミアハ様、初めて見る!怖い!

「あ、すまん……。【ダイアンケイト・ファミリア】で知ったばかりなのでな。……このくらいならいいか。」

「???」

「……ベルは半年前、ゼ……お祖父さんを失ったことは知っているか？」

「え、ええ。以前、ベルさんから聞いたことがあります。」

うん、聞いている。

話しているベルさんは悲しそうだった。

「その……お祖父さんはな両親を失ったベルを14年間育ててきたのだが、それがひどい！」

ひいっ！

「碌なものしか食わせず！碌なことしか教えず！その上、半年前にわざと死んだふりをしてベルの育児放棄をしたんだ！」

「え、ええええっ！そんなの……ひどすぎますっ！」

「ああ、ひどいだろう？だから……ベルを甘やかしてやってくれないか？」

はいっ！わかりましたっ！甘やかしますっ！

あの時のリヴィラのように……ふふっ。

そして、またしばらくして。セバスさんがやってきた。

「申し訳ございません。神ミアハ様、カサンドラ嬢を貸していただけませんでしょうか？」

「む、セバスカ。どうしたのだ？」

「思ったより、特訓が激しすぎてアミッド嬢の回復が追いつかなくなっています。」

「……………何をやっておるのだ。ああ、いやそうだったな。わかった。店番は私がしよう。カサンドラ、セバスについてあげてくれ。ベルの治療のためだ。」

「べ、ベルさんの治療？」

そして、私はセバスさんへついていって、身を隠したままクノツソスへ入っていった。

な、ななな何ですか…。

目の前の、心臓に悪い戦いは。

ひいつ！血がこんなにこっちまで！

「セバスさん！これ以上はやりすぎです！死にます！」

「まだです。せいぜい死の十歩手前ですな。」

…この人、何を言っているの…？

そ、それよりベルさんがあんなに焼け爛れて…。

ジュワツ…。

え？ええええええ？ととと溶けた…。

え…これ…毒？

は、はやく癒やさないと…

「カサンドラ嬢、しばらくお待ちを。あの方々はまだ語り合いたいようですよ。」

……………お互い、無口なんですが…。

…それに、あの女の人…誰ですか…？

「あちらの方は、バーチェ・カリフ様です。「カーリー・ファミリア」から我が「ヘステイア・ファミリア」へ改宗した方です。レベルは6です。」

「……………」

ごめんなさい。言っていることがわかりません…。

それに、ベルさんはレベル4では？

「ああ、坊ちやまは昨日ランクアップして、レベル5になりました。」

え？ええええええええっ！

わ、私とダフネちゃんはその深層からの帰還で、やっとレベル3になったというのに。ま、また差を開かれちゃった…。

え？坊ちやま？

「大丈夫ですよ。坊ちやまはそのような事を気になさるお方ではありません。」

「…あの…さつきから気になっているのですが、『悲観者』はずっと無口です…。何故わかるのでしょうか？」

!?

そ、そそそそそそうだ。

私の考えていることが…何でわかるの？

それに…何で【戦場の聖女】がここにいるんですか？

「執事の嗜みでございます。お二方、気になさらないで下さい。アミッド嬢はカサンドラ嬢と同じく坊ちやまたちの治療のためでございます。」

「…私の知っている執事と全然違うような気がします…。あ、よろしくお願いします。」

【ディアンケヒト・ファミリア】団長のアミッド・テアサナーレです。」

「同感です…。よ、よろしくお願いします。【ミアハ・ファミリア】団員のカサンドラ・イリオンです。」

セバスさんって…ベルさんを坊ちやまと呼ぶし…何者なの？

そして、ベルさんとバーチェ…さんがお互い蹴りを顔に入れた後に…お互い倒れた。

「ふむ…そこまですな。では、アミッド嬢はバーチェ嬢を、カサンドラ嬢は坊ちやまを
お願いします。」

「ああ、もう！カサンドラさん、ベルさんをできるだけ治してください！後で私がおつつ

「け治します！」

「は、はははい！わかりました！」

ベルさんを治療しようとしたが…、うっ…これはひどい。

内臓まで毒に侵されている…。

な、治してみせます！まずは解毒魔法を…。

【……………（詠唱中）……………】

【キュア・エフィアルティス！】

よ、よし。毒は何とか…。そ、そして

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕（かいな）。届かぬ我が言の葉の

代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソール・ライト】

ううっ…だめ…追いつかないっ！

「カサンドラさん！すみません、遅くなりました！…これは半分くらい治療されている

！毒もほぼ解毒されている…。けど…バーチエさんより状況がひどい！」

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。葉奏（やくそう）をここに。三百と六十と五の調べ。

癒しの暦は万物を救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操斂。呪いは彼方に、

光の枢機へ。聖想の名をもって私が癒す】

【ディア・フラーテル】

うわあ…凄い。

私の魔法より強力…。

うう…それに比べて…。

「カサンドラ嬢。気落ちすることはございません。カサンドラ嬢も優秀なヒーラーでございます。自信をお持ちなさってください。」

「…ふう…、何とか凌げました…。セバスさんの言う通りです。これほどの回復魔法は【ディアンケヒト・ファミリア】で私以外はそうそういません。自信をお持ちなさってください。」

……うん。

【戦場の聖女】にそう言われるなら…。

頑張ろう、ベルさんのために！

第62話 悲観者、恐怖。

「ええ。これほどの回復魔法でしたら明日からお願いすることになります。困難な状況を治すことによつて、カサンドラ嬢の経験値および偉業が結構溜まりますので、悪い話ではないと思いますよ。」

あ、はい。

…ええ？あ、明日から…えええええつ！

「私としては即やめてほしいのですが…」「それはできませんな」…ですよね。」

「まあ、明日からの模擬戦は私とメイ、そしてバーチエ嬢です。毒魔法が使えるのは僥倖ですね。バーチエ嬢はシメとしてやっていただきますので、カサンドラ嬢の魔法が活躍されるいい機会でございます。」

「シメ？」

「坊ちやま、バーチエ嬢、動けますかな？」

「あ…う…く…な、何とか…。」…大丈夫だ…団長の方が深手と思いますが…。」

治療したばかりなのに、二人とも動ける…すごい。

バーチエさんはレベル6だからわかるけど…、ベルさんはレベル5になりたてだから

まだ動きが鈍い…。

「では、バーチエ嬢。先程の付与魔法を出してくれますかな？」

「?…:わかった…:…」

【食い殺せ】

【ヴェルグス】

「…:これでいいか？」

「はい。坊ちやま、すみません。」

ガシッ カパッ

「え?な、何を!?う、動けない!ちよ、セバス!口をあががが…:」

「ちよつと、何をなさってるのですか!」

「えええええつ!」

セバスさんがベルさんを羽交い締めにし、口を開けさせています。

な、何するんですか…:?

「バーチエ嬢、坊ちやまの口へめがけてヴェルグスを注いで下さい。」

「「は?」「あひゃ?」

「毒を飲ませて、発展アピリテイの『耐異常』を上げるためです。」

「そんなの!許可できません!」

「ひいひいっ！」

「私が許可するのです。さあ、バーチエ嬢。」

「…団長、すまない。」

「あー！ガボガボガボガボガボ…うぐうううっ！」

「なっ！カ、カサンドラさん！魔法を！」

「は、はいいいっ「待ちなさい。まだです。」…。」

「こ、殺す気ですかっ！」

「坊ちやま！毒を乗り越える気で耐えるのです！それは坊ちやまの母方のファミリアも越えた道です。」

「!!うううううっ！」

「な、な、な、何をなさっているのですかああああつ！あなたはあああつ！」

「……………【カーリー・ファミリア】でもやらないぞ…それは…………。」

「あ、あわわわわわ…。」

こ、怖すぎる…。この人…。

数分後経つても、ベルさんはもがき苦しんでいました…。

「うがああああああつ！あああああつ！」

ダメ…見ていられないくらい…ダメ…！

アミッドさんは回復魔法を唱えようとしてましたが、セバスさんによつて口を塞がれていました。

振りほどこうとしてもビクともしません…。

私も隙あらば唱えようとしたら、セバスさんに睨まれました…。

怖い…。

「坊ちやま、この程度を越えられないようでは…【猛者】を倒すことも、『異端児』を救うことも、黒竜も倒すことも…そして坊ちやまの目指す『英雄』になれることもできませんぞ。」

!!!う、う、う、うあああああつー!

えええつー!こ、克服しようとしてるうううつ!

「無駄だ……私のヴェルグスはその程度では耐えられないはずだ……このままでは死ぬぞ……。」

「むー!むむむー!（放して!放してください!）」

「……【劍姫】さえ振り向かせることもできませんよ……。」

今の何て言ったの…?

聞かなければいけないような…。

!!!!!!……あああああつー………………。」

あ、あ、あ、ああああ……

し、死んじやった……？

「ふむ……気絶しただけですな。どうやら乗り越えたようです。出だしは上々ですな。」

え？こ、克服できたの？

「……あ、ありえない……。私のヴェルグスを……克服した……？……そこまでしなければならぬのか……。」

「ぶはっ……。ぜー、ぜー、ぜー。セ、セバスさんっ！あ、あ、貴方は何を考えているのですかああっ！」

ひいひいっ！

怖い！アミッドさん、怖い！

「何を？坊ちやまを強くするためですが、何か？」

「何かではありませんっ！こんなの特訓じゃないっ！拷問じゃないですかっ！」

「ああ、カサンドラ嬢。「は、はひっ！」念の為、坊ちやまに魔法をかけてくれませんか？」「わ、わかりましたっ！」

【……………（詠唱中）……………】

【キュア・エフィアルティス】

「……………ふむ、大丈夫のようですな。」

「セバスさんっ！私の話をっ！聞いていますかっ！」

「聞いておりますよ。強くするために決まっていますんじやないですか。」

「こんなのっ！【ロキ・ファミア】でもやりませんよっ！」

「だから、彼らはダメなのです。」

「「!?」」

え…？【ロキ・ファミア】がダメ…？

「限界を乗り越えようとせず、地道に進む方法は確かに安全です。ですが、その程度です。だから、あの『三首領』はレベル6止まりなのです。ところでパーチエ嬢、貴方の闘国は殺し合いをしてきたとのことですね？常に同格の相手ではなかったですか？」

「…………その通りだ。よく知っているな…。」

「ええ、研究しましたので。ダンジョンもなしでそこまで至るのは、なかなかできることではありません。」

「それとっ！これとっ！何の関係がっ！あるのですかっ！」

ひいひいっ！怖いっ！

アミッドさんって怒るとそうなるんですね！

団長から聞いたのと、全然違いますっ！

「強くなるため、その一心です。パーチエ嬢、そうですね？」

「……………そうだ。」

「死んだら、元も子もないじゃないですかっ！」

「そうです。だから、貴方を連れてきたじゃないですか。」

「……………私の魔法は生かすためです。苦しませるためじゃありませんっ！」

「承知しております。」

「…何故…何故…そこまでするのですか…………。貴方たちが出れば戦争遊戯は簡単に済ませるのでしようっ！」

「……………そうだな。私もそう思う…。」

えええっ！「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」の戦争遊戯に簡単に勝てるううっ？

第63話 聖女、驚愕。

「…「フレイヤ・ファミリア」も「ロキ・ファミリア」も都市の安寧に貢献してきました。決して怠けているわけではありません…。」

「ええ、そうですね。ですが、7年前の大抗争で彼らはわかっていたはずですが、自分たちが弱いということに。なのにこの7年間で1つもランクアップしていません。特に「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」の幹部たちは。」

「……………」

アイズさんやテイオナさんたちは着実に強くなっている。

…でも、セバスさんの言う通り7年前時点の第一級冒険者たちは、ランクアップしていない…。

「私から見ますと、呆れて何も言えません。その点、坊ちやまはどうです？ パーチエ嬢、坊ちやまと戦って弱いと感じましたか？」

「……………いいや、全然だ。ヴェルグスを使わなければ、明らかにレベル6である私が負けていた。私のヴェルグスの領域に体ごと踏み込み、素手で立ち向かうのはテイオナ以外いなかった。しかしテイオナはレベル6。団長はレベル5になったばかりだ。比較にな

らん。」

あの戦いは異常です…。

彼は数日前まではレベル4と聞いていました。そして今日レベル5と知り、レベル6のバーチエさんと互角、いえそれ以上の戦いを繰り広げていました。

今の彼は、レベル6に相当しています。

「カサンドラ嬢、「は、はひっ！」「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯前と戦争遊戯中の坊ちやまの動きは同じでしたか？」

「…全然違います。明らかに違います。戦争遊戯の数日前は、元団長…いえヒュアキントスさんに負けていました。たつたの…たつた数日でレベル3を超えるなんてありえるはずがなかった…。でも、私の妨害があつてもベルさんはヒュアキントスさんの魔法に耐え、勝ちました…。」

あの戦争遊戯は信じられませんでした。

1000人程の構成員を持つ「アポロン・ファミリア」に、攻城戦で短期決戦を挑み…勝利しました。

特に、最後の【太陽の寵童】との一騎打ちでは、思わず手に汗を握ってしまいました。やはり、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持つ者と言ったところでしょうか。

才能があるんでしょね…。

「何だと…数日でレベル差を覆したのか…。」

「さて、アミッド嬢。坊ちやまは、この短期間で神時代の例を見ないほど、強くなっています。ですが、多くの第一級冒険者を育ててきた私が、はつきり言います。坊ちやまは才能が全くありません。むしろ、「フレイヤ・ファミリア」そして「ロキ・ファミリア」の幹部たちの方が、まだ才能豊富です。」

「は?」「何だと?」「ええっ!」

あ、あ、あれほどの強さで…、短期間でここまで昇ったというのに…さ、才能が全くない…。

「ヘラ・ファミリア」の…最恐の眷属を育ててきた、セバスさんがそこまで言うなんて…。

じゃ、じゃあ何で!

「簡単なことです。『想い』です。バーチエ嬢、心優しい貴方が過酷な闘国で生き抜くには、殺されたくない」という気持ちでしょう?」

「…その通りです（こいつも、お見通しか…。メイ様と同じく逆らつてはいけないな…。）」

「坊ちやまはただ、”強くなりたい”の一心です。全てを救いたい、絶対に見捨てない、諦めたくない…など多く思っていますが、根はただ一つ”強くなりたい”のみです。」

「…何かわかるような気がします。数時間だけです。団長と戦って気持ちが伝わってきました。私と話したい、どんな私でも受け止めたい、私と家族でいたいという気持ちが。」

「…わ、私も遠征時で、ベルさんに多く救われてきました。誰も信じてくれない言葉を、ただ一人ベルさんは信じてくれました。ベルさんがいるから、私はここにいます！」

想いなら、私だって…。

「アミッド嬢、貴方の気持ちはわかります。全てを治したい、癒やしたいという想いがあるでしょう。それと同じことです。」

「だからといって、耐異常を上げるために毒物を飲ませるなんて…。」

「私がかつて所属していたファミアと、同じことをしているだけです。坊ちやまが”強くなりたい”と想っているなら、それに応えないといけないでしょう。それができないければ何が執事ですか。」

「…執事ってすごいな…。」

「…多分、違うと思います…。」

「…絶対に、私の知っている執事と違います。」

絶対に違う！

貴方のような執事が、いてたまるものですかっ！

「改めて、戦争遊戯が始まるまでに治療をしていただけますかな？アミッド嬢、カサンドラ嬢。」

「…彼の想いに負けないくらい、私も”全てを癒やす”という気持ちがあります。何が何でも治し、絶対に死なせません！」

「…私も、私もベルさんを死なせたくない！絶対に治します！」

カサンドラさんも優秀な治療師ですから、ついてこられるでしょうね。

「…セバス…様。私はどうしたらいいのだろうか？」

「貴方は、生殺与奪権をメイに握られていますね。メイにいろいろと指導を仰げば、お姉さんであるアルガナを一蹴することができますよ。」

「…わかりました（あのアルガナを？…いや一蹴する前に、私が生きてられるかどうか…。団長、ヘステイア様、守って下さい…。）」

「ああ、ちょうどいい機会です。坊ちやまのこと、そして私が何者かをこの場でお教えしましょう。」

そしてセバスさんは、「白兔の脚」のこと、セバスさん…メイさんのことを語っていたきました。

魔導人形について驚くところはありましたが、先程と比べるとまだマシです。

「カサンドラ嬢、お願いがあります。坊ちやまを介抱しながら大通りなど目立つところを歩いて、坊ちやまを支えながら〔ヘスティア・ファミリア〕ホームへ寄って、そのまま泊まっていただけませんか？ どうか？ バーチエ嬢は人目を避けて帰って下さい。まだ知られるのは早いですからね。」

「ええっ！ あ、はい。わかりました（べ、ベルさんに触ってもいいということですよね？ や、やった！）」

「…承知しました。」

「私はアミッド嬢をお送りした後に、鍛冶場の増築依頼したいことがありますので〔ゴブニユ・ファミリア〕へ寄ります。アミッド嬢、明朝にお迎えへ参ります。」

「はい、わかりました…。」

かなり忙しいんですね…。戦争遊戯のルールもまだ決まっていけないのに…。

お得意様の〔ロキ・ファミリア〕へ忠告ぐらいはした方がいいのでしょうか？

「ああ、アミッド嬢。〔ロキ・ファミリア〕へ言ってもいいのですが、その場合報酬は提供しませんよ。」

!?

読まれている…。

敵に回したくありませんね、ええ本当に。

第64話 白兔、混乱。

「う……ん……。」

僕は一体……。

バーチエさんと模擬戦をしてたっけ……。

うん、そしてそのあと……えーと……。

だ……めだ。思い……出せない……。

何だろう、この頭の後ろの感触は……。

気持ちいい……。

それに……いい匂い……。

「あの……ベルさん……大丈夫でしょうか？」

え!?カサンドラさん!?

え? 膝枕?

わわわ、起きなきや!

ボヨン!

「むぐっ!」「あっ……!ん……。」

え?え?え?

何で僕はカサンドラさんに膝枕されているの!?

起きようとしたら柔らかいものが…。

?!?!

「あ、あの…ベルさん、お、落ち着いて下さいっ。」

ぼくは、こんらんしてしまった!

—————

ようやく落ち着いた僕はカサンドラさんに、すぐさま土下座した。

「すみません!カサンドラさん!本当にすみません!」

うう…恥ずかしい。

第一級冒険者になつたばかりなのに…。

「わ、私は気にしてませんっ!むしろ、嬉しいというか”兔を愛でる”という予言の通り
というか、とにかく立って下さい…。私が困ります…。」

「本当にすみませんでした!…つとと…」

立ち上がろうとしたら…、ふらついてしまった。

「べ、ベルさん!大丈夫ですか?」

カサンドラさんが支えてくれて、立つことができました。

「だ、大丈夫ですよ…あれ、おかしいなあ…。まともには立てないし歩けない…。」
バーチェさんの組手、そんなにきつかったのかなあ…。

そりゃ、あの毒はきつかったけど…。

「本来なら入院しなければならいんです！ですが、今のベルさんなら大丈夫、とセバスさんが言うものなので…。アミッドさんがすごく怒つて、とても怖かったです…。」

え…。アミッドさんが怒った…？

怖い！ベッドに縛られて怒られる！

その怒ったアミッドさんにセバスが…？

「そ、そうなんですか。その…セバスはアミッドさんに何かしましたでしょうか？」

何かしたら、謝らないと！

土下座しないと！

「い、いえ、淡々と答えていました。あの冷静なアミッドさんが怒鳴り散らしても、セバスさんは涼し気な表情で淡々と…。どちらも怖かったです…。」

セバス…すごい…。

あのアミッドさんに…。

「とりあえず、ベルさんは私と一緒に帰るようセバスさんに言われていますので…。か、帰りましょう。」

「あ、はい…。すみません。歩けるようになるまでお願いします…。」

カサンドラさんに支えながら…!?み、密着してる!?

当たってる! ナニカと言わなくても、当たっている!

そ、そこまでしなくても…、言わなくっちゃ!

「あの…カ、カサンドラさん!あの…当たっています!」

「だ、大丈夫です。そ、そうしないと歩けませんので…それに…そういうことをするのはベルさんだけです…。」

「~~~~!?!あああ、歩けるようになるまではお願いします!」

平常心だ、平常心。

あ、神様がこちらを睨んでいる光景が見える…。

「あの…カサンドラさん。」

「♪あ、はい。何でしょうか?」

「何も…この…目立つ大通りで歩かなくても…。」

今、僕たちはメインストリートの真ん中を歩いている。

めっちゃ目立っている!多くの人に見られている!

「セ、セバスさんの言いつけです…。あ、そこ危ないですよ。」

ふによん

「?!?!? あ…はい…すみません。」

平常心、平常心、平常心……。

うわあ…みんなにすごく見られている…。

「チツ、イチヤイチャしやがって」

「心配して損したぜ。」「やはりくたばれよ、鬼。」

しくしくしくしく……。

「あの…ベルさん?大丈夫ですか?」

「あ、はい。大丈夫です。…ちよつと心にクルものがあつて…。」

「だ、大丈夫ですか?!えつと胸のところですか?」

!?ムニユムニユ

「?!?!?」

!?平常心だ!平常心だ!平常心だ!

わざとやっつてないよね!?

「?」

あ、これ…素だ……。

あ、【ガネーシャ・ファミリア】の団長のシャクテイさんだ。

「こちらを見て呆れている…。」

「何をやっているんだ…【白兔の脚】は…。あんなにボロボロになって、相手はリオンか？いや、【ミアハ・ファミリア】の【悲観者】か…？」

「うう…、恥ずかしい…。」

「あ、師匠の超スパルタ教育で助けた冒険者のお姉さんだ。」

「くっ！私が代わりたい！」

「どっちを？」

「もちろん【悲観者】に決まってるじゃない！」

「私なら！介抱するフリをして…ぐふふふ…。」

「あんた…それ、犯罪よ…。」

「怖い！怖いよ！」

「それより召集に行かないと！」

「そうね！私たちの思いが叶うんですもの！」

「や、やっと着いた…。」

「こんなにホームは遠かったつけ…？」

「ん…、少しは…マシになったかな？」

「カサンドラさん、ありがとうございます。ここで…」
「いえ、セバスさんから泊まるように、と。」

ええっ!?!セバス、何を言っているの!?!
と、とにかくセバスに聞かないと!

ホームの扉を開けたら

「おかえりなさいませ…ご主人様。」

メイド服を着た、バーチエさんがいた。

幻でも見ているのかな…?

再びホームの扉を閉じて、もう一度開いた。

やっぱりメイド服のバーチエさんがいた!

ぼくはふたたび、こんらんしてしまった!

ホームの中に入って、リビングのソファに座ってしばらくして…

ぼくはしようきにかえった!

「あの…バーチエさん…、どうしてメイド服を着ているのでしょうか?」

「はい…ご主人様。メイド長の言いつけです…。」

メイーーーーー!

「はい、坊ちやま。何でしょうか?」

声に出してないのに、何でわかるの!?

そして、どこから現れたの!?

「メイドの嗜みです、坊ちやま。バーチエさん、そのくらいわかるようにして下さい。」

「…はい、わかりました(メイドって、すごいな…)」

メイドって、しゅごい…。

って、違う違う!

「ねえ、メイ。どうして、バーチエさんがメイド服を着ているの?」

「本人が望んだことでございます」「え?」「ギロリ!

「あ、はい。そ、その通りです(貴女が「やれ」と言っただんじやないか!とは言えない…)」

そうか、そうなんだ。それなら仕方がないね。

「ところで、坊ちやま。もう一人新入団員がいますので紹介しますね。」

バーチエさんでなく、他にもいるの!?

うう…:僕は団長失格だな…。

しつかりしなくつちや!

「入りなさい。」

「はい。」

え？ええええええええつ！

エイナさん!? どうして!?

ぼくはまた、ふたたびこんらんしてしまった!

ようやく、ぼくはしよきにかえった!

「ベル君、ううん。团长、と言ったほうがいいかな?」

团长: エイナさんから团长つて変な気分:。

僕としては今まで通りがいいかな:。

「え、いや、あの、な、慣れないので:。当分は今までの通りでお願いします:。」

「うん、わかったよ。ベル君（メイさんの言う通りだったな。）」

うん:。:。:。まだエイナさんからこういう呼び方が好きだな。

何でうちに入ろうとしたんだろう?。

あ:。:。この前の負い目からかな?

「あの:。:。、どうしてうちに入ったんですか? ギルドの方が収入も待遇もいいと思うのですが?」

「ギルドをクビになったから。」

「あ? えええええええつ!」

ぼくは、さらにまた、こんらんした！

第65話 白兔、眠気。

整理しよう。

バーチエさんと模擬戦した。

うん、わかる。

模擬戦の後にアミッドさんが怒った。

わからない。

模擬戦の後に何があつた？

わからない。

気絶したみたいで、カサンドラに膝枕してもらった。

何でかわからないけど、わかる。

柔らかい何かが顔に当たった。

わからない！わからない！わからないんだああ！

まともに立てないから、カサンドラさんに肩を貸してもらって帰った。

うん、わかる。

メインストーリーの真ん中をわざわざ通って帰った。

わからない。

途中で柔らかい何かが腕に当たったり胸に当たったり…。

わからない！わからない！わからないんだああ！

ホームについたら、バーチエさんがメイド服を着て迎えに来ていた。

わからない。

エイナさんが新入団員で、ギルドを辞めてきたとのこと。

わからない。

ダメだあああああ！

わからないいいいい！

ようやく落ち着いた…。

「ごめんなさい…。僕らのせい…。」

「ベル君、謝らないで。いずれ遅かれ早かれこうなっていたの。今のギルドには前々から不満に思っていたから今回はいきつけになったの。」

「…でも。」

「…ベルくんは私が入ったら、迷惑…？」

違う！違う！違う！

「いいえ！そんなことないです！エイナさんが入ってくれたら、僕嬉しいです！色々知っていて凄く頼りにしていました！その…入ってくれたらいいな…と思ったこともありました…。」

うん、本当に…。困ったことなど色々と相談して…嬉しかった。

入ってくれて、すごく嬉しい！

「うん、ありがとう！じゃあ、改めてこれからも末永くよろしくね！」

「はい！」

そのために…、今回の戦争遊戯で頑張ろう！

あれ？さっきの言葉に何か含めてなかった？

ダメだ…疲れててわからない…。

「でね、私はメイさんより事務処理と財務管理を任せられているの。ということ、団長の決済印が必要になっている書類がこちらです。」

ドサドサドサドサ！

……………ほえ？コレ、何？

「ベルくん、リリさんに全部任せたらダメだよ。団長なんだからちゃんと目を通しておかないと。戦争遊戯のための特訓も大事だけど、こつちも大事なんだよ。危うく脱税となる項目がいくつかあったよ。それは後でまとめてギルドへ提出するね。」

嘘でしょ……。…今までやったことない…。

「ベル様、申し訳ありませんでした。私が入団した時から事務処理や財務管理をしていました。ベル様、ヘスティア様がやるべき仕事、戦略などもリリが全て請け負っていました。」

「……………ごめん…リリ。僕がしつかりしてなかったから…。」

「いえ、その時のベル様はダンジョン巡りや色々とありましたから「うぐつー」、リリがしばらくやってその後にベル様へ引き継ぐつもりでした。ですが、今日エイナ様が入って、事務処理と財務管理を担当していただきました。」

え？今日入ったばかりなのに、把握したの？

エイナさん！すごい！

「エイナ様はすごいですよ！ほんの数時間でここ数ヶ月かかった仕事を全部処理してもらいました！ベル様にも目を通した方がいい、と助言を受けました。なので、今後はベル様もやっていただきます。」

「う、うん…わかった。」

「ですが、今は戦争遊戯の準備でそれどころではないと分かっています。なのでメイ様の助言を受け、戦争遊戯後にまとめてやっていただきます。それまでメイ様とエイナ様とリリで回していきます。よろしいでしょうか？」

「うん、その時はよろしくね！メイ、リリ、エイナさん！」

不甲斐ないなあ…。本当に戦争遊戯が終わったら、取り掛からないと！

「もちろんでございませす。坊ちやま。」

「うん、しばらくは私たちに任せてね！」

「リリたちにお任せ下さい！」

エイナさんが入ってくれて……。本当によかった！

いつかお返しをしないといけないよね！

「ところで、坊ちやま。加減はいかがでしようか？」

「うん…何か特訓がきつくて体の調子が悪いみたい…。」

『…あの毒をたっぷりと飲んでたら、普通死んでもおかしくないのに…。ベルさん…すいこ…。』

『そうだな…私のヴェルグスを耐えきるとは、団長はすごいなあ…。』

『!?ど、毒!?な、何があつたんですか！カサンドラ様！』

『…後でお話します…。あの…セバスさんから泊まるようにと言われていましたが、いいのでしょうか…?』

『…【悲観者】もですか…。』

『また、増えました…。』

「なるほど…。今日はもう風呂へ入って寝た方がいいと思います。」

「そうだね…。戦争遊戯まで本調子であればいいけど。」

「ああ、坊ちやま。今日はいつもの特製ドリンクで一段と濃いものにしておきました。」

「あ、いつものドリンクだね？わかった、ありがとう。」

グビグビグビグビ……。はあ。

ふー、このドリンクは効くなあ…。

……。もし、「ゼウス・ファミリア」の彼らがいたら、

「うわ…。あいつ。あのドリンクの特濃を一気飲みしてるぜ…。」

「やべえよ…。やべえよ…。」

とつぶやいていただろう…。

『あの…。あの飲み物は何ですか…？』

『リリさん、あれ大丈夫なんですか？』

『耐異常を通過するものらしいですよ…。でも効果は抜群みたいです。そうですね？春

姫様？』

『は、はい。揺すつても軽く叩いても起きませんでした…。』

『…私が侵入しても気づかなかったくらいだから…。何が入っているんだ…。』

『『『怖くて…聞けない…』』』』

あれー？

バーチエさんとエイナさん、一日も経たずにリリと春姫さんと仲良くなっている…？
カサンドラさんも馴染んでいるし…。

いつの間に？

あ…れ…眠くなつて…き…た…。

「坊ちやま？大丈夫ですか？風呂へ案内しますね？」

「う…ん……にや…い…くう…。」

「ちよ!?メ、メイさん、大丈夫なんですか？」

「ええ、問題ありません。さあバーチエさん、仕事です。」

「!?わ、私がやるのか？いえ、やるのですか？あの…風呂までも…？」

「他に誰がいるのですか？なら、全員でもいいのですよ？嫌なら私が…。」

「…「やらせてください！」」

んー？

んー、眠いー。

けど、風呂に入らなきゃ…汗だくだし…。

あうー…。

「べ、ベル様、こちらですよ。」

「ほ、ほら、ベル君。ここに段差があるから…ね？」

「ささ、こちらでございます。」

「…ご主人様…か、肩をお貸しします。」

「わ、私はこちらの肩を…。」

「あいー。」

「…!?!(か、かわいい!)」

はやく ふろに はいらなきや

それから きおくが ない

ただ なにか やわらかった

それだけは おぼえている

第66話 豊穰神、再会。

困ったわ…。

フレイヤ、一体何があつたのよ。

【猛者】たちのあの様子、初めて見たわ…。

それに、こつちも人手不足なのよね…。

エニユオ…いえディオニユソスのせいで、私の子がほとんど診療所で入院してしまつて
いるよね。

アミツドちゃんのおかげで、危機的状况から脱することができてよかつたわ。

助けてもらった、ロキの眷属たちに感謝しなければならぬわね。

いえ、あの子…ヘステイアのところの兔さんの遊撃がなければ、全員助けられなかつた
と言つてたわね。

そして、ディオニユソスの切り札を消滅させた…。

本当に、兔さんとヘステイアに感謝しないとイケないわ。

だからこそ、今回のフレイヤの魅了による暴挙は許せない。

何故…あんなことをしたのかしら？

それに「猛者」に癩癩を起こして八つ当たりするなんて、いつものフレイヤじゃない。やはり会ってみたいとダメだわ。

「大分お疲れのようですね、神デメテル。こちらのハーブティーはいかがでしょう？ 大分落ち着けると思います。」

「…ああ、ありがとう。…ああ、本当に落ち着けるわ…。…って誰!？」

誰?!いくら、ホームで人が少なくともここまで忍び込んでくるなんて…。

「お久しぶりでございます。神デメテル様。15年ぶりでしょうか?」

「!?…メイ?メイちゃんなのね?」

「はい、メイでございます。」

「メイちゃんがいるということは…、ゼウスが来ているの!？」

ゼウスが来ているなんてとんでもない!

いつの間にオラリオへ来ていたのよ!

立入禁止のはずなのに!

オラリオ中の女神のみんなへ、緊急連絡しないと!

「いえ、あの元バカ主神は来ておりません。」

「え…でも貴女を解放できるのは「ゼウス・ファミア」だけのはず…。新しい眷属でも作ったのかしら?」

「いえ、違います。〔ゼウス・ファミリア〕直系の系譜を持つ者によつてです。」

「そんなはずはないわ！直系の眷属たちは黒竜によつて全滅させられ、最後の生き残り【暴食】も死んで断絶したはずよ。あ、ごめんなさい：メイちゃん。貴女にいう言葉じゃなかつたわ。」

「いえ、お気になさらず。」

「…じゃあ、誰？」

「デメテル様のご存知の、あの困つた子のお子様でございます。」

「!?ゼウスと一緒に色々とやらかした子？あの子に子がいたの!？」

ゼウスと一緒に覗きなど色々とやらかした子だつたわ。

本当に困つた子だけど、何故か憎めないよね。

「はい、そうです。」

「……いえ、ありえないわ。だつてあの子ああでも避妊はちゃんとしたもの。歡樂街で100斬り達成しても、誰一人妊娠してなかつたもの。」

「恥ずかしながら、その通りでございます。」

「……紹介してくれるかしら？悪い子じゃなかつたらいいけど。」

心配だわ。

その子がメイちゃんを利用したら、オラリオは大混乱に陥つてしまうわ。

あのヘラのところの執事……セバスちゃんでなければ対処できない!

「いえ、デメテル様は既に会っておられます。まず、デメテル様の思うようなことにはなりません。」

「え? 既に会っている? ……あの子に似たような子っていたかしら?」

オラリオって、意外と広いのよね…。

ダイダロス通りあたりの孤児かしら?

「それよりデメテル様、先程ひどくお疲れのようでしたが、何かございましたでしょうか?」

「そう! そうなのよ! メイちゃん、聞いてくれる?」

そして、私はメイちゃんに今回のことを話した。

「そういうことなら、既に掌握しております。」

「え? もう? 昨日の今日よ。…いえ、メイちゃんなら容易いことでしょうね。それで教えてくれる?」

「いえ、私でなくセバスが動いて確認してくれました。」

「……………もう一回言ってくれるかしら? セバスって、あり得ない言葉が聞こえたんだ

けど。」

ありえない！

セバスちゃんまでも解放してるなんて！

どこの馬鹿よ！

オラリオを滅ぼすつもり？！

「聞き間違いはありません。セバスが『フレイヤ・ファミリア』へ忍び込み探ってくれました。」

「……嘘でしょ……。」

忍び込むって……間違いないわ、セバスちゃんだわ……。

フレイヤの魅了騒動なんて問題だけど、メイちゃんとセバスちゃんが解放されたら、ゼウスとヘラの夫婦喧嘩の延長戦が再び始まってしまう！

こっちの方が大問題だ！

止めなきゃ！

メイちゃんを解放した子と、セバスちゃんを解放した子を。

「メ、メイちゃん？その……セバスを解放した子って『ヘラ・ファミリア』の眷属よね？」
「いいえ、『ヘラ・ファミリア』の眷属の子です。」

……………終わった。

いえ！まだだわ！

あ…閻派閥やディオニソスつながりとしたらどうしよう…。

「デメテル様、何か勘違いなさっているようですが、私とセバスを解放した方は同人物でございませう。」

「え？…あ？…ええええええっ！」

嘘でしょ！【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持つ子がいたの！？

大ニユースじゃない！あ、もしかして…。

「ねえ、その子って、【暴食】と【静寂】の子？」

「全然違います。ありえませぬ。」

ですよねー。

あ、溜息つかれている。

「わからないわ…。」

「先程の神フレイヤについて、お答えしましょう。」

フレイヤの問題より、こっちの方がすごく気になるわ！

でも聞いてみましょう。元々、そっちで悩んでいたものね。

第67話 豊穰神、意欲。

メイちゃんから、フレイヤの状況について教えてもらった。
フレイヤ…、何やってるのよ。

神友として喜ばばいいのか、神として嘆けばいいのか迷うわね。

「そういうことだったのね…。まあ、「猛者」たちが戸惑うのも仕方がないわ。」
「はい、情けなく思います。その程度さえ解決できないとは。」

…え？そつち？

まあ、フレイヤのことはわかったわ。

兔さんがフレイヤの『伴侶』だったなんて…。

ヘステアに悪いけど、「ロキ・ファミリア」が介入したとしてもフレイヤが念願の『伴侶』を手に入れるため本気でくるはず。

今回の戦争遊戯は「フレイヤ・ファミリア」の勝利で確定ね。

それより、こつちが問題よ！

その子がゼウスやヘラのような子だったら大問題だわ！

「そう、なるほど。そういうことだったのね。」

「はい、そうです。デメテル様。」

「わかったわ。…話を戻すけど、その子はどんな子なの？ゼウスのように助平な子？またはヘラのようにおつかない子？」

「そのどちらでもありません。そうですね…、純粹無垢を形にした方です。」

あれー？違う？

「ねえ、メイちゃん。その子は何やっているの？」

「冒険者でございます。」

冒険者なら、どこかのファミアリアにいるわね。

「どこかのファミアリアにいるの？」

「【ヘステイア・ファミアリア】です。」

え？ヘステイアのところの？

じゃあ、メイちゃんとセバスちゃんを解放した子って…兔さん…？

嘘でしょ…。

あの純粹無垢を形にした子が…ゼウスとヘラの眷属の子…？

「メイちゃん…ちよつと混乱してきたわ。貴方が封印から解放された時から教えてくれ

る？」

「はい、かしこまりました。」

そして、一昨日に解放された時のことから語ってくれた…。

「ごめんなさい、何か勘違いしてたわ。」

「いえ、仕方ありません。一昨日のことですから。」

「それにしても…あのゼウスが14年間ほど育ててきたというのに、どうやったらあんな純粹無垢な子になるの?」

「私もセバスも、奇跡と思っております。恐らく母親のメーテリア様による影響かと。」

メーテリア、ね。

ヘラが大事にして、絶対に会わせてくれなかった子。

あの兎さんを産んですぐに亡くなったなんて…。

そしてゼウスは、14年間程碌なものを食わせず碌な事しか教えず、半年前に育児放棄するなんて…!

ヘラの復活もあるかもしれないけど、許せない!

しかも兎さんに知らせず、心に深い傷を負わせるなんて!

「ゼウス…許せないわ…!あの兎さんがあまりにも可哀想じゃない!」

「同感でございます。そのことをご存知の神は、全員大変お怒りでした。」

そりゃ、怒るわよ!

いくらヘラが怖いからといって、死んだふりして放置するなんて！

同郷の神としてでも、許しがたいわ！

「神ヘルメスは知ってたようです。まあご心配なく、昨晚私とセバスが断罪し釘をさし、首輪をつけておきましたので。」

「……かなり気の毒に思うけど、一体ヘルメスは何をやったの？」

そして、ヘルメスのやったことを教えてもらった。

有罪。

ゼウスといい、ヘルメスといい、アポロンといい、アレスといい、デイオニュソスといい……本つつ当につオリンポスの男神で碌な神はいないの!?

頭くるわね……。

「……ヘルメスも同罪ね。けど、貴方たちが断罪したから、まあいいわ。今更だけど、メイちゃんは何のために私のところへ来たの？戦争遊戯に協力したくても、この通り私の子たちは少ないので、手を貸すことができないわよ？」

「それについて、私達の計画をデメテル様へ伝えて、協力をいただこうと思ひまして、よろしいでしょうか？」

計画？この戦争遊戯ではなくて？

そして私は、兎さんを中心としたオラリオ連合を作り、ダンジョン制覇と黒竜討伐を

目標にすることを聞いた。

「…確かにダンジョンはもう限界だわ。ディオニユロスも言っていたわ。」

「はい、その通りでございます。」

「あの兎さん…ベルと言ったほうがいいかしら？」

「デメテル様にお任せします。」

「いえ、兎さんと言うわ。その方が可愛いし。…話を戻すわね。その話、全力で乗らせてもらうわ。」

「ありがとうございます。食糧全てを担う『デメテル・ファミリア』が味方になってくれれば、頼もしい限りです。」

「でも私の眷属たちが重症で、まだ入院しているの。時間がかかるので待つててくれるかしらっ？」

「ええ、知っております。それについてご相談があるのですが」

私はメイちゃんからの提案を聞き、驚いた。

「それなら喜んで引き受けるわ。…私としては願ったり叶ったりだけど、いいのかしら？」

「大丈夫です。彼らも引き受けざるを得ないよう案は考えております。」

「（その案が怖いのだけれど）…わかったわ。それは置いといて…兎さんを中心とした連合を作るとなると、ギルドあたりが五月蠅くならないかしら？」

特に金にがめついあのロイマンは、色々と言ってくるでしょうね。

「ご心配いりません。ギルドは、私とセバスが躡けて坊ちやまのために役立ついただきます。」

「そ、そう（…ウラノスも気の毒ね）。…ねえ、メイちゃん。そのこと他の女神へ言っちゃダメかしら？」

「…できれば戦争遊戯が終わるまでは、伏せてほしいのですが。」

「ああ、違うの。兎さんの生い立ちのことよ。ほら、兎さんの親はゼウスとヘラの眷属でしょ？兎さんの生い立ちを知ってしまったら、7年前の出来事を知っている人たちが兎さんを恨んで何かをしてくる、と私は思うの。そうならないよう私のような善神の女神達で、事前に根回しをして守りたいの。」

7年前の大抗争の爪痕は、まだ色濃く残っている。

たとえ兎さんが戦争遊戯で完勝したとしても、その爪痕は兎さんを間違いなく傷つける。

そうなる前に、私達…女神連合で兎さんを守らないと！

「…なるほど。そういうことでしたら、お願いしてもよろしいでしょうか？（ローリエさ

んに依頼したアレもありますし、デメテル様の根回しも加えてスキルの相乗効果も出るかもしれないね。こちらとしては願ったり叶ったりですね。元のバカ主神はひどい目に合うでしょうが、自業自得です。」

「ええ！任せてちょうだい！」

さあ、やる気が出てきたわ！

明日から…いえ今から頑張ります！

早速、みんなを招集する手紙を書かないと！

フレイヤ…、貴方の『伴侶』は大した子だわ。

貴方の目は間違っていない。

あの兎さんは、”救界”の要となる子。

これまでの急成長や戦いぶりを見て知った今、それはもうほぼ、間違いない。

それに…あんなことを聞かされたら、女神として黙ってられないわ！

そして…非常に残念だけど、あの【最強侍従】と【最恐執事】が兎さんにいる限り、この戦争遊戯で貴方たちに勝ち目はないわ。

第68話 老神、焦燥。

「今…何と言った？愚者よ。」

「辞めさせてもらう、と言ったんだよ。ウラノス。」

目の前の賢者…いや愚者は、信じられないことを言った。

魔法大国『アルテナ』から出て彷徨い出た彼を、男神と女神が拾い儂へ紹介した。

そして、長年儂の私兵として働いてもらった。

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】が追放されても、下界を揺るがす【異端児】と私のつなぎ等を、感謝してもしきれないほどの働きをしてもらった。

その愚者が…辞める？

「何があつたのだ。」

「本業に戻って専念させてもらいたいのだ。ウラノス。」

「答えになつてないぞ。もう一度言う、何があつたのだ。」

「…ウラノス。ベル・クラネル、あの少年のことをどう思う？」

ベル・クラネルか…。

ゼウスの落とし子であり、あのヘステイアの最初の眷属であり、ヘルメスのお気に入

りであり、異端児からの信頼が厚く、フレイヤの魅了を弾き、今やオラリオを代表する冒険者の一人となっている。

今更、そのベル・クラネルがどうしたのだ？

「…彼がどうしたのだ？」

「ウラノス、私達は騙されたのだ。あの姑息な神、ヘルメスに。」

「…何だと？」

「…ゼウスの落とし子…彼は【ゼウス・ファミリア】の眷属ではない。」

「！」

では、何だと言うのだ？

「彼は…【ゼウス・ファミリア】の眷属の子…【ゼウス・ファミリア】の系譜を持つ者なのだ。」

「…そうか。」

愚者にとつて驚くことかもしれないだが、私にとつては想定内だ。

「それだけなら、まだよかったんだ。…彼は、もう1つの系譜を持っているんだ。」

何…!?

「彼の父親は【ゼウス・ファミリア】最弱のあのサポーターだ。」

ゼウスと多くの醜聞を作った子か…。

…似てないな…、いやあの真紅の瞳だけか。

だが、もう1つの系譜だと？母親のか？

「彼の母親は…、あの最恐の「ヘラ・ファミリア」だよ。ウラノス。」

「!?」

馬鹿な…！そいつは、何ということをしたのだ！

そのようなことをすれば、男神と女神の夫婦喧嘩によつてオラリオは滅びる！

いや…、黒竜にある意味感謝するべきか…。

皮肉なことだな。

「そうだよ。ウラノス、あの少年は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」のそれぞれの直系の系譜を持つ、この世で唯一無二の少年なのだよ。」

……驚いた。ベル・クラネルがな。だが、

「それで…？愚者、お前が辞める理由にはならない。」

「ああ、そうさ。それだけなら本当によかったんだ。問題はその系譜がもたらすものなのだよ。」

…もたらすものだと？

「ウラノス、忘れたのかい？「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」には、恐るべき双壁がいたことを。」

……まさか……彼らか？

彼らが復活したというのか！

いや、彼らは「ヘファイストス・ファミリア」、「ゴブニュ・ファミリア」にそれぞれ封印されているはずだ。

それぞれの眷属でなければ解放できないはず。

そして、その眷属である「静寂」と「暴食」は、7年前の大抗争で断絶したはずだ。

……あつ！

ベル・クラネルが持つ系譜か！

「ウラノス……。私は先日、「ヘステイア・ファミリア」へ訪問した。有無を言わず拘束させられて、部屋の隅っこでベル・クラネルの半年間の経緯を、元ギルド受付嬢のエイナ・チュールと共に教えてもらったよ。あの……忌々しい「最強侍従」に！ああ！腹立つ！」

……愚者のこのような様子、久々に見るな。

そうか……「最強侍従」が解放されたのか……。

待てよ……まさか「最恐執事」もか？

「【最恐執事】のセバスにはまだ会ってないが、彼も解放されているよ。……ウラノス、「最強侍従」から聞いた話で私達が知っている内容と齟齬があった。」

そして、私は愚者からベル・クラネルの半年間の出来事を教えてもらった。

【ソーマ・ファミリア】の体質改善、イシユタルの送還等にベル・クラネルが関わっていたのか。

頭が痛くなってきた…。

「ウラノス…それで私が辞める理由だが、彼らが全て仕切るそうだ。」

「…何だと?」

【最強侍従】から言付けがあるよ。『このメイとセバスは坊ちやま第一。救界なぞ、知ったことか。坊ちやまのやりたいこと全て叶えるのが私たちの望み。そのついでにやってあげるのだからありがたく思え。だから邪魔するな。邪魔したら滅ぼす。』…このことだ。そして『震えて待て』だそうだ。」

「……………」。

「ウラノス? 聞いているかい? まだ、あるんだ。ロイマンから全財産没収したが、【最強侍従】が言うには『アルテナ』で購入した収納魔道具にまだ1000億ヴァリスがあるとのことだ。」

「……………」。

ロイマンめ…私を謀ったな…

「そして私にもこう言ったよ。『異端児のことといい、クノツソスのことといい…本当に無様です。魔道具を専念して作ることをお薦めしますよ。』だつてさ。元々私は魔導士だ。こういった斥候まがいのは本当に不向きなんだ。なので、彼らに任せることにしたよ。そして私は、あの少年…ベル・クラネル専属の魔道具作製者にならせてもらうよ。」

「……何だと?」

「彼らの目的は、ベル・クラネルを中心としたオラリオ連合を作ることだ。そして…我々の念願でもあるダンジョン制覇と黒竜討伐を行うことだ。そのために、魔道具を作れということだ。」

「!?」

何だと…、いやかえって好都合か。

今回の戦争遊戯で、「フレイヤ・ファミア」が勝ったとしても、「ゼウス・ファミア」と「ヘラ・ファミア」ができなかったことを、「フレイヤ・ファミア」が成し遂げるとはどうしても思えない。

だが、ベル・クラネルは良くも悪くも、オラリオの中心人物の一人として一番注目されている。

そして彼らがベル・クラネルを支えていくとなれば、ベル・クラネルを中心としたオ

ラリオ連合を作るのは非常に現実的だ。

主神であるヘステイアも神望も高いしな。

そちらの方の可能性が非常に高い。

「ウラノス。貴方にとつて悪い話ではないはずだ。長年いがみ合っていた彼らが、ベル・クラネルの元で絶対の忠誠を誓い手を組んでいる…。この時点で、我々の敗北は確定だ。そして神フレイヤ、神口キとの戦争遊戯はそのための布石だそうだ。既に彼らももうその地盤固めに奔走しているよ。」

「……………そうか。」

「既に、『ヘファイストス・ファミリア』、『ゴブニュ・ファミリア』、『ミアハ・ファミリア』、『ディアンケヒト・ファミリア』、そして『ヘルメス・ファミリア』も彼らの手の内にある。」

「…………………………。」

思つたより早いな…。

解放されて間もないはずだが…。

「残るファミリアも時間の問題だろうね。」

そうだな。『デメテル・ファミリア』もこうしている間に取り込み済みだろうな。

ベル・クラネルの生い立ちを知れば、あの善神であるデメテルは黙っていられないだ

ろうな。

「…………戦争遊戯は彼らがやるのか？」

「いいや。彼らは最後の保険だそうだ。戦争遊戯は、彼らを除く〔ヘステイア・ファミリア〕を中心とした連合で完全勝利または圧勝する必要があるそうだ。そうしないとダンジョン制覇や黒竜討伐は不可能とのことだ。」

なるほどな。彼らはオラリオから出れない制約がある。

だから、この戦争遊戯は鍛えるのにちょうどいいということか…。

「……………それで、私との連絡担当は誰だ？ヘルメスか？」

「いいや、彼らから追って連絡があるそうだよ。だから私はこれが貴方に会う最後になるかもしれない。」

「?!?!…待て。彼らが…ここへ来るのか？」

「ぞうだよ、ウラノス。だから『震えて待て』とのことだ。…ウラノス、貴方には残念なことだが、ギルドは彼らが仕切るそうさ。」

「…ロイマンが黙っていられんぞ。」

あの権力、金の権化が、オラリオ連合を黙って見逃すわけがない。

確実に何かをしてくるだろう。

「ウラノス、彼らがそれを見落とすと思っっているのかい？今回の戦争遊戯で〔ヘステイ

ア・ファミリア」への妨害をしてきたロイマンを、彼らが許すと思っているのかい？」

「……ロイマンが気の毒になってきたな……。」

「さあね。私もあの豚にはいい加減うんざりしてきたから、ちょうどいいさ。」

…【最強侍従】に会ったからか、スツキリした感じだな。

「ウラノス、はつきり言おう。ベル・クラネルを全面支持すべきだ。彼は、”救界”の要だ。それは今までの急成長や戦いを見てわかるだろう？」

「…そうか。未来はベル・クラネルの手に委ねられたな。」

「私はもう、全てを彼に賭けている。だから、私は彼専属の魔道具作製者になるのさ。私の引き継ぎは彼らがやってくれるよ。」

そうか、なら私ができることは祈祷だけだ。

「ウラノス、このような形になってすまないが…、長年、大変世話になった。」

「愚者、それはこちらもだ。長年、私を支えてくれて非常に感謝する。」

「……っ、また会おう。」

「ああ、またな。」

………しかし、彼らがここへ来るのか…。

覚悟はしておくか。

第69話 機関長、愚痴。

「くそっ！くそっ！くそっ！」

おのれ！私の金が！私の財産が！

長年奉仕してきた私の汗と涙の結晶がっ！

「あのハーフェルフまがいめっ！リヴェリア様の寵愛をいいことに！」

あの小生意気なアイナ・チュールの娘だから、いい気になりやがって！

どこのファミリアにも所属させないようにしてやるっ！

そして娼婦へ落ちるがいい！せいぜい汚れまくるがいいっ！

それを見て嘲笑ってやろう！

はははははっ！

「それに『フレイヤ・ファミリア』めっ！余計なことをしやがって！」

魅了を使って何故そこまでする！

「ベル・クラネルを手に入れたいだと！そんなの勝手にしろ！オラリオを、私の都市を巻き込むなアアアっ！」

……だが、最強派閥だから仕方があるまい、鼻屑にしてやるから感謝しろっ！

神ヘステイアはオラリオを浄化した貢献で、残してやるが他は知ったことかっ！

「ヘステイア・ファミリア」なぞ問題だらけではないかっ！特に団長のベル・クラネルは件のモンスターをかばい、バベル前で大立ち回りをしやがって！」

あのハーフェルフが隠しているせいで、あの小僧の成長の秘密がわからんではないかっ！

「あのカジノでの恨みは忘れんっ！あの小僧のせいで大儲けだったところをパーにしやがって！許さん！絶対に許さん！また、半年前の「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯で、「アポロン・ファミリア」に大金を賭けたというのに負けた！大損ではないかあああああっ！」

しかも、歓楽街で「フレイヤ・ファミリア」だけでなく「ヘステイア・ファミリア」もいたとのことだが、一体何をしたアアアツ！

「他にも何かやつてるに違いないっ！」「ガネーシャ・ファミリア」に命じて捕らえて、自ら尋問してやるっ！」

あの兎のヒューマンごときがっ！覚えていろよっ！

貴様を庇うハーフェルフは、もうおらんからなっ！

「団員のヴェルフ・クロツゾなど、我らがエルフの里を焼き払った大罪人の子孫ではないかっ！」

都市追放にしてやるっ！神へファイストスと懇意のようだが、関係ないっ！

ただし、魔劍製造機として成り下がるなら、オラリオにいてもやってもいいっ！

ああ、そうしてやるっ！

「他にも問題ありだっ！リリルカ・アーデもだっ！手癖の悪い小人族とは奴のことに違くないっ！」

「ソーマ・ファミリア」絡みの騒動も、奴が元凶だっ！間違いないっ！

団長ザニスからは数十万ヴァリスや神酒を度々受け取っていたが、それも止まったっ！あの役立たずがっ！

だが器量はよさそうだから、あの「勇者」への首輪として、娼婦にして献上してやるっ！

感謝しろよ！「勇者」！

ふはははははは！

「サンジヨウノ・春姫もだっ！元【イシュタル・ファミリア】の何かを握っているに違くないっ！」

あの穢らわしい狐人め！元の遊女に戻してやるっ！

ヤマト・命も【タケミカヅチ・ファミリア】へ戻してやるっ！

同郷？知ったことかあああああっ！

「ロキ・ファミリア」には「ヘステイア・ファミリア」に味方せぬようにしといたから、「ヘステイア・ファミリア」の敗北は必至だろう。ははははははっ！」

せいぜい感謝しろよ、神フレイヤ！

「ゼー、はー、ゼー、はー。ふんっ！まあ、私の全財産の半分はまだあるから仕方があるまい。」

…ふう。隠してある財産の半分までも取られるとはな、さすが神ウラノスといったところか。

しかし、誰だ？

ここまで把握しているとは…。まあ、いい。

20年前くらい、『アルテナ』で親睦旅行してた時に収納魔道具を数十点買っておいちゃった。

おかげでバレることはなかった。

はははははっ！

…：神ウラノスは何を考えているっ！

都市の安寧だけで祈ればよからう！

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】が黒竜討伐に成功してればよかったものを！

あの役立たずどもがっ！

まあ、「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」が、目の上のたんこぶの奴らを追放してやったから気分がいいっ！

あの時の痛快な気持ちはなかったなっ！

「ロキ・ファミリア」は、ちまちまとダンジョン攻略して、私の財産を再び肥やすがいいっ！

はははははっ！

「抗争は何とか止められた。あとは「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」と「ヘスティア・ファミリア」の戦争遊戯でお互いを喰らい合うがいい！はははははっ！」

どうせ、「ヘスティア・ファミリア」の惨敗は確定だな！

「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」は本当に邪魔だったっ！あいつらのせいで、私の胃痛はずっと収まらなかった！財産も減る一方だったっ！」

！
神ゼウスは、儂を引き連れて歓楽街で豪遊してかかった費用を儂に押し付けやがって

！
神ヘラは、新入り時代からネチネチネチネチといびりやがって！

！
文句言うようなら手指の爪を剥がしやがって！

！
あれの治療も自腹だったんだぞ！

それに二人の夫婦喧嘩の仲裁を、儂にさせやがって！

その度に診療所送りになったんだぞ！

その治療代もまた自腹だったんだぞ！

黒竜討伐で全滅したと聞いた時は、ざまあみろと思つたわ！

神ゼウスは3日で立ち直つたようだが、神ヘラはずつと意気消沈だったな。

いい気味だ！

ははははは！

「7年前の大抗争で参加しやがって！当時の派閥で倒したからいいよなもの、あの死にぞこない共め！辺境でのたれ死ねばよかつたものを！……まあ、あいつらの名前を地に落としたからよしとしよう。はははははっ！」

だが、あの二大派閥は本当に強かつた……。

だから、今の【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】は比べ物にならない。

それは儂が一番よく知っている。

だから、儂にとって扱いやすい！

だから、儂の財産がどんどん増える！

「ははははははっ！何が【勇者】だ！何が【猛者】だ！」

【ヘステイア・ファミリア】？知らんな！

「ふう…、さて、気分直しに数百万ヴァリスしたワインでも飲むか。」
「どうぞ、こちらです。」

「お、すまんな。ゴクゴク…はあ美味い…。」

あ…勝利の美酒は美味い…。

!?!?

「誰だっ！このギルド長としての部屋を知つての狼藉かつ！誰か来い！曲者だっ！」

何者だ！…ここまで忍びこむとは…大胆不敵なやつめっ！

「おや、私をお忘れですか。」

「……………」

ワインの飲みすぎで、あり得ないものを見てしまったようだ。

いかな、そろそろ寝なければ…。

「なるほど、これが収納魔道具ですね。」

「……………」

目がおかしくなったようだ…。

「疲れているようだ。あり得ないものを見てしまったようだ。あいつらが解放されているわけがないんだ！あの目障りなやつらは全員死んだんだ！そんなはずがない！あり得ないんだ！」

「それがあり得るのですよ。」

「目障りとは全く失礼ですね。色々とお世話してあげたというのに。」

……嘘だ……嘘だ……ウソダアアアア!

「え、え、衛兵! いや、見張りは何をしてたああ!」

「寝ていますよ。よほど疲れているようですね。」

「豚の相手は疲れますからね。」

ま、ま、ま、間違いない!

【最強侍従】と【最恐執事】が何故ここにいるうううう!

第70話 機関長、絶望。

「ひいひいひいっ！」

「おやおや、15年ぶりに会ったというのに失礼な豚ですね。」

「全くです。それにひどく醜くなっています。本物の豚の方がイケメンですよ。」

「ど、ど、ど、どうして…。」

こ、こいつらは私の新入り時代からいて、私をことあるごとにいびり倒しやがった！
自ら封印したのを知った時は、思わず大歓喜したものだ。

…封印した箱を蹴飛ばそうとしたら、感電や発火で大やけどになったがな…。

運んで捨てようにも、【ロキ・ファミリア】の【重傑】でも死にかけたぐらいだ。

【フレイヤ・ファミリア】の【猛者】に頼んだら、「自分でやれ」と断りやがった！

あの役立たずどもめがっ！

「それに先程の言葉は聞き捨てなりませんな。」

「ええ、本当に。」

「!?…いい、いつからいたのだ…いえ、いたのでしょうか…?」

ぜ、全部聞かれていたら…殺される！

「『くそ！くそ！くそ！』からでございます。」

最初からじゃないかあああああー！

「はあ…新人のころから色々と教育してあげたというのに、私は悲しいです。」

あれを教育というのかあああ！

拷問の間違いだらおおお！

「さて…『ゼウス・ファミリー』と『ヘラ・ファミリー』は本当に邪魔だったつ！』と
いうのはどういうことでしょうか？」

「あの、それは、その、」

「『あの死にぞこない共め！辺境でのたれ死ねばよかつたものを！……まあ、あいつらの
名前を地に落としたからよしとしよう。』で、死にぞこないとはザル坊と『静寂』のこと
でしょうか？」

「ひいひいひいっ！」

どうして、こいつらが解放されているんだあああ！

解放できる眷属は全員死んだはずだぞ！

いや、あの神々、オラリオ外で眷属作つたのか！

いや、あの神々の眷属なら門のところで入れないはずだ！

いや、あのクノツソスを通ってきたのか！

「そのどちらでもありませんよ。」

!?

「本当に脳の髄まで豚ですね。15年前の時に徹底的にするべきでした。」

!?!?!?

殺される！

「ま、待て！いえ！お待ち下さい！お待ち下さい！」

「ほう、何でしょうかな？」

「聞きましょう。最期ですから。」

ひいひいっ！考えろ！考えるんだ！

何としても時間を稼ぐんだ！

「な、何故貴方様方が、解放されているのでしょうか？」

「簡単なことです。「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つお方によって。」

「簡単なことです。「ゼウス・ファミリア」の系譜を持つお方によって。」

「ふ、二人もおられるのですか？（時間を稼ぐんだ！時間を稼いでその2人を何とか殺さ

ないと！）」

「いえ、一人です。」

!?!?そんな馬鹿な！

「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の両方の系譜を持つ者がいるなんて！

「あ、あり得ない！両方の系譜を持つ者なんて、この神時代でもなかったはずだ！」

「言っても無駄でしょうね。さて、少々散歩へ行きましようか？」

「時間は有限ですからね。散歩がてらお話しますよ。」

「い、嫌だ…嫌だアアアア！ガアツ！…！…！…」

!?

こゝ、声が出ない…。

「声帯を潰しました。毎回毎回しましたが、その感触はもうお忘れですかな？」

!?

「ああ、面倒ですからここで説明しましょう。我々を解放したのは確かに「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の両方の系譜を持つお方です。解放されたのは一昨日です。」

!?!?

「そのお方はその時まで、「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」のことを全く知(知?)りませんでした。」

!?!?

「貴方もご存知ですが、我々は系譜を持つ者の記憶を読み取れます。そしたら、そのお方

を身ごもったのは、黒竜討伐前でここオラリオです。」

(な、何だとおおお!)

「そのお方は、『フレイヤ・ファミリア』と『ロキ・ファミリア』によって母親ごと追放されました。」

「そして、私の元主神ゼウスによって一般人として半年前まで育てられました。」

(くそっ!あの時、追放ではなく皆殺しにすればよかつた!)

「……………今、何を考えましたかな?『あの時、追放ではなく皆殺しにすればよかつた!』と?」

「セバス、落ち着きなさい。どうせその人格は数時間後、完全に確実になくなるのだから。」

ひいひいっ!

「…っ。ふう、いけませんな。メイ、すみませんでした。」

「気持ちはずごくわかります。さて、続けましょう。そのお方は、元主神によって育児放棄させられ傷心のまま、オラリオへやってきました。」

(な、何だと!半年前だと?するとまだレベル1か。今を耐えれば、他の息のかかったファミリアによって潰してやる!)

「……………っ。そして、ある女神の眷属となり現在に至ります。」

「現在、そのお方のレベルは5です。」

(は、半年すぎでレベル5だど!? あり得ない! いや…待てよ…まさか…。)

「正解でございます。そうです。先程まで貴方が喚いていた、【ヘスティア・ファミリア】団長ベル・クラネルこそが、我らが仕える真の主です。」

「先程、豚が喚いていた『許さん! 絶対に許さん!』の相手です。」

(な、な、な、何だとおおお! なら、今を耐えれば明日オラリオ中に知らせて、奴を大抗争を引き起こした大犯罪者の子として裁き、死刑にしてやる!)

「……………メイ。私は……………我慢できません…っ!」

「セバス。私もっ…我慢の限界です…っ!」

(あ)

「初めてですよ…ここまで私を怒らせるとは…。」

(は、はじめてみる。常に余裕綽々だった、【最強侍従】と【最恐執事】の怒りの姿を…)「ふう…長年の付き合いで楽にあげましようと思いましたが…、やめた。麻酔も薬もなしにしてやる。元主神ヘラ譲りの拷問術だけだと思ふなよ。」

「長年の付き合いで優しくするつもりでしたが、やめましよう。7年前の大抗争で死んだ方がマシだったというくらい、精神改変させてやる。感謝しろよ、豚が。」

(や、やめて下さい! 今のは本心じゃないんです。どうか! どうかお許しを! そ、そうで

す！1000億ヴァリスを差し上げます！どうか！どうか！」

「何を言っている？その金は全て坊ちやまのために使うと、最初から決まっている。」

「私たちの目的は、豚、貴様だ。お前を坊ちやまのために尽くすように精神改変し尽くしてやる。」

!?

「地獄さえ、元主神ヘラでさえ生ぬるぐらい、俺の独自拷問術を味わせてやる。感謝しろよ。」

「元主神の糞ゼウスが泣き叫び喜ぶぐらいの、自分で編み出した精神改変技を叩き込んでやる。嬉しいだろう？」

（ひいひいっ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！）

「ここではやらん。坊ちやまに聞かれるだけで坊ちやまが穢れる。」

「貴方の所有物は私達が有効的に使ってやろう。もちろん、ギルドも含んでな。」

（ウラノス様！ウラノス様！お助け下さい！）

「役立たずの神ウラノスは、内容によっては後を追わせてやる。」

「役立つようなら生かすが、そうでないなら祈祷させるだけの道具にしてやるから安心しろ。」

（あ、あ、あ……。）

「安心しろ。お前だけではない。他にもいる。」

「命は有効的に使わなければいけない。それに時間は有限だからな。」

（わ、私はオラリオを管理する機関のギルド長です！ウラノス様から直々に命じられています！）

「知ってる。明日も仕事だろう？それまでに間に合わせてやるよ。」

「おめでとう、お前が我々二人による第一号だ。」

(!?)

「さあ、行こうか。仲間が待っている。……メイ、先に行つてきます。」

「了解です。私はここの整理をしてホームへ戻ってから向かいます。ゆつくりと捌いて下さい。」

（誰か！誰か！「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」でもいい！誰かああ！私を助けておおお！）

第71話 勇者、危惧。

「これでよし。」

「ヘステシア・ファミリア」に戦争遊戯を仕掛けたことによつて、間接的に「フレイヤ・ファミリア」と戦える。

「やつと、これであの色ボケんこと決着つけられるなあ、フィン？」

「ああ、そうだね。時間を稼いで準備を進めないとね。」

「そうさ、この方法でしか助けるしかなかったんだ。」

戦争遊戯の方式が何であれ、まず「ヘステシア・ファミリア」を瞬時で下す…フリをして「ロキ・ファミリア」と「ヘステシア・ファミリア」の合同で、「フレイヤ・ファミリア」を討つ、それが最善のパターンのはずだ。

「……………なのに、何故親指のうずきが収まらないんだ？」

一旦、ホームへ戻つて考えるか…。

「どうしたんじや、フィン。さつきからずっと怖い顔をしておつて。」

「いやね、さつきから親指のうずきが収まらないんだ。どうも…嫌な予感がするんだ。」

「お主のそのうずきには何回か助けられたからのう。その勘を信じてもよいのではないか？」

「…………ガレスの言う通りだ。打っておく手は打っておくか。
「ラウルとアキを呼んでくれ。」

「団長、参りました。」「どうしたんつすか？」

「今すぐ、ダンジョンに潜っているリヴェリアのところへ行つて、今回のこと…神フレイヤの魅了、戦争遊戯について全てを伝えに行つてくれ。できるだけ早く、にだ。」

「あ、はい。わかりました。」「了解つす。」

「うむ、リヴェリアと一緒に早く戻ってくるようにな。…………どうも、アイズやベートを抑えるのに儂では一苦労じゃ。扱いがうまいリヴェリアが必要じゃ。」

ああ…、アイズはアレを本気にして部屋を徹底的に掃除しているな。

ホームへ帰る時、ロキと一緒に見に行ったが床や壁が鏡のようになってたな…。

ロキは呆れていたな…。

アイズの要求は、残念ながら叶わないな…。

リヴェリアにフォローをお願いしよう。

それに、ベートはベートでかなり苛ついているようだ。

「フレイヤ・ファミリア」に対してではなく、ベル・クラネルに味方できないことに、だ。半年前のベートでは考えられないな…。

「あはは…アイズから相談があったのですが…ちよつと戸惑いました。」

「うん?」「相談? 珍しいのう。」

アイズからアキに相談? 珍しいな。何だろう?

「えーと…「ベッドはダブルにした方がいい? ベルもそんなに大きくないからそのままがいい?」と私に…。」

「……………」。「マジっすか!」

「それで…、「戦争遊戯が終わってからでいいじゃない? あと、リヴェリアにも相談した方がいいよ。」と、とりあえずそう言つとききました。」

…そうか。本人は気づいているのだろうか?

とんでもない発言をしていることに。

「ありがとう…。すまないが…、それも含めてリヴェリアへ伝えてくれ。さっきの”できただけ早く”は取り消しだ。至急向かって、迅速に戻ってきてくれ。」

「了解しました(ツス)！」

親指でなく、別の意味でも頭が痛くなってきたよ……………。

まさか、アイズのこんなことで悩ませるとは思わなかったよ。

リヴェリアへの説明はこれでよし。

ラウルならともかく、アキはきちんと説明してくれるだろう。

…今は18階層か下層あたりと思うが、二人なら問題ないだろう。

……あの二人、そろそろくつついてもいいと思うのだが。

老夫婦と冷やかされているが、もうその域に達しているんじゃないかな？

いや、まず自分のことだな。いけないな。

正直、羨ましいよ…。

「さて…!?ぐぐうううっ!？」

「どうしたんじゃ!フィン!？」

親指が…これまでにないほどどうずいている!

初めてだ…こんなことは…。遠征でもクノツソスでもなかったぞ!

彼らに頼んだことが間違っているのか?…いや違う。

【ヘステイア・ファミリア】……………か?」

「団長!どうしましたか!？」

テイオネか…。念には念を押ししておくか。

「テイオネ…、ナルヴィとシャロンと一緒に【ヘステイア・ファミリア】を見張ってくれないか?何か嫌な予感がするんだ。」

「…？団長がそういうならそうしますが…【フレイヤ・ファミリア】が【ヘスティア・ファミリア】のホームを襲う…そういうことですか？」

「……………それはない。だが…、気になるんだ。テイオネ、頼むよ。」

「わかりました！任せて下さい！」

これで、怪しい動きがあればレベル6のテイオネなら気がつくだろう。

他の二人もレベル4だ。戦力的には問題ないだろう。

……………なのに、何故だ？親指のうずきが止まらない…、むしろ強くなっている…！

「フィン…もう休め。汗がすごいぞ。」

「……………そうするよ。ガレス、油断しないでくれ。【ヘスティア・ファミリア】に何か起こるような気が…いや、絶対に何かが起こっている。」

「むう…あの若造か…。お主らが羨ましいのう。儂はあの若造と殆ど話もしたこともないんじやが。」

ああ、そうか。ガレスはベル・クラネルの戦いも見てなかったな。

「それは運が悪かったね。……………!?がああああああつ！」

「フィ、フィン!?!」

何だ！さつきと同じ…いや、更なるうずきが!?!

馬鹿な…この短期間でか!?!

…一体、何が起こっているんだ!?

「ガレス…すまない。少し休む…、警戒態勢は続けてくれ。」

「う、うむ…、フィン。クノツソスのようなことはもう起こらんじやろ。」

「いや…その時より最悪かもしれない。僕もわからないけど、最悪だけど最悪じゃない。」

「……意味がわからなくて…。」

僕もわからないよ。ただ、そんな気がするんだ。

…「ロキ・ファミア」にとつて最悪で、オラリオにとつて最良…?

今回の戦争遊戯は間違っている、そう言いたいのかい?

『そうだ。お前達は負ける。絶対に勝てない。』

と親指がそう、うずいているように聞こえた。

第72話 怒蛇、気絶。

私は愛する団長の命令のため、「ヘステイア・ファミア」のホームを見張っている。「白兔の脚」には興味あるけど、まだレベル4じゃない。

まあ、でも団長の言う通り格上の敵やモンスターを相手にし、レベル3で『異端児』の件でアイズを退け、あのクソムカつく黒いミノタウロスと戦ったものね…。

私に同じことができるかって？

団長のためになら！と言いたいけど、無理ね。

「あの…ティオネさん。何をぶつぶつと言っているんですか？」

「ああ、ごめん。ついあの『白兔の脚』のことを考えていてね。どうやったらあんなに強くなるのかなど。」

「それはわかります…。同じレベル4なのにあそこまでできません…。」

ああ…ナルヴィは「デメテル・ファミア」救出のために動いてたわね。

その時『白兔の脚』の遊撃にすぐ助けられたらしいわね。

「あそこまでつて、どんな感じなの？私見てないから、わからないんだけど。」

「ティオネさん…、一匹の食人花でも私達レベル4数人でも手間取るのに、あの『白兔の

【脚】はたった一人で多くの食人花を瞬時で切り刻み爆破し、多くのヴァルグを塵に変えたんですよ…。」

「え？」

「レフィーヤが葛藤する意味がようやくわかったんです…。あんなの追いつけませんよ…。」

「そして…【白兔の脚】がアイズさんとダブるくらい凄かったんですよ…絶対レベル4のなりたてじゃないですよ！」

レベル4上位の彼らがそこまで言うなんて…。

団長の言う通りかもね。

今の【白兔の脚】がどんなに強いかはわからないけど、私でも手間取ったあの硬い食人花を一人で複数倒すなんて…。

レベル5、6と見たほうがいいわね。

「ティオネさん…本当に【ヘスティア・ファミリア】と戦争遊戯するんですか？」

「クノツソスで、彼らに大きく助けられたのに何か罪悪感を感じるんですが…。」

わかるわ…、ナルヴィとシャロンの気持ちは。

私も【ヘスティア・ファミリア】…特にあの【白兔の脚】に何も思わないはずがない。

レベル1でミノタウロス強化種の死闘を、目の当たりにしたんだもの。

あの戦いの感動は、闘国にもオラリオへ来てもなかった。
テイオナがはしやく気持ちもわかる。

あれは…心をざわつかせる…燃えさせるものだった。

団長がいなかったら、テイオナと共に興味を持つてたかもしれないわね。

その時、白兔は寝ていたが大蛇に巻き付かれる夢を見て、うなされていた。

しかし、横で寝ていた春姫が慌てて、ポンポンすることによってようやく安眠できた模様…。

団長による愛の発破の「ベル・クラネルの真似事は君たちにとつて荷が重いか？」は
すごく堪えたわ。

当時レベル5である私が、レベル1であるベル・クラネルに負けるわけにはいかない。

そのおかげで『穢れた精霊』を倒せたのだから。

あの戦いを見てなかったらと思うと、ぞつとするわね。

初中層で18階層到着は血を騒がせてくれたわ。

あの戦いでレベル2にランクアップし、18階層まで一気に来るとわね…。

【アポロン・ファミリア】戦争遊戯は、凄かったわ。

レベル3のヒュアキントスとタイマンで戦い、倒すなんて。

アイズとテイオナがたったの数日で、特訓しただけで？

…私もその特訓に入りたかったわ。

その後は…ああ、歓楽街で偶然会ったわね。

何か、私達アマゾネスに対して妙に怯えていたわ。

後でテイオナに聞くと、「イシュタル・ファミア」の娼婦戦士に追いかけて回されていらしいわ。

何があつたのよ…。

その後、「イシュタル・ファミア」が「フレイヤ・ファミア」によつて壊滅されたらしいけど、まさかベル・クラネルが関わっているんじゃないでしょうね？

そして…『異端児』の件…。

あの童女を庇つたのは驚いたし、喋るモンスターであることにも驚いた。

私たち「ロキ・ファミア」と一時敵対するとは思わなかつたけどね。

あー！あの「不冷」め！風の魔剣がなかつたら捕らえていたのに！

しかもベル・クラネルとあのムカつく黒いミノタウロスの一騎打ちに割り込めないよ
う「女神の戦車」が邪魔しやがって！

あの糞猫め！今度会つたら殺す！

今回の神フレイヤの魅了騒動は腹立つ！

私たちを魅了して、ベル・クラネルを奪うなんて気に入らない！

神ヘステイアによつて解除された後、アイズとテイオナと一緒に「フレイヤ・ファミ

リア」ホームへ殴り込んでやったわ!

でも、そこにいたエルフとアイズがいがみ合っていたのは、何でよ!

味方じゃない!

彼には……本当に悪いことをしたわね……。

だから、今回の団長の判断は納得できない。

いつもの団長なら、あの豚の話なんか鼻であしらうはずなのに……。

何で……? 何かを焦ってる……?

……? 妙に静かね……?

「ねえ、ナルヴィ、シャロン、いる?」

……。

おかしい……。初めからいなかったような……。

……もしかして、敵!?

「誰だあ! 出てきやがれ!」
「フレイヤ・ファミリア」か!?

……。

気のせい……? ううん、そんなはずがないわ。

さつきまで、そこにナルヴィとシャロンがいたもの。

あの2人、仮にもレベル4だもの。

簡単にやられるわけがないわ。

……。

トイレに行ってるだけかしら？

でもあの2人なら私に声をかけるはず。

または、もう既にやられてる…？

いけない、いけない。

【ヘステイア・ファミリア】を見張らなくちゃ。

あいつらのことは後でもいい。

先程、神ヘステイアと【白兔の脚】と【不冷】が戻ってきて以来何も起こらない…。

ただ、あの三人以外に誰かいたような…？

「……ガハッ!? あ……ぐっ……」

何だと……!

いつの間に背後につ…。

この!

…ダメだ……!

首を完全に極められている…。

そんな…レベル6の私が…ここまで接近許すなんて…。

【猛者】か…？

いや…あの猪は…こ…こま…で

器…用じゃ…ね…え。

そ…これに…こいつ…

にん…げ…んじゃ…ない？

つめ…た…い。

だ…んちよ…う。

第73話 大切断、收拾。

「けつ！てめえとはそんなくらいにしてやる。」

「それはこっちの台詞だー！バカ狼ー！」

先程までベートと模擬戦していた。

ほとんど八つ当たりだけどね。

ベートも同じ気持ちだろうなー。

あー！むかつくー！

ベートじゃないけど、何かむかつくー！

どうして、どうしてアルゴノウトくんに味方しちやダメなんだよー！

まだひどいことを言ったことを、謝ってないのに…。

嫌われたくないよお…。

謝りたいよお…。

今からホームへ行つて謝りに行こうか…？

あーだめだー。

ロキとフィンが戦争遊戯を「ヘステイア・ファミリア」へ仕掛けに行ったんだ…。

……でも、どうして？

いつものフィンなら、ロイマンとかいうやつ一蹴しているのに？

何か…フィンらしくない。

戦争遊戯で、どうしてアルゴノウトくと戦わなきゃならないんだよ…。

【フレイヤ・ファミリア】と戦うためと言っているけど、どっちみち「ヘステイア・ファ

ミリア」と戦わなきゃならないんじゃない？

そりゃあ、レベルも戦力もこっちが上だけだよ…。

なーんか釈然としないな…。

ん？みんな集まって何してんの？

聞いてみよつと。

「ねー、どうしたのー？」

「あ…テイオナさん。」

ラクタ…クルス…スターク？

「こんな夜更けにみんな集まって、何してるのー？あれ？ナルヴィとシャロンは？」

「テイオナさんと…「ヘステイア・ファミリア」の監視に行きました…。」

ええっ!?!そこまでする!?!

ますます、フィンらしくない……。

「監視つて、まだ戦争遊戯始まっていないのに…。」

「ティオナさんは…今回の…戦争遊戯をどう思います…?」

どう思うって…?

「俺の場合は、『デメテル・ファミアリア』の眷属を救うためにナルヴィと回ったんだけど、あの『白兔の脚』がいなきやかなりヤバイことになっていたんだ。『白兔の脚』がいたおかげで全員救うことができ、無事に離脱できたんだ…。」

ああ、そうか…クルスはナルヴィと『デメテル・ファミアリア』の眷属を救出しに行つたんだ。その時にいたんだ…。

「クノツソスの戦いで、あの『汚れた精霊』が強化された時自分はもうダメだと思いましたが…。けど、あの鐘の…大鐘楼の音が聞こえて立ち上がらなきやと思つたんです…。」

うんうん、あの鐘の音は綺麗だったな…。

やる気が出てきたというか…みなぎってくる感じだったな…!

「私…あの子、『白兔の脚』の戦いぶりを間近で見ました…あの…『汚れた精霊』が寄生した竜を倒すところを…。」

おおー! いいなー! 私もその場にいたかったな…!

かつこよかっただろうなあ…。

「私は…、『白兔の脚』がほんの…ほんの数分で貯めた一撃であの恐ろしい竜を消し飛ば

したんですよ！跡形も残さずに！団長たち…アイズさんたちには悪いけど…、私は…あの子が『英雄』…『本物の英雄』を見たんです…！」

「お、おい！ラクタ、テイオナさんに失礼だろ！」

「あ、す、すみません！生意気な口を…」

「うんうん、わかるよ。ラクタの言うことも。私…うん私たちは半年前から知っているからねー！」

「「え？」」

そして私は、アルゴノウトくんがレベル1の時に、目の前でミノタウロス強化種を撃破したことを細かく話した。

「ミノタウロスを倒したと聞いたのですが…、何ですか！それは…」

「規格外にも程あるだろ…」

「すごいなあ…」

えっへん！

アルゴノウトくんはすごいんだぞー！

「今回の戦争遊戯は…何で【フレイヤ・ファミリア】じゃなく、【ヘステイア・ファミリア】なんですか！」

「俺…【白兔の脚】にまだ何もお礼も言っていないんだぞ…。何も仇で返さなくてもいいん

じゃないか…!？」

「私…嫌だよ。あの子に剣向けるなんて…。」

…みんな、アルゴノウトくんに随分と影響受けているなあ。

まあ、私のもつとだけどね!

「私も納得してないよ…。戦いたくないよ…。けど、これがアルゴノウトくんを守る唯一の手段だとフィンが言ってたし…。」

「私と一緒にいたラウルさんも納得してませんでした…。けど、「団長のいうことだから」と言っていました。けどそれは私にでなく、無理矢理に自分を納得させていたように見えました…。」

「あれ?…そういうえば…ラウルとアキはどうしたのー?」

「団長より、リヴェリア様へ至急帰るように、とダンジョンへ向かいました。」

え?…リヴェリアへ?

至急につて…フィンは何を焦ってるんだろ…?」

「団長は何を考えているんだ…。」

「今からでも【フレイヤ・ファミリア】へ殴りこむ気はあるぜ、俺は。」

「私もですよ!」

あー…やばいなー。

これ、簡単に収まりそうもないなあ。

リヴェリアが来ても…ダメかも…。

よしっ！ここはあたしらしく…。

「みんなっ！模擬戦しよう！」

「「え？」」

「うーんうーんと考えるより、体動かして発散しよう！あたしもさつきまでベートと模

擬戦してたし（真剣で、だけど）。」

「そうだな…うん、そうしよう！」

「あたしもレベル3になったばかりだけど…あの時の光景をもっと間近で見たいために強くなりたい！」

「お前ら…脳筋すぎるだろ…。だが、そうした方がウチらしいな。」

ふー…何とかなつたかな？

けど…この調子じゃ戦争遊戯まで収まりがつきそうもないよ…。

フィン、どうするの…？

あつ…まだアイズの問題があつた…。

リヴェリアが戻ってくるならレフィーヤも戻るよね…？

もっと揉めるような気が…戦争遊戯だけでなくアルゴノウトくん絡みで絶対に揉めるよね？

うーん…困ったな…。

ああ！もう！

あの時「フレイヤ・ファミリア」へ殴り込んだままで、やっちやえばよかつたのにー

！

第74話 凶狼、自問。

糞がっ！「ヘステイア・ファミリア」に戦争遊戯だとっ！

フィンンの奴、何を考えてやがる！

【フレイヤ・ファミリア】から喧嘩を売ってきたんだらうがっ！

豚の言うことなんぞ無視すりゃいいだろうが！

何ビビってやがるんだ！

ジジイもジジイだ！

あいつの戦いも見たこともないくせに、偉そうにしやがって！

何が【重傑】だ！

何がレベル6だ！何が第一級冒険者だ！

あの美の神の魅了に堕ちた俺たち：【ロキ・ファミリア】が…。

俺は…自分が情けねえっ！

よくも、あの糞猫がっ！

【フレイヤ・ファミリア】どもめっ！

絶対ブチ殺してやるっ！戦争遊戯なんか知ったことかっ！

あいつの…、あの兎野郎の、クラネルのことを忘れさせやがって！

…あいつはどこまでもすげえんだ。

弱えくせに、絶望に向かって立ち上がりやがって…。

『弱者の咆哮』を何回もあげやがって！

レベル1のくせにレベル2上位相当のミノタウロス強化種を、

【アポロン・ファミリア】のあの変態野郎…レベル3を…、

【異端児】で俺たち【ロキ・ファミリア】と敵対し、一矢向けやがって…、

俺やバカゾネスどもとやり合った、黒いミノタウロスとタイマンしやがって…、

クノツソスのあの大鐘楼の音…いや『弱者の咆哮』を…、

そして、美の神の魅了をもものともしなかった上、孤独になつても折れなかった…。

それに比べて、俺たちは…俺は…。

畜生！畜生！畜生…！…っ！

それに、あいつは俺のような奴じゃねえ。

【アポロン・ファミリア】の戦争遊戯前に、『焔蜂亭』であの変態野郎たちと揉めやがった時だ。

あいつは自分をコケにされても、自分の主神をコケにされるのは許さなかった。

それであいつは、『雄だ。雌や弱いものを守る奴だ』と知った。

だから、らしくもねえ真似をしてしまったがな。

クラネルとたまたまだが、『豊穣の女主人』で相席になることがあった。

俺らしくもねえ世間話をしたが、なかなか悪くなかった。

こいつと同じファミリアで、語り合うのも悪くねえな、と思つたぐらいだ。

ちっ…。

さつきまでテイオナとやり合つてたから、少しは頭が冷えたぜ…。

テイオナはバカだが、今回のことわかつてやがるな。

テイオネは…フィンに従つてるが、少しは疑問に持つてるな。

ガレスはクラネルとはそんなに話したことないから、何も感じねえだろうな。

アイズは…相部屋だと？あいつ意味わかつてんのかよ？

それ以前に、あいつ自覚してねえな…。

ババアが戻るのを待てだと？

ババアがフィンの案を受け入れるとも思えねえがな。

それにあの女も今回のことを聞いたらブチ切れるんじゃないやねえか？

なんだかんだと言って、あの女はクラネルのことを結構見ているからな。

フィンの奴…。

あいつ、何焦つてやがんだ？

クノツソスで、クラネルに美味しいとこ取られたからか？

フレイヤの魅了に抗うことができなかったからか？

はっ！【勇者】とあろう者が情けねエ！

【ヘスティア・ファミリア】を助けるためとか言ってるが…、ありや嘘だな。

フィンは「ヘスティア・ファミリア」を…クラネルを下して、自分の手の内に収めた
いからじゃねえのか？

名を上げるなら、強い奴を倒した方が手っ取り早いからな。

ただ…クラネルはまだレベル4だ、まだ第二級冒険者だ。

『保護』とかいいながら、要はクラネルは自分より下だという事実が欲しいだけじゃねえ
のか？

クラネルがやったことは、全て自分が指示したことにしたかつたんじゃねえか？

…あり得るな。

あの、フィンならやりかねえ。

振り返ってみれば、クラネルがやったことはどれもこれも、目を瞞るものだからな！

半年だ！たったの半年で、ここまで名を上げやがった！

半年前に駆け出した奴は、もう俺らの背後まで追いつきやがった！

フィンやアイズ…、俺にできたか？

いいや、できなかった！絶対にな！

その上…あいつのファミリアは誰一人も失ってねえ！

レベル1、2に関わらずだ！

それに比べてウチはどうだ？

最強派閥といいながら、俺が入団しても多くの犠牲を払いやがった！

特に…クノツソスへ初めて入った時に、リーネたちを…何人か失いやがった！

あの時に、俺が「足手纏いは要らねえ。邪魔だ」と言っただんだ！

それをあいつらは蹴った、だから死んじまったんだ！

それだけじゃねえ！他にも何回かあった。

畜生…！

しかし…フィンの奴、『異端児』の件でマシになったかと思っただが…。

ありや…駄目だ。

あの程度で、焦るなんてな…。

今回でフィンの底が見えたな…。

…改宗を考えるべきか？

…改宗？…何故、そう考えた？

俺がレベル6に至ったからか？

いや違う…、『弱者の咆哮』を聞かされたのは、これまでもクラネルだけだ。あいつは立ちやがった。

『弱者』から脱却し、『強者』への道を歩いたのは、あいつが初めてだった。

そうだ…あの猛牛の一戦からだ。

俺は…あいつに…、『憧れ』を見たからかもしれない…。

もし、あいつがうちに「ロキ・ファミリア」に入っていたら、リーネたちを失われずにすんだのか？

クノツソスで…いや、もつと前にあのエルフ…フィルヴィスを救えたかもしれないのか？

あいつによって、俺たちも今よりもつと強くなっていたかもしれないのか？
ちつ…俺らしくもねえことを考えちまったぜ…。

ん？あいつら…何やってんだ？

バカゾネスに、ラクタ、クルス、スタークか？

模擬戦か…。

考えるのはやめだ。俺も入ってやる！

「おい！てめえら！俺も混ぜろ！」

第75話 重傑、追惜。

ふう…、フィンの奴やつと休んだわい。

フィン、焦つとるな…。

あの若造のことについてかなりこだわつてたようだが…。

中層初突入で、18階層まで来た時は面白い若造と思つたが、ここまで面白いと思わなかつたわい。

やはりあの時に、”スモウ”でもとつとけばよかつたかのう…。

そもそも、儂はあの若造の戦いは【アポロン・ファミア】の【太陽の寵童】ヒュアキントスしか見とらんわ！

確かにあの戦いは見事じやつた。

だが、あやつらはその前のミノタウロス強化種の戦い、そして『異端児』の黒いミノタウロスの戦いも見とるではないか！

ずるいのも程があるわ！

それを見ながら酒でも飲みたかつたわい…。

非常に惜しいことをしてしまうたわ…。

若造は本当に面白いのう…。

レベル3をもものともせずタイマンで破ったり…、

『異端児』をモンスターと知っていないながらも、優しさを持ち彼らを助け…、

クノツソス戦で大鐘楼の鐘を鳴らし、儂らを奮い立たせた上、『汚れた精霊』によつて侵蝕された竜…ニーズヘッグを消滅させたり…。

本当にたつたの半年で、ここまで来おつた。

本当にたつたの半年で、ここまでかきまわしてくれるわ。

儂らや【フレイヤ・ファミア】も、最強派閥の立つ瀬がないわ！

奴ら…【ゼウス・ファミア】（ヘラ・ファミア）が聞いたら嘲笑うであろうな…。

これじゃ、どっちが『英雄』かわからんわい。

何が最強派閥じゃ、何が英雄候補じゃ。

何が【重傑】じゃ！

今回の件もそうじゃ。

神フレイヤの魅了をもものともせず、オラリオで孤立無援になりながらも自分を押し通したわい。

まことに、天晴れじゃ…。

だから、柄にもなくベートと同じく【炎金の四戦士】へげんこつをいれてやったわい。

…だから、フィン、奴焦つとるのか？

自分にはないものを多く持つとる、あの若造に…。

負けたくはない、という気持ちは分かるがのう…。

既に勝負あつた、のではないか？

クノツソス戦で、邪神ディオニュソスへ一矢報いたのは、確かにお主の采配じゃ。

だが、それはあの若造を認めたからではないか？

あの少年の…：下界の可能性を秘めている、あの若造を期待してたのではないか？

何故、それを今になって…。

ああ…、そうか。

フィン、お主はあの若造に嫉妬しておるのじゃな。

神フレイヤの魅了を弾いたことではない。

あの若造の折れぬ信念に…：純粋な思いに…。

『異端児』を見捨てなかつた優しさに…。

無駄じゃな。

フィン、お主は既に汚れきつておる。

策謀、戦略、勘…：などで、オラリオいや世界で今のお主に並ぶ者はおらんじやろう。

お主は確かに多くを救つた、だが同時に多くを切り捨てた。

『27階層の悪夢』…、あれを切り捨て多くの邪神を捕らえた。

だが、それが怪人フィルヴィス・シャリアを産んでしまったのじゃ。

それが今回の邪神ディオニユスの野望を一段と近づけてしまった…。

今回の異変の原因は直接的ではないが、農らにもある。

それだけではない。

7年前の大抗争の立役者である、あの娘共を…。

あの時、あやつらが下層へ行くと言った時に農だけでも行けばよかつたんじや！

何故、農らより若い奴らが逝かねばならんのじや！

ノワール達に申し訳がたんわい…。

あの娘共は…、農らより『英雄』になる素質があつた。

あの「ヘラ・ファミリア」の中でも異端であり才禍の怪物でもあつた、【静寂】のアル

フィアに大きな打撃を与えたのだからな…。

そういうや…そろそろあの娘共の命日か。

また、酒樽をいくつか持つて下層へ行かねばならぬな。

せめてもの手向けではない。農らの償いではない。

先に逝ってしまったお主らに、酒を奢らなければならぬからな。

約束したからう…。

あの娘共の中で唯一生き残った【疾風】…。
復讐に走った哀れなエルフか…。

奴の暴走のおかげで『暗黒期』が終わったのは確かじゃ。

加勢しようとしたリヴェリアを止めるのに、命がけじゃった。

リヴェリアの奴め、ホームで『レア・ラーヴァテイン』を使うとは…。

あん時は焦ったわい。おかげでフィンと儂は死にかけたんじゃがな。

【疾風】の今は、ミアんとここで働いておるのようじゃが、ミアならまず大丈夫じゃろう…。

いかな…過去に引きずられておる…。

今回の戦争遊戯の目的は「ヘステイア・ファミリア」を下し、「フレイヤ・ファミリア」

と決着をつけるか…。

だが、テイオナやベートたちは納得しておらぬのう。

テイオネはフィンが何とかうまくやるじやろうな…。

それにアイズの発言には驚いたわ。

…あやつ、自分で気づいておらぬのか？

既に、あの若造に惹かれておることに。

儂らが長年育てても戦闘以外に興味を持たなかった、あの娘がな…。

リヴェリアは許すのか？アイズに対して過保護じゃろう、あやつは。

それ以前に、リヴェリアは今回のフィンの考えに、賛同できるとは思えん。

あやつは根っからのいけ好かんエルフじやからな。

またホームで暴れるかもしれんのう…。

厄介なエルフじや…。

今回の戦争遊戯はどうなるのかのう…。

フィンは負ける可能性が高いというが、あの若造がどうやって、最強派閥である儂らと「フレイヤ・ファミア」をどう下すのかが楽しみじやな。

もし…あの若造がそれを成したなら…、わしら老兵はそろそろ去るべきかのう…。

世界は英雄を求めている…か。

む…？何じや、この騒ぎは…。

何か揉め事か？

やれやれ、一難去ってまた一難か…。

リヴェリアめ、はよう戻ってこんかい。

自分だけダンジョンで楽しんで、儂だけで苦労させる気か！

深層で魔石稼ぎした方がなんぼかマジじやわい！

第76話 勇者、焦燥。／不冷、予感。

おかしい…。

テイオネに指示してから2日経つ。

何故、一つも連絡が来ないんだ？

テイオネの性格上、1日どころか数時間も空かないはずがないんだが…。

【ヘスティア・ファミリア】に何かあったのか…？

いや、何かあったなら大騒ぎになるはずだ。

何しろ、今の注目の的だからね彼らは。

「フィンよ、【ガネーシャ・ファミリア】のシャクテイとテイオネ、ナルヴィ、シャロンが来たぞい。」

「…何でシャクテイが来るんだい？」

「儂が聞きたいわい…。」

「まあ、いいや。通してくれないか。」

—————

「团长おお！申し訳ありません！」

「申し訳ありませんでした！」

「三人とも落ち着いてくれ、何があつたのか報告してくれないかい？」

「は、はい……。」

三人とも、僕が指示した日に何者かによつて気絶させられたとのこと。

「何だつて……？君が背後から気づかれずに首を締められただつて？」

「お主がか？ありえんのう……。オツタルでもないし……。」

「わかりません……。」

「私達は気づいたら、『ガネーシャ・ファミリア』の牢屋にいました……。」

「目覚めたのは今朝でした……。」

あり得ない！他の二人ならともかくテイオネが落とされるなんて！

「ヘステリア・ファミリア」か？

いや、ベル・クラネルはそんな真似をするような人ではない。

リリルカ・アーデもだ。

仮にできたとしても、ヤマト・命か？

いや、レベルが違いすぎる。

じゃあ！誰だ！

「フィン、落ち着け。」

「……! ああ、すまない。テイオネ、ナルヴィ、シャロン、ご苦労だったね。下がっていきよ。」

「は、はい、申し訳ありませんでした!」

「申し訳ありませんでした!」

彼女らが退室してから、シャクテイへ目を向けた。

「何で、彼女たちが牢屋にいたんだい?」

「それは私が聞きたい。今朝牢屋の点検をしようとしたら、彼女たちが牢屋にいたんだ……。」

「何じゃ、それは……。」

「団員の全員へ聞いた。誰も心当たりがないそうだ。」

「じゃあ、何か? 何者かがテイオネ達を気絶させ、彼女たちを担いで〔ガネーシャ・ファミリア〕へ忍び込んで牢屋に放り込んだ、とでも?」

「そうとしか言えない……。牢の点検をしたのが、一昨日の朝だったからその間にとしか考えられない。」

「あやつらが問題を起こして、ぶちこまれたとかは?」

「それもないと言っただろう。団員全員心当たりがないと。」

馬鹿な……。レベル6のテイオネを落とした上、3人を担ぎ、第一級冒険者が多く揃っ

ている「ガネーシャ・ファミリア」へ誰も気づかず、奥の牢屋にそっと入れて去ったと？

そんなの…オツタルでもできないぞ！

「…！フィン！おい、フィン！」

「！あ、ああ、すまない、ガレス。…シヤクテイ、彼女たちの釈放及びここまで送り届けてくれてありがとう。」

「いや、気にしないでくれ。…ところで彼女たちは何か任務を請け負っていたのか？」

「…ああ、悪いけどそれ以上はうちの機密なんだ。すまない。」

「そうか…いや書き置きがあつてな。」

「は？」「何じゃと？」

「これだ…。『この者たち、覗きの現行犯につきここへ投獄せり』と。」

「……………」

「ハスティア・ファミリア」しか考えられないじゃないか！

だが、あり得ない！

彼らの中にそこまでの凄腕がいるとは思えない！

「…そうかい…。お手数をおかけしてすまなかつた…。」

「では、私はこれでな。」

「ああ、シャクティ。【ガネーシャ・ファミリア】は今回の戦争遊戯には参加するのかい？」

「……私達は【ヘステティア・ファミリア】に大きな借りがある。それはわかっているだろう？」

「もちろんだよ。ただ、今回は中立を守って欲しい。でないと、【ロキ・ファミリア】は【ガネーシャ・ファミリア】に今後協力できるかは保証できない。」

「【勇者】、それは脅しか？」

「いいや、忠告だよ。【象神の杖】。」

「……………」

「……私達はオラリオの治安維持を担当している。それはお前ら【ロキ・ファミリア】にも【フレイヤ・ファミリア】にもできないだろう？だから、まだ迷っている、と言っておこう。」

「…そうだね。その通りだね。」

「先程の脅しはガネーシャに伝えておこう。…残念だよ、【勇者】。」

ボタン

「フィン…、何故あのような事を言ったんじゃ？今まで築いてきた信頼が、先程で崩れおったぞ。」

「……。」

「フィン、何を焦っておる？」

焦る？僕が？

「…すまない、どうかしてたようだ…。」

「シャクテイへは、儂からお詫びしておこう。」

「助かるよ…。」

僕としたことが…。

シャクテイには悪いことをしてしまったな。

……一体、「ヘスティア・ファミリア」で何が起こっているんだ？

ティオネたちを呼んで、当時の状況をもっと詳しく聞かなければ。



く「ヘアァイストス・ファミリア」の椿の仕事場く

「…というわけだ。ベルのあのスキルに対しては大剣を多く用意した方がいいと思うんだ。」

「そうじゃのう。不壊属性でも駄目か。なら威力重視の大剣を複数用意しておこうか。」

「そうだな。」

「あと、ヴェル吉よ。このドロップアイテムどうするんじや？」
ん？何だ、このでかい爪は…。

「何だ、これは？」

「【白兔の脚】と【疾風】が倒した、原因不明のモンスターのドロップアイテムじゃ。」
「待ちなさい、椿。貴女は人様のドロップアイテムを横取りしたの？」

あ、ヘファイストス様が怒っているぞ…。

「い、いや違うんじや。ほ、ほらあの二人が大怪我をしたから、ひとまず手前が預かってこうと…。」

「嘘ね。」

「…すまぬ。見たこともない素材でつい…。」

「椿、お前…。」

気持ちはわかるが…、それはダメだろう…。

「椿、これは懲罰ものよ。」

「…すまぬ。」

「はあ…、ヘステイアには私からお詫びしておくわ。貴女、どんどん借りが増えているわよ。」

「お手数をおかけしてすまぬ、主神様よ。いくらでも無料で武器打つと伝えといてく

れ。」

「貴女の武器はそんなに安くはないでしょうに…。」

【「ヘアイストス・ファミア」団長のオーダーメイドって、数億ヴァリスはするよな…。」

俺もそのくらいまで腕を上げないとな！

「ところで、これは…確かに見たことのない…いや【ゴライオスの硬皮】に近いな…。」

「ああ…ダンジョンのイレギュラーの…。」

「主神様よ、ヴェル吉。これはかなりの曲者じゃぞ。」

「どういう意味だ？」

「このハンマーをな…こうよ！」

「ちよつと!?!」「樁!?!」

お、おい！爪が砕け…ない？

逆にハンマーが切れたあああ!?!

「なっ…!?!」

「この爪にかかるとな、何でもスパスパ切れるんじや。オリハルコンでもアダマンタイトでもな。」

「異常ね…。」

「これもか…下手に加工するよりそのまま武器として使った方がよさそうだな…。」

結局、「ゴライオスの硬皮」と同じ扱いか…。

一体、何でできているんだよ…。

「それしかあるまいな…。」

「取っ手をこうして…逆反りの剣になるわね…。」

「よほどの剣の達人でしか使えんな。一歩間違うと自分も簡単に切れてしまうぞ。」

命か？ いや、これは逆反りだな…。

ベルか？ うーん…。

「大剣は、店にある大剣を多く用意すればいいわね。」

「そうじゃな、時間もないことだからのう。」

「そういや、思ったんだが…。」

「ところで…椿は誰に対して武器を打つんだ？」

「ううむ…あのメイドと執事は？」

「いらなと思うわよ。彼らは。」

「…俺もそう思うぜ。アレは存在自体が反則だろ…。」

アレそのものが武器だからな…。

「なら、保留ということになるかの。」

「そうだな…。このドロップアイテムはベルとあのエルフが揃ってから、渡したほうが

よさそうだな。」

「うむ、悪いことをしてしまったのう…。」

「そうね…。ねえ、ベル・クラネルは今、何しているの？」

「セバスとメイ、それと…いや【悲観者】に治療してもらいながらしごかれてるぜ。」
(バーチエについては黙っているようにと言われていたからな、あぶねえ)

「…………そうわかったわ(デメテルが何か女神連合を作るとか言っているけど…、恐らくメイかセバスがデメテルに接触して何かしたかもしれないわ。それにしても動きが早いわね…。)」

「それに、ヴェル吉よ。「ヘルメス・ファミリア」が何か珍妙な店を開いたようじゃぞ。」

「は?」「また何かやったの…。ヘルメスは。」

「いや、その店がな…。」

「何だっ!?何でそんな店を…?」

「うわあ…。ヘステイアがキレルわよ…。」

何でそんな店を…?

すごく嫌な予感がするぜ…。

第77話 劍姫、満足。

モヤモヤする。

何かわからないけど、モヤモヤするしイライラする。

ダンジョンに…潜る気がない。

モンスターを…斬る気がない。

ベルに…会いたい。

あの白い笑顔を見たい。

あの白い髪をモフモフしたい。

【ヘスティア・ファミリア】ホームをそつと見張つたけど、ベルはいなかった。

朝早くからどこかへ出掛けて鍛えてるみたい。

後をついたらフィンたちに怒られるよね…？

【フレイヤ・ファミリア】へ单身殴り込みに行こうと思つたけど、何か取込中で忙しいみたい。

「女神祭の続きを、じゃが丸くん巡りをしようかな？…ううん、ダメ。そんな気になれない。」

フィンが「ヘスティア・ファミリア」へ戦争遊戯を仕掛けた日から、おかしい。あれが間違っている？

フィンの判断で間違ったことは…少ないはず…。

部屋をこれでもかとピカピカに掃除して、ロキやフィンには呆れられたけど汚いよりはマシなはず。

アキにベッドを変えたほうがいいのかと聞いたら、困った顔をしてリヴェリアが来てからにした方がいいと。

リヴェリアなら答えてくれるはず。

けど、何故だろう？

リヴェリアも困った顔しそうな気がする。

あの日から、気分がスツキリせずホームにずっといた。

ティオナとベートさんは模擬戦をずっとしていた。

私もしようと思っただけど、そんな気になれなかった。

そんな私を見かねたロキが『気晴らしに外でも出たらどーや？じゃが丸くんでも食ってきーや。』と言ってるけど…。

やはり、そんな気になれない…。

はあ…。

………?

何だろう、行列が…すごい？

女の人ばかり…女神様も？

何のお店…？

【ヘルメス・ファミリア】 主管…

「『ベル・クラネル』グッズ専門店…!？」

これだ！

私は行列に並んで、数十分後にようやく店へ入れた。

そこには、私の求めるものがあつた。

そこには、天国があつた。

「ベルの絵…ベルのウサ耳ペン…ベルのウサ耳柄パジャマ…ウサ耳ベルのぬいぐるみもある。…さいこー。」

全部買おうと思つたが、各商品一人一点までとのことだつた。残念。

買い占め、転売禁止だつた。

転売って何？

「ここで買ったものを他で高く売ることですよ。そんなのしたら出入禁止ですからねー。」

そんなの絶対にしない。

とりあえず全種類購入した。30万ヴァリスもしたけど…。

またダンジョンへ潜って、魔石稼ぎすればいいし。

店員さんから、何か金色のカードをもらった。

なににな…

”『ベル・クラネル』ファンクラブ ランク：ゴールド”

とあった。

ゴールドって何？

「お客さんはほとんどの種類を買ったんですよ？ 貴女はベル様の熱烈なファンとして認められたという証がこのゴールドカードなのです！」

はあ。

ファンって？

「ベル様を応援する人のことです！」

ほうほう。

そのゴールドカードを持つ意味は？

「次回購入するときに10%引きになりますよー。更に限定グッズを買う時に優先してくれますよー。」

!?

「また、限定商品や新商品を入荷しますよー。楽しみにしてください。」
絶対に買う！

「ありがとうございますー。次回もおいで下さいなー。」
まんぞく。

とりあえず、この全商品を部屋に置いて愛でよう。

絶対に愛でる。

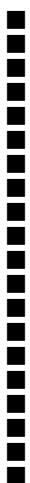
さっさと帰ろう。

そしてこれらを眺めて寝る。

そうしよう、ふんふん。

その日、ホームへ帰ったアイズが妙に上機嫌なことをロキとフィンが不審に思ったが、今は気にしないことにした。

しかし、後日彼らはそれを後悔することとなった。



↳ 『ベル・クラネル』グッズ専門店の店員控え室↳

「ロキ・ファミリア」の「剣姫」：全種類の商品購入しました。」

「会長に報告を。…ゴールド会員1名追加つと。」

「それにしても…戦争遊戯の敵対派閥が購入つて…。」

「それも狙いの1つらしいよ。すごいわ…会長。」

「違うわよ。会長の背後に絶対の力を持つ御方がいて、その御方の案らしいわよ。」

「どこまで考えているの…その御方は。」

「そんなのどうでもいいわ。私達はベル様を応援する会…ファンクラブの幹部よ！」

「…そうね！」

「でもこの店だけで回すのは、さすがに限界だわ…。」

「大丈夫よ。会長はそれを見込んで、他の支店も作ることを検討しているらしいわ。」

「…さすが、会長！」



く「ヘスティア・ファミリア」ホームく

「我が神、報告いたします。「ロキ・ファミリア」の「劍姫」、予想通りゴールドになりました。」

「そうですか、予想より早かったですね。ローリエさんありがとうございます。」

「これしきのこと…。これは本日売上でそちらの取り分の30万ヴァリスでございませす。」

「それはそれは……。ではこちらを差し上げましょう。本日の使用分です。」

「おお……これはあの御方の……感謝いたします。他支店を作るのに忙しいため、これで失礼します。」

「「……………」」

「エイナさん、お聞きの通りです。この30万ヴァリスを、ファミリアの資金に加えて運用をお願いしますね。」

「あ、はい。税金の申請はしているのかしら？あ、納税証明書がある。大丈夫みたいね。」

「エイナ様エイナ様、そっちではありません！ファンクラブとやらに突っ込んで下さい！」

「さ……30万ヴァリス……たった1日で……。さすがベル様……」

「リリさん……私はもう達観することにしました。ベルくんのためになるなら、もう何でもいいよ。」

「まだ入団して数日なのに、リリより馴染んでいませんか!？」

「エイナ様……すごいです……。」

「リリさん、春姫さん、ファンクラブから見たら私達は垂涎の的よ。ここは甘んじて受け入れましょう。」

「それはそうですが……」

「ベルくんのスキルからして、ファンクラブは非常に大きい。なら問題ないわ。ええ、問題ありませんとも……私も行きたい！」

「めっちゃ気にしてるじゃないですか！」

「まあまあ、貴女方が気になさるのは当然のことです。……ところで、ここにグッズの全種類のサンプルがありますが、いりますか？」

「「いりますー！」」

そして、三人はゴールドカードより上の、プラチナの更に上のホワイトカードを手にし、ホクホクだったようだ。

ヘステイアは、バイト先で日中と働いていたためファンクラブについては全く聞いてなかった。

「ぬあー！今日はいつもよりめっちゃ多いな！何でだろう？」「ヘステイアちゃん、早く揚げなよー！」はいい！」

ヘステイアのバイトしているじやが丸くんの店で並んでいる客の大多数が、ファンクラブの会員であることを知らずに、働いているのであった。

会則の1つに、「【ヘステイア・ファミリア】主神ヘステイアに貢献すべし。」と書いてあるためであった……。

第78話 妖精王女、後悔。

私は今、18階層にいる。深層からの帰りだ。

今回の目的はレフリーヤがレベル4になったから、ランクアップのズレとスキルの確認のためだ。

本来なら、下層までの予定だったがレフリーヤのスキルがあまりに強力すぎるため、深層まで潜っていった。

その甲斐もあり、ズレも直りスキルの確認が十分にできた。

更に魔石やドロップアイテムも豊富に獲得できた。

次の遠征の軍資金の足しにはなるだろう。

ロキの酒代にならないよう、しっかりと管理しないとな。

「ふう…やつと18階層か。思ったより深く潜ったな。」

「あ、はい。リヴェリア様、ありがとうございます！」

「気にするな、お前が強くなると私も嬉しい。戦力の幅も広がるしな。」

「えへへ…。」

「これで、ようやく本腰入れて座学に入ることができな。」

「えっ…、あの…今までののは一体…？」

「何を言っている？基本だぞ。これからが本番だぞ。」

「…そ、そうですか…（あれが基本？嘘でしょ…。アイズさん、助けてええ！）」

レフィーヤは引きつっていたな…。

はあ…あの程度の座学で根を上げるとは情けない。

レフィーヤはとぼとぼとして、テントへ戻っていった。

そんなに座学が嫌なのか…？

困った奴だな。

「リヴェリア様…。」

「ん？アリシアか。どうした？」

「その…レフィーヤですが、何か大きく変わったような…。やはり、あのフィルヴィス・

シヤリアの件でしょうか？」

「しっ！声がでかい…。（気づいてないな）…そうだ。彼女の影響がレフィーヤを強くさ

せたようだ。」

「…そうですか。何か一皮向けて一層頼りになりましたね。」

「ああ…そうだな。喜ぶべきなのだが、素直に喜べないな…。」

「え…？どういうことでしょうか？」

「いや、すまない。世迷い言を言ってしまったようだ。お前も早く寝ろ。明日は早いぞ。」

「あ、はい。すみません。これでお邪魔させていただきます。お休みなさいませ。」

「ああ、お休み。」

いかんな…つい本音をこぼしてしまった。

確かにレフィーヤは、あの戦いをきっかけに強くなった。

しかし、大きな犠牲を払ってしまった。

同胞のフィルヴィス・シャリア…、邪神ディオニュソスの眷属であり、怪人。

第一次クノツソス侵攻で、神ディオニュソス、いや神ペニアを送還させたことで恩恵を失ったフリをして自分をわざと殺させた…ことによつてレフィーヤを戦線離脱させた。

彼女はレフィーヤを戦線離脱させて、第二次クノツソス侵攻戦に参加させないようにした。

しかし、それが精神崩壊寸前のレフィーヤを覚醒させるきっかけになってしまった。

前々から怪しいと思つてたが、それに対して追求しなかつた我々にも責任がある。

決定打となつた、クノツソスに初めて潜つた時に気づけば、あのような悲劇が起ころなかつたかもしれない…。

いや、違う。もつと前だ。

レフィーヤやベートから聞いた話では『27階層の悪夢』がきっかけだった。

数年前の『27階層の悪夢』の時に、我々「ロキ・ファミリア」が助けに行くべきだったのだ。

そうすれば、『27階層の悪夢』は起こらなかつたはずだ。

「ディオニュソス・ファミリア」のパーティも全滅することもなかつたし、フィルヴィス・シヤリアも怪人になることもなかつたのだ。

そう、神ディオニュソスの野望を早めてしまったのは我々だ。

しかし、そうしなければ闇派閥に属する神々を捕らえることはできなかつた。

捕らえたことによつて、「ロキ・ファミリア」「フレイヤ・ファミリア」「ガネーシヤ・ファミリア」の名声も大きく上がり、フィン野望に大きく近づけることができた。

だが、代償は大きかつた。

数年後の今…怪人となつたフィルヴィス、闇派閥がもたらした悲劇を産んだのは…我々だ。

クノツソスでの悲劇…リーネたちを死なせたのは…我々だ。

第一次クノツソスでの大敗北を招いたのは…我々だ。

今回の…責任の大部分は私たち「ロキ・ファミリア」にある。

レフィーヤは私たちを大いに責めるべきなのだ。

だが、あの娘は絶対に我々を責めないだろう。

それはフィンもわかっててやっている。

それだけではない。

5年前の：「アストレア・ファミリア」壊滅も我々が関わっている。

あの時：「アストレア・ファミリア」が下層の調査へ行くと挨拶に来た時、フィンは「罨に間違いないけど、彼女たちなら切り抜けるだろう。」と樂觀視していた。

そして：彼女たちは闇派閥の最後の砦である派閥：「ルドラ・ファミリア」の罨にかかり、同胞である「疾風」を除き、全滅した。

フィンもその知らせを聞いた時に落胆したが、あれは彼女たちの死に対して落胆したのではない。

彼女たちに期待しすぎた自分に落胆したのだ。

私は：激怒した。

7年前の大抗争での最終決戦：ここ18階層であの「ヘラ・ファミリア」の【静寂】と邪神エレボスの戦いがあった。

邪神エレボスがもたらしたモンスターによってアイズが暴走し、私とガレスはそれを止めるしかできなかった。

当時レベル3であった、彼女たちが…当時病で弱っていたといえ、レベル7の【静寂】のアルフィアを倒してくれなければ、オラリオはエレボスが産んだモンスターによって確実に滅ぼされていただろう。

あの戦いに私とガレスは最後まで、関わる事ができなかった。

だが、あのアルフィアを追い詰めて倒したのだ。

アルフィアの恐ろしさ、理不尽さは私がよく知っている。

そして最後は…自分で炎の海に身を投げて死んだと…。

彼女らしい…。

それを…っ！

あの【静寂】を追い詰めた彼女たちが、壊滅したのを落胆程度でっ…！

ガレスもわかっていたが、私ほど強く責めなかった。

その後、ロキもさすがにフィンを叱責して終わったが…。

私は納得していない…悔しかった…。

間もなく神アストレアがオラリオを出ていった。

そして…、共に出ていったと思っていた同胞の【疾風】の暴走が始まった。

彼女は普段の彼女ではなかった。

アイズと同じく、家族を失い敵を滅ぼすだけとなってしまうのだ。

アイズと同じく、黒い感情に全てを支配されてしまったのだ。アイズと同じく、復讐に全てを捧げた【疾風】だった。

私は彼女を止めることが……いや権利がないのだ。

アイズを育てている内に……彼女の気持ちも理解できるからだ。

私は彼女に加勢しようとした。

だが、フィンとガレスが必死に止められた。

フィンが理をもって論そうとした。

ガレスは筋をもって論そうとした。

確かに【疾風】の暴走はやりすぎだ。

だが！私は……その時色々と積み重なり、もう我慢ができなかった。

久々にあの二人と大喧嘩をして、ホームを中破させるぐらいの魔法を連発した。

ロキを送還してもいいというくらいに。

アイズが間に入ってくれなければ、私は【ロキ・ファミリア】を壊滅していただろう。【ヘルメス・ファミリア】の【万能者】が情報を提供し、【ガネーシャ・ファミリア】が物資などを提供していた。

私も陰ながら同胞たちを通し、【疾風】を手助けした。

フィンは渋っていたが、黙認していた。

当然だ。

あの時、彼女たちについていけばこのような事は起こらなかったのだ。

黒い【疾風】は、オラリオ中を荒れ狂った。

疑わしきものを全て罰し…。

闇派閥を全て滅ぼし…。

邪神を追い詰めた…。

そして…【ルドラ・ファミリア】を壊滅させて『暗黒期』を終わらせた。

ほんの僅かの期間で、我々ができなかったことを成し遂げたのだ。

さすがに堂々と誇ることができないが、私は同胞として誇らしかった。

同胞として恥ずべきだとけなす同胞もいたが、私は強く叱責した。

彼女の気持ちを理解しろ！同じことができるか！と。

ギルドのあのエルフの恥知らずである、ロイマンは【疾風】を捕らえようとしたらしい。

ロイマンは【疾風】を捕らえて、闇派閥壊滅を自分の手柄にしようとしていたのだ。

聞けば、復讐を成し遂げた【疾風】は『豊穡の女主人』で店員として働いているとい

う。

さすがのフィンもロイマンの行動を許容できなかったようだ。

「フレイヤ・ファミリア」「ロキ・ファミリア」「ガネーシャ・ファミリア」などの多くの派閥が「疾風」をかばった。

そして創設神ウラノスの命令で、「アストレア・ファミリア」の働きもあり「疾風」の暴走を不問にした。

あのエルフの恥知らずは終始不満を言っていたが、飲まなければ王族として貴様をエルフから永遠に追放する、と断言したら折れた。

いつか…絶対に追放してやるからな！

「ロキ・ファミリア」は『豊穡の女主人』での常連となっているが、表向きだ。

本当の目的は「疾風」を監視することだ。

それを知った私は再び激怒した。

今までは酒場なんぞには、行きたくはなかった。

『豊穡の女主人』だけだが、そこへ行くのは彼女を守るためでもあったのだ。

ロキはそれを知らずに喜んでいたがな…。

フィンとガレスは納得してなかったが、「アストレア・ファミリア」を滅ぼしたのは我々だ！大抗争の功績は彼女たちがいてこそだ！と強く責めた。

さすがの彼らもロキも何も言えなかったようだ。

それぐらいの負い目はあるようで、少しは安心した。

だが、『豊穰の女主人』には「フレイヤ・ファミリア」元団長の、ミア・グランドがいる限り彼女は大丈夫だろう。

「彼女はああ見ても面倒見がよい。

ドワーフだが、うまくやってくれるだろう。

そして現在に至るが、それでも彼女は昔の彼女には戻らなかつた。

いや…半年前から彼女は少しずつ変わった。

あの…【未完の英雄】いや【白兔の脚】のベル・クラネルによつて。

第79話 妖精王女、回想。

「疾風」が「ヘステイア・ファミリア」の助っ人として、「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯に参加していることに流石に焦った。

素知らぬ顔をするのに必死だった。

そして…あの少年と彼女は私たち「ロキ・ファミリア」と一時敵対した。

『異端児』の件で、だ。

ダイダロス通りのあの少年の行動は、理解できなかった。

だが、フィンの仮説を聞いて納得した。

あの少年は、助けを求めてきたものを救おうとしただけなのだ、と。

それが人であろうが、怪物であろうが。

助けを求めてきたものを救うのは、当たり前前の行動だ。

だが、あの場でそういうことができるかと言われたら、否だ。

あの少年はそれができたのだ。

愚かと言わざるをえない、だが…とても眩しいな。

王族妖精としてでも、称賛したくなるくらいだ。

フィンだけではない。

レフィーヤ、ティオナ、ティオネ、あのベートもだ。

そして私も：特にアイズだ。

あの少年にかなり毒されている。

私たちは数年間アイズを育ててきた。

5年前と比べて、言動はかなりマシになった。

だが：、アイズの中にある黒い炎はランクアップするごとに激しくなった。

あの「疾風」のようになるのが怖かった。

そうならないよう、アイズをずっと見てきた。

だが半年前からあの少年に会ってから、アイズは目に見えてわかるように変わった。

ミノタウロスからあの少年を助けて、ベートにあの少年を貶されたあの日から、アイズは変わった。

ランクアップ前にウダイオスを倒した日、精神疲弊したあの少年に初めて会った。

アイズが興味をもっていたようなので、あの少年に膝枕するように言ったが何故かあの少年は逃げたそうだ。

思わず笑ってしまった。

アイズが意気消沈するのも、むくれて私に軽く八つ当たりするのも。

アイズの表情が、年頃の少女のようにコロコロと変わるのがおかしかった。遠征前にアイズがあの子に特訓をしているのは、気づいていた。

だが、その時のアイズは楽しそうな表情をしていたので知らない振りをした。

私たちが長年苦勞してきたのを、本人は気づいていないがあの子はあっさりと変えたのだ。

膝枕のことは別にしても、少々嫉妬した。

その時、レフィーヤがいつもよりやる気を出して意気込んでいた。

いい競争相手でも見つかったのだろうか？

そして：あの少年とミノタウロス強化種の一騎打ちを見た時。

ミノタウロスの必殺の真正面に突進した時、若いと思つた。

だが、彼は：勝つたのだ。

そして、あらわになつたステータスを見た時、笑つてしまった。

オールSと皆には言つたが、実際は違う。

敏捷が限界であるSを越えてSSになつていた。

あり得ない、だがあり得る事実に笑つてしまった。

我々が越えられなかつた壁を、この少年はあっさりと越えてしまつたのだから。

彼を見て、冒険者というものを改めて考えさせられた。

ガレスは惜しいものを見逃したかもと言ってたが、正にそうだ。

あれは「ゼウス・ファミリア」や「ヘラ・ファミリア」にはなかったものだし、いいものが見れてよかった。

私の願望である『まだ見ぬ世界を』に該当するかもしれない。

遠征で、あの『汚れた精霊』との決戦でフィンからの発破で立ち上がった。

あの少年は限界を越えて立ち向かい、勝ったのだ。

あの少年よりレベルが高い我々が、屈するわけにはいかないのだ。

あの『汚れた精霊』の決戦で勝てたのは、あの少年のおかげと言ってもいいかもしれない。

遠征の帰りで18階層へあの少年を含むパーティが転がり込んで来た時は、驚いた。レベル2になったばかりとはいえ、18階層へ来れるとはな。

だが、あのアイズが必死になって彼を担いできた時の方が驚いた。

彼らを治療し、しばらくしてあの少年が目覚ましアイズが連れて我々のところへ来た。

あの少年と少し話をしたが、礼儀正しく冒険者らしくない少年だった。

むしろ、『冒険者はやめなさい、ろくでもない職業だ。他の仕事を選びなさい。ギルドの仕事はどうだ？紹介するツテはあるぞ。』としたくなるくらいだった。

そういうところなのだろうか？アイズが惹かれたのは？

いや、それだけではないような気がする。

レフィーヤの競争相手はあの少年だったのか…。

魔導士ではないあの少年を、競争相手にしてどうするのだ…。

帰ったら、もう一度座学で教えてやらねばならんな。

【アポロン・ファミリア】の戦争遊戯であの少年の戦いを見た。

戦争遊戯前にアイズとテイオナと特訓していたのは知っている。

そのため、急成長したのだろう。間違いないくレアスキルを持っている。

戦いぶりは見事というしかなかった。

だが、危なっかしいな…。ハラハラしたぞ。

それに…【疾風】が表に出てどうするのだ…。

そしてあの少年はレベル3に至った。

レフィーヤが凄く悔しがっていたな。

こちらはクノツソスで、闇派閥の罠にかかりリーネたちを失ってしまった。

…完全に我々の失態だ。

クノツソスの鍵を【イシユタル・ファミリア】が持っているのは確実だ。

だが、しばらくして【イシユタル・ファミリア】が【フレイヤ・ファミリア】によつ

て滅ぼされた。

その原因があの子にありと噂だが、眉唾だろう。

だが、「イシユタル・ファミリア」壊滅の数日前に歓楽街付近であの子と会ったとアイズたちから聞いたのだが、事実かもしれん…。

もし、事実なら数日かけて問い詰めて説教したいくらいだ。

…いかな、他派閥の者に対して少々熱入れすぎのようだ。

ラキアが侵攻してきた時、神ヘステイアが誘拐された件でアイズはあの子と一緒に、エダスの村というところで過ごしたようだ。

本人はすごく楽しく話していたことから、余程楽しかったようだ。

しかし、黒竜の鱗の時は険しい顔をしていた。

黒い炎はアイズに深く根付いているようだ。

そして：『異端児』の件。

あの少年が竜女をかばい、オラリオを全て敵に回した。

それでもあの少年はくじけず、オラリオにいる異端児をクノツソスへ帰そうとした。

それでは、どっちが悪者かわからんな。

レフィーヤは「ヘステイア・ファミリア」ホームの見張りをお願いしていたのだが、何をトチ狂ったのか直接殴り込んだそうだ。

おかげで「ロキ・ファミリア」の評判が少し悪くなった。

何を考えてるのかと叱ったが、あの少年への納得できないという怒りで聞いてなかった。

私たちの中で、レフィーヤがあの少年のことを一番わかっているのかもしれないな。

私はアキから鍵を受け取りクノツソスで闇派閥を殲滅していき、途中で『異端児』と会った。

頭領と思われる者と問答をしたが、馬鹿馬鹿しかった。

だがそこを邪神につけこまれ、『異端児』、食人花と怪人と三つ巴で戦う羽目になってしまった。

そして：アリシアが『異端児』によつて救われ、私達はもう『異端児』に対して剣を向けることができなかつた。

危機と思われたところに、フィンとガレスたちが助けにきた。

そのおかげで怪人を退け、食人花を滅することができた。

レフィーヤ：いつもより火力が強かったが、何があつたのだろうか？

そして、あのフィンが『異端児』と一時同盟の話を持ちかけた。

フィン：もう、以前の打算を働かせる小人族ではない。

吹っ切れて、いい顔をしていた。

恐らく…あの少年の影響だろう…。
やはり嫉妬してしまうな。

第80話 妖精王女、謝意。

彼のことを聞けば、アイズの追跡から逃れたがアイズと対決し、竜女をダンジョンへ逃したが神ヘルメスの生贄となった異端児の戦い、そして…あの黒いミノタウロスとの一騎打ちになったそうだ。

何がどうなったら、そうなるのだ……。わからん。

ただ、惜しい気がしたな。

あのミノタウロスの戦いに等しい、いやそれ以上の戦いを見れなかったことが、レフィーヤがいつになく張り切っていたのは、その影響だろう。

やはり、惜しい。見たかったな…。

アイズは彼につく「疾風」の対決…そして竜女をかばうあの少年の対決…。

アイズは「疾風」を下したが、あの少年を倒すことができなかったそうだ。

あの少年が守る竜女に、自分の幼い姿を重ねてしまったそうだ。

その上、アイズの黒い炎をアイズ自身が疑うようになってしまった。

そしてあの竜女に対して嫉妬してしまっただけ、自分に英雄が現れなかったために。

私は、副団長として失格かもしれないが、アイズの近くにいる者としてそれは嬉しい。あの少年には多くの意味で、感謝しなければならぬ。

そして第一次クノツソス侵攻戦で、我々は失態を犯した。

邪神タナトスまでも、邪神ディオニュソスにはめられてしまった。

神ペニアが、邪神ディオニュソスの隠れ蓑となり送還されてしまった。

それにより「ディオニュソス・ファミリア」、いや「ペニア・ファミリア」が全滅してしまった。

そして、フィルヴィスの偽死にレフィーヤが壊れてしまった。

邪神タナトスのあがき、そして『異端児』のセイレーンのレイがいなければ、フィン
は死んでいた。

『異端児』との一時同盟がなければ、もっと大きな犠牲を払っていただろう。

その一時同盟を持ちかけたフィンを、変えさせたあの少年に感謝しなければならぬ
のだ。

あの少年が投じた一石による波紋で、我々は助かったのだ。

それだけではない。

レフィーヤたちが会った邪神タナトスが示した絵画についても、あの少年は知っていた。
た。

アイズたちがオラリオ中を探し回っても見つからなかった情報を、あの少年は持っているのだ。

邪竜ニーズホッグ：『精霊の六円環』の逸話を知っていたのだ。

あの少年の祖父が作成した物語とのことだが…、この世界の中心と呼ばれるオラリオでも見つからなかった情報を、何故知っているのだ？

あの少年の祖父は、一体何者なのだ？

それは後にしよう。

ともかくあの少年がもたらした情報のおかげで、邪神ディオニュソスの企みが大体判明した。

第二次クノツソス侵攻戦へは、【ロキ・ファミリア】、【ヘルメス・ファミリア】、【ヘファイストス・ファミリア】、【ガネーシャ・ファミリア】、【ディアンケヒト・ファミリア】、…そしてフィンの説得により【フレイヤ・ファミリア】が参戦した。

後で聞いた話だが、地上では【ニョルズ・ファミリア】、【ゴブニュ・ファミリア】などがフォローしてたらしい。

テイオナ、テイオネがいる戦場へは【カーリー・ファミリア】が乱入してきたらしい。そして…あの少年がいる【ヘステイア・ファミリア】が参戦した。

彼らの参戦は、我々にとって非常に大きな助けとなった。

これまでの戦いで多くの死者がでたが、彼らが参戦してからは死者は最小限だったと思うだ。

フィンとタメ張るくらいの頭脳を持つ、小人族のリルルカ・アーデ。

私やガレスのフォローがあつたにしろ、あそこまでの指揮は大したものだった。

まだ10代と聞き、驚いた。その歳のフィンより遥かに凌ぐだろう。

フィンの花嫁候補と打診してたようだが、既にあの少年に絶対の忠誠を誓っていると思うだ。

その忠誠が愛なのかは不明だが、フィンとしては残念な結果になったな。

ガレスから聞いた話だが、ヤマト・命も非常に大きな助けとなつたらしい。

彼女は重力の檻を発現する魔法を出し、『穢れた精霊』の魔法を悉く防いだとのこと。ガレスも前線に出るようになり、大きな打撃を与えることができたらしい。

そして、攻守とともに優れてかなり助けになつたらしい。

そして：私の戦場ではエルフの里を焼き払ったラキアの、魔剣貴族クロツゾの子孫であるヴェルフ・クロツゾが参戦した。

彼の参戦は正直複雑だった。

レベル2で魔剣を打つただけで大した戦力にはならないと思つていたが、それは大きな誤りだった。

彼は：私達魔導師、いや魔法を扱える全ての天敵だった。

魔力爆発を誘引する短文詠唱の持ち主だった。

しかも、砕けない魔剣を持ち放つことができるのだ。

ふざけるな、と言いたくなつたくらいだ。

【白妖の魔杖】へ「デイン・セルランドも言っていたが、つくづく我々エルフとの相性が悪い。」

敵には絶対にしたくない。するなら、すぐさま倒さなければならぬ。

だが：、味方にすればこれ以上頼もしいものはない。

『穢れた精霊』は彼にとつてただの火薬庫だったようだ。

私、いや私たちにとって大きな助けとなった。

団長であるあの少年は：我ら【ロキ・ファミリア】や【ガネーシャ・ファミリア】の援護をしてくれた。

目的は、囚われとなつていた【デメテル・ファミリア】救出のための遊撃だった。

神デメテルは邪神ディオニユスによつて彼らを人質に、言うことを聞かされていたのだ。

人質である彼らを救わなければならなかった。

だが、そこを見越してか多くの食人花などを配置していた。

彼らをかばいながら戦うのは容易ではなかった。

そこを助けてくれたのが、あの少年だった。

ナルヴィやクルスの話では、アイズとダブってしまったくらいの強さだったそうだ。

レフィーヤの葛藤がやつとわかった、と言つてたな。

そのおかげで囚われとなっていた彼らを全て救い出し、離脱に成功できたのだ。

レフィーヤとベートの戦場では、死んだはずのフィルヴィス・シャリアがいた。

いや、彼女が二人いたと言つたほうが正しい。

彼女は魔法で常に分身していたのだ。

遠征時で忽然と姿を消したのは分身魔法を解除したからだ。

1つとなった、フィルヴィス・シャリアは…アイズと戦つた怪人を凌ぐ、怪人だった。

アイズと戦つた怪人は肉弾戦や接近戦のみだった。

だが怪人となったフィルヴィス・シャリアは、魔法を使えるのだ。

そう…短文詠唱の魔法が恐るべき攻撃力を持ち、多くの死者を出してしまつたのだ。

レベル7に相当する強さで、肉弾戦だけでベートをあつという間に倒したようだ。

これまでと思つた時に、「ヘルメス・ファミリア」が駆けつけた。

【万能者】、元【イシユタル・ファミリア】から改宗した【麗傑】、そして彼女…【疾風】

が大きな助けとなりレフィーヤを守つた。

本当にありがたかった。

ここでも、「ヘスティア・ファミア」に大きく助けられた。

：元【イシユタル・ファミリア】のサンジョウノ・春姫。

メレンで、フリユネ・ジャミールをアイズと互角に戦えるほどにする、妖術を扱える者だった。

彼女は：レベルを1段階一時的にランクアップできる妖術の持ち主だった。

メレンの時は1人だけだったが、あれからスキルか魔法を習得したのか複数人に放つことができたのだ。

フィルヴィス・シャリアを相手にする戦場では、一気にレベル5が4人揃い大接戦となったようだ。

特にレフィーヤの魔法：いやスキルが大きかったらしい。

だが：レベルの差がありすぎた。

フィルヴィスの魔法は全てを一掃し、彼らを地に伏せてしまった。

だが、サンジョウノ・春姫はまだ妖術を1つ残していたのだ。

レナ・タリーがベートを目覚めさせ、妖術を下しランクアップさせたのだ。

レベル7となったベートと怪人フィルヴィス・シャリアの激闘となった。

だが邪神ディオオニュソスはまだ、奥の手を隠していた。

『穢れた精霊』を宿した深層の竜…邪竜ニーズホッグを模倣した『穢れた精霊』が本命だったのだ。

我々が危惧していた『精霊の六円環』はダミーだった。

邪神ディオニユソスの真の目的は、オラリオの崩壊ではなく…我々高レベルの冒険者の死だったのだ。

それを証拠に各戦場でもう少しで倒す寸前で『穢れた精霊』が全回復し、強化された。疲労困憊だった我々は万事休すかと思う時に、体に、心に、響く大鐘楼の音が聞こえたのだ。

フィンが乾坤一擲であの少年を、邪竜ニーズホッグを模倣した『穢れた精霊』にぶつけたのだ。

下界の可能性を…未知を、邪神ディオニユロスへぶつけたのだ。

そして、私たちもその大鐘楼の音に激励されたかのように立ち上がり『穢れた精霊』たちを悉く撃破した。

ラウルから聞く限り、あの少年も邪竜ニーズホッグを模倣した『穢れた精霊』を跡形もなく消滅させた。

そしてレフィーヤたちも同じように立ち上がり、怪人フィルヴィス・シャリアを死闘の末、撃破することができたのだ。

最後は分身し、1人は邪神ディオニソスへ：もう1人はレフィーヤへ別れの挨拶を告げた。

そして、アイズは怪人レヴィスとの戦闘で黒い炎に堕ちる寸前だったそうだが、あの少年の大鐘楼の音に目覚め、黒い炎が消えアイズ自身とあの少年との絆によつて生まれたい風によつてレヴィスを撃破できたそうだ。

我々は、「ヘステイア・ファミリア」：特にあの少年に助けられたのだ。

でなければ、我々だけでなくオラリオも消えていただろう。

本来ならあの少年は、大いに賞賛されるべきなのだ。

決して我々「ロキ・ファミリア」ではない。

第81話 妖精王女、墓参。

よくよく考えれば、「ヘステイア・ファミリア」はいつ全滅になってもおかしくない状況ばかりだ。

なのに、1人たりとも死んでいない。

それに比べてこちらはどうか？

大派閥とか都市最強派閥とか言ってる割に、大きな犠牲を払ってしまっている。あれほどの戦いを超えた割には、フィンとガレスと私はランクアップしてない。情けない…。

こうしている間に、あの少年は強くなっているだろう。

アイズのことは別にしても、あの少年に興味持たずにはいられない。

ふう…。

レフィーヤも彼女を失ってどうなるかと思っただが、乗り越えてくれたようだ。

アリシアの言う通り、一皮向けて頼りになってきた。

だが、ガレスの言う通り私たちも負けるわけにはいかない。

いかん、眠れんな…。少々風にでも当たってくるか。

皆は……もう寝ているか。

王族としてでなく、1人の女として散歩するか。

18階層……。『迷宮の楽園』か。

む……花畑か。ふふ……少女に戻って摘むのもいいか。

……ああ、あいつの手向けでもするか。

このあたりだったな……。こんな粗末な花ですまんが、勘弁してくれ。

「久々だな……。このあたりにくるのは何年ぶりだろうか。なあ……。今の私たちをお前が見たら嘲笑うだろうか？それとも……無感動で無視か？……そうだな、お前はそういうやつだったな。」

「あの……リヴェリア様？どなたとお話しているのでしょうか？」

「む……。レフィーヤか。どうした、眠れないのか？明日は早く出るから少しは寝ておけ。」

「あ、はい……。そのつもりでしたが、何だか目が冴えちゃって……。それは花束でしょうか？」

「ああ……知り合いのな。」

「そ、そうでしたか。それは失礼しました。」

む、何か勘違いしているようだな。

「いや、お前が考えているようなものではないんだ。勘違いするな。」

「え？そ、そそそそんなこと考えていませんよ！」

「まあいい、静かにしとくようにな。奴…あの女は静かのを好むからな。」

「あ、そうでしたか！」

やはり勘違いしていたな。

はあ…何でそういうのを考えるのだ…。

「ここに…いや、ここで死んだのは私が一回も勝てなかった女だった…。」

「と、都市最強の魔導師のリヴェリア様が!？」

「ふふふ…都市最強の魔導師はあの女のようなことを言うのだ。本当に惜しい女だった

…。」

「ど、どんな方でどんな魔法を使うのでしょうか？」

ああ、そうだったな。あの規格外の女は確か…。

「レフィーヤ…お前は確か15歳だったな？」

「あ、はい。そうです。」

「あの女は10代半ばでレベル7だった。」

「ええええええええええ!!？」

さすがにショックだった。

当時あのオツタルをなでただけで、吹き飛ばしたな。

10代後半でレベル7となり、あの「ヘラ・ファミリア」の幹部まで上り詰めたからな。

「魔法もデタラメだった。超短文詠唱で、ガレスを一撃で倒す程だった。」

「えええええええええつ!?!」

あれは反則だろう。避けたら避けたで平衡感覚を狂わせるし…。

【不冷】の魔力爆発の短文詠唱でも追いつかないだろう。

速さではあの少年の速攻魔法に匹敵するかもしれんが、威力が違いすぎる。

「更に、敵の魔法を無効化する魔法を持っていた。しかも超短文詠唱だ。」

「えええええええええつ!?!」

魔導士なのに相手の魔法を無効化するなんて…知った時は唾然としたものだ。

私の最大魔法をあっさり無効化された時は、こいつ本当に人間か?と疑ったものだ。

私達魔法種族であるエルフにとって、相性最悪のやつだったな。

「そして…三大クエストの1つの「海の霸王」のリヴァイアサンにトドメをさした長文詠唱魔法も持っていた。」

「何ですか!?!そんなの…反則じゃないですか!」

そうだな…。だが、あの女はそのため戦線離脱せざるを得なかった。

「まだあるぞ。今のアイズほどの速さで並行詠唱が可能だった。」

「ええええええええええっ!？」

一度詠唱が始まったら、もう止められないからな。

前線で飛び回り超短文詠唱を連発されたら、たまったものではない。

「ああ、そういえば相手の剣技を簡単に模倣できるんだったな。あの女は。」

「……………」

7年前の大抗争でもあの女は、当時のアイズの剣をあつさりと奪い、「ゼウス・ファミリア」の【暴食】ザルドの剣技を模倣してきてガレスを切り刻んだのだからな。

魔法も超短文詠唱で協力、魔法を無効化する障壁…いや付与魔法、魔力の臨界を突破する長文詠唱…。

そしてアイズ並の敏捷…、見ただけで模倣できる…改めてよく考えると正真正銘の化け物だったな。

【才禍の怪物】と呼ばれるのも道理だ。

「都市最強の魔導士と言われるのも、納得です…。じゃ、弱点とかはなかったのですか？」

「ある…彼女には大きな弱点がな。それがあの女をレベル7程度に留めていたんだ。」

「レ、レベル7程度に…。弱点とは何ですか？」

「…死の病だ。」

「え…。」

ああ本当に惜しい、惜しすぎる。

「彼女には生まれつきの病を持っていた。そしてそれはスキルとして発現するほどだった。」

「……。」

「それがなければ…奴はレベル7に収まる器ではなかった。レベル8，9…いや10以上は行けたかもしれん。」

「病で死んだのですか…。」

「いや…、7年前の大抗争で闇派閥として、ここ…18階層で死んだ。」

「!？」

あの女は…大馬鹿だ。

自分の命が残り僅かだからといって、それを私達に捧げて経験値と糧にすることはなかなか。

あの大抗争で、確かに多くの者がランクアップしてオラリオの戦力上昇になったのは確かだ。

だが、他に方法はなかったのか…と、私はつくづく思う。

私はレフィーヤに7年前の大抗争について語った。

「そうだったんですか…。学区で学んだこととは違うんですね…。」

「何だと?」

「あ、はい。学区では『7年前の大抗争を含む暗黒期は、ギルドと有力ファミリアの手によつて終焉を迎えた』と書いてあつたんです。」

「そんな馬鹿なことがあるか! あいつらの無念を、彼等彼女等の死を、彼女たちの悲しみをその一文だけでだど!」

「ひいひいっ!」

何故、そういうことになっているのだ!

学区は…確かギルドの管轄だったな。

さては、ロイマンか! あの恥知らずが!

自分の手柄にする算段だな!

「も、申し訳ありません!」

む…いかん。レフィーヤには罪はない。

地上へ戻つたら、「ロキ・ファミリア」としてロイマンへ抗議しなければならんな。

「は、話を戻して…その、リヴェリア様の知り合いがここに眠っているんですね…。」

「いや…、このあたりはあの女が炎渦巻く穴に飛び込んだところだ。あの女らしいよ

…。」

「その人も…未来を危惧してたんですね…。」

「そうだ。時代を逆行させるとか、のたまっていたが結局奴らは未来を心配していたのだ。」

「奴らが…今の私達を見たら嘆くだろうな。」

「あの…私も花を供えてもいいでしょうか?」

「…ああ、構わないぞ。」

だが、レフィーヤのように後進の者が順調に育つていつている。

近いうちに私達を超えるだろう。アイズたちのようにな。

「これで、よしつと…。」

「レフィーヤ…お前に言っておくことがある。あの女の前だな。」

「え? な、何でしょうか?」

「私を目指すな。私を超えろ。」

「リ、リヴェリア様を!? そ、そんな大それたことは…。」

「そうしなければ…、フィルヴィス・シャリアのような者がこれから先に次々と出てくるぞ。」

「!? …っ、はい…わかりました。」

すまないな、お前の触れたくないところに触れてしまつて。

お前はこれからも強くなつていくだろう。だが、私という王族妖精が枷となつてはダメなのだ。

もうひと押ししておくか…。

「それにあの少年に…【白兔の脚】には負けたくないのだろうか？」

「!? ええ! 負けませんとも! あのヒューマンには!」

「そ、そうか…。」

かなり効果てきめんだつたな…。

すまない…君のことを当分使わせてもらう。

「しかし…あの少年が今やレベル4か…(半年でレベル4はあの女も驚くだろうな)。」

「ふんっ! 中身はまだまだですよっ! 絶対に負けませんっ!」

「レフイーヤ…少しは【白兔の脚】のことを認めろ。」

「もうとつくに認めていますっ! だからこそ、気づかないのが腹立つんですよっ! あっ

…!？」

お前…まさか。

そうか…そういうのはとつくに過ぎていたのか。

ここは素知らぬ顔をした方が吉だな。

「ここを出る頃には、『白兔の脚』はレベル5になっていたりしてな。」

「そんなわけがありませんっ……いや……まさか……あり得るかも……。」

なんだとかんだと言つて、認めているんじゃないか……。

アイズといい、レフィーヤといい……。

『精霊の六円環』を教えてくれたお礼も兼ねて、あの少年と……『白兔の脚』と一回ぐらいは話しておくべきだな。

……？ 何だ、記憶のどっかに……あの少年に似たような者に会ったような気がする。

いつだ……どこだ……？

だめだ。思い出せん。

「あれ……。あそこにいるのアキさんとラウルさんじゃないですか？ あつ、ままままさかデート中!？」

「ここまで来てデートするの……？」

「ええ、確かりヴィラにカッブル限定の『ハイパーダンジョンサンド・タピオカデラックス』があるとエルフィが言っていたので、それじゃないですか？」

何だ……その頭が悪そうな名前のやつは……。

最近の若い者の考えていることはよくわからん……。

「あつ！ ようやく見つけた！ ラウル！ こっちよ！」

「ああっ！ やつと追いつけたっす！」

む…？ 私達を探していたのか？

何かあつたのか…？

第82話 千妖精、暴走。

ラウルさんとアキさんが急いで、こっちへやってきました。

デート中じゃなかったんですね！

「私達を探していたようだが…、何かあったのか？」

「団長から伝言あります。緊急事態が発生したため、至急戻ってきてほしいとのことです。」

「な、何があつたんですか？」

「待てレフィーヤ、私が聞く。お前はアリシア達を起こして帰る準備をしろ。」

「は、はい！わかりました！」

そして、私は急いで戻つてアリシアさんたちを起こしてテントを片付けました。

テントを片付けて帰る準備を終えて、リヴェリア様のところへ戻りました。

「……それは本当なのか…？フィンたちは一体何を考えているのだ!？」

「残念ながら事実よ……。」

「団長たちが決めたことだけど、ウチも納得してないっす……。」

リヴェリア様がすごく怒っていた…。怖い…。

「レフィーヤたちか？今から帰る。急ぐぞ！」

「は、はい！あの…何があったのでしょうか？」

「行きながら話す！さっさとしろ！」

「「は、はいっ！」」

リヴェリア様がここまでお怒りになるとは…。

一体何があったのでしょうか？

そして行きながら、リヴェリア様とアキさんとラウルさんから事の次第を聞きま
した。

神フレイヤがベル・クラネルを手に入れるために、オラリオを魅了したこと…。

ベル・クラネルが「フレイヤ・ファミリア」団員であることを、オラリオ全員へ刷り
込ませたこと…。

しかし、ベル・クラネルは決して魅了に屈しなかったこと…。

そしてベル・クラネルの主神ヘステイアが、司る権能を使ってオラリオを魅了から解
除したこと…。

ベル・クラネルを巡って、「ヘステイア・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」が

戦争遊戯に合意したこと…。

「ロキ・ファミリア」がギルド長ロイマンから「ヘステイア・ファミリア」に味方するなどの通知を受諾したこと…。

さらに「ロキ・ファミリア」も「ヘステイア・ファミリア」に戦争遊戯を仕掛けて合意したこと…。

以上のことから私の脳が導いたことは、ただ一つ。

ベル・クラネルが全て悪い！

「何ですか！あのヒューマンは！何を考えているのですか！」

「いや…レフイーヤ。今の話をよく聞いてた？」

「どう聞いても【白兔の脚】は、全然悪くないじゃないですか。むしろ被害者じゃないですか。」

「アリシアさんは、あのヒューマンのことを知らないから、そう言えるんですよ！ほんつとにつ！あのヒューマンは！許せません！」

そうです！あのヒューマンはいけません！

「どう聞いても、神フレイヤが悪いじゃない…。」

「ベル・クラネルが、神フレイヤをたらしこんだに決まっていますんじゃないですか！」

「いくら何でも、無理があるだろう…。美の女神なんだぞ？でなければ、オラリオに魅了

をかけるわけがないだろう。」

「リヴェリア様は、ベル・クラネルと話したことはあるんですか！」

「い、いや、まだないぞ。だがな…。」

「あのヒューマンが、何か卑怯な手を使つたに決まっています！卑怯な手を絶対に使わな
い人ということは、知っています！だけど、何かやつたに違いありません！」

「そうです！あの無詠唱の魔法といい、魔法を強くさせたあのスキルといい、絶対何か
あるに違いありません！」

「無茶苦茶なことを言っているつす…。」

「ラウルさんは男だからわからないんですよ！あのヒューマンはそういう人なんです
！」

「駄目だ…。こいつ。」

皆さんはあのヒューマンの見かけに騙されているんです！

私は絶対に騙されませんからね！

ベル・クラネルうううう！待ってなさいいいい！

その時、白兎はすごい悪寒に襲われ周囲をキョロキョロしていたが、その隙をついた
メイによつてぶつ飛ばされ、正座・説教されていた。

「……レフィーヤは無視しろ。アリシア、全てのエルフへ呼びかけろ。王族妖精として

の命令だ。」

「え？は、はいっ！御用は何でしょうか？」

「ベル・クラネルを捕らえて折檻するんですね！」

「「折檻！」」

「違う！いい加減に正気へ戻れ！レフイーヤ！でないと、座学を倍にするぞ！」

「ひいつ！はっ…私は一体何を…？」

（（そんなに座学が嫌なのか…。気持ちにはわかるが…。））

「…とにかく急ぐぞ。アリシア、先程の件だがギルドへ集結するように、とな。」

「ギ、ギルドにですか…？」

「あ、あの…ホームへ先に戻ってからでは…。」

「戻ってどうする？どうせ、フィンやロキらに言いくるめられるのがオチだ。」

「し、しかし…。」

「戻るならお前たちだけで戻れ。私は行く。」

ああ…完全に怒ってらっしやる…。

「ど、どうするっす？アキ。」

「こんなに怒ってるリヴェリア、久しぶりだわ…。团长もガレスさんもアイズもいない

し…。」

ど、どうでしょう…。

ああ、バベル前の大広場へ着いてしまった…。

「ギルドへ向かう。」

「は、はい。」

「ラウル…私はそのままりヴェリアについていくから、ホームへ戻って団長たちをすぐ
に呼んできて。」

「わ、わかったつす。」

わ、私はどうしたら…。

あれ…何だろう、この感じ…。

むっ！

あの少年だ！

いる！この近くにいる！

何故かわからないが、いる！

急にキヨロキヨロした私を、ラウルさんとアキさんは訝しげに見ていた。

「ア、アキ…。レフィーヤの様子が…。」

「ちよ…ちよつとレフィーヤ、何しているのよ…。」

「むむっ！こつちですわね！」

「お、おい…レフィーヤ。そつちはギルドの方角じゃないぞ！おい！待て！どこへ行く！」

「ベル・クラネルを見つけました！」

「「は？」」

逃しませんよ！ベル・クラネル！

今回について全部吐いてもらいますからね！

そして…大通りで、胸がでかく黒い髪の女性に肩を預けて歩いている白兎を見つけました！

一粒となるくらいの距離で。

「ベル・クラネル！貴方にお話があります！」

私の声にビクつとしたベル・クラネルと、それに怯えた隣にいた女性が振り返りました。

さあ！話してもらいますよ！

第83話 千妖精、詰問。

「おい：【ロキ・ファミリア】の【千の妖精】だぞ：。」

「戦争遊戯はまだだろ？前哨戦か？」

「周りがざわついていますが、知りません！」

私は、あの少年：：ビクビクしている白兔のところへ、一直線に行きました。

「レ、レフィーヤさん!?お、お久しぶりです。あの：何かご用でしょうか？」

「ええ！久しぶりですね！用がなかったら駄目なんですか!？」

「ひいっ！」

いつもビクついていますね！この少年は！

失礼な人です！

「ところで：貴女は誰ですか？」

「わ、私ですか？私は【ミアハ・ファミリア】のカサンドラ・リオンと言います：。」

「それはご丁寧に。私は【ロキ・ファミリア】のレフィーヤ・ウイリデイウスと言います。

ああ、お引取りいただいても結構ですよ。私はこの【白兔の脚】に話がありますので！」

「あの：私はミアハ様より、ベルさん専属治療士と任じられています。それに、ホーム

まで送るよう言われておりますので…。」

「は?」「え?」

何で貴方が知らないんですか!

『あの…カサンドラさん。何で、いつから、僕の専属治療士になったのですか?』

『メイ様とセバス様からお願ひされましたが…その、駄目でしたでしょうか?』

『いいえ! 凄く嬉しいです! でも…いいのですか? 「ミアハ・ファミリア」は?』

『大丈夫です。団長もダフネちゃんも承知しています。』

『本当に…ありがとうございます!』

気に入りませんね。何をこそそそと話しているんでしょうか?

どうせ、碌なことではありません!

「ちよつと! 何をこそそそと話しているんですか!」

「ひいっ!」

「どうせ、その【白兔の脚】に無理やりされているんでしょう! 私が折檻しますので、帰っていただいても結構ですよ。」

「折檻?!」

「それよりどういうことですか! 神フレイヤの魅了が効かないなんて、何しているんですか! オラリオ中に貴方が【フレイヤ・ファミリア】と刷り込ませたなんて、どうして

なんですかー！」

「えと…それは…。」

「とにかく！全部！話さない！とりあえず私達のホームへ行きますよー！」

「いいっ!？」

「おい…なんだあれは。」

「えーと…【白兔の脚】が【悲観者】といちゃついているのを、【千の妖精】が割り込んできた？」

「浮気現場を発見した、恋人の修羅場？」

「でも【千の妖精】、【白兔の脚】を【ロキ・ファミリア】のホームへ連れて行こうとしてくるぞ。」

「【白兔の脚】ボロボロじゃねえか…。戦争遊戯が始まってからにしろよ…。」

「周りが何かと言っているようですが、無視です無視！」

「さあ！行きますよー！」

「あ、あのレフィーヤさん！僕らは戦争遊戯で…。」

「そんなの関係ありません！貴方は何か隠しています！そんな気がします！」

「「いや、無茶苦茶だろ…。」」

「それが嫌なら今！ここで！話さない！」

「あ、あの…強引なのはいけないと思います。ベルさん、体調がよくありませんので…。」
「体調がよくない…？　そういえばそうですね。」

(ほっ…)

「私が口を利用してあげますから『ディアンケヒト・ファミリア』へ行きますよ！」

「ええっ!？」

「何ですか？　何か人に言えないようなことでもしたんですか！　不潔です！」

「ち、違いますよ！」

「そ、そうです！　(さっきまでアミッドさんと一緒にいたなんて言えない…)。」

何か隠していますね！…この人達！

怪しいです！

「第一、貴方は隠しごとが多いんです！　こちらの綺麗な人と何をしていたんですか！」

「き、綺麗な人…はう…。」

「な、何をつて…、さ、散歩？」

「ほう…、散歩ですか？　寄り添ってくつつけあつて散歩ですか？」

よく見れば、この方前髪で隠していますが結構美人ですね。

それに…胸も大きい…。はう!？

「あ、貴方は何を考えているのですかああああ！　不潔です！　信じられない！」

「ひいっ！」

「この人をどこかへ連れ込んで、何かいやらしいことでもするんでしょう！そうに決まっています！」

ええ！そうに違いありません！

やはり！全部話してもらわないと！

「レ、レフィーヤさん！誤解です！そんなことはしていません！」

「……（ベルさんではなく私達ですが…、い、言えません…。）」

「そちらの方はそう言ってますんが？」

「ふえ？カ、カサンドラさん！何か言って下さい！」

「……（昨日のアレは凄かった…。今日も…。）」

「ほら！私の言っていることは、間違っていないでしょう！さあ、行きますよ！」

「カサンドラさん！カサンドラさん！」

「…はっ！あ、あの…それは戦争遊戯の後にでも…。」

そんなの関係ありません！

…この人も怪しいですね！

「わかりました！貴女も一緒に来なさい！」

「ええっ！」

「神フレイヤ？戦争遊戯？そんなの知りません！貴方は、いえ貴方たちは何か隠しています！ええ、絶対に何か隠しているに違いありません！」

「無茶苦茶なこと言っているぜ…。」

「【千の妖精】やばいと思ったが、ここまでやばいと思わなかったぜ…。」

「おいおい、ここで抗争するのかよ。逃げる逃げる！」

「周りが騒がしいようですが、知りません！」

「ま、待つて下さい！レフイーヤさん！本当に待つて下さい！」

「問答無用です！…いえ…ここで魔法をぶつけて、丸焦げにして引つ張ったほうが早いかもしれないですね。」

「ひいひいっ！」

「そうですね。」

「最初からそうすればよかったですね！」

「軽〜く炙っておけば死なないでしょう。」

「レベル4ですからね！」

「だ、誰か【ハスティア・ファミリア】を呼べー！」

「いや【ガネーシャ・ファミリア】だろ？」

「あ…。お、おい…あれ見ろよ…。」

さて、「アルクス・レイ」を軽くぶつけて…。

「!?」

「レ、レフィーヤ!何しているのですか!」

「待って下さい!この少年を折檻して連れていきますから!」

「せ、折檻!」

「つ、連れて行く!?!」

「レフィーヤ、な、何を言ってるつすか!」

何か聞き覚えのあるような声がしますが、知りません!

邪魔しないでください!

「おい、レフィーヤ。」

「何ですか!私は忙しいんです!」

「おい、レフィーヤ!」

「あ、あのレフィーヤさん…。」

「何ですか!全部話す気になりましたか!」

「あ、あの…後ろを見て下さい:。」

「ははーん、その隙に逃げ出そうという腹ですね!そうはさせませんよ!」

ええ!いつもそうです!

私から逃げようとするなんて、許せません！

今日こそは逃しません！

「ち、違います！後ろを！後ろを見て下さい！」

「何ですか！後ろに何もな…いことは…なかった…で…すね。」

そこには…私達「ロキ・ファミリア」の仲間がいました。

そして、怒りをあらわしたリヴェリア様が…。

「私に意見するとは、お前も偉くなったものだな。レフィーヤ。」

「い、いえ、これには事情があります…。」

「ほう、いきなり歩きだして『白兔の脚』を見つけ難癖つけて、魔法をぶつけようとした

ことが事情か？」

「あわわわ…。べ、ベル・クラネル！せ、説明しなさい！」

「え？ぼ、僕ですか？」

そうです！そもそも貴方が悪いんじゃないですか！

全部話しなさい！

「いや、ベル・クラネル。不要だ。私の仲間がすまなかったな。」

「い、いえ…あの…僕らは、これで失礼していいでしょうか…？」

「ああ…、いや待ってくれ。アリシア、お詫びにエリクサーを渡してやってくれ。体調が

悪いようだしな。」

「あ、はい。わかりました。…ベル・クラネル、うちのレフィーヤが本当にすみません…。」

「あ、あの…エリクサーは結構ですが…。」

「いや、受け取ってくれ。レフィーヤだけでなく、私たちの仲間が君たちに迷惑をかけてしまったようだから…。私達は先程までダンジョンに潜っていたから、事の次第を知らなかったのだ。」

「え、あ、そうでしたか。それはお疲れ様です…。ええと…はい、わかりました。ありがとうございます。受け取らせていただきます…。では、これで僕たちは失礼させていただきます。」

「ああ、すまなかつたな。「待ちなさい！ベル・クラネル！」待つのはお前だ！アキ！アリシア！レフィーヤをホームへ連行しろ！」

「レフィーヤ、貴方が悪いわ。」

「レフィーヤ、反省して下さい。」

「あ、ちよ、放して下さい！ま、待ちなさい！ベル・クラネルく〜！全部！説明！しなさああああい！」

そして、私はアキさんとアリシアさんに拘束され、ホームまで連行されました。

リヴェリア様からの、今までにない程の怒りと共にお叱りを受け、謹慎されたのは言

うまでもありませんでした。

これもそれも全て、ベル・クラネルのせいです！

第84話 愚者、引越。

今…私は「ヘステイア・ファミリア」ホームの部屋の1つにいる。

何故かって？

あの性悪メイドとサド執事に拉致されてきたからだよ！

「……………おい。」

「どうしましたか、愚者？」

「何かご不満でも？」

「どうしたもこうもない！何故…何故！私が「ヘステイア・ファミリア」ホームにいるんだ！」

ウラノスへ退職届をぶつけた後、『魔女の隠れ家』へ戻ろうとしたら店そのものがなくなっており、背後から気絶させられ、ここへ連れてこられた。レノアは部屋の隅で震えていた。

後で謝っておこう…。

「言うまでもないでしょう。あの店は「フレイヤ・ファミリア」に知られています。」

「本当に思考まで鈍ってしまわれたのですね。賢者の名が泣きますよ？」

こんなの、想定できるか！

「そもそも、貴女は既に神ウラノスから辞めたのでしよう？ならいいではありませんか。」

「ここなら、〔ロキ・ファミリア〕にも〔フレイヤ・ファミリア〕にも攻められることはありませんからな。」

そうだな！

お前らがいるなら、鉄壁なものな！

「それに…、〔ヘステイア・ファミリア〕の方は貴女と顔見知りでしょう？ならやりやすいではありませんか。」

「魔道具を作るだけでなく、使用感を聞くにはちよいどいいではありませんか。」

…一理ある。

くそっ！反論できないのが腹ただし！

「それに…そもそも貴女の蘇生魔法は、坊ちやまがいなければできません。」

「どういう意味だ…？」

「貴女は、スロットを埋める無駄なものと同じおっしゃっていましたが、そうではありません。」

何だと…？

ウイーネの時はたまたまではないのか？

「恐らく…あなたの蘇生魔法は確率により成功するものではありませんか？」

「確率…だと…。つまり…、私は…ウイーネ以外ハズレを引いてたということか？」

「ザツツライト。」

腹立つなあ、こいつら！

そうか…単に運がなかっただけなのか…。

正直凹む…。

「しかし、何故だ？ベル・クラネルに何か…特別なスキルでもあるのか？」

「今は全部言えません…、坊ちやまには神時代で初の発展アビリティを持っています。」

「『幸運』…聞いたことがありますか？」

ない…。

はあ…ベル・クラネル、君は本当に…。

「その『幸運』によって、貴女の蘇生魔法の確率が跳ね上がったのでしょうかね。」

「坊ちやまはその『幸運』でカジノで荒稼ぎしましたから、よほどの運でしょうかね。」

なるほど…。

そのような発展アビリティがあつたとは…。

そうか、私のこの魔法は意味があつたんだな…。

いや、彼が現れるのを待つていたかもしれないな。

「なので、貴女はここにいた方がいいです。魔道具製作者としても蘇生魔法の持ち主としても。万が一の備えとしてでも。」

「私達もいますから、会話に事欠かないでしょう。ああ、レノア嬢は助手としてお願いしますね。三食昼寝つきですからご安心を。」

…まあ、最強と最恐がいる限りここは安泰だろう。

「さて、私達はこの役立たずの神ウラノスでも挨拶に行きますか。」

「そうですね。あの豚もすでに調整済みで問題ありませんからね。」

「おい…待て。今、『調整済み』と言わなかったか？あのロイマンに何をした？」

「別に？単にお話をしただけですよ？」

「(哀れ…ロイマン。) そうか…わかった。その辺は君らに任す。ここへ連れてきたからには魔道具で何かリクエストがあるのだろうか？」

「さすが、長い付き合いだとおわかりになりますな。賢者の面目躍如といったところですかな。」

「貴女に作製してほしい魔道具とはこちらの通りです。」

む…。 ……なるほどな。この内容の魔道具か。

ふむ…着眼点が私と違うから非常に参考になる。

「そうか、わかった。これなら短期間で作れそうだ。」

「よろしくお願いしますね。」

「今は時間がないですが、戦争遊戯後は時間ができますので、色々と話しましょう。」
そういつて、彼らは音もなく去った。

「ふう…レノア、大丈夫か？」

「は、はい…愚者様。あの方々は一体…？」

「私の…悪友さ。」

第85話 愚者、入浴。

ガラガラガラ!

「そうそう、賢者。貴女臭いますよ。お風呂へ入ってはいかがでしょうか? いや、入れ。」
「…嫌味か? 骨と皮しかない私に入れと?」

いい感じで終わりそうだったのに…、こいつは!

「そうですが? 凝り固まった骨と皮が柔らかくなるには、ちょうどいいでしょう。」

「…はあ。どうせ、有無を言わさず入らされるだろう? いいさ! 入ってやるさ。」

いつか入りたいと思ってたが、ちょうどよかったな。

こいつ、そこまでお見通しじゃないよな?

…ないよな?

「わかつているなら、いいです。では、こちらです。ああ、一緒に入る方もおりますので。」

「…え? おい! わかつてるのか? 今の私を見たら…。」

「問答無用です。」

ひよい トコトコ

「おい！こら！下ろろーせ！」

何て奴だ！ひどいメイドだ！

訴えてやる！

「ふう…いい湯ですね。」

「ええ…（今日で二度目の入浴ですが、まあいいでしょう。）」

「【ディアンケヒト・ファミリア】にはないのでございますか？」

「患者用はあるんですが、団員用はありませんね。」

「【ヘスティア・ファミリア】は贅沢ですね。改宗してよかったです！」

「命さんが言い出したことではありませんか…。」

「…：さあ！湯を堪能しようじゃありませんか！」

「「話を逸しましたね…。」」

「下ろろーせ！あ、こら！脱がすな！」

ちくしょう！セクハラだ！

「…？なんの騒ぎでしょうか？」

「皆様方、失礼します。」

ガラガラガラ

「あの…そちらの骸骨は何でしょうか？」

「え？愚者様？」

「愚者様って女性だったんですか!？」

「「ええっ!？」」

皆…私を女性と見てなかったのか…。

まあ、黒ずくめでわからないから仕方がな…

ドッボン！

いいいいいいっ！

「ぶはっ！メイ！何をするんだ！」

「入らないと言いつ張るからです。」

「入らないと言いつてない！ほら、私は骸骨だろうが！」

スパルトイに近い私を…。

「今更ですか？皆様、どう思います？」

「リリはもう慣れました…。」

「春姫もです。なので、愚者様気になさらないで下さい。」

「そうです！」

「私は入団して間もないけど…、もういいかなと（ベルくんと比べたらどうってこともな

いっし)。」

「エイナさん…馴染みすぎです…。」

「なるほど、貴女が愚者ですか。アミッド・テアナサーレと言います。よろしくお願いします。」

「ああ…これは失礼。愚者と呼ばれているがね…。つてそうじゃない！君たち動じないな！」

((そのメイドと比べたら…ね。))

手慣れているな…。まあ、いいか。

久々の湯を堪能しよう！

「ふう…数百年ぶりの湯だよ…。」

「数百年ぶりですか…。あら…?」

「…命様、リリの目がおかしくなったのでしょうか?」

「あ、リリ殿ですか?じゃあ、幻覚ではないですね。」

「?どうかしたのかね?」

ん?皆、私をじーっと見つめているな。

何だろ?」

「これはこれは、思わぬ副次効果がありましたね。…ああ、なるほど。そちらの方です

か。」

「おい、メイ。何があつたんだ？皆、私を見ているようだが？」

「では、この鏡を見て下さい。愚者：いえ、この場では賢者と呼んだほうがいいですね。」

「何を言つて…い……るん……だあああ!!?ええっ!も、元に戻りかけている!」

あの呪いの魔道具を作る前の肉体が…戻りかけている!

何でだ?どんなことをやってもできなかつたのに!?

「うわあ…愚者様つて元々美人だったんですね!」

「これは美人というより美少女じゃない?」

ちよ…ちよつと…恥ずかしくなってきたじゃないか!

あまりジロジロと見ないでくれないか!

「ど、どうしてでございますでしょうか?」

「恐らく、アミッドさんですね。」

「「え?」」

「アミッドさんの出汁が愚者の不死の呪いを解いたかもしれませんね。」

「だ…出汁…。」

なるほど…【戦場の聖女】は伊達じゃないということか。

「こういう効果もあつたとは…。」

「ふむ…アミッドさん、カサンドラさん、その骸骨に魔法をかけてくれませんか？」
「え？」

「アミッドさんの出汁が聖なる水で愚者を徐々に解呪できたかもしれませぬ。なので、解呪がより強い魔法なら解呪できるかもしれませぬ。」

「わ、わかりました。」

ちよ、ちよつとそれやられたら消えてしまうんじや…。

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。薬奏をここに。三百と六十と五の調べ。癒しの暦は万物を救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操縦。呪いは彼方に、光の枢機へ。聖想の名をもって——私が癒す】

【ディア・フラーテル】

【……………詠唱中……………】

【キュア・エフィアルティス】

アーーーーーッ！

…？何ともないな…。あつ！

「うあああつ！数百年ぶりの肌と肉だあああつ！」

「うわあ…すごい美少女…。」

「何てもつたないことを…。」

「賢者の石を作った頃って、こんなに若かったんですね！」

「すごいですね……」

我ながら見ると、恥ずかしいな……

まさか800年経った後でもこの感情を再び持つとは……

「はあああ。いい湯だ……。アミッド・テアナサーレ、カサンドラ・イリオン、感謝するよ。」

「い、いえ……。私もここまでとは思っていませんでした（しかし……出汁ですか……）」

「……この湯、商売でき「リリさんやめて下さいお願いしますほんとうに」ませんね……」

「ふう……ん？酒とつまみ？これは……」

「貴女の故郷、『アルテナ』の酒とつまみです。」

おお！気がきくな！

もう二度と食えない、飲めないと思っていたものが……

「ありがたい！いや……行儀が悪いが許してくれたまえ。」

「……いえ、どうぞ（数百年ぶりですから、仕方がありませんね）。」「」

「……モグモグ……ゴクゴクゴク……ぷはあく久々だ……」

（もしかしたら一時的なものかもしれませんが、様子見ましようか）

つと、いけないな。【戦場の聖女】と【悲観者】にお礼言わないとな。

「アミッド・テアナサーレ、カサンドラ・イリオン、治療魔道具で何かあつたら言ってくれ。及ばずながら力になりたい。」

「あ、はい（すごく嬉しそう…）」

「愚者、今のうちに改宗はできませんでしょうか？」

「ん？ああ…無理だな。あの主神が開錠および改宗可能にしてくれなかったからできないが…。」

「なら、ここに『開錠薬』と『更新薬』があります。ヘステイア様が戻ったらやってみませんか？」

「…準備がいいな。そうだな、ぜひお願いしたいな。」

800年も経っているんだから、ステータスも大幅に上がっているだろうな。

…上がっているといいな。

「えーと…帰ってみたら、そのの美少女が愚者くん？いや愚者ちゃん？とは驚いたよ…。」

「ちゃんづけはやめてくれないか、神ヘステイア。愚者くん結構だよ。」

「（すごく上機嫌だな）ああ、わかったよ。愚者くん。えーと、改宗できるかって？」

「はい、『開錠薬』と『更新薬』があります。できたらいいのですが…。」

「これらの薬はあまり好きじゃないけどね…。けど愚者くんは800年も生きてきたんだしやってみるか!」

神へステイア…ありがたい!

「開錠はできた、更新もできた。ステータスの各項目ほぼMAXになっているけど…、改宗するには『アルテナ』の主神が必要みたいだね。…ごめんよ、愚者くん。」

「いや…更新ができただけでもありがたい。ふむ…魔導と神秘がSになったか。これでもいい魔道具が作れるな!」

よっしやあああ! 質のいい魔道具が作れるぞおおお!

「…ああ、やつぱりここまでですか。」

「え? あ!」「む? どうした? あ…。」

ああ…私の肌と肉が…。

骨と皮だけになってしまった…。

「元に戻りましたね。やはり一時的なものでしたか。」

「……メイ。」

「何でしょう?」

「【戦場の聖女】と【悲観者】が風呂へ入る時には、私も呼んでくれないか?」

「ふっ……いいいでしよう。」

メイの嘲笑がムカつくが、やはりあの風呂の気持ちよさは抗えん。一時的でも元に戻るきっかけが見つかったのは、非常に大きいな！
…癩だが、メイとセバスには感謝せねばならんな。

第86話 老神、不動。

「……………（愚者がいないのがこんなに寂しいとはな。）」

「神ウラノス、こちらのハーブティーはいかがでしょう？」

「こちらは焼き菓子です。」

「……………15年前に言ったが、唐突に現れるのはやめてほしい…。久々だな、メイ、セバス。」

「本当に変わらぬな…。こやつらは。」

「さて、発言に気をつけなければならぬな。」

「ええ、久々ですね。この役立たずの神が。」

「15年間お疲れ様です。座っているだけのクソ神が。」

「本当に変わらぬな…。お主たちは。お主達が復活したのは愚者から聞いておる。」

「かなり怒っているな…。」

「これは、ますます言葉を選ばないと送還されるな。」

「そうですか、それで何か言うことは？」

「ベル・クラネルに全てを託す。それだけだ。」

「上々です。残念です、せっかくの道具を持つてきたのですが。」

（道具…何の道具かは聞かないでおこう。）

「さて、神ウラノス。15年間の怠慢について説明をお願いいたします。」

「何故、神フレイヤと神ロキを制御できなかったのです？」

「……………あやつらは男神や女神ほどの力も器量もないからだ。フレイヤはともかく、

ロキは特に信用ならん。あやつは天界でも邪神として暴れまわっていたからな。」

「それでも何らかの叱咤激励はできたでしょうに。」

「創設神の名が泣きますよ？」

「何とでもいえ、逆にお前達に問う。フレイヤとロキの眷属で、お前たちの元ファミリア

の眷属と同様のことができたのが、何人いると思っている？」

「ふむ…………、数人も満たないですね。」

「全く、マキシムやザル坊が自らの命を差し出し、彼らの経験値にしたというのに無駄になりましたね。」

「…それに、ベル・クラネル程の逸材があやつらの眷属にはいたか？」

「皆無ですな。」

「坊ちやまをそやつらと同レベルにされては、困ります。」

よほど、ベル・クラネルに執着しておるな…。

まあ、仕方があるまい。両ファミリアの系譜を持つ唯一無二の子だからな。

「お前達の目から見て、ベル・クラネルはそれほどか？」

「おや、まだ会っておりませんか？ いけませんな。」

「会って話してみることを、おすすめしますよ。」

「そうしたいが…ここまで連れてくるのは厳しいだろう。ロイマンがいる限りな。」

「それについてはご心配なく。」

「我々が誠心誠意を込めてお話をした上で、非常に協力的になっておりますよ。」

「……………何だと？」

「こいつら…ロイマンに何かしたな？」

「いや…聞かないでおこう。」

「聞くのが恐ろしいからな。」

「…殺してなければそれでいい。あれでも有能だからな。」

「ええ、有能ですね。薄汚い欲望がなければ。」

「確かに有能です。反吐が出るほどの醜さでなければ。」

「ああ、明日にギルド長とお会いできると思いますので、してみてはいかが？」

「本当に何をしたのだ…。」

「ロイマンに会うのが怖くなってきたな…。」

「神ウラノス、愚者を介して言いましたが、我々は救界には興味ない。坊ちやまを真の主として見定めています。坊ちやまがやりたいこと、成したいこと、叶えたいことを我々は全力をもって支えます。」

「相手が貴方であろうが、元主神たちであろうが、立ちふさがるなら全力で叩き潰します。」

「……………元主神でも…だと？あやつらが何をしたのだ？」

「お答えしましょう。」

そして、儂は男神がベル・クラネルを14年間も育て、女神復活とともに育児放棄したことに呆れた。

「そうか……………天界へ送還されても文句はいえぬな。」

「何を言っているのです？そんなもったいないことはしません。」

「坊ちやまの心の痛みの、一億倍くらいは味わってもらわないといけません。」

「……………そうか。」

自業自得だな、男神は。

「神ウラノス、オラリオは坊ちやまを中心として一丸となってもらいます。何かご意見は？」

「ない。先程も言ったが、ベル・クラネルに全てを託す。それだけだ。」

「そうですか。ならそのまま祈禱を続けて下さい。ダンジョン制覇も黒竜討伐も坊ちや
またちが成し遂げます。」

「なら、いい。」

「ああ、ギルド運営はロイマンにおまかせした方がいいですね。」

「今のロイマンなら、誠心誠意込めて動いてくれますのでご心配はいりません。」

「……………そうか。」

「戦争遊戯が終わってしばらくしたら、坊ちやまを会わせます。その時に判断して下さい。」

「先程貴方が言った、全てを託すのにふさわしいかどうかを。」

「不要と思うが、会ってベル・クラネルの真意を聞くにはちよいどいいか。」

「では、我々はこれでお暇させていただきます。」

「戦争遊戯は神の鏡を見て、坊ちやまが救界の要となるかどうかを見定めてください
ね。」

……………行ったか。

ふう……、何とか送還されずに済んだな。

ロイマンに一体何したのだ？あの二人は？

まあ、いい。明日ロイマンに会えばすむことだ。

そして翌日ロイマンに会った儂は、腰が抜けるほど驚き呆れた。

改めて、とんでもない奴らを解放したベル・クラネルを、恨めしく思ってしまった。

だが、かえってそれでよかったかもしれない、と悟るウラノスであった。

第87話 道化神、予感。

また、今日も欠席や…。

あんの色ボケ、いつまでも拗ねているんや…。

時間が延び延びになるのは狙い通りやからええけど、美の神としてどうや？と思うんや。

同郷としてホンマに恥ずかしいわー。

しかし、あの色ボケがそこまでして手に入れたい子が、ドチビの子とはなー。

というか、レベル1の時にすぐに手を出さなかつたんや？

あー、どうせしばらく放し飼いにしておしくなつた時に手に入れたくなつたんやろうな。

そして、フラれた。

ざまあ…と言いたいんやが、ウチらも魅了されたから強くは言えんわ。

あの少年、一体何なんや。

冴えない少年に見えて、開けたらビックリやんけ。

未知がびつちり詰まっとるわ。

ウチも欲しくなったわー。

それに：フィン、かなり焦つとるなー。まあわからんでもない。

ぼつと出のあの少年が、自分より英雄の道をショートカットで駆け上っているんやから。

しかも半年で。

『異端児』の段階ではフィンがまだ勝つとると思つたんやが…。

クノツソスの戦いで、あのクソ神の吠え面を見ることができたのは、ドチビとドチビの子たち…特にあの少年や。

まあ、フィンが見いだし切り札としてうったし、鼻屑目に見ても五分五分やな。

けど、今回は違う。

あの色ボケの、ウチでも逆らえんかった魅了を弾き、孤独となった状況でも諦めんかった。

フィンでも無理や。

明らかに格が違うというより…、バグやな。

これだから、下界は面白いんや。

あー、くそ。何でウチに入らんかったんやー。

絶対におもしろいことになつとつたんになー。

それに…、もうウチのもの殆どがああ少年を気にしとる。
フィンや幹部全員だけでなく、二軍もや。

あの大鐘樓の音を聞いたら、誰だつてそうなるわー。

まあ、あの音を聞いたクソ神の面は笑えたけどな。

ここまですとは思わなかったわー。

ほんまにドチビにはもつたえないわー。

フィンは3日前からずつと考え込んでる。

テイオナとベートや一部の団員たちは、3日前から模擬戦をずつとやつとる。

鬱憤が溜まるとるんやろうな。

テイオナが「ガネーシャ・ファミリア」の牢屋にぶちこまれた時は、さすがにわろう
てしようたわ。

今は模擬戦に、ストレスぶつけて仲間入りやー。

ガレスはそいつらの宥め役や。大変やろうな…。

ドチビの子の戦いを見れんかったのを、今でも愚痴つとる。

しやーないわ。運が悪い、というしかないわー。

アイズたんは…あの発言をした後、ホームにこもりつきりや。

アイズたんがあんな発言するとはなー、いや絶対に意味分かつたらんな。

フインはリヴェリアが何とかするだろう、と言ってるがアレ見ると無理やない？
いや、今のアイズたんおかしいんや。

昨日、機嫌が悪いアイズたんを見て外出てきーやと言って、数時間後アイズたんに珍しく大荷物の買い物をしてきたんや。

何買ったんやろうな…。

それからずっと上機嫌で、ホームから特に自分の部屋から出ようともせん。

剣の素振りだけはやつとつたけど、それが終わったらすぐに部屋にこもつとる。

ますます気になるわー。

しかも、今までになかった表情も出てきとる。

絶対にあのドチビの子の影響や！

本当に何でウチに入らんかったんや！

しかし…、ティオネを気絶させたのは誰やねん。

ティオネはレベル6やぞ？

背後からそつと気配もせず、首を締めて、三人抱えて「ガネーシャ・ファミア」の
牢屋に？

色ボケの【猛者】は無理や。そんな器用なことはできるわけないやろ。

そんなんでできるのは、オラリオどころが世界中にもおらへんわ！

…いや、待てよ…いたわ…。

あいつらなら、可能や。

けど、あいつらは封印されとる身や。

あのエロ爺と、超絶残虐破壊衝動女はオラリオに入れへん。

もちろんその眷属もや。

最後の眷属でもある【静寂】と【暴食】は7年前に死んだんや。

だから、解かれるはずがないんや。

そや、そのはずや。

なのに…何で嫌な予感がするんやろうな…。

もう手遅れのような気がしとるのは、ウチの気のせいやろか？

そろそろ、ママが帰る頃やな…。

アキとラウルから聞いて、多分怒るんやろうな…。

5年前のように、また暴れなきやいいんやけどな。

このおもしろい段階で、本当に送還されとうないわ…。

ドガドガドガドガ！

あー、怒つとるな…。

どっか避難しとこうか…。

バタン！

あー、手遅れやった…。

いつでも逃げられるようにしとこい。

「リヴェリア、お帰り。ノックをしてからドアをそつと開けてくれないか？」

「お主らしくないぞ、少しは落ち着かんか。」

「よー、ママ。レフィーヤはどうやったん？」

二人とも煽つたらアカン！

そつと別の話題へ反らせないと、ウチが送還されてしまうんや！

「落ち着けど？今までのことはアキとラウルから聞いた。これが落ち着けるわけがな

いだろうー！」

「まーまー。ママー、レフィーヤはー？」

「レフィーヤは…謹慎処分だ！後でみっちりきっちり説教だ！」

「は？」

「何があつたんや…（最近この台詞ばかりやなあ。）」

もう勘弁してほしいわ…。

「今…【ハスティア・ファミリア】と戦争遊戯前だな？あの未熟者はベル・クラネルを見
つけ、脅し、喧嘩を売つたんだ！しかも、メインストーリーのど真ん中でだ！」

「「……………」」

何で…そないなことになつとるんや…。

レファイヤ…あの少年を嫌っているといいながら、思い切り気にしとるんやんけ！

ミイラ取りがミイラにならんようにと、言うたのに！

「それはまだいい。説明しろ、フィン、ガレスそしてロキ。お前達がいながら何故このよ

うなことになっているんだ！」

「そうくると思ったよ。今から説明するよ。」

そしてフィンは今までのことを説明しよった。

けど、それだとママには逆効果やない？

第88話 道化神、驚愕。

「なるほどな…。だが、見損なつたぞ。フィン、ガレス。」

「何だつて?」「何だと?」

「フィン、お前はベル・クラネルに劣等感を抱いているんだろう?【勇者】というのはお前ではなく、彼が一番相応しいことにな。だから、お前はロイマンのような愚物の話に乗った振りをしながら、「ヘスティア・ファミリア」を降し彼の功績を自分が指示したことにしたいのだろうか?それが一族復興の早道だからな。」

「リヴェリアツ…!」「リヴェリア!言い過ぎじや!」

「ガレス、お前もだ。「熱き戦いを」といいながら「ぬるき戦い」しか求めてこなかっただろう?ファミリアの安全というのを建前にしながら、ドワーフのように引きこもりぬくぬくと安全をとつたのだろうか?何が【重傑】だ?笑わせてくれるな。」

「貴様!」「それは、まあ同意するね。」

「ちよ、ママ、言い過ぎや…。」

「ロキ、貴様もだ。」「ファツ!?ウチも!?!」

「主神でありながら、酒をくらい我々にセクハラをし、揉め事しか持つてこないし、しか

もアイズに教育の悪いことばかり！少しは主神らしく堂々としろ！」

「それは同意するね。」「儂も同感じゃ。」

「フアツ!?!誰も味方してくれん!?!」

ひどい！ウチはフアミリアのことを考えて…。

あー、反論できんわー。

「それをいうならリヴェリア、君もだ。「まだ見ぬ世界を」といいながら未だにここにいる。アイズのこともあるかもしれないが、結局君も見ぬ世界を怖がり、ここにいる。エルフラしく傲慢で矛盾しているのは、君じゃないのかい？」

「何だと！フィン、貴様！」

「同感じゃな、傲慢ちきなエルフラしいわ！」

あーあーあー…。

これ、止まらんわー。

「【ヘステティア・フアミリア】に戦争遊戯だと？貴様らは恥を知らないのか!?!フィン、ガレス、貴様らが忘れたというのなら、思い出させてやる！邪神ディオニュソスの野望を、同胞であったフィルヴィス・シャリアを怪人に落とす『27階層の悪夢』を間接的に起こしたのは我々だと！」

「やめろ！リヴェリア！」

「いいや、止めないさ！それだけではない！5年前の【アストレア・ファミア】を壊滅させた、間接的な原因も我々にもある！」

「……………っ。」

「ロキ、あの時お前は安心しただろうか？」

「何やて？」

「お前は、神アストレアが気に食わなかっただろうか？エセ正義をかざしている彼女たちを。」

「…それは認めるわ。だが、あの子たちが死んでよかったと思つたことはないわ！」

「リヴェリア…彼女達が死んで残念に思つたのは君だけじゃない。」

「嘘をつくなよ、【勇者】。お前は彼女達の功績を、【静寂】を倒した彼女達を疎ましく思つていただろう？特に【狡鼠】のライラをな。」

「いい加減にっ…………！」

「7年前の大抗争で、功労者であつたのは【アストレア・ファミア】と【フレイヤ・ファミリア】の【猛者】だけだ。我々はただ、指揮をして動いただけに過ぎない。」

「……………っ！」

確かにウチは、アストレアが気に食わなかった。

純粹面だけでなく、偽善ぶりもや。

だが…アストレアのおかげで、大抗争はあの被害が最小限で済んだんや…。特にアストレアの眷属たちはなあ…。

本当に惜しいことをした、だから今のリヴェリアの発言だけはあかん！

「リヴェリア、それは…」

「それだけではない。5年前の『疾風』もだ！彼女が復讐にかられたといつても、たった1人の彼女のおかげで『暗黒期』が終わったんだぞ！最強派閥の我々でもなく！」

「……っ！」

「確かに行き過ぎはあったかもしれない。だが、お前達は知っているか？学区の教科書には7年前の大抗争、彼女の暴走による『暗黒期』の終焉が、ギルドの手柄になっているそうだ。」

「「なっ…!?!」」

「レフィーヤから聞いた。恐らくロイマンがすり替えたんだろうよ。あの同胞にふさわしくない、薄汚い豚がな！」

それはあかんわー、それだけはやっちゃあかんでー。

よし、ロイマンに抗議やー。

「わかった…、ロイマンに抗議するよ。」

「フン、抗議か。今度はロイマンから何を受け取り、何を取引する気だ？少しはベル・ク

ラネルを見習え。」

あ、ヤバ……

「ちよ、リヴェリア、それは……」

「あの少年の今までの経緯は知っているだろう？あの少年は何も見返りもなく、立ち止まることもなく、ただ前を向いて走っていつている。私は、あの少年に顔向けができん。」

「……。」

「あの少年を見てきてわかると思うが、「ヘステイア・ファミリア」はいつ全滅してもおかしくはない状況にあった、なのに、誰も死んでいない！」

「……っ！」

「それに引き換え、こちらはどうか？最強派閥と謳いながら、リーネ達を失った。クノツソスの件でも『27階層の悪夢』による引き金がなければ、彼女達が死ぬことはなかった！」

「リヴェリア、それはしやーない。あの邪神共を送還しなけりや、多くの子たちが死んだんや。」

あの事件が引き金になったのはわかっとる。

けど、邪神を捕らえなきやあかんやつたんや。

それはアストレアも認めとる…渋々やけどな。

「わかっている！わかっているんだ！だが、あの少年を見てそう思わずにいられないんだ！『異端児』の件もだ。一時期オラリオの敵となっても、あの少年はそれを押し通した！私たちにできるか！いいや、できない！絶対に切り捨てた！それはフィン！お前が一番分かっているだろう！あの少年が救ったからこそ、第一次クノツソス侵攻戦でセイレーンのレイがいなければ、お前は死んでいた！」

そやな……あの少年が『異端児』を救うというアホなことをしてなきや、ウチらは死んでいた。

それは認めざるを得ないんや。

あのクソ神を追い詰めたのは、ドチビとドチビの子たちのおかげや。

「…………それは認めるよ。だからこそ、ベル・クラネルを保護しなければならぬ。」

「そして、彼を利用して自分の一族の再興を成すつもりか？成した後はその件を蒸し返して、世界を混乱させた大罪人として処刑するのか？」

「いい加減にしろっ！リヴェリア！」

「二人とも落ち着けい！」

「あの少年の戦いも見てないドワーフごときに、何が分かる！」

「貴様らだけ見て、儂が見てないのはずいではないか！」

ちよ、ガレス…。

それは運が悪いというしかないわー。

「もう、我慢できない！表へでろ！リヴェリア！」

「ああ、私もだ！貴様の欲深さはロイマンに匹敵するよ！」

「二人とも腹立つわ！儂も相手になつてやる！」

あーあーあー。

ヤバい。5年前よりキレとるー。

アイズたん！助けに来てやー！

「リヴェリア、お帰り。…何やっているの？」

キターーーー！！

アイズた?!…ん!?

ホワット?!?!

「む、アイズが。ちよつと待て。こいつ…ら…と!?!」

「ア、アイズ…?!?それは…?…」

「な、何があつたんじゃ…?!」

ホントに、何が、あつたんやあああ!?!

第89話 妖精王女、感涙。

私たちが一触即発で、喧嘩…いや殺し合いをしようとしたところにアイズが入ってきた。

驚くべき格好で…。

「ア、アイズたん…。その格好は何や…？」

「…？パジャマ…だけど？」

「いや、わかっているよ。パジャマでうろつくな、ということじゃないんだ。そのパジャマの柄と左手に持っているものは何だい？」

「…？ウサ耳ベルと、ウサ耳ベルのぬいぐるみだけど？」

「どこからどう突っ込めばいいのか、わからんわい…。」

アイズが…あの少年のウサ耳？をつけた顔の柄のパジャマ…年頃の女の子が着るようなものを、そして左手にあの少年のウサ耳のぬいぐるみを抱きしめている…。

これは夢か…？

あのアイズが…年頃の娘のような姿を…。

「フィン…ガレス…目の前は夢ではないだろうか？」

「残念ながら、事実だよ……。」

「何があつたんじゃ……?」

さつきまでの殺気めいた雰囲気は既に吹き飛んでいた。

だが、次のロキの言葉で更に険悪になった。

「あかん! あかん! アイズたん! その柄のパジャマとぬいぐるみは即捨てーや!」

その時、一陣の風が吹いた、黒き風が。

「!?!」

「ロキ、やめろ!」

「ぬうん!」

【起動】ー【復讐姫】

「今、何て言ったの? ロキ? ねえ?」

「ひっ……!」

「アイズ、落ち着くんだ……。」

「ロキ、僕の背後から動くな。いいな?」

「アイズ、ロキの言ってることは言い間違いだ。そうだな、ロキ?」

そう言わないと、アイズは間違いなくロキを殺す!

「お、おう。うん、ウチの言い間違いやった。に、似合つとるで、アイズたん!」

「そう…それならいい。次はないからね。」

「本気で言っていると思うよ、ロキ。次は僕らが守れると思わないでくれ。」

「嘘は言つとらん…、言つとらん…。本気や…。」

「アイズ、分かったな。なら、その風を収めてくれ…。私らが安心できない。」

「…わかった。」

【白き風】

「……これでいい？」

この白い風は…そうか…あの少年との絆でできた風か…。

なるほど、アイズが安心するわけだ。

「この風は、ベル・クラネルの絆でできた風か…？」

「うん、リヴェリア。あの子の風であの怪人を倒せた。さっきの風では倒せなかったん

だ。」

そうか…確かに安心する風だ。

「アイズ…聞いていいかい？その…パジャマとぬいぐるみはどこで買ったんだい？」

「？店だけど？」

「儂、オラリオにいて長いんじゃないが、そのような店があることも聞いたこともないぞ…。」

「最近…できたみたいだよ？」

「ウチもその店聞いたことないな……。あつ！アイズたん、昨日その店へ行ったん!?」
「うん。」

「そうか……。だからアイズ、昨日と今日は上機嫌だったんだね？」

「うん、ベルに囲まれているから？」

!?

今……何て言った？ 囲まれていると言ったな？

お前……まさか!?

「待て。アイズ、囲まれていると言ったな？ まさかと思うが、ベル・クラネルを攫って自分の部屋に閉じ込めているんじゃないだろうか？」

「ひどいよ、リヴェリア。いくら私でも、そんなことは……。……。しないよ？」

この子……顔を背けたな？

『今、ものすごく間があったね。しかも顔を背けたね。』

『機会があれば、攫おうとしてたかもしれないのう。』

『嘘は言つとらんで。安心せーや、ママ。全然安心できへんけどな。』

「……。そうか、それは私が悪かった。だが、囲まれているというのはどういう意味だ？」

「うーん、どう説明すればいいんだろう……？」

「部屋で、ベル・クラネルに囲まれていると言ったね？ 見に行ってもいいかい？」

「うん、いいよ。」

「待て、年頃の娘の部屋だ。まず私とロキが行く。いいな、ロキ？」

「おー、ウチも興味あるわー。」

『ロキ、発言には気をつけてくれよ。特にベル・クラネルに関しては。』

『さっきのアイズは本気じゃった。儂でも防げるかは…。』

『わかつとるわ…。まだ送還されたくないわ…。怖かったわー。』

「じゃあ、アイズ行こうか。」

「うん。」

すごく嫌な予感がするが…見なければならぬだろうな…。

そして私たちはアイズの部屋に来た。

前のアイズの部屋は、殺風景だったはずだ。

ベッドと机と椅子、クローゼットと鏡だけだった。

それが…。

「……………」

「何や…これは…。」

「どっ？ベルがいつぱい。」

そこには…確かにベル・クラネルがいた。

ただし、本人ではなく物だが。

絵…、ぬいぐるみ…、服…、抱き枕までも…だと!?

「アイズ…、これは…何だろうか?」

「ベルのグッズ。」

「そ、そうか…。確かにいっぱいだな…。」

「ちよ!?!リヴェリア、他に突っ込むところあるやろ!?!」

「す、すまん。アイズ、それはどこで買ったんだ?」

「ベルのグッズ専門店。」

「は?…」

「えーと…、「ヘルメス・ファミリア」が作った店が…ベルのグッズ専門店。そこで買ったんだ。ほら、ファン会員のゴールドカード。ゴールドだよ。」

「そ、そうか…すごいな。」

「あの優男…何やつとんねん…。」

アイズが年頃の娘らしくなったと思ったが…、これは少々あの少年に偏りすぎではないだろうか?

逆に心配になってきた…、あの少年が。

「リヴェリア、ほらベルにそっくり。これを抱いて寝るとよく寝られるんだ。」
「そうか…。それはよかったな…。」

アイズのこの表情は…私たちでは引き出せなかったな…。
だが…、これはやりすぎではないだろうか…？

む…これは？

「『ベル・クラネル伝記』一巻』？」

「あ、これ。ベルの今までのことが書いてあるんだ。」

ほう。興味深い。

「すまんが、アイズそれを貸して「ダメ」くれないだろう…か？」

「アイズたん、あそこにこれと同じ本があるんやが…？」

「あれは観賞用。これは読書用。そしてそれは予備用。」

「何で三冊もあるんねん…。一冊でええやろ！」

「ロキはわかかってない。本は…ボロボロになるんだよ？」

確かにこの本は、何回も読んで擦り切れているな。

待てよ…。

「アイズ、お前がこれを読んでいるのか？前は本を読むのも嫌だとか、言っただけか？」

「……………昔の話だよ。「半年前ぐらいだが?」…ベルの本は別。」

「そうか…私にとつて、お前が本を読むようになったのは嬉しい。」

「リヴェリアあああ!?!突っ込むところはそこやないやろ!?!」

「ロキ、いいではないか。アイズがどのような形にしろ、本を読んだり可愛い服やぬいぐるみを持つようになったのは、いいことではないか。」

「それはそうやけど…。そうや!アイズたん、ウチのグッズは「いらぬ捨てる見たくない。」…そうなん…。」

……………まあ、当然だな。

しかし、ベル・クラネル伝記か…。

非常に興味があるな。

「アイズ、明日でもいいからその…ベル・クラネルぐつず専門店?へ連れてつてくれないだろうか?この本を買いいたいんだが。」

「いいよ。明日行こう。」

「ああ、行こうか(アイズとこういう会話するのは初めてだな…)。」

「うちのアイズたんがあああああ…」

「あ、リヴェリア。フィンから聞いているかもしれないけど…。」

「フィンから?何をだ?」

「あ!!」

「戦争遊戯に私たちが勝ったら、ベルと私を同じ部屋にしてほしい。」

.....

「この子は、今何と言った...?」

「アイズ...その...同じ部屋にしたいのは何でだろうか...?」

「ベルを愛で...守りたいから。」

「ガハアツ!」

む、ロキが血吐いて倒れたか...

送還はされていないから、放置しておこう。

「そ、そうか...。だが、アイズ。この部屋にベル・クラネルを入れるのか?」

「えっ...ダメなの...?」

「よし、アイズ。逆に考えよう。もし、ベル・クラネルの部屋がお前の...ぐっずだらけだ

としたらどう思う?」

「.....嬉しい?」

「(逆効果だったか) そうか。まあ、過ちとかならないが...。」

「ちよ!?!リヴェリアああああ!?!」

「過ちって?」

「ああ、いや。そうだな、戦争遊戯に勝った後、お前とベル・クラネルとじっくり話す必要があるが、いいな?」

「?うん、いいよ。」

『ママ!ママ!ええんか!それは!あかんやろ!』

『黙れ、ロキ。あの少年にそういう邪な心はないと信じたい。なら、アイズの気持ちを尊重してもいいではないか。』

『それはそうやが!ウチのアイズたんがあああ!』

アイズが年頃の娘らしくなったのは、嬉しい。

あの少年には本当に感謝しなければならぬ。

このような形でなければ…な。

第90話 千妖精、興奮。

怖かった…。

リヴェリア様のあの怒り…説教…怖かった。

これも全て、あの少年のせいです！

団長やガレスさんと話があるので、早々と切り上げてくれました…。

途中でテイオナさんと会い、今回のことを話しました。

わかってくれるはずです！

「それは、レフィーヤが悪いよー。」

あれー？

そして、テイオナさんと一緒にアイズさんに会いに行きました。

「最近というか、昨日からアイズがすごく機嫌がいいんだー。」

「最近…？ということはそれより前はよくなかったんですか？」

「あー、うん。ほらアルゴノウト君のことでね…。」

また！あの少年ですか！

本当にどれだけ、私たちの心をかき回してくれるんですか！

「あれー？リヴェリア、そっちにいたんだ。」

「アイズさん成分が…欲しいです…。」

「うむ…？お前達か…？レフィーヤ、反省したか？」

「はい…すみません。ところでアイズさんは？」

アイズさんの顔見たい…。

「レフィーヤ？どうしたの？」

「アイズさあ……ん？」

「え……？ア、アイズ…それは何？」

「……ベル？」

べ、ベベベル・クラネルうううう！

「ちよ、ちよっと待って下さい！そ、それは!？」

『まずいで！リヴェリア、レフィーヤがあの子のことをけなしたら、血い見るで!』

『ああ！そうだな！ただでさえ、さつき揉めたばかりなのにな!』

「待て、レフィーヤ…」

「ど、どこに売っているんですか！それは!」

「え？」

パジャマですって!?

アイズさんを包んでいるのがベル・クラネル!

何てうらやましい…違う、いやらしいんですか!

それに…何ですか!ウサ耳とは!

似合いません!

何て可愛い…違う!何ていやらしいんですか!?

「ベルグッズ…専門店?」

「えー!?何それ!私も行きたーい!どこにあるの!?というか、教えてほしかったよー!」

「ご、ごめん?」

何て…何て…ものを売っているんですか!

すぐさま購入…いいえ!没収…違う!焼却しなければ!

「ヘルメス・ファミリア」が開いた店だよ…。昨日行ってきたんだ。ほら、ファン会員

証のゴールドカードだよ。」

「……………」

「アイズ、聞こうと思ったんだが…グッズ全部でいくら使ったんだ?」

「……………怒らない?」

「ああ、怒らないとも(すごく嫌な予感がするが、仕方がないだろうな)。」

「昨日と今日で…100万ヴァリスくらいかな?」

「100万ヴァリス!」

それだけで!? 高すぎます!

ボツタクリです!

「そ、それだけですか…?」

「ううん、違うよ。この部屋にあるもの全部。」

「はっ。」

「お前達は見ない方が…ああ、もう手遅れか…。」

そして、私はアイズさんの部屋を見せてもらいました…。

「す、すごい…アイズ、こんなに買ったんだ…。」

「こ、これも…。あ、それもいいですね…。」

『今の内に止めたほうがええんやろか…?』

『もう手遅れだ…。ロキ、フレイヤ魅了騒動でオラリオのどれくらいのファミリアが、動いた?』

『全部や…。』

『そうか…なら、遅かれ早かれ耳に入っただろうな…。既にオラリオ中に広まっていると考えたほうがいいな。』

『これはドチビの案とちやうな…。あの優男の案らしいといえはらしいが、どうもちや

うような気がするんねん…。何かこう…えげつない奴の案のような気が…。』

『フィンたちと口論している場合ではないな…。一歩間違うと…いや、もうファミリア内で割れてしまうな…。アイズの要求を聞き入れないと、あの子は暴れるぞ。』

『そうやろうな…。アイズたんが女の子らしくなったのは嬉しいんやが、こんな形になるとは思わなかったわー。せめて9年前にあの少年がおつたらなー。』

『全くもって同感だ…。』

ロキとリヴェリア様が何かを話し合っています、私はそれどころじゃありません。

買うものを考えないと…違います！

燃やすものを……いえ、やめましょう。

ええ、これはベル・クラネルを懲らしめるためです！

そういうえば、あの少年のことをよく知りませんね…。

せめて、この『ベル・クラネル伝記』1巻』は買わなければなりませんね！

「アイズさん…この本は全部で何巻あるんでしょうか？」

「ええと…今日で…8巻あつたかな？まだ全部見てないけど…その1巻だけは何回も読んでしまっているんだ。」

「そうですか、ありがとうございます！（8巻ですか。…うん、ヴァリスは問題ないです、すね！）」

(そうか、8巻もあるのか…。読み応えがあるな。)

「ああ、それと…。ゴールド限定の情報だけど、戦争遊戯後にその伝記の0巻がゴールド限定に売ってくれるって。」

「「0巻?」」

「うん…。あ、これ言ってもいいのかな…?」

「アイズ、ここは私たちが知らない。言ってほしい、0巻とは何だ?」

「ベルがオラリオへくるまでの話と…ベルの家族について。」

「「!?」」

『リヴェリア…、これ重要な情報とちやう?』

『ああ、重要だ。まさか、ここで知るとはな…。ふあんくらぶ、恐るべしと言ったほうが

いいのかな?』

『そやな…。』

「ア、アイズさん! そのお店はどこにあるんですか!？」

「あたしも行くー! お金は…テイオネから借りてもらうよー! ああ、大双刃が…。」

「うん、いいよ。リヴェリアも一緒にいくから、その時に行こう。」

「ああ、そうだな(レフィーヤには謹慎と言ったが、まあ仕方がないだろうな)。」

「ウチも行くわー。何か面白そうやし(あの色ボケが復活したら、絶対店のものを買い占

めるやろうなー)。」

そんなお店があるなんて…。

ルルネさん！教えてくれてもいいじゃないですか！

ベル・クラネル！

貴方の秘密を暴いてみせますからね！

第91話 大切断、駄々。

あたしはティオネにお願いしている。

「ティオネ！お願い！お金貸して！」

「嫌よ。あんた、大双刃の借金まだでしょう！それを全部返してからにしなさい！」
「わかっているよ！けど、どうしても欲しいものがあるんだ！お願い！」

極東で伝わっている土下座で、ずっとお願いしている。

どうしても…アルゴノウトくんのグッズが欲しいんだ！

「…はあ。仕方がないわ。いくら欲しいの？」

「ほんと！ありがとう！100万ヴァリス！」

「ふざけんよ！てめえ！高いじゃねえか、何買うんだ！」

「アルゴノウトくんのグッズ！」

「は？」

あたしはティオネにアイズの部屋について説明した。

「あのアイズがねえ…。なら貸してもらったらいじゃない。」

「いや、それが…貸してと言ったらさ…、「私と戦って勝ったらいいよ」と本気モードで

…。」

「……………気になるわね。アイズの部屋を見せてもらいましょう。」

そしてあたしたちはアイズの部屋に行った。

「この人ばかりは何…?」

「あれーおかしいな? さつきまでなかったのに…、アイズの部屋からだ…。」

何で? 女性だけがアイズの部屋を歩き来している?

どうしてー?

「あら、ナルヴィじゃない? これは何?」

「あ、ティオネさん、ティオナさん…。いえ、あの「白兔の脚」のグッズ全種類をアイズさんが持っているのです、どんなものかを見に…。」

「全種類ですって!?! アイズ…:どれだけ買ったのよ…。」

うん、だから全種類をかうのに、100万ヴァリスかかるんだ。

「あ、アリシアだー。」

「ふむ…なるほど。アレがこの値段ですか…。明日はリヴェリア様も行かれるようだし、ずらして行ったほうがいいでしょうか?…:いえ、護衛のためについていったほうがいいでしょうか? ロキも行くようだし…。」

「アリシア、どうしたのよ？」

「え？あ、ティオネですか。いえ…ちよつと気になることが…。お二人こそどうしたのですか？」

「このバカがね、100万ヴァリス貸してほしいってさ。ほら、【白兔の脚】のグッズを買いたいってさ。」

「何さーいいじゃんー。」

アイズが羨ましいよー！本当に。

アルゴノウトくんのグッズって、最高じゃん！

「ティオナ…、まず大双刃の借金を返してからの方がいいですよ。」

「ほら。」

「ううー…、でも欲しいんだもん…。」

「全種類はダメでも、少しずつ集めたらいいのではないのでしょうか？私もそうしますし。」

「え？」「は？」

「あ！いえ、では私はこれで！」

ええー…、あのアリシアまでも…。

「何が起こっているのよ…。」

そしてアイズの部屋を見せてもらうのに、数十分かかった。

「ティオネ……大丈夫？」

「うん？ あー……あのことね。とんだ失態だわ……。誰よ、本当につ！」

ティオネがアルゴノウトくんのぬいぐるみを殴ろうとしてたら、さつとアイズがぬいぐるみを助けてた。

「ティオネ……ベルに八つ当たりしないで……！」

「!? あ、ごめん……（今の、本気の殺気だったわよ!）」

ヤバイ。

「あー、ごめん、ティオネが。でもこのぬいぐるみ可愛いよねー！」

「うん、私はこっちの笑顔のベルがいい。」

「あー、わかる！」

（話についていけない……）

「でもさー、ティオネもフィンのグッズがあつたら、どうする？」

「何言ってるのよ、店丸ごと買うに決まってるじゃない！」

「ほらー、ならあたしの気持ちわかるよねー！」

「……仕方がないわね。ただ、アリシアの言う通り少しずつ集めたらいいじゃない。ほら、アイズは全種類持っているんだから、それを見たらいいじゃない！」

「ううー…、仕方がないかー。うーん、どれがいいかなー。」

「ティオナ…日ごとに色々新しい商品が入ってくるからキリがないと思うよ…。ダンジョンへ一緒に行つて魔石稼ごう?」

「え?アイズ…あんたこれだけ集めても満足できないわけ?」

「うん…、だつて新商品や限定商品がどんどん入ってくるから…ほら、これは限定で10人しか持つてないんだ。」

(ガチだ…。)

「そ、そうだね!明日は店へ行つていろいろと教えてくれるといいなー!」

「あ…なら、支店へ行つたほうがいいかも。そっちが空いているから。」

「え?し、支店?できて間もないわよね…?」

「うん、思つたより大好評なので東西南北で支店を作るつて。あ、これはゴールド限定の情報ね。」

『マジでガチになっているわよ…アイズ。』

『じゃが丸くんとダンジョン以外のこんなアイズ、初めて見るよ…。』

「あと…本店は行列がすごいから、私はゴールドだから優先的に入れるけど、付添は1人だけしかできないんだ。それは早いもの勝ちでリヴェリアにするつもりだけ…。」

「そ、そうなんだ…。つて、それレフイーヤへ言つた方がいいよ!」

「明日の朝でいいかな…と思ったけど、ダメ？」

「今、言った方がいいわよ。あの子すぐくがっかりするわよ。」

「うん、わかった。」

そして、夕食の時間でアイズがそれを言ったら、ロキと女性陣ががっかりし、リヴェリアが大変申し訳なさそうにしていた。

ラウルたち男性陣は微妙な表情をし、『後でもいいか』と。

ベートは興味なさそうだったが、尻尾が興味ありそうにフリフリとしていた。

素直じゃないなー。

そしてフィンは何かを考え込んでいた。

逆効果にならなきゃいいけど…。

私たちの本拠に近いファンクラブは、私たちで大盛況だった！

そして本店はリヴェリアとアイズで行き、ゴールド優先の待遇としてグッズの内容にリヴェリアも唖然としたみたいだけど、本には興味津々で全部買ったとのこと。

いいなー！

私は全部気に入って、ティオネにお願いしたけど貸してくれなかった！

ティオネと一喧嘩しようとしたら、お店の人が出てきて「出入り禁止」と通達される

「まあ、第一級冒険者だから魔石をガツポガツポ稼いでくるから、ゴールドは近いうちになるでしょう。」

「はい、グッズをホームに置いたらすぐにダンジョンへ行く、と息巻いていました。」

「本店では、『九魔姫』が主に書籍を大量購入したため、シルバー会員になったという報告がありました！あと…『剣姫』がプラチナ寸前です…。」

「さすが第一級冒険者と言ったらいいのか…というか『剣姫』買すぎじゃない？」

「うん、限定商品をすぐさま予約しまくっているわ…。」

「それより、『ロキ・ファミリア』の様子はどうか？」

「女性陣の話では、『九魔姫』は予想外にも戸惑っていないそうよ。男性陣は行きたがっているみたいのようです。『重傑』は動きなし。ただ、『勇者』は何かを考え込んでいるみたい。」

「!!すぐさま、その件を会長に報告して！『勇者』の動きは最優先よ！」

「了解！」

「男性用の店も作ったほうがいいのかしら…。」

「リヴィラのならず者どもが、『俺らが入りにくいじゃねえか！』との苦情がありました…。」

「支店長会議の課題に入れておくわ…。恐ろしいわ、ベル様はリヴィラのならず者まで

も手懐けるなんて…。」

「あ、それはかなり前からですよ。確か〔アポロン・ファミリア〕の戦争遊戯で〔ヘステイア・ファミリア〕に全員賭けたそうですよ。」

「ああ、だから倍率がそんなに高くなかったのね。大儲けだったそうね。何故かしら？」

「それはほら、伝記の第2巻に載ってたわよ。」

「それ、ギルドでは口外禁止じゃなかった？」

「え？あの豚が？」

「いや…それがね…。」

「「ええーっ！」」

第92話 勇者、懺悔。

ここんとこ数日は疲れたよ……。

昨日は、テイオネたちが2日前気絶させられ、「ガネーシャ・ファミリア」の牢獄に入れられたり……。

【ガネーシャ・ファミリア】団長【象神の杖】シャクティと険悪な仲になったり……。

そして、今日はレフィーヤがベル・クラネルとメインストリートで喧嘩しそうになったり……。

リヴェリアと久々に口論し、殺し合いになりかけたり……。

アイズがベル・クラネルのグッズにハマったり……。

うちの女性陣もそのグッズに興味を持ったり……。

何て日々だ……。

やはり、「ヘスティア・ファミリア」へ戦争遊戯を仕掛けたのは間違っていたのだろうか？

だが、もう引けない。

今日のリヴェリアの言葉は堪えたよ……。

僕の古傷、いや痛いところを抉ってくれる。

おかげで冷静になれたよ。

7年前の大抗争…。

確かに【アストレア・ファミリア】に思うところがないわけではない。

あの…最恐の眷属【ヘラ・ファミリア】でも異端であった【静寂】を倒したのだから…。

例えば病で弱体化したとしても、『才禍の怪物』は伊達じゃない。

そして彼女は、【静寂】を下し…邪神エレボスが産んだ【神獣の触手】を倒した。

オツタルは【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】に挑み続けて負け続けてきた。

それは僕らがよく知っている。

そして【ゼウス・ファミリア】の【暴食】ザルドに挑み、負け、勝った…。

超えろ！と言った僕が言うのもなんだが、羨ましかったよ。

彼に挑み、彼の心を知り、彼を超えた。

真意がどうであれ、オツタルはレベル7となった。

僕は…あの時冒険者の指揮をするのに精一杯だった。

【暴食】はオツタルに任せだが、闇派閥の猛攻は激しかった。

特に、ノワールたちの：老練な戦士たちの特攻を止められなかった。

彼らの切り開いた道は、多くの人々を救ったんだ。

僕の指揮じゃない。それが悔しい。

だからオツタルが「暴食」を倒した後、我慢ができず振り切れた。

あの時、ヴァレッタに止めをさすべきだったんだ。

そうすれば、クノツソスでリーネ達死ぬことはなかったんだ。

リヴェリアたちは僕らのせいというが、実際は違う。

7年前の大抗争でヴァレッタを追い詰め、命を刈り取ることができなかった僕のミスだ。

『27階層の悪夢』…。

クノツソスのきっかけは「27階層の悪夢」だ。

あのタイミングは間に合わなかった。だから邪神の捕縛に専念したんだ。

彼らには気の毒だった。だが、それが今のクノツソスでの悲劇を生むとは思わなかった。

もし行つてたら、『穢れた精霊』の触手を撲滅しフィルヴィス・シヤリアのような怪人を産むことはなかったのだろうか？

いや邪神達が、ヴァレッタたちが暗躍して大抗争よりさらなる悲劇を産んだだろう。

だが、数年の時を経て邪神ディオニュソスの野望を、クノツソスの悲劇が起きてしまった。

数年間も、クノツソスの存在を見抜けなかった僕らのミスだ。

今思えば、【静寂】と【暴食】はそのヒントをかきしていたのではないか？

そう思うと、不甲斐ない自分を殴りたくなるよ。

リーネたちや、【ディオニュソス・ファミリア】いや【ペニア・ファミリア】の眷属たち、そしてフィルヴィス・シャリアに申し訳が立たないよ。

【アストレア・ファミリア】…。

5年前に彼女たちが、下層へ行く時に警告を…いや、ガレス一人でも向かわせるべきだったんだ。

そうすれば…、彼女たちは【疾風】を除いて全滅することはなかったんだ。

何が起こったかはわからない、ただ闇派閥の罠ごときで彼女たちが死ぬわけがない。特にライラがいる限りはね。

なら、考えられるのはダンジョンのイレギュラーのみだ。

僕でも予想できない、いや神時代でも起こらなかったイレギュラーが発生し、それが【アストレア・ファミリア】を襲ったのではないか？

そうだとしたら、ガレスだけでは対応できなかつたかもしれない。

【疾風】が生きて帰ってきたことが、奇跡だったといわざるを得ない。

リヴェリアの言うように、彼女たちに嫉妬していたのは確かにあった。

【アストレア・ファミリア】は【静寂】を倒し、オツタルは【暴食】を倒した。僕は闇派閥の残り滓を払ったにすぎない。

だが、死んだことにより安堵してしまった自分がいたのは事実だ。

ライラは：うん、まあ、同族であり惜しいことは思ったが、これ以上付きまとわなくとも済むと思ったのは事実だ。すまない：ライラ。

落胆したのは彼女たちの死ではない、安堵してしまった自分に対してだ。

：ガレスが、彼女たちの命日に酒樽を下層へ持っていつてるのは、知っている。

同行させてもらおう。彼女たちの冥福と謝罪、そして自分の戒めのためにだ。

【疾風】：。

【アストレア・ファミリア】の唯一生き残った彼女は、まさに【疾風】だった。

いや、悲しみと怒りの黒き【疾風】だった。

神アストレアがオラリオ外に出たことにより、タガが外れたのだろう。

：仲間を失った時から考えていたかもしれない、神アストレアに見られたくないために。

アイズの未来を垣間見てしまった。

彼女は、まさにアイズそのものだった。

家族を失い、悲しみと怒りに任せ剣を奮った。

一般人でも、闇派閥に関わりがあるなら容赦なく殺った。

そして「27階層の悪夢」以来の残り闇派閥をほぼ壊滅し、邪神を突き出した。

彼女が荒れ狂わなかったら、『暗黒期』は今も続いていただろう。

それは感謝している。

だが、リヴェリアの参戦意欲は予想外だった。

あの時のリヴェリアは今日と同じだった。

いや…今日のリヴェリアは、ベル・クラネルと比べた自分たちが不甲斐ないがための

自責だった。

あの時は、今までの鬱憤と同胞を見捨てられない気持ちもあつたのだろう。

気持ちはわかるが、オラリオ最強派閥の1つ「ロキ・ファミリア」団長としてどうし

ても許すわけにはいかなかった。

まさか、拠点を吹き飛ばそうとは思わなかったよ…。

アイズのおかげで本当に助かったよ…。

そしてベル・クラネル…。

あの少年は本当に規格外だ…。

僕の計算を全て狂わせてくれるよ、困ったことに何故かそれが嬉しい自分がある。彼は：間違いなく本物の『英雄』だ。

ミノタウロスの戦いでは、僕ら「ロキ・ファミア」の首脳陣が、異端児の黒いミノタウロスの戦いでは、一部のオラリオの神、冒険者、一般人が、クノツソスの戦いでの大鐘楼は、クノツソスにいた全ての冒険者たちが、彼を『英雄』と認めている。

僕ら：いや「ゼウス・ファミア」や「ヘラ・ファミア」のような「神工の英雄」と違い、天然であり「異端の英雄」だ。

だからこそ、彼が欲しい。

リヴェリアの言葉を肯定するわけではないが、彼が僕の指揮下に入れば強く生きるはずだ。

小人族の復興の鍵は、間違いなく彼が握っている。

だが：同時に劇毒でもある。

リヴェリアの言うように、大罪人として処刑する気は全くない。

だが、彼はそれをすんなりと受け入れてしまう気がする。

それに甘えてしまう自分が、つくづく嫌になる。

長い付き合いであるリヴェリアやガレスは、それを見通しているんだろうな。

だから今夜はそこを突かれ、ついカツとなつてしまった。

それにアイズ…。

今夜のアイズの変貌には驚いた。嬉しい意味でだ。

だが、ベル・クラネルのことになると豹変するのは、心臓に悪いからやめてほしい。ロキに向かつて、あのスキルを発動させるのは駄目だろう。

ただ、その後の白い風には驚いた。

あれが怪人を破つた風か…。

アイズが昨日大量買したのは、ベル・クラネルのグッズだと聞いた時は呆れたよ。

あの子は武器しか興味なかったというのに…。

リヴェリアが上機嫌で戻ってきた時は、ホツとしたけどね。

しかし、それも数分だけだった。

リヴェリアから聞き、あの後に部屋を見た途端、さすがに啞然としてしまったよ。

ガレスも開いた口がしばらくは塞がらなかったようだ。

リヴェリアは、別の意味でアイズの成長に喜んでたようだ。

まあ、気持ちはわからなくもないけどね。

複雑だよ…。

僕らではなく、ベル・クラネルがこの短期間でアイズを変えたことに。

本人が気づいていないのが、非常に癪だけどね。
ベル・クラネルのことが知りたい。

リヴェリアが言つてたが、ぐっず？ 専門店で彼の自伝があるそうだ。

「ヘルメス・ファミリア」が管理しているなら「ヘルメス・ファミリア」へ聞いたほうが早そうだ。

：勘だが、「ヘルメス・ファミリア」ではなく神ヘルメスが握っているような気がする。
レフィーヤを通して、ルルネ・ルーイに依頼するなり脅すなりベル・クラネルの秘密を探ってもらおうか。

彼の秘密を知ることが、この戦争遊戯の鍵のような気がするんだ。

これはガレスにもリヴェリアにも言えないな、絶対に反対するだろうから。

さて：明日は、ギルドへ行つてロイマンへ抗議しないとイケないな。

彼女たちの功績を横取りさせるわけには、いかない。

それは絶対に許さない。

この平和は…、彼女たちが築いたものだ。

守るのは僕たちの義務だ。

ロイマンめ…。

はあ…、彼を越えようと思ひ、やつぱり戦争遊戯を仕掛けるんじやなかつた…。

次から次へと災難がくるし、やることが多くなつたよ。
ほら、親指もそういつている。

『今更なんだ？もう手遅れだ。』

第93話 受付嬢、判明。

ふう…昨日はやばかった。

まさか、あのような形で…ベル君の…。

きやーきやー。

「エイナ様、エイナ様。思い出すのもいいですが、ヘスティア様に気づかれると厄介ですから取り繕つて下さい。まあ、お気持ちはわかりますが…。」

「そうだね、気をつけるね。ケホツ…ケホツ…。」

「風邪でございますか？今日の夕方にカサンドラさんがベル様と帰つてこられますから、そのときに診てもらつてはいかががでしょうか？」

「ああ、いいよ。ずっと前からなんだ。大したことないよ。」

うん、この咳が出たのは…1年前からかな。

アイナ母様の咳と似ているような気がするけど、気のせいかな。

「皆様。おはようございます。」

「おはようございます。」

「ああ、エイナさん。紹介してませんでしたね。こちらはセバスです。」

「セバスと申します、エイナ嬢。坊ちやまが日頃からお世話になっております。」

「いえいえ、こちらこそ。…ケホツ…ケホツ…すみません。失礼しました。」

いけない、いけない。咳がこんなところで出るとは…。

やっぱり、カサンドラさんに診てもらおうかな？

「!?…エイナ嬢、先程の咳はいつ頃からでしょうか？」

「え…？あ、いや大したことでは…「いつ頃からでしょうか？」…1年前からです…。」

「…失礼なことをお聞きしますが、親類の方で先程の咳をされている方はおりませんでしょうか？」

「あ、はい…。母が…。」

「母君ですか。母君は、もしやずっと体調が悪く寝たきりが多いのではありませんでしょうか？」

「…どうして、それを…。」

何でわかるの!?

リヴェリア様と家族以外には、誰にも言っていないのに…。

「やはりですか…。メイ、予定を早めます。アミッド嬢に例の特効薬を完成させねばなりません。」

「セバス、そうなのですか？エイナさんが？…いけませんね、事は一刻を争いますね。」

「ええ。エイナ嬢、もしや母君は、死の病にかかっているのではありませんでしょうか？」

「!？」

オラリオへ来て、まさかと思って調べているところだけど…。

まだ仮説段階なのに…、何でわかつたの!？」

「失礼しました。私は前に所属していたところ…〔ヘラ・ファミリア〕で貴方と同様の咳をされていた方が二人おりました。」

「……。」

「一人は〔静寂〕のアルフィアお嬢様…。」

「!？」

「もう一人はアルフィアお嬢様の双子の妹の、メーテリアお嬢様です。」

「〔静寂〕に双子の妹…がいたのですか…。」

「私は長年その方たちのお世話をしていました。なのでその特徴もよく知っています。咳だけでなくひどいけだるさもありますね?。」

「…あります。てつきり…あの日かと。」

「ええ、よく間違われます。ですが、咳には特徴があるため間違いありません。」

「ど、どうすればいいんですか…! 私…まだ死にたくない…母にも…。ベル君とずっと

「一緒にいたいんです！」

「いやだよお…、せつかくベル君と同じミアミアに入ったのに…！」

「そんな病で終わるなんて…いやだ…。」

「エイナさん、エイナさん、落ち着いて下さい。セバス、脅しすぎです。」

「メイさん…、ありがとうございます…。」

「失礼しました。エイナ嬢、心配いりません。アミッド嬢に特效薬の作製をお願いしてあります。メイ、坊ちやまの血は確保してありますか？」

「ええ、毎晩抜き取っています。こちらになります。」

「何故…ベル君の血なのですか…？」

「坊ちやまの血は、死の病の抗体があります。」

「メイ様、ベル様は死の病にかかっていないのに、どうして抗体があるんですか？」

「そしたら、メイさんとセバスさんは一瞬黙ってしまった。」

「一体何があるというの…？」

「…貴女たち三人だけの秘密にしてください。戦争遊戯が終わるまで誰にも話してはいけません。いいですね？ヘスティア様にもです。」

「「は、はい！」」

「、怖い…。」

「坊ちやまのお母様は生まれつき死の病にかかり、坊ちやまを産み、間もなくお亡くなりになりました。」

「「なっ！」」

「死の病は遺伝するもの…エイナ嬢の母君、そしてエイナ嬢に遺伝している可能性が高いです。」

「じゃ、じゃあ、妹も…。」

「そうですね。今はまだでも、今後発症する可能性が高いでしょう。」

「何て恐ろしい病なのですか…。」

死の病…ベルくんのお母さんも…。

母も妹も、そのうちに…？

いやだ…！

「ええ、ところが坊ちやまは…その前兆が全くありません。それどころか他の病にもかかっていません。」

「「!?」」

「それはこのセバスが保証しましょう。長年死の病を診てきて見ることしかできなかつた私が。」

「「……………」」

だから、ベルくんの体内に死の病の抗体が…。

「【ディアアンケヒト・ファミリア】そして【ミアハ・ファミリア】が協力するのは、この血のためです。」

「じゃ、じゃあ…その特効薬があれば、私の母も妹も、そして私も…!？」

「はい、治る可能性が高いです。何しろ初めてのケースで確実ではないのですが、神ミアハと神ディアアンケヒトは確信しているようです。」

「やりましたね！エイナ様！」

「うん！うん……！ありがとう……ベル君！」

ベル君……これで返しても返しきれない恩ができちゃった…。

「【ヘステシア・ファミリア】へ入っててよかった！」

あれ…？リリさん、何かを考え込んでいる…？

（…ベル様は「ヘラ・ファミリア」の系譜を持ち、…死の病で亡くなったお母様…まさか!?）

「…質問です。ベル様のお母様はまさか…メーテリア様なのですか？」

「さすが、リリさん。この短時間でその事実までたどり着きましたか。」

「……っ。メイ様とセバス様がこの事実をずっと隠していた理由が、わかりました…。

確かにこの事実にはベル様には耐えられませんっ……!？」

「ど、どういう意味でしょうか？リリ様？」

えっ……？事実……？

「メーテリア様の双子のお姉様は……誰ですか？」

「誰って……さつきセバスさんが……あっ！」

「そんな……!？」

「そうです。【静寂】のアルフィア様は……ベル様と血のつながった方……伯母様であるのです。7年前の大抗争を引き起こした1人である、アルフィア様を倒したのが……【アストレア・ファミリア】の方々、特に【紅正の花】と……【疾風】のリュー様です……。」

「リュー様が……ベル様の伯母様を……。」

「そんなの……ひどすぎるよ……。」

何てひどい……運命のいたずらなの……。

こんなのとて……ないよ。

「ファミリアという家族なら、まだよかったです。しかしアルフィアお嬢様と坊ちやまは、血が確実につながっている本当の家族なのです。」

「だから、まだ知るべきではなかったのです。坊ちやまがこの事実を知れば、戦争遊戯に大きな影響が出ます。」

「リユー様に対して私は思うところがないわけではないですが、当時はやむを得なかつ

たと思います。しかし、坊ちやまは今でもアルフィアお嬢様と「暴食」が会いに来なかったのを、ひどく気にしておられます。それが、血縁者であれば尚更です。」

「坊ちやまと深層で共にし助け合い、深く信頼している方が、坊ちやまの血縁者でもある【静寂】を倒した方と知ったら、憎しみはしませんけどひどく葛藤にかられるのは、間違いありません。」

そうだね…ベルくんは優しい子だから…。

「今回の戦争遊戯は、生半可な覚悟では駄目なのです。そのため、私とセバスはこの事実を戦争遊戯が終わるまで明かさないことにしたので。」

「…わかりました。私はこの事実を絶対に明かさないことを誓います！」

「リリもです！」「春姫もです！」

ベルくんは、まずこの戦争遊戯に集中してもらわないと！

例えば事実を知ったとしても、私達でもベル君の心を守らないと！

「ありがとうございます。エイナ嬢、貴女のはまだ前兆段階です。特効薬があればすぐに治る可能性が高いでしょう。申し訳ありませんが、特効薬の実験台になっていただけませんかでしょうか？」

「はい…喜んでお引き受けします。ベル君と共に生きていくためにも…！それに母と妹も助けたいです！そ、そしてベル君を紹介したいし…。」

「ふふ、そうですね…。メイ、後は頼みます。私は『ディアンケヒト・ファミリア』へ至急この血を渡しに行き作製依頼をします。その後『ミアハ・ファミリア』へその旨を伝えに行きます。」

「わかりました。セバス、ここは私に任せてください。」

何かとんでもないことに、なっちやったな…。

けど、セバスさんのおかげで今分かってよかった！

よかった…！母も妹も助かるなんて…！

やはり、私の判断は間違っていなかった！

ベル君！一生そばにいるからね！

第94話 聖女、調合。

今日もですか…。

今日はバーチエさんだけでなくセバスさんと、初対面のメイさんも参戦するそうです。

はあ…死なないだけまだマシかもしれませんが。

そう考えないと、やってられません。

今日は本格的にやると聞きましたが、大丈夫でしょうか…？

ベル・クラネルもですが、主に私の精神が。

昨日はさすがに疲れしました。

セバスさんが見かねて（主に貴方のせいですが）「ヘステイア・ファミリア」ホームの

お風呂に入らせていただきました。

すごくよかったです。

うちのホームにもお風呂がありますが、患者用であって私達団員のためではないです。

増築した方がいいでしょうか…いえ、増築しましょう。

【絶影】が提案したとのことなので、彼女に依頼してみることを検討しましょうか。

コンコン

「はい。」

「濃だ。アミツド、入るぞ。」

昨日からベル・クラネルのことを心配していました。

毒を飲ませた経緯を話しますと、予想通り怒り狂いました。

セバスさんが語ったことをそのまま言いますと「…仕方があるまい。」と項垂れていました。

先日までベル・クラネルに対して目を背けていたくせに、今はお節介おじいさんになっっています。

それはそれでいいのですが、私はともかく他の団員がすごく戸惑っています。

「どうしたのですか?」

「いや、うむ。今日もあの子を頼む。」

ほら、今までそう言わなかったのに…。

まあ、つつけんどんにするよりはマシでしょう。

「失礼いたします。おはようございます。お二方。」

「うおっ!」「きゃあっ!」

び、びつくりしました…。

「ノックもせず申し訳ありません。至急お願いしたいことがあります。」

「な、なんだ？（【最恐執事】がお願いすることなんて碌なことじゃない!）」

「報酬を前払いいたしますので、特効薬作製へ取り掛かっていただけかもしれませんでしょうか？」

「何故…でしょうか？」

前払するのはこちらとしてはいいのですが、気になります。

「当ファミリアの団員のエイナ・チュール嬢が、死の病の兆しがあるためです。」

「!？」

あの受付嬢が…いえ、それ以前に「ヘステイア・ファミリア」へ入団したのですか!?
ギルドは今、大変でしょうね…。

いけません、それどころではありませんでしたね。

「本人は実験台になるのもいとわないそうです。」

「…わかった。アミッド。」

「承知しました。ただ…今日の特訓はどうしましょうか？」

「調合セットを特訓場のクノッソスまでお持ちいただけませんか? もちろん、私が運びます。」

「中止にはしないのですね。まあ当然ですね。」わかりました。ただ、一人助手が欲しいのですが。」

「わかりました。どなたでしよか？」

「【ミアハ・ファミリア】のナアーザ・エリスイスです。」

「何で…私が。」

「エリスイス、手が止まっていますよ。」

「あんた、この状況でよくやれるね。」

「慣れましたので。」

「ここはクノツソスです。」

エリスイスと一緒に、特効薬作製をしています。

ええ、ベル・クラネルの特訓を横目に。

「そう…。何故私を指名した？」

「調査についてはアビリティを除いても、貴方が一段と上ですので。」

「へー、【戦場の聖女】様に言われるとは光栄だね。」

「…エリスイス、その呼び方は好きじゃないと言ったはずですが？」

「悪かったよ。でも…あちらはいいの？」

「死の数歩手前になったら、あちらのセバスさんが呼んでくれます。」

「いや…でもすごいことになっているけど、止めないの?」

そうですね。あ、ベルさんがあのメイドさんによつて吹き飛ばされました。

すぐ立ち上がりましたから、大丈夫でしょう。

ええ、大丈夫でしょう。

「止められます?」

「無理。あの人が怖くて止められない。」

セバスさんは、ベル・クラネルの特訓を見ながらこちらの進捗状況を確認しています。

執事の嗜みとか言ってますが、あんなの普通の執事じゃありません!

「昨日、私が怒ったのですが、けんもほろろでした。」

「あなたが?怒った?それでもけんもほろろ?…やばいじゃん。」

「そうです。やばい人たちです。」

ええ、本当に怖い人たちです。

メイドさんのメイさんも紹介してもらいましたが、セバスさんと同格と聞き思わず遠い目をしてしまいました。

もう、「ヘステイア・ファミリア」の勝ちでいいのでは?

「そう…。あ、そつちの割合多くしたほうがよさそう。」

「なるほど…。となると少し量が多くなりますが？」

「うーん…。なら症状の重い人用にする？」

「そうですね…。体調次第でしょうか？」

「飲みやすいように甘味入れる…。いや効果が減少するか。」

「いえ、悪くありませんね。問題はその甘味ですか。」

非常に拗ります。さすがエリスイスですね。

このような状況でなければ手は組みたくはないでしょうが、ベル・クラネルに対して大きな借りや負い目があるので、すぐに承諾してくれました。

それに、死の病の撲滅は私達の倒す共通の敵ですから。

「ご歓談の最中申し訳ありませんが、坊ちやまがそろそろ死の五歩手前に入りますので、準備をお願いします。」

「わかりました。まずは「悲観…いえ、カサンドラさんに治療して、戦闘続行してはどうでしょうか？」

「ちよつと…。あんた。」

「そうですね。カサンドラ嬢の経験値獲得のためいいかもしれませんね。ですが、よろしいでしょうか？」

「私も先日レベル3になりましたので、それにこれから治療士は多いほうがいいでしょ

うっ？」

「全くもって同感ですな。しばらくはあちらのカサンドラ嬢にお願いいたします。死に近くなりましたら、また呼びかけますのでお願いします。」

「そのあたりのタイミングはお任せします。」

「承知しました。」

「ねえ…何でそんなに冷静にやりとりできるのさ。私、今のやりとりだけでも絶句するけど？」

「エリスイス…これはまだ初歩です。「初歩!」問題は特訓が終わった後のシメです。」

「シメ? シメって何? カサンドラも言ってたけど、『怖くて言えない』と。」

「ええ、正にその通りですよ、エリスイス。貴女も見たら絶句しますよ。ええ、私が保証します。」

「あんたに保証されても…そこまでのの?」

ええ、あれを見たら…。本当に腹立ちますよ。

毒妖蛆の毒より強力な猛毒をガブガブと飲んで、耐異常を上げるなんて…。

エリスイスの想像より上と言った方が、後々の衝撃を和らげるでしょう。

「…いえ、そこより更に上です。「上!」はい、それより手が止まっていますよ。」

「あ、ああ。そうだね、こっちに集中しないとね。でも、死の病の抗体がベルにあるなん

て…。」

「私も驚きました。彼は…一体何者でしょうか？」

「何者か…か、私にとってベルはベル、それでいいの。…ただ、死んでほしくないなあ…。」

まるで姉のように見つめていますね。

そういえば、エリスイスは彼がレベル1からの付き合いでしたね。

第95話 聖女、歓談。

「ベルには本当に迷惑を掛けっぱなしでつらいんだ……。あの黒いミノタウロスの戦いでも肝をつぶしたのに、深層からの帰還でベルの左腕がめちやくちやになった時は腰が抜けそうになったよ……。ああ、あの時はありがとうね。あ、それ取つて。」

「はい、これですね。いえ、組成が残っていたから何とかになりました。少しでも欠けていたら駄目だったでしょう。」

「ありがと。……私のような腕を取り付けられるのはいいけど、また借金が増えるからねえ……。それだけじゃない。神フレイヤの魅了騒動で、ベルにひどい態度を取ってしまったのを知った時は、死のうかと思つたよ……。」

「それは許しませんよ、エリスイス、ベル・クラネルも、そうなるのは絶対に望まないはずですよ。」

「少だけ話しましたが、ベル・クラネルはそういう人のはずですよ。」

「貴女がそれをすれば、あの人は深く悲しみ自分を責めるでしょう。」

「分かつているよ、ベルはそういう子だつてこと。アミッド、あんたはあの子が強くなつてから知り合つたみたいだけど、私はベルが駆け出しのころから知つているんだ。」

「セバスさんからは才能がないと聞いていましたが）その時は、どういう人だったでしょうか？」

「あの子は冒険者に向いてない、本当に不向きなんだよ。それに、あの子は騙されやすいんだ。ここ、オラリオにいちやいけない子なんだ。そう、どこかのどかな村で暮らしている方が向いているんだ。」

「（エリスイスにそこまで言わせるとは、セバスさんの言う通りですね。）そうでしたか……。」

「あんたはあの子がランクアップを立て続けにして、才能があると思うかもしれないけど、右腕を失った私が見ても、ベルに才能はないんだよ。だから一文無しになってでもいいから、オラリオから出てどこかでのんびりと暮らしてほしい、と思った時もあったよ。」

「エリスイス……」

「でもベルはこの半年で第一級冒険者まで、来てしまった。もうオラリオから簡単に出られなくなった。でもねアミッド、あの子は私が知らないところで、多くの血と涙を流しているんだよ。それを考えるだけでもつらいんだ、ここ半年間で、あの子を見てきた私にとってね。」

本当に……弟のように可愛がっていますね。

「昨日、ミアハ様から聞いてびっくりしたよ。ベルがお祖父さんにお粗末な扱いをされて育ってきたって。ベルはお祖父さんをすごく慕っていたのは、ベルから聞いて知っていた。けど、そんな扱いをされてきたなんて知らなかった。それに、あんなに怒っていたミアハ様を見たのは初めてだよ。」

「私もです。ディアンケヒト様も引いていたくらいでした。」

「あの爺が？まあ、そうなるのはわかるよ。だけど、私は納得したよ。」

「納得、ですか？」

「うん、ベルはね。まあ、話してみたらわかるけど本当に初心な子なんだ。あの年で初心な子はここオラリオ、いや世界を見てもそんなにいないんじゃないかな？だけどね、あの子はハーレムとかダンジョンに出会いを求めてる、とか言っているんだよ。」

「ププツ。」

「何ですか、それは。矛盾しているじゃないですか。」

「そういうえば診察の時でも、私と目を合わせず赤面していましたね。」

「女性に対して免疫が全くないのに、どうやってそれができるといいますか…。」

「まあ、笑うよね。初心なのにそんなのできるの？と疑問に思ったんだ。それで、そのお祖父さんから碌でもないことを教え込まれた、ということから、納得したというわけ。」

「なるほど…。」

「でもね、お祖父さんが死んだふりをして育児放棄したというのは、さすがに許せない。あの子がどんなにお祖父さんを慕っていたかを、知っているんだ。だからそれを騙すようなことをするなんて、ひどすぎる。たった半年間だけあの子を見てきた私でも、怒りを覚えたよ。」

「私もです。いかなる理由があろうとも、きちんと責任を持つて育てるべきです。例えばベル・クラネルの命を助けるためと言っても、そのようなことはするべきではありません。」

「ホントだよ。ん、こんな感じかな。」

「あ、できましたね。」

エリスイスとこう話すのは数年ぶりですね。

これもベル・クラネルの人徳のなせる業でしょうか。

彼にある意味、感謝しなければいけませんね。

「ミアハ・ファミリア」が息を吹き返し、エリスイスとこう話すことができたのは、彼に関わり彼と助け合ってきたことにあるのですから。

「ご歓談の最中ですみませんが、できたようですね。」

「あ、はい。こちらです。ただ、被験者が飲んでみないとわからないのですが…。」

「お預かりいたします。エイナ嬢に飲んでいただきます。」

「後でいいので、効能と結果を教えてください。」

「ふむ…その必要はないかと、先日と同じようにうちの浴場で疲れを癒やすついで、確認されてはどうでしょうか？」

「そうですね…。その方がよさそうですね。」

あの気持ちよさは、ホームでは味わえませんかね。

死の病の特効薬を調査し、ベル・クラネルを死から引つ張り出すだけですから。

ええ、そう思わないとやってられません。

「ねえ、ちよつといいかな？ベルの方、かなりヤバい感じなんだけど…。」

「ナーザ嬢、ご心配いりません。あれはまだ死の7歩手前です。」

（十分ヤバいんだけど…。うわ、変な音を鳴らしながらぶつ飛ばされている。）

「カサンドラさんにできるところまで、やっていただきましょう。」

「あなた…カサンドラにも、聖女を名乗らせる気？」

聖女というより、オラリオ上位の治療士ですね。

【「フレイヤ・ファミリア」の「黄金の魔女」ヘイズ・ベルベッドたちもいますが、オラリオでは治療士が圧倒的に不足しています。カサンドラさんにも一角を背負っていただきます。」

「それはうちにとっては非常に助かるけど、いいの？」

「ええ、それは私にとつて悪いことではありません。精神疲弊によつて救えない命も多
くありました。ヘイズ・ベルベッドは神フレイヤの命令があれば助けるでしょう。です
が、命令次第では助けない命もあるでしょう。それら全てを私一人で背負わせる気です
か？ エリスイス。」

「まあ……気持ちにはわからんでもないけど……。」

「エリスイス。私は聖女という名に疲れしました。救えない命もあつたというのに、何が
聖女ですか！」

「……………」

いけません。

つい、旧知に対して本音をこぼしてしまいました。

「すみません。つい取り乱してしまいました。」

「いや、あなたのそれを久々に見たからびつくりしただけ。まあ、カサンドラにも経験値
を積ませてもらうには丁度いいし。手に負えなくなったら助けてあげなよ。」

「もちろんです。」

理解してくれる人がいるのはいいですね。

少しは気が楽になりました。

カサンドラさんも日に日に、腕を上げていつていますね。

……このような状況はマツチポンプと言いませんでしょうか？

そして、ベル・クラネルの特訓が終わりました。

昨日と違い死にかけた回数減りましたが、それでも見ていられないくらいでした。

エリスイスは3回目から目を逸らし、耳を閉じてました。

気持ちは分かります…。

そしてメイさんがベル・クラネルを羽交い締めにし、バーチエさんの造りだした猛毒を飲ませたのを見た時、エリスイスはやはり取り乱し怒っていました。

そして彼がもがき苦しんでいる最中で、エリスイスはカサンドラさんに「治せ！」と喚き立ててメイさんに取り押さえられていました。

昨日と同じく、ベル・クラネルは何とか克服しましたが、また気絶しました。

そして今、私とエリスイスは「ヘステイア・ファミリア」の浴場で疲れを癒やしています。

先程、元ギルドの受付嬢のエイナ・チュールに特効薬を飲ませました。

飲ませる前に診断しますとセバスさんの見立ての通り、やはり死の病にかかってました。

前兆段階なので、気づかないのは当然です。

結果は、成功でした。

気だるさや咳などが完全になくなり、かなりよくなったとのことです。

本当に彼の血は抗体なのですね…。

まずは様子見で、これからも特效薬作製に集中しましょう。

治療？ 考えないことにします。

そうしなきゃ、やってられません！

第96話 聖女、逃避。

「あんたが怒る理由が分かったよ…。あれはダメでしょ。」

「わかりますか。セバスさん…いえ彼らに反抗できますか？」

「無理。強すぎ。怖い。」

「なので、私は現実逃避することに決めました。ああ…、いい湯ですね。」

事後報酬でもあるベル・クラネルの血で特效薬作製できますし、経験値も積めますから問題ないですね。

ええ！問題ありませんとも！

そう思わなきや、やってられません！

「思っただけだよ…。どうしてカサンドラとベルはわざわざ大通りを歩いているの？私達のようにこっそりと戻つたらいいじゃない。」

「さあ…それは「僭越ながら私がお答えしましょう。」「うわっ！」「きゃっ！」

「…びつくりしたよ。」

セバスさんと同じく、いきなり現れないでくれますか？

心臓に悪いです。

「失礼しました。ナアーザさんの質問ですが、簡単なことです。あの状況を多くの人に見てもらうためです。」

「何故？」

そうですね。わざわざ【ヘステイア・ファミリア】団長のボロボロな姿を見せてどうするのです？

わざと見せつけて、何をしようとしているのです？

「それはファミリア内の秘密と言っておきましょう。…そろそろ坊ちやまたちが戻られる頃ですね。賢者、さっきから黙っていますが生きてますか？」

「失礼だな！お前は。湯を堪能してただけだ。」

「…まさか、神ウラノスの元懐刀までも【ヘステイア・ファミリア】にいるなんて…。」

ああ、そうでしたね。

エリスイスは愚者さんとは初対面でしたね。

「スパルトイ!？」と驚いていましたね。

またその後の姿にも唾然しました。

まあ、気持ちはわかります。

ここにいたら、気にしてはダメだと。

「他にも何かありそうですが、もう私は気にしないことにします。」

「…現実逃避しすぎでしょ、あんた。」

仕方がありません。

ああ、いい湯ですね。

『ねえ…もうこの戦争遊戯、「ヘステイア・ファミリア」の勝利確定じゃない?』

『やはり貴女もそう思いますか。私もそう思います。』

『「フレイヤ・ファミリア」は自業自得としても、「ロキ・ファミリア」が気の毒に思っ
てきたよ。』

『エリスイス、私はもう昨日で達観しました。気にしたら負けだと。』

『…そうだね。まあ、ベルが死なないだけでもいいか。今のうちに「ヘステイア・ファミ
リア」に全財産賭けておこう。』

「…その腕の借金返済まで、もうすぐですね。」

『銀の腕』かね。なかなかいいものだね。」

「【アポロン・ファミリア】の戦争遊戯ではたつぷりと儲けさせてもらったからね。やっ
と返せる。」

よかったです。

エリスイスのあのような姿はもう二度とはごめんです。

「エリスイス…、まだトラウマはありますか?」

「うん、まだみたいだ。1〜4階層は何とかだけど、前のようにはできないな。」
「モンスターに対してかね…。」

「うん、襲われるのが怖いんだ。襲われなかったらいいけどね。」
「難しいですね…。」

「ナアーザ・エリスイス…、襲わないモンスターならいいのかね？」

「…そりゃいいけど…。そんなモンスターはいないでしょ。」

「…いると言ったらどうするかね？」

「…何を馬鹿なことを…。そうだね…いたらさ…トラウマ克服するまで慣れたいな。」

「…心当たりがある。トラウマを克服する気があるなら、紹介するが？」

「……え？」

そして愚者さんは『異端児』について説明してくれました。

「なるほど…。」

「どうかね？君にとって悪い話ではないはずだ。」

「…ちよつと考えさせてくれる？まだ恐怖感がぬぐいきれないんだ。」

「ついでに言うと、ベル・クラネルは彼らを家族同然と思っているよ。」

なるほど…あの騒動は『異端児』が関わっていたのですか。

「……はあ、ベルの保証付きじゃ断れないじゃないか。お願いしていいかな？」

「了解したよ。まず、この戦争遊戯が終わった後に「ヘステシア・ファミリア」と共に彼らの元へ訪れ紹介しよう。」

「ありがたい、愚者さん。……って、愚者さんもこの戦争遊戯は「ヘステシア・ファミリア」の勝利と思っっているんだ……。」

「彼らが手を組んだ時点で、勝ちさ。あの【最強侍従】と【最恐執事】がいる限り、勝ち揺るがないよ。というか、彼らに勝てるのがオラリオにいる、とは思えないね。例えレベル8でもね。」

「そうですね……。【猛者】は彼らの前では赤子同然かもしれませんね。……話は代わりますが、先程の『異端児』の件で行かれるなら、私も同行してもいいでしょうか？」

「……何故かね？」

「まずは興味。そして彼らと取引をし、素材などを交換できないかなど。例えば『ユニコーンの角』や『マーメイドの血』などとか。……駄目ででしょうか？」

「……駄目とは言えないが、彼らを搾取しないと約束するなら構わない。「そんなことはありません。約束します。」……なら【医神の忠犬】と共に紹介しよう。私としては、彼らと手を携える人が増えるのは望むところだから。」

「ありがたいございます。」

ちよつと怖いですが、モンスターの消費するものは、私達治療士にとって貴重品です。

その代わり、こちらからも何かを提供しなければいけませんね。

治療、またはポーションなどでしょうか？

いえ、まず会ってからですね。

風呂から上がった後、彼らが帰ってきていました。

しかし、何故か意識朦朧としていたベル・クラネルを「ヘステイア・ファミア」の複数の団員たちに抱えられ浴場へ入っていききました。

エリスイスと私はそれを見て唾然としましたが、つい興味があり彼らと共に入りました。

私は、彼の左腕の経緯を確認するためです。

ええ、左腕の経緯を、です。

：一言いうと、凄かったです。

まだ未精通と聞きましたが、アレで？

可愛い顔をして、凶悪なものをお持ちなのですね。

私は診察などで見慣れています、エリスイスは終始赤面してずっと見ていましたね。

その後は、意識朦朧の彼を中心に女子トーク？というものをしました。

少々湯あたりしましたが、楽しかったです。

…それ以前に、意識朦朧の彼は一時幼児退行していましたが、大丈夫でしょうか…？
……やはり、気にはダメですね。

ええ、そう思わなきややってられません！

第97話 猛者、匙投。

フレイヤ様が元に戻らない…。

どうしたものか。

ヘルンは峠を越したが、未だに目覚めない。

ヘイズもフレイヤ様を宥めようとしたが、駄目だった。

【フレイヤ・ファミリア】が一丸となって、宥めようとした。

………このような状況で、一丸となるとは思わなかったがな。

だが、どんなに言ってもフレイヤ様は聞こうともされない。

ワインを要求されてるが、心を鬼にして拒否した。

その分、泣き、怒りが激しくなった。

………疲れた。

そしてまた、幹部会議を開いた。

「…いい加減にしろ、オツタル。」

「いつまでもこの不毛な会議を続けるんだ。」

「フレイヤ様を何とか以前のように戻さなければならない。」

「さらなる炎上を覚悟で、ベルを無理やりでも攫うしかない。」

「【ヘステイア・ファミリア】を壊滅してもいい。」

「……ククク……、余りに無駄なことを……。」

「……………」

やはり、そうなるか。

この際【暴食】と【静寂】の真似をしてオラリオを敵に回し、【ヘステイア・ファミリア】を壊滅させるか。

どうせオラリオの嫌われ者になっている。

止むを得ないか。

……？

ヘデインがずっと無言のようだが……、何か考えでもあるのか？

「……ヘデイン、何か考えでもあるのか？」

「……ある。だが、それはフレイヤ様の許可がいるが……しかし、それしかない。」

「あるなら言ってみろ、羽虫。もう他に打つ手がないんだぞ！」

「静かにしろ、発情猫。やっとフレイヤ様が寝付いたんだぞ。」

「また起きて癩癩を起こしたらどうする、糞猫。」

「お前が宥めるのか？にやおーんと？馬鹿猫が。」

「やれよ、年中発情の糞馬鹿猫。」

「てめえら……。」

はあ……こいつらは。

とにかく今は案でもいいから、フレイヤ様を元に戻さなければならん。

「ヘデイン、案があるなら言ってくれ。」

「……わかった。フレイヤ様を元に戻すのは、彼女しかない。」

「ヘイズでも無理だったのだぞ?」

「違う。フレイヤ様に対して強くいえる女性だ。」

……何だと?」

「あの裏切り者のヘルンが目を覚ましたとしても、逆効果だろうが。」

「それに、そんな女はうちにはいない。」

「全員がフレイヤ様に、絶対の忠誠を誓っている。」

「そんな女がいるとしても、俺たちが許すわけがないだろう。」

「それはわかっているはずだ、ヘデイン。」

……まさかヘデイン、お前は。

「貴様らの目は節穴か。いるだろう、フレイヤ様に対して不遜な態度を取れる女が。」

「……………おい、羽虫。てめえ、正気か?」

「ここまで私達が手を尽くしたのだぞ？他に手があるとしたら彼女しかない。私達より長くフレイヤ様に任せ、フレイヤ様に強く物言いができ、そしてフレイヤ様をずっと見てきた女だ。」

「……………確かに。」

「あの女に頼るのは癪だ。」

「だが、もう他に手が無い。」

「時間も無い、それしかないだろう。」

ミアか……………、確かにミアしかないない。

「だが、2日前にお願ひしたんだぞ。どうするのだ？」

「……………ミアの要求を全て飲む、どんな要求でもだ。」

やむを得ん……。

「わかった。俺が行こ「いや我々、幹部全員で行くべきだ」…何だと？」

「羽虫、ふざけるな。ここはオツタルが行くべきだろうが。」

「いいかげんにしろ、糞猫。前回はオツタルが行つても、なかなか聞いてくれなかったのだぞ。なら、今回は我々が誠意を見せて、ミアにお願ひするしかない。それが一番可能性が高い。」

「……………」

……確かに。

あの時、ミアは俺一人で来ているのが非常に不満そうだったな。

「仕方がない……。ヘーデインの案を採用する。全員でミアのところへ行くぞ。」

そして、俺たちは全員、『豊穣の女主人』にいる。

ずっとミアの前で頭を下げ続けている、全員がだ。

「コンのっ！大馬鹿つたれ共がっ！情けないねっ！この役立たずどもがっ！」

やはり……こうなった。

「オツタルっ！アタシは言ったねっ、次は承知しないとっ！アンタらは何もできない力カシかっ！」

「「「……………」」」」

「ミア……頼む。」

「ふざけんなっ！商売の邪魔だっ！帰りなっ！」

くっ…………やはり駄目か。

『あんなに怒った母ちゃんは、久々ニヤ……。』

『「こ、潰れないよね……？」』

『兄様……。』

豊穰の女主人の店員そして多くの客は、俺たちを遠巻きに見ていた。

仕事を続けながら……。

『オツタル、口下手なお前では駄目だ。私がやる。』

『……すまん。頼む、ヘデイン。』

「ミア……貴女の要求を全て聞こう。我々がフレイヤ様をお願いします。どんなことでもだ。」

「ほう……、少しはまともな言葉が出てきたじゃないか。どんなことでもだね?」

「ああ……偉大なるエルフの女王陛下に誓って。」

「あたいはドワーフだよ?……まあいい。絶対に飲んでもらうよ。いいね?」

「わかった。」

そしてミアはしばらく考え込んでいた。

どんなことを言うのだろうか……。

ミアのことだ、生易しいことではないだろうな。

「まず一つ。この戦争遊戯が終わった後に、結果がどんなになってもアタシを完全脱退させること。」

「それは……わかった。フレイヤ様へ我々がお願いします。」ヘデイン!」

『オツタル…もうここまで来たら全て飲むしかない。責任は私が取る。』
『くっ…。』

申し訳ありません…フレイヤ様。

「どんなことでも、と言ったのはアンタらだよ？文句あんのかい？」

「いや、ない。それだけか？」

「2つ。オツタル、お前の团长権限をアタシによこしな。」

「…わかった。」

止むを得ないだろうな。

いや、元の鞘に戻ったということだけだな。

「3つ。全ての団員に告げな。アタシがルールだ、アタシが法だ、逆らうことは許さな
いってな。もちろん、アンタらもだよ。」

「『……………。』」

「返事はっ！」

「『くっ…。』あ…はい。』」

……昔と同じだな。

俺にとつては違和感ないが、こいつらにとつては屈辱だろうな。

「4つ。ここの店は空けるにはいかない。どんなことがあつてもだ。でだ、アタシが

そつちへ行くとなると、ここの店は誰がやる？」

「それは…その店員が…」

「無理だね。この馬鹿娘どもがやれるわけがないだろうがっ！」「ニヤツ！」「店長代理として…、アレン。アンタがやりな。」

「「は？」」

いや…、それはさすがに無理があるだろう…。

「なっ、何だと!?俺がやれるわけがないだろうがっ！」

「ニヤ!?か、母ちゃん!?!」

「黙りなっ！3つ目の話聞いてたかい?全ての団員はアタシの言うことに従え、つてな。」

「ニヤ!?で、でもニヤーは!」

「アーニヤ!アンタはどここの団員だ!言ってみなっ！」

「…っ。【フレイヤ・ファミリア】ニヤ…。」

「なら、言うことを聞きなっ!アレン、いいねっ！」

「だ、だから、俺ができるわけがないだろうが!」

「黙りなっ!アタシが知らない!でも思っているのかい?ずっとウチを日中覗いていただろうがっ！」

「「え？」」

……フレイヤ様の、いやシル様の護衛のためではなかったのか？

「そ、それはシル様の護衛のためだ！」

「おい、その糞神。「は、はいっ！」 本当のことを言ってるか？ その馬鹿猫は。」

「いいえっ！ 嘘を言ってますっ！」 「な、なっ！」

「というわけだ。これ以上、この場でアタシに言わせるのかい？」

「……くっ。「あ？」……わかった。」

「やり方はアンタに任せる。「な、何だと！」 わかっているはずだよ？」

「……俺に任せるといふことでもいいんだな？」

「アタシに二言はないよ。」

「わかった……。」

……いいのか？ それは。

いや、ミアの言うことだ。

『え？ どうなってるの？』

『つまりニヤ……、「女神の戦車」が母ちゃんの代理をやる、ということになったニヤ。』

『え？ 兄様が……？ やりづらいニヤ……。』

「じゃ、今からやりな。」

「「「え?」」」

それは無茶があるだろう…。

「さつさとやりな、と言つてんだよっ!」

「くっ…!おい、その三馬鹿ども!さぼつてんじゃねえ!厨房の料理が冷めるだろうがっ!」

「「え?え?」」

「轢き殺されてえのか?」

「「わかりました!やります(ニヤ)!」」

「やればできるじゃないか。そのまま続けな!さて、最後の5つ目だね。」

驚いた、意外とやれているな…。

「5つ。アタシがああのカバカ女神に何をしようが、一切口を出すな。いいなっ!」

「「な!」」 「分かった。」

「約束は守りな。あんたらの命を賭けてもらうよ。」

…ミアなら、フレイヤ様に害をなそうとはしないだろう。

我らより長い付き合いで、フレイヤ様をよく知っているのはミアなのだから。

第98話 猛者、安堵。

「()は『戦いの野』…。」

ミアがこの場に立つのは、数年いや十数年ぶりだろうか？

「どういうことですか！何故我々が、酒場の女将ごときのことを聞かなければならぬのですか！」

「納得できません！そんな女でなくても我々だけでもできます！」

「フレイヤ様は我々がお諫めする！酒場の女将は引っ込んでな！」

「……やはりこうなったか。」

「やれやれ。これだから、あのバカ女神の眷属はいやなんだよ。」

「何だと！フレイヤ様を、『ゴンツ！』ガハアツ！」

「さて、アタシのウォーミングアップに付き合ってもらおうかね。その治療士ども邪魔すんじゃないよ！邪魔したら、アンタらの先輩と同じように埋めるからね！」

「[[[[埋める!]]]]」

「何だ、知らなかったのかい？オツタル、アンタ説明してなかったのかい？」

「……説明の必要がないからだ。」

「チツ、使えないやつだね。まあ、いい。文句あるやつはかかってきな。」
「上等だっ！」

そして…、目の前には死屍累々が広がっていた。

久々だな、ミアの稽古は。

しかし…、こんなに弱かったのか？現団員達は？

「「あが……。」「」

「「うあ……。」「」

「「げほつ……。」「」

「肩慣らしにもなりやしないよ…。何だい？コイツらはたるんでるよ！おい、オツタル、アంతタ甘やかしたな？」

「…甘やかしていない。」

十数年だというのに…、全然腕が落ちていないな…。

放置していた俺も悪いな…。

反省せねばならんな。

「まあ、いい。次はお前らだ。かかってきな。」

「気に食わないと思っていた。」

「あの御方を何度も愚弄しやがって。」

「ドワーフのババアめ。」

「ぶっ殺し：『ゴンツ！』ガツ！」

「『え？』」

「しゃべっている暇があるなら、かかってきな。隙だらけだよ。」

俺もずっとそう思っていた…。

しゃべる余裕あるなら攻撃するべきだ…。

「『ちよ、ちよと待っ…』」

「ここは『戦いの野』だよ！敵は待ってくれないんだよ！覚えときな！」

ゴン！ゴン！ゴン！

当然だな…。

【炎金の四戦士】がかなう相手ではない。

「私はごめん被る。」「…お、俺もです。」

「チツ、これだからエルフは嫌なんだ。さてオツタル、待たせたね。かかってきな。」

「…ああ、行かせてもらおう！」

久々だ…胸を借りさせてもらおう！

「ふう……こんなもんか。強くなったね、オツタル。」

「はあ……はあ……。」

十数年のブランクもあるのに……、本当にレベル6か……？

ここ数日不調とはいえ……、ここまでやるとは……。

俺もまだまだだな……。

「正直すぎるよ、アンタは。アンタも知っているように、このアタシはあの時代での化け物共と、長年やりあつてきたんだ。いい加減に搦め手というのを覚えな！もつと考えな！甘えんじやないよ！」

「……………そうだな。」

「おい……その治療士ども、コイツらが死んでなかったら、さっさと癒やしな！アタシは厨房へ行く。コイツらも食堂へ連れてきな！」

「は、はい……！」

む、ミアが作るのか……。

十数年ぶりだな……。

「あの……団長。あの方は、もしかして昔うちの厨房を切り盛りしていた、伝説のドワーフですか……？」

「……伝説かどうかは知らんが、元団長で厨房を支配していた奴だ。」

「や、やはり！すごく助かりますー。みなさーん、救世主が現れましたー。早く治療して、食堂へ連れて行ってくださいーい！」

「はい！」

伝説になつていいのか…ミアは。

初めて聞いたぞ…。

いや、きつとフレイヤ様が悪ノリしてヘイズへ言ったのだらうな。

ミアの手料理を食べたことがない現団員達は、非常に運がいいな。

さて…、久々のミアの料理だ。

この時だけは団長というのを忘れて、たつぷり食わせてもらおうとしよう。

ガツガツガツガツ！

「「お代わりお願いします！」」

「さつさと食え！腹いっぱいになったら、さつさと風呂に入つて寝な！このバカタレども！いいね！」

「「イエス！ママ！」」

………すっかり手懐けられているな。

現団員達は、昔より従順になつてないか？

俺の気のせいだろうか？

ミアがたるんでるといふ気持ちも、わからんでもないな…。

む…、昔よりかなり美味くなっているな。

俺もお代わりするか…。

ドンツドンツドンツ！

「アンタはそれだけじゃ、足りないんだろ？10倍は用意したから、さつさと食いな！」

「有り難く頂戴する…。」

感謝する…。

ヘデインの案に乗ってよかったかもしれん。

ここ数日、まともに食ってなかったから非常にありがたい。

「おい、オツタル。これが終わったら、アタシはあのバカ女神と話をする。邪魔したら承

知しないよ。」

「分かった。フレイヤ様を頼む。」

ふう…、やはり俺は団長に不向きだ。

ミアに…再び戻って欲しいのだが、完全脱退は痛いな…。

絶対に何かが起こるだろうが、俺はもう知らん…。

ミアに全部任そう。

やっと安心できる…。

さて、さつさと食って寝るとしよう。

うむ、やはりミアの料理は美味しいな。

たまには『豊穡の女主人』へ行ったほうがいいだろうか…？

第99話 女将、折檻。

うつとおしいアイツらは、これでよしつと。

アレンはずつと店を監視もとい、アーニヤを見守ってきたんだ。

店の動きなどは把握しているから、数日は大丈夫だろう。

しかし…、昔より弱くなっていないか？

それに芯がなさすぎる。

オツタルでは足りなかったかもねえ…。

あのいけ好かないエルフ：ヘディンとか奴の方が、まだマシさね。

まあ、いい。

いずれにしろ、あのバカ女神のせいさ。

「おい、その侍従。さつき言いつけた通り浴場に湯を入れたね？」

「は、はい！」

「そうか、ご苦労。さつきと寝な。」

「え、でも…フレイヤ様が「あ？」…寝かせていただきます…。」

やれやれ、こいつらもあのバカ女神に過保護すぎるよ。

さーて、久々の喧嘩といくかね。
バンツ！

「……………何？勝手に入らないでよ！…え？ミア？」

ズンズンズン

「黙りな。」

ゴンツ！

「きゆう……………」

やれやれ、噂は本当だったみたいだねえ。

さて、目を覚まさしてやらないとダメだねえ。

よいしょつと…うつ、酒臭いねえ。

ちようどいいじゃないか。

よしよし、言いつけた通り湯は張っているね。

そーれ。

ドッポーン！

「ぶはっ！はあ、はあ…。何するのよ！」

「少しは目が覚めたかい？バカ女神。」

「ミア…母さん…いえ、ミア。何故ここにいるの？」

「アイツらが頭下げて、アタシんとこへ来たんだ。余計な手をわずらわすんじゃないよ！」

「…そう。ミアにはわからないわよ！私がずっと求めてきた『伴侶』に拒否されたこの気持は—」

「知るかい。そんなのどうでもいいさね。」

「ど、どうでもいいって！貴女という人はっ！」

バシヤアツ!!

「いい加減に目を覚ましな、バカ女神。さっさと決着をつけてから言え。それがアタタだろ？」

「ゲホツ…！ゲホツ…！」

「アタタのワガママのせいで、ウチの商売が上がったりだよ！それにずっとサボりは、許さないからね！さっさと決着をつけて、早く復帰しな！」

「なっ…！…シルは死んだわ。だから戻らないわ。」

「あ？誰がそんなの許したんだい？アタシは許した覚えはないよ！」

「…っ！なら、貴女を魅了…『バシヤアツ！』目がああっ！目がああっ！」

「アタシがただアタタと長く付き合っている、と思っっているんだい？あんまり舐め

るんじやないよ！」

「ひつく…ひつく…。」

「泣いたって許さないよ。…聞いたよ。あの坊主を手に入れるために、アンタの持つ全てをチップに賭けたそうだね。なら、さっさとやりな。」

「ぐすつ…止めないの？」

「あ？何故止めなきやならないんだい？いずれ早かれ遅かれ、こうなっていたのは、わかっていたはずだろ？今更、何言ってるんだい。」

「……………そうね。確かにそうだね。ふう…少しは落ち着いたわ。はあ…………。」

ふん、少しは自分を取り戻したかい。

さて、本題はここからだね。

「状況はどうなっているの？」

「アンタがこの四日間、ワインを浴びるように飲み、泣きわめいたぐらいだね。オラリオではその噂でもちきりだよ。」

「え」

「自覚してなかったのかい？はあ…、このバカ女神が。」

「私…、もうオラリオを歩けないわ…。」

「今更だね、もう開き直りな。それがアンタだろ？」

「うう……」

……？何か変わったね、この女神。

あの坊主の影響か……

まあいい、利用させてもらうよ。

「今、【フレイヤ・ファミリア】はこのアタシのものとなっている。文句はないね？」

「……え？戻ったの？」

「この戦争遊戯の間だけさ。その後は、完全脱退させてもらうよ。それはアイツらの命を賭けてもらっているさ。」

「な、何を勝手なことを「あ？」……仕方がないわね、悪いのは私だもの。」

「わかっているじゃないか。アイツらは明日からしごいてやる。それに……何だい？アンタが甘やかすから、弱くなっちまっているよ。」

「仕方がないわ……。あの時代と比べたら、彼らが可哀想よ。」

「はあ……、情けないっただらありやしないよ。それじゃあ、あの化け物共に申し分けが立たないよ。」

「そうね……。でも、ベルは違うわ。あの子は「救界」の要であり、英雄候補。ヘステイアではあの子を引き出せないわ。」

「嘘をいいなさんな。アンタはあの子を『伴侶』と見定めただけだろうが。アンタは、ただ一人の女としてあの坊主に惚れた。ただ、それだけさ。」

「……………ミアには分かってしまっているわね…。ねえ、戻る気は「ないね」…はあ、惜しいわ…。」

「(ようやく落ち着いたみたいだね) さて、アタシがしばらくここを仕切る。文句はないね?」

「ええ。ミアが仕切るなら、この戦争遊戯は勝ったも同然だわ。」

「ふん、終わった後は休憩なしで働いてもらうよ。「えつ…」何か文句あんのかい?」「いえ、ないわ…。」

もう大丈夫みたいだね。

さて、お置きといくかね。

「ああ、だがねえ。アンタがここ数日しかしたことに対して、ケジメつけさしてもらおうよ。」

「え? え? ……ねえ、ミア。何で腕まくりしてこっちへ来るの? ……わ、私が悪かったわよ…。」

「安心しな。ほんの喝を入れさせるだけさ。「その喝が安心できないんだけど!」黙りな、このバカ女神が。」

「いや、やめて…。だ、誰か来て！」「無駄さね、みなアンタのせいで寝不足だから今頃夢の世界さ。」きやああああつ！」

とりあえず、尻叩き10回でいいかねえ。

バカ女神にお仕置きし、神室へ放り込んでやった。

「ひつく…ひつく…お尻がなくなつたよう…。」

「安心しな、まだあるさ。」

「痛くて寝られないじゃないの！『ゴンツ』……きゆう…。」

「寝られてんじゃないか。さて、これで一段落かね。あの坊主には悪いけど、勝たせてもらうよ。」

「ようやく寝られるか…。っ!？」

そこには、アタシの若い頃の像と書き置きが置いてあつた。

その像はすぐさま粉碎してやったがね。

書き置きには

「時の流れは残酷なり。」

とありやがった。

ここまで忍びこまれるとは…。

あのひょうろく玉んとこの「勇者」の仕業じゃないね。

この言葉…、それにその筆跡に見覚えがあるね…。

そして、この感じ…。

まさか…アイツが解放されたというのか!?

心当たりは…、あの坊やか…?

あの赤い目…そして面影…。

アイツらの血を受け継いでるならあり得ない話…、いやこの感じからいってもう確定か。

だとしたら、アイツだけじゃない。

あの女も解放されているね…。

ちっ、時間をかけすぎたね…。

アイツらが手を組んだなら、もう手に負えないじゃないか。

はあ…もう負け戦だ。

さつきは勝たせてもらうよと言ったが、取り消すよ。

だが、そう簡単に勝たせてやらないよ。

「おい…、いるんだろう?」これ以上の手出しは無用だよ。アタシがいる限りね。さつき

と帰りな。」

……。

行ったか…、やはりこの感じはアイツの気配だったか。

わざと気配を出しやがって…。

はあ…、まあ完全脱退するのにはいいきっかけと思うさね。

翌朝バカ女神が元に戻ったことで、アイツら大喜びだったけどアタシは喜べない。

まあ、バカ女神がうつ伏せでケツをヘイズに治療してもらっているのを見て、アイツらは啞然としてたがね。

その日はアイツらを思い切りしごいてやった。

だが、やはり甘々だねえ。

できることはしておくか…。

アタシの店は大丈夫かねえ…。

第100話 道化神、不安。

昨夜、あの色ポケんところからミア母ちゃんの怒鳴り声が聞こえたわ。

こりゃあ、明日あたりに復活するかもなあ。

今日は、予定ぎっちりやー。

午前は、あの少年のグッズ専門店での近くの支店で、レフィーヤたちと行くんや。

午後は、フィンたちと一緒にギルドのロイマンへ抗議やー。あの腹をめっちゃ絞ったからなー。

フィン、昨日の口論でようやく目が覚めたみたいやな。

リヴェリアはアイズたんがああなったから、落ち着いたみたいやけどウチとしては複雑やわー。

「ロキ、ちよつといいかい？」

「何や？悪巧みかいな？」

「まあ、それに近いね。…ベル・クラネルの身元調査をしたい。」

「ちよ…。ほつ、アイズたんもリヴェリアもおらん…。フィン、ほんまに気をつけや。」

「わかってるさ、いないことを確認した上で言ったのさ。」

マジであかんって。

今のアイズたんにとって、あの少年は逆鱗やつて。

昨日はマジで怖かったわー。あのスキルをウチに対して解放するなんて。

頼むから、ヘラのようにはならんといてや…。

「そか、何でそれをしたいん？」

「今回の戦争遊戯は、ベル・クラネルが鍵を握っている。なら、彼の身元をまず知りたい。ロキ、疑問に思わなかったかい？彼が、オラリオの誰も知らなかった『精霊の六円環』について知っていたことを。」

「そやな…、古代でそれを知った奴はいないはずや。そう、神を除いてな。」

「ティオナによると、ベル・クラネルは全ての英雄譚を知っているらしい。あまりにも正確な内容をね。」

「下界をずっと見とった神って、何柱ぐらいは心当たりあるけど…、やはり一番はゼウスやな。」

「そや、あのエロ爺は天界での戦争をそっちのけで、下界をずっと見とったと聞いたことある。」

まさか、あの少年がゼウスの関係者？

いや【ゼウス・ファミリア】の最後の生き残り？

「ロキ、僕もそう思った。だけどね、『ゼウス・ファミリア』の最後の眷属は【暴食】のザルドのはずだ。それは確かだ。なら、彼はいつ、どこで神ゼウスと知り合ったのかが知りたいんだ。」

「アイズたんが言つとつたなあ、あの少年は半年前にじいさんを亡くしたと。」

「それが神ゼウスと？ロキ、神ゼウスが死んだという知らせはないよね？」

「そないな大ニュースあつたら、今頃大騒ぎや。だから死んでいないはずや。」

「それに、『ゼウス・ファミリア』の系譜もないはずだ。オラリオで誰も孕んでいないね。」

「なるほどなあ…、あの少年が孤児でゼウスがそれを拾つたという可能性もあるなあ。」

「ありうるね…。けどね、彼はそれだけじゃないような気がするんだ…。」

「本当にあの少年はおもろいわー。」

「下界の未知そのものやな。」

「それで、どこに依頼するん？」

「いいや、知っている神へ探してもらおうのさ。」

「誰や？」

「昨日アイズが言つてただろう？ベル・クラネルぐつず専門店を開いているのは「ヘルメス・ファミリア」と。だけどね、末端の団員は知らないと思うんだ。恐らく神ヘルメス

か団長のアスファイが知っているはずだ。」

「なるほどなあ……。けどフィン、あの神は他の神よりもつと一筋縄ではいかないんはずや。」

「そう。だから、『ヘルメス・ファミリア』の手によって神ヘルメスの持っている情報を教えてもらうんだ。」

「へえ……。おもしろいやんけ。誰に頼むんや?」

「【泥犬】……ルルネ・ルーイさ。幸い、彼女は【ロキ・ファミリア】寄りだ。金に困っているようだし、レベル詐称もしているのでそこを突けば、調べてくれるんじゃないかな?」

「おもしろいな。あの優男もまさか、自分の眷属に腹探られるとは思わんやろうな。」
フヒヒヒ、あの優男ぶった顔が吠え面になるのを見たいわー。

それと少年の情報を得られるし、一石二鳥やな。

「けど、それをアイズやリヴェリアに知られたらあかんで。いや、他の子もや。」

「わかってるさ。ガレスにも言わないさ。僕のやってることは人道にもとるってことはね。」

「そか、いつ頼むん?」

「みんなが出払う……今さ。」

「そか、ウチもレフィーヤたちと行くわ。その時に何かわかったら言うとかわー。」

「ロキー！そろそろ行くよー！」

「おっと、もうそんな時間なんか。はあ…皆楽しみにしてるのはわかるけど、敵対派閥なんやで…。」

「そうだね…。まあ、彼を取り込む前提と思えばいいさ。」

「そやな、じゃあ行ってくるわ。フィン、下手すんなや。」

「ああ、もちろんさ」

そしてウチはレフィーヤとそのベル・クラネルグッズ専門店へ行ったんやが、すごかったわー。

ウチだけやなく、他のファミリアも女神までも並んどる。

戦争遊戯の相手のウチらが並ぶのがおかしいやろか、じろじろと見られとった。

まあ、当然やろな。

グッズの精巧さがリアルすぎて、すごい争奪戦になつとった。

レフィーヤは少年のこと貶しとるくせに、ほぼ半分以上買つてたわ。

言つとることと行動があつてへんがな。

止める担当のあのアリシアでさえ、目の色を変えて厳選して多く買い込んでたわ。

テイオナはもう全部買う！と言って、テイオネに駄々をこねてねだつとった。

子供か！ウチ、一緒にいて恥ずかしかったわ。

乱闘になるところを、店の姉ちゃんが出禁にすると、ピタツと大人しゅうなつた…。

これで戦争遊戯やれるん？

ウチ、不安やわ…。

第101話 勇者、驚愕。

…さて、行くか。

皆がベル・クラネルグッズ専門店へ行っている間に、「ヘルメス・ファミリア」のルルネ・ルイーと会い依頼した。

彼女は「白兔の脚」に対して、かなりの嫉妬を持っているようだった。

彼の身元調査で神ヘルメスの神室を調べるよう依頼すると、「あら探しだな！」快く引き受けてくれた。

彼の評判を落とすためではないんだけどな…。

そこは勘違いしないでほしい。

そしてロキ・リヴェリア・ガレスと待ち合わせして、ギルドへ向かおうとした。

「フィン、ガレス、待たせたな。」

「随分と上機嫌じやのう、リヴェリア。」

「ああ、なかなか興味深い本を多く買ったからな。アイズのおかげだ。」

「こちらは疲れたわー。おもしろいものが多かったんやけど、あの子たちがなあ…。」

「それは、行く途中でも聞くよ。じゃ、行こうか。」

リヴェリアがアイズの持つごーるどカードで、行列が長く並んでいた中優先に入れた
そうさ。

そして、店の中は支店にあるより豊富であり、ゴールド限定のぐっずもあつたそうさ。
さすがのリヴェリアも呆れたが、ゴールド限定の本もあり全部購入したらしい。

「いや、凄かつたぞ。細工が巧妙なものが多かつたし、本も面白い内容もあつたな。」

「さよか。こつちはレフイーヤがもう目についたものから買っておつた…。あのアロシア
でも目の色を変えて厳選してでも多かつたわー。問題はティオナや。」

何があつたんだい…。

ティオネならわかるけど、ティオナまで…。

「何をしておつたんじゃ…。」

「駄々っ子や。」「は？」

「もう一目で見て気に入つてな、ティオネに『全部買ってー！』とすがつとつたわ…。」

「何をやってるんだ…。」

「ティオネがもうキレてな、乱闘になるところを店の姉ちゃんが『出入禁止にしますよ
！』つちゅーと、ピタつとおとなしゆうなりおつてな。あれで、戦争遊戯できるんかい
な…。」

子供か！逆に考えると、そこまで目を引くものがあつたんだろうね。

僕でも入れるだろうか…。

聞くところ、女性ばかりのようだけど。

「そ、そうか…。思ったより人気あるみたいだね。」

「人気というものじゃないぞ、フィン。恐らくもう既にオラリオで一番だろうよ。」

「ウチもそう思うで、ウチの周りが全員行っているんじゃないかと思うたぐらいや。」

「そこまでかのう…。しかし儂には入りにくいんじゃないか。」

「ああ、それについてはふあんくらぶも考えているそうさ。男性用の店も作る予定らしい。…それもアイズのゴールド限定情報だな…。」

「マジかいな…。ちゆうか男も行くんかいな?」

「…それもゴールド限定情報だが、リヴィラのボールスたちの『入りにくいじゃねえか!』というクレームを受けて作るらしい。」

あのボールスが?

ベル・クラネルは、彼らが一番嫌いなタイプじゃなかったかな?

「リヴィラのあのならず者どもがか?これは不思議じゃのう。」

「アイズが、『伝記2巻に書いてあった』と言っていた。なので、帰ってからじっくりと読むつもりだ。」

「アイズが?本を?それは…まあいい傾向だね。」

「私も同感だ……。まあ、店の中に入った時、年相応の娘になったのを見たときは、微笑ましかったがな。」

そうか……。もう、アイズはベル・クラネルしか目に入らないな。

もし、ベル・クラネルを害をなそうとしたら……。恐ろしいよ。

「さて、今日はギルドや。あのロイマンの腹をかなり絞ったるでー。」

「私としては追放してほしいのだがな。」

「彼は有能だけど、欲深いのが玉に瑕だね。」

「許せんのは、7年前の大抗争とあの娘っ子らの功績をモノにしようとしたことじゃ。」

そうだね。それは確かに許せないね。

「よし、着いたでー。」

「今日はいつてもより混んでいるな……。手が空いているのは……。ローズか。」

「ここはお主に任せるわい。儂よりお主が適任じゃろう。」

「はあ……。ロイマンと話すのはお前たちに任せるぞ。私は見たくもないからな。」

よっぽどロイマンが嫌いのようだね。

まあ、気持ちはわかるけどね。

「ローズ、ちよつといいか?」

「これはこれは【ロキ・ファミリア】の【九魔姫】様ではございませんか…、ああもう！取り繕う余裕がないっ！」

あのローズがかなり取り乱れてるな。

そういえば…、いつもより余裕がなく殺伐としてるな。

「かなり疲れているようだが…、何があつたのだ？」

「仕事…追いつかない…。」

「何があつたのだ…。先日、神フレイヤの魅了騒動がまだ尾を引いているのか？」

「いや…。二つの理由があつて混乱しているのさ。」

「二つ？」

「周りを見て何か気づかないかい？」

「何をつて…、そういえばエイナがいないが何かあつたのか？」

「クビになつた。」

「は？」

「【フレイヤ・ファミリア】にお咎めなしということから、ギルド長と揉めたのさ。それで、チョンさ。」

馬鹿なことを…。エイナ・チュールは有能な人材だ。

それをクビにした？

どこまで愚かなんだ…ロイマンは。

いや…これはチャンスかもな。

エイナ・チュールはアイナ・チュールの実の娘だ。

しかもリヴェリアとも懇意だ。

彼女をうちに入団させて、事務仕事を手伝わせよう。

「……………ロイマンを呼べ。さもなければ、ここを氷漬けにするぞ。」

ああ…完全にキレているな。

「それが二つ目の理由さ。」

? どう言う意味だい?

「あ、リヴェリア様。こんにちは。」

エイナ・チュールだと…?

よし、いいタイミングだ。

「む…、エイナか。ロイマンにクビになったと聞いたが、大丈夫か? 私が取りなしてやるからしばらく待て。」

よし、これはチャンスだ。

うちへ入団させよう…。

「エ、エイナああああ! みんなああああ! エイナが戻ってきたよおおお!」

「エイナアアア！戻ってえええ！」

「やったあああ！これで帰れるうううう！」

「そこまで追い込まれていたのか…。」

「いや、うちへ…。」

「あ、皆さん。私は先日【ヘステイア・ファミリア】へ入団しました。以後、よろしくお願ひします。」

「「ええええええええっ！」」

「何だと？」

「遅かったか…。」

「はい。あ、ローズさん。こちらが申請書とその他です。」

「え…嘘でしょ…。まだ続くの…この仕事地獄が…。」

「私は知りません。」

「エ、エイナ…。何か、強くなつてないかい？…と、申請書とそのほ…か…。」

「ローズさん、後ろが押してきています。早く処理をお願いします。」

「元職場なのに、容赦ないな…。」

「レベラーのはずなのに…、何だこの余裕は。」

「ラ…【白兔の脚】がランクアップううう！？」

「ローズさん、情報を暴露しないで下さい。懲罰ものですよ。」

「あ…す、すまない。こ、これは本当かい？」

「はい。神ロキ、私は嘘をついてますか？」

「いや…嘘はついとらん…。まじかいな…。」

「た、たつたの2ヶ月でランクアップだと…!？」

…これで彼はレベル6相当となった訳か。

「エイナ…、「ヘステティア・ファミリア」でよかつたのか？」

「はい、リヴェリア様。私は「ヘステティア・ファミリア」がいいんです。」

「そうか…今は戦争遊戯で敵対派閥だが、終わったら色々話をしよう。」

「はい、お言葉に甘えてさせていただきます。ローズさん、早く手続きをお願いします。」

「…わかつたよ。はあ…エイナがそうしたいのなら仕方がないか。…後悔はするんじゃないよ。」

「はい、しません。」

何だ…彼女の堂々たる姿勢は。

まるで、この戦争遊戯は勝つたも同然というような…。

「何の騒ぎだ。時間は有限だ。皆、仕事に戻るがいい。」

その声はロイマンか。

「やあ、ロイ……マ……ン？」

「何や、フィン。ど……うし……たん？」

「ロイマン！お……ぬしか……？」

「ロイマン！きさ……まは……誰だ？」

誰だ……こいつは……？

「アレが二つ目の理由さ……。」

「……嘘ですよね？ローズさん？あの方が……ギルド長？」

「嘘だったら、どんなにいいか……。」

僕の知っているロイマンは「ギルドの豚」と言われているくらい、肥え太っていた。

だが、目の前にいるロイマンは太ってない。

むしろ……腹筋が割れていてスラッとしている上に……、老獪なエルフラしくなっている。

一体、この短期間で何があつたんだ!?

「「ええええええええつ！」」

第102話 受付嬢、勘付。

セバスさんとメイさんに、今日この時間にギルドへ行くように、と言われたんだけど…。

まさか戦争遊戯の敵対派閥の「ロキ・ファミリア」がいるとは思わなかったよ。

そして、あのギルド長までも…。

4日前まではかなり太っていた体型なのに…。

なんで、ガリガリまで痩せ細って腹筋まで割れているの!?

「ローズさん…。ギルド長は確か、4日前までは太っていましたよね…?」

「…そうだよ。」

「私の気のせいではなかったんですね…。いつからですか?」

「…昨日からだよ。」

「昨日? つまらいたった2日ぐらいで、あんなったんですか?」

嘘でしょ!?

あのお腹が、あの腹筋が割れるくらいなくなるなんて…。

それに、体格も顔の輪郭も大きく変わっちゃっているよ!

そんなのあり得ない！

「…そうだよ。早朝に来てすぐギルド長の席に座ったんだから、全員「誰だ？」と思ったんだよ…。ギルド長の取り巻きどもが確認したら本人とわかり、全く仕事にならなかったよ。ギルド長を除いてね…。」

「え？」

「エイナ…ギルド長は元々有能だったのは知っているね？」

「あ、はい。」

「昨日はその10倍ぐらい処理してたよ。「10倍!」だから、私たちが追いつけなく仕事が終わらないんだ…。」

「た、他人とは思わなかったんですか？」

「そりゃ、思ったさ。けどね、ギルド長しか知らない内容も書類の保管場所も、全部知っているんだよ…。本人としか思えないじゃないか…。」

「そ、そうですね。どうしてだろう…？」

2日前つて、私が神ヘステイア…ううんヘステイア様と直接面談し、「ヘステイア・ファミリア」に入団した日だよね？

その時に変わったことって…あつ!?

ま、まさか…セバスさんとメイさん？

いやいや、まさかそんなことは…。

愚者様をきょうは…ううん、お話した時に確か…。

『神ウラノスに、エイナさんと同じく退職届をぶつけなさい。そして魔道具作成に集中して、坊ちやまのために役立てなさい。神ウラノスと豚は私たちがやりましょう。』

あの言葉が本当だとしたら…。

うわあ…、納得しちゃった。

ウラノス様は…送還されてないからまだ生きてるよね…？

「ねえ、エイナ…。本当に戻る気はないんだね？明らかに今回の戦争遊戯で「ヘステイア・ファミリア」は完全不利だよ。」

そうだよ。普通はそう思うよね。

「ローズさん、心配していただきありがとうございます。既に決めたことですから。」

「そうか…。健闘を祈っているよ。」

けど…、ベルくんとの人たちを見てみると、そう思えない。

有利でもあの人たちは、少しでも完全勝利に近づけるようにいろいろなことをやっている。

あのギルド長の変貌もその一つ…じゃないかな？

「ロイマン…本当に君かい？」

「何を言ってる？【勇者】、私は前からこうだ。呆けるにはまだ早いのではないか？」
（（嘘だ！絶対に嘘だ！））

「ロキ…。」

「嘘は言つてへん…言つてへんで…。あり得ないけど、嘘は言つてへんで…。」

「困りますな、最強派閥の1つである【ロキ・ファミア】がこの体たらくでは。綱紀を引き締めてはいかがですか？リヴエリア王女殿下。」

「………はっ！そ、そうだな。ゴホン…、ロイマン、貴様に聞きたいことがある。」

「伺いましょう。その前にそれは【ロキ・ファミア】副団長としてですか？それとも、我らエルフの王族としてでしょうか？」

「（こいつ、本当にロイマンか？）前者だ…。」

「わかりました。私にお聞きしたいこととは？」

「まず…、何故、エイナ・チュールをクビにした？返答次第ではタダじゃ済まないぞ。」

「エイナ・チュールから退職届を出したためです。「何？」私はそれを受領しただけです。」

「エイナ、事実か？」

「はい、ギルド長の言っていることは事実です。」

「ああ、エイナ・チュール来たか。ミイシャ君、私から君に渡したものはまだ持つてるな

？」

（君!?! ミイシャに対して君!?! 初めて聞いたよ!）

「え? あ、はい。あの…ここで出すのですか?」

「当たり前だ。時間は有限だ。早く出したまえ。」

「は、はい! 少々お待ち下さい!」

私に渡すもの?

何があつたんだろう…。

書類は全部すぐに引き継ぎ済ませたし…。

「こ、こちらです。」

「エイナ・チュール、長年の勤務ご苦勞だった。退職金を受け取らず去るのは、私の信条が許さん。」

退職金?

……本人だよね?

（（信条!?! ありえない!?! 誰だ、お前は!?!））

「ロキ…。」

「ウチは夢を見とるんやろか…。嘘は言つてへんで…。何が起こっているんや…。」
「わ、わかりました。ありがとうございました。」

「うむ。その資料を少し見たが、『ヘステイア・ファミリア』へ入団したそうだな。新天地でも頑張るように。」

「あ、ありがとうございます。」

何回も思うけど…、本人だよな!?

（（だから、誰だ!?!お前は!?!））

「さて、リヴェリア副団長。お聞きしたいことはそれだけですか?」

「あ、いや。まだある。学区での本に、7年前の大抗争を含む暗黒期の終焉がギルドの手柄になっていると書いてあるそうだな?」

「はい、そうです。」

え? 何ですって!!

それは…ダメじゃない!

「そうです、ではないわ!あの戦いやあの娘つ子らの苦勞をお主の手柄にするつもりか!」

「【重傑】。質問ですが、7年前の大抗争や暗黒期は、元をたどれば【ゼウス・ファミリア】、【ヘラ・ファミリア】がいなくなつた当時、ギルドを含むファミリアが手綱を締めてなかつたことから闇派閥が増長したことにあります。そうですね?」

「(本当にロイマンか、こやつは?) そうじゃ…。」

「【ゼウス・ファミリア】、「ヘラ・ファミリア」を追放した僕たちに対して皮肉かい？）ああ、そうだね。」

「【重傑】のいうことを採用するならば、増長した原因をその本に載せませんが、よろしいですか？」

「なっ！」

「手綱を締めなかつたのもギルドの責任として載せているのです。それに、解決したのはギルドだけでなく有力ファミリア、と記載しているはず。特定ファミリアに肩入れはしないのが、ギルドの信条です。」

「有力ファミリアか…。」

「どうしても7年前の大抗争や暗黒期の詳細を載せる場合、当時の有力ファミリアの怠慢も載せることになります。だが、それではオラリオが軽く見られる。なので、あの一文にしました。」

「…一理ある。だが！」

「それはそちらのファミリアの教育で教えたらいいのではないかと思いますが、いかがでしょうか？」

「……………そうだね。「フィン！」ガレス、彼の言う通りだ。暗黒期が始まったのもギルドと僕らのせいでもある、そして暗黒期を終えた彼女の罪をかばったのもギルドと僕らで

もある。それは間違っていない。」

「……くっ！」「ぬう……。」

「さすが【勇者】。ご理解していただき、何よりです。ですが、ここへ来る前にしてほしかったですね。」

（（だから、誰だよ！お前は！））

うわあ…、以前のギルド長じゃない！他の人ではないよね？

でも、その論理…まるでメイさんとセバスさんのと似ているような…。

やはり、何かしたんだ…。

「リヴェリア副団長。先程で終わりでしょうか？」

「……これで最後だ。何故【ヘステイア・ファミリア】へ味方しないようにと我らへ手紙を送ったのだ？」

「確かに神フレイヤの所業は許せるものではありません。だからと言って、戦争遊戯が始まっていないのに罰則を与えるのは平等ではないし、効率的ではありません。戦争遊戯後に正式な罰を与えます。だが、その前に【ロキ・ファミリア】が【フレイヤ・ファミリア】へ抗争などを仕掛ける理由として【ヘステイア・ファミリア】に味方するとうのを上げないようにするためです。」

……1日目の時にそう説明すれば、退職届をぶつけなかったのにな。

「そんなの、詭弁だ！」

うん。私もそう思う。

「最強派閥二強の【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】はここ数年敵対していました。ギルドとして警戒するのは当然でしょう。そう、十数年前の【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】のような関係ではない限り。」

「…正式な理由があれば【ヘスティア・ファミリア】へ味方するのはいいの？」

「ええ。そうです。ギルドは、貴方方ファミリアだけでなく一般市民の安全も預かっています。一般市民たちへの説明で、その正式な理由があれば問題はありません。」

「…ぬう…。」

まあ、そうだよね。

「ですが、貴方方は既に【ヘスティア・ファミリア】へ戦争遊戯を仕掛けた。私は【ロキ・ファミリア】として味方せずとも、何人かを条件付きで改宗させて【フレイヤ・ファミリア】の戦争遊戯に勝利するという算段をしていました。それが裏目に出て非常に残念です。」

え？ああ…そういう見方もあるか…。

よく考えれば、そうした方が無難だったよね。

「よくも又ケ又ケと！」

「リヴェリア副団長、貴女は遠征でダンジョンに潜っていました。責めるのは主神ロキと、フィン団長とガレス副団長ではないでしょうか？ 貴女が戻ってから「ヘスティア・ファミリア」への扱いを決めるべきではなかったでしょうか？」

『一理ある…だが、こんな理論はロイマンじゃない！』

『僕もそう思う。おい、ロキ。本人じやろうな？』

『それは間違いあらへん…。最初の問答で確認したやん…。』

「そうか…わかった。」

「ご理解していただけて何よりです。すみませんが、時間は有限ですので私は仕事に戻ります。では。」

やはり、ギルド長じゃない！

メイさんとセバスさんが何かをしたんだ。

あ…まさかこの場でこの時間に「ロキ・ファミリア」が来るのを計算して、私を向かわせたとか…。

ハハハ、そんなの…ありえる…、あの人達なら…。

いけない、用が済んだから戻らないと…。

「あの…リヴェリア様。私はこれで失礼しますが、よろしいでしょうか？」

「…あ、ああ。そうだな。すまない…、私たちの不手際でお前達に迷惑をかけてしまった

ようだ。」

「（その結果、メイさんとセバスさんが解放されたからいいようなものだけど）いえいえ。戦争遊戯ではレベル1の私は参加せずホームで留守番ということになったので、その：戦場では顔合わせできませんのでご了承下さい。」

「そうか、お前に剣を向けるとアイナに何か言われるのを覚悟していたが、それがなくてよかったよ。」

「ありがとうございます。では、私は所用がありますのでこれで失礼します。」

「ああ、気をつけてな。」

この短期間で：ギルドを掌握してしまった…。

ローズさん、ミイシャ、みんな：強く生きて…。

ギルド長がああなった今、少なくとも前よりはマシになっているはず。

……多分。

ただ、これだけは言える。何回も言うよ。

【ヘステイア・ファミリア】へ入団してよかった！

第103話 重傑、疲弊。

どうなつとるんじゃ…。

ロイマンは確かに高慢ちきなエルフで、儂らドワーフよりかなり太つておつたはずじゃ。

なのに…別人と思えるほど体型が変わつとる上、性格も口調も変わつておる。

「ウチ…、もう疲れたわ…。」

「私もだ…。夢でも見ている気分だ…。」

「僕もだよ…。残念ながら現実だよ…。」

ロキもこいつらも信じられんようじゃな。

「ロキ、リヴェリア、ガレス。僕はあと一つ寄りたいたいところがあるんだが…。」

「私は早く帰つて、あの少年の伝記を読んで気分直しをしたいんだが…。」

「それでフィン、どこじゃ?」

「ミアのところ…、『豊穰の女主人』だよ。」

そして、ミアんとここに着いたが…。

「…?おかしいね、ミアの声が聞こえないね?」

「ああ…そうだな（「疾風」は帰ってきているのだろうか?）」

「そんなの入ってみないとわからんじやろ。儂は一杯ひっかけたいんじや。」

「ウチも付き合うわー。」

信じられんものを見たから、エール2、3杯は飲まないとやってられんわい。

儂らは、また信じられんものを見た。

「愚図2号!もたれかけて、サボってんじやねえ!3番テーブルへ早くいけ!」

「二、ニヤー!サボって「轢き殺すぞ?」行きますニヤー!」

「おい、厨房のメイ!お前、10分休憩しろ!腕の動きが鈍っているぞ!」

「イエス、サー!メイ、休みます!」

「にいさ「あ?」…サー!ニヤーも休み「ダメだ。20分前に休んだだろうが!」ハイニヤ…。」

「ルノア!客だ!…ちっ【ロキ・ファミリア】か。嫌なところを見られちまったぜ…。」

「イエス!サー!…ようこそ!【ロキ・ファミリア】の皆様、4名様でしょうか?」

「あ、ああ。よ、4名で。」

「では、こちらです!」

目の錯覚か…?

【フレイヤ・ファミリア】副団長の【女神の戦車】が、ミアの代わりに店を仕切つとる…。
儂は疲れとるな…。

「ご注文は？」

「エール3杯で、あとつまみも…。」

「私はアルヴの聖水を…。」

「はい！了解しました。しばらくお待ち下さい。」

「儂は疲れとるんじやろうか…。」

「ウチも疲れたわ…。」

「僕はもう疲れたよ…。」

「私もだ…。」

「ここへ寄らんで、そのまま帰った方がマシじやな…。」

「ほらよ、注文のものだ。」

「…ありがとう。アレン、何故ここにいるんだい？」

「ミアに店番押し付けられた。それだけだ。」

「ミアは…【フレイヤ・ファミリア】ホームにおるのか？」

「昨夜聞いただろうが、糞ドワーフめ。あそこにいたつきりだ。」

「そやか…。フレイヤはどうなったんや？」

「さあな、ミアがいるなら元に戻ったんじゃないやねえか？」

「…そうか（時間稼ぎも今日までか）。」

「俺は行くぜ。おい！愚図1号、どこへいく！」

「お、お花を摘みに…「ちっ…すぐに戻れ！でないと轢き殺すぞ？」イエス、サー！」
堂に入つとるな、意外なところを見たものじゃ…。

「何か、馴染んでいるね。彼は。」

「まさか【女神の戦車】が、酒場の指揮をやるとは…。」

「今日は何なんや…一体何が起こつとるんや…。」

「儂はもう考えることは、やめたわい。」

もう飲んで、考えることを放棄するわい。

「……………」

む？フィンが何か考えとるな。

「フィン、何を考えとるんじゃない？」

「あ、いやね。今日のロイマンの言った言葉が妙に気になってね。」

「私は全てがもうわからないのだが…。」

「ああ、彼が言つてた中で「時間は有限だ」と何回も言つてただろ？」

そんなことを言つとつたか？

「そうやな、そんなことも言っとったな。」

「それがどうしたんじや？」

「それが妙に引つかかるんだよ。そう、昔に何回も聞いたことがあるんだよ。」

「時間は有限だ…か。何もおかしなことはないが？」

「そうなんだよ。だから妙に引つかかるんだよ。」

「お主でもわからんなら、儂にわかるわけないじやろ。」

もう知らんわい。

グビグビグビ…。

「しかし、エイナ・チュールが「ヘステイア・ファミリア」に入るとはね。」

「私としては、友人の娘のこともありうちに入ってほしかったがな。」

「事務仕事が優秀と聞いたとったからなー、ほんまにウチに入って欲しかったわー。」

「同感じやな、儂らの負担が減るからもう。」

ドワーフに事務処理をやらせるではないわ。

鍛治まがいのことをしとったほうが、まだマシじやわい。

「それに…エイナ・チュールの態度が気になるんだ。何かこう、おかしなことなかったか

い？」

「どこがどうおかしいのだ？」

「入団したばかりだよ？堂々としすぎじゃないかな？」

「むう…言われてみればそうじゃな。あの場なら、ビクビクするのではないか？」

「アイナはたまに突拍子もないことをするからな…、その血を受け継いでいるのではないか？」

「それに…ギルド長を見て驚愕し、その後納得したような表情をしていたんだ。」

「何だと？」

「あの娘っ子が何かを知つとると？」

「何であの場で聞かなかつたん？ウチなら見破れたのに。」

「…ロイマンのシヨックがまだ抜けてなかつたんだよ…。」

「ああ……。」

「そっか…何か惜しいことをしたわー。会ったら聞いてみるわー。」

「それはないね。恐らく戦争遊戯のあとになるだろうね。」

「いや、何かで外へ出るといふことはあるはずだ。その時に聞いたらいいのではないか？」

「忘れたのかい？監視していたティオネたちが気絶させられ、【ガネーシャ・ファミリア】の牢獄へ入られたことを。」

「あのようなことがまた起こると？」

「ああ、その可能性が高い。今の「ヘステイア・ファミリア」に何かが起こっている。だから、入団したばかりのエイナ・チュールが堂々としているのは、そこにあるんじゃないか」と僕は思っている。

むう……。一体何が起こつとるんじゃないや……。

む、エールがなくなつたな。あと一杯飲んで帰るとするか。

いずれにしろ、戦争遊戯では手加減せずぶつかるのみじや。

儂というドワーフはな。

第104話 泥犬、捕縛。

へへへっ！

あの【白兔の脚】の弱味を握れ、と【勇者】から依頼される（違う！生い立ちなどを探ってくれと言ったんだよ！by【勇者】）とはな。

報酬もでかいし。

…そりゃあ、あの【白兔の脚】に対して恨みなんかないよ。

ただ、あそこまで強くなるなんて思わなかったんだよ！

何だよ！

一ヶ月半でレベル2なんて…。

その一ヶ月後に私と同じレベル3!?

そしてその2ヶ月後に私より上のレベル4!?!?

ふざけんなよ！

半年であんなバカ正直者がな…。

でもさ、あのバカ正直者がうちのファミリアにいたら、ヘルメス様にこき使われるのが見えているんだ。

むしろ、「ハスティア・ファミリア」に入っててよかったと思つたんだ。
じゃあ、何で「白兔の脚」に対して気に入らないのかつて？

全部だよ！

あんな強さを持つてて、威張らずヘラヘラとしやがつて。

「フレイヤ・ファミリア」や「ロキ・ファミリア」のように堂々としろよ！

『強者』らしくさ！

女に興味津々な感じみたいだけど、初心で手を出せないなら歓楽街なんか行くなよ！
「イシユタル・ファミリア」のゴタゴタでヘルメス様に目をつけられるから、そうなるんだよ！

『異端児』の件だつて、そうさ！

モンスターだぞ！見捨てても、問題ないのに余計な情けをかけて助けるなよ！

おかげでオラリオが大混乱じゃないか！

まあ、あいつの評判が下がったのはいいけどさ、すつきりしないよな！

だけどさ、「ロキ・ファミリア」を欺いてモンスター……いや『異端児』のやつらと交渉をして、あいつのための生贄を捧げさせるのはかなり心が痛かつた。

モンスターなのに……俺らのような悲痛な表情を見せられたらさ、誰だつてそうなるだろ！

アスファイなんか、終始ヘルメス様を軽蔑していたし。

でも…そんな小細工をしてもあいつは、【白兔の脚】はそれを壊しヘルメス様の予想を覆し、以前より更に上の名声を取り戻し、自ら勝ち取りやがった。

あのヘルメス様からだぞ！

ふざけんなよ！

現れるなら、もつと前に現れるよ！

そうなら、24階層であいつらが死ぬことはなかったんだ！

わかっているよ！

あの黒ロープのやつへの依頼を受けた、私のせいだということとは！

【白兔の脚】ではないということに！

エリリー、ポット、ポック、ホセ、キークス…。

すまない。本当にすまない…。

…【勇者】からの依頼を受けたのは、嫉妬心もあるけど本心はあの【白兔の脚】について知りたかったんだ。

何故、あそこまで強くなれる？

何故、あそこまで優しくできる？

何故、あそこまで諦めが悪いんだ…。

だから、調べたいんだ。

【白兔の脚】について。

…よし。

ヘルメス様もアスファイもない。

ここんところ、忙しくて出ているようだしな。

でも、変なこと言ってたな。

3日前にヘルメス様とアスファイが青い顔で怯えながら、帰ってきたんだ。

あの日は神会の後に「ヘステイア・ファミリア」へ寄ると言ってたから、「ヘステイア・ファミリア」で何かあったのかな？

まさか、あのお人好しな【白兔の脚】が一癖二癖あるヘルメス様に何かするわけがないじゃないか。

それにあの言葉…。

『今の「ヘステイア・ファミリア」に手を出すな！いいな！絶対だぞ！手を出したら…俺は送還され、お前らは皆殺しされるのは確定だ！今の「ヘステイア・ファミリア」は、今のオラリオで一番手を出しちゃいけないファミリアだ！特に、ルルネ！お前は余計なことをするんじゃないぞ！』

『…「ヘスティア・ファミリア」に手を出すことは許しません。ただ、連絡役としてローリエ、貴女がやりなさい』え？私が？はい！わかりました（よつしやああああ！これでベルきゅんと会う理由ができたアアア！）。『…私は疲れました。いいですね？手を出してはいけません！』

なーんか納得できないんだよな。

「ヘスティア・ファミリア」の団員見てもレベル1、2ばかりじゃないか。

どこに怯える理由があるんだ？

まあ、いい。今のうちに調べないと…。

ダメだ。見つからない。

ヘルメス様のことだ。「白兔の脚」については調査済みのはずだ。

だから、あそこまで熱入れているはずなんだ。

あるはずだ。

そういえば…、机下のところに何かゴソゴソしていたな。

調べてみるか…。

んー、ないか…。

あれ…床にズレている板がある。

やばいやばい、元に戻さないぞ。
ズルツ

あつ……。何かある……。

羊皮紙……いや、日誌？

『ベル・クラネル英雄日誌』

こ、これだ！

チクツ

……？何だ、ああただの破片か。

よし、見て……みよ……うか？

あ……しま……つた……

ま……ひ……と……ねむ……りだ。

私は数時間しびれながら、眠らされた。

そして、目の前にアスフィとヘルメス様がいる。

「……ルルネ、遺言はありますか？」

「ま、待ってくれ！アスフィ、せめて話だけは聞いてくれ！」

「ほう？言ってみなさい？ヘルメス様、確認をお願いします。」

「ああ。」

あ、マジモードだ。マジで怒っている。

やばい、嘘言えない。どうしよう…。

仕方がない…全部言おう…。

「……ということだよ。」

「はああああ、貴女という人は！〔ハスティア・ファミア〕には手を出すなというのは、ベル・クラネルにも関わらないでください！という意味なんですよ！わかっているんですか！あの少年は、オラリオの起爆者なんです！それを！」

「……わ、わかっているよお…。」

「いいえ！わかっていますせん！」

「まあ、俺を調べる着眼点は悪くない。しかしここまでやるのは、〔勇者〕らしくもないな…。」

「【白兎の脚】専門店ができたことで、ヘルメス様を調べた方が早いと言ってたよ…。」

「ローリエが手がけているものですか…。確かここに報告書がありましたね。……!?!? な、何ですって…ここまで?。」

「どうしたんだい?」「これを見て下さい…。」「どれどれ…?はあ!?!今日を含めてたったの

3日間で!？」

? あー、ローリエが手掛けているベル・クラネル専門店か?

どうせ、赤字続きで潰れかけているんだろ。

「嘘だろ…。本店と東西南北に支店、更に男性用支店もだと…?」

「え!?! まだ続けているのかよ! というか、6つの店もだつて!?! お、お金は大丈夫なのかよ!?!」

「昨日で…500万ヴァリス…。」「え!?!」 今日で1000万ヴァリス以上だと!?! ア、アス
フィー・ロ、ローリエを呼んでこい!」

「わ、わかりました!」

な、何が起こっているんだよ…。

第105話 泥犬、恫喝。

「ヘルメス様。何でしょうか？この駄犬の始末ですか？お任せ下さい、来い！駄犬め！
貴様は地獄の責め苦でも生ぬるい！」

「ぎゃああああ!!」

「ま、待て！ローリエ！落ち着け！アスフィー！」

「ロ、ローリエ！落ち着きなさい！」

痛い痛い！首が絞まる！

レベル2だよな？私より強くない!?

「チツ…命拾いしたな。それで何の御用でしょうか？報告書に何か不備でも？」

「い、いや。えーと店の開設許可は2日前にしたよな？何で、こんなになっているんだい
?」

「わかりませんか？儲かったからです。」

「いやいやいや！普通は数週間かかるんだろ？この短期間でできるわけないだろ!？」

「皆の協力が素晴らしかったです、以上。」

「嘘だろ…。早すぎるだろ…。」

「ヘルメス様…嘘は言っていないですよね？」

「言っていない…。はっ！まさか…ここへ帰る時のあの行列は…!?!」

何か行列が多いなーと思っていたけど、アレがベル・クラネルグッズ専門店?!
嘘だろ…。何が起こっているんだよ…。

「気づかなかったのですか？ヘルメス様とアスファイ姫らしくないですね。」

「!?姫はやめなさい、ローリエ…。」

「(あー、メイにがつつりと洗脳されているなー)そうか…。」

「ああ、【ロキ・ファミリア】も【フレイヤ・ファミリア】もお得意様でファンとなつて
います。」

え？だから【勇者】がああのを依頼してきたのか…？

というか、戦争遊戯の敵対派閥だよな…？

買い物の上、ファンになってどうするんだよ…。

「…ヘルメス様。【ヘステティア・ファミリア】の戦争遊戯の相手つて、【ロキ・ファミリア】
と【フレイヤ・ファミリア】ですよね？」

「そうだな…(もう確定なのに、更にダメ押しするのか？えぐくないか?)。
「何がどうなつてんだよ…。」

「それで、問題ありませんね？では、この駄犬の始末をしてきます。来い！」

「ぎゃああああ!？」

「ま、待て!ローリエ!ルルネの沙汰は俺がする!」

「この駄犬は許されなことをしたのです!毛を全て刈り「刈り!」耳としっぽを切り落とさなければなりません!」

「口、ローリエ!それはやりすぎです!だ、団長命令としてその手を離しなさい!」

「……………チツ。命拾いしたな、次はないぞ。ルルネ。」

「ひ、ひいいい…。」

ローリエ…めっちゃ変わってないか?

ほんの数日前までは何ともなかったのに…。

何があつたんだよ…。

「さて…ルルネ。沙汰を申し渡す。戦争遊戯が終わるまでホームで謹慎だ。いいな?」

「え?そ、そんな…『ルルネ!承諾しなさい!そうしないと、ローリエが納得しません!』

…わ、わかつたよ。」

「ヘルメス様、進言してもいいですか?」

「う、うん。何だい?」

「謹慎は、戦争遊戯当日前日まででいいのでは?」「え?」「【勇者】からの依頼で【ロキ・ファミリア】と懇意であることから、【ロキ・ファミリア】へ戦争遊戯の援軍として派遣

してはどうですか？」

え？ローリエが助けてくれた…？

どうしてだ？

「(忘れてた。彼等からも依頼されてたな) そうだな…なら、「ヘステイア・ファミリア」へはアイシヤを派遣しよう。フレイヤ様のところへは…、いらないと言われるだろうな。」

「そうですね…。」

「では、私は店の経営でやることが多いので失礼します。…おい、ルルネ。「ひいつ！」大人しくホームで謹慎してろ。でないと、オラリオ中にいるあの御方のファンがお前を付け狙うぞ。」

「ローリエ…聞きたいんだけど、その…ファンってどのくらいいるんだい？」

「さあ？少なくとも1,000人以上はいるじゃないですか？」「1,000人!」「」そのあたりはヘルメス様が確認されてはどうですか？」

「…そうだな。ルルネ、ホームで大人しくした方がいい。命が惜しければ出るんじゃない。」

「わ、わかったよ…。」

「では、失礼します。」

「はい。問題ございません。むしろ、ルルネさんがあちらにいてくれたほうが、丁度いいのです。」

「そうですか…。何か必要がありましたら申し付け下さい。私は幹部たちの報告を聞かなければなりませんので、これで失礼します。」

「ありがとうございます。ローリ工様。」

『そこまでするのですか…?』

『あの「ヘルメス・ファミリア」が…。』

『アイシヤ様がお気の毒でございます…。』

「神ヘルメスは油断ならない神ですからね。元主神も『クソガキヘルメス』と言っているのです。これぐらいが丁度いいのです。」

「そうですか…。しかし、数日でここまで…。」

「もう、オラリオは「ヘステティア・ファミリア」の手中にあるんじゃないですか?」

「実感がわきません…。」

「正直、私もここまでとは思いませんでした。坊ちやまの人徳がオラリオの皆様、かなり深く根付いていたようですね。さて、坊ちやまの部屋ですがベッドをキングサイズに変えました。」

「「え?」」

「カサンドラさんはまだ起きていますね？ エイナさん、「は、はいっ！」 今晩はエイナさんの担当でしたが、カサンドラさんと坊ちやまを挟んで一緒に添い寝していただきませう。」

「ええっ!？」

「1人占めさせたいのはやまやまですが、これから増えることを考えるとローテーションを早めます。申し訳ありません。」

「いえいえいえいえ！ 私はそれでも構いません！（カサンドラさんがいてくれるなら、歯止めが効くので逆に助かるかも…）」

『「ということは…、明日はリリと春姫様ですか。」』

『「リリ様…よろしくお願いいたします。」』

第106話 美神、衝動。

はあ……。ミアから久々に怒られてしまったわ。

まさか、あの子のことで取り乱してそれが4日もすぎてしまうなんて。

オツタルたちには悪いことをしてしまったわね……。

でも、お尻叩きはないんじゃない？

浴場に投げ込まれただけでも十分だと、私は思うんだけど？

ヘイズに治してもらったけど、まだ痛いわ……。

ミアが戻った以上、もう負けることはないわ。

ヘステイアがオラリオ全てを味方にしたとしても、ね。

そういえば……ヘルンはどうなったのかしら？

絶対に私の手で下さないよ。

「そのあなた、「は、はいっ！」ヘルンはどうなったの？」

「ヘルン様は、未だに目覚めません……。命はヘイズ様が何とか取り留めたようですが。」

目覚めない？

ああ……ヘルンはこれ以上、生きることが拒否しているのね。

でも、駄目。それは許さない。勝手に天へ帰ることは許さない。

「そう、わかったわ。…ところで私がいけない間に何か面白いことはなかったかしら？」

「は？あの…いないというのではなく…。」

「いない、そうよね？」

「(無理に誤魔化そうとされている…) : はい。そうですね、【ロキ・ファミリア】が【ヘステイア・ファミリア】に戦争遊戯を仕掛けたことですね。」

ロキが？

…ロイマンがロキたちに何か警告をしたということね。

そんな余計なことをしなくても勝てるわよ、だから恩は感じないわよ。

無駄なことをしたわね、ロイマン。

でも、これで【ヘステイア・ファミリア】の敗北は確定ね。

ふふっ…、どっちにしろベルは私のもの。

ああ、やっと私の『伴侶』が手に入る！

ヘステイアにも、【劍姫】にも、渡さない！

「あとは…ベルの、いえ【白兔の脚】のグッズ専門店ができたことぐらいですね。」

「…(聞き間違いかしら?) ベルのグッズ専門店?…詳しく教えて頂戴。」

そして、私は【ヘルメス・ファミリア】が開いたベルのグッズ専門店について聞いた。

「(引きこもっていたのが悔やまれるわね) それでどんな状況なの?」

「あ、はい。本店を含めて東西南北に支店があり「東西南北!」あ、はい。それで男性用支店ができ、全部で6つの店(6つの店も!)がありますね。」

「ねえ…私がいなかったのは4日間よね?その店はいつできたの?」

「…2日前です。」

「2日前?…早くないかしら?」

「私もそう思います…。連日行列が並んでいる状態です。」

何よ…それ。

「……………行くわ。」「は?」

「その店へ行く。そう言っているの。」

「こ、困ります!ミア団長代理より、フレイヤ様をホームから出すと言われております!」

「ねえ、ここの主神は誰かしら?」「フレイヤ様です…。」

「なら、問題ないわね。その店へ案内して頂戴。」

「こ、ここの近くでしたら南支店ですね。」

「あら、本店は駄目なの?」

「…その、本店はあまりに行列が長いので、ゴールド限定となったそうです。」

……ゴールド限定？

「ゴールド限定って何……？」

「……ベル、いえ【白兔の脚】グッズの種類を2／3以上買った人に譲られる会員証です。ブロンズ、シルバー、ゴールド、そしてプラチナとランクがあります。」

「……貴女、妙に詳しいわね？」

「すみません……。私も会員でブロンズです……。」

「へえ……どんなものなの？」

「あ、はい！その……キーホルダーですが、こちらになります。」

あら、可愛い。

……それにしても妙にリアルね？

……欲しい。

「南支店でもいいわ。案内してちょうだい。」

「あ、はい！あの……神であろうが有力ファミリアであろうが並ぶこと、そして買い占めや転売は認めないのが鉄則とのこと。それでもよろしければ。」

「構わないわ。ふふふ……面白くなってきたわ。」

「ミ、ミア団長代理へ確認して……不要よ。お供して頂戴。」（ああ、怒られる……）わかりました……。」

ふふふ…、ベルのグッズ専門店があるなんて。
ヘルメスもたまにいいことをするじゃない。

…連日行列って、ベルも罪よね。

「こ、こちらが行列の最後尾です。」

「……長いわね。まあ、いいわ。暇つぶしになるし、話し相手になって頂戴。」

「あ、はい！」

そして私は、グッズのことやここ数日のことについて聞いた。

「そう、そういうことになっているのね。（【悲観者】って元アポロンのとこよね？…要注意ね。）」

「はい…ベル、いえ【白兔の脚】が誰と稽古しているのかなり噂になっているようです。」

「そうよ！毎日ボロボロになっているのよ。【ロキ・ファミリア】の【劍姫】様でもないみたいだし、誰なのかしら？」

「うーん、うちでもないし…そもそもベルとやり合えるって、第一級冒険者しかいないじゃない。」

……貴女、馴染んでないかしら？

それに、その娘たちは誰なの？

「あ、フレイヤ様。すみません。…その、ファンの集まりがあつて情報交換を…。」

「そ、そう（たつた数日で？どこまで広がっているのかしら…。）」

「ああ！尊い！あの白い髪！あの笑顔！荒くれ者にはないよね！」

「うんうん、わかるー！」

「でも、貴女のところに数週間いたんじやない？ずるいわよ！」

「そう言つても…、私は少ししか話してないし…まあもつと話せばよかつたと思つていいけど。」

「贅沢つてもものよ！それは。」

………勝つたとしても、彼女たちを抑えられるのかしら？

勝つた後のことも、考えないといけないわね…。

困つた子だわ、ベルは。

あら、順番が来たわね。

それに…：ファン同士の話も面白かつたわ。

シルとして来れば、よかつたかもしれないわね。

「はい、入場前に注意です。買い占めや転売とかはしないで下さい。すれば生涯出入禁

止です。そして、神であろうが最強派閥であろうが一人一種類一品までです。」

「わかったわ。全種類買うわ。」

「はい、わかりました。ゴールド限定パックですね。」

ゴールド限定パック？

「いるんですよ。熱烈なファンほど全種類買う方が。でも時間節約のため用意してあるんです。」

「そ、そう。」

「そして…そのゴールド限定パックでしか買えない限定ものがあるんです！女神様、ラッキーですね！」

（私がフレイヤでも関係ないということね。ふふふ…いい店だわ。）

「わかったわ。それでお願いできる？お代はファミリアへ請求してくれるかしら？」

「はい！ゴールド限定パック1名様、入りましたー！」

……え？

……こんなにあるの？

そこには、グッズがこんもり積まれた荷車があった。

「フ、フレイヤ様。私が引いていきます。」

「そ、そう。ごめんなさいね。ここまであるとは思わなかったわ…。」

ふふふ……いい買い物をしたわ。

そして堂々とホームに戻ると…、ミアが笑顔で待っていた。

そして、案の定怒られた。

「このバカ女神がつ！どこへほつついて歩いてたんだいっ！」

「……散歩よ。」

「へえ、散歩ね。でかけたのが昼前で、今はもう夕方だけど？」

「お店で長居していたのよ…。」

「それで、この荷車は何だい？」

「買い物よ…。」

「おい、お前。「は、はいっ！」アタシはこのバカ女神を、ホームから出すなど言ったね？」

「はい…言いました。」

「何で出してんだい？…まあ、いい。どうせこのバカ女神が駄々こねたんだろ。それで何を買ったんだい？」

「ベルのグッズよ。」「は？」

そして荷車から私の神室へベルのグッズを置いた。

「……………」

「あら、素敵。ベルにそっくりじゃない。」

「フ、フレイヤ様、これは一体…。」

「見たらわかるじゃない。ベルのグッズよ。」

「フレイヤ様！これはいいものですよ！」

「え？本当？…精巧にできているわね。」

スルーしているけど、ヘルン…貴女、ベルのグッズを試しに顔の横に置いたら即座に目を覚ましたわね。

『ベルの匂いがしたからです』ですって？

貴女…大丈夫なの？

昼までの私のシリアスモードを返して頂戴。

「あの…フレイヤ様。」

「オツタル、私は忙しいの。後にしてくれるかしら？」

「あ、それはここに置きますね。」

「うーん、そこはこれがいいじゃないかしら？」

「でもその後に、このベル柄のカーテンにしますのでそれを背景にしますから。」

「あ、そうね。その方が映えるわね。」

「……………おい、バカ娘共。」

「ミア、後にして頂戴。」

「すみません、ミア団長代理。少々お待ち下さい。」

「こんなにあるとは思わなかったわ。」

「結構癒やされるわね…ふふふ。」

「……………オツタル、下がりな。」

「……………すまない。後は頼む…。」

「さてつと…、こんのツ！バカ娘共がああつ！」

そして、私達はミアに雷を落とされた。

昨日に続いて、またお尻叩きをされた。

ヘルンと共に…。

痛いわ…。

第107話 白兔、再会。

「レア…お姉ちゃん？」

目の前にいたのは、リユーさんと初めて会う女の人、そして5年前にお祖父ちゃんがいない2ヶ月間で、一緒に暮らしたレアお姉ちゃんがいた。

「レアお姉ちゃん？いえ、ベル。この方は…ア、アストレア様!？」

「え？レアお…わぷっ！」

レアお姉ちゃん？アストレア様？が僕に向かって突っ込んできた？

わしゃわしゃわしゃ！

「わわわ、髪の毛が！」

ぐにぐにぐに！

「いー！いー！いー！（引つ張らないでー!）」

「うん！この髪の毛触り、このほっぺの伸びはやはり、ベルね！間違いないわ！」

ムギユー！

昔と同じだ！

事あるごとに僕の髪をかき回したり、ほっぺを引つ張ったり、今のように抱きしめる

んだから、間違いない！

レアお姉ちゃんだ！

「むー！むー！むー！（ちよ、ちよと待ってー！）」

「ああ、会いたかったわ！ベル！」

「むー！むー！むー！（落ち着いてー！レアお姉ちゃん！）」

駄目だー！

こうなつたレアお姉ちゃんは、気がすむまで収まらないんだつたー！

「先輩！先輩！固まってないで、アストレア様から彼氏を離しましょう！」

「…はっ！そ、そうですね！ア、アストレア様、ベルを離して下さい！」

「嫌よ。」

「…は？」

「リユーばかりずるいわ。ベルと一緒にいたなんて。」

「え？あの？ベルと初対面ではなかったのですか…？」

「違うわ。私がベルの最初の女の人よ。」

（レアお姉ちゃん！その発言は誤解を招きますーっ！）

その時、空気が凍った。

（あわわわ…、もしかして、私はアストレア様と先輩の板挟みになってますか？

ひいひいっ!」

「ど、どういうことでしょうか?ア、アストレア様?」

「まず一時間ほど、ベルを堪能させて。」

(長っ!)

「あ、あの…、ベルさんが苦しがつていますので離していただけると…。」

「…誰かしら?貴女は?」「ひいっ!」

「ちよ、アストレア様!神威を解放しないで下さい!」

やばい!カサンドラさんが危ない!

レアお姉ちゃんがこうなると、相手が萎縮するんだ!

故郷の村で、お祖父ちゃんがいな隙に僕をいじめようとした人をこうして叱ったんだ!

その人は…それ以来僕を見ると怖がつて、家へ閉じこもるようになった…。

(ご、ごめん!レアお姉ちゃん!)えいっ!

「あん…。もう、ベルつたら!」

「ぶはっ。レアお姉ちゃんだよな?あ、いや。アストレア様?え?レアお姉ちゃんつて神様だったの!」

「バレちゃったわね。うん、そうよ。正義を司る神様よ、えっへん!」

「えええええっ！」

『先輩…、アストレア様ってああいうキャラだったのですか？』

『たまにはありますが…、あそこまで誇示するのは初めて見ました…。』

「えーと…じゃあ、アストレア様と呼ぶべきですね。」

「駄目よ。」

「え？」

「レアお姉ちゃん、と言いなさい。」

「え…でも神様だよね？リユーさん？」

「え？あ、はい。そうですね。」

うん、神様なら敬意を示すべきだよね。

5年前はまさか神様と知らなかったんだから。

「却下よ。そう呼んでくれないなら、5年前のベルのことを全部バラすわよ。」

「!!!」

「確か、ベルは夜中…「わかりました！わかりました！だから言わないで下さい！」敬語も駄目よ。」

「うう…わかったよ。レアお姉ちゃん」

それはずるいよ…。

「うん、よろしい。さあ、もう一度ハグを…。」

「いえ、待つてください。アストレア様、それは公私混同です。」

「…リユー。これは私とベルの問題よ。割り込まないでちょうだい。」

「(ムツ)ゴホン。アストレア様はベルとどのような関係だったかは知りませんが、5年前の話ですよ？ですが、今は私とベルの絆が深いです。ということ、遠慮して下さい。」

「リユー、随分と偉くなったわね。ベルの彼女「彼女!」が貴女というのはまだ役不足だわ。料理の腕を上げてから、出直してきなさい。」

「なっ!り、料理の腕は関係ないでしょう!「いいえ、大ありよ。ベルの横に並ぶなら、最低限それぐらいは習得しなさい。」ぐっ!?!」

(あわわわ…:さつきまでは先輩の彼氏としてふさわしいか心配されていたのに、今は【白兎の脚】の彼女として先輩がふさわしいのか、という流れになっています!何ですか…それは…:)

「ちよ、ちよっと!アス:『ギロリ』レアお姉ちゃんもリユーさんもやめて下さい!うっ…。」

あ、特訓の疲れが…今になって。

「べ、ベル!」「だ、大丈夫なのですか!」

「あの…ベルさんはちょっと特訓で疲れていますので、その辺にしてくれませんか。それに…周囲の目が…。」

「「え？」」

『おい…【白兔の脚】をアストレア様が抱きついていたぞ…。』

『あのエルフがアストレア様といがみ合っていたぞ…。』

『え？何？修羅場？』

『これは…会長に報告した方がいいのかしら？でも【ヘステイア・ファミア】の敷地内よね？』

「リユー…今は休戦しましょう。」

「そうですね（まさか、アストレア様と既に会ってたなんて、聞いてないですよ！）。」

「ほっ…（た、助かったああああ！）。」

「あの…ホームに入りませんか…？あちらの方が…。」

「「え？」」

ホームの玄関ドアの前に、腕組みをして怖い笑顔をした神様が立っていた。

第108話 処女神、鎮静。

「やあ、アストレア。久しぶりだね？」

「ええ、ヘステイア。久しぶりね。積もる話もあるので入れてくれないかしら？」

「その前に、君は何をしに来たんだい？」

「ベルに会いに……いえ、戦争遊戯に参戦するためよ。」

「!?こいつ……ベル君をベルと呼び捨てしてなかったかい？」

「今、ベル君に会いに、と言わなかったかい？」

「……5年ぶりに会ったから、つい口が滑っただけよ。」

「さつきまで、そのエルフくとベル君を取り合いしてなかったかい？」

「いつから聞いてたの？」

「ベル君が『レア……お姉ちゃん?』と言ったときからさ。」

メイくんが教えてくれたんだ。

『面白いものが見れますよ』と。

全然面白くないよ!

何だよ!ベル君と既に会ってたなんて!

幼馴染のお姉さんというポジションを、さらつと取つてゐるなんて！

「ヘステイア、それを含めて話すから入れてちょうだい？ほら、ベルも疲れているようだし。」

「……はあ、事が状況だから仕方がないか。ちゃんと説明してもらおうよ。」

ただでさえ、バイトで疲れているのにこれ以上負担かけないでくれよ…。

フレイヤが復活した今、明日は神会へ来るだろうし。

その対策も練らないと駄目だけど、アストレアが来た以上タイミングがいいのか悪いのか…。

「なるほどねえ。ベル君とは5年前に会つたんだ。」

「ええ…色々あつてね。アドバイスをもらいに行つてたのよ。その時にね。」

ベル君は、メイ君からもらった特製ドリンクを飲んで、バーチェくん達に抱えられて退室していった。

あれ、大丈夫なのかい？

何か口調が幼児退行しているんだけど…、気のせいかな。

「神ヘステイア。遅くなり申し訳ありません。『アストレア・ファミリア』のリユース・リオン、今回の戦争遊戯に参戦することをお許し下さい。」

「よく来たね、エルフくん。非常に助かるよ。まだ始まってないからよかつたよ、本当に。」

「ところで、ヘスティア。何故、「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」から戦争遊戯を仕掛けられているの？」

「あー…どう説明したらいいんだろ。「私にお任せ下さいませ、ヘスティア様。」あ、メイくん頼むよ。」

「…？貴女は？」

「申し遅れました。私は「ヘスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイドのメイといいます。坊ちやまを幾度も助けていただき、ありがとうございます。「疾風」と、リユー・リオン様。」

「あ、はい。…え？専属メイド？坊ちやま？」

「貴女…魔導人形？」「ええっ!？」

「はい、神アストレア。その通りでございます」

そして、メイくんはこの戦争遊戯について起こったきつかけを話してくれていた。

「……と、以上でございます。」

「なるほど…アストレア様の考えの通りでしたか…。」

「すごいですね！アスト…レア様…。」

「セシル？どう…し…。」

「……………許さないわ。フレイヤ…………。」

うわあ…アストレア。

めつちや怒ってて、神威を全開放してるなあ。

まあ、可愛がっていたベルくんがフレイヤにああされたと知ったら、そりやそうなるよね。

「リユー…セシル…。」「は、はいっ！」

「戦支度をしなさい、フレイヤのところへ殴り込むわよ。」

「ええっ!？」

「ちよ…落ち着きなよ。アストレア！」

「これが落ちて着いていられる!?!私のベルがフレイヤによって、ズダズダにされそうになったのよ！」

「ちよつと待て!?!私のベル」って何なんだ!？」

あ…も…!

アストレアが、ここまでベルくんが夢中とは思わなかったよ。

「……落ち着いたかい？アストレア。」

「ええ……ついカツとなつてね。ごめんなさい、ヘステイア。」

「まあ、気持ちわかるよ。ボクもそうなつたからね。」

「そうね、眷属全員とベルを秤にかけたら、さすがの貴女も怒るわね。」

あの時は本当にキレそうだったよ。

というか、あの時のフレイヤは余裕ありそうで余裕がなかったよな。

いや……、あれが追い詰められたフレイヤかもしれないね……。

「それで、ヘステイア。何か作戦とかは立ててあるの？」

「え？あー、まあね。」

「その前に皆様、一旦汗を流してきてはどうでしょうか？（坊ちやまが彼女たちと出たようですので、今なら大丈夫でしょう。）」

「あら？泊まらせてくれるのかしら？」

「んー、部屋はいくつもあるし。戦争遊戯に協力してくれるからいいよ。それに、明日神会がようやく開けるみたいだから、その作戦も練りたいんだ。手伝ってくれるかな？」

「わかつたわ。協力させていただくわ。：リユー、セシル。」

「お言葉に甘えて泊まらせていただきます。神ヘステイア。」

「いい子たちじゃないか……、アストレア。」

「ええ、本当に（5年前、ベルを無理やりでも眷属にするべきだったわ…）」

何だろう…。今の、邪念が混じってたようだし。

しかし、今日も忙しかったなあ。

行列が並ぶ程なんて今までなかったし。

そして、僕たちは風呂へ入った。

「あー…、すつきりしたなー。」

「ええ、そうね。まさか大浴場までもあるなんて…。」

「（うう…：眠い）…すみません。ヘスティア様、アストレア様、先輩。限界なので先に寝てもよろしいでしょうか？」

「え？そうね。セシルは頑張ってくれたものね。いいわよ。ね、リユー？」

「はい、そうですね。セシル、今は疲れを癒やして下さい。」

「ありがとうございます。神ヘスティア、申し訳ありませんが先に寝かせていただきませう。」

「いいよ。ゆっくり寝てね。」

「はい、皆様、おやすみなさい。」

「さて、始めるか…ふあーあ…。」

「ヘステイア様、バイトで疲れているようですので、まずこちらを飲んではいかがでしょうか？」

「あ、そうだね。すまないね。」

ベルくんも飲んでいた特製ドリンクかー。

どんな感じだろ…ゴクゴクゴク…。

おお、飲みやすいな…。

あれ、眠気が…。

「すびー…。」

第109話 侍従長、詳説。

「寝るのはやつ！」

「バーチエさん。」

サツ

「……」

「なつ……！（いつの間に……それに、このアマゾネス強い……）」

「ヘステイア様を神室へ運びなさい。数時間後には起きるようになっていきますから。」

「かしこまりました。」

ひよい、サツ。

さて、ヘステイア様はこれでいいでしょう。

神アストレア、そしてリユーさんに説明するのにヘステイア様がいてはやりにくい内容もありますので、特製ドリンクを飲んでいただきしばらく眠っていたいただき、全快していただきます。

「貴女……ヘステイアを眠らせて何のつもり？」

「……貴女は何者ですか？ほんの数日前、貴女はいなかったはずだ。」

「それは、これから説明します。…そろそろ来る頃ですね。」

「おやおや、これは丁度いいですね。」

時間通りですね。さすが、セバスです。

「!?いつの間に…。」

「セバス、首尾は？」

「フレイヤ・ファミリア」はミアの警戒もあり、さすがに入りにくくなっていますね。さすが我らを手間取らせた「小巨人」というだけがあります。ですが、それでも隙はあるようでした。一方、「ロキ・ファミリア」は容易いですね。「勇者」はいつもの冴えも余裕もない上、その他の団員もかなりの不満を持っているようです。大したことはありませんな。」

「なっ…、「フレイヤ・ファミリア」だけではく「ロキ・ファミリア」まで忍び込んだだと…。」

ああ、リユーさんは初対面でしたね。

「自己紹介が遅くなりました。私は、「ヘスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル專屬執事のセバスと申します。」

「貴方も、魔導人形ね…。何者なの？ベルに近づいて何を企んでいるの？」

「いえいえ、企みなどはありません。我らは坊ちやまのために力を尽くしているだけで

す。」

「アストレア様……。」「嘘は言っていないわね……。」

もちろんです。

しかし、神アストレアがここまで坊ちやまに対して、過保護なのは驚きましたね。

「ハステイア様を眠らせたのは、これから述べることに對して処女神にとつては承諾しにくいものですから。」

「どういう意味かしら？それに、貴方たちはベルのために力を尽くすと言っているけど、何故そこまでするのかしら？」

「簡単でございます。我らの真の主ですから。」

「真の……ですか？」

「神アストレア。貴女は坊ちやまの出生の秘密を知っているはずですよ。」

「!?」「出生の秘密……ですか？」

坊ちやまの記憶を見る限り、坊ちやまの出生の秘密を知っているはずですよ。

「そうです。我らは魔導人形。あるファミリアによって、造られたものです。」

「そう……そういうことなのね……。」

「アストレア様？ベルの出生の秘密とは何なんですか!？」

「それは………っ。」

言いづらいでしょうね。

内容が内容ですので、仕方ありません。

私たちの方から説明いたしましょう。

「リユー様。改めて、深くお礼申し上げます。坊ちやまが駆け出しの頃から、命を幾度か助けていただき、そして叱咤激励していただき、ありがとうございます。」

「…それは私の方だ。彼がいなければ、今の私はいない。彼がいたからこそ、私は…正義を取り戻すことができた。」

「坊ちやまは貴方を深く信頼なさっております。」

「私も彼を深く信頼している…。そして…彼を愛している。」

本心からのようですね。

では、坊ちやまの出生の秘密を知った後でも、そう言えますでしょうか？

試させていただきます。

「ありがとうございます。その気持ちをしっかりと持つてください。」

「それはどういう意味でしょうか？」

「先程の紹介で、補足があります。私達を造ったファミリアについてです。」

「…っ。」

「私は、元『ゼウス・ファミリア』専属メイドです。」

「私は、元【ヘラ・ファミリア】専属執事です。」

「なっ……！まさか……ベルは……。」

「その通りです。坊ちやまは【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の両方の直系の系譜を持つ、この世で唯一無二の御方です。」

「そんな……アストレア様！」「事実よ……。」

驚いたようですね。

リユー様にとつては、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】という名は、7年前の大抗争で深い関わりがありますからね。

「リユー様、坊ちやまは7年前のことを知っております。」

「なっ……！」

「ですが、坊ちやまは7年前の大抗争で、彼らが起こしたことについて罪悪感を持っておりません。」

「違う！あれは彼らのせいじゃない！闇派閥のせいだ！【暴食】と【静寂】は確かに許されないことをしたが、それも私たちを強くするためだった。私は……彼らを『英雄』として尊敬しています……。」

「そのお言葉を聞いて安心いたしました。坊ちやまは、彼らが会いに来なかつたのを非常に気にしております。」

「当然よ！会いに行くべきだった！彼らは7年前のあの戦いに参加せず、ベルのところへ行くべきだったのよ！」

「ア、アストレア様……。まさか、ベルを育てたのは……。」

「ええ……。ゼウスよ。……そういえば、ゼウスはどこにいるの？……ここにいるの？」

言ったら、絶対に怒るでしょうね。

これまでの流れで、神アストレアは坊ちやまを溺愛しているのは間違いありません。

「元主神は半年前に育児放棄して、逃げました。」

「は？……もう一回言ってくれるかしら？」

「はい。この14年間、碌な事しか教えず碌なものを食わせず、半年前に元主神ヘラが正気に返ったことにより、坊ちやまを育児放棄してどこかへ逃げました。」

「何てひどいことを……あれだけお祖父さんを慕っていたというのにつ！」

「……ゼウスはどこ？」

やはり怒っていますね。

まあ、仕方がありません。

5年前の記憶を見る限り、眷属にしようかと散々と迷っていましたが元主神に坊ちやまが懐いていることから、澁々と諦めましたからね。

「さあ、少なくともこのオラリオの近くにいるのは確かでございます。場所は神ヘルメ

「スが知っているようですが、どうせまたいなくなるでしょう。」

「そう…ヘルメスが。」

これはまずいですね。

目からハイライトが消えています。

そのまま「ヘルメス・ファミリア」へ殴り込んで、神ヘルメスを送還しかねませんね。

第110話 執事長、揺動。

「これはいけませんね。」

「まだ、神ヘルメスは使い道がありますので泳がせておかないと。」

「神アストレア。冷静になってください。既に神ヘルメスは我らが断罪し、釘をさし、首輪をつけております。」

「……わかったわ。ヘルメスはまだ必要ということね？」

「はい、ご明察の通りです。」

「ふー……。断罪と言ったわね？ 一体、ベルに何をしたの？ ヘルメスは？」

「お答えいたします。リユー嬢にも深い関わりがございますので。」

「え？ 私も？」

そして、神ヘルメスが坊ちやまに対して仕出かしたことを説明いたしました。

「……………天界へ送還したいわね、本当に。」

「不埒なことはいくつか知っていますですが、18階層の件だけでなく「イシユタル・ファミリア」壊滅もですか！?（だから【麗傑】のアイシャ・ベルカと親しかったのですか。…

余計なことを。」

「いずれも坊ちやまを【最後の英雄】にするために、試練を与えたのでございます。」
「ヘルメスに最期を与えたいわね…。」「同感です。」

神アストレアをここまで落とすとは…、いえもう既に5年前に落ちていましたか。

「今は、我らを恐れ従順になっています。思い余つて、事に及ばないで下さい。」

「ええ、わかつたわ。けど、許せないことは許せないけどね。」

「はい。では、リユー嬢。もう一度お聞きします。坊ちやまは7年前のことを知つても、貴女を信頼しています。貴女はいかがでしょうか？」

「何度も聞いても無駄です。私は何があろうと、彼のそばにいて彼の横で共に戦い、そして彼を生涯愛します。」

「リユー…貴女。そこまで…。」

予想はしていましたが、そこまで想っていたとは坊ちやまは果報者ですな。

元ファミアリアの娘たちなら、すぐに叩き出すでしょうね。

「それを聞いて、安心いたしました。」

「セバス、それは野暮というものです。彼女と坊ちやまは深層でお互い助け合った仲ですから。」

「な、何故！それを！」

「ああ、言い忘れておりました。我らはそれぞれの眷属または系譜を持つものなら、記憶を全て見る事ができます。」

「!?!」

「当然、神アストレア。元主神が旅に出たと嘘をいい、貴女と坊ちやまと二人きりで「二人きり!?!」過ごした2ヶ月間のことも、リユー嬢と坊ちやまが関わったことも全て我らは知っております。」

「!?!」

青ざめたり赤くなったり、していますね。

まあ、あのような事は人には言えませんからね。

「アストレア様…5年前、神ゼウスに何をしたのですか?まさか、ベルと一緒に過ごしたかっただけではないでしょうね?」

「そういうリユーだって、ベルと何かあったわね?全部吐いてくれるかしら?」

「そ、それは…。」

「『互いを温めなくては…』ですね。」

「!?!?そ、そこまでも…。」

「『その後のこともいいましようか?』」

「言わないでくださいやめてくださいゆるしてください。」

「リユー、貴女…まさかベルを…。」

「ちちちち、違います！まだ、やっていません！あつ…。」

「まだ!?まだって、言ったわね!」

「神アストレア、ご安心下さい。坊ちやまはまだ来てないため、きれいなままです。」

「え?」「はい?」

坊ちやまは本当に来ていないのが、未だに信じられません。

あのクソ雑魚サポーターや、クソエロ爺の影響を受けているというのに…。

何故でしょうか?純粹さだけでは片付けられませんね。

「…そ、そう。まだだったのね…。(よかったわ)。」

(危なかった…。あの時で踏みとどまって、本当によかった…)

「しかし、惜しいことをなさいましたな。リユー嬢。」

「?。」

「坊ちやまの意中の方は、ご存知ですね?」

「…はい。」「え?誰よ!」

「もし、彼女より先に貴女に会っていたら、坊ちやまの意中は貴女になっていた可能性が

非常に高いです。」

「何…ですつて…、そんな…嘘だ…。もつと…早く会っていれば…、くつ…あの戦闘狂め…。」

「それより、誰なの!?!」

「ロキ・ファミリア」の【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン嬢です。」

「ええーっ! そんな…あの嬢が?」

リユー嬢はひどく落胆されていますね。

まあ、かなりニアピンでしたね。

どちらになっても私たちは問題ありませんが。

神アストレアもひどく驚かれていますね。

ふむ、ここで坊ちやまのスキルをお見せしたほうがいいでしょうね。

それで更に揺さぶってみましょう。

「ああ、いい機会です。坊ちやまのステータスの一部をお教えしましょう。」

「そうですね。(それでも坊ちやまを愛せられるかですね)」

「?。」

そして、私たちは坊ちやまの発展アビリティ『魅了』とスキル『兎囲女達』を教えま
した。

案の定、彼女たちは凹んでいました。

「……フレイヤ……余計なことをしてくれたわね……。それに、ゼウス……谷へ突き落とす前に、後頭部に岩でもぶつければよかったわ……。」

それでも、あのクソエロ爺は死なないでしょう。

何しろ、元主神ヘラの折檻にも耐えれたくらいですから。

「……神フレイヤは仕方がないとしても、ハーレムを教え込んだ神ゼウスを送還したいです……。」

「リユー嬢、坊ちやまが強くなりたいたいという気持ちはご存知でしょう?」

「はい……複雑ですが、それでも彼を愛しているという気持ちは変わりません!」

ふむ、それでも揺れませんか。

どうやら、本物のようですね。安心しました。

「はあ……リユー。貴女のステータスを彼らに見せましょう。その方がいいわ。」

「え? あ、そうですね……。ただ、見せても……(チラ)。」

「ああ、我らの強さですか? 言ってみせませんでしたね、レベル7上位はあります。」

「レベル7上位!? ア、アストレア様!!」

「う、嘘は言っていないわ…。」

「私たちは、それぞれのファミリアの指導教官をやっていました。」

「指導教官?!」

「はい、リユー嬢。貴女方を苦しめたアルフィアお嬢様は、私が教えました。まあ、7年前時点のアルフィアお嬢様は恐らく死の病で弱体化していましたから、レベル7下位かレベル6上位あたりですね。」

「…そ、そうですか（あれで下位なのか…よく勝てたものですね）。」

「リユー…見せた方が貴女のためになるわ。ベルの力になるためにも。」

「ほう?! 拝見いたしましたよう。」

そして、私はリユー嬢のスキルの『白兔純愛』に驚きました。

「これは…驚きましたね。」

「ええ…これは明らかにリユー嬢向けですね。」

「神アストレア、坊ちやまの『兎囲女達』の効果を見ると改宗させた方がいいと思います
が。」

「そうね…（相手がベルだなんて…、複雑だわ）。」

「いえ…それは戦争遊戯後にしてくれませんか?」

「ほう?」「ふむ?」「え?」

「確かにベルのスキルと私のスキルが重なれば、更に強くなれるでしょう。ですが、私はアストレア様の眷属でベルのことを好きに…いえ愛するようになったのです。スキル目的で改宗はしたくありません。それにもし改宗すれば、スキルが消失する可能性があるかもしれません。なので、今は改宗は避けさせていただきたいです。」

「ふむ…一理ありますな。メイ、どう思います?」

「素晴らしいと思います。坊ちやまへの愛がスキル効果などに惑わされないというのは。」

「リユー…(そこまで想っているなら認めないわけにはいかないわね…。はあ…、やっぱり5年前に無理やり眷属にすればよかったわ…)」

「それに…。」「それに?」

「あの…【剣姫】と決着をつけたいのです。「アストレア・ファミリア」のリユー・リオンとして。7年前は引き分け、そして『異端児』騒動では完全な敗北…。今度は絶対に勝ちたいのです!」

「私は好ましいと思います。坊ちやまの横に並ぶには、そうでなくてはいけません。」

「さすが、アルフィアお嬢様が認めた方だけありますな。」

「リユー…、戦闘馬鹿も大概にしなさいよ。ベルにドン引きされるわよ。」

「な!? わ、私は戦闘馬鹿ではないです!」

(じゃあ、ポンコツエルフ?と言おうと思っただけど、可哀想だからやめるわ。)

「リニュー嬢、お許し下さい。貴女を幾度か試すような真似をしてしまって申し訳ありません。」

「私たちが認めましょう。貴女は坊ちやまの横に並び立てる女性のうちの1人であることに。」

「い、いえ…。…。女性のうちの1人?」

「はい、ここに住んでおられる女性の殆どは坊ちやまのハーレムに入っておられます。坊ちやま本人は全く知りませんが。」

「…私は?」

「はい、神アストレア。もちろん貴女も入っておられます。」

「よしっ!」 「…アストレア様。」

「まあ、そのうち女神連合から話があると思います。」

「女神連合?」

「ええ、神デメテルに坊ちやまのことをお話されましたら、元主神に対して激怒されておられました。」

「ああ…デメテルなら怒るでしょうね…。連合というと他にも?」

「ええ、善神の女神様を中心に日ごとに増えています。ヘステイア様を除いてですが。」
「まあ、ヘステイアはそういうのをあまり好かないでしょうね。わかったわ。」
「では、ヘステイア様が起きられるまでしばらく寛いでくださいませ。セバス、対応をお願いしますね。」

メイ…、気を遣ってくれましたね。

ありがとうございます。

「はあ…ベル。半年で大きくなりすぎよ…。」

「私もここまで成長するとは、思いませんでした。」

「神アストレア、リユー嬢、お願いがごきます。」

「セバス…だったわね？何かしら？」

「私たちに？」

これはどうしてもお聞きしたいのです。

私が教えた…義娘のことを。

「アルフィアお嬢様の、7年前の様子そして最期をご教示願います。」

第111話 執事長、祈願。

「アルフィアお嬢様の、7年前の様子そして最期をご教示願います。」

「！」

「それを聞いて、どうするのかしら？」

「どうもいません。ああ、誤解なきように。私はアルフィアお嬢様の仇をとることなど全くございません。ただ、長年教えてきたあの娘がどのようなにして生き、どのようなして逝かれたのかを知りたいだけでございます。」

「そう…、わかったわ。セバス、と言っていいかしら？ 話す前に言っておくわ。私はアルフィアとザルドを未だに許していない。」

「アストレア様…。」

「リユー、勘違いしないで大抗争なんかじゃないの。ベルを一人にさせ、ベルに寂しい思いをさせ、ベルを悲しませた彼らを許せないの。」

「お怒りはごもつともでございます。」

あのクソエロ爺と一緒に暮らしていた坊ちやまは、寂しさに苦しんでいた時がありました。

クソエロ爺が、下界から見たままを書いた英雄譚で坊ちやまの寂しさを紛らわせたよ
うですが、それでも寂しさは完全にぬぐいきれませんでした。

現に彼らの存在を知った坊ちやまは、今も非常に彼らのことを気にしておられます。
「どこから話したらいいのかしら…。リユ、貴女から話してくれるかしら？ 私も補足
するから。」

「あ、はい。まず…」

そして彼女たちは、アルフィアお嬢様が大抗争の間でなされたことを話していただき
ました。

「…以上となります。」

なるほど。アルフィアお嬢様の、魔法を無効化する【静寂の園】を逆手にとり、『海の
霸王』リヴァイアサンにトドメをさした最終奥義【ジェノス・アンジェラス】を無効化
しましたか。

その【静寂の園】を奪い取ったのが、あのクソエロ爺の『アイギス』もどきとは、皮
肉なことですね。

そして、自らを炎渦巻く穴へ身を投げるとはあの娘らしいですね…。

「ありがとうございます。本当に不器用な娘で、ご迷惑をおかけし申し訳ありませんで

した。」

「いえ…、私は未だに【静寂】が願ったことには応えられていません。彼女が願う『英雄』にまだなれていませんが、ベルと共に強くなっていくことで、たどり着くのではないかと思つています。」

真面目で誠実な方ですな。

坊ちやまが信頼なさるのも当然ですね。

「セバス、どうしてアルフィアはベルに会いに行かなかつたかは、わかるかしら？」

「長年あの娘を見てきた私の視点で、よろしければ。」

「ええ、知りたいの。アルフィアはベルの存在を知っているはず。なのに会いに行かなかつたのは何故かを。」

「アルフィアお嬢様は、余命いくばくもありませんでした。坊ちやまといられる時間が残りわずかしかないなら、神エレボスの誘いに乗り、貴女を含むオラリオの冒険者を強くする道を選んだのでしょうか。」

「その前に会いに行けばいいじゃない！ベルがどんなに寂しがっていたかは、貴方も知っているでしょう！」

「アルフィアお嬢様は、坊ちやまより『黒き終末』の時計を遅らせることを選んだのです。そのため、アルフィアお嬢様は坊ちやまに会う資格がないと考えたのでしょうか。坊ちや

「だが剣をとらない世界にするために、リユー様貴女を含むオラリオの冒険者が『黒き終末』を討つことを託したのです。」

「……………っ。」

「…納得できないわ。ベルがどんな気持ちでいたのかを知らずに、勝手なことを！」
「ここまで感情的な方とは驚きましたな。」

いえ、坊ちやま限定でしような。

これは喜んでいいのか嘆けばいいのか困りますな。

コンコン

「気持ちを落ち着かせるためのハーブティーです。一息つかれてはどうでしょうか？」

メイ、ナイスタイムिंगです。

あのことを滑らせて、リユー様の決意を鈍らせては困りますからね。

「ふう…すこし熱くなりすぎたわ。」

（アストレア様があんなに怒るのは、初めて見ました…。）

「そろそろ、ヘステイア様がお目覚めになる頃です。神アストレア、申し訳ありませんが

少しお付き合い願えませんでしょうか？」

「私に？」

「ええ、明日は恐らく神フレイヤが復帰されるでしょう。戦争遊戯を進めるにあたって、ヘステイア様とリリ嬢と私達で作戦を練りたいのです。」

「なるほど…、ヘステイアは確かに女神として強いけど、そういう方面は苦手だと思わ。わかったわ、私もベルのために協力するわ。」

（ベルのために、ですか…。う…眠くなってきました…。）

「リユーさんは、明日から坊ちやまの特訓に参加させていただきます。ランクアップのズレや例のスキルを試す必要があります。」

「そうですね。ふあ…、すみません。アストレア様。明日に備えて、そろそろ寝かせていただきます。」

「ええ、そうした方がいいわね。お休み、リユー。」

「はい、お休みなさい。アストレア様。」

バタン

「…セバス。貴方、先程の説明で嘘が混じっていたわね？」

「はい、ご明察でございます。リユー嬢にまだ知られるには早いですから。」

「ベルは…知っているの？」

「いいえ、坊ちやまはまだ知りません。戦争遊戯に集中していただかなければなりませんから。」

「そうね…。ベルもリユーもこの事実を知ったら、戦えるどころじゃないわ。」

「はい。私もまさか、アルフィアお嬢様を倒したのが坊ちやまの信賴されているリユー嬢とは、思いもありませんでした。」

「神でありながら、運命を感じずにはいられないわね…。はあ…。」

ええ。そうですね。

アルフィアお嬢様の託した方が、あのエルフの女性でよかったです。

あの方なら坊ちやまと共に歩み、アルフィアお嬢様より高みへ行けるでしょう。

アルフィアお嬢様…、無事に転生されて坊ちやまと私に、再び出会えることを願っております。

第112話 正義神、憤激。

「セバス、メイ。現状について教えてくれるかしら？特にベルのことをもつと詳しく、もつと細かくね。」

「かしこまりました。」

そして半年間のベルのこと、今のオラリオの状況、そして彼らの目的を教えてもらった。

「…………やはり5年前に無理矢理でも、眷属にすればよかったわ……。そうすれば、私が何が何でも守ってあげたのに！」

『特に神アポロン、神イシユタル、神イケロスに対してかなり激怒していましたね。』

『……ここまで坊ちやまに対して過保護とは、思いませんでした。』

何か話しているかわからないけど、たったの半年でベルに対してこれはキツすぎじゃない？

スキルの『憧憬一途』はベルといえればベルらしいけど、ここまで急成長しすぎでしょ

う…。

へスティアが隠したがるのも納得だわ…。

あの子は嘘がつけない子。絶対に他の神からちよっかい出されるでしょうね。

でも、私がいる限りもう大丈夫。

ちよっかい出す神は、私が片っ端から送還してあげるからね！

アポロン！イケロス！今度会ったら覚えてなさい！

ゼウスもよ！

「まあ貴方たちがいたら、今回の戦争遊戯では勝利確定だけれど、黒竜討伐にはベルたち自身の強化が必要よね。だから、この戦争遊戯でベルたちを鍛えあげなければならぬ、というのは納得したわ。」

「はい、その通りでございます。」

「でも…【フレイヤ・ファミア】へ忍びこんで自滅を促したり、ギルドから愚者を引き抜いた上にあのロイマンを改変させ洗脳して、ウラノスを脅迫するのは少しやりすぎじゃない？」

「坊ちやまの完全勝利のためであり、今後のためでございます。」

「なら、仕方がないわね。」

フレイヤのところは仕方がないわ。

痲癩を起こしたり泣きわめくフレイヤがそうだったのは、ベルを『伴侶』と見定めただけど振られた結果よね。ふふふ、いい気味ね。

ロイマンが「ヘステイア・ファミア」を追い詰め、ベルを処刑すると聞いた時は頭に来たわ。

さすがの彼らもブチキレて、改変して洗脳したのは当然ね。

あの『ギルドの豚』が、どういうふうに変わったのかは見ものね。

「オラリオ連合…。ベルを中心とした複合ファミア連合ね。はあ…。冒険者になって半年もないあの子が中心となるなんて。アルフィアやザルドの嘆きが、今になってわかるわ。」

「(心中お察します。）」

本当ね…。

冒険者になって半年もないのに、何でベルが中心人物となっているのよ！

ロキの【勇者】を含む三首領も、フレイヤの【猛者】たちは何しているのよ！

あの子に全部押し付けけないでよ！

仲違いなんかしないで、協力すればあの子が台頭することはなかったのに！

「…ベルのグッズ専門店はどうなの…？」

久々に帰ったオラリオで、ちらちらと見かけるあの行列は何事かと思つたら、ベルの

グッズ専門店と聞いて驚いたわ…。

行けばよかつたわね…。

「私どもも驚いております。ここまで広がるとは予想の倍以上の成果でした。」

「まさか6つの店舗が立つくらい、オラリオ中が坊ちやまに夢中とは目を瞠るばかりです。」

ファンクラブの会長が、「ヘルメス・ファミリア」のあのエルフの娘、ローリエと聞いて驚いたわ。

そこまでベルに対して夢中と思うのは複雑だけど、ベルのスキルを考えると非常に効果大よね。

でも…。

「ねえ、グッズについて興味あるんだけど…。」

「かしこまりました。いくつかサンプルをいただいていますので提供します。」

やった。

ふふふ、後で愛でましょう。

「そうそう、神アストレア。明後日はリユーさんと坊ちやまの添い寝をしていただきます。」

「は？そ、添い寝？」

私は、ベルが深層のトラウマで眠りが浅いことから、特製ドリンク？で眠らせて女性二人と共に添い寝していることで凌げていることを聞いて、驚いた。

ベルが知らないのは、問題じゃないのかしら…。

「リユーさんのスキル効果を上げる相乗効果もありますが、いかがでしょうか？」

「そ、そうね。ベルを助けるためだもの。これも治療の一環ね。仕方がないわね。ええ、仕方がないわ。」

治療なら仕方がないわね。

5年ぶりよね、ベルを抱き枕にして寝るのは。

あの子を抱き枕にして寝ると、より一層安眠できるよね。

旅に出た後はなかなか寝つけなくて、困ってたのよね…。

【ヘスティア・ファミア】はベルを除いて、レベルが2止まりだけどどれも優秀よね。

リリルカ・アーデは【勇者】とタメはるほどの頭脳で、ライラに近いわね。

ヴェルフ・クロツゾ：【単眼の巨師】より強力な魔剣を造れるって凄くない？

しかも、壊れない魔剣に魔力爆発を促す魔法を持っているなんて…。

ヤマト・命は、輝夜と同郷でタケミカヅチ・ファミアから改宗し、万能タイプね。

サンジョウウノ・春姫も輝夜と同郷ね。名前の語呂が輝夜と似ているのは気のせいかし

ら？それに彼女の妖術はレベルブースト…非常に強力ね…。

かなり尖ったタイプが集まっているわね。

そして：団長のベルはレベル5で、メイとセバスの見立てでは既にレベル6上位に匹敵しているらしいけど、あのベルがねえ…。

転んだだけでびいびい泣いてたあの子が、たったの半年でオラリオの第一級冒険者までのし上がるなんて、誰も想像できないでしょうね。

でも、会ったベルは5年前のベルのまま、たくましく強く成長していた。

正直に言くと、惚れ直したわ。

だから、リユートの相手がベルというのは複雑すぎるわ。

あの子、戦闘しかないでしょう…。

これからは、家事などを習得してもらわないといけないわね。

コンコン

「ふあくあ。ごめん、アストレア。少し仮眠してしまつたよ。」

「リリも仮眠していました。すみません、アストレア様。」

「いえ、いいわ。早速、明日の神会について作戦を立てましょう。」

「はい、「ヘステイア・ファミリア」の完全勝利のために。」

「はい、坊ちやまのために。」

「この二人がいれば、ベルは盤石ね。」

∴7年前の大抗争で、この二人がもし解放されていたらオラリオは間違いなく終わっていたわね∴。

疑問に思ったけれど、何故彼らはこの二人を解放しなかったのかしら？

第113話 妖精劍士、改名。

よく寝られました。

「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯前までに、間に合つてよかったです。

しかし、昨日は驚くべきことが多かったですね。

シル：いえ神フレイヤが痲癩を起こして、神会が延期になったこと…。

それは私達にとつて助かったのですが、彼女は大丈夫でしょうか…？

そして、アストレア様が既にベルと5年前に会つていたこと…。

それは本当に驚きました。

しかもアストレア様を「レアお姉ちゃん」と呼んでいるとは…、ずるくないですか？

私もリ、リユーお姉ちゃんと…いえ、やめましょう。

は、恥ずかしい…。

当分は今のままでいましょう。

ベルの専属メイドのメイと専属執事セバスがいたことに驚きました。

しかし、それより驚いたのは「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の魔導

人形であり、指導教官であつたこと。

そして、彼等を解放できるのはそれぞれのファミリアの眷属…。

しかし、それぞれの眷属であった「静寂」と「暴食」は7年前に死んだはずですが、その系譜を両方持つ者がいました。

それがベルです。

彼等にああ言ったもの、正直戸惑いました。

ベルは7年前のことを知った。

私は、ベルの…家族のファミリアの人に手にかけてしまった。

それでも、ベルは私への態度は変えなかった。

彼はそういう人間だということを、知っている。

彼がいなければ、今の私はいない。

彼がいなければ、私は正義を取り戻すことができなかった。

そして彼は、私が愛する人だ…。

だからこそ、彼に私の生涯を捧げなければならない。

……ふう、いけません。

つい思いにふけてしまいました。

さて、ベルを起こしに行きますか。

「その必要はありません。おはようございます。リユーさん。」

!?メイさん…いつの間に背後に…。

レベル7上位というのは、本当だったのようですね。

「おはようございます。メイさん。」

「調子はいかがでしょう？昨日は大分お疲れだったのようですので。」

見抜かれていますね。

5日間、ろくに休んでいませんでしたから。

「いえ…かなり回復できました。」

「それはよかったです。今日から特訓ですので、身体に支障あつては困りますからね。」

…特訓？どのような特訓をするのだろうか…。

しかし、相手になるような人はいるのだろうか…。

「心配無用です。昨日貴女が会ったバーチェさんは、レベル6です。なので、相手にとっては不足ないと思いますよ。」

!?あの時のアマゾネスのメイドか…。なぜ、メイド？

それはいい。レベル6だと…。

「はい、【カーリー・ファミリア】から改宗していただきました。元副団長ですので、相手には欠かせないかと思えますよ。」

【カーリー・ファミリア】副団長だと!?

「対人戦に特化し、戦いしかない国家系ファミリアと聞いていますが…、よく改宗できたものです。」

「はい。円満にお話をさせていただき、快く改宗していただきました。」

「そうですか…。それなら胸を借りさせていただきますでしょう。」

「それはそうと、リユースさん。名前を変えたほうがいいのではないのでしょうか？」

「？ああ…。そういえばそうですね。私はギルドの要注意人物一覧に載っており、死んだことになっていましたね。うーん…。」

「名前については、坊ちやまに相談してはいかがでしょう？」

「そう…。ですね。ベルに名付けてもらうなら問題ありませんね。」

「（坊ちやまの部屋からエイナさんとカサンドラさんが出たようですね）では、坊ちやまを起こしに行きましようか？」

「え、あ、そうですね（何故こちらの考えていることがわかるのです？）」

「メイドの嗜みでございます。リユースさん。」

「…奥深いですね、メイドというものは。」

「名前を…変えるのですか…？」

「はい、ベル。私はギルドの要注意人物一覧に載っており、死んだことになっています。」

表に出るには名前を変えなければならぬのです。」

「坊ちゃまから名付けてもらうなら、問題ないかと思えます。共に深層で苦勞した仲であり、【疾風】が死んだことになった一因でもあるのです。」

「うっ…そう言われると…。」

「あの…メイさん。それはベルの責任では『ギロリ』あ…そ、そうかもしれませぬね。お、お願いできますか?」

「このメイド…怖い。」

「ミア母さんと同じ…いえそれ以上に逆らってはいけない感じがします。」

「うーん。…あつ!…いや、でも…。」

「何か思いついた名前でもあったのですか?」

「あ、はい。リユーさんは、『リユールウ・ウィーシエ』という名前を聞いたことありませんでした。どうか?」

「確か、英雄譚『アルゴノウト』に出てきたエルフの方ですね。でも、ウィーシエという名前ではなかったのでは?」

「他の童話にはなかったのですが、お祖父ちゃんの童話にありました。」

「(なるほど、神ゼウスのですか。それなら間違いありませんね)その名前に?」

「いえ、2つにわけて名前をつけるのはどうかと。リユー・リオンさんが死んだことに

なっているのなら、ルウ・リオンと名前はどうかと思いました。」

なるほど：ルウ・リオンですか。

悪くありませんね。

「なるほど、さすが坊ちやまです。ルウ・リオンですか。語呂もいいですし、悪くないと思います。双子の妹という設定なら大丈夫でしょう。」

「ルウ・リオン：ルウ・リオン。悪くありませんね。その名前をいただきます。」

「で、でもいいのですか？家族から頂いた名前なのに：。」

「ベル。私は故郷を捨てました。あそこには他民族に対して見下すような人ばかりだ。私はその人達が嫌いで故郷を捨てました。結局、私も同じでしたが：。」

「いいえ！リユー：ルウさんはヒューマンである僕を見捨てなかった！リリもヴェルフも、リヴィラの人たちも。だからルウさんは、自分を卑下しないでください：。」

「！ふふ：：18階層で言われたことをもう一回聞くとは思いませんでした。ありがとうございます。ベル。私は貴方から頂いた名前を、ルウ・リオンとして生きていきます。」

「ルウさん：。」

「ベル：。」

「ゴホン。坊ちやま、ルウさん、いい雰囲気のところすみません。」

「！！」

い、いけません。

つい…。

「ルウさん、名前も変えたなら髪の毛も元に戻し、キレイにカットいたしましょう。」

「は…？いえ、私はそのままでもいいのですが…。」

「え？リユースさんの地毛って、その色じゃないんですか？」

「ええ、そうです。ルウさん、双子なら元の地毛でなければおかしいですよ？」

「でも…。」

『坊ちやまは金髪が好みだそうですよ。』

「お願いします！元に戻しましょう！ええ、双子なら地毛でなければなりませんからね。」

（決して【劍姫】に張り合うためではありません！）

そして、私はメイさんによって金髪に戻しカットし、朝食の場で披露してもらいました。

「うわあ…。キレイです。リユース様…いえ、ルウ様。」

「金髪だったんですね！」

「それに、そのカットすごくおしやれ！耳かけショートで爽やかですね！（私もメイさんにお願しようかな？…このところ、ずっと行ってないし）」

「先輩！カッコかわいいですよ！」

「…ル、ルウさん。すごくキレイです！」

「あ、ありがとうございます。皆様…、ベル。」

うう…：恥ずかしい。

それに…：メイさん、カット技術すごいですね。

私に合わせて、キレイにカットしてくれました。

再び髪の毛を伸ばしましたら、お願いしてみましようか…？

「ほえー、すごいね、エルフくん。ここまで変わるとは。」

「そうね、改名したルウ・リオンもいいわね。ねえ、ヘスティア。二つ名考えてみない？」

「ん？あー、そうか。【疾風】は死んだことになっていたっけ。そうだなー、うーん…。」

「私は、今のルウを見て思いついたの。【薫風】というのはどうかしら？」

「【薫風】？新緑の間を吹いてくる快い風だっけ？うん、いいんじゃないかな？今のエル

フくんにはピッタリだね！」

「どうかしら、みんな？」

「「すごいと思います！」「」

【薫風】…。いいですね。

でも血に塗れた私が、いいのでしょうか…。

いえ、【疾風】はあの厄災ジャガーノートと戦い、死にました。ギルドも死亡認定されていますし…。

それに要注意人物一覧で、ベルに迷惑をかけたくないです。

非常に都合のいい話で抵抗がありますが、皆がそれを望むなら仕方ありません。その代わり、私は誓います。

今は正義を掲げ、ベルを愛する【薫風】こと、ルウ・リオンです。ベルの力になり続け、ベルを生涯愛し続けることを！

第114話 後輩、作製。

後輩、作製

昨日は大変でした。

本当に大変でした。

先輩の彼氏が戦争遊戯の「ヘスティア・ファミリア」の「白兔の脚」ということは知っていました。

その戦争遊戯が神フレイヤの痲癩で延期していたことは知っていました。

【白兔の脚】が夜前にホームへ帰ってくるということは知っていました。
ですが…。

アストレア様が既に【白兔の脚】と5年前に会っていたことは知りませんでした！

そしてアストレア様が【白兔の脚】：いえ、ベル・クラネルを溺愛していることは知りませんでした！

何ですか！

本来なら先輩の彼氏がベル・クラネルに相応しいかどうか、を判断するべきなのに、ベル・クラネルの彼女が先輩に相応しいかどうか急に急転しました。

それに…先輩って料理が壊滅的に下手だったんですね…。

あれはどうみても、弟を溺愛する姉のようでした。

私がまだアストレア様の眷属になっていない時に、他人ですが弟に対して非常に構っている姉をみたことがあります。

あれにそっくりでした。

もし…アストレア様が5年前に、ベル・クラネルを眷属にしていたらどうなっていたのでしょうか？

私の先輩になるのでしょうか？

でも…彼は14歳ですよ？私より年下ですよ。

ということは、先輩であるけど年下ということに？

…少しイメージしてみましよう。

「セシル！セシル！今日はゴブリンを10体倒したよ！」

「わー！すごいですね！先輩！よしよしよし。」

「もー！セシル！僕、一応先輩なんだからナデナデしないでー！」

「あ、すみません。アストレア様がいつもされているのを見て、つい…。」

「うう…レアお姉ちゃんったら…。でも、まあいいか。」

「いいんですか！では、遠慮なく…。」

「何やっているのかしら？セシル？」

「ひいっ！先輩、助けて下さい！」

「レ、レアお姉ちゃん！セシルだよ！神威を向けないでよ！」

「むー…セシル、これは私だよ。」

「じ、じゃあ。許可とるならいいんですか？」

「………いいわ。ただし、私がしてからね。てーい！」

「ちよ、ちよつとー！レアお姉ちゃん！」

…悪くありませんね。

結構楽しくやっていたんでしようね。

あ、でもそれじゃ先輩が救われませんね。

うーん…。複雑です。

はっ！いけません。

それに今朝の先輩を見て、驚きました。

金髪で耳掛けシヨートで、めっちゃカッコいいし女性らしいです！

メイさんはすごいですね。

後で私もカットしてもらいしよう。

あ、いけない。

あの武器について、相談しないと…。

コンコン

「ん？誰だ？」

「あの…【アストレア・ファミリア】のセシルです。ヴェルフ・クロツゾさんへ武器について相談したいことがあるのですが、今少しよろしいでしょうか？」

「ああ、いいぜ。入りな。」

「失礼します。」

私は、離れの鍛冶場へ来ている。

アストレア様から依頼された武器について、相談しにきた。

「あーセシルさんと言ったか？名前はヴェルフでいい。家名は嫌いなんだよ。」

「あ、わかりました。ヴェルフさん。わたしもセシルでいいです。」

「それで、武器について相談って何だ？」

「これです…。」

私は今、製作中の武器を打っている。

正直行き詰まっている。

なので、「ヘスティア・ファミリア」の鍛冶士【不冷】ヴェルフ・クロツゾさんに相談した。

「これは…。ふむ…なるほど。お前はまだレベル1だったな？」

「あ、はい。そうです。」

「それにしても、よくできているな。…だが、未完成のようだな。相談したいのはそこか？」

「すごい！もう見抜いた！」

「さすがオラリオの鍛冶士だ！」

「あ、はい。そうです。欠片でもいいから、質のいい大聖樹の枝があれば、何とかなるかもしれないんですが…。」

「大聖樹の枝か…。いや、足りないのはそれもあるが、もう1つ致命的に足りないのがある。」

「えっ!？」

「そ、そんな…思いつくのは全部考えたのに…。」

「お前は誰のために武器を打っているんだ？この武器は確かによくできている。だが、誰のための武器なのか見えないんだ。」

「!!」

「恐ろくだが…アストレア様に依頼されたと思うんだが、アストレア様のためなのか？いや、違うな。これはただ、武器を打っているにすぎない。…魂がないんだ。」

見抜かれた。

私はアストレア様に依頼され、ただ武器を打っていた。

それだけだった。

「それに…この形状にこの感じ…。もう、お前にはアストレア様が誰のためになのか分かっていないじゃないか？」

「はい…といつてもつい最近ですが…。」

「そうか…。まあ、何かあると思っていたが今はどうなんだ？」

「先輩のための武器を作りたいです…。」

「わだかまりはないな？」

会った当時はあった…。

けど、先輩の過去の話を聞いたり、この数日間に先輩と話をすることによって、そういうのは吹き飛んだ。

今は、先輩の力になりたい！

先輩の武器を打ちたい！

「ないです！先輩の…武器を打ちたいです！ご協力をお願いします！」

「いいぜ。といつても、これを見るとその大聖樹の枝が必要みたいだな、それがあれば打ち直しができるんだが…。」

「き、協力してくれるんですか？」

「当たり前だろうが。お前んとこの【疾風】…いや【薫風】だったな。色々と助けられたんだ。これぐらいはしとかないな。」

「あ、ありがとうございます！」

「枝があれば、すぐにできるんだがな…。」

コンコン

「ん？誰だ？」

「エイナです。ヴェルフさん、素材の在庫などについて確認したいのですが。」

「あー、朝食の時にそう言ってたな。入っていいぜ。」

「失礼します…。あら…先客でしたか。」

「は、はい。失礼しています。」

「ところで、素材の在庫といつてたな。ちょっと待ってる…。」

「セシルさん、どうしてヴェルフさんのところに？」

「はい、それは…。」

私は、先程のことをエイナさんに説明した。

この人もキレイだなあ。ギルドの受付嬢をやつてたらしい。

あのベル・クラネルについてぞつこんでしようね！

先輩…ライバルが多いですが、頑張つて下さい！

「なるほどね…大聖樹の枝ね。確か『ディアンケヒト・ファミリア』が7年前の大抗争で押収してたのを預かっていたはずだわ。」

「な、なら、それをいただくことは…。」

「うーん…でも今は戦争遊戯前だし（死の病の特効薬に必要なだから、そこまで回してくれるかな…）。」

「ですよねー…。」

そうそう、うまくいかないか…。

どこかに落ちてないかなー。

「悪いな、待たせた。これでいいか？」

「あ、はい。確認します…。はい、ありがとうございます。ただ、火炎石が少々不足ですね？やや多めに調達した方がいいですよ。私が手配します。」

「あ、悪いな。俺はそつちの方は不得手なんだ。頼んだぜ。」

「すごいですね…エイナさんは。入ったばかりなんですよね？」

「それぐらいはしないとイケないからね。」

「あ、そうだ。さつき大聖樹の枝と言ったな？ 欠片でもいいんだよな？」

「あ、はい。そうです。」

「思い出したんだがな…。確か【薫風】の使っていた木刀が大聖樹の枝を元にしたのを覚えてるんだ。【アポロン・ファミリア】戦争遊戯前にメンテナンスしたんでな。」

「せ、先輩が!？」

「あー、でも深層へ潜る前に破壊されたと言ってたな。それがあればいいんだがな…。」

「…もしかして。あの時、リヴィラのボールスさんが持ってきたものが、それかもしれないません。」

「何だって!」「本当ですか!」

「ええ、ただどあれはギルドの保管庫にあるので…。私が行ってももらえるかどうかは…。」

「では、私が取ってまいりましょうか？」

「うおっ!」「うわっ!」「きゃあっ!」

いきなり、セバスさんが現れました!

気配もなく音もなく…すごく強いんだろうなあ…。

「失礼しました。少々小耳に挟みましたので。なるほど……これがルウ嬢の武器となるものですか。」

「あ、はい。そうです。」

「ふむ。悪くありませんね。そこらの武器を使うよりはマシかもしれません。それに、ルウ嬢の元武器の欠片を使えば彼女も思い入れがあるでしょう。」

「おい…、何をするつもりなんだ？」

「ギルドへ忍び込んで、その武器を回収します。エイナ嬢、その武器はどこにあるかはわかりますでしょうか？」

「あ、はい。保管した担当者は私ですので、場所は……のところです。」

「なるほど。場所がわかれば容易い話です。1時間お待ち下さい。では。」

「「……………」」

そして、セバスさんは音もなくスツと姿を消した…。

あの人、どのくらい強いのか…？恐らく先輩より上かも。

「おい、いいのか…？あいつ、本気でギルドへ忍びこむぞ。」

「ヴェルフさん。私はもう達観しました。そうでなきゃやってられません（ギルド長のあの様子をみたら誰だってそうなるよ！セバスさんなら、ギルドへ忍び込むなんて朝飯前なんだろうなあ…）」

「そ、そうか……。まあ、あいつらなら簡単だろうな。」

「い、いいんですか？」

「セシルさん、彼等は規格外なの。そう思ったほうがいいよ。」

「そ、そうですか……。」

「とつてまいりました。」

「「早っ！」」

早くない!? まだ10分も経ってないよ!

「皆様、仕事でお忙しいようですので容易かったです。忍びこんでそこらの木刀とすり替えてきました。」

「いつの間に……。いや、もういいや。お前らは何でもありだからな。」

「お褒めに預かり恐悦至極です。」

(褒めてねえよ!)

「さて、エイナ嬢。これで間違いありませんでしょうか？」

「本当に忍び込んだのですね……。うん、確かに私が確認したものです。」

「どれどれ……。ああ、確かに【薫風】の使っていたものだ。セシル、これで問題ないな？」

「あ、はい!……ええ! これです! これがあれば完成できます!」

「よっしゃ! さて今から打ち直しをするか。セシル、お前がやれ。お前が【薫風】のため

の武器を完成させるんだ。俺もフォローする。」

「あ、ありがとうございます！よろしくお願いします！」

「よかったですね！セシルさん。あ、私は在庫のまとめと火炎石の調達をしますね。」

「ああ、頼んだ。」

（ルウ嬢の武器はどうなるかと思いましたが、何とかなりそうですね。）

先輩。貴女のための武器を打ちます。

私はまだレベル1ですが、先輩のために力になりたい！

貴女を助けるための、ベル・クラネルを助けるために武器を打ちます！

第115話 妖精剣士、稽古。

神ヘステイアとアストレア様は、神会へ行きました。

神フレイヤがようやく復帰したとの連絡が入ったからです。

昨夜遅くまでセバスさんとメイさん、あの小人族と話し合っていました。

何らかの作戦を練っていたのでしょうか。

そのあたりは任せましょう。

そして、私はベルと一緒に早朝特訓をクノツソスでやっています。

ベルは…。

「はい、足元がお留守ですよ、坊ちやま。いけませんな。」

「うわあつ！ゲホッ！ガハッ！」

セバスさんに足払いされ、腹に足蹴されました。

ああ……その衝撃でぶっ飛ばされています。

……ベルは決して弱くありません。

先程私と模擬戦して、終始押されて負けました…。

ベルにない経験や勘などで切り抜けようとしたのですが、それも読まれ負けてしまいま

した。

もう追いつかれましたか…。

しかし、それを見てもセバスさんやメイさんは圧倒的に強いです。

アルフィアより速く、アルフィアより苛烈な攻撃をします。

魔法がないだけですが、それを上回るほどの連続攻撃をします。

ふむ…なるほど。参考になりますね。

さて、私も…。

「改めて…初めまして。〔ハスティア・ファミリア〕団員のバーチェ・カリフです…。」

「あ、それはご丁寧に。〔アストレア・ファミリア〕…ルウ・リオンです。」

「……？団長ではない…なのでしょうか？」

「(そういうえばそうですね。セシルと二人だけですね。セリスを団長にするにはレベル

が足りないですし…) ぎ、暫定団長です。」

「暫定ですか…。貴女と…セシルさんの二人だけなら団長でいい…ではないでしょうか？」

か？」

「そう…ですね。失礼しました。〔アストレア・ファミリア〕団長のルウ・リオンです(ア

リーゼ、すみません)。」

「了解した。では…やり合いますようか。」

「はい。胸を借りさせていただきます。」

そして、私はバーチエさんとやり合いました。

「…レベル5になつたばかりと思えない…ですね。」

「〔麗傑〕と違い、超接近型タイプですか。素手で攻撃してきますが、どれも鋭く速い！
くつ…そちらもなかなかやりますね。」

私の借り物の木刀で速く鋭く振つていますが、軽くないしています。

強い…でもそうでなくては、あの〔劍姫〕に勝てない！

「はあああああつ！」

「！（更に速くなるだつ！これは手加減できんな…本気で行くか）まだ、甘い！」

これもいなすだつ！

このアマゾネス、強い！

「何つ！ぐつ！ガハツ！」

「…なかなかや…りますね。」

気になつたのですが…。

「ゲホツ、ゲホツ…！あの…無理して敬語を使わなくてもいいのですが…。」

「…そうしないと、メイド長から「私がどうしましたか？」いえ…何でもありません。」

（何となく察しました…。）

気配もなくスツと現れないで欲しい…。

心臓に悪いです。

「ところで、貴女たち手ぬるいんです。」

「は?」「いや、でも…。」

「戦争遊戯の相手はレベル6以上ですよ?そんなお遊戯をやつて勝てると思つていますか?」

「し、しかし怪我をすると戦争遊戯に影響が…。」

「あちらに、アミッドさんとカサンドラさん、そしてナーザさんがおります。問題はございませぬ。」

しかし、私と彼女は昨日で知り合ったばかりなのですが…。

「仕方がありません。ルウさん、私と手合いしましょう。」

(死ぬな…これは。)

「は、はあ…。」

「貴女が本気を出さないなら…、坊ちやまどの思い出を暴露「やらせていただきます!」いい返事です。さあ、かかつてらっしゃい。」

(同情する…。気をしっかり持つてくれ…。)

「(レベル7上位の相手は…やったことないですね。あのアルフィアでも下位とは…ど

のくらいでしょうか）行きます！」

そして、メイさんに全ての斬撃を軽いなされた上で腹に掌底を一発打ち込まれて、私は数秒で地に伏せられた。

「ゲホッ！ガハッ！ぐうつ…。」

「ふむ…レベル5上位ぐらいですね。バーチエさん、貴女から見てくださいか？」

「そうですね…速さだけならレベル6に達するかもしれませんが。」

「そのあたりですね。ですが、足りません。ルウさん、貴女は技の多彩さや駆け引きがあります、私は数百年以上指導教官をやっておりますので、それは貴女より遥かに上です。」

「ぐつ…。」

「【静寂】が弱体化したとはいえ、レベル3が群がって倒したのは奇跡とiiいようがありません。私はレベル7上位と言いましたが、身体能力だけならレベル8に届くでしょう。」

「なつ…。」

「ルウさん、貴女は坊ちやまを愛しているとii言いましたね？所詮はその程度ですか？」

「!!!舐めないでいただきたいっ！行きます！」

「そうではなくては困ります。とりあえず死の3歩手前まで行きますよ？」

「…え？死の3歩手前？」

私は、何回も打ちのめされて何回も【悲観者】に治療され、アリーゼたちに何回も会う羽目になった。

しかし、あちらは何も語らず、ただ同情する目でじっと見つめられていた。
何か言ってほしい…、つらいです…。

「ルウさん、そのままでもいいです。今回の特訓が終わったらアストレア様に更新してもらうように。ステータスが跳ね上がっているかもしれないません。」

「…っ…っ…っ。」

「ほら、遅いですよ。「がっ！まだまだ！」はい、駄目です。「があっ！」…坊ちやまへの愛はその程度で「はああああっ！」気合だけでは駄目です。「うあっ！」」

余裕でいなされ、散々やられました…。

これが…レベル7上位？強すぎる…。

第116話 妖精劍士、教示。

だが、「猛者」と比べたら…。

「そうですね。今の【猛者】はレベル8寸前ですね。ランクアップ可能ですがステータスを限界まで上げているのか…または偉業が足りないのか…。少なくとも私よりは上です。ね。」

「（何で考えていることがわかるんですか）…っ…っ…っ。」

「メイドの嗜みです。ほら、足元がお留守ですよ。…：あら？よく避けましたね。」

「はあはあはあ…。」

「ルウさん、魔法を使いなさい。私相手に容赦はいりません。」

「で、ですが…「坊ちやまの思い出を…」わかりました！知りませんよ！」

【今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ——星屑の光を宿し敵を討て】

【ルミノス・ウインド】！

「手ぬるいですね。」

バツ！スツ！スツ！スツ！

「つ、突っ込んできた…？」「はい、お邪魔しますね。」ガハッ！あうっ…。」

そ、そんな…、私の「ルミノス・ウインド」へ真正面から突っ込んでくる人はいなかった…。

アルフィアでもしなかった…。いえ、あの人なら無効化するからその必要はないでしょうね…。

しかも無数の大光玉を全て避けて、私の懐に入ってくるなんて…。

それにランクアップした上で発展アビリティの「魔導」を習得したことにより、レベル4の時より遥かに大光球が大きくそして多く、更に速かったはずだ！

なのに、何故真正面から入り全部避けられる!?

「坊ちやまの記憶で、貴女の魔法を何回も見ています。対策などいくらでも練れます。貴女がランクアップしようがしまいが、パターンさえわかればどうつてことはありません。」

「…：…そんな…：ベルには数回しか見せてないはず…：。」

「ルウさん。貴女は、魔法とスキルを完全に使いこなせていません。」

「!!」

「貴女は覚えていますでしょうか？深層でのジャガーノートとの最終戦で、その魔法を

足場にして『空中機動』と『高速跳躍』をして倒したのでしょうか？」

…あれは無我夢中だった。

やれと言われても再びやれるかわからない…。

それに、身体への負担が思ったより大きい。

「そして、『精神装填』と『疾風奮迅』と『白兔純愛』、『魔導』と『魔防』があれば、あの程度の負担軽減と、更なる速度や攻撃上昇が可能のはずです。」

そんなの…すぐにできるわけが…。

「坊ちやまの意中の『劍姫』に追いつくには、それが一番の早道です。」

ぐっ…、あの女には負けたくない！

戦闘でも、ベルへの愛にも！

「わかりました…。お相手願えますか…？」

「構いませんよ。貴女が精神疲弊するまで。」

そして私は新たな戦闘技術の習得のため、精神疲弊するまで続いた…。確かにこれを使いこなせば、高レベルの相手でも倒せるでしょう。

複数だろうが単体だろうが、幅広い戦い方が可能だ。

18階層の時の黒いゴライアスでも倒せるでしょう。

完全に消し去ることはできませんが、大幅に削れるはずですよ。

そしてフェイントも混ぜれば、相手が達人であればあるほどより翻弄させることが、可能でしょう。

ですが、その分かなりの負担がかかります。

しかし【白兔純愛】の効果の1つ、『精癒』で軽減可能です。

それをスキルの1つである【精神装填】で、脚への『力』を上昇した上に身体への負担が軽減します。

そして、【疾風奮迅】で更に速度上昇し、攻撃力も上がります。

さらに【白兔純愛】の効果の1つ『剣士』で攻撃力上昇します。

その時が夜であれば、【妖精星唱】で増幅します。

大光球の間を飛び交えば更に上昇します。

何回も飛び交えば、更に増幅します。

何ですか…この無限ループみたいな技は…。

タイミングや魔法のコントロールが上手く使いこなせなければ、不可能です。

一步間違えば、大怪我するかもしれません…いえ、既にしました。

何回も【悲観者】や【戦場の聖女】に、治療してもらいました。

四肢がちぎれるような感じでした。

それでも、メイさんは的確な指摘点をあげて、アドバイスをしてくれました。

『私はもう知りません。ええ、知りませんとも。』

『あなた…投げやりすぎでしょ。まあ、気持ちはわかるけど。あのメイド…怖いね。はっ！（まさか、ポーションを薄めてベルに売ったこともバレている!?!）』

『エリスイス? どうしました? ほら、手が止まっていますよ。』

『あ、ああ。すまない(絶対にバレているよね? あっ、今こつちをみて領いた…怖い!)。』

『あの…団長? 何か震えているようですが…。』

『いや…何でもないよ(絶対に、あのメイドと執事には逆らってはいけない!)。』

第117話 処女神、出陣。

昨夜遅くまで話し合ったのに、身体も頭も絶好調だ。

寝る前に、ベル君がいつも飲んでいる特製ドリンクを飲んだけど、アレが効いたかな？

これで、万全の状態で戦える！

…まあ、実際に戦うのベルくんたちだけだね。

「おはよう！みんな。」

「「おはようございませう！ヘステイア様！」」

うーん、いつの間にか大所帯になったなあ。

ベルくんを眷属にしてから、半年かあ…。

感慨深いなあ…。

女性比率が高いのが気になるけど、気にしないでおこう。

「どうしました？神様？」

「ああ、何でもないよ。今日はフレイヤが復帰してくるから、やっと進められるなあつて。」

「そうですか…。復帰？え？フレイヤ様に何かあったんですか？」

（あ、ベル君は知らないことになってたんだ。しまった！）

「ベル様、神フレイヤは体調不良のため寝込んでいたそうです。」

「ええっ！そんなことになっていたの？お、お見舞いに行かなくちゃ…。」

「こーら、ベル。相手は敵対派閥よ。気にしちや駄目よ。大したことはないみたいだから大丈夫よ。」

「そ、そうなの？レアお姉ちゃん…。じゃあ、大丈夫かな。」

「坊ちやま。大丈夫のようです。私が忍び込んだ時に確認しましたが、単に寝込んでいただけでした。」

「セバスが言うなら大丈夫だね！」

（セバスくんへの信頼が厚すぎるね…。）

（やはり、5年前に眷属にするべきだったわ…。）

「そ、そういや。アストレア、体調はどうだい？」

「ええ、ヘスティア。あのドリンクを飲んだ後、ぐっすりと寝られたわ。」

「リリも初めて飲みましたが、結構効きますね。アレは。」

「そうだね！メイの特製ドリンクはよく効くね。ありがとう！メイ。」

「いえいえ。坊ちやまのお役に立てて嬉しいです。」

メイくんへの信頼も厚いなあ…。

そりや、いないと思つていた家族がいたら嬉しいよね。

「さて、朝食を食べたらボクとアストレアは神会へ行つてくるよ。」

「ええ。そうね。さて、何柱送還させようかしら…。」

「……キミはホームにいてもいいんだよ？」

「冗談よ。」

「では、神アストレア。後ろに隠した剣をお預かりいたします。」

「…もう！言わないで頂戴、セバス。」

『センパイ…、アストレア様のイメージが昨日と今日で崩れました…。』

『セシル、私もです。ベルが関わるところなるとは思いませんでした…。』

アストレアがこうなるとは…。

ベルくん、恐るべしだね。

「じゃあ、行つてくるよ！」

「ハスティア様、段取り通りをお願いいたします！アストレア様もハスティア様のフオーをお願ひいたします。」

「任せて頂戴！」

さて、出陣といきますか！

「ようやく神会か。」

「4日ぶりか。アポロンの時より短かったな。」

「あの時はヘステイアだったけど、今回はフレイヤ様とは思わなかったな。」

「その原因が、酒と癩癩とはウケる。」

あー、神々が好き勝手言っているよ…。

「ヘステイア、調子はどう？…あら、アストレア。オラリオに来ていたのね。」

あ、ヘファイストスだ。

「ええ、ヘファイストス。ちよつと、眷属絡みでね。」

「…そう。ヘステイアに味方するのね？」

「ええ、そうよ。味方しない理由なんて皆無よ。」

「…そうね。彼等が気の毒に見えてきたんだけど…。」

ボクもそう思うよ…。

たったの数日で、ここまで準備を進めていたなんて…。

さすが、最強と最恐の指導教官…。

でも、やりすぎじゃないかい？

「よー！ドチビ、覚悟はできてるかー？」

げ、ロキだ。

「ふん、当然さ。覚悟をするのはキミじゃないのかい？」

「何やとー！……つて、こんなことを毎回やつとる場合じゃあらへんわ。アストレア、ドチビんところにつくんか？」

「ええ、当然よ。ロキ、昨日で【勇者】の発言があつたけど、別に何ともなかつたわよ。おかげで昔親しくしていた子と会えたし。」

…アストレア。笑顔が怖いよ。

ほら、みんなドン引きしているし。

「そ、そうなん？…なあ、何でそんな喧嘩腰なん？ウチ、何か悪いことしとらんよな？」

「ふふふ、気のせいじゃない？」

「……まあ、ええわ。それより、色ボケはまだ来とらん？」

「え？またなのかい？」

えー？またかよ。

「いや、さつき使いをよこしたら来るそうだよ。やあ、アストレア。久しぶりだね。」

「ええ、久しぶりね。ヘルメス…。」

「ア、アストレア…。笑顔が怖いぜ…。」

「ふふふ、身に覚えがあるんじゃない？ねえ、ヘルメス？」

「……………あの、オレは君に何かしてないぜ？」

「ええ、私の眷属について情報もらったことは感謝しているわ。でもそれとは別にね？」

「別…？」

あー、ベルくんのことかあ…。

今、ここで揉め事は勘弁してほしいんだけど…。

ザワ…ザワ…

「待たせたわね…（ああ、お尻が痛い…。）」

あ、フレイヤだ。ようやく来たんだね。

あれ…？何かおかしくない…？

うーん？

第118話 処女神、提案。

フレイヤがようやく来て、柱にもたれた。

「よし、じゃあ始めようか。…あれ、フレイヤ様？席につかれてはどうです？」

「ここでいいわ。」

「え？何でや。話しづらいわ。いいから、座れや。」

「ここでいいわ。」

「いや、でもそんなに遠く離れてたら…。」

「ここでいいわ。」

「「……………」」

何で立ったままなんだよ！

「ここ最近のフレイヤ、おかしいよ！」

あー、もー進まない!!

……………仕方がない。

「じゃあ、ボクらがそっちへ行くよ。それでいいだろ？」

「ええ、悪いわね。」

「ええー…何や。そりや。まあ、ええわ。」

「何か締まらないなあ…。」

ホントだよ！

そして、フレイヤが立っている柱を端にして進めた。

「えーじやあ仲介人のオレ、ヘルメスが務めさせていただきます。〔ヘスティア・ファミリア〕、〔フレイヤ・ファミリア〕・〔ロキ・ファミリア〕の戦争遊戯の段取りを進めさせていただきます。では、まずお互いの要求を述べてくれないかい？」

「私からの要求はベル、ただ一人。勝負形式は何でもいいわ。」

「ウチからの要求もベル・クラネルや。勝負形式はドチビ、お前が決めえや。」

「ボクからの要求は戦争遊戯に勝った後に言うよ。別にいいだろ？」

「ふーん、勝つ自信があるみたいね。いいわよ。そちらはいくつもファミリアで同盟を結んでもいいわよ。」

「あん？舐めとんのか？まあ、ええわ。ドチビんところつるむファミリアがあるとなええんがやなー、ヒヒヒ。つくファミリアあるなら、この場で声あげーや。」

「私はヘスティアにつくわ。」

「私もだ。」「俺もだ。」

「…まあ、予想はついてたわ…。」

「…儂もつく。」「ふんっ！儂もつくわ！感謝しろよ！」

「ちよ、ちよい待ち…。ゴブニユもディアンケヒトもかい!？」

「私は中立を取るわ（実際はヘステシアのところだけどね）。」

「『私たちも中立を取ります（実際は『ヘステシア・ファミリア』だけどここでは言わないわ。計画通りに）。』」

デメテル…いや、女神連合かい…。

聞いた時は驚いたよ。

まあ、ベル君の出生について知ったらデメテルは黙っていられない性格だものね…。

ちよつと複雑だよ。

「え？コレ、俺も言わないとダメなん？」

「じゃ、じゃあフレイヤ様に…「いらないわ」…デスヨネー。」

「俺は…ロキに「いらんわ。ニヨルズ、お前んとこはレベル2が最高レベルやん。」…だよな。」

「ああ、私はもちろんヘステシアにつくわ。」

「…ああ、アストレア。いたのね、久しぶりね。」

「ええ、久しぶりね。フレイヤ。」

「…ねえ、何でそんなに喧嘩腰なの？私、貴女に何かしたのかしら？」

「ふふふ、身に覚えあるんじゃない？」

（リユー絡みかしら？でも、これは違うみたい？何かしら？）

『アストレア、少しは抑えてくれよ。』

『…仕方がないわね。』

ボクもアストレアのことをいえないけど、ベル君のこととなるとアストレアは暴走しがちなものなあ。

困った子だよ…。

「あー、じゃあ次は勝負形式だけど、何か案あるかい？」

「ヘステイアに任すわ。どんな条件だろうと私たちは勝つわ。」

「ウチもやー。ドチビが決めたらええわ。」

「じゃあ、ヘステイア…。」

「その前に、ボクから案を出したいけどいいかい？」

「あら、何かしら？降伏かしら？」

「何やー降伏するんかー？そんなの興ぎめやん。」

しないよー！

勝利確定？なのに何で降伏しなきゃいけないんだい！

「せっかく、ここに今の最強派閥が2ついるんだ。趣向を凝らしてみないかい？」

「趣向？」

「そうさ、オラリオ最強を決める戦争遊戯になるんだろ？それなりに演出をしてもいいんじゃないかい？」

「フレイヤ、ロキ。貴女たちは数年いがみ合っていたんでしょ？それを単なる戦争遊戯で終わらせるのは、もったいないと私は思うんだけど？」

「ふーん、面白いじゃない。話してみてくれない？それで決めるわ（何か企んでいそうだけど、関係ないわ）。」

「ウチもや。というかレベル差あるもんなー、ハンデくらいはくれたるわ（ドチビがどんな案だしてくるか楽しみやわー）。」

よし！第一関門突破！

「聞き入れてくれて嬉しいよ。それは…」

ボクは昨夜みんなと話し合った内容を伝えた。

-
- ・ 明日、記者会見で勝負形式を決める。
 - ・ その場を『神の鏡』を使って世界へ公開する。
 - ・ 勝負形式はくじ引きで決める。
 - ・ ただし、各ファミリアの団長がポーカーで勝負して勝った人が引く。

・勝負形式がどのような形であろうが、気絶・精神疲弊・死の5歩手前のダメージを受けたら強制アウトする魔道具を着用。

・「ヘスティア・ファミリア」は戦争遊戯中でも、全員仮面とフードをかぶって参加する。

・各ファミリアへ飛び入り自由参加。人数は問わない。

「という感じだよ。どうかな？（間違つてないよね…?）」

第二関門、突破！

「…記者会見？神の鏡を使って世界へ公開？」

「くじ引きはウチらが決めるのではなく、団長同士のポーカーで決めて勝者が引くん？」

「……なるほど。確かに面白い趣向だな（これはヘスティアじゃないな、リリちゃんでもない。セバスとメイカ…?いや彼等で話し合つた結果か…。悪くないが、ヘスティアの有利な点がないのが引つかかるんだが。）」

「ヘスティア…聞いてもいいかしら？」「?いいよ。」

「この趣向は確かに面白いわ。異存はないけど…、貴女が有利な点がないんだけど？」

「あるじゃないか？全員仮面とフードをかぶって参加すると。」

「こんなの、有利な内には入らんわ！」

「何だよ。ロキは反対なのかい？」

「反対どころが、ウチは問題ないんや。ドチビに有利な点があらへんのが気になるんや！」

あれー？

逆に気を使われているー？

「貴女たちが異存ないなら、この趣向を進めてもいいんじゃない？」

「…そうね（まあ、どんな手を使ってもミアとオツタルがいる限り、問題ないけどね）。」
「ウチは別に構わんけどなー（妙に引つかかるんや…）。コレ、ドチビの案とちやうな。あの小人族の案やろか？」

「…お二人さんに異存ないなら、この趣向で進んでもいいかい？場は「ヘルメス・ファミリア」が整えよう。そうだな…明日の朝にバベルの広場あたりでどうだい？」

「どこでもいいわ。」

「ウチもやー。」

「異存ないよ。」

よしー！

第三関門突破できた！

ふー、一仕事終えたよ。

後は明日かな…。

第119話 猛者、渋々／ 勇者、動揺 / 白兔、朦朧。



「フレイヤ・ファミア」ホーム

「すみません…。もう一度説明してもらえませんか？」

「明日記者会見をして、貴方たちがポーカーでくじを引く人を決めて、その人が戦争遊戯の形式を決めるの。」

何故…そんな真似をしなければならないのだ？

そもそも、奴らが決めればいいのではないか。

「…欠席して奴らへ譲る手はないのでしょうか？」

「…その手があったわね。けど、もう決めたことよ。諦めてちょうだい。」

「…ミア。」「諦めな。」「…分かりました。」

何で、俺がそんなことを…。

せつかく本調子に戻ったというのに…。

(こんな回りくどいことをするなんてね。アイツらの考えは相変わらず読めないよ。)

「さてオツタル、稽古だ。ついてきな。」

「ああ…そうだな（明日一日我慢するだけだ。ここ数日と比べればマシだろう）」

フレイヤ様の癩癩に振り回された時と比べれば、どうってことはないだろう。

「…何か失礼なことを言われているような気がするわ。」

「知るか。アンタはこの部屋にずっと閉じこもっていない。坊主のグッズがあるだろう？」

「本物がいいんだけど…、まあ、いいわ。そのうち手に入るのだから。さて、昨日はベルの伝記をどこまで読んだかしら？」

フレイヤ様はベルのぬいぐるみを抱きしめながら、本を読もうとしていた…。

「…ミア、いいのか？あれは。」

「あちこちうろつきまわるよりはマシだよ。ほっときな。」

…複雑な気分だ。

ベルのグッズでフレイヤ様の機嫌が直るのはいいが、我らの立場がないのが気になるんだが。

今更だな…。

「ああ、そうだわ。ミア、オツタル。稽古が終わったら更新するので、後で来てちょうだい。」

「…十何年ぶりだろうね。まあ、大して上がってないだろうね。」

に、やらなければならぬんだい？彼に譲るよ。」

「そうだな、そんな茶番をせずともベル・クラネルに譲ればいいのではないか。」

「いやー、それがな。他の神どもがノリにノツてな。やらざるを得なくなつたんや。…まあ、ウチも見たいんだけどな。」

「はあ…。まあ、こちらとしてはメリットもデメリットもないし…メリット?。」

「どうしたんじゃ、フィン?。」

「神の鏡…記者会見…ポーカー…。これが狙いなのか?いや、それなら僕にもメリットがあるか…。」

公開させるのが目的なのか?何のために?

「フィン?何かわかつたのか?。」

「ああ…薄つすらとだけどね。…彼らとしては公開させるのが目的じゃないかと。」

「公開…じゃと?。」

「そうだよ。僕らがズルをしないかと…いやそれは意味がないか。それをして無駄だとあの子はわかつているはずだ。」

世界に公開させて何をするつもりなんだ?

単に同情を集めるだけなのか?

いや、それはない。同情を集めても結果的には戦争遊戯で決めることだから。

または単に顔や知名度を上げたいだけなのか？

いや、それはない。むしろ隠す方だ。

あの子はクノツソスでも、ベル・クラネルを前線へ立たせないように自分を生贄に出したくらいだ。

出さざるを得ない何かがあるのか？

一体、何が狙いなんだ？

「あ、それとな…。フィン、昨日アストレアに言ったやろ？何かなあ、アストレアが喧嘩腰で威嚇してきたんや。」

「え？」「フィン…、お前は何を言ったんだ？」

いや…別に何かしなことは言っていないはず。

「今の『ヘスティア・ファミリア』は何かおかしい、と言っただけだよ。」

「…それだけか？それだけで、神アストレアを怒らせる要因でもあったのか？」

「後はなあ、あの優男や色ボケに対しても威嚇しておったわ。いつものアストレアとちやうわ。」

神ヘルメスや神フレイヤにも？

確かに…、神アストレアらしくないな。

「神アストレア、いや『アストレア・ファミリア』はせめて敵にはしたくなかったのだが

な…。」

「この際、仕方がなからう…。」

「ロキ…他に何か言つてたかい?」

「ん? あー、そうや。昔親しくしていた子と会えたと言つとつたわ。」

親しくしていた子? アストレアがオラリオ外にいた時に?

…まさか、ベル・クラネルではないだらうね?

いや、彼かもしれない。

だとすると、昨日の僕の発言は…。

「どうしたんじや、フィン? 頭抱えおつて。」

「神アストレアが、怒る理由がわかったかもしれない…。」

「何だと?」「何やと?」

僕の考えを彼らへ伝えた。

「…またあの少年か。敵に回すところなるのか…。」

「あの若造、本当にウチへ入れるべきじやつたかのう…。」

「そやろ? 本当に何で、ウチに入らんかつたんや!」

「昨日ああいうことを言うべきではなかつたよ…。」

もし、神アストレアが5年前にベル・クラネルと会っていたとしたら…。

親しくしていた子という程だから、それなりの仲ということとわかる。

そして昨日の僕の発言は、ベル・クラネルをけなすのと同然ということになる。

彼の今までの経緯を聞いたとしたら、神ヘルメスや神フレイヤに喧嘩腰になるのもわかる。

余計なことを言ってしまったな…。

「いずれにしろ…【アストレア・ファミリア】は神ヘステイア側に回るのは確実だったと思うよ。それが早いか遅いかだけで。」

「まあ、そうだな。【疾風】があちら側にいる限りな。」

「アイズたんには聞かせられんなー、フィン。」

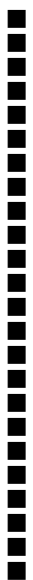
「そうだね。安心して寝られないよ。」

「うちの若いもんどもは、もうあの若造の話ばかりじゃぞ。あのベートもじゃ。」

彼を敵に回すと、こうなるのか…？

本当に戦争遊戯を仕掛けるんじゃないやなかった。

「「はあ…。」」



「【ヘステイア・ファミリア】ホーム」

ぼくは、めいのとくせいどりんくをのんだ。

そして、かみしやまからはなしを、きいた。

「ふえ……？あす……きしやかいけん……？」

「うん、そうだよ。……ベル君、大丈夫かい？」

「だいじよぶでしゆ……。きしやかいけんてなにやるんでしゆか……？」

（これ大丈夫かい……？ますます幼児退行してないかい？）

「ヘステイア様。すみませんが、坊ちやまはもう寝かせた方がいいかと。明日の朝に説明されたほうがよろしいと思います。」

「メイと同意見です。坊ちやまの性格上、緊張して寝られないと思います。」

「あーそうだなー。うん、ベル君。明日の朝に説明するからね？」

「あい、かみしやまー。」

「ぐはあ！（何だい！この可愛い生き物は………尊い。）」

あれー？かみしやまがちはいてるー？

だいじよぶー？

「へ、ヘステイア様！大丈夫ですか？」

「命嬢、神ヘステイアの介抱をお願いします。」

「は、はい。」

みことさーん、よろしくー。

「皆様方、いつものお願ひしますね。」

「「かしまりました!」」

あ、みんなだー。

レアおねーちゃんもルウさんもいるー。

「あ、あのアストレア様…。ほ、本当に入るのですか…? (あの時の光景は幻覚ではなかった…。本当に毒を飲んでいたのですね…)」

「嫌ならいいわよ。リユー…いえルウ。私は、ベルが9歳の時に毎日一緒に入ってたから。」

「「毎日!」」

「い、嫌とは言つてません…。そ、その…心の準備が…。」

「ルウさん、ベルくんはほらこの通りですから、大丈夫ですよ。」

「女は度胸ですよ、ルウ様!」

「何で、貴女たちは、そんなに冷静なのですか!」

「「慣れました。」」

あうー? なにー?

けんかー?

非常に惜しいところであった、とのこと。
メイ曰く「神の天然ジゴロに対しては、さすがに難しいですね。」とのことであった。

第120話 旅神、準備。

ふう……。記者会見の準備はこんなものか。

何とか間に合ってよかったよ。

「あの……ヘルメス様。」

「どうした、アスファイ。」

「その……今回の記者会見って、やる必要があるのでしょうか？」

「んー、今までなかったことだしな。それに、これは恐らく彼らの案だね。何かあるから記者会見をする必要があるんだろうね。その何かが気になるんだけどな。」

すごく気になる。

メイとセバスはともかく、ベルくんに対して過保護なヘステイアやリリちゃんやんが公開を認めるとは、何かがあるんだろうな。

「私は、……ここまでやるのか？と思うんですが……。」

「……わからない（ローリエのこともあるし）。それに……。」

「それに？」

「アストレアが、何故か俺に対して敵愾心持っているんだ……。」

「ヘルメス様！何をしたんですか！いえ、何かをしたに間違いありません！今すぐに謝って下さい！早く！」

「いや、それが本当に心当たりがないんだよ…。しかも、俺だけじゃない。ロキにもフレイヤ様にも威嚇してたんだ。いつもの彼女じゃないんだ。」

「私…すごく嫌な予感がするんですが。まさか、ベル・クラネル関連ではないでしょうね？」

「……うーん。アストレアがベルくんに会ったことはないはずなんだけどな……。」

あんなアストレア、初めて見るなあ…。

ベルくん関連だとしたら、何故アストレアが怒るんだ？

リユーチちゃんならわかるんだけど。

「それは、まあ後でもいい。準備はどうだ？」

「いつでも始められます…。突貫作業は本当に勘弁して下さいよ…。」

「ははは。悪い悪い。戦争遊戯まで時間あるから、それまでのんびりしたらいいさ。」

「その後は…？」

「さあね。戦争遊戯の結果次第かな。フレイヤ様が力押しで勝つか、ロキが策を弄して勝つか、ヘスティアが大逆転で勝つか、だな。」

「……彼らがいでは無理なのでしょうか？」

「いくらセバスとメイが強かったっても、勝負形式次第で負けることもあるさ。」
そうさ。もし一対一の勝負形式なら、ベルくんは勝ち目はほぼゼロ。

セバスもメイも手出しできないはずだ。

「いずれにしろ、今日の記者会見次第さ。」

「各主神、各団長への会見……。団長同士によるポーカー戦……。勝者が勝負形式のくじ引きですか……。回りくどくないですか？」

「俺もそう思う。ただ、絶対に何かの狙いがあつてそうしていると思うんだ。」

「狙い……ですか？」

「そうさ。神の鏡を使うことを前提にするというのは、世界へ公開することを意味するんだ。そこに何かの狙いがあると俺は見ている。……その狙いが、全くわからないんだけどね。」

「【猛者】と【勇者】は、ベル・クラネルに譲ると思いますが……。」

「そうだね。でも、神会で決めたことだ。茶番でも一応付き合ってもらわないとね、最強派閥の面子もあるし。」

ああ、本当に茶番だ。

けど、その茶番は絶対にただの茶番ではないはずだ。

何しろあの【最強侍従】と【最恐執事】、そして【勇者】とタメはれるリリちゃんが考

え抜いたものだからね。

絶対に何かの狙いがあるはずなんだ。

そろそろ時間だな。

役者も揃ったし…。

チラリ

「うーん、天気日和ってやつだね！」

「ええ、そうね。」

「ホンマにのん気な奴らや…。」

「オツタル、不満そうだね。」

「…五月蠅い（何で俺がこんなことを）。」

「あうあう…（どうして…今朝聞いたばかりなのに…、心の準備ができてないよう…。）」

三者三様だな…。

さて…頃合いかな。

「それじゃあ、ウラノス、『力』の行使の許可を。」

【一許可する。】

ギルド本部の方角より、重々しく響き渡る神威のこもった宣言が届いたと同時に。

オラリオ中にいる神々が、一斉に指に弾き鳴らし円形の窓の『鏡』が出た。
よし、『神の鏡』を起動したな。

「レディーズ、アンド、ジェントルメン！ 只今より、『フレイヤ・ファミリア』VS『ロキ・ファミリア』VS『ヘステイア・ファミリア』の戦争遊戯の記者会見を始めます！
司会は、このヘルメスが務めさせていただきます！ よろしくー！」

ワアアアアアア！

「まず、各主神の挨拶から始めます！ 皆様、どうぞー！」

「何があっても私達が勝つ、それだけよ。」

「ウチらが勝つ。それだけや。」

「えーと…ボ、ボクらが勝つぞー！」

…ヘステイア。もう少し威厳を。

締まらないぞ…。

「……………」

「な、何だよ！ いいじゃないか！」

あーあ。

オリンポス代表でもあるんだから…、せめてカッコつけてほしいんだけどな。

「ヘステイア。ベルのためにも、もう少し頑張ってほしいわ。」

「もうちよつとヒネれや、ドチビ。」

「うぐぐぐぐ…。」

この中でも最年長でもあるんだから…。

まあ、ヘステイアらしいといえばらしいが。

「…コホン！ ありがとうございますー！ 記者会見は、「フレイヤ・ファミリア」、「ロキ・ファミリア」、「ヘステイア・ファミリア」の順で進めます！ それぞれの制限時間は5分とします！」

さて、何が起こるんだろうな？

このオレ、ヘルメスが彼らの狙いを見極めてやるぜ。

第121話 猛者、畏敬。

何で俺がこんなことを…。

「ほら、オツタル。そんな顔を見せないの。」

「そうは言ってもですが…。」

「さて、まず【フレイヤ・ファミリア】の記者会見です！」

B o o o o o o o o o o !

「え……………」

「…何だと？」

我が【フレイヤ・ファミリア】に向かって、ブーイングだと!?

どこのどいつだ!?

……………は?!

「ちよ、ちよつとタイム!み、みんな!ブーイングはやめてく…ふぎやつ!も、物は投げないで下さい!あいたつ!」

オラリオ全域からだど…?!

ふぎけるな…!!

「……………黙れ！」

……………。

Boooooooooo!

な、何だと!?

俺の一喝が通用しないだど!?

「ちよ、ちよつと進まない!だ、誰か何とかしてくれー!ぎゃん!」

役立たん神め…!:

「オラリオを魅了しておいて、よくものうのうと!」

「そのでかい凶体をしてて、そんな小細工しかできないのか!」

「酒飲んで癩癩起こすなんて、女神の威厳どこに行ったのよ!」

「ミアに泣きつくなんて、それでも【猛者】かよ!」

「レベル7が泣くぜ!」

……………何だ。こいつらは…。

だが、聞き逃がせん言葉がある。

「俺を冒流するのはいいが…、フレイヤ様を冒流するとは許さん。文句あるのならその

場へ出る!」

「ちよ、ちよつとオツタルくん、火に油を注ぐような真似は…。」

B o o o o o o o o o o !

「みんな、ちよつと静かにしてちようだい。」

.....

B o o o o o o o o o !

「え……？」

「貴様ら……！フレイヤ様の言葉を遮るな……！」

『ロキ、これはサクラかい？』

『いや、本気や。マジでオラリオの不満や。怖いわー。』

『僕が収めてこようか？』

『ん？あー、神の鏡で公開しとるんやったな。えーで、カツコつけてこいやー。』

『ああ、神ヘスティアには感謝しないとね。』

「みんな、静かに……」

ちつ……フィンめ。

この場をまとめて名を上げるつもりか。

小賢しいやつめ。

「何もできなかった【ロキ・ファミリア】は引つ込め！」

「な……。」

「何が【勇者】よ！何が最強よ！」

「偉そうなことを言ってる、魅了されるとは情けねえぜ！」

「【勇者】のくせに、レベル7にランクアップできないのかよ！」

それは同意する…。

俺も人のこと言えんが、お前はこの7年間何をやってきたのだ？

「…っ！この…！」

「（あ、やばい）フィン！あかん！やめえや！」

「そんな飲んだくれの無乳なんか、女神じゃねえよ！」

「あっ…。」

「……あ？何やお！今の言った奴、前へ出るや！」

よくぞ言ってくれたと、拍手を送りたくなってしまったな。

「…まあ、それはわかるわ。仕方がないものね。」

「……（ずっと思っていた…、本当に女神か？と。この場では言わないでおこう。）」

「口、ロキ。抑えてくれ！」

「放すんやー！フィン！こいつら、しばいたるで！」

オラリオの不満がここまではな…。

「ヘラ・ファミリア」と同じように、恐怖で統括した方がいいのか…？

いや……あいつらと同じ真似が出来そうもない…。

「み、みなさん！や、やめて下さい！」

む、ベルか。

「インチキ・ルーキー」は引つ込め！」

「怪物趣味」の兎は黙れよ！」

『まだヘステイアのところだけど、言われると何か腹立つわね…。』

『フレイヤ様…抑えてください…。』

ほんのわずかの期間で一緒にいただけだが、俺もベルが悪く言われるのはあまりいい気がしないな。

「皆さん！今は、僕たちの話を聞いて下さいっ！」

「うるせえ！……ぐはっ！」

「…え？」

「静かにしなさいよ！貴方たちは恥よ！」

「実力もないくせに、吠えるんじゃないわよ！」

「あの子は半年でここまで来たんじゃないか！あんたも同じことをやってみな！」

…む、元「イシユタル・ファミア」の戦闘娼婦か。

「うるせえ！歓楽街の淫売どもが！」

「何だとおっ！」

「ちよ、ちよつと、みんな！やめてくれー！」

「神の指図なんざ構うもんか！やっちまえー！」

……もう知らん。神ヘルメスに任せる。

ホームへ帰るか……？

「ー止めよ。」

「!!!」

ぐっ！何だ、この巨大な神威は！

オラリオを覆う程だと！フレイヤ様の魅了の時と同じ……？

いや、その倍はある！

15年前に味わった、神ヘラや神ゼウスの神威より上だ！

一体、どこの神だ……？

何……!?

「ー静まれ。」

「……………」

「ー彼等は数年オラリオを守ってきた。」

「ー彼等は犠牲を顧みず戦ってきた。」

「彼等を冒瀆するな。それは汝ら自身を侮辱するのと同等。」

「今は静聴せよ。」

「……………」

暴徒共が収まり、頭を垂れた…。

あれが…いやあの御方が神ヘステイアなのか…。

『ドチビの神威がこれ程とはなあ…（ウチら同郷の大神オーディンより上やないか？）』
『神ゼウスと神ヘラより上の神威、初めてだよ…（戦争遊戯なんか仕掛けるんじゃないか？）』
『た…。』

「神…様？」

「…ふー。あー、しんどかった。静かになってよかったよ。おーい、ヘルメス進めてくれー。」

「あ、ああ。わかった。えー、すみません。先程の続きをさせていただきます。」

「…オツタル。あれが真のヘステイアよ。私も初めて見るけど、ここまでとはね…（あのオーディンより上の神威は初めてだわ）。だから言ったでしょう、私が唯一畏れるものだって。」

「はい…。」

「さて、気を取り直して！『フレイヤ・ファミリア』の記者会見です！」

「フレイヤ様！何故、ベル・クラネルを魅了して手に入れようとしなかったのでしょうか？」

「魅了なんかであの子を下したくなかったの。それだけよ。」

「ありがとうございます！」

「【勇者】様、今回の戦争遊戯はいかがでしょうか？レベル7といえども、【白兔の脚】は格上を倒し続けていますが。」

「立ち向かうなら相手になる。レベル5だろうがレベル6だろうともだ。それだけだ。」

「ありがとうございます！」

「今回の戦争遊戯では【ロキ・ファミリア】もいます！因縁の相手となりますが、いかがでしょうか？」

「因縁ね……。向こうから突っかかってきただけよ。それほどでもないわ。」

「長い付き合いだが、かつての最強と最恐にはまだ及ばないと思っている。」

「ありがとうございます！」

「まだ、続くのか……………」

「はい！5分経ちましたー。ここまでです。フレイヤ様、【勇者】、ありがとうございます！
たー！」

…疲れた。

「なるほど、なかなか悪くなかったわ。」

「自分はもう帰りたいのですが…。」

「ダメよ。その後にポーカー勝負あるでしょ？期待しているわよ。」

「……………」

何で、こんな茶番に付き合わなければならんのだ…。

第122話 勇者、失態。

「続きまして、『ロキ・ファミア』です！」

「やつと始まるわー。さつき無乳と言った奴の面、忘れんからなー。」

「ロキ、それぐらいは許してあげようよ。」

いい加減にそれはもう、諦めてほしいんだけどね。

「ロキ様！フレイヤ様の先程の発言、どう思いますか？」

「いつものことやー。負けるのが怖いから、あないなことを言つとるねん。」

「ありがとうございます！」

「【勇者】、今回の戦争遊戯はいかがでしょうか？」

「そうだね。【フレイヤ・ファミア】はかなり個が尖つてて油断できない。だから、こつちは組織力で挑ませてもらうさ。勝ちの目があるとしたら、そこかな？【ヘステイア・ファミア】は、人数が少ないといえども【フレイヤ・ファミア】より油断はしたくないと思っているよ。」

「ありがとうございます！」

なるほど……これが記者会見というものか。

いい機会だ。小人族の栄光への一步とさせてもらおうか。

「フレイヤ様の魅了騒動で、「ヘステイア・ファミリア」に味方するかと思いましたが、何故戦争遊戯を挑んだのでしょうか？」

「そやなー。ウチ、最強派閥の1つやる？ フレイヤんとこに挑むには、あちらが邪魔やねん。それだけやねん。」

「ロキ、説明になっていないよ。君たちも知っての通り、「フレイヤ・ファミリア」と僕たちは長年いがみ合ってきた。決着するのに「ヘステイア・ファミリア」と同盟しているからという理由にしたくない。だから、「ヘステイア・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」に戦争遊戯を仕掛けたんだよ。」

「ありがとうございます！」

『え？ 神様、そうなのですか？』

『うまいね……。【フレイヤ・ファミリア】との戦争は基本的にギルド、いやオラリオが恐れている事態さ。だから、その理由を【ヘステイア・ファミリア】との同盟ではなく、戦争遊戯にしたということだね（それだけではないような気がするけどね）。』

.....

「最後になりますが、【勇者】に質問です。」

「何かな？」

「信憑性が怪しいんですが、この場で【勇者】にお聞きします。「ヘスティア・ファミア」団長の【白兎の脚】への暗殺を依頼したという噂が広まっていますが、いかがでしょうか？」

「ぶぶぶっ!？」

「(暗殺だっ!?) そんな事実はないよ。」

「ええっ! ファインさんがぼ、僕を暗殺ううう!？」

『な、何だってー!？』

『…オツタル。今すぐ、【勇者】を真つ二つにしてちょうだい、さあ早く。』

『フレイヤ様…抑えて下さい…(フィンがそんな真似をするわけがない…はず…だ)』

「そうでしたか! すぐく広まっているので、びっくりしました。噂は噂なんですね!」

「僕も驚いているよ。何でそんな噂が広まっているのか…。」

キヤアアアア!

「な、何だ!? またかい…? ……え? ルルネ?」

悲鳴を上げたところを振り向くと…。

…え?

何で、【ヘルメス・ファミア】のルルネ・ルイーが十字架に磔されているんだい?

それに周りを取り囲んでいる白装束は? 闇派閥…? いや、違う。

何が起こっているんだい？

「〔泥犬〕よ！貴様に問う！〔ヘステイア・ファミリア〕の〔白兔の脚〕の暗殺を、〔ロキ・ファミリア〕の〔勇者〕より依頼されたのは真か！」

「ち、違う！そんなの依頼されてない！」

「全ての真実を見通す神々よ。この愚かな罪人の〔泥犬〕は、嘘をついているか否か？」
「嘘は言っていない。」

あ…、まさか…。

「では、何故貴様は〔ヘステイア・ファミリア〕の〔白兔の脚〕の情報を、探ろうとしたのだ？ネタは上がっているんだぞ！」

「え？マジ？」「嘘は言っていないな。」

「そ、それは…。」

「依頼者は〔ロキ・ファミリア〕の〔勇者〕か？答えよ！」
「……………」

捕らえられたのか…？

でも、誰に？〔ヘステイア・ファミリア〕の様子を見ると…違うな。

二人とも顎が外れるぐらい、啞然としているからね…。

「沈黙は肯定とみなすぞ！今から10秒数える。時間をすぎたら火炙りの刑に処す！そ

れまでに自供したら、火炙りは取りやめる。約束は守ろう。」

「「え？ひ、火炙り？」」

「マジでやるぞ、コレ。それに、嘘は言つてないぞ。」

「うわー。火炙りを生で見るの初めてだわ。俺様、ワクワク。」

え？嘘だろ…。

今のご時世に？

「ア、アスファイー！ルルネを助けろー！」

「わ、わかりました！」

『フ、フィン！ヤバイでコレは！』

『ああ！（ここは無理矢理入つて止めるべきなのか？いや、それだと僕がやったと自供したと同然になつてしまう…）』

「10、9、8、7」

「…（チラリ、ごめん）。はい…そうです…。」

「神々よ！」

「嘘は言つてないぞ！マジかよ！」

「【勇者】 って、サイテー！」

しまった！

今、神の鏡で世界中に公開されているんだった!

「何と愚かな罪人よ! 火炙りは約束通りやめよう。」

「「ホツ……」」

「だが、罪は罪。串刺しの刑に処す!」

「「ええっ!」」

な、何だって! 早く止めないと!

「や、やめて下さい!」

しまった……出遅れたか。

「何故、止める?」「ヘスティア・ファミリア」の「白兔の脚」よ。」

「あの……ルルネさんがどうして僕の情報を探ろうとしたのか、わかりません。そ、そんなに大したものではないと思いますので、解放してあげてくれませんか?」

「【白兔の脚】よ……。汝はこの罪深い【泥犬】を許すというのか?」

「許すも許さないもないと思います。それに……僕は一農民の子なので……。」

「何と清く正しい人なのだ! よかろう、汝に免じて【泥犬】を解放しよう!」

「あ、ありがとうございます!」

………しまった。

少しの迷いで、汚名挽回の機会を逃してしまった。

「…【勇者】。今の件は事実でしょうか？」

「（もう隠し立てはできないな）ああ、事実だよ。暗殺は絶対にしていない、それは確かだ。彼を調べたのは、ここまでの異常な成長ぶりに興味を持って依頼したのさ。君たちもそうだろうか？」

「それはそうですが…。そうですね！情報収集は大切ですからね！」

「…そうだね（くっ！せっ！）かくの機会を逃して、栄光から遠ざかってしまった。」

『フィン、下手うったなあ…。』

『失態だよ…。ロキ。』

「（ルルネめ、ホームから出るなど言ったのに…）そろそろ時間となりました。ありがとうございますごさいましたー！（さっきの奴らを捕らえないと…あれ？もう撤収している。早いなー）」

『ヘルメス様…。ルルネを回収しましたが、彼等は既に撤収し散ってしまいました…。』

『そうか…。ルルネは嚴重注意として、ホームの独房にぶちこんでおけ。』

『かしこまりました。』

『ぶ、くくく…。』

『フ、フレイヤ様…お、抑えて下さい。』



「ヘステイア・ファミリア」ホームにて

「あの…これは計画通りでしょうか？」

「いえ、私たちは一切関与していません。恐らくファンクラブの独走ですね。」

「それにしても、痛快でした。あの【勇者】が右往左往しているのは。」

「ベル君の情報は大丈夫でしょうか…？」

「神ヘルメスのことですから、嚴重に管理しているでしょうね。そうでないなら、既に私たちが裁きを下しています。」

『神に対して裁きとは、すごいな…。』

『同感でございます…。』

「それにしても、【勇者】の目の付け所はいいかもしれませんね。」

「そうね、ルウ。いずれにしろ、「ロキ・ファミリア」も許せないわね。」

『センパイ…、アストレア様が最近怖いんですが…。』

『セシル…、慣れましょう…。』



「ロキ・ファミリア」ホームにて

「ア、アイズ！落ち着くんじゃ！リヴェリア、お主も止めんか！」

「ガレス、お前は聞いていたのか？」

「いや初耳じゃ！知つとつたら止めたわい！」

「なら、アイズの怒りももつともだ。私は止めない。」

「……………（フィン、ロキ。早く帰ってきて…この剣で…）」

黒い風が吹き荒れていた。

「テイオネさん！テイオナさん！やめてほしいっす！」

「五月蠅い！このバカテイオネ！どう見てもフィンが悪いじゃん！」

「やめなさい！だ、团长には何か考えが…それがアルゴノウトくんの暗殺!?」暗殺してないと言っているじゃない！グハッ！この…糞がアアアアア！」

「これ、どうしたら収まるのよ…。」

褐色双子が殴り合いしていた。

「レ、レフィーヤ？さつきからブツブツと言っているけど…ひいつ！詠唱を唱えているー！」

「…团长、説明してもらいますよ…『二重追奏』の準備はできています…。」

「レ、レフィーヤ、それを解除しなさい！ホームが消し飛びます！」

妖精が魔法を貯めていた。

アイズ、テイオナ、レフィーヤを中心に、今回のことに対して怒っていた。

フィンたちがそれを気づいたのは、記者会見が終わってからとなった。

機嫌を宥めるため、じゃが丸くとスイーツを屋台丸ごと買うはめとなってしまうた。

ロキは送還防止のため、しばらくガレスと一緒に行動することになった。ガレスにとっては、いい迷惑であった。

第123話 白兔、緊張。

「では、最後に〔ハスティア・ファミリア〕です！どうぞー！」

あわわわ…：どうしよう、もう出番が来てしまった…。

「べ、ベル君大丈夫かい？足が手と同時に出血しているぜ。」

「だ、大丈夫でちゅ…痛つ、舌かみました…。」

（大丈夫かなあ…。こういう時はボクがリードしないとね！）

ワアアアアアアッ！

「キヤー！ベル様よ！」

「ああ！生で見れるなんて、来てよかった！」

「見てよ、あの白い髪、くりくりとした赤い目、そして笑顔！サイコーじゃない！」

「ぬいぐるみより、めっちゃくちゃ可愛いじゃない！」

「あれで、レベル5よ！貴方の彼女になりたいー！」

キヤアアアアアアア！

「ひいひいひい！」

「な、何なんだ…これは…オラリオ各方面から？」

な、何が起こっているの!?

オ、オラリオが大歓声で揺れているううう?

こ、怖いいい!

「し、静かにしてくださいー! (ベルくんのファン…もうオラリオにいる人全員じゃないかい? これ、フレイヤ様やロキんとこが勝つても、大暴動が起こるんじゃないかな?)」

『(ギリ…)…オツタル。蹴散らさない。』

『フレイヤ様…抑えて下さい…(勝った後はどうなるのだろうか…)』

『貴方、そればかりじゃない(でも、勝った後オラリオに再び魅了をかけるべきかしら…? いえ、勘だけ二度とは効かないような気がするわね。)』

『…フィン。ウチ、今更思い出したんやけど…。』

『奇遇だね、ロキ。僕もだよ。』

『アイズたんがブチ切れてなければいいけどな…。いや、絶対にブチ切れとるわ、ほら。』

『…? ああ…うちのホームの方向に暗雲が立ち込めているね…。』

『どないしょ…。ウチ、送還されてしまっわ…。』

『…ガレスにしばらく護衛をお願いしよう…。』

「静粛に! 今回の通知を忘れましたか! 資格剥奪しますよ!」

ピタッ。

『…資格剥奪って何や?』

『恐らく、彼のファンクラブの会員じゃないかな?』

『ああ…。ということはあの姉ちゃんは、そのファンクラブの幹部ということかいな?』

『そうだね(僕らが勝ったとして、彼女たちを抑えられるかな? いや、不可能に近いかも…)。』

「ぐすつ…あれ? ローリエさん?」

「!はい、「ヘルメス・ファミリア」のローリエです。久しぶりです、ベルくん(やつと会えたあああああ!)」

「ありがとうございます! 助かりましたああああ!」

「!! あ、あの記者会見の席へ…どうぞ(手を握られたああああ! 洗わないぞおお!)」
「こ、こちら! ベルくん、その手を離すんだ!」

「あ! すみません!」「いえ…(ああ…名残惜しい…)」

「オツタル…。あのエルフを今、斬りなさい。嘘を言っているわ。」

『無茶を言わないで下さい…フレイヤ様。』

『言い方を変えてもダメよ。』

(俺にどうしろと…。)

「あー、ゴホン。ただいまより開始します！(ローリエ…スゴイな。ここまでまとめるとは。意外に才能があるかもしれない)」

「神へステイア！先日の魅了解除はありがとうございました！」

「あー、うん。みんなが元に戻ってよかったね！」

「はい、では質問に移させていただきます。今回の戦争遊戯はいかがでしょうか？【フレイヤ・ファミリア】や【ロキ・ファミリア】という最強派閥が相手ですが？」

「そうだねー。非常に厳しいと思うけど、全力を尽くすだけさーね、ベル君！」

「ふえ？あ、はい。そうですね！」

(よし、調子に戻ってきたかな。)

「ありがとうございます！」

神様…ありがとうございます。

「【白兎の脚】に聞きます。このたび、レベル5へのランクアップおめでとうございます！」

「え？あ、はい。ど、どういたしまして。」

「今回の戦争遊戯で【白兎の脚】はどう思いますでしょうか？」

「そうですね…【フレイヤ・ファミリア】も【ロキ・ファミリア】の皆さんは、僕より強

いと思います。でも、僕は神様の…【ハスティア・ファミリア】が好きなんです。守るために全力を尽くすだけです！」

「ありがとうございます！」

うん、だんだんと慣れてきたかな。

【白兔の脚】に聞きますが、ランクアップの速度が異常に早いのですが、何か秘訣がありましたら教えてほしいのですが…。」

（来たな！）

「え？そ、そんなに早いのですか？成長期じゃないんですか？」

「え？…神々の皆様。」

「嘘は言っていないぞ…マジかよ。」

「コレ、マジで知らないぞ…。」

（あ、マズい。）

『…ドチビ、あの少年に隠しとるな。』

『ますます気になるね。』

「別にいいじゃない？スキルだとしても詮索はご法度でしょう？」

「あ、あのー、横入りはちよつと…。」

「あー、すまないけどそれはファミリア内の機密と言っておくよ。ただ、それはベルくん

「だけと言っておくよ（フレイヤめ、知っててフォローしてくれたな…。でもナイス!）」
「え?え?」

「そうでしたか!機密に関わる質問をしてすみませんでした!」

「いやいや、みんなが気になることだからね。仕方がないよ。」

「ありがとうございます!」

あー、やっと終わった。

すごく緊張した。

でも成長期じゃないんなら、何なんだろう?

（まずい、ベルくんが気になり始めた!…仕方がない。いつものドリンクで忘れさせよう。）



く【ヘステイア・ファミリア】ホームにてく

「……………やはり5年前に無理矢理、眷属にするべきだったわ。ああ…口惜しいわ。」

『センパイ…。アストレア様、アレばかり言ってますよ。』

『しっ!セシル…仕方がありません（いくらベルの強化といってもコレはやりすぎなのではっ!）』

「ふむ、今回の狙いは的中したようすな。」

「ええ、これで坊ちやまに興味を持つ方々が倍増したのは、間違いありませんね。」

「……リリは複雑です。」

「私もです……。」

「春姫もです……。」

「さて、これで貴女達は坊ちやまが取られないように守る側となりました。覚悟はよろしいですね?」

「……はい……」

（私は関心があるけど、アストレア様やセンパイ程ではないので、それよりあの武器を早く完成させないと……!）



く大樹海への入り口付近く

「………なんだ、この胸の高鳴りは?」

「!?み、みんなー!大変なことが起きたよー!」

「何だ、ランテ。五月蠅いぞ。」

「ア、アルテミス様が「胸の高鳴り」と言っているよ!」

「む、それはいかな。診察しましょう、アルテミス様。」

「いや、大丈夫だ。ただ、あの少年から目が離せないのだ。」

リオへ向かってみるか。…あの子は一体何者だ？目が離せない…。」

第124話 旅神、見届。

「では、引き続きましてー。団長だけでポーカーをやってもらいます！勝者が今回の戦争遊戯のくじを引いてもらいますー！」

やっと記者会見が終わった…。

こんなに、長く苦しい戦いとは思わなかったよ…。

「…何で俺が、こんな茶番をしなければならぬのだ。」

「…疲れているね、オツタル。僕もだよ…。」

「…ど、どうしよう…。」

ん？【猛者】と【勇者】は疲弊しているようだけど、ベルくんは違うな。

何だろう…？トイレかな？

ま、いいか。進めよう。

「なお、ディーラーは『大賭博場』一のディーラーに来ていただいております！」

「…どうも。」

「ルールは至って、簡単！一発勝負で役が一番高い人が勝者です！」

うん、ヘスティアも面白い案をするよな。

これ、今後もやったほうがいいじゃないかな？

「…さっさと始めろ。」

「オツタル、急かさないでくれよ。ん？…ベル・クラネル？どうしたんだい？」

「あ、あの…すみません。ディーラーさん…。」

「はい、何でしょうか？」

「ポーカーのルールを知らないのです…、教えてくれませんか…？」

「………………」

「あー、すみません。一時中断させていただきまます。ディーラーちゃん、ベルくんへ簡単なルールを教えてやってくれないかい？」

「はい、かしこまりました。【白兔の脚】、よろしいですか？」

「は、はい！よろしく願います！」

キャアアア！

「ポーカーを知らないって、何て可愛いの！」

「純粹すぎて、キュンキュンするわ！」

「ああ、愛おしい…。」

ファンに更に火が入ってしまったな…。

あ、ローリエが沈静した。

あいつ、才能あるな…。

「…忘れてた。こいつはまだ14歳だったな。」

「そうだね…。まあ、待とうじゃないか。」

…カジノへもつと連れて行くべきだったかな？

あ、いや。

メイとセバスにより折檻されるから、やめどころ。

『ヘステイア…。』

『ドチビ…、ポーカーのルールくらい教えろや。』

『し、知っていると買ったんだよ！』

『ベルはまだ幼いのよ。『え？そっち？』ポーカーなんて知るわけがないじゃない（ルールットは知っているけどね）。何でポーカーなんて選んだのよ。』

『そ、それは…（あれー？メイさんとセバスくんはポーカーがいいと言っていたんだけどなー？）』

『せめて社会勉強としてカジノに『それはダメ』…なんで色ボケが言うんねん…。』

『ベル君をあんな不健全なところへ連れて行くのは、反対に決まっているじゃないか！』

『同感ね。』

『何やねん…、こいつらは。』

過保護だなあ、フレイヤ様とヘステイアは。

あの二柱、意外に気が合うんじゃないかな？

「ありがとうございます！大体わかりました！」

「いいえ。」

「はい！では再開させていただきます！」

「行きます。」

シュツ！シュツ！シュツ！

「……。」

「……。」

「えっと……こうだから……うーん。」

……ベルくんにはポーカーフェイスを求めるのは、さすがに無理があるよなあ。

何でポーカーなんて持ち出したんだろう？

「やーん、可愛い！」

「悩む姿もいいわよねー！」

「お姉さんが色々と教えてあげたいわー！」

ファン熱、上がってないかい？

これ、ファンが倍増するような気がするんだが…。

あー！これが狙いか？

ハハハ、まさかなー。

「よろしいでしょうか？」

「…2枚交換だ。」

「僕は1枚交換。」

「え？交換？あ、そうか。いらぬカードは…は、は、ハックション！あ。」

『『あ！』』』

あー！

あーあ…。手札全部さらけ出して…え？

2 ♥ 3 ♥ 4 ♥ 5 ♥ 6 ♥ のストレート・フラッシュだと！

一発目で？

すごいビギナーズラックだな…。

「あわわ…す、すみません！全部交換で！」

「何だと？」

「正気かい？」

「ひいっ！」

全部交換って…、あー全部さらけ出したら交換と思つたんだな…。

『うわあ…なんちゆうもつたいないことを。』

『ふふふ、ベルらしいわね。』

『うん、そうだね!』

『え?あれー?ウチがおかしいんかいな?』

いや、ロキ。君は間違つてないぞ。

あれ、子供のお遊戯を見る母か姉の目だぞ…。

「…わかりました。全部ですわね?」

「オツタルさん、フィンさん、すみませんでした!」

「…いや(もつたいないことをしたな)。」

「…気にしないでくれよ(慣れていない以上、仕方がないね)。」

「えつと…わあ…。」

?

何かいい役でも来たのかい?

いや、さっきのストレート・フラッシュも役分かってなかったんじや?

「三方、準備はよろしいでしょうか?」

「ああ。」「もちろんさ。」「はい!」

「では、勝負!」

【勇者】は…、Q♥ Q♣ Q♦ 8♠ 8♥ のフルハウスか。

【勇者】は…、7♦ 7♥ 7♣ J♠ J♦ のフルハウスか。

ベルくんは…ええ？

「…なっ！」

「…これはすごいね。」

「そんな…私は絶対にさばいたはずなのに…。」

A♥ A♣ A♦ A♠ Joker のファイブカードだと！

確率が一番低いやつだぞ！

それを全部交換しただけで？

すごいツキだな…。

ワアアアアアアアアア！

「すごい！」

「ああ！スゴイわ！ベル様！」

「あの役を…全チェンジで揃えただと!?!」

おっと、いけない。

「【ヘステイア・ファミリア】の【白兔の脚】ベル・クラネル、大逆転のファイブカード

で勝利だあああ！」

「へステティア・ファミリア」ホームにて

「…すごいわね。」

「全部チェンジでファイブカード!?ありえませんか!」

「さすが坊ちやまですな。ですが、これ程の運とは思いませんでしたな。」

「本当ですね。イカサマもなく純粋な運ですね。」

「すごいです!ベル様!」

「ポーカー初挑戦で、ファイブカードつてすごいね!」

(以前、『エルドラド・リゾート』でルーレットをやった時、ベルは全て百発百中でしたね。その時の運でしょうか?またはギャンブルの才能が…?)

「ここまでとは思いませんでしたが、これほどの演出を見せたなら多くの人が坊ちやまに関心を持つのは間違いありません。」

「そうですね。帰ってきたら、一旦模擬戦した方がいいかもしれません。」

「あの…質問ですが、もしベル君がスキルによってレベル7上位以上に上がったとしたら、どなたが相手するのでしょうか?」

「私とメイが二人がかりでやります。」

「元ファミリア団長のマキシム、【ヘラ・ファミリア】団長の【女帝】も私たちが二人が

「かりで鍛えました。」

「あ、はい。そうですか…（ベル君、強く生きてね！私たちが支えるから！）」

第125話 道化神、感動。

「では、〔ヘステティア・ファミア〕団長の〔白兔の脚〕ベル・クラネルに、今回の戦争遊戯の勝負形式のくじを引いてもらいましょう！ さあ、ベル君。こっちへ来てくれないかい？」

「やっとな終わったわー。」

「けど、おもしろかったけどな。」

「え？ あ、はい。オツタルさん、フィンさん、すみません！」

「お前は勝った。それだけだ（やっとな終わる…疲れた）。」

「気にしないでくれよ（僕らの問題はその後だけだね。さて、アイズたちをどう宥めようか…）。」

「帰るのが怖いわ…。」

「アイズたん、ティオナあたりがブチ切れとるやろうな。」

「ガレスが上手く抑えてくれるとええんやけど。」

「ここに勝負形式を入れた箱がある。ベルくん、ここから1つ取り出してくれないか？」

「あ、はい。わかりました！」

ゴソゴソ…ゴソゴソ…

「えいつ！えと…『旗争奪戦』？」

「……………!!」

「おおつと！今回の戦争遊戯の勝負形式は『旗争奪戦』だああああ！」

（よりによつて、それか…：すごい引きだな。）

ヒヒヒツ、勝ったわ。

「『旗争奪戦』はオラリオで最多の勝負形式です！場所は…各ファミリアのレベルを考慮して、18階層がベストと思いますが、いかがでしょうか！」

「最初に言つたはずよ。どんな勝負形式だろうが、どこだろうが、私たちは勝つと。」

もう勝った気でおるわ。

けど、この勝負は戦術次第で勝つことができるんや。

つまり…、フィンがおれば負けることはないんや！

「ヒヒヒ、『旗争奪戦』なら熟知しとるわ。蹂躪してやるからなー、ドチビ。」

「な、何だつてー！熟知つて、ずるくないかい！」

「仕方がないわ、ヘスティア。貴女は最近下界へ降りたばかり。この勝負形式はかつてあるファミリアがしのぎを削つた戦いだもの。熟知というよりよく見たと言つた方が正しいわね。」

そやな。あいつらがよくやり合ってた勝負形式や。

まあ、あのクソジジイや超絶残酷破壊衝動女の夫婦喧嘩で、よく使ってたやつや。

あいつらの眷属たちが、毎回迷惑そうな顔をしとったわな…。

「あるファミリア？」

「ドチビと同郷のやつ、ゼウスとヘラんとこや。」

「なななな、何だつて!？」

「運が悪いなー、恨むならあの少年を恨めやー。あつ！ちやうちやう！運の悪さや（危なかつたわー、これ世界に公開されとるんやろ？アイズたんが見たらまたキレるんやろな）。」

ヤバかつたわー。

だが、既にそれを聞いたアイズは更にブチ切れ、黒き嵐が黒き嵐とランクアップし、傍観していたリヴェリアでも止めざるを得ない状況になってしまっているのを、ロキとフィンには知らないのであった。

「ロキの言うことはともかく、この勝負もらったわ。」

「なんやー、もう既に勝った気でおるんか？足元すくわれんようにな。」

「……（ということは、セバスとメイくんにとつては当事者でありよく知っているということだよね…?）」

「けっ！フレイヤの足元をすくってあざ笑ったるわ。」

「改めて、勝負形式は『旗争奪戦』で、場所は18階層、日程は7日後でよろしいでしょうか？」

「7日後ね、別にいいわ。」

「ビビビツ、18階層まで来れたらええんやけどなー。」

「くっ…（帰ったらセバスくんとメイくんに要相談だね！）」

「はい！では、これで記者会見を終わります！来週をお楽しみにして下さい！」

…ドチビ、なーんか隠しとるな。

まあ、ええわ。どうせ、この差は覆せへんからな。

さて、あちらは…。

「…ベル、全力で挑んでこい。」

「オツタル、僕を無視かい？『旗争奪戦』は戦術がモノをいうことを忘れたのかい？」

「やるならこい。全て打ち砕くのみ。」

「そうさせてもらうよ。さて、ベル・クラネル。君たちには悪いけど、勝たせてもらうよ。」

「ほ、僕らだって負けません！」

「いい返事だ。じゃあ、7日後にね。」

「はいー！」

「おーおー、バチバチやり合つとるわ。」

と、その前に……。

「あー、ちよい待ちや。少年、ちよつとええか？」

「ダメだー！」「ダメね。」

「ちよ、ドチビはわかるけど、何で色ボケが言うんや！」

「君のような有害神をベルに近づけるのは、教育上よくない！」

「同感だわ。」

「……まあ、同意するね。」

「ちよ、ちよい待てや。教育上よくないのは色ボケ、お前もやないか！フィン、どつちの味方やねん！」

「あ、あの……。ぼ、僕に何の御用でしょうか？」

……ええ子や。

マジでウチに入れたくなつたわ。

「いや、あのなー。半年前にオラリオへ来たんやろ？何で、ウチに来なかつたん？」

「え？行きましたよ？」

「は？」「何だつて？」

「でも…、門番の方に「資格ナシ」と追い出されました…。」

「…帰ったら、その門番を問い詰めたるわ…。」

「いや、ロキ。半年前は確か入団希望者を、試しに門番に採用しなかったかい？」

「あつ、そやった！…その門番はどうなったん？」

「ウチにいるのに不適合と妥当し、追い出したよ…。」

しもうたわー！

英雄の卵をこちらでポイしてしもうた…。

「…改宗せえへん？色々とサービスしたるで？」

「ダメに決まってるだろ！」

「何を言ってるの？ダメに決まってるじゃない。」

あんたらには言うてへんで！

特に色ボケ！

「ロキ様、ありがとうございます。…でも、僕は神様のところが【ヘステイア・ファミリア】が好きなんです。すみません。」

…何てええ子なんや。

「んー、わかったわ。その代わりウチが勝ったら、改宗してもらおうからなー。」

「あ、はい！けど、僕らは負けません！」

眩しっ！眩しすぎるわ！

あまりに純粹すぎる子や！

リヴェリアあたりが可愛がりたくなる子やろな！

「私から貴方たちに一言あるわ。」

「え？」「何や、負け惜しみか？」

「ふふ…負け惜しみを言うのはそつちよ。」

何や…、すぐくやな予感がするわ…。

「ミアとオツタル、ランクアップしたわ。レベル7とレベル8ね。」

な、何やとおおおおお！



く「ヘスティア・ファミリア」ホームにてく

「『旗争奪戦』でございますか…？」

「どんなルールなんだろう…？」

「お互いの陣地にあるファミリアの旗を奪うか、燃やせば勝ちです。」

「坊ちやまの引きはつくづく恐ろしいですね。」

「…あの、『旗争奪戦』についてご存知なのでしようか？」

「ええ、よく知っています。」

「私たちにとっては、ですね。」

「え？」

『旗争奪戦』は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が雌雄を決める時によくやっていました。」

「なので、戦術もルールも私たち以上に知る者はいないでしょう。」

「…なるほどね。貴方たちにとっては十八番の勝負形式ということね。」

「ええ、これで完全勝利へ更に近づけました。」

「一対一なら勝ち目は厳しいですが、『旗争奪戦』なら負けることは少ないですね。」

「…頼もしいですね。」

「後は…戦力ですね。」

第126話 処女神、驚愕。

うあー。

差を空けられたー！

ロキはフレイヤの子たちのランクアップを聞いて、さすがに驚いていたな…。

その後、「勇者」くんと一緒に帰っていったけど、その時の話が気になってしまった。

『ウチ、帰りたくないんやけど…まだ送還されたくないんやけど…』

『とりあえず、アイズにはじゃが丸くんを、他のみんなにはスイーツかな…。できるだけ

…いや店にあるものを全部買っておいたほうが無難か。』

『店丸ごと!? あー、それぐらいせんとあかんかあ…。ミア母ちゃんやオツタルのランク

アップも大事なんやが、こつちも大事やろうなあ…。』

『ロキ、僕が説明するよ。だから、その信憑性を証明してくれ。それが一番被害が少ない。』

『なーる、食べ物で一旦落ち着かせて、説得するということやな。…何で、戦争遊戯前に味方からやられなあかんねん…。』

『…そうだね。ここのところ失態続きだよ。はあ…。』

何か大変そうだね…。

いや、あちらのことを心配している場合じゃない！

ただでさえ、レベルが2つ離れているのに更に離されたんだ。

レベル8…。セバスくんやメイくんより上。

そしてあの怖いミア母ちゃんがレベル7…。

って、ミア母ちゃんって「フレイヤ・ファミリア」だったのかい！

何てこった！

あれ？ベルくんは？

…キヨロキヨロ…。

あ！フレイヤのところに！

「あの…フレイヤ様。お加減はいかがでしょうか？」

「あら？見舞いに来てくれなかったの？寂しかったわ。」

「す、すみません！気づいたのは昨日の朝だったので…。」

「何だと？（あれほど噂になっていたというのか？）」

「ひいつ！ご、ごめんなさい！」

「オツタル、やめなさい。…昨日の朝に？」

「は、はい。ずっと特訓だったので…。」

「特訓だと？誰と特訓していたのだ？」

「それは…、」

わーっ！ヤバいー！

「や、やあ！ベルくん！そろそろ帰ろうぜ！」

「あ、はい。神様、帰りましょう。フレイヤ様、失礼します。」

「ええ、帰りましょうか。ベル。」

「待つんだ！何をさりげなく、ベル君を連れて帰ろうとしているんだ！」

「あら？だって、この戦争遊戯はもう私達が勝ったのも同然じゃない？けが人が大勢出るよりはマシでしょう？」

ムカツ。

「ボクらはまだ降参宣言してないぞー！ー！」

「フレイヤ様…、お戯れはそこまで…。」

「ふふふ、冗談よ。じゃあベル、一週間後にね。ヘスティア、一週間でベルと別れの挨拶をしておきなさいね。じゃあね。」

「ふざけるなー！ー！」

数日前に、酒と癩癩で荒れていたくせに何を気取っているんだよ！

……だけど、本調子に戻ってよかったよ。

けど、何だろう？

さつきまで、ベル君に対して同意見が多かったよね…？

フレイヤだけど、フレイヤじゃなくなっているような気がするのには気のせいだろうか？

神は不変のはずなんだけど、うーん…。

「神様？ 帰らないんですか？」

「あ、うん。帰ろうか！」

「失礼します…（ベルきゆううんん）。」「む。」

この子はさつきの記者会見で、彼女たちを落ち着かせた子だっけ…。

ベルくんに手を握られて赤面していたよね？

まさか…、この子もか！

「あ、ローリエさん！ 先程はありがとうございます！」

「…いえ。あの、帰られるならこのルートをおすすめします。先程のファ：いえ女性たちが殺到しないルートですの。」

「ひいっ！ あ、あの人たちがですか？ か、神様！ ローリエさんから教えていただいたルートで帰りましょう！」

「そ、そうだね（嘘は言っていないから事実のようだね）。ローリエくんと言ったね？ あり

がとうね！」

「いえ、ベルくんを命を助けていただいたのでこれぐらいは……（あの雌豚共にベルきゅんを近づけさせるものか！幹部達を招集して守らないと！）。」

……何だろう。別の感情が混じっているような？

まあ、いいか。無事に帰るルートを教えてもらったからね。

あの大笑声は本当にビビったよ……。

もうオラリオ全員じゃないかい？

今回の記者会見で、もう世界中に広まったよね……？

あのスキルで、今のベルくんはどこまで強くなっているんだい……？

「ただいま……。」

「や、やつと帰れた……。」

「坊ちやま、ヘスティア様、お帰りなさいませ」

「お帰りなさい！」

「あ……、うん！ただいま！」

「あの娘に教えてもらったルートですんなりと帰れたね！」

「は、はい！他の道を見ますと、僕たちを探していましたようですし……。」

うん。あの娘たちの目怖かったな…。

『愛しの兎様はどこ!?』とか『私達のアイドルのベル様ー!』とか言ってたな…。

怖いよ…。

「ベル、お疲れ様!……ヘステイアも。」

「レアお姉ちゃん!うん、大変だった…。でも何とか切り抜けたよ!」

「ええ!見てたわ!よく頑張ったわね、ベル!」

「わわわ、髪の毛をくしゃくしゃしないでー!」

アストレア…君、完全にブラコン化してないかい?

ボク一応、ここの主神なんだけどとってつけたように言わないでくれるかい?

追い出そうかな…?

「ヘステイア様。坊ちやまのステータス更新をお願いします。」

『スキルの効果を確認するため我々が模擬戦しますので』

セバスくん…君、器用だね。同時に二つしゃべるとは…。

「そうだね!今朝は身支度で忙しくて、できなかつたからね。おーい、ベルくん!ステータス更新するよー!」

「いーいーいー(あ、はい。神様)!ぷはっ、もうレアお姉ちゃんつたら!今、行きまーす。」

やれやれ、アストレアもベルクんに依存しているなあ…。

さてさて、昨日まではかなり上がっていたものなあ…。

耐異常がこれまでにない早さで上がっていたのが、すごく気になるんだけど。

「神様…、5日前からずっとステータスを見てないのでどのくらい上がっているんでしょうか…?」

「そ、そうだね。あ、あまり大して上がっていないから、見ても見なくても同じだよ（本当は、かなりめっちゃくちゃ上がっているんだけど！セバスクんとメイくんはどんな特訓をしているんだい?）」

「そうですか…。オツタルさんとミア母さんがランクアップしてたなんて…、勝てるかな?」

「ベルクン…、セバスクんとメイくんを、みんなを信じよう。今のボクはそんなことしか言えない、頼りない神だけだね。」

「いいえ！神様は僕をずっと助けてくれました！だから…、この「ヘスティア・ファミリア」は僕の家族です！はい、僕たちが絶対に守ります！」

「ベルクン…君は何ていい子なんだ！（どうして7年前に、ベルクんの両親のファミリアの彼らはベルクんに会いに行かなかつたんだろう…?）」

つと、いけないいけない。ステータス更新しないと。

うーん、今日は特訓してないから大して上がってないなあ…。

ん？アレ…？コレは…え？スキル？

な、なんじゃああああ、コレはああああ！

戦争遊戯中（回想含む）

第127話 処女神、戦場。

……いよいよ、今日だ。

フレイヤとロキとの戦争遊戯だ。

みんなは今頃18階層か…。

今日はセバスくんとメイくんがいないから、身の回りを久々にボクとアストレアでやる羽目になったよ。

「自炊をするのは久々だわ…。」

「ボクもだよ。セバスくんとメイくんに頼りすぎていたかな…。あれ？あ、作り置きがあるー！」

「あら？本当？よかったわ…。彼らがいない生活はもう考えられないわね…。」

「言わないでくれるかい？」

モグモグ…。

うん、ずっと置いていた割には美味しい！

「あれ？ボクの服が…え？コレは…。」

「あら、いいじゃない。ヘステイア、あなたらしい服ね。」

「…キミのセリフじゃないけど、彼らがいないのはキツイね。」

んしょつと…。ゴソゴソ…ゴソゴソ…。

んー、悪くない。サイズもぴったりだし。

デサインも悪くない！いいね！コレ。

「さてと…行こうか？」

「ええ、行きましょう。ベルの…いえ私達の勝利のために。」

ああ、行こう！

「やあヘステイア、アストレア。一週間ぶりだね。」

「あ、ヘルメス。」

「…ヘルメス。」

「な、なあ。アストレア、ずっと聞きたかったけど、何故俺に喧嘩腰なんだい？」

あ…。

「ふふふ、聞きたい？ねえ？」

「…アストレア。」

「…わかったわよ。」

「え、えーと。教えてくれないのかい?」

「教えるわよ。戦争遊戯が始まる前にね…?」

(怖いぜ…アストレア。何をしたんだろう、オレ?)

ベルくんへの依存が日々強くなってないかい…?

「あ、そうだ。今日の解説だけど、オレとタケミカツチがすることになったから、そちらの名簿をくれないかい? フードをかぶっていても、番号のバッジはつけているんだろ?」

「ヘルメスはわかるけど、何でタケなんだい?」

何でタケ?…こちら側なんだろう?

「今回の戦争遊戯は、高レベルの激闘になる予感がするんだ。だから、武の神であるタケミカツチに解説してもらおうと思つてね。彼ならどんな速さでも見切れるだろうし。」

「そうね…。タケミカツチなら問題ないけど、いいの? ヘステイア派閥だけ?」

「それとは別に解説については、武の神の名において公平を期すことを誓おう。」

「あ、タケ!」

「ヘステイア、すまん。こいつに依頼されて、最初は断つたんだが確かにこの戦争遊戯

は、激闘になる。武の神である俺なら見切れる。なので解説に妥当ということになったんだ。」

「ううん！キミなら、解説をきちんとしてくれると信じているよ。解説よろしくね！」

「ああ「タケミカツチ様ー！」あ、すまん。子どもたちが呼んでいるんだ。後でな。」

「うん、後でね。」

タケが解説かあ。そうだよ。高レベルの激闘って、目に止まらないものね。

神であるボクでさえ、わからないんだ。他の子だつてわかるわけないし。

適任だね！

「話を戻して、そちらの名簿をくれないかい？フレイヤ様とロキは、既に提出してもらっているんだ。」

「あー、そうだったね。ええと…アストレアと一緒にいいかい？」

「もちさ。他のファミリアの子もいるかい？そのファミリアの名前もあれば、ありがとういけど。」

「書いてあるわよ。…ヘルメス。正義の神である私が誓つて言うわ。ここにあるのは真実よ。」

「え？あ、ああ。疑うわけじゃないか！どれどれ……。え？」

まあ、信じられないよね。ボクもさ。

ベルくんは何てスキルを発現させてしまったんだ…。

ベルくんの想いがそれほど強かったことを、意味するんだけどね。

「ヘルメス。もう一回言うわ。ここに書いてある子たちは確かにいるわよ。」

「USOだろ…。え？ど、どうなっているんだい？こ、こんなの絶対にあり得ない！」

「ヘルメス。気持ちはわかるよ。」

「だ、だが！」

…仕方がない。

「―ヘルメス。『悠久の聖火』を司る私の名において誓おう。ここに書いてあることは真実だと。」

「!!…承知しました。後で説明していただけると助かりますが…。」

ふー。ここんとこ、コレを使うのが多いなあ。

「うん、もちろんだよ。まあ、ボクらも最初は信じられなかったけどね。」

「…ベルくん関連かい？」

「今は、その通りとしか言えないわ。」

「……………はあ。わかったよ。後はこちらで何とかするよ。」

「頼りにしてるぜ！ヘルメス！」

ヘルメスなら何とかごまかせるだろうネ。

「ああ、そうだね。ヘルメス。戦争遊戯が始まる前に、神の鏡を通してちよつと私から話したいことがあるので、協力をしてくれないかしら？」

ああ……。あの件か。

「へ？ま、まあ、いいけど……何を話すんだい？」

「大抗争の真実を。」

「!!……アストレア。それはあいつと彼らの気持ちを無駄にすることになるぜ？」

「ええ、わかっているわ。真実といつても、少し嘘を交えるだけだね？」

「……あいつの神友として、それは看過できないな。」

「そういうと思ったわ。ベルのこれからのため、と言えばわかるかしら？」

「!!……そうか、そうだな。あいつも喜んでその汚名をかぶるだろうな。わかったよ。」

「ありがとうね。……ベルへ仕出かしたことの1つは相殺ね。」

まだ、根にもつていたのか……。

まあボクも知ってたら許さなかつたけどね。

「……あー。そうか……（ベルくん、もうアストレアを落としたのか……）。そ、それは彼女によつて終わったはずだぜ？」

「私は関与していないわ。だから、別よ。ああ、特に彼女はね。」

「（シユバツ！）………へステイア、いえへステイア様……。お願いします……天界へ送還す

るのだけは勘弁して下さい…。」

「ヘルメス…（土下座するほどかい？）。まあ、ボクからも言っておいたけど、その…大層お怒りでね…。」

「ひいひいひい…。」

「ただ…彼らへの制裁に協力するのなら、考えるつてさ。」

「協力いたします！協力させていただきますから、天界送還だけはやめて下さいいいい！」

（ヘルメス…そんなに天界へ帰りたくないのか…。）

「わかったよ。伝えとくよ。」

「お願いいたします！ふう…さて、俺は解説の準備をしてくるよ（はあ、ベルくんどこまで規格外なんだい…。コレ、あの方も気づいているんじゃないか？はあ…。）」

あ…黄昏れている。

少し気の毒に思えてきたよ…。

「ふふふ、ヘルメスのあの姿を見て溜飲が少し下がったわ。」

「アストレア…、同郷なんだから手加減してあげなよ。」

「手加減しているわよ？でも、アレらはどうなるかは知らないけどね。」

「あ…そうだな。」

さて…フレイヤとロキは…つと。

あ、いた。

「待たせたね。フレイヤ、ロキ。」

「やつと来たな、ドチビ。」

「いいえ、今来たところよ。ベルとの別れは済ませたかしら？」

んなのするわけないじゃん！

「わ。ぶっ。」

「する必要はないわよ。フレイヤ。」

それはボクの台詞だー！

邪魔するなー！アストレア！

「…ねえ、聞きたかったけど、どうして私に喧嘩腰なのかしら？」

「そうや、ウチにも何でや？」

「ふふふ…、この戦争遊戯でわかるわよ。」

「……ええー。」

はあ…アストレアも大分変わったなあ。

神は不変だというのに…。

さて、そろそろ始まるか。

あの子たちは大丈夫だろうか……。いや！大丈夫さ。ベルくん、セバスくんもメイくんもいるし。

準備や戦力は整った！

勝負だ！フレイヤ、ロキ！

第128話 正義神、打明。

「そろそろか…ウラノス、力の行使の許可を。」

「―許可する」

ワアアアアアアア!

全ての神が、神の鏡を開いたわね。

アストレア、しっかりとしなさい!

ここが私の戦場よ!

ベルのためにも!

「えー、まもなく「フレイヤ・ファミリア」VS「ロキ・ファミリア」VS「ヘステイア・ファミリア」の戦争遊戯が始まります。解説は、わたくしヘルメス、そして武の神であるタケミカヅチが務めさせていただきます!」

「タケミカヅチです。俺はヘステイア派閥に属するが、この戦争遊戯に関しての実況は公平を期することを、俺の司る武に誓って守ろう。」

「ありがとうございます!この度の戦争遊戯は、ハイレベルの戦いになります!タケミカヅチはそれを説明していただきます!よろしくお願いします。」

堂に入っているわね…。

さて…。

「各陣營の説明をしていただく前に…、正義を司る神アストレアよりお話があります。お願いします！」

「え？」「何やて？」

「行くわね、ヘスティア。」

「うん、頑張つてね！」

すーはー。

「オラリオのみんな、そして世界の子たちよ。私は正義を司るアストレア。この場を借りて、みんなへ伝えたいことがあるの。」

『何を話すんやろな…。』

『さあ…。』

「これから伝えることはオラリオのみんなにも、そして私にもつらいことなの。でも、もう隠しておくことはよくないため、今この場で明かします。」

「……………」

「それは…、7年前の大抗争の真実です。」

「！！！！」

『真実やて…？おい、色ボケ何か聞いたるん？』

『エレボスが【静寂】と【暴食】を従えてオラリオに大打撃を与えたが、本当はオツタル達を強くさせるためのことでしょ？確かに私達のような一部の神は知っているかもしれないけど、何で今更…？』

『そやな…。』

『大抗争は悲しい戦いだつた。けど、みんなは不思議に思わなかつた？』

「「？」」

「1000年も最強を誇つた、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】がエレボスのような神に何故従つていたのかを。」

「「!!!」」

『エレボスのような神つて…さりげなくデイスつとるで。』

『まあ、事実だからしようがないわね。』

「特にオラリオに長年いた神や子はよく知っているはず。あの精強で最強を誇つていた【ゼウス・ファミリア】が、あの傲慢で最恐を欲しいままにしていた【ヘラ・ファミリア】が、何故有無を言わず従つていたのかを。」

『それはわかるわ…。何で従つていたんやろうな？フィンもわからへんと言つてたわ。』

『同感ね。彼らとの付き合いが多かつたオツタルも首をかしげていたわ。』

「その理由は私も5年前までははっきりと分からなかった。けど、5年前に知ってしまつた。彼らは…、人質を闇派閥に囚われていたため、従わざるを得なかつたのよ!」

「「なっ!?!」」

『人質やて!?!そんなはずあらへん!?!あいつらの生き残りはあの二人だけのはずや!』

『ええ、そのはずよ…。アストレアは何かを知っている…?』

「その人質は…、〔ゼウス・ファミリア〕と〔ヘラ・ファミリア〕の両方の系譜を持つ、この世で唯一無二の子なのよ。」

「「!?!」」

『そ?!?!そんな馬鹿な…。ありえんはずや…。』

『初耳よ…。いえ…まさか…あの時の女性?』

『フレイヤ、何か知つとるんか!?!』

『ロキ…、貴女も覚えているはずよ。〔ヘラ・ファミリア〕で病弱だつた女性がいたことを。』

『ん? あー、ディアンケヒトやミアハが言つとつた子か。確か死の病にかかつたな。』

『ええ、それだけじゃないわ。その娘は…妊娠していたのよ。』

『な、何やて!?!すると、何か!ウチらは身重の病弱の子を追いつ出したというんか!?!』

『いえ、そんなはずはない。許可したはずよ。謹慎という形で、『ディアンケヒト・ファミリア』の診療所に入院させるという条件でね。』

『…あー、思い出したわ。そや、確かそう許可したんや。けど、その子は自分からゼウスと一緒に出たと聞いたんやけど?』

『ええ、覚えてるわ。あの時の後味の悪さは忘れようがないわ。』

『その子の産んだ子が…、ゼウスとヘラの系譜を持つと?』

『ええ…何て恐ろしいことをしたの…。その子を孕ませた男は。』

『その男はゼウスとこ…?まさか、ザルドはんか?』

『ザルドにそんな度胸はないわ(キリツ)。』

『…それ以前に、ヘラン娘を孕ませようとする男っておるんか?』

『わからないわ…。』

「みんな、静かに…。みんなが動揺する気持ちもわかる。それなら、彼らが従うのも仕方がない。彼らの系譜を持つ者、彼らの血を受け継いでいる者、彼らの最後の生き残り…。その子を守るために、彼らは闇派閥の手足となるしかなかったの。」

「……………」

『ちつ…闇派閥の邪神共、楽に逝きおって…。』

『胸糞悪いわね…。【静寂】と【暴食】は本当に無駄死にじゃないの…。』

「大抗争では多くの子が死んだ…多くの神が天へ還った。けど一番最初の犠牲者であり、一番深く傷つけられたのは、その子なのよ。当時、その子のたった二人の家族である【静寂】と【暴食】を、悪者という形で闇派閥に陥れられた上に、真正正銘の天涯孤独となつてしまったの。」

「何てひどいことを！」

「私も家族を失つたけど、そこまでひどくはなかった！」

「ちくしょう！闇派閥の奴らめ！」

『…ウチらがその女性をキチンと保護してたら、起こらなかつたんか？』

『…そうかもしれないわね。けど、もう終わつたことは仕方がないわ。後味悪いけどね。』

「そして5年前、私は自分のファミリアがほぼ壊滅した後に旅をしたの。そして、その子に会つた。その子は【ゼウス・ファミリア】も【ヘラ・ファミリア】も全く知らず、ただの農民の子として育つていたわ。」

『な…。』

『それがいいわね…。知らない方が幸せだもの。』

「聞くところによると、闇派閥はその子を大抗争が終わるまで、拉致されていた。そして、大抗争で【静寂】と【暴食】が死んだ後に、育てられていた家に戻さず道端へ放置

されていたの。…運よく拾われて元の家に戻されたけどね。」

「闇派閥のやつら、許せねえ！」

「あんまりじゃない！」

「その子があまりにも可哀想じゃない！」

「闇派閥の邪神が全員天界へ送還しよつたから、嘘かわからへんけどな…。」

『そうね…。けど、こつちの方が真実味があるわ。あの最強と最恐が従うのも納得がいくわ。』

『その女性は…、子を産めたん？ 病弱の体でか？』

『さあ…。』

『いや、無事に産んだ。私達が見届けた。』

『ああ、儂らが確認した。…その引き換えに産んだ母は逝つたがな。』

『ミアハ：ディアンケヒト、あんたらは知つとつたんか？』

『ミアハ、ディアンケヒト…。その子はどこにいるかを、貴方たちは知っているの？』

『ああ、知っているとも。』

『知つてどうするのだ、フレイヤ？』

『もちろん、私が引き取つて育てるに決まっているわ。』

『ちよい待ちや。色ボケの物騒なところに預けられるか！ウチのようなアットホームの方

がええに、決まっとるやろ。』

『『アットホーム……?』』

『な、何や!間違つてへんやろ!』

『だが、その必要はない。』

『え?』『何やて?』

『そら、アストレアが続きを言うようだぞ。』

第129話 正義神、暴露。

さて、ここからが本番ね。

女神連合・ギルド・ファンクラブも協力してくれるようだし…。

「…そして、私はその子に会った。5年前、私は眷属を多く死なれて立ち直れない状態だった。けど、その子によって癒やされ、私は私であることを取り戻すことができたの。」

「「うううっ…」」

（あー…、なるほど。既に5年前に落とされていたということか。じゃあ、アストレアのあの態度にも納得するな。…ベルくん、恐るべしだな。マジで協力しないと、アストレアによって送還されるな。）

『何てええ子なんや…。』

『まさか…その子って、そんな…いえ…なら、アストレアのあの態度にも納得が行くわ…。』

『どないしたんや？色ボケ？何か心当たりあるんか？』

『私の予想が正しければ…、運命を感じずにはいられないわね…。はあ…。』

『あん？』

「そして、私は自分を鍛えるために旅へ出た。そして……ここオラリオへ戻ってきた。そして、その子がいたの。白い髪に赤い眼の子がね。」

「!!!」

『ま、ま、まさか……あの少年が……？』

『やはりね……。そうなのね？ミアハ、ディアンケヒト。』

『ああ、間違いない。』

『儂らも先日、知ったばかりじゃがな。』

「ええ、そうよ。一週間前の記者会見で、ポーカーで全チエンジのファイブカードを出した子。【ヘスティア・ファミリア】 団長……【白兔の脚】 ベル・クラネルが、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の直系の系譜を持つ、唯一無二の子なのよ。」

「……な、何だつてー!!!」

「本人は先日に、7年前の大抗争で自分の身内が犯したことについて深く後悔していたわ。」

「違う！それは闇派閥のやつらが悪いじゃねえか！」

「何でよ！何で、その子がひどい目にあわなければならぬのよ！」

「あんな純粹無垢な子が！」

『あの少年が…【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持つとるなんて…。』

『信じられないわ…、どちらも似てないじゃないの…。』

『それは同意するわ…。』

『え？待って…まさかベルを育てたお祖父さんは…、ゼウス？』

『そうだ。』『あやつだ。』

『な、何やて！あの煩惱の塊の工口爺が、あの純粹無垢の塊のような子を育てたやと！嘘やー』

『それは同意するわ…。ただ…、おかしいわね？何でここにゼウスがいないの？』

『…半年前に育児放棄した。』

『14年間、碌なものを食わせず碌な事しか教えずにな。』

『何ちゆうことをするんや…。それで何であないな、キレイな純粹無垢な子に育つんや…。奇跡やろ…。』

『（ギリツ…）この戦争遊戲が終わったら、私の子に命じてゼウスを探し出して捕らえさせるわ…。そして、ありとあらゆる苦痛を味わせてやるわ…。ただでは天界へ還してやらない。』

（ガチで言うところぞ…この色ボケ。）

(ここにもいたか……)

(ベルへの愛は、嘘ではないとわかるな。)

「…以上が、大抗争の裏で起こった真実です。それをどう捉えるかは貴方たちに任せるわ。ただ私、いいえ「アストレア・ファミリア」はあの子を正義の名において、何が何でも守る。それだけは言います。」

『アストレアがああ態度をとるのもわかるわ…。』

『はあ…、ベルも罪な子ね…。』

「アストレア、ありがとうございます！解説の立場を置いて…、アストレアと共にエレボスの送還を見届けた神として、俺も告げよう。エレボスは送還の際に、「白兔の脚」を人質にして「静寂」と「暴食」を手足のようにつき使い、死なせたことを言っていたのは間違いない。このヘルメスが保証しよう（すまん、エレボス。お前の求めた英雄のためだ。汚名をかぶってくれ。）」

『あの優男…、何で言わんかったんや!』

『あの時は、黙るしかなかったでしょうね。大抗争の爪痕は、まだ幼かったベルを探し出して傷つけるかもしれない。沈黙そのものがベルを守ったのよ。…エレボスのあがきってやつね。』

『何で、それをこないだの記者会見で言わんかったんや!』

『言ったら…、オツタルも【勇者】もさすがに鈍ったのでしょね。あの二人は特にあのファミリアの子たちと深い縁があった。』

『くそっ…。ウチが勝ったら、あの子を絶対にめっちゃ甘やかしたる！』

『ロキ、それはダメよ。それは絶対に譲らない。私があの子を愛し尽くす。』

『ヘラの眷属の子やぞ…？』

『関係ないわ。…むしろ、ヘラへのいい当てつけになるわ。』

『まあ、そうやるな。しかし…何で両ファミリアから、そこまで似てないんや？父親は

【ゼウス・ファミリア】の誰なんや？』

『さあ…。』

『いや、お前たちも知っているはずだ。』

『ああ、あのサポーターのことを。』

『サポーター？あ！フィンがゼウスとここに勝った唯一の子か！確かあの子の眼は赤かったわ…。』

『え？嘘でしょ…？ゼウスと共に醜聞をまいたあの子が…？ベルの父親…？ええ…。』

『絶句するのわかる。儂もそうだったのだからな。』

『目を含んで肉体そのものは父親譲りだが、髪と顔、性格は母親譲りだ。』

『そう…病弱だった女性の方は、ヘラが大事にして会わせてくれなかったから、知らない

わね……。そこまで似ているの?』

『ああ、目の色を除けば瓜二つだ。もし……【静寂】のアルフィアが、7年前のベルに会っていたら間違いなく大抗争へ行かず、ベルを溺愛していたのは確実だろうな。』

『それは確かだ。』

『はあ……。惜しいことをしたわね……。まあ、いいわ。いずれにしろこの戦争遊戯に勝つて、ベルをこの手に入れて愛し尽くすわ。』

『おい、色ボケ。何を勝つたような事を言っとるんや。勝つのはウチや!』

『いいえ、私よ。』

『ウチやー!』

『……………ねえ、君たち。ボクが存在忘れてないかい……?』

第130話 勇者、分析。

さて、そろそろ頃合いか。

「みんな、準備はできているかい？」

「ええ。」「ううー…。」

「問題ない。」「いつでもいいぜ。」

ふう…記者会見の後は大変だったよ。

アイズを宥めるため、じゃが丸の屋台そのものを持つてきたことで落ち着いてくれたけどね。

ただ、ロキのことをずっと獲物を狙うような目をしていたのはさすがに困った。

ガレスに四六時中護衛してもらった。

ガレスにとつてはえらい迷惑だったろうけどね。

テイオナは、テイオネとダブルKOの形で落ち着いてくれたが、ずっとすねていた。

なので、魔法をストックして目からハイライトを消していたレフイーヤに、それぞれ数十万ヴァリスをベル・クラネルのグッズのために渡したら、二人とも落ち着いてくれた。

僕のポケットマネーだからいいけど、痛かったな。

…ホームを爆破されるよりはマシだよ。

そして、今回の『旗争奪戦』…。

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の戦争遊戯を何回も見ていたおかげで、いろいろと戦略が練れたよ。

まず、【ヘステイア・ファミリア】の旗を潰す。

そして【ヘステイア・ファミリア】の戦力と統合し、【フレイヤ・ファミリア】に当たる。

それだけだ。シンプルだけど、その方が効率的だ。

問題は最初に【ヘステイア・ファミリア】の旗を狙うことだ。

僕の目を以て見ると、【フレイヤ・ファミリア】は一目瞭然だね。

オツタルとミアがこつちへ来るのだが、あちらの最優先は【ヘステイア・ファミリア】だ。

そつちへ間違いない行くだろうね。

さて、【ヘステイア・ファミリア】は全員フードをかぶっているからわからないが、大体はわかる。

足元が丸見えだよ。それに高レベルは、なかなかいないからね。

それにこちらはルルネ・ルイーが入ったことにより、あちらの戦力を把握できた。
【豊穡の女主人】の従業員が参加しているらしい。

それを知ったのは大きい。

悪く思わないでくれ……。それも戦略なんだ。

【ヘスティア・ファミリア】の旗を守るかのように、横に二人……。

正面に一人か……。悠々とテーブルに座って紅茶を優雅に飲んでるな……。

【ガネーシャ・ファミリア】が参戦したと聞いたが、恐らく彼らだろうね。

しかし、紅茶を優雅に飲むような人ってあちらのファミリアにいたのだろうか？

何だ……？あの大量の大剣は？

砦のつもりか？

いや……特にあの二人の周りが多い。

何の真似だ……？

いけないな。戦力分析に集中しなければ。

戦力を見ると……。

前衛に5人……。【不冷】【黒拳】【疾風】……いや【薫風】、後二人か。

中衛に8人……。【絶†影】【麗傑】【黒猫】【戦車の片割れ】【象神の杖】、後二人……そし

て、ベル・クラネル。

後衛に2人…。レベル1のサンジョウノ・春姫、そしてレベル2のリリルカ・アーデか…。

中衛重視か…突撃陣形を組んでいるから間違いないか。

椿がないこと、後衛が少ないことが気になるんだが、まあいいとしよう。

思ったより少なく感じたな…。

【ガネーシャ・ファミリア】が参戦と言っていたが、全員ではなさそうだ。

治安維持のためだからだろうか？

まあ、いい。この程度なら勝てる。

親指がずっと疼き続けているが、無視だ無視。

やらなければならなくなっただ。

今回の戦争遊戯では、親指の疼きに頼らない。

「皆、作戦は覚えているな？」

「はい！」

「では…。」

「フイーーン！」

「……………」

そうか…。この戦争遊戯は飛び入り自由だったんだな…。

忘れていたよ。

【カーリー・ファミリア】か…。

だが、丁度いい。旗の守り手が心許なかったんだ。

アルガナはこつちに…、作戦に支障はない。

「なっ！ア、アルガナ！あんた、何しにきたのよ！」

「何を言っている？ テイオネ、フィンのために我々が来たのではないか！」

「…アルガナ。何をしに来たんだい？」

「お前を助けるためにだ！ 飛び入り自由なんだろう？」

「まあ、そうだけどね。」

旗の守り手をラウルとアキ、【カーリー・ファミリア】にやってもらおう。

「アルガナは僕の部隊に。他のものは旗を守ってもらいたい。」

「了解した！ わかったな、お前ら！」

「…はい！」

「あれ？ ねー、バーチェはどうしたのー？」

「……………あちらだ。」

「え？ ウソでしょ？ 何で、〔ヘスティア・ファミリア〕に!?」

「改宗したからだ。今はそれだけしか言えん。カーリーからの主命だからな。」

「改宗!?!」

何だって?ということは前衛か、旗の守り手か…。

あのカーリーがよく認めたな、自分のところの副団長を?

「どういうことだ!何故、バーチエが改宗した!?!あのカーリーが認めるわけがないだろう!?!」

「手を放せ、テイオネ。事実だ、バーチエは改宗した。カーリーの命令で、この戦争遊戯で私とバーチエが殺し合うためにだ。」

「テメエら!」

「テイオネ、やめるんだ。」

「団長…。」

「アルガナ、増援感謝するよ。ただ、その代わり僕の指示に従ってもらおうよ。」

「ああ!もちろんだ、私の強き男よ!」

……僕の女運はどうなっているんだろう…。

【ヘスティア・ファミリア】を下したら、あの子に僕の副官になってもらおう。

少しは…揺れるか…?

いや、揺れてほしい…。

「何で…バーチエが【ヘスティア・ファミリア】に…。」

「……………ずるい。」

「ベートー・ローガー！」

「……………。」

増援は嬉しいんだけど…。

ベート…。

「お、俺が呼んだんじゃねえぞ！」

「ベート・ローガアアア！ゲフツ！」

「な、何しに来やがった！帰れ！」

「愛しい男のところにいるのが私！」

「うわあ…、ブレないねえ…。」

「あちや…レナも来ちまったか…。」

神ヘルメスが、「ヘステイア・ファミア」へアイシャを派遣したから、こちらにはルネ・ルイーを派遣してもらった。

本当はいらなかったが、ルネ・ルイーが手癖の悪さで「ヘステイア・ファミア」の名簿を掠め取り、報告してもらった。

それは非常に大きい。

シャクティが入ったのは残念だが、やはりあの時の発言がまずかったか…。

「ルルネさん、いいんですか？」

「いいさ、私はあんたらと懇意だったからな。丁度よかつただけさ。」

「……ルルネさん。」

「おう、【劍姫】……。そ、そんなに顔を近づけなくても……あの怖いんですけど……。」

「ベルの暗殺はしてないんですよね？」

「あ、ああ！もちろんだ。していない、絶対にしてないって！これからもしないって！

(これももう5回目だけど……)」

アイズ……、まだ根に持っているな。

そろそろ、ここで気を引き締めるか。

「全員、気を引き締めろ。」

「「「……………」」」」

「各自、手筈通りに行動するように。アルガナ、君は黙って僕へついてきてくれ。指示は追ってする。」

「わかつた！お前に従おう！」

「リヴェリア、ガレス。あちらの方は頼む。」

「ああ、わかつた。」

「任せておけい。」

「戦争遊戯開始早々に、僕らは「ヘステイア・ファミリア」を強襲する！」



「何や…、ドチビ2号。何しに来たんや。」

「2号!?（あ、カーリーのことか…）」

「ふん。『闘争』を求めにきたのよ。悪いかのう?」

「ああ、悪い。やから、はよ帰れ! シツシツ!」

「そういうワケにはいかんわ。既にアルガナがお主んどこへ入ったからのう。」

「は? …… ホンマや。何勝手なコトをしとんねん!」

「仕方がなからう。全てはお主のせいではないか! 儂のファミリアを骨抜きにしおつて
!」

「自業自得やろ…。ウチに責任押し付けんな、ボケ!」

「カツカツカツ…。まあ、いいではないか。本来の目的がようやく見えるからのう。」

「本来の目的やと? おい…ドチビ2号。何を考えとんねん?」

「【闘争】に決まつとろうが! オラリオ、いや世界最強を決める真の【闘争】がいよいよ
始まるではないか! これを見ずにして、【闘争】を司る儂の名が廃るではないか!」

「廃つてもええから、はよ帰れ。」

「つれないやつじやのう…。のう? オリンポス最強の大女神よ。」

「「……………」」

「……………え？ボクのこと？」

「お主の他に誰がおるんじや…。あんなことをしておいて、すつとぼけるとはのう。」

「いやあ…。悪かったねえ、カーリー。」

「おい…。ドチビ。「ん？」「白い方や！」「白い方!?!」何でこの黒い方と「黒い方じやと!?!」

何やつとんねん?！」

「え？あ、カーリーののこと？パールから聞いているから、ちよつと話ただけだよ。」

「…ちよつとどころではないじやろうが…。まあ、いいわ。見よ、そろそろ始まるぞ。」

「戦争遊戯まで残り30分です！こちらの実況は、向こうには届きません！脱落者の連

絡だけです！始まる前に、各陣営への説明をさせていただきます！」

第131話 美神、口論。

まさか、ベルがゼウスとヘラの眷属の子だったなんて。

ベルの身元をもっと調べておくんだったわ…。

ベルを守るためにも。

けど、そんなの関係ないわ。

私の『伴侶』が何者であろうが、ベルはベル。

それでいい。

けど、ゼウスは絶対に許さない。

必ず探し出して、生き地獄を味わせてあげる。

…ヘラには劣るかもしれないけど。

けど…、ゼウスと共に醜聞をまいたあの子の息子というのが、信じられないわね。

母親に生き写しだと、ミアハとデイアンケヒトは言っているけど…。

体は父親譲りなら、何でまだ未精通なのよ？

偏りすぎてないかしら…？

そろそろ始まるわね…。

「いよいよ『伴侶』がこの手に入ると思うと、感慨深いわね。」

「ふふふ、フレイヤ。これでわかったかしら?」

アストレア……。

「ええ、よくわかったわ。5年前、既にベルに会っていたとはね。」

「そうよ。私が、ベルの、最初の、女の人よ。」

「(ムカツ) …へえ、9歳の子に?随分と範囲が広くなったわね?アストレア。」

「ベルだけよ。二ヶ月も、二人つきりで、過ごしたわ。」

二人つきりですって!?!ゼウスは何をしていたのよ!

絶対に探し出してやるわ!

「……5年前の話よね?今じゃないわ。ベルが駆け出しのころからずっと見てきたのは私よ。」

「…振られたくせに未練がましいわよ、フレイヤ。美の神が泣くわよ?」

「…振られていないわ。離れ離れになっただけよ。」

「……………」

「「ふふふふふ。」」

「「…怖い。」」

「おい、ドチビー号…なんとかせえ、アレを。それにドチビー号の存在忘れとるで。」

「アストレアは、もうベルくんを溺愛しているから仕方がないさ。ボクはもう慣れたよ。あ、カーリー！キミの好きな『闘争』だけ？ホラ、楽しんできなよ！」

「アレは『闘争』と言わん！儂を巻き込むのはやめい！あ、押すではない！」
何か外野がうるさいわね。

…ベルの周りにいる女性、どんどん増えてないかしら？

「では、今からルールと各陣営の説明を始めます！」

「『一』」

ルールね…聞き飽きたけど、ヘステイアの陣営には興味あるわね。

「皆さん、見えますでしょうか！リヴィラの南にある、大きな三角形のような形を。あそこが今回の戦争遊戯の会場です！」

ワアアアアア！

「三角形のそれぞれの頂点が、『ヘステイア・ファミリア』・『フレイヤ・ファミリア』・『ロキ・ファミリア』です！」

「ヘルメスよ。ルールだが、皆へ説明した方がいいのではないか？」

「(いい合の手だぜ、タケミカツチ！) そうですね！ルールは至つて、簡単！各陣営にあるファミリアの旗を奪うか燃やせば勝ちです！見えるでしょうか、それぞれの角でたなびいている旗を！」

「戦闘は、あの三角形の中でなければならぬのか？」

「はい、そうです！戦闘はあの三角形の中でやらなければなりません！移動は三角形から出てもいいのですが、攻撃は三角形の中でやらなければなりません！」

ゼウスとヘラの時は、長方形だったわね。

今回は三角形ね、初と言えば初ね。

「なるほどな。それで、三角形の外にあるでかい檻みたいなのは何なのだ？」

「はい、あの檻は強制アウトした人が入るところです。ちなみにあの檻は治療魔道具です。死にかけの人が入ると徐々に回復するといふものです！万一を考えて、「ディアンケヒト・ファミリア」団長〔戦場の聖女〕、「フレイヤ・ファミリア」の〔黄金の魔女〕、

「ミアハ・ファミリア」団長〔医神の忠犬〕、同じく〔悲観者〕が傍にいます！」

「ほう、なるほどな。命に関わる事態は避けられるな。だが、強制アウトはどのように判断するのだ？」

「はい！参加者の首についている首輪が見えますでしょうか！アレが今回の肝です。気絶・精神疲弊・死から数歩手前だと強制アウトさせられ、あの檻の中に入ります！」

「ほう、安全については問題ないのだな。だが、本当に大丈夫なのか？」

「心配はいりません！この『旗争奪戦』は、とあるファミリアたちが雌雄を決めるときに何回も繰り返され、その時に使用したのがあの魔道具なのです！念の為、安全確認は済

んでおります！」

「…その安全確認は、どのようにしてやったのかは聞かないでおこう。なるほど、ルールと安全についてはわかった。皆も分かったかな？」

ワアアアアア！

うまいわね…。ヘルメスはともかく、タケミカツチまでとは意外だわ。

「…ヘルメスもそうだけど、タケミカツチもうまいわね。」

「もう、これからの戦争遊戯はあの二人でいいんじゃないかしら？」

「そやな、アポロンの時はガネーシャが解説にならんかったからな。……………あれ？ガネーシャは？妙に静かやな。」

「……………」

「ガネーシャ？大丈夫かい？」

「ガネーシャ…、まだシヨック…。」

「そ、そうかい。まあ、仕方がないよ。ボクもさ…。こういう時はどーにもなーれと開き直った方がいいさ（でなきや、やってられないよ！コンチクシヨー！）。」

「…そうだな、そうだな！よし！俺がガネーシャだあああああ！」

五月蠅いわね…。

せつかく静かになったというのに。

「ヘステイア…余計なことを。」

「五月蠅いわい。」

「静かにしてちょうだい…。」

「な、何だよ！ボ、ボクが悪いのかい！」

「元気づける神を間違っているわよ。」

「では、各陣営の説明に移ります！」

第132話 武神、解説。

「まず、『ロキ・ファミリア』からです！ ほぼ全員の団員が集まっていますね！ あ、『カーリー・ファミリア』もいますね！ どう見ますか、タケミカヅチさん！」

タケミカヅチさん：ヘルメスめ、調子にノッているようだな。

まあ、いい。

俺も合わせるとしよう。

「ふむ、『カーリー・ファミリア』か。闘争に明け暮れたファミリアと聞く。対人戦でかなりの強さを発揮するだろうな。一方、『ロキ・ファミリア』は『勇者』『重傑』『九魔姫』を中心とした組織力が売りなのだが、『カーリー・ファミリア』との連携でどこまでいか、だな。」

「そうですね！ ですが、団長の『勇者』に絶対服従のようですので心配は無用らしいですよ。」

「ほう。では、『勇者』の指揮次第となるな。どつちのファミリアへ攻め込むのかだな。」

「なるほど！ ……タケミカヅチさんはどうみますか？」

「あの様子から見ると…、旗はレベル4を中心とした子で守り…む？ 『カーリー・ファミ

リア」のほとんどが加わっているな。旗の防御がより強固になったな。攻め手は…、二手に分かれるようだな。」

【勇者】を中心とした少数部隊と…、【重傑】と【九魔姫】が率いる精鋭部隊か…。

ヘステイアのところは、舐められているのか？

いや…、速攻で奪う気か。

「二手ですか？」

「聞こうと思ったのだが、本来『旗争奪戦』は2つのファミリアが対象だが、今回は3つ。それはどうなるのだ？」

「はい、お答えしましょう！奪われた旗のファミリアは、奪った旗の傘下に下ることになります！」

「なるほどな…。ということは、この戦争遊戯は2対1になるか全滅させて1対1に持ち込むかだな。」

「あ、そうですね！全滅させて正々堂々と1対1となる手もありますね！」

「しかし、全滅させるにはそれなりの労力と時間が必要となる。なので、速攻で旗を燃やした方が楽だし早い。【勇者】はそれを狙っているかもしれないな。」

「なるほど！そうになると、時間との勝負になりますね。遅ければ遅いほど…」

「ますます不利になるわけだ。シンプルだが、旗を早く奪うかにかかっている。」

「ありがとうございます！では、『フレイヤ・ファミリア』はいかがでしょうか？」
「フレイヤ・ファミリア」は…。

なるほど、突出とした『個』らしいな。

「一言で言うと『フレイヤ・ファミリア』らしいな。」

「と、言いますと？」

「ああ、すまん。組織力に秀でた『ロキ・ファミリア』と違い、『フレイヤ・ファミリア』は突出とした『個』が特徴だ。旗を守っているのがレベル7の『小巨人』。そして『ヘステイア・ファミリア』に向かって堂々と立っているレベル8、『猛者』。他は、『ロキ・ファミリア』に向かって陣を整えている。」

「ああ…、確かにわかりやすいですね！」

「これは『ヘステイア・ファミリア』にとって苦しい戦いになるな。なにせ二方面から各ファミリアの団長が直々に向かってくるのだから。」

「確かに！」

「いずれにしろ、各ファミリアの陣地が交わるところが激戦地となるのは間違いない。」

「ありがとうございます！最後に『ヘステイア・ファミリア』です！」

「ヘステイア・ファミリア」は…全員頭からフードとマントで覆っているからわからんな。

いや…足のところだけ見えるな。頭隠して尻隠さずか。

へスティアらしいと言えばらしいが…。

「円陣を組んでいますね。これでは誰が誰だかわかりませんね。」

「いや…、よく見れば膝から下が丸見えだ。大体は特定できる。」

「あ！確かにそうですね！（本当にいるのかい？信じられないが…、今は見るしかないな）」

「だが…、旗を守っている3人の内2人はかなりの凄腕だな。…ヘルメス、【猛者】と【小巨人】以外にレベル7以上はいないよな？」

あの2人の立ちこなしだけで、かなりできる。

ステータスは【猛者】が上だが、あの2人の前では蹂躪されるだろう。

それほどの腕前だとわかる。

「二人、【ナイト・オブ・ナイト】がいますが、オラリオへ来たという連絡はありません。それは、オレが保証しよう（あー、確かに。あの感じ…本当だったんだ。どうやって…？）あの2人がどうかしましたか？」

「…あの立ちこなし…隙があるようで隙がない。あの2人がいる限り、旗は揺らぐことはないだろう。レベル8となった【猛者】が相手でもわからんな。」

「そこまでですか？（そりゃ、そうだよな）。【ゼウス・ファミリア】団長のマキシムで

も倒せなかったんだからね、あの2人。そこへ彼女がいたら…完全な鉄壁じゃん！」
「ヘスティアには悪いが、あの2人以外が全滅したとしてもあの2人がいる限り旗は揺らがない。あの2人をどう崩すかが鍵だ。」

「(うわー、さすが武の神。そこまで見抜けるんだ…)なるほど！」

「ヘルメス、『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』と違い、『ヘスティア・ファミリア』は番号で見分けるんだよな？」

「はい、そうです！それがヘスティアからの条件だそうです。」

「ふむ、だが。まあ、一見だけであの内の一人在小人族だからリルカ・アーデとわかるが。」

「ええ、そうですね！(この名簿が本当だとしたら…、彼女はどこにいるんだい?)」
ヘルメス…?この名簿を穴あくように見つめているな。

この名簿がどうかしたのか？

何か気になる点でもあったのか？

「(はっ!)ゴホン…、タケミカツチさんの予想ではどうなると思いますか？」

「そうだな…。順当に言えば『フレイヤ・ファミリア』だが、戦術がハマれば『ロキ・ファミリア』。『ヘスティア・ファミリア』はあの二人…いや『白兔の脚』次第だろうな。」

「『白兔の脚』はレベル5ですが？他の方と比べると圧倒的なレベル差がありますか。」

「ベル……いや『白兔の脚』は、今まで自分よりずっと格上の敵を倒してきた。我々の予想をことごとく覆ってきた。今回も大番狂わせが起こるかもしれない。一週間前の記者会見で、ポーカードでファイブカードを出したようにな。」

「あれには驚きましたね！ポーカードで一番確率が低い役を全部チェンジで揃えるんですから！」

「全くだ。なので『白兔の脚』の運、そしてこの短期間でどこまで強くなれたかにかかっているだろうな。」

あの立ちこなしを見ると、2週間前とは雲泥の差がある…。

よき師匠に恵まれたのか…？

命に聞いてもダンマリで教えてくれなかった。

何が起こったかはわからないが、『異端児』の件もあるし期待するでしょう。

………「ヘステイア・ファミリア」にファミリアの全財産を賭けているのでな。

数日前に命と春姫が、「ヘステイア・ファミリア」に全財産を賭けるよう強く迫ってきたのは驚いたがな。

一体、何があつたのだ？

第133話 猛者、激突。

ようやく、始まる…。

長い二週間だった…、

いや最初の一週間がすごく長く感じた。

ベルのせいではない、ということとはわかっている。

…ベルが折れれば、このようなことは起こらなかったのは事実だ。

だが、ベルは折れず信念を曲げず自分を貫いた。

非常に感嘆した。

旗争奪戦とはな…。

あいつらがしのぎを削った戦いが、今この場で始まる。

戦略は、俺一人で「ヘステイア・ファミア」を潰す。

旗はミア一人で十分だろう。

他は「ロキ・ファミア」に回す。

「ヘステイア・ファミア」に、レベル8の俺の進行を止められるわけがない。

まず相手にならんだろう。しかし、ベルは別だ。

レベル5にランクアップしたようだが、俺がレベル8に上がったことにより差をつけた。

だが、油断はできん。

あいつは常に格上と戦い、勝ってきたからだ。

遠目だが、旗に三人が守っているな。

：気のせいだろうか？どこかで会ったような感じがするのだが。

特に旗の横にいる二人は、かなりできる…。

フードと仮面をかぶっているからわからんが、確実に会っているはずだ。

それに何だ？

奴らの周りに大剣がいくつも突き刺さっているが…。

まあ、いい。

いずれにしろ、叩き潰すだけだ。

「オツタル。」

「ミアか。旗は頼む。」

「あいよ。アンタはあの旗を奪えばいい。：奪えるものならね。」

「どういう意味だ？」

「アンタがレベル8になろうが、アイツらには勝てないよ。アンタとアタシが組んでも

ね。」

「何だと…、あそこにいる奴らを知っているのか？」

「戦えばわかるさ。それよりあの坊主には気をつけな。数週間前のと比べ物にならないよ。」

「…百も承知だ。言われるまでもない。」

「そうかい。さてと…、アタシは旗を守る。アンタはさつさと行ってきな。」

「(ミアがここまで恐れるとは、あいつらは何者だ?) わかった…。」

ベルは…。あそこで円陣を組んでいるのうちどれかだな。

む…? 一人がフードと仮面を外したか。

ベルか。

…確かにミアの言う通り、2週間前のと明らかに違う。

うちにいた時よりも、佇まいがかなり洗練されている。

誰が鍛えた?

【疾風】…いや今は【薫風】か?

いや、あの感じは【薫風】より遥かに上だ。

ミアの言う通り、油断はできんな…。

他はフードと仮面をかぶったままか。

まあ、レベル差もあり相手にはならんだろうな。

来たら来たで、この剛剣で叩き潰すのみ。

「おい、オツタル。」

「…アレンか。後は頼む。」

「言われるまでもねえ。さっさと片付けてくる。…手こずるんじゃないぞ。」

「わかつている。」

「…あの愚図共を不用意に傷つけるな。店の人手が減ると困る。それだけだ。」

…アレン。あいつらのことを意外と気にかけているんだな。

と、言おうと思ったがやめた。

開始前に揉めるのも面倒だ。

ベルを再び見たが、やはり違う。

明らかに『強者』の雰囲気をもとっている。

この2週間、誰によって鍛えられた？

1週間前の記者会見では、俺が精神的に疲弊していたから気づかなかったが…。

フレイヤ様の状況も知らないくらい、誰と特訓していたのだ？

フィンたちか？

いや、記者会見の様子からあり得ない。

まあ、いい。…剣を交えればわかることだ。

それより、旗の横にいるあの二人だ。

ミアが恐れるぐらいなのか…？

レベル8となった俺とレベル7となったミアが組んでも勝てないだと？

一体、何者なのだ？

『本部より、開始まで残り数秒です！位置について下さい！』

む。…この一戦で、決まる。

ゴオオオオオオン！

銅鑼がなったか。

さて、行くか。……なんだと？

ベル一人がこちらへ向かって…いや俺にか!?

たった一人でか！

舐め…いや、確かにその方がいい。

他の奴らでは、ベルの足手まといになる。

なら、受けて立とう。

丁度、陣地の境目か。

「…一週間前に全力を傾けてかかってこいと言ったが、まさかお前一人だけとはな。」

「…オツタルさんとは直接戦ったことはありませんが、よろしくお願いします！」

「…言葉は不要だ。お前の全力を俺にぶつけてみる。かかってこい！ベル・クラネル！」
「はい！行きます！」

あちらも大剣か。だが、俺の『破黒の大剣』には敵うまい。

一撃で倒れてくれるなよ…？

「はあああああつ！」

「！」

何だと！レベル5にしては速すぎる！

くっ、初撃はあちらか。

ドゴオオオオオオン！

ぐうううっ！

馬鹿な！レベル8の俺がわずかに押されただと！

どれだけの隠れステータスがあったのだ！？

ガン！キン！

…っ！馬鹿な！

数週間前の太刀筋が明らかに違う！

誰だ！こいつを鍛えたのは！

「はああっ！」

「何っ！」

ギン！ギン！ギン！ギン！

：俺は夢でも見ているのか？

今の太刀筋は…、いや間違えようがない。

ザルドの太刀筋そのものだ…。

「オツタル！何をポケットとしてんだいっ！」

「!？」

いかん。俺としたことが動揺してしまった。

ミア、感謝する。

まずは、弾き飛ばす！

「ぬうん！」

「くっ！」

ふー…。いかん。

どこかで俺はお前を見下していたようだ。

お前は、もう半年経ったばかりの冒険者ではない。

俺を脅かす『強者』だ。

「すまん、ベル。俺はお前に詫びなければならぬ。お前が全力を向けて立ち向かうなら、俺もそれに応え全力で受けて立たねばならなかった。ここから仕切り直した。」

「……はいつ！」

「行くぞ！ベル！」

ガギイン！ゴン！キン！ドオン！

レベル5？そんなの考えるな！

今は、こいつとの戦いだけを考えてろ！

7年前の時と同じように！

「はあっ！」

「ぬん！」

ガギイイイン！

ピキッ

！む、ベルの大剣の耐久が耐えきれんか……。

このままいくと、砕け散るか……。

ガン！

ピシピシ……

キン！カン！

ピキキ…。

ガツシャーン！

ここまでか…。何っ！

大剣が飛んできただと！

なっ…。後ろを見ずに受け止めただと…。

「はあああああっ！」

「くっ！」

ギンツ！

あの距離からここまで投げるとは…。何という力なのだ。

そうか…。あの突き刺さった大剣はこのためだったのか！

いや…。タイミングといい、ベルが受け止めやすいように投げるとは…。

ミアの言う通り、あの二人は只者ではない！

「…っ！はあっ！」

「！ちいっ！」

ズンツ！

ザルドの太刀筋だけでない…。

マキシムの太刀筋もだ…。

誰だ！誰に教わった！

太刀筋を知っている奴がこの世にいるはずがない！

「ぬんっ！」

「ぐうううっ！」

…受け流しも完璧だ。

やめよう。目の前にいるベルは、2週間前のベルではない。

このままでは、「アポロン・ファミリア」の「太陽の寵童」の二の舞だ。

…それに徐々に攻撃力と速さが増してきている。

もう、こいつはレベル5になったばかりではない。

アレンやヘディンでは、もう相手にならないだろう。

レベルという枠を超えた奴だ。

ならば、見極めてやる。

フレイヤ様の『伴侶』としてふさわしいのか。

そして…、あいつらが求めた「最後の英雄」にふさわしいのか。

この一戦で見極める！

「やあああっ！」

「ぬおおおっ！」

第134話 神々、興奮。

「残り数秒です！…5，4，3，2，1，0！戦争遊戯開始です！」

ワアアアアアアアア！

「さあ、始まりました！全ファミリア行動開始しました！」

「そうだな、旗を取れば勝ちだからスピードがものを言うだろうな。」

「そうですね、あ。さっき円陣を組んだままの【ヘステイア・ファミリア】が二手にわかれました！」

「ほう、二手に…。何だと？」

「これは…、フードと仮面を外した【白兔の脚】単身で【フレイヤ・ファミリア】へ突入しましたー！」

「何とまあ無謀な…いや、返ってその方がいいか。」

「どういふことでしょうか？」

「…【ヘステイア・ファミリア】の最大戦力は【白兔の脚】だ。強者には強者をぶつけるのが一番いい。被害が出たとしても一人だからな。時間稼ぎかもしれない。」

「なるほど！もう一方は…、ああつと！【勇者】率いる部隊と真つ向からぶつかりますね

「！」

「策を仕掛けないのか…？）レベルや人数を考えると「ヘスティア・ファミリア」が圧倒的な不利だな。」

「そうですね！あ！【白兔の脚】と【猛者】が接触しました！どうなる…え？」

うおおおおお！

「ほう、【白兔の脚】はレベル5になったばかりと聞いたが、【猛者】と渡り合っているな。」
「す、すみません。動きが早すぎて見えません…。タケミカツチさん、実況をお願いできませんか！」

「む？あ、ああ。…【白兔の脚】は手数だけではないな、太刀筋もいい。よほど教えた奴がよかったのだろう。一方、【猛者】はステータスの高さの売りにそれをものとしているが、【白兔の脚】の技がわずかに上回っているな…。いや、これは更に速くなっているな。」

「え、ええ？レ、レベル5なのにレベル8と渡り合っているのですか！」

「そうだ。いかなる強者でも相手の技が優れていれば、負けることもあり得るのだ。もちろん、技にステータスがついていけるかが条件だが、【白兔の脚】はまさにそのお手本といえよう。」

キヤアアアアア！ベル様ああああ！

「嘘だろ！この数週間でレベル8のオツタルくんに追いついたというのか！セバスとメイはどんな特訓をしたんだ！」は、はは。こ、これは驚きましたね。」

「ああ、そうだな。だが、これは【白兔の脚】の体力と時間の問題だな。あとは大剣の耐久力か。」

「どういうことでしょうか？」

「【猛者】の大剣はかなりの大業物だ。【白兔の脚】はいい大剣だが【猛者】の大剣には及ぶまい。このままでは…ほらな。」

「ああっと！【白兔の脚】の大剣が砕け散ったー！こここまでかー！あー！」

おとおおおおっ！

「ほう、【ヘスティア・ファミリア】の旗の守り手の一人が地面に突き刺している大剣を投げて、【白兔の脚】がそれを振り向かずそのままの勢いで大剣を受け取り攻撃したか。よほどお互いを信頼しあつてできないとでんな。」

「（この短期間で？ああ、ベルくんにとって家族だからなあ…）そうですね！見習うべきかもしれませんね。」

「…妙だな。あの猛攻でレベル差もあるのに【白兔の脚】の勢いが衰えるどころが増している。」

「ええっ！」

「これは、かなりの長期戦になるかもしれないな。おや、ヘスティアの部隊とロキの部隊がぶつかるようだぞ。」



くバベルにてく

「そんな…レベル8もあるオツタルと渡り合えるなんて…。」

「そんなのありえへんで…。おい、ドチビ一号！ズルな…んて」

「ズルと言ったかしら？ロキ？」

「ア、アストレア。その剣、隠し持っていたのかい？やめなよ…。」

「ロキ。「はいっ！」私の司る正義に誓って言うわ。ヘスティアも私もズルはしていないわ。」

「……スキル？ええ、それしかあり得ないわ。（あのスキルだけでも規格外なのに、更に何か強力なスキルが出たというの？）」

「……そうだとおっしゃるよ。」

「ひい…、怖かったわー。スキルって…どんだけ未知が入ってんねん、あの少年は。」

「未知か…まさにそうだね。ところで、ロキ。アレをなんとかしなよ。」

「ん？あー…あかん。もうハイテンションやわ。」

「ハハハハハ！何という『闘争』よ！素晴らしいぞ！儂が下界で降りた中で、一番じゃ

！嗚呼、このような『闘争』は天界でもなかなか見んぞ！そうじゃ、もつとやれい！

く大樹海からオラリオへ向かう途中く

「……………オリオン。」

（ようやく見つけた…、私のオリオン。）

「ア、アルテミス様？あのー、もしもし…？」

「あ、ダメ。これ、完全に恋する乙女の目だわ。」

「一週間前の記者会見からずっとその熱が長引いて、心ここにあらずという感じだったわね…。」

「アルテミス様によく恋が来たのは嬉しいが、これは…やばくないか？」

「「ヤバイ。」」

「それは置いといても、すごいわね、あの子…。半年でレベル5でも凄いのに、レベル8の【猛者】と渡り合っているわよ。」

「こりゃ、見た目を差し引いてもアルテミス様が惚れるのも無理ないわ（私もだけど、言うのが怖いわ…）」



く歌劇の国く

第135話 勇者、当惑。

……ベル・クラネルはオツタルの方へ行つたか。

僕らも舐められたものだな……いや、妥当だ。

レベル8となったオツタルに、最大戦力であるベル・クラネルをぶつけるのが最良だ。

……だが、7年前と違い彼らには3つもレベル差がある。

オツタルの圧勝で終わるだろう。

なら、早く降さなければならぬ。

【ヘステイア・ファミリア】を早々と降して合流し、オツタルたち【フレイヤ・ファミリア】に当たらなければならぬ。

それはリリルカ・アーデもわかっているはず。

こちらと手を組んで、【フレイヤ・ファミリア】に当たらなければ勝てないのはわかっているはず。

一体、何を考えているんだ？

まあ、いい。捕らえればわかることだ。

「団長！ 【ヘステイア・ファミリア】の部隊がこちらへ向かっているのを見えました！」

「ううー…、アルゴノウトくんが向こうへ行ったのはいいけど、できればアルゴノウトくんの仲間を傷つけないなあ。」

「あきらめろ、ティオナ。殺さないだけマシと思え。」

…こちらの部隊は、僕・ティオネ・ティオナ・アルガナの4人だけだ。

少ないが、レベルを考えても彼らにとっては過剰戦力だろう。

とりあえず、彼らがこちらへ向かってきたのは僥倖だ。

まず第一段階成功かな。

陣地の境目を中心に向かい合ったか…。

さて、降参をすすめようかな。

「言うまでもないが、降参してくれるかな？そちらはシャクティもいるようだが、こちらはレベル6が4枚。君たちがいくら来ようと勝ち目はない、妖術師がいてもだ。わかるだろう？リリルカ・アーデ。」

「……………」

「だんまりかい？なら、捕らえさせてもらうよ。まず、君たちのフードや仮面を剥がさせてもらおう。囲め、ティオネ、ティオナ、アルガナ。」

「…悪く思わないでね…。できるだけ傷つけないわ…。」

「ううー…やりたくないなあ…。そうだ！パーチエを相手にしよう。パーチエはどこー

「？」

「雑魚はいらん。バーチエー！出てこい！」

よし、四方を包囲したな。

まずはリリルカ・アーデを確保しよう。

彼女がベル・クラネルの次に厄介な存在なのだから。

後は時間を稼げば…、こちらの勝ちだ。

……？何故、妖術師を中心に方円の陣？

リリルカ・アーデを前線にだしてどうするんだ？

何かあるはずだ…僕らと同じく戦略を立てているのか？

いや、他に飛び入りも伏兵もない…。

気のせいかな。先に確保しよう。

「君らしくないね。前線に出てくるとは…失望したよ、リリルカ・アーデ。」

チャキ…。

!?チャクラムだと！

リリルカ・アーデはボウガン主体のはずだ。

この短期間で新たな武器を？付け焼き刃か？

彼女に期待しすぎたか…？

「悪いけど、そんな付け焼き刃じゃ…!?」

ヒュッ！ヒュッ！

！

キン！キン！

「……………」

馬鹿な！付け焼き刃じゃない！

今のは熟練とした技だ。

それに…あのチャクラムの形状…今の技は。

…ありえない！

いや…、彼女にはアレがあつたな。

「変身魔法かい？その【疾風】いや【薫風】に彼女の特徴や技を聞いたのかい？それで僕の動揺を招くつもりだったのかい？そんなの通用しないよ？」

「……………」

「残念だよ、リリルカ・アーデ。君に期待しすぎた僕が愚かだったようだ。もういい、退場させてもらおうよ。」

石突きで軽く打てば気絶するだろう。

さようなら。

ガキイツ!

!?

馬鹿な!彼女はレベル2になったばかりだ!
受け止められるわけがない!

この感じ…、レベル4!?

妖術か!いや…特徴の金色のオーラがない。

素だと!あり得ない!

「…へっ。あいつの言った通りだな。余程、あいつにご執心のようだなあ、勇者サマよ?
ロリコンとは知らなかったぜ。」

!?

馬鹿な…変身魔法はそこまで模倣できるのか…?

危険だ!早く倒さなければ!

「ロリコンですって(だと)!!」

「ちよつとー!ティオネー!アルガナー!集中しなよー!」

「らしくないぜえ?勇者サマ。そらよつ!」

なっ!?

ドガン!

これは…ライラの手製爆弾…。

間違いない！

ドガン！

くっ…!?

「テイオナ！テイオネ！アルガナ！もういい、全員強制アウトさせろ！ベル・クラネルさ
えいれればいい！」

「は、はい！」

「ええーっ！」

「わかった！」

「はあ。あいつらの言ってた通り、らしくないなあ。ちつとは頭冷やせや！」
ぐっ！

模倣魔法はここまで模倣できるのか！

しかし、この感じ…間違いない。

ライラ本人としか考えられない。

だが、彼女は5年前に死んだはずだ！

なぜ、今になって！

キン！ガン！ドン！

「ど、どうなってんのよ！こいつらはレベル4以下なのに！」

「ええーっ！何が起こっているのー！どうみてもレベル5はあるじゃん！」

「ぐっ！この感じ、バーチエか！」

何だと！

バーチエ・カリフやシャクティはわかる。

なぜ他は防げるんだ！

「余所見はいけないぜえ？」

しまった！懐に入られた！

だが、ライラだとしてもレベル6の僕に勝てるわけがない。

「さあて、勇者サマよ？ちつと付き合えよ。」

…間違いない。この至近距離で確信した。

リリルカ・アーデじゃない。

本物のライラ本人だ…。

僕の勘だけでなく体全体がそう告げている…。

え？付き合え…？

「デートへ行こうぜえ？」

!!!!

しまった！自爆か！

「デートだとお！そうはさせるかあ！」

「ちよ、ちよつとー！」

あっ………。

ドガガン！

第136話 千妖精、啞然。

うう…何か騙しているようで罪悪感が…。

「レフイーヤ、大丈夫か？安心しろよ、このあたりはあたしがよく知っているから、心配はいらないぜー！」

「は、はい。」

……………今、私は戦争遊戯の戦場である三角形の外を迂回しています。

【ヘスティア・ファミリア】の背後を突き、旗を燃やすためです。

ルルネさんと私の二人だけの別働隊です。

団長たちの部隊は囿です。【ヘスティア・ファミリア】をおびき出すための。

そして、私は【ヘスティア・ファミリア】の旗を魔法で燃やすための本命です。

うう…、重大な役目です…。

仕方がありません。

これもベル・クラネルを助けるためです！

【フレイヤ・ファミリア】を倒すためには、私たち【ロキ・ファミリア】と共闘しなければなりません。

しかし、それもギルド長ロイマンによって阻まれ、「ヘスティア・ファミリア」へ戦争遊戯を仕掛ける形になってしまいました。

なので、一旦「ヘスティア・ファミリア」を降し、傘下に置かなければなりません。……釈然としませんが、「ヘスティア・ファミリア」に私達と同等の力がない限りその手しかないでしょう。

そういうえば記者会見の2日前に、ギルドへ文句言おうとした団長たちが疲弊して帰ってきましたが、何があつたのでしょうか？

リヴェリア様に聞きますと、

「聞かないでくれ……。頼む。」

と自室にこもり、ベル・クラネルの伝記を読んでいた。時間がたつにつれて、ようやく上機嫌になつてくれました。

あの本は癒されますからね！

ベル・クラネルの伝記すべて数十回くらい読みました！

…なるほど。そうだったんですね！

育児放棄したお祖父さん、許せません！

あんないい子を！……つて、違います！

そもそも、そのお祖父さんが元凶じゃないですか！

ベル・クラネルをあんな風に育てたのは！

今回の戦争遊戯で「ハスティア・ファミリア」を降した後、あの子は私の後輩として徹底的に指導します！

ええ！そうします！

隅から隅まで、一から教育し直します！

「おい？レフィーヤ、そろそろ着くぞー！」

「あ、はい！」

それにしても、団長はすごいですね。

旗にいる人をおびき出して、少人数となった拠点の旗を魔法で焼く案を考えつくなんて。

いえ……過去の戦争遊戯で、あるファミリアが考えついた案だそうです。

その案を改良して、団長自らが囷となるなんて、誰も考えないでしょうね！

あ、そろそろ着きますね。

「……ほとんど出払っているな。」

「ですね。旗を守っているのは、たったの3人ですか……。」

旗の両側に二人……。前方に1人。

不用心ですね。私達のところは数十人いるというのに。

「レベルを考えると、私とお前だけでも倒せそうだな。」

「ダメですよ！旗だけ燃やすよう、団長に言われているのですから！」

「へいへい、わかったよ。さっさとしようぜ（疫病神はいないな…、ホツ…）。」

さて…詠唱を始め…。

『速報です！』

「！」

『初の脱落者が出ました！』

「お！もう出たのか。どうせ、「ヘステイア・ファミリア」だろ。」

「そうですね（ベル・クラネルではありませんように）。」

『「ロキ・ファミリア」の【勇者】、「怒蛇」脱落！』

『「カーリー・ファミリア」の【女神の分身】脱落！』

「ええええええっ！」

な、な、何で！団長とティオネさんが！

しかもあのアルガナさんまでも!?

何が起こっているのですか！

『「アストレア・ファミリア」の【狡鼠】脱落！』

「!?……嘘だろ?何で…。」

「アストレア・ファミリア」の【狡鼠】って…誰ですか？」

【アストレア・ファミリア】って、この間公表があつたレベル5【薫風】とレベル1のセシルという子だけじゃないんですか？

「そんな馬鹿な…。【狡鼠】は5年前に死んだはずだ！」

「ええええっ！」

「数日前に、ヘルメス様の机上に置いてあつた名簿にはなかつたはずだ！死者が生き返つたというのか！」

「あわわわ…。何が起きているんでしょう…？」

「…考えるのは後だ！レフイーヤ！さつさと旗を燃やしてずらかろうぜ！今のうちに陣地に入ろうぜ！」

「あ、はい！」

陣地から攻撃しないと、反則負けになりますからね！

よし、ギリギリで陣地にいますね。

気づかれていませんね。

【ヘステティア・ファミリア】の皆さん、ごめんなさい…。

【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】

【アルクス・レイ】！

これで終わりです！

え……？

旗の前方にいた人がいつの間……？

あ、私の魔法が当たってしまおう！

……………。

え？私の魔法が…消えた？

「お、おい！レフイーヤ！何やってんだよ！」

「そんな…私の魔法が消えた…？いいえ！そんなはずがありません！」

なら、別の魔法を使うまでです！

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、

矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。 雨の如く降りそそぎ、

族どもを焼き払え】

【ヒュゼレイド・ファアラリカ】！

……………。

「ま、また！消えた！ど、どうして！」

「……………まさか。いや、今のは7年前の…あの時に似ている…。」

「ルルネさん？」

「そ、そんなのあり得ない！あの魔法を使う奴は死んだはずだ！【狡鼠】といい、何が起きているんだ！」

ルルネさん！

駄目だ、パニックっている！

いけません！私だけでも落ち着きましよう！

こ、こうなったらリヴエリア様の魔法を！

【ウィーシエの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい】

【エルフ・リング】

【間もなく、焔は放たれる。忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む。】

！

いつの間にか、物陰から人が！

ですが、間に合いませんよ！

【至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火。汝は業火の化身なり。】

【燃え尽きろ、外法の業】

【ウイル・オ・ウイスプ】

(え？短文詠唱？あ)

「は？」

ちゅどおおおおおん!!

第137話 道化神、放棄。

『「ロキ・ファミリア」の「千の妖精」脱落！』

『「ヘルメス・ファミリア」の「泥犬」脱落！』

「何や…何が起こっているんや…。」

嘘や…フィンが脱落者第一号なんて…。

別働隊作戦が失敗した上、レフィーヤの魔法がかき消されとるなんて…。

初っ端から台なしや！

「アルガナああああ！何をやつとるんじやあああつ！（アルガナ…役立たん奴らめ。あやつら全員を「ロキ・ファミリア」へ改宗させるか？あの「白兎の脚」を無理矢理拉致して、闘国で多くの子を孕ませて一からやり直ししよう。…あれ？あの小僧、最悪女の系譜を持つとると、アストレアが言っておったな……。え？あの小僧を拉致したら…最悪女が儂んどこ…闘国に来る？…あのメイド！嵌めおったなああああ！やられたわ！）」

うるさいわ！

そんなことはどうでもええねん！

なんかごちゃごちゃ考えとるみたいやが、それどころやない！

「はあ……。やはり、こうなったわね……。」

「仕方がないよ……。」

ドチビとアストレア、……絶対に何か知つとるな！

絶対に聞いたる！

「ドチビイイイ！」

「落ち着きなさい、ロキ……。」

……落ち着けるワケがないわあああ！

色ボケんところは被害ないから、そんなこと言えるんや！

おんどりやアアア……ひい。

「斬るわよ？」「ハイ……。」

キャラ、変わってへん？アストレア……。

怖いわ……。あの少年の影響なん？

それにココ、武器持ち込み禁止じゃ……？

「何だよ？ロキ？2号ならあつちだよ？」

「2号じゃと?!いい加減にせい！カーリーと呼ばんかい！」

「1号や1号！「無視じゃと?!」お前や！どないなつとんねん！なんでフィンが真つ先に

脱落してるんや！」

そや、納得できん！」

ウチんとこの団長やぞ！」

「何故つて…、アストレアの子のライラくんが自爆の道連れにそっちの【勇者】と【怒蛇】、カリーリーのところの【女神の分身】が脱落したただけだよ？」

「それや！それ！何で、アストレアんとこの【狡鼠】が生きとんねん！5年前に死んだはずやなかつたんか！」

「……死んだのは確かよ。どうせ、その経緯を言っても信じてくれないから、無駄よ。私でさえ、今でも信じられないんだから…はあ。」

は？え？どないなつとんねん？

「えーと？いきなり現れて、パツと生き返ったとでも？んな、アホな話あるか！」

そんなん、神でもできんわ！」

「……………端折つて言うと、そうなるわね。」

…え？マジ？

「……念のため聞くけど、神力は使うてへんよな？」

「当たり前じゃない、送還されるに決まってるでしょう。ベルがいるのにするわけがないじゃない。」

ブレへんな……。あの少年に依存しすぎとちやうん？

「例え、使えたとしてもそういうことはボクでもできないね。」

何……やと……。ドチビでもできんやと……。

もはや、神すら越えとるやんけ！

「……もしかして、ベルのスキルが関わっているのかしら？」

「……そうよ。これ以上は機密だから、ノーコメントね。」

「アストレア、何で君が言うんだい？ベル君はボクの眷属だぞー！」

非常に惜しいことをしてしもうたわ……。

……あん時の門番やつとつた入団希望者を探し出そかな？

キツチリ礼したるわ！

英雄の卵どころちやうわ！

未知もどえらい未知だけちやう！

バグってるのもびつちり詰まった子やんけ！

そんな子を追い出すなんて、何でそんな門番を立てたんやー！

ウチのアホー！

「ロキ……なんか悶え苦しんでいるんだけど？」

「ほつときなさい、ヘステイア。」

(ロキの気持ちわかるわ…。あの時逃した子がここまで来るなんて、誰も思わないでしょうね。)

「そのスキルだけではなさそうね。レベル8のオツタルと渡り合っているだもの。…何かあるわね？」

レアスキルコレクターかつ！

ウチんところにも何人かおるが、あの少年ほどとちやうわ！

「ノーコメントさっ！」

ホンマに、バグ中のバグそのものやんけ！

……………

………ヒヒヒ。

…これやから、下界はオモロいんや！

ただ、気になると言えば…。

「それもやが、レフィーヤの魔法をかき消した…いや無効化したアイツは何者やねん…。」

「【静寂】の魔法に似てるわね…。いえ、それより洗練されているわ。【静寂】に子はいないはず。一体何者なの？」

「ノーコメントさっ！」

ちっ…どんだけ切り札を隠しとんねん…。

フィンが脱落した上に別働隊が失敗した時点で、もうウチの負けやんけ！

リヴェリアたちがいくら頑張っても、色ボケんとこのオツタルとミア母ちゃんは越えられん。

ドチビンとこが、色ボケんとこに勝つのを祈るところ…。

ン？アレ？

…あの少年、糞爺と最悪女の系譜を受け継いでると言つとつたな？

まさか…いや…そんな。

あの旗を守つとる3人の内2人は…。

『なあ、ドチビ…。』

『何だよ。いい加減に戦争遊戯に集中しなよ。君の子も参加してるんだから。（ベル君の活躍を焼き付けておかないと！）』

『わーつとるわ！…ドチビンとこに最近、メイドと執事入らんかったか？』

『！（やはり気づいたね）……いるよ、と言つたらどうする？』

確定や！

あいつらが解放されて、あの少年におつた時点でウチらの負け確定やろ！

ただでさえ一人でもチートなのに、それが二人おつたら反則やろ…。

しかもあの少年の未知とバグが加わってしまったら、もうアカン！

2週間という時間を与えとったのが致命的や！

色ボケんところが拗ねとかなかつたら、すぐにでもやれたやろうに…。

「何かしら？…ジロジロと見て…。」

あー！もしかして、色ボケの痲癩が長引いたのはあいつらが…。

ファンクラブもあいつらの案なら、納得がいくわ…。

あの少年は全く知らんやろうな、あいつらが全力でサポートしてるんやから。

フィンの勘も、ある意味当たったわな。

それが何かわかれば、まだ勝ち目はあったんやろうな…。

いや、それもあの少年のバグか…。

あー！もうえーわ！

どーにもなーれ、や！

あいつらが手出ししないところを見ると、あの少年いやあの子達を鍛えるのがこの戦争遊戯の目的やろな…。

はあ…。

しやーない、ここは楽しませてもらうわー。

レベル差もあるこの戦争遊戯をどう覆すのかをな。

第138話 処女神、回想。

やはりロキ、セバスクんとメイくんに気づいたね。

まあ、ココまで来たらもう隠す必要ないよね。

はあ…ベル君にあのスキルが発現するなんて、人の子の想いは神すら越えることを思い知らされたよ。

いや、それはベル君だけだね。

あの子のあまりにも純粋な想いが、あのスキルを生んだんだ。

それが下界の可能性であり、ロキの言う通りの正に未知だね。

この2週間は濃かったなあ…。

最初の一週間は濃かったけど、特にこの一週間は濃すぎるよ！

一週間前のベル君を更新した時が、忘れられないよ。

（一週間前（記者会見後））

な、なんじゃああああ、コレはああああ！

「…神様？」

はっ！いけない！

気付かれないように…、

くーる！クールだ！

「あ、ああ。ちよつと待つてね。うん、あまり上がつてないね。もういいよ。」

「そうですか…。うう。それで本当に勝てるのかな…？」

うう…罪悪感に押しつぶされそうだ…。

ごめん！ベルくん！

君のためなんだ！許して！

「じゃあ、失礼します…。」

……………よし、ベルくんは行ったな…。

パンパン

「お呼びでしようか？」

「あ、今日はセバスくんだね？メイくんも呼んでくれる？緊急事態だつてね。」

「パンパン。」

うおっ！早っ！

「君たち…すごいね。つて、それどころじゃない！ベルくんに新たなスキルが出てきた

んだ！それがもうワケワカメなスキルなんだ！」

「落ち着いて下さい。ヘステイア様、まず坊ちやまのステータスをお見せできますかな？」

「すーはーすーはー…ふう、落ち着いた。うん、これだよ！」

ベル・クラネル

L v. 5

力：S 913 ↓SS 1006

耐久：SS 1003 ↓SSS 1115

器用：SS 1081 ↓SSS 1205

敏捷：SSS 1201 ↓SSS 1412

魔力：A 815 ↓S 958

幸運：E ↓D

耐異常：E ↓D

逃走：H

魅了：I

〈魔法〉

【ファイアボルト】

・速攻魔法

<スキル>

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上

【英雄願望】

- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

【闘牛本能】

- ・猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

【兎囲女達】

- ・女性限定（種族問わず）
 - ・慕われる女性が多ければ多いほど、全能力の高補正。
 - ・お互いの信頼が厚ければ厚いほど、お互いの全能力の超高補正。
- （※但し、同じファミリア内に限る。）

・女性からの愛情が深ければ深いほど、全能力の超高補正。
タイム・ラビット

【時駆白兎】

・場所は問わない。

・条件を満たせば、本人の意思に関係なく発動する。

「これはまた…。」

「本当に坊ちやまは、私達をどれだけ驚かせれば気が済むのでしょうか？」

「…意味わかるかい？」

全知無能であるボクでもわからないよ！

何だよ！【時駆白兔】タイム・ラビットって！

「全くわかりませんね…。『条件を満たせば、本人の意思に関係なく発動する』というのが引っかけりますね。つまり、突発的に起こることでしょうか？」

「そんなの…予想できないということじゃないか。」

「私は、スキル【時駆白兔】の『時駆』が気になります。時を駆ける？時間を巻き戻したり早送りしたりすることでしょうか？」

「時間を操るなんて…ボクら神、いや大神の中でも少数しかできないよ！」

時を操るなんて…もう神を越えているんじゃないか！

「ただ…このスキルが出たきっかけに心当たりがあります。」

「ええっ！それは何だい？」

「ああ…あのことですか。」

あのこと？

「ハスティア様。坊ちやまは一週間前にリリ嬢から、7年前の大抗争についてアルフィアお嬢様と【暴食】について聞かされたことを覚えておいでしょうか？」

「ああ……うん。」

「坊ちやまはあの日からずっと、「何で来てくれなかったんだろう？」「7年前の僕がしっかりとっていていれば、あの人達を止められたんじゃないの？」「7年前に戻る事ができたら、あの人達を止めて7年前の僕のところへ行かせたらいいのになあ……」と何度も何度も思っております。」

「……………っ！」

「私達は坊ちやまの記憶を毎日読んでいます。そのことを思わなかった日はここ一週間で一日もありませんでした。」

「恐らく、その悲痛な想いがこのスキルを生んだでしょう。ただ、どんなスキルかはわかりませんが……。」

……ベル君、君は……。

ベル君の家族への想いは並々ならぬのは知っている。

でも、スキル発現するほどとは思わなかったな……。

「戦闘に関するスキルではないことは確かです。」

「一度発動すれば、わかるかもしれません。」

「いずれにしろ…やってみないとわからないということか…。」

コンコン

「ん？はい。」

「春姫です。すみません、ハスティア様にお客様です。ベル様も知らせて間もなく来られます。」

「客？誰だい？」

「神ガネーシヤ様と、『ガネーシヤ・ファミリア』団長シヤクティ・ヴアルマ様の二名様です。」

「ガネーシヤが？どうしたんだろう？」

「更に団長も直々に？」

「…何でこんな時間に？」

「恐らく、戦争遊戯への不参加を表明しに来たのでしよう。」

「【勇者】が【象神の杖】へ圧力を、そしてオラリオの治安維持のためで不参加の表明を、直々に来られたのかと思います。」

「圧力って…、【勇者】ってそこまでするのかい？」

「今日の記者会見といい、ちよつと見損なつたよ。」

…治安維持のためなら仕方がないよね。

「わかったー。今から行くよ。」

「はい、応接室におられます。アストレア様とルウ様は既におられます。では、失礼します。」

ガネーシヤも大変だな……。

治安維持の方まで気を回さないといけないなんて。

「ヘステイア様、私共は坊ちやまのこのスキルについて調べます。」

「勘ですが、近いうちに発動するような気がします。」

「そっか！君たちに任せるよ。」

セバスクんとメイくん任せば、安心だね！

後日、ヘステイアは語った。

メイくんの勘は当たるね…。

近いうちどころじゃない…数十分後だったよ…。

第139話 白兔、発動I。

春姫さんから、ガネーシャ様とシャクテイさんが来たとの連絡から、応接室へ向かっている。

何の用なんだろう？

ステータスがあまり上がってないのは、シヨックだなあ。

今日だって、ポーカーで札を全部さらけ出すという失敗をってしまったし…。

まあ、その後に同じ数字が4つにジョーカーが揃ったから何とか勝てたけど。

みんな、大げさすぎない？

応接室に…あれ？話し声が…。

「そうですか…やはり不参加ですか。」

あ、ルウさんだ。

「ガネーシャ？治安維持が理由だけじゃないでしょう？他に何かあるでしょう？ねえ？」

レアお姉ちゃんだ…。

「ちよ、アストレア、やめなよ…。」

「い、いや……その……（怖い……）」

レアお姉ちゃん、また村にいた時と同じことをやっている……。早く止めないと……。

「……【ロキ・ファミリア】の【勇者】より「中立を保て」と脅しをかけられたんだ。」

「何ですって……!」

「……【勇者】も落ちたものね。」

フィンさんが!?

どうしてなんだろう……?

「あ……ベルさん。」

「あれ、カサンドラさん? どうしました?」

「あ、はい。メイ様より、お客様へお茶とお菓子をお持ちしましたので……。」

カサンドラさん、【ミアハ・ファミリア】から派遣されてきたんだよね!?

小間使いじゃないよ!

「あ! ベルさん。わ、私から言い出したんです。いつも厄介になっていることすし

……。」

「小間使いなことをさせて、ごめんなさい! あ、今開けますね!」

コンコン

「僕です、入ります。カサンドラさんもいます。」

「はーい、いーよ。」

ガチャ

「失礼します。」

「ベル・クラネル、この時間にすまない…」

『発動しました』

え？誰？

「はい？え？今、誰か言いましたあああああ！」

「は？」「え？」「なっ！」「ベル!？」

「べ、ベルくうん！」

いきなり、足元に穴がああああああ！

僕は穴に吸い込まれるよう、落ちていった。

わわわわわ！何？

声が出たと思ったら、いきなり足元に穴が開いて落ちるなんて！

くっ！早く体勢を整えないと…。

というか、どこまで落ちるの!?!コレ。

『爆発する建物から、重体となったアーデイ・ヴァルマを瓦礫から救い出した後、30秒以内に癒やせ』

え？誰ー！？

アーデイ・ヴァルマって…誰？

あ！光が見えた！

ドザアアア！

「ゲホツ…ゲホツ…うわっ火事!?え?どこ?ここは?」

「うう…。」

「うわっ!け、怪我人?は、早く助けないと…」

ドガーン!

「ば、爆発!?あつ!あの時の声に『爆発する建物』って…もしかしてここ?え?爆発する

の?ココ?」

ドガガーン!

「ひいつ!早くこの人を助けて外へ出ないと!」

レベル5の力で瓦礫に埋もれている、青い髪の女の人を急いで救い出した。

うわ…美人。いけない、いけない。

「はあっ…はあっ…。何とか救い出せた…。うっ…ひどい怪我。えつと…あ！リヴェリア様からいただいたエリクサーがポーチに入ったままだった！これで！」

そのエリクサーで、その女の人にぶっかけた。

「あ…う…。」

よかった、応急処置はこれで何とかかなりそうだ。

『ミツシヨンコンプリート！』

「え？みっしよおおおおんつてえええええ！」

また声が聞こえて、すぐまたさつきと同じ穴に吸い込まれるように落ちた。

穴の縁につかまろうと思ったけど、穴からの吸引力が強くダメだった！

せめて、その女の人でも…ダメだ！

「何が起こっているのとおおおお！」

僕にできるのは、その女の人がどこかへ飛んでいかないようしつかりと抱きしめるぐらいだった。

何が起きているのとおおお！？

ぐうううっ！

前後左右から引きちぎられるようだ！

放すものかああああ！

「あ……だ、誰……？」

「すみません！ちよつとトラブルがありますので、今は許してください！」

「は……やく逃げて……ここは爆発……」

「大丈夫です！爆発どころかここがどこか僕もわかりません！」

あ！光が見えた！

ドーン！

「うう……」

「え？ベル？さつき、下へ落ちていったよね？」

「え、ええ。落ちたはずですよ。何故上から落ちてくるのです？それにこの娘は？」

その声は……、レアお姉ちゃんとルウさん！

「え？あ！戻ってきたあああ！あ、カサンドラさん！すみません。怪我人です！早く治して下さい！」

「え？あ、はい！わかりました！」

「怪我人？誰……だ？ば、馬鹿な……」

「そ、そんな！」

「……嘘。」

「お、恩恵が……さ、再接続した……。」

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソールライト】

よし……！かなり治ってきた！

「……アストレア様、私は夢でも見ているのでしょうか？」

「ルウ……私もよ。」

「ま、まさか……そんな……。」

「…………あ、ありえん。」

あれ？皆さん、この女の人を知っている？

「う、ううん……。」

「あ、よかった！」

カサンドラのおかげで何とかかなりそうだ！

エリクサーを使つてしまったけど、怪我人を救うためならリヴェリア様も許してくれるよね？

「ベルくううん？誰だい？その娘は……？というか、君はどこへ行つてきたんだい！」

「わかりません！いきなり落ちたとおもったら、声がしてなんか爆発する建物の中に落

ちて、その女の人が瓦礫に埋もれて怪我をして、救い出してエリクサーかけたら、また声が出て落ちてここにいます！」

「説明ありがとう！……つて、わかるかあああああ！」

「ごめんなさあああああ！」

僕もわかりません！

「う……あれ？ここは……どこ？」

「あ！気づきましたか？ここは「惚れた……」え？」

「「え？」」

「私、アーディ・ヴァルマと言います！ねえ、君の名前教えて！付き合つて！結婚しよう！……うん、子供作ろう！」

「「ハア!？」」

「段階を多く超えていますううう！」

この人、シルさんより積極的すぎる！

あ！ちよ、ちよつと僕の手を胸に……。

「こ、こらーっ！ベルくんから離れるんだー！」

「きゃっ！あれ？初めて見る神様だ……。初めまして！アーディ・ヴァルマと言います！」

「う、うん……。」

「ところで……ここは……？あれ？お姉ちゃん？ガネーシャ様も？あ、……リオンだよね？アストレア様も！」

シヤクテイさんを……お姉ちゃん？

え？シヤクテイさんの妹さん!?

「……………ガネーシャ。本物か？」

「……アーデイの恩恵が……復活した。……再接続した。そんなのあり得ないはずだが、今ここにあり得ている！」

「……………アーデイ……なのですか？」

「？そうだよ、リオン。あれ？髪の毛切った？うわー、似合っているよ！」

「そ、そうですか……。……………アストレア様。」

「嘘は言つてないわ……。そんなの……あり得ないはずなのに、目の前になると……。」

どうしたんだろう？みんな……？

幽霊を見るかのように……？

「「??」」

僕と神様と、青い髪のお姉さん……アーデイさんと一緒に首かしげてた。

「……………ベル・クラネル。今回の戦争遊戯に我々【ガネーシャ・ファミリア】は、【ハステイア・ファミリア】に味方する。文句はないな？ガネーシャ？」

え？ドア越しだけど、不参加と言ったんじや…？

「……ああ。文句なんかあるもんか！あるわけがない！」

「すまないが、このバカ妹を早急に連れて帰ればならないのでな。礼は後日に必ずする。では、失礼する！行くぞ、ガネーシャ！」

「……ヘステイア、いやベル・クラネル。シャクテイの言う通り、礼はまたいずれ必ずする。ではな！」

「あ！ちよ、ちよつと待って、お姉ちゃん！」

「うるさい！さつきと来い！」

「まだ君の名前聞いてないー！また来るからねー！」

????

シャクテイさんは持っていたマントでアーデイさん？を覆って、そのまま出ていった。

ガネーシャ様と共に。

「何が起こっているのでしょうか？神様？」

「さ、さあ。(ガネーシャたち、さつき不参加表明したよね？何で？…あの青い髪の娘が関係しているのか？いや、さつきのベルくんを起こったことは一体…。)」

あれ？神様、何を考えているのですか？

「ルウさん？レアお姉ちゃん？さっきの女の人…アーディさんを知っているんですか？」

「……すみません、ベル。ちよつと現実を受け止められません。外の風に当たてきます……。」

「ごめんね、ベル。私もちよつと落ち着かせてくれるかしら？ルウ……私も付き合うわ。」

あれー？フラフラしてベランダへ…、大丈夫？

体調が悪かったら、カサンドラさんにお願いしよう。

ところで、さっきの声と穴は何だったんだろう？

第140話 象神詩、帰還。

「そんなに引つ張つたら痛いよ！お姉ちゃん！」

「うるさい！黙って来い！」

「……………」

うー、そんなに怒らなくても。

そりゃあ、あの幼い娘に不用意に近づいた私も悪いけど。

まさか、自爆攻撃してくるなんて…思わなかったもん…。

……………?

あれ？ここ、オラリオだよね？

私の知っているオラリオと違い、雰囲気は笑顔であふれて明るくなっている…？

うーん…どうなってるだろう？

あれ？ホームを通り過ぎた？

え？どこへ行くの？

「あれ？『アイアム・ガネーシャ』を通り過ぎたよう…どこへ行くの？」

「いいから、来い！」

お姉ちゃん…？どうしたの？

ここは共同墓地…。あれ、数が増えている…。

もうすぐ暗くなるのに…、いやだなあ…。

お姉ちゃん、ここへ連れてきてどうしたんだらう…？

ガネーシヤ様もいつもじやない雰囲気を纏っている…？

何があつたのかなあ…？

「…アーデイ、これを見ろ。」

「見ろつて…ただなのは…か。え？わ、私の名前？」

ど、どうして！わ、私の名前の墓があるの!?

「アーデイ…、お前は死んだはずだった…。」

「…え？」

死んだ…？

「覚えているか？お前が助けようとした幼い娘が、闇派閥の自爆攻撃をお前に仕掛けたことを。」

「う、うん…。」

覚えているよ、ついさっきのことだから…。

「あの時、お前は自爆攻撃によって吹き飛ばされ、崩壊する建物に押しつぶされたはずだった…。更に他の闇派閥の自爆が重なり、あの倉庫は爆発した。爆破と火事がようやく収まり、瓦礫を取り除いてお前を探したが肉片すらもなかった。それもそのはずだ。お前は、今ここにいるのだから。」

「ど、どういうこと!?!」

「わからない…わからないが…、お前は今ここにいる。ここに…っ!」

そう言いながら、私の肩を掴んだ。

「お、お姉ちゃん、落ち着いてよ。」

こんなに取り乱すお姉ちゃん、初めて見た…。

「落ち着けるものか!アーディ!今は…、あの日から7年経っているんだ!」

「な、7年!?!ど、どういうこと!?!」

何で、7年も経っているの!?!

「…:…:シャクテイ、アーディよ。これは俺の予測だが…、ベル・クラネルは何らかで7年の時を越えてアーディ、お前を救い出し今の時代へ連れて帰ったのだ。アーディ…:お前の恩恵が復活して俺と再接続したのが、何よりの証拠だ。絶対にあり得ぬことだが、目の前にするとさすがにな。」

「時を越えて…:。」

「…そんなことがあり得るのか？」

「わからぬ…。だがな、シヤクティ。お前も知っている通り、ベル・クラネルはこの半年で多くのあり得ないことを成してきただろう？…今回のこれは規格外だがな。…さすがのガネーシヤも超ビツクリだ。」

ガネーシヤ様がマジモードに…。

じゃあ、今は本当に7年後のオラリオ…？

なら、あの明るい雰囲気も納得できる。

「じゃ、じゃあ。私は死んだことになっていたの…？」

「そういうことになる…。【白兔の脚】いや、ベル・クラネルには、7年前から許可なく連れてきたことに対して文句言いたいが、今となつては感謝してもし足りないがな。」

「あの子、ベル・クラネルって言うんだ…。」

「…：気になるのは、そこなのか？はあ…：、お前は変わらんな。」

「お姉ちゃん、ごめんね。7年も心配かけて。私…：ダメな妹だね。」

「…：っ！う…：っ！」

「間もなく大雨が来るな…。」

「大雨？ガネーシヤ様、空には雲一つもないよ？…：きやつ！お姉ちゃん？」

お姉ちゃん？いきなり抱いて…。

…っ、泣いている…。

「アーディ…アーディ…アーディーッ！」

……………ごめん、本当に。

「…ごめん、本当にごめんなさい！お姉ちゃん！」

「うあああああああああああつ！」

「……………ベル・クラネル、感謝する。シャクティの7年も止まっていた時が、ようやく動き出したことを。」

「グスツ…グスツ…。」

「ふー…。だが、お前が戻ってくれて本当によかったよ。」

「うん！そっか…7年かあ…。あれ？私は15歳で死んだから、今は22歳？……………ううん！まだ15歳！」

「お前という奴は…。」

「ということはお姉ちゃんは…3「ん？」…何でもないです。」

そっか…だからお姉ちゃんどっか老けている感じが…。

「何か考えなかったか？ん？」

「ナンデモナイデス。」

「うむうむ！久々の姉妹の会話はいいものだ！さあ！アーデイ、次は俺の番だ！俺の胸へ飛び込んでこい！」

「それで、お姉ちゃん。7年間のことを詳しく聞きたいな。あの時のことも。」

「そうだな…だが、ここは人目につく。しばらくはフードを被ってホームにいる。」

「ええーっ！早くあの子のところへ行きたいんだけどな…。」

「しばらく待ってくれ。7年間のことももちろんだが、ホームにいる皆にも伝ええないとな。」

「そうだね！7年間も留守にしてたものね！あれ？ガネーシャ様？どうしたの？帰りますよー！」

「ガネーシャ…スルーされた…。だが、これがアーデイだな！」

…。
ホームへ帰ったら、イルタたちが私を見て大騒ぎし大泣きし、それが数時間も続いた

…。
そして、戦争遊戯に「ガネーシャ・ファミリア」が「ヘステイア・ファミリア」に味方することに反対するものはいなかった。

そして、私はお姉ちゃんから私が死んだということになった日から半年前までのことを聞いた。

「そっか…あの後に大抗争が起きたんだ…。」

「ああ…ある意味、お前が消えたのがあの時でよかつたかもしれん。あのままだとお前は間違いなく大怪我してたか死んでいたかもしれん。それぐらい…ひどい戦いだつた。」

死の七日間…。

相手があの最強の【ゼウス・ファミリア】の【暴食】と、最恐の【ヘラ・ファミリア】の【静寂】なんて…。

よく、みんな勝てたね…。

「そして、その2年後にアリーゼたちが…。」

「詳しいことはリオンが知っているが…な。」

リオンを除いて、全滅したなんて…。

あのアリーゼたちが、ジュラのような奴にやられるなんて信じられない。

「アストレア様がオラリオを出た後に、リオンが…。」

「お前がその場にいたなら、リオンを止められたかもな。だが、あの時のリオンはもう完全に復讐に染まっていた。私では…止められなかった。私は立場上手助けすることが

できず、物資援助しかなかった。」

「ううん、私でも無理だったかも。リオンは正義に対してストイックだったから…。特にアリーゼたちを慕っていたから。」

「そうだな…。」

リオンが暴走したおかげで、オラリオから闇派閥が消え笑顔と明るさが戻ってきた。

リオンは「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」ができなかったことを単独で成し遂げたんだ。

内容はともあれ、『暗黒期』を終わらせたのは事実なんだから。

「それより！あの子のことを、ベルくんのことを聞きたい！」

「……………ベル・クラネルのファンクラブの店がある…。団員の誰かが彼の伝記を持っていたはずだ…。」

「ええーっ！ファンクラブ!? そんなに人気なの!?! 行きたーい!」

「アーデイ…お前はまだ死んだことになっているんだ。無用の混乱は招かないでくれ…。」

「む…。伝記かあ…。え? 半年しか経ってないのに、伝記なの?」

「ああ…彼の活躍は私でも目を瞞るものばかりだ。アーデイ…お前も知っている『異端児』も彼を一番に慕っているんだ。」

「ええっ！あの『異端児』も!?ベルくん、すごい！」

「あの少年は一体何者だろうな…。ここ半年といい、お前を7年前から連れて帰ってきたことといい…。」

「いいんじゃない？お姉ちゃん。彼はオラリオ、ううん…世界が求めた英雄かもしれないよ！私を時の彼方から連れてきたようにね！」

ベルくん！君のことを色々と知りたいな！

そして、君の近くにいたいなあ…。

そうだ！

「お姉ちゃん…お願いがあるんだけど…。」

第141話 執事長、読取。

坊ちやまの身に何か起こったことから、すぐにメイと駆けつけました。

聞き耳立てたところ、状況は把握できませんでした。が全くわかりませんでした。

なので、神ガネーシャとシヤクテイ嬢が去った後に応接間へ入りました。

「何があったんだろう？？あ、セバス！メイ！」

「……………（一体何だ？あの穴は…………）」

ヘステイア様は何か深く考え込んでいますね。

坊ちやまに聞くより、記憶を見たほうが早いかもしれませんね。

「坊ちやま、何が起こったのでしょうか？」

「僕もわからないんだ……。端的に言うのと、いきなり穴が開いて落ちて、声がしてなんか爆発する建物の中に落ちて、その女の人が瓦礫に埋もれて怪我をしていて、救い出してエリクサーかけたら、また声がして穴に落ちてここにいるんだ……。わからないでしょ？」

……………本当にわかりませんな……。

……………声？ふむ……記憶を見てみますか？

「メイ、ハーブティーを4名分お願いします（神アストレアとルウ嬢が間もなく戻られま

すので)。」

「了解しました(セバス、詳細をお願いしますね)。」

さすがメイですな。

理解している人がいるのは手早く助かります。

「坊ちゃま、記憶を見てもよろしいでしょうか？その方が手っ取り早いと思います。」

「あ、そうだね！お願いするね！」

……ここまで無防備とは少々心配になりますな。

お嬢様方でしたら「触るな。触ったら壊す。」と言うというのに……。

では……。

……………！！

なるほど、そういうことでしたか……。

「セバス、何か分かった？」

「調べるのに時間がかかりますので、少々お待ち頂けますかな？」

「わかった！セバスに任せるね！」

……素直すぎるのも考えものですな。

坊ちゃまは、本当に守りがいのあるお方ですな。

おや、お戻りになりましたか。

「……整理できませんでしたが、ようやく落ち着きました……」

「思い返しても、あり得ないわ……。ガネーシヤは何か分かったかもしれないけど……」

坊ちやまは……メイの特製ドリンクで回復してもらいましょうか。

恐らく先程のでかかなりの精神力が削られています。

「お持ちいたしました。坊ちやまはこちらを。」

「？特製ドリンク？メイ、僕は別に疲れていないけど……」

「坊ちやまにはわからなくても、私にはわかります。精神力を大幅に削られています。」

「ええっ、そうなの？……そういえば何かダルいような。ありがとうね！メイ。」

さすがメイですな。

坊ちやまは特製ドリンクを飲まれて、いつものように彼女たちに抱えられていきま
した。

「ハステイア……どういうことなの？」

「待つてくれないか、アストレア。……セバスクン、何かわかったかい？」

「ええ、わかりました。その原因も。」

「何ですって!?!」「ええっ!」

「セバス、説明を。」

「単刀直入に言いますと、坊ちやまの先程発現したスキルが発動したためです。」

「スキル？」

「…やっぱりね。心当たりがあるとしたらそれしかないよね…。」

「なるほど。セバス、坊ちやまが経験なされたことを一からお願ひします。」

「了解しました。では…。」

坊ちやまが経験なされたことを説明しました。

「【時駆白兔】…ベルの悲痛な思いが生んだスキル…。」

「ヘステイア様、神アストレア、あの穴は何かわかりますでしょうか？」

「…ガネーシャは気づいているだろうね、あの穴は時空の穴に似ていた…いやそのものだ。」

「時空の穴ですって！そんなの…。」

「いいや、間違いない。ボクは見たことがあるんだ、かつて天界でクロノスが開けた穴だね。」

「では、神クロノスの仕業…？」

「わからない…。ボクの考察を言うよ。何か条件を満たすことで時空の穴が開いた。そしてミツシヨンというのが今の時代へ戻るための試練かもしれない。そのミツシヨン

をクリアしたことによりベルくんはアーデイくんを抱え、この時代に戻ってきたということになる。」

私の考えと一致します。

さすが、ヘステイア様ですね。

「……あり得ないわ。けど、アーデイは生きてこの時代へやってきた。事実よね……」

「……なら、納得できません。あの日……私はよく覚えてる。アーデイはあの建物の崩壊と共に爆破で肉片残らず消し飛んだ……と思っていました。ですが、ベルがあの時代のあの日に飛んで、アーデイを救い出し癒したことでこの時代へ連れて戻ってきました。あの時代のあの建物の瓦礫にアーデイがいないのなら、辻褄が合いません。」

「ルウ嬢はアーデイ嬢と仲が良かったのですか？」

「ええ、私の数少ない友人の1人でした……いえ、今も友人の1人です。」

友人ですか。それも条件に入るのでしょね。

あの場にいたのは、ヘステイア様・神ガネーシャ・神アストレア・シヤクティ嬢・ルウ嬢。そして、坊ちやまとカサンドラ嬢が入ったことによりスキルが発動したということですね。

条件はこの中にありそうですね。

「この一件、私共に預けていただけませんか？ 条件について確認したいため」

す。」

「そうだね。セバスくん…メイくん…、これはもう神の予測を超えているよ。何か協力できることがあつたら言つてね！」

「……私もまだまだ未熟だわ。はあ…とんでもないスキルだわ。」

「まだ受け止められないのですが…、今はアーデイが無事に生きていることを喜びたいと思います。よかつた…本当によかつた！」

「そうね…、アーデイが無事なのもそうだけど【ガネーシャ・ファミリア】がこちら側についたのは大きいわ。」

「そうだね！その前に言つとくよ…。ベルくんのあのスキルは一步間違えると、下界だけじゃない。天界も全てを巻き込むことになりかねない。」

「そうよね…。時空を越えるなんて、神すらできないのにただの純粋なあの子が発動するなんて…ベルの想いはどこまでなの…？」

「そうですね。」

「坊ちやまの純粋な想いは神すらも越えるでしょう。」

「才能がないどころじゃありません。」

「純粋たる想い…それが坊ちやまの才能でしょう。」

「このスキルについて、メイと共に研究しなければなりません。」

「心得ていますよ、セバス。」

…助かります。

坊ちやまはもはや私たちで押し量れません。

本当に、守りがいがある上に仕えがいがある御方です。

第142話 正義神、墓参。

昨日は神としても驚いたわね…。

はあ…ベルったら、あんなどんでもないスキルを発現するとは思わなかったわ。

時を越えるなんて…、あり得ないけど、実際にアーデイを連れてきたものね。

…家族への想い。

…やはり私は彼らを許せないわ。

このスキルも、ベルには言えないわね…。

本人も知らないスキルがどんどん発現するなんて、ヘステイアも罪悪感につぶされそうね。

同情するわ…。

コンコン

「?誰かしら?」

「メイでございませす。神アストレアに少々ご足労をお願い致します。ルウさんにも来ていただいています。」

「わかったわ。今から行くわ。」

もう、ベルのスキルを解析したのかしら?…早いわね
何故ルウも?

まあ、行けばわかるわね。

「朝早くからお越しいただき、ありがとうございます。」

「どうしたのかしら?」

「少々お待ちくださいませ。」

この中庭に、私・ヘスティア・ベル・ルウ・フェルズ・メイがいる。

何の用かしら?

「遅くなり申し訳ありません。アミッド嬢を連れてきました。」

「…おはようございます。」

「お、おはようございます。すみません!アミッドさん、うちのセバスがどうしても、
と、」

「…いえ、気にしないで下さい。セバスさん、ここで集まって何の用でしょうか?」

「…(おかしいですね。発動しませんね?)」

「…(まだ何か足りないでしょうか?)」

???

あら、「不冷」が来たわね？

「あー、ちよつといいか？ 椿から預かって来たんだが、その…ベルと【薫風】が戦ったモンスタードロップアイテムをな。椿が拾ったままなんだ。後でヘアアイストス様と椿が詫びにくるそうだ。」

「…ジャガーノートの…爪ですか…。」

長く、デカいわね…。

この爪が…私の子供たちを…。

「ルウさん…、この爪はルウさんの好きにして下さい。ルウさんが倒したのですから…。」

「いえ…、ベル。貴方がいなければジャガーノートを倒すこともできなかった。なので、それはベルが受け取って下さい。それに…私はそれを見たくもありませんので。」

「…：分かりました。なら、これはアリーゼさんたちの墓に供えましょう。仇は取った証ということで、どうでしょうか？」

「…：そうですね。すみません。時間を少々いただいてもいいでしょうか？ アリーゼたちの墓へ行きたいのですが。」

いい機会ね。私も行こうと思ってたわ。

戦争遊戯前に墓参りしておきたいわ。

「…………えーと？」

「ハスティア様、大変申し訳ありません。検証は失敗した模様です。」

「申し訳ありません。坊っちゃま。」

「あ、ううん！気にしないで！」

「すまないが、私も同行してもいいかね？戦場となるところを下見しておきたいのでね（アレらを仕掛けておきたいのもあるが）。」

「……私も同行してもよろしいでしょうか？神ヘルメスより戦争遊戯の治療担当を任せられましたので、愚者さんと同じ目的で下見したいのですが。」

「はい、構いません。アリーゼたちも賑やかな方が喜ぶでしょう。」

そうね。大所帯になるわね！

クノツソスを通して、セバスとメイによってすぐに18階層に着いた。

闇派閥がここを根城にして、大抗争を引き起こしていたとはね…。

【暴食】と【静寂】は暗にここを教えていたかもしれないわ。

「……ここです。アストレア様。セシルも連れてきたかたのですが、「どうしてもやることがあるのです。戦争遊戯後でお願いします！」と。」

「仕方がないわ。今は緊急時だもの。」

「ここへ来るのは…あの時以来ですね…。」

「!!そ、そそそうですね!」

「?あつ…!す、すすすみません!」

…何かあつたわね?

怪しいわ。

「神アストレア。ここで神威を解放するのはおやめくださいませ。」

「また、ダンジョンのイレギュラーが発生すると困ります。戦争遊戯の準備が台無しになります。」

…仕方がないわ。

帰ったら問い詰めましょう。

「みんな…長くお待たせしてすみません。アストレア様を連れてきました。…あの時のジャガーノートではありませんが、仇をとることができました。それがコレです…。」

「ルウ、ここにあるのは武器だけなのね?」

「はい…、あの時引き返して探したのですが、既にモンスターに食われたためありませんでした…。申し訳ありません。」

「責めているわけではないの。武器だけでもよく見つかったわね…。ルウ、ありがと

う。」

「いえ…。」

「皆、長く待たせてごめんなさいね。戦争遊戯後に、ちゃんとした花をたくさん供えてあげるから…。」

リリルカ・アーデに教えてもらった花屋で買った花を供えた。

武器だけなのは寂しいけど…。

「では、僕も花を…ええ？また？うわあああああ！」

「!?」「え！今、ここです!?!」

振り返ると、昨日の同じ穴が開いていた。

ベルはまたそこへ落ちたのだ。

「そういうことでしたか。」

「なるほど。それらが足りなかったのですね。」

「ベル・クラネルが消えた…?」

今度は何なの!?

「愚者！今の内に蘇生魔法の詠唱をお願いします！」

「な、何!」

「いいから早く!」

「わ、わかった！後で説明しろよ！」

【未踏の領域よ、禁忌の壁よ。今日この日、我が身は天の法典に背く。ピオスの蛇杖、サ
ルスの杯。治癒の権能をもつてしても届かざる汝の声よ、どうか待っていてほしい。王
の審判、断罪の雷霆。神の摂理に逆らい焼きつくされるといふのなら、自ら冥府へと赴
こう。】

分からないわよ！

神なのに、全く分からないとは自分が不甲斐ないわ！

第143話 白兔、発動Ⅱ

「うわあああああー！」

また、アーデイ？さんと同じように落ちた！

何？この穴は一体何なの？

『アリーゼ・ローヴェル、ゴジョウノ・輝夜、ライラの遺体の大部分を3分以内に回収せよ。』

「え？え？誰が言ってるのおおー！」

アリーゼって…ルウさんのいたファミリアの団長？

…え？遺体？

あ！光が見えた！

バツシャーン！

「ぶはっ…、ここはダンジョンの下層？…え？血がいつぱい！」

この血の海は…見覚えがある。

「ルドラ・ファミリア」のジュラ・バルマーによつて、召喚されたジャガーノートが現れた時の光景に似ている…。

え？あの時に…？

いや、違う。気配を感じない。

!!誰かいる！

「もしもし、だいじよ…うつ。死んでいる…。」

赤い髪の女性…、!!もしかしてこの人がアリーゼさん？

さっきの言葉を思い出せ！

『アリーゼ・ローヴェル、ゴジヨウノ・輝夜、ライラの遺体の大部分を3分以内に回収せよ。』

ルウさんは、遺体がなかったと言っていた。

なら！僕が持つて帰らないと！

「つて…バラバラになつててわからないけど、早く集めないと！ええつと…ゴジヨウノ・輝夜さん、ライラさんは…つて。時間がない！目につく人たちの首や胴体などを集めただけ…！」

僕は無我夢中で、バラバラになっていた人たちの首や胴体などを集めた。

けど、全部は集められなかった。下層の水にいくつか流された…。

うう…ごめんさい。

「ゼーゼー。こ、これでこのあたりにある遺体は最後つと…。」

『ミッシヨンコンプリート！』

「え？また！うわあああああ！」

僕はまた穴に落ちた。

「ぐううううつ！」

アーデイ？さんの時と同じく、前後左右に引つ張られてどこに向かっているかわからない！

バラバラになって持ちにくいけど、絶対に持つて帰る！

レアお姉ちゃんとルウさんのためにも！

「せめて、首と胴体だけは守る！」

三人分…しかないけど…。

これでいいのかな…？

あ！光が見えた！

ドーーーーーン！

「うう…？あ、戻れた…？」

「べ、ベル！………そ、それは！」

「アリーゼ…輝夜…ライラ！」

あ、やっぱりそうなんだ…。

「え？何で上から…。怪我人？いえ…もう。」

「愚者！早く蘇生魔法を！」

（今、やっている！）

【開け戒門、冥界の河を越えて。聞き入れよ、冥王よ。狂おしきこの冀求を。止まらぬ涙、散る慟哭。代償は既に支払った。光の道よ。定められた過去を生贄に、愚かな願望を照らしてほしい。嗚呼、私は振り返らない】

【ディア・オルフェウス】

この光は…ウィーネを生き返らせた時の…。

!!うまく行つて！お願い！

光はアリーゼさんたちを包み…ウィーネの時と同じく、欠損部分が再生した。

心臓の鼓動を感じる…体温も温かくなってきた。

よかった…うまく行つたんだ…。

ムニユ

「え？う、うわあつ！」

身体が再生したから、三人が僕を覆いかぶさるように…。

「むー！むー！むー！（誰かはがしてえええー）」

「坊ちやま、今お助けします。」

「！いけません！先程の光で冒険者達がこちらへ来ます！クノツソスへ運びます！」

「そんな…恩恵が復活した…再接続した…あり得ない…。」

「…何が起こつているのですか…？」

「はあはあ…ウィーネに続きうまくいったか…。やはり確率ということか…。いや、その前に何で【アストレア・ファミリア】の彼女たちが何故上から…？」

「アリーゼ？輝夜？ライラ？」

「全員、しっかりしなさい！話はクノツソスでします！今はこの場を離れることに集中しなさい！」

「…」

「ルウさん！貴女は神アストレアを担いでクノツソスへ至急！セバス！」

「承知している。愚者、アミッド嬢失礼。坊ちやま、動けますな？」

「う、うん。」

「至急、この場から離れます！今、私達が見られては戦争遊戯に影響が出ます！」

「！！！！」

そして、僕たちはすぐにその場を離れ、誰にも見られず無事にクノツソスへ着いた。

「「はあはあはあ……。」」

「何とか誰にも見られずにすみましたな。見られたら、口封じしなければなりませんでしたからな。」

怖っ！

本当にやる！セバスは！

「……何が起こっているのですか？説明していただけますか？」

「私にもだ……。何故、『紅正の花』と『大和竜胆』、『狡鼠』がベル・クラネルと共に上から降ってきたのだ？彼女たちは、5年前に下層で死んだはずではなかったのか？」

うん……何でかわからない……。

「ア、アストレア様……。」

「……何度も確認しても間違いないわ。アリーゼたちの恩恵が復活して、私と再接続したわ……。こんなことって……。」

……本当にアリーゼさんたちなんだ……。

一体何だろう、あの声とあの穴は……。

「どうやら、成功できたようですね。」

「ええ、足りなかったものがわかりました。」

！セバスとメイは何かを知っている……？

「セバス：メイ。何が起こったのか説明してくれる？」

『この場に起こった以上、最早坊ちやまを含めて隠すことはできませんな。』

『そうですね。』

「わかりました。アミツド嬢、愚者、口外無用でお願いします。でなければ…。」

「絶対に言いません（今更でしよう）！」

「ああ、もちろんだ。」

「え？セバス。僕には？」

「はい、坊ちやま。今から説明いたします。」

そして、セバスとメイは僕の新たに発現したスキル【時駆白兔】について教えてくれた。

第144話 聖女、診察。

私はベル・クラネルのスキル【時駆白兔】を聞いて、呆れた。

この人は、どれだけ規格外なのですか！

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持ち…、

死の病の抗体を持ち…、

冒険者になって半年すぎで、レベル5に第一級冒険者へ至り…、

半年間で多くのあり得ないことを成し遂げ…、

オラリオ一の人気者となり…、

記者会見後のポーカーで、全チエンジのファイブカードを出し…、

そして、時を越えて5年前に死んだ【アストレア・ファミリア】の彼女たちの遺体を

持ち帰った…。

もう、この人は【聖人】と称えてもいいのでは？

いえ、【神】とまつられても違和感がありませんね。

蘇生魔法を使った患者さんにも驚きましたが、ベル・クラネルがいないと不発になる

とのことですが…。

比べられたら私が矮小に見えます。

「…そっか。神様は僕に気を使って…。」

「その通りでございませう。坊ちやまは戦争遊戯に集中していただかなければなりませんから。」

「このスキルは坊ちやまが意識して出せるものではありません。なので、取り扱いは注意が必要のため、私達へお願いしたのです。」

その検証のために、私達が呼ばれたのですね。

事前に言われても、簡単には信じられませんね。

目の前にしない限り。

「【戦場の聖女】、…すみませんがアリーゼ達を診ていただけませんか?」

「あ、はい。わかりました。」

そうですね。彼女にしては信じられませんね。

ダンジョンで死んだと思われていた方々が、ベル・クラネルによってこの時代に連れられて、復活したのですから。

確認しましょうか…。

「脈は正常…、外傷なし…、神経などに異常はなし。至って健康そのものですね。まもなく目覚めるかと思えます。」

信じられませんね。四肢が欠損したというのに蘇生魔法はそれを再生できるのですか？

「そうですか…。ありがとうございます。信じられませんが、目の前にすると信じざるを得ませんね。はあ…。ベル、私は貴方にどれだけ借りを作ればいいのですか…。」

「はあ…。あの時のガナーシヤの気持ちが変わるわ。ベルは時を越え、アリーゼたちの遺体を持ち帰り愚者の魔法でベルの運によつて復活するなんて…。私とルウを含めて「アストレア・ファミリア」はベルに対して足を向けて寝られないわね。」

神でも予想はできませんね。

というか、こんなの予想できるわけがありません！

これも考えない方がいいですね。キリがありません！

私が非常に興味があるのは、愚者さんの蘇生魔法です。

「ウィーネの時が初だったが、連続で成功できるとはな…。本当にこの魔法は意味があつたのだな。」

「…そんなに確率が低いのですか？」

「……800年も生きてきて、救いたい命に対してしたことは数え切れないさ。すべてが失敗したため、スロットを埋める無駄な魔法だと思つていたがね…。まさか、確率がベル・クラネルが引き上げていたとは。」

……ベル・クラネルがいなければ、不発に終わるといふことですね。

ポーカードでファイブカードを全チェンジで出すような方なら、引き上げることができるといふことですか……。

診療所でお願ひしようと思ひますが……。

「アミッド嬢、残念ですがそれはご遠慮願ひます。」

「坊ちやまのスキルが、また発現するかわかりません。」

でしょうね。

何らかの条件が揃つてしまえば、また時を越えるかもしれませぬからね。

その影響が診療所を巻き込んで、たまつたものではありません。

「おや、もうすぐ目覚めるようですね。」

「!!」

「う、ううん……。」

赤い髪の女性……、アリーゼさんが目をさますようです。

問題はないようですね。

「うーん……、あれ？何でリオンがいるの？ダメじゃない！先に逝つたら。」

「……アリーゼ、なのですか？」

「リオン？頭でも打つたのかしら？この完璧美少女である私を忘れたのかしら？」

…この人は何を言っているのでしょうか？

「……アストレア様。」

「美少女に対しては、嘘を言っているわね。けど、その口調はアリーゼに間違いないわ。」
「ひどいわ！アストレア様！本当のことなのに……え？何でここにアストレア様がいるの？なんか暗いわね。天界ってこんなところなの？」

「……はあ。本当にアリーゼだわ。天界でもないわよ。現世よ、ただし数年後のね。」

「……え？どういうこと？あれ？私、あのモンスターに貫かれたはずよね？胸が小さく
なっているような気がするんだけど？」

「……アリーゼで間違いないようです。」

「……そうね。」

【紅正の花】 ってこういう方だったのですね…。

感動の再会が台無しです。

「む……うん？ここは……どこだ？……おい、リオン。何でお前が先に逝っているんだ？」

「……ふあくあ。あん？ここはダンジョンじゃねえのか？……アタシ言ったよな？生きるんだぞって。何でおめえがいるんだ？リオン？」

「……輝夜っ……ライラっ……！」

「……本当に生き返ったのね……。はあ……。」

「「生き返った？」」

「…ふう…。詳しいことは後で言います。アリーゼ、立てますか？」

「ええ！あら？リオン、髪の毛切ったのかしら？んしょつと…」

よかつたですね…。

「え？また？うわああああああ！」

「な！坊ちやま?!連続ですか！」

「そんな！また条件が揃ったのですか！」

……もう勘弁して下さい。

気にしないことにしたといっても、どうしても気にしてしまうじやありませんか！

恨みますよ！ベル・クラネル！

第145話 白兔、発動Ⅲ / 侍従長、冷静。

「うわあああああー！」

また、時空の穴に落ちた！

どうして！何で？

ルウさんとアリーゼさんが手を握っただけなのに！

『落下するアルフィアが、炎にくるまれる前に回収せよ』

え？これがセバスの言っていた試練？

…アルフィア？

確かセバスが言ってた、7年前の大抗争で闇派閥としてフィンさんたちへ託した僕の…お母さんのファミリアの人…だよな？

その人を…助ける？

あ！光だ！

ヒュルルル！

また落下してるううう！

うっ…熱い！

あ…。

僕の目の先には炎の海と…それに向かって灰色の髪をした女性が落ちていく…。

あの人…アルフィアさん…。

！いけない！絶対に助ける！

…駄目だ！

落下はあちらが先だから、追いつけない！

どうすれば…。

そうだ！ファイアボルトで噴射して加速すれば！

【ファイアボルト】！

よし！加速できた！

絶対に追いついて、助ける！

僕の家族を！

「嗚呼…妹よ。ようやく、そっちへ行くよ…。」

「駄目だ！」

「！」

「そっちへ行かないで！僕を…置いていかないで！」

「お前は…メーテリア？いや…違う…。」

【ファイアボルト】！ 【ファイアボルト】！

【ファイアボルト】！ 【ファイアボルト】！

「何故……ここに……。」

「絶対に助けるんだあああああ！」

僕はファイアボルトを連発して、やっとアルファイアさんへ追いついた。

「どうやって……。」

「ごめんなさい！ 詳しいことは後で話します！」

僕はアルファイアさんに追いついてしがみついた。

『ミツシヨンコンプリート！』

声が出て、目の前に炎の海に飲み込まれる寸前に、時空の穴へ落ちた。

ギリギリだった……。

「ぐうううううっ！」

また、先程と同じく前後左右に引っ張られてどこに向かっているかわからない！

「これが時空の穴の中……。」

「何だ……ここは。ダンジョンか？」

「いえ…時空の穴だそうです…。」

「もう、いいだろう…。手を放せ。」

「嫌だ！絶対に離すものか！もう…失いたくない！」

「！」

アルフィアさんは僕から引き離そうとしたが、僕はそうさせなかった。

「……………」

あ、光だ！

ドドーン！

「べ、ベル!!」

「今度は何?!…え?」

「え?何?さつき男の子が落ちて、上から降ってきたんだけど?」

「何が起こっているのだ…。」

「アタシに聞くなよ…。」

「あ…着いた…。」

「ここは…クノツソスカ。」

「アルフィア…お嬢様。」

「これは…。」

「何故、また落ちたのでしょうか？」

「わかりません。彼女たちの何かがありそれが揃ったと？」

「もうすぐ上から落ちてきますね。愚者、蘇生魔法は可能でしょうか？」

「無理だ…全精神力を使った。何とか動けるが、今日は使えない。」

「となると、アミッドさん。すみませんが、回復魔法の準備をお願いします。」

「…わかりました。私の魔法が必要ということですね。」

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。薬奏をここに。三百と六十と五の調べ。癒しの暦は万物救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操斂。呪いは彼方に、光の枢機へ。聖想の名をもって——私が癒す】

「おや、時空の穴が上に開きましたな。」

「誰を救い出したのでしょうかね。」

ドドーン！

「べ、ベル!？」

「今度は何なの!?!…え？」

「え? 何? さつき男の子が落ちて、上から降ってきたんだけど?」

「何が起こっているのだ…。」

「アタシに聞くなよ…。」

「あ…着いた……。」

「ここは…クノツソスか。」

【静寂】!?

「アルフィア…お嬢様。」

「これは…驚きましたね。セバス?」

「……………」

あまりのことにフリーズしていますね。

無理ありません。

坊ちやまは…精神疲弊ですか。

セバスを正常に戻すのが先ですね。

「セバス!しっかりしなさい!貴方の義娘でしょう!」

「!すみません、メイ。神ガネーシャや神アストレアの気持ちだが、ようやくわかりました。目の前にいるのは間違いない、アルフィアお嬢様です。」

「アミッドさん、彼女に魔法を。」

（【静寂】?本物ですか?ああ、もう!知りません!）

【ディア・フラータール】

『え!?何なの!?あの娘は…「ディアンケヒト・ファミリア」の…?あんなに大きかったっ

け?。」

『確かに、大きいですね。』

『お前ら…どこを見て言ってるんだよ…。』

随分と賑やかな方々ですね。

ルウさんと同じファミリアとは思えませんね。

「む…これは。回復魔法か。誰だ…? な! セ、セバス! メイ!」

「お久しぶりです。アルフィアお嬢様、15年ぶりでしょうか?」

「久しぶりですね、【静寂】。15年ぶりですね。」

…やはり、弱体化していますね。

『ア、アルフィア!? 何で? 2年前に死んだはずでしょ!?!』

『何がどうなっているのだ…。私達はあのモンスターにやられて死んだはずなのに、何

故生きているのだ? それに【静寂】も…。』

『もう、誰か説明してくれよ! おい、リオン! 説明しろ!』

『説明すると長くなります…。あちらが終わってからにします…。』

『……………アルフィア。』

「…何故、貴様らが…。! そうか、この子が…。」

「その通りでございます。」

すぐにわかりましたか。

さすが、「ヘラ・ファミリア」の幹部の一人だけありますね。

「説明しろ…。ぐつ、ゴホツゴホツ！」

「！いけません！今すぐ診療所へ運ばないと！」

「あの…その…私、例の特効薬を持っております…。」

「なんと！」

なるほど、アミッドさんが持っていた薬がキーの一つでしたか。

運がいいのか悪いのか…。

いえ、かえって手間が省けた分、運がいいというしかありませんね。

『気になったけど、あのお兄さんは誰？』

『私は、あのメイドの方が気になりますねえ。』

『もうアタシにはわかんねえよ。どうにでもしてくれよ。』

『アストレア様…。』

『今は、彼らを見守りましょう…。それよりベルは大丈夫かしら？』

『『『ベル？』』』

『ああ！もう！』

「それは僥倖でございます。厚くお礼を申し上げます。」

「アミツド嬢、それをいただけませんか？」

「あ、はい。どうぞ。3つ持っております。」

それを【静寂】に飲ませれば…。

「いらん…。それより説明だ。」

チツ…相変わらず嫌な女ですね。

「お断りします。今の私の主は坊ちやまでございます。メイ。」

「失礼します。【静寂】。」

「な、何を！ぐがっ…。」

…病で衰えていますね。

レベル6上位ぐらいですね。

「アルフィアお嬢様、これは死の病の特効薬です。ではグイツと行って下さい。」

「な…！ぐっ、ゴクゴク…：かはっ！貴様ら！」

「いかがでしょうか？」

「いかがも何も…：？体が…軽い。けだるさも不快さも…完全でないが3割以上なく

なっている…。」

どうやら成功できたようです。

「何故だ…何故！これをメーテリアへやらなかったのだ！」

「それは無理難題でございます。その特効薬は最近できたばかりです。」

「……説明しろ。特効薬はいい。何故、私がこの時代にここにいるのだ？」

「(さすがですね、少しは把握しましたか) そうですね。そちらのお嬢様方も含めて説明いたしましょう。」

彼女たちも数分前に復活したばかりですからね。

説明しなければなりません。

「あら、無視されているかと思つたわ！ 2年ぶりね、アルフィア！」

「小娘共か……。ということは、あの日から2年か。」

「いいえ、違います。大抗争から7年でございます。」

「「7年!?!」」

それは驚くでしょうね。

【静寂】にとつては7年、彼女たちにとつては5年ですからね。

「……ということは、この子は……14歳か。」

「おや、覚えておいででしたか。」

「忘れるはずがないだろう？ この子のことを。」

あれ程溺愛していた、坊ちゃんのお母様の子ですからね。

「……よく言えるわね、アルフィア。貴女たちが自分たちの身勝手に捨てたのに？」

「……神アストレアか。」

坊ちやまへの過保護ぶりが、火を吹きましたか…。

少々面倒なことになりましたね。

『ね、ねえ。アストレア様が、今まで見たことないほどキレているんだけど。』

『私もあのようなアストレア様、初めて見ますけれど…。』

『おつかねえ…。何があつたんだよ…。』

『……どこから説明したらいいのか困ります。』

そうですね。

いつそのこと、ここで気絶させてホームで監禁した方が楽かもしれません。

第146話 執事長、諫言。

アルフィアお嬢様を7年前に死ぬ寸前に、坊ちやまが救い出したのは驚きました。さすがの私もフリーズしてしまい、メイにより再起動させられました。

私もまだまだですな…。

神アストレアが激昂される寸前に抑えて、私たちから説明しました。

今は、大抗争から7年後であること…。

大抗争の2年後にルウ嬢を除いて、ダンジョンの厄災に「アストレア・ファミリア」が全滅したこと…。

そして坊ちやまのスキルによって、貴女方を過去から現代へ連れてきたということの説明しました。

その時にアルフィアお嬢様は、憤怒の表情で彼女たちに振り向いていましたが、精神疲弊した坊ちやまをそのまま膝枕してたことにより、すぐ落ち着きました。

ずっと撫で続けて、一向に離れようとしません。

「過去から未来へ…。そのような事が可能なのですか？アストレア様。」

「信じられないのは無理もないわ…。私もよ。でもこれは事実よ、受け止めなさい。」

「はえー、ということはアタシたちは、あの兎とあの黒ずくめに感謝しなけりやならないな。」

「兎？ ああ、そうね！ その子、兎に似ているわね！ ねえ、アルフィア。疲れたでしよ、ちよつと交代してくれる？」

「五月蠅い、役立たずの小娘共め。私の経験値を無駄にしたことで恥を知れ。」

「「うぐつ！」」

「お嬢様。それは言い過ぎでございます。ルウ嬢は貴女の経験値を糧にし、坊ちやまの危機を幾度が助けました。」

「そうか、それならいい。その他の小娘共は役立たずが、死ぬ。」

相変わらず辛辣ですな。

「ちよつと！ リオン、ずるいわ！」

「あの兎さんと何かありそうですねえ。」

「後で全部話してもらうからな。」

「……………（久々な感じのはずなのに、どこか納得できません…）」

ルウ嬢としては、先日のアーディ嬢のこともありまだ整理できてないようですね。

無理ありません。

「話はわかった。なら、私は姿を消す。この子はお前たちに任ずぞ。」

「…今、何とおつしやいましたか？」

「またですか…お嬢様のこの勝手さは、

慣れたとはいえ、ここは譲れませんな。

「私はこの子の傍にいる資格がない。だから、この子の前から姿を消す。そう言っているのだ。」

「…アルフィア。貴女は再びこの子を捨てるというの？」

「……………何故、お前が怒るのだ？神アストレア。」

「…ここは神アストレアに任せましょう。

どうにもならない場合は、やむを得ません。

メイも相当怒っていますね…。」

「…貴女を蝕む病はスキルだそうね？」

「そうだ。病がスキルとして発現するほどにな。」

「では、ベルのこのスキルはどこから発現したかわかるかしら？」

「……………」

お嬢様も他人事ではありませんからね。

坊ちやまのこのスキルがどのようにして発現したのかを知りたいのでしょうね。

「ベルは！7年前の大抗争を知って、貴女たちが闇派閥に入ったのは自分のせいだと責

めてるのよ！ここの、毎日よ！」

「なっ…、違う！私が決めたことだ！この子は関係ない！」

「この子は、ずっと…貴女たちに捨てられたと思い、生きてきたのよ！貴女たちにも捨てられ、ゼウスにも捨てられて、一人で家族を求めてここオラリオへやってきたのよ！」

「待て…、聞き捨てならんことを言ったな？ゼウスにも捨てられて、だと？どういうことだ！セバス！説明しろ！」

「お聞きになられたのでしたら、しばらくは坊つちやまのそばにいてはどうですかな？」

坊つちやまのことを聞かせれば、気が変わるかもしれませんがね。

「……いや、いい。私は、この子より終末の時計を遅らせることを選んだのだ…。私は…会う資格も知る資格も…、見る資格さえもないのだ…。」

「ベルのこのスキルは！貴女たちに会いたい、という想いによつて発現したのよ！想いの力で、貴女を7年前のあの時から救い出したのよ！」

「……っ！」

先程、特効薬を飲ませる時にお嬢様に触れて記憶を確認しました。

本当に強情なお方です。

「お嬢様、嘘をつかれてはいけませんな。坊つちやまに会う資格がない？見る資格がない？」

い？それだけではありませんでしょうか？」

「言うな！セバス！」

「貴女、さつきからずつと嘘ついてるじゃない！何で…嘘をついてまで、ベルのそばにいてやらないのよ！」

「…私は、お前たちも知つての通り大抗争を引き起こした、闇派閥の大幹部だ。私がいては…、あの子の枷になってしまう。」

「そんなの関係ないでしょう！あの子の側にいたいのかを私は聞いているのよ！」

「お嬢様！」

頑固もいい加減にして欲しいですな。

メイもそろそろ限界に近いようです。

「…いたいには決まってるだろう！先程…いや、7年前に炎渦巻くあの穴に落ち、追いかけてきたあの子の顔…特にこの白い髪を見た途端、メーテリアの子だとすぐにわかった…。あのか弱い赤子がこう育つてくれて嬉しかった…。だからこそ、犯罪者である私があの子の側にいるわけにはいかないのだ…。」

お嬢様…、それは理解できませんが…。

「………犯罪者でなければいいのね？」

「………何だと？」

何を言うつもりですか……？

「…正義を司る私が言います。【静寂】アルフィア、そして【暴食】ザルド、貴方方には罪はありません。全てはエレボス、闇派閥のせいといたします。」

「「ええっ！」」

「…何の真似だ？私への同情か？そんなものは…」

「何言っているの？全てはベルのためよ。」

「「は？」」

「ああそうだわ、お礼を言うのを忘れていたわ。アルフィア、貴女たちが大抗争を引き起こしてくれなければ、私はベルに会うことはなかったでしょう。感謝するわ。」

「何……!？」

「私が、ベルの、最初の、女の人よ。」

「何…だと…!？」

「え？マジ？リオン！そうなの!？」

「（まだ言いますか…）まあ、正確に言いますとベルが最初に会った女神ですが。」

「紛らわしい…。」

「だけだよー。アレ、マジで言っているぜ。」

ああ、なるほど。そつちで来ますか。

では、乗っかかりましょう。
メイ。

「【静寂】…、私は今、貴女の四肢を切り落としたい気持ちで一杯です。坊ちやまがどんな気持ちで14年間も生きて、そして先日7年前の大抗争を知った後、更に貴女たちへの想いをどんなに募らせたのかわからないでしょう。ですが、貴女たちが坊ちやまに会いに行っていたら、私たちは解放されることはなかったでしょう。ありがとうございます。」

「そうですね、それはお嬢様に感謝するべきですな。」

「くっ…！貴様らっ！」

ふむ、思いの外食いつきましたな。

『ねえ…あのメイド。アルフィアの四肢を切り落とすとか言ってるわよ…。』

『アリーゼ…皆、忠告します。あのメイドと執事に逆らってはいけません。ええ、本当に。』

『何があつたのだ…。』

さくらに乗っかかりましょう。

「ああ、お嬢様。数年もすれば…、お嬢様にとつてお孫さんができるかもしれませんな。」

「な、何だ?!?早い！早すぎる！そ、そんなの私が許さん！」

「それでしたら、どうなさいますかな？」

「…セバス！貴様！くそつ…分かつているくせにつ！」

本当に素直ではないお方ですな。

まだまだ粘りますな。

「お嬢様。坊ちやまは、『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』が求めてきた英雄そのものでございます。」

「ば、馬鹿な！ありえない！妹は才能がなかったはずだ！孕ませたあの男も雑魚に匹敵するはずだ！あの子はそれらを受け継いでるはずだ！」

「ですが、事実です。私たちが認めます。坊ちやまは『最後の英雄』の最有力候補です。」

「……………何故だ、何故！あの子が選ばれるのだ！『猛者』や『勇者』共は一体何をやっていたのだ！」

「何も。7年前から全然ランクアップしていません（チラツ）。」

「後進の者は育っているようですが（チラツ）。」

「おのれ…！私たちがやってきたことは無駄だったのか…！」

あと一押しですか？

『ねえ…あの人たち私たちのことを、暗にけなしていない？』

『そうでございませぬえ、反論できないのが悔しいですが。』

『とういか、フィンまだレベル6なのかよ。何やってんだよ。』

『……………（すごく嫌な予感がします…）』

「ああ、そうそう。今のベルの周りには多くの女性に囲まれているわよ。そのルウを含めてね。」

「「え!?!」」

「な!ア、アストレア様!それは!」

「……………ほう、貴様。よくも、あの子に手を出したな…。覚悟はできているだろうな?」
「ち、違う!まだ手を出して…あつ。」

「「まだ!?!」」

「……………手を出してないのは褒めてやる。だが、今のうちに駆除すべきか…いやあの子の側について見張るべきか…。」

「お嬢様、先程のお言葉で坊ちやまの前から姿を消す、とか言いませんでしたかな?」

「セバス、貴様…!」

「いい加減に素直になさるべきです!大抗争のことを知った今、…今の坊ちやまにはお嬢様が必要で…ございます。」

「……………いいのか?神アストレア。大犯罪者の私があの子の側にいても。」

「当たり前でしょう。ベルは何も罪もないのに苦しんでいるんだもの。それは私たちが

はできない。置いていった貴女たちが償うべきよ。」

「……言質は取ったぞ。……おい、セバス。この子のことを全て教えろ。」

「もちろんですとも。」

神アストレアの機転で、お嬢様を煽らせて留まらせましたな。

そうでなかったら、メイと共にお嬢様の四肢を切り落としていたのは確実でした。

それに危ないところでした。

もしあのままお嬢様を行かせていたら、メイや私の手から逃れていても火山の火口に飛び込んで自害をされていたでしょう。

そもそも、坊ちやまを一目で見えて込み上げてくるものに耐えきれなかったでしょうに。

本当に素直でないお方です。

第147話 愚者、驚愕。

800年も生きてきたが、今日ほど驚いた日はなかった。だつて、そうだろう？

目の前に、死んだはずの【紅正の花】【大和竜胆】【狡鼠】そして【静寂】がいるのだから。

5年前に、厄災ジャガーノートの手にかかつて死んだはずの【紅正の花】【大和竜胆】【狡鼠】がベル・クラネルのスキル【時越白兔】によつて、5年前から現代へ遺体を持って帰つた…。

それだけでない。

私のこの蘇生魔法で、ベル・クラネルの『幸運』によつて確率を引き上げて彼女たちを復活させた…。

一人ならともかく三人で一度だと？

それだけでももういっぱいなのだが、また彼のスキルが発動した。

そして、彼は7年前に飛び、炎の海に飛び込む寸前の【静寂】を救い、現代へ連れてきたのだ。

彼は…何なのだ。

【静寂】がベル・クラネルを置いて去ろうとし、神アストレアが激昂した。すったもんだで、結局【静寂】は彼のところにいることになった。

……え？戦争遊戯での戦力、もう揃ってないか？

「ジャガーノート？」

「はい、お嬢様。我々が遠征で70階層以降に出たあのモンスターです。」

「ああ、確か魔法を反射したり何でも切り裂くアレか。」

「え？70階層？ダンジョンは57階層まで踏破したんじゃないの？」

「何だ、あの戯言を信じていたのか。そんなわけがないだろう。」

そうだな、ギルドが隠していたからな。

深層でもとんでもないのに、更なる地獄があるとは思わないだろう。

「70階層以降に…あのモンスターがいるのですか？」

「はい。ルウ嬢。ただ、貴女と坊ちやまが戦ったモンスターはイレギュラーです。最初に戦った時点のジャガーノートは我々が戦ったジャガーノートよりかなり劣ります。

恐らく、階層が深くなればなるほど強くなるかもしれないですね。」

「ふん、20秒耐えれば後はどうってこともない。脆かったです。」

「に、20秒…。」

「化け物共め…。」

同感だ。

しかし、そんな彼らでも黒竜を倒すことができなかつた…。

「でも、あのジャガーノートはあれつきりでもう出ないでしょう?」

「……出ました、つい最近に。」

「あんだと?また出たのかよ!」

「はい、ライラ嬢、「ルドラ・ファミア」のジュラ・バルマーによつて人為的にジャガーノートが召喚されました。ですが、ご安心を。坊ちやまとルウ嬢が、変異したジャガーノートを撃破いたしました。」

「すごいじゃない!リオン、さすがね!」

「私は、ジュラがまだ生きていたことに驚きましたねえ。」

「最近と言つたな?それまでおめえは何してたんだよ?」

「!そ、それは…。」

言い難いだろうな。

彼女が復讐に染まり、たった一人で閻派閥を壊滅させたことを。

「……みんな、それについては帰つてから話しましょう。」

「……そうね!7年も経っているんだもの!オラリオがどうなっているのか見たいわ

！」

「私はそれより、そちらの兎さんとの関係を知りたいでございますねえ。」

「あ、それは私も知りたいわ！」

「あたしも興味あるな。」

「！そ、それはその……。」

「言え。全部すべて吐け。」

……【静寂】つてああいうキャラだったか？

聞いていたのと違うのだが。

あれでは、まるで子供を過剰に愛する親のようだ。

「お嬢様方、それについてはホームへ帰ってからにしてください。さて、ここから全員フードを被って下さい。アミッド嬢は私がお送りします。」

「ホツ……（いずれは言わなければならぬのでしようね）。」

「よろしくお願いします（疲れました…【静寂】いいえアルフィアさんが現代にいることをディアンケヒト様へ伝えた方がいいでしょうか？）」

「アミッド嬢、それを含めて私から伝えますので不要でございます。」

「そうですか（心を読まないでほしいのですが）。」

「失礼しました。」

セバス、氣遣えよ。

「愚者、大丈夫ですか？」

「ああ、何とかな。精神疲弊寸前だが、彼女たちの存在が衝撃すぎてな。」

「まあ、無理ありません。しかし、蘇生魔法がうまくいってよかったですね。一人ぐらいいはと思いましたが、まさか三人とは予想以上でした。」

「メイ、お前たちの仮説が正しかったな。スロットを埋める無駄な魔法でなくてよかったですよ。」

「愚者、貴女のそれは切り札ですが、坊ちやまがいなければ無用の長物ということをお忘れなきように。」

「わかっているさ。というか、ベル・クラネルが規格外すぎて敵にはしたくないね。」

お前らがいるなら、ますますしたくないよ！

「坊ちやまがここまでとは思いませんでした。先程の【静寂】いえ、アルフィアさんに手をかけなくてよかったです。」

「そ、そうか…。」

マジでやるな、コレは…。

「重くはありませんか？お嬢様？」

「薬が効いたせいか、体が軽い。しばらくこの子を抱いていたい。」

アルフィアはベル・クラネルをお姫様だっこして歩いている。

「アルフィア、変わってくれるかしら？」

「いらん。不要だ。この子に近寄るな。」

「ひどいー！」

……死の病の特効薬か。

その抗体がベル・クラネルにあるとはな。

はあ…、君は本当に何なのだ？

やっと着いたか。

人目を避けたのはいいが、【紅正の花】があちこち行こうとし【薫風】に止められるなど時間を大きくロスしたな。

【静寂】がキレるかと思つたが、ベル・クラネルを大事そうに抱えずと見ていたな。

……大丈夫なのか？

ベル・クラネルの現状を知つたらどうなるのだろうか？

ホームが消し飛ばされない事を祈ろう。

「ただいま、戻りました。」

「おつかえりー! ……つて、ベルくん! ……君は誰だい!? というか、出かけた時より人数が増えてないかい!？」

「いろいろあつたのよ…、ヘスティア。疲れたわ…。」

「申し訳ありませんが、全員集合願えませんか？」

「あ、はい! わかりました。」

驚くだろうな…。

「すみません…。ヴェルフ殿とセシル殿は鍛冶のため、手が離せないので後でとのことです。」

「いえ、結構です。」

「メイ様、セバス様、そちらの方々はどうなんでしょうか? (どこかで見たことがあります) が、気のせいでしょう。ええ、気のせいに決まっています!」

「今から説明いたします。バーチエさん、坊ちやまは部屋で寝かせていますね?」

「はい、メイド長。精神疲弊したのか安心したのかぐつすりと寝ています。」

「重畳です。まず皆様に坊ちやまの新たなスキルが発現したのを報告します。」

「ええっ!」

「…またですか。今度は何ですか？もうリリは動じませんよ。」

「これはいくらなんでも動じるだろうな。」

「それは…」

「何ですか！そのスキルは！あり得ないです！」

「リリさんの気持ちはわかります。ですが、事実です。本日、そのスキルが発動しました。」

「発動したのかい…。検証に成功できたのはいいけど、その結果が彼女たちかい？」

「はい、ヘステイア様。2回も発動しました。」

「に、2回?!」

「1回目は、彼女たちです。そちらが【アストレア・ファミリア】団長の【紅正の花】アリーゼ・ローヴェルさんです。」

「ハ―イ！よろしくね！」

「…そんな、いえ、でも…確かに5年前に見たことがあります…。」

「その横が副団長の【大和竜胆】ゴジヨウノ・輝夜さんです。」

「よろしくお願い致しますね。」

「ゴジョウノ……?」『春姫殿のサンジョウノと似ていますね。』

「そして、団員の【狡鼠】ライラさんです。」

「あー、よろしくな。」

「……間違いありません。確かに【狡鼠】です……。」

「え?なんで?彼女たちは死んだはずじゃなかったのかい?」

「私の蘇生魔法で、ベル・クラネルの運によって引き上げられ復活した。」

「あ、ウィーネ様を復活させたのと同じ魔法ですか?」

「その通りだよ。サンジョウノ・春姫。」

「!サンジョウノ……だ?!?同郷だけでなく、サンジョウノ……:確かにあの家は狐人系だった。何故、サンジョウノがここに……いる?もしかや、追手か?」

「はああああ……、アストレア。事実かい?」

「ええ……、事実よ。私も今でも信じられないくらいよ。」

「そうか……もう今さらだね。それで、2回目はこちらの娘かい?」

「はい、ヘステイア様。こちらは、私が元所属していた「ヘラ・ファミリア」幹部の一人、

【静寂】のアルフィアお嬢様です。」

「……………」

「!!」

「へー、ヘラの眷属かあ。あの子の眷属らしいね。よろしくね！ボクはヘスティアさ。」
「アルフィアだ。…ヘラを知っているのか？」

「まーね。あの子はゼウスが絡むだけで厄介な子だけど、普段はいい子さ。そうだろ？」

「いい子…だと!?あのヘラを…?!」

「な、何も怯えなくても…。単にうるさいけど、お節介焼きの子じゃないか？」

「……………あの子の主神が貴女で本当によかった。あの子を眷属にしてくれて深く感謝する。」

「……………君は、ベルくんの何なんだい？」

「そうだな、私もそれを知りたい。」

あの過剰な接し方を見て、単に同じファミリアの系譜の子だけとは思えない。

「アルフィアお嬢様は坊ちやまと深い関係があります。明かすつもりはありませんでしたが、本人が生きてここにいる以上、知らなければなりません。」

「深い関係だつて？」

「はい、ヘスティア様。アルフィアお嬢様は、坊ちやまのお母様のお姉様にあたります。」

「「な、何だつてー!!」」

何と…。ならあの態度も納得できる。

はっ！ベル・クラネルに起こったことを知れば…。

……オラリオを滅ぼさないでくれよ、頼むから。

第148話 静寂、畏敬。

「ええーっ！あの可愛い兎さんのお婆……」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「きやあああああああ！」

セバスメ、余計なことを。

「「……………」」

「（こ）で警告をしておくか。

「お前たちに一つ言っておこう。私のことを「お婆さん」と言ってみろ。この小娘のようになるぞ。」

「「はい！わかりました！絶対に言いません！」」

「カサンドラ嬢、すみませんがアリーゼ嬢を癒やしてくれませんか？」

「あ、はい。わかりました。」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

「う……うう……。この1日で臨死体験を2回もするなんて……」

余計なことをいうからだ、この小娘め。

命があるだけありがたいと思え。

「ア、アストレア様……、事実なのですか!」

「ええ、事実よ……。ルウ、貴女に言えば貴女はベルに対して、必ず罪悪感に苛まれるわ。だから戦争遊戯が終わるまでに、言わないでおこうと思つたの。けど、こうして生きて目の前にいるなら別だわ。」

「……………複雑です。」

「まさか、あの可愛らしい兎さんと血縁関係にあるとは……。」

「よくよく見れば、なんとなく似ているよな!」

ふむ、見る目があるな。そこの小人族。

「静まれ。」

「!!!」

「なっ!」

へら、いやあの狒々爺以上の神威だど!?

馬鹿な!これほどの神威を今まで感じたことはない!

「ヘラの眷属、アルフィアよ。そなたに問おう。」

「何故7年前に、我が眷属であるあの子に会いに行かなかったのだ？」

「答えよ。」

ぐっ…ヘラで慣れているとはいえ、これは…。

神の問いか。嘘や意地はつけんな…。

『ヘスティア…マジでキレているわ。記者会見で見たけど、直に感じるのは初めてだわ…、オリンポス最強大女神の本気の神威を。』

『あれが…本気のヘスティア様（18階層や記者会見でその片鱗を感じましたが、あれほどとは…）。』

オリンポス最強…ヘラや狒々爺より上か。

あの子は主神に恵まれたな。

「…私は、死の病で残り余命いくばくもなかった。あの子のところへ行ってもあの子を悲しませるだけだ。」

「…それだけか？」

「…あの子に剣をとってほしくはなかった。だから、オラリオの後進達が私達を喰らい『黒き終末』を乗り越えるために。そしてこの世に『希望』をもたらすために、…あの子が戦わずに済む世界のために。」

これを語るのはエレボスの時以来だな…。

『……っ。』

『アルフィアがあればほど命を賭けていたのは、あの兎さんのためだったのでございますね。』

『だからつてよー。…いや5年前、無様に死んだアタシらが言う資格ねーわな。』

その通りだ。無能な小娘共め。

貴様らが油断してやられるくらいなら、エレボスの誘いに乗るべきではなかった。

「ーそれだけか？」

……見抜かれているか。やむを得まい。

「……妹があの子を産んだときは17歳だった。私は妹が身ごもったこともショックだったか…。」

『え!? 17歳!? 早くない!?』

『17歳ということは、妊娠したのは16歳あたりということになりましたよ?』
『確かにはえーな。』

妹は部屋も出れないぐらいだったのだぞ!

あの雑魚めが! よくも!

黒竜にやられたのを幸運に思え!

「それより……自分が「お義母さん」と呼ばれるならともかく、「おばさん」と呼ばれるのが絶対に嫌だった。」

『『ああー……。』』

『10代で呼ばれるのは、確かにキツイですね。』

『普通はそう呼ばれるんだけどな、まああの姿形で呼ばれるのは傷つくわな。』

黙れ、小娘共が。

「―よくわかった。だが、そなたは我が眷属のあの子の心に深く傷つけ、悲しませた。」

「―その罪は重い。それは深く理解していような?」

「ああ。」

「―そなたは我が眷属のあの子にどうしたいのだ?」

「…できれば、あの子の側にいたい。あの子に命を救われたなら、あの子のために生きてい。」

「―そなたの気持ちはわかった。神罰ではないが、そなたは我が眷属のあの子と共に生きよ。それがそなたへの罰だ。」

「感謝する。神へステイア。」

……今までにない神威だったな。

だが、慈愛に満ちていた。

あの子が、いかに神ヘステイアに愛されているかがわかるな。

「ふうー。ここんところ、こうする機会多いなー。いやー、ごめんね。アルフィアくん、君を試すような真似をして。お、ありがとうね！メイくん。」

「……………」

私の目の前には、先程の女神が崇高な気配の欠片もなく、ソファアにぐてーともたれている。

「いえ、お疲れ様でした。ヘステイア様、こちらのお飲み物をどうぞ。」

「……………」

「アルフィアお嬢様。ヘステイア様はあちらが普段でございます。」

……懸隔が激しすぎる。

私の畏敬を返せ。

「では、ヘステイア様。アルフィアお嬢様をここへ住まさせても問題ありませんでしょうか？」

「何言ってるんだい？当たり前じゃないか！ベル君も喜ぶだろうしね。」

「神ヘステイア、感謝する。…セバス、私の部屋は静かなところを頼む。間違ってもあの

小娘共の近くにするな。」

「承知しております。」

「あの子の部屋は？」

「賑やかなところですが「そうか、やむを得まい」…では、部屋に案内致します。」

「こちらでございます。お嬢様。」

ふむ…悪くない。いい部屋だ。

「さて…セバス。あの子のことを全て言え。」

「承知しておりますが、お嬢様はしばらく静養していただきます。特效薬を数日ほど服用して下さい。」

「わかっている。神ヘスティアに誓ったんだ。あの子の側にいるなら、病を何が何でも治さなくてはな。…何故、この特效薬はあの時に作れなかったのだ？」

この薬がメーテリアが飲めば…、少しは命が長らえたかもしれないというのに。

「お嬢様、この特效薬は大体3つの素材でできています。2つともお嬢様のご存知の大聖樹の枝、カドモスの泉。残り1つが数日前にわかり、手に入れたものでございます。」

「もったいぶるな。何だ？その素材は。」

「坊ちやまの血でございます。」

「……何だと!? 何故、あの子の血が…。」

「お嬢様。坊ちやまはメーテリアお嬢様の血を引いております。死の病が坊ちやまに遺伝する可能性が高かったに関わらず、これまで病気など一切かかっておりません。」

「そうか、そういうことか…。」

「……なるほど。あの雑魚の遺伝子か。」

「はい、あのクソ雑魚サポーターの生命力が坊ちやまをここまでたくましく成長してくれました。皮肉なことですが。」

「全くだ。あの赤い目を見るだけでえぐりたくなるんだがな…。そうか、死の病に打ち勝つものがあの子にあるわけだ。そしてそれを元にしたのが特效薬か。…確かにあの時ではどうしようもないな。」

まさか、生まれたばかりの赤子のあの子から血を抜き取るわけにはいかないしな。

メーテリアは、命をかけてあの子を生かした甲斐があったな。

あの雑魚には感謝してはやらないが。

「その通りでございませぬ。」

「あの子の血を元にしたものなら、飲まないわけにはいかないな。」

「ええ、ですが本日は様子見で。明日から1日に3回特效薬を飲んでいただきます。」

「ああ。それよりあの子の事を早く言え。」

「かしこまりました。長くなりますが、よろしいでしょうか？」

神ヘステイアにも誓った通り、あの子の側にいなければならぬからな。

メーテリアの血を引き、「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つあの子の記憶をセバスは読み取れるからな。

これ以上ない、あの子の生き証人だ。

「まだ日は高い。それに……お前の入れた紅茶を、久々に飲みたいしな。」

「……承知しました（坊ちやま、感謝いたします。再びアルフィアお嬢様に、お茶を入れるような時が来るとは思いませんでした）。」

メーテリア……。お前が命を賭けたあの子は私が見守ろう。

すまないが、そっちへ行くのはまだまだずっと先になりそうだ。

その代わり、あの子の話をたくさん持つていくから楽しみに待つていてくれ。

第149話 妖精剣士、号泣。

驚きました…。

まさか、「静寂」のアルフィアがベルのお…母さんの姉だったとは。

もしベルがアルフィアを連れてこなかったら、アストレア様の言う通り私はその事実
に耐えきれなかったでしょう。

なら、アルフィアのベルに対する態度も納得できます。

あれは息子を溺愛する母そのものですね、……実の母ではないですが。
さて、私は困っている。

まさか、ベルが5年前に飛んでアリーゼたちの遺体を持ち帰り、患者の蘇生魔法でベ
ルの運で3人とも蘇生するなんて…。

本当に困った人です。借りをいくら返しても返しきれないじゃないですか。

いえ、困っているのはそっちではなく…。

「はあ…、5年後の未来ですか。」

「パツと見たところ、すっかり明るくなったわね!」

「そうだなあ。ジユラの奴が生きてたとはな、あれから何があったんだろうな?」

それです。それを言うのに気が重い…。

アリーゼたちの復讐のために多くの人を傷つけ、闇派閥やそれに加担する商会などを潰して回り、邪神を追い詰めた…なんて言えない…。

特に酒場の娘として働いていた姿を見せたくない！

絶対に笑われませう！

「さて、そろそろ話していただきましょうか？アストレア様、リオン？」

「ルウ、私から説明するわ。」

「いえ…私から言います…。」

「あー、その前にリオン？おめえ、何でルウに変えてんだ？リユー・リオンからルウ・リオンに変わったのは何でだ？」

「そ、それは…。」

「言えないなら、私から聞こう。…お前、何人斬った？」

「!!」

「あの時のお前は世間知らずの青二才のエルフだった。だが、今のお前は、現実を知った熟練のエルフとなっている。そうなったのは、ただ一つ。お前、何ふり構わず闇派閥を潰したな？」

「……………っ！」

「リオン、おめーな顔に出過ぎなんだよ。あたいらが復活したのに喜べないのは、何か後ろめたいことをやっちゃまったとしたか、考えられないだろうが。」

「リオン、あの日から何があったのか教えてくれる？」

「我々は既に死んだ身だ。生き返ったがな、お前を責める資格なんかない。言ってみろ。」

「……わかりました。」

私はあの日からシルに拾われるまでのことを話しました。

「……以上です。」

「[[「……………」」」

何か言っただけのようですが…。

罵倒された方がまだマシです…。

「はああああ。その程度だったか。」

「は？」

「てつきり、オラリオを火の海にしたとか瓦礫にしたかと思っただわ！」

「あたいは、目につく神を片っ端から送還したかと思っただぜ。」

「……………貴女たちが、私をそんな風に見ていたことがよくわかりました。」

だんだん腹が立ってきました…。

「ま、まあ。私もそう考えていた時があったわ。」

アストレア様！貴女までもですかっ！

「ふん。その程度で私たちがお前を責めるわけがないだろうが。見くびるな、このポンコツエルフが。」

「わ、私はポンコツエルフではないっ！」

「でも、リオンにしては上出来ね！膿を洗い流しただけで、最小限の被害だわ！」

「他のファミリアが手助けしてねえのがムカつくがな。フィンも少しは手伝えよなあ。」

みんな…。

「お前を生かしたのは私たちだ。お前をそういうふうに進い込んだのも私たちだ。」

「それは違う！私は、感情に身を任せて復讐に走った！」

「リオン、それも私たちの責任よ。」

「てめえが気に病むことねえよ。死んでいったあいつらも、同じことを言うぜ。」

「……………っ！」

「お前の罪は私たちの罪でもある。」

「あの兎ちゃんによって生き返ったなら、リオン、私たちは兎ちゃんの力になっている貴女の力になるわ。」

「だからよお、いちいち気にすんなって。終わったことは仕方がないだろ？」
「みんな…。私は…う、う、うああああああつ！」

私はみつとももなく泣いてしまった。

「すみません…。」

「まあ、それはいい。だが、どうしても聞きたいことがある。」

「あら、奇遇ね！私もだわ！」

「あたいもだな。」

な、何でしょうか？

【ルドラ・ファミリア】のことでしょいか？

壊滅した闇派閥？

または関連した商会でしょうか？

「あの兎ちゃんとうどういう関係なの？すごく聞きたいわ！」

え？

「同感でございますねえ。何か只ならぬ雰囲気を感じましたので。」

「それに、おめえ。他人には触れられないんじゃないやなかったのか？あの兎には触れたのか

？」

「ルウ、私も聞きたいわ。全部吐き出しなさい。ベルのことを！」

「な、何ですか！アストレア様までも！」

「先程までのシリアスモードはどこへ行ったのですか！」

「そ、それは…あ、明日にしませんか？」

「「ダメよ（だ）（に決まってるんだろ）」」

「それに…あの子の名前聞いてないわ！アストレア様はどういう関係なの？」

「アルフィアの話聞いてなかったの？私が、ベルの、最初の、女の人よ。」

「それはもういいです。あの兎さんはベルというのですか？」

「…ベル・クラネルです。」

「ほへー、ベル・クラネルねえ。あの「静寂」の甥かあ。似てるようで性格は違うみてえ

だな。」

「アルフィアとは真逆の性格と言った方がいいですね。」

「そうね。」

「それで、詳しく聞かせろ。」

「た、助けて下さい…ベル！」

「バーン！」

「アストレア様ー！ご依頼の武器が、センパイの武器ができました！……えーと、その女

の人達はどちら様でしょうか？」

「…誰？」

「あつ…。」

セシルのことを紹介するのを忘れていました…。
ですが、セシル！いいタイミングです！

第150話 後輩、初対面。

ヴェルフさん…いえ、ヴェルフ師匠の指導のおかげで、アストレア様から依頼された武器が、センパイのための武器がようやくできました！

なんか、命さんより全員招集の連絡がありました、大事なところなので後で何うと言付けをして、ヴェルフ師匠と最後の仕上げをしました。

そのおかげで、武器が仕上がりました！

「…ようやくできたな。」

「はい！ヴェルフさんのおかげです！」

「いいや、お前の腕だ。お前が【薫風】のために打ったからこそ、ここまでの武器ができたんだ。誇れ。」

「…ありがとうございます！師匠！」

「…よせ。俺はまだまだ未熟者だ。師匠と呼ばれるのはまだ早いんだ。」

「いいえ！ここまでの確に指導してくれました！なので、師匠と呼ばせていただきます！」

「…勝手にしろ。まあ、椿もいるからそっちにするかはお前に任せませ。それより、この

武器を【薫風】へ早く見せてやれ。」

「はい！また、よろしくおねがいます！失礼します！」

私は、出来立てホヤホヤの武器を持ってセンパイのところへ行きました。

センパイの部屋にいなかったので、アストレア様の部屋へ行こうとするとセンパイの声が聞こえました。

なので、思わず開けました。

「アストレア様……依頼の武器が、センパイの武器ができました！……えーと、その女の人達はどちら様でしょうか？」

しかし……そこにはセンパイを取り囲んでいる、アストレア様と赤い髪、黒い髪、ピンクの髪の女の人がいました。

「……誰？」

「あつ……」

え？どちら様でしょうか？

「セ、セシル！よく来てくれました！ア、アリーゼ！し、新入団員です！（助かりました！セシル！）」

「え？新入……団員？」

「こいつ！逃げやがった！」

「後で、たつぷりと聞かせてもらいますからねえ。」

「…もう！セシルったら、タイミングが悪いんだから…。」

「え？…え？」

ど、どういうこと？

私は混乱しています。

…ベルさんがスキルで5年前に飛んで、アリーゼ…団長たちの遺体を回収して現代へ戻った。

…そして愚者さんの蘇生魔法で、ベルさんによつて確率が引き上げられアリーゼ団長たちを蘇生させた。

…今、センパイがこれまでのことを話し、ベルさんの関係について問い詰められていること。

最後のはともかく、こんなのわかりますか！

数日前にセンパイが語ってくれた、アリーゼ団長たちが復活してここにいる？

ありえないです！

…ベルさん、貴方はもう『英雄』さえ超えていますよ…。

「あらあら！セシルというのね！私はアリーゼよ！よろしくね！」
テンション高い人ですね…。

この方が団長ですか。

「ゴジョウノ・輝夜といいます。よろしくお願い致しますね。」

うわあ…きれいな人…。

「あたいは、ライラってんだ。よろしくな、新入り。」

リリさんと違ったタイプの人ですね。

「は、はい…、先輩方。セシルといいます。まだレベル1ですが、よろしくお願い致しますー！」

「うん！元気な子ね！」

「あの後に、新たな団員でございませうか。」

「アストレア様が眷属にしたんなら、あたいたちは何も言えねーよ。」

…濃い方々ですね。

「悪いけど、セシルちゃんの歓迎会は後ね。今はリオンと兎さんの関係について聴いてるの。」

「え？ああ、センパイの彼氏ですか！」

「「彼氏!」」

「ち、ちが…まだ彼氏ではないです…。」

「私は、ルウをベルの彼女と認めていないわよ。」

「「彼女!」」

あー…この前の続きですか…。

「どういうこと!?!私より先にリオンに彼氏ができるなんて、ショックだわ!」

「驚きましたねえ…。このポンコツエルフに彼氏ができるとは…。」

「あたかも、さすがにびっくりだぜ。」

「いや!だから、まだ彼氏じゃないですと言ってるじゃないですか!あと、輝夜!私はポンコツエルフではない!」

「だから、ベルの彼女には役不足と言ってるじゃない!」

……何でしょうか。この混沌とした場は…。

「ま、待つて下さい!セ、セシル!私に用があつたのではないですか?」

「あ、そうでした!アストレア様に依頼された、センパイの武器がようやくできました!」

「あら、セシル。出来たのね?見せてくれるかしら?」

「はい、こちらです!」

そして、私はヴェールに包まれた、白く緑に近い色をした長剣を出しました。

「これは…。」

「セシル、凄いわ…。私の予想していたものを遥かに越えているわ。」

「ヴェルフ師匠の指導のおかげです！」

「なかなかの業物ですねえ…。」

「鍛冶か、使える新人じゃねえか。」

「セシル…、これは私の…武器ですか？」

「はい！アストレア様に前から依頼されていましたが、求めていた素材が手に入らなかったのが困っていました。その時、ヴェルフ師匠から一喝させられセバスさんによって素材が手に入り、センパイのために打ち直しました！」

「素材？…これは私の『アルヴス・ルミナ』の欠片…。セシル、これを私が使ってもいいのですか…？」

「はい！センパイのために、センパイが彼氏と共に戦うための武器です！」

「セシル…：…ありがとう。」

「セシル、この剣の銘は何かしら？」

「まだ決まっています…。アストレア様、またはセンパイが名付けて下さい！」

「で、では…ベルと「却下よ。そうね、『アルヴス・ルミナ』を元にしたものだから、ベタだけど『ネオ・アルヴス・ルミナ』でいいじゃない？」…長いですが、それでいいか

もしれませんね。」

センパイ…、ベルと名付けたら後々恥ずかしくなりますよ。

「そういうえば、リオン！ 私たちの武器はどうなったのかしら？」

「…18階層でその…みんなが「死んだらそこに埋めてほしい」と言ってた場所に突き刺しています。あ、輝夜。この小太刀はお返しします。私は、セシルが打ってくれた武器を使いますから。」

「何だ、お前は私の言ってたことを律儀に守っていたのか。…馬鹿な奴だ。…どれ、かなり使い込まれているな…。確かに返してもらったぞ。」

「この小太刀のおかげで、幾度か助けられました。お礼を言います。」

「ほう、それはあの兎さんの危機もでございませうか？」

「そ、それは!？」

「クスクス。だが…これは。おい、そこの新入り。」

「は、はい!…輝夜センパイ?」

「この小太刀、打ち直しできるか？」

「失礼します…。…すみません、私の腕ではできません。あと数合すれば砕けます…。」

「ふむ、私の見立てと同じでございませうねえ。となると、新たな武器が必要ですね。」

「…私の所持金から出しますが?」

「ただこうと言いたいが、受け取れるか馬鹿め。アストレア様、ファミリアの資金はまだございますか？」

「ごめんなさい……。生活費に使ったわ。」

「となると、ダンジョンに潜る必要がありますねえ。しかし、私達は死んだ身だから大つぴらには動けない。困りましたねえ。」

「そうだなあ。それ以前に現状の説明してもらってねえぞ。」

「そうね！ 兎ちゃんのことをもつと聞きたいわ！」

（振り出しに戻りましたか……。どうしましょうか。）

コンコン

「誰かしら？」

「メイでございます。ハーブティーと茶菓子を用意しましたのでいかがでしょうか？」

第151話 侍従長、暴露。

「はあ〜、落ち着くわ……。」

「この茶菓子、なかなかの味でございますねえ。」

「うめえな！コレは。」

盗み聞きしましたが、なかなか賑やかな娘たちですね。

「神アストレア、現状はいかがでしょうか？」

「ルウの、半年前のことまで話したわ。けど、ベルのことはまだね。」

「では、私が代わりに説明いたしましたでしょうか？」

「そうね、貴女ほどの適任はいないわね。お願いしてもいいかしら？」

「承知いたしました。」

「あ、あの…。」

『ルウさんと坊ちやまに関することは、ルウさん自身からお話してください。いいですね？』

『…はい。』

そこまでは責任持てません、特に深層のあの事に関しては。

坊ちやまのことを愛していると言い切ったからには、そのくらいやって下さい。

「気になったのだが、お前は何者だ？ なかなかできるようだ。が……」

「自己紹介が遅れましたね、私は「ヘスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイドと申します。元「ゼウス・ファミリア」専属メイドでもあります。」

「ゼウス・ファミリア」だと……!? あの兎さんは、まさか……」

「その通りでございます。坊ちやまは、「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つ唯一無二の御方でございます。」

「……なるほど。あの兎さんはなかなかの血筋でございますねえ。」

「貴女ほどではありませんよ。「アストレア・ファミリア」副団長、ゴジヨウノ・輝夜様。

または、極東の『朝廷』の暗部を司る、ゴジヨウノ家の姫君と言った方がよろしいでしょうか?」

「!? ……そっちの名は捨てた。今は「アストレア・ファミリア」だ、間違えるな。」

「失礼しました。こちらにはサンジヨウノ・春姫さんがおられますが、サンジヨウノから追い出された身ですので、何かと目をかけてやって下さい。」

「……どこまでお見通しなのだ。そうか、あの忌まわしいところから追い出されたのか。わかった、話をしておこう。同郷だしな（遠い親戚でもあるしな）。」

愚者が春姫さんの名前を言った時、輝夜さんは目つきを鋭くされてましたね。追手と

思われたら困りますからね。

第一、あの春姫さんがそんなことができないわけがないでしょう。

「さて、半年前まではルウさんが話されていましたが、5年前の神アストレアが坊ちやまとお会いされた時からお話しいたしましょう。」

「え？ちよ、ちよつと待つて！それは…。」

「私も聞きたいわ！」

「アストレア様が、あれほど兎さんに拘る理由を知りたいでございますねえ。」

「わりいな、アストレア様。あたしも聞きたいんだわ。」

「すみません…アストレア様。私も。」

「…私も。」

「あ、貴女たち！」

「ご要望が多いですので、お話いたしましたしょう。」

彼女たちの主神ですから、言わなければならぬでしょう。

遅かれ早かれ、バレてたでしょう。

諦めて下さい。

「……うう、全部バラされた…。」

「うわあ…、あの兎ちゃんを独り占めにしたいがために。」

「神…いえ大神ゼウスを谷底へ突き落とすとは…。」

「耳を疑ったぜ…。」

「…その後、本当に2人きりで2ヶ月過ごしたのですか（何て羨ましいことを…）。」

「（やはり、ブラコンを拗らせています…。）」

神アストレアの坊っちゃんへの過保護は重いですね。

まあ、そのおかげでアルフィアさんへの説得が上手く行きましたが。

「では、坊っちゃんのことをお話しいたしましょう。」

「待ってたわ!」

「アストレア様とリオンを落としたり、兎さんの話がようやく来ましたか。」

「待ちくたびれたぜえ。」

「（大体聞いたけど、聞き漏らしがないか確認しないとね。）」

「（…：…恥ずかしいのですが、ベルのことで全て知っているわけではないので、いい機会ですね。）」

「（センパイの話でおおまかに聞いたのですが、更に詳しく聞けるのですね!）」
そして坊っちゃんがおラリオへ来てから、2ヶ月半のことを話しました。

「嘘でしょ！オラリオへ来て1ヶ月半で、ミノタウロス強化種と戦ってレベル2になるなんて！」

「ありえん…。リオンが戦争遊戯に加勢していたとしても、レベル2とレベル3の一騎打ちで勝つとは…。」

「あたしはそれより、その戦争遊戯での戦略や策を練りやがった同族のことが気になるなあ（えげつない真似しやがる。しかも綿密とした計算の上であの兎を盛り立てやがった。…フィンに匹敵するんじゃないか？）。」

「す、すごいですね。センパイ！」

「ええ、そうですね（勝ったのはベルが決定打ですが、そこまでの道を作ったのはあの小人族です。彼女が一番の功労者だ）。」

「……アポロン。会ったらタダですむとは思わないでね。」

「「……………」」

そうですね。

神アポロンについては折檻が必要ですね。

あの変態神を坊っちゃんに再び近づけてはいけません。

そして、坊っちゃんまがレベル3になってからのことを話しました。

「ええっ！遊女一人を救うために、『イシユタル・ファミリア』に喧嘩を売るなんて…、カッコいいじゃない！」

「殺生石にレベル・ブーストですか…。(サンジヨウノが娼婦として売られていた？…サンジヨウノらしくないな。いつものやり方で何故処分しなかったのだ？…特に殺生石は。)」

「無茶苦茶だぜ…何なんだよ。あの兎は。」

「(あの歡樂街炎上はベルが関わっていましたか。あの『麗傑』との縁はそこからでしたか。神ヘルメス…余計なことを。)」

「うわ……センパイの彼氏、無謀なことをしますね。」

「天界へ帰ったら、オリンポスの有志と共にイシユタルを討ち滅ぼそうかしら？ええ、そうしましょう。」

「「……………」」

ますます過激になってますね。

それ以前に天界へ帰るというのは、坊っちゃんとお別れすることになるのですがそれは分かっておいでのことでしょうか？

第152話 侍従長、助言。

『異端児』のことを話しますと、さすがの彼女たちも渋い顔をしました。

それは当然でしょうね。

「知恵を持つ喋るモンスター…、仲良くなれそうね！それに「イケロス・ファミリア」はやはり閨派閥とのつながりがあったわね！」

「团长様、それはそういう単純な問題ではありませんが…。というカリオン、お前よくこれを受け入れたな？」

「……ベルが決めたことですので、私はそれを手助けしたにすぎないだけです（それに彼らがいなければ、私もベルも深層で死んでいたでしょう。いつかはお礼を言わなければいけませんね）」

「あの黒ずくめ、神ウラノスの部下だったのかよ…。というか、フィンたちに喧嘩を売つてよく無事でいられたよな。」

「はえー。何度も聞いてもすごいですねえ。レベル7に匹敵する黒いミノタウロスとの戦いってどんなんでしょうね？」

「イケロス…、会ったら永遠の眠りにつかせてやるわ。」

「……………」

大丈夫でしょうか？

思い余つて、元主神を殺しかねませんでしょうか…。

早まったことをしないよう止めておくようにしましょう。

もつたいたいですからね。

そして、遠征のことを話しました。ルウさんのアレは伏せています。

本人は私に話してほしかったのですが、そうはいきません。

「モス・ヒュージ強化種…：ジュラ…：ジャガーノート…：そして重症を負ったままの深層脱出…。兎さん、お祓いした方がいいのではないのでしょうか？何かに取り憑かれているとしか考えられません。」

「凄いわね！…ここまで半年なのもつと凄いわね！」

「…：私に会う前にそのような事が…（あの技はその時で編み出したものでしたか）。」

「…言葉ありません。」

「ルドラ…アリーゼたちの件も含めてちゃんと礼をしておかないとね。イシユタルと共に滅ぼさないと。」

「……………」

心配になってきました。

神アストレアのイメージが完全に崩れましたね。

まあ、坊ちやまに対して敵意を持たないだけでもマシですが。

坊ちやまが救援に向かった、クノツソス：邪神ディオニュソスについて話しました。

そのきっかけとなった【27階層の悪夢】の全ても。

坊ちやまの記憶だけではわかりませんでしたので、ギルドや【ロキ・ファミリア】などへ忍び込んで情報収集してきました。

容易かったですね。

「今更だけど、【27階層の悪夢】にやはり助けにいくべきだったかしら？」

「団長様、それは無理難題です。第一、あの時は間に合わなかった。仕方がありません。」

「フィンのやり方は間違ってるけどな、まさかあの時の歪みが今になって出てくるとはな。」

「何度も考えても悔やむわね…。あの件によつて生まれた怪人が、同郷の神によつて利用されるなんて。」

「…あの大鐘楼の音は神…いえ邪神ディオニュソスも予想外でしたでしょうね。」

「深層で負った傷が回復してないというのに…すごい。」

坊ちやまは大したことはしてないと思いでしようが、「ロキ・ファミア」にとっては大きな借りとなったのでしようね。

今回の戦争遊戯で内部から大きな不満が上がっているそうですが、当然です。最後に、今回の戦争遊戯のきっかけとなったことを、話しました。

「か、神フレイヤの魅了を弾いて孤立無援となった状況でも諦めないとは……。あの兎さんはどれだけ規格外なのですか……。徹底的にお祓いした方がいいのではないのでしょうか?」

「私はそれより「フレイヤ・ファミア」の洗礼を、連日耐えきったのが凄と思うわ!」
「私が離れている間にそのような事が……。辛かったですね、ベルは。」

（センパイの彼氏は、この時点で『英雄』と称えられてもいいのでは?）

「やっぱり、フレイヤ許せないわ。でも、ベルに振られたからざまあ見ろね。いい気味だわ。」

「「……………」」

まあ、そうですね。

美の女神が振られるとは思いませんでした。

さすが、坊ちやまです。

「…が、現在までの状況です。」

「…半年でレベル5。はあ…もう英雄そのものじゃない！恩がでかすぎてどう返していいかわからないわ。でも！少なくともこの戦争遊戯では、助けないといけないわ！いいわね、みんな！」

「そうですね。同郷の者もこのポンコツエルフも助けていただいた上に、私達を生き返らせてくれましたね。それに…【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】が非常に気に入りません。いい機会です。痛い目に合わせてあげましょう。」

「か、輝夜！私はポンコツではない…！貴女たちが助けなくても私は彼を助けます、何が何でも。」

「フィンや【猛者】を敵に回すなんてよー。あたしならすぐ降伏なんだけどなー。けど、アストレア様もリオンもあたしたちもかなり世話になったしな、返せるものは返さないとな。」

（ベルさんのおかげで、ルウセンパイと仲良くでき、そして死んだセンパイたちが復活しました。恩がでかすぎますね…。）

（ベルは、私を心身と共に癒やし、リオンに正義を取り戻させ、アリーゼ、輝夜、ライラ…貴女達を過去から連れて帰り復活させた…。はあ…ここまでとは思わなかったわ。）

もはや、【アストレア・ファミリア】は坊ちやまの手中にありますね。

本人は気づいていませんが、彼女たちは坊ちやまを生涯支え続ける気でしようね。

坊ちやまのスキルが、ここまで影響を及ぼすとは本当に予想外です。

「アストレア様は、どうされたいのでございますか？」

「…ベルが生きている限り、ベルをずっと支えて行きたいと思っっているわ。今回の戦争遊戯に関わらず、ダンジョン制覇や黒竜討伐だけでなく、ずっとね。みんなはどう思うかしらっ？」

「異議はないわ！というか、死んだはずの私達を復活させてくれたもの！」

「そうだなー。もらった命はあの兎のために生かさないと。甘っちょろいのが心配だぜ。」

「そうでございますね。それだけでなく、私はあの兎さんの側に寄り添いたいですねえ。」

「なっ!?か、輝夜！」

「お前だけに独り占めはさせんぞ。私もあの兎さんに惚れたのだからな。」

「待ちなさい！輝夜！抜け駆けは駄目よ！私もだわ！」

「あたしはごめんこうむるぜ。勇者サマ一筋だからな。」

「…私は憧れるだけです（これ以上の修羅場に入りたくありません!）」

「……また増えたわ（ベルのアビリティが影響しているのかしら？強化してくれるのは

いいけど……、複雑だわ。」

これで、坊ちやまのハーレム構成員が増えましたね。

「アストレア・ファミリア」は坊ちやまと彼女たち次第で、何人か増え続けるかもしれないね。

ですが、彼女たちは大事なことを忘れているようです。

「なら、貴女たちはより強くならなければなりませんね。」

「「え？」」

「忘れましたか？今の坊ちやまには、あの『才禍の怪物』と呼ばれたアルフィアさんがいます。彼女を納得させるのが最低条件でございます。」

「「あつ……。」」

やはり忘れていましたね。

しかも、今のアルフィアさんは坊つちやまのために病を克服し、更に強くなっていくでしょう。

そして、坊ちやまに対してより過保護になるでしょう。

追いつけられますか？

「……私は神だからいいけど、みんなは苦勞するわ。頑張つてね！」

「ずるいわ！アストレア様！」

「それは、公私混同でございます。」

「いくらベルと古い付き合ひと言つても、それはずるすぎます！」

神アストレアも例外ではないと思いますが…。

まあ、それはアルフィアさんとセバスの説得次第ですね。

恐らく、大丈夫でしょう。

「はあー苦労するぜ、あいつら。なあ？新入り。」

「そうですね。ライラ先輩。」

「武器がないなら、買うか作るしかないな。新入り、おめえ作れるとしたら今からだ之間に合うか？」

「む、無理です！」

「だよなあ…。」

それは不要ですね。

「その心配は不要です。」

「うおっ！」「ひゃっ！」

「【ヘファイストス・ファミリア】と【ゴブニユ・ファミリア】が協力してくださいませ。特に【単眼の巨師】はいくつかの借りがありますので、それを使わせていただきましよう。」

あのジャガーノートの爪は、「単眼の巨師」がくすめとつたのを知っています。そこをつけていけば、彼女たちの武器を作るか譲ってくれるでしょうね。

『……おい新入り、このメイドはヤバい。あたしの勘がそう言っている。絶対に逆らうなよ。』

『ははははい！わかりました！』

失礼な小人族ですね。

まあ、その勘は間違っていないと言っておきましょう。

第153話 執事長、談話。

「……………」

「…以上が、一週間前までのこととなります。」

「……………」

「おや、カップの中身が空になりましたな。お茶を注ぎましょう。」

そろそろ…来ますな。

「…ぜだ。」

「お嬢様？」

「何故、あの子がそんな目に遭わなければならないのだ！ふざけるな！」

「落ち着いて下さいませ。」

やはり、怒りましたか。

「これが落ち着けるか！糞神共があの子に仕掛けたことを！特にアポロンとヘルメスは

！」

「まあ、そうですね。」

「特にアポロンは許せん！あの子に変態的な行為をしようとしたばかりか、あの子を傷

つけたただけでなく私と妹が愛した教会を破壊しただと！見かけたら皆殺しにしてやる！」

仕方がありませんな。

あの教会はお嬢様たちにとって、思い出の場所でしたからな。

「ヘルメスもだ！私達と同じ『神工の英雄』をあの子に押し付けるな！悉く、あの子に試練を仕掛けやがって！〔ヘラ・ファミリア〕があつた時からそうだ！今度こそ送還してやる！」

「それは駄目でございます。神ヘルメスは坊ちやまのために役立つてもらいます。」

「…相手はあの狒々爺でも手こずつた糞神だぞ？」

「神ヘルメスは我々がまだいた時より、坊ちやまへ並々ならぬ期待を寄せています。〔ヘルメス・ファミリア〕は今の私達にない情報収集力があります。利用しない手はございません。」

「くっ…。やむを得んか。またおかしな真似をしたらどうするのだ？」

「心配は無用です。1週間程前に、断罪した上で釘を刺し首輪をつけておきました。」

「…そうだったな。お前とメイが協力した以上、心配は無用だったな。」

「はい。」

ええ、あの神には油断はできません。

元主神ヘラもクソエロ爺も手を焼くぐらいですからね。

「…しかし、半年でレベル5か…。神時代にも「ヘラ・ファミリア」にもいなかったな？」
「はい。世界新記録でございます。」

「はあ…メーテリアと雑魚の子が大成を成すとはな。誇ればいいのか、心配すればいいのか悩むな。」

「贅沢な悩みでございますな。」

「五月蠅い。…だが、系譜を持つだけでお前達が解放されるとはな。」

「どうやら、眷属だけでなく系譜を受け継ぐ者でもできるようですね。坊ちやまを初めて見たときは驚きました。」

「…やはりお前もそう見るか。あの子はあまりにもメーテリアに似すぎている、目の色を除けばな。」

「はい。」

「7年前炎の海に飛び込んだ時、メーテリアの幻覚を見てしまった。しかし、それはあの子そのものだった。あの時の、あの子の一語一句がかなり堪えたよ。あの小娘共にやられた時よりもな。」

「…お嬢様。」

「神アストレアの挑発に乗って、どさくさに紛れてあの子の側になったが、そ

の後の神ヘステイアによる問いには逆らえなかった。…あの子は、私達と違い主神に恵まれたな。」

「そうでございませぬ。ヘステイア様は、数百年オラリオにいた私から見ても善神中の善神でございませぬ。坊ちやまの最大の幸運は、ヘステイア様に拾われたことだと思いません。」

「そうだな…。他の神々に拾われても玩具のように扱われるだろうな。神ヘステイアには感謝しても感謝し足りないな。」

「ですが、坊ちやまに対して多少溺愛気味なのが玉に瑕ですが。」

「…度がすぎるようなら、釘を刺さねばならんな」

坊ちやまは善き主神に出会えました。

お嬢様とヘステイア様の仲を取り持つ必要がありますな。

「7年前、私達が示したことをあいつらは学ばなかったようだな。ますます失望したよ。」

「ご心中察します。」

「ザルドも浮かばれないだろうに…。やはりエレボスの誘いに乗らず、ザルドの意見に従いあの子に会いに行くべきだったか。」

「そうされましたら、お嬢様たちは私達を解放されましたか？」

「……いいや、しないだろうな。お前たちはよくも悪くも危険すぎる。あの子を徹底的に甘やかす上にしごくだろう?」

「お褒めにいただき光栄でございます。」

「褒めてない。」

私にとっては褒め言葉でございます。

坊ちやまが私を解放してくれたことに感謝しなければなりませんね。

それはアルフィアお嬢様が、坊ちやまに会いに行かなかったことにも対してです。

「しかし、この7年間で【猛者】を除いて第一級冒険者が誰もランクアップしてないとはな。ここまでの怠惰とは思わなかったぞ。」

「ですが、【猛者】も私の目から見て大したことありません。レベル8となっても【ゼウス・ファミリア】団長の【傑物】と比べ物にはなりません。」

「あの精強な男と比べるまでもないだろう。…あの子が【最後の英雄】の最有力候補となるとはな。この半年間で成したことを見れば、そう思うのも道理か。」

「複雑ですな。私達が求めてきた英雄がすぐ側にあるとは思いませんでした。」

「全くだ。はあ…何故あの子が選ばれるのだ…。」

あと1年、いえ2年早ければ…。

いえ、過ぎたことは仕方がありません。

今の環境に感謝しなければなりませんな。

「それで、今回の戦争遊戯はどうなったのだ？いつからやるのだ？」

「一週間後でございます。戦争遊戯は、私達にとって手慣れた『旗争奪戦』でございます。」

「！そうか。それなら、もう勝ったも同然だな。」

「ええ。坊ちやまの引きは恐るべきですな。」

「待て、引きだと？どういうことだ？」

「お嬢様、坊ちやまは異常すぎます。こちらが先日ステータス更新したものでございませぬ。」

ヘステイア様から見せてもらったものを暗記し、写したものです。

何度も見ても異常ですな。

第154話 執事長、解説。

「どれ……………。おい、セバス。コレは事実か？」

「はい。真でございます。」

「ありえん…。私でも、限界はSまでのはずだ。あの子は上限がないというのか？」

「わかりません。ですが、【憧憬一途】が坊ちやまを強く導いているのは確かでございます。そしてその副次作用は、美の女神である神フレイヤや神イシュタルの魅了を無効化します。」

「とんでもないスキルだな…。待て、このスキルは…。あの子は誰を対象にしているのだ？」

「対象は様々ですが、発現したきつかけは【ロキ・ファミリア】の【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインでございます。」

「…あのダンジョンの子か。ヘラが欲しがっていた子だったな？」

「はい。」

あの時の娘が、坊ちやまの憧憬の対象となるとは思いませんでしたな。

そして坊ちやまを強く鍛えて、道を示してくれたことに感謝します。

しかし、あの娘は気づいているのでしょうか？

初対面で既に坊ちやまへ惹かれていることに。

「…それは置いておこう。その他も異常だな…。【幸運】だと？」

「そのアビリティは坊ちやまをギリギリまで生き残らせ、あらゆる現象から坊ちやまを守ったものでございます。ヘスティア様は【加護】のようなものと言っておりました。【アストレア・ファミリア】の娘たちを復活させたのも、そのアビリティが深く関係しております。」

「……運か。運があの子を守ってくれたのだな。運も実力のうちというが、本当にそうだな。」

「発現したきつかけはわかりませんが、元々あったものではないかと思えます。」

「そうか。……【耐異常】のランクが妙に高いな？【逃走】…あの雑魚にもあったもの聞く。だが、問題はコレだ。何だこの【魅了】は。」

「私とメイの見解では、【幸運】と同じく坊ちやまに元々あったものであり、神イシュタルや神フレイヤの魅了を受け続けてそれによって鍛えられ、発展アビリティとして発現したのではないかと思えます。」

「……余計なことをしてくれたな、あのビッチ神共め。」

そうでしょうか？いつかは発現されてたかと思えます。

例のスキルと組み合わせれば、より力を発揮できるでしょう。

今回の記者会見で成功できましたので、どのくらいまで上がっているか楽しみですね。

「スキルも異常だな。【憧憬一途】はともかく【英雄願望】…【猛牛殺し】…【兎囲女達】…【時越白兔】…見るだけで頭が痛くなってきた。それらは後にしよう。魔法は、…無詠唱か？」

「はい、お嬢様。無詠唱の魔法でございます。威力は無詠唱の分弱いですが、連発できます。」

「ふむ…威力が弱いなら使い物にはならんが、牽制程度にはなるか。」

「いいえ、お嬢様。それは先程の【英雄願望】によつて徐々に強化されます。」

「ほう、それは凄いな。何故、この魔法が出たのだ？」

「神フレイヤが戯れで、坊ちやまに魔導書を渡したのがきっかけです。」

「…あのビツチ神は何を考えているのだ？まあ、いい。おかげで、あの子が強くなれるならいいでしょう。」

恐らく神フレイヤも坊ちやまを強くさせたいために、魔導書を差し出したのでしょうね。

坊ちやまの想いの強さがこの魔法を引き出しましたな。

使いようによつては、隙がなく恐ろしい魔法になることをお嬢様はお気づきでしょうか？

「この【英雄願望】とは何だ？」

「チャージ行動です。坊ちやまがレベル5になったことから5分間までは溜めることができます。溜めれば溜めるほど威力が高くなります。それは魔法だけでなく武器も素手も適用します。」

「なるほどな…。チャージ間は動けるのか？」

「レベル2はなかなか動けませんでしたが、レベル3になつてからは移動できるようになりました。また、足に溜めることによつて、一時的に加速することが可能になりました。」

「応用が効くスキルだな。どうせお前たちのことだ。このスキルの有効的な使い方を、あの子にも指導しているのだろう？」

「ご明察でございます。私達が教え、自分で考えそれを反復して習得しております。…本当にあのクソ雑魚サポーターの子かと疑う時があります。メイもです。」

「……そうか。素直ないい子に育つたのだな。…いや待て。あの狒々爺に14年間も育てられたと言つてたな？何故、そこまで純粋で素直な子に育つたのだ？」

「それは私共も不思議に思つております。ただ、クソエロ爺が下界から見たまを絵本

や小説にしたものを坊ちやまに見せたのが、よかったかもしれませぬ。」

「どういうことだ？」

「坊ちやまは、クソエロ爺が見た下界の真実の英雄譚にのめり込んでいました。いわば、古代の英雄たちが坊ちやまを教え、戒め、善き道へ導いたのではないかと、私とメイはそう思っています。」

「…なるほどな。先人の教えを学びそれを習得したわけか。いや、あの子の純粹な想いがそれを受け止め、自らの血肉や知恵に変え、現在に至ったわけか。」

「その通りでございます。坊ちやまは私達から見て才能が全くないと思いましたが、想いの強さそのものが坊ちやまの恐るべき才能でございます。」

「……そうか。せめて私、いや私達「ヘラ・ファミリア」がこの手で育て上げたかったのだがな。」

「ご心中察します。」

しかし、坊ちやまが「ヘラ・ファミリア」がいた時に生まれたとしても、元主神ヘラが溺愛し絶対に人前に出さなかつたでしょう。

例えば、アルフィアお嬢様やメーテリアお嬢様が相手だとしてもです。

今が、坊ちやまにとって幸せな時かもしれませぬ。

皮肉なことですが。

「【猛牛殺し】…それは『異端児』の黒いミノタウロス、アステリオスという奴がきつかけか?」

「はい。猛牛系とありますが相手が猛牛系でなくても、イメージに浮かぶだけで適用されます。それはモス・ヒュージ強化種戦で発動いたしました。」

「…想いの強さがここまで適用されるとはな。ある意味、いつでも超強化されるわけだ。」

「はい。その通りでございます。」

「ここまでもう十分なのだが…。これは見たくもないが、見るしかないだろうな。何だこのスキルは。」

「レベル5になって発現したものでございます。きつかけはクソエロ爺でございます。…お嬢様。このスキルと【魅了】の発展アビリティの組み合わせは極めて凶悪でございます。」

「あの狒々爺め。あの子を育児放棄しただけでなく、碌なことを教えんとは。会ったら、全力の魔法で吹き飛ばしてやる。…それはさておき、これはどこまで強化されるのだから?」

「昨日までの段階では、レベル5やレベル6の人に対してはもう相手にならないくらいです。」

「何だと？そこまで強化されるのか？」

「お嬢様、信じられないかもしれませんが、今の坊ちやまは私またはメイと5分間戦えるほどでございます。」

「…何だと？嘘を言っているのではあるまいな？」

「事実でございます。坊ちやまを愛する人が増えれば増えるほど、そして坊ちやまを慕う人憧れる人が多ければ多いほど、坊ちやまは強化されます。そこへ先程の「猛牛殺し」のイメージが加われば更に跳ね上がります。時たまに私やメイが手こずる時があります。」

「お前たちでもか…。」

「これは先日までですが、今は更に跳ね上がっているでしょう。」

「どういう意味だ？」

「はい、実は…」

昨日の記者会見について話しました。

「そんな糞神なぞ知りませんな。」

「……はあ……仕方がない。あの子が強くなるのはいい。ただ、雌豚がよってくるのは我慢ならん。防波堤と言ったな？何だ、それは？」

「はい、それは……」

リリ嬢たちのことを話しました。

「……………」

「お嬢様？」

「やはりエレボスの誘いに乗らずに、あの子のところへ行くべきだった。あの小娘共に、嫁の作法を教えてやれたのに！」

「今更でございませぬ。」

お嬢様は結婚されてないのに、どうやって嫁の作法を教えられるのでしょうか？
本当に意地っ張りな方です。

「……半年で多くないか？……何であの子へそんなに寄ってくるのだ。」

仕方がありません。

坊っちゃんの人徳そのものに惹かれてきたのですから。

「……………はあ。あの子が未精通なのが幸いしたな。…本当にあの雑魚の遺伝子を受け継いでいるのか？あの雑魚は7歳で精通した、と周囲に言いふらしていたぞ。」

「私共も不思議に思っております。ここまで都合よく、双方のいいところだけを受け継いだ方は初めてでございます。」

「はあ…仕方がない。お前たちのことだ、その小娘共の人格などは問題ないだろうな？」
「もちろんでございます。メイがほぼ担当していますが、私から見ても問題ありません。強さやスキルなどが随分偏っていますが、それぞれ補えば問題ありません。」

「全て完璧というわけにはいかんな…。まあ、いい。私が目を光らせておこう。」
「ほどほどに願います。元主神ヘラのように、ならないでくださいませ。」

「あんな姑のようには……………そうだな、気をつけておこう。あの子に嫌われたくないからな。」

お嬢様は坊ちやまに過保護なことをするでしょうね。

彼女たちに対して危害や脅しをする可能性が高いです。

なので元主神ヘラのようにはならないように、と釘を刺しておきました。

「ヘラ・ファミリア」の幹部であるお嬢様は、そのことをよくわかつているはずですよ。

「そして、このスキルか。」

「お嬢様、このスキルは極めて発動条件が難しいです。ヘステイア様は下界だけでなく

天界をも滅ぼしかねないスキル、と言っておりました。」

「だろうな、7年の時を遡って私を炎の海から助け出したくらいだからな。絶対にあり得ないが、起こった以上信じるしかあるまい。それがあの子のスキルなら、尚更だ。」

「そうですね。」

「…あの小娘共も助ける必要があったのか？私の経験値を無駄にしたのぞぞ。」

「[アストレア・ファミリア] 団長のアリーゼ・ローヴェルが、お嬢様を救い出す発動条件の1つでした。」

「…そうか。なら、仕方がないな。お前たちのことだ、発動条件は既に把握しているだろう？」

「三度起こりましたから、大体は把握しております。完璧ではありませんが。」

「そうか。取り扱いには気をつけ……思ったのだが、まさかメーテリアの復活も可能なのか？」

「可能性はありますが、今のところ恐らく条件が足りません。まず、戦争遊戯に勝つ必要がございします。」

「………そうか、期待はしないでおう。…できればそうあってほしいものだな。」

「全くでございします。」

アーデイ嬢、アストレアの娘たち、アルフィアお嬢様から、坊ちやまのスキルの発動

条件が大体絞れました。

メーテリアお嬢様を復活させるには、まだ条件が足りません。

そのために、戦争遊戯にどうしても勝たなければなりません。

む……？そろそろ坊ちやまが起きられますな。

「そろそろ、坊ちやまが目覚める頃でございます。メイによつて、アストレアの娘も集まるでしょう。」

「騒がしいのは好きではないが、仕方がないな。………はあ。」

「ご心配はいりません、お嬢様。坊ちやまはお嬢様を決して拒絶したりはいたしません、ご安心を。」

「心を読むな、忌々しい奴め。やはりエレボスの誘いに乗らず、あの子のところへ行くべきだった。」

今更ですな。仕方がありません。

メーテリアお嬢様に似すぎている坊ちやまを見れば、そうなるのは当然です。

アルフィアお嬢様に関わらず、「ヘラ・ファミリア」の娘たちも坊つちやまを見ればそうなるでしょう。

アルフィアお嬢様が死の病から逃れたのかはわかりませんが、少なくとも当分は大丈夫でしょう。

当面の間、特效薬を服用し続ければ完治することは可能ですね。

そうなりますと、『才禍の怪物』の猛威が奮います。

坊ちやまのためなら、一層増しますな。

：アルフィアお嬢様と、このように長く語り合ったのは「ヘラ・ファミリア」に所属した時でもありませんでした。

いつも片言だけで終わっていましたからね。

今後もこのような機会があると思うと、坊ちやまには本当に感謝しきれませんな。

第156話 白兔、躊躇。

「う、ううん…。」

ここは…、「ヘステイア・ファミリア」のホーム？

えっと、確か今日は…特訓？いや、18階層でルウさんのファミリアの人の墓参りに行つて…。

!?

ア、アルフィアさんは!?

コンコン

「…ご主人様。起きていますでしょうか？」

「あ、はい。起きています。」

バーチェさんは、ずっと僕のことをご主人様と言い続けている…。

僕は呼ばなくてもいいと言ったんだけど、メイへお願いすると

「メイドの生きがいです。坊ちやまは、メイドの生きがいまで取り上げる気でしょうか？」

と言われたら何も言えない。

「失礼します。」

ガチャ…。

何度も見ても、すごい美人だよね。

特にあの胸が…ダメダメダメ！

僕は団長だよ！

「?…メイ様より、リビングへ来るようにとのことですので来ていただけますでしょうか？」

「あ、はい。わかりました。」

「ご主人様、前にもいいましたが…、私に対して敬語は必要ありません。ご主人様は私に何度も勝ちましたので、その特権があります。」

「えっと…うん。わかった。けど、慣れるのに時間がかかるから待つてね。」

「はい。では、リビングへ同行させていただきます。」

バーチェさん…、もう手慣れている。

メイドという仕事に合っているのだろうか？

うーん。僕が精神疲弊してから、数時間ぐらい経ったかあ…。

ええと…、ルウさんのファミリアの人たち…アリーゼさんたちを患者さんの魔法で生

き返らせたんだよね？」

そして…僕のお母さんと同じファミリアの人、アルフィアさんはどうなったんだろう？

メイとセバスに聞いてみよう。

コンコン

「ヘスティア様。ご主人様を連れてきました。」

「あ、うん。入っていいよーベルくん、バーチエくん。」

「おい、セバス。今の何だ？ご主人様だと？」

「お嬢様。先程説明した通りでございます。」

え？アルフィアさんの声？

よかつた、無事だったんだ！

「え!?ご主人様!?どういうこと!?!」

「私は、ご主人様より若様の方が似合うと思いますねえ。」

「あー、そうだな。あたしはあの兎を見るといいカモの方が…いや、待ってくれよ、アストレア様!冗談だった!」

「……（私も改宗したら、ベルのことをご、ご、ご主人様と呼ばなければならぬでしょうか?）」

「……（…混沌が起こっています。スルーですスルーです）。」
……。

「ご主人様…、私達もそう呼んだ方がいいでしょうか？」

「ベル様…ご主人様…。 ……ご主人様の方がいいかもしれませんね。」

「ベルくんを、ご、ご、ご主人様と…（きやーきやー）。」

「ベル殿、強く生きて下さい…。 私は呼び方を変えませんから…。」

「ベル、強く生きろよ…。」

……。

「バーチェさん、僕入りづらいんですが…。」

「…諦めて下さい、ご主人様。」

うう…恥ずかしい。

よりによつて、お母さんと同じファミリアの人に知られてしまうなんて。

「し、失礼します。」

ガチャ。

リビングには、左端に神様とリリ、春姫さん、エイナさん、カサンドラさん、ヴェルフと命さんがいて。

右端にメイとレアお姉ちゃんとルウさん、セシルさん。

そして先程生き返ったアリーゼさんと輝夜さんとライラさん。

右の隅にセバスとアルフィアさんが…。

「えっと…神様、すみません。精神疲弊してしまして…。」

「あ、うん。メイくとセバスクんから聞いているよ。仕方がないよ（本当は仕方がなくはないけどね！時を遡る代償が精神疲弊程度で済むくらいなら、じゃが丸くんより安いよー。）」

「あの…皆さん、ご無事だったでしょうか？」

そして、彼女たちの方へ振り返った。

「ええ、ベル。ベルのおかげでアリーゼたちの遺体を過去から持ち帰り、愚者さんの魔法で無事に生き返ったわ。彼女の主神として、お礼を言わせていただくわ。…本当にありがとうねー！ベル！」

「あ、僕は単に遺体を集めて持って帰っただけで…。」

「アストレア様！いいでしょ？私、アリーゼ・ローヴェルよ！ねえねえ！兎ちゃんの名前は？」

『五月蠅いな…。あの小娘共を吹き飛ばしていいか？セバス。』

『駄目でございます。』

何かあちらで怖いことを言っているような気が…。

「あ、はい。ベル・クラネルと言います！」

「ありがとうございます！ベル！アストレア様とリオンが世話になったわね！私達もね！」

「団長様、どいてくださいませ。「んぎやつ！」では私の番ですね。助けていただきありがとうございます。私はゴジョウノ・輝夜と申します。…若様。」

「あ、はい。…若様!?!」

「あー、あたしはライラってんだ。うちのやつも含めて世話になったな。ありがとうございます！」

「あ、はい。」

「さっきの若様って何!?!」

「ベル…感謝します。貴方は私に正義を取り戻させただけでなく、皆をあの忌まわしい過去から持ち帰り生き返らせてくれました。ありがとうございます、ベル。」

「いえ…僕は遺体を持ち帰っただけですので、礼は愚者さんへお願いします。」

「わかりました。この礼はいつか必ずします。」

「礼って、何をするつもりかしら?」

「あのポンコツエルフに、果たしてそれができるのでしょうか?」

「あたしは賭けてもいいぜ。無理だと思うぜ。」

「私は、まだ認めないわよ。」

???

第157話 白兔、号泣。

そしてセバスとアルフィアさんの方に。

お母さんと同じファミリアの人…。

でも何でだろう…？

最初に見た時もあったけど、初めてじゃないような気がする…。

いけないいけない、初対面は大切だよね。

「初めまして！ベル・クラネルと言います！」

「違う。」

「え？」

「…初めましてではない。久しぶりが正しい。」

「え？…あの、会った覚えがないんですが…すみません！」

「謝るな、無理もない。初めて会った時は、お前が赤子の時だったから仕方がない。」

赤子の時に…？

「お嬢様、それではわかりません。」

「…私は、お前の…母であるメーテリアと双子の、姉のアルフィアだ…。」

「!?」

え……、お母さんの……?

じゃあ、アルフィアさんは僕と血が繋がっている……本当の家族?

あの時、助けて本当によかった!

本当に……。

「……お前に助けてもらったが……、今更許してもらおうとは思ってない。私はそれだけのことをしたのだから……。」

「違う!それは違います!だって……アルフィアさんは世界のために、フィンさんたちを鍛えるために戦ったんですよね!僕は、アルフィアさんを、誇りに思います!」

「やめろ、私を誇りに思うな。私は……オラリオで多くの人を殺した、大犯罪者だぞ?」

「なら!僕も一緒にその罪を償います!」

「!!」

「だから……、もうどこも行かないでください……お願いします……。僕を置いていかないで下さい!」

「分かった。嗚呼……、お前は本当にメーテリアに似ているよ(その目の色を除けばな)。」

「お母さんに……?」

「ああ、そうだ。お前の母、メーテリアのことを色々と聞かせてやろう。だから、お前の

「14年間の事を私に聞かせてくれ。」

「あ、はい！わかりました！ええと…、伯母さん？」

「「全員退避！」」

「グンッ！」

「!?!?」

「~~あ~~あああ……っ！」

痛い！げんこつ……だよね？

今の……見えなかった！

どうして……？

「ベル。一回しか言わないから、よく聞け。私のことは……アルフィアお義母さんと呼べ。

いいな？」

「え？……でも、一般的にお母さんのお姉さんは……」

「わかったな？」

「……ハイ。」

「では、私のことは何て呼ぶか言ってみろ。ほら。」

「……ア、アルフィア……お義母さん……？」

「よろしい。……ずっと一人にさせてすまなかったな、ベル。」

「……っ！う、うあああああつ！寂しかった！ずっと寂しかったんだ！お祖父ちゃん
がいても、寂しかったんだ！村で父親と遊んでいる光景を、オラリオで親子連れで買
物をしている姿を見るたびに！」

「すまない。本当にすまない、ベル……。大丈夫だ、これからはずっといるからな。」

そしてお義母さんは、泣いてる僕をそっと抱きしめた。

お義母さんはその後何も言わなかったけど、泣いているように感じた。

だから、僕は……お義母さんの分も。

「うあああああああ……ん！」

しばらく僕はお義母さんの胸で、ずっと泣き続けた。

（お嬢様、よかったですな……。お嬢様のあの表情、あのような姿、初めて見ます。無理に
涙を堪えなくてもよろしいでしょうに。）

「ぐすつ……ぐすつ……。すみません、神様、皆さん。」

「いや、無理もないよ。よかったね！ベルくん！」

神様……ありがとうございます。

でも、僕は……。

「レアお姉ちゃん、僕はお義母さんの罪を背負い…」

「駄目よ。」

「え？」

「背負う必要なんかないのよ、ベル。」

「でも…。」

「大丈夫、私に任せておきなさい。何たって正義を司る神様なんだから！」

『アストレア様のあのキャラ、初めて見るわ…。』

『私もでございます…。』

『いいのかよ…。まあ、あたしたちを救ったのもあるしな。それに「静寂」の戦う本当の理由を知っちまったからな。』

『ルウ先輩…。』

「アストレア様、ベルに贖罪させる気は当然私もありません。ですが、どうやって彼らの罪を？」

「ええ、5年前ベルに会ってからずっと考えていたの。どうやったらいいのかを、ね。」

「…何だと？」

「私の案を言うわね。」

そして、レアお姉ちゃんは語ってくれた。

全てをエレボス様や邪神の神様に押しつけることに。

僕を人質にして、お義母さんたちに言うことを聞かせたというようにすることを。

「レアお姉ちゃん…、いいの?」

「当然じゃない。ベルは何も罪もないんだもの。悪いのはエレボスよ。大丈夫よ、エレボスもわかってくれるわ。」

「…エレボスが気の毒に思うが、まあベルのためなら、仕方がないだろう。」

レアお姉ちゃん…ありがとう。

「まあ、そうだけどなあ。」

「うん! 私はアストレア様の案に賛成だわ!」

「私もでございます。それなら問題ございませんね。」

「なるほど、それなら辻褃が合いますね。」

「坊ちやま、大変申し訳ありません。残り時間わずかですが、本日の特訓がまだですの
で、今から再度クノッソスへ向かいます。よろしいでしょうか?」

「あ、うん。そうだね! 戦争遊戯にどうしても勝たなければならないから、もつと特訓し
ない」と!

「アルフィアさんは静養のため、しばらくホームにいていただきます。坊ちやまのため
にも。」

「……お前たちがフォローするなら、心配は無用だろうな。私は病を治すのが先だ。べル、強くなるんだぞ。」

「うん！勝たなければならぬ理由が増えたから、もつと強くなりたい！」〔ヘスティア・ファミリア〕を守るだけでなく、お義母さんのためにも！」

「そうか…、お前はいい子だな。」

お義母さんは僕の頭をナデナデしてくれた。

心地いいなあ…。

「えへへへ。つと、セバス。支度をしてくるね。」

「はい、玄関でお待ちしております。」



「…神アストレア。貴女の案は確かに辻褄が合うかもしれないが、7年前の恐怖を味わったオラリオの人々は納得しないぞ？」

「あの場では若様を安心させるために言いましたが、アルフィアの言う通りまだ不安材料が大きいです。」

「5年前でも大抗争の爪痕は深かったわ！今もまだ残っているよね？」

「はい、リリもよく覚えています。なので、その案は実現率が低いかと思います。」

「ええ、私もそれを危惧していたの。けど、今の状況なら大丈夫。デメテルたち…女神連

合に話を通して、協力してもらおうわ。」

「…女神たちだけでは足りないぞ?」

「そうだなー。特にあのギルドの豚が納得しねえぞ?」

「あつ…。」

「神アストレア、先程の案はよき案でございます。私から、ギルドのロイマンに話を通しておきましょう。」

「「え?」」

「私も名案だと思えます。「ヘルメス・ファミア」のローリエさんを通してファンクラブで伝達し、本を発行してもらいましょう。」

「「ファンクラブ?」」

「…やはり、こいつらを解放すべきではなかったな。自重を知らない奴らだから困る。はあ…。」

『アルフィア様でも…。』

『「ヘラ・ファミア」の幹部が恐れるぐらいなのですな…。』

『7年前に解放されていたら、どうなっていたんだろう…。』

「ところで、アルフィアに異議があるわ!」

「…何だ?」

「アリーゼ？7年前のことなら…」

「違うわよ！どうして、ベルにはげんこつで私には魔法なのよ！」

「「あー…。」」

「当然だろう。あの子に魔法をぶつけるわけがないだろうが。」

「いいじゃない！鼻屑はいけないわ！」

「黙れ、小娘が。」

「じゃあ！別の言い方をすれば問題ないわね！伯母様…」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「きやあああああああ！」

「アリーゼ…自業自得です。」

「本日3回目の臨死体験でございますねえ。」

「くわばらくわばら、だぜ。」

「あの人が団長で…大丈夫なのでしょうか？」

「学ばない小娘め。」

「カサンドラ嬢。」

「はい、分かりました（ここのところアリーゼさんに使う機会が多いですが、ベルさんで

ないだけ残念です。」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

「うう…。みんなからの扱い、ひどいわ…。」

第158話 処女神、更新Ⅰ。

「神へステイア、神アストレア、お願いがございます。」

「ん？何だい？」「何かしら？」

「戦力が揃いましたので、戦争遊戯の戦略を整えたいと思います。」

「そのため、現時点で全団員の更新をしていただき戦力把握をしなければいけません。」

「もしかしたら、スキルなどが発現しているかもしれない（チラツ）」

「当日にスキルが発現したら、何が起こるかわかりませんから（チラツ）」

「…そうだね（チラツ）」「そうね…（チラツ）」

「??？」

ベルくんの例もあるからなあ…。

さすがにアレ以上のスキルは出ないよね？

「さーて、セバスクんとメイくんが言った通り更新するよ！入団順に入ってくれー。」

「え？神様、僕昨日更新したばかりですよ？」

「念のためだよ、ベルくん！」「は、はい！」

当日に無茶苦茶なスキルが出たら、目も当てられないよ！

「私はヘラの奴が改宗可能にしてくれなかったから、更新すらもできんな…。」

「そうですね、お嬢様。元主神を探す時間もありませんから、現状のままとなりますが。」
「まあ、仕方がない。だがこの厄介な病さえなくなれば、全盛期以上の力を取り戻せるな。」

「そうでございませぬ。その時はお相手いたしましょう。」

「…お前と？ そうだな。お前相手なら、手加減なく振るえるな。」

『え？ 全盛期以上の力を？』

『まだあの時でも弱体化してたのに、全盛期より更に上があったのでございませぬか…。』

『しかも病も克服するから、長期戦も可能だよな。』

『つまり、最後に放とうとした魔法を連発可能ということですか…。あの魔法を？』

『あの女の人…そんなに強いんですか？』

『『『圧倒的』』』』

アルフィアくんが参加してくれれば、更に戦力強化できるね！

病人だから無茶してほしくないのが本音だけど、彼女としては義息子が戦争遊戯の賞品になつてるのが気が気でないだろうね！

ヘラかあ…。

この戦争遊戯に勝ったら、ヘラのオラリオ入りを許してもらおうかな。

アルフィアくんのこともあるけど、ベルくんのことも知りたいだろうね、あの子は。問題はあの子の激情をどう抑えるかだね。

それはセバスくん和アルフィアくんと要相談かな？

「まあ、そういうことだから、みんなのステータス更新をするわ。…アリーゼ、私にとって貴女たちの更新は5年ぶりかしら？」

「私達にとつては数日前だけだね！」

「そうでございませぬえ。おい、リオンお前レベルはいくつだ？」

「…5です。」

「はあ？その程度しか上がらなかつたのか？…お前ずつとステータス更新してなかつたな？」

「アストレア様の話からすると、5年前のステータスそのまま最近更新したということか？」

「…はい。そうです…。」

「もつたいないわ！けど、仕方がないわね！」

「仕方がありませんねえ…。まあ、ここから私達にとつて再スタートということになりますね。」

「そうだな。新生【アストレア・ファミリア】ってか？」

「新生って…文字通りですから何も言えません…。」

「セシル、わかります…。」

まあ、そうだよね。

死んだはずの子たちが過去から来て生き返ったなら、新生とも言えるよね。

はあ…、ベルくんはどこまでもとんでもないことをするんだ。

これ以上は出ないよね？出るなら無難なスキルであつてくれ…。

主神としては贅沢な悩みだよなー。

うーん…。ベルくんも、命くんも、ヴェルフくんも、サポーターくんも、春姫くんも大して上がらなかつたなあ…。

ベルくんはさすがにスキルは出なかつたなー。

春姫くんのランクアップは保留した方がいい、とセバスくんとメイくんが言つてたし。魔力がSに達してから、と。

あとはアドバイザーくんか。

「失礼します。ヘステイア様。」

「うん。そこで横になつてくれる？数日前に更新したばかりなので、大して上がつてないと思うけどね。」

「ええ、私もそう思います。けど、ベル君の例もありますので…。」

「そうだね…。まさか時を越えるとはね。ボクも驚いたよ。神の中でもできる奴って非常に少ないんだよ。」

「そこまでですか？」

「うん。天界でも3本の指に数えられないくらい、いないかな？でも、自ら時を越えてミッションを課して救い出して元の時代へ戻るなんて、彼らの中にもいないけどね！」

「ヘステイア様。…その、時を越える代償は大丈夫なのですか？」

「そうだね…。精神疲弊で済むならね…。」

「うーん、心配だな。」

「今のところは精神力を大きく使用するだけとしかわかってないね…。そうだね、アミッドくんたちに念のため診てもらったほうがいいね。どれどれ…：…んー、え？んんん？」

「ヘステイア様？」

「…：…メイくんたちの言う通りだったね。アドバイザーくん、おめでとう。魔法とスキルがそれぞれ1つつ発現しているよ。…：魔法はともかくこのスキルは何なんだよ！」

「どうして！ボクの眷属はレアスキルばかりなんだ！」

「へ、ヘステイア様？」

「ああ、ごめんよ。…つと、これが君のステータスだよ。」

~~~~~

「…ティア！ヘステイア！」

「…はっ！な、何だい？アストレア」

いけない、つい思いにふけてしまったよ。

「何だい、じゃないわよ。さつきまでポーツとして、どうしたの？」

「いやね、一週間前のことを思い出してね…。」

「ああ…、ここ一週間は濃かったものね。」

「本当だよ…。ところで、ボクはどのくらいポーツとしていたんだい？」

何かを見逃してしまったら、彼らに申し訳が立たないよ！

「1分間ぐらいね。今からバーチェと【大切断】の一騎打ちが始まるわよ。」

「お！バーチェくんか。よかった、いいところで間に合って。」

「貴女とバーチェは仲いいものね。」

「あの娘はいい娘だよ、本当に。」

なんで、カーリーのところにいたのかわからないなあ。

素直ないい子で、最初は笑顔さえ見せてくれなかったのに今は頻繁に見せるように

なつたね。

ベルくんとボクをかなり慕ってくれているようで、嬉しい。

やり方がやや乱暴だったけど、改宗させてよかった！

「ふん！それは妾に対する当てつけかろう？へステイア？」

「何だい、カーリーいたのかい？」

「いちやいかんのか！アルガナが負けた以上、「カーリー・ファミリア」は「ロキ・ファミリア」に頼るしかないが、「勇者」も脱落したらもう負け確定じゃ！」

「何やお！飛び入りしたのはそっちやないか！」

「五月蠅いわ！この無乳女神が！全てお主のせいじゃ！」

「うがあああああ！」

あーもー、うるさいなー。

バーチエくん！頑張るんだぞ！

## 第159話 蠱毒王、余裕。

「テリオネー！アルガナー！二人のバカー！」

計画以上の収穫を得るとはな。

計画では、【勇者】とライラが道連れ自爆で脱落する予定だった。

その後は、アルガナーには私が、テリオネはアリーゼと輝夜、テリオナはルウとシヤク  
テイが相手するはずだったが…。

まさか、テリオネとアルガナーがライラの自爆に自ら飛び込むとは、驚いた。

【勇者】への想いが災いしたな。

まあいい、アルガナーとやりあう手間が省けた。

残るのはテリオナだけだ。

「うう……。いけない！あたしだけでも頑張らないと！」

「残念ですが、テリオナ。貴女も脱落させていただきます。」

「……………誰？（バーチェの声だけど、口調がかなり違う！別人だよね？）」

む…？ああ、仮面とフードか。

「……………！」

『承知した。』

仮面とフードを外した。

「久しぶりですね、テイオナ。数カ月ぶりでしょうか。」

「……………えーと。いくつか質問していい？」

「?どうぞ。」

「バーチェ、だよね？」

見てわからんのか？

「そうです。」

「その格好は何？」

「メイドです。」

「何で？」

「[ヘスティア・ファミリア] 団長ベル・クラネル直属メイド親衛隊だからです。」

「え!?!何それ!?!アルゴノウトくんの!?!どういうこと!?!それにその口調何!?!あたしの知っているバーチェはどこへ行ったの!?!」

「質問が多いですが、一言で言うなら [ヘスティア・ファミリア] へ改宗したからです。」

「それ!?!何で改宗してるの!?!」

『……………!?!』

「(時間がないか)後で説明します。降参するならよし、しないならここで脱落させていただきます。」

「何でよ!どうして!アルゴノウトくんの直属メイド!?ずるい!あたしもなりたい!あたしの方が先に好きだったのに!」

ドン!ドン!ドン!

何も泣きながら、地面に両手を叩くことはないだろうに…。

みんなもドン引きしているな。

そうか、テイオナも団長のことが好きだったのか。

「改宗するなら話は通しておきますが「本当!?!」…脱落するか降参するかにしてください。」

「…あたしは一応「ロキ・ファミリア」の幹部の一人だよ…。なので降参はしない。」

「では、かかってきなさい。」

(バーチェエだけど、あたしの知っているバーチェエじゃない!スタイルが全然変わっている!ううー…、やりにくい!)

「いっくよー!」

「……。」

ヒュッ!ヒュッ!

「くっ！当たらない！」

「無駄が多いです。」

「ううー！調子が狂うー！ならー！これはどう！」

大双牙か。確かに厄介だが…。

「うりやりやりやー！」

「……………」

当たらなければどうってことはない。

「ゼーゼー…。あれ？他のみんなは？」

「計画通りに行動しただけです。後は貴女を倒し、追いつくだけです。」

「な!？」

こんなに隙が多かったのか、ティオナは。

いや、私が強くなっただけか。メイド長には感謝しかないな。

隙を突かせてもらう！

「ガッ!？」

「その程度だったのですか？ティオナ。」

「ゲホッ……。うう…（今の一撃…重い！しかも的確に急所を…）」

「アルガナとティオネの後を追って下さい。」

「な……んでヴェルグスを使わないの……？」

「……わかりませんか？」

「え……？あ！（指先にほんの……ヴェルグスが！こ、こんな微細なコントロールまでも使えるようになったの!?!）」

「今の一撃で、貴女はもう死に体です。では、しばしのお別れです。」

「さ、させるかあああ！」

『『狂化招乱』を使つても無駄です。いくらステータスが上がる……』

「はあああああー」

「技が追いつかなければ、意味がありません。」

「あ……がはあ……。」

先程の攻防で、ティオナの大双牙を振るう両腕にヴェルグスを少し流し込んでいた。

それが効いて鈍くなっていた。

なので攻撃をかいぐくつて、鳩尾に肘打ちと共にヴェルグスを打ち込んだ。

「終いです。」

「つよ……すぎるよ、バーチエ……。後で……教えてよ……。」

「いいですよ。改宗できたら（教えるのはあのメイド長ですが）。」

「約……束だよ……。」



バシユツ!

『【ロキ・ファミリア】の【大切断】、脱落!』



「『褐色巨乳美人メイド、キターーーー!』」

「よっしやー! バーチェくん! 偉いぞー!」

「あー、テイオナが負けおったかー(あのメイド服からしてあの性悪メイドに指導してもろうたんだろうな。こりや、負けるわ)。」

「……見事じゃ、バーチェ。」

「何や、ドチビ2号。さっきみたいに喚かんのか?」

「お主人娘も負けたじゃろうが。…バーチェのあの身のこなし、今までのバーチェと一転して全然違う。アルガナがいたとしても、秒殺じゃろうな。」

「【大切断】が秒殺ですか! すごいですね! 【蠱毒の王】は!」

「うむ。【蠱毒の王】の身のこなしは見事に尽きる。あれは独学では不可能だ。恐らく優秀な指導者がついてるだろうな(恐らく旗の守り手のうち一人だろうな)。」

「(あー、メイくんか。けどメイくんの指導についていけるだけでもすごいよな) そうですか! これで【ロキ・ファミリア】連合はレベル6が4枚落ちました! 【勇者】の脱

落は痛いですねー！」

「ああ、これで【ロキ・ファミリア】の敗退は濃くなったな。残る三首領のうち【重傑】、【九魔姫】で勝てるかどうかだな（ほぼゼロだろうな）。」

「ほらな、武の神であるタケミカヅチが太鼓判じやぞ。どんな気持ちじゃ、ロキ？ん？」  
「うっさいわ！そっちこそ、バーチエたんを生かせなかつたやろが！」

「…しようがなかるう。恐らくあのメイドによつて賤けられたんじやろうな。あそこま  
で強くなるとは思わんかつたわ。」

「やはりかー。…聞こうと思うただけど、何でバーチエたんの改宗を認めたんや？」  
「それはな…」

「何や…それは。」

「デタラメじやろう？あのメイドめ！」

「（性格が悪いのは変わらんやつちやなー）そんな手で来たらどうしようもないわな。」  
「じやろう？」

「はあー、フィンの言う通り戦争遊戯を仕掛けるんやなかつたな…。フィンは今頃、あの子によつて目覚ましとるんやろうな（頼むでー、ライラたん。フィンの調子を戻したつてな）。」

## 第160話 勇者、目覚。

僕、いや僕たちはミスリルの檻の中にいる。

戦争遊戯の様子は、檻の中に別の神が作った『神の鏡』で見ている。

「……………」

「団長、すみません…。」

「フィン、すまない…。」

「ごめんなさい！私のせいで…。」

「レフイーヤのせいじゃないさ。あたしがパニックらなければ…。」

ライラ…の自爆攻撃によって脱落させられ、その爆発に巻き込まれテイオネとアルガナも。

そして、間もなくレフイーヤとルルネ・ルーイが、「不冷」の魔法によって魔力爆発させてここへ来た。

…そして、ありえない人物を目の前にしている。

「無様だな。勇者サマよ。」

「ライラ…、何故君が生きているんだい？5年前に死んだはずじゃなかったのかい？」

「ああ、死んださ。この時代に来て生き返ったのさ。」

そんなのありえるわけがない。生き残っていた？

いや、生き残ってて潜めていた？

潜めていたなら、何故出てこなかった？

「あ、ありえない！何でだ！何で生きてんだよ！【狡鼠】！」

「うるせえぞ、【泥犬】。おめえ、自分の心配しとけよ。ここから出たら地獄が待っているぜ？」

「じ、地獄？」

「おめえ、あの兎のファンの賞金首にかけられてんぞ？グッズ100万ヴァリス分のな。」

「ひ、ひいつー！……あの、レファイヤ、その目やめてくれないか？怖いんだよ……」

「む、むむむ。あのヒューマンのグッズ100万ヴァリス分とルルネさんの縁……どっちを選ぶべきか……」

「レファイヤ、あんた……」

「む、ティオナとバーチェの決着がついたか。」

ティオナも負けたか……

仕方がない。

今のバーチェ・カリフは僕も負けるかもしれない。

「ロキ・ファミリア」の【大切断】、脱落！」

ドーン！

「はい、一人追加ですね。……これはバーチェさんですね。カサンドラさん。」

「は、はい！」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

「……うう。ああー！負けた！悔しー！何だよー！あんなの、あたしの知っているバーチェじゃない！」

「メイド服……あそこまで似合うとは思わなかったわ。ねえ、アルガナ？」

「（メイド服はともかく、あの戦い方……バーチェの奴、あのメイドから習得したのか？）私がいちとして、今のバーチェには勝てんな。」

「ええ……私でも勝てないわね。今のバーチェには。」

そんなのどうでもいい。

「ライラ！何故君が生きているのか、答えろ！」

「はあ……、ここまでは思わなかったぜ。」

「ライラー！」

「……………」

「パアン！」

「…？」

「僕は…ぶたれたのか？」

「失望したぜ、勇者サマよ？」

「てめえ！よくも団長を！」

「うるせえ！アバズレ共が！フィンをこんなにさせたのはおめえらじゃねえか！」

「…！」

「特にてめえだ！【怒蛇】！フィンがこうなつてるとわかってんなら、止めるのがおめえの役目だろうが！」

「……………っ！」

「見たくもなかったぜ、こんなになつた勇者サマは。」

「……………」

「なあ、フィン？おめえの親指は何て言つてんだ？」

「……………」

「答えろ！」

「……………」

「フィン…。おめえの最大の失態はあの兎を敵に回したことだ。」

「そうだ…。」

ベル・クラネルに対して嫉妬してしまって、戦争遊戯を仕掛けてしまったのが始まりだ。

「フィン、あの兎はバグっている。神も世界もお手上げになるくらい、バグっている。」  
「バ、バグっている…?」

「当たり前だろ?半年で第一級冒険者に至れるやつが、バグらないほうがおかしいだろ?どんな天才でも1つのレベルをあげるだけでも、数年かかるというのに、あの兎は数ヶ月でポンポン上げやがる。」

「そ、それはスキルか何かで…。」

「そんなスキルが発現するくらいバグってんだよ。あの兎は。」

「ライラ…君は、ベル・クラネルによって生き返ったのか?」

「生き返らせてもらったのは他のやつだがな、それ以上はトップシークレットさ。」

「だ、だが!そんなの反則だ!お前の名前は、私が手に入れた名簿なんかに乗ってない!」

!?

しまった！そういうことか！

「へっ、引つかかったな。【泥犬】よお？」

「え？」

「あたしたちの名簿は今日、ヘスティア様からヘルメス様に初めて渡したんだよ？」

「な…そんなの…嘘だ！」

「……掴まされたということだね？ライラ。」

「（少しは戻ってきたか）その通りさ。【ヘルメス・ファミリア】に【ロキ・ファミリア】と懇意の【泥犬】がいるように、こっち側にもいんだよ。なあ、【泥犬】？心当たりはねえか？」

「そ、そんなのいな……あ。ロー…リエ…。」

「正解さ。うちの大将であるバグ兔のファンクラブの会長がローリエさ。」

「ええええっ！あのローリエさんが会長!？」

「「え？そつち？」」

「要するに、僕らは踊らされたということだね？」

「そうさ。いつもの勇者サマならすぐに見破ったはずだぜ？」

そうだね。僕の失態だ。

はあ…整理してみるか…。



ん…？

…ロイマン？「時間は有限」？

…バーチエ？メイド？

ま、まさか!?

彼らを解放するには、最強と最恐の眷属…いや系譜…。

そんな…はははは。

彼が…後継者だったのか…。

彼らが動いたなら、ここ数日の理解できないことが全てつながる！

だが、彼には…。

「ライラ。彼は、7年前のことを知っているのか？」

「へえ…ようやく調子が戻ってきたじゃねえか。ああ知っているさ、最近だがな。」

「なら、この状況が一転すると世界の敵になるかもしれないよ？」

「それも織り込み済みさ。この戦争遊戯が始まる前に、アストレア様からな？」

「それだけでは…ああ、ファンクラブか…。」

「それだけじゃねえよ。デメテル様、善神の女神様を中心とした女神連合、そしてギルド

もなっ。」

「(ロイマンをああ変えたのは彼らか)……僕は彼らに時間を与えすぎたか。」

「ああ、そうさ。と言つても、事は一週間前に全部終わっていたらしいがな。」

「ファンクラブは彼らの案なのか?」「え!?!」

「ああ、そうさ。だが、あいつらにとつてはどうでもよかつたらしい。ここまでの結果となつたのは予想以上らしい。あのローリエの才能だとさ。」

「そうか。はあ…。だが、ベル・クラネルとオツタルのあの互角の戦いぶりとは?」

「それもトップシークレットさ、と言つても大方予想付くだろう?」

「なるほど、スキルか…。ああ!クソ!僕のやつていたことは天に唾する行為だったか。」

「まあ、そういうことさ。この短時間でここまで当てたことに、いい情報をやるよ?」

「何だい?これ以上のことはもう勘弁したいけどね。」

「まあ、そう言うなよ。…耳貸せ。」「あ!」「」

「何だい?」

「あの兎な…、【静寂】の甥だぜ?」

「な!何て恐ろしいことを…。まさかあそこにいる人物は…。」

『しかも、あの【静寂】がおめえらが想像できないくらい、兎を溺愛しているぜ?弱点である病も完治さ。当然、あの兎にいろいろとしたおめえらのことに対して、かなりお冠さ。』

『……逃げ道は?』

『大人しく傘下に降るしかねえよ。あたしらも大方の派閥もな。』

「…はあ。彼らが動いていて時間もたつぷりあり、君たちが復活していて彼女もいる以上、もう勝ち目ゼロじゃないか…。」

親指の疼きがようやく収まった。

『ようやくわかったか?』という感じで。

先程までの自分が不甲斐ないよ。

……どうにもなれ、だ。

「ライラ、膝貸してくれ。」

「あん?…いいいぜ。」

「だ、団長!それなら私が…」30分後に交代してやるから待て。」…約束よ。」

不貞寝してやる。

この戦いを最後まで見届けて、彼の勇姿を焼き付けてやる。

## 第161話 九魔姫、接触。

時はしばらく遡り…。

フィンが行ったか…。

なら、こちらも「フレイヤ・ファミア」の奴らと当たらんとな。

「リヴェリア…。」

「どうした？アイズ。」

「予想通り、「フレイヤ・ファミア」の大半がこちらへ向かっている。」

「そうか。聞いたな？皆。用意しろ。手筈の通りに当たれ。」

「「承知しました！」」

オツタルは「ヘステティア・ファミア」の旗をもぎとりに行ったか。

レファイヤが間に合えばいいが…。

いかな。こつちに集中せねば。

「私は…【黒妖の魔剣】とやる。」

「わかった。私は同胞の【白妖の魔杖】とやる。…ガレス。」

「わかつとるわい。あの生意気な四つ子【炎金の四戦士】じゃろう?」

「けつ!あの糞猫があ…。今日こそ殺してやる…。」

「ベート、殺すことはできないぞ。脱落するだけだぞ。」

「揚げ足とるんじやねえよ!ババア!」

「間もなく見えてきました!大軍勢です!」

「では私の魔法で牽制する。敵が怯んだ隙に攻めろ!」

「承知しました!」

配置は問題ないな…。

始めるか。

決着をつけよう、【フレイヤ・ファミリア】!

【間もなく、焰は放たれる。忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む。至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火。汝は業火の化身なり。ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを。焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ】

【レア・ラーヴァティン!】

「ぐううう!」

「今だ!攻めろ!」

ウオオオオオオオオ!

アイズは…、同胞ヘグニと接触したか。

「ここで会うか…。我が仇敵よ。」

「そんなの知らない。貴方はベルをいじめた。許さない。」

「我が真なる友は今頃、オツタルによって蹂躪しているころだ。諦める。」

「!?…なら貴方を倒して追いかけて助ける!」

「無駄だ。さあ、始めよう。我らの聖戦を!」

『【剣姫】と【黒妖の魔剣】、激突!』

ベートは…言うまでもないな。

「この糞猫ガアアアアアアアア!よくもヤツてくれたなアアアア!」

「五月蠅え!クソ狼ガアアアアア!さっさと死ねやアアアア!」

「ひいひいひい!割り込めないひいひい!」

『【凶狼】と【女神の戦車】、激突!』

ガレスは奴らか。

「またこいつか。」

「しつこいぞ。」

「飽きたから、どっかへ行け。」

「老いぼれのドワーフめ。」

「飽きたのはこつちじゃ！この生意気な小人族共め！」

『【重傑】と【炎金の四戦士】、激突！』

そして、私は…：同胞へデイン…。

いや、フィン曰く【フレイヤ・ファミリア】の影の団長。

「…貴女が私の相手ですか。」

「そうだ。」

「…なるほど。私を完封ですか。」

「掛かってきても別にかまわないのだぞ？」

「ご冗談を。と言いたいところですが、今は胸を借りさせていただきます。」

「いいだろう、来い！」

『【九魔姫】と【白妖の魔杖】、激突！』

『速報です！』

「「!?」」

もう、か。

【ヘステイア・ファミリア】あたりだろうな。

『ロキ・ファミア]の「勇者」「怒蛇」、脱落！』

「何だと!? フィンが! ティオネもだど!」

「詰みですな。リヴェリア様（「勇者」が? 早すぎる。あの愚鬼の仕業か?）」

ありえない! あのフィンが…。

真つ先に落ちるとは。

『カーリー・ファミア]の「女神の分身」、脱落!』

「何だと!? 続けざまにだど!」

「…ありえねえ。あちらにそんな戦力ねえぞ!」

同感だ。レベル6がこうも立て続けに落ちるとは。

「ヘステイア・ファミア]にそんな戦力はないはずだ!

『アストレア・ファミア]の「狡鼠」、脱落!』

「な! 何じやと! ありえん!」

「間違いじゃないのか?」「あの女は死んだはずだ。」

「だが、事実だ。」「誤報じゃないか?」

馬鹿な…。ありえない!

彼女は5年前に死んだはずだ!

潜伏していたのか? いや、ありえない。



【疾風】…いや【薫風】が暴走しているのに出てこないはずがない。  
何故、今になって…。

！いかんな。私がつっかりしなくては。

…不味いな。双方とも、かなり動揺している。

「静まれ！速報に耳を貸すな！目の前の敵に集中しろ！」

「！…」

思い返してもありえない！

あのフィンが真つ先に脱落だど!?

それに一気にテイオネと、アルガナ・カリフもだと。

だが…問題はその後だ。

何故! 【アストレア・ファミリア】の【狡鼠】ライラがいるのだ!?

5年前に死んだはずだ!

ありえない!

「リヴェリア様。考え事とは余裕ですな。」

「…お前は先程の速報で、疑問持たなかったのか?」

「私達の役目は戦争遊戯に勝つことです。それ以外は興味ありません（リヴェリア様の考えている事もわかる。ありえない!）」

「…そうだな（レフィーヤの別働隊がうまくいつてくれればいいが…）」

『速報です！』

（来たか！）

『【ロキ・ファミリア】の【千の妖精】脱落！』

「な……。」

「なるほど、別働隊ですか（早くないか？【ヘスティア・ファミリア】の戦力を甘く見すぎたか…）」

レフィーヤが…。

あのファミリアのやり方を真似たのが不味かったのか？

いや、すぐにはわからないはずだ！

それに彼ら…特に神ヘスティアは、この『旗争奪戦』は初見のはずだ！

『【ヘルメス・ファミリア】の【泥犬】、脱落！』

「ルルネさんも…。」

「【ロキ・ファミリア】も終わりだな、【剣姫】よ。」

「まだ！私たちがいる限り！」

ああ、そうだな！アイズの言う通りだ！

まだ、巻き返しはできる！

「糞がアアア！フィンもバカ女共も、何やってんだアアア！」

「てめえらの負けだ（早すぎる！何が起こってやがんだ！）」

ベートー！冷静にならないと目の前の敵でさえ、勝てないぞ！

…【女神の戦車】が相手じゃ、簡単に勝てないのはわかるが。

『速報です！【ロキ・ファミリア】の【大切断】、脱落！』

「何…じゃと？フィン、ティオネだけでなくティオナまでじゃと…。」

「終わったな。」「ざまあ。」

「我らの勝ちだ。」「…【ヘステイア・ファミリア】がそこまで強いということなのか？」

「…空気読めよ！アルフリッグ！」「」

くっ！作戦失敗か！

だが、こいつらだけでも倒さなければ！

…？何だあの土煙は…。

!?!【ヘステイア・ファミリア】だと！

こんな短時間に…、何故ここが的確にわかるのだ!?

一体、【ヘステイア・ファミリア】に何が起こっているのだ!?

## 第162話 主任猫、狼狽。

一体何が起こってやがる！

レベル6の4枚を、この短時間で瞬く間に倒すなんてありえねえ！

レベル7が2人いないとできねえぞ！

または何かがあるのか…？

ちっ！「ヘステイア・ファミリア」がこっちへ来やがったか！

アーニヤは…いるな。なんとなくだがいる！

あの愚図が！さっさと脱落させてやる！

「考え事とは余裕だナア？糞猫！」

ドガアアア！

「!?…くそっ！【凶狼】め！」

「ちっ…、雑魚どもが群がって来やがったか…。まあいい。手間が省けるぜ（クラネルは

いないな…、よし）。」

「てんめエ…。」

…？何故、そこで立ち止まる？

何やってんだ…あの愚図。フードと仮面をしてもわかる。

高台に上って何をしようってんだ？レベル4の愚図に何ができるってんだ！

…？愚図2号もルノアのやつ、なんで魔石灯をあつ愚図に向けてんだ？

「おい…。あいつからテメエと同じ匂いがするのは気のせいか？確か、あの酒場の店員だったか？」

「五月蠅え。あの愚図とは縁切った。知らねえよ。」

「…ちつ。…？おい、あの野郎は何しようしているかわかるか？」

「あ？」

あの愚図、仮面とフードを外して…。

???

何でドレスをしてんだ？あの愚図！

帰ったら轢き殺してやる！

「ニャー！今から、このアーニャ様の世界デビューニャー！」

「[[[あゝ]]]」

？何をしようってんだ？

……………ま、まさか！

「ま、ま、待てやアアアア！この愚図がアアア！ヤメロオオオオオ！」



「ファンクラブ全員！耳栓装着！頭を抱えるように！」

「死にたくなかったら言うことに従いなさい！」

「地獄が見えるわよ！」

「了解！」

「何じゃ？何じゃ？」

「何やつとんねん、自分ら…。耳栓して耳を塞いで頭を抱えて、ニョルズまでも…。」

「ヘステイア、貴女たち耳を塞いで何をしているのかしら？」

（アーニヤのあの服…高台…あの魔道具…アレンのあの焦りよう…そしてヘステイアの

この様子…）

「……っ！まさか！や、やめなさい！アーニヤ！」



ベルとオツタルのガチンコでも…

ドガアアアーン！

「はあ…はあ…。」

「む？何だ…あの光は？」

「!!」

「ベル…、何故そんなに離れる？」





『……………!』

『了解した。』

【喰い殺せ】

【ヴェルグス】

「ぐ……が……あの愚図が……。」

「く……そ……猫がア……。」

チクシヨウ……!二度とやるな、と言ったのに……!

前より威力が上がってやがる!

あの愚図!これが終わったら轢き殺してやる!

他の奴らは……。

「……はあ……はあ……。」

「うう…………。」

さすがは【剣姫】か。

ヘグニは羽虫である分、ダメージが大きいな。

「ふう……恐ろしい攻撃じゃった……。」

「…………何て。」

「…………音痴。」

【戦車の片割れ】め。」

ちっ…あのドワーフめ。大して効いてねえな。

あいつら！さっきと立ち…。

いや仕方がねえ、あの愚図の歌を大音量でまともに受けたからな。

「う…ぬ…。我が…同胞よ。彼女は…そちらの…仲間では…なかったのか？」

「……すみません、リヴェリア…様。……？」

「どうした…？あれは…！」

羽虫どもは何とかか生き延びてるか…。

何だ…？あれは…水球？

「はあっ！」

『……！』

『了解。』

カーリーのとこの糞女…いやメイドが特大の水球っぽいのを俺たちの頭上に投げて、フードと仮面をかぶった女が振りかぶった鉄球でそれを…？

!!!

「ぜ、全員よけろおおお！ぐっ…。」

チクショウ！あの愚図の歌で、足まで来てやがる！

「いか…ん！しまっ……た！さっきの歌は…我らの足を止めるためか！」



「なんて恐ろしいの……。たった一人の猫人が、アーニヤちゃんの歌がオラリオ、いえ世界を揺らすなんて……。」

「天界まで届いたんじゃないかな？」

（ゼウスやアポロン、イケロスには大ダメージ与えたかしら？まだ送還されないですよ。）

「ふう……なるほど。音波攻撃と猛毒の雨で弱体化を狙ったわけか。」

「はあ……はあ……、少し興味があつて耳に入ってしまった。すみません！解説続行しますー！」

「ファンクラブ、全員無事です！」

「ファンでない方および神々は、地に横たわっています！」

「ベル様の加護が守ってくれたんだわ！」

「おい……色ボケ……。」

「やめて……。今は話しかけないで……。頭が……。耳が……。」

「あの娘に二度と歌わせんな……。」

「二度と歌わないで、と言ったのに……。どうして……。」

「何て恐ろしい手を使うんや……。」

「ひどいわ……。ヘステイア。」

「こっちはレベル差があるんだぞ。仕方がないだろ？」

「…そりやそうやが、使っちゃあかんやろ…アレは。」

「…アーニヤは私の眷属なのに…。」

「彼女を捨てたのは貴女でしょ？まあ、理由はわかっているけどね。」

「……………」

## 第163話 凶狼、冷静。

糞があああああ！

あいつら、何てことをしやがる！

歌によるステータスダウンだけでなく、あの毒女の猛毒の雨で猛毒の状態異常を起こしやがった！

ちっ！耳がしばらく使い物にならねえ…。

獣人である分、感覚が鋭いためそこを突きやがった！

頭がガンガンする上、猛毒で朦朧寸前だ！

レベル4以下はもう使い物にならねえ…。

だが…、間違っちゃいねえ。

弱者なりの弱者の抵抗だ。

レナは…先程庇ったから何とか動けるか。

今のうちに脱落させるか…？

……？あいつら何を？

『……………！』

『了解した。』

タタタタタ！

あの毒女……？しまった！

ウチの陣地の方向へ向かいやがった！

旗を奪う気か！

レベル6の毒女に勝てる相手がウチの陣地にはいねえぞ！

ラウルでもダメだ！

「ぐ……、しまっ……た！ベート！【蠱毒の王】を……止めろ！」

「ふ……ぎけんな！ババア！緑に……動けねえんだよ！」

「なら、まだまともな儂が行こう。旗を燃やすわけにはいかんからのう。!?」

ガキイイ！シユバアアツ！

「……………」

「……………」

なんだあ？あいつら……、雑魚のくせにジジイを止めた？

いや、レベル5ぐらいはありやがる……何者だ!?

「ふむう……、レベル5が2枚とはのう。シャクティか？いや……この感じは違うのう。」

「……………」

「……………」

「ええい！名前ぐらいは名乗らんかい！」

『……………！』

『わかりました。』

「……………」

「……………」

「くつ、無理じゃ！リヴェリア！こやつらを出し抜いて陣地へ戻ることとはできん！ちつ、こやつらも持ち直しおった！」

「ぐっ……………」

「あの歌はひどかった……………」

「フレイヤ様にお願ひして、あの馬鹿猫へ歌禁止にしてもらおう。」

「ドワーフの老いぼれめ、その女二人も倒す！」

ちつ！ジジイがもたもたしているせいで、あのチビ共も持ち直しやがった！

「何故だ！何故、何も言わず連携が…取れるのだ！……………!?くそつ！囲まれた！アイズ！向かってくれ！」

「わかった……………!!」

シュバツ！



「【劍姫】…お相手願おう。」

「仮面とフードが…、【疾風】いや【薫風】だど!?馬鹿な、あの動きは!?!」

なんだ!今の動きは!

レベル5の動きじゃねえぞ!

あの売女の仕業か?…いや違う!

「貴女は『異端児』と【フレイヤ・ファミア】の時に…。どいて!あなたに構って…!」

ガン!キン!シユバツ!

(そんな!あの時からランクアップしたとしてもレベル5!今の感じは私と同じレベル6…。メレンの時と同じ…いや!違う。素のまま!)

「すみませんが、貴女はここにいてもらう。」

キン!カキン!カン!

「…どうして、この短期間に強くなったの?私はそれが知りたい。」

「ベルのおかげです。」

「……はあ。」

は?

何言つてんだ…あのエルフ。

「ベルを愛するが故の力です。」

「…リヴェリア。この人は私の敵。絶対に倒す。」

「…ぐ。我を無視するな。我が仇敵と同胞よ。」

ドガアアアアン！

「お、おい！アイズ！」

「ダメじゃ…、完全に血が上つとるわい。」

あの馬鹿！状況を読め！

俺だけでも…。

…何とか動けるか。!?

シュバツ！

ぐっ！

「【凶狼】…、テメエはここで終わりだ。落ちろ。」

「糞猫があ。あの馬鹿猫女とどういう関係か知らんが、首輪ぐらいつけとけ！」

「できたらそうしてる！あの愚図が！後で轢き殺してやる！」

「お、おう…。」

…何だか知らねえが、まだ血縁者がいる分てめえはマシだ。

守る奴がいるんだからよ。

だが、こつちもいるんだ！負けられねえんだよ！

バシユツッ！バシユツッ！バシユツッ！

バシユツッ！バシユツッ！バシユツッ！バシユツッ！

!?

『速報です！「ロキ・ファミリア」の「道化の書」、「……」、「……」、「……」脱落！』

『「フレイヤ・ファミリア」の「……」、「……」、「……」、「……」、「……」脱落！』

な!?ちくしょう!

あいつら、脱落しやがった!

「フレイヤ・ファミリア」の奴らはどうでもいい!

いや、無理もねえ…。

あんな全体波状攻撃に、第二級冒険者程度が耐えられるわけがねえ。

「エルファイ…ナルヴィ…クルス!くっ!なら、私の魔法で一気に吹き飛ばしてくれる!」

「お待ちを!リヴェリア様!あちらを!」

「何だ?...ヴェルフ・クロツゾ!?!いつの間に!」

「我らが詠唱を唱えれば、あやつがすぐさまに魔法を放ちます!」

「くっ!つくづく、我らエルフとあやつとの相性は最悪だな!」

「同感です…。ヴェルフ・クロツゾのところへ向かおうにしても【象神の杖】と先ほどの

鉄球女が立ちふさがっています。どちらも恐らくレベル6はあるかと。」

あの鍛冶士か。

反魔法を使う奴と聞いたが、ババアやあのエルフ対策として封じてきやがったな。ちくしょう！

まるで、フィン……いやもつとタチ悪いのを相手にしている感じだ！

「馬鹿な！第一級冒険者がそんなにいないはずだ！何が起こっているのだ!？」

ババア！冷静になりやがれ！

くそっ！……あの魔法を使うか？

いや……外傷もそんなに負ってない。放つたとしてもたかがしれている。

……？そういえば、あの売女……何もしねえ？

何故あの魔法を使わない？使えば一気に俺らをつぶせるのか？

舐めて……いや、知られるのを恐れているのか……!？」

「困か！くそっ！

「べ、ベート……。」

「レナ、無事か？てめえはさっさと脱落しろ。」

「う、うん……。」

「テメエも落ちろ！【凶狼】！その売女と一緒にな！」

「テメエが落ちやがれ！糞猫ガア！」

ちくしょう！

これじゃあ、俺らが弱者側じゃねえか！

## 第164話 狡鼠、暴露。

「……………」

「うわあ…、えげつねえ…。」

まあ、そうだな。

アタシもそう思うわ。

あいつ、容赦ないな。

「ライラ…、これはやりすぎじゃないのかい？」

「おいおい、勇者サマがそう言うのかい？こっちは弱小ファミリア連合だぜ？」

「彼らがいてどこが弱小だい？こちらが挑戦者じゃないのかい？」

「あいつらは、アタシらが全滅してから動くってんだよ。今はアタシらだけの力さ。」

「！そうか…この戦争遊戯は君たちの特訓成果を出すための場か。はあ…ここ2週間の自分は道化だったか…。」

凹むのもしゃーないわな。

アタシでもあいつらの存在知らなかったら、まともにハマってた可能性が高いな。

いや、それ以前に5年前に死んでいるから何も言えんわな。

『あの…ティオネさん。どうしてあの方が団長を膝枕されているんでしょうか?』  
『うるさいわね! 団長が希望したから仕方がないわよ! (あと数分で交代…早く!)』

あー、そろそろ交代してやるか。

しかしこの勇者サマ、一向にも嫌がる様子ねえな。

「さっきの音波攻撃、ライラが注意を呼びかけてくれなければやばかったね。」

「どーも。まあ、アレはおまけさ。」

「「アレがおまけ!?!」」

「ああ、たまたまそのことを知ったあいつが即座に採用したわけよ。あのつえーメイドの毒を確実に浴びせるためにな。」

「あたし、あそこの部隊に加わらなくてよかったよ…。」

「私もよ…。」

「あの音波攻撃でもキツイのに、その後にはバーチエの猛毒を浴びるのか…。カーリーも真っ青だな。」

その頃、カーリーはアーニヤの歌をまともに聞いてしまい、泡拭いて気絶していた。  
ロキとフレイヤは何とか持ち直した。

カーリー含む地に伏せたその他の神々は、放置されていた。

合掌。

「『闘…争』じゃ…。はあああ！妾、復活じゃ！」

「ライラ…リリルカ・アーデはどこにいるんだい？」

「何だ？まだあいつにこだわってんのか？まだ15歳の処女だぜ？」

「団長…、ロリコンはいけないと思います。」

「フィン、私もそう思うぞ。」

15歳のあいつに懸想するなら、ロリコンと言われても仕方がねえぞ。

まさか、まだ処女と思わなかったぜ。

あいつに聞いてみたら「当たり前です！ここはベル様に捧げます！」と言い張りやがった。

「二人とも、真に受けなくてくれるかな？みんながドン引きしているけど？」

「いや、だっておめえあいつに、プロポーズしたじゃねえか。」

「『プロポーズ!?!』」

「何だ。おめえら、知らなかったのか？」

「フィンがお見合いに行つたのは知ってたけど…。」

「プロポーズの話は初耳です！」



「詳しく知りてえか？」

「え…、ちよつと待つてくれるかい？」

「「知りたい（です）！」」

「アミッド…君までもかい。」

「【勇者】、私も一人の女性です。恋愛話には興味あるのは当然でしょう。」

「そうだなー。神の鏡で公開…」

「やめてくれ。それだけは駄目だ。勘弁してくれないか？」

「じゃあ、ここに居る奴らならいいよな？」

「……………仕方がない。」

まさか、勇者サマがあいつにプロポーズするとはな。

それもビックリしたが、断つたのも更にビックリした。

まあ、あの兎にベタ惚れなら仕方がないわな。

もったいねーよなー。

---

「団長のプロポーズを断つて、あの少年に…。」

「うわあ、何てもったいないことを…。」

「アルゴノウトくん…いいなあ…。」

「そうか、安心したぞ。フィン。」

「まあ、あの子は【白兔の脚】に絶対の忠誠を、いえ愛を誓ってたわね。」

「テイオネ…、以前リルカ・アーデを追いかけ回していたというクレームがベル・クラネルより話があったけど、事実だったんだね？」

「あつ！いい、いえ。事実確認のためです。」

「あたしはもつたいたいと思っただけ、あいつがあ兔に完全ベタ惚れだからな。」

「ライラ…話を戻していいかい？彼女はどこにいるんだい？絶対に指揮しているはずだけど、あまりにも戦況を把握しすぎて、統制がとれすぎている。声もないのに、指示が的確すぎる。彼女があの中にはいないのはわかっているのに、これはあり得ない。」

話を逸らしたな。この話は色々と使えるな。

まあ、元々その話だったからな。

「どこにいますと思う？当ててみな。ヒントは、この場からでもわかるぜえ？」

「この場から？つて上には何も…!?そうか、そういうことか…。なら、戦争遊戯前日でハーピーやセイレーン、ガーゴイルがこの18階層の天井を飛び交っていたのも納得がいったよ。」

「早速わかったかい？」



【……（詠唱中）……】

【ゼオ・グルヴェイグ】

「フレイヤ様……申し訳ありません！」

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。葉奏をここに。三百と六十と五の調べ。癒しの暦は万物を救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操斂。呪いは彼方に、光の枢機へ。聖想の名をもって——私が癒す】

【ディア・フラーテル】

「やあ、みんなお疲れ様。すまなかつたね。」

「団長、脱落してすみません……（誰？ 何でテイオネさんを差し置いて団長を膝枕？）」

そろそろ交代してやるか。

「おい、その【怒蛇】。交代だ。」

「待ちくたびれたわよ！」

「僕の意味は無視かい……？（ライラの膝枕は悪くなかつたな。妙に頭が冴えまくつていた……。機会あれば、今度もお願いしようか。）」

## 第165話 劍姫、激怒。

「はあああああつ！」

「やあああああつ！」

キンー！カンー！ドドドドドドド！

「くっ……ここまでは。」

「それは私の台詞。レベル5のはずなのに何でここまで……。」

彼女はこの間戦った時は、レベル4のはず。

ランクアップしてもレベル5。

何で、私と互角にやり合えるの!?

「どうしてそこまで強くなったの……?」

「さつきから言っているでしょう。ベルを愛するがゆえの力です。」

「そんなの……認めない！」

「貴女が認めようが認めまいが、事実です。」

うるさいー！うるさいー！うるさいー！

「き、貴様らー！我を無視するな！」

「【黒妖の魔剣】、貴方は後です。」

「うるさい！黙ってて！」

先にこの人を倒さないと！

「ベルと最初に会ったのは私が先。引っ込んでて。」

「な!?だ、黙りなさい！先に会ったから、それがどうだというのです！」

「ベルのことをよく知っているのは私。」

「それは嘘ですね。彼のことをよく知っているのは私だ！」

「……………」

「……………」

「貴女を倒す！」

「お前を倒す！」

ドドドドドドドドドド！

「だ、だから！我を無視するんじゃない！」

「おい…【凶狼】、アレはいいのか？」

「…………俺は知らねえ。余所見すんじゃないやねえ！糞猫がつ！」

「はあ…はあ…、うわ…女の戦いだ、物理的に。」

「アイズめ…。これが世界に公開されとるのを忘れとるのう。ところで、お主らしい加

滅に名乗らんのか？ぬっ！

ガキーン！

「……………」

「……………」

「お主らの戦い方…どこかで見たことがある気がするのだが、気のせいかな…。」

「老いぼれのドワーフめ！」

「いい加減にくたばれ！」

「タフだけのクソジジイめ！」

「あの女たちは後だ！」

「ええい！しつこいわ！弱体化したお主らなんぞ、ものの数ではない！」

「アイズめ…後で説教だと言いたいが、止むを得まい。アリシア、無事か？」

「はあ…はあ…すみません。最初の音波攻撃でもう立てません…。しかも猛毒の追いうちで…もう。」

「すまん…。」

「お気をつけください…。」

バシユ！

『速報！【ロキ・ファミリア】の【純潔の園】、脱落！』

「くっ！ヴェルフ・クロツゾがあそこで構えている限り、詠唱が唱えないな。」

「ヘディン様…申し訳ありません。」

「我らの力が至らぬばかりに…。」

「あのような攻撃に耐えられるのがおかしいのだ。仕方がない。」

「我らがあそこへ特攻しましょうか…？」

「無駄だ。【象神の杖】とあの鉄球女がいる限りヴェルフ・クロツゾは破れない。」

「ガフツ…限界です。先に…」

バシユ！

「フレイヤ様に…申し訳が…」

バシユ！

『速報！「フレイヤ・ファミリア」の「…」、【…】脱落！』

「いい加減にしろ！我が真なる友がお前らに見向きするわけがないだろうが！」

「！」

ピタッ

………どういう意味？

「…ようやく、こちらに向いたな。我が仇敵共よ。」



「我が同胞よ。ベルが見向きするわけがないというのはどういう意味です？」

「……それはどういう意味？」

「我が真なる友の相手は、フレイヤ様しかいないだろうが！第一、お前らのその貧しい胸で、我が真なる友を満足させられるわけがないだろうが！」

「……………っ！」

「この人……………今、何て言ったの？」

『『『あつ……』』』

「あの羽虫……」

「『『『馬鹿だ……』』』」 「『『『馬鹿だ……』』』」

「ヘグニ…… 終わつたな。」

「【劍姫】……一旦休戦しませんか？この同胞……いえ言つてはいけないことを言つた愚か者を裁きたいのですが。」

「賛成。ただし、私も参加する。」

「え？え？ま、待て……………」

「ベルは……そんなのこだわらない。少なくともテイオナよりはある。」

「同感です。」

ゴゴゴゴゴゴ！

〈脱落組〉

「……………(チラツ)。」

「アイズー！後で覚えてろー！」

「(ひいひいひい…) かかってくるがいい！」

「(うわあ……………、涙目で意地張っている…)。」

「死になさい！」

「……………死んで。」

「くっ！ガハツ！ぎゃん！あ、ま、待つて…。ぎやあああああああ！」

バシユー！

『速報！「フレイヤ・ファミリア」の「黒妖の魔劍」、脱落！』

「リヴェリア様…。我が同胞がすみません。」

「いや…仕方がない。しかし、アイズがあそこまで怒るとはな…。はあ…それを気にするようになったのはいいが…。」

「リヴェリア様。不本意ですが、一旦休戦して〔ヘステイア・ファミリア〕へ当たりませんか？ヴェルフ・クロツゾがいる限り、我らは何もできません。」



「貴女に構っている暇はない、です…。自陣へ引き返しますので邪魔しないでください。」

「残念ですが、もう手遅れです。間もなく貴女たちの旗は落ちます。」

「させないっ…!」

「ですが、引き返せる状況ではありませんよ。ここにいる貴女たちは。」

「どういう事?」

「掛けまくも畏き——いかなるものも打ち破る我が武神（かみ）よ、尊き天よりの導きよ。」

「……」

「リヴェリアめ。無茶を言ってくれる。ぬ? 攻撃に変わったか! 来るがいい!」

「バサア! バサア!」

「む…、フードと仮面を外したか…。何者じゃ?! な、何じゃとおおおお!」

「久しぶりね! ガレスの叔父様! 四つ子ちゃん!」

「5年ぶりだな、【重傑】【炎金の四戦士】。貴様らがあまりにも不甲斐ないので、冥府より舞い戻ってきたぞ。」

「!?」

「「「ええええっ!」」」

「「……——神武闘征」

【フツノミタマ】！

「「「がああああつ！」「」」

「(クノツソスで【絶†影】が出した魔法か！)ぬおおおつ！」

「ぐつ！…オンつと…さあ！ガレスのおじ様の好きな我慢比べよ！」

「ぐつ…、これで…よし。若い女性が二人おります。じっくりお話をいたしましょうか。

喜べ。」

え？どうして…アリーゼさんが？

重力の…檻？味方もろとも？

ううん、あの二人だけが普通に動いている…。

魔道具？

「嘘だろ…。」

「けっ！どうでもいい。単に生きてただけだろうが！」

「ば、馬鹿な！何故、【アストレア・ファミア】の【紅の正花】と【大和竜胆】が!？」

「ありえない…。私は夢でも見ているのか…。」

バサアッ！バサアッ！

……！

「……。」

「【九魔姫】、これまでだ。間もなくお前らの旗は落ちる。」

「シヤクテイ……。やはり【ヘスティア・ファミリア】についたのか……」

「ああ。ただ、クノツソスの件ではない。【白兔の脚】……いやベル・クラネルは、私の7年の時を動かしてくれたのだからな。この程度では返した内に入らないさ。」

「何だと……？」

「誰だ？【象神の杖】の隣にいるメイドは？」

「さあ？おい、レナ。知っているか？」

「……同族？ううん、知らない……」

誰……？あのメイドは？

ヒュッ！ キン！

「ちいっ！クロエか！」

「サー！いや【女神の戦車】！よくもここ一週間ミヤーをこき使ってくれたニヤー！」

「兄様！ごめんなさいニヤー！ミヤーの安息の日々のために脱落してニヤー！」

「クロエたちほどじゃないけど、まあこれも戦いだ。脱落させてもらうよ！」

「ふざけんな！ルノア以外の愚図共！てめえらはサボろうとしてたばかりじゃねえか！心根を鍛え直してやる！特に愚図一号！」

「ウニヤ!!」



「……………（言えない。とても言えない…）」

「……………（アフロディーテ…、ごめんなさい）」

「ヘルメス、あれはアフロディーテに似てないか？ん？ヘルメス？」

「ぷ…くくく（駄目だ！笑うな！こらえるんだ！）。し、失礼しました。そ、そうですね。ただ、肌の色と胸がかなり違うだけです。いやー、同郷の神と似ている人を初めて見ました！（どこで見つけたんだ？すごいよなー）」



〈歌劇の国〉

「サンドロおおお！ベックリイイイン！」

「は、はいいいいい！」

「至急、オラリオへ向かうわよ！誰よ！私のパチもんを！許さないわ！」

「…驚いたな。アフロディーテのそっくりさん、いや胸が…ガハアツ！」

「うるさいわね！殺すわよ、アポロン！」

バキィツ！

「ゲホオツ！」

「ア、アポロン様！ご無事ですか？」

「ゲホツ…ゲホツ…。ああ、大丈夫だ。」



「…しかし、神の鏡で対峙してもわかりません。あの女は第一級冒険者、レベル6はあるかと。」

「そうだな、ヒュアキントス。だが、ああそっくりだとオラリオで目立たないはずがないんだがな…、しかもレベル6だ。ヘステイアはオラリオのどこで見つけてきたんだ？」

## 第166話 処女神、心配Ⅱ。

うわあ…こんなうまく行くなんて…。

サポーターくんとアドバイザーくんの組み合わせは凶悪だね！

あの時の更新した時の衝撃はすごかったなあ…。

〈6日前〉

「ああ、ごめんよ。…つと、これが君のステータスだよ。」

エイナ・チュール

L v. 1

力： I 0 ↓ H 8

耐久： I 0 ↓ H 10

器用： I 0 ↓ H 13

敏捷： I 0 ↓ H 11

魔力： I 0

〈魔法〉

【鑑定】サシヂ

【開け、秘密の扉】

・付与魔法。

・レベルの強弱やステータスロックに関わらず、状態異常やステータスを見ることが  
できる。

・ランクや魔力次第で、ステータスだけでなく種族・出生・犯罪歴などを知ることが  
可能。

〈スキル〉

【白兔眷属】

・血をいただいた相手への忠誠または愛が強ければ強いほど、早熟する。

(ただし相手が異性のみ)

・血をいただいた相手が強ければ強いほど、ステータス高補正。

・血をいただいた相手が死亡するとスキル消滅と同時に、ステータス上昇鈍化・ステータス超低補正・罹患の呪詛（解除不能）が同時にかかる。

魔法はわかる。アドバイザーくんは今まで多くの冒険者を見てきたんだ。

だからそれが発現するのは理解できる。

…規格外だけどね。けど、問題はこのスキルだ！

何だよ！【白兎眷属】って！

「ええ…？私、ベルくんから血をもらったことなんて…あ。」

「…心当たりあるのかい？」

「ええ。ヘスティア様にはまだ言ってますでしたが、先日セバスさんより…」

ボクはアドバイザーくんが死の病にかかりかけたこと、そしてベルくんの血にその抗体がありそれをもとにした特効薬を【ミアハ・ファミリア】と【ディアンケヒト・ファミリア】が合同で作製していることを知った。

そして、その薬を飲んだことよってアドバイザーくんが完治し全快したことも…。

「それだね。それしかない。…ってキミはボクの眷属なのに、何でボクの眷属の眷属になっっているんだああああ！」

「そ、そんなことを言われても…（べ、ベルくんの眷属…。ご、ご主人様と言わなきゃいけないのかな？あ…、さっきのことが本当になっちゃった…。）」

「…何はともあれ、魔法とスキルが発現したね。魔法は戦闘系ではないけど、補助系としては規格外だね。戦闘系を補うのがこのスキルみたいだね。」

魔法は…ステータスを見るだけでなく状態異常もか。

ほぼ手を触れれば見ることができるといふことか。

ガネーシヤかディアンケヒト、ミアハんところが欲しがるような魔法だね！

ガネーシヤなら…不審者か犯罪者を見抜けるし…。

ディアンケヒトやミアハなら…、どんな病気や怪我をしているのかも見抜けるし…。

色々汎用がきく魔法だね！

「この魔法は…恐らく私がギルドの受付嬢だった時の経験を踏まえてですね。そして、

このスキルはメリットが大きいですが、その分デメリットも大きいですね。」

「…いいのかい、アドバイザーくん？キミはハーフェルフだ。恐らくベルくんより長く

生きるだろう。…ベルくんがもし死んだら、そのデメリットがキミに降りかかるけど

？」

ベルくんはヒューマンだ。ハーフェルフといっても長命種に近い。

ベルくんが年老いて死ぬ時は、アドバイザーくんはまだ熟した女性のままだろう。

もしベルくんが死んだら、キミは恐らく冒険者として生きることができない上、病魔

に冒されるだろう。

キミは…その覚悟があるのかい？

「…ヘスティア様。私は入団時に、ベル君の力になりたいと誓いました。それは今も変わりありません。もし受付嬢のままでしたら、死の病にかかりオラリオを去って母のいるところで暮らしていたでしょう。ですが、私は彼の力になりたい！もう後戻りはで

きません！」

嘘は言っていない……けどね、アドバイザーくん。

キミは……ベルくんがいない世界に耐えられるのかい？

あの子を失った世界に。

「……キミの覚悟はよくわかったよ。はあ……ベルくんも罪な子だなあ。この事実はベルくんにはとても言えないね。あの子は優しい子だ……。ただ、メイちゃんとセバスくんには言うけど、いいかい？」

「はい！（というか言わないと、あの方たち何するか……。けどベルくん第一だから何かと気を配ってくれると思う。死の病に気づいたのがセバスさんだし……。）」

「じゃあ、呼んでくるね。」

「え？」

パンパン

「お呼びでございますか？ヘステイア様。」

「うん、セバスくんは？」「ここに。」

「……………（ヘステイア様、手慣れている）。」

「あー、君たちの予想通りにアドバイザーくんにスキルと魔法が発現したよ。はい、これだよ。」

そしてボクはエイナくんのステータスを彼らへ見せた。

「失礼します。……………これは。」

「エイナ嬢、申し訳ありません。私の短慮のなさで、このようなことになってしまつてお詫びのしようがありません。」

「セバスさん、謝らないで下さい。私は後悔していません。遅かれ早かれ、私は死の病で死んでいました。セバスさんには本当に感謝しています。ただ…母や妹がその特効薬を飲んだら、このスキルが発現するかどうか心配なんです。」

ああ…そうか。

第三者が飲んだら発現するかもしれないか…。

そうだね。当然、そういう危険性もはらむよね。

「セバス。エイナさんがそう言っているのです。まずは坊ちやまの血を飲むだけで発現するのか、または坊ちやまの好意を持った後で発現するのか…などを検証しなければなりません。」

「…そうですね。アルフィアお嬢様が元主神ヘラに更新されればわかるかもしれませんが、何人かのサンプルが必要ですね。しかも女性限定の。」

「そうですね。エイナさんが発現したのは仕方ないとして、リリさんと春姫さんに坊ちやまの血を飲ませて試してみますか？」

……スキルの内容について釈然としないけど。

その前に、ボクの眷属を実験台にしないでくれるかな!?

おーーーーーい!

「時間がないので、本日の特訓が終わってからにしましょう。坊ちやまは本当に仕え甲斐のある方ですな。次から次へと課題が来ます。未知の宝箱そのものですな。」

「本当ですね。さすが、私達の真の主というだけありますね。」

「キミたちにとつてはいいんだけど……ボクとしては、もういっぱいだけね!」

「……私もです、ヘステイア様。」

本当にそうだよ!

【憧憬一途】でもビツクリなのに、【兔囿女達】や【時越白兔】までなんて……。

これ以上だと、さすがにボクでも保たないよ!

せめて一年くらいは平穩に過ごしたかったよーーーーー!!



## 第167話 栗鼠、考察。

ベル様にあんな前代未聞なスキルが発現するなんて…。

時を遡る？

5年前に壊滅した「アストレア・ファミリア」の主要メンバーである「紅正の花」「大和竜胆」「狡鼠」の遺体を持ち帰り、愚者様の蘇生魔法で復活させ、

7年前に死なれた「ヘラ・ファミリア」の「静寂」アルフィア様…ベル様のお、お義母さんを、救い出し連れて帰った…。

誰が予想できますか！こんなの！

ですが、これで戦力は申し分ありません。

…戦力過剰かもしれませんが、これで勝ちの目が出てきました！

おや、ヘスティア様とエイナ様と…セバス様とメイ様が出てきましたか。

あの感じは…何かありましたね？

メイ様が私に向けて手招きしています。

「リリさん、エイナ様にスキルと魔法が発現しました。スキルについては私達が解明しますので待つて下さい。魔法だけ伝えます。」

魔法!?!…さすが、魔法種族の血を半分受け継いでいるだけではありませんね。

「それで、どんな魔法ですか?」

「ええ、リリさんとしては非常に役立つと思いますよ。それは…」

エイナさんの魔法の【鑑定】の詳細を聞きました。

…何ですか。それは。

ほぼ相手の情報丸見えではないですか!

付与魔法ということは、最初にかけてままだ相手の情報探り放題ではないですか!

戦闘系ではないですが、戦略的には反則に近いですね。

私のスキルと合わされば…、戦況次第でひっくり返せますね。

……いえ、待って下さい。

愚者様はこちら側です。あの魔道具を使えば…、

リリもエイナ様もレベルが低いままでですが、18階層の戦場へ行かなくても可能では

?

低レベルでもベル様を大いに助けることが可能になります!

「…さん、リリさん。聞いていますか?」

「あ!はい、すみません!考え事をしていましたので。」

「現状で、戦力が整いました。【アストレア・ファミリア】の彼女たちも恐らくランクアッ

プしているでしょう。スキルや魔法は聞かなくてもいいですが、あちらから言ってきたら採用して下さい。」

「!?レ、レベル5が3枚…。」

「リリ嬢、少しよろしいでしょうか？戦力が整った以上、ここから貴女の出番です。ですが、制約を課しましょう。」

「制約……ですか？」

「はい。1つ、私とメイは旗を守るため動きません。ただし、私とメイ以外が全滅したら、動きます。」

そうですね。旗だけを守りぬけばいいですからね。

セバス様とメイ様は、旗を守るのにうってつけです。

ただ、物理攻撃はともかく遠距離からの魔法攻撃が厄介です。

「2つ、アルフィアお嬢様はまだ病み上がりです。アルフィアお嬢様も旗の守護に務めさせていただきます。アルフィアお嬢様は、魔法を無効化できる付与魔法をお持ちです。動くのは貴方たちが全滅してからです。」

!?魔法を無効化!?

…これで、旗の守護は完璧となりました。

「3つ、春姫嬢の妖術は禁止です。彼女の妖術は全てのファミリアが欲しがるものです

からな。神イシユタル騒動の時と同じことがあつてはいけません。それを防ぐためです。」

そうですね。

春姫様の妖術は、下層の階層主『アンフィス・バエナ』を第二級冒険者だけでも倒せるぐらいですからね。

戦力が揃わなかった時はやむを得ず使うつもりでしたが、現状なら大丈夫みたいです  
ね。

「リリさん、以上の3つの制約で戦略を立てていただきます。可能でしょうか？」

「はい！成し遂げてみせます！」

十分です！

後は…：エイナ様の魔法でどこまで探れるかを検証が必要ですね。

患者様に魔道具を借りて18階層で試さないとは…。

「ああ、リリさん。患者にはある魔道具の作製をお願いしますので、聞いてみた方が  
いいですよ。」

お見通しですか…。

ある魔道具ですか、気になりますね。

「それと、今回の戦争遊戯で我々が用意した切り札がありますので、それは後日に紹介し

ますね。色々調整がまだ必要ですのぞ。」

……調整というのがすごく引つかかります。

この方々の切り札というのが、すごく怖いぞす！

「アストレア・ファミリア」の方々とベル様のお義母様が入る前の、勝てるという切り札というのが…。

いえ、それは後にしましょう。

セバス様とメイ様より『旗争奪戦』のルールや抜け道などを昨日聞かせていただきました。

そして、現状の戦力…。

ベル様については、今晚あたりにセバス様とメイ様へ確認しましょう。

最初は絶望的でしたが、セバス様とメイ様の参入で戦えるほどになりました。

ベル様のランクアップに、あのスキルで一気に戦力アップでき、

バーチェ様の改宗で戦力アップ、エイナ様の入団で滞っていた事務作業が一気に解消でき、ファンクラブの設立でベル様の戦力アップ、資金調達、世間を完全に味方につけました。

そして、多くの派閥を味方につけました。

「ヘファイストス・ファミリア」、「ゴブニュ・ファミリア」、「タケミカツチ・ファミリア」、

「デメテル・ファミリア」、  
「ヘルメス・ファミリア」、  
「ミアハ・ファミリア」、  
「ティアンケヒト・ファミリア」、  
「アストレア・ファミリア」、  
「ガネーシャ・ファミリア」ですか……。  
「ヘラ・ファミリア」はアルフィア様だけですが、  
主神ヘラの許可は大丈夫でしょうか……？

後は、女神連合で「デメテル・ファミリア」を中心とした善神の同盟がいます。今は伏せていますが、勝利後に判明するそうです。

たったの数日でここまでの派閥同盟になるとは、誰も予想できませんね！

恐るべしは、セバス様とメイ様です。

たったの数日でここまでの立場を築くとは……。

「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」の首脳陣の方々は、この状況に気づいていますでしょうか？

例え気づいたとしても、ここからの逆転は果たして可能でしょうか？

悪いですが、リリたちはそのまま突っ走らせてもらいます！

ベル様の完全勝利のために！

## 第168話 紅花、決断。

うう…、ひどい目にあつた。

今日だけで、臨死体験を3回もするなんて。

というかアルフィアの魔法、2年…いえ7年前より上がつてない？

ピンポイントで来るなんてなかったわよね？

つまり…病でかなり半減してたわけ？

私達、よく勝てたわね…。

と、いけないいけない！

ベルのこともつと知りたいわ！

「ねえねえ、リオン！ベルのこともつと知りたわから教えて！」

「……………嫌です。」

「え？何ですよ！あ、なるほど！取られるのが怖いよね！大丈夫よ！ちゃんと分けるから

！」

「なっ！ち、違います。それは…その…つまり…。」

「要は奪われるのが怖いだけだろうが、この潔癖エルフが。」

「か、輝夜！」

うーん、リオンのこの反応新鮮だわ！

でも、どっかぎこちないわね！

まあ、あれから5年も経っていて色々とあったから仕方がないわね！

「はいはい、ベルのことは私を通しなさい。さて、更新するわよ。」

「……………」

アストレア様は、私達の主神よね？

ベルはヘスティア様の眷属なのに、ベルを優先するなんて今までのアストレア様じゃ考えられないわ！

『アストレア様がベルに対して、あそこまで溺愛するとは思わなかったわ！』

『私もです…。』

『若様は罪な人ですnee。籠絡しがいがありますね。』

『お前、何するつもりなんだよ…。』

(鍛冶場に戻りたいです…)。

そして私達は全員、更新してもらった。

「アリーゼ…、5年前にルウを助けてくれてありがとうね。貴女たちは死んでしまった



けどね。」

「ううん。あのモンスター…ジャガーノートを倒すにはどうしてもリオンの魔法が必要だっただけ。初見で手負いだった私達ができるのはジャガーノートの動きを止めることと、魔法反射の鎧を剥がすことだけしかできなかつたの。」

あのモンスターは厄介だったわ。

聞けば、あのモンスターに1対1でベルが挑んだなんて…、凄いわ。

その後深層へ落ちて、多くのモンスターを取り込んで変異したジャガーノートにベルとリオンが戦って勝ったなんて…、さすがの私も言葉が出ないわ！

「そう…、生き返ってくれて嬉しいわ。ベルには感謝しても感謝し足りないわね。貴女たちの遺体を過去から持ち帰り、愚者の魔法で復活してくれたんだもの。…：はあ、5年前のベルは本当にあそこまでじゃなかつたのに」

「5年前のベルって、どんな子だったの？勇敢でわんぱくな子だったの？」

「逆よ。すぐに転んで、びいびい泣く子だったわ。女の子として見られてもおかしくなかつたわね。ゼウスがいない隙に、村の人がベルをいじめようとしても無抵抗で何もしなかつた子だった…。まあ、その人たちは私が神威全開で叱ったけどね！」

「(うわあ…その村人たちが気の毒に思えてきたわ)そ、そうなのね！その泣き虫だったベルが今や【最後の英雄】の最有力候補なのね…。」

「私としては複雑だわ。逆に【勇者】や【猛者】の怠慢が腹立つわね。アルフィアたちの気持ちも今になってわかるわ。」

「そうね…。でも、半年でレベル5なんてすごいわね！」

「本人がそれに対して無自覚なのが心配なのよね…。アリーゼ、ベルの力になってあげてね。」

「ええ！もちろんよ！アストレア様、リオンを助けてもらったただけでなく、私達も生き返らせてくれたもの！随分でかい恩だけど、生涯返していきたいと思っっているわ！」

「ありがとう…アリーゼ。…！更新終わったわよ。アリーゼ、ランクアップしているわよ。」

「え！本当！…リオンに早くも並んだわね。」

「それはどうかしら？今のルウは5年前と比べ物にならないわよ。」

「あら！それは楽しみね！ベルの特訓のついでに私達もついていって、模擬戦してもいいかしら？」

「そうね。それはセバスとメイに聞かないといけないわね。」

そして、その後輝夜もライラもランクアップしていることを知った。

セシルちゃんは、鍛冶場へ戻りヴェルフ・クロツゾの教えを乞うとか言ってたわね。

歓迎会も開かないと！あ、私達の復活祝いも開くべきかしら？

「もう、追いつかれませんでしたか…（数日だけなのに、ステータスがかなり上がっているのは驚きました。あの特訓が効いているのでしようね）。」

「お前がモタモタしているだからだろうが。自業自得だ。」

「はー、もうレベル4か。勇者サマの背中が見えてきたな。」

「さて！私達はベルの特訓へついていって、模擬戦しましょう！メイさんとセバスさんはどこかしら？」

「どうかしましたか？」

「きゃあっ！」

び、びっくりした…。気配も何も感じなかったわよ…。

…この人もメイさんと同じく、強いよね…。

「何のご用でしょうか？」

「あ、そうね！私達、ランクアップしたから調整のため模擬戦したいけど、ベルが特訓している所へ行きたいけど、ダメかしら？」

「問題ございません。ランクアップしたのですね、おめでとございます。」

淡々と言ってくれるわね…。

まあ、ベルと比べたらしょうがないわね！

「ああ、セバス。これらがみんなのステータスよ。リリちゃんへ渡してくれるかしら？」  
「よろしいのでございますか？」

「【アストレア・ファミリア】は、もうベルを生涯支えると決まっているわ。なら、【ヘスティア・ファミリア】の傘下に降ると同然。なら、今渡しても後から渡しても同じことだわ。」

「承知しました。リリ嬢にお渡しして、取り扱いには注意するよう伝えます。」

「ええ、わからないことがあれば私に……いえ、貴方たちに聞いてみていいわ。」

「心得ました。そろそろぼっちゃまが来られるのですが、皆様武器は大丈夫でしょうか？」

「そうですね！手頃な武器を買いに行かないと……。」

5年間も放置していたら、もう使い物にならないわよね。

どうやって、買いに行こうかしら……。

「はあはあ……。間に合つててよかったです！」

「どうした？セシル？」

「あ、はい。オラリオへくる途中、ルウ先輩より皆様の武器の特徴を聞きましたのでそれに近い武器を、ヴェルフ師匠が作られた予備の武器から持つてきました！ヴェルフ師匠に相談したら、快く貸してくれました！」

「あら！感謝しないといけないわね！どれどれ：私はこの長剣ね！」

「私は：この刀か。なるほど、同郷のあの者のために打ったなら私も合うな。ふむ：悪くない。いい刀だ。」

「あたしはこれかあ。んー、形は違うがそれなりには使えるかな。」

「あと、ヴェルフ師匠から今晚に神へファイストスと「へファイストス・ファミリア」団長の椿さんが来られるので、本格的な武器はその時にお願ひしたらどうか？」と。」

「なるほど【単眼の巨師】か。奴とは面識がそれなりにある。」

「でも、私達死んだことになっているよね？大丈夫かしら？」

「それについては問題ございません。彼らも同盟の一つですから説明しておきましょう。」

「うーん、【単眼の巨師】に依頼するのにかあ…。ローンは覚悟しておくか…。」

「それも心配無用でございます。【単眼の巨師】は色々と借りがありますから。」

「そ、そうか…。まあ、いい。私達は若様の力になることを考えればいい。」

「では、坊ちやまが来られましたら共に参りましょう。」

リオンはどのくらい強くなっているのかしら？楽しみだわ！

## 第169話 毒舌女、敗北。

生き返った上に、ランクアップしているとは驚きましたねえ。

あの兎さん…いえ、若様には感謝しなければいけませんね。

さて、どうやって落としましょうか。

その前に、リオンの実力を試みましょうか。

鈍っていたら…、あの兎さんは私がもらいましょうか。

私の好みに入りますからねえ。

…サンジヨウノについては、帰ってからにするか。

見たところ、何も知らない箱入り娘に見えますねえ。

あれで追手というなら、奴らの神経を疑いますね。

…気になることは多くあるが、今は置いておきましょう。

「さて…数日ぶりに模擬戦ね！あ、リオンにとつては5年ぶりね！」

「ええ、そうですね。」

「さて、お前の実力を見せてもらおうか。鈍っていたら、若様は私がもらいましょうか。」

「な！ダ、ダメだ！」

「それが嫌なら、手を抜くなよ？」

「…！わかりました。手加減はしませんよ？」

「偉くなつたものだな、ポンコツエルフが。」

「わ、私はポンコツではない！」

「やれやれ、そのところは変わらねえなあ。」

「さっさとやりましょう！」

そして、リオンと私で模擬戦を始めた。

「が…は。少しは…手加減しろ…。」

「手加減はしないと云つたはずですが…。私はいつもやりすぎてしまいます。それを忘れましたか？」

同じレベル5のはずだ…、なのにここまでとは。

こいつはどのくらいの修羅場をくぐつてきたのだ!?

「輝夜がここまでとはね！次は…私とライラよ！」

「な！アタシを巻き込むんじゃねえ！」

「今の私ではリオンに勝てないわ！だから、ライラと組むわ！いいわね、リオン！」

「ええ、構いません」

くそ…あの速さ、技の冴え…レベル5ではないな。

恐らく、何かのスキルがあるのでしょうかね。

【アストレア・ファミリア】副団長として、このままでは終われませんね。

「きやあああああ！」

「おい！ちよつと待てよ！何だよ、その強さは！うわあああああ！」

（ここまで弱かった？いえ…あのスキルですか。それだけではないですね、ここ数日メイさんと模擬戦したからでしょうか。）

二人でもダメか…。

なら、三人がかりでやるか。

「そこまです。ルウさん、何をやっているのですか？」

「す、すみません。」

「手ぬるいです。」「え？」「もっと殺す気でやりなさい。」

何だと…？

アレで手加減していたというのか？

「…はい。」

「まあ、先日復活してきた仲間ですから仕方がありません。ルウさん、まず私とやりま



しよう。」

「え？は、はい！」

「貴女たちはよく見ておきなさい。本当のレベル7上位の力を。」

何だと！あのメイドはレベル7上位に匹敵するのか！

あの執事もか…。

この戦争遊戯、もう既に「ヘステイア・ファミリア」の勝ちではないのか？

そして、私はあのメイドとリオンの壮絶な戦いを目にした。

「がはあっ！…あぐう…。」

何だ…あの戦い方は。

これが、あのリオンなのか？

「ふむ、私に「太刀浴びせるとは少しはなじんできたようですね。」

「はあ…はあ…。」

「ルウさん、少しは休憩しておきなさい。さて、次は貴女たちです。」

「「え？」」

「輝夜さん、貴女の考えの通り確かに私達が出張れば、戦争遊戯には勝てるでしょう。ですが、それではダメなのです。」

「何だと…?」

そして、私達はこの戦争遊戯の狙いそしてこれからのことを教えてもらった。

「なるほどなあ…。そりや理にかなっているわな。」

「ベルを中心とした、オラリオ連合ね! いいじゃない!」

「そういうことでしたか…。なら、強くないといけませんね。」

「わかりましたか? では、かかってきなさい。」

「望むところだ!」

そして、私達三人はメイドに一泡吹かせるため、戦った。

しかし…。

「この程度ですか?」

「うう…。」

「何なんだよ…アルファイアより強えじゃねえか…。」

「これが…本当のレベル7…。」

1分も経たず、地に伏せられた。

化け物め…。

「当然です。アルフィアさんは病でかなり弱体化していました。レベル6上位か中位あたりでしょう。7年前に貴方たちが死んでないのがその証拠です。それはよくおわかりでしょう？アリーゼ・ローヴェル団長？」

「…ええ。それはわかっていたわ。」

「なら、言うまでもないでしょう？貴女たちは強くならなければなりません、貴女たちを助けた坊ちやまのためにも。」

「ぐっ…。私達はあの…若様によって生き返った。その恩を返さなければならぬ。何としてもだ！」

「なら、死ぬ気がかかってきなさい。治療なら、あちらのアミッドさんやカサンドラさん、ナアーザさんがいます。死の数歩手前なら大丈夫ですよ。」

万全の備えはできているということか…。

なら、後先考えずにやるだけだな！

ドゴオオオオン！

「!?」

「!?…!?…!?」まで強化されましたか。」

「な、何…?」

「ふう…!?」までとは思いませんでしたな。」

「だ、大丈夫？セバス。僕、やりすぎちゃった…？」

「いえいえ、大丈夫でございます。」

『セバス、どうです？』

『驚きました。最早、私と互角に戦えるだけでなくその上をいつています。』

『そうですか。では、私達が出張るときでしょうか？』

『いえ、もう少しですな。まだ、坊ちやまは今の力になじんでいません。そこからですな。』

『了解しました。では、私はあのお嬢さん方をしばらく鍛えましょう。』

「え…？もう、ベルはそこまで行っているのですか？」

「はい、ルウさん。思ったよりの強化が上乘せになっているようです。」

強化…？…上乘せ…？

「貴女方には今晚にでも坊ちやまの強さの秘密を明かしましょう。」

「…！」

「あ、あの…！それはよろしいでしょうか？」

「何を今更。貴女と神アストレアはご存知でしょうに。」

「…そうですね。」

何だど？アストレア様とリオンは知っているだど？

…まあ、仕方がない。私達は今日復活したばかりなのだからな。

「バーチェェさん。」

「ここに。」

「貴女は、ルウさんと戦いなさい。殺す気でやりなさい。」

「…承知しました。」

「バーチェェ、よろしくお願いします…。」

あのアマゾネス、強いな…。

「彼女はレベル6です。【カーリー・ファミリア】の元副団長です。快く改宗してくれませんでした。」

（え？快く…？いや、もういい…私は今の環境がすごく気に入っている。特に団長には…あの方とヘスティア様に生涯を捧げよう。感謝しなければならぬ、メイド長には。）

レベル6だと!?

「【カーリー・ファミリア】だって!?!あの物騒な闘国のか!?!」

「うわあ…、ここまでやるの?ううん!ここまでやらなきゃダメということね!リオンに負けたままでいられないわ!」

「そうでございませぬ。あちら様は5年分歳をくつていますから、まだ私達の方が若い

ですからね。」

「な！か、輝夜！貴様！」

「まあ、事実だしなー。」

「じゃあ、リオンはオバサンと……」

「アリーゼ！私はまだ21歳だ！」

「私達と比べれば、年上ではないか。若様も、若いピチピチの10代の女がいいでしょうに。」

プチン

「……メイさん。すみませんが、彼女たちへの相手は私がしてもいいでしょうか？」

「構いませんよ。私はバーチエさんを相手にしましょう。「え？」いいですね？」

「あ、はい（ああ……またあの地獄を見ることになるのか……）。」

「貴女たちに一つ言っておきましょう……。」

「リ、リオン？怖いわ！」

「お、落ち着けよ！」

「この程度の挑発に乗るとは情けないですねえ。またはその自覚があるかと？オ・バ・サ・ン？」

プチン　プチン

(なるほど、アルファイアの気持ちがよくわかりました…。)

「……ベルの側にいることは許しましょう。ですが！序列は私先だ！それに、エルフとしてはまだ10代もありません！」

【今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ。星屑の光を宿し敵を討て！】

並行詠唱が前より早くなっているだど！

しかも剣の冴えも鋭くなっている！

「ちよ、ちよっとリオン！本当のことじゃない！オバサ…きやあああああ！」

「アタシは関係ないだろうが！勇者サマ一筋…って、聞いてんのかよおお！」

「本当のことだろうが！オバサンではないなら、ババアだろうが！がはあつ！」

【ルミノス・ウインドツ！】

リオンとアルファイア…、意外に気が合うかもしれないな。

リオンめ、本気で殺しにきたな…。

本日で何回かの臨死体験となった…。

団長様にとってはもう二桁の臨死体験ですか。

【悲観者】 や【戦場の聖女】に何とか治療してもらったが、その後も続いた。  
そこまで怒るなら、さっさと若様に手を出せ！



## 第170話 狐姫、思案。

本当に今日は驚きました。

ベル様のお：お義母様を過去から連れてきたなんて。

それだけでなく、ルウ様と同じファミアの方の遺体を過去から持ち帰り、愚者様のウイーネ様を生き返らせた魔法で三人とも生き返らせることができました。

ベル様は本当に凄いです！

物語に出てくる英雄様より凄いです！

あの時【イシユタル・ファミア】から救い出してくれた時は、絶対に忘れられませ  
ん！

だからです。

だからこそ、神フレイヤの魅了にやられベル様のことを忘れるなんて。

悔しい、私は自分が悔しい。

ベル様への想いが、魅了に負けたことが。

「…様！春姫様！」

「はっ！な、何でございましょうか？」

「…大丈夫ですか？心ここにあらずという感じでしたよ。」

「すみません…。その、少し前のことを思い出していましたので。」

「…気持ちはわかります。ですが、その分ベル様へ貢献しなければいけません！」

「はい！すみません！リリ様！」

ええ！そうですね。

メイ様に誓いました、ベル様に全てを捧げることがを。

「そういえば、エイナ様はどこへ…？」

「ハスティア様と命様と一緒に、散策しています。例のスキルの効果を確認するためです。」

「ええと、相手のステータス情報を見ることが出来る魔法ですか…？」

「はい。」「凄いですね！」

「ええ。ですから、どこからどこまで見ることが出来るかが問題です。それ次第で、戦争遊戯だけでなく今後の戦況を左右します！」

「それ次第でございますか？」

「はい。それによつて、リリ達がダンジョンに潜らずにすむかもしれません。愚者様の魔道具を使えばですが、愚者様に確認しますと「もう少し待つてほしい」とのことでした。」

「ダンジョンに潜らずに!?!それは一体…。」

「今は置いておきましょう。それより先程いただいた【アストレア・ファミリア】のステータス情報とこちらの情報をまとめなければいけません!」

戦争遊戯ですか…。

【イシユタル・ファミリア】の時に何回かありましたが、春姫が目にすることはありませんでした。

ですが、相手は最強派閥の【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】です。果たして勝てますでしょうか…?」

いえ!絶対に勝たなければなりません!

ベル様を守るためにも!

ガチャ

「邪魔するぞ。」

お、お義母様?!

「ア、アルフィア様!」

「な、何かご用でございませうか? (お義母様と言った方がいいでしょうか?)」

「…ああ。挨拶をと思っただけだ。うちの義息子が世話になっているようだからな。」

『義息子ではなく甥なのでは…。』

『リリ様！しー、しーでございます！』

ソレを言いますと、レベル4のアーリーゼさんを瞬時でボロボロにした魔法で殺されま  
す！

「セバスから大体、お前たちのことは聞いた。」

「ひいつー！」

「よくも私の義息子を…とりたいところだが、それを差し引いてもベルの力になって  
くれたそうだな。ベルの義母として感謝する。」

「い、いえっ！リリはベル様がいなかったら、今頃生きてはいなかったでしょう。感謝す  
るのはリリの方です！」

「は、春姫もですー！」

セバス様はどこからどこまで説明されたのでしょうか？

すごく気になります…。

「そうか。お前たちはまだ第二級冒険者にもなっていないと聞いた。しかし、ベルは今第  
一級冒険者だ。これから、どうやってあの子の力になるのだ？言ってみろ。」

「リリは…、小人族です。ですが、ベル様は向こう見ずで突っ走るところがあります。」

【勇者】ほどではありませんが、ベル様のやりたい事を最短で導かせるのがリリの役目で  
す！」

「それはわかった。だが、深層より下は甘くないぞ?」

「ええ、それはメイ様より聞いております。ですので、リリのスキルとエイナ様の魔法そして愚者様の魔道具によってできるのではないかと思っております。」

「ほう、言ってみろ。」

「それは……」

---

え……リリ様。

そのようなことを……。

「……ということですよ。まだ確定ではないですが、ほぼそうなるのではないかと思っております。そのために試験としてこの戦争遊戯で試します!」

「……なるほどな。確かに、その方法なら非力なお前ならうまくいくだろうな。うまくいかなかったら、どうするのだ?」

「その時はその時で考えます!それができなければ、多くのトラブルを招いているベル様を支えることなどできません!」

(ちよ、リリ様!)

「……そうか。ベルがいろいろとやらかしてすまないな。これからも頼むぞ。」

「はい！お任せくださいませー！」

リリ様はすごいですね…。

リリ様の頭脳がなければ、私たちは全滅してたでしょうね。

リリ様が羨ましいです。ベル様から深い信頼を預けていますから…。

「それで、狐人のお前はどうかのだ？レベルブーストができると聞いたが。」

(こ、こんつ!?)

「…春姫はそれしかできません。なら、妖術を更に極めてベル様の力になりとうでございますー！」

「確かにそれは強力な妖術だ。私たち〔ヘラ・ファミリア〕にもなかった。だが、使いどころを誤るなよ？それによつてはあの子の足を引っ張りかねないし、死ぬことにもなるのだぞ？その覚悟はお前にあるのか？」

「ありますー！でなければ、春姫はここにいませんー！」

「…そうか。あの子はいい娘たちに恵まれたな（これも幸運の導きなのか？良からぬ雌豚なら懲らしめようかと思つたがな）。」

『よしっ！お義母様より好感触を得ました！序列上位はもらいました！』

『あ、そうでございますね。他の方より一步リードですね！』

リリ様、そこまで考えていたのですね！凄いです！

春姫はおこぼれもらっているだけですが、それはそれでよしとしましょう。

そして…ふふふ。

「だが…、ベルはまだ子供だ。思い余って手を出すなよ？手を出したら…、分かっているな？」

(ひいつ！)

「は、はい！もちろんです(でございます)！」

「なら、いい。そこらへんの雌豚共と同列でないことを常に示してみろ。期待しているぞ。」

す、すごいプレッシャーを感じます…。

妖術を更に高めるために、詠唱技術や回避技術を身に着けなければいけません！

回避技術はタケミカツチ様から本格的に学んでいかないと…。

詠唱技術は…、ルウ様でしょうか？

いえ、戦闘方法が違いますから…。

誰に学んでいったらいいでしょうか…？うーん…。

## 第171話 絶†影、感心。

私は、ヘステイア様とレベル1のエイナ殿の護衛です。

今から、エイナ殿の魔法の検証のために外出します。

【汝らの秘密、判明せよ】

【鑑定】

「どうかな？アドバイザーくん？」

「これは…凄い魔法ですね。視界に映る人の上に文がありそこに名前や種族、レベルがあります。」

「変装しても一発で見破れるかもしれませんね…。リリ殿の魔法でも見破れるか帰ったらやってみましょう。」

「そうだね！あ、ボクも見えるのかい？」

「あ、はい。こう見えます。」

ヘステイア

種族：神

レベル：???  
????



「なるほどねえ。レベルがいくらなのか気になるけど4桁？そんなにあるのかい？」  
「さすがヘステイア様ですね！」

神にもレベルがあるのですね。

4桁…さすがヘステイア様です！

「そ、そうかなー。命くんはどうだい？」

「あ、はい。命さんは…」

ヤマト・命

レベル2

力： 低い

耐久： 低い

器用： 低い

敏捷： 低い

魔力： 低い

スキル：あり

魔法：あり

「ステータス詳細はさすがに無理かー。」

「これで内容まで分かったら、たまったものではないですね…。」

「そうだね…。でも、ステータスロツクが意味ないよね、コレ。」

「ええ…。エイナさんが経験豊富な元ギルドの受付嬢であり、良識のある女性でよかったです！」

「いえ、そんな…。私もこの魔法が顕現するとは思いませんでしたが…。」

（恐らく、もう1つのスキル【白兎眷属】がその魔法を引き出したんだ。）

スパイや忍びにとつて天敵となる魔法ですね。

【ヘステイア・ファミリア】への間者防止にもなります。

レベル1となつたばかりなのに、すごくないですか？

「これはいつまで保つのでしょうか？」

「今はヘステイア様と命さんの二人だけです。大通りへ行つてみましょう。」

「何が起こるか分からないんだ。命くん、頼むよ！」

「おまかせくださいませ！」

ヘステイア様と、エイナ殿の身を守らなければなりません！

特にエイナ様は、メイ殿とセバス殿が解放される前の、敗北確定の【ヘステイア・ファミリア】へ入団してくれた方です！

「うっ…。これはキツイ…。情報量が一気に来て…。待つて下さい…。」

「だ、大丈夫かい？命くん、何か感じるかい？」

「いえ、全く……」

頭痛を抑えるような身振りですが……、これだけの情報が一気に入ってきたらパンクしますよね。

それだけで済ませるエイナ殿がすごいです……。

「ふう……落ち着きました。何とか処理できました。」

「しよ、処理ですか？」

「ええ、一気にそれぞれの情報が表示され、近づけば近づくほど……、あ、その人スリです。」

「え？わかりました！曲者！」「い、痛え！」

「ああ！よかった、捕まえてくれて！あたしの一ヶ月分の給料が入った財布をスラれたんだよ！」

「マジか！おお、「ヘスティア・ファミリア」だ！すごい！」

……スリと見破れるのもすごいです、これだけの人の情報を処理できるエイナ殿もすごいです。

さすが、ギルドの百戦錬磨の元受付嬢だけではありませんね。

見方によつては、レベルに関係なく突き抜けていませんか？

「ええ……ここまで見破れるのかよ……。ボク、何もしてないぜ？」

同感です。私は言われるままに捕まえただけです。

【ガネーシャ・ファミリア】にとって、喉から手がでるほど欲しがりそうですね。

「ご協力ありがとうございました！おい、さっさと来い！」

【ガネーシャ・ファミリア】構成員がすぐに来てくれましたので、引き渡しました。

多くの人に見られ、感謝されました。

私は何もしてないのに…、評判が上がってしまいました。

「アドバイザーくん…すごいね。」

「あの人…レベル2。やや力が高めですね。胃が荒れている感じなので胃薬をすすめた  
いですね。」

そこまで見破れるのですか…。

【ディアンケヒト・ファミリア】や【ミアハ・ファミリア】からも欲しがりそうですね。

「……エイナ殿が本当に良識のある人でよかったです…。」

「……そうだね。コレは悪用されたら、とんでもない被害が出るね…。」

「ええ、そうならないよう私を戒めてくださいね。ヘステイア様。」

「その必要がないと思うけどね（ベル君がいるならキミはその気が全くないだろうね）。  
わかったよ。」

完璧ですね…。自分に対しても戒めるぐらいの方ですね。

見習わなければいけませんね。

結構、長く保っていますが大丈夫でしょうか？

「エイナ殿、まだ保ちますか？」

「…そろそろ、限界かも。解除します。」

【閉じよ、秘密の扉】

「ふう…どのくらいまで保ちました？」

「1時間ほどです。」

「レベル1のなりたてで1時間かあ。結構長く保つね。」

「マジックポーションを30分ほど間隔を置いて飲めば、1日は保つかもかもしれません。」

「あ、そうか！…やはり反則だね、その魔法は。」

「すごいですね…ほぼ無尽蔵に使い放題ではありませんか。」

「ですが、都市内ならともかくダンジョンだとそうは行きません。むしろ命さんの魔法がまだ生かせられるかと。」

「そうですね…。ですが、エイナ殿はまだレベル1になったばかりです。3層までなら可能では？」

「ソロでは無理かな。ベルくんじゃないんだから。」

「そうだね。ベルくんは別。…ホームにいなながら情報を見るといいうものができたらね

え。」

「それができたら、エイナ殿はホームにいなながらダンジョンに参加できますね！」

「あはは、それができたら冒険者の半分は引退していると思うよ。：けど、冒険者の安全はより高くなるね。元ギルド受付嬢としては嬉しいけどね。」

そうですね。私のスキルはどちらかといえばダンジョン向けですね。

ですが、切り替えができればエイナ殿の魔法と連携可能ですね！

「：キミを眷属にしてよかつたと思うけど、本当にいいのかい？ギルドの方が給料も待遇もいいだろうに。：いや、キミが決めたことだからボクは何も言わないけどね。」

「ヘステイア様、気遣いいただきありがとうございます。けど、私はベルくんの力にどうしてもなりたくないんです。」

「はあ：：ベルくんも罪な子だよなあ。あちこち責任が多くなっているけど、あの子は耐えられるのかなあ：：？」

「大丈夫です。ベルくんが耐えれないなら、私達が支えればいいだけですから。」

「エイナ殿はすごいですね：（春姫殿もそこを見習わなければならないと思いますが、いえ心配は不要かもしれません。リリ殿、春姫殿、エイナ殿はここ数日一緒に行動しているようですよから。」

「レベル2の命さんに言われるほどではないですよ。それに、私はまだなりたてですよ

「？」

なりたてでも…、私のなりたての頃と比べると比較になりません！

戦力というより補助的な意味ではオラリオ上位に入るのではないでしょうか？

「なりたてだけでもその魔法が出た時点で、魔力が結構上がるんじゃない？（あのスキルの効果もあり、結構上がると思うけどね）」

「そうかもしれないね…。ヘステイア様、検証のため帰ったら更新をお願いしてもいいですか？」

「そうだね。ボクも知りたいしね。」

「そろそろ帰りましょうか？」

「あ、待つて下さい。自然回復でどこまでやれるか試したいので。」

【汝らの秘密、判明せよ】

【鑑定】

「アドバイザーくんは熱心だなあ。」

「そうですね。私も見習わなければなりませんね。」

いいお手本の方が入ってきてよかったです。

特に…タケミカツチ様へ見向きもせず、ベル殿に思慕を持ってよかったです。





この短期間でここまで強化されるとは思いませんでした。

ですが、冒険者になってからの半年では経験は埋められませんね。

「そこです。」

「ここですな。」

「げふっ！がはっ！うわあああつー！」

坊ちやまは、私とセバスの連携攻撃によつてぶっ飛ばされました。

「う…あ…。」

「カサンドラさん。」

「は、はい！」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

カサンドラさんの治療の腕も上がってきましたね。

いい傾向です。

それに、アミッドさんも指揮がうまくなりましたね。

オラリオの治療士をまとめてもらうには彼女が最適ですな。

「ふう、今日はここまでにしておきましょう。日も間もなく暮れますでしょうから。」

「そうですね。」

「はあ…はあ…。やはりすごいね、セバスとメイは。」

「いえいえ。」

「ここまで来たことに私達は驚いています。さすが、坊ちやまでですね。」

「…そ、そうかな。えへへへ。」

心配です。この程度のお世辞で照れるとは。

本当にあの困った子の遺伝子を受け継いでいるのですか？

坊ちやまは現時点でオラリオ上位に入りますが、あまりにも世間知らずです。

私達が守らなければいけませんね。

「…もう若様だけで勝てるのではないのでしょうか？」

「私もそう思うわ。私達がまとめてかかっても負けるでしょうね。」

「フィンたちが可哀想に思えてきたぜ。」

「…私も早く並ばないと…。」

「『この戦闘狂め。』」

「わ、私は戦闘狂ではない！【劍姫】と一緒にしないでください！」

あちらも騒がしいですね。

そろそろいきいますか。

「では、シメといきますか。」

「シメ？」

（ああ…ベル。頑張って下さい…。）

「カサンドラさん、準備をしておいて下さい。」

「は、はい。」

「やはり慣れないよ…。」

「私事です。しかし、彼らに逆らえますか？」

「無理。」「無理です…。」

アミッドさんもカサンドラさんも慣れてきましたね。

さて、始めますか。

「バーチエさん、準備を。」

「はい。」

【喰い殺せ】

【ヴェルグス】

バーチエさんも魔法の精度がよくなってきましたね。

私の教えをきちんと受けています。

坊ちやまの専属メイド親衛隊としてやっていけそうですね。

「え？あの子、何出したの？」

「…猛毒です。」

「は？」

「おい…あたし何か嫌な予感がしてきたぞ。」

「では、坊ちやま。」

「え？え？何を…うわっ！あがが…」

「はい、流し込んで下さい。」

「承知しました（団長…すまない。本当にすまない）。」

「ガボガボガボ……。うぐううううっ！」

いつもより量が多く質も濃いですが、どうでしょうか？

「「ええええええっ！」」

「ベル…耐えて下さい…。私は無力だ…。」

「な、何をやっておるのだ！あいつらは！」

「し、死んじやうわよ！」

「…耐異常を上げるためだそうです。」

「は!?!そんな無茶苦茶な訓練ありかよ！」

「（ヘラ・ファミリア）でもやっていた方法だそうです…。」

「その前に死んじやうわよ！」

「……いや、団長。見てみる。」

「え？」

早いですね、もう。

「ぐううう！……ふう。ビックリしたよ。セバス。」

「「ええええっ！」」

「もう、乗り越えましたか。」

「バーチェさんの毒を克服しましたか。思ったより早かったですね。」

「わ、私のヴェルグスが……。そんな……。」

やはり、先日の更新でDに上がったためもう効きませんか。

「……えーと……。そんなに大した毒じゃない？私も飲んでみようかな？」

「アリーゼ！やめたほうがいいです！地面を溶かすほどの猛毒です！」

「え！何よ！それ！嫌よ！」

「……若様の耐異常はどのくらいあるのだ？」

「Dです。輝夜嬢。」

「「D!？」」

「……そこまでして上げるのかよ。あたしは嫌だ。絶対に嫌だ。」

貴女たちにはしませんよ。

坊ちやまだけ……いえ、【猛者】や【勇者】たち三首領にも飲ませましょうか。  
7年間の怠慢の罰として。

「……驚きました。もう克服したのですか。」

「す、凄いです！ベルさん！」

「よかつたよ……あの苦しむ姿を見ずにすんで。」

そうですね。

これで冒険者になって半年とは誰も信じられないでしょうね。

頃合いでしょうか。

「坊ちやま、大丈夫ですか？」

「うん、何かキツイ飲み物だったね？」

「私の……ヴェルグスが……キツイ飲み物……」

「……………賭けてみますか。」

「メイ？」

「セバス、再びぼつちやまを。」

「すみません、坊ちやま。まだ続きがあります。」

「え？え？え？あががが……」

申し訳ありません。

あの困った子の生命力を受け継ぐ…坊ちやまに賭けてみたいのです。  
あの子を苦しませたものを。

「な、何をするの？」

「すごく嫌な予感がするぞ…。」

「坊ちやま、ほんの数滴です。」

「あが…ゴクン…!!!うあああああああつー！」

やはり、耐異常Dでは駄目のようですね。

## 第173話 侍従長、叱咤。

「お、おい！あのメイド何を飲ませたのだ!？」

「これは…今までにならないほどの苦しみ様です！」

「なっ…！カサンドラさん！解毒魔法を！」

「は、はい！」

「待ちなさい。たったの数滴です。耐異常のレベルからして、死ぬことはないでしょう。」

「あれは！違います！バーチェさんの毒より遙かに上の毒です！死にます！」

「……ベル？」

数滴ですからね。

あの子はどれだけ苦しんだのか…。

「なるほど、メイ。貴女はあの毒を飲ませたのですね。」

「ええ。バーチェさんの毒に慣れた以上、あの毒なら耐えられると計算しました。…数滴ですが。」

「私の毒より…？何の毒なのですか…。」



「ゼウス・ファミリア」の「暴食」を蝕んだ毒でございます。」

ええ、ザルド坊を蝕み戦線離脱させ、坊ちやまを一人にさせ、「猛者」に無駄な経験値を食わせたきつかけのものです。

「まさか……ベヒーモスの猛毒を!？」

「正解でございます。」

「あのザルドを苦しませた猛毒をか!? 【戦場の聖女】！早く治せ!」

「駄目です。」

「ふざけんな!あの兎がマジで死ぬぞ!」

「黙りなさい。」

「[「-」]」

賭けるしかありません。

時期早々かもしれませんが、坊ちやまを信じます。

「坊ちやま、聞こえていますでしようか。坊ちやまに飲ませた数滴の毒は…私の所属していた【ゼウス・ファミリア】の【暴食】ザルドを蝕み、苦しませ、坊ちやまを一人にさせた元凶の毒です。」

「!!!うぐ…うあああああつ!」

「なっ…。克服しようとしているわ!あの子!」

「…ば、馬鹿な…耐えられるわけがない…。」

「狂ってるぜ…。」

「ベル…。」

この程度を越えられないようでは、これからの苦難に耐えられません。

お願いします、坊ちやま。

「坊ちやま。ザルドの…ザル坊の仇をとってくださいませ。」

「あああああああつ！……………」

「なっ！」

「死んだ…?」

「いえ、気絶しただけです。ふむ…。何とか克服できたようですね。」

「カサンドラさん！」

「はい！」

「……………（詠唱中）……………」

【キュア・エフィアルティス】

持ち直したようですね。

「よかったです。何とかかなりそうですね。」

「よかった、ではない！死ぬではないか！こんなの！」

「そうよ！こんなの、特訓じゃない！拷問よ！」

「アタシもそう思うぜ。」

「だから、貴女たちはジャガーノート如きに負けたのです。」

「！！！！」

「……ここで彼女たちに甘さを突いておきましようか。」

「……っ！」

「すぐに対応できるよう、準備と心構えができておらず」

「ジュラ如きの俗物以下の罠にハマられ、おめおめと厄災を呼び寄せることになったのです。」

「貴女方はジャガーノートにやられたのではないのです。貴女方自身の傲慢そして油断にやられたのです。」

「すぐに未知を既知に変えることができたなら、倒せたはずです。」

「……無茶苦茶なことを！」

「私達は、それでも黒竜に負けたのです。」

『陸の王者』『海の霸王』に死闘の末で勝っても……。

「！！！！」

「ベヒーモスやリヴァイアサンの欠片如きに、負けては話にならないのです。」

「黒竜はそれらを遥かに凌ぐのほどの化け物です。」

「倒せる可能性を持っているのは、今のところ坊ちやまだけです。」

「だからこそ、坊ちやまにはあらゆる可能性を超えてほしいのです。」

それが、坊ちやまの目指す『英雄』に近づく早道です。

「……………」

「リオン…。お前は何も言わねえのかよ?」

「彼らは…ベルのことを第一に思っている。彼らがベルを死なせることはないと分かっています。彼らはベルを強くするために、最短で安全な道をとっているのを知っています。…もし、彼らがベルを死なせるようなことがあれば、私はこの命を賭けて彼らを倒します! 例え死のうとも!」

「……………リオン。貴女は…。」

「お見事です、ルウ嬢。貴女は坊ちやまの横に並び立てる女性であることを証明しました。」

「皆さん、ルウさんの足元を見て下さい。」

「足元だと…?! お前…。」

坊ちやまがバーチエさんの毒を飲んでから、ずっとそうしていました。

坊ちやまが強くなりたいたいという気持ちを理解している彼女ならわかるはずです。

だから、自分をずっと抑えていましたね。  
素晴らしいです。

「手を見せて下さい。ルウ・リオンさん。」

「……………」

「うっ…。爪が骨まで食い込んでいます…。」

「はあ…。貴女がここまで耐えなければならぬなら、私達は何も言えないじゃないですか…。エリスイス、確か改良ポーシヨンがありましたね？」

「ああ…。はあ…。あんたがそんな無茶をするなら、喚いていた私達が馬鹿みたいじゃないか。」

「…うっ…。すみません、「医神の忠犬」。」

「…駄目ですね。一体どれだけ食い込んだのですか。私がやります。」

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。薬奏をここに。三百と六十と五の調べ。癒しの暦は万物を救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操縦。呪いは彼方に、光の枢機へ。聖想の名をもって——私が癒す】

【ディア・フラーテル】

「すみません…【戦場の聖女】。」

「……はああああ。このポンコツエルフが！」

「な!?わ、私はポンコツではない!」

「ばあくかめ。お前のその様を若様が目にしたら、若様は自分を責めるだろうが!」

「……はっ!」

「はあ……リオンがここまでとは思わなかったわ。」

「ああ、ここまでとはな。」

「ううう……。」

まあ、そうですね。

少なくとも坊ちやまには知られないほうがいいですね。

「さて、もう日暮れになります。カサンドラ嬢、いつものように坊ちやまを介抱してくだ

さい。」

「は、はい!お任せ下さい!」

「え?何で?そのままベルと一緒に帰ればいいじゃない?」

「…アリーゼ、それには理由があるのです。」

「それに貴女たちは死んだことになっています。闇に紛れてホームへ帰らないと面倒な  
ことになります。」

「あ!そうだったわね!」

「では、こちらから帰りましょうか。」

クノツソス…ダイダロスはいいものを築きましたね。

それが一時的に闇派閥のアジトとなっていたのが気に入りませんが、まあいいでしょう。

私達の役に…いえ坊ちやまの役に立ってもらいます。

「……闇派閥が根城にしてたここを私達が活用するとはな。」

「オラリオにこの入口があちこちあったなら、あの時の闇派閥の神出鬼没がようやくわかったぜ。」

「アルフィアとザルドは、ここのことを暗に示していたことがあったわね…。もっと早く気づくべきだったわ。」

そうですね。

すぐに気付けば、貴女たちは今頃生きていたでしょうね。

## 第174話 狐姫、決心。

日が暮れます…。

ベル様はご無事ででしょうか…？

ガチャ……。

「あ！お帰りなさいませ、皆様方。」

「ああ…ただいま。」

「疲れたわ…。」

「これを毎日だつて？キツイぜ、これは。」

「ふん、軟弱な小娘共が。……ベルはどこだ？セバス。」

「カサンドラ嬢と間もなく来られます。」

「そうか……。」

（（めっちゃガツカリしている……。））

先程までうろうろとされていて、窓の外を見たり玄関のドアをじつと見つめていましたね。

ベル様を実の息子のようにな、非常に気にかけていることはわかります。



「そうだわ！アルフィアに質問があるわ！」

「何だ？下らんことなら魔法をぶつけるぞ。」

「ち、違うわよ！えーと、アルフィアのいた【ヘラ・ファミリア】って耐異常を上げるために毒飲んでたの？」

「…よく知っているな。いや、セバスから聞いたんだな。そうだ、毒妖蛆の毒を数倍に薄めて飲んでたな。あれはキツかった。」

「「え？う、薄めて？」」

「何だ？当たり前だろうが、そのまま飲んだら死ぬに決まっているだろう（そんなことができたのはザルドだけだったな）。」

「「……………」」

「何を言っているのだ…貴様らは？」

アミツドさんやカサンドラさんから聞いた話では、バーチェさんの毒をそのまま飲んでいただけの話ですが…。

バーチェさんの毒は毒妖蛆を遥かに超える毒と聞き及んでいます。

お義母様のファミリア…【ヘラ・ファミリア】も同様のことをされていたとのことでしたが、薄めていたのですね…。

じゃあ、ベル様は【ヘラ・ファミリア】より更に過酷な特訓をしているということに

…？

ガチャ。

あ！戻りました！

…え？べ、ベル様…？

「ただいま、戻りました！」

「あ…う…。」

「べ、ベル!?何でそんなにポロポロに…どうしたのだ!この状態は!」

「す、すみません、アルフィアさん。セバスさん、メイさん、思ったよりひどいです!私の魔法ではもう効きません!アミッドさん、魔法をお願いします。」

「そこまでですか…。わかりました。」

【癒しの滴、光の涙、永久の聖域。葉奏をここに。三百と六十と五の調べ。癒しの暦は万物を救う。そして至れ、破邪となれ。傷の埋葬、病の操縦。呪いは彼方に、光の枢機へ。聖想の名をもって——私が癒す】

【ディア・フラータール】

(…駄目ですね。一時的に回復できましたが解毒できてません!)

「う…あ。お、お義母さん、ただいま…。」

「ああ、おかえり。ベル。…セバス、貴様らは何をやったのだ!?」

『やばいわ！お義母様の怒りに触れたわ！』

『ホームが消し飛ぶかもしれないですねえ。』

『復活したばかりなのに、再び死ぬのは嫌だぜ。』

ひいひいひい！

怖いです！

「特訓ですが、何か？」

「特訓だど!?何をやったのだ！言え！いや…おい、小娘共。」

「「はい！」」

「こいつらに聞く前に…、特訓内容を全て言え。ベルのだ。」

「「わかりました！」」

お義母様を倒したのは「アストレア・ファミリア」の方々ですよね…？

従順になっています…。

いえ、あのお義母様の怒りを目にしたら仕方がありません。

「何だと…もうセバスたちの連携攻撃の段階まで行ったのか…。ついていけたのは、あの傲慢女とあの精強な男しかいなかったのに…。」

「…あれはもうレベル7上位と 생각합니다。」

すごいです！ベル様！

この短期間でレベル6を完全に超えてしまいました！

「だろうな。私が全盛期を取り戻したとしても、こいつらの連携についていけるか微妙だな。だが、ベルのこの様子はそれではない。他にもあるな？」

「ええ、そうです。それは……」

一体、何をしたのでしようか……？

聞くのが怖いです……。

ガチャ。

あ、エイナ様と命ちゃんです！

「ただいまです。な、何の騒ぎですか!？」

「あ、エイナ様！ちようどいいところに！あの魔法をベル様へ試して下さい!！」

「え？リリさん……？べ、ベルくん!?わかりました！試してみます!！」

【開け、秘密の扉】

【鑑定】

「…生命力と精神力が非常に低くなっています！危険です！え………毒?！」

「な、何だと!?!毒だと!?!」

「…ベヒーモスの毒(弱)?！」

ベヒーモス……？

「な……貴様ら！ベルに何をしたのだ！もはや許せん！」

「〔全員退避！〕」

ひいひいひいひいっ！

【福……ガッ！

「〔え？〕」

え……？お義母様が魔法を唱えようとしたところに、セバスさんが踏み込みお義母様の喉を掴みました…。

速いです！

「お嬢様、落ち着いてくださいませ。」

「……！……！……！（セバス！放せ！）」

ジタバタ、ゲジゲジ！

「エイナさんの魔法がそこまで見抜けるとは予想外でした。思いの外使えますね。」

「あ……、はい。ありがとうございます（何で！そんなに冷静なんですか！傍にアルフィアさんがすごく怒っているというのに…。）。」

「皆様方、お嬢様の魔法を封じるのは簡単でございます。詠唱を唱える前に、すぐに懐へ入り込み喉を押さえるだけです。」

『『そんなのできるか！』』

無理です無理です！

そんなのできません！

「アルフィアさん、貴女もわかっているはずですよ。黒竜を倒すにはこの程度では不可能だと。」

「……………！……………！（ふざけるな！鉄くずにしてやる！）」

「メイ、無駄です。かなり激昂しておられます。」

『『うわあ…。あのアルフィアを子ども扱いに……。』』

「7年前に坊ちやまを捨てたくせに……………！（なっ……………）何を今更……………。坊ちやまの生命力については知っていますね？それに賭けただけです。」

うわあ……………お義母様が非常に気にされていることを……………。

セバス様と違い、メイ様はお義母様に容赦ありません……………。

「……………！……………！（それとこれと！何の関係があるのだ！）」

「だからこそ、ベヒーモスの毒ごときに屈されては困ります。むしろ乗り越えて克服するこそが、打倒黒竜への道ですよ。貴女の言っていた『黒き終末』を確実に止めるためです。」

「……………。」

「落ち着かれたようですね。」

「カハツ…ケホツ…。だからと言ってここまでするのか…？この子は冒険者になってまだ半年なのだと…？」

同感でございます…。

ベル様は私達と違い、半年前にオラリオへやってきて冒険者になったばかりです。

それが、何故第一級冒険者より過酷な特訓をしなければならぬのですか！

「我々は坊ちやまの願いを叶えようとしているだけです。」

「坊ちやまのなりたい『英雄』への道を導いているだけです。黒竜を倒すのはそのついでにすぎません。」

「……ベル、許せ。黒竜さえ倒すことができなかつた私たちが、お前に想像もできないくらい重い重荷を背負わせてしまったことを。」

「……う、あ？…お、義母さん、僕は…『英雄』になりたい。「ああ。」だから、ザルド…さんを苦し…ませた毒を…倒したかつた…だけ。「ベル…。」その程度…では…僕の、目指す…『英雄』に、なれ…ない。」

「すまない、ベル。本当にすまない…っ。」

ベル様……。

貴方はあの時…「イシユタル・ファミリア」から私を救った時からでも変わらないの

ですね…。

「けど…、お義母さん。ずっと…そばにいて…ほしい。もう…僕を、置いて…いかないで。」

「…！ああ、ずっといるとも！」

『アルフィアのあの表情、初めて見るわ…。』

『（ギリ…）神エレボスを天界から引きずり下ろして、めった刺しにして再び送還したいですねえ。』

『同感です。』

『はあ…、フィンたちは何やってんだよ…。』

ベル様…。

ベル様、春姫は二度とベル様を1人にしたりはしません。

もしフレイヤ様の魅了に屈することあれば、春姫はもうベル様に顔向けできません。

お義母様の言うように、私は覚悟がまだ足りませんでした。

ベル様の助けになるのも当然ですが、ベル様を1人にしてはいけません！

出遅れても駄目、負けても駄目、死んでも駄目です！

春姫はもつと強くなりとうございます！



## 第175話 静寂、後悔。

仕方がない…。

こいつらはベルに対して絶対の忠誠を誓っている。

ベルが望むよう強くさせているのは間違つてないが…。

念のため、確認してやる。

「……わかった。確認するが、お前たちがベルを真の主と認めている。そうだな？」

「もちろんでございます。」

「当たり前でしょう。」

「ベルを死なせることはないと思うが…、もし死なせたら私が貴様らをこの命に代えても鉄くずにしてやる。覚えとけ。」

「ご心配なく、真の主と認めた以上坊ちやまに尽くすだけです。」

「坊ちやまの存在そのものが我々の生きがいです。坊ちやまが死なれるようなことあれば、オラリオ全てを含めて自爆しましょう。」

「「え？？じ、自爆？オラリオを？」」

「……それはいらん。」

やはりこいつらは解放すべきではなかったな。

エレボスの誘いに乗るべきではなく、ザルドの意見に従うべきだった。

「さて、坊ちやま。こちらをお飲みくださいませ。いつもの数十倍は濃くしております。」

「あ……う……ん、わかつ……た。」

!?

「そ、それは!?メ、メイ! 貴様、なんてものをベルに渡しているのだ!」

「?特製ドリンクですが何か?」

あのドリンクは……あいつら「ゼウス・ファミリア」がそれを見て非常に怖がっていた。私達「ヘラ・ファミリア」は飲んだことないが……、気になっていた。

7年前にザルドへあのドリンクのことを聞くと、真つ青な表情をしていた。

「聞くな、あれは危険なものだ。思い出したくもねえ。」

顔をしかめて項垂れてつぶやいていたな……。

「んしょ……と。ゴクゴクゴク……。」

「何かではない! あ……、そ、そんなに一気に飲みするな!」

せめて、少し……少しずつ飲め!

メイを信用しすぎだ！

…いや、仕方がない。

魔導人形だが、物心のついたベルにとつて狒々爺の次に会った家族だからやむを得まい。

「ぶはあ…んゝ効くね！これ。メイ、いつもありがとうね！」

「いえいえ。…エイナさん、どうです？」

…？おかしいな。何ともないようだな？

むしろ、先程より元気になっているな。

「は、はい！…えーと…はい！…ベヒーモスの毒（弱）が消えています！」

何だ?!あのドリンクにそんな効能があつたのか!?

いや、それ以前にこの女はそれさえ調べられるのか…？

じゃあ、私の今の状態もわかるということか。

「それはよかったです。ひとまずは成功ですね。」

「…あのドリンクが効いたのか？じゃあ、何故奴らはあんなに怯えていたのだ？」

「お嬢様、それは坊ちやまを見たらわかります。」

…？…？…？どういう意味だ？

「おい、ベル。大丈夫か？」

「……んあ？おかあしちゃん？どうちたの？」

「ガハアツ！」

何……だと。

「ア、アルフィア!？」

「死の病が再発したのか!？」

「いえ……アルフィアさんに死の病（やや弱）とありますので、それではないと思います。恐らく……」

（やや弱ですか。半分はお嬢様と同じ血ですから馴染むのが早いでしょうね。となる  
と、明日あたりに完治しますでしような。）

「あうー？おかあしちゃん？うう……ひつく……。」

む、いかん！

ベルが泣きそうだ！

「だ、大丈夫だ。ベル。」

全然大丈夫じゃないがな。

かなり効いたぞ……。

「わーい、おかあしちゃん！」

「……なるほどな。奴らが怯え、飲みたがらない理由がようやくわかった。」

「おわかりになられましたか。」

「やつらー?」

「ああ何でもないんだ、ベル。よしよし。」

「えへへへー。」

……何故、私はこの子のところへ行かなかつたのだ…。

非常に悔やむ。

いや、メーテリアがこの子をゼウスに預ける時に止めるべきだったのだ!

「……エレボスの誘いより前に、ゼウスと争つてこの子を引き取るべきだったな。」

「今更でございますな。」

五月蠅いぞ、セバス。

「え、えーと?ベル?」

「んー?どうちたの?ありーねしやん?」

「グハアツ!」

「だ、団長!」

「あれー?かぎゆやしやん?」

「うぐうつ!」

「…そうなるだろうな。はあ…赤子の時からこの子の面倒を見るべきだった。」

しかし、この状態のベルは無敵じゃないか？

「ヘラ・ファミリア」が健在だったら、団長を含めて皆がベルを甘やかすだろうな。うむ、間違いない。

あ…いや、あのヘラがそれを許すわけがない。

メーテリアからベルを取り上げて、自分の神室で目一杯愛するのは間違いない。

当然そんなことはさせませんが、団長含む皆がそれを許さないだろう。

特にメーテリアが。

そして、あの狒々爺も口出ししてくるだろうな。

……ベルを巡って、オラリオ全体が戦争になっていたかもしれない。

「うわあ…あんな顔であの口調で言われたら、そりやダメージ受けるわ。」

「私の時もそうでした…（るーしゃんと言われた時、自制しなかったらかなりやばかった。攫って自室へこもって愛でたいと思ったくらいです）。」

「では、皆様。いつものどおり坊ちやまをお風呂に入れてください。」

「「はいー」」

はっ。

「何だと？この状態のベルを風呂にだど？何故、女性の貴様らが？」

「ううー…。ねむいー…。」

「坊ちやまが完全な眠りに落ちるまでに、キレイにしなればなりません。アルファイアさんが嫌なら彼女たちがやってくれます。」

…更にスキル強化を図るためか。

だからって、そこまでするのか…。

それにこいつら、妙に手慣れて…ああ、なるほど。

私に来るまでそうしていたということか。

仕方がない……。

「嫌とは言っていない。賑やかなのは好きではないが…、わかった。私も入ろう。」

「はい、皆さん。アルファイアさんと一緒に大浴場へ案内して下さい。」

「では、こちらでございます。」

「うむ。ベル、行こう。さあ、おいで。」

「あい、おかーしゃん！」

……やはり何度も思う。

私はこの子のところへ行くべきだった！

## 第176話 処女神、歡喜。

あー。今日は忙しかったな。

エイナくんの魔法の検証のため、そこら辺を歩いたり…。

一旦ホームへ帰って、アストレアとデメテル率いる女神連合の打ち合わせへ行ったり…。

疲れたー。

ベルくんに会って癒やされたい！

「ただいまー！あれ？セバスくん、メイくん？もう特訓終わったんだ？」

「ただいま。ベルはどこかしら？」

アストレア…。

先にエルフくんたちの心配をしなよ。

キミは彼女たちの主神だろ？

「もう既に自室で寝ておられます。」

「そっかあ…。ま、いいか。明日も会えるし！」

『セバス、メイ。今日は誰の番なの？』



『アルフィアお嬢様のみでございます。』

『そう…。さすがにアルフィアと一緒に寝るといふ強豪はいないのね。』

『さすがのアリーゼ嬢も割り込めませんでした。』

『でしようね。…アルフィアの病状はどうなの？』

『エイナ嬢の魔法で見たとこ、半分以上は治っているようです。』

『早いわね…。』

『坊ちやまの血でできた特効薬は、アルフィアお嬢様と同じ血が半分流れていますから、順応性が高いせいかと。』

『ああ、なるほど。まあ、完治するのはこっちにも都合がいいし、ベルも喜ぶだろうし。』

『そうでございませう。』

何を話しているんだろう？

疲れたな。

あ！報告しないとね！

「セバスくん、女神連合へ今日話をつけてきたよ！デメテルたちも、その情報は渡りに船で眷属にも伝えておくってさ。」

「それはようございませう。」

「後は、ギルドとファンクラブだけ…。ボク、ファンクラブ初耳だよ？」

「言えば、ヘステイア様は許可されたでしょうか？」

「……しないね。はあ、ここまで来たたら許可するしかないじゃないか！……ところで、グツズってどんなものなのさ？」

「それについては、ヘステイア様の部屋を別室ご用意しております。」

「は？」「え？何それ。」

ボク、この主神だよね？

そんな部屋を用意しているなんて聞いてないよ！

……どんな部屋なのさ？

その部屋はベルくんで満ちていた。

天界にあるボクのお気に入りの部屋より、素晴らしかった。

「……………ここは天国かい？」

「天界ではないけど、私達にとっては天国そのものね。」

そうだね！

「お気に召しましたでしょうか？」

「セバスクン！メイくん！君たちは最高だ！いいね！ひやつほーい！」

「むー、ずるいわ。ヘステイア。」

ボクはベルくんの主神だからね！

セバスくんとメイくんがいてよかったよ！

「へへーんだ。うわあ……ここまで精巧なものもあるんだ。あの記者会見での歓声の理由がようやくわかったよ。」

「ちよつと一個だけでも……。」

「貸すのはいいけど、あげないよ！」

「じゃあこのぬいぐるみを貸してちょうだ……。」

「アストレア様用のグッズを用意しましたが？」

「あら、そうなの？ああ、そうだったわ！お願いしていたわね。」

アストレア……キミの眷属のこと忘れてないかい？

ベルくんはボクの眷属だぞー！

5年前にキミがベルくんに既に会っていたとしてもだ！

でも、たったの数日ですごいなあ……。

「それにしても数日でここまで……。ローリエくんは才能があるね！」

「はい。それですが、ローリエさんは他派閥ですがここへの出入りを許可してもいいでしょうか？」

「うん？そうだね。記者会見ではいろいろと助けてもらったんだ。もちろん、いいに決

まってるさー！」

「ありがとうございます。ローリエさんも喜ぶでしょう。」

ヘルメスとこだけど、大丈夫だろう。

記者会見では本当に助かったね！

彼女もベルくんのハーレムに入っているんだらうけどな…。

今更仕方がない！

「へー、こんなまであるんだ。…ん？ベルくんの伝記？0巻って？」

「はい、坊ちやまが生まれてから半年前のことまであります。」

「え？待って。私のことも書いてあるの？」

「もちろんでございます。」

「へー！どれどれ…。……………アストレア。君、正義の看板下ろしなよ。」

これは駄目だろう…。

正義のハードルが低く感じるよ。

「だ、だって！あの時のベルには本当に世話になったんだもの！」

「だからと言って、神威全開でベルくんをいじめようとした村人を威嚇したり、ゼウスを谷底へ突き落とし2ヶ月で2人きりで過ごすのはやりすぎだと思わなかったのかい？」

「仕方がないわ。あの村人たちは本当にやる気だつもの。…………ゼウスの性格は貴女もよ

く知っているでしょう?」

「神威全開はさすがになあ…。まあ、終わったことは仕方がないね。ゼウスは…あれはダメだね。」

「同感だわ。」

ゼウスは困った子だなあ。

ベルくんを育てたのはいいいとしても、もうちよつと育てようがあつたんじやないのか?  
?

「ところで、ベルくんの強化具合はどうだい?」

「もうレベル7上位ですね。」

「ええっ!」

早い!早すぎるよ!

「ですが、まだ力に振り回されています。私とセバスの二人がかりで馴染ませ、鍛えていくところですよ。」

「もう、そこまで強化されたんだ…。」

「はい、【猛者】がレベル8になったのは想定内でしたが、坊ちやまがここまで早く来るとは想定外です。」

「早すぎるわ…。」

あの記者会見で、どれだけの人がベルくんに興味持ったんだ…。

心配になってきたよ。

「ですが、レベル8となった【猛者】の相手には丁度いいです。」

「はあ…あの記者会見はそういう狙いがあったけど、思った以上の結果を生んだね。」

「ええ。ですがその後にあストレア様の眷属の復活、そしてアルフィアお嬢様を過去から連れ出すとは流石に想定外でした。」

「そりゃ、想定外だろうね。天界にいる神々もビックリだろうね。」

「エレボスあたりは啞然としてそうね。いえ、腹抱えて大笑いしているかのどちらかね。」

そうだね！時を超えるだけでなく、その時代の子をこの時代へ連れてくるなんてね。

ボクたちどころが、大神でも想像できないじゃないか！

幸い、越えてきた時代では状況的に死んでいたことになっていたので、いいけど。

もし幸せな時を過ごしていたら、目も当てられないよ！

「ああ、ヘステイア様。神々で思い出しましたが、ファンクラブの出張店を出します。」

「出張店？」

「ええ、記者会見でオラリオ以外に坊ちやまのことが知れ渡りました。多くの神々や人々は坊ちやまに対して興味を持ったでしょう。そこで更に深めるためファンクラブ

出張店を回します。」

「そこまでするのかい？もう十分じゃないかい？」

やりすぎじゃないかい…？

このグッツを世界中に？ヤヴァイよ。それ。

世界中の女性、いや女神もベルくんにもロメロになっちゃおうよ。

この処女神のボクでもね！

「…と表向きはそうです。目的は元バカ主神を追い詰めるためです（他にも神アレスや神アポロンもあります）」

「あつ…。」

「そして、元主神ヘラに連絡をとるためでもあります。」

「うわあ…。」

そ、そこまでするのかい？

そりゃあ、あの二人はオラリオへ入れないんだけど…。

「坊っちゃんまの願いを叶えるのに、必要なことでございます。」

「む…、仕方がない。その辺りはメイクんとセバスくん任せよ！」

「かしこまりました。」

『いいの？ヘステイア。』

『今、ボクたちに報告しているのは既に準備を終えていることじゃない？じゃあ、もう任せたほうがいいき。ベルくんのためになるならね。』

『あの子たち、ベルを世界の王にしかねないわよ？』

『……………やりそうだね。まあ、その時はボクらが守ればいいき。キミも協力してくれるんだろ？』

『もちろんよ。はあ…フレイヤ騒動がここまで大きくなるとはね。』

『同感だよ…。』

はあ…。

ゼウスとヘラの眷属は、何て子たちを作ったんだ…。



## 第177話 栗鼠、考案。

むむむ…。

【アストレア・ファミリア】の皆様が協力してくれるのは嬉しいです。

特にルウ様は…このスキルが羨ましいですが強力ですね。

現在の戦力は次の通りでしょうか…。

レベル6は、バーチエ様、

レベル5は、ベル様、椿様、ルウ様、アリーゼ様、輝夜様、

レベル4は、アイシヤ様、ライラ様、

レベル3は、ダフネ様、カサンドラ様、アミッド様

レベル2は、私、命様、ヴェルフ様、ナーザ様、

レベル1は、春姫様、エイナ様

ですか。

メイ様、セバス様、アルフィア様は旗の守護、ローリエ様はファンクラブ運営のため、除外します。

【アポロン・ファミリア】や【イシユタル・ファミリア】が相手ならこのメンバーで十分

かもしれません。

ですが、相手は「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」です。

……まだまだ、戦力不足です。

せめてレベル6が1人、レベル4が数人ほしいところですね。

「フレイヤ・ファミリア」は突出とした個なので「猛者」を倒したとしても揺るがないでしょう。

ですが各個撃破しやすいです。

「ロキ・ファミリア」は私達に似た組織を重点に置いています。

なので三首領、特にフィン様を倒せば大きく戦力ダウンするはずですよ。

問題はフィン様を戦争遊戯の初っ端からどう脱落させるべきか……。

課題が山積みですよ！

せめて相手が弱体化してくればいいのですが……。

……弱体化？

コンコン

「あ、はい。どちら様でしょうか？」

「私だよ。リリルカ・アーデ。」

「愚者様ですか！どうぞ！」

ガチャ

「失礼する。む…戦争遊戯の戦略かね。」

「ええ、難題なので困っています。ところで、何の御用でしょうか？」

「例の魔道具が一段落ついたのですね。試しにやってみただ。」

「！そうですか！」

「ああ、それがこれさ。」

そういつて、愚者様は壁に光を当てました。

「これは……18階層を真上から見えた絵ですか？」

「いいや、絵ではないよ。”えいぞう”さ。」

「えいぞう、ですか？」

『『神の鏡』で見たようなものさ。』

「なっ！」

「あとは…これさ。もしもしファイア、聞こえているかい？」

『はい！聞こえているよー！』

「な、な…。」

「ほらリリくん、かけてみたまえ。ヘッドギアをかぶるような感覚さ。これを…口元あたり位置して…そうそう。」

「え、えーと？もしもし？」

『んー？あ！リリさん！』

「フ、ファイアさんですか？ええええつ！」

『すごいよねー！これ。』

コンコン

「リリさん、先程頂いた資料なんですが…。え？何をやっているのでしょうか？」

「エイナさん！…そうだ！エイナさん、あの壁に映っているえいぞうに魔法で見てくれないませんか！」

「え？壁に…絵？…やってみます。」

【開け、秘密の扉】

【鑑定】

「くっ…！何…多くの情報が入って…。…え？何で絵にステータスが？」

「…！何と…！！」

「成功です！エイナさん！ファイアさんはどこあたりにいるかわかります？」

『あたし？えーと、ここはね。』

「あ、ファイアさん待ってて下さい！」『う、うん？』

「ファイア…ファイア？リヴィラの南東あたりに…『異端児』の女性に、ハーピー？」

「フィアさん！フィアさんはリヴィラの南東あたりにいるのですか？」

『え？南東？ええと、北があつちだから…うん、北西に街が見えるよ。』

「やりました！これで、リリの理想的な指揮ができます！」

「…これは。すごいな、君の魔法は。」

「！フィアさん！フィアさんの北東あたりに〔ロキ・ファミリア〕のレベル4のクルスさんが近づいています！」

「!!聞こえました？離脱して下さい！」

『わかった！うわ、本当だ！こちらを見ている！やばっ、逃げるね！』

「了解です！ええと、愚者さん？これはどうやって切るんですか？」

「ああ、それはここさ。…そう、この切換がつかないだり切ったりするものさ。」

「なるほど！ありがとうございます！これはどのくらい…えいぞうが出せるんですか？」

「魔石を交換しながらすると、ずっとできるさ。」

「すごい…！本当にここからでも連絡できるんだ…！」

これで懸念していた点が解決できました！

エイナ様とリリ、そして愚者様がここ、「ヘステイア・ファミリア」ホームで指揮及び連絡ができます！

「これで、リリとエイナ様が戦場へ出ることはなくなりました。…むしろエイナ様には魔力を使うことを強いることになりませんが…。」

「そうだね。マジックポーションを30分置きに飲めばいいかな。」

「それなら、『ミアハ・ファミリア』のナーザくんに出してもらったらどうかな？ 彼女はまだダンジョンへ潜れる状況ではないだろう？」

「そうですね！…ミアハ様もいてもらいましょう。念のためです。」

「なるほど、そうだな。この魔道具はまだまだ改良の余地はあるからね。『神の鏡』と並行してやれば問題はないだろう。」

「…『ヘスティア・ファミリア』がだんだんと他の派閥より先へ行っていますね…。ギルドあたりが何か言ってる…。あつ。大丈夫ですね。」

「…そうだな。」「…そうですね。」

【ギルドの豚】もあの方たちの手の内ですからね…。

コンコン。

「どうですか？ リリさん、賢者の魔道具は？」

「あ、メイ様！ 実は…。」

先程あったことを説明しました。

「なるほど、素晴らしいです。まさに理想的な環境ができましたね。」

「ええ、そうです。あとはエイナさんの体調によりますが…。」

「大丈夫でしょう。前日の晩に特製ドリンクを飲めば全快します。」

「あ、はい。わかりました。」

「ああ、リリさん。ヘスティア様のところへ来ていただけませんか？話があるそうです。」

「私はこの魔道具を改良しよう。先程でいろいろと気になる点があつたのでね。」

「あ、わかりました。よろしくお願いします。」

「あ、はい。…あ、しまった。この資料について確認しに来たんだっけ…。」

「うーん…大丈夫かなあ…。」

「あの…ヘスティア様？」

「コンコン」

「あ、はい。入っていいよー。」

「失礼します…。春姫様ですか？」

「すまないね、こんな夜更けに。」

「いいえ（今日はリリと春姫様の番ではありませんからね）」

「ハスティア様、メイ様よりお呼びと伺いましたが、どうしましたでしょうか？」

「おまたせしました。」

「皆さん、揃っているようですね。」

「……（いきなり現れないで欲しいです）」

「あ、セバスクン！メイくん！あの件について、彼女たちへ説明してほしいんだけど……。」

「では、私から説明しましょう。」

メイ様から、エイナ様に発現したスキル【白兔眷属】について説明していただきました。

—

「何ですか！ベル様は本当に規格外です！ハスティア様、……ベル様は神様ではないですよね？」

「ヒューマンだよ……と言ってもここまで来ると、ボクもちよつとはつきりと断言できないよ……。」

でしようね！

半年で第一級冒険者に、魅了を持ち、時を越えることができ、そして眷属を作ること



ができる?」

もはや、神じゃないですか!

「ベル様の眷属……ですか(羨ましいです!春姫も欲しいです!)」

「それで……リリたちに何の御用でしょうか?」

「既におわかりかもしれませんが、このスキルは坊ちやまの血を飲むことにより発現できるか、を検証したいのです。今はエイナ嬢だけなのか、または単に血を飲むだけで発現するのかを。それにより特効薬の運用が変わるかもしれません。」

「それで、貴女たちに飲んでいただき試したいのです。ただ、先程言ったデメリットがあります。それがそれを覚悟しておいて下さい。」

「デメリットは確かに怖いですが、ベル様が死なれる方がもっと怖いです!リリは飲みます!」

「春姫もです!ベル様のお側にいたいのです。そのために春姫はもっと強くならなければなりません!そのため覚悟はできております!」

「君たち……。はあ……。」

「わかりました。ではこのコップを飲んでもらいます。エイナ嬢が飲んだ特効薬に入った血の割合と同じ内容です。」

「頂戴します。」

グビツ…ゴクゴク……。

……? 何ともありませんね?

「ではヘスティア様、更新をお願いします。」

「はあ……、君たちがそんな覚悟をしていたら断れないじゃないか…(ボクが神であることが恨めしいよ)。」

「いかがですかな?」

「ちよつと待つて……。うん、発現しているよ。内容はアドバイザーさんと同じだね。」

!! やりました! これで、リリはベル様の眷属です!

いえ、ベル様と呼ぶよりご主人様と呼んだほうがいいですね。

「やはりですか。春姫さんも続いております。」

「わかったよ。」

「うん……、春姫くんも同じく発現しているね。」

「なるほど。となると、エイナさんだけの固有スキルではないということですね。」

「やりました！春姫はこれでベル様の眷属になりました！」

「こらー！君たちはボクの眷属だぞー！」

「も、申し訳ございません！」

「気持ちわかります。ええ、分かりますとも。」

「となると……ベル様の血はかなりの劇物となりますね。」

「となると、別方面から見る必要がありますね。」

「ええ、そろそろですね。」

「「え？」」

「別方面……？」

「コンコン」

「？誰だい？」

「私よ、ヘステイア。みんなを連れてきたわ。」

「私がお呼びいたしました。どうぞ神アストレア、皆様方。」

「何故、アストレア様たちを？」

「ガチャ」

「お邪魔するわね。どうしたの？セバス。私とみんなに用があるというの？」

「はい、この夜中に来ていただきありがとうございます。説明いたします。」

## 第178話 栗鼠、疑問。

「……ベルはヒューマンよね？」

「神様と言われても信じますねえ。」

「何だよ……そりゃ。あの兎、どんだけ規格外なんだよ。」

「(ずるいです……何故彼女たちが……)」

「……(ベルさん、本当にヒューマンですか?)」

「……ずるいわ。」

「「は？」」

え？何て言いました？

「私も神の座を捨てて、ベルの眷属になりたい！」

「こらー！アストレア！君はれっきとした神だぞ……捨てるならボクも捨てたいさ  
！」

アストレア様……ヘステイア様も。

もしベル様が神様なら、この世界はマシになるでしょうね。

「……それであたしたちにその血を飲ませて検証するってか？」

「その通りです。デメリットが嫌なら結構でございますよ。」

「「飲みます！」」

「え、えーと私は…『ギロリ』：飲ませていただきます。」

「へっ！断れねえじゃねえか。あたしたちはあの兎によってこの時代へ連れてこられ、生き返ったんだ。この命はあの兎にある。なら、この血を飲むのは望むところだぜ。」

ライラ様、本当によろしいのですか？

「よろしいのですか？他の方はともかく、ライラ様は…。しかも、デメリットが大きいですよ？」

「それはその時さ。早熟するんだろ？むしろ、あの「勇者」サマに追いつける絶好のチャンスじゃねえか。あの「勇者」サマを部下にするのも面白えじゃねえか。」

この方…フィン様を……。

「はあ…：仕方がないわ。みんな、いいのね？特にルウは。」

「アストレア様。私はベルの力になると決めました。ベルが死んだ時は…考えます。」  
(後を追う気ね…。はあ…：困った子だわ、ベルは。)

「ああ、いいさ。あたしはお前らと違い、あの兎にメロメロじゃねえからな。」

「悪かったわね！」

「ちよ、アストレア様のことじゃねえよ！」

「……………（台詞を取られた）。」「」

アストレア様のイメージが崩れました…。

グビ…ゴクゴク…。

「…ベルの血つて無味なの？」

「無味無臭でございますねえ。」

「…？何ともねえな？」

「（お願いします。スキルが発現して下さい。）」

「（丁度喉が乾いていたところです。）」

「ステータスを更新するわ、みんな。」

「どうだい？アストレア。」

「アリーゼと輝夜、ルウは発現したわ……。」「やったー！」「……………けど、ライラとセシルにはなかったわ。セバス、メイ、彼女たちはベルの血を飲んだのよね？」

ルウ様はわかりますが、アリーゼ様も輝夜様も発現しましたか。

「はい、アストレア様。それぞれ同じ量で同じ薄さです。」

「…どういう事なの？」

「なるほど。これで大体は掴めましたな。」

「ええ、そうですね。単に飲むだけでは発現しませんね。」

「どういう…事でしようか？」

「エイナさん、リリさん、春姫さんは種族が違います。それでも発現しました。」

「そして、同じファミリアでも発現しました。」

「【アストレア・ファミリア】のアリーゼさんと輝夜さん、ルウさんは発現しました。ですが、ライラさんとセシルさんは飲んでも発現しませんでした。その違いは坊ちやまへの好意が高いことです。」

「【！】」

「つまり、坊ちやまへの好意がかなり高い人には発現するということです。」

「エイナ嬢のご家族…死の病の患者が坊ちやまと会わずに、特效薬を飲めば問題ありませんとのことです。」

好意度がある程度高くないと、発現しないということですね。

リリのベル様への想いが証明されたようで、嬉しいです！

「これで、リオンに追いつけるわね！」

「今日やられたことは絶対に忘れんからな。」

「貴女方が悪いでしょう…。」

「そうでしょうか？ 差はそのまま…いえ更につけられると思いますよ。」

「え？」

「ああ、そうでしたね。坊ちやまの強さの秘密とルウ嬢の秘密を教えましょう。」

「…よろしいのでしょうか？」

「ええ、リリさん。彼女たちは坊ちやまに返しきれない恩があります。それがあふ限り、密告も裏切りもないでしょう。まあ、あつたとしたら塵にしますが。」

「ひっ！」

「それ以前に、私が許さないけどね！」

まあ、「アストレア・ファミリア」の皆様ならベル様を裏切りませんでしょう。

特にアストレア様がいる限り。

そしてセバス様とメイ様は、ベル様の強さの秘密とルウさんのスキルを教えました。

「…もう、ベルは神でいいのじゃないかしら？」

「同感でございます。というか、お前さつさと若様に手を出せ！」



「…手を出しても無駄です。」

「?どういう意味だ?」

ええ、そうですね。

まさか、未精通とは。まあ、納得はできません。

いろいろとボディタッチをしても、恥ずかしがるだけで欲情のようなものはありませんでしたからね。

……ベル様は本当にヒューマンですよね?

「ああ、そうでしたね。坊ちやまはまだ未精通です。」

「は?…若様は14歳ですよね?何でまだ来ていないのだ…。これでは生殺しではないか。」

うわあ…ぶっちゃけましたよ。

『手出す気満々ですね…。』

『精通されていますしたら、既にアイシヤ様が手を出していたでしょうね…。』

「何を言っているのです?ゴジョウノ家の姫君が経験あるわけないでしょう。まだ処女でしょうが。」

「!?…その名は捨てたといっただはずだ。二度と出さないでもらいたい。」

「では、何故ゴジョウノと名乗っているのです?春姫さんと違い、『朝廷』の内情を分かっ

てなお、名乗っている自体が未練あるのではないですか？」

『『朝廷』…？春姫さん、ご存知ですか？』

『『朝廷』でございますか？お父様が働いているところですか知りません…。』

「お前、辛辣だな…。勘違いしないでもらいたい、名乗っているのは私の罪の証だ。…これ以上は言えん。」

「『輝夜』…。」

何か事情があるようです。ですが、もう首をつっこみませんよ！

これ以上のトラブルは勘弁して欲しいです！

「これで、ベル君の血はわかったけど何故発現できたんだろう？」

「これは私たちの仮説段階ですが、恐らく発展アビリティの【魅了】による副次作用かと思えます。」

あのアビリティですか…。

「フレイヤやイシユタルの影響ということ？」

「それだけではありません。坊ちやまはずつと家族を求めてきました。その想いが【魅了】と結びつき、例のスキルが発現したのでしょうか。」



「あ、はい。ゴジヨウノ・輝夜様？何の御用でしょうか？」

「ゴジヨウノはいらん、輝夜と呼べ。…春姫と呼んでもよろしいのでしょうか？」

「あ、はい。輝夜様。」

「様はいらんと言つただろうに…。まあ、いい。春姫、何故お前はサンジヨウノから追いつ出されたのだ？」

「ええと…それは。」

「…戦争遊戯が終わつた後でいい。今はそれどころではないですからねえ。同じジヨウノを背負う者として頑張りましょう。」

「ジヨウノ…でございませうか？」

「呆れたな…何も知らぬのだな。それさえも教えてもらつてないのか？」

「も、申し訳ございません…。」

「いや、それはこちらが悪い。ただ、言えるのは…私とお前は遠い親戚にあたる。」

「え!?そ、そうなのでございませうか？」

「ああ、そうだ。まあ、その、何だ。困つたことがあれば相談にしに来て下さいな。」

「はい！輝夜お姉様！」

「(…お姉様か、悪くないな)もう夜も遅いです。そろそろ床に就きなさい。」

「はい！これからもよろしくお願い致します。では、お休みなさいませ。」

「はい、お休みなさいませ。」

ペコ、トコトコ…。

「……文字通りの箱入り娘なのだな。だが、腑に落ちん。何故サンジヨウノはあの娘を無事に追い出し、今も生きているのだ？……あのヤマト・命と共に色々と聞きたいことがあるな。やれやれ復活したばかりなのに、守らなければならぬものが増えましたねえ（だが、悪くありません）。」

## 第179話 鍛冶神、呆然。

「ほら、椿。行くわよ。」

「ああ、分かつとるよ。主神様」

所用があつたから、「ヘステイア・ファミリア」ホームへ行くのが遅くなつたわね。椿の不祥事についてヘステイアへ謝らないと…。

神友だからといっても、親しき仲にも礼儀ありだからね。

「うーむ…【白兔の脚】の大剣は10本あればいいかのう？」

「店にある大剣全てでもいいわ。フレイヤに落とすし前をつけてもらわないとね。」

「（まだ怒つとるのう）わかつとるよ、主神様。」

これでも足りないくらいよ。

でも…フレイヤが痲癩起こすなんて、天界でもなかつたわよね？

それほどあの子…ベル・クラネルに執心というわけね。

「しかし、旗争奪戦か。懐かしいのう。」

「？ああ、そうね。私たち神にとつてはほんの少し前だものね。」

「本来なら「ヘステイア・ファミリア」の敗北確定なのだが、あの執事とメイドがおる限

りはな。」

「ええ、そうね。まさか、彼らの元所属していたファミリアがよくやっていたのを引くなんて…。」

「その前に、ポーカーの全チエンジでファイブカードを引くとは驚いたがな。」

「ええ、神でも無理よ。あれ。」

「その他にもいろいろとありえないことを成し遂げたりな。」

「まさか、それ以上は…‥‥ないと言い切れないわね。」

「じゃろう?」

ベル・クラネルはオラリオへ来て、たったの半年であり得ないことを成し遂げたものね。

何故かしら?まだあるような気がしてならないわ。

行くのが怖くなってきたわ…。

---

「さて、着いたわね。」

「うむ、ではノックするぞ。」

コンコン

「はい……。あ、ヘファイストス様に椿様！」

「おお、すまんが神ヘステイアに面会をお願いしたいのじやが。」

「わかりました。お入り下さい。ヘステイア様を呼んでまいります。」

バタバタ

「相も変わらず、居心地がいいのう。ここは。」

「そうね。ヘステイアらしい暖かさがあるわ。」

あーら、ヴェルフだわ。

……後ろの娘は誰？

「ああ、ヘファイストス様。来ましたか。椿、遅かったな。」

「お主らと違って、暇ではないんじゃないや！……ところでそっちの娘は誰じや？ヴェル吉のコレか？」

「ば、馬鹿！違えよ！違いますからね！ヘファイストス様！椿！誤解するようなことを言うな！……こいつはアストレア様の眷属だ！」

「……嘘は言っていないわね。ヘファイストスよ。よろしく。」

「は、はい！【アストレア・ファミア】のセシルです！レベル1です。ヴェルフ師匠より鍛冶技術を教わっています！」

「師匠じやと？お主、弟子を取るようになったのか。生意気じやな。」



「…押しかけられたんだよ。【薫風】の武器を打ち直すためにな。」  
「へえ。そうなの。ふーん。」

「あの…ヘファイストス様。俺はヘファイストス様一筋ですからね！」

「!もう、やだ!ヴェルフったら!」

「何故、ここで言うのだ…。空気読まんかい!」

ふふふふ。

あら…、アストレア?

何故?ここに…ああ、一旦居候ってことね。

え!?待って、後ろの娘たちは…。

「あら、ヘファイストスじゃない。ああ、セシルのことを言うのを忘れていたわ。」

「あら!椿じゃない!元気だった?」

「おや、椿ではありませんか。数日…いや5年ぶりですね。」

「おお!久し…ぶりじゃな?はて、手前は夢でも見とるんじゃないだろうか?」

【紅の正花】に【大和竜胆】!?!生きていたの!?

いえ…5年前に死んだはず…。

「……………どうということ?アストレア。」

「色々あつてね…どう説明したらいいのかしら?」

「うむ、夢じやな。5年前にぼっくり逝きおつて！喋り相手に困ったぞ、【大和竜胆】。」  
「それはすみませんでしたねえ。5年前より今日連れてこられて、復活したばかりです  
ので。」

嘘は…言つてない…。

冗談でしょ？誰よ!?

へステイアはできないはず！

「ははははっ！お主でもそんな冗談を言うのじやな！」

「……嘘は言つてないわ。椿。」

「夢だからのう。こう、ほっぺをつねれば……痛いな。…本物か？」

「そうでございますよ。【単眼の巨師】。」

「……主神様よ、どうなつておるのだ？」

私が聞きたいわよ！

ありえない…絶対にありえないわよ！

「……何が起こつたのか説明してくれる？アストレア。」

「それでしたら、私が説明いたしましょう。神へファイストス。」

「メイ……。もしかして、ベル・クラネル関連かしら？」

「ご明察の通りでございます。」

冗談でしょ…。

冗談と言つてほしいわ…。

「頭が痛くなつてきたわ…。水くれるかしら？」

「こちらでございます。ヘステイア様は間もなく来られます。」

「そう……。【紅の正花】も？」

「ええ！お久しぶりです！ヘファイストス様！」

「……このテンシヨンの高さ。アリーゼ…なのだな？」

「あら！椿、忘れたの？この完璧美少女を！」

「……主神様よ。こやつは間違いなくアリーゼじゃ。」

「……でしようね。」

間違いないわね…。

はあ……。

「おんやあ？久しぶりじゃねえか、【単眼の巨師】。」

「……ここは冥府か？【狡鼠】までも……。」

「残念がら、現世よ……。」

冥府と言えばそう思いたいわね。

けど、現実よね…。

# 第180話 単眼師、我儘 / 鍛冶神、我儘。

む、ヘステイア様か。

「へフアイストス！この夜中にどうしたんだい？」

「ねえ…ヘステイア。いえ、その前に、うちの椿が【白兔の脚】と【疾風】が討ち取った  
モンスタードロップアイテムを掠め取ったことについて謝罪します。」

そうじゃった。

こいつらのせいで、すっかり忘れておったわ。

「申し訳ございませんでした。神ヘステイア。」

「ふえ？あー、そのことかあ。うん、謝罪は受け取ったよ。」

「あら！椿、駄目じゃない！」

「戦闘狂だけでなく泥棒もやるようになったのですか？同郷の者としてなんと嘆かわしいことを…。」

「掠め取るなんてなあ…。どんなものを盗ったんだよ？」

「こやつらのこの憎まれ口は…間違いないようじゃな。」

だが、やはり夢だと信じたい。

こやつらは5年前に死んだはずなのだからな。

ほつぺをつねつてもう一度確認しようか。

「……やはり夢じゃな。…いてて！夢ではない…。どうなつておるのだ？」

「……椿がごめんなさい、ヘステイア。その代わり椿がそちらの要望の通り武器をうつてくれるわ。」

「あら！それなら丁度よかつたわね！」

「なら遠慮なくお願いいたしましょうか。」

「あたしの分も頼むぜえ。」

この厚かましきは、間違いないようじゃな。

本当に5年前から来て生き返つたのじゃな。

くそつ！不意打ちはあんまりじゃぞ。

「……その前に、彼女たちのことを説明してくれるかしら？……一言言つてもいいかしら？こんなの絶対にあるえないわよ！」

「では、説明いたします。」

誰じゃ！こんなのあり得ないのを引き起こした規格外は……あ。

いたわ…。

やはり【白兔の脚】……いやベル・クラネルか。

ヴェル吉が羨ましいのう。

奴と直接契約を結んだからな。

こんなことを仕出かすとは思わんかったわ！

「……ヘステイア。」

「なんだい？ヘフアイストス。」

「ベル・クラネルがヒューマンに扮した神ということとは……、ないよね？」

「当たり前じゃないか！……と言いたいけど、ここんどこボクも自信がないよ……。」

そう言われても信じるな。

手前でも未だにこやつらを目の前にしても、信じられん……。

「時を遡って連れてくるなんて……私達でも神力を全開まで使ってもできないわよ！大神クロノスでもできるかわからないくらいよ！」

「……本物じゃな？」

「もちろんでございますよ。」

「この大戯け共が……勝手に死によつて……。」

「それで、武器を打つてくれるかしら？」

ああ、打つてやるとも！

ただし！これは主神様でも譲れん。

手前の…我儘だ！

「…もちろんじゃ。ただし条件が2つある。」

「樁？何を…。」

「1つ、先程のお詫びではない。お主らの復活祝いじゃ！」

「おおー！太っ腹だぜ！」

「2つ、そのセシルに相槌させろ。お主らの末妹じゃろ？」

「そうですね。セシル、お願いしていいですか？」

「は、はい！こ、光栄です！」

そやつに相槌させれば、こやつらも気合入るじやろうな。

ヴェル吉の弟子とやらになったなら、多少は技術あるじやろう。

ついでにヴェル吉も鍛えさせてやる！

「主神様よ。この2つは譲れん。」

「はあ……、樁。わかったわ。まあ、あり得ないことを目にしたら仕方がないわ…。」

『彼女たちだけじゃないんだけど、まだいるんだよね…。』

よし…っ！





「あのー、ヘファイストス…。」

「ああ、ヘステティア。椿がごめんなさいね。はあ、彼女たちを5年前から連れてきた上に復活させるなんてね…。天界にいる神々は知っているのかしら…?」

「えーと…。」

「?ヘステティア、どうしたの?」

「そのー…、彼女たちだけじゃないんだ…。」

「……他に誰を連れてきたのかしら?すごく嫌な予感がするわ…。」

「ガネーシャ・ファミリア」の「象神の歌」アーディ・ヴァルマを連れてきたこと、そして、7年前の大抗争で「ヘラ・ファミリア」の「静寂」アルフィアを連れてきた上、彼女がベル・クラネルの血の繋がった肉親であり、伯母であることを知った。

呆れたわ…。

ベル・クラネルが故意ではないことはわかってる。

「……………椿のセリフじゃないけど、夢ではないよね?」

「残念だけど、現実だよ……………」

【静寂】を連れてくるのはやりすぎじゃない?

【静寂】と【暴食】がああいうことを何故したかはわかっているわ。

けど、その被害は大きかった。

「アストレア…、【静寂】のやってきたことはわかっているはずよね？たとえ、ベル・クラネルの伯母でもその罪は重いわよ。」

「わかっているわ。でもそのままでは、ベルは苦しみ続けるわ。私はそれを放っておけない。どうする？へファイストス。貴女はそれをベルに糾弾し、ベルの前でアルフィアを裁く？」

正義を司る貴女がそれを言うの？

いや、貴女だからこそそれを言うのね…。

でもね、アストレア。

「私をバカにしないでくれる？私はベル・クラネルがレベルーのときから見ている。彼の人柄はよく知っているわ。…【静寂】のやったことは確かに許されることではないけど、ベル・クラネルの側に居続けるなら、私は何も言わないわ。特に、ヘステイアの裁きの後にはね。」

アストレアの言う通り、何故7年前にベル・クラネルのところへ行かなかったの!?  
けど、ヘステイアの裁きを受けた彼女を責められないわ。

彼女は彼女なりの理由があつたのだから。

「…ごめんよ。へファイストス。」

「……謝らないですよ。はあ、ベル・クラネルはそうなのね。あの子が下界の、救界の”要”なのね。」

「ええ、私達はそう確信している。……皮肉なことにね。」

「ここ半年の彼の活躍を見ればね。」

ヘルメスはもつと前から彼に注目してたようだけど、そういうことだったのね。

なら、私も腹を決めましょう。

椿がああいう我儘を通すなら、私も我儘を言わせてもらおうわ。

「なら、〔ヘファイストス・ファミリア〕は〔アストレア・ファミリア〕と同じく、〔ヘステイア・ファミリア〕の傘下に入ります。……いいわね？ヘステイア。」

「へ、ヘファイストス！いいのかい？」

「私も毒されてしまったわ。貴女たちだけでなくベル・クラネルからもね。はあ……時を越えるなんて冗談じゃないわよ……。」

「そうだよね……。下界の子供たちの力を改めて知ったよ……。」

（ゼウスはそれを知って、わざと育児放棄したのかしら？だとしても、許さないわ……。）

『ヘステイア……。アストレアが何か怖いんだけど？』

『ん？あー……多分。ゼウスに対して許さないと思っただらうなあ。』

『確かに、ゼウスのやったことは許されないわね……。ああヘステイア、女神連合は知って

「んんん」

『んあ？あー、今日会ってきたよ。』

『そう、もう準備はできているということね。後は…ギルドね。』

『あー、それね…。』

ロイマン…自業自得ね。

彼等の逆鱗に触れるなんて、愚かなことをしたわね。

まあ、マシになるなら問題ないわ。

……でも、やりすぎじゃない？

『はあ……ベル・クラネルも規格外だけど、彼等も規格外ね。いい主従関係ね、ヘスティア。』

『嫌味かい…？へファイストス。』

『誉めてるのよ。ロキとフレイヤが哀れに思ってきたわ…。』

『ボクのことにも気遣ってくれないかな!?!』

知らないわよ。

ベル・クラネルを眷属にしたのは貴女でしょうに。

女神連合…ギルド…ファンクラブを掌中に収めているなんて。

とんでもない魔導人形たちを作ったわね、彼等は。さて、椿はどんな武器を打つでしょうね。

あの様子じゃ、かなり気合の入った武器になりそうね。

## 第181話 象神杖、頭痛。

アーデイがああいうことを言い出すとはな。

私としては数年「ガネーシャ・ファミリア」に居てほしかったのがな。

まあ、オラリオから出るわけではないが。

…複雑だ。

「ねえねえ！お姉ちゃん、早く行こう！」

「待てアーデイ、ちゃんとフードかぶれ。…よし、お前はまだ死んだことになっているのだから。」

「あ、うん…。ねえ、何で公開しちゃダメなの？」

「混乱を招くからだ。…お前が死んだことでショックを受けた一般市民も多くいたんだ。」

「あ…、そうか。」

お前はある意味、オラリオで注目されていたからな。

あのスリにとつてもな…。

「ヘステイアのところへお礼を言うのが遅くなったな！まあ、皆のあの様子では仕方が

なかったな！」

「ああ、そうだな…。昨日はずつと宴会で、全員が泣き叫ぶとは思わなかったが。」

「でも…。ジャフ、ラーザ、カインがないのが寂しいなあ。」

特攻のことか…。

あれは誰にも止められなかったのだ。

アーデイがその場にいたとしても不可能だっただろう。

「…：あいつらはお前と違い、オラリオのために散っていったのだ。ベル・クラネルでも

お前と同じ奇跡を起こすのは不可能だろう。…：変な気を起こすなよ、アーデイ。」

「うん…：わかった。早くベルくんのところへ行こう！」

やれやれ。

「はあ…：アーデイが戻ってきたのは嬉しいが、心臓に悪すぎる。」

「同感だな！…：だが、そのおかげでシャクテイ。お前はランクアップできなかったではないか

！」

「…：アーデイのことでランクアップが止まっていたのはわかっていた。だが、どうし

ようもなかった。そして、アーデイが戻ってきた途端にレベル6へ上がるとはな。はあ

…：私の心はそこまで弱かったのか。」

「…：シャクテイ、自分を責めるな。それだけお前はアーデイを愛していたのだ。…：俺は

ベル・クラネルに感謝しても感謝し足りない。アーデイを救って連れて帰った上、お前の止まった時を動かしたのだからな。」

…そうだな。だが、あんな奇跡を起こすとはな。

リオンが目をかけるのも…いや惚れるのも仕方がないな。

…何故だろう？まだ胸騒ぎがするのは気のせいか？

「ガネーシャ…。なんか嫌な予感がするのだが、これで終わりではないような気がする。」

「……俺はガネーシャだ！」

「おい、誤魔化すな。」

「ここだね！ああ！ベルくんに会って何て言おうかな？」

「…お前はこう言っただろうが。「名前教えて！付き合って！結婚しよう！ううん、子供作ろう！」と。」

「うわあああ！やめてよ、お姉ちゃん！だって…一目惚れだったもん。」

「はあ…。」

あの時にアーデイがいたことでも信じられないのに、あの発言だからな。

…ベル・クラネルが不満ではない。



むしろ…このアーデイでいいのか？

もう少し手元に置いて、教育してからの方がいいと思うんだが。

「アーデイに嫁のもらい先ができたのは複雑だな！シャクテイ！お前も歳…ガハアツ  
！」

「何か言ったか？ガネーシャ？ん？」

「ごめんなさいすみません許してください」

「よ、嫁…へへへ…」

ガネーシャめ。き、気にしていることを…。

さて、入るか。

コンコン

「あ、はい。あ、【ガネーシャ・ファミア】の皆様方。」

「ああ、先日の件でベル・クラネルにお礼がしたいのだが。」

「あ、分かりました。こちらへどうぞ。」

「はい！お邪魔します！私、アーデイ・ヴァルマと言います！お姉さんは？」

「あ、私はサンジョウノ・春姫と申します。」

「よろしくね！歳はいくつですか？」

「16歳でございますが…？」

「あ、私より1個上だ。春姫さん、よろしくね！」

「あ、はい！」

(…15歳か。間違つてはないが、本来なら22歳だろうが。お前は。)

「あら！アーデイじゃない！貴女もベルに救われた口かしら？」

「へ？アーリーゼ！」

何だと!?

「おやおや、ヴァルマ姉妹でございますか。…アーデイも若様に救われましたか。」

「よう、そつちとしては5年ぶりか？」

……………

私は夢でも見ているのだろうか？

アーリーゼ、輝夜やライラが目の前に生きているのだが？

「ガネーシャ…、今は夢ではないのだな？」

「……あり得んことだが、あり得ているな！夢ではないことは、昨日の宴会で全員がお互いのほっぺをつねって証明しただろう！泣きながらな！」

「勘弁してくれ……。」

昨日の宴会は大変だった。

アーデイを知っている者が、アーデイを見てお互いほっぺをつねって痛みを感じ、夢

でないことに喜びずつと泣いていたな。

泣いて、笑って、ほっぺをつねって……の繰り返しだった。

「あら？ガネーシャ、どうしたの？」

「うむ！ヘステシアとベル・クラネルにお礼を言おうと思つてな！……彼女たちもか？」

「……ええ。貴方のあの時の気持ちが変わったわ。」

「そうか！わかつてくれて嬉しいぞ！」

……また、ベル・クラネルか。

あの少年、本気で尋問したくなつたな。

「シヤクテイ？どうしたのですか？」

「ああ、リオンか。あり得ないことが連続で起きて頭痛がな。」

「……気持ちはわかります。ええ。」

理解してくれる同志がいて、嬉しいぞ。

「何だ、騒がしいぞ。小娘共。」

!?

「せ、【静寂】!?!何故、貴様がここにいる！」

「シ、シヤクテイ！落ち着いて下さい！彼女は敵ではありません！」

「落ち着けだ?!?!ああ！もう、どういふことか説明しろ！リオン！」

「分かりました！分かりましたから、落ち着いて下さい！」

そして、私はベル・クラネルのスキルによるものであることを知った。

アーデイを連れ帰ってきた翌日にアリーゼ達を5年前の惨劇から遺体を持ち帰り、愚者の魔法によってベル・クラネルの運によって復活したことも。

続いて、【静寂】を7年前から連れて帰り、彼女がベル・クラネルと血が繋がっている伯母であることを知った。

## 第182話 象神、従属。

……すごいな！ベル・クラネルは！

ここまでのことを引き起こすとは！

むー！シャクティが頭を抱え、胃を抑えているな！

「…………頭痛薬と胃薬をくれないか？リオン。」

「シャクティ…………。」

…………気持ちはわかるゾウ！

応接室で、ヘステイアとベル・クラネルを待つこととなった。

その間に、アーデイとシャクティと「アストレア・ファミリア」と話している。

特に5年前のことを。

「そうか…ジャガーノートという化け物に…。」

「ええ。ダンジョンはむやみに破壊すべきではありません。」

「リオン、ごめんね。私がああの自爆攻撃を避けていたら、助けにいけたかもしれないのに。」

「アーデイ、あの化け物には何人いても同じだ。」

「そうだぜ。シヤクテイがいてもフィンがいても同じだったと思うぜ。」

「リオン、ネーゼたちの…墓へ今度連れてつてくれる？」

「私からも頼む。」

「はい！行きましょう。」

アーデイ、シヤクテイ、そして【アストレア・ファミリア】の【紅の正花】【大和竜胆】  
【狡鼠】【疾風】…いや【薫風】か。

この光景を再び目にするとはな。

「【ガネーシャ・ファミリア】の皆様。ハーブティーでございます。」

「ああ、ありがとう…（どっかで見たとあるな…だが、先程の事実と比べたらもうどう  
でもいい）。」

「ぎゃあああああ！さ、さ、さ、【最強侍従】メイ！な、な、何でここにいる！」

「な!? 【ゼウス・ファミリア】のか!?（そうだった！何故!?）」

「ガネーシャ様？どうしたの？そんなに取り乱して。」

（ああ…、そうだったわね。ガネーシャは彼等の存在を知っていたわね。）

そんな馬鹿な！

何故、【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】が解放されているのだ！

「何故？言わなくてもわかるでしょう？役立たずの象の神。」

「ぐはあつ！こ、この感じは間違いない！何故だ！お前は封印されていたはずだ！」

「【ガネーシャ・ファミリア】の皆様方、こちらへお座りくださいませ。」

「あ、ああ。ありがとう（こいつも見たことあるな…もう勘弁してくれ）。」

「ありがとう！お兄さん！」

「む、すまん。……!?……シャクテイ、我々は夢を見ているに違いない。ああ、違いないともー！」

馬鹿な！「ヘラ・ファミリア」の「最恐執事」もだと!?

き、き、緊急事態だ！

「五月蠅いですよ。その仮面を割って別の仮面にすり替えて差し上げましょうか？」  
「すみませんごめんなさいそれだけは許してください。」

駄目だ…。

オラリオ、終わった…。

土下座するから、仮面を割らないで下さい。

そして、メイとセバスから事の次第を聞かせてもらった。

そうだったのか…。

ベル・クラネルは「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の両方の直系を待つ者だったのか。

だから、彼等が解放されているのか。

それでベル・クラネルに絶対の忠誠を？

……………。

この戦争遊戯、もう勝っているじゃないか!?

この二人が手を組んだらそれだけで確定だゾウ!

「（もう頭と胃が痛い…）なるほどな…。アストレア様の言う通りそうだとしても、【静寂】…お前がやったことは許されることじゃない。だが、近しい者を亡くした絶望感、喪失感はわかる。神ヘステイアの裁きを受けた後、貴女の甥の側にいるなら私は何も言わない、いや言えるわけがない!」

「お姉ちゃん…。」

「……闇派閥が子供を利用した自爆攻撃は止めるべきだった。すまない。」

「許さんと言いたいが、アーデイを連れてきた以上私には言う資格がない。貴女の甥、ベル・クラネルに感謝しろ。」

「ああ…。」

「あ、あの！アルフィアさん！」



「…何だ。」

「甥っ子さんを私に下さい！」

「「ハア!?!」」

……………。

ホワツト?

ヒエツ…:空気が…:寒い!

「…何だと?」

「ま、待て、【静寂】!アーデイ!それは早すぎると言っただろう!」

「でも、ベルくんの唯一の血縁者だよね?なら、先にアルフィアさんに言ったほうがいいと思っただけだ。」

「…………ふむ。わかってるな、小娘。」

「「そこで納得するの!?!」」

「それで…:【ヘステイア・ファミリア】へ改宗したいんだ!」

「「ハア!?!」」

「ま、待て!アーデイ!俺は聞いていないゾウ!」

改宗だと!?!

俺は聞いてないゾウ!

「今は駄目ですね。」

「ええ、そうですね。」

おおっ！思わぬ援護が来たゾウ！

「え!?ど、どうしてですか!?!」

「アーデイ嬢、貴女は死んだことになっています。今はまだ戦争遊戯さえ始まっていません。」

「今、貴女が【ヘスティア・ファミリア】へ入団すると貴女が生きていることに注目され、戦争遊戯が延期か中止になってしまう可能性が高いです。」

「…そうだな。そうなるな。」

「なので、貴女が改宗するなら戦争遊戯が終わってからのの方がよいかと思います。」

「…はい、わかりました。」

む、むう…。

「アーデイ・ヴァルマ。」

「は、はい!」

「貴女は坊ちやまにより、7年前の大抗争から現代へ連れてこられました。その恩だけで改宗をしたいのでしょうか?」

「いいえ!違います!私は…ベルくん、ベル・クラネルに完全に惚れました!7年前の大

抗争で生き延びていても、ベルくんに出たら絶対に一目惚れしています！私…アー  
デイ・ヴァルマは、ベル・クラネルに全てを捧げます！」

「「えええっ!?!」」

「なるほど。神アストレア、神ガネーシャ、如何でしょうか？」

「嘘は言っていないわ…（ああ…、また増えたわ…）」

「駄目だ！駄目だ！アーデイ、俺は許さん！」

「黙りなさい「ハイッ！」。そんなことは聞いていません、嘘か本当かを聞いています。  
切り落としますよ？」

（（うわあ…神に対して切り落とすって…。））

「（ヒイヒイッ！だが、俺は負けんゾウ！）嘘は言ってません！だ、だが、アーデイ！  
俺に対して相談はないゾウ！」

「だって言ったら反対するじゃない、ガネーシャ様は。」

「当たり前だ！せ、せめて今すぐでなくて、数年かけて…。」

「ごめん、ガネーシャ様。私は…ベルくんのが本当に好きになったんだ。今すぐで  
も彼の側にいたいんだ！」

「（嘘は言っていない）………そうか。ただし！戦争遊戯で「ヘステイア・ファミリア」が  
勝つてからだ！」

「ありがとう！ガネーシヤ様！」

「……メイ、セバス、聞くまでもないが勝つ見込みは？」

「言うまでもないでしょう。」

「我々の勝利確定でございます。後は勝ち方の問題でございます。」

「…勝ち方？」

「はい。実は…。」

セバスとメイ、【静寂】を除いて、ベル・クラネルたちだけで戦争遊戯に勝つことによつて、ベル・クラネルを中心としたオラリオ連合を作ることを知つた…。

「そうか…わかつた。」

「ガネーシヤ？」

「ここまでお膳立てしているなら、賭けるしかないだろう。」

ベル・クラネルは、この半年そして今回のことを見ても彼は…、救界の”零”だ。それにヘステイアはゼウスやヘラと違い、天界でも上位の神格者だしな。

「待たせたね！ガネーシヤ。どうしたんだい？あれ？何か雰囲気は…？」

「こんにちは！ガネーシヤ様。あ、シヤクテイさん、アーデイさん、こんにちは。」

「ヘステイア。」

「う、うん？何だい？（いつになく雰囲気が違うな）」

「ガネーシャ・ファミリア」を…「ヘステイア・ファミリア」の傘下に入らせてもらいたい。」

「えええええええつっ!」

「シヤクテイ、いいな?」

「……そうだな、その方がいいな。今後のことを考えるとな(チラツ)。」

「ど、どうしてだい!?!」

「…アーデイを連れて帰った上に彼女等がいるしな、そして…ベル・クラネル。」

「は、はい!」

「アーデイを救ってもらったことに深くお礼を言わせてもらいたい。それとは別に君に聞きたいことがある。」

「はい……?」

「君は…何を目指しているのだ?」

「笑われますが…、僕は物語の英雄たちより…全てを救う『英雄』になりたいです!」

「そうか…『全て』か…。なら、【ガネーシャ・ファミリア】は君を全力で支援しよう!」

「ええええつっ!」

「シヤクテイ、アーデイ、いいな?」

「ああ。」

「私は問題ないよ！あ、君の名前教えてくれる？」

「え？あ、はい。自己紹介が遅れてすみません！ベル・クラネルと言います！」

「うん、よろしくね！ベルくん！これからもずーっとね！」

「え？あ、はい？」

（何が起こっているのか、全くわからないんですけど！）

『『全て』か…。とんでもないな、ベル・クラネルは。』

「ええ、シヤクテイ。ですが、それでも私達はベルに全てを賭けています。」

「そうか。アーデイを連れて帰ってくれたからな。…戦争遊戯に参加するのは私だけだ。他の者は治安維持に回したいんでな。」

「十分です。」

「それと…皆。私はレベル6にランクアップしたから、多少は力になれるぞ？」

「『おおおっ！』」

彼等が眩しいな…。

【ゼウス・ファミリア】や【ヘラ・ファミリア】と違う。

彼は…本物の『英雄』だ。

ロキ…フレイヤ。

この戦争遊戯では、お前たちに勝ち目は無い。

何せ我々の予想を超え、覆す『英雄』がここにいるのだから！

## 第183話 音痴猫、覚悟。

ヒーヒー…。

辛いニヤー！

母ちゃんがいた時は、ちよくちよくサボれていたのに…。

兄様が母ちゃんへの代理になってから、サボれなくなつたニヤー！

「おい！愚図1号！何をぶつくさ言つてやがる！4番テーブルに客が来たぞ！早く行け  
！」

「イ、イエス・サー！行きますニヤー！」

せめて、名前で呼んでほしいニヤー！

兄様の妹のアーニヤという立派な名前があるのにニヤー！

や、やつと終わったニヤ…。

疲れたニヤー…。

「ちつ…今日はまあまあだな。おい！調理班！とつとと休め！いいな！」

「「イエス・サー！」」



メイたち、もう兄様に従順になったニヤ…。

母ちゃんのいた時より休憩が多かったから、メイたちは大喜びニヤ…。

その代わり、ウチらの負担が多くなったニヤ…。

バァン！

「今日はもう閉店…。え？」

「ふーん…予想以上にやってるじゃないか？ええ？アレン？」

か、母ちゃん!?

店へ戻ることになったのかニヤ!?

やったニヤ！平穩が戻るニヤ！

「……何の用だ？ミア。」

「様子を見に来ただけさ。ところで、戦争遊戯は5日後になったのは聞いているね？」

「記者会見であの白髪頭が何か騒いでたニヤ…。」

「本当に戦争遊戯をやるのかニヤ…？」

「相手は…団長、レベル8なのにニヤ…。」

「知らねえよ。店が忙しくて聞けるか、そんなもの。」

嘘ニヤ！

記者会見でフレイヤ様がブーイングされたときに、ブーイングした奴らを轢き殺そう

としたニヤー!

ヘスティア：様が神威を開放してなかったら、ここあたりは血の海だったニヤ。ウチら全員で止めなかったら、ヤヴァかったニヤ…。

「そうかい。とりあえず5日後になったさ。アレン、アンタも参加しな。」

「…フレイヤ様からの命令か?」

「ああ、そうさ。」

「この店はどうなるんだ?」

「1日を超えることはないだろうさ(アイツらのことさ、長引かせることはないだろうね)。なので、その日だけ店を閉めるよ。」

「そうか、わかった。おい!聞いたな!5日後は休みだ。」

「「イエス・サー!わかりました!」」

やったニヤー!

母ちゃんも兄様のいない内にバカ騒ぎするニヤー!

「…間違っても、ここを宴会場にするんじやねえぞ?」

『『ギクウツ!』』

「轢き殺すぞ?」

「「イエス・サー!大人しく休みます!」」

「……うまくまとまっているじゃあないか（アレンをここにいさせるのも悪くないね）。」  
ニヤァ……。

せつかくの休みがニヤァ……。

「…愚図1号はどうするんだ？」

「愚図1号？…ああ、アーニヤのことか。好きにしな。」

「ニヤァ!？」

「アタシらにつくか、「ヘステイア・ファミリア」につくかどちらでもいいさ。あの女神はアンタのことは知らん、だとよ。」

「……………」

「どうするんだい？アーニヤ？」

「…ミヤァは…、シルを取り戻したいニヤァ…。」

「そうかい。それならいいさ。」

母ちゃん…。

「待て。いい加減にしろ、愚図1号。あの時わかったはずじゃねえか!」

「…兄様。それでもシルはミヤァの友達ニヤァ!」

「…好きにしろ。ただし、「ヘステイア・ファミリア」が負けたら…冒険者を辞めろ。こ

こで永遠に働け、いいな!」

「え、永遠にというのは…キツイニヤ…。」

「ああ？」

「わ、わかったニヤ…。」

（素直じゃない奴だねえ。冒険者を辞めろと言ってるが、「フレイヤ・ファミア」から破門または改宗しろとか、オラリオを出て行け、とは言わないんだねえ。）

…ミヤーも覚悟を決める時が来たニヤ…。

アイツらへの後を追う時が来たニヤ…。

---

「クロエ…ルノア。ミヤーはシルを取り戻したいニヤ…。」

「はあ…アーニヤ、「ヘスティア・ファミリア」は圧倒的不利にあるよ。それでもいいの？」

「ミヤーとしては反対ニヤ。シルは神フレイヤ様と同一じゃないのかニヤ？意味ないことはやらないニヤ。ミヤーは負け戦には乗りたくないニヤ。」

「これはミヤーの決めたことニヤ。クロエ、ルノア、ここは頼んだニヤ…。」

フレイヤ様がミヤーを捨てたなら、それでもいいニヤ…。

兄様もミヤーが邪魔なら…。

「アーニヤ！あんだ…。」



## 第184話 黒拳、覚悟。

はあ…とんだ貧乏くじを引いちまったよ。

だが、あのアーニヤをそのままにしておけない。

あの目は…死ぬ覚悟だ。

クロエもそれに気づいているはずだ。

デメテル様を探すより、ホームへ行つたほうが早いね。

久々に「デメテル・ファミリア」ホームへ行くか。

……?

何で門番がないんだ？

まさか!?

私は、ホーム内を探し回つた。

「デメテル様!」無事ですか!」

「きゃっ!…ルノア?」

デメテル様…一人?

何で!?ベルセフォネたちはどこへ!?

「デメテル様!?ど、どうしてお一人なのですか!?ベルセフォネたちはどうしたのですか!?」

「…ルノア。ひさしぶりね。…ベルセフォネたちは、『ディアンケヒト・ファミリア』で入院しているわ。」

ベルセフォネたちが!?

そんなことをしたのはどこの誰だ!?潰してやる!

「どこのファミリアですか…?そんなことをした糞ファミリアは…。」

「ルノア…落ち着いて。全て説明するわ。」

そして私は、知った。

数ヶ月前にエニユオ…いや邪神ディオニユスによって『デメテル・ファミリア』を利用され、何人が殺されてベルセフォネたちを監禁してたことを。

第二次クノツソス侵攻戦で、あの冒険者くん…『ヘステイア・ファミリア』の大活躍のおかげで、邪神ディオニユスを送還し、ベルセフォネたちを救い出したことも。

「ごめんなさい…ルノア。貴女に早く全てを話したかった。けど、あの戦いまでディオニユスたちに監視させられてできなかった。あの戦いの後に全員が入院していて、私一人でファミリアを切り盛りしていたため今の今まで連絡ができなかったの。」

「デメテル様のせいではないですよ……。私が、『デメテル・ファミリア』へちよくちよく様子を見に行くべきだったんです……。」

「……それがかえって、よかったかもしれないわ。もし来ていたら……ルノア、貴女は確実に死んでいたわ。ディオニユスは……レベル7相当の戦力を持っていた。彼女によつて、私の目の前で子どもたちが一人一人殺されたわ……。」

レベル7!?……そんな。

なんでそんな戦力を……。

「それより、ルノア。どうしたの?何か用があつて来たのじゃないか?あ、今お茶入れるわね。」

「お、お手伝いしますよ。」

「じゃあ、そこに戸棚にクツキーがあるの。取つてくれる?」

「はい……!」

デメテル様……ごめんなさい。

ベルセフオネたちに申し訳が立たないじゃないか。

私が酒場でのうのとやっていた時に。

くそっ!

「さて、ルノア。教えてくれるかしら?」



「はい。実は……」

私はシルを助けるために、戦争遊戯で「ヘステイア・ファミリア」に参加することを伝えた。

「ごめんなさい……ルノア。謝ってばかりね。」

「デメテル様は……知ってたんですか？シルが……フレイヤ様であることを。」

「ええ、知ってたわ。眷属と入れ替わりに役割演技をしたたということもね。」

「そうでしたか……」

「……フレイヤは『伴侶』を探していたの。素の自分を見てくれる人をね。」

「……『伴侶』？」

私はシルが……フレイヤ様が『伴侶』を探し、その『伴侶』が冒険者くんであることを知った。

「……わかりました。それでも私はリユーを……アーニヤを助けなければなりません。アーニヤは……死ぬ気です。」

「……【ヘステイア・ファミリア】へ味方するの？」

「はい……。これは私の独断です。破門にしていただけでも結構です。」

「絶対にしないわ、ルノア。私は貴女の判断を尊重するわ（セバスとメイがいる以上、勝利確定だものね。……レベル8となった【猛者】でも勝てるかわからないけど、【ゼウス・

ファミリア」団長マキシムちゃんでも彼等に勝てなかったと聞いているので、大丈夫ね！」

「デメテル様…ありがとうございます！」

「ステータスを更新するわ。ハスティアへの手紙も用意しておくわね。」

（先日の記者会見は驚いたわ。まさか全チェンジでファイブカードとはね…。先日の神会で中立を保つと言ったけど、土壇場で言っても問題ないでしょう。【デメテル・ファミリア】は、あの幸運の兎さんにオールインするわ。）

「【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】が相手です。無事に帰ってくるかわりません…。」

「大丈夫よ、ルノア。」

「ですが…相手はレベル8, 7, 6ですよ？レベル4の私では恐らく相手になりません。」

「そうかもしれないわね。…ルノア、私はこの戦争遊戯後に【デメテル・ファミリア】は【ハスティア・ファミリア】の傘下に入ることを決めているの。」

「さ、傘下!?ど、どうしてですか?」

「…ここでは言えないわ。【ハスティア・ファミリア】へ行けばわかるわ。」

「……………?分かりました。」

何故?

どう見ても【ヘステイア・ファミリア】が圧倒的な不利じゃないか。

翌日【ヘステイア・ファミリア】へ行き、デメテル様のおっしゃったことがわかった  
…。

こんなの…デタラメだ！反則じゃないか！

だが、勝ち目が出てきたのは非常に良かった。

ミア母さんより怖かった…、あのメイド。

【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】が気の毒に思えてきたよ…。

## 第185話 黒猫、予感。

ニヤー！

アーニヤもシルも大馬鹿ニヤー！

何でミヤーがこんな危ないことをしなければならぬのニヤー！

「メレンまで行くの面倒ニヤー……。あれ？ニヨルズ様ニヤー！」

「はあ……ロキの力になってやりたいが、団長のロツドはレベル2だしなあ。」

「ニヨルズ様ー！ちよつといいかニヤ？」

「うおつ！……クロエか。……ちようどいい、こちらも話があつたんだ。」

ニヨルズ様がミヤーに？

何だニヤ？

「【ロキ・ファミアリア】に……？」

「ああ、そうだ。ロキにはいろいろと世話になったんだ。ここで恩を返しておきたいんだ。」

「……はあ。お人好しがよすぎたからこうなったニヤー！密輸を見破られるなんて。」

「…すまない。どうだろうか？」

「……ニオルズ様。ミヤーがいるところは知っているニヤ？」

「ああ、『豊穰の女主人』だろうか？何を今更？」

「シルのことも知っているニヤ？」

「……ああ、知っているとも。同郷だしな。」

「そうかニヤ。シルはやはりフレイヤ様だったニヤ。」

「すまない…言うべきだったが、あまりにもお前が幸せそうだったんでな。」

「それだけじゃないニヤ。フレイヤ様からも口止めされてたんニヤ？」

「ああ、そうだ。」

「何でそんなことをしたのか、話してくれるニヤ？」

「ああ、それはな……」

そして、ミヤーはフレイヤ様がシルを通して役割演技をしていることを知った。

役割演技……

ミヤーの最初に所属していた犯罪組織の主神も同じことを言っていたニヤ。

フレイヤ様も……あの嬉々としながら鮮血と死をもたらす殺戮を司る屑と同じニヤ！

「……というわけだ。」

「んー。何で「ヘステイア・ファミリア」じゃダメかニヤ？」

今回の記者会見で「勇者」の知名度は下がった。

ありや、落ち目に入っているニヤ。

ミヤールの勘では、「ロキ・ファミリア」へ味方しない方がいいときているニヤ。

「?そりや、わかるだろ?」「ヘスティア・ファミリア」団長はレベル5だ。フレイヤやロキのこと比べ物にならないじゃないか?そりや、土壇場で全チエンジでファイブカードを出したのは驚いたけど、ただ、それだけじゃないか?」

ニョルズ様はわかってないニヤ。

ファイブカードを土壇場で運だけで揃えるなんてあり得ないニヤ!

あの少年は…ヤバイニヤ!

あの青いケツ…じゃないニヤ!

あの深層を重症負ったままで生き延びたことといい…。

「クロエ?」

「んー。ちよつと考えさせて欲しいニヤ。それより更新を頼むニヤ。」

「…わかった。」

ニョルズ様を説得するには、材料が足りないニヤ…。

「そつちはどうニヤ？ルノア。」

「問題ないよ。デメテル様も快く送り出してくれたよ。」

「ミヤーはダメニヤ。ニョルズ様は「ロキ・ファミア」寄りニヤ。」

脅しても何か足りないような気がするニヤ…。

最悪の場合、無視して「ヘスティア・ファミア」へ参加することも考えニヤいとダメニヤ。

「ルノア…クロエ。これはミヤーの問題ニヤ。二人が関わることじゃ…。」

「リユウが関わっている時点でもうアーニヤだけの問題じゃないよ。」

「ここまできたらもう一緒ニヤ！」

「…ありがとう。ルノア、クロエ。」

「今日はサー…いやアレン店長代理から休みもらったので「ヘスティア・ファミア」へ行くよ。」

「うん！」

「せつかくの休みなのニヤ…。」

---

「…だニヤ。」

「アーニヤ、言い出しつぺのニヤーが先陣切るべきニヤ。」

「わかったニヤ。」

コンコン

「はい。どちら様…。アーニヤ様でございますか？」

「おはよーニヤ。リユーはいるニヤ？ヘステイア様にも面会をお願いしたいニヤ。」

「え？リユー…あ、ルウ様でございますね。しばらくお待ち下さいませ。」

バタバタ…。

「おい…さっきの狐人、リユーのことをルウと言ってなかったか？」

「改名？…死んだことになってるから名前を変えたニヤ？」

「ルウ…リユー…どっちでもいいニヤ！」

何でこのタイミングで？

リユーに何かあったのかニヤ？

ガチャ…。

「どうしたのです？アーニヤ、ルノア、クロエ。」

「リユー！無事だったニヤ。実はミヤーたちを戦争遊戯で〔ヘステイア・ファミリア〕に参加させてほしいニヤ。」

「…え？ミア母さんの許可は取っているのですか？」

「好きにしろって言ってたニヤ…。」



「アーニャ……。」

アーニャ……やぶれかぶれになっているニャ……。

「あの……ルウ様。その、メイ様が……彼女たちを中庭へ通すようにと。」

「メイさんが……？わかりました。皆、こちらへ。」

「「？」」

何で中庭なのニャ？

すごく嫌な予感がするニャ。

---

そこにはメイドと小人族が立っていた。

あれはヤヴァいニャ！

『『豊穡の女主人』の従業員の皆様、はじめまして。【ヘスティア・ファミリア】団長専属メイドのメイと言います。よろしくお願ひします。』

「アーニャだニャー！」

「は、はあ……。ルノア……と言います。」

「（何かわからないけど、このメイドヤヴァい）クロエ……です。」

「さて、皆様は戦争遊戯で【ヘスティア・ファミリア】に参加したいということですが、真でしょうか？」

「そうだニヤー！」

「ああ」「そーニヤー！」

「黒拳」ルノア・ファウストさんは神デメテルより話は聞き及んでいます。ですが、他の二人は自分の判断ですね？」

「!!」

「な、何でそんなことが分かるニヤー！」

「言わないとわかりませんか？」【フレイヤ・ファミリア】の【戦車の片割れ】、そして副団長【女神の戦車】アレン・フローメルの実妹のアーニヤ・フローメルさん？」

「!!」

「そして、【ロキ・ファミリア】と縁が深い【ニョルズ・ファミリア】の【黒猫】、それとも【セクメト・ファミリア】元構成員のクロエ・ロロさんと言ったほうがよろしいでしょうか？」

「!!」

ヤバい！このメイド、ヤバい！

この場から逃げ…ヒッ！

「おやおや、どちらへ行かれるつもりですかな？」

ヒイヒイヒイ！

「この執事もヤヴァいニヤァー！」

「まあ、いいでしょう。まず…貴女たちの腕を確かめていただきます。どこからでもかかってきてください。」

「ふ、ふざけるニヤァー！ただのメイドが生意気ニヤァー！」

「ああー！」

「二人ともヤ、ヤメるニヤァー！このメイド、マジでヤバいニヤァー！ミヤァーはやりたくないニヤァー！」

「やりたくなくても、私から行きますよ？」

「速い！あ…ダメニヤ。」

「ウニヤァー!?!」

「え？ク、クロエ!?!」

「遅いです。」

「ガハアツ！」

「ええっ！ウソニヤァー！ルノアがワンパンで!?!」

「事実です。はい、貴女の番です。」

「ウニヤァー!?!」

瞬く間に、ウチたちは地に伏せられた…。

## 第186話 黒猫、恐怖。

ミャー達は中庭で、メイドと執事の前で正座させられているニャ…。

勝てるわけがないニャー！

「なるほど、貴女たちの腕前は分かりました。」

「………」

「ですが、既に我々のことを知っています。ただでは帰すわけには行きませんね。」

「ヒイヒイッ！」

「あ、あの…彼女たちは私の同僚ですので…どうか手心を。」

「リユー！」

『うわ…あのリユーがあんなことを言っているよ…。』

『当然だニャー！あのメイドと執事、マジでヤバイニャー！』

「まあ、足止めくらいにはなるでしょう。いいでしょう。戦争遊戯の参加を認めましょう。」

「このメイドと執事だけで勝てるのではないかニャ!?」

「フザケンニャー！」

「一つ興味深いことがあります。アーニヤ嬢。」

「な、何ニヤ？」

「ここで、一曲歌つてくれませんか？」

「!!!」

「ま、待つて下さい！セバスさん！それは！」

「おおー、ミヤアの歌を聞きたいニヤ？いいニヤ！」

「に、逃げ…ウニヤー！」

「や、やめなよ！アーニヤー！」

ギヤアアアア！

あの地獄が再び来るニヤー！

「まずは一曲歌うニヤー！」

---

(あまりにもひどい音痴のため、割愛させていただきます)

「が…はあ…。」

「ウ…ニヤ…。」

「うう…。」

「なるほど、災害音痴というだけではありません。」

「ふむ、使えそうですね。どうですか、リリ嬢？」

「……………はっ！すみません、気を失っていました。…朝食だけでなく昨日の夕食分もリバスしそうです。…これは耐異常を貫通していませんか？ですが、使えますね！」

何で…この二人は平気なのかニヤ…。

一体、何をする気ニヤ…。

「ああ、クロエ嬢。」

「ヒツ！な、何ニヤ？」

「アーニヤ嬢はミアの許可を取っているからいいとして、そちらは神ニョルズの許可はもらっていませんね？何故でしょうか？」

「…ニョルズ様は『ロキ・ファミア』寄りニヤ。あのお人好しの神はミヤーが「ヘステイア・ファミア」に参加するのを認めないニヤ。それに、あの少年では「フレイヤ・ファミリア」と『ロキ・ファミア』には絶対に勝てないと言ってたニヤ。」

「ク、クロエ！それは！」

「ほう？」

「ヒイイイ！ミ、ミヤーが言ったんじゃないニヤ！ニョルズ様が言ったニヤ！」

「なるほど、なるほど。神ニョルズとは『海の霸王』リヴァイアサン討伐関連で、面識が

あります。神ニヨルズはまだオラリオにおられますね？」

「ハ、ハイニヤ。」

「案内していただけますかな？」

「喜んでニヤ！」

『ウニヤー……。どうする気ニヤ……。？』

『あいつ……。主神を売ったよ……。』

『神ニヨルズが送還されないことを祈りましょう……。』

命には代えられないニヤ！

くニヨルズが泊まっている宿屋く

「クロエ？どうしたんだ？」「ロキ・ファミリア」へ参加してくれるのか？」

「……。その前に、こちらの御方がニヨルズ様にお話があるそうニヤ。」

「フードかぶっているな、誰だ？……。ぐがッ！」

ニ、ニヤー！な、何をしているニヤー！

ニヨルズ様を片手で首をつかんで宙吊りするなんて！

「お久しぶりですね。お人好しのニヨルズ様？」

「ガ……。な、何で！お前が……。解放されている……。んだ？」

「教えて差し上げましょう。貴方がクロエ嬢に言った「フレイヤやロキのこと比べ物にならない」の対象の御方が、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜をお持ちでございます。」

「ウニャー!?!」

あの少年がそんなヤヴァいとこの!?!

「な…!?!」

「そしてその御方を、真の主と私とメイが認めております。その意味はおわかりですね？」

「ま、待て…!?!」

「坊ちやまを侮辱した礼として…、クロエ嬢を除く貴方のファミリア全員を数時間内に全て惨殺し、その首を貴方の前へ持つてきましょう。そして、貴方の四肢をへし折って、後日に元主神ヘラへ引き渡します。」

「や、やめてくれ…!?!頼むから、やめてくれ!」

「聞こえませんか?」

「…やめて下さい。お願いします。俺が、いや私が悪かったです…。ですので、それはやめさせていただけませんかでしょうか?」

「ふむ…まあ、ギリギリ及第点を差し上げましょう。ですが、誠意が必要とは思いません



か？」

ヒイイイッ！

ミア母ちゃんより神を恐れニヤイ奴がここにもいたニヤー！

「ゲホッ…ガハッ…。何を望むつもりだ…。」

「部屋の隅で怯えておられる、クロエ・ロロ嬢の〔ヘスティア・ファミリア〕参加を認めていただきたいのです。もちろん、了承していただだけますね？」

「…：わかった。あ、いや喜んで承諾させていただきます。」

「そうですか、ありがとうございます。よかったですね？クロエ嬢。話し合いは無事に済みましたよ。」

「ヒイイイッ！」

これが話し合い!?

仮にもニヨルズ様は神ニヤー！

ミア母ちゃんより、ヤヴァいことをやってるニヤー!?

「クロエ…お前は知っていたのか？」

「知るわけないニヤー！初耳ニヤー！」

「そうだよな…。こいつらがしているなら話は別だ。ベル・クラネルのやってきたこ

と、俺はあまり知らないからな……」

「それはいけませんな。坊ちやまがオラリオへ来てから半年のことを簡単に説明いたしまししょう。」

そして、その執事はあの少年がやってのけたことを話してくれたニヤ……。

「……なんだ、そのあり得ないことだらけは……。ロキの子のやってきたことが霞むじゃないか……。」

「ウニャー……。」

「さて、どうなさいますかな?」

「……【ニオルズ・ファミリア】は【ヘスティア・ファミリア】の傘下に降る。それが事実なら……、ベル・クラネルは明らかに俺たち神が求めていた、救界の”要”じゃないか。」  
「賢明な判断でございます。ですが、眷属への説明はよろしいでしょうか?」

「……俺が説得する。それに、ヘスティアは天界でも上位に入るほどの神格者のはずだ。ゼウスやヘラ……オーデインと違ってな。」

「わかりました。後日、【ヘスティア・ファミリア】へ来ていただき再度先程のことをお願いいたしますね?」

「ああ、わかった。」

「では、これで失礼します。坊ちやまへの特訓がまだでございますからな。」  
ヒイヒイイツ！音もなく去ったニヤー！

『同業者』でも真つ青ニヤー！

「クロエ…すまない。あんな恐ろしい奴らがついているとは知らなかつたんだ…またベル・クラネルの偉業もな。」

「ニョルズ様は悪くないニヤ…。メレンにずっといたから仕方がないニヤ…。」

「ロキのところが哀れに思えてきたな…。ロキにも忠告した方がいいだろうか？あ…いや、しないほうがいいな。ロッドたちと俺が命の危機にあつてしまう…。」

「それが賢明ニヤ…（どこかで見ているような気がしてならないニヤ）。」

とんでもない奴らと関わってしまったニヤー！

リユーがあんなに怯えるのも道理だニヤ。

…：「ハスティア・ファミリア」へ全財産賭けるニヤー！

こんな勝利確定の情報を知った今、儲けなきややつてられないニヤー！

## 第187話 音痴猫、嘆願。

ミャーは…とんでもないところへ入ってしまったニャ…。

今の「ヘステティア・ファミリア」はミャーのどこの【戦いの野】が手ぬるく感じるぐらいの魔窟ニャ…。

何なんニャー！この二人は！

「さて、貴女たちの役目は…いつも通りでいいです。が、【小巨人】と【女神の戦車】へは他言無用です。まあ、【小巨人】は私達のことを感づいているようですが。」

「ウニャ!?母ちゃんはおミャーたちを知っているのかニャ?」

「ええ、よくご存知ですよ。時の流れは残酷なものです。あの端麗な女性がああなるのですから。」

「その話詳しく聞きたいんだけど、聞くのが怖い…。」

「同感ニャ…（あの執事が去ったと思つたらこのメイドがいきなり現れて攫われたニャ…。ニョルズ様がこのメイドを見て、顔面蒼白ですぐ土下座をした姿は忘れられないニャ…。）」

「さて、貴女たちはこちらの指示に従ってもらいます。いいですね。」

「了解しました（ニヤ）！」  
怖いニヤ…。」

けど、これでルノアとクロエを危ない目に合わせずにすむ…。

あとはミヤールの死に場所ニヤ。

「ああ、皆様こちらへ来ていただけますかな？他の参加者への顔合わせをした方がよろしいでしょう。」

---

そこには今回の戦争遊戯の参加者がいた。

「うわ…こいつら、強いよ…。」

「……………ヤヴァイニヤ…。ミヤールはもう帰りたいニヤ…。」

「もう、ミヤールたちはいららないじゃないのかニヤ…。兄様たちが気の毒に思えてきたニヤ…。」

「む、豊穡の女主人のこの従業員か。…おい、その黒い猫人。どこかで会ったことあるか？」

「（ヒイヒイイ！【ガネーシャ・ファミリア】の【象神の杖】!?!）ひ、人違いニヤ…。」

「そうか…。いや、待て。その気配…お前！数年前、私を暗殺しようとした奴だな？」

「「ええっ！」」

「ヒトチガイデス、ハイ。」

「嘘を言っているわ。」

「嘘を言っているね。」

「(何で神様がいるニヤァー! シュバツ!) …その節は大変申し訳ございませんでしたニヤァー。お許し下さいニヤァー。」

クロエ…素早い土下座だったニヤァー。

「クロエ…貴女、シヤクテイを暗殺しようとしたのですか?」

「リユーと会う前ニヤァー! オラリオへ来てすぐの時ニヤァー! そんな化け物とは知らなかったニヤァー!」

「化け物とはひどいい言い草だな。私より上の化物ならそこにゴロゴロいるではないか。」

「言わないでニヤァー! 先程、身を以て知ったニヤァー!」

同感だニヤァー!

何で今まで出てこなかったニヤァー!

「騒々しい。さつさと済ませろ。」

『あ、ヤバイ。この人が一番ヤバイ。』

『逆らったら…目を合わせたら、殺されるニヤ…!』

『団長より…母ちゃんより…ヤバイニヤ。ミヤールの死に場所はここかニヤ…。』

『お嬢様、抑えて下さいませ。さて皆様、こちらの方々は…』

ミヤールたちは、参加者を紹介してもらったニヤ…。

「ねえ、リユー…いやルウ。あんたの仲間って全滅したんじやなかった?」

「……はい。そうです。」

「何で、そこに生きているのかニヤ?今の今まで出てこなかったのは何でニヤ?」

「そうだニヤ。」

「……戦争遊戯が終わった後に話します。私も未だ夢ではないかと思う時があります

……」

「……聞くのが怖くなってきたよ。」

「【ヘステシア・ファミリア】は弱小ファミリアじゃなかったのかニヤ!もう、オラリオ

で一番ヤヴァイファミリアニヤ!」

「そうだニヤ!ミヤールのファミリアより怖いニヤ!」

「……大変不本意ですが、同意します。」

どうなってるニャー！

「ああ、アーニャ嬢。こちらへ来ていただけますかな？」

「ウニャ!?」

「…アーニャ、骨は拾ってあげるよ。」

「…短い付き合いだったけど、忘れないニャ…。」

「死ぬことはないと思いますが、気をしっかりと持って下さい。」

ニャー……！

ウチが何をしたのかニャー！

ミャーは怖い執事に別の部屋へに連れられたニャ…。

「さて、お待たせいたしました。」

「どうしたのさ、セバスくん。その猫人がどうしたのかい？」

「初めて見る娘ね（まさか、この娘もベルのことを…?）」

「何の用だ、セバス。私は自室へ帰ってベルの自伝を読みたいのだが。」

「何の用だ? その猫人は確かミアのとこにいたのだったな?」

へステイア様と…アストレア様?



そして、さっきの一番ヤバイ奴と【象神の杖】？

「さて、アーニャ嬢。貴女は死ぬ覚悟をなさっておりますね？」

!?

「気になり、ルウ嬢に聞きました。数週間前の、貴女と神フレイヤと貴女の実兄の【女神の戦車】アレン・フロームルのことを。」

リユーに、あの場を見られたのかニヤ!?

「大方理解しましたが、貴女は大変な誤解をなさっております。」

誤解…？

「【女神の戦車】に妹がいるのは聞いたことがあるが…、その妹の【戦車の片割れ】がこいつだったのか…!」

「そんなのはどうでもいい。私達をここに集めたのは何か理由があるのだろうか？ 言え、セバス。」

「はい…実は…」

あの場にあつたことを、この執事は見てきたかのように話したニヤ…。

「なるほどね…。」

「フレイヤがそんなことを…。」



「…知っているニヤ…。けどミヤーはその時ミア母ちゃんのとこにいたニヤ…。」

「そうか。ミアがお前を守ったのだな。あ、いや…そうか。過保護な奴だな、【女神の戦車】は。」

「ど、どういうことニヤ!」

「先程の【静寂】が言ったことが答えだ。【女神の戦車】はお前を見限ったのではない。お前を再び危険な目に合わせたくないため、心を鬼にしてお前を突き放しミアに保護させたのだ。」

!?

「シルという娘が神フレイヤなら…お前を追放し、シルとして元団長であるミアのところに保護させたのだろう。シルという娘の警護という名目で【女神の戦車】の目の届くところにな。」

「そ、そんな…。」

「話を戻すが…、7年前の大抗争で私は実の妹…アーディを失った。」

!?

「私は…アーディを冒険者にしたくなかった。だが、アーディはなつてしまった。…だからこそ、【女神の戦車】の気持ちがよくわかる。妹として大事にするなら、ホームにいさせるなり普通の町娘にするべきだったのだ。」

「……。」

「そして、アーディは自らの油断により闇派閥の自爆攻撃で死んだ。お前も【女神の戦車】が守ってくれなかったら、深層で野垂れ死んでいただろう。」

「……。」

「恐らく、【女神の戦車】は神フレイヤに嘆願したのだろう。死力を尽くして忠誠を誓うから、お前をファミリーから追放しミアのところまで保護させてほしい……とかな。恩恵を残しているのがその証拠だ。」

「……。」

「【静寂】も実の妹を病で失った。……だから、あいつもわかるのだろう。」

兄様……はミヤールを捨ててなかった……。

ずっと……。

「アーニヤくん、フレイヤは君を捨ててないさ。シャクティくんの言う通り、捨てるなら恩恵を封印しているはずさ。」

「そうね、フレイヤは非戦闘員も多く抱えていると聞いたわ。アーニヤちゃんを追放するのは、余程身にこたえたかもしれないわね。」

「アーニヤ嬢、これでおわかりでしょう。貴女はずっと【女神の戦車】いえ、お兄様のアレン・フロームルにずっと守られていたのでございます。レベル6へ行けたのは神フレ

イヤへの忠誠だけでなく、貴女を守るための力を求めたのもあるかもしれませんが。」

兄様…ごめんなさいニヤ…。

なら…、ミヤーがやれることは…。

「(シユバツ!) ……ヘステイア様、アストレア様、お願いがありますニヤ…いえ、ございます。」

「…何だい?言つてごらん?」

「今回の戦争遊戯で、ミヤー…私アーニヤ・フロームルは死力を尽くして勝利に貢献いたしますので…、フレイヤ様と兄様…アレン・フロームル、いえ「フレイヤ・ファミリア」のみんなの命はお助けいただきませう、お願いしますニヤ…いえお願い致します!」

「…アーニヤちゃん…。」

「……わかつたよ。ただし、死力を尽くすのは認めない。キミには悲しむ人がいるんだからね。いいね?」

「ヘステイア様!ありがとうございます!……ニヤ。」

兄様…フレイヤ様、ごめんなさいニヤ…。

ミヤーがもつと賢かつたら…もつと早く気付けたハズニヤ…。

というか、こんなヤバイ奴らがゴロゴロいるなら「フレイヤ・ファミリア」の敗北は必至ニヤ!

ミヤーが【フレイヤ・ファミリア】を守らないと！

## 第188話 静寂、完治。

ふむ…数日前と違い、非常に体が軽いな。

病魔に冒されていないというのはこんな感じなのか。

これなら、長時間で戦えるな。

ベルのためにも。

コンコン

「…誰だ？」

「セバスでございます。アルフィアお嬢様、ご加減はいかがでしょうか？」

「ふん、入れ。…あの特効薬はすごいな、さすがベルの血を素にしているだけはある。」

「ほう。そこまでの効き目でしたか。」

「ああ、私も今日からの特訓に入らせる。なまるとベルの力になれん。」

「わかりました。ただ、念のためエイナ嬢の鑑定を受けていただきます。」

む、そうだったな。

あの娘の魔法は、私の状態がわかるんだったな。

あの娘もベルのハーレムか…、複雑だ。

多くないか？

「そうだな、そうさせてもらおう。」

病が完全に治ってなかったら、いつ吐血するかわからんからな。

ベルがそれを見たら、あの子は悲しむだろう。

だから、完全に治さなければならぬのだ。

「おはようございます。アルフィアさん。」

「ああ、おはよう。確か…エイナだったな？」

「あ、はい。エイナ・チュールです。ベルくんの元アドバイザーです。以後、よろしくお願ひ致します。」

「アルフィアだ。改めて、うちの義息子が大変世話になった。感謝する。」

「あ、いえ。こちらこそ。」

「……ふむ、合格。」

「え？合格？」

「いや、気にするな。こつちのことだ。」

（お嬢様の太鼓判を得ましたな。まあ、無理もありません。坊ちやまの周りにいる女性



の中でも、エイナ嬢はレベルを除けば非常に優秀で坊ちやまからの信頼も信用も厚いですからね。」

「では、鑑定してもらおうか。」

「あ、はい。失礼します。」

【開け、秘密の扉】

【鑑定】

「……死の病の表示がありません。ですが、生命力がまだ完全ではありません。」

「そうか。生命力か……やむを得ん。おい、セバス。メイのあのドリンクを持ってこい。」

「はい、アルフィアさん。こちらです。」

「……音も立てずに近寄るな。心臓に悪い。」

「メイドの嗜みでございます。」

「ふざけたことを……。よこせ、ゴクゴク……。ふう……なるほど。」

「あ！生命力が8割ほどになりました！」

「そうか。む……眠気か。今日は安静にした方がよさそうだ。」

「そうでございますな。」

「そうですね。ベルくんが心配するかもしれませんね。」

「そうだ。お前……いやエイナはよくわかっているな。」

「あ、いえいえ。」

『セバス、アルフィアさんの中でエイナさんはどの位置にいますか?』

『現時点では一位か二位でしょうな。レベルが高ければ一位確実なのは間違いありません。』

なかなか好感の持てる娘だな。

この娘ならベルを任せられそうだな。

…ハーフエルフなのが惜しいな。

「だが…スキルとしてある以上、また発病するかもしれないな…。」

「そうでございませぬ。ですが、当分はないと見ますね。」

「そうだな…。エイナ、すまないが一週間に一回は鑑定で診てもらえないか?」

「あ、はい! わかりました。」

本当に便利な魔法だな。

使いようによっては私の魔法より、非常に強力だな。

あの年増ハイエルフよりはマシだな、うむ。

「邪魔するぞ!」

「ディアンケヒト様…せめてノックをしてからにしてください。」

「…騒がしい神が来たな。はあ…。」

「すまないが、失礼する。アルフィア……、セバスの言っていたことは本当だったんだな、」  
「アルフィアアアアアア！お前は！」

「五月蠅い。魔法をぶつけるぞ。」

「ぐっ…、この感じはやはりアルフィアか…。何故だ！何故7年前に儂等のところへ来なかつたのだ！」

「そこまで私達が憎かつたのか……？」

「違う。もう手遅れだからだ。だから行く必要がなかつた。…メーテリアのことで貴方たちを憎むことは最初からない。あれはメーテリアが自分でやったことだからだ。自業自得だ。」

「そうだ、本来ならメーテリアはここオラリオに…」  
「【ディアンケヒト・ファミリア】の治療院で入院するはずだった。」

だが、メーテリアは腹の中の子…ベルの命が脅かされるのを知り、ゼウスと共にオラリオを出ていったのだ。

私はそれを事後に知り、後を追いかけたが既にベルを産んだ後だった…。

だが、それが正解だったかもしれない。

こうして、私がここにいるのだから。

「お前は…、これからどうするつもりなのだ？」

「…神ヘステイアによる裁きを受けて、あの子の側にいることになった。」

「そうか、それならいい！メーテリアも喜ぶだろう！」

「…そうだな。できるだけ長生きしてあの子の成長を見届けて、メーテリアへ土産話を持っていかなければならないからな。」

「うむ。だが…7年前の大抗争については周りがどうするかだな…。」

「神ディアンケヒト様、神ミアハ様、それについて案がごじます。」

「何だと…？」

「ふむ…なるほどその案なら、大丈夫だろう。…だが、女神連合はデメテルの性格上仕方がないとしても、ファンクラブやロイマン改変はやりすぎではないのか？」

「ファンクラブは『ヘルメス・ファミリア』のローリエ嬢の才能によるものでございます。ロイマンは、坊ちやまを処刑しようとしてました。その報いです。」

「…愚かな豚だな。こいつらの逆鱗に触れるからだ。」

まあ、こいつらが裁かなければ私が終焉を与えていただろう。

「…まあいい。ギルドがマシになるなら問題ないだろう！それより、アルフィア。死の病の具合はどうなのだ？」

「もう治った。」

「はあ?! お前がこの時代に来たのは数日前だろうが。アミッド、診てやってくれ!」  
「かしこまりました。【静寂】…、いえアルフィアさん、よろしいでしょうか?」

…エイナの【鑑定】が正しければ、治っているはずだ。

それにこの娘の診断で問題なければ、エイナの魔法は正確ということがわかるな。

「いいだろう。手を抜くなよ?」

---

「…確かに治っています。こんなに早く治るとは…。ああ、なるほど。彼の血の半分は貴女の血と同じですから馴染むのが早いということですね?」

「そうだ。」

「予想以上の効き目だな…。」

「これはあのサポーターに感謝するべきだな。」

…妹を孕ませたあの雑魚に感謝だと!?

認めないぞ、私は。

「違う。」

「ちゅー!」

「あの子自身の力だ。」

「いや、それは…。」

「あの子自身の力だ。」

「ハイ…。（そんなに嫌いなのか…。）」

それでいい。

「ですが、その特効薬は副次作用がございます。最近判明したことです。」

「セバス、ヘステイア様を連れてきます。説明は続けて下さい。」

「了解しました。」

「おい、何だ？その副次作用とは？」

「あの…、よろしいでしょうか？それは機密事項では…。」

「構いません。言ったとしても彼らはどうしようもありませんよ。」

「それはそうなのだが…目の前で言われるとな。」

「事実なのだから仕方があるまい。」

（規格外に逆らいたくありません。）

「早く言え。何だ、それは。」

「それは…。」

何だと…そんな副次作用が…。

くそっ！何故、ここにヘラがないのだ！

「…なるほど。となると、余程【白兔の脚】への好感度が高くなければ問題はないということですね。」

「ふむ、限られやすいな。だが…、ベルは本当にヒューマンなのか？」

「ここまで来ると、儂等『神』を超越しているとしか思えんな…。」

うむうむ、さすが私の義息子だな。

む、神ヘステイアか。

「やあ、ミアハ、ディアンケヒト。彼女の見舞いに来たのかい？」

「ああ、そうだ。」

「儂はもう呆れたぞ。ベル・クラネルはヒューマンなのだな？」

「ベルくんを診察したらわかるじゃないか？あ、アミッドくんベルくんを診察したよね？何も異常ないかい？」

「え？あ、はい。時を遡る代償は今のところ精神疲弊だけですわね…。」

「それだけだね？よかったよ…。」

全くだ。時を遡る代償が精神疲弊だけとはな。

なら、やるべきことはやっておかないな。

「おい、セバス。」

「既に手配しております。戦争遊戯後になると思っていますので、気長にお待ち下さいませ。」

「心を読むな、忌々しい奴め。そうか、仕方があるまい。以前と違い、時間はたっぷりあるからな。」

「…何をするつもりなのだ？」

「…まさか、その副次作用を発現させるためへラを探すのではあるまいな？」

「ご明察でございます。」

「………」

そのスキルが発現すれば…より高みへ行けるからな。

「ヘスティア。」

「ど、どうしたんだい？ミアハ。」

「ミアハ・ファミリア」を「ヘスティア・ファミリア」の傘下に入れてほしい。」

「ええっ!？」

「儂もだ。『ディアンケヒト・ファミリア』は「ヘスティア・ファミリア」の傘下に入る。いいな？アミッド。」



「え？あ、はい。問題ありません（まだ入ってなかったのですか？とつくに入っていると  
思ったのですが…、まあ、あの規格外のベル・クラネルや彼女たちに刃向かうのは愚か  
ですからね。」

「ええええっ！いいのかい？」

「ああ、そうだ。いずれにしろ、そうなる予定だったのだ。」

「そうだな。今後のためにも。」

「…ありがとう。ミアハ、ディアンケヒト。」

「その…代わりと言ってなんだが…。」

「ああ、そうだな。」

「何だい？できることならやるよ！」

「ヘラから守ってほしい。」

「……………うん、わかったよ！」

……………。

まあ、賢明な判断だな。

あのヘラがベルのこれまでのことを知ったら、オラリオを滅ぼしかねないからな。  
ヘラをいい子と言う神ヘステイアなら、大丈夫だろう。

……………あのヘラのどこがいい子なのだ。

理解できん。

それはさておき、ベルの眷属か。悪くないな。

ベルの力になるためにも更なる高みへ行かねばならん。

あの精強な男や傲慢な女より上へ。

どうせ、ベルより先に死ぬんだ。

なら、できることはしておくべきだろう。

だから早く出てこい、ヘラ。

## 第189話 処女神、傾聴。

むあー。

本当はこうしている場合じゃないけど、平和だねえ…。

へファイストスとアストレアとお茶してくつろぐのもいいねえ。

「ねえ…今の鍛冶場にはヴェルフと椿と貴女の眷属が3人だけよね？」

「そうだけど？」

「大丈夫なの？」

「…：へファイストス。嫉妬かい？」

「そうよ。」

「断言しないでくれるかい…？」

「神へファイストス、大丈夫でございます。食事や飲み物を差し入れています、そんな雰囲気は微塵ともありません。」

「セバスが言うなら、大丈夫ね。」

「…そんなに心配なら見に行ったらいいじゃないか。」

「…しつこい女性と思われたらどうするのよ。」

「…………ええー。」

まさかへファイストスがこうなるとは思わなかったなあ。

天界でアフロディーテとの恋人だった時でも、こうはならなかったのに。

「…………へスティア。今、何を思ったのかしら？」

「ナンデモゴザイマセン。」

危ない危ない。

へファイストスにその話題は禁句だからねえ。

コンコン

「ん？誰だい？」

「私です。へスティア様。」

「サポーターくんかい？入りなよ。」

「失礼します。」

どうしたんだろう？

この夜中に。

「どうしたんだい？うわ…サポーターくん、キミ目に隈できているよ…。」

「ここ数日、寝ずにセバス様とメイ様の課題をクリアするために考えました。セバス様、メイ様、課題の回答を出しに来ました。」

「ほう、伺いましょう。」

「どのような回答か楽しみですね。」

「ねえ、私が聞いてもいいのかしら?」

「〔ハファイストス・ファミリア〕は〔ハスティア・ファミリア〕の傘下にありますので、問題ございません。」

「サポーターくん、聞かせてくれよ。キミの勝利の策を。」

「はい!」

セバスくんとメイくんの課題をクリアするなんて、どういう策なんだろう?

「…以上の内容となります。【猛者】を除く他の者との勝率は80%です。」

「え、えげつない…。」

「うわあ…。傘下に入って正解だったわ。」

「念に念を押しした内容ね…(ベルが今日まで生きてこられたのは、この子の頭脳があつてこそね)。」

……サポーターくんが優秀なのは知っていたけど、ここまでとはね。

それは偏にベルくんのためなんだよね。

「ふむ……残り20%は何でしょうか？」

「会場はダンジョンの18階層です。ダンジョンのイレギュラーが10%です。そして、冒険者の底力が10%です。」

「なるほど。妥当ですね。私から見ますと問題ありません。」

「面白く、効率的な策ですね。ですが、追い詰めてからの決定打に欠けますね。」

「ええ、そうなんです。……セバス様、メイ様、アルフィア様の三方から一人出張ってほしいのですが。」

「許可できません。」

ええー、厳しいなあ。

よし、ここは主神であるボクが……

「ヘスティア様がどう言おうとダメでございます。」

……ねえ、何で神の心まで見通せるのさ。

キミたち、本当に魔導人形？

神を超越してないかい？

「うぐつ……やはりですか。むむむ……」

「リリ嬢、お忘れですか？我々は切り札を持っていると。」

「『切り札？』」

「ええ。「アストレア・ファミリア」の皆様方とアルフィアさんが入る前の、我々の切り札です。」

『すごく怖いんだけど…。』

『あの娘たちが入る前の？何出す気かしら…。』

『今の戦力でこの策の上に、彼らが温存していた切り札？もう勝利宣言してもいいと思うんだけど…。』

そうだね！ロキとフレイヤに彼らの存在を伝えたら、降伏するんじゃないかな？

「駄目でございます。坊ちやまの心血の結晶を無駄にするおつもりですか？」

だよね！わかってたよ！

「そ、その切り札とは何でしょうか？」

「その前に、先ほどの策を明日に皆様へ出しましょう。切り札はその時にします。」

「リリ嬢、貴女は今から休むべきです。そんな表情では皆様へ不安を与えてしまいません。」

「わ、わかりました。…メイ様、例のドリンクをいただけませんかでしょうか？」

「もちろんですよ。美容成分がたっぷりに入ったものを出しますよ。」

!?

「ねえ、それボクにもくれないかい？」

「あ、私も。」

「私もくれないかしら?」

「神様でも美容を気にするんですね……不老なのに。」

神でも気にするのは気にするんだよ!

そして、翌朝になりセバスくんとメイくんの招集により、戦争遊戯に参加するみんなが集まった。

…思ったより多いな…。

ベルくんとヴェルフくんを除けば、全員女性じゃないか!

「コホン、治療班を除き集まりいただきありがとうございます。戦争遊戯まで明後日となりました。私、「ヘステイア・ファミリア」参謀のリリルカ・アーデが今回の戦争遊戯への策を考案しました。」

「リリ、頑張つて!」

（「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」を相手にして、どのような策か……。いずれにしろ、勝たなければならん。）

（この魔法、本当にズルいよね。今使つてもみんなにはわからないんだもの……。ベル



くん、ステータス全部激高となつてゐるんだけど…。ランクアップしたばかりよね？」  
「へえ、おもしれえじゃねえか。あの【勇者】サマを蹂躪させられるかあたしが見定めてやるぜ。」

「ふん、聞かせてもらおうか。生半可なものなら承知せんぞ。」

「【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】を相手にした策ですか。楽しみでございませぬえ、春姫？」

「はい！輝夜お姉様！リリ様は凄いです！」

「……招集かけられて来てみたのはいいんだけどねえ。眉唾じゃないかと思つたんだが【静寂】【紅の正花】【大和竜胆】【狡鼠】が本当に生き返つてゐるんだねえ（あの【静寂】が坊やの伯母だつて!?!……ハードルが一気に高くなつちまつたよ。あの坊やは本当にヒューマンかい?）」

「…………（ベルきゅん、ベルきゅん、べるきゅん!）」  
「では、始めます。」

「この内容を聞いたら、みんなドン引きするんじゃない？」

## 第190話 処女神、不知。

サポーターくんが、戦争遊戯の策を語ってくれている。

みんな…唾然としているね。

そりゃ、そうだね！

「……………以上です。」

「…前から思っていたのだが、彼女ほどの存在をギルドはもつと注目すべきだったな。」

「二、ニヤー…。こちらへついて正解だったニヤー…。」

「元裏稼業のあたしたちでも、それはさすがにドン引きだよ…。」

「兄様たちには悪いけど、ミヤーの歌を世界に轟かせる時が来たニヤー！」

「いいのか…？これは。【ガネーシャ・ファミア】として止めるべきなのか？いや、仕方がないか。いや、でも…。」

「リリスケ…容赦ねえな。」

「相手が哀れに思えてきました…。当初はこちらが絶対的な不利だったのに…。」

「うわあ…。私でもこれはちよつと引くわ！」

「…相手は現最強派閥です。それぐらいは…（人のことは言えませんが、やりすぎではないですか？）」

「僕はオツタルさんと一騎打ち…。勝てるかな…？ううん！勝たなければならぬんだ！」

ベルくん…。ボクはキミの将来が改めて心配になってきたよ。

サポーターくんを信頼しすぎてないかい？

「ライラ？先程の見定めてやると言ったけど、どうかしら？」

「…：…相手はあのフィンだ。それぐらいはしねえとな。あたしを捨て駒にするのはい。だが、何故あたしなんだ？」

「…：…リリは7年前のフィン様の最終決戦の発破を聞いています。あの時、フィン様の意図を理解し煽ったのはライラ様だけです。今のフィン様は焦っておられます。なら、最初に落ちて正気に戻っていたただかなければなりません。今後のためにも。」

「…：あの時、てめえは聞いていたのか…。そうだな、今のフィンは見えなくなっちゃまっている。恐らく親指の疼きがあるに関わらず、このバグ兎に「バグ兎!」挑もうとしてやがる。わかった、あたしに任せろ。勇者サマの目を覚まさせてやるよ。」

バグ兎…。か。あながち誇張表現でもないよね。

これ以上のバグはもう勘弁してくれよ…。

「ありがとうございます！」

「あー、言い忘れてたわ。おめえのこの策、【勇者】サマを超えているぜ。あたしが認めてやる。この戦争遊戯、フィンが目覚めない限り【ヘスティア・ファミリア】の勝利で終いだ。」

「ライラが太鼓判を押すなら、大丈夫ね！…ところで、切り札って何なの？」

「リリはわかりませんが、セバス様とメイ様が温存している切り札だそうです……。」

「「え？こ、この二人が温存している切り札？」」

「……貴様ら、覚悟しておけ。自重しないこいつらが溜めに溜めた切り札だ。オラリオを滅ぼすかもしれん。」

「「ヒイイイ！」」

「アルフィアお嬢様、そこまではありません。」

「失礼ですね。私達を何だと思っているのですか？ただのメイドと執事です。そんなことができるわけがないでしょう。」

『『どこが、ただのメイドと執事だ！』』

絶対に！ただの！メイドと執事！じゃなーい！

「戦闘における主力、賢者へのサポート、門番をご用意いたしました。」  
「入りなさい。」

「ザツ…ザツ…ザツ…」

あれ、この前にセバスくんとかメイくんを紹介してもらって恩恵を与えた子たちだ。  
うち、一人は改宗だけだね。

「まず、こちらが戦闘における主力です。」

「アマゾネス…？」

「バーチエちゃんと同じメイドね！」

「彼女は、レベル6です。パワー型ですので「重傑」相手にも引けをとりませんよ？」

「レベル6だつて!?オラリオの同族にそんな奴いたかねえ…。」

「……………ねえ、ヘスティア。」

「何を言いたいのかはわかってるよ!……………ここまで似ている娘、初めてだよ。」

「誰にですか?神様?」

「イシユタル、フレイヤと同じ美の女神であり、ボクたち同郷のアフロディーテさ。」

「ええ、ここまでそっくりなんて。レベル6?【麗傑】も知らないなんて…。」

「……………まさか、貴様等。」

「え?…あの名前…、見間違いないよね?嘘……………あ、あり得ない!うん、同姓同名に

決まっている。ええ、それしかない！完全に違うんだもの！

あれ、どうしたんだろう？アドバイザーくん？

あ！あの魔法を使っているみたいだね。

…何で顔面蒼白になっているんだい？

「自己紹介は後にしましょう。」

「次は賢者のサポートです。レベルーです。」

「私のサポートかい？…彼はどこかで見たような…。」

「はい、彼は元閹派閥でモンスターの合成を試みた研究員です。私達の説得に耳を傾けて、改心しました。賢者のサポートにはうってつけですよ。」

「説得というのが怖いニヤ…。」

「改心したというのも怪しいよ…。」

「モンスターの合成…まさかあの時の方ですか？でもあの方は髪の毛とメガネがあったはずですが…。」

（え…？この名前…ギルドの牢獄に入ってた…？うん同姓同名、同姓同名！）

嘘は言っていない…。

彼らの言う『説得』と『改心』は絶対に普通じゃないよね！

「最後に門番です。」

「うわあ…すごい筋肉…。僕もあなりりたいなあ。」

「ダメよ！ベルはそのままがいいのよ！私が許さないわ！」

「そうだぞ、ベル。筋肉がいくら大きかろうと、強いとは限らないぞ。お前はそのままでもいいんだ。」

「そうよ！ベルはそのままでも十分強そうよ！」

「そうだよ！ベルくん！主神であるボクがそれは絶対に許さないよ！」

「『そうです！そのままがいいです！』」

「え、ええ…。何でみんなまで…。」

（すまん、ベル。俺では助けることができない。許せ。）

駄目だよ！ベルくん！

あの筋肉はキミに絶対似合わない！

「こちらはあるファミリアから、改宗してもらいました。ハスティア様も立ち会ってくれました。」

「あ、うん。でもこの感じだったのかなあ…？同姓同名があのでファミリアにいたのかな？」

「彼はランクアップし、レベル3です。二つ名とともに門番の役目を果たしてくれるでしょう。」

「……どこかで会ったような気が……いえ、会っているはずですが、そんななりをし  
ていたら絶対に覚えているはずです!」

(同姓同名…同姓同名! あり得ない! …けど、この人達はギルド長を…はっ! まさかこ  
の3人も…。)

ア、アドバイザーくん? ますます顔色が悪くなってるないかい?

死の病が再発したわけじゃないよね…?

「リリ嬢、レベル6の彼女ならこの策の成功率は跳ね上がるでしょう。」

「ええ! 問題ありません!」

「では、自己紹介をしてみよう。先程とは逆に門番からです。」

ボクは既に聞いているんだけどな。

「「「え?」」」

「「「は?」」」

「「「ええええええええ?!」」」



(ああ…やつぱり…。本人だった…。)

本来の彼らと全く違うということを、みんなから聞いて驚いた。  
アドバイザーくんが顔面蒼白するのも納得だよ…。

やりすぎ！やりすぎだよ！

アルフィアくんの言う通り、自重してくれよ——！

「……………ヘスティア。」

「ボクは知らない…知らなかったんだ。」

「アフロディーテが彼女を見たら、間違いなく怒ってココへ来るわよ…。」

「…だよねえ。」

「私…：彼らに対して恐怖を覚えたわ…。」

「ボクもだよ…。ある意味、オラリオを揺るがすよ…：コレは。」

ベルくんは、何て人達を解放してしまったんだ…。

神をも恐れる所業を平気でやってのけるんだから。

戦争遊戯の結果より、こっちの方が問題にならなきやいいけど…。

なったらなつたで、追及しないんだろうな。

我が身大切だからね…神でも。

~~~~~

「…ティアア！ヘステティア！」

「むあつ！あ、ごめん！ついボーつとしてしまったよ。」

今日は思いにふける時が多いなあ…。

気をつけないと。

「いえ、ほんの数十秒だったわ。そろそろ…出るわよ。」

「そう、ついに…出るんだね。」

「何や？まだ隠し玉あんのかい…、いや、その前にあのアフロたんのことや、一体何者や

ねん！」

「あの魂の色…、やはりつい最近見たことがあるわ。どこかしら…？」

君たちも知っているはずだよ…。

「…もうすぐわかるよ。前もって言うておくよ、ボクは…知らなかったんだ。」

「ええ…。」

「？」

第191話 凶狼、絶句。

くそっ！

あの毒女の毒がじわじわと回ってきやがる！

耐異常が高くなければ抵抗できねえ！

レナは…もう限界か。

「はあ…はあ。き、キツいね。」

「もう脱落しろ。死にやしねえんだからよ。」

「も、もうちよつと頑張るよ！」

ちつ…意地張りやがって。

『頃合いです！発言を許可します！』

『了解しました。』

…？あのメイドアマゾネス、動きやがった。

カーテシーなんかやりやがって…、何するつもりだ？

「…【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の皆様、大変ご無沙汰しております。」

「「?」」

ご無沙汰?

あのアマゾネス、会ったことねえぞ!

匂いも…知らねえ!

「そして…レナ。お久しぶりですね。」

「え?え?私!?!」

「おい!レナ、お前会ったことあるんじゃないやねえか!」

「そんな!知らないよ!あんたのような美人に会ったことなんて!」

何だと!?

「まあ、無理もありません。ほんの姿形が変わっただけです。」

「「?」」

「【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタイン様、その節は色々とお世話になりました」

「え?」

キン!カン!キキン!

カン!「あの…。」

キン!「何ですか、【劍姫】。今は勝負の最中です。」

カカン!「私…あの人に会ったことないんですけど…。」

ギン！「…いいえ、会っているはずですよ。この中で【剣姫】…貴女と因縁深い相手です。」

キン！「…え？でも、見たこともないですよ…。」

キキン！「でしょうね。私も名前を聞くまでは全く分かりませんでした。驚きますよ、絶対に。」

ゴン！「教えてください…。」

キン！「間もなく彼女から告げますよ。そこですよ！」

カン！「…っ！」

アイズと因縁深い相手だと!?

誰だ！

「そして【凶狼】のベート・ローガ様。メレンでは大変お世話になりました。」

「…は？…メレンでだと？」

【イシユタル・ファミア】の奴か！

だが、同じファミアのレナでも知らねえと言っている…。

誰なんだ！

「また、【女神の戦車】アレン・フローメル様、【白妖の魔杖】ヘディン・セルランド様、【炎金の四戦士】アルフリッグ様、ドヴァリン様、ベーリング様、グレール様、先日『女

主の神娼殿』ではお世話になりました。「猛者」オツタル様、「黒妖の魔剣」ヘグニ・ラグナル様がこちらにおられないのは残念ですが。」

「「は？」」

「あのメイドのアマゾネス、お主らのことを知っているようだが？」

「知らない。」

「知るもんか。」

「見たことない。」

「会ったこともない。」

「いいえ！会ったことはあるわ！ガレスのおじ様もね！」

「ああ、そうだ。オラリオに長年いる者なら全員知っているはずだ。」

「何じゃと？あんな特徴的なアマゾネス、儂は知らんぞ！というか、何故お主らが生きておるー！」

「ごちやごちや五月蠅いぞ、「重傑」。御託を並べるなら脱落しろ。」

『輝夜！リリちゃんの指示の通り、彼女が告げてから仕掛けましょう！』

『了解した、団長。』

ガン！キン！ドン！キン！

「おい、てめえら！あのアマゾネスを、知っているな？」

「…知ってるニヤ。」

「一体、誰なんだ！教えやがれ！」

「間もなく、向こうから告げるよ。」

「ああ？」

「兄様…、あり得ないヤツだニヤ…。ミャーも聞いた時は腰抜けるかと思つたニヤ…。」

「何だと…？お前が？」

シユバツ！カン！キン！

「…（そろそろだな。まさか奴の活躍を願う時がくるとは思わなかつたな）」

「リヴェリア様…ご存知でしょうか？」

「あちらはお前を名指ししていたようだが？」

「正直言いますと、心当たりも見覚えもありません。あそこにいるレナ・タリーを知つて

おり、メレンや『女主の神娼殿』の発言から【イシユタル・ファミア】のはずですが。

レベル6なんていま…。あ…いや、馬鹿な…あり得ない。あり得るはずがない！」

「ど、どうしたのだ？」

「…（【白妖の魔杖】は気づいたようだな。ここまでヒントがあればな。だが、アレが奴と同一など世界中の誰も思わないだろうな。）」

「皆様はお忘れのようですね。改めて自己紹介をさせていただきます。」

「「……………(ゴクリ)」」

「私は、【ヘスティア・ファミリア】 団長ベル・クラネル専属メイド親衛隊の1人であり……、」

「「メイド親衛隊!?!」」

キンーカン!

「…ベルの専属メイド親衛隊って…何ですか?」

「私に聞かないで下さい…。」

「そして、元【イシユタル・ファミリア】…」

「ええっ!嘘っ!私、【イシユタル・ファミリア】全員の顔知っているけど、あなたの顔は知らないよ!」

「団長、【男殺し】フリユネ・ジャミールでございます。」

「「……………あ……………?」」

あの女…、何だった?

……。

「は?」「え?」「ふえ?」

「なあ?!」「はい?」「何だと?」

「やはりか…。」

「「ええええええええええええつ！」「」

「「は？」「」

「「え？」「」

「「何だつて？」「」

「「嘘だろおおおお！」「」

「「ええええええええええええつ！」「」

「やはり、こうなったね……」

「無理もないわ……」

「ア、アフロたん似メイドアマゾネスが……あのフリユネやおおお！」

「あ、ありえんのじゃ……あの体型がどうなったらあなるんじゃ……」

「……嘘でしょ。……いえ、でもあの娘の魂の色は確かアレと同じ色……」

「……………」

「おい、ヘルメス？どうした？単に自己紹介しただけではないか？」

「タ、タケミカツチさん……【男殺し】は見たことありますか……？」

「いや、ないな。私は数年前にオラリオへ来たばかりだから、子どもたちの世話やバイ

トで忙しく、彼女の顔も知らないんだが。」

「そ、そうですか。すみません！神会へ一旦つなぎます！……ヘステイアさん！あの……メイドのアマゾネスは本当に、『男殺し』のフリユネ・ジャミールでしょうか!？」

「…断言するよ。彼女は間違いなく、元『イシユタル・ファミリア』団長、フリユネくんさ。」

「(あ！ロイマンと同じく、セバスとメイによつて……うわあ)ありがとうございます！……あー、すみません。取り乱しました。解説を続けます！いやー、驚きましたね！随分と……イメージが変わりましたね！(変わりすぎだろ!)」

「?そうか。だが、なかなかできるな。先程の『蠱毒の王』程ではないがそれに迫るほどの実力者だな、彼女は。」

「え、ええ?そ、そうですか。ではどのように戦うか要注目ですね！(一体、何をやったんだ!彼らは!)」

『やりすぎよ……。恐らくゼウスかヘラがアフロディーテの特徴を彼等に教えてその型をはめたわね。アフロディーテ、絶対に怒ってオラリオへ来るわ。間違いなく。』

↳ 歌劇の国

「は?誰よ!フリユネ・ジャミールって!イシユタルのこの元団長?アポロン、貴方は

知っているのー！」

「……………馬鹿な。」

「は？何を呆けているのよ！そこのアポロンの子、知ってたら言いなさい！」

「……………あり得ない。あの…ヒキガエルがどうやって…。」

「ヒキガエルですって!?!このアフロディーテ様を!?!サンドロ、ベックリン！こいつらをやっておしまい！」

「ア、アフロディーテ様、落ち着いて下さい！」

「い、今は混乱していますのでしばらくお待ちを！」

「ふざけんじやないわよ！へステイアアアオラリオへ行ったら覚えてらっしゃい！」

第192話 主任猫、苦戦。

「あ、ありえねえ…。」

『隙ありニヤ!』

シユバツ!

「ぐつ…!この愚図2号が!毒の刃か!」

「ニヤハハハ、積年の恨み思い知れニヤ!」

「いや…たつたの数日間だけだろ…。」

「兄様…、大人しく脱落してほしいニヤ…。」

「…ふぎけるな!俺は…負けるわけには行かねえんだ!」

『アーニヤ…今はやめよう。私達の役目は【女神の戦車】の足止めだよ。』

『わかつたニヤ…。』

「ぐつ…!毒が…。この毒は…先程の…。」

くそつ…!こいつらにしてやられるとは!

他の奴らは…。

バシユ!

『速報です！………ファミリア』の『爛花』、脱落！』

凶狼のあの売女が脱落したか…。

よくもつたほうだな。

くそつ、あの女がああヒキガエルだと!?

「いただきい！」

「!!ぐうっ！」

くそつ！毒と愚図の歌のせいで、かなりステータスがダウンしてやがる！

ああヒキガエル…いやああメイドのふざけた発言のせいで、心身共に混乱してやがる

！

ルノアの拳をまともに受けるほど、落ちてやがる！

間合いを取らねば…。

他の奴らは…。

「余所見はいけないわよ！四つ子ちゃん！」

「あ…え？ぎやあああああ！」

バシユ！

『速報です！「フレイヤ・ファミリア」の「炎金の四戦士」グレール脱落！』

「グ、グレールうううう！」

「お前の番だ。居合の太刀『一閃』。」

「し、しま…うわああああ！」

『フレイヤ・ファミリア』の【炎金の四戦士】アルフリツグ脱落！』

「アルフリツグうううう！」

「輝夜！」

「ああ！」

「ちよ、ちよつと待…ぎゃああああああ！」

『フレイヤ・ファミリア』の【炎金の四戦士】ドヴァリン、ベーリング、脱落！』

あ、あいつら…。

愚図の歌で…猛毒の雨で…重力の檻に…あのメイドのふざけた発言だと！

どれだけ弱体化させれば、気が済むんだ！

「お主ら…えげつないかのう…？」

「さて！ガレスの叔父様！脱落してもらおうわ！」

「簡単に落ちるなよ？じわじわと削ってやる。」

「舐めるではないわ！この…馬鹿娘どもが！どこをほっついて歩いておった！」

あのドワーフ！あれらの波状攻撃でもまともに動いているだと！

ちつ…化物が。

「どこって…ダンジョン？」

「正確に言いますと、一旦冥府へ行って戻ってきましたと言いますね。」

「…は？」

「命ちゃん！まだ保つわね！」

「はい！お任せ下さい！」

「行くぞ！【重傑】！貴様らの5年間の怠慢、見せてもらおうか！」

ありや…時間の問題だな。

他は…!!

「そこニャー…!!」

「なっ!ぐっ!」

「はあああつ!」

「ちいっ!」

「ニヤハハハ!【女神の戦車】をこう蹂躪する時が来るとは思わなかったニャ!楽しー

ニャー!」

「この愚図共がアアア!」

くそっ!

他の奴らは何してやがる!

「ば……かな……。何故あの【男殺し】が……こうな……るのだ?」

「ぐっ!リヴェリア様!早く正気に……!がはっ!」

「【白妖の魔杖】がこうなるとは……あの小人族は敵に回すべきじゃないな。」

「ゲホツ……、貴様はレベル5止まりのはずだ!フレイヤ様が言つてた……お前の時は7年前から止まったままとな……ここ数日、何があつたというのだ!」

『時間稼ぎです!耳を貸さないで畳み掛けて下さい!』

『了解。』

「はあああああつ!」

「なっ!……その耳にあるものは……、そうかそういうこと……がはあああつ!」

『速報です!「フレイヤ・ファミリア」の【白妖の魔杖】、脱落!』

なっ!あの羽虫までもが……

くそっ!全員轢き殺して……ダメだ!先程のダメージで足まで来てやがる!

早く回復……くそっしつこいぞ、こいつら!

……俺の足止めか?やられた!

あの糞狼は何してやがる!

「あ、ありえねえ……。」

「レナは行きましたか。話をもつとしたかたのですが、後でいいでしょう。さてベ-

ト・ローガ様、お相手願ひましょう。」

「おい！その売女共！このメイドがあのかきガエルだど!?ふざけるな！」

バツ！バツ！

「……あんたが信じられないのも仕方がないさ。あたしもだよ。」

「ベート様……事実でございます。」

「嘘……だろ……!!しまつ……ぐがあああつ！」

ゴオオオオオン！

あの糞狼が！まともにメイドの鉄球を受けやがった！

「……ちつ。目が覚めたぜ。てめえがヒキガエルだろうがなんだろうが関係ねえ。ゲフツ

！」

ゴオオオオオオン！グツ！

「……その程度ですか?……!!」

「かかったな……この鎖をちぎれば意味ねえよなあ！」

グシヤアアツ！

「はあ……はあ……手こずりやがって……は？」

「ありがとうございます。おかげで身軽になりました。」

「な……2つのトゲ付き鉄球を手に嵌めて……ガッ！グハツ……この……ゲホツ！」

「…ほう。ボクシングを習得するとはな。余程いい指導者を得たと見る。」

「ボ、ボクシング？あ…確かに。かつて、天界で流行っていたアレですか？」

「うむ、そうだ。俺も一応習得しているが、あれは基礎がしっかりしているな。お、今はクリーンヒットだな。ほら、【凶狼】がグロッキーでそこをアッパーカット…すれば、な？」

『速報です！【ロキ・ファミリア】の【凶狼】脱落！』

「す、すげえ。タケミカツチを解説にしてよかったよ！」お、お見事ですな！」

「ここまでの指導者…ぜひ会ってみたいものだ。恐らく我々神の誰かがその指導者に教えたのだろう。一朝一夕ではこうはならんな。」

「あ…ゼウスだ！あの好々爺がメイくんに教えたんだ！」そ、そうですね。【男殺し】は【凶狼】に負けたことあるため、今回は見事に雪辱を果たしましたね！」

「ほう、そうなのか。心機一転で強くなったのだな。見事だ。」

「（それはないと思うな）そうですね。いや、すごいですね！【ヘステイア・ファミア】の一方的な蹂躪ですね！」

「嘘や…ベートが。ガチンコ対決でフリユネに負けるなんて…。」

「あまりにも変わりすぎじゃない…。どうやってやったの？」

「（容姿はともかく、ボクシングもあのメイドが教えたんじゃないやろうな）だが、洗練された

動きじゃった。いやはや、見事な「闘争」であつたぞ。」

『オイコラ、ドチビー号。これはやりすぎとちゃうんか?』

『ボクもそう思うよ…。ボクは以前のフリユネくんを知らなかつたんだ。今のフリユネくんが初対面なんだよ。セバスくんとメイくんが連れてきたんだ。』

『やっぱ、あの二人か。ロイマンといい、フリユネといい…なんちゆうものを解放したんや…。』

『…ベルくんの家族への想いが、彼らを解放したんだ。』

『へえ…その話、後でゆつくりと聞かせろや。』

『いいよ。あ、彼らからキミに伝言あるよ。聞くかい?』

『へ?え?あいつらがウチに…?…何や?』

『巨乳にして差し上げましょうか?幸い、モノは余っていますから…と。』

『モノつて…まさか…。嫌や…やめてや…許してや…。』

第193話 劍姫、動揺。

え……？あの人が、「イシユタル・ファミリア」のフリユネ・ジャミール？

嘘……。

『速報です！』………ファミリアの「爛花」、脱落！』

「隙あります！」【劍姫】！」

！しまった！

仕方がない！

【目覚めよ】

【エアリエル】

ゴオオオオオ！

「くっ！あの時の風ですか！」

「貴女は強い……けど、もうこれで終わり。」

「なら、私も奥の手を出しましょう。」

え？……奥の手？

『速報です！「フレイヤ・ファミア」の「炎金の四戦士」グレール脱落！』
な!?

『フレイヤ・ファミア』の「炎金の四戦士」アルフリック脱落！』

そんな！こんなに早く!?

【今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。】

長文詠唱!?

いけない！止めないと…。

ダメ！速くなって止められない！

『「フレイヤ・ファミア」の「炎金の四戦士」ドヴァリン、ベーリング、脱落！』

【汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人。】

それに…歌や毒、そしてフリユネ・ジャミール、立て続けの速報で集中できない！

ステータスがかかなり低下している…！

『速報です！「フレイヤ・ファミア」の「白妖の魔杖」、脱落！』

うるさい！

【空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ——星屑の光を宿し敵を討て！】

【ルミノス・ウインド】！

「ぐっ！」

【目覚めよ】

【エアリエル】

ゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオ！

「はあ…はあ…防げた…。!?あの人はどこに!?あ…。」

空中にいくつかの風の球が……。

その上にあの人が乗っている。

「【剣姫】…この魔法で貴女を倒すことはできない。それはわかってました。風なら貴女の方が有利。ですが、私が欲しかったのはこの状態です。」

何をする気……？

ゴツ！ドガツ！ドゴツ！

!?

「ぐがあああああつ！ちよこまかと動きやがって！こいつは、絶対にヒキガエルじゃねえええええ！ガハアツ！ゲホツ！グハツ！」

え…？何、あれ…。

フリユネ・ジャミールの戦闘スタイルじゃない！

ベートさんが…蹂躪されている。

ヒュッ！

!?

「ぐっ！」

「余所見とは余裕ですね。ですが、それがいつまで保ちますか？」

何…風の球の間を飛び交って…。

飛び交う程…速く…鋭くなっている！

止めないと…ダメ！

レベル6の速さを…超えている！

「そろそろ、脱落させてもらいます。」

ヒュッ！シユバツ！ヒュッ！

ぐっ！空中の風の球の間を飛び交って…。

あ…私を中心に複数の球が囲んでいる…。

しまった！

「これで貴女は籠の中の鳥です。ご覚悟を。」

シユバツ！シユバツ！シユバツ！シユバツ！

「うああああああっ！」

強い…。何でそこまで強くなったの…。

ベル……のおかげなの……？

……認めない！

【エアリエル】！

「ぐっ……風の守りですか。ですが、それも食い破ります。」

ガリッ！ガリッ！ガリリリッ！

ダメ……時間の問題。

もつと早くエアリエルを発動するべきだった！

『速報です！「ロキ・ファミリア」の「凶狼」脱落！』

な……ベートさんまでも。

残るのは……リヴェリアとガレスだけ!?

あれだけいた【フレイヤ・ファミリア】も【女神の戦車】だけ!?

そんな……あり得ない！

ガレスは……【絶†影】重力の檻で、死んだはずの【紅正の花】と【大和竜胆】と戦っている……。

リヴェリアは……何で棒立ちに……？あ……【不冷】の魔法……。

くっ……！

無理……助けられない！

「…貴女には失望しました。ベルへの想いがその程度だったとは。」

!?

「それでは、彼の横に並ぶことができない。彼は…もつと先を見据えている。」

な…。

シュバツ！

「【劍姫】…。貴女はまだ復讐に囚われているのですか？」

何で…わかるの!?

シュバツ！シュバツ！シュバツ！シュバツ！

ぐっ！

「7年前…ここ18階層で、神エレボスによって召喚された【神獣の触手】を縫い止めた貴女の目の意味…その2年後にわかりました。」

「な…。」

「5年前…私はここダンジョンの下層で…私以外の仲間を失った。そして…復讐の炎に堕ちた。その時の私の目は7年前の貴女の目…いえ今の貴女の目に瓜二つだった。」

!?

「復讐を捨てろとは言いません。私もかつて復讐に堕ちたのだから。」

シュバツ！シュバツ！シュバツ！シュバツ！

ああああっ！

「貴女は何のために復讐をするのかは聞きません。ですが…復讐を果たした後に、貴女の求めていた方は戻ってくるのですか？」

「…戻ってくるはず！」

「では…、その血塗られた手でその方を抱きしめられるのですか？その方はそれを喜びますか？」

「な!?あ、あ、あ……。」

「……………これで終わりです！」

『速報です！「ロキ・ファミリア」の「超凡夫」、「貴猫」、「……」、「……」脱落！』

『「ロキ・ファミリア」旗、焼失！「ロキ・ファミリア」敗北！』

ピタッ。

彼女の剣が私の喉前で止められた…。

負けた…。

レベル6の私が…レベル5に…。

「……………貴女の負けです。【劍姫】。」

「……………」

「先程の問い、よく考えたほうがいい。私は…その問いに答えるのに5年かかったのだ

から。」

「…どうやって…克服したのですか…？」

「全て打ち明けなさい、ベルに。」

「……な…。で、できない…。」

「彼が拒絶するからですか？ 貴女の知っている彼はそのような人物ですか？」

「!?ち、違う…。」

「時間はまだあります…。私が言えるのはそれだけです。」

『アイズ・ヴァレンシユタイン様に告げて下さい。ベル様を応援しにいくか、その場で座り込むかを。』

『わかりました。』

「【劍姫】…私たちは【フレイヤ・ファミア】の旗を目指します。貴女たち…【ロキ・ファミア】は負けたのです。ここに座り込むか…彼の勇姿を見に行くかを選びなさい。」

「……行く。ベルのそこへ行く。」

「なら、そうしなさい。彼の戦いは…貴女に何かを教えてくれるかもしれません。では。」

そういつて【薫風】は、他の者と共に【フレイヤ・ファミア】の旗へ向かった…。

「ベル……。私は…どうしたらいいの？」

行こう…、ベルと【猛者】が戦っている場所へ…。



タタタタタッ！

「随分とキツイことを言ったものだな…。」

「……………」

「悪いことをしたと思っっているかもしれないけど、あれでいいのよ！リオン！」

「……………」

「私が言えることではありませんが、あれでいいのです。あれで立ち上がれなければ、ベル様の横に並び立てることはできないでしょう。」

「そ、そうね（未だに慣れないわ…あの【男殺し】とわかっていても…全部変わっちゃっているもの！）」

「だが、あの娘に真正面から言えるのは、お前だけだ。…私達が生き返ったのも何だがな。」

「……………ベルは【剣姫】を救えるのでしょうか？」

「リオン！ダメよ！貴女の愛する人を信じなさい！」

「なっ！……………そ、そうですね。」

「はあ…早く慣れる。このポンコツエルフが。」

「か、輝夜！私はポンコツエルフではない！」

第194話 超凡夫、揉事。

「がはあ…。あ…。」

「ラ…ウル。」

自分は先程まで「ロキ・ファミリア」の旗を守っていたつす。

「カーリー・ファミリア」の人達と一緒に…。

だけど…。

【ヘスティア・ファミリア】の【蠱毒の王】の急襲によってたちまち【カーリー・ファミリア】の人たちを瞬時叩きのめし脱落させ…

自分…【ロキ・ファミリア】の旗の守り手も…。

かろうじて、全員脱落してないけど…時間の問題つす。

『速報です！「…………ファミリア」の【爛花】、脱落！』

!?

レナ・タリーも…!?

「…この程度ですか。では旗を燃やさせていただきます。」

『待って下さい！まだ…早いです！』

『…了解しました。』

『ラウル…、【蠱毒の王】は誰かと話しているわ。』

『確か…『眼晶』だったけど持っている様子がないっす…。』

『…あ。カチューシャに紛れてわからないけど、何かを掛けているわ…。』

『…アキ。後は頼むっす。脱落すると共にアレを壊すっす。』

『ダメよ。貴方だけ逝かせない。私もやるわ。』

『すまないっす…。』

『謝らないですよ。』

『速報です！【フレイヤ・ファミリア】の【炎金の四戦士】グレルール脱落！』

『なっ…！』

『【炎金の四戦士】までも…。』

『（ここで【貴猫】へ意趣返ししますか）バーチェェさん、例のプランを実行して下さい。』

『了解…！』

『ちっ…ダメね。』

『行くっす！』

『【フレイヤ・ファミリア】の【炎金の四戦士】アルフリッグ脱落！』

立て続けに!?

気にしたらダメっす！

まだ【ロキ・ファミリア】は残っているっす！

「無駄な抵抗はおやめなさい。貴方方の負けは確実です。」

「そんなの…まだわからないっす。自分たちはまだここにいるっす！」

「すぐに脱落させなかったのが致命的よ！行くわよ、みんな！」

「「おおっ！」」

『「フレイヤ・ファミリア」の【炎金の四戦士】ドヴァリン、ベーリング、脱落！』

まだっす！

『!?気をつけて下さい！彼らは通信機を壊そうとしています！』

『了解した。これから仕掛ける。』

「ああ、【超凡夫】。」

「へ!?な、何っすか？」

自分に？

「ご結婚おめでとうございます。村へお帰りになるそうですね？」

「「えっ!?!」」

え？

『速報です！「フレイヤ・ファミリア」の【白妖の魔杖】、脱落！』

空気を読んでほしいっすー！

「ラウル……、どういうこと？ねえ？」

「アアアア、アキ！落ち着くっす！剣の向き先が違っす！」

「何でも、メイン通りにあるカフェの店員とねんごろになったそうですね。」

あ！あの子っすか。

いや、あの子は…。

シユバツ！

ひいっ！

「ラウル……教えてくれる？」

「ま、待っつす！それは…」

「私どもの参謀が見かけたそうです。カフェの裏手で貴方が彼女に何かを渡しているのを。そう、彼女の左手を包むかのように…。」

そ、それは！

ヒュン！

ひいっ！

「……………」

「アキイイ！違っつす！彼女とは…」

「そして、右手を彼女の肩に…」

ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！

「ちよ、ちよつと黙ってほしいつすうううう！」

「ラウルさん…見損ないました。」

「アキさんという方がいるのに…。」

違うつすううううう！

「おや、【貴猫】と？二股ですか？」

「二股!？」

「ち、ちが…ひいつ！」

キン！ヒュッ！カン！

「ま、待つつす！アキ、違うつす！」

「なるほど、【超凡夫】と言いながらベッドの上では違うのですね？」

「ベッドの上!？」

ガキイイイ！

「最低です！」

あんたは黙ってほしいつすううう！

【蠱毒の王】 ってそんなキャラだったつすかあああ！

ググッ……

「アキ！話を聞いて欲しい……（あ、ダメだ。眼からハイライトが消えている）っす……」
「（可哀想になってきたな……）ああ、補足を忘れていました。同じ故郷の女性が結婚のため村へ帰ることになり、その祝い金として渡したそうですね。なんでもその娘は幼馴染の妹だそうですね。」

ピタッ

あ、危なかつたっす……もう少しで喉を貫かれるとこだったっす……

「「え？」」

「……ラウル？そんなの？」

「そうっす！そう言おうと思つたら……。」

「ご、ごめん……。」

「ですが、その幼馴染は貴方を懸想していたそうですね？」

ヒュッ！

ひあああああつ！

首を後ろへ下がらなかつたら……やばかつたっす！

「何故断つたのですか？せつかくの縁談だったのに？その娘もカフエの看板娘で美人でしたそうですね？その姉である幼馴染も美人と思えますが。」

ピタッ

「「え？」」

「はあはあはあ…怖かったつす。アキ、全部話すから落ち着いてほしいつす。」

「わ、わかつたわ…し、仕切り直しましょう。みんな。」

「はいーラウルさん、ご命令をー！」

「……………みんなのことが一時信じられなくなつたつす…………。」

「そうそう、貴方はこの後に確かこう言いましたね。」

あ！

「ちよ、ちよつと待つつす！」

「『自分は既に決めている人がいるつす。同期ですごく頼りになる人が。なので…断るつす。』と、確かこうでしたね？」

何で一語一句知っているつすかあああああつ！

「え？」

『それってアキさんのことじゃ…。』

『それ以外考えられないよね？』

「そして…つ、話の邪魔をしないでくれませんか？」

「その先を言わせるわけにはいかないつすうううう！」

ドン！

なっ！

「あー！すみません、ラウルさん足が滑っちゃいましたー（チラツ）。」

ちよ…ぶべっ。

「ちよつとラウルさんそこにいたら、邪魔ですよー（チラツ）。」

なっ！

「そして、その娘は貴方が平凡のため騙されてないかを心配されていましたね？」

「『……………』」

みんな！

その目は効くつす！やめてほしいつす！

『速報です！「ロキ・ファミア」の「凶狼」脱落！』

ファツ！ベートさんまでも！

こつちはそれどころじゃないつす！

「そして貴方はこう言いましたね？『心配いらないうつす。騙されたとしても自分は命を預けるほど信用しているつす。その人の名は…』…無料ですよ。【超凡夫】。』

「うおおおおおつす！アキ、今の内つす！」

「え？あ、そ、そうね！え、えーい。」

嘘つばいつすうううう！

【貴猫】アナキティ・オータム様、貴女のことです。おめでとうございます。」

あああああああ！

「え、えと…ラウル。そ、そうなの…？」

「……………そうつす。」

「わ、私もラウルのことを命預ける程信用している…。」

「おや、単に仲間だけの関係なのですか？」

え？

「いいえ！ラウルさんとアキさんは既に恋人の枠を超えています！」

「この際です！いい加減にはつきりして下さい！ホーム内でも外でも、老夫婦みたいに
見せびらかして、私達をやきもきさせないで下さい！」

【超凡夫】、漢を見せて下さい。」

ちよ、ちよつと！

どつちの味方つすかあああああ！

「私は…ラウルとそういう関係になってもいい…。」

「あ、アキ…。自分はアキのことを大事に想っているつす…。」

「私も…………。」

「おお！とうとうこの瞬間が！直接この目で見れるとは！」

「長かったです…。よかったです…。」

「残念ですが、時間切れです。」

「「え？」」

え？あ！いつの間に自分らの足元に火炎石が!?

【蠱毒の王】が持つているのは…自分らの魔剣!?

いつの間にかすめ取ったつすか!?

「続きはあちらでやって下さい。」

「ちよ、ちよと待つつすー！」

こ、こんなのないっすー！

ドガガン！

バシユ！バシユ！バシユ！バシユ！

『速報です！【ロキ・ファミリア】の【超凡夫】、【貴猫】、【…】、【…】脱落！』

『【ロキ・ファミリア】旗、焼失！【ロキ・ファミリア】敗北！』

—————

「「爆発しろ！【超凡夫】！」」

「何やっとなねん…。ラウル、アキ…。」

「うわー…これは聞いてないけど…。バーチエくん、すごいなー！」

「リリちゃん、「ロキ・ファミリア」に何か恨みでもあるのかしら？」

「ロキ、助言するわ。あの二人をホームから出させなさい。」

「ん？あー、そやな。というかあの子ら、コレ『神の鏡』で世界公開されとるのを忘れとるな…。」

「バーチエ…ああいうことができるようになったのじゃな。意外じゃ。」

「まあ、ええわ。いいきっかけになったわ。感謝するで、ドチビー号。」

「ん？あー、まあね（メイくんからの指導の賜だろうね）。というか、キミ負けたんだよ？」

「フィンとレフィーヤが脱落した時点で負けや。次は色ボケ、お前んとこや！」

「まさか…ここまでやるなんて。でもオツタルとミア、そしてアレンがまだいるわ。」

「ベルくん…。」

第195話 重傑、抵抗。／九魔姫、観念。

『「フレイヤ・ファミリア」の「炎金の四戦士」ドヴァリン、ベーリング、脱落！』

む！アイズが…。

早く向かわねば…

ガキイイイ！シユバツ！

ぐっ！

「ダメよ！ガレスの叔父様！」

「大人しくしとけ、【重傑】！」

くそっ！

音波攻撃はともかく【蠱毒の王】の毒はまだ効いとる。

更に、【絶†影】の重力の檻に、あまりに変貌した【男殺し】…。

呪詛よりもキツイわい！

「こんなチクチクした攻撃では儂を倒せんぞ！」

「ええ、そうね！わかつていたわ！」

「それが我らの役目なのだからな。」

役目じゃと…?!

儂の足止めか!

なら、抜け出さないと…ぬおっ!

いきなり重力が強くなったじゃと!

「申し訳ありませんが、しばらくそこにいてもらいます。」

何故! 儂が抜け出そうとわかつとった!?

毒が抜けつつあることを何故見抜ける!?

『速報です! 「フレイヤ・ファミリア」の「白妖の魔杖」、脱落!』

何じゃと!? リヴェリアは何をやつとる!?

む…!? 【不冷】か。

行こうにも、シャクティが立ち塞がってるからできんか…。

フィンやロキの言う通り、「ヘスティア・ファミリア」へ挑むんじやなかったわい。

あまりにも計算尽くされておる!

だが! このままでは終わらんぞ!

「ぬおおおおおっ!」

「あら! やはりそうきたわね!」

「全ては奴の予想範囲か。」

何じゃと…？

「だけど！それも対処済みよ！」

ガンッ！

ぐっ！左膝を…。

「そら、こつちもだ！」

ガン！

ぐおっ…！右膝を…。

これでは思うように動けんわい！

「お主ら！正義を名乗るなら正々堂々とやらんかい！」

「やだわ！ガレスの叔父様！正義を名乗るからこそ、こうしているじゃない！」

何じゃと…？

「脱落させないようにやっているではないか。ボケたか？【重傑】。」

うぬ…！

「ぐがあああああつ！ちよこまかと動きやがつて！こいつは、絶対にヒキガエルじゃねええええ！ガハアツ！ゲホツ！グハツ！」

な、なんじゃと！

あれは…【男殺し】の戦闘スタイルではない！

馬鹿な…。

「お主ら！あのアマゾネスは本当に【男殺し】なのか!?姿形も戦闘スタイルも全く違うではないか！」

「……………」

何故…黙るのじゃ…。

「ガレスの叔父様…信じたくない気持ちはわかるわ。」

「我らとて、到底信じられなかった。だが、事実だ。」

「何…じゃと…!?!」

この騒がしい娘共がこうも沈痛に語るとは…。

バシユ！

『速報です！【ロキ・ファミリア】の【凶狼】脱落！』

な!?!

ベートが…素手でのガチンコで負けるとは…。

「これまでだな、【重傑】。」

「ガレスの叔父様がレベル7か8になってたら、間違いなく敗れていたわね。」

「…皮肉か？それは。」

「ああ、皮肉だとも。お前らは7年前であいつらから何を学んだのだ？」

「5年前に死んだ私達が言うことじゃないけどね！」

「揚げ足を取らないで下さいますか？団長様。」

死んだ……じゃと？

「お主らは……本当に死んだのか？」

「ええ、そうよ！ここの下層でね。」

「ダンジョンのイレギュラーにやられた。だが、それは我らの油断と傲慢が元だったから止むを得まい。」

「……【疾風】のやったことは知っておるのか？」

「ええ。知っているわ。」

「貴様らがあやつの業を糾弾するなら、『アストレア・ファミリア』そして『ヘステイア・ファミリア』を完全に敵に回すと思え。」

「……そうか。何故生き返ったのか話してくれるかのう？」

「ええ！この戦争遊戯で私達が勝った後でね！」

「しかるべきお人が説明してくれるだろう。心して待つておけ。」

しかるべきお人じゃと……？

『速報です！【ロキ・ファミリア】の【超凡夫】、【貴猫】、【……】、【……】脱落！』

『【ロキ・ファミリア】旗、焼失！【ロキ・ファミリア】敗北！』

な…。いや、当然の結果か…。

ベートが脱落するのを待つておったな…。

アイズは…寸前で止められたか。

「さて！ガレスの叔父様！約束通り、当分のお酒は奢ってもらおうよ！」

約束じゃと？本当に覚えておるのじゃな…。

「この5年間ずっと、下層で大量の酒を流し込んでやったぞ！」

「知らんな。そもそも、この5年間で我らはそこにいなかったのだから。」

「何じゃと…？」

「ではね！ガレスの叔父様！私達は「フレイヤ・ファミリア」の旗へ向かうわ！」

「…ミアは儂らのように甘くはないぞ。…儂はどうすればよい？そちらの傘下に入った

じゃろうっ？」

「何も。」

「何じゃと？」

「ここで座り込むのもよし。若様の勇姿を見るのもよし。任せます。ただし、我らが「フ

レイヤ・ファミリア」と戦うのに一切手出し無用だ。」

「…お主らだけの力で本当に勝ち抜くつもりか。ふん、いいじゃろう。そもそも儂はあ

の若造の戦いを生で見とらんからのう。間近で見物させてもらおうわい。」

む、【炎金の四戦士】がいないな…？もう脱落したのか。

ああ…私のようにあまりの衝撃で棒立ちして、そこをやられたか。

「余裕だな？ 【九魔姫】。」

「シャクテイ…、あそこにいるのは本人たちなのか？到底信じられないんだが。」

「ああ、本人たちだ。信じられないのは当然だ。私もそうなのだから。」

「何だと？何故、今の今まで出てこなかったのだ!？」

「…死んでいたからだ。」

「は？」

「あいつらは本当に5年前に死んだんだよ。【九魔姫】。」

「馬鹿な！では、生き返ったというのか！あり得ない！」

「…あり得るのだ。5年前から遺体を持ち帰り生き返ったんだ。」

「は？」

あり得ない！そんなことが起こってたまるものか！

誰だ！そんなことをした奴は！

あ…、…いたな。

「まさか…こんなあり得ないことを成したのは…ベル・クラネルなのか？」

「…そうだ。生き返らせたのは別の奴だな。」

「…ははは。〔ヘスティア・ファミリア〕、いやあの少年の敵となった瞬間で我々の敗北は決まったわけか。」

「意外と受け止めるのだな…?」

「シヤクテイ、私はお前よりあの少年がレベル1の時から見ている。あの少年がレベル1でミノタウロス強化種を倒したのを目の前にしている。その異常さもな。」

「…そうか…。」

「フィンはその少年に嫉妬しているようだが、私は違う。あの少年が…7年前ここで死んだ〔静寂〕…そして〔暴食〕が求めた英雄だと思っている。神フレイヤの魅了騒動の直後に私がそこにいたら、間違いなく〔ヘスティア・ファミリア〕へ味方するよう強く推していた。」

「そ、そうか（その〔静寂〕が生きていて、彼の実の伯母であることを知ったらどうなるのだろうか…?）。」

「…?まあ、間もなく我らの旗は落ちる。聞くが、何故私を脱落させなかった?」

「お前が王族妖精だからだ。お前を脱落させると多くのエルフを敵に回す。だから、無力化させるしかなかった。」

「そうか…お互いままならないものだな。」

『速報です!〔ロキ・ファミリア〕の〔凶狼〕脱落!』

!?ベートが…得意の素手で負けた…か。

「聞くが…あのアマゾネスのメイドは本当に〔男殺し〕なのか？」

「信じられないのもわかる。私も今でさえ信じられないのだから。事実だ。」

「そうか。それもベル・クラネルなのか？」

「いいや、別の奴さ。…それもベル・クラネルが原因なのは否定しないがな。」

「どういう意味だ？」

「この戦争遊戯が終われば、わかるさ。」

頭が痛くなってきたな…。

ロキの言う通り、あの少年を入団させるべきだったな。

…あの時の門番を探し、懲らしめたいな。

む、アイズが…押されてるな。

あの戦法は…風の籠か。

アレではアイズの魔法は生かせられん。

『速報です！〔ロキ・ファミア〕の〔超凡夫〕、〔貴猫〕、〔…〕、〔…〕脱落！』

『〔ロキ・ファミア〕旗、焼失！〔ロキ・ファミア〕敗北！』

負けたか。道理だな。

ラウルたちでは〔蠱毒の王〕には勝てん。

アイズは…寸前で負けたか。

彼女なら…、できるかもな。

復讐者を止められるのは、復讐を成し遂げた者しかできない。

その先にあるものを知っているのだから。

「さて…これで私達はお前たちの傘下に入った。何をすればいいのだ？」

「何も。」

「何だと？」

「ここで座り込むのもよし。ベル・クラネルの戦いを見に行くのもよし。」

「そうだな…。今のあの少年を知りたい。」

「そうか。方向は…この先だ。」

「そうか、お前たちの健闘を祈る。」

…アイズがおぼつかない足取りで向かっているな。

む、ガレスも向かうようだな。

【ロキ・ファミリア】で生き残ったのは三人とはな。

ロキ、許せ。

ロキ…アイズは「ヘステティア・ファミリア」へ改宗させるべきだ。

そこには…アイズをこの半年で大きく変化させた少年がおり、復讐の先を知っている

同胞がいるのだから。

第196話 主任猫、焦燥。

『速報です！「ロキ・ファミリア」の「超凡夫」、「貴猫」、「……」、「……」脱落！』
『「ロキ・ファミリア」旗、焼失！「ロキ・ファミリア」敗北！』

糞がっ！

生き残りはオツタルとミアと俺だけか…。

「ロキ・ファミリア」のやつらは…「劍姫」「重傑」「九魔姫」か。

奴らは…あの兎の援護に向かう気なのか…？

ちくしょう！このままではミアのところに奴らが攻め込まれる！

オツタルがまだ戦っているのに旗を失うわけにはいかねえ！

せめて1人ぐらいは脱落させてやる！

「ニャー！隙ありニャー！」

ぐっ！こいつら立て続けに攻めやがる！

「はあっ！はあっ！はあっ！」

ぐっ！この、はっ！

「兄様、ゴメンニャー！」

ぐうっ！

はあ…はあ…。

休ませてくれねえ…、そうか!?

こいつら俺を疲れさせるつもりだ！

ふざけんじゃねええええ！

『傾合いです！【象神の杖】以外の他の者は【フレイヤ・ファミリア】の旗へ向かって下さい。レベル7の【小巨人】1人だけです！』

「キタキタキタニャー！」

「よっしや！行くよ！」

「母ちゃん、行くニャー！」

なっ！奴ら、一斉に俺たちの旗へ向かいやがった！

くそっ！止めないと！

ガキイン！

なっ！

「お前の相手は私だ。【女神の戦車】。クノツソス以来だな。」

【象神の杖】か！

レベル5と聞いたが、数日前にランクアップしたばかりと聞いた。

だが、今の俺では…。くそっ！

こういう形に持ち込むのが狙いだっただのか！

「じゃー、バイバイニャー！サー！」

「すまないね。これも作戦なんだよ。」

「兄様…、ゴメンニャ。」

タタタタタタッ！

「ま、待ちやがれ！グツ！」

「かなり弱体化されているな…。」

「誰のせいだと思ってるんだ！ふざけるな！」

「それはすまん。だが、これも戦争だ。」

「くそっ！てめえだけでも道連れだ！」

「悪いが、そうはさせない。」

ガン！ガン！ガン！

ちくしょう！

本来なら圧倒して勝てたはずだ！

このままでは…。

キン！ゴン！ガン！

「先に謝っておこう。【女神の戦車】。」

「ああ!?何だつてんだ!?!」

「【戦車の片割れ】は全てを知ったぞ。お前が遠ざけ、ミアに保護してもらったことをな。」

!?!

ガン!キン!ゴン!

「【戦車の片割れ】は当初、特攻覚悟で死ぬつもりだったぞ?」

あの愚図があああああ!

何考えてんだ!

キン!キン!キン!

「だが、神フレイヤ魅了騒動でお前達のあの場を見ていた、リオンが話してくれたおかげでわかった。お前が遠ざけ神フレイヤが追放し、シルという町娘に扮して【戦車の片割れ】を拾い、ミアに保護してもらったことがな。」

!?!

あの羽虫が余計なことを!

だから、フレイヤ様の魅了で骨抜きにするべきだったんだ!

ガキン!ガゴン!

「女神の戦車」…、全てを知った【戦車の片割れ】は神ヘステイアと神アストレアに、「フレイヤ・ファミリア」全員の命を嘆願した。勝利に貢献する代わりにな。」

「な……あの愚図が……」

「お前の気持ちはわかるとも言えんが、7年前の大抗争で私はアーデイを失った。」

「……………」

「私はアーデイを冒険者にするのを止めなかった。だが、私は甘かった。だからアーデイは、死んだのだ。」

「……そうだ。てめえはあの女を冒険者にするべきじゃなかったんだ！ホームの奥に閉じ込めればよかったんだ！そうすれば、クズどものせいで死ぬことはなかったんだろうが！」

あの女がノコノコと出てきたのも悪いが、その場へ出したてめえが一番悪いんだよ！
姉なら……守るべきだったんだ！

ガン！ガン！ガガン！

「そうだな。だからお前の判断は間違ってる。」

「けっ……」

「打ちのめされようが、けなされようが、生きていればそれでいいのもわかる。」

「……………」

「だがお前にとつての計算外は、「戦車の片割れ」はああいうことをされてもお前を慕っていたことだ。…【戦車の片割れ】はレベル4だ。何故、オラリオから追放しなかった？まだ安全だろうに。」

「あの世間知らずの愚図が、のうのうとオラリオ外で生きれるわけがねえだろうが！あの能天気が簡単に騙されて、奴隷にされたらどうするんだ！あのドジが流砂や水に流されて死んだらどうするんだ！」

誰かが見てやらねえと、あつさり死んでしまふんだよ！

あの愚図は！

「…そ、そうか。だが、何故…恩恵を封印しなかった？魅了で骨抜きにしなかったのだ？」

「…俺もそうするべきだと言った！だが、フレイヤ様が拒否した…。それが答えだ。」

「…そうか。神ヘステティアと神アストレアの予想は当たっていたというわけか。」

「…おしやべりは終わりだ。さっさとめえを倒してあいつらを轢き殺してやる！」

「残念だが、そうはさせん。」

ちつ…！余計なことを言っちまつたぜ。

…あの愚図を失うという恐怖感はその時の深層で十分だ！

そんなのゴメンだ！

わけがないわ。」

「もう少し優しくできなかつたの?」

「あれで優しくしたつもりよ? アレンは…アニーヤを骨の髄まで魅了させて人形のようにさせてくれ、と言ったのよ? 聞いた時はさすがに啞然としたわ。」

「…うわ。そこまでかい?」

「当然、私は反対したわ。アニーヤはアニーヤの魂の輝きがある。その輝きを私の手で曇らせる? いいえ、そんなことはできない。だから一旦追放という形にして、ミアのところに預けたの。納得させるのに大変だったのよ? あの子に。」

「やはり、そうだったんだね。」

「ええ、でも。アレンはシル…私の警護をすると言いながらアニーヤをずっと見守っていたわ。何人かは気づいていたようだけどね。」

「シスコンやないか…。」

「…そうね。それでも度を過ぎていたわ。以前アニーヤに言い寄る冒険者がいたわ。それを知ったアレンは、その子の後をつけてダンジョンで因縁つけて、冒険者に復帰できないほどの大怪我をさせたわ。その時はさすがに嚴重注意したけど、それでもあの子はそっぽを向いて反省してなかつたわ。本当に困った子だわ…。」

「………………うわあ。」

「…ヘステイア。アーニヤが貴女に付く代わりに私達の命の嘆願をしたって本当なの？」

「そうだよ。事実を知ってもなお、あの子は泣きながらボクたちにお問い合わせをしたんだよ。いい子じゃないか。」

「…そう。アーニヤらしいわね。」

第197話 麗傑、驚愕。

残るのは「小巨人」と「猛者」か。

あたしらがここまで来るとはね。

「春姫、まだ動けるね？」

「はあ…はあ…、はい！まだでございます！」

「よし…あんたは何もするな。突っ立つてるだけでいいんだ。といつても残り二人だけどね。」

「ええ、そうでございますね。」

よくここまでやれたものだよ。

【ロキ・ファミリア】も降すなんてね…

まあ、仕方がないさ。あんな弱体化を重ねられたらね。

あの日のことは忘れられないよ…。

~~~~~

「では、自己紹介をしてもらいます。逆に門番からです。」

「…ワタシハ、ザニス・ルストラデス。ヨロシクオネガイシマス。フシンシャハトオシマ

セン。」

「「え?」」

ザニス・ルストラ?

確か、「ソーマ・ファミリア」団長じゃなかったか?

こんな奴じゃない!

「私はミュラーです。ベル様のために魔道具を作るために存在しています。」

「「は?」」

知らないねえ。。

あ…春姫から何か聞いたことあるね。

確か、閨派閥じゃなかったか?

「皆様、お初にお目にかかります。特に、ベル・クラネル様、ヤマト・命様、アイシャ・ベルカ様、サンジヨウノ・春姫様、お久しぶりでございます。私はフリユネ・ジャミールでございます。」

「「ええええええええ!」」

は?あのメイド…何て言った?

聞き間違いかねえ…。

ああ、聞き間違いに決まっていますとも!



(ああ、やつぱり…本人だった。)

「静粛に、皆様五月蠅いですよ?」

「「いやいやいやいや!」」

これを見せつけられて、静かにしろだつて!?

ふざけんじゃないよ!

「ふむ、何か言いたいそうですね。質問がある方はまとめて、リリ嬢お願いします。」

「……………」

「おい、呼んでいる…あ、ダメだ。こいつ…気絶してやがる。」

……ああ、チビスケの元ファミアだったか。

「ええっ!リリ!リリ!しっかりして!」

「…はっ!べ、ベル様…リリは…あり得ないことを聞いた気がします。ゆ、夢ですね?」

「残念だが、現実だぜ?」

夢と思いたいねえ。

こんなの…夢じゃなきや何だつてんだい!

「……………質問です。まず…愚者様のフォローとなる方、ミュラー様ですが。彼は…闇派

閥にいた方ではないですか?」

「ええっ!私も初めて見るわ!」

「私もでございますねえ。」

「…闇派閥。その方は何をしたのですか?」

「モンスターとモンスターの融合をやった方です。食人花とコボルトが融合したモンスターに、ベル様も【ロキ・ファミア】も苦しめられました…。」

確かにそういう話だったが、【ロキ・ファミア】も関わっていたのか…。

「ニヤ!?あの時の!?嘘ニヤー!」

「ふざけんニヤー!全然違うニヤー!」

「あんだと?…そんなことをやったのか?こいつは。」

「はい、ライラ様。ですが…彼は髪の毛とメガネをしていませんでしたか?何故…目と鼻と口と耳以外全部剃られているのですか?」

「反省の意だそうです。」

『『嘘だ!絶対に嘘だ!』』』

絶対にこいつらがやったはずだ!

「はい、セバス様のおっしゃる通り。私は恐ろしいことに手を出してしまいました。深く後悔しております。そのため、不要なものを全て剃りました。」

「アストレア様…?」

「…嘘は言っていないわ…。」

「彼は魔道具作製について、長けているそうです。賢者、貴女のフォローになれるはずですよ。」

「私としてはそれは非常に助かるのだが…、大丈夫なのかな？」

「もちろんです。私達を誰と想っているのですか？」

「…そうだな。ミュラー、私は愚者だ。よろしく頼む。」

「はい、愚者様…。「待って下さい。それでは示しが付きません。なので、魔道具作製部を設けましょう。部は愚者とミュラーでいいでしょう。」部長、よろしくお願いします。」

「魔道具作製部…。まあ、名前は何でもいいが。部長か…。」

魔道具作製部…。ウチの団長のアスファイが羨ましがるところだねえ。

…何故だろう？アスファイも入る未来が見えてしまったよ。

「ミュラー様はわかりました…。次は…そちらの…門番の方です。ザニス・ルストラと言いましたが、リリが前にいた」「ソーマ・ファミリア」の団長ではないでしょうか？」

「ああ、あたしも聞いたことがある。だが、こんなやつではなかったはずだぜ？」

「俺もだ。同姓同名があつたファミリアにいたのか？リリスケ？」

「いるわけないじゃないですか！二人もいてたまるものですか！」

「お、おう…。」

「彼はリリさんの言う通り、「ソーマ・ファミリア」団長の「酒守」のザニス・ルストラ

です。ほんの姿形が変わっただけですが？」

「変わりすぎです！何ですか！身長が前の二倍もあり、筋肉がこんなにありません！それに、何故この方も目と鼻と口と耳以外、全部剃られているのですか！それに色白だったのに、何で日焼けしたかのように小麦色になっているんですか！」

だろうな。あたしもそう見る。

変わりすぎだろ！

「ええっ！に、二倍？」

「ほんの手を加えました。」

『絶対に、ほんの、じゃない…ガッツリだよ…。』

『同感だニヤ…。』

「ですが、ザニスさんは反省して身も心を尽くして門番をしてくれるそうですよ。そうですね？」

「ハイ。メイドチョウ、ソウデス。」

「何で、カタコトなんですかああああ！」

「リ、リリ！落ち着いて！」

「リリサマ。イママデータイヘンモウシワケアリマセンデシタ。」

「ハステイア様あ！」

「う、嘘は言っていないよ。サポーターくん。」

「そんな……。」

「だからかー。ソーマが震えてボクに土下座してきたんだよ。」

「「は？」」

「【ソーマ・ファミリア】を【ヘスティア・ファミリア】の傘下に入れてくれて……。」

「はあ!?……こんな……形で……リリの復讐が終わるとは……思いませんでした……。」

「リリ……。」

「(ガシツ!) ベル様あああ!」

「うわ!……よしよし。」

「おい、何を気安くベルに抱きついている。離れろ。」

「(バツ!) はい!すみませんでした!」

7年前の大抗争で猛威を振るった【静寂】が……。

坊やに手を出さだけで死の覚悟が必要だねえ。

……あのメイド長、約束は守ってくれるんだろうね?

## 第198話 麗傑、呆然。

…知りたくもなかったが、知るしかないだろうね。

コイツのことを…。

「気を取り直して…最後の方です。あの…、本当にフリユネ・ジャミール様ですか？」  
聞きたくない！

「はい、そうです。リリルカ・アーデ様。」

「…まさか、元「イシユタル・ファミリア」団長、「男殺し」フリユネ・ジャミールその人ではありませんよね？」

違うと言ってくれ！

「お恥ずかしながら、そういう過去もありました。」

ああああああっ！

「アストレア様…ヘステイア様…。」

「…嘘は言っていないわ。そんな…あり得ないわ…。」

「嘘は言っていないよ？みんな、何でそんなに動揺するのさ？」

動揺!?知っているから、動揺しているんだよ！

特にあたしたち、元「イシユタル・ファミア」はね！

サミラたちも連れてくるべきだった…。

絶対に阿鼻叫喚が飛び交うよ！

「アイシヤ様…。」

「あたしに聞くな！チビスケ！あり得ないんだ！絶対に別人だ！」

そうだ！あのフリユネがこんなちまりっ子になるなんて…。

一体、何をしたいんだい！あいつらは！

あ！あの時、このメイド長がフリユネの居場所について聞いてきたのは…。

まさかあの後に…。

言わなきや…よかったよ。

「春姫様…。春姫様？」

「……………」

「？おい、春姫…。なっ！笑顔のまま気絶しているぞ…。は、春姫！し、しっかりしろ！」

無理もないよ…。

あたしと同じく、春姫もフリユネをよく知っているからね。

だから、現実を受け止められないんだ。

気絶しなかったあたしを全力で褒めてやりたいよ！

「ねえ、リオン。」

「何でしょうか?」

「【男殺し】って、あんなに小さかったっけ?」

「いいえ、違います。数ヶ月前はああではありませんでした。ええ、そのはずです…(チラツ)。」

「ということは…(チラツ)」

ああ、絶対にあいつらがやつたに違いない!

「皆様、大げさですね。ほんのちよつと変わったただけじゃありませんか。」

「「ほんの!?!」」

ほんのじゃねええええええ!

全部だ!全部!

「ねえ、メイ。本当にこの女の子は…フリユネさんなの?」

よし!坊や、よく聞いてくれた!

「はい、そうです。坊ちやま。」

「知っていると思うけど、僕フリユネさんと戦ったことあるんだよ?その…可愛い女の子じゃなかったはずだよ?」

「坊ちやま、覚えておいて下さい。女性は、変わるものです。」



「ええっ！ そうなの!? …女の人って、しゅごい…。」

『『そんなワケがあるかー!』』』

「おい、貴様らしい加減にしろ。ベルに何を教えている。」

「アルフィアさん、私は別に間違ったことは教えていません。女性は化粧次第で変わるものだ。」

「…間違つてはいないが、これは絶対に違うだろう…。」

言いくるめられてんじゃないよ！

あの坊やの将来が心配になってきたねえ…。

「いいですか、皆さん。戦争遊戯に勝つのが目的です。そんな些細なことにこだわっている場合ではありません。」

「『些細!』』」

「相手はレベル8ですよ?」

「『!』』」

「しかも、あのミア・グランドがレベル7ですからね。苦戦するのは必至ですね。」

「確かにニヤ…。」

「今でも勝てないのに、更に強くなっているの? うわ…。」

「レベル7の母ちゃん…恐ろしいニヤ…。」

「ミア母さんがレベル7となると、今までの数倍と考えたほうがいいですね…。」  
それはそうだが…。

レベル8の【猛者】を相手にするより、こいつらを相手にするほうが恐ろしいよ！  
「わかっていただけでよかったです。では、リリさん。フリユネさんは貴女の指揮下に預けます。大丈夫です。ちゃんと言う事を聞いてくれますよ。」

「……わかりました。」  
なっ!?

「チビスケ!?こいつは言う事を聞くような奴じゃない!」

「アイシャ・ベルカ様、私は以前と違います。メイ様により、生まれ変わりました。」

この感じ…、確かにフリユネの気配だ。

だが、変わりすぎだろ!

「………あんた、本当にフリユネなのかい?」

「ええ、貴女にはひどいことをしました。神イシユタル様の命令とはいえ、大変申し訳ありませんでした。どんな仕打ちでも受けましょう。」

ちっ…あいつら、あのフリユネに何をしたんだい…。

いや、聞くのが怖くなってきたよ。

知らないほうがいいね。

「……いいき、あんたが本当に生まれ変わったならな。あの坊やの助けになってやってくれよ。」

「もちろんです。この命はベル様のために。」

敵でも味方でも、以前のフリユネなら厄介だが、今の……このフリユネなら大丈夫だねえ。

しかもレベル6にランクアップしたか……あの【蠱毒の王】に並んだか。慣れるのに時間がかかりそうだ……。

春姫は……まだ目覚めないか。あ、今起きたか。

「う……。あ、輝夜お姉様？」

「春姫！ああ、よかった……。」

「夢を見ていました……。フリユネさん似の大きい芋虫の中から、女神と間違われるような女の子が蝶のように出てきたのです。……わけがわかりませんでした。」

……うまい例えだねえ。

蝶か……フリユネらしくないが。

「………そ、そうか。」

「あら？……あの方は……夢に出てきた……。うーん……。」

「な!?お、おい！春姫！……おい、ヤマト・命！春姫を部屋に運ぶから手伝え！」

「わ、わかりました！（気持ちには非常によくわかります…春姫殿）」

また気絶したか。仕方がない。

元【イシユタル・ファミリア】にいた奴らなら、今のフリユネを知ったら卒倒するだろうね。

その後、フリユネの模擬戦を見たが全然違うじゃないか！

スタイルは双斧を使った力押しのはずだ！

何で…素手でこんな蝶のように舞い、蜂のように刺すスタイルになってんだよ！

お株を取られた【アストレア・ファミリア】も啞然としているじゃないか！

しかも…、前よりも遥かに強くなっているじゃないか！

こんなの、初見じゃワンパンで終わりじゃないか！

一体どういう鍛え方をしたんだい！

何回も言うけど、【猛者】よりこいつらが恐ろしいよ！

ヘルメス様が恐れるのも納得だよ！

## 第199話 栗鼠、休憩。

上々です！

思った以上の成果です！

「よしーこれで【フレイヤ・ファミリア】はミア様と【猛者】だけです！エイナ様、【猛者】の様子はどうですか！」

「【猛者】は…疲労度は増えています上、アーニヤさんの歌以降の生命力と精神力は徐々に下がっています！ベルくんも疲労度は高いですが、スキルによる強化で補っています。ただ…さすが【猛者】と言われるだけであつて徐々に押されています！」

「そうですか。まだ足りないのですね…。ベル様…。」

「こら、司令がそんな顔したらダメじゃないの。」

「ダフネ様…。」

「【白兔の脚】に賭けるしかないでしょ。……最悪の場合、あの人たちが動くし…。」

「そうですね…。その時は【猛者】に同情します…。」

コンコン

「はい？どなたでしょうか？」

「私達だよ。リリ司令。」

「愚者様ですか！どうぞ。」

ガチャ

「どうかね？通信機と映像の調子は？」

「問題ありません！【ロキ・ファミア】の二軍が壊そうとしましたが、防げました！」「そうか、今の状況は…何と【ロキ・ファミア】をもう降したのか。残るのは…【フレイヤ・ファミア】の【猛者】と【小巨人】か。そしてこちらの被害は【狡鼠】だけか。上の上だな…。」

「ええ！思いの外、上手く行きました！」

「そりゃ…あんな弱体化の波状攻撃をしたら、どんな第一級冒険者でも耐えられないと思います…。」

「私なら、最初の音波攻撃で脱落してしまうね。うん。」

弱体化の案がうまく行きました！

最初はバーチェ様の毒と命様の魔法と思いましたが、アーニヤ様とフリユネ様で更なる弱体化を狙えました！

半分ぐらいは受けられると思いましたが、全員が受けるとは思いませんでした。まあ、そりゃそうですね。

リリ達でさえ、腰抜かす人も何人かいましたからね…。

「ええ。ですが、メイ様とセバス様の切り札が一番大きかったですね。」

「…ええ。まさか彼女がああなるなんて…誰も予想できませんね。」

「本当に…あの【男殺し】なの？…味方でよかったですと本当に思うよ。」

「同感です（チラツ）…。愚者様、そちらはいかがでしょうか？」

「ん？ああ、彼のおかげで捗っているよ。私に近い思考をしているため、次の魔道具の案が次々と出てきている。」

「そうですか！それはよかったです。」

「部長、よろしいでしょうか？今の映像でややノイズが走っています。少々改良する必要があります。」

「何だと？…確かに走っているな。魔石の質が悪いのか…または出力が悪いのか…。ミュラー、アレの原因と改良案を考えてくれ。」

「かしこまりました。私は部屋へ戻りその案を練ります。失礼します。」

ガチャ…バタン

「…本当に、あのミュラー様なのですね…。」

「ギルドの牢獄から脱獄させるなんて…、非常識です。」

「彼らを常識で凶るのは無駄だよ。エイナ・チュール。」

「ねえ…あの人、ミュラーって人は何をしたの？」

「はい、彼は…。」

『異端児』の方を巻き込んだあの事件のことを話しました。

モンスターとモンスターを強制的に融合させるといふ禁断の技術を…。

「とんでもないことをするね…。大丈夫なの？また同じことをするかも…。」

「それは大丈夫です。記憶と自我を全て一片残さず消して、新たな自我を作り知識と技術だけを残したそうです。セバス様とメイ様が。」

「……うわあ。」

「他の二人もそのようにしたらいいですが、あの方はまだ前の原型を保っているからまだマシかもしれません…。」

「…そうだな。」「……そうですね。」

ええ、それは本当ですね。

あの二人は…。考えたくないです…。

「他の二人って？一人は【男殺し】として、もう一人は？」

「…ダフネさん。こちらへ来られる時、門をくぐりました？」

「あ、うん。門番のあの巨人、いつ雇ったの？私と同じレベル3でも強そうだよ。」



「……彼が誰かわかります?」

「え? うーん、オラリオでは見たことないなあ。」

「……リリの元ファミアリアの…元団長です。」

「……え? ごめん、もう一回言ってくれる?」

「【ソーマ・ファミアリア】元団長、【酒守】ザニス・ルニトラです。」

「……原型がない。」

「はい。一片ありません。」

「リリさん、それを聞いた時立ったまま気絶しましたね…。」

「ええ…あまりの衝撃で立ったまま気を失うというのは二度目でした…。」

リリを長年虐待していたザニスが…ああいう形になるなんて、誰が予想できますか!

メガネでガリガリで嫌な男が、前の身長の2倍ほどになり【猛者】並の筋肉の肉体と

なり、スキンヘッドでサングラスという巨人になっているなんて、誰がわかりますか!

何でも…カヌウさんのケジメとして改宗させるとソーマ様へ迫ったそうです。

そして、そのままザニスがいる檻の中で改変改造しました。

ソーマ様とチャンドラ様、その他の団員の目の前で…。

目を背けることも許さなかったそうです。

改宗の際、ソーマ様がヘステイア様に震えながら土下座して「傘下へ入らせて下さい」

と泣いて懇願したそうです。

「ソーマ・ファミリア」も「ヘスティア・ファミリア」の傘下に入りましたか…。  
リリとして、このような形は複雑です…。

「ミュラー…【酒守】…【男殺し】か…。あの後、彼らに聞いたんだが人材が足りない  
と嘆いていたよ。」

「「え？た、足りない？」」

足りないって…。

あれだけのことをして、まだ足りないというのですか！

「ああ、ベル・クラネルへ危害を及ぼした人がオラリオにいない、または死んでいたため  
だそうだよ。」

「…聞くのが怖いですが、どなたにするつもりだったでしょうか？」

「まず、【オグマ・ファミリア】の【咬犬】モルド・ラトローにするつもりだったが、彼  
の信者になったため見逃したそうだよ。」

「…信者になるのはいいですが、ベル様へ悪いことを吹き込まないでほしいです！  
カジノや繁華街へ連れて行ったりするのはやめてほしいです！

「次に…【アポロン・ファミリア】団長の【太陽の寵童】ヒュアキントス。」

「ああ…ヒュアキントスは【白兔の脚】を執拗に追い詰めていたものね…」

ベル様を痛めて、追い詰めたあの人ですか。

まあ、オラリオにいたらそうされてしまいましたね。

「そして…【イケロス・ファミリア】団長、【暴蛮者】デイツクス・ペルデイクスを中心とした一党。」

「ベル様を苦しめ、精神的に追い詰め、ウィーネ様の額の宝石を奪い、あの騒動を引き起こした方々ですか…。」

全員、異端児の反撃によって死にましたね…。

彼らにとってそれが不幸中の幸いであつたかもしれませぬ。

「その他に…【殺帝】ヴァレッタ・グレーテ、【白髪鬼】オリヴァス・アクト、などの闇派閥の幹部たちかな。」

「えっと…その方たちはベルくんに何かを？」

「いや、直接はしてない。ただ、命を有効的に使うならいいだろうとのことさ。後は…7年前のこともあつたかもな。ああ、今は【エレボス・ファミリア】団長の【顔無し】ヴィトーを探していると言つてたな。」

「…闇派閥が哀れに思えてきました。」

「同感だよ…。」

「闇派閥に対してこんな気持ちを持ったのは初めてです…。」

そうですね！

残るのは「エレボス・ファミリア」団長の「顔無し」ヴィトーですか…。

ベル様へ危害を加えなければいいのですが…。

「ああ、ダフネ・ラウロス。君とカサンドラは「静寂」へもう謝ったかい？」

「え？せ、【静寂】に？わ、私達は何もしてないよ！」

「何、聞いてないのか…。セバスから聞いたのだが…【アポロン・ファミリア】は「ヘステイア・ファミリア」の元ホームであつた廃教会を破壊したらしいね？」

「あ、うん…。ヒュアキントスの案でアポロン様が賛同したけど…私は賛成できなかつたな。」

「その廃教会が…【静寂】とベル・クラネルの母の思い出の場所だつたそうだ。」

「早急に！カサンドラと！謝りに行きます！」

「ベル・クラネルと神ミアハと一緒に殺されることはないだろうから、彼らも共にした方がいいよ。」

「そうさせていただきます！…：恨むよ、ヒュアキントス！」

「うわあ…。お義母様の逆鱗にがつつりと触れているじゃないですか！」

「…：そうだね、ベルちゃんと神ミアハ様と一緒になら、アルフィアさんも許せざるを得ないかな。…：その他の【アポロン・ファミリア】構成員はオラリオ外にいるけど、戻つてき

たら…考えたくないね。」

オラリオから永久追放ですものね。

というか、あの神を再びベル様へ近づけてたまるものですか！

「そうだな…。あの『神の鏡』で彼を見てオラリオへ不法侵入しかねないな。そうなる  
と、彼らは本当に終わりだな。」

「そうですね。今のお義母様は全盛期を超えているそうです。…オラリオの一画が更地  
にならなきゃいいですけどね…。」

「怖いことを言わないでくれる!? ああ…何てことをしたの…。か、菓子折りは何がいい  
かな…?。」

「あ、私知ってます。アルフィアさんは甘味が好物だそうなので、旬のスイーツ菓子が喜  
ばれるかもしれません。」

「ありがとう！ 戦争遊戯が終わった後すぐに、カサンドラと買いに行ってくるよ！」  
むむむ！

エイナさん…、いつの間にお義母様とそんなに親しくなったのですか！

リリもポイントを稼がなければいけません！

あ、いえ！ それどころではありません。

戦争遊戯が先です！

今は…ベル様以外の全員が「フレイヤ・ファミリア」の旗へ向かっていますね…。  
ベル様…。勝って下さい！

## 第200話 女将、隆起。

『速報です！「フレイヤ・ファミリア」の「女神の戦車」脱落！』

ちつ：…アーニヤのあの歌がまだ耳に残ってやがる。

アイツ、あとでげんこつ落としてやるさね。

…アイツらがまだ出てないのに、何だいこのザマは。

【ロキ・ファミリア】もウチもほぼ全滅じゃないか。

情けない…。

いや、これもあのチビの策か…。

だが、腑に落ちないのがあるねえ。

何だい、【アストレア・ファミリア】の【狡鼠】が生きているのはどういう訳だい。

リユーを助けなかったのかい？

…：…こつちに來るねえ。

やれやれ、アタシに腰を上げさせるとは大したものだよ。

先陣切っているのは…あのバカ娘共かい。

「ニヤー！母ちゃんを見つけたニヤー！」

「手筈の通りにやるよ！」

「いくニャー！」

「…ミア母さん、すみません。」

「…？アタシを中心に囲んだ？」

まあ、いい、蹴散らしてやるよ。

「何しに来たんだい？このバカ娘共が。」

「旗を燃やしにきたニャー！」

「悪いけどね。」

「ゴメンなさいニャー！」

「行きます！」

キン！ガン！カン！シユバツ！

ちっ！即席にしてはやるじゃあないか。

リユー、いやルウはレベル5と聞いたがレベル6に相当するね。

けど…甘いよ！

「ふん！」

ドゴオ！

「ウニャー！地面が割れたニャー！」



「デタラメだよ…。」

「旗の周りが…陥没したニヤァー!」

「これでは…迂闊に攻められない…。ダンジョンの再生を待つしかありません。」

「こっちはあの化物共とやりあつてきたんだよ。」

「アンタら、バカ娘共を相手にするのはワケないさ。」

【フツノミタマ】!

「なっ!ぐっ…重力だと…。」

「命ちゃん!OKよ!うまくハマっているわ!」

「後は待つだけだな。」

!?

「アイツらは…ルウと同じファミリアだった…。」

「馬鹿な…何で生きてんだい!」

「いや…そんなことは後でもいい!」

「舐めんじやないよ!」

ドゴオツ!

「なっ…!ぐっ…、解除されました!」

「きゃああつ!こ、ここまで地面を割ることができるの!?!」

「化物め…。常識を考えろ！」

アタシから見れば、アンタらが生きてるのが非常識だよ！

『【小巨人】を取り囲んで下さい！まず疲れさせます！』

『『了解！』』』

…？動きが速い！

何故、声掛けもせずにやれるんだい？

何かあるね。

『包围完了！魔法が使える方はそこから魔法をガンガンとうってください！』

『『了解！』』』

ちっ…：囲まれたね。

『えげつないニヤ…。』

『ミア母ちゃんをモンスター扱いにしているニヤ…あの小人族。』

『まあ、階層主よりは強いと思うけどね。』

『いえ、確実に階層主以上です。』

『聞こえているよ！この馬鹿娘共が！』

『『ヒイツ！』』』

アタシを階層主扱いするとはいい度胸じゃないか！

『ヴェルフ様！「小巨人」へ魔剣をうってください！』

『お、おい！アイツはモンスターじゃないぞ！』

『【重傑】より数倍タフです！問題ありません！』

『ふざけろ！やってやるよ！』

「さっさと脱落してくれ！」

魔剣か！

だが、甘いね！

「ふんっ！」

ガッ！ドドドド！

「なっ…、地面を掘り返して炎を防ぎやがった…。」

「うわ…。」

「近づいてもダメ、遠くからもダメ…やはり持久戦になったか。」

ちっ…。このままでは負けるね。

だが、簡単に旗は落としてやらないよ！

『前後左右から同時に魔法を放って下さい！まず、命様の魔法で縫い止めます！その後はヴェルフ様、ルウ様、アイシヤ様、魔法を！フリユネ様は鉄球を！詠唱を開始して待機して下さい！』

『了解！』

…アイツら、アタシに四方から攻める気か？

容赦ないねえ…。だが、それでいい。

【掛けまくも畏き——いかなるものも打ち破る我が武神よ、尊き天よりの導きよ。卑小のこの身に巍然たる御身の神力を。救え浄化の光、破邪の刃。払え平定の太刀、征伐の靈劍）。今ここに我が命において招来する。天より降り、地を統べよ——神武闖征】

【来れ、蛮勇の覇者、雄々しき戦士よ、たくましく豪傑よ、欲深き非道の英傑よ。女帝の帝帯が欲しくば証明せよ、我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ。飢える我が刃はヒツポリユテー】

【今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ——星屑の光を宿し敵を討て】

【フツノミタマ】！

ちっ！また重力かい！

「ぐっ…だが、甘…」

なっ！

【ヘル・カイオス】！

【ルミノス・ウインド】！

「はああああっ！」

「くらいやがれええええっ！」

同時に魔法と遠距離攻撃に、魔剣だど!?

アタシは無事でも旗が！

ちっ…なら、仕方がない！

「はあああああっ！」

ドゴーーーーーン！

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「「はあ!」」

『何が起こったのですか!?!報告して下さい!』

はあ…はあ…。

これを使うのは十数年ぶりだねえ…。

「な…や、山を作るなんて…。」

『山!?!』

「これじゃあ、攻められねえ！」

「…天然の城を作りましたねえ…これでは攻めることも難しくなりました。」

「すまない。遅くなった…何だこれは。」

「ミア母さんが…山を作りました。」

「ありえないニヤ…。」

「さすが母ちゃんニヤ…。」

やれやれ、少しは時間が稼げそうだね。

よっこらせつと。

少しは休ませてもらうよ。

来れるものなら来てみな。

「どうする？司令？」

『……登れますか？』

「かなりの斜面であちらから狙い撃ちされるぞ！」

「とりあえず…掘る？」

「アリーゼ…やめたほうがいい。あちらはその道のプロだ。」

「ある程度登って、そこから一斉に攻めるしかないだろうな。」

「これ、魔法じゃないよね…。」

「恐らく力技かと。」

「【九魔姫】を呼んで魔法で撃退するか？」

『ダメです！「ロキ・ファミリア」に頼ると、リリたちの勝利が霞みます！』

「方法は他にあるか？司令。」

『：ルウ様の魔法で飛んで、四方八方から攻めている隙に皆様が上って一斉攻撃して下さい。』

「そうね！それが一番簡単そうね！」

「アリーゼ：。司令、私がミア母さんと一騎打ちしろと？無茶言わないで下さい：。」

『ある程度の牽制でいいです！空中に気を取られている内に、足元から攻めます！』

「階層主戦に匹敵するな。」

「もうそれ以上ニャー……。」

「とりあえず、司令の指示どおりにやるぞ。」

「ええ、行きます！」

：長くは保たないね。

それまで早く決着をつけるんだよ。

オツタル、坊主。

## 第201話 勇者、問掛。

「やああああつっ！」

「ぬうん！」

ドガアアアアン！

「はあ…はあ…。」

「ふー…。」

まさか…ここまでやるとは。

レベル5でレベル8の俺と渡り合えるとは。

だが、甘い。

お前はまだ半年の冒険者だ。

こちらは長年戦ってきた経験がある。

もし、お互い同じ年月なら俺が負けていただろう。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

「！」

あれは…。



ミアが本気でしたか。

「あ、あの山は…。」

「ミアが本気出したようだな。…これで俺たちの勝ちは動かなくなった。」

「ミア母さんが…!!…まだです！まだ、僕とみんながいる！」

「…なら、かかってこい！」

「はああああつ！」

ドゴオオオン！

「くっ、ぬん！はあつ！」

こいつの力は異常だ。

普通は戦えば戦うほど、威力も速度も落ちるはずだ。

だが威力も重く、速度も速くなっている！

あの狐人はここにいない、なら何かのスキルか…？

「たあつ！」

ガキン！

「ぐっ！だが、…甘いっ！」

「うっ…まだまだあ！」

よく粘る…。

太刀筋も最初に比べれば、鋭くなってきている。

それに：こちらが不利になってきている。

まさか、アレンとヘディンまでも脱落するとは。

フィンが最初に脱落したのは驚いた。

立て続けに「ロキ・ファミア」の奴らが次々と落ちたな。

そして、我が「フレイヤ・ファミア」も…。

なんだ、あの音波攻撃は…。

攻撃を受けた時より、かなりマシになったがまだ耳に残っている。

その後「カーリー・ファミア」全滅した後に、「ロキ・ファミア」と「フレイヤ・

ファミア」の幹部たちが立て続けに脱落するとは。

そして：「ロキ・ファミア」の旗も落ちた…。

一体、あの場で何が起こったのだ…。

「はああああっ！」

シュバっ！

「!!ちっ！」

頬を掠めたか…。ここで終わりにするか。

「ぬん！はっ！」

シュツ！ゴオツ！

「！うっ！ぐっ！はっ！」

よく避ける…。

まるで俺以上の強者と戦ったことがあるかのようだ。

そんなはずがないのだが…、こいつは誰と特訓していたのだ？

だが、ぬるい。

「ふんっ！」

「ここだっ！」

「何っ！」

しまった！これを狙っていたのか！

シュバアアツ！

「ぐっ…。」

腹をかすめたか…。

ここまでやるとは。

「はあ…はあ…。」

何故…ここまで戦うのだ？

聞いてみるか。

「ベル…お前は何故そこまで戦う？」

「え……？」

「何故、そこまで強くなりたいのだ？」

「…憧れている人がいて、その人に追いつきたいからです。」

【劍姫】のことが…。

聞いてもいいが、この場で聞くのは気が引けるな。

「それだけではないだろう。お前の剣はそれだけでないと語っている。」

「!!」

「うまく言えんが…、もつと崇高な感じがするのだ。お前の剣は。」

「…オツタルさんは、英雄譚を知っていますか？」

む…英雄譚だと？

「…只の物語だろう？」

「!!只の物語じゃない！古代の…これまでの時代を築いてきた人たちの人生が書いてあるんです！」

「む、むう…。そ、そうか。」

何か逆鱗に触れてしまった気がする。

「あの人たちは！僕たちのように神様の恩恵を貰わず、自らの力で生き抜いて多くの偉

業を成し遂げてきたんです！」

「……………」

「僕は…その人達のように強くなりたい！」

「……………」【最後の英雄】になりたいたいのか？」

「…僕は、その【最後の英雄】がなんなのかわかりません。以前、ある人が【最強の英雄】である大英雄アルバートさんと同じ功績を築いた者が【最後の英雄】だと。」

フレイヤ様がシル様の時に話したことか…。

「けど…僕は【最後の英雄】にはなりません。」

「……………」何故だ？」

「僕は疑問だったんです。何で【最後の英雄】なのかを。」

「何だと…？」

「英雄は…終わらない！」

「！」

「英雄に最後はない！今までも、今も、そしてこれからも！」

「……………」

「ここにいて、オツタルさんも！【ロキ・ファミア】と【フレイヤ・ファミア】のみなさんも…オラリオにいるみんなも英雄だ！」

「……………な。」

「僕は…【最後の英雄】なんかならない！僕がなりたいのは…。」

「……………」

「英雄譚の英雄達より、多くの人や生き物たちを救い、みんなを苦しめる人や怪物を倒し…全てを救う英雄になりたい！」

「！」

「…僕は【最強最高の英雄】になりたい…それが答えです。」

ザルド…【静寂】…。

お前たちは早まった。

こいつが出てくるのを…待つべきだったのだ！

ならば、俺がやることは唯一つ。

【女帝】、マキシム、ザルド、【静寂】…お前たちを真似させてもらうぞ。

「…わかった。だが、この俺を倒さなければお前のその発言は意味がないぞ！」

「はい！僕は貴方を倒し、先へ進みます！」

「やってみろおっ！ベル・クラネル！」

「はあああああっ!!」



くバベルの神会く

「「……………」」

「…ベルくん。」

「ベル…。」

「くはあく、何ちゆう子や…。こんなにおもろいと思った子は初めてや…。」

「妾もじゃ。こんなにも血が沸き立つ、と思ったのは初めてじゃ…。」

「【最強最高の英雄】…ね。【最後の英雄】に対していい顔しなかったのは、そういう意味だったのね（ベル…。）」

「ベル…。お前はもう我々、神の思惑を超えているのだな。」

「ベルくん…また、俺は君を見誤っていた。更なる上を目指していたとはね（ゼウス、貴方はこれを知っていたのか？）」



く【ヘステイア・ファミリア】ホームく

「【最強最高の英雄】か…。」

「…ヒュアキントスが叶わないわけだよ。そんなのを目指しているあの子には。」  
「関係ありません！ベル様が何を目指そうが、リリはベル様を支えるだけです。」

「そうだね！私もだよ！」

「ハステイア・ファミリア」自陣へ

『お嬢様。どうぞ、ハンカチです。』

『私は……また過ちを犯すところだった……。あの子に……ベルに……【最後の英雄】を押し付けてしまった……。ベルはそんなものを見ずに、遙か高みを見ていたというのに……。』

『アルフィアさん。それは私達も同じです。坊ちやまを最初、【最後の英雄】にしようと思っていました。しかし、時を重ねるうちに坊ちやまはそれを目指しておらず、【最強最高の英雄】を目指していることを知りました。』

『そして、私達がかつてのファミリアでやってきたことより苛烈な特訓を、坊ちやまへ課したのでございます。』

『神ヘルメスのことを悪く言えないな……。ベル……【猛者】を倒せ……。お前なら……できる！』

へ大樹海からオラリオへ向かう途中へ

「………決めた。」

「「え？」」

「【アルテミス・ファミリア】は【ハステイア・ファミリア】の傘下に降る。」



「『えええええ!』」

「オリオンは…間違いなく救界の”要”だ。オリオンが破れば、この世界は終わりだ。」

「…アルテミス様が決めたことなら、私は何も言いません。ですが、皆は…。」

「『問題ありません!』」

「だそうです。ですが、あの少年についてもっと知る必要がありますね。」

「そうだな、至急オラリオへ向かわないと。まず、この戦争遊戯を無事に見届けよう。」

「『はい! 頑張れー! ベル・クラネル!』」



く 歌劇の国く

「…もう確定ね。アポロン、貴方達は愚かなことをしたわね。」

「いいや、アフロディーテ。私は後悔してない。ベルきゅんをより高みへ押し上げたのだから。」

「…あの兎め、大言壮語を吐きやがって…。何様のつもりだ!」

「私は、この戦争遊戯を見終えたらすぐにオラリオへ向かうわ。」

「我々も行くわ。」

『ア、アポロン様! 私達は戦争遊戯で負けて、オラリオから永遠に追放されたのですが

！』

『黙れ、ヒュアキントス。ベルきゅんのこの活躍をみてじつとなんかしてられるか！』



}\  
?????  
}\

「……あの子は、本当に夫と私の眷属の血を受け継ぐ子なのか……？私達が求めた【最後の英雄】を否定し、更なる高みを目指しているあの子が……。オラリオへ……行かなければならない。あの子のことをもっと知りたい……。……勝ちなさい、私の……。……義孫。」

## 第202話 千妖精、応援。

私は、あの少年ベル・クラネルの戦いを見ています。

レベル5とレベル8の…：互角のあり得ない戦いを。

「……………」

そして、ここに私の仲間と、「フレイヤ・ファミア」の殆どが入っています。

【ヘスティア・ファミア】は0人で、【アストレア・ファミア】の【狡鼠】のライラさんだけです。

ほぼ無傷じゃないですか！

「あつという間に、ここも一杯になったね。」

「そうだなー。思ったより早かったな。」

団長はライラさんに再び膝枕してもらって『神の鏡』でベル・クラネルとオツタルの対決、そしてミアと【ヘスティア・ファミア】の対決をしています。

まるで自分の家で庭を見ているかのように…。

「……………」

「テイオネ…いつまで拗ねているんだ。」

「五月蠅いわねー！アルガナー！」

テイオネさんが代わった後、団長が「首が痛い。悪いけど、ライラに再び代わってくれ」と…。

その時のテイオネさん、見ていられませんでした…。

「おい…、あのメイドアマゾネスは…あのヒキガエルなのか？」

「あん？そっだよ。【凶狼】。」

「ふざけんな！どこをどうしたら、ああなるんだ！」

コクコクコクコク。

あの人が…フリユネ・ジャミールと名乗った時、私達は啞然とし、脱落者が続々来てもしばらくは一言も言えないくらいでした…。

団長でさえも…。

「てめえらがそう思うのも無理ねえよ。あたしらも知った時は腰抜けるかと思っただけだからな。その元【イシユタル・ファミア】の奴に聞いてみなよ。」

「あ、ははは…。フリユネが…フリユネが…あんな美少女に…。これは夢だ…夢だよ…。」

「こんなんでも聞けるか！まだ…ある。…何なんだ！あの弱体化の連続攻撃は！」

コクコクコクコク。

……あちらの部隊に入らなくてよかったです。

音波攻撃に：【蠱毒の王】の猛毒の雨に：重力の檻に：フリユネさん…。

呪詛の重ねがけをするより、ひどすぎます！

「うるせえぞ、【凶狼】。あたいらは弱小ファミリア連合だぜ？真つ向からやり合ったら、敵うわけねえだろうが。」

「……そうだ。てめえらは弱者だ。足掻くのは当然だ。だが…：限度つてもんがあるだろうが！」

コクコクコクコク。

ええ、そうです！あまりにもひどすぎます！

あそこまでしなくてもいいじゃないですか！

…：私が入っていないので言う資格がないのですが…。

「はっ！負け犬の遠吠えにしか聞こえねえぞ。」

「そうだ、黙ってる。【凶狼】。」

「シスコン馬鹿猫は黙ってやがれ！」

「なっ…、てめえ！轢き殺してやる！」

「やってみやがれ！仕切り直しだ！」

ひいひいひい！

「ここで争わないでくださいいいいいい！」

「レフィーヤ…貴女が羨ましいです。」

「そうだよ！レフィーヤ、あの地獄は…思い出したくないよ！」

「す、すみません！アリシアさん、エルフィ。」

仕方がありません…。

私は別働隊でしたので。失敗したので顔向けできないですが…。

ああ…、後でリヴェリア様に怒られる。

ところで…：…何で、魔法が消えたんでしょうか？

「…【狡鼠】。何故お前たち、【アストレア・ファミリア】の【紅正の花】【大和竜胆】が

生きているのだ？」

「そうだ。お前たちは死んだはずだ。」

「闇派閥の偽情報によって、下層で死んだはずだ。」

「何故、今更出てきたのだ？」

「身を潜んでいた割には、5年は長すぎる。」

団長もルルネさんも言っていました、【狡鼠】のライラさんたち…【紅正の花】【大和

竜胆】は5年前に死んだとのことですよ。

実は生きていた…？

「うるせえな、「フレイヤ・ファミリア」。5年前から遺体を持ち帰り生き返らせてもらったんだよ。ハイ、終わり。」

「「納得できるか!」」

そんなの…あり得ません!

「…弱体化攻撃で、あの音波攻撃は我らの元仲間であり情報不足だった。バーチエ・カリフによる猛毒の雨はわかる。ヤマト・命による重力の檻もわかる。だが…あの【男殺し】は納得できん。明らかに物理の法則に反している。」

「「そうだ! そうだ!」」

「しつげえな…おめえらの気持ちは理解できるぜ。だが、現実だ。てめえらは負けたんだ、受け入れやがれ!」

「「くっ……。」」

そう言われると…何も言えません。

「はっ…! こ、ここはどこ? ああ…脱落してしまったんだ。ベート、ごめん…。」

「…おい、レナ。フリユネのこと覚えているか?」

「え? あれ? ベートも脱落したんだ…。ああ、あのヒキガエルでしょ? その【フレイヤ・ファミリア】のやつらにポコポコにされて宿に引きこもっているはずだよ。」

「…違う。さっきのフリユネだ。」

「あれー？あの金髪褐色巨乳美少女がフリユネのはずがないじゃない。あははははー！」  
 「……現実だ、受け入れろ。あの売女共……【麗傑】も【ヘスティア・ファミリア】の狐女も認めていたぞ。」

「そんな……アイシヤや春姫までも……嘘だ……。そ、そうだ！生き別れの双子で同姓同名がいたんだよ！そうに違いない！」

「いいえ、残酷な事実を告げるようですがあの方は間違いなく、元【イシユタル・ファミリア】団長のフリユネ・ジャミールです。この私とここにいる【ミアハ・ファミリア】団長ナアーザ・エリスイス、カサンドラ・イリオンが保証しましょう。」

「「マジか……。」」

「そ……んな……。嘘だ……。」

レナさん……。

元所属していたファミリアでよく知っていた方がああも変貌したら、そういう気持ちになるのは 無理ありません。

一体、【ヘスティア・ファミリア】に何が起こっているのですか！

「さつきから気になっているんだが、あつちはいいのか？フィン？」

「いいきつかけだ。今までやきもきさせてくれたんだ。そつとしてあげなよ。」

(チラッ) ……ああ……。



声かけられないほど、熱々になっていますね。

それはそれでいいのですが、場所を考えてほしいです。

「ラウル……」

「アキ……」

「「チツ！」」

みんなが舌打ちしたくなる気持ちはわかります……。

「ねー、【黒妖の魔剣】。さつきアイズに言ったことをあたしにも言ってみてよー？ねー？」

「……………（ガクガクブルブル）」

「ねーってば。ねー？」

「やめなさい……ティオナ。大双刃を【黒妖の魔剣】の股間へ突き立てようとするのは。」

「みんな……助けて（チラツ）」

（（サツ……））

これは、【黒妖の魔剣】の自業自得です。

私は……うん、一般以上はありますね。このくらいなら大丈夫でしょう。

って……何を考えているのですか！

「ライラ、聞いて良いかい？」

「何だ？フィン？」

「この戦争遊戯後に…僕らへの仕置きはどうなるんだい？」

「「！」」

「そんなの聞いてどうするんだ？」

「今、聞いておいて覚悟をしておこうと思つてね。」

……そうですね。私達は負けました。

あの少年…ベル・クラネルの「ヘステイア・ファミリア」に。

「待て、【勇者】。まだオツタルとミアがいる。」

「君らしくないね、【白妖の魔杖】。ミアは既に包囲されている。時間の問題だよ。」

「だが、レベル8のオツタルがいる。まだ負けたわけではない。」

「レベル5のベル・クラネルと互角に戦っているのが、見えないのかい？」

「…あの愚兎が長く保つわけがないだろう。それに…オツタルはまだ奥の手を出していない。」

「それは彼もだよ。魔法もスキルも使つてない。それは…数週間も彼を洗礼に落とし、君らがよくわかっているだろう？」

「「！」」

「……だから、あり得ないのだ。この短期間にレベル8へ追いつけるわけがない！」

「おかしいね？僕の耳には、君はあのベル・クラネルに期待しているかのように聞こえるよ。」

「【勇者】！貴様！」

「怒ると言うことは、凶星なんだね？【白妖の魔杖】。」

「くっ……！」

認めたくありませんが…、彼を応援したくなるのはわかります。

あの言葉…卑怯じゃないですか！

あの言葉を聞いてしまったら、見ずに…聞かずになんかできません！

あの言葉に、あの表情をしていたら、心が冷静になんかいられません！

負けるなア！ベル・クラネル！

「どうすんだよ？勇者サマよ。」

「知ってるなら教えてくれるかい？」

…こつちの方も聞かなければなりませんね。

何されるんでしょうか…？

## 第203話 白妖杖、絶句。

あの愚兎め…。

あんな大言壮語を吐いて、後のことを考えているのか？

再び教育してやらんと駄目だな。

だが…あそこまで、レベル8となったオツタルと互角になるほど強くなるとは予想外だった。

あの狐人の魔法か？いや、違う。

…スキルしか考えられないな。

【最強最高の英雄】か…。

はつきりと目標を明確にしたのはいい。

これでお前は引けなくなった。

前へ突き進むしかなかった。

あの方の『伴侶』であることを証明してみせろ。

後は私達だな。

オラリオを侮辱した罪は受けよう。

問題はフレイヤ様だ。あの方はずっと苦しんできた。せめて、我らの命と引き換えに…。

いや、それは神ヘステイアが許さないな。

あの愚猫の妹、アーニヤの嘆願を袖にはできないはずだ。

沙汰を待つしかないな…。

問題はこつちだ。

あり得ないはずなのに、あり得ている奴がここにいる。

5年前、闇派閥の偽情報により嵌められた「アストレア・ファミリア」の【狡鼠】だ。

本人は「5年前より遺体を持ち帰り生き返らせてもらった」というが、あり得ないはずがな…い。

…。

…それもあの愚兎か。

あり得ないはずだが、あの愚兎が関わっていることを考えるとあり得てしまうな。

む…、奴が沙汰について語っているな。

「あたしも深く関わってないんだがな。そういうのは、あのバグ兎とヘステイア様、アストレア様、そして勇者サマのご執心のあいと…あの化物共が決めているんだ。」

化物共だと？誰のことだ？

「君はそこまで関わってないのかい？」

「さつきも言っただろ？あたしは5年前より遺体を持ち帰り生き返らせてもらったんだ。従うしかないじゃねーか。」

「そうだね…。」

「だけどさ、そういうのに対してはいくつか案があつたぜ。聞かない？」「参考程度に聞かせてもらつていいかな？」

化物共が気になるが、それも気になるな。

「まず、過激な方からだな。「全員死ね。」だな。「二ひいっ！」「それはおめーらが聞いた通り【戦車の片割れ】の嘆願もあり、即却下したさ。」

（【静寂】だね。まあ、彼女からして見れば僕らは腹立たしいだろうね。）

「「ホツ…。」」

「オラリオ追放というのもあつたけど、第二級冒険者以上がごっそりと抜けたらオラリオの大幅な戦力低下になっちまう。」

「妥当だね。」

「あのバグ兎は現状のままでもいいと言つてたが、さすがに何もなしというわけにはいかねーだろ？」

「彼らしいね。」

ああ、本当にあの愚兎らしいな。思考がわかりやすい。

だから、より教育が必要だというのに…。

「それでなかなか決まらないから、あいつらが決めて当日に発表することになったんだ。」

「そうか…。」

「ただ、3つの選択肢と聞いたぜ？ 詳しいことはおめーらのホームへ直接行って言うだとき。何でもファミリアごとくに違うらしいぜ？ あたしらはコレが終わってから聞く予定だけだな。」

「ホームで死刑宣告を待て、と？」

「さっきも言っただろ？ それは即却下したってな。まあ、他の案でかなり反対していたのが1つあったけど、それはあたしも反対だったな。」

「…彼がそこまで強固に反対する案って、何だい？」

「すごく嫌な予感がするな…。」

「聞いたら絶句するぜ？…全員性転換。」

「「……………は？」」

「全員性転換って言うてんだ。あのフリユネをああした奴らがウチにいんだよ。」

「「ひいひいひいっ！」」

「ふ、ふざけんじゃねええ！ お、俺らを…性転換だど!? できるわけが……」

「…彼らならやりかねない…いや絶対に可能だね。」

…【勇者】はその化物共を知っているのか…？

私がオラリオへ来る前にその化物共がいたのか…？

「せ、性転換？あたしたちアマゾネスは女性のみのはずだよ？そんなことができるわけが…」

「新人類を作るのもいいかもしれませんが…だとよ。」

「…いやだああああ！」

「記憶も全て性転換した後に合わせるように調整するつてさ。」

「…調整!?!」

「ああ、そうだ。これも言ってたな。ついでに恋仲にさせるよう、無理矢理カップリングさせるのも面白いかもしれませんね、と。」

「…外道か!?!」

……考えがまともな奴じゃない。

そんなことを現実にできるわけが…、いやあのフリユネを見るとそれも容易そうに感じるな。

私が…女性に？他の有象無象の糞と交われと？

考えたくない…。



そうなる前に自害する。絶対にする。

「おいおい、騒ぎすぎだろうが。さつきも言っただろ？バグ兔が強固に反対したと。」

「「ありがとうございます！ベル・クラネル様！」」

「…ライラ。その3つの選択肢は大丈夫なのかい？」

「おいおい、勇者サマよ。あのバグ兔の性格を知ってんだろ？バグ兔の希望に何とか合わせた内容だよ。」

「そうかい、それなら安心かな。…彼には非常に感謝しなければならぬね。」

「あいつは「ベル様は甘すぎます！」とぼやいていたな。」

…あの愚兔が中心となっているなら、そこまでひどい内容にはならないだろう。

後日、ヘディンは語った。

ふざけるな、あの愚兔が！

自分を過小評価するな！自分を物差しにして測るな！

その辺りを教育するべきだった！

そんなことは不可能だ！

死ね、と言っているのと同義だ！

## 第204話 竜娘、応援。／白兔、突破。

「ベル…頑張つて！」

「ベルツち…。」

「ベルさん…。」

ここは…20階層の隠れ家。

リドたちと初めて会った場所。

そして…神様からの『神の鏡』で戦争遊戯を見ている。

ベルの戦いを。

神様やリリたちを守るための。

何か難しい話をしていたからよくわからなかった。

けど、ベルが戦わなければならないというのはわかる。

何で、ベルが戦わなければならないの？

何故、ベルが傷つかなければならないの？

けど、リリや春姫を守るためと聞いた。

ベルはいつもそうだった。

自分のためじゃなく、誰かのために戦っている。

私、ううん。私達異端児はモンスター…。

でも、そんな私達をベルは見てくれた。

手を取ってくれた。

守ってくれた。

嬉しかった。

地上にいた時は、暖かく…そして怖かった。

そんな私達をベルたちは守ってくれた。

嫌な目にあうことはわかってはいるはずなのに。

だから私達はベルの力になりたい！

助けてもらっただけじゃない、ベルが大好きだから！

「ウィーネ、力を抜きなさい。爪が食い込んでいますよ。」

「あ…ごめん。」

生えてきた爪が手に食い込んで…痛い。

「チカライレスギダ。ラクニシロ。アノコゾウハマケナイダロウ。」

「けどよー、ベルと戦っている…【猛者】だっけ？あいつ強いぞ…。」

「当然だ。自分を強くさせた奴だから。」

「アステリオス？それは貴方の前世ですか？」

「そうだ。あの男のおかげで自分はベルに会うことができたのだ。」

「…そうか。」

アステリオス：…ベルの好敵手。

見た目は怖いけど、優しい人。

「ねえ、アステリオス。ベルは勝つよね？」

「今のところは【猛者】が有利だな。」

「お、おい！アステリオス！それは嘘でもベルつちというべきだろ！」

「リド、いいの。私もわかるの。…あの人はベルよりも強い。」

「ウイーネ…。」

あの人は…あの金髪のきれいな女の人より更に強い。

ベルが負けるのが怖い。

けど…。

「けどね、神様が言ったの。ベルの勝利を信じているなら祈ってほしい、と。」

「祈る…ですか。そうですね、ここにいる私達ができるのはそれしかありませんね。」

「キューー！」

「ワンワン！」

「うん！祈ろう！ベルさんのためにも」

「ソウダ。イノルシカナイ。アノコゾウノシヨウリノタメニ。」

「ベルツち！勝てよ！」

「我が好敵手よ。自分は待つ。強くなるのを。」

「「ベルー！」」

ベル……！勝って！



強い。

目の前のこの人は、強い。

レベル5の僕が倒せるわけがないほど、強い。

メイから聞いた。

目の前のこの人は、僕のお父さんと同じファミリアの人……ザルドさんを倒した人ということを。

憎くはないのか？と聞かれたら、憎くはないはずがない。

僕を1人にしたのだから。

けどザルドさんはその時、もう死に近かった。

メイが僕に飲ませた……ベヒーモスの毒を多量摂取したのだから。

そして……7年前の大抗争で、オツタルさんやフィンさんを押し上げるために名を落としてまで、絶対悪となった……。

当事者であるお義母さんから聞いた。

お義母さんと同じく、助けに行きたかった。

【アストレア・ファミリア】と同じく、遺体を持ち帰りたかった。

けど……メイとセバスは、条件が足りないからできないと言われた。

条件を集めるには……オツタルさんに……この戦争遊戯で勝たなければならないことを。

だから、僕はザルドさんが押し上げたオツタルさんを倒す。

倒して、僕は先程言った【最強最高の英雄】を目指さなければならない。

もう『神の鏡』で宣言してしまった。

恥ずかしいけど、それでいい。

師匠の言った通り、僕は前へ進むしかないんだ。

オツタルさんと互角に戦えているのは……、僕の素じゃない。

【時駆白兔】のように他にスキルがあると、薄々は気づいている。

神様は意地悪してないのはわかっている。

僕を心配して隠しているのは知っている。

だから、知らない振りをする。

神様から打ち明けてくれるまで。

だから、前へ進むしかない。

ガン！ガン！キン！

キン！「考え事とは余裕だな！ベル！」

ガン！「すみません！」

ガガン！「何を、考えていた！」

ゴン！「…ザルドさんは、強かったですか？」

キキン！「!!…ああ、強かった！俺が目指しているやつだった！毒なんかに侵されていなければ俺なんか倒されるわけがなかったのだ！」

ドン！「自分を卑下しないで下さい！」

キン！「!!」

ガキン！「それは！ザルドさんを侮辱するのと同じです！」

ガガン！「そうだな！ああ、そうだな！」

ピシ！ピシシシ！

ガキン！

もう大剣が限界だ！

パリーン！

ヒュッ！バシッ

いいタイミングだよ！セバス！

ガキーン！

「ぐっ…！だが、俺は負けるわけにはいかん！」

「フレイヤ様のためだからですか！」

「それもある！ザルドは…この程度で屈する奴ではない！奴を簡単に超えさせるわけにはいかん！」

「!!」

「貴様が【最強最高の英雄】を目指すなら…壁は大きければ大きいほどいい！なら、俺が示さなければならん！」

「オツタルさん…。」

「貴様は俺を英雄と言ったな！なら【最強最高の英雄】を目指すなら、俺を超えてみせろおっ！」

「!!わかりました！」

頭の中がクリアになっていく

みんなの顔が浮かんでいく

そして、メイ、セバス、お義母さん…僕の家族。



黒竜がいなければ、僕は一人じやなかったかもしれない。  
でも…神様やリリたちに会えた。

そして、ウィーネやリドさんに会えた。

僕は忘れていない。

ウィーネたちと笑って暮らせる世界が欲しいことを。

だから、僕は英雄になりたい。

【最強最高の英雄】に！

英雄になって…ウィーネたちと笑って暮らせる世界を作りたい！

ザルドさんを倒したオツタルさん…いや【猛者】。

フレイヤ様…シルさんもヘルンさんも救う！

それができなきや、何が英雄だ！

だから貴方を倒し、前へ進む！

【最強最高の英雄】への道を！

「ああああああああつ！」

「なっ!!」

メイから教えてもらった、ザルドさんの…マキシムさんの太刀筋を。

そしてアイズさん…、僕の今までの分を…重ねる！

ズバー！ズバー！ズバー！ズバアツ！

「ぐおおおおおおおつ！」

（ぐつ…ここへ来て更に進化…いや飛躍するのか！だが！）

「はあああああああつ」

「ぬおおおおおおつ！」



〜バベルの神会〜

「「うおおおおおおつ！」」

「ベルくん…。」

「ベル…。」

「あく！くそつ！何でここに酒があらへんのや！絶好の肴が目の前にあるというのに！」

「そうじゃな！…ん？何じゃ、ソーマ。何百年ぶりかのう？」

「…酒だ。目の前の肴に合うものを持ってきた。」

「「おおおつ！」」

「私はいいわ。この戦いを素面で見届けたいの。」

「ボクも。」「私も。」

「見事だ…この土壇場で新たな境地に踏み出したようだな。」

「あ、新たな境地と言いますと？」

「あの域へたどり着くのは…難しいのだ。人が生涯かけてもたどり着くかどうかのものなのだ。【白兔の脚】は多くの人の太刀筋を見て真似てそれを束ねて、自分の…今までを注ぎ、【白兔の脚】本人の太刀筋を編み出したのだ。」

「な……。」

「【白兔の脚】は、ほんのわずかだがあの年で剣の頂きに手をかけたのだ。この武の神であるタケミカヅチが認めよう。」

うおおおおおおお！

く 【ヘステイア・ファミリア】 自陣く

『坊ちやまは…自分の太刀筋を編み出しました。この土壇場で。』

『ええ。本当に驚かせてくれますな、私たちの真の主は。』

『……これで勝負はわからなくなつたな。』

『ですが、長くは保ちません。』

『そうですね、あの小僧もそろそろ出してくるでしょう。』

## 第205話 白兔、英斬。

「はあ…はあ…。」

「がはっ…。ふー…そろそろ決着をつけよう、ベル。」

「!!」

「これから放つのは…俺の必殺技であり…、ザルドを破った技だ。受けてみる!」

【銀月の慈悲、黄金の原野】

来る! オツタルさんの魔法…ううん必殺技が!

リン リン

【この身は戦の猛猪を拜命せし。】

リン リン

オツタルさんのその技はどんなのかわからない。

けど、メイとセバスが大体教えてくれた。

【駆け抜けよ、女神の真意を乗せて】

リン リン

恐らく、この短時間での蓄力では倒せない。

だから…。

(行くぞー!ベル!)

【ヒルデイス・ヴィーニ!】

赤い…光が僕へ向かってくる!

ギリギリまで…見極めない!

「アッ!だ!」

ここ2週間鍛えた敏捷で、光を躲した!

そして溜めた一撃で!30秒間の蓄力をカウンターとしてぶつける!

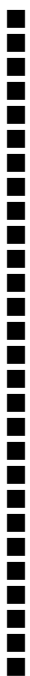
(なっ!躲しただど!?!ぐっ!)

「あの速さで方向転換した!?だけど、そのままぶつける!」はあああああつ!」

赤い光と白い光がぶつかり合う。

そして…。

ドゴオオオオオオオオン!



〈脱落組〉

「あり得ねえ…オツタルのあの技を寸前で躲すなんて…。俺でもできねえぞ!」

「嘘だろ…。」

「夢か…？」ギュー

「夢じゃない…。」ギギュー

「痛い！もう少し加減しろ！」

「オツタルのアレ、初めて見るけど…なるほどね。」

「猪らしく、体当たりですか…。しかも超高速で…。」

「…だが、クラネルのアレでは倒せねえ。」

「ええ、【猛者】の方が上ね。」

「そんなのわからないよ！アルゴノウトくん！」

「お、土煙が晴れそうになったな。…あれ？」

「…どうやら相打ちになったようだな。」

「…二人とも倒れていますね。」

「ええー！【猛者】のアレを【白兔の脚】のたった一撃で!?」

「アキ…ウチが見たのはアレツす。【穢れた精霊】が寄生した竜を倒したのは。」

「ラウル…、貴方が【白兔の脚】について熱く語る気持ちがわかるわ。【白兔の脚】に嫉妬するわね。」

「ウチはアキが一番つすよ！」

「ラウル…。」「アキ…。」

「チツ！」

「へっ、あのバグ兎はこのままで終われねえよ。あの猪もな。」

「そうだね。…やはり、二人とも立ったね。けど…。」

「ああ、あの様子ではあと一撃しか保たないな。」

「オツタルの勝ちだな。あの兎ではアレに対抗する手はねえ。」

「ベル・クラネル！先程の言葉を言い切ったからには、証明して下さい！」

「レフイーヤ…、あんた…。」

「そうだよ！アルゴノウトくん！頑張れー！」



「が、は…。俺の「ヒルディス・ヴィーニ」は…初見の…はずだ。ゲホツ…。何故…見切れるー！」

「あ…、ぐ…。ま、だ…だ！」

「だ…が、まだ俺には力が残されて…いる！これで…終わりだ！ウオオオオオオツ！」

（まさか…獣化!?!）

「フーツ！フーツ！」

【銀月の慈悲、黄金の原野】

またあの技が来る！しかも獣化した状態で！

先程の蓄力では対抗できない！

…なら、今ここで切り札を切る！

神様…見てください！

僕は【ヘステイア・ナイフ】を逆手にし…

【ファイアボルト】

魔法を注ぎ込み…溜める！

リン リン

(フーツ！フーツ！…何だ…あれは。魔法か？フーツ！フーツ！いや、そんなことを考えるな！)

【この身は戦の猛猪を拝命せし。】

リン リン

【英雄願望】の引鉄、

思い浮かべるのは、【ゼウス・ファミリア】の【暴食】ザルド。

【陸の王者】ベヒーモスの肉を喰らい、悲願のため、仲間のため、【陸の王者】ベヒーモスを撃破した。

そしてその毒に侵されながらも、次代の英雄のために名を落とし絶対悪として、自らの身を捧げた英雄。



そして…僕の家族。

リン ゴオオオオン

(！鈴の音から…大鐘音の音に。真つ向勝負か！いいだろう！)

ゴオオオン ゴオオオオン



くバベルの神会く

「来るぞ！来るぞ！」

「グビツ…。かっつ、美味いわ！」

「ゴクゴク…、はっつ！これまでで一番美味しい酒や！」

「…ああ、美味しい。やはり肴次第か。」

「ヘステイア…ベルのアレは…。」

「ボクも初めて見るよ。アレがベルくんの必殺技…。だけどあの輝きは…ボクの司る炎に似ている…？」

「神の炎を生み出したというの…？」

(恐らく、ベル・クラネルの魔法を私が打ったナイフの素材であったミスリルの特性を利用して、それを溜めたんだわ。二重蓄力ね。けど…あの輝きはあり得ないわ、ヘステイアの血を媒介にしたとしても。それも下界の未知だというの…？)

「タ、タケミカツチさん！ア、アレは何でしょうか？」

「わからん。だが、あのナイフはミスリルで出来ていると聞いた。【白兔の脚】はそれを利用して溜めたのだろう。しかし、あの輝きはあり得ない。下界では…生み出せないものだ。」

「そ、そうですね（あの輝きは、ヘスティアの司る炎に似ている…。嘘だろ！ベルくん、君はどれだけ俺たちの予想を超えてくれるんだ！）」

「【白兔の脚】は先程と違い、獣化した【猛者】のあの技に真つ向から受けて立つようだな。これで決まるぞ。」

「み、みなさん！余所見禁止ですよ！刮目してご覧ください！」

うおおおおおおお！

## 第206話 白兔、決着。

まだだ！もつと溜めないと！

ゴオオオオン　ゴオオオオオン

【駆け抜けよ、女神の真意を乗せて】

この一撃で…決まる！

(フーツ！フーツ！ベル！これで終わりだ！)

【ヒルデイス・ヴィーニ】！

ゴオオオオオオオオオオツ！

ゴオオオオオン　ゴオオオオオン

ぐつ…先程より強烈な波動と共に光が…来る！

………だ！

【聖火の英断】！

ボオオオオオオオオオオツ！

(炎だ?!だが、それでは俺を倒せん!…何だど?炎が形作つて?あれは!)



く「ロキ・ファミリア」残党く

「ぬはははははっ！あの娘共の言う通り、儂の血を熱く沸き立ててくれるわ！あの若造め！ここで火酒があれば、最高なのじゃがな！」

「あの魔法をあの手で注ぎ溜めただけで、あの輝きはあり得ない。」

「……あれは何？リヴェリア、ガレス。」

「ぬ……？炎が形作って……獣のような姿に……？あれは……!？」

「馬鹿な！炎が意思を持つわけがない！……あれは！」



く「ヘステイア・ファミリア」自陣く

『馬鹿な！あの炎の形は……ベヒーモス!？』

『まさか……ここ連日に飲ませたベヒーモスの毒のせいなのですか!？』

『それしか考えられません。ですが、あれはベヒーモスというより……聖なる獣、いえウエスタ・ベヒーモスですな。』

『アルフィアさん……貴女の【静寂の園】であの炎を無効化できますか?』

『……無理だな。あれは最早魔法ではない。あのナイフによって変異した……いや昇華した浄火の炎だ。私の魔法では無効化できません。こつちが焼き尽くされるな。』

『坊ちやまは、恐るべき技を編み出しましたな。さすが我らの真の主ですな。』



ビュッ！ビュッ！ビュッ！

「ちよこまか動いてんじやないよ！ルウ！さつきと降りてきな！アンタらは落ちな！」

『そ、速報です！「フレイヤ・ファミリア」の「猛者」、脱落！』

「！」「」

（オツタル：負けたか。アタシももうすぐだね。だけど、何人かは脱落してもらおうよ！）

「あ、あの白髪頭！ほ、本当に団長に勝ったニヤー！」

「ニヤー！それよりこつちが規格外だニヤー！スコップで土を飛ばすなんて！」

「さつき、「不冷」がまともを受けて下へ落ちたよ！…脱落はしないけどね。」

「たった一人で我らを翻弄するとはな…。レベル7…いや「小巨人」が規格外か。」

『全員、今すぐそこから離脱して下さい！早く！』

「！」「」

「に、逃げるニヤー！」

「ええーっ！ここまで来たのに！あ…何か嫌な予感…。離脱するよ！」

「行くわよ！みんな！リオン！そこから離脱しなさい！」

「もう離脱します！」

「何だい？あいつら…ここまで来て…。!?ちっ！」

ボオオオオオオオッ！

「「ひいひいっ！」」

「あの炎は…ベルの…。」

『速報です！「フレイヤ・ファミリア」の旗、焼失！「フレイヤ・ファミリア」敗北！この戦争遊戯の勝者は「ハスティア・ファミリア」！』

『…司令、あの炎は何なのだ？』

『ベル様の必殺技によって生み出した炎です。流れ矢というか流れ炎がそちらへ向かっただけです。』

「危なかったな…。我らも脱落するところだった。」

「二、ニヤー…。ミア母ちゃんが作った山が半分消し飛んだニヤー…。」

「あたしの作った山がこうもたやすく吹き飛ぶとはね…。あの坊主は一体何をやったんだい…。」

「ウニヤー！母ちゃん!？」

「五月蠅いよ！アタシらの旗が落ちたんだ。抵抗はしないよ。やれやれ、疲れたよ。おい、ルウ。」

「は、はい！」

「アンタ、クビ。」

「…は？」

「クジだと言っただよ！どこでも行っちゃまいな。あの坊主のとこだろが古巣だろうがね。」

「…ミア母さん。ここ5年間、本当にありがとうございました…。」

「ええーっ！リオンのウエイトレス姿見たかったのに！」

「残念でございませぬえ。」

「……………二重の意味で感謝します。ミア母さん。」

「そ、そうかい…。」

「ルウ・リオン様。メイド長より言付けがあります。」

「え？メイさんから私に？な、何でしょうか？（すごく嫌な予感がします）」

「明日付けで、ベル・クラネル直属メイド親衛隊に加わるように、とのことです。ちなみに拒否権はありません。拒否すれば…、全てバラすとのことです。」

「……………謹んでお受けします。」

「「うわあ……………」」

「…はあ、相変わらずだね。あの性悪メイドは。」



## 第207話 白兔、胴上。

早く…あそこへ行かなきゃ…。

あ…炎が、山を飲み込み…消し飛んだ…。

み、みんなは大丈夫!?

『速報です!「フレイヤ・ファミリア」の旗、焼失!「フレイヤ・ファミリア」敗北!この戦争遊戯の勝者は「ヘステイア・ファミリア」!』

え…?か、勝った?

ああ…よかった。

ガクツ…。

もう…限界だ。

ガシツ。

「…え?」

「ベル…よく頑張ったね。凄かったよ…。」

アイズさん…?どうして…ここに?

あ…【ロキ・ファミリア】の旗が落ちたから、僕たちに降ったんだ…。

ちよつと…あの…近くないですか？

「ベル・クラネル。今、落ちるのはまだ早いぞ。最後まで格好つけろ。」

「そうじゃ、オツタルを倒したお主が脱落しては、格好がつかないじやろうが。」

リヴェリアさん…ガレスさん…。

「お前は、オラリオ最強の【猛者】に勝つたのだ。堂々と胸を張れ。」

「そうじゃ。お主は…いやお主たち【ヘステイア・ファミア】は儂らに勝利したのじゃ。」

ああ、本当に勝つたんだ…。

神様…、僕たち…勝ちました！

「【ベル…】」

あ…みんな。

人数は…一人だけ欠けている。

脱落者は…ライラさんだけ…。

リリの計画通りだ…。

よかった…。

「…【剣姫】。…何故、貴女がベルを支えているのですか？」

「…歩けないようだったから。」

「そうですか、それはありがとうございます。では後は私達がやりますので、代わりましよう。」

「…嫌です。私が支えます…。」

「なっ!? あ、貴女たちは負けたのですよ!?!」

「…それとこれとは別です。ベル…歩ける?」

「あ、はい…。何とか。」

「【劍姫】—こつちを無視するな! ベルも何か言ってく下さい!」

「え? ぼ、僕ですか? え、えーと。」

「…ベル、ダメ?」

「うっ…!」

「【劍姫】—貴様!」

何で、アイズさんとルウさんが喧嘩しているの!?

「はあ…、帰ったらまた一騒動ありそうですねえ。」

「その前に、こいつを胴上げだ!」

「そうニャー!」

「にゅふふふ、どさぐさに紛れて尻を…。」

「ええっ! ちよつと、ヴェルフ! うわっ! ヒッ! 誰が尻を…。わあっ!」

あ、高い…。

【ヘステシア・ファミリア】の陣地に…セバス、メイ、そしてお義母さんが見える。  
勝ったよ…僕。

守りきったよ…【ヘステシア・ファミリア】を。

そして…【最強最高の英雄】へ一歩近づくことができたよ…。



く脱落組く

「……………」

「気分はどうだい？オツタル。」

「悪くない。」

「……オツタル、何故笑っているんだい？負けたのに？」

「笑っている？…そうか、俺は笑っているのか。ああ、そうだな。【最強最高の英雄】に  
負けたからな。」

【最強最高の英雄】…か。まさにそうだね。あちらを見なよ。」

「何だと？」

「あの兎、やりやがった…。」

「けっ…絶対に追いついてやる。」

「いや！俺が先だ！」

「え？あの【白兎の脚】に？やめなよ、ベート！」

「そうだな。」

「シスコン発情猫には無理だ。」

「ベルと一緒にするな、愚狼。」

「そのアマゾネスとヤツてろ。」

「へへへ…【炎金の四戦士】からお墨付きをもらったよ！ベート！」

「…すまん、【凶狼】。俺たちが悪かった。」

「てめえらー！」

「やった！やったよ！アルゴノウトくんがやったよ！」

「はい！やりましたね！それこそ、私の好敵手です！」

「いや、あんたら…私達は負けたのよ！わかってるの!？」

「えー、テイオネとアルガナは何もしてないじゃん。」

「ぐっ…。」

「あー…負けたか。」

「でも、これでいいと思う自分がいるのは駄目かな？」

「私もそう思います。後は仕置きですか…。」

「そうですね。その前に：アレを何とかしたいのですが：。」

「無理。」

「ところで、ラウル。お義母さんへ手紙送っていいかしら？」

「いや、アキ。数年前から送ってるじゃないですか。ウチが送る前から既に母さんが知っているのは驚いたつすよ。」

「ふふふ、だつてラウル手紙をほぼ出さないじゃない。」

「それはまあ、そうだけど。けど、今回はアキの手紙と一緒に書いて送ろうかと思うけど、どうつすか？特に今回のことを。」

「あら、いいわね。」

「チツ!!」

「あれほどいがみ合っていた僕たちが、ベル・クラネルたちに負けたことによつてああなっているんだ。僕は：彼を見誤っていたよ。」

「フィン、俺もだ。俺もベルの強さを：あいつの願っていることに負けた。」

「後は：彼らからの仕置きか。」

「俺は既に覚悟している。：聞くが、何故お前が生きているのだ？【狡鼠】。」

「よう、【猛者】。後日に説明してやるよ。あのバグ兔が本当に勝つちまうとはなあ：。」

「何だい、ライラ。君は信じてなかったのかい？」

「勇者サマよ、普通に考えろよ。レベル5がレベル8に勝てるわけがねーだろ。普通はな。」

「そうだね…。普通はね。」

「そうだな、普通はな。」

「どうやら彼らの迷惑はうまくいったようですね。」

「は、はい。そうですね。長く時間がかかるかと思いましたが、こんなに早く…。」

「ベルを中心としたオラリオ連合か…。あっさりとうまく行きそうだね。」

## 第208話 処女神、宣言。

か、勝った…！

ワアアアアアアアアアアツ！

「決まりました！【白兔の脚】の必殺技が【猛者】の必殺技を撃破し…そのまま【小巨人】が築いた山を旗ごと吹き飛ばしました！【ヘステイア・ファミリア】の完全勝利で終わりました！」

「そのままの勢いで旗を燃やすとはな。見事の一言に尽きるな。」

「これで、この戦争遊戯の【旗争奪戦】の勝者は【ヘステイア・ファミリア】となりました！」

「ベルくん！よくやった…！」

「ベル…とうとうここまで（5年前に眷属にするべきだったわ…）」

冒険者になって…半年あまりでここまで…。

あの時、君に初めて会った時は忘れられないよ！

「ヒック…、とんでもないやつちゃやな。ええもん見せてもらったわ！美味しい酒やったわー。」



「同感じゃ。ヒック：最高の【闘争】であつたぞ！見事じゃ、【白兔：いや、ベル・クラネル！】」

「美味かつた：酒自体では駄目ということか。肴も研究せねば。」

酔つ払いは無視しよう。

というか、ロキ、カーリー。君たち当事神だよ？

ソーマ：新たな分野へ手を出すのはいいけど、サポーターくんのような子を生むんじゃないよ。

「おい、色ボケ。お前もウチも負けたんや。：その割には冷静やな？」

「……：こうなるのは予想してたもの。あの子にね。」

「お前：負けることを予想してたんか：。そやな、あの少年はお前んとこで一時的にもんな。」

「ええ：。さあ、ヘスティア。私達は負けたわ。貴女の要望は何なの？」

フレイヤ：君は覚悟してたのか：。

だつたら：いや君はそうせざるを得なかつたんだね。

あの子が止めてくれるのを待ってたんだね。

「そうだね。フレイヤ。僕たちの要望は：ベルくんを中心としたオラリオ連合を設立したい！」

「「な、何だつてー!」」

「そして、ダンジョン制覇と黒竜討伐を目指す!そのために協力してくれ!」

「こ、これでいいのかな…。」

「ハスティア如きに何ができるつてんだ?あの【白兎の脚】を改宗してくれるならいいぜ?」

メモメモ…。

「グータラロリ巨乳女神が何言つてやがる。一昨日来やがれつてんだ!」

メモメモ…。

「第一、そつちは単体ファミリアで10人以下もねーじゃねーか。ふざけろ!」

メモメモ…。

「ねえ、アストレア。何をメモしているの…?え…?さっきの言つてた神の名前?」

「ええ、ヘアイストス。一斉送還するリストをね。」

「「え」」

「…こいつら、アストレアの演説を聞き流していたね?」

「い、一斉送還つて、そんなことが…。」

「あら、やるのは私じゃないわ。ペルの母方の主神がやつてくれるわよ。」

「「あつ…」」

「ヘラ、ゼウス。これを見ているかい?…フレイヤ、ロキ。ヘラとゼウスのオラリオ入りを許可してほしい。ただし監視つきで、だ。」

「私達は負けたですもの。従うわ。」

「大丈夫やろ（あのメイドと執事がおるからな〜）」

「というわけだ。ヘラ。ええと、アストレアが書いたリストは後で渡すから…」

「ま、待ってくれ!ヘスティア!いや、ヘスティア様ああ!それだけはおやめ下さい!」

「そうです!協力!いや奴隷になってもいいから、それだけはおやめ下さい!」

「申し訳ありません申し訳ありません申し訳ありません!」

うわあ…ヘラのやつ、ボクより下界へ降りて何をしたんだよ…。

というか、コレ。

世界へ公開しているのを忘れてないかい?

「いやよ。ヘラが許しても私が許しません。ベルを改宗ですって?斬るわよ?」

「「ひいひいひいっ!」」

「ちよつと…:それ、私のところの剣じゃない!没収よ!」

「あんっ!いいじゃない!こいつらを切り刻み、送還してやらなきやベルのためにならないのよ!」

「「ひいひいっ！大変申し訳ございませんでした！」」

……あつちはヘラとアストレアに任そう。

「ヘステイア、いいかしら？」

「何だい？デメテル？」

「【デメテル・ファミリア】を【ヘステイア・ファミリア】の傘下にいれてほしいけど、いいかしら？」

「もちろんさ！」

「「えええっ！」」

「ということで、貴方たちに一切食糧は買わせません。」

「「お許しくださいませー！」」

うわあ…兵糧攻めで来たなあ。

「【ニオルズ・ファミリア】もだ。」

「【ヘファイストス・ファミリア】もよ。」

「そうか…。なら【ゴブニュ・ファミリア】もだ。」

「【ミアハ・ファミリア】も入ろう。」

「【ディアアンケヒト・ファミリア】もだ」

「【タケミカツチ・ファミリア】も入ろう。」

「ヘルメス・ファミリア」も（入らないとマジで送還される…、ヘラとアストレアに）。  
「【ガネーシャ・ファミリア】もだ！」

「ハハハハ！なら【カーリー・ファミリア】も入ろう！」

「そして、正式に【アストレア・ファミリア】も入ります。」

一氣に大所帯になったなあ…。

「……………え？は、早くないかしら？」

「（あ…あいつらによって根回し済みかー。ニョルズまでも…。もうアカンな、完全に降参や。）」

「ちよつと待っていただきたい、神ヘステイア。」

「…誰だい？」

「ギルドを統括しているギルド長のロイマンです。」

「「ええええええええっ！」」

「……………ロイマンって…兄弟でもいたのかしら？」

『色ボケ…。あれ、本人やで。信じられへんけどな。』

『USOでしょ…？』

「神ヘステイア。そちらの団長ベル・クラネル…【白兔の脚】は、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を受け継ぐ者であることは確かですか？」

「そうだよ。」

「7年前の大抗争についてはご存知ですか？」

「そうだよ。」

「そうだ！そいつは闇派閥じゃないのか！そうだ！裁くべきだ！だろう？みんな！」

「そうだ！そうだ！」

メモメモ…。

「こちらで調べたところ、事実であることがわかりました。確かに7年前、北の村で7歳の子供が拉致された記録があります。その名前もベル・クラネルであることがわかりました。」

「「え？」」

「それを裏付ける資料も他に多く残っております。したがって、「暴食」と「静寂」は人質を取られて邪神エレボスの手足となって、動いてたことが証明できました。私も「ゼウス・ファミアリア」と「ヘラ・ファミアリア」と長年の付き合いがあり、彼らのことをよくわかっております。人質をとられては仕方ありません。【白兔の脚】【静寂】【暴食】は一切非がないことを、ギルドは完全に証明いたします。」

「「え…マジ…？」」

「そして、今回の戦争遊戯での勝利おめでとうございます。神ヘステイアの宣言の通り、

【白兔の脚】を中心としたオラリオ連合を築き、ダンジョン制覇および黒竜討伐をされることについてギルドは歓迎致します。よって、オラリオ連合はギルドが全力を持って支援いたします。」

「「ええええええ！」」

「そうか、わかったよ。ロイマンくん、よろしくね！」

「かしこまりました、神ヘスティア。では、私は仕事がありますのでこれで。時間は有限ですからね。」

資料って…うわあ、そこまでしたんだ…。

味方においてよかったよ。

「「……………」」

「はい、貴方たちはリストに追加ね。」

「「お許しくださいませ！ご慈悲を、何卒ご慈悲を！」」

だったら煽るなよ…。

ボクはもう知らない。ヘラに任せるよ。

『て、手回しがよすぎないかしら…？』

『色ボケ…お前、気づいとらんのか？まあ、ええわ。というか…やりすぎあらへんか？コレ。』

「ま、待て！だ、だが、『白兔の脚』は冒険者になってまだ半年だ！任せられるか！そう  
だろ！みんな！」

シー……………ン。

「え？な、何で…俺の眷属までも…。」

「キミたちに聞くよ。ベルくんは…オラリオ連合の上にいるのに役不足かい？」

「『いいえ！賛同します！』」

「な…。」

「あいつはこの半年ずっと駆け上ってきたんだ！俺らのように、ノロノロとしてねえ！」

「ベル様は、ずっとひたむきに頑張ってきたわ！」

「常に格上と戦い、強くなってきたんだ！あの『猛者』を倒すくらいな！」

「なら…問題はないね？」

「『はい！問題ありません。我々冒険者はオラリオ連合に従います！』」

ファンクラブの影響…すごいなあ…。

「……………」

ポンポン

「ねえ、覚悟はできている？」

「ひいひいっ！」



「私がやると、手元が狂うといけないからプロに任せるわ。」

「「プロ!?!」」

「ヘラが来るまで、首を洗って待ってなさい。」

「「ご慈悲を!何卒ご慈悲を!」」

ボクは知らなーいっと。

「それで、ドチビ。ウチらへの仕置きはどうすんのや?」

「…そ、そうね。あまりの手回しの良さに忘れていたわ…。」

「今晚に各ホームで待つてなよ。こちらから使いをやるから。」

「使い…?」

「……マジ?アイツらが来るのか…。嫌やなあ…。」

彼ら以外に、説明してくれる人がいないから仕方がないよ!

## 戦争遊戯の後始末

### 第209話 勇者、帰還。

思ったより早く決着が着いたな…。

さて、アイズたちと合流するか。

「お怪我はないようですね。」

「アミッド…、君は知っていたのかい？彼らのことを。」

「はい、知ってました。2週間前に。」

2週間前…。あの時の親指の疼きが激しかった時か。

だけど、言ってくれてもよかったんじゃないかな？

「何故言わなかったんだい？それなりの付き合いはあったと思うけど？」

「言わせてくれると思いますか？彼らが。」

「…：…：そうだね。彼らはそうだったね。」

彼らが手を組んだ時点で敗北確定だな。

しかも、彼らが出張るまでもなくベル・クラネルたちだけで勝った。

それは非常に大きい。

僕らの完全な敗北だ。

「やれやれ……。何とかアイズたちを守らないとな。」

「ベル・クラネルのことですから、大丈夫と思いますが。」

「そうだね。ただ、どんな要求をされるのが怖いんだよ。彼らからね。」

「……ご無事をお祈りしております。」

「この2週間で何があったのかを詳しく聞きたいね。怖いけどね。」

「…簡単に言いますと、怖かった上疲れしました。」

「そ、そうかい……。」

聞くのが怖いけど、聞いたほうがいい気がする。

親指もそう言っているね。

「さあ、みんな。僕らは負けたが、堂々と帰ろうじゃないか。」

「「はー！」」

---

地上へ帰る途中に、アイズとリヴェリアとガレスと合流した。

「やあ、リヴェリア、ガレス。お疲れ様。」

「どうやら、吹っ切れたようだな。」

「全く手間のかかる奴め。」

「すまないね。でもそつちは、ベル・クラネルの戦いを直接目にしたからいいじゃないか。」

「がはははは！お主らが褒めるのもわかるわい。火酒を飲みながら見たかったわい。」

「全くこいつは…。フィン、彼に追いつこうともう思わないのか？」

「やめた。僕らは負けた。なら、彼が走る先をそのまま辿らせてもらうさ。その方が一族再興の最短の道だからね。」

「そうか。その方がいいだろうな。この2週間で彼らに何があったのかを詳しく知りた  
いものだ。」

「え？リヴェリア…ガレス、君たち気づいてないのかい？」

「何をだ？」「何がじゃ？」

「そうか、そこまで徹底していたのか…。帰ったら話すよ（恐らくロキは気づいているだ  
ろうね）。」

「??」

彼らが解放されていることを知ったら、どんな顔をするんだろうね。

アイズたちは…。

「ねー。アイズ。【黒妖の魔剣】に言ったことをもう一回言ってみてくれる？ねー？」

「えと…その…あの…。」

「ねー？誰の胸より大きいって？ねー？」

「……ご、ごめんなさい。」

「えー？謝って欲しいなんて言っていないよー。誰の胸より大きいかと聞いてるだけだよー？」

「……………（たすけて）。」

「いい加減にしなさい、ティオナ…。」【黒妖の魔剣】、ずっと涙目だったじゃない…。敵対ファミリアだけど、あまりにも可哀想だったわよ。」

「ティオナさん、ベル・クラネルはそんなことを気にしませんよ…多分。」

「多分って何ー？どういうことー？レフイーヤー？」

「（あ、しまった）ご、ごめんなさい！」

「何で謝るのー？ねー？」

「……………まだ、根に持っているのか…。」

「ところで…聞きたいのだが、いや聞きたいことが多くあるが、まずアレについて聞きたい。」

「そうじゃな。何があつたんじゃ…。」

「ああ、アレね。まあ、僕と同じく吹っ切れたかな？」

「吹っ切れすぎじゃろう…。」

彼らのことだね…。当分は長引きそうかな？

「はー、帰ったら怖いっす…。旗を守りきれなかったから…。」

「ラウル、あれは貴方のせいじゃないと何回も言ってるじゃない。私も責任の一環もあるのよ。」

「いや、アキ。旗の守護の責任者はウチっす。アキには及ぼさないようにするっすよ。」

「駄目よ。ラウル、私達は一緒にしょ？」

「アキ…。」「ラウル…。」

「「チツ!!」」

責任か…。なら、その責任を利用させてもらうか。

彼らにも僕らにも益になりそうなことを。

「地上へ出るのが怖い…。怖い…。」

「ルルネさんを突き出す…?でも…うーん…。」

『100万ヴァリス分のグッズは欲しいですが…。仕方がありません!でも…(チラッ)うーん。』

『よーし!地上へ出たら【泥犬】をとっ捕まえてアルゴノウトくんのファンクラブ本店へ連れて行くっつとー!』

そろそろ、地上に着くか。

「みんな、そろそろ地上に着く。僕らは負けた。けど、堂々と胸を張ろう。罵詈雑言が来ようとも気にするな。いいな？」

「「はいー！」」

思ったより、なかったな。

というか、負けたのに拍手喝采で迎えられたよ。

複雑だ…。

ルルネ・ルーイはすぐに〔ヘルメス・ファミリア〕総動員で確保して連れて行かれた…。

テイオナは悔しがつっていたが、仕方がないね。

そろそろホームか…。

「やあ、帰ったよ。門を開けてくれるかい？」

「お疲れ様です！団長、みなさん。おい、門を開けろ！」

ゴゴゴゴゴゴ…。

やはり、ロキが待ち構えていたか。

「お帰りー！フィン、皆。」

「「ただいま！ごめんなさい！」」

「ロキ、すまない。負けてしまったよ。」

「しゃーない。相手が悪すぎたんや。それに、ウチも楽しめたからなー。」

「こちらとしては無様すぎた。すまない。」

「まんまと奴らに嵌められてしもうたわ。」

「ロキ、僕らの仕置きはどうなったんだい？」

「……今晚に、ドチビからの使いが来るんや。」

「「使い？」」

「……使い（恐らく彼らだろうね）。…ロキ、僕怖いんだけど。」

「……ウチもや。」

「「??」」

「「使いか……どちらが来るんだろうね？」」

「……いずれにしろ、覚悟はしておこう。」



## 第210話 女将、喝入。／白兔、勝鬨。

「……………」

「……………」

「いつまでも落ち込んでいるんだい！シヤキつとしな！」

「「イエス！ママ！」」

「オツタル！アンタもしっかりしな！」

「わかつている…。」

（こりや、駄目だ。かなり堪えているね。）

---

「おい！堂々としな！アタシ達はこのファミリアだ！言ってみな！」

「「「フレイヤ・ファミリア」です！」」

「なら、いつものようにやりな！クソツタレ共から何を浴びさせようが、睨み返してやれ！」

「「「イエス！ママ！」」」

「おい、オツタル！先陣を切りな！…アタシたちは負けたが、堂々とやれ！あの女神の名を汚したくないならな！」

「わかった。」

「「イエス！ママ！」」

---

意外だったねえ…。

まさか拍手喝采で迎えられるとは。

それもあの女神とあの坊主のおかげかねえ。

「門を開けな。」

「あ、はい！お帰りなさいませ。開門！」

ゴゴゴゴゴ

やはりいたか。

「お帰りなさい、みんな。よく帰ってきたわ。」

「「申し訳ありませんでした！フレイヤ様！」」

「いえ、いいのよ。よく頑張ったわ。相手が悪かっただけよ。」

「おい、アタシたちへの仕置きはどうなったんだい？」



「さて、ベル。私達も帰りましょうか。」

「うん。あれ？お義母さんとセバスとメイは？」

「そういえばそうですね。いつの間にかいなくなっていますね。…え？あ、はい。ベル、司令から連絡です。どうぞ、通信機です。」

「あ、うん。も、もしもし？リリ？」

『ベル様！勝利おめでとうございます！』

『ううん、みんなのおかげだよ。特にリリの指示とエイナさんの魔法があったよ。』

『リリとエイナ様はできることをしましただけです。ベル様はすごかったです！』

『ありがとう！ところで…お義母さんとメイとセバスは？』

『クノツソス経由でホームへ帰るそうです。今は姿を見せる時ではないと。』

ああ、そうか。特にお義母さんは死んでいることになっていたっけ。

『え？……あ、はい。エイナ様より、生命力と精神力がかなり低下しているためアミッド様とナーザ様に診てもらおうようにとのことです。』

あ…うん。さつきからずつとダルいままだ。

エイナさんの魔法、便利だなあ。

『わかった。今からアミッドさんのところへ行つて一緒に帰るね。』

『はい！お待ちしております！』

…この通信機、便利だなあ。

愚者さんも凄いけど、それを使いこなすリリも凄いやね！

「じゃ！帰りましょうか！アミッドちゃんたちを拾って行きましょう！」

「そうですね。しかし、『重傑』がああ程度だったとは。それだけ私達が強くなったというところでしょうか？」

「いえアリーゼ殿と輝夜殿に驚き、本来の力を出せなかったでしょう。でなければ、とつくにレベル2である私の重力の檻をちぎっていたでしょう。」

「む、なるほどな。そっちの可能性が高いな。」

あのガレスさんを足止めするなんて、アリーゼさんたち凄いなあ。

「本当に私達で『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』を降したのですね。」

「残る母ちゃんを倒せなかったのが悔やむニヤー！」

「そうだね。けど、あの冒険者くんの炎で山の半分ごと消し去るなんて…。」

「全くだ。あの女将、かなり強かったぞ。俺たちが一斉にかかっても勝てないなんて…。ベルのあの炎がなかったら、俺たちの何人かが脱落していたぞ。」

ミア母さん…、そんなに強かったんだ。

もし先にミア母さんと戦っていたら…オツタルさんに勝てなかったかもしれない。

「あんたらはまだマシだよ。あたしらは何もしてなかったからねえ。」

「はい、でも勝ててよかったです!」

「しかし、あの弱体化の波状攻撃はえげつなかったな…。逆の立場と思うと恐ろしいな。」

「それでもしないと、奴らには勝てなかったから仕方がないよ。」

弱体化攻撃については賛成できなかったけど、それしか「ロキ・ファミリア」と「レイヤ・ファミリア」に勝つ方法がなかったし、セバスとメイが強く推すから渋々認めるしかなかったんだ。

「ごめんなさい…」「ロキ・ファミリア」と「レイヤ・ファミリア」の皆さん…。

「そうだニャー!…ここ数日こき使われたサーを足止めするのは楽しかったニャー!」

「しかし、クロエ。クビになった私が言うことではないですが、帰ったら豊穡の女主人の酒場で「女神の戦車」がいたらどうするのです?」

「ニャハハハ、そんなワケないニャー!…一時的な代理なのでいるわけないニャー!」

(兄様…フレイヤ様…。)

言ったほうがいいのかな…。

いや、メイとセバスから戦争遊戯後にそれぞれのファミリアへ報告するまで言わないで下さい、と言われたんだ…。

「ベル…迎えにきたよ。」

「あ、ナアーザさん！わつとと…二重回復薬ですか？」

ライラさん、アミッドさんと、ナアーザさん、そしてカサンドラさんが歩いてきた。

「勝利おめでとうございます。…かなり消耗しているようですね。」

「ぶ、無事でよかったです。」

「本当に勝つちまつたんだなあ、レベル8に。」

「それを飲んで。かなり消耗しているようだから。」

「あ、はい。ありがとうございます！ゴクゴク…。ふう…何とか回復できました。」

「…え？ああ、わかった。すまないが、「悲観者」。ベル・クラネルへ回復魔法を掛けてくれないか？エイナ・チュールがまだ生命力がかなり消耗しているとのことだ。」

「あ、はい。わかりました。」

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソール・ライト】

ああ…結構回復していく…。

オツタルさんの戦いは本当に消耗してたんだなあ。

いつ、脱落してもおかしくなかったと思う。

「はあ…。かなり楽になりました！ありがとうございます！カサンドラさん！」

「い、いいえ。それくらいはお安い御用ですから…。」

「ベル、凱旋です。帰りましょう。」

「はい！皆さん…僕たちの勝利は皆さんのおかげです！ありがとうございます！」  
「気にするな。」

「まだまだ借りは大きいわ！これからよ！」

「そうですねえ。まだこれからありますからねえ。」

「あたしはもう疲れたぜ。あいつらの相手をするのは。」

「さつさと帰ってゆつくり休むニヤー！」

「明日から仕事開始だからねえ。」

「ルノア！言わないでニヤー！」

「おい、坊や。締めをしな。勝鬨をまだ上げてないだろ？」

「あ、そうでございますね！」

「【猛者】を討ち、そのままで旗を燃やしたのはご主人様です。」

「私達の大將がここで示して下さい。」

え、今、ここでやるの…？

は、恥ずかしい…。



「わかりました……。僕らの、【ヘステイア・ファミリア】連合の勝ちだ！」

「「おおーっ！」」

その声は18階層の隅々まで届いた……。

## 第211話 道化神、絶句。

ウチらは軽く飲んどる。

他の子は疲れたため、ウチの命令で寝ているねん。

「はー…。戦争遊戯中の酒は美味かったのに…、今は美味くないわ…。」

「ロキ…、何故そんなに落ち込むんだ？たかが、使いがくるだけだろう？！」

「儂は満足じゃ、あの光景を直接目にしたからのう。あれだけで当分3日間は酒の肴になるのう。」

「ガレス…：そう言っているのも今の内だよ。」

「ロキ…：フィン、お前たちは何を知っている？！」

「それは…。」

コンコン

「ん？誰や？いや、もーえーわ。入ってきーや。」

「では、失礼します。」

何やねん…。

待てや…、門番を除いて全員寝ているはずなんやが…。

それにその声……まさか。

ガチャ

「なっ！お前は……！」

「……何故おるんじや!?!お主は〔ハファイストス・ファミリア〕で封印されとるんはずじやー！」

「……勝手にホームへ忍び込まないでくれるかな？心臓に悪いよ。〔ゼウス・ファミリア〕の【最強侍従】メイ。」

「ホンマに解放されとるんやな……。」

「15年前と変わらんな。」

「……ここまで忍び込むとは相変わらずやっちゃ。」

「15年ぶりですね。たかがレベル6止まりの三首領と、神ロキ。」

「その口調、間違いない。何故！お前が……!?!」

「馬鹿な！ザルドは死んだはずじや！解放されるわけがない！」

「……リヴェリア、ガレス。彼女はベル・クラネルによつて解放されたんだ。そうだね？」

「気づくのが遅いですね。【勇者】。」

「フィン！どういふことだ！」

「あー、ウチが説明するわー。」

そして、ウチはアストレアの演説について語ったんや。

「……そういうことか。ベル・クラネルが……」

「あ奴らの子とは驚いたぞい……」

「ちゅーか、どつちのファミリアにも似てないやん！何で、あないなキレイな性格やねん！」

「坊ちやまの人徳でございます。神ロキ。」

「坊ちやま……。違和感がなさすぎて笑えんな。」

「……人質というのは嘘だね？彼らの名誉を守るためかい？」

「いいえ。坊ちやまの罪悪感をなくすためでございます。」

「「は？」」

「説明いたしましょう。」

罪悪感？何のこやねん……

「……確かにベル・クラネルには罪はない。あの少年がそう思うのも仕方がないだろう。」

【静寂】め…。」

「あ奴らは若造のところへいくべきじゃったな。馬鹿な奴らが…。」

「だけど、ここまでやったんだ。問題はないだろう？僕たちが何を言おうが。」

「その通りですね。やっと本調子に戻りましたね？【勇者】。」

「君たちにとつては、僕たちが道化に見えたんだらうね？」

「ええ。無様で、痛快で、誠に遺憾でございました。」

「腹立つが、事実だから何も言えん…。」

「そうじゃな…。」

「ずーっと踊らされたからな。」

「癪やわ。」

あの少年がウチにおつたら、メイたんもセバスたんもウチのもんなのに…。

ホンマにあの時の門番、しばくで！

「それで、メイ。僕らへの仕置きは何だい？ライラから3つの選択肢があると聞いたんだけど？」

「はい。お答えしましょう。まず、ヘステイア様のお言葉です。『フレイヤ・ファミリ

ア」と違い、そっちは色々と思惑があつたと思うけど、ボクたちを助けるために介入してきた。なので、置ききは軽く済ませたい」とのことです。」

「(チラツ)：同じ神なのに、何故こうまで違うのだ…。器が違いすぎる。」

「ちよ!?!リヴェリア!それはひどくない!?!」

「黙れ、ロキ。ヘスティア様を見習え。」

あんな神格が桁違いに高いやつを見習えるか!

無理や!

「では、1つ目。「神ロキの断酒・セクハラ禁止。男性は全員女性へ性転換。」です。」

フアツ!?

「(キリツ) 2つ目に進んでくれないかな? ライラから聞いた話では却下じゃなかったかな?」

「はい、ですから男性だけです。」

「理不尽じゃ…。」

「な、何で…ウチに…。」

「非常に魅力的な案だな。」

「「リヴェリア!?!」」

「フィン、お前が女性になればティオネから逃げられるし、一族再興のきつかけを自分で

産んで育てることができてるぞ？非常に魅力的で効率的な案だ。」

「やめてくれないかな？本当に、マジで。」

「嫌じゃ…。僕は嫌じゃ…。」

「私は検討に入りたい。…聞くが、何故女性は性転換しないのだ？」

「坊ちやまの希望でございます。」

「そうか。ベル・クラネルに感謝しなければな。その案にしたいな。」

「待ってくれ！まだ、2つ目と3つ目が残っているんだ！」

「そうじゃ！そうじゃ！」

必死やな。まあ、気持ちはわからんでもないけどな。

断酒とセクハラ禁止を除けば、ウチとしては大歓迎やけどな。

「2つ目「神ロキの断酒・セクハラ禁止。【ロキ・ファミリア】内の不純異性交遊禁止」で

すが…【超平凡】と【貴猫】のこともありますから、それはおすすめできません。」

「そうだね、本当にそうだね。」

「賛成派と反対派に大きく分かれそうだな。」

「そうじゃのう。あんなのを目にしたらそれは選べないのう。」

そやな…。ラウルとアキ、ずっとひつついているわ。

いや、アキがラウルにべったりやねん。

あれを引き離すと言うたら、ブチ切れるやろうな。

2つ目は却下や。

しかしな…、納得できんのがあんねん。

「ちよい待ちーや！何で1つ目と2つ目の案にウチへの罰があるんや！」

「別にいいではないか。神へスティアに感謝しなければな。菓子折りを持ってお礼に伺いたいくらいだ。」

「【九魔姫】、歓迎しますよ。」

「…3つ目は？」

「3つ目「神ロキの断酒・セクハラ禁止。〔へスティア・ファミリア〕への改宗希望者がいれば許可すること。ただし、ベル・クラネルのスキルを考慮して三首領で決定するものとする。」です。」

「スキルを考慮？どういうことだ？」

「…オツタルと互角に戦えたのと関係があるのかい？」

「はい、そうでございます。」

「ちよい待てーや！3つの案ともなんでウチの断酒とセクハラ禁止があるんや！」

「ロキ、仕置きは受けなければならぬぞ。我々は負けたのだから。」

「そうだね。観念しなよ、ロキ。」



「同情するぞい、ロキ。」

「嘘や…殺生や…。」

何て恐ろしい案を出すんや…。

ひどいわ…。

## 第212話 道化神、悔恨。

散々話し合つたところ、やはり1つ目と3つ目やな。

フィンとガレスは3つ目イチオシと言つてるが、おもしろくないねん。

「検討できるのは1つ目と3つ目だな。」

「いや、リヴェリア。3つ目だけだよ。」

「そうじゃな。3つ目のみじゃ。」

「2対1か……。ロキ、お前の周りに美人と美少女のみとなるぞ?」

うん、非常に魅力的やねん。

けどな、セクハラ禁止じゃ意味あらへんわ!

「セクハラ禁止じゃ、何もできんわ!メイたん!何とかそれは却下できへん?」

「坊ちやまの意見です。【劍姫】が坊ちやまに神ロキの酒癖の悪さとセクハラに困つていと愚痴をこぼしたのがきっかけです。」

「アイズたーーーーん!」

他派閥にウチのことをバラすんやない!

「自業自得だ、ロキ。アイズには後で褒めてやらんとな。」

「うううー…。」

「妥協案として用意してあります。「神ロキの断酒・セクハラ禁止（ホーム限定）」でどうです？」

「おおお！ええやんけ！

そつちがいい！

「ふむ…外では構わんということか。まあ、外ではセクハラできないだろうな。」  
「ロキ、ここが落とすどころだよ。」

「しゃーないわ…。1つ目…」「ロキ！」…3つ目にするわ。」

ホーム限定か…。まだマシやな。

ミア母ちゃんのとこへ飲みに行くしかあらへんな。

「そうか…残念だ。1つ目にしたかったのだがな。」

「…（本気だ）。」

リヴェリア…マジで思っているやん。

「それで、ベル・クラネルのスキルとは？」

「一部だけですが、お教えしましょう。」

非常に興味あるわー。

---

何…やて…。

魅了やと…。色ボケと同じのを持つとるとは…。

それに、【兎圀女達】って何やねん！

ハーレムそのものがスキルやお！

あんなキレイな子が…糞命に影響されてそれが発現したと？

バグでも限度つてもんがあるやろ!?

何であの日にその門番を雇ったんやー！

「…：魅了に、【兎圀女達】か。女性しかできんな。」

「羨ましいいね。いや、彼が大変だと思うべきか。はっ、まさか…：彼は…：それを知っているのかい?。」

「いいえ、全く微塵も。」

「…：大丈夫なのか?ベル・クラネルが気の毒に思えてきたのだが。」

「あの若造が可哀想に思えてきたわい…。」

魅了って…：そのスキルとの組み合わせはえげつないやん！

あ！フレイヤがこいつらに気づかなかったのは…：あの少年の魅了に…：…。

うわあ…。

それ以前に、あの少年が知らへんって…。

メイたん、外堀も内堀もとことん埋めてあの少年のハーレムを作って、観念させる気やないか…。

可哀想に思えてきたわ…。

今度会ったら、うまい飯でもおごつたるか…。

「ふむ…となると限られるな。ベル・クラネルへの好感度が高いのは…アイズ、ティオナは確定として後はレフィーヤか。」

「そうですね。ただ、改宗されるので何かとまとめ役や相談役が必要と思います。【九魔姫】または【純潔の園】あたりをおすすめします。」

フアツ!?ウチのオキニメンバーばかりやん!

「…私が行けん、ここの初期メンバーだからな。責任というものがある。アリシアを派遣しよう。」

「そうだね、アイズ・ティオナ・レフィーヤ・アリシアがいいね。」

「問題ないのう。」

「ちよい待ちーや!ウチは反対や!アイズたんもティオナも、レフィーヤもアリシアもアカン!」

「ロキ、僕らは負けたんだ。受けようよ。」

「じゃあー！つ目の案にするわ！そこで性転換した子を派遣すればええやん！」

「な!？」

性転換したガレスとベートを派遣したる！

アキとラウルには百合カツプルになつてもらうわ！

「これで2対2か。【最強侍従】、すまないが我々だけでは決まらん。全員の承諾を得た  
いが後日に来てもらえないか？」

「ま、待つてくれ！ロキ！ア、アイズが納得しないで！ロキを送還しかねないぞ！」

「そうじゃ！あの晩のことを忘れたか！」

「ひいっ！嫌や……しやーない。3つ目の案にするわ。まずウチの子たちに説明するから後日に来てくれへん？」

「そうですね。2日後でどうです？」

「(ホッ…) ああ、十分だよ。」

肝が冷えたわー。

「聞くのを忘れたが…、何故【アストレア・ファミリア】の【紅正の花】【大和竜胆】【狡鼠】が何故生きているのだ？」

「その2日後に説明いたします。私でも驚愕するくらいなので。」

「……【最強侍従】の君が？聞くのが怖いね…。」

「はい、ヘステイア様曰く「天界を滅ぼしかねない」とおっしゃったくらいですので。」

「え？あのドチビが？天界を？とんでもないやんけ…。」

「何をやりおったんじゃ…あの若造は。だが、よし！あの娘共が生き返ったのは嬉しいからのう。」

「そうだね。彼女たちの死は、オラリオにとってかなり痛手だったからね。」

「まさか、復活してくるとは誰も思わんだろうな…。」

全くや。あの少年は何をやったんやろうな！

「さて、2日後にいい返事を期待していますよ。【ロキ・ファミリア】三首領の皆様。では、これで失礼します。」

シュッ！

あの時のアイズたんにあのスキルを出されたら…間違いなく送還される！

3つ目しかないわな。

それに…メイたん。ホンマに変わらんな。

音もなく消えるなんて…。暗殺家も真つ青や。

「1つ目の案にしたかったのだがな。仕方がないな。」

「僕は肝が冷えたよ…。」

「濃もじゃ…。」

「ううー、ホーム内での断酒にセクハラ禁止かあ……。おのれ、ドチビいいい！」

「私は大歓迎だ。アイズたちの改宗での付き添いに、神へステイアへ菓子折りを持ってお礼に行かねばならんな。」

「ひ、ひどい……。ママ……。」

「自業自得だよ、ロキ。今日はもう遅い。明日にみんなへ説明しよう。」

「賛成じゃな。僕はまだ飲むぞい、あの若造の戦いの余韻が残つとるからのう。」

「ちくしょー！ウチも飲むぞー！とっておきの酒を飲みまくつたる！」

禁止にされるなら、オキニの酒を空にして飲みまくつたる！

どーにもなーれや！



## 第213話 劍姫、拳手。

昨日は、負けた…。

すごく悔しかった…。

けど、あの人…【薫風】の言っていた事がすごく刺さった。

『では…、その血塗られた手でその方を抱きしめられるのですか？その方はそれを喜びますか？』

…お母さんは…喜んでくれない…。

この血に塗れた手を…。

私は…どうすればいいの？

『全て打ち明けなさい。ベルに。』

…ベルに打ち明けたら…絶対に嫌われる…。

『彼が拒絶するからですか？貴女の見る彼はそのような人物ですか？』

…違う。

ベルはあの娘…竜の娘をかばっていた…。

ベルなら…聞いてくれるかもしれない…。

でも…怖い…。

私を見る目が変わるのが…怖い。

今までの関係が変わるのが…すごく怖い。

でも…。

【猛者】との戦いを見て…ベルが目指しているのが…遙か先の道であることを…。

お父さんより…上の道を。

【最強の英雄】傭兵王ヴァルトシユティンより上の道を…。

ベルはレベル5になったばかりなのに、レベル差が3もある【猛者】に勝った…。

あの炎は綺麗だった…。

あの炎は強かった…。

あの炎は優しかった…。

そしてベル…【ヘステイア・ファミリア】は勝った…。

勝てるはずがないのに、勝った…。

その後ベルが倒れそうになって、支えた。

その時、色々と悩んでいたことが吹き飛んだ。

ベルの側にいれば、私の行き先がわかるかもしれない。

ベルの側にいたい…。

ベルの側にいると心が温かい…。

ベルの側にいると黒い炎が完全に消えていく…。

フィンも何か変わった気がする。

あの時は駄目だったけど、今なら改宗が可能かもしれない。

リヴェリアにもお願いしよう。

…そういえば、昨晚「ヘステイア・ファミリア」の使いが来たのかな？

そんな心配がしなかったけど…。

「みんな、おはよう。」

「「おはようございませす！」」

「まず、昨日は僕の完全なミスだった。すまない。」

「儂も、あの場をまとめきれなかった。すまん。」

「私も、あの場を落ち着かせることができなかった。すまない。」

「団長たちのせいじゃありません！私があの人族の自爆に飛び込まなければ…！」

「じ、自分も旗を守りきれなかったす！責任は自分にあるっす！」

「ラウルだけのせいじゃありません！私もです！」

「わ、私もです！私が「ヘステイア・ファミリア」の旗をちゃんと攻撃していれば！」

「フィンたちを責められないよ。あのバーチエには完全に勝てなかったもん！」

「あの弱体化攻撃に耐えていれば……！」

「すまない……。みな、静かにしてくれ。まず昨日で、僕は一番先に脱落した。なので一連の流れを見ている。【ヘステイア・ファミリア】の勝利までの流れを簡単に説明しよう（僕を一番先に脱落させたのは、こういう役割をするためもあったのか……。非常に惜しいな、リリルカ・アーデ）。」

そして、私達は昨日の戦争遊戯について説明してもらった。

「おい！何でてめえの魔法が発動しなかったんだ!？」

「ベート、よせ。レフィーヤ、もう一度聞くぞ。魔法を連発しても、かき消されたのだな?。」

「は、はい！申し訳ありません！」

「……まさか。奴までも……か？フィン！」

「そうだよ、リヴェリア。ライラから聞いたから間違いない。彼女も復活しているよ、君の天敵がね。」

「……【ヘステイア・ファミリア】へ行く理由が他にも出来たな……。」

「「??」」

リヴェリアの…天敵……？

誰なの……？

「信じられない…。【アストレア・ファミリア】の彼女たちが生きているなんて…。」

「事実だ。私も信じられないが、現実だ。…あり得ないことだがな。」

「【紅の正花】、【大和竜胆】、【狡鼠】は死んだはずじゃなかったっすか!？」

「あの娘たちが言うには、5年前に死んだはずだそうじゃ。5年前から遺体を現代へ持ち帰り生き返ったそうだが…何度も考えてもわからんのう。可能なのか？ロキ。」

「蘇生する魔法か、ものがあれば可能やろうな…。けど、時を遡るといふのはありえへんけど、あり得ているから可能やろうな（それもあの少年なん？…バグにも限度あるやろ…。）」

「だろうね。……彼は、半年前にこの門を叩いたけど当時の入団希望者を門番に雇ったため、追い出してしまったそうだ。本当に、惜しいことをしたよ。」

「「はあ!？」」

「何だ?!?ふぎけんじゃねえ!その時の奴はどこだ!?!ぶち殺してやる!」

「ベート、待ちなよー!あたしも殺るー!」

（え?つまり…私の後輩になっていたかもしれないということですか?…許しません…燃やします。）

許さない……。よくもベルを追い出すなんて……

「まーまー、落ち着けやー。…その門番を探すのは後やー。ウチも腹立つんやけどな。運が悪かったと言いたいようがないわー。」

「大体のことはわかったかな？反省は後にしよう。昨晚、「ヘステイア・ファミリア」の使いが訪ねてきたよ。僕らの仕置きについてね。」

「一！一！」

「その前に、神ヘステイアの言葉を伝えるよ。それは……」

フィンは、ヘステイア様と3つの選択肢について語ってくれた。

やはりヘステイア様は、ロキと違い本当の女神様だ……

「3つ目しかねえじゃねえか！絶対に3つ目だ！……お、俺が女だと……。ふざけんじゃねえ！」

「……何て恐ろしい案を出してくるっすか……。嫌っす……」

「1つ目か2つ目だったら、ラウルと一緒に破門してもらってラウルの村へ帰るけどね。」

「アキ…。」「ラウル…。」

「「チツ!!」」

女性…。女ばっかり…。

前も思ったけど、ベルつて…不良なの？

「それで、3つ目について僕らで話し合っただんだ。」

「フィン、ガレス、私は「ロキ・ファミリア」創立時からのメンバーだ。責任もあるから改宗するわけにはいかん。」

「その前に…「ヘスティア・ファミリア」へ改宗を希望する者はいるかな？」

「「ハイ!」」

行く!

「けっ!クラネルがいるんだ。行かねえわけがねえだろうが!」

「あたしは行く!絶対に行く!(アルゴノウトくんのメイド親衛隊へ入りたい!)」

「私はごめんよ。団長がここにいないなら、私もいるわ!」

「どうしましょうか…。リヴェリア様がいるならここにいてほしいですか…?」

「むむむ…。アイズさんも手を上げているし、あの少年がいるなら行かなければならないでしょう。けど…。リヴェリア様の教えがまだ終わってないようだし…。」

思ったより…多い。

「ふむ、多いね。けど、こちらの戦力もあるんだ。バランスを考えて、使いと話して決めさせてもらったよ。アイズ・ティオナ・レフィーヤ・アリシアの4人だ。」

「本来ならまとめ役として、私が行くべきなのだが…これも勉強だ。アリシア、頼むぞ。」

「は、はい！おまかせくださいませ！」

「何でだ！フィン！」

「【ロキ・ファミリア】は【ヘステイア・ファミリア】の傘下にある。どちらでも同じことだ。それに【ヘステイア・ファミリア】は中衛が厚いが、前衛と後衛が不足している。また、離れ離れになるわけではない。」

「模擬戦や遠征はファミリア合同でやるそうだ。同じことじゃ。」

「また、【ヘステイア・ファミリア】はベル・クラネルと【不冷】を除けば、主神ヘステイアも含めて全員が女性だ。しかも【不冷】は離れの鍛冶場で寝泊まりしているそうだよ。事実上、女性だけだよ。」

「ちっ……！」

よし！やった！

あの時、あびーるしてよかった！

あれ……？

ベル以外、全員女性が同じ家で寝泊まり……？



何だろう……ムカムカする。

## 第214話 美神、驚愕。

負けたわね……。しかもあんな形で。

オツタルの必殺技を真つ向から打ち破るなんて。

レベル8とレベル5なのに……。

負けたのに……清々しい気持ちね。

皆は、ミアの命令で寝ているわ。

ここにいるのは、幹部のこの子たちだけ……。

この子たち、俯いて顔を上げられないわね。

仕方がないわ。圧倒的な戦力差を覆されたのだから。

「み……いい加減にしな！アホンダラ！アタシらは負けたんだ。いつまでも俯いてんだ

い！……」

ミア……私の台詞を取らないでくれるかしら？

ヘステイアの要望が、ベルを中心としたオラリオ連合とはね。

ゼウスとヘラでもできなかったことね。

天界の上位に入る神格者のヘステイアだからこそ可能。

そして、今回の戦争遊戯で一番注目されファンクラブもできるくらいのベルなら問題ないわね。

……ロキのところは恐らくヘステイアの傘下に入るでしょうね。

ロキは送還されないでしょうね、多分。

そして……私は天界へ送還され、この子たちは改宗される…。

せめて……ベルと少しお話がしたかったわ。

送還される前に話をしてもらいましょう。

ベル…。

「…使いはいつになったら来るんだ？遅えぞ！」

「モゾモゾするな、発情猫。」

「イライラするな、シスコン猫。」

「何だ？盛ってんのか？発情シスコン猫。」

「そこらへんの娼館へ行ってこいよ、発情シスコン馬鹿猫。」

「て、てめえら！」

アレン…あそこで公開されてはもう隠せないわね。

…せめてアーニヤとは話をしておきたかったわ。

ミアに言付けしてもらいましょう。

「神フレイヤ。覚悟を決めるにはまだ早すぎます。こちらのハーブティーでも飲んで落ち着かれていますか？」「……え？」

「……え？」

「!!!」

「何者だ！ここまで忍びこんでくるとは！」

「門番は何をしてやがった！」

「ひいっ！」

「お前は……馬鹿な……。あり得ない！」

「静かにしな……相変わらずだねえ、サド執事。〔ヘステイア・ファミリア〕からの使いかい？」

「そんな……！あ……！」

「ベルは、ゼウスとヘラの系譜を持っている……。」

「何てこと……！」

「何故、私は見落としていたの……！」

「久しぶりですね。神フレイヤ、ミア、小僧。」

「「小僧？」」

「そこにいるではないですか？でかい図体して負けたレベル8が。」

「くっ…何故、お前が解放されているのだ！【ヘラ・ファミリア】の【最恐執事】が！」  
「なっ…【ヘラ・ファミリア】だと…。」

「おや、気づいておりませんでしたか？」

「…久しぶりね、セバス。何故貴方が…いえ貴方達が解放されているのか説明してくれるかしらっ？」

「喜んで。では…」

そして、セバスは解放されてから戦争遊戯の終わりまでのことを話してくれた。

「ふん、やはりあの坊主はあの爺とヒステリー女の系譜を持っていたのか。」

（あの愚兎がな。だが、そんなのはどうでもいい。）

（……ちっ、【暴食】と【静寂】はあの兎を見捨てたのか…）

「ベルの特訓相手は、【最恐執事】のお前だけでなく【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】もだったのか…（こいつらが手を組んで暗躍してたのなら…、勝てないはずだ。もっと早く気付けていれば…）。」

「そっでございます。」

「ご託はいいよ。さっさと用件に入りな！」

「せっかちになりましたな、ミア。若い頃と大きく変わり、このセバス時の流れを感じます。そう思いませんか？神フレイヤ、小僧。」

「え？あ、あまり変わってないじゃないかしら？」

「(サツ) ……………。」

オツタル…目を反らしたらだめじゃない！

気持ちはわかるけどね。

「「若い頃？」」

ズシン！

「黙りな。」

「「ハイ(怖い)！」」

「やれやれ、では、まずヘステイア様の言葉を伝えます。「フレイヤ、キミのやったことは罪深い。魅了でオラリオを支配しただけでなく、怪物祭の騒動、ミノタウロス強化種などベルくんにはオラリオを巻き込む試練をぶつけた。だけど、魔導書の提供や歓楽街炎上、異端児騒動などでベルくんを助けたのもまた事実。そして、ベルくんの希望により重くはしない。」だそうです。」

ヘステイア…。あんなことをしたというのに。

ベル……ありがとう。

「…神ヘスティアの寛大な処置感謝する。」

「お、俺もです…。」

「……ちつ。」

「……………」

「礼儀がなつてない方々ですな。神フレイヤ、甘やかしすぎではありませんかな？」

「…貴方が元いたところと、一緒にしないでくれるかしら？」

「それは失礼しました。ああ、アーニヤ嬢。部屋の隅にうずくまっていなくてそちらへ座って下さいな。これから通達しますので。」

「「え？い、いつの間に？」」

「ニ、ニヤ…（ガクガクブルブル）。」

ア、アーニヤ!?

何でそんなに怯えているの!?

「て、てめえ!この愚図に何しやがった!」

「何も。単に首の襟を掴んで建物の屋上を転々としただけでございます。」

「嘘つくニヤ…!ミヤをボール扱いにして高く運んだじゃないかニヤ…!おミヤが豆粒になるまで高くポーンポーンと投げて移動したニヤ…!」

「「うわあ……ひでえ。」」

「け、怪我をしたらどうするんだ！」

「大丈夫です。その時は『ミアハ・ファミア』へ運ぶだけでございます。」

「そういう問題じゃねえ！」

「いい加減にしな！話が進まないよ！さっさと話しな！」

「怒られたではありませんか、『女神の戦車』。」

（（お前のせいだろ！）（）

…セバスは相変わらずね。

アーニヤに怪我がないのはよかったわ。

…その気になれば、セバスはバベルの屋上から紐なしバンジーでもやりかねないわ

…。



## 第215話 美神、感謝。

「では、まず1つ目。男性は全員性転換で、女性はそのままで。そして強制カップリングします。」

「あら、面白そうね。」

「……………勘弁して下さい。フレイヤ様。」

「嫌だああああ！」

「ニヤ？ということは、兄様は姉様「轢き殺されてえか？轢き殺されたいんだな？」ゴメンなさいニヤー！」

「…本当だったのか、【狡鼠】の言ったことは（1つ目に決まったら、自害しよう）。」

「…嫌だ…死にます。」

「ふん、案外軽いじゃないか。」

「…軽くない！重い、重すぎる！…」

「黙りな！2つ目は何だい？」

「2つ目は、少々厳しいです。「フレイヤ・ファミリア」は解散。眷属達はこちらの指定するファミリアへ改宗。ホームも財産も全部没収とのことです。これは裏情報ですが、

ギルドは「フレイヤ・ファミリア」を完全にギルドの下部組織にしようとしています。そうなる前に解散して、オラリオ連合のファミリアへ改宗することをおすすめします。」

「…………このバカ女神はどうなるんだい？」

「ああ、言い忘れていました。これは坊ちやまの要望であり、ヘステイア様も他の方も難色を示していました。坊ちやまの言葉をお伝えします。「フレイヤ様が何に苦しんでいるのか僕はわかりません。なので、わかるまでは追放や送還はしないで下さい。」とのことです。」

「ベル……………」

「それで、どうなるんだい？」

「それを踏まえて、ヘステイア様から貴女への処罰内容を伝えます。「本当はアポロンと同じくオラリオ追放にしたいけど、ベルくんがこう望んでいるので次の沙汰を下すよ。ベルくんが寿命で死ぬまで神フレイヤとしての活動を禁ずる。そして神威を完全に封じ役割演技で街娘のシルとして、ベルくんの従者として側に仕えるように。」とのことです。我ながら、非常に甘い沙汰だと思います。」

ベル！ ありがとう……！

あんな仕打ちを貴方にしたというのに……！

ヘステイア……ごめんなさい……。

「……確かに甘いねえ、あの坊主とあの女神は。いいのか？アンタとしては。」

「私なら、元主神ヘラに引き渡しますね。」

「……それなら自害して天界へ帰った方がマシよ。」

「……だろうね。」

あのヘラに？嫌よ！

ゼウスにしたことを私にするなら、天界へ帰るわ！

「……私としてはそれに賛同できません。」

「俺もだ。」

「「「そうだ！そうだ！」」」

「黙れ、3つ目をまだ聞いてないだろうが。」

みんなはさすがに反対ね…。

私はそれでいいと思うんだけど…。

ベルの従者…ふふふ。

「そうだねえ。おい、サド執事。3つ目は何だい？」

「…これは、坊ちやまの強い要望です。ですが、私としてはオススメできませんな。あま  
りにも酷な内容と思いました。」

「え？「ヘラ・ファミリア」の「最恐執事」の貴方が？ベルがそんなことを？」

「あのベルがそんな恐ろしいことを考えつくわけがない、と思うが……。」  
「同感だ。」

「……内容は何だい？」

ベルが……セバスが恐れるようなことを？

そんな子じゃないはずよ。

「その前に、皆様にお聞きします。そちらのミア・グランドの料理は美味かったですか？」

「……ああ。そうだ。」

「『美味しかったです！ママ！』」

「俺はちよくちよく食ってたからな。美味かったぜ。」

「悪くはなかった。」

「お、美味しかったです。」

「母ちゃんの料理は美味いニャー！」

「では、神フレイヤの料理はいかがだったでしょうか？」

「『（スン）……………』』」

「え？何でみんな、一斉に真顔で黙るのよ？」

ミアの料理が美味しいのは認めるわ。

でも私の料理もそれなりと思うけど？

「……………おい、まさか。あの坊主が考えたというのは…。」

「では、3つ目です。『フレイヤ・ファミリア』は現状のままとする。その代わり神フレイヤの料理の腕が『小巨人』の料理の域に達するまで、『フレイヤ・ファミリア』の飲食物、水一滴に至るまで神フレイヤの手掛けた料理のみとし、携帯食や外食などは一切認めない。とのことですよ。」

「……(スン)……………」

「あら、簡単じゃない。そっちがいいわね。3つ目にしましょう、みんな。」

ええ、それぐらいなら問題ないわね。

ベルらしい案ね。

なのに、何でセバスが恐れるぐらいなの？

「……………あの坊主。何て恐ろしい事を考えつくんだい。アレを食ってピンピンしてたのはあの坊主だけじゃないかい。」

「え？ミリア？」

「あ、あ、あの白髪頭！ミヤーを、『フレイヤ・ファミリア』を全員毒殺する気がニャー！ミヤーは嫌だニャー！あんな地獄はもうたくさんだニャー！」

「ちよつと、アーニャ。毒殺って…」

「皆、聞いてくれ。俺は団長として苦渋の決断をしようと思う。2つ目の仕置きを受け入れようと思う。全ては俺の非力が故だ。……すまない。」

「ちよつと、オツタル…」

「いや、オツタル。お前は悪くねえ、仕方がねえんだ。この3つの内で2つ目がまだマシンなんだ。」

「そうだ、オツタル。私がお前なら間違はなく2つ目を選択していた。」

「団長よ…。貴方の選択は間違っていない。」

「そうだ。」

「胸を張れ。」

「お前は間違っていない。」

「我々はお前の選択を尊重しよう。」

「ちよつと、みんな…」

ひどくない!?

私の料理を食べたときは「…美味しいです。」と言ってくれたのに!

その後、何故かトイレに行列が並んでいたけど、たまたまね。

「決まりだね。他の奴らにはどう説明するんだい?」

「俺が…いや、我々だ」我々幹部が決めたことにする…。」

「「オツタル、皆もわかつてくれるはずだ。」」

「団長！ミャーは従うニャー！」

「……………むう。」

みんな…ひどいわ。

ベルだけよ、わかつてくれるのは。

「決まりですな。神フレイヤ、問題ありませんでしょうか？」

「申し訳ありません。フレイヤ様、何卒2つ目を受け入れていただきますようお願い致します。」

「「お願い致します！」」

「……………甚だ不本意だわ。本当に不本意よ…。3つ目ならすぐに終わるといふのに…。」

まるで私の料理は激マズと言っているようなものじゃない！

「無理だね。アタシが保証するよ。アンタがそれを可能にする頃は、数千年後ぐらいだね。」

「貴女がそこまでいうほどですか？ミア。」

「ああ、そうさ。後にも先にも、コイツの料理を食ってピンピンとしたのはあの坊主だけさ。他にいるとしたら…：くたばったけど、「ゼウス・ファミリア」の【暴食】だけだろうね。」

「なるほど…。シル嬢には、厨房には立入禁止と命じておきましょう。」

「その方がいいよ。死者が出ないうちにね。人によっては、あの世へ逆もどりになりかねないからねえ。」

「ミア…ひどいわ。」

「諦めな。人…いや神には向き不向きというものがあるんだよ。」

絶対に諦めないんだから！

覚えてなさいよ！



## 第216話 白妖杖、考慮。

危なかった…。

まさか本当に1つ目で性転換が出るとは。しかも男だけだと？

それに決まったら、私を含め「フレイヤ・ファミリア」の男性陣は自害ラツシュだな。だが、3つ目は何だ！

あの愚兎め！貴様の強靱な胃袋と我々と一緒にするな！

：フレイヤ様の料理は何故かわからんが、耐異常を通過する。もう二度と食いたくないのだが…。

それを、ミアと同じ域に達するまでフレイヤ様の料理尽くしだと？

ふざけるな！深層で数年いたほうがまだマシだ！

—————

さて、奴らへ説明するか。

「皆、聞け。昨晚「ヘステイア・ファミリア」の使いが来た。あちらからの仕置きについて3つの選択肢があったが、俺は…いや我々で話し合ったところ2つ目になった。

「むう」まず、神ヘステイアの言葉を伝えよう。……」

オツタルが昨晚のことを説明した。

フレイヤ様はまだ不満を持っておられるな…。

1つ目に対して、女性陣は安堵の息が大きかったが男性陣は悲鳴の嵐だった。

「嫌だあああああ！」「」

「いつそ殺してくれえええええ！」「」

「死んだ方がマシだあああああ！」「」

やはりそうだったか…。

2つ目に対しては、やはり非難轟々だった。

「何故、それを選ぶのですか！団長！貴方達が！」

「フレイヤ様への忠義はその程度だったのですか！見損ないました！」

「2つ目は到底受け入れられません！」

だろうな。普通はそう思うな。

「ほら、オツタル。だから、3つ目にしましょうと言ってるじゃない。」

「……………」

フレイヤ様…、まだ諦めていないのですか…。

「フレイヤ様が3つ目を希望されているなら、何故それを選ばないのですか！」

「聞け。…我々幹部もお前達と同じ気持ちだった。だが、3つ目を聞き我々は2つ目を

選ぶしかなかったのだ…。すまん、俺があの時ベルを打ち破っていれば…！」

「え…、3つ目を…？」

「団長があの魔法を放ち、ベルがそれを真つ向から打ち破られたら、我々の誰もできないじゃないですか…！」

「あの…3つ目とは何でしょうか？（すごく嫌な予感がします…）」

ヘルンか…。奴なら身をもって知っているだろうな。

「それは…「待て、オツタル。」アレン…。」

「てめえらに聞くぞ。そこにいるミアの料理食ったな？」

「「はい！美味かったです！ママ！」」

「そうかい。」

「そうか。では、フレイヤ様の料理は覚えているな？」

「「(スン) ……………。」」

「え？何で、みんな黙るのよ…？」

そりゃ、そうだろうな。

あの後、トイレへ駆け込んで間に合わないならギルドまたはダンジョンへ行つたぐら  
いだからな。

何て恐ろしいのを作られたのだ…、フレイヤ様は。

「3つ目は、ベルが強く推したそうだ。「フレイヤ・ファミリア」は現状のまま。」

「「おお！さすがベル！」」

安心するのはいいが…。

「ただし、フレイヤ様の料理の腕がミアの域に達するまで飲食物、水一滴に至るまでフレイヤ様が作られたもののみとする。携帯食や外食は一切認めない。…以上だ。」

「「え……………」」

「…………（嘘……。あの料理を毎日毎食…？）」

だろうな。絶句するのも道理だ。

「私としては容易いものと思うんだけど…。オツタルたちったら私の料理の腕を疑うんですもの…。みんなは3つ目がいいよね？」

「団長！私は貴方方の苦渋の決断を尊重します！」

「え？」

「申し訳ありません！団長達の苦しみを理解できてませんでした！」

「我々も2つ目を支持します！」

「ちよつと、みんな…」

「諦めな、往生際が悪いよ。」

フレイヤ様、申し訳ありません…。

我々の胃腸を守るためです…。

あの愚兎め！

「「申し訳ありません。フレイヤ様！」」

「……（アレを食べてなんともないのは、ベルだけです！毎日毎食？無理です！）」

「むううううっ！」

「どうやら決まりましたようすな。」

「「誰だ！」」

「【ヘスティア・ファミア】 団長ベル・クラネル専属執事のセバスと申します。お見知りおきを。」

「おい、サド執事。簡単に忍び込んでくるんじゃないよ！」

「やれやれ、いつの間に短気になったのですか？ほら、目元のシワが……危ないですね、ミア。」

「このサド執事！たやすくアタシのコブシを受け止めてんじゃないよ！」

（（え？ミア団長代理のコブシを片手で……この執事、ヤバい！））

やはりな……レベル7か8はあるな……。

【勇者】が言っていた化物共というのはこいつのことか。

共……？他にもいるのか？

勝てないわけだ…。

「セバス…、何をしに来たのかしら?」

「2つ目に決まりましたようですので、皆さんの転向するファミリアを伝えるに参りました。それとも1つ目がよろしいでしょうか?大丈夫ですよ。フリユネさんのように美人に仕立て上げますから。」

「「ひいひいひいっ!」」

「セバス…2つ目で正式に決まった。だから1つ目と3つ目はなしだ…。なしだったらなしだ!」

「そうですか、それは残念です。せっかく各人のアフター設計図を持ってきたのですが。」

「「アフター設計図!」」

「あら、面白そうね。見てみたいわ。」

「「2つ目!2つ目で異存ありません!なので、それはお下げください!」」

こいつらだったのか。あの「男殺し」をああしたのは。

…敵にした時点で我々の敗北は決まったのだな。

もつと早く知っていれば…!

## 第217話 白妖杖、呆然。

我々の改宗先はどこになるのだろうか…。

「では、まず【猛者】。貴方は基本がなつてません。力押しで何でもできると思ったら大間違いです。だから、レベル5の坊ちやまに翻弄されるのです。」

（（坊ちやま…あいつ、そう呼ばれているのか。違和感ないな。））

「それで…俺はどこになるんだ？」

「まず、基本の足運びや剣の構えからやり直しなさい。なので、武の神である【タケミカヅチ・ファミリア】へ改宗をおすすめします。神タケミカヅチもご了承済みです。」

「…わかった。受け入れよう。」

なるほど…よく見ている。

武の神からの手ほどきを受ければ、オツタルはより一層強くなるだろう。

「そして、【白妖の魔杖】【黒妖の魔剣】【…】（ヴァン）【名も無き女神の遣い】は、【へステイア・ファミリア】へ改宗していただきます。」

何故、私なのだ？

「理由を聞いてもいいですか？」

「はい、まずヘディン・セルランド殿。貴方の坊ちやまへの指導は的確なものでした。当時坊ちやまに不足していたものが貴方の指導によってより伸びました。その指導力として判断力はお見事です。したがって私の執事軍団へ入ってもらいます。」

「…あの愚兔があまりに未熟で見ていられなかったただけだ。貴方の下につくのはいいが、私から奴への態度は変えない。それでもいいのですか?」

「公の場は合わせていただけのなら、問題ありません。」

「承知した。よろしく頼みます。セバス…いえ、執事長。」

なるほど、今まで通りということか。

なかなかできる執事だな。

「あ、あの…俺は何故…。」

「坊ちやまがここにいる間、貴方は坊ちやまに何かと優しくしていました。坊ちやまを友と見ていますでしょうか?ヘグニ・ラグナール殿?」

「は、はい…。真なる友と思っています…。」

「それはようございしました。友の一人として坊ちやまを支えてあげて下さい。ああ、無理に言おうとしなくてもいいですよ。」

「…はい。よろしく願います…。」

ヘグニへの扱いがうまいな…。



まあ、これで私の負担が軽くなるな。

「ヴァン殿も同様です。」

「…わかりました。執事長。」

「…あの、私は…。」

「はい、ヘルン嬢。あなたは坊ちやまの従者として、シル嬢と共に坊ちやまのフォローをお願いします。」

「(従者!? やった!) 承知しました! よろしくお願いします、執事長。」

「ああ、シル嬢とヘルン嬢の上司は私ではありません。坊ちやまの専属メイド長のメイドが担当です。」

「え? あの【最強侍従】のメイドが? ……憂鬱だわ。」

「同情するよ。あの性悪メイドが上司とはね。」

「……(性悪メイド? 大丈夫でしょうか?)」

やはり、もう1人いるのか。

「そして【炎金の四戦士】。貴方方の連携は見事です。ですが、致命的な欠陥がございます。」

「何だと?」

「俺たちに欠陥だと?」

「あり得ない。」

「てめえの目が…曇っていませんね。ええ、ハイ。なので、その…我々の喉先にあるナイフをおろしてくれませんか？」

「だから、そこを突ければ終わりなのです。」

「…その欠陥とは何でございましょうか!?（食い込んでる！喉に食い込んでるって！）」

「指揮官です。今までは恐らくヘディン殿の指示で動いていたでしょうが、やはり種族の違いで齟齬が発生するでしょう?」

「ああ、ある。」

「その陰険エルフは俺らのことを理解してねえ。」

「やりづらいつたらありやしない。」

「だから俺たちだけで動くしかないんだ。」

お前たちが勝手な行動をするからだろうが。

「連携上は問題ないでしょう。ですが、先の戦争遊戯を見てわかる通り貴方たちの連携は確実に機能していませんでした。それはおわかりでしょう?」

「…悔しいが、確かだ」

「貴方がその指揮官をしていただく?」

「いいえ、同じ種族の方になっていただきます。」

なるほど、同じ小人族ならわかるだろうな。

だが…。

「まさか、あのいけ好かないやつか？」

「【ロキ・ファミリア】の【勇者】か？」

「従いたくねえ。」

「見たくも話したくもねえ。」

「でしょうね。ですが、もう一人いると言ったらどうします？」

「……もしかして【ヘステイア・ファミリア】のリルルカ・アーデか？」

「そうでございます。レベル2ですが、今回の戦争遊戯での戦略を全て立てた方です。坊ちやまに次ぐ功労者でございます。」

「異存ない。」

「問題ない。」

「不満ない。」

「反対ない。」

「【炎金の四戦士】は【ヘステイア・ファミリア】へ改宗でよろしいですか？」

「はい！」

「では、私の執事軍団へ入ってもらいますね。」

「「えっ…。」」

「何か？」

「「いえ、何でもありません！」」

あの戦いでここまで見抜くのか。

恐ろしい分析能力だな、しかもレベル7以上の実力を持っている。

ますます敵にしたくはないな。

「そして、ヘイズ嬢、『満たす煤者達』は、『ミアハ・ファミリア』へ改宗していただきませぬ。『ディアンケヒト・ファミリア』を希望されるのでしたらそちらでも構いませんよ？」

「いいえー。神ミアハがいいですー。あのガメつい神には入りたくないし、あの聖女サマもいますからねー。」

「「ヘイズ様に従います。」」

「承知しました。神ミアハには話を通しております。」

…「ミアハ・ファミリア」は治療士の層が一気に分厚くなったな。

「ディアンケヒト・ファミリア」との競争心を煽るためか。

まあオラリオ連合として、治療士がある程度まとまるのは悪くない。

「さて、残りの方は全員【デメテル・ファミリア】へ改宗して頂きます。神デメテルには了承済みです。神フレイヤの数少ない神友であり、同じ豊穰を司る神なので問題はないかと思えます。」

「数少なくて悪かったわね。…そう、デメテルなら問題ないわ。…みんな、私のためにデメテルへ協力をお願いできるかしら？」

「『承知しました！』」

「あの女神のところか。まあ、野菜などを多く仕入れているから手間が省けるねえ。」

「おい…この愚図はどうなるんだ？」

「もちろん。同じ【デメテル・ファミリア】ですよ。その方が貴方も都合がよろしいでしょうっ。」

「…ちっ。」

「ああ、そうそう。神デメテルの言葉を忘れていました。「ミアとアレンとアーニヤは、そのまま『豊穰の女主人』で働いてほしいわ。従業員が足りなければそちらで選んでもいいわよ。あ、野菜の仕入れ値は安くしておくわね。」とのことですよ。」

「そりゃ、助かるねえ。シルとルウも抜けたことだし、何人か働いてもらうか。」

「ニヤ？つーことは、兄様がずっと店に？」

「何か文句あんのか？サボらせはしねえぞ？」

「ウニャー…。」

（（尻尾の動きが言っていることと違うな…。やはり兄妹だな。））

【デメテル・ファミリア】か…。クノッソスの戦いでほぼ全員が捕虜にされたと聞く。

全員が入院している今、神デメテルは無防備状態。

オラリオの食糧を担っている【デメテル・ファミリア】を失うのは非常に痛い。

なので、そこへ元【フレイヤ・ファミリア】が改宗し、守るといふわけか。

なるほど…勉強になる。

「さて、【フレイヤ・ファミリア】のホームは取り壊させてもらいます。」

「「え？」」

「財産などは既に回収していますので、後で【デメテル・ファミリア】へ宿泊棟などの建設資金に回させていただきます。」

「「は？」」

「以上です。では、皆様。共に外へ出てもらいます。」

「「え？え？」」

何のつもりだ…？

すごく嫌な予感がするのだが…。

「ここは…我らがホーム【戦いの野】を見下ろせるところか…。

…？何だこの編んだような線は？

執事長の持っているものにつながっている？

「長年住んだホームだけど、感慨深いわね…。まあ、取り壊すのに時間がかかるでしょう。」

「では、神フレイヤ。こちらのボタンを押してくれませんか？」

「え？これに？何かしら？」

ポチッ

ド、ド、ド、ド、ド、ドカーーーーン！

「……………え？」

「「は……………？」」

「はい、約束通り取り壊させていただきました。」

「「俺たちのホームがああああああああ！」」

【戦いの野】が…あつという間に瓦礫に…。

「ご安心くださいませ。皆様の貴重品はこちらに置かれています。名前のタグ付きです。」

「「いつの間にも!」」

「アンタ…、忍び込むついでに盗んだだけでなく、あちこちに火炎石を忍ばせたね?」

「ご名答でございます。」

「(こいつ、ヤバイ!本当にヤバイ!逆らったらダメだ!)(」

「…俺の部屋にあった、ザルドの剣と鎧を盗んだのはお前だな?」

「盗んだ?違います。返していただいたのですよ。『暴食』を育て上げたメイへお渡ししました。」

「……………そうか。」

「ねえ…セバス。貴方、自重というものを知っているかしら?」

「知っておりますとも。今の私は坊ちやまの力になることに全力を注いでいるだけでございます。」

「そう…(ベルはとんでもない者たちを解放したわね…)」

「……………あの、ミア団長代理。私たちの上司となるメイさんという方は、あちらのセバスさんほどではありませんよね?」

「残念だけど、あのサド執事と互角の奴だよ。…同情するよ、本当に。」

「……………そんな。終わった…(やっとベルの側にいれると思ったのに)。」

セバス殿と互角の奴が、もう一人いるのか…。



あの愚兎め、何をしたのだ!?

「では、神フレイヤ。シル嬢になつていただきますかな?」

「急かさないでくれる? せめて、みんなにフレイヤとして別れの言葉を告げておきたいのだけれど? ……すぐにホームを爆破されるとは思わなかつたわ。さすが、「ヘラ・ファミリア」を最恐に押し上げた【最恐執事】というだけであるわね。」

「お褒めに預かり光栄でございます。」

「褒めてないわよ。 ……ベルの側にいるのは非常に嬉しいけど、貴方達がいると憂鬱だわ…。」

「大丈夫でございます。【ヘステイア・ファミリア】の皆様はすぐに慣れていただきますから。」

「……………そう（ヘステイアたちに同情するわね）。」

……………退屈はせずすみそうだな。

まあ、いい。あの愚兎を鍛え直し、教育してやる。

……………どこまでかは執事長次第だな。

## 第218話 美神、後処理 I

「みんな…こんな形になったけど。ごめんなさいね、私の我儘でこうなって。」

「そうでございますな。」

「(ムツ)セバス、貴方はちよつと黙つて頂戴。」

「失礼しました。」

腹立つわね。

これから、彼らとずっと一緒に？

憂鬱だけど、ベルと一緒にいるからプライマイゼロね。

「フレイヤ様、私の力不足で大変申し訳ありません。」

「オツタル、何てめえで責任被つてやがる。お前だけじゃねえ。俺らもだ。」

「そうだ。何もかもかぶろうとするな。」

「…だから、脳筋。」

「「「そうだな！この脳筋が！」」」

「……すまん。」

何故こういう時に一致団結するのよ…。

まあ、そこも可愛いんだけどね。

「オツタル、いいえ貴方達は本当によくやってくれたわ。オラリオを全て敵に回しても。…けど、今回は相手が悪かった…いえベル一人に負けたと言っても過言じゃないわね（あの幸運のせいでしょうね）」

「はい…（こいつらが解放されていなければ…いやそれもベルの運なのか。）」

「『……………』」

ベルの発展アビリティ…『幸運』。

あれが彼らのところへ、ベルを導いたのね。

「私は…ヘステシアの慈悲、そしてベルの優しさによって天界へ送還されずにすんだわ。…シルとしてベルの側にいることになったけど、貴方達と離れ離れになるわけではないわよ。…そうよね？セバス？」

「もちろんでございますとも。ただ、神フレイヤとしての現神はヘステシア様の許可が必要ですが。」

「十分だわ。それに…傘下ファミリアだし同じようなものよ。」

「『フレイヤ様ああー』」

「非戦闘員に関しては…ヘルン、お願いできるかしら？」

「かしこまりました。」

「貴女たちもヘルンをサポートしてあげて。」

「「はー」」

非戦闘員は多いけど、ヘルンたちが対処してくれるなら大丈夫ね。

改宗先が予め決まっているのは癪だけど、デメテルやタケミカツチ、ヘステイアなら安心ね。

「先にどこへ行こうかしら…?」

「神デメテルが待機しておられますので、先に【デメテル・ファミリア】へ行かれたほうがよろしいかと。」

「…嫌な人ね。これも計算の内というわけ? 憂鬱だわ…。」

やはり、腹立つわ。

ベルの側にいるのはいいんだけど…、彼らが目を光らせていては手も出せないわね。

何とかならないのかしら…。

【デメテル・ファミリア】に着いたのはいいけど…、デメテル一人だけ?

不用心よ…。と言っても仕方がないわね、クノツソスで全員が入院する羽目になったのだもの。

なるほど…、だから私の眷属を改宗するには丁度いいということね。

デメテルならいいわ。

「フレイヤ、久しぶりね。ええと…お疲れ様と言ったほうがいいのかしら？」

「そうね、デメテル。まさか彼らが解放されているなんて…。ベルの身元を調べておくべきだったわ。」

「今更でございませぬ。」

「(イラツ)…。」

デメテルはセバスたちの解放を知ってみたいね。

だったら、教えても…いえ彼らがそうさせてくれるわけがないわね。

はあ…ここ数日の私は何をしたのよ…。

「ま、まあ。気持ちはわかるわ。…セバスちゃんから聞いていると思うけど、貴女の眷属の大方は引き取るわ。いつでも会いに来てもいいわよ。」

「ごめんなさいね。神友の貴女に押し付けるような真似をして。」

「気にしないで。こちらメリットがあるんですもの。ペルセフォネたちが動けない以上、私一人で大変だったのよ？第二級冒険者たちが多くいるなら大歓迎よ！それに…私達神友でしょ？」

「デメテル…ごめんなさい！」

私は…神友失格だわ。

デメテルを助けることにかまけて自分を優先するなんて。

デメテルはセバスやメイを通して、私の眷属の改宗先を引き受けてくれた。神友として顔向けができないわ…。

「いいのよ。そちらはようやく『伴侶』を見つけたでしょ？ヘスティアを応援しないわけではないけど、負けちゃ駄目よ！」

「！ええ、ベルの側においてベルの最期までいるわ。ありがとう…デメテル。」

「ふふふ、シルちゃんとしていつでも来て頂戴。前よりは気楽に来れるでしょ？」

「そうさせてもらうわ。…彼らをお願いするわね。」

「お願いするのはこちらよ。では、改宗を始めましょうか。」

デメテルが応援してくれるなら、心強いわ。

持つべきものは神友ね。

……改宗でかなり多いけど、仕方がないわ。

疲れたわ…。

後は、ミアとアレンとアーニャね。

「ふう…やつと残り3人ね。」

「ええ、ああ、貴方達。早速で悪いけど、裏の畑にある野菜を全て回収してほしいの。お願いできる？」

「「かしこまりました、デメテル様。……フレイヤ様、今までありがとうございますございました！」」

「今生の別れじゃないんだから。デメテルを支えてあげてね。」

「「はい！」」

あの調子なら大丈夫でしょうね。

ミア……。私の眷属の中で一番付き合いが長い子。

神であろうが特別扱いしなかったところが好きだったわ。

それだけでなく色々世話になったけどね。

「ミア……貴女を手放すのは非常に惜しいわ。」

「さっさとやりな。アタシはせいせいしたよ。」

「もう……こういう時ぐらいはしんみりとするんじゃないの？」

「ナニいつてやがる。たかがシルになるだけだろ？アタシにとつては今まで通りさ。」

「……そうね。」

「ああ、いつでもルウとあの坊主と飯と酒が飲みたければウチに来な。」

「……ミア、ありがとう。長い間、世話になったわね。」

「……それはこちらもさ、フレイヤ。」

やはり、付き合いが長いとしんみりしてしまうわね。

ちよくちよく『豊穰の女主人』へ行きましょう。

ベルとルウとヘルンとともに…。

そしてアレン…。

今回の戦争遊戯でよく頑張ってくれたわ。

アーニヤ、クロエ、ルノア相手にやりにくかったでしょうね。

「アレン…今回は悪かったわね。」

「気にしないで下さい。フレイヤ様、俺達は負けた。それだけです。」

「そうね…。アーニヤと仲良くしてあげてね。」

「お断りします。あの愚図はサボろうとしてばかりなので、厳しくしてやらないと。」

「ふふふ…。アレン、今までありがとうね。ミアと店を盛り上げてあげてね。」

「かしこまりました。…我らを拾い育て上げて、本当にありがとうございました。フレ

イヤ様…。」

本当に素直じゃない子ね。

そしてアーニヤ…。

無理にしてアレンに追いつこうと頑張らなくてもよかったのに。

それがアーニヤ自身を追い詰めてしまった。

だから、ホームから追放しミアのところまで保護してもらうしかなかった。



悪いことをしたわね…。

「…フレイヤ様。」

「アーニヤ、ごめんなさいね。嘘を言つて、辛い思いさせて申し訳なかつたわ。」

「違うニヤ…ミヤアがもつと賢かつたら、もつと早く気付けたニヤ…。ごめんなさいニヤ…。」

「賢いアーニヤなんて、アーニヤじゃないわ。」

「ウニヤ!? ひどいニヤ!」

「ふふふ…。アーニヤ…貴女はアレンのついでじゃない。私は貴女達が欲しかつたら、貴方達二人を眷属にしたのよ。」

「うう…ごめんなさいニヤ…。ヒック…ヒック…。」

「ああ、もう泣かないの。ほら、いつものように笑つて。」

「グスツ…。はいニヤ…。」

「シルとして、『豊穰の女主人』へベルとルウと一緒に行くわ。その時は歓迎してくれる?」

「もちろんニヤ! ミヤアの歌も…」

「それはダメよ。生涯禁止よ。」

「そうね。『デメテル・ファミリア』でも禁止事項にするわ。」

「ウニャー!?なんでニャー!?!」

そりや、そうよ。

あんな歌を世界へさらけ出したら、禁止にするに決まっているじゃない。

それを採用したあの子もあの子だけどね。

これで…デメテルへの改宗分は終わったわ…。

あつけないものね。

「…デメテル、あの子達をよろしくね。」

「任せて頂戴。伊達にオリンピックスの地母神は名乗っていないわよ。」

「神友として…シルとして会いに行くわ。」

「いつでも待っているわ。」

ありがとう…デメテル。

フレイヤとして会いに行く時は…暫く先になるわ。

それまで…さようなら、私の神友。

## 第219話 美神、後処理Ⅱ

さて…次は。

「次は【ミアハ・ファミリア】でございます。」

「わかったわよ。」

嫌な人ね、本当に。

あら、わざわざ店前で待ってくれたのね。

「おお、来たか。フレイヤ。」

「アポロンの宴以来ね、ミアハ。」

「そうだな。セバスから聞いているが、本当にうちでいいのか？ デイアンケヒトの方が待遇いいと思うんだが。」

「あんな、うるさくガメつい神は嫌ですー。」

「そ、そうか…。」

「ええと…私が団長のナアーザだけど、いいの？」

「はいー、ナアーザさんの薬はよく効きますー。色々とお世話になっていますー。」

「え？そ、そうなの。それは毎度ありがとうございます…。」

「ええと、ヘイズだっけ？うち、結構オンボロだけど？」

「大丈夫ですー。これから盛りたてればいいですー。むしろ燃えますー。」

「わ、私よりポシティブ…。」

「そうか、なら借金でもして新たに…。」

「ミアハ様は経理へ手を出さないで下さいー。私達がやりますー。」

「そうだね。ミアハ様はデンと構えてよ。」

「そうね、ミアハ様は何もしないで下さい。」

「む、そうか。いや、頼りになる子達だな。」

いえ、違うわよ。

貴方が金に無頓着だからじゃない。

なるほど、ヘイズたちをこちらへ改宗させる理由がわかったわ…。

ヘイズ…本当に世話になったわね。

あの子達の治療だけでなく、料理もお願いしてたものね。

「ヘイズ、本当に世話になったわ。治療も料理も。」

「いいえ、フレイヤ様を勝たせず申し訳ありませんでした。」

「ヘイズ、嘘はいけないわ。貴女、ベルが勝つことを期待していたでしょう？」

「……ごめんなさい。私達は治療士なのにフレイヤ様の苦痛を除くことができずで

した。なので、ベルに期待してたんです。フレイヤ様を解放してくれることを。」

「ううん、貴女は間違っていないわ。むしろお礼を言わなければならないわ。」

「……フレイヤ様！」

「そんな顔をしないの。【ミアハ・ファミリア】は【ヘステイア・ファミリア】の傘下にあるのだから、シルとして会いに行けるじゃない。」

「そうだな。いつでもいいぞ。」

「ありがとうございます……。」

ミアハならヘイズを悪くは扱わないでしょうね。

「言い忘れておりましたが、【ゴブニュ・ファミリア】へ建設のお願いをしております。」

「建設?」「我らの治療院か?」

「いいえ、総合施設でございます。」

「総合施設?」

「はい、オラリオ連合となったからには傘下ファミリアの物をまとめて売るところです。」

「あら、面白そう。」

「だが、その土地はあるのか?オラリオはどこもいっばいだぞ。」

「……まさか……。」

「はい、ご明察の通りです。元「フレイヤ・ファミリア」の敷地です。」

「元だと?」

「だから爆破したのね…。」

「爆破!」

なるほど、爆破させてその後建てるつもりだったのね。

だったら、そう言やいいのに…あ、無理ね。

オツタルたちが断固反対するでしょうね。

「そうでございませう。私は数百年前からずっと思っていました。何故ファミリアごとく売場所がバラバラなのだろうかと。一つにすれば効率的なのにと。」

「まあ…そうですね。」

「なので、今回はいい機会です。総合施設で傘下ファミリアの売り物をまとめます。」

「ほう、面白いな。」

「はい、「ミアハ・ファミリア」と「ディアンケヒト・ファミリア」のような治療院はありませんが、出張治療院のような店でやってもあります。「ディアンケヒト・ファミリア」へ確認しますとそのような余裕はないので「ミアハ・ファミリア」へ譲るとのことです。なので、ヘイズさんたちの活動の場が生かせられるかと。」

「なるほど…面白いわ。」

「ゴブニュ・ファミリア」と「ヘファイストス・ファミリア」の武器を並べて競争心を煽らせるます。それは両ファミリアの主神も乗り気でございます。」

「そうだな、2つ並べて見る場所がないものだな。」

「そして『デメテル・ファミリア』の野菜や果物、『ニョルズ・ファミリア』の魚介類なども売ります。将来的には料理店も建てます。シル嬢は駄目でございます。」

「まだ何も言っていないわよ…。」

「なるほどな。バベルに匹敵する目玉となるな。」

「はい、まだ構想中ですのでお待ちくださいませ。」

「面白くなってきたわ。フレイヤとして行けないのが残念だけど。」

総合施設…今までにない案ね。

オラリオ連合だからこそこそでできることね。

「じゃあ、ミアハ。ヘイズたちをよろしくね。」

「ああ、任せておけ。」

貴方を任せるの間違いじゃないかしら？

「さて…セバス。次はどこかしら？」

「タケミカツチ・ファミリア」でございます。」

タケミカツチね。

そういえばオツタル、あそこのファミリアと何回か関わりがあったわね？  
セバスが改宗を勧めたのは、それもあるかしら？

「む…来たか。」

「久しぶりね。タケミカツチ。」

「ああ、確かアポロンの宴以来だったか？今回は残念だったな。」

「嫌味かしら？」

「いや、そんなつもりはなかった。ただ…相手が悪かったな。」

「そうね。…オツタルをよろしくお願いするわ。」

「ああ、最強の武人にすることを約束しよう。この武の神の名にかけてな。」

「楽しみにしているわ。…オツタル。タケミカツチの言うことを聞きなさいね。」

「はい…。」

もう、そんなに気落ちしなくてもいいのに。

オツタルのせいだと誰も言っていないわ。

ベルが…貴方より強かった、ただそれだけよ。

「レベル8だろうが、基礎から教えていく。お前はさらなる高みへ行ける素質がある。」



「……よろしくお願いします。タケミカツ子様……。」

武の神のタケミカツチが太鼓判を押すとはね。

楽しみだわ。

…改宗をしましょうか。

思えば、あの路地に倒れていた子がオラリオ最強となるとは誰も思わなかったでしょうね。

それに、この子ミアにかなり懐いていたわね。

そして、「ゼウス・ファミリア」「ヘラ・ファミリア」へ何回も挑んで負けていたわね。今でも負けた回数が多いほどにね。

「これで…終わリね。オツタル…今まで私の我儘を聞いてくれてありがとう。」

「いえ…我らではフレイヤ様を救うことができませんでした。申し訳ありません。」

「いいえ、貴方達は私をずっと助けてくれたわ。…これからは自分の道を目指しなさい。

【ゼウス・ファミリア】の【傑物】や【ヘラ・ファミリア】の【女帝】に追いつきたいでしようっ。」

「……はい。追いついてみせます。」

「ほう、【傑物】と【女帝】はそんなに強かったのか？」

「はい、タケミカツチ様。奴らは正真正銘の化物でした。特に【女帝】は、そのセバス

が育て上げたやつです。」

「元団長ですな。レベル9で、元主神ヘラに生き写しで傲慢で暴虐な方でしたな。」

「……そうね。」

「レベル9であのヘラに生き写し?……そうか、道は果てしなく遠いな。では早速やるか、まずは足運びからだ。」

「はい、タケミカヅチ様。…失礼します、フレイヤ様。」

「タケミカヅチ、よろしくね。さて、セバス。私たちは「ヘステイア・ファミリア」ね?」

「もちろんです。ご案内いたしましょう。」

オツタル…最強の武人となることを祈っているわ。

タケミカヅチならオツタルを任せられるわ。

ヘステイア程ではないけど、神格者だしね。

それに「ヘステイア・ファミリア」と懇意だから、シルとして見守っているわ。

## 第220話 美神、後処理Ⅲ

そして、最期に「ヘステイア・ファミリア」ね。

「アポロン・ファミリア」ホームを改装し、ヘステイアの温かみがあるわね。

「直接来るのは初めてだわ。」

「では、こちらでございます。」

ガチャ

「ヘステイア様。神フレイヤご一行様をご案内いたしました。」

「ふえ?」

「は?」

何よ…、貴女たちのその反応。

まさか…もしかして、私のホームが爆破されることを知らなかった?

彼ならやりかねないわ…。

何しろ、「ヘラ・ファミリア」の「最恐執事」だものね。

「は、早くないかい? 戦争遊戯が終わって1日しか経ってないよ?」

やっぱり知らなかったみたいね。

「私達のホームを先程木端微塵にされたのよ。文句はそのセバスへ言って頂戴。」

「え？ホ、ホームを木端微塵？」

「ようこそ、いらつしやいました。神フレイヤ。」

ああ……間違いないわ。

ベル……1体だけでいいのに、2体も解放するなんて…。

「……………本当にいるのね。【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】メイ。」

「ええ、15年ぶりですね。ところで、ヘルンさんはどちらでしようか？」

「非戦闘員への扱いをやっているわ。多いから数日後に来るでしよう。」

「ではお手伝いに行きましょう。」

シュッ！

……………相変わらずね。

まあ、いいわ。ヘルンもかなり助かるでしょう。

「「？」」

「ああ、貴方たちに言っておきましょう。メイは私と同等の力を持っています。」

「なるほど…彼女もそうなのですね。」

「……………怖い。」

（（また逆らってはいけない奴が増えた…））

貴方たちの気持ちはよくわかるわ。

黒竜遠征まででゼウスとヘラの夫婦喧嘩でこの2体の喧嘩の余波のため、こちらにも大きな被害が出たくらいだもの。

その彼らが手を組んだら…ね。

ガチャ

「ふん。負け犬共がよく顔を見せたものだ。」

!?!?!何で?

「な!?!せ、【静寂】!?!」

この際、説明してもらいましょう。

【紅の正花】【大和竜胆】【狡鼠】が生きていることを含めて。

「……………ヘスティア。説明してほしいんだけど?どうして、【アストレア・ファミリア】の

彼女たちと【静寂】が生きているのかしら?」

「あ……。セバスクン。」

「お答えしましょう。」

---

嘘でしょ…………。

ベルが【時駆白兔】というレアスキルを発現したなんて。

神でも大神でも出来ないわよ！

どうなっているのよ！あの子。

あとちよつとで私のところに堕ちるところだったのに！

「ベルが時を遡って彼女たちを連れてきた？……私達、いえ大神でもできる神って少ないわよね？」

「そうだねー。ボクはもう達観したよ。」

「私も未だに夢じゃないかと思っているわ。現実だけだね。」

達観するしかないわね。

ただのヒューマンが神を超えるなんてね。

ヘステイアとアストレアに同情するわ。

「アストレア・ファミリア」はわかります。ただ、あの愚兎が「ヘラ・ファミリア」の系譜を持っていても、何故「静寂」がここにいるのです？母方と同じファミリアだけにいるような奴ではないと思いますが。」

「あー…キミ、「貴様、あの子のことを何と言った？」…あーあーあー…。」  
え？何で怒るのよ？

貴女、そんなキャラじゃないでしょう。

「フレイヤ…離れましょう。送還されるわよ」

「え？」

「貴女と同じ系譜といつても、あの愚兎とは赤の他人でしょう。」

「あっ!？」

え？

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「ぐああああああっ！」

「へ、ヘ Dein!？」

「ちよ、ちよつと！いきなり何をするのかしら？」

「この白耳長が私の義息子、そして私達の関係を愚弄したからだ。」

「「え？む、義息子?」」

「……え？義息子?……聞き間違いかしら?ヘスティア、アストレア。」

「……正確に言うと、ベルくんはアルフィアくんの甥だよ。」

「実の息子以上に溺愛しているわよ……。」

嘘でしょ……。

あの【静寂】が?ヘラでも【女帝】でも臆さなかった彼女が?

ベルの……伯母?

「「え？ベルの伯母……」」

「「ああっ!」」

え？

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「「ぎゃああああああ!」」

「ひ、ひい……。」

「生きているなら、よく聞け。私を伯母さんといってみろ。ひき肉にしてやるぞ。」

「わ、わかりました……（ガクガクブルブル）。」

本気で言ってる、本気で怒っているわ……。

いえ、それより……あり得ない事実を知ったわ。

『……嘘でしょ。ベルが【静寂】の……甥?』

『事実だよ、フレイヤ。』

『私……送還されなきゃいいけど……。』

『そこは大丈夫さ。ベルくんがアルフィアくんに念押ししたからね。……多分、大丈夫。』

『【最強侍従】に【最恐執事】、【静寂】?……負けるはずだわ。』

「おい、そのビツチ神。間違えているぞ、私達はただ旗を守っただけだ。貴様らを負か



したのはベルとあいつら自身の力だ。」

「…そうね。はあ……、もつと早く気づくべきだったわ。」

ベルがゼウス・ヘラの系譜を持っていることを調べておくべきだったわ。

いえ…、私はベルの系譜よりベルそのものを好きになったもの。

その時点で…負けていたのね。



え？【白妖の魔杖】に【炎金の四戦士】？」

「はい、【ヘスティア・ファミリア】へ改宗となり私の傘下に入ります。」

「（ええーっ！【フレイヤ・ファミリア】が？）わ、わかりました。」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

「…先に説明してほしかったのですが。」

「『同感です…。』」

俺は…運がよかった。

「申し訳ありませんな。お嬢様は坊ちやまのこととなると、視野が大変狭くなっております。以後、ご注意を。」

「承知しました…。愚…ベルはどこに？」

「傘下のファミリアヘリリ嬢たちと挨拶まわりをしております。」

友よ…早く帰ってきてくれ…。

「わかりました。…【静寂】、いやアルフィア。貴女のご子息のことについて話があります。」

お、おい！我が宿敵、ヘーインよ。

それ以上刺激するな！

「…何だ？」

「ご子息の教育はどうなっているのですか？ろくでもない下衆なことに詳しいのに、それに対して初心すぎる。あと、一般的な常識は知っているとしても教養がまるでなっていない。」

…え？

「…私ではない。あの狒々爺のせいだ（あの狒々爺、絶対に全力の魔法で吹き飛ばしてやる）。」

「（狒々爺…大神ゼウスのことか）貴女がご子息のところへ行かれていれば、少しはまともな教養を身につけられたはずですよ。一歩間違えば、ご子息はそこらの有象無象になっていた可能性が高いですよ。」

何だ…これは。

どこかで見たことが…、ああそうだ。

学区で何となく見てたときに、教師と生徒と保護者が話していた時の感じに似ている。

「…その通りだ。今でも悔やむ、あの狒々爺を押しつけてあの子を引き取るべきだつ

たと。」

「では、貴女がご子息を教育すると?」

「ああ「お嬢様、それは無理ですな。ここ最近お嬢様はずっと坊ちやまを甘やかしてばかりです。」……悪いか。」

「あと、ヘステイア様。「ふえっ!?」貴女もです。」

「ベルに対して、甘すぎます。あと食事がじゃが丸くんばかりなのもよくないです。」

「さ、最近は違うよ!」

「貴女が身を切つて働くのは構いません。ですが、貴女は主神なので一応の警戒をもつて警護をつけるべきです。そもそも……」

「ひくくくん。」

ヘディン……、凄いな。

【静寂】だけでなく神ヘステイアまでも説教するなんて。

俺でも出来ないぞ。

『何かしら……。この光景は。』

『三者面談? いえ、ベルがいないから保護者面談?』

『ヘディンはベルをかなり熱心に教育してたものね。あの時のリードは凄かったわ……はあ、もう一度してもらいたいわ。』

『何それ、詳しく。』

ああ…ヘディンのしごきのアレか。

俺から見ても見事なリードだった。

途中で見失わなかったらな。

「ヘディン殿、貴方に依頼したいのは坊ちやまへの教育係です。幸い、坊ちやまもヘディン殿を師匠と言っております。」

我が友の教育係…。

いいのか？それは。

まだ改宗さえも済ませていないのに。

「待て、セバス。こいつはレベル6だろうが。クソ猪を倒したベルより弱いではないか。」

「お嬢様、そういう問題ではありません。坊ちやまの周りには私達を含めて坊ちやまに對して甘い方々です。それでは坊ちやまのためになりません。ヘディン殿のような方がいれば、坊ちやまは歪まらずまっすぐに育つはずです。」

「む……。」

そうだな、ベルは良くも悪くも純粹すぎる。

フレイヤ様や俺を含めても、我が友に甘くなってしまう。

…友の人徳だろうな。

一緒にいると非常に和む。

「んー…、そうだね。ベルくんはあまりにも世間を知らなさすぎる。サポーターくんたちがいるにしても、彼女たちも僕たちもベルくんに対して甘いからなあ…。よしヘディンくん、ベルくんをお願いできるかい？」

「承知しました。ヘスティア様、セバス殿、その任務お引き受け致します。ただ私は私のやり方があるため、ベルが私の眼鏡に叶うまで愚兎の呼び方や手荒なことの許可をお願いします。」

「何だと？」「ちよ、手荒なことって…」

「はい、許可しましょう。」

「な!?!セバス!」

「お嬢様、私は坊ちやまの記憶を見えています。ヘディン殿はかなり乱暴ですが、坊ちやまをちゃんと教育しておりました。お仕置きするときも大怪我しない程度まで魔法を抑えています。私から見てもなかなかの指導ぶりでした。」

「お前がそこまで言うのか?…止むを得まい。あの子の教育を頼む。…ただし、一生残るような怪我をさせるなよ?」

「心得ている、アルフィア。…セバス殿、先程ベルの記憶を見ているというのはどうい

「ことでしょうか？」

「そうだな、それが知りたい。」

「はい、私は「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つ者であれば記憶を読み取れることができます。貴方が坊ちやまに対して女性の免疫をつけるため、怪物進呈を「え！そんなことをしたのかい!？」やったり座学を徹底的にしたことも知っております。」

「え？ということとは、我がホームでベルをすごいた内容も把握しているということ？」

「あ…こつち見て頷いた…。」

「怖い…。」

「我が友よ、早く帰ってきてくれ…。」

「なるほど…。…何故、愚兎は自分に対してああ過小評価なのです？」

「いい質問です。坊ちやまは半年前まで同年代の方とくらべて非常に劣っていました。それがコンプレックスとなっております。」

「ああ…ベルはそういうところがあるな。」

「すぐわかる。共感できる。」

「やはりですか。傲慢であることもよくありませんが、弱気すぎるのも同義ですね。…自信をつけさせるのが先ですね。ただ、愚兎はお世辞に弱すぎる。」

「全くその通りです。ヘディン殿ならどうしますか？」



「…そうですね。一番いいのは同レベルと模擬戦ですが、オツタルとの戦いからスキルによる後押しがあるのはわかっております。なので、それは意味ありません。となると、深層の闘技場に放り込みますか。」

え？そ、それはやりすぎないか？

「何だと？貴様、あそこに放り込むだと？そんなの「お嬢様、今は引いて下さい」…くそっ。」

「闘技場で死闘を繰り返すことによって、自信をつけさせます。…セバス殿ならどうします？」

「それも良案ですな。私なら、異端児のアステリオスと坊ちやまを戦い合わせます。」

「あの黒いミノタウロス…いえ異端児ですか。」

「ええ、坊ちやまの冒険者の始まりはミノタウロスからです。そして、異端児騒動で塞ぎ込んでいた坊ちやまを奮い立たせたのが、彼です。」

「……そうですね。なら深層の闘技場で、彼とモンスターの撃破数を競い合うのはどうでしょうか？魔石もドロップアイテムも得られるし、メリットは非常に大きいかと。」

「ほう、それはいいですね。採用しましょう。」

え？マジでやるの？

うわ…。我らのホーム『戦いの野』よりきついぞ、それ。

しかも、ベルの好敵手が競うならベルとしてはやる気が出るだろうな。

「…いいのかい、アルフィアくん？」

「…お願いしたのだからしようがない。死ぬことはないだろう。…なら、今までより存分に甘やかしてやらんと。鞭は奴に任す。」

「(え?今まで以上に?ならボクも!) そうだね!…ベルくん、生き延びてくれよ…。」  
同感です…。

友よ、生きてくれ…。

『……ヘディンがあそこまでベルに対して教育熱心とは知らなかったわ。』

『思ったんだけど、何であの子を副団長にしなかったの?すぐくデキる子じゃない。』

『ヘディンから断ったのよ。自分に適任ではないから、と。』

『ああ…あのメンバーをまとめるのに大変なものね。』

『失礼ね…、と言いたいけど私もそう思うわ。』

フレイヤ様…もう馴染んでいますね。

「「ベル…生き延びろよ。」」

「我が真なる友よ…気をしっかりもってくれ。俺はお前の友だからな。」

我も早く馴染まないと…。

だから友よ、早く帰ってきてくれ。

## 第222話 美神、後処理Ⅳ

そろそろ、頃合いね。

「さて…改宗をするわ。ヘスティア。」

「…いいのかい？もう少し先でもいいんだよ。」

「ありがとう、ヘスティア。けどね、ホームを木端微塵にされてほとんどの眷属を改宗したですもの。なら、今しても後しても同じだわ。」

「わかった…。うちのセバスくんがすまないね。」

「本当よ…。」

まさかセバスがあんな手に出るとは思わなかったわ。

ヘディン…、私達の頭脳として色々と動いてくれたわね。

多少、余計なこともあったけどね。

「ヘディン…色々とお世話になったわね。」

「こちらも大変お世話になりました。あの時、我らを救い出してくれてありがとうございます。」

「彼らが気に入らなかつただけよ。気にしないで。」

「…ありがとうございます。」

「ヘディンくん、ベルくんへの教育は…程々にね？」

「承知しております。どこに出しても恥ずかしくないよう鍛え上げます。徹底的に。」

「ヘディン…、本当に程々にしなさいよ。」

心配になってきたわ。

あの初心なベルをあのような紳士に短期間で鍛え上げたくらいなもの。

それを徹底的に？

楽しみでもあるけど、不安ね…。

レベル6 ヘディン・セルランド「ヘスティア・ファミリア」入団。

ヘグニは口下手だけど、ヘスティアは気にしないわね。

「ヘグニ…、色々と助けてくれてありがとう。」

「いえ…私は何もできませんでした…。ご、ごめんなさい、フレイヤ様。」

「いいえ、貴方はよくやってくれたわ。…ヘスティア、ヘグニはその…口下手だけど。」

「あ、うん。ヘグニくん、無理にしてカッコつけなくてもいいからね。あるがままの君を見せたらいいさ。ベルくんもそれを望んでいると思うし。」

「あ、ありがとうございます。…ど、努力致します…。」

「あ、そうだ。彼女たちにあの時の発言、謝った方がいいよ。ボクも仲裁するからさ。」

「そうね。ルウはアレでも結構根に持つから…。」

「ひいひい…、へ、ヘステイア様。お、お願いします。」

ヘステイアは、本質を見抜くことができるからヘグニについてこの短時間でわかったみたいね。

でも、戦争遊戯でのあの発言はいただけないわ。

【剣姫】にもルウにも謝ってもらいましょう。

レベル6　ヘグニ・ラグナール「ヘステイア・ファミリア」入団。

そして、この子たち…。

私への忠誠が強いあまりに、過激な行動をしがちだけど悪い子ではないわ。でも、【フレイヤ・ファミリア】にとってムードメーカーだったわ。

アルフリッグが苦勞人でお気の毒だったけどね。

「アルフリッグ、ドヴァリン、ベーリング、グレルル、今までありがとうね。」

「『申し訳ありません…フレイヤ様！』」

「いいえ、貴方達はよくやってくれたわ。ただ、ヘステイア側が一枚……いえ何枚も上手だっただけよ。」

「……そうですね。…ヘステイア様、よろしくお願いします…。」

「あー。無理にボクへ忠誠誓わなくてもいいよ。ただ…ベルくんの力になってあげてくれないかい?」

「「かしこまりました!」」

「君たちはサポーターくんの下につくと聞いたけど、いいのかい?ロキンとこの【勇者】でなくて。」

「あんないけ好かない奴は嫌です。」

「我々は奴を【勇者】と認めません。」

「【勇者】と認めません。」

「【勇者】というより詐欺師です。」

「【勇者】ならベルの方が適任です。」

「そ、そうかい…。」

相変わらずね。

まあ、それには同感するわ。

「ごめんなさいね。この子たち、【勇者】を何故か毛嫌いしているのよ。」

「まあ：好き嫌いはあるから仕方がないね。でもいいのかい？サポーターくんはレベル2だよ？」

「確かにレベル2ですが」

「リリルカ・アーデはレベル1の時からでもベルを支え」

「多くの困難や強者でも勇気を持ち、あらゆる手で立ち向かっていました。」

「彼女こそがレベルの枠を超えた、真の勇気を持つに相応しいと我々は認めます。」

「：そうか。サポーターくんのことをそこまで見ているんだね、君たちは。ベルくんだけでなくサポーターくんの力になってあげてね。」

「：承知しました！」

「：いい子達じゃないか。フレイヤ。」

「ええ、自慢の子達よ。」

本当に：いい子達よ。

レベル5 アルフリッグ、ドヴァリン、ベリング、グレル、〔ヘステイア・ファミリア〕入団。

ヴァン：、本当によく働いてくれたわ。

神々に色々とおちよくられて、悔しい思いをさせて悪かったわね。

「ヴァン、色々ありがとうね。」

「いえ…私がつと強ければ…。」

「ヴァン、自分を卑下しないで。貴方はよく頑張ってくれたわ。」

「フレイヤ様…申し訳ありません！」

「みんなにも言つたけど、ボクに無理して忠誠誓わなくてもいいからね。」

「いえ！ヘステイア様はこの半小人族の私を普通に扱ってくれました。他の神々は…。」

「あ…彼らは悪ノリしているだけさ。…同じ神としてごめんね。」

「頭をお下げ下さい…。それだけでも十分です。フレイヤ様と同じくヘステイア様に忠誠を誓います。」

「無理しなくてもいいんだよ？ただ、ベルくんの力になってあげてくれ。その…ここは女性が圧倒的に多くてね。」

「…：…そうですね。ベルに同情します。」

「ヴァン、よろしくね。」

ベルといい友達になれそうね。

レベル4 ヴァン 「ヘステイア・ファミリア」入団。

ふう…大方済んだわね。



「さて…あとはヘルンくんだけ？」

「ええ、非戦闘員が多いから時間がかかるけどね。」

「その心配は不要です。神フレイヤ。」

「きやつ！」

「…あー、もう来たのかい？」

「……………」

「へ、ヘルン？だ、大丈夫？」

「非戦闘員の就職先を傘下のファミリアへ分配完了しましたので、後で改宗手続をお願いします。」

「そ、そう。」

「では、私はこれで。坊ちやまを手伝わなければなりませんので。」

シュツ！

「ヘルン…、大丈夫？」

「あの方…：優秀すぎて怖すぎます。」

「気持ちはわかるよ…。何があつたんだい？」

「はい…ヘステイア様。いえ、その前に色々と騙して申し訳ありませんでした。」

「ん？あー、いやいいよ。今までフレイヤと共にベルくんを助けてくれたんだろ？なら、

「ごや。」

「…ありがとうございます。」

「ヘルン、…メイが何をしたのかしら？」

「はい、非戦闘員はやはり予想通り不満を言っていました。戦争遊戯をもう一度すれば負けないとのたまわっていました。そこへ…あの方が現れました。」

「あーあーあー、何となく予想できたよ…。」

「非戦闘員があの方へ攻撃しようとはしました。私は止めましたが、あの方…非戦闘員を一睨みで戦闘不能にさせました…。しかも、「フリユネ・ジャミールだけでは物足りなかつたところです。坊ちやまとヘステイア様に害をなそうとするなら丁度いいですね。ふむ…女性が多いですね。まあ、いいでしょう。改変のしがいがありますね」と言った時点で、全員即座にあの方へ土下座して詫びてベルとヘステイア様に逆らわないことを誓っていました…。」

「……………」

「しかも…私たちの仕事で数日かかるところを数分で済ませました…。優秀すぎて怖かつたです…。」

「そ、そう。ヘルン、覚えておきなさい。彼女はかつて最強をほしいままにした【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】よ。…私と貴女の上司よ。」

「……………そ、そうですか。」

「あー、まあ気に病むことはないよ。すぐ慣れるさ。」

「そうね、ヘルン。今から改宗をするわ。」

「あ、はい……。」

これで……【フレイヤ・ファミア】は終わりね。

## 第223話 美神、後処理V

ヘルン、貴女と初めて会った時が忘れられないわ。

まさか女神になりたいなんて…。

でも、もうこれで終わりよ。

「ヘルン…貴女から取り上げた名前、今こそ返すわ。」

「そんな！フレイヤ様！」

「いいえ、貴女はもうこれから女神になることはないわ。だからこそよ。」

「私は…フレイヤ様に何もお返ししていません！それどころか、何度か逆らいました！」

「逆らったのは…ベルへの愛が故でしょ？」

「……はい、そうです。」

「愛の女神として、それを認めないわけにはいかないわ。ヘルン…いえシル。これから貴女はベルの従者として生きなさい。」

「フレイヤ様は…どうされるのですか？」

「そうね…、ベルから名付けてもらおうかしら。」

「あ、じゃ。シルの名前を差し上げますから、私はベルに名付けてもらいます。」

「(ムツ) いいえ、本当の名前を捨てるのは良くないわ。だから受け取りなさい。」  
「いいえ、フレイヤ様はずっとシルと名乗っていました。ベルもそう思っているはずですよ。」

「ベルは貴女が本当の名前を捨てたら、気に病むわ。だから受け取りなさい。」

「いいえ、私がシルと名乗ったらベルは違和感をもちます。だからフレイヤ様に差し上げます。」

「あーもう！進まないじゃないか！なら、ボクがシルという名前を取り上げる！ベルくんに二人とも名前をつけてもらったらいいじゃないか！」

「そうですね。その方がいいわ。」

「そうですね。それなら問題ございません。」

「君たち…仲いいね。」

そうね…、ヘルンと私は表裏一体だったわね。

ある意味、気を使わなくてもいいわね。

レベル2 ヘルン【ヘステイア・ファミリア】入団。

「ヘルン…長い間、世話になったわね。」

「いえ、こちらこそ…。」

「けど、これからは一緒にベルを支えましょう。」

「はい!」

「思ったけど、フレイヤ。何故ベルくんに手を出さなかったんだい? 添い寝はしたと聞いているけど?」

「ベル、まだ未精通じゃない。どうして、ゼウスと醜聞を撒いた程の子の息子なのにまだ未精通なのよ? ものすごく生殺しだったわよ。」

「そんなことを処女神のボクに言われても…。」

「只今、戻りました。」

「「きゃっ!」」

「あーおかえりー。」

「心配一つも立てずに現れるのはやめてほしいんだけど。」

まあ、【最強侍従】だものね。

「間もなく坊ちやまが戻られます。ということで神フレイヤ、街娘に変身して下さい。」

「急かさなideくれる?」

「あとヘルン嬢、変神魔法は禁じます。シル嬢への変身も同様です。」

「で、ですが…。」

「坊ちやまはありのままの貴女を好みますよ?」

「わかりました！そうさせていただきます！」

「ねえ、メイ。聞いている？」

「何ですか？」

「せめて神フレイヤとしてベルに言いたいんだけど…。」

「それは坊ちやまの死に際にしてください。その方が印象に残りやすいでしょう？」

「……そうね、その方がいいわね。わかったわ。」

今、やるとベルが悲しむのもあるわね。

あの子は優しい子なのだから…。

「ああ、街娘になったらヘステイア様から恩恵を刻んで下さい。」

「え？」「へ？」

「神でも恩恵を刻んではいけないということはないはずですよ。それに…その方が役割演技としてリアルが出るでしょう？」

「……それは面白いわね。けど…。」

「ボクは別にいいんですけどな。」

「神ヘラがここへ来ましたら、間違ひなく貴女は抹殺されますよ？ヘステイア様の庇護にあるなら、さすがの神ヘラも手出しできないでしょう。」

「刻んで頂戴、ヘステイア。」

「あ、うん……。ヘラは…あの子は15年前までオラリオで一体何をしたんだい？」

「知らないほうがいいわ。」

「はい、ヘステイア様は知らないほうがいいです。」

「ますます気になるんだけど!？」

本当に知らないほうがいいわよ。

最恐と言われるぐらいなもの。

それに…、恩恵を刻むとどうなるのかも楽しみもあるわね。

だけど、大丈夫かしら？

いくらヘステイアでもヘラの暴虐を抑えられると思えないけど…。

「ただいまー。」

「「おかえりなさいませ、坊ちやまー!」」

「ふえ? な、何で…シルさんとヘルンさんが?」

「坊ちやま、お忘れですか?」  
「フレイヤ・ファミリア」は2つ目の仕置きを受け入れました。

「ええっ!? こんなに早く? 僕、3番目だと思ったんだけど…。」



「そうよね。」

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「ぎゃっ!? あ、師匠!」

「この程度では効かないか。もっと火力を上げてよよさそうだな。」

「え」

「この愚兎め! あの仕置きで平然とできるのは貴様だけだ! 我らは生きた心地がしなかつたぞー!」

「友よ…アレはひどいぞ。」

「二「ベル…、お前の胃袋は別物だ。」二」

「あ、ヘグニさん、アルフリッグさん、ドヴァリンさん、ベーリングさん、グレールさん、師匠と何故ここに? シルさんもヘルンさんも。」

「ベルさん…そちらのセバスさんに私達のホームを壊されました…。」

何も説明もなしによ!

「ええっ!? 何やっているの! セバス。」

「坊ちゃま、戦争遊戯の敗者はそうなる定めです。」

「そ、そうなの…?」

そんなわけないでしょう！

この子の将来が心配だわ…。

「…あまりにも無知すぎます。これからは私達が世話します。いいですね？ベル。」

「あ、ハイ。」

「ところで、ベルさんにお願ひがあるんです。私…シルとヘルンに名前を付けてほしいんです。」

「え……？どういうことですか？」

そして先程までのことをベルに説明した。

「そうだったんですか…。ヘルンさんは…いいのですか？」

「はい。ベルに名付けてもらえるなら問題ないです。とうかさつさと付けて下さい。」

「ハ、ハイ！ええと…、ならシルさんがシノスさんで、ヘルンさんがルーゼさんでどうですか？」

「ほう、悪くありませんな。シルから分けて名前を付けましたか。」

「呼びやすいですね。さすが、坊ちやまです。」

「シノス…シノス・フローヴァ。うん、悪くないですね！さすがベルさんです！」

「ルーゼ・フローヴァですか。貴方にしては上出来です。」

「これからもよろしくお願いします。坊ちやま。」

「い、今まで通りでいいのに…。」

「お仕えるのですから当然です。」

「これから私達があくまなくお世話しますからね。」

「ただし、いやらしいことはダメだー！ボクが許さないからね！さて、フ…いやシノスくん。恩恵を刻もうか？」

「はい、ヘスティア様！」

「キミに様付けされるのは、何か違和感感じるんだけどなー。まあいいか。」

仕方がないじゃない。



『……また増えました。』

『……次の添い寝はいつでしょうか…。』

『エイナ様に教えてもらったところへ行きましょう。明日にでも。』

『はい！あ、皆様も誘いまししょう！』

『まあ…いいでしょう。争うとベル様は悲しむでしょうし…。』

『ベル殿…、気づくのはいつになるのでしょうか？』

『さあな、あいつらの様子から見るともつと先じゃねえか？…後戻りができないぐらい

にな。』

『ベル殿…、強く生きて下さい…。』

『同意するぜ…。』

## 第224話 劍姫、衝撃Ⅰ。

やった。

やつと、0巻を手に入れた。

うふふふ。

「アイズさん！やつと0巻を手に入れましたね！」

「早く帰って読もー！」

「うん。」

ベルの秘密が知りたい。

ベルのことをもつと知りたい。

さてさてつと…。

---

アストレア様、ずるい。

ベルと二人きりで二ヶ月も過ごしたなんて。

それに…ベルのおじいさんって神様、ゼウス様なんだ。

あれ？どこかで聞いたことが…。

うーん。

え？

嘘…、そんな。

あの怖い人の…甥？

何で!?! どうして!?!

ベルを置いていくなんて…。

……私達を強くするよりベルの側にいるべきじゃないの？

でも…そうでもしなければ私達は強くなれなかった。

あの人…今でも怖い。

闇派閥…。

リーネたちを死なせたのも許せないけど、ベルを拉致して一人にさせたのも許せない。  
い。

【タナトス・ファミアリア】は消滅したけど、まだいるのかな…？  
後でフィンたちへ聞いてみよう。

ひどい！

ベルのおじいさん死んでなかったんだ。  
途中で育児放棄するなんて！

ベルがどんなに悲しんだのかも知らずに！

…でも、それで私はベルと会うことができた。

結果オーライ…かな？

でも許せない。

---

ふう…濃かった。

あ、リヴェリアへ教えよう。

10回以上は読んだから貸してあげよう。

---

ん、まだ執務室にいるかな。

コンコン

「誰だい？」

「私。」

「アイズか、入っていいぞ。」

ガチャ

「どないしたん？アイズたん？」

「うん、ベルの自伝で0巻を見たんだけど。」

「！」

「その…驚く内容があつて、その報告をと思つただけどいいかな？」

「ああ、いいとも。」

「ええと、まず、ベルを育てたのはゼウスという神だけど、知っている？」

「あ…、うん。」

「ああ。」

「うむ。」

「え？何で知っているの？」

「昨夜、使いから教えてもらったんだよ。」

「そうなんだ。あ…思い出した。7年前の【暴食】という人、【ゼウス・ファミリア】じゃなかった？」

「そうじゃ…。今頃思い出したのか…。」

「仕方がないだろう、アイズはザルドと会つたことないからな。」

「…ということは、ザルドという人はベルの…家族？」

「…そうだよ。」



「何で、オラリオを追い出されたの？」

「アイズ：覚えているか。あの時代は闇派閥が暴れていたことを。」

「…うん。」

「あの時代、『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』は黒竜に敗れて全滅寸前だった。闇派閥は彼らを恐れていたが、全滅した後暴れるのは目にみえていた。なので、自ら出ていって僕らに託すしかなかったんだ。表向きは僕らが追い出したということになっっているけどね。」

「……追い出されなかったら、ベルはオラリオにいたままということ？」

「……そうなるな。だが、いたとしても闇派閥に蹂躪されていただろう。あの時代はそういう時代だった。」

「…うん。」

「それだけかい？」

「あ、ううん。まだあるの。」

アストレア様がゼウス様を谷底へ突き落とし、ベルと二人きりで二ヶ月過ごしたことを話した。

「アストレア：…何やつとんねん。」

「神アストレアが僕らにキレるのも無理ないよ。」

「あの神アストレアがな…。」

「本当にずるい…。」

『『『そこなのか!?!』』』

「でも…驚いたことはここからなんだけど…。」

ベルがああ…【静寂】の甥であることを話した。

「な、何じやと!?!あの若造が【静寂】と血がつながっている甥じやと!?!」

「まじか…。」

「すまない、言うのを忘れていたよ。アイズ…復活したのは【アストレア・ファミリア】の彼女たちだけじゃない。【静寂】も生きているよ。」

「…え?ど、どうして!?!」

「わからない。それについては明日、「ヘスティア・ファミリア」が来て説明してくれるんだけど…。リヴェリア?どうしたんだい?」

「…:…思い出した。ベル・クラネルが誰かに似ているのかを。」

「何やて?」

「私は女性限定の【ヘラ・ファミリア】へ使い走りとしてよく出入りしていたのを知っているだろう?」

「そうじゃな。その度お主は愚痴っておったな。」

「その内の一度だけで、ある女性と会ったのだ。あの最恐の「ヘラ・ファミリア」でもあまにも似合わない女性にな。白い髪でアルフィアと同じオツドアイの女性だった。……ベル・クラネルと生き写しだった。」

「……そうだったのか。その女性は誰なんだい？」

「【静寂】……アルフィアの双子の妹、メーテリアという非戦闘員だった。」

「あの「ヘラ・ファミリア」に非戦闘員がおったのか？ しかもアルフィアの双子の妹？ ……初耳じゃぞ。」

「あー、聞いたことがあるわ。確かヘラが溺愛している子やったわ。そうか……その子があの少年の母親だったんか……。」

「そうなんだ……。その人は……どうなったの？」

「死の病で死によった……。あの少年を産んですぐにな。」

「まさか……神ディアンケヒトや神ミアハが言っていた女性とはメーテリアだったのか？」

「そうや……ウチと色ボケは入院を許可したんや。けど、その娘はゼウスと一緒に出たんや。」

「何故だ！ 少しでも生きながらえただろうに！」

「………僕の予想だけど、彼らは墮ろそうとしてたんじゃないかな？ ベル・クラネルを産ん

「だら死に近くなるから。それを知った彼女はゼウスに頼んで一緒に出たとか？」

「ありうるのう……。」

「……やるせないな。我々がその女性を保護していれば、ベル・クラネルはオラリオで生まれ育っていたかもしれないな。」

え？そ、そうなの？

でも……あの時代は……。

あの時の私を……ベルに見られたくない。

## 第225話 劍姫、不安。

「だがのう、あの時代で生き残れるのは難しかったぞ。守れる余裕はなかったはずじゃ。」

確かに、あの時代であの優しいベルが生き残れるかは難しかったかもしれない。オリオにいなかった方が正解かも。

「だね。ある意味、彼女の選択は正しかったかもしれない。彼女が命と引き換えに産んだベル・クラネルが現在ああなっているんだから。」

「そやな…。母は強しといったところやな（チラツ）」

「おい、何で私を見る？…それよりアルフィアは許せん！あの少年より我々を強くすることを選ぶとは！大きなお世話だ！」

「リヴェリア…。そうでもしなければ僕らはランクアップできなかつたし、今までの苦難を乗り越えることができなかつた。それは事実だよ。」

「…くっ！我らの非力が故か。」

あの人が生きている…？怖い…。

ベルがいじめられなければいいけど…。

「ああ、ライラは言ってたな。彼女はベル・クラネルをかなり溺愛しているそうだよ。想像もできないけどね。」

「何やて？まじかー…。」

「溺愛？あのアルフィアが？信じがたいな…。あ、いや。ありうるな…。」

「どういうことじゃ？」

「メーテリアという女性に会った時に数分話をしたが、非常に穏やかで好感の持てる女性だった。あの「ヘラ・ファミリア」と真逆に位置する女性だった。だが、数分後アルフィアがすっ飛んできてメーテリアを大事そうに背中の裏へ隠し、私を魔法で吹き飛ばした…。だから記憶が定かじゃなかったんだな。」

「うわあ、シスコンやったんや…。だからその娘に似とるあの少年を溺愛するのも道理やな。」

「…だから【静寂】は、僕らに対していい感情を持っていないね。」

「え？ど、どうして？」

「アイズ…僕ら【ロキ・ファミリア】がベル・クラネルにしたことを思い返してみなよ。」

えつと…あ…。

ミノタウロス暴走…、ベートさんの暴言…、特訓でボコボコにしたこと…、異端児の件…。

あわわわ…。

「そんなのは、あいつがあの子の側にいなかったことが原因だろう！」

「そうじゃのう…。だが、それを言ってるわけでもないじゃろうが。」

「そうだね。」

「……奴と一回話をする必要があるようだな。」

ええと…私達、【ヘステイア・ファミリア】へ改宗するよね？

大丈夫かな…？

「あ、それからそのゼウス様がベルを半年前に育児放棄したんだって。だからベルは…家族を求めてオラリオへ来たらしいよ。」

「あの爺が？そもそも、あの少年は男やろ？すぐに放置しなかったな！」

「そうだね。彼は男に対しては無頓着で放置主義だったからね。」

「…育児放棄だと？それでも大神か！それでも最強を誇った【ゼウス・ファミリア】の主神か！」

「あまり褒められたものではないのう…。」

「でも…ベルは私と会うことが出来た。それは、ゼウス様に感謝してもいいかも。」

「………」

もしあのままだったら、私は間違いなく黒い炎に飲まれていた…。

ベルが救ってくれた…。

「そやな。あの少年がいなければウチらはあの糞神によつて蹂躪されとつたやろうなー。」

「そうだね…。」

「こうなるのをわかつとつたから、放置したとかはあるかのう?」

「だとしても、育児放棄はすべきではない!そもそも原因は何なのだ!」

「聞いた話では、ヘラの奴が半年前に正気に返つたのが原因みたいやでー。」

「……ああ、あの塞ぎ込んでいたのが15年も続いたのか。神ヘラはああいう娘たちでも愛してたんだな。」

「そうだね。傲慢でも神ヘラにとつては可愛い子だつただろうね。」

「それでも最恐を誇っていたからのう。」

「神ヘラが復活したとなると大神ゼウスは…逃げるしかなかったのか。いくら神ヘラでもあの少年を害しない…とは限らないな。」

「ロキ…ヘラはオラリオへ帰ってくるのかい?」

「ウチらは負けたからなー。しゃーないやろ。監視付きらしいけどな。」

「…大丈夫かのう?あの若造の命は。」

「それはわからん。ただ、そのメーテリアっちゅう娘はヘラがかなり溺愛してたみたい



やで。」

「そうか…。神ヘラの動向次第だな。」

ヘラ様には会ったことないけど…そんなに怖い神…？

あの怖い女の人の…主神？

ベル…大丈夫かな？

そういえば…。

「あ…フィン。闇派閥はまだいるの？」

「シー、あれで全滅したとは言えないかな。いるとしても以前のような巻き返しはできないかな。」

「そうだな。オラリオ連合となった今、奴らには何もできないな。」

「そうじゃのう。だが、儂としては不完全燃焼じゃな。リーネ達の仇を直接取れなかったからのう。」

「そうだね…せめて、ヴァレッタだけはこの手で殺りたかったな。ベートに譲ったのは仕方がないけどね。」

「もう…ベルを闇派閥に関わらせたくない。もしいたら、根絶させよう。」

「ああ、そうだな。」

「そうだね、それは僕たちのケジメだね。」

「そうじゃのう…。だが、幹部は全員死んだかのう?」

「いや、少なくとも一人いる。元【エレボス・ファミリア】団長のヴィトー、【顔無し】がね。」

「!奴か…。確か【アストレア・ファミリア】と深く関わりがあったな。」

「もしかしたら、奴かもしれんのう。あの小娘達を追い詰めたのは。」

「あり得るね…。」

もしいるなら…ベルと絶対に関わらせない。

私達の手で終わらせる。

「あ、リヴェリア。この0巻貸すね。絶対になくさないで。」

「ああ、ありがとう。わかっているよ。ところで、明日の荷造りはできているのか?」

「まだ。ベルグッズの全部「全部は駄目だ。最低限だけ持っていけ。部屋は残しておくから」…わかった。」

さて、戻って荷造りしないと…。

最低限…難しい。

## 第226話 九魔姫、振返。

ふむ…なるほど。

ベル・クラネルがオラリオへ来るまではそういうことだったのか。

「いよいよ明日だね。さて、疑問が氷解してくれるといいけどね。」

「そうじゃのう。」

「ウチは嫌やなー。ん？リヴェリア、もう読んどるん？」

「うむ…ざっと見ただけだが。一部隠蔽されているのがあるな。…改めて見るとあの少年、本当にうちへ入れるべきだったな。」

あの少年は…アルフィアやゼウスに捨てられたことも知らずにオラリオへ来たのか…。

人柄もいいし、礼儀正しい少年だったな。

うちへ入ったら、テイオナやレフィーヤあたりが可愛がるだろうな。

また、アイズにいい影響を多く与えられただろうに…。

…非常に惜しいことをしたな、本当に。

あの時、遠征から早く帰っていれば今の状況は変わっていたかもしれないな。

「今更やなー。あの時の門番、本気で探したいわー。」

「今更だよ、ロキ。ところで、もう聞いたかい？昨夜【フレイヤ・ファミリア】のホームが爆破されたらしいよ。」

「聞いた……。誤情報かと思つて、実際に行くと【ゴブニュ・ファミリア】が瓦礫の撤去作業をやつていた。」

近所迷惑だろう…。

一体、【フレイヤ・ファミリア】の仕置きは何だつたのだ？

「恐らく【最恐執事】の仕業じゃな。死者やけが人はゼロだそうじゃ。」

「色ボケや【フレイヤ・ファミリア】はどないしたんやろうなー？」

「大部分は【デメテル・ファミリア】で、その他は傘下のファミリアらしいよ。神フレイヤはどこへ行つたかは掴めなかつた。まあ、詳しいことは明日に【最強侍従】が教えてくれるだろうね。」

そうだな。聞きたいことが山ほどあるな。

この2週間で一体あいつらは何をやつたのだ？

「あの性悪メイドからか…。何故、あのホームを爆破したのじゃ？」

「あの跡に、オラリオ連合の傘下ファミリアの売り物を全部集めた総合施設を建ててらっしゃいよ。」

「ほー、面白そうやん。」

「ほう、それは楽しみだ。あちこち行かずにそこへ行けばいいのか。手間が省けるな。」

「ああ、今のオラリオ連合だからこそできることだね。ギルドも後押ししているそうだよ。」

なるほど、傘下ファミリアの売り物を一点にまとめるつもりか。

悪くない考えだ。バベルやダンジョン以外の目玉を増やすのは。

数百年もオラリオにいた彼らだからこそ、出せる案だな。

「……行動が早いな。まあ、奴らが手を組んだらそんなに不思議なことではないがな。」

「全くじゃ。奴らが手を組んどるとわかっとなら、打つ手は違っていただろうに。」

「それさえも分からないようにしてただろうね。本当に厄介な奴らが、よりもよって一番読めない彼につくなんて……。予想だにもしなかったよ。」

「ウチもやー。スーパーバグにスーパーチートが入ったようなもんや。」

「意味がわからんが、既に勝負は決まっていたようなものか。……アルフィアが出張ってきたらタダじゃすまなかっただろうな。だが、奴らの参戦なしで彼らのみの力で勝ったのは非常に大きいな。」

「そうだね。あの戦争遊戯は新しい戦術を出しレベル差を覆した、いいお手本だよ。」

全くだ。情報を徹底的に隠蔽した上で我らを攪乱してくるとは。

「僕がいの一番に脱落させられるのは屈辱だったけど、あの後に起こったことを知れば先に落ちてよかったかもしれないね。」

「ずるいぞ、フィン！お主が楽しおつて。聞けば、【狡鼠】に終始膝枕してもらったそうじゃな？・テイオネが哀れじゃったと聞いたぞ。」

「貴様にあの苦しみは理解出来んだろうな。あの音波攻撃に猛毒の雨に、魔法を封じられフリユネ・ジャミールの変貌…、よくもまあこれだけの弱体化を重ねられるものだ。」

だが、あの小人族はどこから指示していたのだ？

それに声も掛けずに何故アレほどの連携がとれたのだ？

「だが、あの小人族もおらんかったし一体どこから指示しておつたのじゃ？」

「恐らく、愚者の魔道具の『眼晶』などで18階層を見渡せて、「ヘスティア・ファミリア」ホームから指示してただろうね。まあ…、それだけじゃないような気がするんだけどね。」

「どういう意味だ？」

「例え、魔道具を使ったとしても見聞きはできたとしても、現場と机上からとは雲泥の差がある。なのに、あまりにも状況を把握している。例えばガレスの毒が抜ける頃に、重力の檻が強まったとか。」

「ああ、あの時か。確かに不思議だったわい。」

「彼女たちの中に、僕たちの状況を調べられる魔法またはスキルがあるんじゃないかと思ってる。僕の勤めでは、恐らくエイナ・チュールではないかと思ってる。彼女は長年ギルド嬢をやってきた。その観察眼が魔法またはスキルとして出たのではないかな？」

「エイナが？……あり得るな。」

あのエイナの娘だからな。

しかもエルフの中でも高位の血を引いている。

希少な魔法が発現してもおかしくはないな。

非常に惜しいことをした……。

いや、エイナと懇意になったあの少年の影響もあるかもしれない。

「それに、神ウラノスの懐刀までも〔ヘスティア・ファミリア〕についたか……。神ウラノスもか？」

「それもライラに聞いたけどね、彼らが愚者を捕らえウラノスを脅したそうだよ。祈祷するだけの道具となるか送還か、どちらかを選べ、とね。」

「うわあ……。」

「……………相変わらず神でも恐れぬ奴らだな。」

「……………そうじゃな。」

「いずれにしろ、彼らが解放され手を組んだ時点……いや、ベル・クラネルを敵にした時点

で僕らの敗北は決まっていたね。」

全くだ。私がおの場にいたら止めていた。  
いや、今更言っても仕方がないな。



## 第227話 九魔姫、納得。

コンコン

「団長、お呼びでしょうか？」

「ああ、ラウルとアキか。入ってくれ。」

「失礼するっす。」

「失礼します。」

「…？何故、この二人を呼んだのだ？」

「さて、呼んだのは他でもない。戦争遊戯での旗を守れなかったことに対する罰だ。」

「「な!？」」

何を考えている！

あの戦争遊戯はラウルとアキのせいで負けたのではない！

私達の責任だろう！

「フィン！あの敗北はラウルとアキのせいではない！」

「まあ、話を最後まで聞いてくれないか？…ラウル、アキ。君らのせいではないのはわかっている。けど、君たちは旗を守れなかったことに対して責任を強く感じているんだ

ろう?。」

「はいっす…。」「はい…。」

そうか…。彼らは彼らなりに責任を感じているのか…。

「ロキと話し会った結果…。君ら二人は【ロキ・ファミリア】ホームから出ていってもらおう。オラリオのどこかで住まいを構えてここまで通ってほしい。」「

な!? 追放だと!

「…：わかつたツス。」

「謹んでお受けいたします。」

いかん! 彼らは次期幹部候補だ。

不満に思えば、改宗希望を出しかねん!

「フィン! それは重すぎじゃ!」

「そうだ! いくら何でもホームから追い出すことはない!」

「まーまー、ラウルたちを見てやー。」

「「え?」」

…：どういうことだ?

「追放っすか…。すまないっす、アキ。ウチのせいで。」

「ラウル、気にしないで。それより新居を探しましょう。…：二人きりで住むところを。」

「え？ふ、二人きりっすか？」

「あら、別々にするつもりだったの？私、悲しいわ…。」

「あ、ち、違うっす！その…本当にいいっすか？」

「もう…私達そういう関係じゃない。」

「そそそそ、そうっすね。…少し前では考えられなかったっすから…。」

「あら、私はずっと前から考えていたわよ？」

「ええっ!？」

ああ…そういうことか。

「……………なるほど。」

「僕らがいるのに、もう二人の世界へ入っているね…。」

「そやな…。ここままでアツアツとは思わなかったわー。」

「……………ここまで見せつけられるとイラッとするね。…ゴホン！」

フィン…それはやつかみというものだ。

想いあつた二人が結ばれるのはいいことだ。

…アイナたちを思い出すな。

元気にしているだろうか？

「はっ！す、すみません（ツス）！」

「いや、仲がいいのはいいことだ。さて、追放処分と言ったけど引越し費用や新居の家賃などはこちらが負担しよう。」

「そうじゃな。」「そうだな。」

「ええっ！そ、そこまでは…。」

「ラウル。何度でも言うけど、戦争遊戯は僕らの責任だ。君らが気に負うことはないんだ。だから追放という形をとらせてもらった。なので、せめてこのくらいはさせてくれ。」

「色々と何かと必要になるだろう。それぐらいはさせてくれ。」

「そうじゃ。お主らが気にすることはないんじや。」

「……ありがとうございますー！」

「避妊はちゃんとしとくんやでー、ヒヒヒ。」

「ロキ、下品だぞ。」

「……………(サツ)。」

…まさかこいつら、もう…。

いや、聞かないほうがいいな。

二人だけの問題だからな。

「…さて、もういいよ。」

「失礼します（するッス）。」

今回の戦争遊戯は、我々にいい影響を与えてくれたな。

ある意味、「ヘステイア・ファミリア」に……いやベル・クラネルに感謝しなければな。やはり、一回はじっくりと話しておきたいな。

そういえば、ラウルとアキがああなつたのをまだ聞いていないな。

フィンは開始早々、脱落したはずだから知っているはずだ。

「思っただが……、あの二人がああなつたのはどういうきつかけだ？」

「そうじゃな、気になるのう。あそこまで踏み切らせたのが何かが。」

「ああ、そうか。君たちは脱落してなかったね。実は……」

そして私達は彼らの痴話喧嘩を聞いた。

『神の鏡』の前で、だ。

「……それはまた。アキの想い心を利用したうまいやり方だな。」

「がははは！その光景を見ながら火酒でもあおりたかったのう。」

「しかし、何故そうまでしたのだ？」

「恐らく、クノツソスでリリルカ・アーデをアキが脅したことがあってね。その意趣返しじゃないかな？」

「ああ……お前の意表を突いたアレか。」

なるほどな、アキがラウルを想っていることを利用した意趣返しか。

しかし、いくら彼女でもあの二人がああなるのは予想できなかっただろうな。

「さて……リヴェリア。ベル・クラネル伝記0巻が読み終わったら貸してくれないか？」

「まだ読み終わってないのだが……リヴェリア様ー！大変です！ベル・クラネルの過去がわかりました！」……レフィーヤから貸してもらおう。失くすなよ？アイズを怒らせたくなかつたらな。」

「もちろん、わかっているさ。まだ死にたくないからね。」

さて、不肖の弟子の話聞きに行くか。

しかし、アイズが報告に来るまで何回繰り返し読んでいたのだ？

あいつ……アイズ以上にあの少年に執心してないか？

大丈夫なのか？

【ヘスティア・ファミリア】へ改宗してあの少年に何かをしなければいいが。

……いや、【最強侍従】や【最恐執事】、そしてアルフィアがいるから大丈夫だな。

特にアルフィアはな……。

丁度いい機会だ。

私の悔しさを少しは味わってこい。

真の都市最強の魔道士の力をな。

## 第228話 純潔園、安堵。

今日、「ヘステイア・ファミリア」の使いが来るのですね。

リヴェリア様の元を離れたくはないですが、期待されてる以上成し遂げなければなりません！

「いよいよ今日か……。そういえば何時に来るのかな？」

「聞いてなかったな……。」

「逆に【ヘステイア・ファミリア】へ乗り込んではどうじゃ？」

「おー、それはおもしろいわー。」

「それは不要でございます。」

「「うわあっ！」「」

なっ！いつの間にも!?

……メイド？

「……何度も言うけど、うちのホームへ勝手に忍び込まないでくれるかな？」  
【最強侍従】。

「「【最強侍従】？」」「」

「ロキ・ファミリア」の皆様方、初めまして。私は「ヘステイア・ファミリア」団長ベ  
ル・クラネルの専属メイド長のメイと申します。以後、よろしく願います。」

「専属メイド長!」

「…僕のは無視かい?」

あの少年は、メイドに何かこだわりがあるのでしようか?

「あいつ…メイド親衛隊といい、どれだけのメイドを雇っているんだよ!」

「春姫がメイドやっているのは、『白兔の脚』がメイド好きなためかな?」

「そんなの知るか!…って、レナ!てめえ、勝手に入ってきたな!」

「え?うん、『道化の魔書』が案内してくれたんだよ。ね?」

「うん!だって、ベートさんの恋人でしょ?」

「ちげーよ!」

「そうだよ!ベートのこいびとだよ!」

「チツ!見せつけてくれんじゃねえよ!糞狼が。」

「テイオネー、八つ当たりはよくないよ!」

相変わらず騒がしいですね…。

ですが、それも今日までですね。

「ヘステイア・ファミリア」に馴染めるといいのですが…。



「なー、メイたん。心臓に悪いから普通に門から入ってくれへん？」

「あのー…団長。ロキ。【ハスティア・ファミリア】の【白兔の脚】とエイナ・チュールがやってきました。が…。」

「普通に門から入りましたが、何か？」

「…屁理屈を。まあ、今更だ。ここへ…いや食堂へ案内してくれるか？」

「あ、はい。」

このメイドの方だけでなく、団長の【白兔の脚】自ら？

エイナ・チュール…、確かギルドの受付嬢でしたね。

【ハスティア・ファミリア】へ最近入ったと聞きましたが…。

…この少年がオラリオ最強の【猛者】を破ったのですね。

見かけにはありませんね。

「お、おはようございます。」

「やあ、おはよう。ベル・クラネル。…いやベルと言っていていいかな？」

「あ、はい！」

「なー、ベルたん。一昨日は凄かったわー。ウチへ改宗せえへん？」

な!?!ロキ!?!

「え、あ、その。」

「神ロキ！それはルール違反です！」

「神ロキ。ヘステティア様を通じて言いましたが、巨乳にして差し上げましょうか？」

「マジすんませんでした！許してや！ホンマに！」

「巨乳？」

「ああ、言い忘れておりました。皆さんのご存知のフリユネさんをああいう風に仕立て上げた内の一人でございます。ご希望の方は私までお願いします。歓迎しますよ？」

「ひいひいっ！結構ですううう！」

「……この方が、あの【男殺し】を？」

敵にはしたくはないですね。

「やはりお前からか……。あれはやり過ぎではないのか？」

「そうですね？世のため人のためです。何かご不満でも？」

「ないんじゃないか……。あまりにも変わりすぎじゃ……。」

「では、まず貴方からしましょうか？【重傑】。ミアの若い頃より端麗な女性にして差し上げましょうか？」

「いや、お主はまっことに良きことをやった。なので……それはやめてくれんかのう？マジで。」

「そうですね、それは残念です。せつかく道具を持ってきたのですが……。」

「『道具?!』」

……【ヘステシア・ファミリア】でうまくやっけていけるのでしょうか？

かなり不安になってきました…。

「テイオナさん。」

「え？あ、あたし？」

「双子は平等であるべきとは思いませんか？」

「え？あ、うん？」

「そちらの【怒蛇】の分を分けて平等にして差し上げますが、いかがでしょうか？」

「……………」

「ちよ、ちよつと…あんた！獲物を狙うような眼をして私の胸を見て…怖いわよ！」

「あ、あの、テイオナさん。僕はそのままでいいと思いますが。」

「そうだね！アルゴノウトくんはわかっているね！えへへー！」

「ホツ…（今のはマジの目だった。）」

テイオナ…、今のは本気の目つきでしたね。

【白兔の脚】がフォローしてくれなければ、依頼してましたね…。

それにテイオナ、【白兔の脚】に大分好感を持っていますね。

「さて、余興はここまでにしておきましょうか。」

「余興!?」

「僕らの仲間をからかうのはそこまでにしてほしいんだけど…、本気だとしても。」

「それは失礼しました。さて、改宗される方は決まりましたでしょうか?」

「ああ。前へ出ろ、お前たち。」

はい、承知しました。

「ア、アイズさん!? ティオナさんも!」

「うん…よろしくね、ベル。」

「よろしくー! アルゴノウトくん!」

「は、はい。」

「ちよつと! 私もいるんですけど!」

「レ、レフィーヤさんですか?」

「も、とは何ですか! も、とは!」

「い、いえ。あの…いいんですか? リヴェリア様の後継者ですよね?」

「それと貴方に何の関係があるのですか!」

「す、すみません!」

「おい…レフィーヤ。そこまでにしろ。でないと、エルフィと交代させるぞ?」

「すみませんでした!」

「えー、あたしは別にいいんだけどなー。それにその子、可愛いもん。」  
「だ、だめです!」

レフィーヤ…、勝者ファミリアの団長である【白兔の脚】に突っ掛からなくても…。  
あ…、そういうことですか。

レフィーヤ、貴女もかなり【白兔の脚】に…。

彼女たちの手綱を握らないといけませんね。

仕事が増えました…。

【ヘスティア・ファミリア】団長の【白兔の脚】へ一応挨拶をしておきましょうか。  
数回、短い話をしたのですが礼儀正しい少年であることは確かです。

「アリシア・フォレストライトです。一応、彼女たちのまとめ役です。よろしくお願ひします、【白兔の脚】…いえ、ベルさんと呼んでも?」

「あ、はい。アリシアさん。よろしくお願ひします!」

「その…騒がしい方々であります、何かありましたら私までお願ひします。」  
「はい!わかりました!」

……本当に礼儀正しく素直な方ですね。

こう言つては何ですが、冒険者らしくはないですね。

私たち【ロキ・ファミリア】へ入つていれば、甲斐甲斐しくお世話していたかもしれ

ません。

惜しいです…本当に。

「予定通りの方々ですね。」

「彼女たちを頼むよ、ベル。」

「は、はい！」

【千の妖精】はレベル4…ランクアップしたばかりなので全て低い…あ、魔力だけ中になつている…早いね。【大切断】も数ヶ月前にランクアップしたばかりなのでまだ低いね…。【純潔の園】はレベル4…長年やつているから全てのステータスがやや高め…あ、ランクアップ確定だ。さて、アイズ氏は…え？ど、どういうこと!?!種族が…)

『エイナさん、落ち着いて下さい。』

『え？あ、はい！すみません…。』

『驚くのは仕方ありません。今は心の内に秘めておいて下さい。』

『はい…わかりました（あれが本当だとしたら…アイズ氏が強いのも納得できる…）。』

……？

あのハーフェルフ、何を動揺しているのだろうか？

「さて、改宗メンバーも決まったことやし…。ところでメイたん。あの娘たちの復活のからくりを教えてほしいんやけど？」

「そうですね。『出てきて下さい、愚者』」

「何故、愚者を呼ぶんじや?」

愚者…。あの異端児をまとめていた方ですか。

そういえば、レイは元気になっているのだろうか?

クノツソス以来会ってませんが…、落ち着いて話をしたいものです。

あ、そういえばベルさんは異端児と懇意にしていましたね。

レイと会う機会があるといいですね。

「……いいのか?メイ。彼らに教えても?」

「ええ、百聞は一見にしかずですから。」

…?

百聞は一見にしかず?

「え?また?うわあああああ!」

「え?べ、ベル!」

「な!ベル・クラネルが落ちましたあああ!」

「は?」

「な…。」

「何じゃ!」

「何が起きたのだ!?!」

ベルさんが、穴に落ちた!?

何が起こっているのですか!

「愚者、蘇生魔法を。」

「承知した。」

【未踏の領域よ、禁忌の壁よ。今日この日、我が身は天の法典に背く。ピオスの蛇杖、サ  
ルスの杯。治癒の権能をもつてしても届かざる汝の声よ、どうか待っていてほしい。王  
の審判、断罪の雷霆。神の摂理に逆らい焼きつくされるといふのなら、自ら冥府へと赴  
こう。】

な……何をするつもりなのですか!?



## 第229話 白兔、発動V／凶狼、決心。

「うわあああああ！」

また!?何で?

条件が揃ったというの!?

『リーネ・アルシエを棺桶から出し、代わりのものを入れよ。』

え?リーネって…誰?

棺桶って…。

あ、光だ!

ドーン!

「ふう。ここは…【ロキ・ファミア】のホーム?うっ…寒い。」

そこには非常に冷えている部屋だった。

そして…棺桶が1つあった。

「ええ…棺桶からリーネという人を取り出して、代わりのものを入れる?うう…罪悪感が…でも帰れるにはそうしないといけないよね。」

そして、周囲を見渡すと砂袋が複数あったのでそれを持って棺桶のところへ行った。

「し、失礼しまーす…。あれ、この人見たことが…。」

カツカツ…

!?誰か来る?

は、早くしないと!

そして、ボクはレベル5のステータスをフルに使って、中のリーネさんを取り出し砂袋を入れて棺桶を閉めた。

リーネさんを担いだ時に

『ミツシヨンコンプリート!』

『間に合ったああああ!』



「な、何が起きたんや!」

「落とし穴を仕掛けたのは誰だ!」

「わ、儂ではないぞ!」

何だ…こりや。

あの黒ずくめが来て、クラネルがいきなり穴に落ち、アイズが追いかけてきたら弾かれ穴が閉じやがった!

何が起こってやがる!

「静まりなさい。」

「「?!」」

「おい…【最強侍従】。お前は知っているのか?これが起こることを。」

「ええ、知っています。神口キ、先程言いましたね?からくりを教えろと。」

「へ?言つたんやが…どういうことやねん?」

「すぐにわかりますよ。」

「上に何があるんですか?」

そして俺らは上を見上げた途端、

ドドーン!

穴がいきなり開いて、下に落ちたはずのクラネルが何かを担いで落ちやがった…。

意味分かんねえぞ!

「べ、ベル!…大丈夫?え…。」

「な?!リ、リーネ!」

「馬鹿な!彼女は墓の下にいるはずだぞ!」

な、何だと!?

【開け戒門、冥界の河を越えて。聞き入れよ、冥王よ。狂おしきこの冀求を。止まらぬ涙、散る慟哭。代償は既に支払った。光の道よ。定められた過去を生贄に、愚かな願望

を照らしてほしい。嗚呼、私は振り返らない」

【ディア・オルフェウス】

「うわっ！ま、眩しい！」

「この光は…あの時の異端児騒動と…先日 of 18階層に…」

「そうだ…あの時の。」

「何が起こってるかわからなかった…」

「お願い！成功して！」

「成功…？」

「ちよ、ちよつとベルたん！何を…。え…？そ、そんなアホな…ありえへん…。けど…間

違いあらへん…。そんな…」

「ロキ!?ど、どうしたんじゃ!?!」

「…リーネの恩恵が…復活した…。ウチと…再接続した…」

「「はあ!?!」」

「馬鹿な！あり得ない！リーネは死んだはずだ！ロキ、もう一度確認しろ！」

「間違いあらへんのや！ホンマに復活しとるんや！」

「あ…心臓の鼓動が…。あ、あの！どなたか確認をお願いできませんか！」

「…わ、私がやろう。……………た、確かに生きている…。そ、そんな馬鹿なことが…」

「うそ……リーネが……復活した……？」

「闇派閥のあのクソ女によつて……死んだはずでしょ？」

あ、あり得ねえ……。

そんなことが起こるなんて……あり得ねえ！

だが……匂いが……復活してやがる……。

他の獣人のやつらもわかつているはずだ……。

そんなの……簡単に受け入れられるか！

「さて、神ロキ。そして「ロキ・ファミリア」の皆様方。それが答えです。」

「「……………」」

「し、信じがたいよ……。」

「だから、貴方達はレベル6止まりなのです。すぐに未知を既知に変えなさい。」

「「!?」」

「……………【最強侍従】の言う通りだ。受け入れろ、フィン、ガレス。リーネは……間違いなく生き返つた。それは紛れもない事実だ。」

「……………そうだね。」

「……………そうじゃな。」

……………クソが……。

「こんなの……こんなの……すぐに受け入れるわけがないだろうが!」

「……すんや……」

「ロキ?」

「探すんやー!半年前に、ベルたんを門前払いした門番のクソカスバカを探すんやー!」  
「お、おい!ロキ?」

「ふざけんやー!何で…、ハイパーウルトラスーパーバグを何で追い出したんやー!」  
「ハイパーウルトラスーパーバグって…、僕のことですか!?!」

「ご縁がなかった、ということでしょう。」

「ちよ!?!メイたん、そんな一言ですまさんといってくれる!?!」

「う……うん。」

「あ……」

目が覚める……。

本当に……生き返ったのか……。

「「……………(ゴクリ)。」」

「あ……。あれ?私……?」

「リ、リーネ……。わ、私がわかる?」

「?テイオナさんですよね?」

「わ、私は!」「じ、自分は!」

「アキさんに、ラウルさんですよ?何を言っているんですか?」

「本物だー!?!」

「リーネええええ!」

「きやつ…!ちよ、ちよつと、エルフィさん!胸を揉みしだかないでください!」

「この弾力…触り心地…間違いない!リーネです!」

「うわあああああん!リーネええええ!」

「え、えーと…み、皆さん。騒ぎ過ぎでは…。」

「リーネ…。お前はどこまで覚えている?」

「え?あ、はい…。あの時間派閥のヴァレッタ・グレートにかかって…アイズさんとベ-

トさんに…」

「そうじゃ…。お主は死んだはずじゃ…。」

「そして、今生き返ったんだよ。ベル・クラネルと愚者によつてね。」

「え…?【未完の英雄】と誰…ですか?」

「リーネええええー!」

「きやつ!み、皆さん!ちよつと…。」

間違いねえ…リーネだ。





者」からの手紙です（後は、「タナトス・ファミリア」の「殺帝」のヴァレッタ・グレーテの髑髏の残骸ですが伏せておきましょう。』

『『え？て、手紙？』』

『発動したということは、「凶狼」は今も【道化の侍者】からの手紙を持っているということですよ。律儀で不器用な狼人ですね。』

『『……（チラツ）。』』

『我々が敵わないわけだ……。ベル・クラネルを敵にするんじゃないよ。』

『まいったね……。これは。僕らの完全な敗北だよ、こんな形で返されたら。』

『とんでもない若造じゃ……。あの若造を中心とするオラリオ連合か……。面白くなりそうじゃない。』

## 第230話 侍者、決心。

そういうことでしたか…。

私はあの時に死んで…【未完の英雄】いえ2段階ランクアップした【白兔の脚】に数ヶ月前から連れて帰り、生き返ったのですね。

……意味がわかりませんが、皆さんの反応を見る限り事実なのですね。

「ぐすつ…ぐすつ…リーネえ…。」

「もう…エルフイさん、泣かないで下さいよ。」

「だって…、私達二軍の中核メンバーの一人が目の前に死なれたら…。」

「ごめんなさい…。」

私だけですか…。

ロイドさん、カロスさん、リザさん、アンジュさん…。

みんなまでは無理でしたか…。

何故…みんなも連れて帰れなかったのですか…。

何故…私だけ生き返ったのですか…。

「ごめんなさい…、私だけ生き返ってしまつて…。」

「いや…【最強侍従】に聞いたんだが、条件を満たせたのはお前だけだそう。生き返っただけ御の字だろう。」

「そや。時を越えるだけでも反則やのに、ベルたんの運によつて生き返るのはめっちゃホンマに運がよかつただけや。…ベルたんを責めたらあかんで。ウチでも感謝しても感謝し足りないんや。」

「でも…。」

私は…みんなを助けられなかった…。

「いい加減にしやがれ！てめえは本来あいつらと死んだんだ。クラネルのおかげで運よく生き返ったんだ！」

「ベートさん…。」

「てめえが生き返つたのは本当に運がよかつただけだ。その運に感謝しろ！」

「ちよつと！ベート！そんな言い方はないじゃん！」

「てめえは黙つてろ！…うじうじする暇あるなら、さつさと強くなりやがれ！てめえは治療士だろうが！あの【戦場の聖女】を超えやがれ！あいつらの命を救えなかつた分…多くの命を救え！」

「!!」

「それが、あいつらへの何よりの餞だろうが！」

「ベート…。」

「……アミツドさんを、超える…?」

「私は治療士…。癒やし、命を助ける…。」

「みんなの分の命を…。」

「パチパチ」

「素晴らしいです。その三首領よりはまだ素質がありますね。ベート・ローガさん。」

「ちよつと、メイ!」

「坊ちやま、彼は言い方は悪いですが正に的を当ててます。どう思います? 神ロキ。」

「…ベートの言う通りや。さつきも言うたけど、リーネたんが生き返ったのはホンマにスーパーレア並に運がよかったんや。他の子には悪いけど、リーネたんが生き返ったのは意味があつたんとウチは思うんや。」

「意味…?」

「さつき、ベートが言うたやろ? リーネたんは治療士や、人を癒やすことができるんや。癒やした分、多くの命を救えるんや。死んだあの子たちの分より多くな。やから…、自分を責めたらあかんで。」

「…はい!」

「ベートさんの言う通り…私は死んでいったみんなの分まで強くならなければならな



今こそ、告げよう。

生き返ったなら、心残りがあることはしたくない。

今なら、言える。

都市最高の治療士を目指すことを決めた私なら。

「ベートさん。」

「ああ？何だ？」

「私は貴方が好きです。」

「「ハア!?!」」

「お、おい！てめえ…何を…。」

「あの手紙を読んだかどうかはわかりませんが、私は貴方が好きです。私は貴方の言う通り、雑魚ですが、アミッドさんを超えて貴方に追いついてみせます！私はこの生涯を賭けても貴方を追いかけて続けます！」

「……へっ！言うようになったじゃねえか。やってみやがれ！」

「はい！」

もつと早く言うべきだった。

生き返ったこの命…、悔いなく使ってベートさんを追いかけて続けます！

「ちよーーーーーつと待ったーーーーー！」

「きやつ!」

「「あー…。」」

「な・に・を・して・る・の・か・な・あ・る・? ベートの、こ・い・び・と・の・レナちゃんを置いて!」

「「い…びと?」

恋…人?

え? 私が死んだ後に…?

「そーそー、このあたしがベートの隅々まで知ってるんだから!」【ロキ・ファミリア】の

みんなが証人だよ! ねー!」

「証人になった覚えはない。」」

「そーそー…つて、えええええ! そんな! そ、そうだ!」【道化の魔書】エルフィちゃん!

「そうだよね! さつき、恋人と言ったよね!」

エルフィ…?

「(ひっ…) え、えーとそれはリーネが死んだ後だけど、リーネが生きているならリーネが先だよ? (チラッ)」

「がー! 裏切られたー! 女の友情ってそんなものなのかー!」

「…そうですか、なるほど。」

「「ひっ!」」

つまり…、これが神々のいう寝取りですか…。

ですが、以前の私と違います。

絶対に、その想いだけは負けません！

「私はリーネ・アルシエと言います。初めまして。ベートさんの自称恋人のレナさん？」  
「自称!?ちがーう! 自他と共に認める恋人です! レベル2のレナ・タリーちゃんです!」

「おや、レベル2ですか? 奇遇ですね、私もです。」

((リーネが怖い…。))

「うぐぐぐぐ…っ! ベート! 何か言つてよー!」

「……。」

ベートさんは何も言わないで下さい!

これは…私の戦いです!

「ベートさん、他派閥との恋愛は禁止ですよ。ですよね? ロキ?」

「え? あ、そ、そやな。うん、そやったわー。」

「ひどい! ロキ様! ベートの寝込みをいつでも襲つてもいいと言っていたのにー!」

「…ロキ?」

「ひっ…。ウ、ウチそないなことを言つたっけな? さ、酒に酔つて覚えとらんわー。」



「とうわけです。さき、お帰りはあちらですよ?」

「うぐぐぐ…。はっ!レ、レナちゃんはベートの勝利の女神だもん!クノツソスの戦いでベートを起こして勝利に導いたんだよ!そうだよね?【千の妖精】!」

「(ちよつと!こつちに振らないで下さい!)わ、私は戦いに夢中だったから、み、見ていません!」

「そんなー!」

クノツソスの戦い…?ああ…。

私が死んでいる間に決着がついたのですね。

後でゆつくりと聞きますね。

『あの…レフィーヤさん、僕の背の後ろに隠れないでくれませんか?』

『怖いんですよ!リーネさんが!…だ、団長なら守って下さいよ!』

『改宗がまだだから、今はフィンさんじゃ…』

『お黙りなさい!』

『は、はいっ!』

『あの…メイさん。いいんですか?ベルくんが…。』

『ただの微笑ましいじゃれ合いです。エイナさん、レフィーヤさんは他派閥でありながら、坊ちやまの距離がかなり近いところにいます。改宗しますと一気に距離が縮まるか

もしれませんね?』

(確か…「ロキ・ファミリア」の担当はミイシャだよね?ミイシャに聞いてみようかな、彼女たちのことを。情報は大切だよね。)

『なるほど…それなら、ベルくんのためにも仲良くしておいたほうがいいですね。』

『はい、正解です。』

『それに…(チラツ)』

「な、何だよー!」

「ふっ…(ぐっ…ゆさっ)」

「ガハアツ!」「ロ、ロキ!」

「!!…ぐ、ぐぬぬぬ!レ、レナちゃんはこれから大きくなるもん!」「大切断」と違うんだよー!」

「二「あつ!」二」

「テ、ティオナ!いつの間に、大双刃を持ち出したのよ!お、落ち着きなさい!」

「んー?何かさー?同族を真つ二つにしたくなつたなー?」

「あ、あの!ティオナさん!落ち着きましたよう?」

「アルゴノウトくんが言うなら仕方がないかー。」

『『『うわあ…チヨロすぎる。』』』

「心配だわ…。」

「ぬぐぐぐ…負けるもんかー！」

「ふいふい」

絶対に負けません！

一度死んだので…、躊躇や羞恥はありません！

治療士としても強くなり、ベートさんの横に立つてみせます！

## 第231話 侍従長、教育Ⅰ。

面白くなってきましたね。

ですが、あれはいただけません。

神へラのような方を生むきっかけになってしまいます。

ふむ、いい機会ですな。

今のうちに坊ちやまへ教えておきましょう。

「坊ちやま、【凶狼】を見て下さい。彼を愛する女性二人が目の前で争っているのを見ない振りをしていますよ。」

「え？あ、本当だ。で、でもあれは仕方がないんじゃないかあ…。」

「坊ちやま、あれは悪いお手本ですよ。彼のが好きな二人が目の前で女の戦いをやっているのに、見ない振りをしているのは非常によろしくありません。」

「おい…【最強侍従】、お前は何を…。」

お黙りなさい。

せつかくのこの機会を逃すわけにはいきません。

「で、でもあれを止めるにはよほどの勇気がいるんじゃないかあ…。」

「坊ちやま、その程度を超えられないようでは英雄にはなれませんよ?」  
「!!」

「英雄譚の中に女性二人の内、一人を選んだことによつて悲劇を招いた物語がありましたね?」

「聖騎士フルランド…。」

「そうです。もし、あの時二人をまとめて結ばれていれば、また違う幸せな結末があつたとは思いませんか?」

「…思う。」

「そうでしょうか?なので、【凶狼】がやるべきことはあのお二人をまとめて恋人にすればいいんです。」

「……それはそれで問題があるのではないかのう…」

確かに問題はあるでしょう。

ですが、もうすでに坊ちやまの周りには命を捧げてもいいという女性が多くいます。スキルの問題もありますが彼女たちの、そして坊ちやまの幸せのためにやらなければならぬのです。

「な、なるほど…。」

「いいですか?坊ちやま、英雄になるには色々ありますがその中でも器量は大切に

す。」

「器量?」

「そうです。人としての器です。どこかのアマゾネスからの熱い求婚を一族の栄光のために保留して、娘ほどに年が離れた同族の女性へプロポーズするなどちつちやな器もあります。」

「…【最強侍従】、それは僕のことかな?」

間違つてはいないでしょう。

それさえもできないから貴方はずっとレベル6なのです。

今、いいところなので黙って下さい。

「いいですか?器量とは受け入れる心の大きさです。私から見るとには坊ちやまはかなり大きいです。」

「そ、そうかな?えへへ…。」

「なので、坊ちやまに好意を持っている女性を5人でも10人でも100人でも受け入れるべきです。」

「じゅ、10人!?ひゃ…100人なんて、無理だよ!」

「坊ちやまは【最強最高の英雄】になりたいのでしょうか?それぐらいは簡単に成し遂げなければ、話になりませんよ?」

「!!……そうだね。器量かあ。うーん…難しいなあ。」

「坊ちやまなら大丈夫です。このメイが保証しましょう。」

「そ、そうかな…。うん、わかった!これからも色々教えてね!」

「はい、坊ちやま。」

今回の教育は、これでいいでしょう。

【ロキ・ファミリア】に借りを作らせるため、【道化の侍者】を復活させましたが思わぬ教育の機会ができました。

レナ・タリーと【凶狼】に感謝ですね。

『エイナ…。』

『何でしょうか?』

『あれは…大丈夫なのか?』

『いつものことです。』

『ベル・クラネルのことがかなり心配になったのだが…。あれは洗脳ではないのか?』

『リヴェリア様に何か不都合なことでも?』

『いや、ないが…。だが、女性を10人や100人を囲むのは不誠実ではないのか?』

『ベルくんなら大丈夫です。』

『何?…あ、そういうことか。お前が【ヘステイア・ファミリア】に入ったのは…。』

『はい、ご明察の通りです。』

『そうか…。(なら、「最強侍従」の言う通りなってほしいものだな。そうでなければあの子たちがあまりにも不憫だ)。』

ふむ、「九魔姫」としては乗り気のようですね。

巻き込んでみましょうか。

そうですね…。15年前でもアルフィアさんに対抗心を燃やしていましたので、その辺りを利用させてもらいましよう。

『ガレス…僕は彼のこと心配になってきたよ。』

『儂もじゃ…。ありや完全に「最強侍従」の言う事を信じ切っているぞい。』

『仕方がないよ。彼は大神ゼウスに育児放棄されてから、ずっと一人だったんだ。「ゼウス・ファミリア」を鍛えてきた魔導人形の彼女も、彼にとっては大事な家族の一人なんだ。』

『半年前の遠征でもっと早く帰っていればのう…。』

『そうだね…。悔しいけど「最強侍従」の言う通り、縁がなかったということだね。だけど、今回で切れない縁ができた。有効的に最大限まで利用させてもらおうよ。』

『何じゃ、一族の再興をあきらめておらんかったのか?』

『あきらめるわけがないだろう。ただ、そのために彼女が必要だな。』



『む？お主、あの若造にべつたりの小人族をあきらめておらんのか？やめとけ、これ以上藪をつつくことはなかるう。』

『いや、リリルカ・アーデではないさ。もう一人いるだろ？』

『お主……いいの？』

『ああ、さつき【最強侍従】の言う通り器量の狭さを突かれてね。それに、戦争遊戯間で彼女とのやりとりは非常に楽しかったし、やりやすかった。なら、少しでも器量を大きくしないとね。』

ようやく一步踏み出せましたね、【勇者】。

遅いですが、遅すぎます。

ですが、お膳立てはして差し上げましょう。

彼女も、主神含めて周囲が坊ちやま一筋ですから居づらいでしょうね。

あの戦争遊戯間で脱落者の檻の中で、【勇者】と彼女は意外に【ロキ・ファミリア】を取りまとめていました。

なので改宗させるより、傘下への監査役として派遣する形がいいでしょう。

まあ、それもリリさんの予想範囲ですね。

この戦争遊戯でリリさんも一皮むけたようで、よかったです。

古巣の【ゼウス・ファミリア】よりやりがいが多くありますね。

…これも坊ちやまのおかげでございます。

## 第232話 貴猫、歡喜。

嬉しい。

リーネを…復活させてくれた…。

【ヘスティア・ファミリア】にとんでもない大きな借りができてしまったわね。

リーネのことだけじゃない。

ラウルと私の橋渡しまでしてくれた。

あの子…団長が気にかけていた子からの意趣返しとはね。

こういう形なら大歓迎よ。

お互い近すぎて、一步踏み出せなかったもの。

あの時のやりとりは、私らしくなかったけど今となつては結果オーライね。

リーネも…以前のリーネより強くなつて何よりだわ。

ベートもリーネへの接し方もどこか柔らかくなつてゐるわね。

はあ…一昨日と昨夜は凄かつたわ。

我慢できずラウルとこっさり抜けちゃつたわ。

【蠱毒の王】の台詞じゃないけど、どこが【超平凡】よ！

うふふ。

ラウルを狙う娘が他にはいないことはわかっているけど、レナ・タリーの例もあるから油断はできないわね。

きつちり、私を刻み込まないと…。

二度と娼館には行かせないからね！

…ラウルは私のもの。そして私はラウルのもの。

団長から追放宣言されたけど、私としては渡りに船ね。

みんなに気を遣っていたけど、これで堂々とできるわね。

明日から二人の新居を探さないと…。

あら？団長が「白兔の脚」に…。

「ちよつといいかい？ベル。」

「はい、どうしましたか？フィンさん？」

「いや、ちよつとお願ひしたいことがあってね。【アストレア・ファミリア】の【狡鼠】を

監査役として派遣してほしいんだけど可能かな？」

「あ、はい。問題ありません。」

「…？なんだか拍子抜けだけど…。」

「【勇者】、それもリリさんの予想範囲です。リリさんはライラさんが【勇者】の一番の理

解者であることを今回の戦争遊戯でわかったので、派遣とか依頼してくるでしょう。」

「…参ったね。ここまで彼女の手のひらの上とはね。」

「いいえ、3つの計算外がありました。1つ目はミアが予想以上に強かったこと、2つ目は坊ちやまのあの技がそのまま「フレイヤ・ファミリア」の旗を燃やしたこと、3つ目は【貴猫】と【超平凡】の仲がかなり進展したことです。」

「1つ目はともかく、2つ目は誰も予想できないんじゃないかな…。だが、3つ目は彼女からの意趣返しだったじゃないかな？」

「ええ、その筈でした。しかし、あそこまで熱愛するとは思わなかったとのことです。羨ましく思い、かなり歯噛みしておられましたよ。」

「一矢報いたかな?…とやりたいけど、こつちもダメージを受けているよ。」

「変な意地を張るからです。」

「痛感しているよ。…とということで、ベル。頼むよ。」

「はい!わかりました!」

…なるほど。

あの娘も【白兔の脚】にご執心ということね。

あの娘たち…大丈夫かしら?

「!!あの…メイさん。ちよつといいですか?」

…?あの人、元ギルド嬢のエイナ・チュールが私を見て何か驚いているようだけど? 「エイナさん、何ですか?…。ほう、それはそれは。【九魔姫】、ちよつと来ていただけますか?」

あの方…【最強侍従】もこちらを見て興味深そうに…。

何かあるの?

「何だ?…何だど?お前の魔法が?…そうか、それは非常に惜しいことをしたな。…は?すまない。もう一回言ってくれるか?…それは確かか?一昨日の今日だぞ?…はあ。ロキ、ちよつと来い。」

リヴェリア…なんでこつち見て驚いているの?

「何や?何があつたん?…ファツ!?エイナさんにそんな魔法が!?ウチへ入ってほしかったわ。…ファツ!?マジ?…遅かったか…。フィン、ガレス、ちよつと来てや。」

ロキも…何でこつち見て驚いているの?

なんか怖いわ…。

「何だい?ロキ。」

「何じゃ、もうこれ以上は勘弁して欲しいぞい。」

「いや、あのな。………ということやねん。」

「………本当かい？君が学区から出た時に入団させるべきだったよ。それにしても早いね………」

「………までとは思わなかったのう………」

………？団長もガレスさんもこつちを見て………

ちよつと怖くなったわ。

ラウルは……、ベートのところね。

行ってみましょう。

「………？どうしたつすか？アキ。」

「ううん、少し寂しくなっただけ。」

「………てめえら、イチヤイチヤするなら他のところでやれ！」

「ベートこそ、すればいいじゃない。その二人がいるんだから。」

「お、おい馬鹿！」

「ベート・ローガあ！私を選ぶよね！」

「ベートさん！駄目ですよ！他派閥との恋愛は禁止ですよ、ということでは貴女は帰って

下さい………」

「嫌だ……！」

レナ・タリーには悪いけど、私はリーネを応援するわ。

リーネが積極的になったのはいいことだわ。

団長たちとロキと：【最強侍従】で何か話し合っているわね。

あ、今終わったみたい。

「みんな、ちよつといいかい？」

「「あ、はい！」」

「二昨日、我々で話し合ったのだがラウルとアキは、旗を守れなかった責任でホームを追放することになった。」

「「なっ!？」」

「これは、僕たちのケジメであり二人の責任を軽くするためだ。完全に突き放すというわけじゃない。彼らはそのままうちへ通つてもらうだけだよ。」

「「ああ…、なるほど。」」

みんなから温かい目で見られているわね。

……いいじゃない。別に。

「だが、状況が少し変わった。アキ。」

「は、はい！」

「……この場で聞くのは公開処刑になるかもしれないが…。私が恥を忍んで聞く。」



「……な、何でしょうか？」

「お前たち、一昨日と昨日の夜にどこへ行ってきた？」

「!!」

な、何で…。

見られないようにしたはず！

「ああ、言わなくていい、その反応でわかった。何故かというとな…。アキ、お前（ご）もっているぞ。」

「…ええ？」

「…ええっ!」

「「ハアツ!」」

「【ヘステイア・ファミリア】のエイナ・チュールは、相手の体の状態を確認できる魔法を習得しているんじゃない。」

「「ええっ!」」

え…? エイナ・チュールがそんな魔法を?

まだ入りたてよね…?

「彼女が君を見てね、妊娠3日目とあるらしいよ。身に覚えは…言うまでもないね。」

「「……………」」

私に……ラウルとの子が？

チラツ。

「そそそそ、それは本当ですか！あわわわ、まず母さんに……いや先にアキを『ディアンケヒト・ファミリア』に……あー！リーネに診てもらったほうが早いっすね！」

「その……ラウル。ごめん。」

「え？何で謝るんっすか？自分らの子っすよ……嬉しくないんすか？」

「違う！それは絶対にない！嬉しいよ……その……安全日といったけど危険日だったの。」

「ええっ！」

『なるほど……そんな手があつたわね。』

『ティオネ……、フィンを獲物を狙うような目で見ないでよ。』

『さっきのあんたに言われたくないわよ！』

「でも、自分……俺は嬉しいっすよ。アキと子ができるのが。」

「ラウル！」

「アキ……、結婚しよう……ツス。」

!!

「嬉しい……。うん、私もラウルと結婚したい……。」

「「うおおおおお！」」

「「きやああああ!」」

『エルフィさん……。ラウルさんとアキさん、さつきから思ったんですがいつの間にああいう仲になったのですか?』

『「昨日だよ。」』

『「昨日!?!」』

『リーネ……。話せば長くなるんだ。』

「みんな、いいかい?話はまだ終わってないんだ。すまないね、プロポーズの邪魔を  
しまつて。」

「い、いえ。」

「それで、追加だけど僕たち全員で罰を受けようと思う。ロキとリヴェリアとガレスと  
【ヘスティア・ファミア】の【最強侍従】と話し合つたんだ。」

「「……………(ゴクリ)」」

「ああ、緊張しなくていいんだ。簡単にいうと、宴だよ。」

「「……………は?」」

「まず、ラウルとアキの結婚式だ。」

「「うおおおお!」」

「そして、リーネの復活祝いじゃ。」

「え？わ、私？」

「最後に…改宗するメンバーの送別会だ。」

「あ…。」

「ちゅーわけや。ということ、食料庫と酒蔵を空にするくらいパーツとやるでー！」

「「うおおおおお！」」

団長…みんな…ありがとう！

「ラウル…。」

「アキ…俺らは幸せ者つす。みんなに祝ってもらえるのが。」

「うん…！」

ありがとう…みんな。

そして、「ヘスティア・ファミリア」。

## 第233話 勇者、観察。

「うわあ……。フィンさんたち凄い。僕もああいうふうにとまどめなければならぬ！」

「坊ちやま、【勇者】たちを参考にしないでいいです。坊ちやまは坊ちやまで思うままにやればいいのです。」

「あ、そうか……。うん、わかったよ。」

「ああ、すまないね。ベル。今日が改宗する日だというのにな。」

「い、いえ……。僕たちに手伝えることはありませんか?」

「ありがとう。けど、今は僕たちだけでやりたいんだ。」

「それは無理ですね。」

「何だつて?」「ふえ?」

「どういう意味だい?」

「今から料理を頼むとしても準備をすることも夜までには間に合いませんよ?」

「……。そうだね。時間的にも厳しいね。明日にするか……。」

「貸し1つなら、手を貸しましょうか?」

「……。貸しがでかすぎて、これ以上は勘弁したいんだけど……。ラウルとアキのためだし、お

願いでいいかな?」

「はい。坊ちやま、それでよろしいですか?」

「あ、うん!ごめんね、メイ。僕の我儘で。」

「坊ちやまのそれは我儘に入りませんよ。美德というものです。」

「そうだね、僕もそう思うよ。」

「ありがとうございます。それで、メイ。僕は何したらいいかな?」

「お待ち下さいませ。エイナさんと愚者さんに言付けて、援軍を呼びました。」

「何だつて?」「援軍?」

「そういえば…、彼らがいっつの間にかいないね?」

「こういうことも織り込み済みというわけか。」

「相変わらずだね、さすが【ゼウス・ファミリア】の【最強侍従】だけはあるよ。」

「お待たせしました、メイ。」

「よう、フィン。お望みの通り来てやったぜ。」

「数十分前にお願したばかりなんだけどな…。そちらのフードは何者だい?」

「只者じゃない…:レベル5、いや6…:以上はある。」

「何で…俺が…。昨日の今日だぞ?」

「バサッ…。」

なっ!?

「ヘラ・ファミリア」の【最恐執事】…。そして……【ゼウス・ファミリア】の【暴食】ザルド。君も生き返ったのか…。」

「15年ぶりですね。【勇者（笑）】」

「【最恐執事】…、今、何かつけなかつたかい？」

「気のせいでございます。」

相変わらずだね。

はあ…何も彼らを2体とも解放しなかつたっていいじゃないか…。

「ああ、そつちもあつたみたいだな。こいつによつてな。」

「わわわ!ザルド叔父さん、髪をぐしゃぐしゃにしないでー!」

「ははは。…それでメイ。俺を呼んだのは何だ?こいつらへの特訓か?」

「いいえ、料理です。」

「何だつて?」「ふえ?」「は?」

「説明するからよく聞きなさい、ザル坊。」

「坊はやめろ…。説明しろ、メイ。」

料理…?!

---

昨日、彼はベルの魔法によって生き返ったのか…。

はあ…こここのところ、驚くばかりだよ。

特に今日は、濃い一日だよ。

「なるほどな…。」

「昨日の今日ですが、貴方にとつてちようどいいリハビリになるでしょう。」

「面白いじゃねえか。いいだろう。おい、【勇者】。厨房はどこだ？」

「あ、ああ。今日は本当に濃い一日だよ…。」

「ベルについていくなら、この程度じゃすまねえぞ。【勇者】。」

「…：…：そうだね。頼もしいよ、本当に。」

やれやれ、これからが心配になってきたよ。

だが、悪いことじゃない。

「ぬおっ！何でお主が…。ああ…あの若造か。」

「何故こうも立て続けに…、頭が痛くなってきた…。」

「いい加減に未知を既知に変えろ、と何回も言っただろうが。それに何だ？7年も経っているのにランクアップもしてないのか。情けないやつらだ。」

「言ってくれるわ…。」

返す言葉もないよ、本当に。



「ファツ!? ザルドはんやんか! あー…ベルたんかー。何でウチらは追い出したんやー!」

「お前らと縁がなかったということだろ。」

「メイたんと同じことを言わんといてやー! ん? ザルドはんが作るんか!? うほー! やつたでー! ザルドはんの美味い飯が15年ぶりに食えるでー!」

「ベルに感謝しろよ、でなきや手伝わんところだ。」

「そうだな。感謝しても感謝したりないな。ところで、お前とベル・クラネルの関係は…?」

「あいつの父親と同じファミリアというだけさ、アルフィアと違ってな。さて、厨房で久々に本気の料理を作るか。」

「すまないな。…彼への借りがますます増えていくな。」

「ベルは気にしないだろうな。だが、忘れるなよ?」

「ああ、わかっている。そうだな、彼はそういう少年だったな。」

「そうだね、彼は僕と違い損得を考えない。」

「だからこそ、多くの人が惹かれるんだろうな。」

「あのアイズでも…。」

「何であんたがいるのよ!」

「おいおい、おめえらは敗者だぜ？ 監査役としてあたいが出向いてやったんだ。感謝しろよ。」

「くっ…団長の操は私のものよ！」

「あ？ おめえの器はそんなにちっぽけなのか？ フィンの横に並ぶなら広くしやがれ！」

「くっ…」

『凄…ティオネさんが言い負かされています…』

『ティオネにとつて苦手な相手かもねー。』

そして、準備が始まった。

と言つても、ほぼ【最強侍従】と【最恐執事】の独壇場だけどね。

「そのテーブルはこちらです。そしてこの燭台はここに。」

「きびきび動きなさい。ダンジョンでの連携と思いなさい。」

「ひー！ あの二人、厳しいよー！ しかも…強い。」

「さつきベートさんが反抗したら、あのセバスという人にワンパンでKOされたよ…。」

「今、リーネが膝枕でケアしているけどね。」

「それで、じゃんけんで負けたレナ・タリーがずっとorzしてんのか…。」

ベート…。まあ、いい。

ベートには悪いけど、リーネの強さとなってもらおう。

そして、【暴食】…いやザルドは。

「おい！さつさと皿を取りに來い！遅えぞ！」

「は、はい…！（じゃが丸くんがこんな……じゆるつ）」

「わ、わかりました！（早いです！それに美味そうです！）」

「わかった！叔父さん、それはあつちだね！」

「おう！」

ミアより凄まじい料理の腕だな。

全く鈍ってない…。

「さて頃合いですね。アキさんは私と一緒に行きましょうか。」

「ラウル殿は私と。」

「え？」

「お色直しに決まっていますでしょう。結婚式をその格好で？それは私が許しません。」

「せっかくなのでやっているのですから、着替えましょう。」

「あ、ハイ。」

お色直しか。そうだな、僕らもしてこようか。

交代でしていけば問題ないだろう。

みんなへ指示しておくか。

「よし…ケーキはこんなものだな…。」

「ザルドはん…こんなキレイででかいケーキを作れたんやな…。しかもバベルの塔の縮小版を。」

「意外だ…。『ゼウス・ファミリア』の『暴食』とあろうものが。」

「うるせえよ。これは俺の趣味みたいなものだ。ああ、これはケーキの切れ端だ。食つてみる。」

「お、頂戴するわ。…モグモグ…うまつ！」

「む、みんなに悪いな。どれ…：ほう。甘味が少ない分旨味があるな。うむ…：いくらでも食えそうだな。」

「そうか（これならベルでも大丈夫だろう）。」

…お色直しから帰ってみれば、いつの間にあんなケーキが…。

お店でもやっていけるんじゃないかな？

ケーキでウチの女性陣が注目しているよ…。

そして…。

「全員、礼服またはドレスに着替えましたね？」

「はい！」

「何で俺まで…。」

「まあまあ、ラウルさんとアキさんのためですから。」

「そうだよ。ベート！」

ホームで皆、この格好で祝うのは初めてじゃないかな？

## 第234話 勇者、感謝。

【最強侍従】がいないと思つたら…。

「……何でドチビがおるんねん。」

「結婚式には神が必要でしょう。」

「聞いたよ。キミの眷属が結婚するんだってね、おめでとう！」

「ああ、ありがとうございます。…って、そんなのウチでもええやんか！」

「では、神ロキ。貴女の司るものは何でしょうか？」

「あん？そんなの、『破滅』に決まつとるやないか！」

「「……。」」

ロキは駄目だな。ヘステイア様へお願いしよう。

【ヘステイア・ファミリア】の傘下ファミリアでよかつたよ…。

「大変申し訳ありませんが、ヘステイア様。ラウルとアキの、二人の門出をお願いできま

せんでしょうか？」

「「お願い致します！」」

「ちよつ、リヴェリア!?みんなも！なんでやねん！」

「黙れ、ロキ。お前は二人の門出を破滅で祝う気か！戯け！」

「うぐつ…！ちくしょう！自分の司るものが恨めしいわ！」

「まあ、そうだよね。わかったよ、ハイエルフくん。僕とシノスくんに任せたまえ。」

「お願いします。シノス…？はて、君はシルという名前ではなかったのか？」

「改名しました。ベルさんに名付けてもらったんです。」

「そ、そうか…（あの少年の周りに何人いるのだろうか？あのアイズで大丈夫なのか？）」

あの子は…異端児騒動でダイダロス通りで会った…。

ロキがミアより危険人物と言ってた子か。

『おい…色ボケ。何しとんねん。』

『今の私は、ただのヒューマンですよ？神ロキ。』

『そんなの…あれ、おかしいな…。何でや？神の力が全く感じられへん…。あれー？』

『ふふふ…私も驚いているんです。』

『…それもベルたんか…。あーちくしょう！あの門番、コレが終わったらマジで探した

るー！』

『…それは私ですよ。目をつけた時にすぐ取るべきだったんです。』

『逃した魚は大きいとちゆうことか…。あまりにも、どでかすぎるわ！』

『神すらも超えるんですものね…。』

？何でロキとため息ついているんだい？

どう見ても…ヒューマン？いや…ヒューマンのはずなのに何故だ？  
違ふと親指が言っているような気がする。

「では、まず新郎の入場です。」

『いつの間に取り仕切られているわよ…。』

『いいじゃん！おかげで時間的にも精神的にも余裕できたじゃん。』

『そうですね。』

『ラウル…いつもより増して凛々しい？』

【最強侍従】…君もノリノリじゃないか。

まあ、おかげでこの短時間でこんな豪華にしてもらったのだから。

ベルに借りがまだできてしまったな…。

そして…ラウル。漢の顔をしているな。

…次期団長として本格的に腰を入れてみるか。

アキと、ラウルとアキの子のためにも。

「そして、神ロキに連れられて花嫁の入場です。」

『うわあ…アキさんキレイ…。』

『ひつく…えつぐ…アギさんよがっだでずねえ。』



『エルフィさん、ほらハンカチですよ。』

…これはまた。

【最強侍従】、力を入れすぎだろう…。

「坊ちやま。こちらの花火玉にチャージしてくれませんか？」

「へ？は、花火玉に？」

「はい。深層の闘技場の時と同じでお願いします。」

「！わかったよ。でも…大丈夫？」

「問題ございません。」

リン　リン

「さて、ボクは他派閥の神だけど親ファミリアとして、キミたちの門出をお祝いさせてもらうよ（本来なら結婚を司るヘラがやったほうがいいんだけどな）。」

「そして、神フレイヤの元眷属であるシノスも、神フレイヤに代わりヘステイア様をお手伝いさせていただきます。」

（代わりやないやろ…本神そのものやろが。）

リン　リン

「よくある誓いをするんだけど、ここではボクのやり方でやらせてもらおうよ。ゴホン…。」

「只今より誓いの時を開始する。」

「は、はい！」

（（記者会見の時の……））

リン リン

「そなた達はお互いを愛しているか？」

「はい！愛しています！」

リン リン

「そなた達はお互いを裏切らないか？」

「はい！裏切りません！」

リン リン

「そなた達はお互いを支え合うことを誓えるか？」

「はい！誓います！」

リン リン

「嘘は言っていないことを確認した。よろしい、我が司る『不滅』において  
神フレイヤが司る『愛』において」

「二人のこれからを『不滅の愛』で祝福します。」

「ありがとうございます！」

リン リン

『不滅の愛』か…。

これまでにない最高の祝福だな。

悪いけど、ロキにはできないことだな。

「ひつく…えつぐ…ラウル、アキ、よがっだなあ…。」

『不滅の愛』か…。彼らに感謝しなければならんな。我々だけでは到底ここまで豪華にできなかっただろう。」

「そうじゃな。…さつきから何じや？鈴の音がするんじやが？」

「…まさか…。」

ベル…その手に持っているのは。

リン リン

「キスしやがれ！てめえら！」

「「そーだ！そーだ！」」

「やれやれ、月並だけど。今、ここにボクたちを前にして誓いのキスを！」

「ラウル…。」

「アキ…。」

リン リン

『坊ちやま、今です。真上へ思い切り投げて下さい。』  
『わかった!』

ブンッ!

チュ…。

「「きやあああああ!」」

「「ヒュー! ヒュー!」」

『はい、魔法をお願いします。』

【ファイアボルト】!

「お? 何や何や?」

「ベル・クラネルが真上に魔法を?」

「何をするんじや? む…鉄球か?」

「いや…あれは。」

ドーーーーー! ドンドンドンドン!

これはまた…すごいね。

ベルのチャージは武器だけでなく、物にもできるのか…。

はあ…本当に惜しい、惜しすぎる。

「きゃっ…すごい…。」

「うわあ…でかい花火…。しかも複数…。」  
「キレイ…。」

ああ…。ただの花火じゃない。

これは…なんだろう。

清らかな感じがする。

『これ…すごくないかい？』

『ですね…こんなでかくて派手で…清らかな花火は初めてです…。花火玉一つで』

『ベルのチャージは聞いていたが、花火玉一つでここまでとは…。』

『ふむ、うまくいったようで何よりです。』

『試作第一号は問題ないですね。』

『はあ…はあ…。僕がやったのもなんだけど、すごく綺麗だね！』

「くくくつ！よっしゃー！宴やー！ラウルとアキの結婚だけやない！リーネさんの復活もや…！そしてアイズたん、ティオナ、レフィーヤ、アリシアの一時サヨナラ会や！まとめてパーツとやるでー！」

「「わあああああー！」」

これ以上ない、始まりの花火だな。

「うめえ！この肉料理うまい！」

「こっちの野菜料理もよ！美味しいわ！」

『豊穰の女主人』で食った料理より美味いぞ！コレ！」

そうだね…こんなに美味しいとは。

【ゼウス・ファミリア】が精強な理由はザルドの料理かもな。

「どうしたあ、テイオネ？その程度かよ？」

「まだまだよ！負けるものかあ…グビグビ…。」

（あたしが飲んでるのは水だけだな。単純な奴だぜ。）

「ほら、ラウル。あーんして。」

「あーん…、美味いつす。ほら、アキも。」

「あーん…美味しいわね、このケーキ。」

「この美味しいケーキが、あの【ゼウス・ファミリア】の【暴食】が作ったものとは思えな

いつす。」

「本当ね…。お店でもやれるわよ、これ。」

……本当に場を憚らないようになったな。

まあ、いいことだ。

想い合っている二人がこうして結ばれたのだから。

「…よかったですね。ようやく結ばれることができて。」

「ヒック…私も団長と、絶対に結婚式を上げてみせるわ！」

「あー、ハイハイ。うわ、酒くさっ！」

「こいつ…絡み酒かよ。」

「幸せそう…二人とも。」

……そうだな。

あ……。

「どこへ行く気だい？」

「ホームへ帰りますが、何か？」

「別に今でなくても…、あいつらもお前達にお礼言いたいだろうに。」

「それは無粋というものです。」

「せっかく美味しい酒もあるがのう…、お主の復活祝いも含めてな。」

「悪いな、またの機会にしてくれ。腹すかせている奴らが待っているんだ。…特にこいつの帰りをな。」

…無理に引き止めるわけにはいかないか。

「…すみません。お楽しみの最中で。」

「ボクたちはあの場にいるべきじゃないさ。キミたち自身が楽しまないと。」

「そうですよ。せっかくのお祝いの場なんですから。」

「…深く感謝するよ、本当に。リーネだけでなく、ラウルとアキの件も。…アイズたちを頼むよ、ベル。」

「はい！」

彼に任せよう…。

---

「……彼には返しきれない恩ができたね。」

「そうだな。あまりにも大きすぎるな。」

「そうじゃな。あの若造は気にしてなさそうじゃが、それでは僕らの気が済まぬのう。」

「そうだね。」

これで「ロキ・ファミリア」は、完全に「ヘステイア・ファミリア」の傘下に入ったな…。

皆も不満など言うわけがないだろうな。

あ…まさか、これを狙っていた…？

「団長…どこですかー！」

「リヴェリア様ー！お話をお願いしますー！」

「ガレスさんー！この秘蔵の酒空けていいですかー！」



「全部空けてもええでー！どうせ、ウチは明日からホーム禁酒やからなー！」

…例え、狙っていたとしても。

皆の心からのあの喜びと笑顔を無下にするわけにはいかない。

「行こうか、宴はまだこれからのようだ。」

「やれやれ、ロキのやつ。明日から禁酒だからといって、全ての酒を空けなくてもいいだろうに。」

「がははは！いいではないか。あいつらがお膳立てしたこの宴を楽しまないと損よ！」

そうだな、楽しまないとな。

そして、その宴は日が変わっても続いた…。

## 第235話 街娘、恩恵。

ああ！楽しかった！

神力、神威を完全に封じられた状態がこんなにも楽しいとは知らなかったわ！

ロキの眷属を、ヘステリアと私で『不滅の愛』で祝福するとは思わなかったわ！

「今日は楽しかったですね！ベルさん。」

「はい！人の結婚式を見るのも、準備するのも、演出するのも初めてです！」

「でも、ベルくんのあのスキル、物でもできるんだねえ。」

ええ、それには驚いたわね…。

たった1つの花火玉をあんな風にキレイにするなんて…。

「はい、ヘステリア様。坊ちやまのこのスキルは37階層の闘技場を丸ごと吹き飛ばしました。」

「何？あそこをか？これはまた…。たった半年の駆け出しがやることとは思えねえな。」

「ザルド殿、駆け出しではありませんぞ。坊ちやまはれつきとした第一級冒険者です。」

「そうだったな…。いや、お前ら普通に考えろよ。冒険者になって半年すぎなら、まだ駆け出しだろうが。」

ザルドでもそう思うわよね。

けど、もうベルは第一級冒険者。

オラリオ最強のオツタルを倒したわ。

「そうだね、普通はそう思うよね。」

「もうベルさんは、オツタルさんを倒しましたよ？ 駆け出しにしては過ぎるとは思いませんか？」

「あの糞餓鬼め……。だが、確かにこいつは普通じゃないな。大したやつだ。」

「わわわ、叔父さん！ 髪の毛をぐしゃぐしゃにしないで——！」

「ははは、許せ。」

こんなザルド、初めて見るわ。

…ゼウスの眷属なら、ベルの家族でもあるわよね。

【静寂】…いえアルフィアもそうだけど、ベルに対してかなり可愛がっているわね。

最初からベルのところへ行けばいいのに…、いえそれだこの子たちは絶対にベルを私に会わせようとしないわね。…複雑だわ。

…昨日は長い神生でも忘れられない日だったわ。

神フレイヤとしてのしばしの眠りと…ヒューマンのシノスとしての始まりだったわ。

「いよいよ、ステータスを刻むのね…。」

ドキドキするわ。

「ステータスを刻むよ?…神に対してやるのは初めてだよ。」

「私はドキドキしますね。今まであの子たちにしたのが私自身にするのですから。」

「…いいのかい?止めるなら今だよ?」

「…神ヘラに殺されたくありません。」

「あの子は一体何をやったんだい…。本当に気になるよ!」

「一言で言うなら…オラリオを恐怖に陥れました。」

「余計に気になるじゃないか!」

知らないほうがいいわ。

ヘラのやったことを知ったら絶対に絶句するわよ。

「まあ、いいや。……あ、刻めるんだね。どれどれ…なるほど。」

「できました?」

「ああ、できたよ。はい、これが君のステータスだよ、フ…シノスくん。」

レベル1

シノス・フローヴァ

力： I 0

|     |   |   |
|-----|---|---|
| 耐久： | 1 | 0 |
| 器用： | 1 | 0 |
| 敏捷： | 1 | 0 |
| 魔力： | 1 | 0 |
| スキル |   |   |

## 【戦乙女】

- ・ 戦闘時に全アビリティ中補正。
- ・ 戦闘続行時に発展アビリティ『槍士』発現

## 【銀の瞳】

- ・ 嘘を看破（神々でも可）。
- ・ 魂の色が見える

## 【白兔眷属】

- ・ 血をいただいた相手への忠誠または愛が強ければ強いほど、早熟する。
- （ただし相手が異性のみ）

- ・ 血をいただいた相手が強ければ強いほど、ステータス高補正。
- ・ 血をいただいた相手が死ぬまで、神威・神力は完全に封じられる。

は？【白兔眷属】？

神威が……出せない？

え？本当に封じられた……？

「え？……すみません、これは写し間違いではないですよね？」

「キミね……、ボクが読み書きもできないと思っっているのかい？」

「いえ……だけど、これは……どうして？私……ベルさんの血を飲んでいないのです……が……」

「あ……シノスくん。ここへ来る前にメイくんかセバスくんのどちらかにすすめられた何かを飲まなかったかい？」

「え？あ、はい。この姿になった後、水一杯をヘルンと共に飲みましたが……」

「それだね、その中にベルくんの血が入っていたんだ。ヘルンくんも後で更新したら出るかもしれないね。」

「え？……ということとは、ルウにも？」

「そうだね、ここにいる女性のほとんど発現しているよ。」

何よ……それ。

もはや、もう神じゃない！

「……………ベルさんはヒューマンのはずですよね？」

「……………そのはずだよ。」

疑問に思うのも無理はないわ。

「でも…神の力がベルさんが死ぬまで封じられるとは…。さつきから神フレイヤになるうとしてるんですが、できません…。」

「本当かい？…これは他の子にはない記述だね。」

「ベルさんの死に際に、フレイヤになることもできないじゃないですか！」

困るわ…、本当に。

「キミが気にするのはそこなのかい？神に戻るのは数十年後になるけどいいのかい？」  
「そのくらい問題ありません。むしろ、このスキルは大歓迎です！」

神威を完全に抑えるって、面倒なのよ。

それがなくなったら本当に楽だわ。

「そうかい…。でもこんなこともあるんだね、神でも高位に位置するキミがただのヒューマンであるベルくんの眷属になるなんて…。…ってあってたまるかあああああ  
！」

「きゃっ！」

「ずるいぞ！ボクもベルくんの眷属になりたいのに！」

「…美を司る神様なら、代わりに天界でも他にイシユタル様やアフロディーテ様がおられますが、『悠久の聖火』を司る神様って天界でもヘステイア様しかいませんよ？諦めて下さい。」

「くそおおおー！」

仕方がないじゃない。

私達美の神への抑止力で、一番強いのは貴女よ。

『戦乙女』かあ…。戦乙女は、君の化身の1つでもあったっけ？」

「はい、そうです。あの忌々しいオーデインに仕える戦士でした。」

「そ、そうか。……オーデインも悪いやつじゃないんだけどな。」

「そう思うのはヘステイア様だけですよ。」

「何で、あいつはそんなに嫌われているんだい？」

「言いたくありません。本当に嫌いです。」

大嫌いよ！本当に。

「わかったよ、無理には聞かないよ。…話は変わるけど、君はベルくんのステータスを知っているんだね？」

「ええ、まあ。…見せてくれるんですか？」

「アストレアも知っていることだしね。今のベルくんのステータスは、ボク1人で抱え込むにはもうキツイ…。キミも責任あるから巻き込んでやる！」

「…そ、そこまですか？…責任？」

責任って、私ベルに何かしたかしら？



## 第236話 街娘、呆然。

え？何これ…。

数週間前のベルのステータスが大きく変わっているわ…。

「え？…：【魅了】に【兔囀女達】？…：…：そんな。」

（うわあ…：すぐくシヨック受けているなあ。）

【魅了】って…：え？私、ベルの魅了にやられているの？

…：だから、本調子じゃなかったのね。

まあ、いいわ。

美の女神として癪だけど、ベルなら許すわ。

けどね…、ここは思い切り言わせてもらおうわよ！

「何ですか…：これは。もう神を超越していますよ！」

「やはりキミもそう思うよね。」

「【魅了】って…：私達美の神のお株奪っているじゃないですか！冗談じゃありませんよ

！」

「まーね。」

「【兎囲女達】!?これ、絶対にゼウス様の影響ですよね!?絶対に、本当に、許しません! ああ!腹立つ!」

「まー。うん、わかる。」

「この【時駆白兎】って、先程言っていた時を越えるスキルですか…。いまいちピンと来ませんが、具体的にどのような感じなのですか?」

「あー、それはね「百聞は一見にしかず」といいますので、実際にご覧になりますか?」  
……………」

「……メイさん、セバスさん、盗み聞きは失礼ではありません?」

「私たちはずっと部屋におりましたか?」

「「え?」」

「気配を断っていました。」

「「……………」」

何も、気配を断たなくてもいいじゃない…。

怖いわよ!

「それで、百聞は一見にしかずというのはどういう意味です?」

「少々お待ちくださいませ。」

コンコン

「ん？誰だい？」

「春姫でございます。あの…【フレイヤ…いえ【タケミカヅチ・ファミリア】の【猛者】様がいらつしやいました。セバスさんに呼ばれて、と。」

「来ましたか。メイ。」

「先に行つて、準備をしておきましょう。」

ヒュッ！

準備？何をするつもりかしら…。

この二人が出張ることつて、絶対にろくなことじゃないわよね？

大丈夫かしら…。

「何をするんでしょう？オツタルさんも呼んで…。」

「あーなるほど、実際にやるんだね。もうボクは達観したよ。キミもそうしたほうが早いぜ？でないと、疲れるよ…。」

「ええー…何が起こるんですか…。」

何をするのかしら？

先程オツタルに会つたけど、この状態で会うとどうなるのかしら？

試してみましよう。

「フレイヤ…様？…え？シル様…でもない？」

あ、やはりわからないわね。

すごいわね…【白兔眷属】って、神威を完全に封じた上に神をも眷属にするなんて。

まあ、異性でベルへの愛が高い必要があるけれどね。

……ベルは神時代で初めて女神を眷属にしたということよね？

その第一人神が私ということなら、悪い気はしないわね。

いけない、オツタルを安心させないと。

「ええ、神の力を完全に封じられました。」

「ヘステイア様！何てことを！」

「ボ、ボクじゃないぞ！」

「オツタルさんオツタルさん、ヘステイア様のせいではありません。これは……え？私の影響によるもの？」

「そうでございます。自業自得とはこのことでございますな。」

「どういう意味だ？」

（そういうことですか……。はあ……ベルさんはとんでもないですね。）

私たち美の神による影響で、発展アビリティ【魅了】が発現し、そのアビリティがベルの「家族が欲しい」という想いが結びつき、【白兔眷属】というスキルを生んだのね。

セバスの言う通り、私たちが仕掛けて私に返ってきたということね。

複雑だわ…。

「【ハスティア・ファミリア】のトップシークレットでございます。」

「オツタルさん、これはむしろ私にとっては都合がいいです。なので、ハスティア様を責めては駄目ですよ?」

「…わかりました。それで俺を呼んだのは何だ?」

「では、クノツソスへ参りましょう。」

「……先に説明してくれ。」

クノツソスね、タナトスたち邪神が入り浸ったところね。

入るのは初めてだわ。

……ここが…クノツソス。

ウラノスの眷属、ダイダロス…いえその子孫たちが築いた人口迷宮…。

ベルもそうだけど、人の想いつて凄いわね…。

あら、メイだわ。側にあるのは…大剣と鎧?」

「来ましたか。もうすぐ来られますので、お待ちくださいませ。」

「これは…ザルドの大剣と鎧?」

そういえば、オツタルの部屋にあつたけど盗まれたと聞いたわ。

セバス……どれだけ私達のホームから盗んだのよ……

「何だ、メイ。私は今、いいところなのだが……」

「メイ、どうしたの？ここへ来てほしいって……うわあああああ！」

「え？べ、ベルさんが穴に落ちた!?!…いえ、この穴は……」

「なっ！ベル、ぐっ！弾かれただど!?!」

この穴……どこかで。

そう、天界で……同郷のウルズ、ベルザンデイ、スクルドのあの女神たちが開いた穴に似ているわ……。

まさか……【時駆白兔】とは……。

「成功でございますね。愚者、お願いします。」

「またかね？わかったよ。」

【未踏の領域よ、禁忌の壁よ。今日この日、我が身は天の法典に背く。ピオスの蛇杖、サ  
ルスの杯。治癒の権能をもつても届かざる汝の声よ、どうか待っていてほしい。王  
の審判、断罪の雷霆。神の摂理に逆らい焼きつくされるというのなら、自ら冥府へと赴  
こう。】

幾度が見たことあるわね、あの光。

一体何なのかしら？

「坊ちやま…お願い致します。」

## 第237回 白兔、発動Ⅳ／執事長、感嘆。

うわあああああああ！

また!? 発動した!?

事前に言つてよおおおお！

『ザルドを棺桶から取り出し、代わりのものを入れよ。』

ザルド…:さん？

【ゼウス・ファミリア】の【暴食】であり、7年前にオツタルさんと戦つて死んだ人…:？

!!

絶対に助ける！

ドーン！

ここは…:確か【フレイヤ・ファミリア】のホームに似ている…:

棺桶…:あそこにザルドさんが…:

代わりのもの…:酒樽…:これしかない！

そして僕はレベル5の力で酒樽数個を棺桶の側へ急いで置いた。

「ええと…:その失礼しまゝす。…:うわ、大きい人。この人が…:ザルドさん。」



カツカツカツ…。

!!

は、早くしないと!

僕はレベル5の力で、自分の倍もあるザルドさんを急いで取り出し、酒樽を入れた。これでよしと…。

『ミツシヨンコンプリート!』

愚者さん!お願いします!



坊ちやまのこのスキルは本当に規格外ですな。

「…? 何故、貴様らはそんなに冷静なのだ! ベルが穴に飲み込まれたのだぞ!」

「黙りなさい、小僧。」

「必ず戻ってくることをわかっていますので、冷静なのです。」

「上に何が…え? 穴?...やはり…時空の…。」

神フレイヤ…いえシノス嬢は何かに気づいたようですね。

シノス嬢にも【白兎眷属】が発現し、神威を完全に封じられたと。

思わず笑いそうになりました、坊ちやまを愛するがあまりに神であることを封じられ

るとは。

坊ちやまの眷属になったことで、元主神ヘラは更に手出しできなくなりましたね。

ドドーン！

「うう…、愚者さん！」

（わかつているとも。今度は…【暴食】!? ああ、もう!）

【開け戒門、冥界の河を越えて。聞き入れよ、冥王よ。狂おしきこの冀求を。止まらぬ涙、散る慟哭。代償は既に支払った。光の道よ。定められた過去を生贄に、愚かな願望を照らしてほしい。嗚呼、私は振り返らない】

【ディア・オルフェウス】

「ぐっ…何だこの光は…。ベル、大丈夫…なっ！ザ、ザルドだと!? 馬鹿な！」

「メイ、どうです?」

「……………セバス。あの時の貴方の気持ち、神ガネーシャ、神アストレアの気持ちが変わりました。これは動揺しても仕方ありません…。復活しましたよ、坊ちやま。ありがとうございます。うございませう。」

「本当!? よかった…。」

無事に成功できてよかったです。

これで…【ゼウス・ファミリア】「ヘラ・ファミリア」が復活できました。

それが坊ちやまのスキルとは何たる皮肉ですな。

今頃、クソエロ爺は驚愕していることでしょう。

「ぐ……うう。」

「な、何だと!?!馬鹿な、死んだはずだぞ!?!」

「黙れ、小僧。さつさと、未知を既知へ変えろ。」

いつまでも動揺しているのですか。

遅すぎます。

「だ、だが!こんな……あり得ない!……はっ、【アストレア・ファミリア】の【狡鼠】がいたのは……。」

「その通りです。」

「む……うん?ここは……クノツソスか。」

「ザル坊、15年ぶりですね。」

「ぎやあああああああ!メイ!ゲフツ!」

「五月蠅いですよ。ザル坊。」

【暴食】が復活したあまりに喜んでおりますな。

「ガハツ……この蹴りは間違いない……。な、な、何でお前がここに!?!……だ、誰が解放した!?!」

「この方でございます。【暴食】……いえ、ザルド殿。」

「セバス…、お前もか。こいつは…誰だ？…!!この性質…この違和…この『状態』…まさかあの馬鹿の子か!」

ほう、さすがに分かりますか。

【暴食】と名乗るだけではありませんな。

「そうです。悪食を極めた甲斐がありましたね。ザル坊。」

「坊はやめろ…。メイ、お前は15年ぶりと言ったな？となると、今は俺が死んでから7年後か。」

「さすがですな、ザルド殿。小僧、これが未知を既知に変えるということですよ。」

「……無茶苦茶を言うな。俺にわかるよう説明してくれ……。」

「これが【時駆白兔】…。ベルさん、規格外すぎます……。」

未知を既知にすぐに切り替えないから、いつまでも経つてもそのままなのです。

確かに坊ちやまのスキルは規格外です。

だからと言って、驚くばかりでは駄目なのです。

「は、初めまして!ザルドさん!ベル・クラネルと言います!」

「おう、ザルドだ。……すまん。7年前にアルフィアを無理やり連れて、お前のところへ行くべきだった。」

「!!……ううっ……。ひっく…ひっく……。」



「まあ、いい。ベル、お前結構強いな。レベルは8か？」

「ぐすつ…いえ、レベル5です！」

「は？…だが、おかしいな。この状態はうちの団長に近いはずだが…。」

「ザル坊。貴方の悪食で坊ちやまはレベル8なのですね。」

「そこまでわかるのですか…。」

「悪食をどれだけ極めているのですか。」

「そのはずだ…。鈍ったか？」

「…いいや、鈍っていない。ザルド。ベルは昨日、レベル8の俺を倒した。」

「は？…レベル5のベルがレベル8のお前を？…メイ、事実か？」

「もちろんです。一騎打ちで堂々たる勝利でした。」

ええ、レベル8の小僧の必殺技を真つ向から勝負して、それを打ち破りそのまま旗を

燃やすとはさすがに驚きました。

「…：…：そうか。お前が【最後の英雄】に選ばれたのか。」

「…：ザルドさん、僕は【最後の英雄】にはなりません。」

「何だと…？」

「僕は…【最強最高の英雄】になりたいんです！」

「!!…：はははははははは！そうか！そうだな！はははははははは！そうでなくてはな！」

「わわわ！髪をぐしゃぐしゃにしないでー！」

「ああ…悪い。…やはり7年前にお前のところへ行くべきだったな。…こんな糞餓鬼共にやるくらいならこいつにやるべきだった。」

「……すまん。」

さつきから謝つてばかりですな。

不甲斐ないですね。

「あ、あの！ザルドさん！お義母さんとザルドさんが、オツタルさんとフィンさんたちを強くさせたからこそ、僕は強くなれたんです！」

「……そうか。なら、俺らの死は無駄じゃなかったということだな。ありがとうな、ベル。」

「えへへ。」

ええ、無駄ではありませんでした。

ランクアップしてないことには失望しましたが。

ですが、坊ちやまへの試練としてはちょうどよかったですな。

## 第238話 執事長、委託。

「…気になったのだが、お母さん？アルフィアの妹も生き返ったのか？」

「え？アルフィアお義母さんのことですよ？」

「何？あいつはお前の伯母のはずだぞ。」

「……アルフィアお義母さんがそう言えつて…、怖かった…。」

「そ、そうか。…そうだった、あいつはそう呼ばれるのが嫌だったな…。」

「ザルド殿、ここにアルフィアお嬢様がいなくてよかったですな。いたら、吹き飛ばされたのは確実ですな。」

お嬢様がいましたら、問答無用で魔法をぶつけていたでしょうな。

せつかく坊ちやまによつて生き返ったというのに、あの世へ逆戻りというのはあんまりですからな。

だから連れてきませんでした。

『え？【静寂】は…ベルの伯母なのですか？』

『はい、そうです。信じられませんよね？』

『はい…。よく見れば…面影はありますが、性格が真逆ではないですか…。』



『そうですね…。あ、オツタルさん。アルフィアさんの前で伯母さんと言つては駄目ですよ?【炎金の四戦士】の皆さんがそれを言つて吹き飛ばされました。もちろん、ベルさんの関係を侮辱しても駄目です。ヘインさんがやられました。』

『あいつらが…。分かりました、気をつけます(ヘラ・ファミア)が懇意にしていた菓子屋がまだあつたな…。以前のように手土産として持つていくとしよう。』

「…確かにそうだ。危なかつたな、くつくつくつ…ぐふつ…うぐつ…」

「ザ、ザルドさん!」

「まだベヒーモスの毒がありましたか。ザル坊、これを飲みなさい。」

「何だと…?これは…ベヒーモス?いや…デザインの薬草と…ベルの性質がする?」

「正解です。坊ちやまの血とデザインの薬草とカドモスの泉とベヒーモスの毒を元にした解毒剤です。」

「解毒剤だ?!?…そうか、今はそういう物が作られるようになったのか。」

「いえ、昨日です。【戦場の聖女】に頼んで調べてもらいました。」

「昨日だと?...…わかつた、飲む。...…ゴクゴク...。むつ...これは...4割ほど毒が抜けた...。」

「しばらくは様子見ですね。」

(4割もですか。恐らく坊ちやまの血が強く作用してベヒーモスの毒を取り込んだで

しようね。昨日のウエスタ・ベヒーモスといい、坊ちやまの生命力は凄まじいですね。」

「さてつと…俺はこれからどうしたらいい?」

「え!?!いい、一緒に帰らないの!?!」

「俺は犯罪者だ…。お前のもとにいるべきだが…お前の足を引っ張ってしまう。」

「それは不要な心配ですよ。ザル坊。」

「何だと?」

そしてメイは、神アストレアが戦争遊戯開始直前に話したことをザルド殿に語りました。

「……そうか。神アストレアに感謝しなければな。ベル…俺はお前のもとにいてもいいのか?」

「うん!?!いてほしい!?!」

「そうか。…そういやあの爺もそこにいるのか?」

「!!…ぐすつ…お祖父ちゃんは半年前に谷へ落ちて亡くなりました…。」

あのクソエロ爺がその程度で死ぬわけじゃないでしょうが…。

ザルド殿の恩恵が切れた様子がないことから、十中八九生きているでしょうな。

そうではなくては困ります。

「は？何だと？谷へ落ちた？…あの爺がその程度で簡単に亡くなるとは思えないんだが（恩恵はある…生きているはずだ）。…ベル、その時にでかい光の柱がなかったか？」

「へ？光の柱ですか？あの辺りに神様なんていませんでしたよ？」

「何だと？…お前、まさかあの爺がゲフウツ！」

「ザ、ザルドさん!？」

「手が滑りました。『ザル坊、あのクソ主神は半年前坊ちやまを育児放棄しました。また、坊ちやまはあのクソ主神をゼウスとは知りません』大丈夫ですか？ザル坊。」

「…ああ。大丈夫だ（あの爺、何やってんだ…）。」

ナイスです。メイ。

坊ちやまが知るにはまだ早すぎますからね。

「ザルドさんはお祖父ちゃんを知っているんですか？」

「あ、ああ。「はい、坊ちやま。お祖父様は元『ゼウス・ファミリア』でした。いつも覗きやセクハラをして困った方でした。」…そうだ。」

「う、うちのお祖父ちゃんがすみません！」

「あ、いや。お前は悪くない、本当に悪くないんだ（悪いのはこつちだ。こんないい子を見捨てるなんて、あのクソ爺は何考えてんだ！見損なつたぞ！）。」

全くです。

元主神ヘラからの折檻が怖いからといって、坊ちやまを育児放棄するとは言語道断です。

「ぐすつ…あ！お祖父ちゃんのことをいろいろと聞かせて！メイも！」

「ああ！いっぱい聞かせてやるぞ！」

「もちろんでございます。ところでザル坊、貴方に仕事をお願いしたいのですが。」

「何だ？」

「料理長をお願いします。」

「は？」「ふえ？」

「かなり大所帯になりましたので、私とメイだけでは片手間では回らないのでお願いしたいです。」

「あ、じゃあ私が「ダメです。」…ええー、なんでー？」

（そうだろうな、シノス様の料理の腕を知ればそうなるのは確実だ。）

私とメイがやってもいいですが、手が回らなくなる前にザルド殿を料理長にすれば随分と楽になる上に戦力が大幅にアップしますからね。

シノス嬢を厨房へ近づけないのもあります。

「まあ、「ゼウス・ファミリア」でもやってたから、あまり変わらんがな。」

「ザルドさんは料理がうまいの？メイ？」

「はい、坊っちゃん。ザルドはかなりうまいですよ。ミアよりやや上といったところで  
しょうか？」

「ミア母さんより!?ザルドさん、すごい！」

【ゼウス・ファミリア】のあの糞餓鬼共の腹を満たせるくらいですからね。

「いや大したもんじゃねえぞ。…気になったんだが、さん付けはやめてくれないか？距離を感じるんだよ。俺らは家族だろ？」

「!!はい！ええと、じゃあ何て「ザルド叔父さんでいいと思いますよ」ザルド叔父さん！」

「ああ、それでいい。ベル、嫌いな食べ物あるか？」

「甘すぎるものはちよつと…。」

「あの馬鹿と同じか…。わかった、腕によりをかけて作ってやる。楽しみにしとけよ！」

「ありがとう！ザルド叔父さん！」

坊っちゃん、よかったですな。

アルフィアお嬢様だけでなく、ザルド殿も戻ってきたのですから。



『ザルド坊、坊っちゃんはクソ主神といた時にろくな物を食べてなかったようです。ほとんど芋料理でした。クソ主神は坊っちゃんに隠れて上等な肉や魚、酒をくらったよう

です。』

『あのクソ爺は何考えてんだ…。なら、その分ベルにもつとうまい物をたくさん食ってもらわないとな!』

『期待してますよ。……あの毒の量をアレだけ食らつてよく生きてくれました、ザルド。』

『すまん……。メイ。心配かけたな。』

『本当ですよ(坊ちやま…本当にありがとうございます。ザル坊を連れてきた上に、生き返らせてくれて…。生涯お側に仕えます)。』

## 第239話 暴喰、感謝。

本当に生き返ったんだな…。

あの馬鹿の子がこんな大したことをやるとはな。

「あ、メイくん。どうだった…成功したみたいだね。」

「はい、ヘステイア様。こちらは私の元所属ファミリアの方でございます。」

この少女が…ベルの主神か。

いや、神は見かけによらないんだったな。

「ヘステイア様。『ゼウス・ファミリア』のザルドと言います。ベルが大変お世話になってお礼を申し上げます。」

「…キミに対しては7年前について叱りたいけど、メイくんからおおそ聞いているよ。キミはこれからどうしたいんだい？」

この神威の気配…、爺より上だな。

返答は慎重にしなければ。

「ベルの力にならせていただきたいです。」

「…嘘は言っていないね。わかった。二度とベルくんを1人にさせないでくれ。」

「かしこまりました。」

いい神じゃないか。ベルはいい神を引き当てたな。

俺たちやアルフィアたちと違ってな。

「…キミ、本当にあの子の眷属かい？すぐ真面目じゃないか？メイくん。」

「ザル坊は、私共の中でもまだまともな方でございます。」

「おい、メイ。まともとは何だ、まともとは。」

「では、貴方よりまともな方は何人いたか言いなさい。」

「……………3人もいないな。」

あいつらはクソ爺の影響を受けすぎだ…。

だから反面教師としてこうならざるを得なかったんだよ！

「……………キミも苦労しているんだね。」

「いえ…。ん？あの爺を、あの子呼びというのは…。」

「ん？まあ、ボクはこんな姿形だけどあの子より年上だよ？」

「何……………だと!？」

「事実です。受け入れなさい、ザル坊。」

そうだった…神は見かけによらないんだったな。

だが…まさか爺より年上がこの少女とは思わんだろうよ。



「…そ、そうですか。うちの爺が色々と迷惑をおかけしたようで…。」

「キミ、順応性高いね…。」

「あのクソ爺がどれだけ問題を引き起こしたのか…。どれだけ俺らに迷惑をかけたのか…。いやでも順応性が高くなりますよ。」

「そ、そうかい。」

全くだ。あの爺があちこち問題を引き起こして、それを鎮静させて謝って回るのが俺らの日課だった…。

手足へし折って神室に閉じ込めても、翌日には復活するんだから困った爺だった。

「…メイから聞きましたが、「ヘステイア・ファミリア」の料理長を受けさせていただきます。」

「ふえ？料理長？」

「はい、今までは私とセバスと命さんがやっていましたが、これからどんどん増えるでしょう。なので、ザルドには料理長をやっていたいただきます。腕は保証しますよ。」

「あー、そうだなー。今まで10人にも満たなかったからね。一気に増えたけど、ザルドくん。よろしくね！」

「はい、かしこまりました。」

本当にいい神だ。ベルは善神中の善神を引き当てたな。

あの無乳やマザコンのところではなくてよかったぜ。

団員たちへ紹介してもらったが…。

「さて、皆様。「ヘステイア・ファミリア」も大所帯になりますので、料理長を雇いました。」

「料理長ですか？メイ様、口を挟むようですが「ヘステイア・ファミリア」は機密が多いので、入団募集はしないとのことではなかったでしょうか？」

（え……？ザルド……？まさか、アルフィアさんと同じく7年前の大抗争の…。レベル7!? ま、間違いない！）

む…？あのハーフェルフ、俺を…いや俺の頭上を見て何かに気づいたな？

それに…女が多くないか？男は…数人か。

「はい、リリさん。その通りです。ですが、こちらの方は坊ちやまと深い縁があります。身元証明及び人格については、このメイが太鼓判押ししましょう。」

（この男……、強いな。レベル6…いや7はあるな。）

「ベルと深い縁ですか…？」

「強いな。」

「ああ、強い。」

「だが、どつかで見たことあるな。」

「確かにどこかで見たことがある。」

「目に傷…まさか。」

「こういう時はストレートに聞いた方がいいのよ！ねえねえ！私、完璧美少女のアリーゼ・ローヴェルよ！いかつい叔父様は何と言うの？」

「(何が完璧美少女だ…。いかつい…)ザルドだ。ベルの父と同じファミア、[ゼウス・ファミア]の[暴食]ってんだ。」

「へ？」「は？」

「「えええええつ！」「」

—————

「ベルは帰ったか？…む、ザルドか。」

「あ！お義母さん！」

「おう、アルフィア。お前もか？」

「お前と一緒にするな。私は生きてままでこの時代へ来たのだ。」

「同じだろうが…。」

「何か言ったか？」「いや、何も。」

変わらん、こいつは。

いや、どつか丸くなったか……ああ、ベルのおかげか。だから、あの時に行った方がいいと言ったんだ。

「メイ様……。あの方も……ベル様のあのスキルでしょうか？」

「はい。その通りです。」

「……そうですか。ええと、ザルド様。「ヘステイア・ファミリア」参謀のリリルカ・アーデといえます。よろしくお願いします。」

「おう。よろしくな。まあ、7年前は色々あったが今はベルの力になりたいと思ってる。よろしくな。」

（あ、久々にまともな方です！よかったです！）

「まあ、いい。腹が減った。早く作れ、ザルド。」

「いきなり、それか……。まあ、いい。メイ、俺の戦場はどこだ？」

「こちらです。」

早速作るか、久々の料理か。

腕が鈍っていないけりやいいが。

ガツガツガツ！

「お替りよ！」



「へっ、そうだな。……ここは女性比率が高すぎるから、あんたらが入ってきてよかつたと思っっているぜ。」

「それでも…肩身が狭いことは変わらないがな（チラツ）」

「ああ、そうだな。もう、力でも知識でもあいつらには勝てないからな（チラツ）」

「よくこれまで耐えてきたな…ヴェルフ。」

「2週間前まではマシだったんだよ。でも、今はな…（チラツ）」

「…かつて我が里で伝えていた鍛冶のレシピを渡そう…【単眼巨師】には渡したくないでな。」

「いいのか？ありがたく受け取っておくぜ。そういや、お前さんの長刀見せてくれないか？整備しておくぜ。」

「助かる。今の今まで自分で整備していたから、困っていたところだ。前のファミリアではつまらない妬みで台無しにされたことがあったからな…。」

「…そうか。お前さんもあちらで苦労してたんだな。」

「ああ…。ここでは何とかやっついていけそうだ。あの愚兎もいることだしな。」

「こうも増えたのはベルのせいだが、悪く言えないな。まあ、ほぼ全員がベルに集中しているから…こちらは気楽だな。」

「……大丈夫なのか？あの愚兎は。この状況を理解しているのか？」

「いいや、全然さ。あいつらは、ベルが後戻りできないところまで追い詰めて責任とらせるんだろうな。…もう助けることができない。」

「自業自得というしかないな。あの【暴食】でも無理だろう。」

## 第240話 暴喰、安堵。

やれやれ。やっと終わったか。

あいつらと違い、皿洗いまで手伝ってくれた。

ベルはいい仲間を持ったな。

「ザル坊。終わりましたか？」

「ちよつと待て。明日の朝食の仕込みをしてるところだ。……これでよしと。」

「相変わらずマメですね。」

「お前が俺をそう仕込んだだろうが……。それでどうした？」

「今までのことを説明しようと思ひまして。」

「ああ、そうだな。ベルは？」

「あちらにおられますよ。」

「ん？あいつ、何を飲んで……げえっ！」

あいつ！あの特製ドリンクを飲んでやがる！

早く止めな……あ、一気に飲みきりやがった……。

「ベル様？大丈夫ですか？」



「んあ？だいじょうびゆだよ。」

「ベルくん、こつちへおいで。足元に気をつけてね？」

「あーい。」

……………あいつ、幼児退行しやがった。

あの様子だと、かなり濃いやつだぞ！

「ザル坊？どうしました？」

「ベル…お前の特製ドリンクを飲んだぞ…。」

「2週間連続で毎日ですよ？」

「毎日だと!？」

あいつ…気づいていないのか!？」

早く教えてやらんと！

というか、あいつらベルをどこへ連れて行った？

「お風呂ですよ。ザル坊。」

「はあ!?!待て待て!アルフィアは知っているのか!?!」

「知ってるも何も、先に風呂で待っていますよ?」

「何……だど。」

あいつ…いいのか？

……大丈夫なのか、ベル。

「さて、部屋へ行きますよ。ザル坊。」

「わ、わかった。……なあ、その坊はやめろよ。俺、もう45だぞ?」

「覚えておきなさい。私から見れば、いくつになっても坊は坊です。」

「そりゃ、お前から見たら誰だってそうだろう…。」

何百年も生きている魔導人形からすれば、神を除けば全員年下だろうよ。

「さて…貴方が死んでからがいいですか? または坊ちやまがオラリオへ来てからがいいですか?」

「……あの糞餓鬼が一週間前にレベル8になったことから、7年前からあまり成長してないってことか?」

「はい、そうです。なので、坊ちやまがオラリオへ来てからのことを話しましょう。」

そして、俺はベルがオラリオへ来てから、今日の戦争遊戯で勝ったことまでの経緯を聞いた。

「あいつら、あれだけやったのに何を学んだんだ…。情けねえ。」

「全くです。」

本当に情けねえ…。

上がりにくいからって、7年もあつたのに1つも誰も上がってないだど？

あの猪の糞餓鬼はともかく…。

「しかし、ベルが冒険者になつて半年でレベル5か…。いや、今はレベル6あたりか。」

「更新がまだですのので、そうなるでしょうね。」

「【憧憬一途】か。あの馬鹿の子とは思えないな。」

「全くです。」

あの馬鹿の子が世界最短記録を更新するとはな。

一ヶ月半でレベル2？その一ヶ月後にレベル3、二ヶ月後にレベル4、そして一ヶ月後にレベル5か。

笑いたくなるな、俺ら【ゼウス・ファミア】にいたらその都度宴会をやつてただろ  
うな。

その元が単なる想いとはな。

あの馬鹿の子としては、考えられないぜ。

【英雄願望】…。あの爺がベルに聞かせた英雄譚の影響か？チャージで単純だが、強力  
だな。」

「そうですね。」

ある意味、応用が効くな。

「【兎囲女達】に発展アビリティ【魅了】か。だからあいつら、ベルを風呂へ連れて行ったのか。よりスキンシップさせて愛とやらを深めるために。」

「はい、そうですね。ですがザル坊…、坊ちやまはまだ未精通です。」

「何…だと？あの馬鹿の子だぞ？あの年であり得ねえ…。」

「私も驚いています。ですが、事実です。」

嘘だろ…。爺の眷属は俺を含めて全員、ベルより若い時に精通してたんだぞ。

爺が14年間つきつきりでいたに関わらずだ。

ん？【兎囲女達】？これはまさか…、ここの女性比率が高いのは。

聞いてみるか。

「メイ…まさかと思うが、ここの連中の女性全員がベルのハーレムではないよな？」

「いいえ。「ほっ…。」数人を除いて全員です。「ほとんどじゃねえか！」」

うわあ…。マジで修羅場になるじゃねえか。

はっ！あいつの性格は今日しか知らないが、ハーレムを囲んで笑うような奴じゃないのは確かだ。

メイ…お前、ハーレムが盤石になってからベルに突きつけるつもりだな。

哀れでならねえぞ。

「せめてあいつに一言言つてやれよ…。不憫でならねえぞ…。」

「駄目です。坊ちやまは心優しいお方です。自責の念に苦しむでしょう。なので、言わないでおいてください。」

「それはそうだが…。だから、そのスキルとアビリティであの糞餓鬼に勝てたのか…。」

「はい、そうです。」

レベル5とレベル8の壁はとんでもなく高く分厚いはずだ。

それを…あいつらからの愛だけでなく、いや世界中からのベルへの想いで乗り越えたのか。

えげつねえ…。

俺や団長以外のあいつらがそれを聞いたら、orzして泣くだろいな。

思い出しただけで笑えてくるぜ。

…あいつらは無事に転生しただろうか？

「俺はあいつが俺達が求めてきた【最後の英雄】と思っていた。だが、あいつはそれを跳ね除け、【最強最高の英雄】を目指しやがった。俺たちの目指したのを突き抜けやがった。大したやつだ。」

「ええ。」

「メイ、お前から見てベルはどうなんだ？」

「才能は今まで教えてきた子の中で、一番ビリケツですね。」

「は？何だと？」

「ですが、想いの強さは神時代の中でダントツですね。」

「想いの強さか…。」

「はい、それが貴方を過去から連れ戻した『時駆白兔』がそれを証明しています。」

「そうか…俺らがベルのところへ行かなかつたために発現したということか。皮肉な話だな。」

「全くです。」

「なら、俺らの選択は間違っていないということだな。」

俺らの経験値をあいづらが喰らい高みへ行けたが、それをベルが喰らつてより高みへ行つたわけか。

くつくつくつ、あの時エレボスの前で言ったことが現実になったわけだ。

…まさかエレボスの奴、天界からそう操作しているわけではないよな？

「数多の英雄が子の前に立ちはだからんことを…か。」

「糞神エレボスの前で言ったことですか。」

「ああ…まさかそれが現実になるとはな、ベルにとっては気の毒だが。」

「坊ちやまはそれが当たり前と思つてゐるようですよ?」

「何だと? ああ、半年だけならそう勘違いするのも無理ないな。まあ、そのままでもいいだろう。」

「そうですね。勘違いしたままで強くなるのは悪いことではありませんからね。」

全くだ。ベルには悪いが、そのままでもらおう。

あの糞餓鬼どものように怠惰になつては困るからな。

それに、アルフィアの奴から死の病の性質が消えているのは気のせいか?

ベルに対して過剰に可愛がつてゐるように見えるので、関係は悪くないようだな。

「アルフィアのあの態度から見て、ベルを可愛がつてゐるようだが?」

「はい、それはもう。実の息子以上に溺愛していますよ。」

「…そうか。それはよかつた。」

あの時、アルフィアはベルに会いに行かなかつたが、会いに行けばエレボスの誘いを蹴してただろうな。まあ、俺もだが。

あの馬鹿の性格が似なくてよかつたぜ。

「ザル坊、貴方が飲んだベヒーモスの解毒剤に坊ちやまの血が入つてましたね?」

「ああ。…まさかあいつの血はベヒーモスの毒を無効化するのか?」

「ベヒーモスの毒無効化はまだですが、坊ちやまのお母様の死の病はすでに無効化でき

「ています。」

「は？ああ、そうか。あいつの血が……いや生命力がその死の病を打ち消したのか。」

「はい。」

「ベヒーモスの解毒剤があるなら、死の病の特効薬もあるか。それをアルフィアへ飲ませたのか。道理でアルフィアがかなり強くなっているわけだ。病が治ったんだな。」

「その通りです。ですが、アルフィアさんのスキルが刻まれている限り再発の可能性は高いでしょう。」

「そうか……。」

それはよかった。あいつはまだまだ若いんだ。

これからベルと一緒にいられるだろう。



## 第241話 暴喰、恐怖。

「また、それだけではありません。」

「あいつ、どれだけ秘めているんだよ……。勘弁してくれ。」

「坊ちやまの血を飲んだら、坊ちやまの眷属になります。ただし、異性だけです。」

「は？け、眷属？」

「先程言いましたね、神フレイヤが坊ちやまを愛するがあまりに戦争遊戯を引き起こしたと。」

「ああ、だがベルたちが勝つたんだろ？」

「神フレイヤはどこへ行つたと思えます？」

「さあ……オラリオから追放したんじゃないか？へステイア様の性格上、送還はしないだろうし。」

「いいえ。今日、【猛者】の横にいた娘、覚えています？」

「ん？ああ、ただの娘だろ？」

「神フレイヤです。」

「………は？ば、馬鹿な……俺の悪食でも引つ掛からなかったのに……。」

「坊ちやまの血の【白兎眷属】は、坊ちやまを真に愛する女性だけに発現します。それは神でも例外ではありません。坊ちやまの血によつて神フレイヤは完全に封じられ、ただの娘となりました。」

「……頭が痛くなつてきた。あの馬鹿の子が……神を超越するのか。他にもうないよな？」

「今のところはそれで打ち止めですね。レベル6になれば、また分かりませんが。」

「……そ、そうか（ベル……強く生きろよ。美味しい飯をたらふく食わせてやるからな）。」  
神を眷属に……。しかもフレイヤだぞ？

あいつの想いはどこまで行くんだ？……あの馬鹿の子とはますます思えねえな。

あの馬鹿が生きてたら、「俺にもくれよー」と言いそうだな。

あいつだけは復活させねえ、ベルの教育に悪い。

やはり惜しいな、【ゼウス・ファミリア】で鍛え育てたかったな。

あの爺だけでなく爺の影響を受けたあいつらも、ベルを可愛がるだろうな。

教育に悪いが、そこは俺と団長が何とかやるだろう。

いかなな、想像したら泣けて来たぜ。

……待てよ。ヘラの眷属の子なら【ヘラ・ファミリア】じゃないか？

……ウチと【ヘラ・ファミリア】でベルを取り合いするだろうな……。

毎回戦争遊戯が起こるのが目にみえているな。

今がベルにとって幸せな時かもしれないな。皮肉なことだ。

ヘステイア様と少しだけ話をしたが、爺やヘラと違い神格がかなり高いという事はわかる。神威も結構高いこともな。

…思ってたんだが、何で爺はベルを育児放棄したんだ？

あの容姿のベルなら、いくら爺でも放棄はしないと思うんだが…。

「私はクソバカ主神を許せません。」

「(メイが珍しく怒っているな…) 何で、爺はベルを育児放棄したんだ？」

「半年前に、神ヘラが正気に返ったからでしょう。」

「今頃か!?!…まあ、あのヘラがそうなるのも無理もないな。」

「なので、クソバカ主神は坊ちやまと自分の身を守るために、わざと死んだふりをするしかなかったでしょう。しかし、それが坊ちやまの心に深い傷を負わせてしまったのです。【英雄願望】【兎囿女達】【時駆白兎】は坊ちやまのその傷によって生まれた想いの強さによるものです。」

「……そうか。はあ、あの糞爺め。他にもやりようがあっただろうに。」

「全くです。」

あの爺め…、メイがここまで怒るのはあまりねえぞ。

メイもベルをかなり溺愛しているようだな。

…魔導人形の使命を考えたらそうなるのは自明の理だな。

「さてつと、大体はこれで聞けたな。俺もかなりの年だがベルの行く末を見るまでは死ねんな。」

「そう簡単に死なれては困りますよ、ザル坊。坊ちやまのお子様が大きくなるまでは。」

「まだ先だろうが…。解毒剤もあるからすぐに死ぬとは限らんがな。…さつきからずつと気になったのだが、その樽は何だ？」

「おや？わかりませんか？」

「この性質…この違和…この『状態』は……ひいつ！お、俺は部屋へ戻る！だから、そこをどいてくれ！」

「駄目ですよ。この樽の中身を全て飲みきるまでは。」

「嫌だ！それは絶対にやめろ、と言っただろ！」

「では、貴方の腕が鈍ってないか稽古をしましょうか？貴方が負けたら、この樽の中身を飲みきってもらいますよ？」

「くそがあああああ！」

そして、俺とメイは戦ったが病み上がりである俺はあっさりと地にふせられた。

そのまままで特製ドリンクが入った樽を全て飲まされた…。

その後のことは覚えていない。

記憶にあつたとしても絶対に思い出したくねえ！

まあ、そのおかげで大体は回復できたのはよかつたが、二度と飲みたくねえ。

…ベルはあの特製ドリンクを毎日飲んでいいのか…。

強く生きろよ…。

## 第242話 九魔姫、心配。

昨日は本当に楽しかったな…。

彼らには感謝しなければならんな。

だが…、こいつら飲み過ぎだ！

メイが置いていった二日酔い防止の薬がなかったら、明日になっていたところだ。

「うう、飲んだわ…。メイさんの置いていった薬がなかったらやばかったわー。」

「がははは、昨夜ほど飲んだことはなかったわい。」

「全くだね。…リヴェリア、彼女たちの引率頼んだよ。」

「ああ、わかっているとも。」

あれから、飲み騒ぎが続いた。

ラウルとアキは、その、なんだ、まあ途中で退席したがな。

冷やかしいにこうとした奴らもいたが、一喝で叱っておいた。

「さて、行くか。あの娘たちは庭にいと聞いたが…。」

「ああ、そうだよ。今もテイオネがテイオナに色々と注意しているよ。」

「そうか。菓子折りも持ったし、行くでしょう。」

「ウチ…ホームでセクハラも酒も禁止かー。」

「自業自得じゃ、ロキ。」

「仕方がないよ、ロキ。」

「諦めろ、ロキ。」

「誰も味方してくれへんー！」

知らん。

「お前たち、準備はできたな？」

「うん…。リヴェリア、あの部屋そのままだよね？」

「ああ、もちろんだ。」

「わかった……。」

「よし…服の乱れもありませんね。髪もよしつと。」

レフィーヤ…何を気合入れているんだ。

……大丈夫なのか？

「早くいこー！早くー！」

「あんた！聞いているの!?失礼のないようにしなさいよ！たまには連絡しなさいよ！」

ティオネ…ティオナにかなり心配しているな。

……大丈夫なのか？ティオネが。

「アリシア……大変と思うが、頼むぞ。」

「はい！確かに引き受けました！」

あちらには「最強侍従」もいるし、大丈夫だと思うが。

問題は……他の団員と馴染めるかだな。特にアルフィアと。

「では、行こうか。」

「はい！」

「ロキ・ファミリア」の門まで団員全員が見送ってくれた。

大げさにしなくてもいいのだが……。

「はあー。ウチ、負けたんかー。」

「何を今更。」

「いや、ウチらがファミリアを立ち上げてからかなり経つとるやん？下界へ降りて数年もないドチビがオラリオ最強派閥になつとるなんてなー。ずっこくない？」

「確かに、「ヘステイア・ファミリア」は神時代の中でも新米ファミリアだろう。だが、今はもう我らを倒した。それは事実だ、受け止める。」

「それはそうやがなー。つと、もう着いたんか。」

「では、入るぞ。」



コンコン

「はい…。あ、【ロキ・ファミリア】の皆様、お待ちしております。」

「おー、来たでー。」

「春姫さん、誰ー？あ、ロキ様だ！」

!?

アーデイ…ヴァルマ。

そうか、そういうことか。

あの時、シャクテイが言っていた「7年も止まっていた時」とはこういうことか…。

【ガネーシャ・ファミリア】が【ヘステイア・ファミリア】に味方するのも道理だ。

「ファツ!?アーデイたんやんか!あー…また、ベルたんかー。」

「え?あ、うん!ベルくんだよ。へへへ!」

『あの…リヴェリア様。あちらの方をご存知でしょうか?』

『ああ。アイズは…覚えているか知らないが、彼女は【ガネーシャ・ファミリア】団長シャクテイ・ヴァルマの実妹アーデイ・ヴァルマだ。7年前の大抗争で闇派閥の自爆攻撃で亡くなったはず…だ。』

『それも…ベル?』

『それ以外、考えられないだろうな。』

「あらー！リヴェリア様！数日ぶりねー！」

「おやおや、【九魔姫】に【劍姫】ですか。貴女方にとっては5年ぶりでございますね。」  
「……ああ、久しぶりだ。お前たちに詫びなければならん。5年前、お前たちと共に行くべきだった。」

「【九魔姫】、貴女が来ても同じだったと思いますよ？あのモンスターはイレギュラーだった。特に貴女にとっては天敵と思いますよ？」

「…そうか。後で詳しく聞かせてくれるか？この娘たちを改宗しに来たのでな。」

「あらあらー！これはまあ…女性ばかりね！私は【アストレア・ファミア】団長のアリーゼ・ローヴェルよ！よろしくね！」

「「あ、はい。よろしくお願ひします。」」

「皆様、お待ちしておりました。こちらにヘステイア様とアストレア様がおられます。」

「ああ、【最強侍従】。わかった。おい、お前たち行くぞ。」

彼女たちと積もる話もあるが、今は後にしよう。

部屋には、神ヘステイアと神アストレアがおられた。

ロキと違い、女神らしきが出ているな。

「やあ、ロキ。」「あら、ロキ。いらっしやい。」

「よ、ドチビ。改宗しにきたでー。：昨日はありがとな。」

「ん？いや、ボクは立ち会ったただけだよ？御礼なら、彼らに言いなよ。」

「そうするわ。ううゝアイズたんを改宗したくはないわー。」

「神ロキ、巨乳に「わーった！それはやめてやー！」。」

まだ言ってるのか…。

そして、私は改宗する彼女たちを紹介した。

「むー…見事に女性ばかり…（特にヴァレン某を改宗したくないけど…仕方がないよね）。」

「そうね…（やはり5年前にベルを眷属にしておくべきだったわ）。」

「神ハスティア、これはお礼としてお持ちしました。」

「へ？お、お礼？」

「はい、我らの仕置きのうちにロキの禁酒とセクハラ禁止を入れてくださり、ありがとうございます。」

「……ロキ、キミ何をやっているんだよ…。」

「ロキ…。」

「うっさいわ、ボケ！しょうがあらへんやろ！ウチのファミリアやねん！撤回するなら

「今やでー！」

「いや、永遠にそのままで。」「永遠!?!」

「わかった、ありがたく受け取っておくよ。そちらにも益があったなら何よりだよ。」

「ウチは大損やー！」

「私は外に出てるわね。」

「あ、うん！」

さて、改宗する順はアリシア、レフィーヤ、テイオナ、そしてアイズだな。

## 第243話 処女神、面談。

最初はこの娘か…。

エルフにしては、スタイルが良すぎないかい？

ベルくんが目移りしなきゃいいけど…あ、いや絶対に目移りする。

…まあ、今更だよね。

「まず…アリシア・フォレストライトです。彼女は攻守と共に長けています。私が信頼する者です。」

「よろしくお願ひします。」

「よろしくね。まあ、最初は馴染めないかもしれないけど、何かあつたら相談してね！」

「…あ、はい。ありがとうございます。同じ神でもロキとは違いますね。」

「なんでや—！」

「キミ…自分の眷属たちにどれだけ迷惑かけているんだよ…。」

ボクもベルくんたちに迷惑かけていることもあるけど、そこまで思われたことないよ！

さて、改宗つと…。

あれ?あれれ?!

「…あれ?アリスアくん…。キミ、ランクアップできるよ?」

「ええっ!」「何やて!…ちよつと見せてや、…ホンマや…。」

「そうか…あの弱体化攻撃に耐えれたから偉業に数えられたのか…。」

「そうみたいだね。各アビリティもまあまあ高いし…ランクアップしてもいいかい?」

「あ、はい!お願いします!」

「もつたいないわ…。待望のレベル5がああ。」

知らないよ!選んだのは君たちじゃないか…。

レベル5 アリスア・フォレストライト 「ヘステイア・ファミリア」入団。

この娘…、確か18階層でベルくんへ魔法を放とうとした娘じゃないかい?

その後、何故か靴をベルくんへプレゼントしたみたいだけど…関係がわからない…。

あつ!異端児騒動で、ウチへ殴りこんでベルくんへ会わせろと言った娘だ。

…何故、改宗を希望したんだい?

「こちらはレフィーヤ・ウイリデイスです。私の後継者でもあります。魔法特化なので

後衛としては不足ないかと。」

「後継者だつて?いいのかい?キミがせっかく育てているんじゃないのかい?」

「はい、ですが。レフイーヤも他派閥での空気に触れるべきかと。色々と刺激があるかもしれませんから（チラツ）。」

「よ、よろしくお願ひします！」

「んー、ハイエルフくんが言うならいいけどさ……。レフイーヤくんもいいのかい？嫌ならいいんだよ？」

「い、いえ！その…リヴェリア様の教えを受けて他の方を見て学びたいなと思います。」

「嘘だね。」「レフイーヤ、嘘はあかんで。」

「はうっ！」

この娘…、嘘がつけないタイプだね。

「おい、レフイーヤ。正直に言え。」

「…私は、そちらの団長のベル・クラネルを好敵手と見ています！負けたくないんです！」

「別に負けたくないなら、改宗しなきゃいいんじゃない？」

「それはその…、彼がレベル1の時から見ているのもっと近くで一緒に戦いたいですー！」

（あー…この娘もか…。魔法特化はボクのアミアリアにはないので欲しいし…チ

ラツ)

メイくん、どう思うかな？

「いいのではないでしょうか？」「うわっ！」

…思っただけで通じるなんて、もう神を超越してないかい？

【最強侍従】…何をしている？」

「ヘステイア様の警護ですが、何か？第一、私に知られても意味ありません。既に把握していますから。」

「は？」「何やて？」

「エイナさんの魔法、忘れましたか？」「あっ！」

（まあ本当は、戦争遊戯前でセバスによつて忍び込まれて各人のステータス等を把握していますからね。）

本当は違うよね？忍びこんで盗み見たんだよね？

まあ、堂々とは言えないね。

「そうだった…。」

「メイくん、先程言いかけたけど何だつて？」

「ヘステイア様、彼女は恐らく神時代でも上位に入るほどの魔道士になれます。理由はどうであれ、坊ちやまに敵意がなかったらいいのではないでしょうか？」



「うーん…。『それにもう今さらでしょう。1人2人増えても同じです。』はあ…わかつたよ。レフィーヤくん、いいんだね？」

「は、はい！」

それに、この娘。他派閥にしては、ベルくんと距離がウチの子並に近いのは気のせいかな？

うーん…悪い娘ではないのは確かなんだけどね。

まあ、改宗すればわかるだろうね。

どれどれ…うわ、見事な程の魔法特化だね。

【千の妖精】であることもうなずけるよ。

「これは…また凄いね。ハイエルフくん、キミの後継者であることもうなずけるよ。」

「はい。私を超える者として期待しています。」

「ですが戦争遊戯を見ますと、並行詠唱としてはまだまだですし体捌きとしては落第ですな。」

「うぐっ！」

メイくん、厳しいね…。

魔道士にそれを求めるのは酷じやないかな？

アルフィアくんとは全く違うタイプと思うんだけど。

「まあ、それについては考えてあります。」

「そうか。みっちりとしごいてやってくれ。…死なない程度にな。」

「死なない程度!?リ、リヴェリア様!」

「レフィーヤ、私は少しお前に甘いところがある。なので少しは厳し目の方がいいかもしれない。【最強侍従】なら大丈夫だろう。」

『アレで甘い!?これ以上厳しく!?し、死んでしまいます…。』

「あ…、メイくん。ほどほどにね?」

「わかっております。」

レベル4 レフィーヤ・ウイリデイス、「ヘステイア・ファミリア」入団。

そして、この娘は…18階層でちらつと話ただけでもいい娘だね。

天真爛漫が似合う娘だね。

「こちらはティオナ・ヒリュテです。我らの中でも前線に立つ第一級です。」

「よろしく願います!ヘステイア様!」

「うん。えーと、改宗したい理由を一応聞いておこうかな?」

「アルゴノウトくんが好きだからです!」

「アルゴノウト?」坊ちやまのことです。…そうか。キミもかー。」

「問題はないでしょう。彼女のような戦力は【ヘステイア・ファミリア】には不足してい

ます。それに、彼女の人格から言つて快活で好ましいです。」  
「そうだね。」

アルゴノウトか：ベルくんや春姫くん、アーデイくんと英雄譚で盛り上がりそうだね。

「そうだね、少し話したけど、ボクもそう思うよ。ええと、テイオナくん。ここはこのルールがあるから従うように。特に、メイくんとセバスくんにはね（チラツ）」

「ドチビ：メイさんとセバスさんに乗っ取られているやんけ。」

「失礼ですね。神ロキ。乗っ取っているならヘステイア様はここにおられません。」

「ふえっ!？」

「神アポロンや神ロキ「ウチ、あの変態と同格なん!？」のような神なら、利き手を除く四肢をもいで「もいで!？」地下の奥深くに閉じ込めています。」

「ひいつ!？」

メイくんから見たら、あの変態神とロキと同格なのか…。

それにメイくん、以前から思っていたけど怖いね。

神を神とも思わないとは…。

「当然でしょう。坊ちやまを預ける神が愚神であることは私が許しません。」

「……ウチになつてたらどうなつてたん?」

「フリユネ「わーった！わーった！これ以上言わんといて！」ご理解していただき、何よりです。」

「……私としてはそれでもいいと思うが「リヴェリアああああ！」黙れ、ロキ。自分の行動を振り返つてから言え。」

ロキ……キミ、普段から何をやっているんだよ……。

「え、えーと？」

「ああ、すまないね。ティオナくん、ベルくんのことが好きなのはわかった。けど、ここにいるみんなもだよ。なので……仲良くしてほしいけど、できる？」

「はい！もちろんです！」

「……良い返事だね。ロキ、いい子じゃないか。」

「だから改宗させたくないねん！」

知らないよ。

レベル6 ティオナ・ヒリュテ、「ヘスティア・ファミリア」入団

## 第244話 道化神、委託。

残るのはアイズたんかー。

ううー…放したくないんやけどなー。

けど、負けたからしやーないわ。

「さて、残るのはヴァレン某くんか。いいのかい？ロキ。君が一番可愛がっている子だろ？」

「ウチとしては当然放したくないねん。…しやーないやろ。」

「では、ヴァレン某くんに…」その前に、アイズについて話をしておきたいです。ヘステイア様「ふえ？」

……そやな、ドチビには事前に言つとかないとアカンわ。

アイズたんは、他では言えない事情があるんねん…。

「【最強侍従】、お前は外して…いやアイズを見つけたのは、お前たち【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】だったな…。」

「はい、彼女のこともご存知です。もっとも、彼女が目覚めた時は貴方たちのところでした。」

「そうだったな…。ヘステイア様、アイズは…」

ドチビなら受け入れられるやろ。

あの知性のあるモンスター…いや異端児を受け入れたドチビなら。

とうとう改宗かー。

「一ヶ月ぶりだね。ヴァレン某…いやアイズくん。」

「はい、ヘステイア様。」

「改宗する前に、何故改宗したかを聞きたいんですけど？」

「ベルの側にいたいんです。」

「……なぜかな？」

「……ペット？」

ゴン！

「ひうっ！」

「すみません…。その、アイズは少々、いえかなり天然なところがあるので…」

「アイズたん、それはあかんで…」

あの少年を身近に思うのはわかるけど、その例えがペットじゃあかんやん…。

誰が教えたんや！

……あ、ウチやわ。

「あー、ハイエルフくん。ボクは、ロキの子の中で一番多く話したのはヴァレン某なのでわかってるよ。アイズくん、ベルくんはキミのペットじゃない。それはわかっているかい？」

「……え、そんな。」

「そんな世界が終わったような顔をされても……。」

「そこまでの天然と思わなかったわ……。」

……つまり、そのぐらいあの少年を想っているわけやな。

妬いてしまうわー。

「少々時間をいただけますか？このバカ娘に話を「不要です」何だと？」

「【九魔姫】、そんな頭ごなしに叱っては何もありません。私にお任せください。」

「な……リヴェリア、メイさんに任してみよーや」……わかった。」

メイさんは、「ゼウス・ファミリア」のあの連中共を手懐けたんやからな。

どうやるんやろなー。

「アイズさん、貴方はじゃが丸くんが好きですね？」

「え？あ、はい！大好きです！」

「では、他の人がじゃが丸くんを食べるのは許さないのですか？」

「え？それはないです…かな？」

「そうですね。もし坊ちやまがアイズさんのものとしたら、部屋に閉じ込めてご飯も食べさせず寝かさず誰とも話しさせないのですか？」

『…ヘラヤん。』『ヘラだね。』

うわー…メイたん、極端なことを聞いてきたなー。

まあ、アイズたんにとってはおわかりやすいかもな。

「そ、そんな恐ろしいことはしません！」

「貴女が先程言ったのはそういうことですよ？」

「あ…い、いえ！ち、違います！違います、ヘステイア様！」

「あー…、うん。わかっているよ（メイくん、極端だなあ）。」

（極端だろう…それで通じるアイズもアイズだ。もつと座学の時間を設けるべきだった。）

アイズたんがここまでとは思わなかったわー。

まあ、戦闘中毒から大きな進歩と言ってもええぐらいやけどな。

「アイズくん、キミのことはロキ、ハイエルフくん、そしてメイくんから聞いているよ。」

「え？何で…そのメイドさんが？」

「ああ、紹介不足でしたね。私は元「ゼウス・ファミリー」専属メイドのメイです。貴女



をダンジョンで見つけたファミリアの一員です。」

「!!」

「なので、貴女のことをご存知です。『大精霊』アイズさん。」

「……私は、大精霊じゃありません。」

「ええ、そうでしょうね。ですが、貴女の使う風はただの精霊の風ではありません。戦争遊戯で確信しました。貴女の風は大精霊そのものです。数百年、神時代を生きた私が保証しましょう。」

「!!」

……アイズさんは、あの爺と最悪女のところでずっと眠つてきたんや。

起きたのは…あいつらが黒竜に遠征に行つてきてウチらに預けた時や。

……起きてすぐ、数年ずつと泣いてばかりやった。

「今はそれを置いておきましょう。ただ、改宗したからにはこのルールに従ってもらいます。いいですね?」

「は、はい。」

「従わなかったら…」

「し、従わなかったら…?」

「オラリオ中のじゃが丸くん屋台から出入禁止させます。」

「従います！従いますから、それだけはやめてください！お願いします！」

うわー…アイズさんの弱点を見事に突いとるで。

『必死すぎるやろ…。泣いてるで。』

『それはありえんと言いたいが、【最強侍従】のやることだからあり得そうだな…。』

『そうだね、メイくんのやることに不可能はほぼないから…。』

「ひつく…ひつく…。」

「あー、アイズくん。ほら、泣かないで。はい、ちーん。」

「ちーん」

もうドチビに懐いとるな。

この分なら大丈夫やろな。

「……………大丈夫なのか？この娘を改宗させて、迷惑をかけないだろうか？」

「ウチもそう思うけど、今更やん。」

「では、改宗を始めようか。ロキ。」

「ほいほーい。」

手放したくはないけど、しゃーないわ。

「……………アイズたん、ドチビならアイズたんをわかってくれるはずや。ちゃんと言う事を

聞きや？」

「うん。わかっている。ロキと違うから。」「グハアッ！」

「では、ボクだね。……なるほどね。」

「あ、あの…ヘステイア様。」

「アイズくん、キミが何に復讐したいか、何故復讐をするのかは聞かない。それはキミ自身が決済すべきだ。もし、誰かに相談したいならボクに言いおいで。一緒に悩んで考えよう。」

「……少し時間を……いただけますか？」

「ああ、もちろんさー！」

……アイズさんのあのスキルを見て、それかいな。

さすが、あの糞爺と最悪女と友好を持つただけはあるわな。

『……ヘステイア様は神格者だな、本当に。』

『ああ、あの異端児でも保護する女神やからなあ。』

『……そうだな。あの少年とあの同胞だけでなく、ヘステイア様もおられるならまず安心だな。』

『随分と心配やんけ。』

『当然だろう。ロキこそないのか？』

『他の神ならともかく、天界でも上位に入るほどの神格者やからな、ドチビは。』

『何だ、お前もあてにしているではないか。』

『まーな。…ウチではアイズさんの心を解放することができんかった。やから頼むで…ドチビいや、ヘスティア。』

アイズさんの…黒い炎を払ってくれや。

ホンマに頼むで、『悠久の聖火』を司る、オリンポス最強大女神ヘスティア。

## 日常編（改宗組のその後）

## 第245話 九魔姫、口論。

さて、これで改宗は終わったな。

あいつらはヘステイア様と「最強侍従」に引き連れて案内しにいったな。

アイズはすっかりヘステイア様に懐いたな。

大丈夫だろう…多分。

後は…。

「九魔姫」、少しよろしいですか？」

「…気配を出さずに背後に立つのはやめてほしいのだが。心臓が悪い。それで、何用だ？」

「お会いになられたいのでしょうか？」

「ああ。一言言わないと気が済まない。」

「では、ご案内致しましょう。」

「ああ、おい行くぞ。ロ…キはどこだ？」

「神口キなら、あちらのザルド殿と酒を飲みながらお話しておりますよ。」

「あいつめ……ホームでは禁酒だからといって。まあ、いい。帰り際に拾っていくとしよう。案内してくれ。」

「では、こちらでございませう。」

そして、私はあの女がいると思われるところへ案内してもらった。

案内してもらったところには、やはりあの女がいた。

傲慢ぶりは変わらん……。

あの時より更に強くなっているような気がするの、気のせいかな……？

「……何用だ。年増ハイエルフ。」

「久々だな、アルフィア。生きていたとはな。」

「ふん、まだレベル6で止まっているのか。何が魔法種族だ。」

「五月蠅い。大きなお世話だ。」

「お二方、紅茶を飲んで落ち着かれなませ。」

「む……。」「……。」「ふん。」

いかな、この女の前ではつい感情が高ぶってしまう。

ふう……久々に【最恐執事】の紅茶を味わったな。

中々の腕前だ。

さて……

「……何故あの少年のところへ行かなかったのだ。」

「……行けばよかつたと思つている。貴様らがこの程度で止まるとは思わなかつた。」

「……そうだな。それは我らの怠慢と言つてもいいだろう。」

「いやに素直だな？」

「貴様らと違い、こちらは安全優先で進んだからな。若手を育てる優先で自分を高めるのを後回しにしたためだ。」

そうだ。犠牲を増やしたくはなかつたのだ。

だが……それは我らが前へ進まないことになつてしまつた。

「なるほど。だからダンジョンの子がレベル6になつたのか。」

「そのダンジョンの子はやめろ。アイズという名がある。だが……あの子はなりふり構わず強さを求めてきた。その結果だ。」

「それが普通だ。〔ヘラ・ファミリア〕にとつてはな。」

「そうだろうな。だが、我らにそんな真似はできなかつたのだ。」

「言い訳にならん。」

「ああ、ならないとも。最恐と言われる貴様らと同じ真似はな。」

「……ふん。」

最恐と言われるだけあって、犠牲を犠牲と思わないのがあったからな。

それだけは真似したくはなかった。

【フレイヤ・ファミリア】の【戦いの野】は、【ヘラ・ファミリア】を真似たのもあったがな。

一応、聞いておこう。

「ベル・クラネルは…お前の妹メーテリアの一人息子なのか？」

「当たり前だろう。見てわからんのか？」

「あの時、お前が魔法で私を吹き飛ばしただろうが。」

「その程度で記憶が飛ぶのか？もう痴呆症か？【戦場の聖女】に診てもらえ。」

「つ!!」「喧嘩なら買うぞ？」

「落ち着かれないませ、お二方。お嬢様もいちいち挑発しないでくださいませ。」

何で、こいつは私を一々怒らせるのだ!?

…王族妖精と見ないのは、アイナとこいつぐらいだ。

だからだろうか…。

「お嬢様、【九魔姫】は坊ちやまがレベル1の時に幾度か世話になっておりました。」

「(…ちっ…)うちの義息子が世話になった…。礼を言う。」



こいつが私に礼を言うとはな……だが。

「……いや、世話になったのはこちらもだ。」

「何だと?」

「アイズのことだ。」

「ベルはやらん。」

「そこまでは言っていないだろう……(本当に溺愛しているのだな、あの少年を)。先程も言ったが、アイズはなりふり構わず強くなった。だが、精神的にはまだ子供だ。強くなることしか考えてなかった。」

アイズは……変わった。

「それとベルと何の関係があるのだ?」

「アイズはあの少年と会った時から変わったのだ。半年前までは私の言う事も聞かずダンジョンへ潜り、ただモンスターを倒すことしか考えていないぐらいにな。アルフィア、お前でもダンジョン以外に料理や服などを嗜むぐらいはあったはずだ。」

「ヘラの方針だ。あれもこれもやれ、と言われた。そうだろう、セバス?」

「そうでございませぬ。ですが、アイズ嬢は行き過ぎでございませぬ。言うなれば修羅そのものでございませぬ。」

「修羅、か。そうだな、言いたくはないが一言でいうとそうだった。だが、あの少年と会

うことでアイズは修羅から抜けつつあったのだ。」

アイズがあのおまま行けば、黒い炎に飲まれていたのは確実だった。

「……お前はその娘を躰けなかったのか？」

「したさ！何度もな！料理を嗜む楽しさも、服を選ぶときめきもな。だが、あの娘はそれも全て拒否しモンスターを狩るのみだった！」

「…異常だな。何故だ？」

「お前も知っているだろう。アイズは…ダンジョンの奥深くにいた。アイズが目覚めたのはお前たちから私達の手に置いてからだ。アイズは…黒竜を憎んでいる。」

「!!」

驚くだろうな、アイズが黒竜と関係があったことを。

アイズが目覚めたのは「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が黒竜討伐に失敗した時だった。

その後ずっと泣いてばかりで、私達がなだめても聞こうとはしなかった。

「父母を奪われたことだな。アイズはその憎しみのみで生きてきた。あれでもかなり躰けたのだぞ？7年前のアイズ、覚えているだろう？」

「まるで獣だったな。」

「ああ、そうだ。あの時からかなり躰けて今ようになったのだ。苦労したのだぞ？」

「お嬢様の記憶から見ますと、かなりの進歩ですな。獣からようやく人間になったような感じですね。」

そうか、【最恐執事】は【ヘラ・ファミア】の眷属……いや系譜を持つものなら記憶を読み取れるのだったな。

なら、当時のアイズを知っててもおかしくはないか。

## 第246話 九魔姫、驚愕。

「……そうか。それで、ベルと何の関係があるのだ？」

「その人間から少女に変えたのが、お前の義息子だ。」

「……何だと？」

「半年前、アイズはあの少年をミノタウロスから救った時からあの少年を気にし始めたのだ。今までにない反応で私達も驚いた。」

「半年前、『豊穡の女主人』でベートが暴言を吐いた翌日にアイズがダンジョンへ潜らなかったことに驚いた。」

その理由を聞けば、あの少年のことだった。

今、思い返してもアイズはダンジョンやじゃが丸くんよりも、あの少年を気にかけていたことにもっと関心を持つべきだったな。

「そうでございませぬ。アイズ嬢は坊ちやまを一目で見た時から気に始めました。アイズ嬢は気づいておられないかもしれませんが、一目惚れというやつですね。」

「何？」 「何だと？」

は？ひ、ひ、一目惚れだと!?

あのアイズが!?

「【九魔姫】、いえ、ここではリヴェリア嬢と言っておきます。それは、メイと意見が一致しています。アイズ嬢は今の今まで恋はしたことはありませんね?」

「ああ、幾度か異性を紹介しようとしたが、じゃが丸を選ぶくらいだった。」

「なら、確定ですね。」

「ちよ、ちよつと待つて欲しい。それは確かなのか?」

じゃが丸くんやダンジョンのことより、あの少年に一目惚れだど!?

……そうでなければ、あの少年を気にしないわけがないな。

妙に納得した。

「はい。アイズ嬢はその時から何か変わったことはありませんかな?」

「ああ、多くあった。私達がいくらやつても駄目だったのをあの娘は反応したのだ。信

じられないほどにな。」

「…おい、セバス。それは確かなのか? 出任せじゃないだろうな?」

「お嬢様、確かでございます。リヴェリア嬢、アイズ嬢は何かと坊ちやまを気にかけているのではないですか?」

「ああ、そうだ。私達が今までやったことは何なのだと思ってくらいな。」

「……自覚していないのは何故だ?」

それはそうだろう。

恋のこの字も知らないのに、それを自覚するには無理がある。

∴【最恐執事】も言つてたが、ようやく少女になつたばかりなのだぞ？

それに、あの子は∴。

「今の今まで、剣しか握つたことがないあの娘にそれを自覚しろというのは無理があるだろう∴。」

「ええ、ですがまだ精神的に幼いですね。」

「ああ、そうだ。だが、ここ最近は女性らしさを出し始めている。〔ロキ・ファミリア〕副団長としては懸念すべきことだが、私人としては嬉しい。」

あの少年を気にするようになってから、身だしなみや服などを気にするようになった。

レフィーヤやティオナの影響もあるかもしれないが、思い返せばあの少年への気があつたかもしれない。

「他の奴にしろ。」

「無茶を言うな∴あの娘が今までなかつたことだ。叶えてやりたい。」

『お嬢様、他の方にしますと坊ちやまの「憧憬一途」が消失してしまいますぞ。』

『くそっ！何故あの野生児にベルをやらなければならんのだ。』

『逆に考えてください。こちらに入ったからには坊ちやま好みとして教育すればいいのです。』

『ちつ……。』

………?

何を話しているのだ？

「おい、何をこそこそと話している。」

「五月蠅い。貴様にわかるか？あんな野生児に私の愛しい義息子をやらなければならぬいのを。」

「野生児……まあ、お前から見ればそうだろう。そんなに愛しいなら、7年前に行けばよかつたのに……。」

「五月蠅い。」

野生児か……7年前のアイズは正にそうだった。

ここまで矯正するのに大変だった……。

副団長としても、アイズの保護者としても。

そして、聞かなければならないことがある。

「それはそうと、ベル・クラネルについて詳しく聞きたい。」

「何だと？」

「そうだろう？ 私…私達が手塩にかけて育てた娘が気になる相手を知って何が悪い？」

「貴様に聞かせる話は「では、坊ちやまについてお話ししましょう。」…おい、セバス。」

……本当にあの少年を溺愛しているのだな。

だったら…いや、たればを言えばきりがない。

それを言うなら私も人のことが言えん。

「お嬢様、坊ちやまの味方は多い方がいいのです。「ロキ・ファミリー」の愚物の小人族や酒しか考えていないドワーフよりはマシでございます。」

「あいづらへひどい言われようだな……。まあ、否定はしない。」

「……そういえば、私もベルがオラリオへ来て半年間のことは聞いたが、その前のことはまだ詳しく聞いてないな。」

「では、そこからお話いたしましょう。」

は？…ああ、そうか。お前は最近この時代へ来たばかりだったな。

……丁度いいな。

信じられん……。あのゼウスによって教育されてきたというのに。

【傑物】や【暴食】を除けば、例外なくゼウスの影響を受けていた。

特にあの少年の父親はひどかった。



なの…。

「あの狒々爺め、絶対に許さん。余計なことをベルに吹き込みやがって。」

「信じられん…。あのゼウスに14年間育てられて聞くに耐えないことを教えられて、今でもなお何故そんな純粹無垢でいられるのだ？もう偉業になるのではないか？」

「そうだろう、そうだろう。」

ベル・クラネルのことを褒めると上機嫌になったな…。

こいつがここまで親馬鹿と思わなかった。まあ、それは私もだが。

## 第247話 九魔姫、依頼。

いい機会だ。

「ベル・クラネルに遭った、「ロキ・ファミリア」のやったことについて深く謝罪する。」  
「……うちの義息子が世話になったから気にするな。それにあの無乳に余計なことを吹き込まれなくてよかったと思う。」

「それは私もそう思う。アイズをロキに近づけさせるべきではなかった。お陰でアイズにいらん知識をつけられた。矯正するのに疲れた……。」

「……お前も苦労しているのだな。」

一段落したと思つたら、アイズの発言でロキの仕業と思うのがよくあつた。

ロキの折檻↓アイズの矯正教育↓ロキの吹き込み↓アイズの発言……で、いたちごっこだつた。

疲れた……。

だが、ここ「ヘステイア・ファミリア」なら問題ないだろう。

ヘステイア様も常識をわきまえており、貞操観念が高い。

我々エルフにとっていい環境かもしれん。

「ロキ・ファミリア」の最古参メンバーじゃなかったら、改宗を間違ひなく希望していただろう。

いや……やめよう。

私が改宗すると、多くのエルフが「ヘステイア・ファミリア」へ雪崩れ込むかもしれない。

そこまでヘステイア様に迷惑をかけられん。

「ああ。だから、「ヘステイア・ファミリア」主神ヘステイアが羨ましい。あんな寛大な女神がいることを今の今まで知らなかったのが恥ずかしい。」

「…神ヘステイアは、あのヘラをいい子というぐらいだぞ?」

「何……だと!」

あの…最強最悪女神のヘラを…いい子だと!?

あ、あり得ない…。

何て寛大な心をお持ちなのだ……。

ロキとは、本当に比べ物にならないな。

「さらにあのクソエロ神ゼウスのことを、困った子扱いするぐらいですからな。」

「そうか……神は運次第というが、ベル・クラネルは当たりを引き当てたようだな。」

「それは私も深くそう思う。…メーテリアが引き寄せてくれたかもしれない。元々、神

ヘステイアがねぐらにしていた教会は、私達姉妹の思い出のところなのだ。「アポロン・ファミリア」如きに潰されたがな（絶対に滅ぼしてやる）。」

「そうだったのか……。なら、アイズとベル・クラネルを引き合わせてくれたのはお前の妹かもしれないな。」

「……余計なことしなくてもいいのと言いたいが、あのスキルが発現したと考えるとそう考えざるを得ないな。はあ……。」

「あのスキル？」

あの少年の、考えられない成長速度と関係あるのか？

是非聞いてみたい……！

「……いつなら教えてもいいだろう？セバス。」

「そうでございませぬ。リヴェリア嬢、坊ちやまがここまで急成長したのは、あるスキルでございます。」

「いいのか？私に教えても。ここで見聞きしたことは一切他言しないと約束しよう。」

「ふん、その時は私の魔法で滅かせてやる。」

「では、そのスキルとは……。」

そして、私はあの少年に発現した【憧憬一途】について聞いた。

【憧憬一途】のきっかけがあのでアイズとはな。

アイズがあので少年を気にし始め、あので少年はアイズに一目惚れしスキルが発現したとはな。

……お互い一目惚れなのか。

ぜひ叶えてやりたい。ラウルとアキのように相思相愛になつてほしい。

「……運命というのはあるものだな。アイズがベル・クラネルと会つたことにより英雄の道を最短で駆け上るとはな。」  
「全くだございますな。」

「美の神のイシユタルやフレイヤの魅了が一切効かないだど？とんでもないスキルだが、純粹無垢なベル・クラネルしか扱うことができんな。」

「そうだろう、そうだろう。」

……こいつ、変わったな。

あので少年のこととなると、非常に機嫌がよくなるな。

まあ、あので娘……メーテリアに生き写しなら仕方がないだろう。

ここへ預けるには、やはり【最強侍従】と【最恐執事】の協力が不可欠だ。

アイズを……少女から恋する乙女に変えるためにも。

「【最恐執事】……いやセバス殿。アイズをよろしくお願いしたい。私ではあので娘に対して

どうしても甘くなってしまう。」

「もちろんお引き受けいたします。メイも承知済みです。」

「……私も機会あれば、声をかけよう。」

「すまん。」

「気にするな。」

こいつがこういうことを言うとはな。

義息子の意中の相手がアイズと知れば、そうせざるを得ないだろうな。

あの少年に嫌われたくないならな。

「では、リヴェリア嬢は「ヘステイア・ファミリア」ホームに出入自由と皆様へ伝えましょう。また、改宗されたメンバーについての報告書を週一に提出しましょう。」

「それは非常に助かるな、頼む。」

「カップが空になりましたな、紅茶を淹れましょう。」

出入り自由はともかく、週一の報告書は非常に助かる。

それが彼らによるものなら、正確だろう。

ふう……、ようやく一安心できる。

ドドドドドドドド！

「何だ？この音は？」

「……騒がしいな。またあの小娘共か？」

「おかしいですな？アリーゼ嬢はダンジョンへ先程行ったばかりですが？」  
嫌な予感がする……。

バーン！

「リヴェリアあああ、ベルが……ベルが……。」

「お、おい！アイズ！ノックをしてから入れと……。」

「ベルに何があつた？」

何があつたというのだ!?

「【白妖の魔杖】に寝取られた!」

「は……。」

……こいつは何を言っているのだ？

## 第248話 劍姫、衝撃Ⅱ

ヘステイア様は本当に女神様だ。

デメテル様も優しかつたけど、ヘステイア様はそれ以上。

うん、やはり改宗してよかつた。

けど…メイさんは怖い…。

強い上に、リヴェリアより教え方がうまいけど怖い。

気をつけよう…。

何より、じゃが丸屋台から出入禁止されたくない！

「こちらが大浴場です。男風呂と間違えないようにしてくださいね？」

「大浴場…、私達…いえ【ロキ・ファミリア】よりも広いですね…。」

「わ…すごい。かなりこだわっているねー。」

「檜風呂…。いいですね。」

広い…気持ちよさそう。

「さて、これであらかた回りましたね？何か質問がある方は…はい、テイオナさん。」

「アルゴノウトくんはこの部屋ですか？」



あ、それ私も知りたい。

「ちよ、ちよつと！ティオナさん！不潔ですよ！」

「ティオナくん…、それを聞いてどうするのかな？」

「アルゴノウトくんは英雄譚について詳しいので、それについて色々と話したいです！」  
「嘘は言つてないね…。そうかー、君もか。」

「え？他にもいるんですか!？」

「あ、うん。いるよ。君たちを出迎えた春姫くんとアーデイくんも英雄譚についてかなり詳しいよ？ベルくんとよく英雄譚について語り合っているよ。」

「わー！同志が増えたー！ロキんそこにはいなかったから、嬉しい！」

「うんうん、友好が深まるのはいいね。…それはそうと、レフィーヤくん？君は何を想像してたのかね？」

「え？あ、その、すすす、すみません！」

「…まあ、いいけど。不埒なことは考えないようにね？一応、ボクは処女神だからね。そういつたことは禁止だ！」

不埒なことつて…何？

（ヘステイア様はロキと真逆のため、エルフである私にとつては過ごしやすいですね。…リヴェリア様もこちらへ改宗された方がいかもしれません。）

「そうですね。教えたほうがいいですね。団長として相談もあるかもしれないですからね。」

「え？あ、はい！そ、相談です！」

「嘘は言つてないけど…何の相談かは気になるね。」

「まあ、いいではありませんか。それに後で坊ちやまについて詳しく説明します。」

詳しく…？興味ある。

「こちらに坊ちやまがおられます。今は勉強中ですのでお静かに。」

「ああ、早速やっているんだ。ヘインくんは。」

「ヘイン？」「フレイヤ・ファミリア」の「白妖の魔杖」ですか？何故ここに？」

「まだオラリオへ周知してませんが、3日前に「フレイヤ・ファミリア」は解散しました。」

「「え?!」」

「「フレイヤ・ファミリア」ホームは爆破しました。」

「「ば、爆破?!」」

「そして、元「フレイヤ・ファミリア」構成員は、「ヘステイア・ファミリア」を含む傘下ファミリアへ改宗しました。」

「「早すぎる…。」」

は、早くない…？

あの【フレイヤ・ファミリア】が…。

「【ヘステティア・ファミリア】への改宗は、【白妖の魔杖】【黒妖の魔剣】【炎金の四戦士】  
【……（ヴァン）】、神フレイヤの元従者シノスさんとルーゼさんです。」

「へー！」

「では、ちよつと見ましようか。」

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「「!?」」

「んぎやつ！」

「この愚兎め！この問題すら解けんのか！これは先程の公式を使えばすぐに解けるだろう！」

「で、でも師匠！これがダンジョンの何の役に立つのですか？」

し、師匠？

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「びいっ！」

「戯けが！リリルカ・アーデやエイナ・チュールに全部任せる気か！貴様は団長だ！それ

ぐらいの計算ができて当然なのだ！目の通し方も覚えとけ！」

「は、はい！師匠！…あれ？メイ、神様？あ、アイズさんたちも？」

な、何で…【白妖の魔杖】が…？

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「ぎやつ！」

「集中しろ！この愚兎め！私がいる限り、オツタルのような脳筋にはさせません！さつさと問題を解け！」

「は、はい！」

ベルが…嬉しそうに従っている…。

そんな…ベルの師匠は私なのに…。

「…まあ、ヘディンくんの言うことも間違っていないね。折檻方法は問題あるけど、ベルくんが怪我してないから、まあいいかな？」

「はい、手加減も絶妙です。坊ちやまの師匠としては問題ありませんね。いい方を得ました。」

!?

ヘステイア様も…メイさんも…【白妖の魔杖】をベルの師匠として認めている…？

で、でも！私はあそこまでひどくしてない！

そ、そうよね？みん…な？

「…：やり方は多少問題がありますが、団長としては事務作業ぐらいはこなさなければいけないですからね。私もフォローした方がいいかもしれません。」

「そ、そうですね（私も勉強しておきましょう…リヴェリア様がないからと言って楽しんではいけませんね！）」

「んー？そんなひどいことはしてないみたいだし…。フィンやリヴェリアもやってたし…。あたしも勉強してみようかな？」

!?そんな…みんな…。

私の…ベルが「白妖の魔杖」に取られた…。

これが…ロキのいう寝取られ…？

リ、リヴェリアに聞かないと！

ダツ！

リヴェリアは…あつち！

「ア、アイズさん!?」

「ア、アイズ!?」

「ちよ、ちよっと！アイズくん！」

「(嫉妬ですか) まあ、あちらの方角はセバスがいるから大丈夫でしょう。」

「あちらの方角? あ…うわー、虎穴に飛び込んだか!」

「虎穴?」

「まず各団員の部屋へ案内しましょうか。アイズさんは後でします。」

「は、はい! (虎穴って…何!?)」

うん! こつち!

この部屋!

バーン!

「リヴェリアあああ、ベルが…ベルが…。」

「お、おい! アイズ! ノックをしてから入れと…。」

「ベルに何があった?」

「【白妖の魔杖】に寝取られた!」

「は?」

## 第249話 千妖精、驚愕。

アイズさん……どうしたんでしょう？

っと、いけませんね！

こちらのあいさつ回りに集中しないと。

「まず、ここ本館と別館があります。そう、あちらが別館です。あちらは男性団員が、ここ本館にはヘスティア様と女性団員、そして坊ちやまです。」

「あの……質問ですが、ベル・クラネル……いえ団長は男性なのであちら別館ではないでしょうか？」

「何を言っているのですか。団長が本館にいないと話にならないでしょう。」

「それはそうですが……団長は男性なので、その……あの……不埒なことをしないと限らないのでは？」

18階層の覗きの件、私は忘れていませんよ！

神ヘルメスの囁きがあつたとしても、私は誤魔化されませんよ！

「レフイーヤくん……君、煩惱にまみれてないかい？」

「い、いえ……一般的なことです！」

「あたしは別にいいよ。」

「ベルさんと少し話しただけです、そこらへんの下衆な男性ではないと思いますよ？」  
「そ、そんな！アリスアさんまでも！」

アリスアさんは、こつち側だと思つたのに！

「まあ、レフィーヤさんが気にかかるのも当然です。そもそも坊ちやまは未精通なのでできるわけがありません。」

「え？」「へ？」「はい？」

み、未精通？

え？まだなのですか…？

「そうだよ。ベルくんは…まだ子供で耳年増なだけなんだ。」

「…なるほど。耳年増なのは、自伝の通り大神ゼウスの影響ですか。」

「あ、うん。そうだよ（もうそこまで浸透しているのか…。ゼウスはもうオラリオを敵に回したね。ファンクラブが世界進出した今、世界を敵に回すのは時間の問題かもね）。」

「そ、そうですか」

まだ未精通だったのですか…あの下着を至急買わなくてもよかつたんじや…。

はっ！私は何をがっかりしているのですか！いけません！

ううー！あの下着が見つからないうちに即刻処分しないと…。



買ったお店の店員さんが、サムズアップしてくれたのに！

………いつか使うこともあるので保管しておきましょう、ええ！

(レフイーヤさんはかなり坊ちやまに夢中ですね。アイズさんのためです！とかいつて襲う可能性が高いですね。まあ、釘を刺しましたから大丈夫でしょう。)

アイズさんが、ベル・クラネル：いえ団長の魔の手にかかる前に私が代わりに犠牲になろうと思っただけです！

決して、絶対に、ベル・クラネルに抱かれないと思つたわけではありません！  
ええ！そうですとも！

「へっくしー！」

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「んぎやつ！な、何をするのですか！師匠！」

「黙れ、ここの計算が間違っているだろうが！この愚兔が！」

「へ？…あ、本当だ。」

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「あ、本当だ、ではない！何回間違えたら気が済むのだ！」

「ひいつ！す、すみません！」

（…何だかんだと言つて、少しは間違いが少なくなつたな。…褒めるのは彼女たちに任せよう。）

「坊ちやまの部屋はこちらです。」

「へー！」

「なるほど、こちらなのですか。」

「ふむふむ……。」

この部屋ですか。私達の部屋から…そんなに遠くありませんね。

はっ！何を考えているのですか、私は！

「君たちに言つとくけど…、ベルくんへの夜這いは絶対に駄目だ！いいね？」

「え？は、はい！」「はーい！」「もちろんですね。」

「…レフィーヤくん、君は要注意だね…。嘘を言っているよ。」

「え？」

「そそそそ、そんなことはありませんよ！」

「……ベルくんへ手出しすると恐ろしいことが起こるからね。やめることをおすすすめす

るよ。」

「「恐ろしい」と？」」

「すぐに分かるよ……。」

恐ろしいことって……なんですか？

（夜這い禁止ですか。添い寝禁止と言っていないから問題ないでしょう。もし神ヘラがここへ居付いたら、ヘステイア様に明かしましょう。神ヘラと添い寝できるのは、神ヘラをいい子扱いするヘステイア様しかないでしょうね。）

「では、入ってみましょう。」

ガチャ

「「え？」」

そして私達はなし崩しに、ベル・クラネル……いえ団長の部屋へ入りました。

本棚と机にベッドだけですか……。

意外とキレイですね。

本棚の本をチェックしないと……見事に英雄譚ばかりですね。

「うわー！英雄譚の本がこんなにあるー！」

「あー、それは「アポロン・ファミリア」のものだね。ベルくんが読んだ英雄譚はベルく

んの実家の方にあるみたいだよ。」

「え？　そうなのですか？」

「うん。いつか、村へ帰ってその英雄譚の本を持って帰りたいと言つてたよ。……でも

ベルくんは第一級冒険者になったんだ。オラリオから出れるかなあ？」

「大丈夫でしょう。きちんとギルドへ申請すれば問題ありません。」

「あつ……。そ、そうだったね。」

……怪しい本はありませんね。

むむむ……いけませんね。

年頃だというのに、そのような本がないというのは。

『レフイーヤさん。』

『ひやつ！　な、何でしょうか？』

『貴女が思っているような本は坊ちやまは一冊も持っていません。それ以前に、そのような本の存在を知りません。』

『は？　し、知らない？』

『ええ。坊ちやまのお祖父様は実戦重視でしたから。』

『そ、そうですか。』

（かなりムツツリですね、レフイーヤさんは。意外といえば意外ですが。）

「では、皆さん。現団員の方と顔合わせに行きましようか。」

「あれ？アイズはー？」

「アイズさんは後でしていただきます。では行きますよ。」

「「あ、はい！」」

アイズさん……どこへ行ったんでしようか？

## 第250話 千妖精、紹介。

顔合わせですね。

ベル・クラネルは「白妖：いえ、ヘディンさんのスパルタ教育中ですから、来ないです。」

そういえば、ベル・クラネル以外の団員とあまり話したことはないですね…。

改宗したからには仲良くしたいですね！

「さて、坊ちやまはここにいる方全員顔合わせはしていますが、「ロキ・ファミリア」そして「フレイヤ・ファミリア」改宗組の皆様は、坊ちやま以外の「ヘステイア・ファミリア」団員へはまだのようですので、これを機会に顔合わせしたいと思います。」

「「はいー」」

メイさんは何者なんだろう？

「ここ最近ではいませんでしたよね？」

「ボクは口出ししないから、進めてねー。メイくん頼むよ。」

「かしこまりました。まず、「ヘステイア・ファミリア」参謀のリリさんですね。彼女はまだ15歳でレベル2ですが、「ロキ・ファミリア」の「勇者」以上の頭脳をお持ちです。」

え？私と同じ年で、団：いえ【勇者】よりも!?  
す：…。

「あの、メイ様。フィン様以上の頭脳は言いすぎじゃ…。」

「ほう、異端児騒動で【勇者】の裏をかき混乱させた貴女が？クノツソス第二次侵攻戦で【勇者】から2面の指揮権をもぎとり指揮した貴女が？先日の戦争遊戯で【勇者】を早々と脱落させ、多くの指揮を飛ばし完全勝利を収めた貴女が？」

「うぐっ!」

「え？クノツソスの指揮は団長：いえ【勇者】ではなかったのですか？」

全部、団長：いえフィンさんがやっていると思っただけです…。

ガレスさんとリヴェリアさんのところを彼女が指示していたのですか!?

ど、どうやって!?

「はい、そうです。百聞は一見にしかずと言いますので、リリさん、変身してくれませんか？」

「あ、はい。分かりました。」

「貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの。」

【シンダー・エラ】

えっ…短文詠唱で変身…？

すい)…。

「「!?」」

「だ、団長…いえ【勇者】に瓜二つ…。」

「うわー…すごいなー！ティオネでもわからないんじゃないかな？」

「では、リリさん。解除を。」

「はい。」

【響く十二時のお告げ】

「ということです。皆様、おわかりになりましたでしょうか？」

「すごいですね…。短文詠唱で化ける上に【勇者】に比肩するほどの頭脳を持っているとは。」

「攪乱させる上に指揮能力も高く、頭の回転も早いです。坊ちやまの活躍はリリさんが支えていると言っても過言ではありませんね。」

…：…ベル・クラネル程ではありませんが、すごくないですか？

短文詠唱で化けることができ、フィンさんと互角の頭脳を持っているとは…。

参謀と言いい張るだけではありませんね！

「あの…あまりそういうことを言うとりりの立場が…。」

「リリさん、貴女はもうしががないサポーターではありません。オラリオで一、二を争う指



揮官です。自信をお持ちなさい。」

そうですね。

【ハスティア・ファミリア】はもうオラリオ最強派閥となったのですから。

「そうです、姫。」

「謙遜しすぎです。姫。」

「姫はもうあのいけ好かない【勇者】を超えています。」

「我々が保証しましょう。あの【勇者】と違うのです、あの【勇者】とは。」

「「姫？」」

姫？

「おい、リリスケ。姫ってなんだ？」

「春姫と同じですね！」

「ええと…私達も姫と言わなければならぬでしょうか？」

「リリ姫…呼びやすいですね。」

「やめて下さい！あの方々が勝手に言ってるだけです！」

姫って…何ですか？

リリルカ・アーデって本当は身分を隠している偉い人？

「姫が駄目なら、フィアナ様にちなんで聖女…」

「アミッド様がいるじゃありませんか！却下と言いましたよね!?グレール様！」

「では、殿下か陛下に…」

「リリは王族や貴族じゃありません！何度言ったらわかるのですかあ!?ドヴァリン様！」

「じゃあ、フィアナ様にちなんで団長に…」

「団長はベル様です！ペーリング様、いい加減にして下さいいいい！」

随分、打ち解けていますね…。

それに私から見ても【炎金の四戦士】は全員同じに見えるのに、見分けられるんですね…。

【炎金の四戦士】は【勇者】に対してそっけない態度だと言うのに…。

「言い忘れていましたが、【炎金の四戦士】はリリさん直属部隊となりました。これで今まで以上に戦略の幅が広がることでしょう。」

「フィン様の方がいいのでは、と言ったのですが…。」

「姫、あいつを【勇者】と我々は認めません。」

「姫、あいつはただの目端がきく詐欺師です。」

「姫、あいつはベルと違い打算的に動いています。」

「姫、あいつは一族の再興と謳いながら【勇者】という称号を利用しているだけです。」

ひどい言われようですね…。

同じ小人族だというのに、何故仲が悪いのですか？

「ああ！もう！好きにして下さい！」

「心得ました！姫！」

「ところで、アルフリッグさん。頼んでおいたことはできましたか？」

「はっ！こちらです！」

「炎金の四戦士」の後ろにケープをかけていた何かがありました。

それを外すと…衣装？

「…ちよつと待ってください。何ですか？これは。」

「リリさん、貴女の衣装です。」

「なっ…。」

「わあ！可愛くてかっこいいです！」

「これはいいですね！リリ殿にすごく似合うと思いますよ！」

「うん…、いいじゃない？【ヘスティア・ファミリア】の参謀らしいですよ！」

「リリさん、貴女は自らを見下しすぎです。それでは坊ちやまの横に並ぶにはあまりにも貧相すぎます。私が用意してもいいのですが、小人族として用意した方がいいと判断しました。アルフリッグさんを中心に【ヘルメス・ファミリア】のメリルさんにも協力

していたいただきました。」

「メリル様ああああ！」

なかなかいいデザインですね。

今の服よりはいいと思いますよ。

「姫。スリーサイズはメリルしか知りませんのでご安心を。」

「当然です！」

「姫、我々は素材と先祖から伝えられた聖女フィアナの衣装デザインを用意しただけです。」

「な……。」

「姫、これは愚者とミユラーによって仕立て上げられた一品です。」

「愚者様ああああ！」

「姫、こちらは耐異常や魔法耐性がございます。」

「何を付与しているのですかあああ！」

「いや、リリスケ。これは俺から見てもなかなかの逸品だぞ……。」

いいじゃないですか？

サポーターのような格好をすると、私達が見下されることもありますからね。

「そして、ゴライアスのフードを着れば防御力が格段と上がりますね。」

「……そんな大それたもの着れませんよ。」

「それを着ますと、坊ちやまが見惚れるかもしれませんよ?」

「仕方ありませんね! せっかく皆様が作ってくれたものですから、着ないといけませんね!」

「チヨロすぎるだろう…。」

ベル・クラネルへ本当に心酔しているんですね…。

少し気になるのですが…。

「あの…質問ですが、何故そこまで【勇者】を嫌うのでしょうか? なんだかんだと言って、

【勇者】はレベル6ですが?」

「確かにそうだ。奴は我らより上のレベル6だ。」

「だが、我らは認めない。」

「奴は勇者ではない、己の名声をあげるためのレットルにすぎない。」

「勇者とは全てを救う者でなければならぬ。奴は全てを救ったか? いいや、奴は常に打算して救う命と救わない命があつたはずだ。そうだろう? 元【ロキ・ファミア】。」

「……確かにそうです。ですが、そうしなければ、大きな被害になつていたはずです!」

【勇者】はそういうところがあつたのは認めます。

けど、それは私達を助けるためで無用な被害を失くすためのはずです!

「ベルを見ろ。」

「異端児騒動や、クノツソス第二次侵攻戦を見ろ。」

「この前の戦争遊戯を見ろ。」

「ベル、または死者が出てもおかしくはなかった。なのに最小限の被害で済んでいる。それは姫による指示だ。」

「!!」

（（それに姫に従うと何か落ち着くし、しつくりと来る。前世では上司部下の関係だったかもしれないな。））

そのリリさんはおそらく、団長にホの字のはずです…。

一体どれだけいるのですか！あのヒューマンには！

## 第251話 純潔園、蒼白。

レベル2といえ、リリさんはすごいですね。

団：「勇者」とレベル6とかけ離れています。年齢からみてまだこれからですね。

しかも頭脳で互角なら、数年もすれば「勇者」を超えるのではないでしょうか？

「さて、次はヴェルフ・クロツゾさんですね。レベル2で、「ヘスティア・ファミア」の鍛冶を担当しています。」

「よろしく頼む。あー、家名は呼ばないでくれると助かる。」

「皆さんもご存知のように彼の先祖はラキアに魔剣を譲りエルフの里を多く焼きました。ですが、それはヴェルフさんではないです。ここにおられるエルフの皆さんは当然おわかりですね？」

ビクッ。

すみません……、わかってなかったのがここにいます…。

レフィーヤ、こつちを見ないで下さい。

「…当然。ヴェルフにそんなことを言う同胞は斬る…。」

「おい、ヘグニ。そこまでしなくていいぞ。」

「…友を侮辱するやつは許さない…。」

だ、大丈夫でしょうか…？

斬られませんよね？

「当然でしょう。ヴェルフさんは直接エルフの森を焼いた本人ではないでしょう。そこを突くのは筋違いというものです。悪いのはラキア、神アレスですから。」

うぐつ！……言葉ありません。

なのでテイオナにレフリーヤ、こつちを見ないでくれませんか。

「うん、でもそれで精霊から見放されて魔剣が崩れたんだよね？どうしてヴェルフさんに？」

そうですね、それが知りたいですね。

「さあな、いきなり発現したからわからないな。まあ、それで周りが魔剣作れと言われ辟易したからラキアを出したんだ。……数ヶ月前のラキア遠征で、親父と爺が来たのは驚いたが、一応解決したから気にするな。」

え？そ、そうなのですか。

私も人のこと言えませんね。リヴェリア様に仕えたいために森を出たのですから。

ラキア遠征の裏でそのようなことが起こったのですか…。

「そうですね。そういえば、彼らは今投獄されていますね。」



「!!…頼む、本当に頼むからあいつらを改変しないでくれ!」

「……………」

「おい…まさかもう既にしたんじやないんだろうな? してないと言ってくれ!」

「今、思い出したところです。彼らが抜けていましたね、と。」

「本当に頼む。あいつらはそつとしておいてくれ…。」

「そうですか。残念です。」

「(マジでやる気だったんだ…)」

改変…? フリユネ・ジャミールのように?

まあ、自分の父と祖父を改変されたら気が気でないでしょうね。

「さて、アリシアさんはどう思います?」

「いえ…その。…18階層では大変申し訳ありませんでした…。貴方の事情も知らずに失礼な発言をしてしまったことを許して下さい。」

「あー、そんなことあったな。いや、気にしないでくれ。よくあることだしな。」

「同胞よ…、貴女はそんなことを言わないと思ってたのに…。」

「同胞…、それは駄目でしょう…。」

「アリシアさん…あの時すぐに謝っていけばよかつたんじや…。」

「まあまあ…、事情を知らないから仕方がないかと…。」

うう…：同胞からの非難が痛いです…。

エイナさん…：感謝します！

「ヤマト・命さんです。彼女はレベル2ですが、偵察や索敵に長けています。同じ仕事である【ヘルメス・ファミリア】のルルネ・ルイーさんより技術は上です。」

「あの…：さすがにレベル3より上とは言い過ぎではないでしょうか？」

「いいえ、命様。リリから見ても【泥犬】よりは上ですよ？ レベル差における実力は別にして。」

「そ、そうですか。」

「そうなのですか？ レベル2にしては侮れませんね。」

「そうだ。【絶影】。」

「お前の索敵能力は厄介だ。」

「お前の重力魔法はあのバカ犬にない。」

「フレイヤ様の魅了騒動前にお前を先に潰したのは、お前が逃げられる可能性が高かったからだ。」

戦争遊戯でもガレスさんを縫い止めたのは彼女でしたか。

なるほど…：元【ロキ・ファミリア】にもラクタたちがいましたが、索敵能力やあの重力魔法はありませんでしたね。

「また彼女は元〔タケミカヅチ・ファミリア〕構成員というだけあって、それなりの武を修めています。〔ロキ・ファミリア〕でいいますと、〔超凡夫〕に近いと言ったほうがわかりやすいかもしれませんね。」

「「ああ！」」

ラウルさんのような万能で、ラクタたちのような偵察や索敵能力があり、重力魔法を持つ…。

…確かに有能ですね、驚きました…。

ベルさんの存在が強すぎて、彼女が目立たないのでわかりませんでした。

いえ、その方が彼女にとってやりやすいかもしれませんね。

「サンジヨウノ・春姫さんです。レベル1ですが、それを補うほどの妖術をお持ちです。既に知っているかもしれませんが、神イシユタルが狂喜したレベルブーストの妖術をお持ちです。今のところは連続で最大4つまでです。〔ヘスティア・ファミリア〕の最大の切り札です。」

「春姫でございませう。よろしくお願ひ致します。」

「はいはい！レベルブーストって、レベルを1段階上げるだけなんですか？」

「はい、そうです。体感した方が早いかもしれませんね。模擬戦の時にやってみましよう。」

「「はー」」

そんなに強力なら、この前の戦争遊戯で何故使わなかったのでしょうか？

聞いてみましょうか。

「あの、質問です。どうして先日の戦争遊戯では使わなかったのでしょうか？」

「もつともな質問です。春姫さんの妖術はこのファミリアでも欲しがるものです。神イシユタルが神フレイヤに強気で出れるようになったのは、春姫さんの妖術があつてこそです。」

「「!!」」

「もし出せば、有象無象の糞神共が春姫さんを手に入れようとしてあらゆる手をしてくるでしょう。それを防ぐために使わなかったのです。」

「…なるほど。そういうことでしたか。」

無用な争いを避けるためですか…。

オラリオ連合を築いた今となつては、大丈夫ですが念のため隠したほうがいいですね。

「それにレベルブーストを受けた方は、精神が高揚します。また得た経験値も半分になります。命のやりとりの危険が高いモンスターが相手ならともかく、対人戦では経験値がもつたいたいですからね。」

「そういうことでしたか……。確かに私が受けた時は精神が高揚していました。あれは慣れないと危険ですね。」

「どういふことでしようか？」

「高揚すると、危機察知能力が鈍くなる上技術がおろそかになってしまいます。」

「はい、ルウさんの言う通りです。なので、今後は春姫さんの妖術に慣れてもらいます。」

「いいですね？」

「はい！」

対人戦はまだ生き残れるかもしれませんが、モンスターが相手ではそう行きませんか  
らね。

## 第252話 大切断、感心。

「エイナ・チュールさんです。彼女は、鑑定魔法をお持ちです。ステータス丸見えとは行きませんが、大体把握できます。また、事務処理や情報処理能力が非常に高く、オラリオ上位に入るほどのです。大派閥なら喉から手が出るほど欲しいほどの人材です。」

「レベルーですが、よろしく願います。あの…メイさん、休憩された方がいいかと。トイレを我慢しておられる方が数人おられますので。」

「!!」

「そうですね。予想より時間がかかりましたね。では休憩を入れましょう。」

え!? そんなことまでわかるの!?

すごい!

「まじか。」

「そんなこともわかるのか。」

「すごいな。ではトイレへ行つてきます。」

「お前か!と言いつつ、俺も。」

「……………俺も。」

あー、冒険者は意地を張る人ばかりだから仕方がないかー。  
けど、これでパーティ管理がしやすくなるよね。

ロキのところのいた時は、フィンやリヴェリアに任せていたからなー。

「アキさんの妊娠を見抜けるんですからね…。」

「すごいよねー！レベルーとは思えないよねー！」

「リヴェリア様曰く、彼女の母は王族妖精に近い方だそうです。それも関係するかもしれませぬね。」

そーなんだ！

ロキんとこへ入っていたら、どうなっていたんだろう…？

あ、それ以前にギルド受付嬢の経験があったから、あの魔法が出たかもしれないよね。  
それに、アルゴノウトくんと無関係とは思えないし…。

ん…？春姫…さんがワゴンを？

「皆様。お茶とメイ様が作られたケーキでございます。」

「皆さん、お手伝いをお願いします。」

「「はいー！」」

「うんまつ！このケーキ美味しー！昨日のケーキと同じくらい！」

「わ、私のお気に入り店の店より美味しい…（ハマってしまいそうです）。」

「【ロキ・ファミリア】にはないですね…。みんなには悪いと思ってしまうですね。」

そーだね！アルゴノウトくんもいるし、英雄譚愛好者の同志もいるし、心強いメンバーもいるし、ケーキも美味しいし、改宗してよかった！

あ、バーチエだ！

「では、続きを始めましょうか。バーチエ・カリフさんです。彼女は坊ちやまの専属メイド親衛隊の暫定隊長です。彼女は元【カーリー・ファミリア】の副団長ですが、神カーリーに快く承諾して改宗していただきました。主に徒手空拳で毒魔法を扱います。その毒については皆さんは身を持って知っているとと思います。」

「ええーっ！あのカーリーが？快く？」

（フルフル…）

『『あつ…（察し）』』

「何か？」

「「いえ！何でもありません！」」

絶対にあのカーリーが簡単にうなずくわけがない！

誰なの!?!あのカーリーを納得させたのは！

アルゴノウトくんは…絶対に違うよね。



リリ…、ヴェルフ…、春姫…、エイナ…も違う…。

まさか…目の前のメイド長…？

ううん、それは後にしよう！

まず、メイド親衛隊！

「バーチエです…。よろしくお願いします。」

「はいはい！あたしもメイド親衛隊へ入りたいですが、どうしたらいいでしょうか？」  
「入隊条件は女性限定であり坊ちやまへの想いが非常に高いことです。主に私が面談しますので希望者は私までお願いします。なお、坊ちやまはメイド親衛隊の存在を知りません。」

（（え？マジ？知らないの？うわー…。））

「わかりました！」

（メ、メイド親衛隊…。わ、私も入った方がいいでしょうか…？）

（…あの少年の趣味ではなくあの方でしたか…。誤解してしまいました。）  
よっしゃー！絶対に合格してみせる！

…アルゴノウトくんが知らないのは問題だけど、些細なことだし。

「フリユネさんです。彼女については皆さん、ご存知と思います。少し容姿と性格が変わり戸惑いますが、慣れて下さい。」

（（少し!?全部だろ!））

「何か?」

「「いえ!何でもありません!」」

「フリユネです。今まで前の私がご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。」

「「……………イ、イイエ。」」

本当に本人だよね…?信じられない…。

改変したのはこのメイド長と聞いたけど…、本当?

まさか、「ヘスティア・ファミリア」の快進撃の秘密はこの人…?

「さて、戦争遊戯後に改宗された方を紹介しましょう。彼女は「ガネーシャ・ファミリア」のアーディ・ヴァルマです。彼女は「ガネーシャ・ファミリア」団長のシヤクテイ・ヴァルマの実妹です。彼女は、坊ちやまによって7年前の大抗争が始まる直前に死亡したこ  
とになっています。」

「…本物?」

「間違いない。あの青い髪…。」

「マジで7年前より連れてきたのか…。」

「ベル…パネエよ…。」

「友はすごいな…。」

7年前のことは知らないけど、リーネだけじゃないんだ。本当に時を超えて連れてきたんだ…。

アルゴノウトくんは凄いなー！

「リーネの時と同じなんだー！」

「いいえ、ティオナさん。彼女は爆死する直前につれてきましたので生き返ってはいません。」

「時を越えてきたことには変わりないじゃないですか…。」

「本当に規格外ですね…。」

「アーディ・ヴァルマです！死んだことになっているけど今、この時代にいます！年は15歳です！英雄譚が好きです！よろしくお願いします！」

「え？また、私と同じ年？」

英雄譚が好き!?

本当に、ヘスティア様が言っていた同志なんだ！

「はいはい！好きな英雄譚はなんですかー？」

「アルゴノウトだよー！」

「おおつ、私と同じだー！」

「え!?ティオナ…さんも!?!」

「テイオナでいいよ！私も英雄譚が好きだよ！」

「おお！同志よ！春姫さん、仲間が増えたよー！」

「わあ！テイオナ様、よろしくお願ひ致します！」

「様はいらないよ！よろしくー！」

嬉しい！ロキのところにはそういうことを話せる仲間がいなかったからなー！

うん、馴染めそう！アルゴノウトくんもいるし！

ロキのところへは、もう戻れそうもないなー！

「あの娘、大丈夫かしら…。」

「テイオネ…そんなに心配するなら、君も行けばよかったじゃないか？」

「団長のところから離れたくありません！」

「そうかい…。」

## 第253話 侍従長、紹介。

ティオナさんは早くも馴染めそうですね。

よかったです。

「はいはい、積もる話は後にして下さい。」

「「はいー！」」

次は、ルウさんですね。

「では戦争遊戯後に改宗してきた方を紹介しましょう。まずルウ・リオンさんです。一応リユー・リオン本人ですが、色々とあり双子の妹のルウ・リオンという設定になっています。」

「ルウ・リオンです。このたび【アストレア・ファミリア】より改宗してきました。よろしくお願ひします。…ところで、【剣：いえ、アイズ・ヴァレンシユタインはどちらへ?】いきなり飛び出してどっかへいったよー。」

「アルフィアさんのところですね。」

「えっ……何故、自ら死地へ飛び込むようなことを……。」

「「うわあ…何て無謀なことを。」」

しかも、「九魔姫」もいますからね。

説教確定ですね。

セバスがいいますから、部屋が壊されることはないでしょう。

あつた場合は「九魔姫」に弁償してもらいましょう。

「アルフィアさん…？死地…？」

「はい、レフィーヤさん。戦争遊戯で貴女の魔法を無効化した方です。」

「ええっ！無効化!?…あれ？最近聞いたことがあるような…。」

「その方はどういう方でしょうか？」

「アルフィアさんはレベル7で【静寂】と呼ばれており【ヘラ・ファミリア】大幹部の一人であります。そして、7年前の大抗争で闇派閥として参加された方です。」

才禍の怪物と恐れられていたというのは伏せておきましょう。

あまり重圧をかけると坊ちやまのためになりませんからね。

「レベル7…7年前の大抗争…闇派閥…ああつ！思い出しました！リヴェリア様が都市最強の魔道士と言っていました！ええっ！何でその方が？」

「彼女は、坊ちやまのお母様のお姉さんです。」

「なっ…。」

「ええっ！自伝に載っていた人がここにいるの!？」

「彼女もアーデイさんと同じように、ギリギリで連れてきました。」

「だったら！何で、7年前に団長のところへ行つてやらなかったんですか！」

やはり、レフィーヤさんは坊ちやまへ並々ならない想いがありますね。

本人は認めたくはないでしょうね、ですが自覚させます。

「ごもつともです。ですが、彼女は坊ちやまが剣を取らない世界にするために自らの命を捧げて、オラリオの冒険者を強くさせることを選んだのです。」

ですが、彼女たちが強くさせた愚物共が坊ちやまのための踏み台となったと思えば、無駄ではなかったですね。

「……っ！だからと言つて……。」

「でも、今ここにいるんだよね？じゃあ、いいじゃん。」

「一つ言つとくぞ。ティオナ・ヒリユテ。」

「騒がしくすると殺られる。」

「「殺られる!」」

そうですね。

「絶対に言つては行けない言葉がある……。」

「「(ゴクリ……)」」

「(キヨロキヨロ) いないよな……? 伯母さんと言つたら死へ一直線だ。」

「死へ一直線!?!」

「我々もそれを言つて、死にかけた。」

「死にかけた!?!」

「いいな? 絶対に言うんじゃないぞ!」

「フリじゃないからな!」

死にかけて本人たちが言っているから、説得力がありますね。

「…私からも言つておきます。あと、ベルのことを悪く言うと同じくやられます。彼女はベルを溺愛しています、かつて彼女と敵対した私達…元「アストレア・ファミリア」が戸惑うほどに。」

「で、溺愛!?! 7年前に会いに行かなかつたのに!?!」

「はい、坊ちやまは性格も容姿も妹であるお母様によく似ています。そのためです。」

「…なるほど。挨拶に行つたほうがいいでしょうか?」

「そうですね、その方がいいでしょう。ですが、今はやめたほうがいいですね。」

「え? どうしてですか?」

「今頃はアイズさんが、「九魔姫」とアルフィアさんによつて説教されているでしょうね。」

「…うわあ…。関わりたくねえ。」



そうですね。

セバスもいるので、荒事にはならないでしょう。

「レフィーヤさん、説教されるのがお好きでしたら行かれても結構ですよ？」

「いいえ！いいえ！遠慮させていただきます（アイズさん…ごめんなさい）！」

「レフィーヤ…。」

「あの…リヴェリア様はアルフィアさんと仲がいいのでしょうか？」

「さあ？でも、私から見ますと相性としては悪くないと思いますよ？少なくとも今は。」

アルフィアさんは坊ちやまの義母として、「九魔姫」はアイズさんの義母としてですから、話は合うでしょうね。

その辺りはセバスに任せましょう。

さて、私の紹介ですね。

「自己紹介が遅れましたが、私は坊ちやま、ベル・クラネル専属メイド長のメイといいます。魔導人形ですが、強さはレベル7上位です。そして、元【ゼウス・ファミリア】専属メイドでした。お見知りおきを。」

「『魔導人形?!レベル7?!』」

「『元【ゼウス・ファミリア】専属メイド?!』」

「あー、いいかい？ボクから言うのも何だけど、ここ数週間でうちが強くなったのはメイ

くんとセバスくんのおかげだよ。」

『やはり…そうでしたか。』

『レベル7に魔導人形…!?!』

『『『ゼウス・ファミリア』だったとは…。』』』

「補足しますと、私は「ヘファイストス・ファミリア」で十数年自分で封印しました。坊ちやまは「ゼウス・ファミリア」の系譜をお持ちです。坊ちやまが私を解放してくださいました。なので、ここにいます。」

『ベルが…。』

『もしベルが解放しなかったら…我々が勝っていた?』

『いや、わからないな。ただ、今ほどにはなっていないなかっただろうな。』

『複雑だな…。』

ええ、本当に坊ちやまには感謝してもしたりません。

ザル坊も復活させてくれましたし、坊ちやまが「最強最高の英雄」を歩んでいるのですから。

## 第254話 静寂、事実。

目の前に、ベルの憧憬相手が正座している。

当然だな、ノックもせずに飛び込んできたからな。

そして、年増ハイエルフが激昂している。

あまりカッカすると、血管が切れるぞ。

「これが！ロキの吹き込んだ結果だ！わかるか！それを聞きたびにロキを送還しようとは何度か思ったことか！」

「まあ、落ち着け。それならお前がつきつきりで教えばよからうに。」

「…私は副団長だ。この子を教える以外に多くやることがある。その合間にロキがいらんことをこの子へ教えるんだ！」

…ハズレの主神を持つと苦労するな。

まあ、それは私達もだな。

本当にベルは当たりの大当たりの神を引いたな。

…グータラなのが玉に瑕だが。

まあ、いい。

仕方がない、ここは年増ハイエルフに味方するか。

「…はあ。(ギロリ) おい、野生児。」

「ひつ…あの…私は野生児ではありません…。」

「黙れ。聞いていいことと悪いことの判断がつかないやつは、野生児でも上等だ。」

「第一、それがおかしいことに何故気づかんのだ…。」

「でも…ロキが。」「誰が口を聞いていいと言った？黙れ。」

「はい…。」

あの無乳神の言う事を信じすぎだ、馬鹿が。

ベルはこいつのどこを気に入ったのだ？

理解できん…。

「無乳はともかく、周りの奴らは何をしているのだ？【勇者】と【重傑】は。」

「あいつらは口を挟むが、止めようとはしない！」

「環境が悪いところなるのか…。」

「環境が悪いというなら、あの少年もだろう。何故、あんなに礼儀正しく純粹無垢なのだ

？悪い環境そのものだろう、あの大神は。」

「それは深く同意する。」

全くだ。あの狒々爺、絶対に吹き飛ばしてやる。

「それは恐らく英雄譚のおかげでしょうな。」

「ふむ？英雄譚？」

「ああ…あの狒々爺は神時代に入る前から古代そのものをずっと見てきたからな。それを物語にしたのだろう。生きる本というやつだな、余計なものもあるが。」

「あの少年は英雄譚が好きなのか？」

「はい、全ての英雄譚を暗記しておられます。今の英雄譚は色々と脚色されていますが、坊ちやまは原典よりさらに濃い内容、真の英雄譚をご存知です。」

「ほう……全部暗記しているとはすごいな（是非話し合ってみたいものだ）。」

「そうだろう、そうだろう。」

うむうむ、さすが私の義息子だな。

「いわば、坊ちやまは英雄譚の中の英雄によって教えられて育ってきたのです。」

「なるほど…。故きを知ってそれを自分のものにしたということか。いいお手本だな。」

「ですが、やはりクソエロ爺が吹き込んだことにより耳年増なことも知っております。それも初心ですが。」

「まあ男性だから仕方がないが、初心なのか…。」

「何が悪い？」

「いや、あの大神によって育てられたのに何故初心なのかと思ったのだ。」

「……そうだな。何故だ？セバス。」

英雄譚を読みまくったとしても、女性関係まではわからないはずだ。

何故、この野生児のように鶉呑みにせず常識もわきまみたいの子に育ったのだ？

「それも英雄譚でございましょう。英雄譚の中に女性関係などそのまま載っているのもありましたからな。それはよくないと英雄譚の英雄に教えられたのでしよう。」

「なるほど……まさに英雄譚の英雄によって正しき道へ導かれたということか。」

物語の英雄たちに感謝せねばならんな。

狒々爺に知識を埋め込まれたとしても、妹を孕ませた男のようにならなくてよかったです。

なったら……矯正せねばならなかったな。

「……ずるい。」

「何がずるいだ？お前も読めばよかろう。」

「……意味がない。あの本に書いてあるのは全部嘘……。」

「今の英雄譚は色々と脚色されていますからね。」

「ベルは……本当の英雄譚を知っているの？」

「そうでございます。クソエロ爺が書いた本は真実ですからね。そして、貴女が大英雄アルバートと関係があるということ疑っております。」

「!!」

何だと?

この野生児が…大英雄アルバートと関係あるのか?

「…何故だ?何故、気がついたのだ?」

『挽歌祭』の時、貴女は大英雄アルバートの墓へ花を供えましたね?その時でございませぬ。」

「え?あの時の?でもあれだけで…。」

「ええ。ですが、あの時に貴女の名前と大英雄アルバートが結びついたのです。」

「私の…名前?」

「坊ちやまは大英雄アルバートの本当の名前を知っておられます。『傭兵王ヴァルトシュテイン』は貴女の父君ですね?」

「!!」

傭兵王ヴァルトシュテイン?

大英雄アルバートではなかったのか?

「ヴァルトシュテインをもじって、ヴァレンシュタインにされましたね?」

「なるほど…ベルがそれを知ってもおかしくはないということか。」

「はい。更に言うなら、坊ちやまはヴァルトシュテイン殿と大精霊アリアの間に子供が

いたということもご存知です。今の段階では子孫と考えているようですが、時間の問題でしょう。その子が貴女であることを。」

「……………」

何だと!?

こいつが…大英雄アルバートと大精霊アリアの実娘だと!?

精霊は子供を産めなかったのではなかったのか?

「怖いのですか? 坊ちゃんがそれを知った上で貴女を見る目が変わるのが。」

「は…いい。」

「ふん。その程度でベルの器を測ったつもりか? だからお前は野生児なのだ。」

「……………どういうことでしょうか?」

ベルの何を見てきたのだ、お前は。



## 第255話 静寂、推薦。

……他の奴にした方がよさそうだな。

だが、ベルはこいつを……ちっ！

「ベルはあの異端児を家族同然に思っているのだぞ？ 貴様が1000歳のババアだろうが、モンスターだろうがそう簡単に変わるわけないだろう、馬鹿が。」

「ババアではありません……。私はまだ16歳です。」

「例えの話だ、野生児。それに……ベルは大犯罪者の私の罪を共に背負うといってくれたのだぞ？」

「な……。」

「そこまでの器なのか……あの少年は。」

そうだ。ベルは優しいだけではない。

全てを救うという……『偽善』を堂々と言い張る子だ。

「それを知った私はあの子の器に打ち震えたよ。そしてあの子のために私は全てを賭ける、と決めたのだ。貴様が大英雄と大精霊の子と知っても、変わらんだろう。」

「……ああ、そうだな（なるほど、例のスキルが強まるだけだろうな）。」

「え？何でリヴェリアにわかるの？ベルとそんなに話したことないのに？」

「では聞くが、お前の知っているベル・クラネルはそんな少年か？」

「……違う。ベルはそんな子じゃない。」

「では、何故恐れるのだ？」

「……………」

「こいつは何を怖がっているのだ？」

「なるほど、今までの関係が変わるのが怖いのですな？」

「!!（な、何で…わかるの!?)」

『私が思っていたより、あの少年にかなり食い込んでいるのがわかるな…。』

『だったら、少しは教養と考える能力を身につける。エイナの方が何百倍もマシだ。』

『エイナが?まあ、あいつなら納得するな。しかし、エイナを育てたアイナは凄いな。本

人は破天荒な性格だというのに…。』

エイナはいいお手本だ。ベルを立ててフォローしてくれている。

ただ甘やかすだけでなく、ちゃんと叱る。

私はエイナを薦めたいな。

「アイズ嬢、そのままでもいいなら構いません。ですが、周りは待ってくれませんか?」

「どういう…?」

「ここで暮らしている内にすぐわかりますよ。」  
「??？」

ああ…そうだったな。

だが、この野生児にわかるのだろうか？

『おい、どういうことだ？』

『…ベルのスキル『兔囀女達』は知っているか？』

『ああ。おい…まさか。』

『勘違いするな、あの子はまだ未精通だ。だが、ここや周りにいる女共のほとんどはベルを慕っている。いつでも関係に進んでもいいようにな。……私は認めたくはないが、言う資格がない。』

そうだ…私は7年前、あの子を捨てて終末の時計を遅らせることを選んだのだ。

本来なら私はあの子に会う資格も見ると資格もないのだ。

だが…ベルは7年前に来て私を救い、この時代へ連れてきた。

それは受け止めなければならない、ベルのために生きることを。

『信じられん…あの大神の元に14年間もいるのにまだ未精通だったのか…。それは、まあ後で考えるとして、一体何人いるのだ。』

『知るか、5人から先は知らん、知りたくもない。』

『5人以上!? あ…【最強侍従】が言ったのは事実だったのか…。』

『あのメイドが何を言ったのだ?』

『10人でも100人でも余裕持って囲むのが英雄の条件だと。』

『あのメイド…何を教えているのだ。』

メイとセバスはベルの強化に力を注ぎすぎた。

スキルの強化だからといって、ハーレムを作ることとはなかるうに。

はあ…。

『だが…、そうでもしなければあの娘たちが報われない。仕方がないだろう。』

『くそっ! 7年前…いやゼウスと争ってあの子を引き取るべきだった!』

『今更だろう…。』

『五月蠅い。』

お前までもそう言うのか。

…ベルはこいつを想っているのはわかった。

だが、こいつはベルのことをどう思っているのだ?

聞いてみるか。

「おい、野生児。お前はベルのことをどう思っているのだ?」

「えつと…ペット?」

「よし、死ぬ。」

ここでやるより、ダンジョンの深層へ連れて行って罫り殺すか。ベルには事故と言っておこう。

悲しみはエイナたちが埋めてくれるだろう。

うむ、完璧な計画だ。

「ま、待つてくれ！アルファイア！この子はあまりの天然だから、よくわかっていないのだ！」

「うちの義息子をペットだと？万死に値するぞ！」

「気持ちをよくわかる！が、この子はその気持ちを本当に理解してないのだ！」

「野生児だからか。」……そうだ。」

……よくよく考えれば、7年前よりはかなりマシになっているな。

こいつがかなり教えたのは理解できる。

仕方がない、こいつに免じて許してやろう。

「リヴェリア……ひどい。私は野生児じゃないのに。」

「ほう、お前がダンジョンやじゃが丸くん以外に興味あることは何だ？言ってみろ。」

「……ベル？」

「ほらな。だから、こいつは理解してないのだ。」

礼儀や作法を知ってたとしても、中身は全くの子供…いやそれ以下か。苦勞しているな、こいつは。

「リヴェリア嬢。アイズ嬢は私共におまかせいただけませんか？」

「…先程、この子を頼むと言ったのだ。二言はない。」

「セバス、お前はこの野生児をどうにかできるのか？」

この年増ハイエルフが手間かけて育てた結果がコレだぞ？

いくら、セバスでも…。

「はい、お嬢様。元ファミアリアの団長と比べれば、まだ可愛いものです。」

「…そうだな。」

「…確かにそれは言える。あの【女帝】と比べるのもどうかと思うが。」

「??？」

あの団長と比べれば、この野生児は赤子の手をひねるより簡単だろうな。

あの傲慢な女は後にも先にも出てこないだろう。

## 第256話 九魔姫、安心。

かなり時間がかかったが、本題に入るか。

「それはさておき。何故「白妖の魔杖」に寝取られたと言ったのだ？」

「だって、ベルの師匠は私なのに……。ベルを鍛えたのは私。」

「鍛えた？ああ、彼がレベル1とレベル2の時か。私はその様子を見てないからわからんが、どうなのだ？セバス殿。」

「え？」

「アイズ嬢、私は「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つ者なら記憶を全部見ることができません。貴女が坊ちやまとした修業内容も全部知っております。」

「え」

……こいつ、何か隠しているな？

だが、無駄だ。

セバス殿はあの少年の記憶を全部読み取っているからな。

「それでどうなのだ？」

「一言でいうと、戦えばわかるというものです。テイオナ嬢の方がマシでございます。」

何だと？ティオナの方がマシだと？

余程の事だぞ、それは……。

「ま、待つて下さい！私はちゃんとアドバイスをしました！」

「ええ。ですが、ティオナ嬢は事前にアドバイスしていました。アイズ嬢は片言だけでした、それも打ちのめした後に。」

「……この子が人に教育できないというのはわかっていたが……。その、何だ。うちのアイズが申し訳ない。」

「……野生児だから仕方がないですまそう。でなきや、塵屑にしているところだ。」

「塵屑?!」

そうされても仕方がないことやったのだ、お前は。

自覚しろと言つても、わからんだろうな。

「また、ティオナ嬢は手加減をきちんとしてやっていました。アイズ嬢は手加減を間違つて、坊ちやまを数十回も気絶させていました。」

「……お前。」……（プイ）。

……人への教え方が致命的に下手とわかっていたが、座学の時間を多く作るべきだったな。

【白妖の魔杖】は元王族だったと聞く、人へ指示することや教えることは慣れているだろ



う。

「どういう教え方をしているのかが気になるが、あの少年がかなり慕っておりこの『最恐執事』が認めるくらいだから問題ないだろう。」

「アイズ嬢、誠に残念ですが貴女と坊ちやまの師弟関係は最悪でございます。」

「(ガーローン!) ……………。」

『すごくショックを受けているぞ、この野生児。』

『あの少年が五体満足であったことに、感謝せねばならんな。』

「だろうな、この子の教え方は身をもって教えるタイプだ。」

セバスの言う通り、師弟としては相性最悪だろうな。

相手がこの『静寂』のような天才タイプでない限り。

「ですが、それ以外の関係は問題ありません。」

「そ、それは、何ですか! 教えてください! (ベルの関係を断ち切られたくない!)」

『おい、必死で食らいついでいるぞ。』

『この子がじゃが丸くん以外でこうなるのは初めて見たな…。』

あの少年の関係が師弟関係と思いきんでいたからな。

それを取り上げられたら、あの少年との関係がなくなるのを非常に危惧しているのだ

ろう。

それが恋ではなく師弟であることを勘違いしているのだ。こいつは。

「知りたいですか？」

コクコクコクコク！

「ここで暮らしていく内にわかりますよ。ただわからないことは放置してはいけません。私とメイに相談するように。ヘステイア様でも構いませんよ。ただし神ロキは駄目です。今後一切近づいてはいけませんよ？」

「は、はい！わかりました！」

早速ロキへの接近禁止を言い渡されたな、まあ妥当だな。

それに…。

『……ロキを遠ざけるのはいいとして、もうセバス殿に逆らえなくなつたな、こいつ。』

『うまく手懐けたな。もう一押ししておくか。』

おい、何をする気だ？

「おい、野生児。見本となる女性を教えてやる。」

「えっ…だ、誰ですか？」

「エイナだ。」

「ああ、なるほど。エイナならいい見本だろうな。」

エイナは非常に優秀だ、ギルドの受付嬢のトップに立つぐらいな。

ギルドで働くときアテナから聞いた時、うちへ入らせなかったのは何故かと聞いたなら「ロキが邪魔。教育にも悪いし、エテナが淫らになったら困る。」と言った。

まあ、アテナの気持ちはわかる。

ロキの扱いにはもう諦めているところだ。

「あと、リヴェリア嬢。レフィーヤ嬢のアイズ嬢への構い方をどう思いますか？」

「ああ…。先輩と後輩の範疇を超えているな。注意しておこう。」

レフィーヤはアイズに対して恋慕の気持ちを持っているだろう。

それはそれでいいかもしれんが、両人のためにならない。

あの少年が間に入ってくれば、問題ないだろう。

「戦争遊戯で、私に魔法を放った奴か。レベル4にしてはなかなかの腕前だな。」

「ああ、私の後継者とみなしているやつだ。」

「ほう。」

いい機会だ、この際お願いしておくか。

「…よければあいつに手ほどきしてほしいのだが…。」

「ふむ…ステータスの詳細を教えろ。」

「なるほど、確かに強力だな。お前は王族妖精だったな？オラリオにいるエルフ全員へ

告げろ、お前たちの魔法を教えろと。」

「無茶苦茶を言うな……。」

「同族の魔法を使えるのだろうか？なら、手札が多いに越したことはない。」

「確かにそれはそうだが……私より上の魔法はそうそうないと思うぞ？それにあいつは、今で精一杯だ。」

それに同族の魔法を使えると言っても、かなりの精神力を使うのだぞ？

オラリオ中のエルフの魔法を覚えるだけでもキツイぞ。

今のままで慣れさせておくのが吉だ。

「ちっ……使えんな。……まあ、目をかけておこう。」

「頼む。あいつに悔しさを味わせてやってくれ。」

「そうですね、レフィーヤ嬢を鍛えたほうが坊ちやまのためになりますからな。」

「ほう。」「何だと？」「えっ？」

何だと？何故あの少年のためになるのだ？

敵視はしてないが、好敵手として見ているのは確かだが。

「18階層でレフィーヤ嬢が坊ちやまを追いかけ回した時がありましたね？」

「ああ、あの時か。」

「あ……2人がいなくなった時の。」

あの時は頭を痛めた。神ヘルメスの悪戯とわかってただらうに…。

「その時に、闇派閥が仕掛けた罠にかかってしまってお二人は即興の連携で切り抜けましたが、なかなか見事なものでした。」

「ほう、具体的にどうやったのだ？」

「声掛けもありましたが、お互いどのような動きをするのかを何故かわかっておりました。意思疎通とはまさにあの感じですね。」

それは初耳だな。

そうか…あの少年の相手としてレフィーヤは最適なのか。

なら、改宗させて正解だったな。

「ふむ…あの2人がな。」

「中衛と後衛の組み合わせとして、坊ちやまとレフィーヤ嬢は相性が良すぎます。恐らくオラリオ、いえ世界でも一番でしょうな。」

「そ、そんな…」

…レフィーヤにあの少年を取られると思っているな。

そんなことはない又何故わからないのだ…。

「ご安心を、アイズ嬢。前衛と中衛と後衛として、アイズ嬢と坊ちやまとレフィーヤ嬢の組み合わせは抜群でございます。」

「ほっ……。」

「それでも、お二人の連携には及びません。代わりにティオナ嬢とルウ嬢が前衛でも問題ありません。」

「えっ……。」

「だろうな。ティオナでも問題ないだろう。」

「だが、何故そこまで相性がいいのだ？」

「何故なのだ？あの2人はそんなに仲が良さそうには見えませんが？」

「それは私もわかりません。こちらで様子見することで何かわかるかもしれません。」

「そうか、頼む。」

「あ、あの……私は。」

「ご心配なく、坊ちやまはアイズ嬢をしっかりと見ております。ですが……」

「で、ですが……？」

「他の女性も多くおられますから、どうなるかわかりませんな。」

「だろうな、あの少年のスキルからして多くの女性に囲まれるのは目に見えている。」

「それをこの娘はわかっているのだろうか？」

「ど、どうすればいいのですか！」

「落ち着いて下さい。大丈夫ですよ。私とメイ、そしてヘステシア様がおられます。」

人で悩まず相談して下さいね。」

「は、はい！わかりました！」

……セバス、うまいな。

せめて、うちにいたらアイズをお願いしてたのだが、当時は縁がなかったのだからやむを得ないな。

だが、まだ初日だぞ？

『落ちたな。』

『改宗してまだ初日だぞ……。さすがは【最恐執事】と言ったらいいのか……この娘が単純なのか……。もつと座学の時間を設けておくべきだった。』

『この野生児が座学をやるわけないだろう。体に直接叩き込んでやらないとわからないのではないか？』

『そのせいでアイズはカナヅチになってしまったのだ……。』

『……下層の『巨蒼の滝』をよく切り抜けたな？』

『魔法を使って、水上を一気に駆け抜けて深層で待機していた。』

『先が思いやられるな……。』

ああ、だが【最強侍従】と【最恐執事】がいるんだ。

うまくアイズを手懐けて、教えてくれるだろう。

## 第257話 侍従長、面談Ⅱ

顔合わせも済み、かつての敵対ファミリアのわだかまりもなくなりましたね。

坊ちやまがヘーデンさんの指導より戻られて、和気あいあいですね。

今回見定めてわかったのは、アーデイさん、テイオナさん、レフイーヤさんは坊ちやまへの想いが高いですね。

アイズさんは途中抜けましたが、彼女はまだ自覚してないのでこれからですね。

アリシアさんは坊ちやまへの想いがありますが、まだ高くないですね。

そろそろ、異端児の方と顔合わせをしておいた方がいいでしょうね。

セイレーンのレイとアリシアさんと組み合わせれば、自動的に高くなるでしょう。

時間は有限ですから、進められるものはさっさと進めましょう。

早いかも知れませんが、アーデイさんとテイオナさんとレフイーヤさんに例のスキルを発現させてもらいますか。その後、リリさんたちとより友好を深めてもらいます。

アイズさんは予想通り精神年齢が幼いですね。

彼女たちへ言っておきましょう。アイズさんはウィーネさん並の精神年齢だと。

そうすれば、春姫さんやエイナさんはアイズさんを気にかけてでしょう。



ではまずメイド親衛隊の面談ですね。

今のところは、バーチエさん、春姫さんだけです。

そのうちリリさん、エイナさんも入ってもらいましょう。

コンコン

「入りなさい。」

「失礼しまーす！」

「さて、メイド親衛隊の面談ですが基本的に服はメイド服を着てもらいます。主にホーム内の雑用と坊ちやまの世話ですね。そして私の指導を受けてもらいます。」

「あー！バーチエの戦い方をやっぱり変えたのはメイさんなんですか！」

「ええ、私が教えました。」

「すごいよね！レベル6のテイオナをあしらうかのように倒したもんね！」

「ううー、悔しい！絶対に習得して勝ってやるー！」

テイオナさんなら大丈夫でしょう。

バーチエさんならテイオナさんをうまく教えられますね。

「…テイオナ。言葉遣いを改めた方が「不要です。そのままでもいいです。」…そうですか。」

「まあ、公的な場所で気をつけてほしいですね。」

「承知しました！」

「あの一、メイさん。どうやってカーリーを説得したのですか？」

「そうですね、それは……。」

そして、私はバーチェさんを改宗させた経緯を説明しました。

---

テイオナさんは聞いて、呆れていました。

まあ、仕方がありませんね。

「…バーチェ、アルゴノウトくんの部屋に忍び込んで何しているのさ……。」

「お前が悪い。お前がクノツソスであのようなことを言うからだ。」

「あ！あの時の……。そんなの！バーチェがそのような行動に出るなんて予想外だったよ  
！」

「仕方がないだろう。気になったのだから。」

「はいはい、そこまでにしてください。メイド親衛隊は今のところ、バーチェさんと春姫さんとルウさんですが、リリさんやエイナさんも入ってもらいます。基本的には坊  
ちやまへの想いが高い人だけです。」

「そ、そんなにいるの……うう……、ライバルが多いよー。」

「アーデイさん、ティオナさん、何故坊ちやまのハーレムを作るのかを教えましょう。」  
「え？ハ、ハーレム？」

そして、私は坊ちやまのスキルと発展アビリティについて説明しました。

「【猛者】に勝ったのはそのスキルなんだ。…すごいなー！」

「だからハーレム…。英雄は色を好むと言うし…。あれ？ベルくんは知っているのですか？」

「いいえ、全く知りません。」「ええっ！」

「…あの、大丈夫でしょうか？団長が否定するのではないのでしょうか？」

「大丈夫です。そうならないようにせ、教育はしております。」

『今、洗脳と言おうとしたよね？』

『うわあ…ヤバイよ。この人。』

『だろうな。だが、その方が私たちにとっては都合がいい。』

洗脳も立派な教育ですからね。

さて、アーデイさんに引き続き確認しますか。

「ティオナ・ヒリュテ。」「は、はい！」

「貴女は坊ちやまに身も心も捧げる気はありますか？」

「あたしは…アルゴノウトくんのミノタウロス強化種との戦いで既に心を奪われています。あの戦いは凄かったし、熱かった。…闘国にも…オラリオでの数年間でもそんな気持ちには微塵もなかつたんです…。そして、異端児騒動でアルゴノウトくと異端児のミノタウロスとの戦いで更に確信しました。…でも、神フレイヤの魅了にかかった時はすごく怒ったし、すごく悔しかつたんです。あたしの…アルゴノウトくんの思い出を踏みにじられ、それに屈してしまったことが悔しかつたんです。」

「あれは仕方がありません。リリさんたちにも言いましたが、神でも私でも抗えませんが、全く効かなかったのは坊ちやまだけです。」

「何故、ベルくんは効かなかったんですか？」

「それは後で説明します。ティオナさん、まだ答えを聞いていませんよ？」

「はい！私はアルゴノウトくんに…うん、ベルくんに全てを捧げます！」

「はい、わかりました。アーデイさん、ティオナさん、メイド親衛隊への入団を許可します。」

「やったー！」

「では、坊ちやまが何故急成長できたのか、そして魅了が効かなかったのかを説明しましょう。」

そして、坊ちやまの【憧憬一途】について説明しました。

「アイズに……。うー！あたしがその時ミノタウロスを倒していれば！」

「うーん……。私はベルくんの好みじゃないけど、いいのかなあ……？」

「大丈夫です。坊ちやまはお優しい方ですから、皆さんを見捨てるようなことはしませんよ。このメイが保証しましょう。」

（言い切るところが怖い……。けど、）

（なら、みんなと仲良くしないとね！争うとベルくんは悲しむだろうし。）

「さて、お二人は強くなりたいですか？」

「はいー！」

「では、こちらを飲んでもらいます。」

「水……？」「水だよね？」

「坊ちやまの血が入っております。」

「え？な、何で？」

「それは……」

【白兔眷属】について説明しました。

そのデメリットも。

「！！……ゴクゴクゴク……。」

(速いな…。まあ、そうだろうな。)

「では、後でヘスティア様に更新してもらいましょう。坊ちやまへの想いが本物なら発現するはずです。なお、リリさんと春姫さんとエイナさんとルウさん、そして「アストレア・ファミリア」の皆さんにも発現しています。」

「よし！バリバリ強くなるぞー！まずはレベル7だー！」

「早く追いつけないと！まず、レベル4に早くならないと！」

「がんばろー！」

「さて、バーチェさん。貴女も負けるわけにはいきませんね。」

「そうですね。」

レベル6のティオナさんが入れば、一気に強くなりますね。

アーディさんもうまくいけば、お姉さんのシャクティさんへ追いつけるかもしれません。  
ん。

あとは「白兎眷属」が発現することを祈りましょう。

そして、アイズさんへの教育もやらなければなりませんね。

坊ちやまのハーレムの本妻として。

## 第258話 処女神、回顧。

うんうん、仲良きことは良きことかな。

一年も経ってないのにもう最強最大派閥になってしまったなー。

みんなからの期待を裏切らないためにも、しっかりとまとめておかないとね。

一昨日、フレ：いやシノスくとオツタルくんがセバスくと一緒に行った後に…。

コンコン

「ん？誰だい？」

「私よ、ヘスティア。」

「何だい、アストレアかい。入ってもいいよー。」

ガチャ

「終わったかしら？…あら？フレイヤは？」

「オツタルくんとセバスくとクノツソスへ行つたよ。…多分、ベルくんのスキル検証のためだと思うよ。」

「え？また誰かを連れてくるの？」

「そうみたいだね。僕はもう知らなーい。」

「ハスティア…現実逃避しないでよ。」

「時を越えてくることに對してどうしろっていうんだい!? ボクの管轄外だよ!」

ボクの司るのは『悠久の聖火』だよ!

時じゃなーい!

それにアレはどうしようもないだろ!?

「まあ…そうね。あ、ルウの改宗お願いしていいかしら?」

「んあ? いいのかい?」

「ええ、ルウも【劍姫】に勝ったようだし…。それにメイからメイド親衛隊に加入するな

ら改宗するようにと言われたのよ。」

「……言われた?」

「……脅迫されたに近いかもしれないわね。」

「んー、でもどうして? 傘下ファミリアなら別に改宗しなくてもいいんじゃない?」

「ルウのステータスを見たらわかるわ。」

……【白兔眷属】のようなスキルじゃないよね?

そういうえば…遠征直後、治療院でベルくんとの関係が怪しかったよね…。

いい機会だ、聞いておこう。



「…エルフくん。キミに聞きたいんだけど…。」

「は、はい。」

「ベルくんと深層へ落ちた時、ベルくんと何かあったのかい？」

「!?」

やはり何かあったね？

よし、アストレアもいることだし全部言ってもらおう。

「あ、私も聞きたいわね。さあ吐きなさい、ルウ。」

「そ、それは!? その…あの…何も…い、いかがわしいことはありません…せんでした。」

「…嘘は言っていないね。」

「それなら、何故こんなに赤面して動揺しているのかしら? 絶対に何かあったに違いないわ。」

「そうだね。さあ、吐くんだ! …大丈夫だよ、ここはボクたちしかいないから。」

「そ、それを言ったら、改宗は取りやめということにならないでしょうか?」

「ならないよ。約束しよう。ベルくんと離れ離れにしないことも。」

「そうね(そうしないと、ルウは安心できないでしょうね)。」

「わ、わかりました。その…実は…。」

そして、エルフくんは深層のセーフティエリアであったことを話してくれた。

「なるほど…。その一歩手前だったことね。」

「ルウ。」

「は、はい？アストレア様？」

「ヘタレね。」

「うぐう!？」

「そうだね。本当にそう思うよ。」

「というか、よくその場で思いとどまったね…。ある意味感心するよ。」

「よく理性が保ったわね…。ルウ（私なら押し倒しているわ、絶対に）。」

「うう…。」

「さて、改宗しようか。」

「ええ、聞きたいことは聞けたし。」

「…：…よろしく願います。」

そして、エルフくんを改宗した。

…なるほど、アストレアの言っていたことがわかったよ。

「このスキルは…：…なるほど、改宗した方がいい理由がわかったよ。」

「でしよう？改宗しても消えなくてよかったわ。」

「これ、エルフくん更に強くなるんじゃないかな?」

このスキルは確かに強力だ。ベルくんのスキルに、ベルくんの血によるスキル、エルフくんのスキル…。

それにこの1週間の特訓で、ステータスが跳ね上がっているよ…。

もう敏捷がCに入っているけど!?

「強化パフが二重になってるし、早熟するわよね?ルウがベルを見限らない限りね。」

「それは絶対にあり得ません!例え皆さんがベルを見限ろうと私だけはベルの側に居続けますー!」

「……サポーターくんも同じことを言ってたよ。はあ…ベルくんは罪な子だなあ。」

「リリルカ・アーデもですか?そ、そうですね(やはり私だけではないということですね)。」

「やはり、5年前に眷属にするべきだったわ…。」

「まだ言っているのかい…。」

(まだ言っているのですか…。)

しつこいなあ…。

「ところで、フレイヤは役割演技でシルという娘に?」

「あ…役割演技どころじゃなくなっちゃよ。」

「は?」「え?」

そしてボクはフレイヤがシノスというヒューマンになったということを話した。

「……は?ベルの血が神力を封印できる?嘘でしょ?」

「事実だよ……。あの子はヒューマンなのに:何で神力を封印できるんだよ……」

(シルがシノスですか……。ベルは本当に神フレイヤをヒューマンにしたのですね。シル:いえシノスにとつてはそれは願ったり叶ったりですね。私もシノスに対していつもどおりにできますね、もちろんルーゼにも。)

「……よし!ヘステイア、ベルの血をちょうだい。私もなるわ!」

「は?」「へ?」

キミは何を言っているんだい?

「神力を封印される上にベルの眷属になれるなら、問題ないわ!」

「ア、アストレア様!?あ、あの:まだアリーゼたちがダンジョンにいますが……。もしアストレア様が神力を封印されるとアリーゼ達は恩恵を失うんじゃない?」

「……忘れていたわ。アリーゼたち全員が揃ってからにしましょう。」

(結局飲むのですね……)

「むー!ボクもなりたいのにー!」

フレイヤもアストレアもずるいよ!

ベルくんはボクの眷属なのに！

「ヘスティアはダメよ。フレイヤの場合美の神は他にもいるし、正義を司る神は私だけじゃなく他にもいるもの。『悠久の聖火』を司るのはヘスティア、貴女だけよ。」

「くそー！何でそんなスーパリアを司るんだ、ボクは！普通の火でいいのに！」

「その普通の火の頂点を司るのが貴女よ？」

「ちくしょー！」

「それに、貴女がヒューマンになったらベルの恩恵が消えるかもしれないでしょ？」

「そうですね。」

「ううー……」

誰だよ！ボクに『悠久の聖火』を押し付けたのは！

「さて、私達は元ホームを整理してくるわ。」

「そうかい？気をつけるんだよ。」

あー、確か「ヘルメス・ファミリア」が「アストレア・ファミリア」ホームを一時預かっていたと言ってたっけな。

引き払ってここへ来るのかい……。はあ……



「アストレア様、すみません……。私はその……今までホームへ近づくこともできなかった

ので。」

「ああ、ルウ。貴女を責めているわけじゃないの。よく売り払わなかったと思っているの。」

「そんなことはできません！」

「ごめんなさいね。…ルウ、貴女はもう【ヘステイア・ファミリア】の一員となつたわ。なので手伝わなくてもいいわよ？」

「アストレア様、私はヘステイア様の眷属でもあり、アストレア様の眷属でもあります。」  
「…ありがとう、ルウ。ところで…ベルは誰を連れてくるのかしら？…すごく気になるわ。」

「私もです…。」

それがザルドと知った時アストレアは7年前について激昂したが、アルフィアと違いお詫びと御礼を真っ先にしてきた上、美味しい飯を提供してもらったため、許したのであった。

## 第259話 処女神、更新Ⅱ

よし、夕食前にみんなの更新をしておこうか。

……ベルくんを更新するのが怖い。絶対にランクアップしているよね？

「あー、サポーターくん、ヴェルフくん、命くん、春姫くん、アドバイザーくん、そして……ベルくん更新をしようか？」

「「え？あ、はい。」」「あー、そうだな。」

「え？一昨日に更新したばかりじゃないですか？」

「あー、ほらボクたちは「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」に勝っただろ？何かスキルが出るんじゃないかなーと。」

「あ、そうですね！」

特にベルくんは絶対にランクアップしているよ！

レベル8を倒したんだからね！

『私の魔法で見ると、ベルくんの全てのアビリティが激高でランクアップ可しています……。また記録更新しました……。ベルくん……規格外すぎるよ……。』

『『マジですか』』』

『冒険者になって半年すぎでレベル6ですか…。』

『凄いですー!』

そして、ボクはベルくんを除く彼らを更新した。

サポーターくんは直接戦闘していないのに、かなり上がっているなー。

絶対に【白兎眷属】の影響だよね…。

それに何かスキル出そう感じがする、

ヤバイ感じのやつが。

ヴェルフくんと命くんは魔力が上がっているなー。まあ魔法しか使っていないからね。

でも…サポーターくんと春姫くんとアドバイザーくんと比べたら微々たるものだけ  
ど。

春姫くんはランクアップ可だけど、もう魔力がSに入っているね。

魔法使っていないのに…。でもメイくんからOKが出てないから保留っと。

エイナくんはずっと魔法を使い続けているから、魔力がCに入っている上に他のアビリティもかなり上がっている…。偉業がまだなのでそうそうランクアップしないよね。

逆に言ううと偉業を積みればランクアップできるといことだよね…。

入団してまだ1ヶ月も経っていないよ!

この【白兎眷属】はやばくないかい?



エルフくんもそうだけど、アストレアのところも同じかもしれないね…。  
コンコン

来た！運命の時が…。

「神様、僕です。」

「あー、うん！入っついていーよ！」

ガチャ

「いつものようにそこへ横たわってね。」

「はい！そうそう簡単にランクアップできるわけじゃないですね…。」

（アドバイザーくんの話ではもう確定だけど…。どれどれ…うわあ…。）

ベル・クラネル

Lv. 5

力：SS 1006↓SSS 2030

耐久：SSS 1115↓SSS 2315

器用：SSS 1205↓SSS 2608

敏捷：SSS 1412↓SSS 3012

魔力：S 958↓SSS 1769

幸運：D

耐異常：D↓C

逃走：H

魅了：I

〈魔法〉

【ファイアボルト】

- ・速攻魔法

〈スキル〉

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上

【英雄願望】

- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

【闘牛本能】

- ・猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

【兎囲女達】

- ・女性限定（種族問わず）

- ・慕われる女性が多ければ多いほど、全能力の高補正。
  - ・お互いの信頼が厚ければ厚いほど、お互いの全能力の超高補正。
- (※但し、同じファミリア内に限る。)

- ・女性からの愛情が深ければ深いほど、全能力の超高補正。

【時駆白兔】

- ・場所は問わない。
  - ・条件を満たせば、本人の意思に関係なく発動する。
- えげつないステータスだ…。

たったの一週間でトータル6000オーバー…。

過去最高の上昇幅だよ…。

ははは…笑うしかないよ。

「ベルくん…おめでどう。ランクアップだよ。」

「へ？は？ええっ！レベル5になってまだ2週間ですよ!？」

「事実だよ…。ランクアップするね？」

「あ、はい！お願います！これで、アイズさんに並びましたね！」

(ヴァレン某どころか、もうオツタルくんを超えて都市最強…いや世界最強になりつつあるけどね！…この子は多分わかってないだろうな。)

はあ…さっさと済ませよう…。

よし…ランクアップつと。

さてさて…!?

……………この発展アビリティとスキルならいいか。

「はい、ベルくん。発展アビリティと新スキルが出たよ。」

「ええっ！本当ですか！」

ベル・クラネル

L v . 6

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏捷 : I 0

魔力 : I 0

幸運 : D ↓ C

耐異常 : C ↓ B

逃走 : H

集中 : I

## 〈魔法〉

## 【ファイアボルト】

- ・ 速攻魔法

## 〈スキル〉

## 【英雄願望】

- ・ 能動的行動に対するチャージ実行権。

## 【闘牛本能】

- ・ 猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

## 【時駆白兔】

- ・ 場所は問わない。

【<sup>ベヒーモス</sup>陸王者】

- ・ 条件を満たせば、本人の意思に関係なく発動する。
- ・ 陸の上にいる限り、ステータス超高補正。
- ・ 陸の上にいる限り、『治癒』発現
- ・ 陸の上にいる限り、『精癒』発現。

・毒無効（但し、ベヒーモス以上の猛毒は除く）。

「『集中』…？…えっと何ですか、それは。」

「うーん、文字通り集中しやすくなるんじゃないかな？」

「えっと…あ。あの感覚かな？」

「え？あの感覚？」

「あ、はい。戦っている途中で頭がクリアになり周りの音が耳に入らず戦いやすくなった時があつたんです。今までの幾度かありました。」

「それだね、それが積み重なって発現したんだ。」

「嬉しいな…僕のやってきたことが発現したというのが。」

「う、うん。そうだね（やってきたことだけでなく想い続けてきたのもあるけど）。」

「あとは…この「陸王者」ですか…。」

「…キミが今まで飲んできたベヒーモスの猛毒の影響もあるよね（あの炎の形もあるかもしれないね）。聞いた時は気を失うかと思ったよ。」

「あははは…すみません。」

「ヤバイよね、そのスキルは（キミのスキルはどれもヤバいけどね!）。」

「あ、はい。けど…まだまだだと思えます。」

「何でだい？」

「僕の目指す【最強最高の英雄】までは程遠いです。もっと強くならないと。」

「キミは思ったより欲張りなんだね…。」

「す、すみません。」

「ははは、何で謝るのさ。…ベルくんはどんなに強くなってもベルくんなんだね。」

「えつと…そうなんですか？」

「その気持を忘れないでくれよ。そうすれば、キミは絶対に強くなれるさ。」

「はい！」

「あ、みんなへの報告は明日にしよう。今日はホラもう遅いし。」

「はい！わかりました！」

……報告は明日でいいか。もう疲れた…。

セバスくんはともかく、メイくんはザルドくと色々と話すことがあると言っていたし。

メイくとセバスくんは明日に伝えよう…。

ボクは本当のステータスの写しをもう一度見た。

ベル・クラネル

L v. 6

力：10

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：I 0

魔力：I 0

幸運：C

耐異常：C↓B

逃走：H

魅了：I↓D

集中：I

〈魔法〉

【ファイアボルト】

・速攻魔法

〈スキル〉

【憧憬一途】

・早熟する。

・懸想が続く限り効果持続。

・懸想の丈により効果向上



## 【英雄願望】

- ・ 能動的行動に対するチャージ実行権。

## 【闘牛本能】

- ・ 猛牛系の戦闘時における、全能力の超高補正。

## 【時駆白兔】

- ・ 場所は問わない。
- ・ 条件を満たせば、本人の意思に関係なく発動する。

## 【兔囲女達】

- ・ 女性限定（種族問わず）
  - ・ 慕われる女性が多ければ多いほど、全能力の高補正。
  - ・ お互いの信頼が厚ければ厚いほど、お互いの全能力の超高補正。
- （※但し、同じファミリア内に限る。）

【陸王者<sup>ベヒーモス</sup>】

- ・ 女性からの愛情が深ければ深いほど、全能力の超高補正。
- ・ 陸の上にいる限り、ステータス超高補正。
  - ・ 陸の上にいる限り、『治癒』発現
  - ・ 陸の上にいる限り、『精癒』発現。

・毒無効（但し、ベヒーモス以上の猛毒は除く）。

今回発現した発展アビリティとスキルだけでなく、問題の発展アビリティ『魅了』が5段階上がっていることも…。

ベルくんが冒険者になって半年すぎかあ…。

スキル補正つきならオツタルくんと戦った時点でレベル8あたりだったら、今はレベル9かもしれないね。

さて、夕食の時間つと。

さっきのことは忘れよう。でなきややってられないよ！

んー、いい朝だ。

コンコン

「誰だい？」

「私共でございます。」

「あー、メイくんとセバスくんか。入っついていーよ。」

「失礼します。」

ガチャ

「おはようございます。ヘステイア様。」

「うん、おはよう！昨日のベルくんのステータスを知りたいよね？ハイ、コレ。」  
「拝見いたします。……!?」

「これは……また。」

「やはり、キミたちも驚くよね。ボクはもう達観したよ。」

コレを見て驚かないのがおかしいよ！

「『魅了』が5段階もですか……。恐らく美の神でも頂点に位置する神フレイヤを【白兔眷属】で眷属にしたからでしょう。道理で皆さんが坊ちやまに見とれていました。」

「そうですね、それに『集中』ですか。恐らく今までの戦いで積み重なったものでしょう。」

「ええ、ですが問題はこのスキル……『陸王者』ですか。」

「かなり強力ですね。数日飲んだベヒーモスと、ウエスタ・ベヒーモスの影響でしょう。」

「毒無効ですか。もうバーチェさんの毒は効かないでしょう。」

「坊ちやまは本当に大した御方です。もう私達の元ファミリアを超えております。」

「本当に仕えがいのある御方ですね。」

キミたちは感心しているけど……ボクはベルくんが遠くへ行ってしまうようで怖いよ。

「ハステイア様、大丈夫でございませう。」

「坊ちやまはハステイア様を絶対に一人にはしないでしょう。あの時に誓ったではあり

「ませんか。」

「そうだね…。けど、やはり不安なんだよ。あの子はまだ14歳で世間知らずなんだ。」

「ご心配はごもつともです。ですが、我らがいる限り問題はありません。」

「だね…。ベルくんをしっかりと見てあげてくれ。他の子たちもだけど。」

「承知しました。」

彼らを解放してくれなかったら、どうなっていたらろう…。

怖くて想像したくないな…。

## 第260話 執事長、報告。

「おや、お嬢様とザルド殿ですか。」

「丁度いいですね。坊ちやまについて報告しておきましょう。」

「これはお嬢様、おはようございます。」

「ザル坊、いい朝ですね。」

「……………」

「おい、どうした？ザルド。」

「聞くな……………」

「おや……………なるほど。」

「メイの特製ドリンクを飲んで幼児退行しましたか。」

「さて、報告しておきましょう。」

「ところで、坊ちやまはレベル6となりました。」

「そうか……………もうレベル6か。早いのはいいことだが……………義母としては複雑だ。」

「……………半年過ぎでレベル6か。だとすると、今はレベル9相当か。もう【女帝】に並んだか。」

「ええ、ステータスはこちらになります。」

「どれどれ? ……頭が痛くなってきた。」

「何だと? よこせ。 ……セバス、頭痛に効くハーブティーを出せ。」

「かしこまりました。ザルド殿もいかがですか?」

「もらおう。 ……何だよ、このスキル。俺への嫌味か?」

「さすがは私の義息子と言いたいが ……ここまでとはな。はあ ……」

私共でも絶句するくらいですからな。

もう坊ちやまは「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」と並びましたな。

いえ、追いついたかもしません。

なら、手心を加える必要はありませんね。

「ええ、なので私とメイは本気を出して坊ちやまを鍛えていきます。」

徹底的に鍛えてあげましょう。

「もう、俺単独では勝てんな ……どうした? アルフィア。」

「…ザルド、7年前の私達の選択は間違っていただろうか?」

「アルフィア、それはない。俺達があの選択をしたからこそ、ベルはここまで強くなった

んだ。」

「…だが、私はあの子を「やめろ、アルフィア。たればを言えばキリがない」…そう

だな。」

「ザル坊の言う通りでございませぬ。」

「そうですね。お嬢様、それ以上は坊ちやまを悲しませるだけでございませぬ。坊ちやまは7年前にもつと強ければお嬢様たちを止めることができたのでは、と今も思っております。」

ザルド殿とお嬢様を連れてきて、坊ちやまの気持ちはまだ消えておりませぬ。

現に、ザルド殿とお嬢様はオラリオを堂々と歩くことができませぬ。

ギルドによつて、お二方の罪を解消したとしてもまだその時期ではありませんからね。

「そうか……じゃあ、なおさらだ。糞餓鬼どもが俺達を喰らつて、その糞餓鬼共をベルが喰らつたから強くなつたんだ。」

「それに、坊ちやまの想いの強さによつてお二方はこの時代へ来られたのでしよう？」

「そうだな……あの子に辛い思いをさせてしまった。だが、あの狒々爺は絶対に殺す。」

お嬢様の怒りは「もつともですな。」

「……俺は止めねえ。どう考えてもあの爺が悪い。」

「お嬢様。殺してはもつたないです。」

「そうです。坊ちやまの心痛の数百倍は苦しんでもらわないと困ります。」

「……………だそうだ。」

「それでも、メーテリアが託したあの子を育児放棄した狒々爺を吹き飛ばさないと気がすまん。あの狒々爺はどこにいる？」

やはり聞いてきましたな。

例え、知ったとしてもあのクソエロ爺は逃げ出すでしょうね。

元主神ヘラの執拗な手から逃げ切ったくらいですからね。

ですが、すでに手はうっております。

「お待ち下さいませ。物事には順序があります。」

「順序だと？」

「はい、数週間はかかりませんが確実に捕まえます。」

「……………何をするつもりなのだ？お前たちは。」

「嫌な予感かしねえぞ…。」

「はい、それは…………。」

私とメイの計画について話しました。

話すと二人は呆れていました。

「……………うわあ、えげつねえ。」



「いい加減にしろ、お前たちはやり過ぎだ。自重しろ！」  
知りませんな。

「既に賽は投げられました。後は待つだけでございます。」

「全ては坊ちやまのためでございます。」

「アルフィア…あのヘラがそれに乗ると思うか？」

「乗るだろうな。あの子はメーテリアに似すぎている。ベルの宣言、あの戦いを見たらなおさらだ。あの子のために本気を出すのは間違いない。私は確信している。」

大幹部の一人であるお嬢様がそこまで言いますからね。

もちろん、長年「ヘラ・ファミリア」に仕えてきた私も元主神ヘラの心境や動きなどはすべて把握しております。

それをわかった上で計画をしています。

「そ、そうか（あばよ…、爺）。」

「それにお前達が今、それを言った時点で私達がどんなにやつても手遅れだろう？」

「ご明察でございます。」

「……………こいつらが手を組んだ時点で爺の運命は決まったな。」

「全くだ。封印する前に鉄くずにするべきだった。」

「残念ですが、あの時点で私より弱いお嬢様がそれをできるのは不可能でございます。」

「五月蠅い。言っただけだ。」

困ったお嬢様ですな。

意地っ張りすぎます。

「ベルの【時越白兔】はすごいな。」

「うむ。…セバス、メーテリア復活は可能か？」

「はい、先程言った計画が順調であれば可能です。」

「そうか、待つとしよう。」

「メイ、団長や【女帝】も連れてくるのは可能か？」

「はい、もちろんですよ。ザル坊。」

ええ、もちろんです。

彼らが復活…いえ連れてくることができれば、黒竜への勝利へ近づけます。

「そうか。ベルには悪いが、あの馬鹿の復活は避けたいな。」

「私は復活させたい。」

「は？何故だ？」

「この手で直接葬りたい。妹を孕ませた罪は重い。」

「……………そうか。」

それは駄目ですね。

「私はザル坊に賛成ですね。」「私もです。」

「何故だ？」

「お忘れですか？あの困った子は貴女たち〔ヘラ・ファミリア〕ホームへ忍び込み、馬鹿主神と覗きを数百回もやって貴女方によって何度も死にかけても、ピンピンと生きているではありませんか。」

「それに坊ちやまの生命力はクソ雑魚サポーター譲りです。そう簡単には死なないでしょう。」

ええ、あのクソ雑魚サポーターには手を焼かされました。

本当にヒューマンか？と思うくらいでした。

それに坊ちやまへの悪影響は計り知れません。

「なので、復活はさせません。坊ちやまの教育に悪いし、坊ちやまのハーレムを食い散らかす可能性が非常に高いです。」

「同感です。彼女たちに手を出したとしてもあのクソ雑魚サポーターは坊ちやまを言うくめるでしょう。なので復活はやめた方がよろしいかと。」

「あー、あいつならやるな。それにあいつはベルに何かと吹き込んで、いい影響を与えねえぞ。絶対にやる、俺が保証するぜ。」

「ちっ…仕方がない。運がいい奴め、黒竜に喰われたことを幸運に思え。」

「それにあの困った子の遺品は全て処分しました。復活の条件は全て絶ちました。絶対  
現実とは言えませんが。」

「そ、そうか（すごい念の入用だな）。」

もちろんでございませす。

おや、湯が沸いてきましたな。

コポコポ…。

「ハーブティーができました。どうぞ。」

「おう、ありがとうな。む…いい味だ。」

「ふう…落ち着いた。……あの子は黒竜を倒せると思うか?」

「……厳しいな。あいつら…団長や「女帝」が力を尽くしたのだぞ?」

「ああ…。だが、私達はあの子に賭けるしかない。」

ええ、今はそれが最善です。

もはや、私達には坊ちやましきないのです。

「レベル10以上が少なくとも5人はほしいな。…いや10人いても勝てるかどうか。」

「お二方、今は坊ちやまに賭けるしかありません。」

「そうです。『終末の時計』は迫っています、まだ時間はございませす。」

「そうだな…ならでできることをやっておくか。まず、あの小娘共を鍛えておくか。」

「ああ、そうだな。ベルを信じよう、【最強最高の英雄】をな。」  
ええ、そうですな。

死んでいったあの娘たちの無念を晴らすためにも。

## 第261話 侍従長、招集

坊ちやまのハーレムで「ヘステイア・ファミリア」のみ招集かけました。

「これは何の集まり……あつ。」

「リリ様？ どうされましたか？」

「メイ様のやることだから意味があるだろうな。」

（早速魔法使ったけど……ここにいる全員、何で鐘のマークがついてるの？ それに……シノさんの種族に神って何なの？）

おや、エイナさんがシノスさんを見て何かに気づいたようですね。

アルフィアさんの推薦ではありませんが、エイナさんはここ一番の当たりですね。

「なになに？ 何の集まり？」

「ルウもいるし、何かな？」

「……何の集まりでしょう？」

「メイさんと呼ばれて来てみれば……。」

「シノス様「様はいらないですよ」……シノス、何でしょう？」

「これ全員集まりましたね。」

始めましょうか。

「これで召集かけた方は全員集まりましたね。ここにいらっしゃる方々は、坊つちやまのハーレムでありスキル【白兎眷属】をお持ちの方だけです。」

「ええっ!?!こんなにいるの!?!」

「レアスキルとは一体…。」

(ああ…だから鐘のマーク…つまりベルくんの…。)

そうですね、レアスキルというより坊つちやまの恩恵といったほうがいいかもしれませぬ。

「さて、改宗組で発現した方を紹介しましょう。ティオナさん、アーデイさん、シノスさん、ルーゼさんです。」

「よろしくお願います!」

「ちなみに、シノスさんは坊つちやまの血によつて神力を封印され、完全なヒューマンとなった神フレイヤです。」

「「ええ? ええええええっ!?!」」

(ああ、やつぱり…。見間違ひじゃなかったんだ。種族に神とあつたのは。)

やはり皆さん、驚いていますね。

「ねえ…、ベルくんはヒューマンだよね?」

「そのはずでございます…。」

「神を封印するなんて…規格外すぎます!」

「あの…メイさん。その封印には条件があるのででしょうか?」

なかなかいい質問ですね。

「【白兔眷属】の通り、坊つちやまへの好意が非常に高い女性であることは同じですよ?ただ、坊つちやまが死なれますと神に戻るだけです。皆さんの場合は呪詛ですが。」

「ベルさんが死なれましたらすぐに天へ還ります。」

「もし、ヒューマンとなつた貴女と坊ちやまの間にお子様が生まれたらどうしますか?」

「「お子様!」」

「うっ…それは…そ、その時に考えます。」

「はい、わかりました。では、お集まりいただいた皆さんに伝えたいことや協力して欲しいことがあります。」

（…ゴクリ）

ええ、本妻候補のアイズさんが改宗した今、やっておかなければなりません。

「まず、このハーレムの存在を坊ちやまは知りません。いつかは告げなければなりません、今はまだ早いです。坊ちやまの願望にはありますが、性格上受け入れられないかもしれません。今は坊ちやまへゆつくりと教育していきます。よろしいですか?」



「「は、はい！」」

『ベルくんをどうするんだろう…。』

『じつくりと思考誘導していくんでしようね…。』

『それは洗脳というんじゃない？』

洗脳も立派な教育ですよ？

序列について話しておきましょう。

ハーレム内の醜い争いはよくありますからね。

「そして、このハーレムの序列は本妻と愛人だけです。なので、お互い蹴落とすようなことは禁止です。もし、しますと…」

「「し、しますと…？」」

「坊ちやまのグッズを全部没収の上、坊ちやまへ2メートル以上近づけることができない魔道具を強制装着させます。」

「「絶対にしません！誓います！」」

「はい、ご理解していただけで嬉しいです。」

『…脅迫だよね？今のは。』

『やめろ、テイオナ。本気で着けられるぞ。後、メイ様とセバス様には絶対に逆らうな。』

フリユネのようになるぞ。』

『ひっ…。』

フリユネさんほどにはしませんよ？

ほんのお話するだけです。

「皆さんの基本的な仕事は、ファミリア管理とアビリティ強化、そして坊ちやまのお世話です。」

「あの…質問です。神…いえ、シノスさんはダンジョンへ潜っても大丈夫なのでしょうか？」

「問題ないと思います。ですが、ソロ活動は禁じます。最低でも3人以上で潜って下さい。」

「わかりました！ふふふ、ダンジョンへ潜るなんてやりたかったんです！」  
「シノス…、無茶はしないで下さい。」

神力、神威を封印されても神は神ですからね。

ダンジョンにもぐっても問題ないと思いますが、レベル1ですからね。

「アビリティ強化って、単に今まで通りということでしょうか？」

「はい、そうです。ですが、皆様は『白兔眷属』という成長促進スキルがあります。これは、経験値もそうですが坊ちやまへの想いが強ければ上がりやすくなります。現に、リさんはスキル取得後、ホームにずっといたに関わらず各ステータスがFに入っていま

す。」

「「はあ!?!」」

「事実です…私も驚いています。知恵を絞っただけなのに、ぐんぐんと上がっているんです。ベル様への想いが強ければ強いほど上昇幅が大きくなるようです。…レベル1で苦労したのは何だったのかと凹みました…。」

まあ、気持ちはわかります。

ですが、その恩恵をまだ活かさきれてないように私は思います。

それを最大限まで活かせれば、ランクアップまですぐでしょう。

リリさんだけではありませんが、一番注目するべきなのは彼女でしょう。

「バーチエさんもレベル7寸前です。後は偉業を積むだけです。」

「ええっ!?!もう!?!」

「はい、なのでティオナさんも姉のティオネさんを一蹴できるほど強くなれますよ?」

「おおーっ! よーし、やるぞー!」

ティオナさんもやる気が出て何よりです。

そして、伸びが一番大きい彼女を忘れてはいけませんね。

このスキルを今のところ、ファミリア内で最大限まで活かしているのは彼女でしょう

ね。

「エイナさんは入団及びスキルが発現してまだ2週間経ってないのに関わらず魔力がCに、その他のアビリティもEに入っています。毎日魔法を使用して、寝る前に精神疲弊するまで使っている成果です。」

「「たつたの2週間でそんなに!?!」」

「はい。このスキルは強力です。坊ちやまへの想いが強ければ強いほど上昇幅が伸びます。坊ちやまへの想いそのものが数字化するわけです。わかりやすいでしょう?」

「なるほど…確かに強力なスキルですね。ふふふ、ベルさんへの想いについては皆さんに負けませんよ?」

(シノス:様が一気に強くなるような気がします。ですが、私も負けません。変神魔法を封印されたら、後は戦うしかありません。ベルのためにも。)

神フレイヤは元々神の戦士と聞いています。

技術については恐らくファミリア内で一番になるかもしれません。

面白くなってきました。

さて、改宗組に言っておかなければいけませんね。

ここで生活していく上で肝心なところを。

「そして坊ちやまの世話です。改宗組はまだ知りませんが、坊ちやまは夕食後に私の特製ドリンクを飲んでいきます。その効果は完全回復と状態異常解消です。ですが、副作用

があります。」

「「……………」」

「え？副作用？」

「幼児退行です。」

「「は？」」

「言ってもわかりませんので、そのうちにわかりますよ。経験されている方は改宗組へのフォローをお願いしますね？」

「「はい！わかりました（これからもするのですね…）」」

「「??？」」

## 第262話 侍従長、危惧。

ふむ、連絡する内容はこのくらいですね。

後はアイズさん関連ですね。

「連絡事項はこのくらいでしょうか。質問はありますでしょうか？」

「はいはい！ベルくんの本命って、アイズだよな？何でここにアイズがいないんですか？」

『うわ、ストレートに聞きましたね。さすが「大切断」ですね…。』

『あ、リリさん。ティオナはそう呼ばれるのが嫌いなのでやめたほうがいいよ。』

『あ、はい。わかりました。気をつけます！ありがとうございます。アーデイ様。』

『様づけはいらないんだけど…。』

『すみません、それはリリの口癖なのでスルーしてください。』

『春姫と同じかー。』

ちようどよかったです。

ティオナさん、いいタイミングです。

「いい質問です。簡単に言う時期尚早だからです。」

「『時期尚早?』」

「アイズさんは、まだ自分の気持ちに気づいてないのと精神年齢が非常に幼いからです。」

「あの…精神年齢が幼いつて…第一級冒険者様ですよね?」

「アイズさんは半年前までじゃが丸くんとダンジョンしかない人でした。そうですね? ティオナさん、シノスさん?」

「…うん。本当にそれしかなかったんだよ、アイズは。あれでも柔らかくなった方なんだよ。」

「そうですね。いわば、剣そのものでしたね。私は興味ありませんでしたね(キリッ)。」  
何を威張っているのですか…。

まあ、元ファミリアでアイズさんと親しくしていたティオナさんがいるのは、非常に好都合です。

説明の裏付けとしては最適ですからね。

「そうなんですか…」春姫さんにわかりやすく言いますと、ウィーネさんより幼いですえ…:ウィーネ様より…下?」

「うわあ…そこまでですか…。」

「今のアイズさんが坊ちやまへどう思っているのかをアルフィアさんが聞きました。そ

したら…」

「「そ、そしたら…?」」

「ペット、と言いついアルフィアさんを激怒させました。」

「アイズ…それはないよ。」

「ひどい…ベルくんをペットなんて…。」

「アルフィアを怒らせるなんて…よく生きていましたね。」

「【九魔姫】が必死で宥め、止めていたそうです。」

「「うわあ…。」」

でしようね。セバスから聞いて、笑ってしまったところでした。

ですが、好都合です。いづれアルフィアさんとアイズさんと会わせる予定でしたから。

そこへ【九魔姫】と一緒にであれば、問題ありません。

おや、シノスさんが不満顔ですね。

まあ、お気持ちはわかります。

「あの…質問です。ベルさんをペットという方が、ベルさんの本命というのが納得できないんですけど…。」

コクコクコク



「ええ、ですが坊ちやまのスキル【憧憬一途】の対象がアイズさんです。それは変更不可です。」

「……………」

「納得できないようですね？シノスさん？」

坊ちやまを愛する女性として、その発言は認めたくないでしょう。

愛を司る女神がここまでなるとは、坊ちやまは未恐ろしいですね。

スキルの伸びが一番大きいのは彼女かもしれませぬ。

「はい、女としてでもベルさんを愛する女性としてでも、アイズさんの発言はスルーできません。…元神フレイヤとして愛を司る立場としてでもです。」

「なるほど、気持ちはわかります。ですが、セバスと私はアイズさんの現状を危惧しています。」

「「え？セバスさんとメイさんが危惧？」」

「はい、今のアイズさんを放置しますと非常に危険です。ファミリア崩壊…いえオラリ才崩壊に繋がりがかねません。」

「「ほ、崩壊!？」」

ええ、崩壊です。

アイズさんはそれほど危険な状況です。

まだシノスさんは納得できないという感じですね。

「あの…なぜそこまで危惧するのですか？【最強侍従】と【最恐執事】といわれた貴方がたが。」

「そうですね。整理しましょう。坊ちやまの【憧憬一途】が発現したのは【ロキ・ファミリア】の不手際がきっかけです。坊ちやまがアイズさんに一目惚れしたのがきっかけです。」

「…くっ、その前に私と会っていれば…！」

「ルウ、それを言うなら私をもっと早くベルさんと会っていればよかったです。」

それを言えばキリがないでしょう。

さて、ここで爆弾を落としましょう。

「ですが、アイズさんの方も坊ちやまに一目惚れです。」

「「え？」」

「「は？」」

「テイオナさん、あの日からアイズさんに何か変わったことはありませんでしたか？」

「…あったよ、すごく。あの日の夜に宴会をやったんだけど、ベートの発言であんな悲しそうなアイズは初めてだったよ。その翌日にもダンジョンに潜らずホームでボーっとしてたんだ。」

やはりそうでしたか。

これで確信が持てました、今のアイズさんは危険な状況であることを。

「エイナさん。【ソーマ・ファミリア】関係でアイズさんに依頼した時気づいたことありましたか？」

「…ありました。【ロキ・ファミリア】で神ロキとリヴェリア様へ相談に行った時、アイズ氏はすぐくがつかりしていました。そして依頼の際、アイズ氏はベルくんに怖がれていないかと相談もされました。今、思えば確かにアイズ氏は当時ベルくんに興味を持っていましたね。」

「あー、確かウダイオスを倒した帰りに今までないほど意気消沈していて、リヴェリアと話していてじゃれ合っていたなー。…それもベルくん？」

なるほど、あの時ですか。

坊ちやまが魔法を初めて取得しダンジョンへ潜った時ですか。

「はい。坊ちやまはその日に魔法を取得していて、精神疲弊するまでダンジョンに潜っていました。精神疲弊した坊ちやまを膝枕したのがアイズさんです。目を覚ました坊ちやまは、あまりの恥ずかしさによりアイズさんの前で逃亡しました。」

「「あー…。」」

「だから、アイズはあんなにガツカリしてたんだ…。一目惚れかー、あのアイズが。」

ティオナさんがいてよかったです。

アイズさんの親友が坊ちやまのハーレムにいることを。

「はい、その後もアイズさんは坊ちやまが関わることに興味を持たれたのではないでしようか？」

「うん、今思えば確かにベルくんが少しでも関わると、身を乗り出して聞くぐらいだったよ。」

「アイズさんがベルさんに一目惚れなのはわかりました。それが何故崩壊に結びつくのでしょうか？」

まだわかりませんか？

シノスさんが一番気づくと思ったのですが、早くもヒューマンに溶け込んでいますね。

いいことなのですが、神フレイヤであったことを忘れないでほしいです。

まあ、悪いことはありませんが。

わかりやすく説明して差し上げましょう。

神フレイヤにとって、トラウマとなるものを。

「わかりませんか？アイズさんのペット発言に、一目惚れであることを聞いても？」

「「「??」」」

「そうですね。一番反対しているシノスさんにわかりやすく言いましょう。」

「え？わ、私ですか？」

「セバスと私は意見が一致しています。今のアイズさんをそのまま放置しますと…」

「し、しますと？」

「かつてオラリオで最強最悪を誇った超絶残酷破壊衝動女の神ヘラと同じ、ヤンデレの道を歩む可能性が非常に高いです。」

「大変理解いたしました！全面協力いたします！絶対にそれは回避しなければいけませんー！」

「[[[?!]]」

「理解していただけて嬉しいです。さすが、神ヘラと渡り合っただけはありますね。」

「好きで渡り合っただんじやありませんよ！ああ…何てことなの。何故気づかなかつたの…私は！不味いわ…不味過ぎる…。」

早くも理解してくれましたね。

狼狽しすぎでしょう、と言いたいです。仕方がありません。

神フレイヤにとつて忌むべきことですからね。

「あ、あの…シノス？」

「皆さん！アイズさんを至急、真つ当な恋する乙女にさせなければいけません！そうし

ないと、私達いえへステイア様も含めて皆殺しにされます!」

「皆殺し!」

「神ヘラに仕えていたセバスさんが危惧するなら相当なものです…。い、今のところは  
どうなんでしょうか?メイさん?」

「今の時点はまだ大丈夫ですね。坊ちやまとの繋がりを断たれるのを非常に恐れていま  
す。私とセバスに相談するよう強く言っています。」

「なるほど…。なら、私達がその受け皿になる必要があるということですね?」

「はい、その通りです。」

早くも対策を考えてくれましたね。

シノスさんがいてくれたことにより、計画が早くも進みそうで何よりです。

「アイズが私たちを皆殺しにするわけがないと思うけど…。」

「テイオナさん、アイズさんが執着しているじやが丸くんを坊ちやまに置き換えてみて  
下さい。そして、お姉さんのテイオネさんの【勇者】に対する態度や【勇者】へ近づこ  
うとした女性への殺意をアイズさんにイメージしてみして下さい。」

「……………ひっ、…………ヤバイ、ヤバすぎる!アイズをテイオネのようにしちゃいけない!  
(テイオナ…………テイオネに対してひどい扱いだな。)」

「へっくち！」

「おいおい、テイオネ風邪か？気をつけろよ。」

「ええ、ライラ。きつと団長が私のことを噂しているに違いないわ！」

「フィンなら、ずっとそこにいるぞ？」「……………」

「い、言ってみただけよ！」

## 第263話 受付嬢、決心。

驚きました…。アイズ氏がそのような状況にあるなんて…。

しかし、シノスさんが受皿と言いましたが、どのようにしたらいいでしょうか？

「それについて、対策は2つあります。皆さんはそれに従ってもらいます。」

（（ゴクリ……））

「1つ目、アイズさんを妹扱いして下さい。」

「「は？」」

い、妹？

「先程言いましたように、アイズさんの精神年齢は非常に幼いです。今、扱いを間違えますと大変なことになります。」

「…第一級冒険者が、ウイーネ様以下…。」

「リリさん、その先入観は捨てて下さい。アイズさんは坊ちやまと会ったことにより少女になりつつあります。なので、皆さんはアイズさんを妹扱いで可愛がってあげて下さい。」

「そう言われても…。」



アイズ氏が第一級冒険者になったこともあり、【剣姫】と呼ばれるほどの人を妹扱いは少々ハードルが高くありません？

「戸惑うのもわかります。【ロキ・ファミリア】では王族妖精である【九魔姫】が教育したことにより、アイズさんはお姫様扱いされています。第一級冒険者のこともあり、アイズさんは孤立しつつあったのではありませんか？ テイオナさん？」

「…そうだよ。あたしから誘おうとしなかったらアイズはずっと一人だったんだよ。」

そういうえば、【ロキ・ファミリア】内ではそういう感じてしたね。

リヴェリア様はそういう扱いは嫌っているのは知っていました。アイズ氏もその影響を受けてたのですか…。

ある意味、改宗は正解だったかもしれません。

「今まではダンジョンやじゃが丸くんが紛らわせていたでしょう。ですが、坊ちやまという優先第一位ができた以上、アイズさんは坊ちやまへの執着ができてしまい、坊ちやまを完全に自分のものとしようとし周りのものを排除、いえ殺害しかねません。」

「「ひっ!?!」」

「だから、不味いといったんです！ 神ヘラも大神ゼウスが浮気するたびに相手の女性を何十人殺害したり、女神を何柱かを送還させたりしていました。」

「テイオネはそこまではしてないけど、将来そうなる可能性が高いよ…。」

神ヘラって、そんな危険な女神だったのですか…。

そういうえば、アイナ母様が「神ヘラは面倒だったわー。まあ夫の大神ゼウスが一番悪いけどね!」と言ってたような気が…。

アイズさんを孤立させなければいいということですね。

「要するにアイズさんが神ヘラのようなになるかは貴女方次第です。坊ちやまのハーレムの命綱を握っているのも貴女方次第なのです。」

「理解しました。アイズさんを私達に溶け込ませる必要があるということですね?」  
「そうです。」

なるほど…、となるとアイズ氏…いえアイズさんと呼んだ方がいいですね。

皆さんとの連携が不可欠ですね。

「……仕方がありません。ベルのためにも協力しましょう。」

「ルウはやめたほうがいいわ。いつもの通りでいいわ。」

「そうですね、ルウは余計なことほしないで下さい。」

「な、何故ですか!?!」

「だって、ルウはいつもやりすぎてしまうから。」

「うぐっ!?!」

……組む相手を考えなければいけないよね。

「皆さんが理解してくれて嬉しいです。アイズさんを貴女たちが接しやすい本妻にしてあげて下さい。教育は私とセバスがやります。」

「わかりました！」

接しやすい本妻…。

そうだね、ベルくんを囲むならベルくんの本命であるアイズさんを私達を中心にするには接しやすいアイズさんにしなければいけないということだね。

「では、2つ目。アイズさんの目の前で坊ちやまへのボデイタッチを多くして下さい。」

「「は？」」

ボ、ボデイタッチを多く!?

「オラリオ連合となつた今、坊ちやまはより強くならなければなりません。それはもちろん貴女たちも同じです。坊ちやまのスキル、貴女方のスキルを最大限まで引き出さなければなりません。」

「あの…今以上にですか？」

「当たり前でしょう。貴女方のスキルは坊ちやまへの想い次第なのです。ボデイタッチが多ければ強いとは言えませんが、少なくともまだ伸びる余地はありますと私とセバスは見ています。」

「ど、どこまででしょうか？」

「そうですね。頬にキスまでですね。」

「問題ありませんね、ええ。」

それって…ギリギリじゃ…。

シノスさんは慣れているけど、私にとっては理性が保てるかが不安です。

うう…理性をしつかりと保たないと。

「頬にキスなんて…そんなこと…。」

「ルウさん、貴女が深層で坊ちやまに「わかりました！やります！やりますから、それ以上は言わないで下さい！」やる気が出て結構です。」

「ルウ…貴女、ベルさんに何したの？」

「それは…その…。」

「さて、「スルーされた!」今回の招集はこのくらいいいでしょう。ローテーションは一旦リセットして、リリさん・春姫さんから始めましょう。カサンドラさんもアリーゼさんも抜けましたから。」

リセット…。そっか、新たに加わった彼女たちも含めないといけないんだ。

周回がますます遠のくなあ…。

「「ローテーション?」」

「…後でわかりますよ、皆様。」

そうですね。

今日もベルくん、メイさん特製ドリンクを飲むだろうな。

あ…そうだ。

メイさんへ聞かないと。

「アイズさんの目の前でやりますと、不味いことになりませんか?」

「アイズさんの感情を引き出すためです、坊ちやまがキーですから。その後は私達がフオローします。アイズさんと親しくなればアイズさんは貴女方へ手出ししにくくなるでしょう。」

「なるほど…。ギリギリの綱渡りになりませんか?」

そうですね、感情の高ぶりによって危険なことになりかねませんから…。

ここにはアイズさんより上の強い女性…あ、いましたね。

メイさんとアルフィアさん、そして戦争遊戯で勝ったルウさん。

大丈夫かもしれないね。

「大丈夫です。ああ、アイズさんへ接するのは皆様もですが、特に春姫さんとエイナさんはアイズさんを目にかけてください。」

「え? あ、はい。わかりました!」

「アイズ氏…いえアイズさんにですね。承知しました(妹を世話したことあるし、その感



「そうですねー。私達が「フレイヤ・ファミリア」で苦労している間に何をしていたのかを聞きたいですねー。」

「「カサンドラさん…一体ベルと何をしていたのですか?」」

「あんだ、何してきたのよ?…全部吐け。」

「ひ、ひいつ!」



「アストレア・ファミリア」元ホーム」

「はあ…ベルの腕枕はよかったなあ…。」

「腕枕ですか? 私は胸枕でございますね。」

「え? 何でよ! あんだ、私と一緒に添い寝したじゃない!」

「団長様が熟睡した後に、若様へ乗っかって寝かせていただきました。」

「ずるいわ! 輝夜!」

「熟睡する団長様が悪いのでございます。それは置いといて、久々にホームへ戻ったが…、私達にとって数日もないのでほこりの様子を見ると、5年以上も経っているな。本当に未来へ来たのだな。」

「そうね。…でもこんなに広がったかしら?」

「やめろ、団長…。あいつらは死んだんだ…。リオンは若様のところへ、ライラは「勇

者」のところへ監査役として行っただけだ。」

「そうね……。一からスタートかしら？」

「ああ、セシルもいることだしな。」

「あ！団長、副団長！こちらの荷物はどこへ置けばいいでしょうか？」

「ああ、玄関のところに置け。……いなくなった奴らのものを置いてもしようがないからな。」

「……輝夜。」

「言うな、私だつて辛いんだ。だが、死んだやつらをいつまでも思っていてもいいつらは成仏できないだろうが。」

「……そうね。」先輩方……」

ガチャ

「あら、アリーゼに輝夜、セシル。みんな、ダンジョンから戻ったのね、丁度よかったわ。」

「「？」」

「今から【ハステティア・ファミリア】へ行くわよ！試してみたいことがあるの。」

「ねえ、輝夜。私何か嫌な予感がするわ……」

『奇遇でございますねえ……団長様。私もです。』

『先輩方……私もです。』



## 第264話 白兔、準備。

うう…：やっと終わった。

けど、師匠の言う通り団長としてやっておかないと…。

頑張ろう！

「坊ちやま、お疲れ様です。」

「あ、セバス！どうしたの？」

「はい、今から戦勝会ですので着替えを手伝いに参りました。」

「ええっ！今日、戦勝会だったの!?!」

僕、聞いていないよ！

「坊ちやまはヘディン殿との勉強をしていましたので、報告は控えておりました。」

「あ、ごめんね…：セバス。それで祝賀会はここでやるの？」

「いえ、ギルドが管理している施設です。覚えていますでしょうか？「アポロン・ファミリア」の『宴』で使用していた施設でござります。」

「あ、あの時の！なるほど…。あーじ、準備をしなきゃ！」

僕、団長なのに何をやっているんだよ！

だから師匠に怒られるんだ…。

「すでに整えております。ザルド殿は既に料理をしております。」

「ええっ！ザルド叔父さんが？」

「はい、皆様も着替え中です。後は坊ちやまだけでございます。」

「わわわ！あ、参加者は僕たち「ヘスティア・ファミア」だけじゃないよね？」

「はい、戦争遊戯に参加していただいた方もおります。そして…」

「ええっ!？」

あの人たちも!？」

「アルフィア！貴女も参加するよね！（アストレア様に引き連れてきたと思ったたら宴だったのね…）」

（嗚呼…ベルの血を飲もうと思ったのに…。まあ、いいわ。機会は今からもあるからいいわ。）

「断る。何故そんな騒がしいところへ、行かなければならないのだ。貴様らだけで行け。」

「しかし、貴女のお『ギロリ』いえ、義息子さんのベルも参加するのですか。」

「私は行かん。」

お義母さん、どうしたんだろう？  
病、大丈夫かな？

「あ、みんな待たせてごめん！うわあ…みんな綺麗だよ。」  
うわあ…、みんなドレス姿…振り袖姿だ…。

綺麗な女の人が綺麗な服を着たら、更に綺麗になるよね。

「「おお〜！」」「ほう…。」

あれ？みんな、どうしたの？

「ベル様もかっこいいですよ！」

「ベルくんの正装は初めて見るけど、凛々しいね。」

「「はい！」」

そ、そうかな…。

「さてベル、行こうか。エスコートを頼むぞ。」

((早っ！))

あれ？さっきまで行かないと言ってたなかつた？

それに…お義母さん、いつもの服でしょ？

「え？あ、うん！お義母さんは…そのままでもいいの？」

「私はドレスだ。問題ないだろう？」「あ、うん！」

ドレス…。その服で、よく今まで戦えたね…。

お義母さんのファミリアの人って、そういう服なんだ…。

『さつきまで行かないと言ってたのに…。』

『若様が絡むと、ここまでとは思いませんでしたね。』

『『親バカにも限度あるだろ…。』』

留守番は、フリユネさんとザニスさんをお願いした。

セバスとメイが信頼しているなら大丈夫だね！

そして、僕らはパーティー会場についた。

入り口あたりでアイシャさんとローリエさんとシャクテイさんに会った。

「あ。アイシャさん！シャクテイさん！戦争遊戯ではありがとうございます！ローリエさん、記者会見や裏方ではありがとうございます！」

「あたしは何もやってないけどね。」

「いいえ、力になれてよかったです（ベルきゅん！ベルきゅんの力になるなら、世界を敵に回したって構わない！）」

（ローリエ…、お前…。はあ…もういいよ。）

「気にするな。レベル6の調整には丁度よかつたからな。…それにこの程度ではア—

デイを連れてきたことの礼の一割にもならん。ところで、アーデイはそちらで迷惑かけていないだろうか？」

「ちよつと、お姉ちゃん！ どうして私が迷惑かけている前提なの！」

「そういうところだ。」

「むー！ あれ？ ガネーシャ様は？」

「あそこで、神々と酒場の娘…？」「シノスさんだよ」と話しているな。」

あ、本当だ。

シノスさんとレアお姉ちゃんと、ガネーシャ様とヘファイストス様だ。

『本当に神の力を感じんな！』

『どうなっているのよ…。』

『ずるいわ…フレイヤ。ベルの眷属で女神第一号になるなんて…。』

『確信もってやったわけではありませんよ。偶然です、ぐ・う・ぜ・んです。』

『…まあ、いいわ。私も飲むから。』

『アリーゼさんたちはどうするんですか？』

『試してみないとわからないでしょう？』

『本気で言っているの？ アストレア。…まあ、私もやってみたい気がするけど眷属が多  
くいるとね…。』

『…俺も飲んでみようかな。』

『あ、女性限定でベルさんへの好感度がかなり高くないと無理ですよ?』

『ぬおおおつ…ガクツ。』

『残念ね…。』

どうしたんだろう?

ガネーシャ様とヘファイストス様、何かガツカリしているような…。

「ニヤー!白髪頭、来てやったニヤ!泣いて喜「あ?」ぶのはミャーニャ…。ハイ、スママセンニャ、ミャーハウレシーニャ。」

「アーニャ、ヤバい奴らが多くいるのに何でそんなことができるのニャ…。」

「あたしにはできないよ…。それに…テーブルの上の料理、かなり美味しそうだけど…。」

お義母さん…、そんなに脅かさなくても…。

「あたしたちが参加していいのかなあ…?」

「メイさん曰く、戦争遊戯勝利の宴と私達の歓迎会のようですよ?」

「…。(ベル…、多くの女の人に囲まれている…)。」

「まあ、いいじゃありませんか。」

あ…、元「ロキ・ファミリア」の皆さんだ。

あれ？アイズさん、こつちを見て…あ、目逸らした。  
どうしたんだろう？

「敵対したファミリアが1つになって集まっているのは、なんとも壯観だな。」

「……人が…いつばい…。帰りたい…。」

「まあまあ、ヘグニ。俺らがいるから、大丈夫だぜ。だが、リリスケのやつは…（チラツ）。」

師匠とヘグニさんとヴェルフだ。

いつの間に仲良くなったんだろう…。

「姫、ベルへ猛アタックを。」

「姫、先手必勝です。」

「姫、他の女に負けてられません。」

「姫、油断大敵です。」

「ああ、もう！そんなことはわかっていきますよ！アレを見て下さいよ！ベル様の近くにお義母様がおられるのに、簡単にできるわけがないでしょう！」

「「サーセン。」」

あれ？リリと【炎金の四戦士】が何か揉めている？

大丈夫かな…？

舞台の上にヘステイア様が立っている。

「さて、これで全員揃ったね？」

「はい、ヘステイア様。」

「では…みんな、戦争遊戯お疲れ様！そして、改宗してきたみんなも気楽にしてくれたまえ！では…乾杯！」

「乾杯！」

僕たちは…「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」に勝ったんだ…。

今更だけど、ようやく実感が得られたよ。

それに…何か背後からずつと視線を感じるんだけど、気のせいかな。

だって、その方角は「ロキ・ファミリア」から…。



## 第265話 悲観者、謝罪。

うう…怖いよう…。

まさか、「ヘスティア・ファミリア」の元ホームがアルフィアさんの思い出の場所だったなんて…。

ダフネちゃんから聞いた時は、気を失ってしまったよ…。

それに、ここ2週間についてやむを得ず全部話してしまった…。

ミアハ様とダフネちゃんは呆れ、団長は羨ましく思い、ヘイズさん方からはブーイングされた…。

だって、仕方がなかっただもん！

メイさんとセバスさんの命令というと、同情してくれた。

複雑だよう…。

「ウニャー！この料理、ミア母ちゃんより美味しいニャー！」

「まじか…。ミア母さんより美味しい料理が存在するなんて…。」

「誰が作ったニャー!？」

「こっちはそれどころじゃありません！」

「生きるか死ぬかの瀬戸際なんです！

あ…、団長とアミッドさんです。

「なかなか美味しいですね。この料理は。」

「……うん。美味しい……。」

「まさか、お前までも復活しているとはな、【暴喰】。」

「久しぶりだな、神ディアンケヒト。」

「…ベヒーモスの毒は…?」

「ベルのおかげで大体抜けた。」

「そうか……。あの時、メーテリアに墮胎薬を飲ませなくてよかったと思うぞ。」

「……爺の手柄と言いたいが、その爺が今、命の危機確定だな……。」

「ふん！自業自得だ！」

……【暴喰】？

誰でしょうか？後で団長へ聞いてみましょう。

あ…【ロキ・ファミリア】の皆さんだ。

あれ？アイズさん…ベルさんをずっと見ている…。

「……モグモグ…（ベル…女の人と楽しそうに話している…）」

『あの…ティオナさん。アイズさん、ベ…団長を見ながらじゃが丸くんをすごい速度で

食べていますけど…。』

『あー…（みんな、メイさんの指示どおりにやっているな）。気にしないほうがいいよー。』

「アイズ…じゃが丸くんだけでなく、他のものも食べたほうがいいですよ？リヴェリア様からの言いつけですのよ。」

「うん…モグモグ…（あ、また他の女の人と…）。」

「聞いていないみたいですよ…。会場入りしてからずっと団長の方を見てばかりですよ。」

「あの時、リヴェリア様とアルフィアさんの間で何があっただけでしょうか…。」

「き、気にしないほうがいいよ（メイさんの言っていたことは本当だったんだ…）。」

どうしたんだろう？

そういえば、この祝賀会が終わったらメイさんから呼び出しがあったんだ。

何だろう…？

いけない、ダフネちゃんとアルフィアさんに謝罪しないと。

アルフィアさんとの面識が多いのは私なんだから。

ベルさんとミアハ様も一緒にいるから、死ぬ…ことはないよね？

よし…！

「あ、あの！あ、アルフィア様！」

「何だ……？」

「大変申し訳ありませんでした！」

「え？え？え？」

「これ、お前たち。いきなり謝ってはアルフィアも戸惑うだろう……。」

はっ！いけない……。

「神ミアハ……、どういうことだ？」

「ダフネ、カサンドラ。お前たちから言わなければならぬだろう？」

「はははは、はい！」

「そ、それは……あの……。」

うう……怖いよう……。

「(イライラ……) さっさと見え。」

「はい！教会を破壊したのが私達の元ファミリアの所業ですみませんでした！」

「何だと……？よし……そこに直れ。覚悟はできているだろうな？」

ひいひいひいひい！

怖ひいひいひい！

「お、お義母さん！ダフネさんとカサンドラさんは僕たちを多く助けてくれたんです！」

「まあ待て、アルフィア。彼女たちは教会の破壊には反対していたそうだ。」  
「……説明しろ。」

「はい！」

ありがとうございます！

ベルさん、ミアハ様！

「……ということですが。私達は反対したんですが、多数決で押し切られました……」

「……なるほど。ベルと神ミアハがそこまで言うのなら、お前たちは許してやる。」

「ありがとうございます！こ、こちらはつまらないものですが……」

今日の朝一で並んだ甲斐があったよ！

「そこまでせんでもよかろうに……。まあいい、ありがたく受け取っておこう。……提案したのは変態神と変態神の糞だな？」

「はい！」

団……ううん、ヒュアキントスさんを糞扱い……。

「……そうか。奴らはオラリオへ来ると思うか？」

「ヒュアキントスは来ないと思いますが……アポロン様「様？」いえ、アポロンはあの戦いを見たら強行してオラリオへ来て……【白兔の脚】に会いに来る可能性が高いかと。」

「ええっ！戦争遊戯で負けたのに？」

「べ、ベルさん。アポロン…はそういう神なんです…。」

「ひいっ！」

うん、アポロン…様はそういう神。

ダフネちゃんもそうやって狙われたんだから…。

「…そうかそうか。なら好都合だな。」

「「へ？」」

「来るなら、この私の手で葬ってくれる。…ああ、楽しみだ。」

「「ひいっ！」」

「その時はお前たちも協力してもらおうぞ？ああ、ベルは見に来なくてもいいぞ。目が汚れるからな。」

本気だ！本気で言っている！

私達も協力…？レベル7がレベル3の私達に？

何をする気なんだろう…。

「アポロンは腐つても神「あ？」いや、止むを得ないだろうな。」

「お、お義母さん！神殺しは大罪じゃあ…。」

「ベル、安心しろ。私のファミリアの主神ヘラは、そういったことに長けている。神をい

かに殺さず苦しませるかを教えてもらっていたのだ。」

「ええっ!？」

(何を教えているのだ…ヘラは。)

怖すぎる!

「ああ、お前は知らなくていいのだ。お前の実母のメーターアは一応知っているが、消極的だった(ブチキレてなかったらな)。」

「そ、そうなの? その…殺さないでね?」

「ああ、わかっているとも。お前は本当に優しい子だな。」

「えへへへ。」

……それでも怖いです。

アルフィアさんの言う通り、ベルさんは知らなくてもいいと思います…。

『アポロン様が気の毒に思えてきたよ…。』

『わ、私も…。』

『しかし、どうやるのだ…? まさか…ヘラがここへ来るのか…? ……来ないことを祈っているぞ、アポロン…。』



「ぶえつくしよん!」

「ちよつと、こつち向いてくしゃみしないでよ！ああ！服に飛沫が！」

「ふ…きつとベルきゆんが私のことを噂しているに違いない！」

「…脳をやられたの？陸に寄ってあげるから、下船しなさい！」

「だが、断る！」

「そのドヤ顔、腹立つわね！誰のおかげでこの船に載っているとと思っているのよ！」

「私だが？私の眷属たちのおかげで船の平和は保っているだろう？」

「あんたらがいなくても保っているわよ！というかどこかへ去りなさい！」

「オラリオへ行くのだろう？なら私もだ！一蓮托生で行こうではないか！」

「一蓮托生!?冗談じゃないわよ！あんたのような変態神と組むなんてお断りよ！」

「お前の主神はああ言っているが？」

「私とて、あの兎なんぞに遭いたくない！…だが、アポロン様の言う事は絶対だ。仕方がないだろう…。」

「こつちもアフロディーテ様のわがままで大変だが、お前も大変だな…。」



## 第266話 愚者、接続。

そろそろ、頃合いか…。

「愚者、そろそろいいでしょう。」

「メイ…いいのか？」

「構いません。いずれは知っておかないことでしょうか。」

「わかった…。私としては望むところなのだから。」

さて、始めるか。

「みなさん、ご歓談のところすみません。只今より、『ヘステイア・ファミリア』のトツプシークレットの一つをお見せいたします。」

「…奴ら、何をするつもりだ？」

「え？え？メイくん？何をするつもりだい？」

「では、愚者。繋いで下さい。」

「ああ、分かった。」

ポチッ

ヴイイイイイン…。

「お？映った？おお、ベルツち！」

「ベルー！」

「リドさん！ウィーネも！」

「な!?異端児のみなさん!?メイさん、どういうつもりですか!今はまだ早いです！」

「今がその時期です。」「…少々手荒くないでしょうか？」

「問題ありません。ほら、ご覧なさい。」

「モンスター…?いや、違う。彼らの言っていた異端児か。」

「ああ、あいつらのおかげでベルは深層の危機から助かったんだ。」

「あの時の…。」

「レイは…いますね。無事でよかったです…。」

やはり混乱したか。

仕方がないだろうな。

「さて、みなさん。混乱中と思います。こちらは異端児で、知識のあるモンスターです。

神ウラノスの私兵であり、坊ちやまの信頼が厚き者たちでござります。」

「…:メイ、セバス。どういうつもりだ?このモンスターを…:「お義母さん!モンスター

じゃない!異端児です!」…:異端児をどうするつもりだ?」

ベル・クラネル…。

あの【静寂】を怒るとは…。

「簡単なことでございます。異端児の方々も【ヘステイア・ファミリア】の仲間でございます。そうですか？ヘステイア様。」

「そうだよ。彼らは…モンスターだけどモンスターじゃない。ボクたちと同じ、知識と感情を持つ者たちだ。仲良くしろとは言わないけど、彼らのような存在がいることを知ってほしい。そして、【ヘステイア・ファミリア】は彼らを全面的に支援する！」

「…ヘステイア様。」

神ヘステイア…。

貴女はやはり、ウラノスが認める慈愛の女神だ。

ベル・クラネルが貴女の眷属でよかったと深く思う。

そして、感謝したい。

「ふむ…そこらの有象無象よりはマシですね。異端児の方々、私はヘディン・セルランドと言います。よろしくお願いします。」

「お？おお、よろしくな！ヘディッチ。」

「「ブブウツ！ヘディッチ!？」」

「…好きに呼べ。」「おう！」

……あの【白妖の魔杖】がな。

リド、グッジョブだ。

今ので、緊張がほどけた。

「あら！先を越されたわ！私はアリーゼ・ローヴェルよ！ご覧の通り、完璧美少女よ！」

「「完璧…美少女？」」

「ちよつと!?何よ、その反応！」

「異端児の方々はまともな感性をお持ちでございませぬえ「輝夜!?!」私はゴジョウノ・輝夜といひます。よろしくお願い致します。」

「かぐやー?」「はい、ウイーネ様。この方は私の親戚でありお義姉さまです。」わあ、よろしくね！私、ウイーネ！」

「おやおや、可愛らしいお嬢様だこと。春姫の言う通りのいい娘ですなえ。」

「えへへー。」

((可愛い…っ。))

ウイーネ…。

君がいなければ、ベル・クラネルとの繋がりもなかっただろう。

あの異端児騒動も…。

そして、この光景もみることもありえなかつたな。

「エリスイス…大丈夫ですか？」

「大丈夫…大丈夫だよ。…あれが…ううん、彼らがベルの言っていた異端児か…。うん、何とかなりそうかな。」

あの様子では大丈夫のようだな。

彼女のトラウマ払拭のため、紹介した方がよさそうだな。

「フィアという方はおりますでしょうか？」

「あ、うん！あたしだよー！」

「先日は、ベルと一緒に深層から助けをいただきありがとうございます。このような形ですみませんが、直接御礼に伺います。」

「ううん！気にしないでー！」

…あの【疾風】、いや【薫風】が…。

そうだったな、ジャガーノート戦で傷ついた彼らを助けたのはフィアとウィーネたちだったな。

「レイ…元気でしたか？」

「アリシア、貴女も元気でしたか？」

「はい、元気です。レイ、私は【ヘステイア・ファミリア】に改宗しました。」

「わア、ソレはよカッタです！」

「今は画面越しですが、今度は直接お話ししたいですね。」

「ハイ！」

あの時、レイが庇ったエルフか…。

クノツソスで、彼女と共に行動したと聞く。

「マジか…。」

「アーニヤ…、あの時のモンスター…うん異端児だよ。」

「あ、ホントニヤー！こすぶれじやなかったニヤー!？」

（こいつ…今の今まで信じていたのか!?)

ああ…ミユラーの件か。

……まあ、大丈夫だろう。

「…あいつらだったな、俺らが見つけたのは。」

「…ザルド。」

「アルフィア、受け入れろ。俺らがやむを得ず拒否したのをベルは受け入れたんだ。」

「……そうだな。」

「俺らはいつらに謝らなきゃいけない。俺らの都合のためにあいつらを切り捨てたんだ。」

「……あの時は仕方がないだろう。」

「だが、ベルは全てを救うということを…『偽善』を通したんだ。それは俺達「ゼウス・

「ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」を超えたんだ。」  
「……ああ、自慢の義息子だよ。」

異端児を見つけたのは、「ゼウス・ファミリア」だったな。

その後、保護したのはいいが紆余屈折あつて決裂してしまつたと聞く。

私が介入する前だったのを覚えている。

まさか、異端児との橋渡しをしたのが彼らの系譜を持つ、ベル・クラネルとは誰も予想できないだろうな。

## 第267話 愚者、様子見。

「……………っ。」

「アイズさん、駄目ですよ。あの方々は異端児であり、モンスターではないですよ。」

「わかっているよ…。私はあの竜の娘に助けてもらったんだから…。」

「あたしはあの娘が子供を助けたのを見たんだ。…ベルくんが守りたいというならあたしも手伝うー!」

「テイオナ!?!」

「アイズ…ベルくんは異端児を、あの娘を守ろうとしているんだよね?」

「うん…あの時…私とベルが戦った時…ベルは…あの娘たちと笑って暮らせる世界が欲しい、と言ったんだ…。」

「世界…ですか。」

「世界か…。黒竜を倒すより大きいな…。なら支えないといけないよね!」

「テ、テイオナさん!?!」

「アイズ、レフィーヤ、アリシア。あたしはもう「ロキ・ファミリア」には二度と戻らない。これからずっとベルくんの側について、ベルくんを支えていく。そう決めたんだ。」



「テイオナ…。」

「たとえ…世界を敵に回したって、あたしはベルくんについていくよ。」

「!!」

(テイオナさん…いつの間になんか強くなったのですか…?)

意外だ…。もつと抵抗すると思っただが…。

【純潔の園】は状況が状況だったからわかるが、【大切断】もか。

「あの方々が…(エルニアの貴族屋敷から救った方の遺品を渡さなければいけませんね)。」

「とうとう異端児のことを知ってしまったか…。」

「あんたらは知ってたのかい?」

「【ガネーシャ・ファミア】の幹部陣だけはね。…でも異端児のみんながベルくんになんか信頼を置いているなんて…。」

「私達はどこか距離を置いていたからな。【白兔の…いや、義弟は我々より深く踏み込んで、異端児の信頼を得たんだな。」

「「義弟!」」

「ちよ、ちよつと!お姉ちゃん!」

「何だ?違うのか?お前はあの時、義弟にプロポーズしたのではないか?」

「「プロポーズ!?!」」

「その話、詳しく聞かせてもらいたいねえ。」

「ああ、いいとも「ちつともよくない!」お前が出会い頭に言ったんだろが。」

「やーめーてー!」

【ガネーシャ・ファミリア】は異端児のことを知っているが、ベル・クラネルほど深くは踏み込まなかつたからな。

本当に【象神の詩】も復活していたのか…。彼女が第一号とメイから聞いた。

はあ…本当に驚かせてくれるな。

「あんなにいるとはね…。」

「ええ…画面越しだけど実物を目の前にするとね。それに思ったより混乱が少ないわね。」

「…あの時、ヘスティアに味方してよかったわ。」

「ああ、そうだな。だが、ヘスティアの慈愛がなければ彼らと分かち合うことはなかつただろう。」

「違いますよ、神ミアハ。ベルさんがあの竜の娘の手をとったからこのような光景を見れたんです。」

「…メーテリアの息子はどこまでも俺等を驚かせてくれるのだ…。だが!仲良くしてお

けば貴重なユニコーンの角や人魚の血などを得られるだろう！」

「まあ、公平な取引をするならいいが！しかし、異端児のあの表情は俺らではできなかつた！ベル・クラネルは数十日で彼らの信賴を掴み取つたのだ！ガネーシャもビツクリだな！」

ああ、私もだ。

まさか、1回の邂逅で宴会をやるとは思わなかつた。

「レイ、ウタツター！」

「え、エト……。ワ、わかりました。お耳汚しですが……。♪」

「む……。」

せ、【静寂】？

関わりうとはしなかつたのに、画面の近くまで行つて何を……？

「お、お義母さん？」

「♪……、あ、アノ……？」

「邪魔してすまなかつたな。続けてくれ。」

「あ、ハイ。♪」

「いい歌だ……（メーテリアに聞かせてやりたいな）。」

……レイの歌を気に入つたのか。

彼女の歌はたしかに美しい。

モンスターではなく純粋な声によるものだからな。

それが【静寂】の琴線にかかったのだろう。

「これは…魔力ではなく単に純粋な声による歌か…。うむ、いい歌だ。」

「……俺はあの異端児を守る…。友を守るなら俺も守る…。」

「ヘグニ…。ああ、俺もだ。」

ヴェルフ・クロツゾ…【白妖の魔杖】に【黒妖の魔剣】もか。

む？【単眼の巨師】と【戦場の聖女】？

「ヴェルフ、彼らとの橋渡しを頼む。」

「椿…？」

「【白兎の脚】が持つ『白幻』は、あのユニコーンの角から造り上げたものだろうか？」

「はあ!?!ユニコーンの角を武器に!?!」

「ああ、そうだ。ベルは、その武器のおかげで深層のペルーダの猛毒の毒を解毒したんだ。俺はそのつもりがなかったんだがな。」

「ペルーダの猛毒を…。」

「単に試し切りしてドロップアイテムを取るより、あいつらと交渉して角や爪などを武器や防具と交換した方がいいんじゃないかと。お互い益があると思うんじゃないか？」

「…まあ、搾り取るよりはマシか。聞いてみるか。」

「あ、ヴェルフ・クロツゾさん」「…家名はやめてくれ」失礼しました。ヴェルフさん。私もお願いします。私も彼らへポーシヨンなどの回復薬を提供したいのですが。」

「……要望が多いな。まあ、あいつらも魔石がいいがドロップアイテムはいらんとこぼしていたな。今から聞いてみるか。」

早速動いたか。

「私も…「愚者、様子を見なさい。」…わかった。」

私が干渉しなくてもいいように、か。

そうだな、見てみよう。

## 第268話 愚者、感激。

「よう、リド、グロス。」

『ん？おお！ヴェルフっち。どうしたんだ？』

『：ワタシハ、コウイウサワガシイトコロハスキデハナイ…。』

「それはすまん。ところで、お前らドロップアイテムの扱いに困っていると云ってた  
だろ？」

『そーなんだよ！魔石だけならアレは食えないしなあ。』

『そしてお前らの爪や角も処分に困ってたよな？』

『お？そうだよ。』

『ソレガドウシタノカ？』

そういえば、そうだったな。

彼らから提供してもらっているが、私も仕事があるから手が回らなかつた。

彼らへ提供するなら問題ないだろうな。

『こちらがな、武器と防具と回復薬とそれらと交換できないかと言ってきてんだ。』

『……いいけど、俺らモンスターだぜ？』

『お主らがモンスターのわけがないだろうが。』

『貴方はモンスターに見えますが、中ははつきりとした私達と同じです。』

異端児騒動から数ヶ月の経っていないのに、「ヘステイア・ファミリア」だけでなく他のファミリアと彼らとの会話を見れるとはな。

『…そう言ってくれるのは嬉しいぜ。ただ…ベルつちの助けになつてくれ。ベルつちは何もかも抱え込もうとしているんだ。俺らも助けるが、あんたらも手伝つてくれ。』

『アノコゾウハ、ムチャトムボウヲスル。ミテイラレン。』

『もちろんじゃ。ベル・クラネルの専属鍛冶士がこやつなのが惜しいんじやがな。』

『へっ、何だ。嫉妬か?』『ああ、嫉妬だとも。』

『彼らは置いといて、ベル・クラネルはグロスさんの言う通り無茶をします。なので何が何でも治します。』

そうだな…。

彼は本当に生傷が絶えないな。

遠征で、まさか【アストレア・ファミリア】を全滅…いや苦しませたジャガーノートとかち合うとはな。

そして、重症を負ったままで深層へ落ちるとは驚いた。

もう駄目かと思つたよ。

『お、おう。そういうや、あんたらは何て言うんだ？俺はリドってんだ。』

『……グロスダ。』

『これはしまったな、手前は椿と申す。』

『すみません、自己紹介が遅れましたね。私はアミッド・テアサナーレです。』

『おう！リドってんだ。よろしくな、つばっち、アミっち。』

『ははは！つばっちか！これはいいな！』

『アミっち…ですか。まあいいでしょう。』

『ドロップアイテムの扱いに困っていたんだ。愚者に全部やっていただけ、追いつかないと不満言ってたんだ。』

『オレイハイラヌカラ、モツテイケ。』

『そうは行きません。取引は取引です。見合ったものを渡します。』

『又、又ウ…カワツタニンゲンタチダナ…。』

『ベル・クラネルほどではありません。』

『…そうだな。』『…ソウダナ。』『…そうじゃな。』

あのように彼らと笑い会えるとはな…。

私のやってきたことは無駄ではなかったな、いや違う。

ベル・クラネルのやってきたことが大きな一歩を踏ませたのだ…。



「♪…い、以上デス。」

「ワアアア！パチパチ！」

「素敵でしたよ、レイ。」

「いい歌だったわ！」

「モンスターとは思えませんねえ。」

「レイ、すごい！」

…メイの言う通り、この場でやってよかった。

私は…勇気が足りなかったな。

今までのやり方だったら、異端児と彼らが話し合い、笑いあえるこの光景を見れることはなかっただろう。

「いい歌だった。私はアルフィア…ベルの義母だ。お前は何という？」

「べ、べべベルさんのお、お義母さんデスカ？こ、コレは失礼シマシタ。レイといいマス。」

「(…こいつもか。はあ…)…お前たちは何を望むのだ？」

「地上を、見たいデス…。あの日の下で暮らしたいデス…。」

「そうか…謝罪しておこう。」

「…謝罪デスカ？」

「私とあそこにいる大男は…お前たちを切り捨てたファミリアの一員だ。」

「!!!」

「許してくれとは言わん。私達の都合でお前達を切り捨てたのだ、恨んでも構わん。」

「…思い出シマシタ。アノ方のお仲間デシタカ…。…ワタシ達は貴女達を恨みませ  
ン。もう慣れマシタから。」

「……すまん。」

「デスガ…ベルさんはどんな状況デモ、ワタシ達を決して見捨てまセンデシタ。ワタシ  
はソレが嬉しい…。アノ方を助けタイ。私…イエ、ココにいるみんなもそう思っている  
ハズです。」

「そうか…ちよつと画面の端へ来い。」

「ハ、ハイ…。」

「…?何をするつもりなのだ？」

7年前もそうだが、「静寂」のやることは過激だから怖いんだ。

特に「ヘラ・ファミリア」はな!

本当に彼女は、あのベル・クラネルの叔母なのか?

『お前…ベルに惚れているな?』

『ナナナナナ、ナンデ!?!』

『ふっ…一目瞭然だ。まあ、いい。お前ならいいだろう。』

『ハ、ハイ!?!』

『義母として、ベルの近くにいることを許してやろうというのだ。』

『ハイ!?!』

『不服か?』

『イエイエイエイエ!よ、喜んで!』

『あの野生児よりはマシだな…。』

『野生児デスカ…?』

『ああ、いい。こちらのことだ。…ベルの力になってやってくれ。』

『あ、ハイ!もちろんデス!アルフィアさん。』

『……ますます気に入った。他のやつらはお義母さんとかいいやがる。私は認めていな

いのにな。』

『は、はア…。』

『…話が逸れたな。すまないが、先程とは別の歌をお願いしていいか?』

『あ、ハイ!喜んで!♪』

……杞憂だったな。

まさか、甥への恋愛感情を確認するとは。

メイの言う通り、相当な親バカになっているな。  
……だったら、7年前にベル・クラネルへ会いに行けよ！

## 第269話 愚者、感涙。

ふう……つい感情が高ぶってしまった。

「ねえ……あのアルフィアが馴染んでいるわよ。」

「そうでございますねえ、真っ先に消すかと思いましたがの。」

『ねえ、春姫。あの女の人って怖いのか?』

『（怖いのは確かですが、ウィーネ様に先入観を持たせてはいけませんね）いいえ、あの方はベル様のお義母様でござりますよ。』

『え、そうなの!? 挨拶に行かないと!』

『あ、今はレイ様の歌を聞いております。終わるまで待ちましょう。』

『はい!』

サンジョウウノ・春姫もウィーネを可愛がっているな。

ベル・クラネルの次に彼女がウィーネを気にかけてただけであつて、異端児の彼らとわけ隔てなく接しているな。

む……? ベル・クラネルと神ヘステイアか……。

「ベルくん……どうしたんだい。」

「神様…僕は間違っていないと改めて思ったんです。この光景を見て。」

「そうだね…今までではあり得ない光景だね。」

「ええ、僕は改めて決心しました。この光景を広げて…ウィーネたちと笑って暮らせる世界にしていきたいと。」

「……ベルくん、その道は遥かに遠い上に険しいよ？その覚悟はできているのかい？」

「神様、僕はこないだの戦争遊戯で宣言したんです。【最強最高の英雄】になると。」

「……そうだね。」

「なら、そういう世界にするのも【最強最高の英雄】が成し遂げるべきじゃないかと。」

「……そうだね。キミならできるさ！」

「はい！」

…【最強最高の英雄】か…。

君がいなければ、ウィーネも異端児の彼らも【暴蛮者】たちの魔の手にかかっていただろう。

思えば、【暴蛮者】たちがいなければここまでの進展はなかったかもしれない。

それまでの犠牲は計り知れなかったがな。

死んでいった異端児の皆…、無事に転生して再会できることを祈っている…。

そもそも、神ヘステイアがベル・クラネルを眷属にしていなければ始まらなかったな。

いや、…元をたどれば…大神ゼウスがベル・クラネルを育児放棄したのがきっかけだ  
が…。

あの大神、何をやっているのだ…。

「ベル様、どこにおられますか？ウィーネ様が呼んでいますよー。」

「ベルー！どこー！」

「あ、神様。春姫さんとウィーネが呼んでいます。」

「ボクも行くぞー！」

「……………」

「どうしましたか？愚者。」

「メイか…。」

「この光景は美しいですね。」

「ああ…。私はこれを求めていたのだ…。」

私に眼があつたら、間違いなく泣いていただろう…。

それほど、私は感動しているのだ。

む、ウィーネがサンジョウノ・春姫によって【静寂】へ紹介しているな。

…見たところ、悪くはなさそうだ。

【静寂】もウイーネを気に入ったようだな。

でないよ、ベル・クラネルの好感度が下がるからな…。

「坊ちやまがおられなかつたら、この光景は見れませんでしたでしょうね。」

「ああ…。」

「……異端児はかつて私達【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】が切り捨て、見捨てた方々です。」

「知っている…。私はその後に彼らと会ったのだ。」

「ええ。その彼らと親睦を結び、大きな一歩を踏み出したのが私達の系譜を持つ坊ちやまとは皮肉ですね。」

「そうだな。彼が【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持つ者と知っていたら、異端児の皆と接触させただろうか？」

「いや、しないだろうな。彼らを切り捨てたファミリアの系譜を持つ者と知っていたら…。」

ベル・クラネルが自らの系譜を知らなかったことが、幸運かもしれない。

そして……、彼らができなかつたことを彼は成し遂げたのだ。

「そうそう、ザル坊が追加の料理を作っています。」

「は？もう十分だろう…。皆、もう休めているぞ。」



「いえ、彼らへの土産だそうです。後で持参して頂けますでしょうか？」

「!ああ、いいとも。彼らも喜ぶだろう。」

「…ザル坊もあの時切り捨てたことを未だに引きずっています。償いと言えないかもしれません。」

「…償いなら、彼が既にしてているだろう。いや、十分にお釣りがくるぐらいのな。」

ベル・クラネルは、ダイダロス通りのあの場で「ロキ・ファミリア」の目の前でモンスターを庇ったのだ。そして彼らをダンジョンに返すために「ロキ・ファミリア」と敵対したのだ。

最強派閥の彼らをだ。

半年前にベル・クラネルがオラリオへやってきて、多くの出来事があった。

それを振り返ってみると、私と彼が会うのは運命だったのだろう。

「……彼がオラリオへやってくるのを私は待つていたかもしれない。いや、私が賢者の石を造り主神に破壊され、自らを不死の呪いにかけてオラリオへ流れ着いたのも、ベル・クラネルに会うためだったかもしれない。」

「……縁とは不思議なものです。私達のファミリアになかったものを坊ちやまが持ち、坊ちやまの元に縁が集結しつつあります。それに…貴女の魔法は坊ちやまの『幸運』なしではできませんからね。」

「…そうだな。彼なら成し遂げるだろう、いや成し遂げるに違いない。ダンジョン制覇に黒竜討伐、そして彼らと手を結び暮らす世界を…。」

「ええ…。私達は坊ちやまに全てを賭けています。貴女は？」

「言うまでもないだろう。私はとつくに全てを賭けている。異端児騒動…いや、神ヘルメスの試練を打ち破った彼にね。」

「そうですか…。…賢者、今の貴女がやることは何でしょうか？」

「無論、ベル・クラネルのために魔道具を造り続けることだ。それ以外にないだろうか？」

「よろしくお願ひします。賢者。」

ああ、そうとも。

異端児騒動を経て、800年も生きた私に全てを賭けると決めたのだ。

彼のために、これからも魔道具を造り続けよう。

それはきつと、彼の助けになるに違いない。

## 第270話 劍姫、苛々。

昨日の宴は楽しかった…。

けど、イライラするしムカムカする。

ベルが女の人と話すだけ…ううん、ベルが女の人を見るだけでもイライラする。

あの竜の娘と話しているだけでも…。

斬ったら…うん、まずいよね。

でも…どうして？

今までそんな気持ちになったことなかったのに…。

「アイズ嬢、落ち着かないようですね？」

「…セバスさん。」

いつの間に…。

「先日の宴で、坊ちやまをずっと見ておられましたね？」

「気づいていたのですか…？」

「アイズ嬢以外の皆さんは気づいておられましたよ。」

「え」

ベルに気づかないようにしていたのに…。

え？みんな知っていた？

そういえば、レフィーヤとアリシアが何か言ってたような…。

「(思ったより重症ですね) 気づかなかったのですか？」

「…はい。何でしょう、この気持ち…。モンスターを前にするのと近い…？」

「(やはり危惧していた通りでしたか) それは間違いです。それについてお教えしましょう。こちらへ。」

「……はい、わかりました。」

この気持ちは何かを知りたい。

ベルへ向けるこの気持ちは、どんなのかわ知りたい。

「メイ、連れてきました(やはり危惧していた通りです。思ったより早いようです)。」

「承知しました(そこまででしたか。後は私にまかせてください。他を頼みます)。アイズさん、思い詰めてはだめですよ。私達に相談してくださいね。」

「…ごめんなさい。自分だけで解決しなかったです…。」

「謝ることはありませんよ。正常な考えですから。」

「そうですか…？それはよかったです。」

「アイズ嬢、女性としてメイに相談した方がやりやすいでしょう。では、メイ。私は他に

やることがありますからこれで失礼します。」

……何故だろう？

階層主のルームに放り込まれたような感じは。

「では、アイズさん。坊ちやまを見てどう思いましたか？」

「…女の人を見すぎ…話しすぎると思います…。」

うん…顔を真っ赤にして女の人と見つめ合ったり、楽しく話したり、女の人から触れてきたり…。

あ…思い出したら、何かムカムカしてきた…。

「何故そう思いますか？」

「…わかりません。」

「坊ちやまと話したいのですね？」

「はい。」

「坊ちやまにはアイズさんだけを見てほしいのですね？」

「はい。」

「（即答ですか。ペースが速いですね）坊ちやまをアイズさんだけのものにしたいたいですね？」

「……そうかな？ そうかもしれない…。」

ベルは……私が育てた。

「アイズさんは嫉妬というものをご存知ですか？」

「嫉妬……ですか？」

嫉妬……？

テイオネがいつも言っているアレ……？

「目当てのじやが丸くんが残り1個となり他の人が食べると、どんな気持ちになりますか？」

「……悔しいです。」

「そのじやが丸くんを坊ちやまに置き換えてみて下さい。」

「……ああ。」

「そうです。それが嫉妬です。」

「……これが嫉妬……。よくないんですか？」

「いいえ、正常です。ただ……」

「た、ただ……？」

「度を過ぎると、よくありません。」

「ど、どうよくないんですか？」

「坊ちやまを拉致して、手足を切り落とし歯を全部抜き取って、誰にも会わせないところ

に閉じ込めることになってしまいました。」

「ひえっ……、よ、よくないんじゃないんですか!」

そ、そんなに危ないものなの!?

……あ、ティオネをイメージしたらわかりやすかった。

「ええ、ですから度を過ぎるとよくないんです。今のアイズさんがギリギリ正常です。」

「これがギリギリ正常!」

「ええ、アイズさんは今までそういう気持ちになったことはありませんか?」

「……ありません。」

「それは坊ちやまに対して意識しているからです。」

「意識……ですか?」

意識……意識……。

モンスターを殺る時の気持ち?

「モンスターを殺すとは別です。決して一緒にしてはいけません。」

「は、はい(違うんだ……)。」

「じゃが丸くんと同じです。」

「あ、わかります。」

なるほど、わかりやすい。

「じゃが丸は割ることができません。ですが、坊ちやまはただ一人だけです。ちぎることも真つ二つにすることができません。」

「それぐらいはわかり……ます。」

「(今、逡巡しましたね) ええ、もし坊ちやまがレベル1の時でしたらアイズさんだけのものになってたかもしれません。」

「え」

……ど、どういうこと!?

「ですが、今の坊ちやまの周りにはアイズさんと同じく坊ちやまを強く意識している女性に囲まれています。」

「……。」

レベル1の時に攫っていればよかったのかな……?

……囲まれている女の人が邪魔なら……。

「彼女たちを斬っても、殺しても駄目ですよ?それではティオネさんと同じですよ?」

「……! (あ、危なかった……)」

「坊ちやまはそれを知ったら、どう思いますか?」

「悲しむ……と思います。」

「そうですね。でもアイズさんは坊ちやまに見てほしいし、もつと話したいと思います」



ね？」

「はい。」

うん……。

「そのためにはどうしたらいいかわかりますか？」

「……わかりません。」

「解決方法を知りたいですか？」

「し、知りたいです！」

「3つあります。それらを守れば、解決できます。」

「守ります！守りますから教えてください！」

「わかりました、一旦落ち着きましょう。はい、ザル坊作のじゃが丸くんプレーンです。」

「わあー！」

モグモグモグ……おいしい……。

ザルドさんの作ったじゃが丸くんは、ジューシーで衣がカリカリしておいしい……。

## 第271話 劍姫、困難。

「落ち着きましたか？」

「はい！」

「では1つ目…。決して一人で行動してはいけません。先程のように。」

「えつと…何故ですか？」

「一人になると、あれこれと悩んでしまうからです。」

「……はい。」

「……ごもつともです。」

でも…誰かと話すと【ロキ・ファミリア】のみんなのように敬遠される…。

「ここにはアイズさんを悪く思う女性はいませんよ。」

「でも…私は怖がれているから…。」

「何故、そう思いますか？」

「えつと…、第一級冒険者だから？」

「では、テイオナさんは？」

「あ……………」

テイオナは…私と違う。

ううん、第一級冒険者だからじゃない。

「はい、第一級冒険者だからではありません。アイズさんは、自分の中にいる黒い炎に怯えているのです。誰かを傷つけてしまうかもしれないからです。」

「!!」

「凶星ですね?」

「……………はい。」

「ですが、その黒い炎は坊ちやまと共にいることで消失するのですね?」

「な、何でわかるのですか!?!」

「一目瞭然です。」

(ガーーーーーン!)

そ、そんなにわかりやすいの!?

セバスさんといい、メイさんといい…。

リヴェリアより逆らったらダメだ!

「なので、一人で行動するより誰かと共に行動するように。」

「は、はい。でも…。」

「ここは「ロキ・ファミリア」ではありません。アイズさんを崇拝する人はいません。」  
「あ……。」

み、見透かされている…。

「なので、貴女を邪険にする女性はいません。いたら、ヘステイア様か私に言っして下さい  
(お仕置きします)。」

「あの…【静寂】「ここでは二つ名は禁止です」…アルフィアさんは私を嫌っているの  
は…？」

「嫌っているというより、もどかしいですね。」

「もどかしい…ですか？」

もどかしい…？

何でだろう？

「はい、その解決方法が2つ目です…。学びなさい。」

「ま、学ぶ？ 苦手です…。」

「ああ、リヴェリアさんのような座学ではありません。皆さんを見て学ぶのです。」

「見て学ぶ…。」

見て……学ぶ？

どうやって…？

「坊ちやまに見てほしいでしょう？」

「はい。」

「モンスターとの戦い方と同じようなものです。」

「えつと…。」

「要するに皆さんから教えてもらおうのです。」

「……。」

…改宗したばかりなのに？

……。

「そのハードルが高いんですね。」

「は、はい。」

「大丈夫です。ここにいる皆様は、アイズさんへ多くのことを教えていくでしょう。」

「……。」

メイさんが大丈夫と言っているなら、大丈夫かな…。

でも、不安だ…。

「【ロキ・ファミリア】にいた時に、テイオナさんとレフィーヤさんと行動することがありましたね？」

「あ、はい。」

「その時、彼女たちから教えてもらうことがありますね？」

「はい、あります。あ…。」

「それと同じことです。」

「わかりました。が、頑張ります。」

が、頑張るぞ。

「3つ目は…メイド親衛隊へ入りなさい。」

「…入ってもいいんですか？」

「おや、興味がおありですか？」

あります！

「はい…。あの…ベルの専属と聞いたので…。」

「はい、坊ちやま専属のメイド親衛隊です。なお、坊ちやまはそれを知りません。」

「え」

「坊ちやまがそれを知ったらどう思いますか？」

「……………恥ずかしがる？」

「ええ、そうですね。ただの専属だけではありません。坊ちやまを支える女性の集まりです。」

「え」

ど、どうということ!?

ベルを支える女の人の集まりって!?

「いい機会です。坊ちやまが何故レベル8の【猛者】に勝てたかをお話しましょう。」

「!!」

そして、私はメイさんよりベルが【猛者】に勝ったアビリティとスキルを教えてくださいました。

「『魅了』……『兔囀女達』……。」

「嫉妬しましたか?」

「!………はい。」

「ですが、彼女たちが坊ちやまの強さを支えているのです。」

「……。」

「もちろん、貴女も入ります。」

「!」

やった!

よかった…。

「なので、彼女たちと仲良くする必要があるので。そうしないと…」

「そ、そうしないと…?」

「坊ちやまは貴女を見てくれることが少なくなるか、皆無になるかもしれません。」

「そ、それは嫌です！……なら。」

周りの女の人を倒したらいいだけじゃ…？

「彼女たちを排除しようにも、貴女はルウ・リオンさんに負けたのです。」

「……次戦えば勝てます。」

エアリエルを最初から使っていれば…！

「ええ、そうですね。ですが、ルウ・リオンさんだけではありませんよ？ 他の方もおられます。そう、【勇者】の頭脳とタメはれるリリさんもいます。様々な搦手を使ってきますよ？」

「あ……………」

フィンと同じ…難しい手を使ってきたら…。

「そしてレベル・ブーストを使える春姫さんもおられます。そして坊ちやまの義母であるアルフィアさんもおられます。それでも彼女たちに勝てますか？」

「……………」

無理。絶対に無理。レベルを一段階上げられた上で？

勝てるわけがない！

それにあの人…怖い上に強い。



しかもベルの伯母…何で似てないの？

「ですが、彼女たちと仲良くすればそれは全て解決できます。」

「その…大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です。彼女たちはかつて貴女と敵対していたフリユネさんのようではありませんん。」

「それは…わかります。」

前のフリユネさんのように、敵意をむき出しにしないし…。

## 第272話 劍姫、入隊。

「貴女と仲がいいティオナさんは、既に加入しています。」

「え？い、いつの間に…。」

「昨日です。」

「昨日!?な、何で…。」

ど、どうして!?

ティオナが入れて、何で私が入れないの!?

「貴女はその時、どこにいましたか?」

「……あ。」

途中で抜けて、リヴェリアとアルフィアさんのところにいました…。

「あの時逃げ出さなければ、ティオナさんと同時に加入してましたね。」

(ガクツ…)

私の……せいだ。

入れない…いやだ…。

「なので、一人で行動してはいけないと言ったのです。」

「大変理解いたしました…。」

「わかっていただけで嬉しいです。話が逸れましたね、メイド親衛隊へ「入ります！」はい、歓迎しますよ。」

「あ、ありがとうございます！」

「この女性はほとんどメイド親衛隊に入っています。なので、自然に仲良くできると思いますよ？」

「わ、わかりました。が、頑張ります。」

「そこまで力まなないでくださいね。自然にしてください。そして同じ親衛隊の皆様から色々教えてくださいますよ。」

「わ、わかりました。」

ダンジョンの深層で戦うより難しいけど…ベルのためになら！

「ああ、2つ注意をしておきましょう。」

「え？な、何ですか？」

「元【フレイヤ・ファミリア】改宗組がおられますが、喧嘩してはダメですよ？特にシノスさんは。」

「シノスさん…神々の中にいた人間の女性ですか？」

「はい、そうです。理由はまた説明します。」

シノスさん…以前はシルさんと名乗っていた人？

どうして「フレイヤ・ファミア」に？

「わかりました…。その…2つ目は？」

「神ロキには近づいてはいけません。向こうから近づいてきたら、すぐ私かセバスへ来てください。」

「はい、わかりました。」

わかった。ロキのせいでいろいろと怒られたし…。

ロキには近づかないようにしよう。

「では、こちらへ着替えて下さい。」

「それは…以前ロキが用意したメイド服？ちよつとデザインが違うくらい？」

「神ロキの欲望に塗れた服と一緒にしないで下さい。神聖な戦闘服です。」

「は、はい！わかりました。すみません！着替えてきます！」

こ、怖い！本気の殺気だった！

メイド服をバカにしないようにしよう…。

「あの…気味悪いほどピツタリなんですが…。」

「それでいいのです。では、同僚の方々を紹介しましょう。付いてきてください。」

「あ、はい。」

だ、大丈夫かな…？

メイさんを信じよう…ううん、信じるしかない！

「皆様方、アイズさんがメイド親衛隊に入りました。」

「よ、よろしく願います。」

「こ、こんなに多くいるの!？」

「…うう、ベルがレベル1の時に攫っておけばよかった…。」

「おー！アイズも入ったんだ！」

「へー！メイド服がすごく似合うねー！」

「…なるほど。メイ様の言う通りですね。」

『魂の淀みが薄れたわ…ひとまずは成功ですね。さすが「最強侍従」ですね。』

『シノス、そうなのですか？』

「はいはい、皆様。ここまでです。アイズさんの担当は、エイナさんと呼んでもお願い

します。」

「はい、承知しました。エイナです。アイズさんと呼んでも？」

「あ、はい。」

「春姫でございます。アイズ様、お互い頑張りましょうね。」

「あ、はい。願います。」

(メイさんの言った通りね…。)

(何となく怯えていますね…。ウィーネ様と同じように接しないと。)

「しばらくは三人で行動してもらいます。よろしいですね?」

「はい。」

この2人…優しそう。

何とかやっついていけるかな…が、頑張ろう。

シーツの張替え…。自分のだけしかやっただことがない。

「えっと…。」

「あ、そのこのシーツの端を押さえて下さいね。…はい、問題ありません。」

「うん、最初にしてはいいと思うよ。」

「そ、そうですか?」

褒められた!嬉しい。

「わわっ…。あ、ありがとうございます!アイズ様。」

「いえ…。その…様づけは…。」

「これは、春姫の口癖ですので気になさらないで下さい。」

「大丈夫!? ああ、よかった。2人とも。」

私の担当がエイナさんと春姫さんでよかった…。

「へー、じゃが丸くんにも多くの種類があるんだ。」

「うん。私のおすすめは小豆クリーム味です。」

「じゃが丸くんに小豆クリーム味ですか…?」

「ん?じゃが丸くんの話かい?…小豆クリーム味は玄人向けだね。わかっている人しか知らないんだよ。」

「ふふん!」

(威張ってるアイズさん、可愛い…。)

(確かにウィーネ様並で精神的に幼いですね。)

(馴染めてきたかな?メイくんたちの作戦がうまくいってよかったみたいだね!)

みんなは優しい…。

けど、この人だけは…何故か負けたくない。

【剣…いえ、アイズ。】

「何ですか…【薫…ルウ。】」

「アイズ、そこにある筈があるでしょう。私はこのモツプです。」

「いいえ、このモツプは私が先に取りました。なので、その筈はルウです。」

「……………」

何故かわからないけど、負けたくない！

二度と負けてたまるものか！

「何で睨み合っているんですかー！メイさんに怒られますよー！」

(ビクウツ！)

メイさんに怒られたくない！

(この2人、似てないようで似てるわね。意外といいコンビになるかもしれないわ…。)



## 第273話 千妖精、納得。

私は、今非常に気になっていることがあります。

それは……。

「あの……ティオナさん？」

「どうしたの？レフィーヤ？」

「どうして、ティオナさんがメイド服を？さらにアイズさんも……？」

今朝からアイズさんとティオナさんがメイド服を着ていました。

アイズさんは春姫さんとエイナさんと常に行動していますから、引き止められませんが……【ロキ・ファミリア】の元幹部がメイドというのはどういうことですか！

団長の趣味ですか！

グツジョ……いいえ！何ていやらしいんですか！

「んー、メイさんにスカウトされたからかな。」

「え!? ス、スカウト!? ど、どういうことなんですか!？」

「ティオナー！窓の拭き掃除終わったー？」

「アーデイ、今からやるよー！ごめんー！じゃあ、またねーレフィーヤー！」



最強と言っていたアルフィアさんですか！

昨夜の宴で見ましたが、話したことがなかったですね！

いい機会です！

…と思っていた時がありました。

---

ホームではなく、クノツソスへ連れてこられました。

何でここなんでしょう？

「貴様か。戦争遊戯で背後からコソコソとしたトロ子は。」

「トロ子!？」

「そうだ。さっさと魔法を撃てばよかろうに。たかが三人が脱落したぐらいで動揺するな。トロ子め。」

「私はレフィーヤという立派な名前があります！」

「黙れ、トロ子が。一人前に名乗るぐらいならさっさと詠唱終えろ。」

「うぐっ!!」

「お嬢様。戯れはそこまでにしてくださいませ。」

団長と異端児のレイさんと話している様子から見て、優しそうだと思っただのに！

めちやくちや厳しそうな方じゃないですか！

「ふん…。だが、貴様の魔法は有用だな。」

「え？あの…なんで知っているんでしょうか？」

「年増ハイエルフから聞いた。」

「年増ハイエルフ…リ、リヴェリア様に何てお言葉を…!？」

と、年増…何たる不敬なことを！

「黙れ。あの年増は三桁に近いそうじゃないか、十分に年増だ。ところで、貴様は何歳だ？」

「15歳です…。」

「ほう。その歳である魔法を放つのか。大した奴だな。」

「そ、そうですか。えへへ。」

「その程度で照れるな。ちなみに私は24歳だ。」

「あれ…?リヴェリア様からは10代でレベル7と聞いたような…。」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「ひいひいっ!」

「今のはわざと外した。私の前で歳のことを言ってみろ。塵屑にしてやる。」

「塵屑!」

何故、ホームでなくクノツソスで会うのかがわかりました…。破壊し尽くしてしまっからですね！

超短文詠唱でこの威力は反則じゃないですか！

しかも、見えないし！衝撃で目眩が少しします…。

ガレスさんが一撃でやられるのも納得です…。

【アストレア・ファミリア】の皆さん、よく勝てましたね…。

「さて、それは置いておこう。」

「理不尽すぎる…（何故この人がべ…団長の叔母でしょうか？全然似ていません！）」

「……貴様、今何を思った？」

「な、なな何でもありません！」

ひいつ！言ったら間違いない殺られる！

団長と似ても似つかないじゃないですか！

本当に血がながっているのですか…？

「……まあ、いい。とりあえず、私の前でお前の最大魔法を撃ってみろ。」

「え？あ、あの…この辺りがとんでもないことになるのですが…。」

「やれ。」

「あ、ハイ。」

リヴェリア様と違い、超スパルタで理不尽だ！

【ウィーシエの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい】

【エルフ・リング】

【間もなく、焰は放たれる。忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む。至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火。汝は業火の化身なり。ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを。焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ】

【レア・ラーヴァティン】！

……え？無効化された!?

どうして!?

「ふん、なるほどな。レベル4にしては威力が高いな、褒めてやろう。」

「そんな…、あの時と同じように…消えた?」

「何だ、聞いてないのか。私のこの魔法は魔法無効化だ。」

「え、詠唱を唱えていませんでしたよね!?!」

「既に唱え終わっている。それも聞いてないのか？この魔法は付与魔法だ。常時かけている。」

「え？じ、常時？」

「それは内外に作用される。つまり、さっきの魔法は本来の威力ではない。」

「そ、そんな……。」

先程のガレスさんを一撃で倒すほどの魔法が本来の威力ではない？

さらに魔法無効化が付与魔法であり、常時かけている？

嘘ですよね……？

リヴェリア様がアルフィアさんを都市最強と言うのも、納得です……。

## 第274話 千妖精、修行。

「……お前の頭は鳥頭か？あの年増ハイエルフから私のことは聞いていただろう？」

「あ、はい……。けど、そこまですとは思いませんでした……（その理不尽な性格も……）」

「その程度なら「ヘラ・ファミリア」にゴロゴロいたぞ。」

「えええええっ！」

「だが、それでも黒竜に傷つけることも叶わなかったのだ。」

「え」

貴女ほどでも……黒竜に傷つけることもできなかったのですか……？

どれだけ強いのですか……？黒竜は。

「だから、貴様には私達を超えてもらわなければならぬ。覚悟しろ。」

「な、何をするつもりですか……？（怖い！ベ……団長に泣きつきましよう！）」

「モンスターの巢へ放り込んで凌辱させ「凌辱！」」それとも水の都の岩に体をくくりつけて死の感覚を教え込むのが先か「死の感覚！」……私はこれといった修行をしたことがないから勝手がわからんな。」

「それは しゅぎよう ではないとおもいます!!」



絶対に修行じゃない！拷問です！

「馬鹿め。生と死の境界を見極めなくては限界など知れんだろう。貴様のようなトロ子  
が英雄なんてものになるためには、限界をあと三百は超えなくてはならん。」

「げんかい の 意味とは!!!」

「お嬢様。それは修業ではありません。」

（ありがとうございませうううう！セバスさん！助かりましたあああああ！）

やばかった…あれは本気だった。

よかった…私の貞操を守れて。

「…貴様の提案を言ってみろ、セバス。」

「では、レフィーヤ嬢にはまず魔法を精神疲弊寸前まで、お嬢様へ撃たせてもらいます。」

あ、それはできます。

簡単ですね！

「なるほど…魔力を上げさせるためか。無効化できる私は格好の的というわけだな？」

「そうでございませう。」

「並行詠唱とかはどうするのだ？このトロ子に教え込むには骨が折れるぞ。」

「メイのメイド親衛隊へ入ってもらって、鍛えさせていただきます。」

「メイド親衛隊？」

アイズさんとテイオナさんが入っているところですか？

「…あんな甘いところですか？」

「あれはアイズ嬢専用でございます。メイから直接指導してもらいます。」

「…健闘を祈ってるぞ、トロ子。」

……アルフィアさんがこんな神妙に言うなんて、どんな魔境ですか！

メイド親衛隊は！

「な、何をするんでしょうか…？」

「それはメイへお聞き下さいませ。ではお嬢様に向かって、魔法を撃ってもらいます。その都度指導して下さい。」

「無効化するのだから意味がないと思うのだが…、まあいい。やってみろ。」

「え、でも…。」

「やれ。」

「あ、ハイ。」

駄目だ…この人には逆らえない。

リヴェリア様が私に対して、甘く接してくれたのがようやくわかりました…。

団長に甘いのが納得できませんが。

このレアスキルで、吠え面かせてあげますよ！

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】

【ヒュゼレイド・ファラーリカ】！

【追奏解放】！

【アルクス・レイ】！

「ぜえ…ぜえ…。」

「器用なやつだな、魔法をストックさせて連発するとはな。」

「ど、どうして無効化できるんですかあ…。」

「知らん。そういう魔法だ。」

本人の性格を含めて理不尽過ぎます…。

貴女のような方が多くいる【ヘラ・ファミリア】は何故、黒竜に勝てなかったんですか！

「今、何を思った？」

「いいえ！何でもありません！」

「それだけ声出せるなら、まだやれるな。続ける。」

「え」

「やれ。」

「あ、ハイ。」

やはり、この人は超々スパルタだ！

【ウィーシエの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい】

【エルフ・リング】

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け三度の厳冬——我が名はアールヴ】

【ウィン・フィンブルヴェトル】！

【追奏解放】！

【アルクス・レイ】！

「も、もう…無理ですう…。」

「意外と粘ったな…。」

「ええ、坊ちやまと同じく根性がありますな。これは期待できそうですな。」

「まあ、あの年増ハイエルフよりはマシだな。…おいセバス。」  
「何でしょうかな？」

「……リヴェリア様よりマシ。それだけでも嬉しいのですが…。  
キツすぎます…。」

「……考えようによつては、場所に困る魔法の試射で相手がレベル7…。」

「これ以上ない特訓でしょうね。」

「魔力が上がってくれるといいですが…。」

『このトロ子に【白兔眷属】は発現しているのか？』

『いいえ、坊ちやまへの想いがどのくらいなのか確認していませんので、発現しておりません。』

『私の勤だがな…、このトロ子もベルへの想いが半端ではないような気がする。』

『ほう、ではメイへお願いしてみましよう。』

「……何を話しているでしょうか？」

「もう、聞く気力もありません…。」

「おい、さつさと起きろ。」

「もう…詠唱を唱える気力も…ありましえん…。」

「ちつ…。おい、セバス。このトロ子をメイのところへ連れて行け。」

「心得ました。レフィーヤ嬢、立てますかな？」

「無…理ですう…。」

「坊ちやまを呼んで姫様抱っこしていただきますか？」

「!!」

え？団長に姫様抱っこ!?

是非してほしい…違います！

そんな不埒なことは…望んで…。

「セバス？メイからお義母さんのところへ行つてほしいと聞いたけど、どうした…レ、レフィーヤさん!？」

「!!!（早くありませんか!？ね、寝たふりしましょう）……………」

このタイミングで!?

セバスさん、見計らっていませんか!?

恐ろしい御方です！

「ああ、丁度よかったです。坊ちやま、お嬢様との特訓で精神疲弊したレフィーヤ嬢をメイのところへ運んでほしいのですが。」

しらばつくれたことを言ってますね！

さあ！早く運んで下さい！

「こんなトロ子なんぞ首根っこをつかんで運べばいいだろうが。」

「もう！お義母さんたら！レフィーヤさんはまだ入団したばかりだよ？」

「こいつはレベル4だ。このぐらいでへばつては話にならん。」

「う…まあ。レ、レフィーヤさん、大丈夫ですか？」

「……………（寝たふり寝たふり寝たふり）。」

運ぶならとつとと運んで下さい！

「坊ちゃま、精神疲弊していますから話しかけても無駄でございますよ。」

「うーん、仕方がないね。よいしょつと…（わ、かなり軽い…）」

「つ……………」

わ…意外とたくましい。それに…いい匂い。

…あれ？何だろう？懐かしい感じが…。

ギョツ

「あれ？僕の服を掴んで…起きていますか？」

「……………（いけない！寝たふり寝たふり）。」

うう…。男なのに何でいい匂いがするんですか！

ミルクのようで…温かい匂い…。

眠ってしまいそうです…。

「坊ちやま、メイのところへ運ばないとレフィーヤ嬢が目が覚めて怒りますよ？」

「わわわ、そうだね。じゃあお義母さん、行くね。」

「ああ、またな。」

バタン



「お嬢様の言った通りでしたな。」

「あのトロ子が獣人だったら、尻尾がちぎれるほど振っていただろう。」

「あとはレフィーヤ嬢の覚悟次第でございますな。」



## 第275話 千妖精、覚悟。

「……………（何でだろう…安心できる。もう確定だ…私はベル・クラネルを…）」

「もうお義母さんたら…。でもレフイーヤさんってこんなに軽いんだ。」

「……………（失礼ですね！そんなに…食べてないはずですよ！…多分）」

「さて、ここかな…。」

あ…、もう終わりですか。

うう…名残惜しいです。

ガチャ

「おや、坊ちやま。どうしましたでしょうか？」

「やあ、ベルく…べ、ベベベルくん！何をやっているんだー！」

「ち、違うんです、神様！セバスから精神疲弊したレフイーヤさんを、メイのところへ運んでと言われたです！」

「ほう、セバスが？わかりました。そちらのソファーまで運んでいただけませんか？」

「あ、うん。…つと。じゃあ、僕は行くね。師匠が待っているんで。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

「ベルくん、頑張ってね！」

もう少しいてもいいじゃないですか！

バタン

「さて、レフィーヤさん。起きていいですよ。」

「へ？」

「……………はい。」

うう……やはりお見通しでしたか…。

まあ、団長がいるとここで起きると気まずいですからね。

「キ、キミは寝たふりをして、ベルくんに運んでもらっていたのかい！何て策士なんだ

！」

「ちちちち違いますよ！本当に偶然ですよ！」

「…嘘は言っていないね（その手があったか！）」

「レフィーヤさん、何故すぐに起きなかつたのですか？」

「そ、それは…。その…。」

団長にしばらく抱いていたからですか、と言えるわけじゃないですか！

でも…心地よかつたなあ…。

「（あー…なるほど）キミ、ベルくんを本気で好いているね？」

「なっ………はい、そうです。」

「ようやく自覚してくれたようですね。」

もう隠せないし…、もう知らないフリできません…。

メイさんの言う通り、私は団長を好いています。

いつ頃からだろうか…。

18階層で闇派閥の罠に落ちた頃？

59階層で『穢れた妖精』との決戦で、フィン団長からの発破？

……違う、もっと前から。

そう、ベル・クラネルと初めて会った時…街角でぶつかった時からです…。

あの時、私はベル・クラネルに一目惚れしたのでしよう。

「はあああく、また増えたー!」

「え?ふ、増えた?」

「レフィーヤさん、メイド親衛隊で貴女をスカウトしなかったのは何故かお教えしましょう。メイド親衛隊は、坊ちやまのためのハーレムです。」

!?

ハ、ハーレムですつてえええええ!

テ、テイオナさんもアイズさんも!?

何て羨ましい…じゃなくて…じゃないですか!。

こ、ここは反論しておきましょう!

「なななな、何ですって!ハ、ハーレム!?ふ、不潔です!」

「…:さつきまで寝たふりして、ベルくんは姫様抱っこしてもらって満喫したキミに言われたくないんだけど?」

「うぐっ!」

か、返す言葉もありませえん…。

しょうがないじゃないですか!

「何故、ハーレムを作らなければならぬのかをお教えしましょう。」

「へ?」

そして、私は団長のスキル…:【猛者】を倒したからくりを聞きました。

「…:『魅了』…:『兔囿女達』…:。全部ゼウス様のせいじゃないですか!」

「まー、そうだね。」

「それは同意します。話は変わりますが、レフィーヤさんは強くなりたいですか?」

「は、はい!」

もちろんです!

「坊ちやまに置いていかれたくないですね?」

「……はい。」

「それは好敵手としてですか？または異性としてですか？」

「……り、両方です。」

本当は異性としてですが、好敵手……いいえ、あ、相方としてですが。

「ですが、今の貴女はレベル4下位です。坊ちやまはレベル6ですがスキルによる後押しのため、レベル9に匹敵するかもしれません。」

「レ、レベル9!?!」

今の団長はもうそこまで強くなっているのですか!?

その『兎困女達』は非常に強力じゃないですか!?

「既に差は限りなく開いています。貴女はそれでも諦めませんか？」

「……諦めたくないです!」

「まさか……メイくん。」

「レベルは縮めることはできませんが、貴女は貴女の売りがあります。それを伸ばす方法がありますが、寿命が縮むかもしれません。どうされますか？」

「……数分考えさせて下さい。」

『メイくん、彼女はそこまでの想いがあるのかい?』

『はい、あります。絶対に乗ってきますよ。』

……団長はヒューマン。私より早く死ぬでしょう。

私は、長命族のエルフ……。団長より長く生き、団長を超えるかもしれません。それでいいのでしょうか？

いいえ……。団長がいらない世界を考えると……。強くなる張り合いが……。いいえ生きる張り合いがなくなるでしょう。

寿命が縮むのは怖いですが、団長と共に生きたい……。

覚悟を決めましょう。

すう……。はあ……。

「かまいません！団長に……。ベル・クラネルに……。置いていかれたくない……。強くなりたいです。リヴェリア様……。アルフィアさんよりも！」

「いい回答です。テイオナさんが強くなっている様子に気づきましたか？」

「え？あ、はい。」

「その秘密をお教えしましょう。」

え？テイオナさんが強くなった秘密が？

「【白兔眷属】……。まさかア、アイズさんも？」

「いえ、アイズさんは時期尚早です。今、やっても恐らく発現しないでしょうね。」

「時期尚早?」

「後で詳しく話しますよ。どうされますか?」

それでも私の気持ちは変わりません!

「……私、レフィーヤ・ウイリデイスは団長……ベル・クラネルを好敵手として見定めているだけではなく、異性としてベル・クラネルを半年も見てきました。彼のおかげで私はこの半年の間で強くなつたと言つて過言ではありません……。そして、改宗して先程確信しました。私は……ベル・クラネルを好いていることに。たとえ、寿命が縮まろうが呪詛にかかろうが、私レフィーヤ・ウイリデイスはベル・クラネルと共に生き、共に戦い、共に散ることを誓います!」

「レフィーヤくん……」

「素晴らしい回答です。では、その思いが本当かどうかこれを飲んで更新していただきます。」

「これは……?」

「坊ちやまの血が入つて(バツ!)……ゴクゴクゴク……へステイア様、更新をお願いします。」

「話は最後まで聞きなよ……。はあ……絶対に発現しているよ、コレ。」

さあ!へステイア様、更新して下さい!

## 第276話 処女神、驚愕。

更新つと…。

どれどれ…、あー、やはり発現したか…

あれ？あれれ？

「いかがでしょうか？へステイア様。」

「発現したけど…、スキルが2つも出ているけど？」

何だい…これは。

まーた、レアスキルかよ…。

「2つも発現したのですか？【白兔眷属】ともう1つは何でしょうか？」

「…うつ…頭痛が…。え？そんな…兄さんが？お義姉様…みんなも…  
はあああああ。」

レ、レフィーヤくん？

ど、どうしたんだい!?

「レフィーヤくん？大丈夫かい？」

「レフィーヤさん？いえ、貴女は誰ですか？」



「ちよ!? メ、メイくん!」

メイくんがボクを抱えて、レフイーヤくんと距離とつた!?  
一体ど、どうしたのさ!

「失礼しました。ヘステイア様、メイさん。」

「もう一回聞きます。貴女は誰でしょうか?」

え? 誰って…レフイーヤくんじゃあ…。

あれ? 何か雰囲気変わった?

「メイさん、お待ち下さい。ヘステイア様。【白兔眷属】ともう一つのスキルを教えてくださいませんか?」

「え? ああ…。」

【妖精前世】

・前世の記憶を持つ。

・前世に習得した魔法が使用できる。

前世って…何?

魂は漂白されて、記憶もないはずじゃなかったのかい!?

天界の連中、仕事さぼったな—!

【妖精前世】…やはりそうですか。」

「前世の記憶ですか。レフィーヤさん、貴女の前世は誰ですか？」

「今の私はレフィーヤ・ウィリデイスです。そして…前世ではフィーナであった者です。」

「フィーナ？」

フィーナって…聞いたことないなあ。

というか、ボクは天界で一万年ほどずっと寝ていたからね。

自慢じゃないけどさ！

「フィーナ…確かクソバカ主神が言っていました。「始まりの英雄」アルゴノウトの近くにいた、ハーフェルフの名前がそれだったはずですよ。まさか、貴女は…。」

「はい、そうです。メイさん。私はそのフィーナの生まれ変わりですよ。」

「な、何だってー！」

アルゴノウトって…古代の英雄で、3000年以上前じゃないか！

3000年以上の時を経て、前世の記憶が蘇ったということなのかい!?

天界の連中、ちゃんと仕事しろよ！

…3000年前の頃は、ボクも天界にいたんだけど担当じゃないからなー。

「これは驚きましたね…。まさか古代三大詩人の三人目で謎となつて居る方、フィーナ様が転生したのが貴女だったとは。」

「古代三大詩人ですか…今は、そんなに大げさになつて居るのですか。私はただのハーフェルフの詩人、フィーナの生まれ変わりです。それだけですよ?」

「待つて下さい…。ハスティア様、今更ですが嘘は言つてませんよね?」

「言つてない…全て真実だよ。こんなことつてあるんだね…。でも、どうしてベルクンの血によつて、レフイーヤくんの前世の記憶が蘇つたんだらう?」

フィーナくんの記憶が蘇つたのは、ベルクンの血がきつかけなのは間違いない。

じゃあ、何でベルクンの血で蘇つたんだ?

「それは簡単です。私の義兄であるアル兄さん…、いえ【始まりの英雄】アルゴノウトの生まれ変わりである、「ハスティア・ファミリア」団長ベル・クラネルの血によつて私…フィーナの記憶が復活したからです。」

「何ですつて! 古代の…英雄の時代の、【始まりの英雄】アルゴノウトの生まれ変わりが坊ちやまなのですか!」

「嘘は言つてない…。マジかよ…。」

古代の英雄の生まれ変わりが、ベルくんなのか…。

ん? アル兄さんということとは…。

【始まりの英雄】の近くにいたハーフェルフがフィーナくん…アルゴノウトくんの義妹だったんだね。

そして、その義兄妹が1000年以上の時を経てベルくん、レフイーヤくんとして生まれ変わったのか。

こうして、同じ場所で巡り合うのは神ながらにして、運命を感じるね。

「レフイーヤさん、少々お待ちを。セバスを呼んでできます。ヘスティア様、これはトップシークレット中のトップシークレットです。」

「う、うん。」

メイくんがこんなに焦るのは初めて見るね…。

ベルくんが時を越えたのも大事だったのに、ここまで焦ってなかったよね。

彼らにとって神時代の前の、英雄の時代の生き証人…。

彼らにとっては憧れの大先輩にあたる人が、転生した…。

そりゃ、焦るよね。

想いはスキルを発現するだけでなく、神々の魂の漂白を抵抗するとはね。

…何でボクの眷属になると、レアスキルばかりが発現するんだよ！

「メイから聞きましたが、驚きましたね。」

「ええ、本当に。」

「ベルくんで大抵驚いたけど、これもだね…。」

「すみません。大事になってしまつて。」

レフィーヤくんのせいじゃないのはわかっているけどね。

「世界三大詩人の中で謎となつている、フィーナ嬢に会えて大変光栄でございます。まさかレフィーヤ嬢に転生されていたとは。」

「しかもフィーナさんの義兄である、『始まりの英雄』アルゴノウトの生まれ変わりが坊ちやまですか。【最後の英雄】最有力候補が【始まりの英雄】の転生者とは、皮肉なものですね。」

「ボクはもう疲れたよ…。」

いくら慣れたといつても、疲れるものは疲れるんだよ！

天界でもこんな驚くようなことなんて、1000年に1回ぐらいだよ！

## 第277話 処女神、質問。

「古代について色々とお聞きしたいですね。非常に興味があります。」

「私입니다。」

古代かあ。ボクはずつと寝ていたから知らないけどね。

あ、そういうや気になったことがあるんだ。

ベルくんがアルゴノウトの生まれ変わりなのは、どうしてだい？

聞いてみようつと。

「あー、フィーナくん：いやレフィーヤくんに聞きたいけど、ベルくんが【始まりの英雄】アルゴノウトの生まれ変わりなのはどうしてわかつたんだい？」

「あ、はい。ベル・クラネルの見た目がアル兄さんと本当に瓜二つだからです。……ですが！性格はまるつきり違います！」

「ほう？」「え？」

「アル兄さんは、悪戯好きで夢見がち、剽軽で美女にだらしないナンパ者です！【英雄】？とんでもない！逃げ回ったり隠れたりするための身軽さと機転以外はからつきしの、非力なヒューマンです！」

「ええー…。」

……瓜二つなのはわかったけど、性格は正反対なんだ…。

今のベルくんではよかったね！

「おやおや、どこかで聞いたことがありますね、メイ？」

「ええ、本当に。あの困った子に瓜二つですね。」

「困った子？」

「坊ちやまの父親です。…どうやら【始まりの英雄】アルゴノウトの性格はその困った子に置いていったかもしれませんね。」

よし！ベルくんの父親に悪いけど、よくやった！

ベルくんを受け継がれていなくてよかったよ！

「……それでも、ベル・クラネルにアル兄さんの記憶を復活させてはなりません！今の性格でいいのです！……アル兄さんは絶対に泣かなかった。どんな辛いことがあってもずっと笑っていた。私はそんなアル兄さんを見るだけでも辛かった。泣いたっていいのに…。」

「レフィーヤくん…いやフィーナくん…。キミはまさか…。」

君は…前世では、アルゴノウト…いや兄を好いてたんだね…。

それが転生した今世になっても、ベルくんを好くことになるとはね。

……その想いが、天界で魂を漂白しきれなかった原因かもしれない。

「グスツ…はい、ヘスティア様。私は…義妹でありながらアル兄さんを好いていました。」

「これは…転生しても貴女方はつながっていたのですね…。」

「ふふっ、今は私が年上ですけどね。それに転生したのは、私とアル兄さんだけではありませんよ?」

「ほう?今の時代に、古代の英雄から転生された方がおられるのですか?」

え?古代の英雄の見た目が瓜二つの子がいるのかい?

「はい、それは…」

コンコン

「…誰だい?」

「私よ、ヘスティア。アリーゼ達を連れてきたわ。」

……【白兔眷属】のことかい。

アストレアもしつこいなあ。

「神アストレアはまだ、諦めておりませんでしたか。」

「神フレイヤが坊ちやまの眷属となったのが、非常に悔しかったでしょうね。」

「アストレアのベルくんに対する執着も深いよね…。」



未だにベルくんを、5年前眷属にするべきだった、と言うぐらいだしなあ。

「(女神2柱がアル兄さん：いえベル・クラネルに執着するとは…。アル兄さんの記憶がもし復活したら、絶対に大歓喜するでしょうね。ですが、私が絶対に復活させません！今のベル・クラネルのままでもいいのです！)あの…先程の話については、メイさんへ伝えませんがいいでしょうか？」

「そうですね、今は神アストレアが優先事項ですからね。大変申し訳ございません、フィーナ嬢。」

「今の私はレフィーヤ・ウイリデイスです。フィーナは古代で…亡くなりました。」

「申し訳ございません、レフィーヤ嬢。」

「いいえ。ところで、メイさん。メイド親衛隊について詳しいお話をお願いしていいでしょうか？(兄さん…ベル・クラネルのハーレムですって!?!スキルのためとはいえ、どうなっているのですか!かつての義妹として見定めてやりましょう!)」

「それは失礼しました、別室で説明いたします。フィーナさん…いえ、レフィーヤさん。」  
「今はレフィーヤでお願いしますね。」

ガチャ

「入るわよ、ヘスティア。あら…? 【千妖精】? 取り込み中だったかしら?」

「いえ、先程終わりました。どうぞ、神アストレア。」

「え、ええ？【千妖精】よね？…なんか感じが変わったような気がするの、は気のせいかしらっ？」

「神アストレア、気のせいです。さあレフィーヤさん、行きましようか。」

「は、い。」

……かなり落ち着いているね。そりや、前世の記憶を引き継いだらね。

ハーフェルフだから少なくとも100年以上は生きているということになるよね。それに……あの古代を生き抜き世界三大詩人の一人になるといふことは、それなりの知識があり魔法も習得しているということだよな？

また、フィーナくんの義兄であるアルゴノウトに瓜二つのベルくんへの想いもかなり高いんじゃないかな？

100年も募らせた想いに今の想いがプラスすると……、【白兔眷属】の効果を最大限まで引き出せるんじゃないかな？

マジで、アルフィアくんやハイエルフくんを越えるかもしれないね。

それに…、彼女もベルくんを絶対に裏切らないだろうね。

それは確信している。

……いい加減にこれ以上増えるのは、勘弁してくれよー！

何だろう…まだ、いるのは気のせいかな？

やめやめ！ 考えたって、  
キリがないよ！  
どーにもなーれ。

## 第278話 紅花、驚愕。

あら？【千の妖精】、なんか雰囲気変わったかしら？

それより、こつちよ。

アストレア様、一体何をするつもりかしら……。

「へステイア。ベルの血をちようだい。……何で疲れているの？」

え？ベルの血？まさか……。

へステイア様、何か煤けているような気がするけど……何があつたのかしら？

先程の【千の妖精】と何か関係があるの？

「色々あつたんだよ……。セバスくん、あるかい？」

「はい、ございます。……本当によろしいのですね？神アストレア。」

「ええ、もちろんだわ。」

も、もちろんじゃありません！

「ちよ、ちよつと待つて下さい！アストレア様！何をするのでしょうか？私、すごく気になるんですけど！」

「先に説明していただけませんでしょうか？何故、若様の血をアストレア様が飲むので



「よし、やったわ！これが私のステータスね。ワクワクするわ！」

レベル1

レア

力： 1 0

耐久： 1 0

器用： 1 0

敏捷： 1 0

魔力： 1 0

スキル

【星乙女】

・戦闘時に全アビリティ中補正。

・戦闘続行時に発展アビリティ『剣士』発現

【正義審判】

・相手が悪性の場合、全アビリティ高補正。

・相手が悪性の場合、異常無効

【白兔眷属】

・血をいただいた相手への忠誠または愛が強ければ強いほど、早熟する。

(ただし相手が異性ののみ)

・ 血をいただいた相手が強ければ強いほど、ステータス高補正。

・ 血をいただいた相手が死ぬまで、神威・神力は完全に封じられる。

【星乙女】 かあ……オリンポスでお転婆娘だったキミらしいよ。」

「ヘステイア、昔のことは言わないで頂戴。」

「いや、あちこち首を突っ込んでいたじゃないか……。」

「それに……【正義審判】ね。」

「それもキミらしいね。でも、モンスター相手にそのスキルは意味ないんじゃないかな

？」

「そうね……でも闇派閥は完全に消滅したわけじゃないよね。」

「……試し斬りみたいなことはやめてくれよ？」

「……………」

「黙るなア！」

「よし！アビリティをバンバンと上げないとね！」

(あーあ、オリンポス武闘派に火が点いちちゃったよ。)

「え、えええ!?急に力が入らなくなったんだけど!？」

「ま、まさか！恩恵が切れたのか!?アストレア様が送還されたのか!?」  
「で、でも！何も起こっていませんよ。」

「…………キミ、彼女たちをどうするんだよ。」

「…………ハスティア、いえハスティア様。あの娘たちを眷属にしていただけかもしれませんでしょうか？」

「キミに敬語で言われても、違和感しかわかないんだけど…。はあ。」



アストレア様がベルの血によつて、神力を封印された？

ベルは本当にヒューマンなの…？

そして恩恵を失った私達は、ハスティア様に恩恵を授けてもらった。

「…………わ、私達のアストレア様がヒューマンに？」

「…………若様の眷属？神がヒューマンの眷属に？」

「…………鍛冶場へ戻つてもいいでしょうか？」

セシルちゃんはまだ諦めモードね…。

私でも現実を受け止められないわ！

「みんな、ごめんね！テヘペロ☆」





「待ちーや！護衛……いやウチも一緒に行くわ！誰かおるんかー？」

「どうしたのよ？ロキ？」

「ちようどよかったわ！ティオネ、ウちらと【ヘステイア・ファミリア】へ行くで！ライラさんの恩恵が切れとった！」

「何ですって！わかったわ、抱えていくわ！」



【怒蛇】がライラと神ロキを抱えて来た時は、何事かと思つたわ！

ライラがダンジョンへ潜つてなくてよかつたわ！

アストレア様がおられることで、ライラはホツとしていたようだけど、神ロキが「神の力を感じられへん……」と言つたことから、ヘステイア様が仕方なく明かしたわ。

「……………は？」

「……………アストレア様がバグ兔の眷属に？」

「……………あの子、ヒューマンよね？」

まあ、そうなるわよね！

ベルは神の格上の存在じゃないかと思つてしまつたわ！

「ごめんなさいね、ライラ。どうしても試してみたかつたの。」

「(いい加減にしるよ！あのバグ兔!) ……ヘステイア様。その、すまないけど恩恵もらつ

ていいかい？」

「うん…いいよ。すまないね、ロキんとこの監査役になって。」

「いや、【勇者】サマの近くにいるからいいんだけどなあ…。まさか、こんなことになるなんて…。」

「ご心中察するわ、ライラ！」

## 第279話 狡鼠、懷誘。

「ウ、ウチも飲むでー！（ヒューマンになるなんて、こんなおもしろいこと逃す気はないでー！）」

「はあ？ロキ、何考えてんだ？」

「フィンたちはどうするんだよ。」

「飲んでヘスティア様の恩恵を刻んでも、坊ちやまの眷属にはなれませんよ？神ロキ。」

「そんなのやってみるとわからんやろ！」

「私から見ても、神ロキの坊ちやまへの気持ちはただの玩具しか見ておられないように感じます。」

「うぐっ!？」

「そうだろうよ…。」

「あのバグ兎への好感度が最大近くまで高くないと、出ないんだぜ？」

「あたしでもセシルでもバグ兎に好意あるけど、リオンたちほどは高くないからな。」

「なので、無駄でございます。」

「ちくしよー！ライラさんの恩恵が切れた時にウチの恩恵を刻むべきやったわー！」

そんなのしたら、監視の意味がないだろうが…。

「それじゃあ、監査役にならないじゃない…。」

「黙つとれ！ただのヒューマンになつたお転婆娘は！」

「それはそれは大変失礼いたしました。神ロキ。」

「うへえ…違和感こんもりしかあらへんわ…。」

「同意するよ…ロキ。」

アストレア様が敬語…。

違和感あつて、気味悪いぜ。

まさか、ダンジョンへ潜るとか言わないだろうな…、いや絶対に言うな。

2年…いや7年前の大抗争でも18階層まで「ヘルメス・ファミリア」に護衛してもらつたぐらいだからな。

アリーゼたちに、ソロで潜らせないように強く言つておかないとな。

「失礼しまーす。あら、神ロキいらつしやい。神アスト…レア？」

「ふふふ、シノスさん。よろしくね。」

シノス…？

アストレア様が言つてた、神フレイヤがヒューマンになつたつて子か!?

…それが原因で、アストレア様はベルの眷属になりたかつたか…。

迷惑千万だぜ、あのバグ兔は！

起こってしまったことは仕方がないな。

ペースがかなり狂ったけどよー、ここは割り切るしかないわな。

「…ヘステイア様。まさか、神アストレアにもですか…？」

「本神がどーしてもというからさー…。」

「ア、アリーゼさんたちは!？」

「…私達はヘステイア様の眷属となつたわ…。考えようによつては、正式にここへ住む

ことになつたわね！添い寝復活ね！」

まだ諦めていなかったのか…。

「仕方がありませんねえ…。まあ、若様へ正式に仕えることになつたからよしとします

かねえ。」

「…：ヴェルフ師匠の鍛冶場を正式に使えるようになったただけマシですね。」

まあ…：正式にあのバグ兔の味方となつたと思えばいいか。

「…：神力を完全に封印するだけでなく…：恩恵も切れるんですね。」

「これで、シノスさんと同じくベルの眷属になれたわ！」

「むー！ベルさんの眷属の女神は私だけでいいのにー！」

「ほーほほほほー！」

アストレア様…、そのキャラ似合わないぜ？

はあ…先が思いやられるぜ。

「女神2人を眷属にするなんて、とんでもない子やわ…。ちくしよー！何であの時追い出したんやー！」

「まだ言っているのかい…。」

ずっと言っているぜ？

けどよー。それだとアリーゼと輝夜とあたしは5年前から来れなかったし、生き返ることができなかつたんだぜ？それに…リオンの正義も取り戻せなかつただろうよ。

【ヘステリア・ファミリア】の団員となつたのが正解だったと、あたしは思うぜ？

「では、お帰りを。神ロキ。」

「ちよ、ちよい待ち！せめて、アイズたんの様子を…。」

「今は研修中ですので無理です。ライラ嬢、神ロキを連れて帰って下さい。」

研修中？…何の研修なんだよ。

非常に気になるぜ、いやそれ以前にこの執事に逆らっちゃいけねえ。

しやーない、ロキを引きずって帰るか。

「あいよ。ロキ、行くぞ。」

「いややー！研修中というのが気になるわー！」

仕方がないな……。なら、この手を使うか。

「ホームへ帰る前に、一杯ひっかけていこうと思っただけだなー。」

「よし！行くでー！」

だろうな、ロキはホームでの禁酒とセクハラ禁止されていたからな。

ずつと「酒……おっ〇い……お〇り……酒……」と呟いてばかりだ。

だって仕方がないだろ？

【ロキ・ファミリア】は負けたんだからな。

「現金ね……。……と、ところでテイオナの様子はどうかしら？」

「皆様と早くも馴染めて、楽しんでおられますよ。」

「……そ、そう。それはよかったわ……。……はあ。」

ああ……。【大切断】のことか。

まあ、寂しいという気持ちはわかるがな。

『寂しがつとるわな……。』

『あいつ、「ハスティア・ファミリア」のこのホームの方角を一時間に一回は見つめてたぞ。』

『そりゃ、ずつと一緒にいた双子が離れ離れになつたらな。当のテイオナはのほほんとして楽しんでるしな。複雑に思うのもしゃないわ。』





## 第280話 侍従長、考察。

私はレフィーヤさんに、メイド親衛隊そして坊ちやまのハーレムについて説明しました。

「……ということでございます。」

「……ベル・クラネルのスキルを最大限まで強化するのはわかりました。そのため、ハーレムを作るのも必須というのもわかります。ですが！…私、彼を心底から愛しているレフィーヤ個人としても、前世でアル兄さんを慕っていたフィーナとしても、かなり複雑です。」

「前世を含めた想いで、ご心中察します。」

「(曲者ですね、このメイド)：私もそのメイド親衛隊に入ってもいいですね？」

「もちろんですよ。大歓迎いたします。」

「ありがとうございます。さて、本題ですね。直接ではないですが、リユールウさんやオルナさんに聞いた話も含みます。」

「世界三大詩人の三人が言う事なら、信ぴょう性は確かですね。」

全く、本当に坊ちやまには驚かせてくれます。

【始まりの英雄】アルゴノウトの生まれ変わりとは…。

しかもレフィーヤさんもアルゴノウトの身内であったフィーナさんとは。

そして私はレフィーヤさんから、古代の英雄が生まれ変わったと予想される方を聞き  
ました。

………。

驚きました。

まさか、これだけの古代の英雄の転生した方がオラリオに集結しているとは。

しかも身近に。

【始まりの英雄】アルゴノウト↓坊ちやま…ベル・クラネル

初代クロツゾ↓ヴェルフ・クロツゾ

【楽園の女王】アリアドネ↓アイズ・ヴァレンシユタイン

古代三大詩人 歌い手のリユールウ↓ルウ（リユー）・リオン

古代三大詩人 語り部のオルナ↓ティオナ・ヒリユテ

争姫エルシャナ（エルミナ）↓ティオネ・ヒリユテ

ドワーフの大戦士 ガルムス↓ガレス・ランドロック

狼帝ユーリ↓ベート・ローガ

ファイアナ騎士団初代団長ファイアナ↓リルカ・アーデ

ファイアナ騎士団二代目団長フィン↓フィン・デIMUMナ

ファイアナ騎士団参謀ヘルガ↓ライラ

ファイアナ騎士団団員メイリア↓メリル

ファイアナ騎士団団員アルフ↓アルフリック

ファイアナ騎士団団員グレーン↓グレール

ファイアナ騎士団団員ベリン↓ベーリング

ファイアナ騎士団団員ドヴァール↓ドヴァアリン

女王アルキティーン↓アナキティ・オータム

ゴオール騎士団第三軍団長ラザル・デアミッド↓ラウル・ノールド

ある意味、先日の戦争遊戯は正しかったですね。

関係者のファミリアを傘下に収めたのだから。

「他の方々…特に第一級冒険者の前世も古代にいたはずですが、完全に思い出せません…すみません。」

「焦らなくてもいいですよ。古代の英雄たちの転生者が今、ここにこれだけ集結しているとは運命を感じますね。」

「本当ですね…。あの…神々が裏で糸を引いているということはないでしょうか？」

あのクソバカ主神はやりそうですね。

問い詰める材料が増えましたね。

「あり得そうですね。ですが、ヘステイア様は関わりないと思えますよ？あの方はそのようなことが出来る神ではありません。」

「それはわかります。あの御方…ヘステイア様が古代の時に降臨していれば…いえ、やめましょう。そのようなたればは意味ありませんね。」

「さすが、古代を生き抜いた英雄だけはありますね。」

【猛者】と違えますね。すぐに切り替えています。

「お世辞はやめて下さい。まさか、アル兄さんが転生してもミノタウロスと縁があると…は…。あつー！」

「どうなさいました？」

「アル兄さんとミノタウロスの決戦の時で…」

「待たせたな、ミノタウロス！ 準備はできたぞ我が敵よ！」

「ここでお前を討つ！ 私一人ではなく、姫と二人で！ 本心に申し訳なく思う！ だから——また会おう、我が敵よ！ 生まれ変わり、次にまた巡り合った時、今度は一対

「で！ 私達の決着を！」

「約束だ、『好敵手』よ！」

驚きました…。

そのような因縁があつたとは。

【猛者】には感謝しなければなりませんね。

偶然とはいえ、ミノタウロスを鍛えアステリオスさんを引っ張り出し、坊ちやまと戦い合わせるとは。

「そのようなことがあつたのですか（現場にいたフィーナさんの言う事は本当に信ぴょう性が高いですね）。あのミノタウロスも、いえアステリオスさんもミノス将軍が転生したかもしれませんね。」

「……複雑です。何も転生してまでも、そのような縁も連れてこなくてもいいじゃないですか！」

それでもしなければ、坊ちやまはここまで強くなれなかつたでしょうね。

「縁ですか…。本当に、全ての縁が現在ここに集結しているのですね。」

これは…黒竜を倒せる兆しなのでは？

なら私達【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】は、真正正銘彼らの踏み台となつたのですか…。

私達【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】は、古代の英雄さえも超えることができなかったことを意味するのでしょうかね。

複雑ですね。

古代からの縁がここに集結しています。

黒竜を倒す…いえ、世界を救い新たな世界を創り出すという使命を果たすために。

## 第281話 侍従長、教示。

「話は変わりますが、お義姉様…いえアイズさんの魔法は異常と思いませんか？神の恩恵を受けてもあのような威力はありません。そう…大精霊でなければ。」

「！貴女は気づいていたのですか？」

「ついさっきですけどね。私の前世の魔法は精霊から力を貸してもらったものです。ですが、アイズさんの魔法は精霊規模ではありません。大精霊そのものです。」

レフィーヤさんがそのことに気づくとは、予想外ですね。

いえ、古代の英雄での経験上ですね。

それは私達を超えるかもしれませんが。

「その通りです。貴女には伝えたほうがいいでしょう。アイズさんの出自を。」

「え？」

そして私はアイズさんの出自をレフィーヤさんへ教えました。

「アイズさんが…傭兵王ヴァルトシユティンと大精霊アリアとの間に生まれたお子様…なるほど、ようやく納得がきました。アイズさんのモンスターへの憎しみ…アイズさんの魔法に。」



「理解が早くて非常に助かります。…ということはアイズさんは1000年前に転生されたということになりますね。」

「本来なら私達と同世代で転生されたかもしれませんが…。大精霊アリアが無理矢理引っ張り出したかもしれませんね。」

「それは有り得そうですね。」

まさか、それもあのクソバカ主神の仕業ではないでしょうね？

だから、神々が下界へ降臨したのでは…？

確定するにはまだ材料が足りませんね。

「ですが、大精霊アリアは大罪を犯しました。傭兵王ヴァルトシュティンとの子を成したいがため、大精霊の力を自ら封印し子を作り…そのためアイズさんに大精霊の力を分けてしまった。そして黒竜に敗北したことで黒竜への憎しみを植え付け、1000年の眠りにつかせたことです。」

「レフィーヤさん…。」

前世のアリアドネを、今世ではアイズさんを慕ってますからね。

大精霊アリアに対して怒るのも道理でしょう。

「悪いとは思いませんよ？それほど…彼女は傭兵王ヴァルトシュティンを愛していたでしょうね。」

「ええ、その通りですね。」

「まさか傭兵王ヴァルトシュティンが黒竜に敗北したのは、大精霊アリアの大罪に対しての神罰ではありませんよね？」

「ないと信じたいですね。」

また、あのクソバカ主神が糸を引いているわけではないですよね？

タイミングといい…、あのクソバカ主神がほかの有象無象の神々と共に降臨したのはそれですか？

ますます信ぴょう性が高くなりましたね。

「…いずれにしろ、アイズさんは…お義姉様には前世を含めて本当に幸せになってもらいたいです。」

「アリアドネさんはアルゴノウトと幸せになったわけではないのでしょうか？」

「数年ぐらいですね。私達が獅子討伐へ行き、私達を庇って死んでしまいました。…弱いのにそんな馬鹿をするとは予想外でした。」

「そうでしたか。」

「あの時の喪失感、悲しみは今でも思い出せます…。生きた心地がしませんでした。ですが、お義姉様は立场上各種族を取りまとめなければなりませんでした。心を殺しやり遂げるしかなかったのです。」

「貴女はどうしましたか？」

「アル兄さんの後を追おうと思いましたが、お義姉様のことを考えるとできませんでした。お義姉様が死なれる時までずっと支えてきました。ですが、アル兄さんがいなかったのは私達にとっても辛かったです…。」

「それは辛いことを聞いて、大変申し訳ございませんでした。」

「いいえ…、こうして転生してアル兄さん…いえ、ベル・クラネルに会ったのだから。アイズさんや皆さんにも。」

…そうですね。

レフィーヤさんには協力してもらいましょう。

坊ちやまを愛し、アイズさんを慕っている彼女なら問題ないでしょう。

「…レフィーヤさん、アイズさんと坊ちやまとの進展について協力していただけませんかでしょうか？」

「進展…ですか？」

「はい、実は…。」

そして私は先日の招集で話したことを教えました。

「なるほど…思い当たる節が多くあります。ようやく合点がいききました。わかりました、喜んで協力させていただきます。」

「ありがとうございます。アイズさんと親しい貴女方が協力していただけるのは、非常に心強いです。」

「いえ、アル兄さんとお義姉様が再び結ばれるのは私にとつて願ってもないことですから。」

そうですね。

1000年以上の時を経て、幸せになってほしいものです。

それは坊ちやまとアイズさんだけではなく…。

「それは貴女もですね？」

「え？そ、そうですね。私は当時義妹でしたから、アル兄さんの近くにおいても堂々と愛することは許されませんでしたから…。でも！こうして転生して、ベル・クラネルのハーレムの一員になったからには堂々とできます！」

「それはよかったです。改めて、レフィーヤさんお願いしますね。」

「はい、こちらもよろしくお願いします。まず、リヴェリア様とアルフィアお義母様を超えないといけませんね。」

「向上心があつて何よりです。」

得難い味方を得られましたね。セバスに報告しておきましょう。

…アルフィアさんを、もうお義母様よびですか。

その翌日にレフイーヤさんは…。

「ほら、団長。襟が曲がってますよ。」

「え？あ、あの…レフイーヤさん？」

「同じファミリアですから、ファイ…いえレファイと言ってください？」

「レ、レファイ？あの…ち、近くありません？（今までこんなに接近してきたことなかったのに！）」

「何ですか？何か不満ですか？もっと近づいたほうがいいですか？」

かなり積極的にいってますね。

前世でできなかった分も含んでいるでしょうね。

「ちよ、ちよつと近すぎます！当たってますつて！（や、柔らかい!?平常心、平常心だ!）」

「む…女の人の匂いがします…。」

「ええっ!?僕、昨日…あれ？昨夜の夕食から記憶が…ない?」

「（メイさんの言つてた添い寝ですか）気のせいでした。すみません、ベル。あ、団長と言つたほうがいいですか？」

「へ？あ、いや…。団長と呼ばれるほどまだ立派ではないので、ベルで…。」

「はい、ベル。」

「はい、レファイ?」

「……………」

何をお見合いしているのですか：貴女たちは。

それに、妙に気が合っていますね。

前世で義兄妹だったのは本当のようですね。

セバスに報告しますと、その場にいなかったのを悔しがっていました。

古代の英雄の時代で活躍された方の、転生者が語ってくれましたからね。

ふふん。

## 第282話 純潔園、観戦。

先日の顔合わせと宴はよかったです。

神口キのセクハラや酒癖がないのは気楽ですな。

改宗してよかったです。

ところで、レフィーヤはどこへ行ったのでしょうか？

「どうしましたか？アリシアさん？」

「あ、はい。メイさん、あの…レフィーヤを見ませんでしたか？」

「レフィーヤさんならアルフィアさんのところで教えを受けていますよ。」

「そ、そうですか。お聞きしたいのですが…。」

「何でしょうか？」

今朝見ました。

テイオナのあの姿について…。

「どうして…テイオナがメイド服を着ているのでしょうか？」

「テイオナさんからメイド親衛隊へ志願してきたからです。」

「メイド親衛隊へ志願!？」

「ああ、丁度いいですね。今、稽古中ですので見学しますか？」

「あ、はい。お願いします。」

稽古中ですか。

メイド親衛隊が稽古…？

「はあああつ！ガハツ！ガツ！」

「テイオナ…。見るんじゃない、感じるんだ。」

「無茶言わないでよ！バーチエ！見ないで感じろつてどう感じるのさ！」

「はあ…なら、お前からこい。見本をみせてやる。」

「…？バーチエ、何で目を閉じて…「さあ、来い」!!舐めんなあああ！グハツ！」

「これを感じるというものだ。わかったか？」

「きつう…。」

テイオナと「蠱毒の…いえバーチエですか。

師弟対決ですか。

今は、バーチエがまだ圧倒的に強いですね…。

「…ルウ、前より強くなっている…。どうしてですか…？」

「前にも言ったでしょう。ベルを愛するが故に、と。」



「……私も負けない。」

（なるほど、少しは改善したようですね。）

「なら、証明してみなさい。」

「言われなくても！」

【エアリエル】！

「くっ…。相も変わらず強力な風ですね。」

「もう、魔法は出させない…。」

「…そこだ！」

「なっ！風の隙間を…！ガハッ！」

「アイズ…貴女はその魔法に頼りすぎだ。」

「ぐっ…まだまだ！」

「来なさい！」

アイズとルウ…。

戦争遊戯では、【戦車の片割れ】による音波攻撃で集中できませんでしたが…。

今はまだ同胞が有利ですね。

アイズ…頑張ってください。

それに…何故、アイズもメイド服なんですか！

それにこの稽古は……

「……………あの、これは？」

「稽古です。」

「どう見ても、殺し合いじゃないですか！」

「大丈夫です。あちらに『ミアハ・ファミリア』の皆様方がおられます。」

「え？」

「ミアハ・ファミリア」の治療士がスタンバイ？

そこまでするのですか……



「こちらでも『フレイヤ・ファミリア』がいた時と同じことをやるとは思いませんでしたー。」

「『同感です。』」

「まー、経験値がもらえるからいいんですけどー。何で全員メイド服着ているんですかー？ ルーゼさん？」

「……………そういうルールです。」

「機嫌悪いですねー？ ベルが近くにいないからって、不貞腐れているんですかー？」

「なっ！……………そうですよ。何か？」

「おやおやー？素直になったのはいいことですねー。」

「黙りなさい！ヘイズ！」

「はいはいー。…フレ…いえ、シノスさん、本当にヒューマンになったんですねー。」

「ええ…、信じられません。事実です。それに…」

「どうしましたか？エイナさん、春姫さん？」

「はあ…はあ…。」

「ふう…、ステータスに頼りすぎは駄目ですね…。」

「ふふふ、これでもかかって天界で大神の親衛隊隊長まで登り詰めたんですよ？ステータスが弱くても、私には技と駆け引きがあります。ステータスがはるかに上の皆さんには劣りませんよ？」

「冒険者はステータスに振り回される者が多い…。けど、技と駆け引きと別。」

「エイナさんはわかっているようですね？けど、言うは易く行うは難いですよ？」

「きやあつ！」

「い、今の内ですう！」

「はい、そこもです。」

「あうっ！」

「へ…いえルーゼ？…フレ…シノスさんってあんなに強かったですかー？」

「私も今日初めて見ますが…、あきらかに武闘派ですね…。」

「…子は親に似るといふのは本当ですねー。」

「ええ…、団…いえ【猛者】たち幹部が脳筋なのは…。」

「ルーゼ？エイナさんと春姫さんはもう立てないみたいなので、相手願えません？」

「いつてらつしゃーい。」

「ヘイズ！…わかりました。怪我したらヘイズに診てくださいいよ？」

「それはどっちですか？いいから、かかって来てください。」

「っ！レベル2を舐めないで下さい！行きます！」

『ヘイズ様…。』

『何ですかー？』

『レベル1のフレ…シノスさんがレベル2のヘル…ルーゼさんを一方的に押ししていますか？私の目の錯覚でしょうか？』

『残念ですけど、私の目にもそう見えますねー。』

「きゃあああああつー！」

「ほらほら、レベル2だからって胡座かいたら駄目ですよ？」

『……技と駆け引きですかー。』

『ステータスがいくら上がろうとレベル差があるうと、技と駆け引きは別ですか……。』

『本当ですなー。今、正にシノスさんが証明していますなーしかもまだ余裕あるみたいですねー。』

『ン億年も生きた神の技と駆け引きにかなうわけじゃないですか……。』



「……………」

「おやおや、シノスさんの槍さばきは見事ですね。レベル1とは思えませんね。」

シノス：…同胞が働いていた『豊穰の女主人』にいたシルという店員ではないでしょうか？

レベル1とは思えない程の槍さばきに…駆け引き。

あ、うまい…。

【勇者】の槍さばきより華麗で鋭く見えるのは気のせいでしょうか？

「ステータスが伸びれば、レベル2上位…いえレベル3に届くかもしれませんね。」

「シノスさんは何者でしょうか…？」

「（今はまだ明かす時ではないですね）その内にわかりますよ。」

「???」  
どういふことでしょうか？

## 第283話 純潔園、切替。

「さて、次は坊ちやまの稽古を見てみましょうか。」

「あ、はい。」

---

私は……次元が違いすぎる光景を見ています。

何ですか……これは。

「はあああああつ！」

「やあああああつ！」

「ベル！握りが甘いぞ！剣のぶつかり合いには手の内を締めると言っただろう！」

「ごめん！ザルド叔父さん！」

あの目に傷の大男……、強いですね……。

【ロキ・ファミア】の幹部が全員かかってようやく勝負になるぐらいではないでしょうか？

【永争せよ、不滅の雷兵】

【カウルス・ヒルド】

「ふんっ！」

「む、耐えたか。」

同胞の雷を平然と耐えましたか…。

「友よ、覚悟！」

「はっ！」

「ぐっ！オツタルを負かしたただけはあるな！」

不意打ちも効きませんか…。

「今です！」

「『承知！姫！』」

何をするつもりでしょうか…？

「え？な、何で！縦一列に!？」

「行くぞ」「シールドバツシュ!？」（しまった！視界が!）」

「どこを見ている」「きよ、距離を置かないと！」

「そうはさせせん」「投槍!？か、間一髪！」

「終わりだ!」「ええっ！み、味方を踏み台にしたあ!？ぐっ！」

なっ！縦一列に並んで間髪入れずに攻撃を!？」



「ちっ！かすり傷でしたか！」

「「申し訳ありません！姫！」」

「いいえ！今のベル様へかすり傷でも勲章ものです！」

「「ありがとうございます！」」

あの連携でかすり傷程度!?

ベルさんはどれだけ強いのですか!?

「リリ！ひどい！」

「後で体でお詫びします！」

「体って何!？」

「余所見するな！ベル！」

「ぐうっ！」

「ちっ、吹き飛ばせなかったか（完治した俺の攻撃を片手で受けるとは…）。」

あれだけの人数が一齐にかかっても…団長は息切れしていません…。

レベル6なのに…何かレアスキルでもあるのですか？

「……………あの、目に傷の大男はレベルいくらでしょうか…？」

「ザル坊ですか？レベル7ですね。」「レベル7!？」

「ですが、今のザル坊は現役を越えていますからレベル8に匹敵するでしょう。」

「レベル8!? (…どうなっているのですか!)」

「一体全体どうなっているのですか!？」

「一ヶ月前まで弱小派閥だったのに、一気にオラリオ…いえ世界最強派閥になっているではありませんか!」

「それにしても、リリさんと【炎金の四戦士】の連携は見事なものですね（リリさんの指揮下に入れて正解でしたね）。」

「え? え、ええ。」

「今の坊ちやまはレベル9に匹敵しますが、まだステータスに振り回されていますね。まあ、ランクアップの調整には丁度いいでしょう。」

「あれで丁度!？」

「ベルさんには一体どんなレアスキルがあるのですか!？」

「アリシアさん。」

「は、はい!」

「その程度で動揺してはいけません。すぐに未知を既知に変えなさい。それが強くなる秘訣です。」

「!!」

「大丈夫ですよ。異端児のレイさんを受け入れたアリシアさんならできます。」

「…努力します、いえ変えてみせます!」

……そうです。

レイを受け入れた私ならできます!

彼女を世界へ受け入れるためにも、ベルさんを…〔ヘステイア・ファミア〕を強固にしなければいけません!

「その意気です。さて、頃合いですね。」

パンパン

「皆さん、そろそろ夕刻です。この辺にいたしましょう。」

あちらのレベル1，2組は…シノスさんだけが堂々と立っていますね。

レベル2が1人とレベル1が2人を相手にして、それですか…。

余程の技と駆け引きがあるようですね。

「はあ…はあ…シノスさん、強すぎるよ…。」

「も、もう、立つのもきついでございます…。」

「ふう、いい汗かきましたね! ステータスがどのぐらい上がっているか楽しみですね!」

「……………」

「へ、ヘル…いえ、ルーゼ?大丈夫ですか?」

「…治療魔法を…かけてください。」

「はい。」

「……（詠唱中）……」

【ゼオ・グルヴェイグ】

『ヘイズ、ありがとう。…何故、『フレイヤ・ファミリア』幹部たちが脳筋だったのかが  
ようやくわかりました…。』

『…私もですー。まさか、フレイヤ様…いえシノスさんも脳筋だったとは…。』

『詐欺です…。何ですか！あの技と駆け引きは！』

『仕方がありませんよー。相手はン億年も生きたフレイヤ様ですからー。』

『そうですね…（シノスがいち早くランクアップしそうな気がします…）。』

ベルさんの方は…、やはりベルさんだけが堂々と立ってますね。

他の皆さんは大の字になっていますか。

圧倒的ですね。まあ、団長を務めるからにはそうならなければなりませんね。

「ふう…まだまだレベル6に慣れないね。あれ？どうしたの？ザルド叔父さんにみんな  
？」

「あー…、歳だから気にすんな（くそっ！現役のカンがまだ取り戻せてないとはいえ、傷

「1つ負けさせねえとは…情けねえ。糞餓鬼のことを悪く言えねえな。」

「黙れ、愚兔。貴様のようなバ愚兔「バ愚兔!」と一緒にするな。」

「友よ…。手加減してくれ…。」

「だから、言っただでしょう!かすり傷1つでも勲章ものだ。」

「正確に!ありがとうございます!姫!」

---

さてアイズと同胞の方は…お互い大の字ですか。

引き分けですね。

しかし、アイズがああまで対抗心を見せる相手はあの同胞だけではないでしょうか?

「はあ…はあ…。し、勝負はお預けです。」

「はあ…はあ…。…さ、賛成。じゃ、じゃが丸くんが欲しい!。」

「…貴女は、それしか…ないのでですか!もつと…他に、あるでしょう!。」

「……ベル。」

「な…、もつと…選択肢を…増やしなさい!。」

同胞…、アイズに対してそこまで突つかからなくても…。

---

テイオナは…ポロポロですが何とか立っていますね。

「ロキ・ファミリア」の時よりかなり強くなっているのは気のせいでしょうか？

「よ、よーし。なんか掴めた気がした！」

「その意気だぞ、ティオナ。…ところで、アーデイはどうした？」

「【アストレア・ファミリア】とダンジョンへ行つたよー！現在のダンジョンでカンを取り戻したいってさ。」

「ああ、そうだったな。あいつらは、過去から来たんだったな。」

過去から…ですか。

あの目の傷の大男も、でしょうか？

## 第284話 純潔園、陥落。

あの後、私達はホームへ戻りました。

目に傷の大男はすぐ厨房へ向かって、作っていました。

そして…。

「「ごちそうさまでしたー！」」

中々の美味でしたね。

あの目の傷の大男が作ったとは思えないほど、繊細で深い料理でしたね。

見かけにはよりませんね。

「ザルド様、お皿を全て洗い終わりました。」

「…お、終わりました。」

「おう、ありがとうよ。ほら、合間に作ったクッキーだ。みんなで分けて食いな。」

「おおー！ありがとうございます。ザルド殿！」

「気にすんな。」

中々、気がきいていますね。

本当に居心地がいいですね、ここは。

「ザル坊にしては気がきいていますね。」

「そりゃ、ここに世話になってんだから作るのは当然だろ。…あの時にあいつらは「酒の肴を作ってくれよー!」としか言わないだろうが。」

「そうですね。大分疲れているようですが、坊ちやまの様子はどうです?」

「そうだな、かなりスキルが後押ししているな。レベル8最上位か、レベル9下位つてとこだな。…俺の不意打ちを片手で受け止めやがったぞ、あいつ。」

「それは上々です。ところで、ここにいつもの「あー!あー!体がまだまだ絶好調だ!だからいらねえよ、それは。いらねえ!」ついたらいらねえんだ!」そう言わずに。」

「放せ!この性悪メイドが!」

「失礼ですね。昔、貴方がメイお姉「あー!あー!あー!」五月蠅いですよ。ザル坊。」

「それはベルに飲ませろ!俺は風呂へ入る!（すまん!ベル、許せ!）」

「ちつ:「舌打ちしやがった!」まあ、いいでしょう。坊ちやまに頼んで明日はザル坊を手ひどく痛めてもらいましょう「てめえ!」。」

確かメイさんは魔導人形でしたね。

だからあの方の幼い頃を知っていても不思議ではありませんね。

でも、何故あの方のドリンクを見た途端、顔面蒼白しているのですか?



「と、とにかく俺は風呂へ入る！」

「覗かないで下さいね？」

「糞爺と一緒にするな！」

糞爺…大神ゼウスのことですか。

確か、難攻不落の女神様の大浴場を覗いた神と聞いていましたが…。

「わっ！「悪い！ベル！」…どうしたの？ザルド叔父さんは。」

「風呂へ入るそうです。」

「え？あ、そうなの？あ、僕も入」その前に坊ちやま、いつものドリンクを忘れていますよ？」あ、そうだね！…ゴクゴクゴク…。」

「皆様、来ますよ！」

え？リリさんが何で身構えているんですか？

何が起こるんですか？

「え？」「何がでしょう？」

「何々？」「何があるの？」

「何でしょう？」「さあ…？」

???何が起こるのですか？



「……………」

「べ、ベル？ど、どうしたんですか？」

「んあ？どちらなの？れふい？」

「ガハアツ！（兄さん…それは、反則ですよ…）」

「レ、レフイーヤ!?!べ、ベル、何をしたの？」

「あー、あいじゆしやんだ！」

「……………」【エア「駄目ですよ、アイズさん」はっ！あ、危なかった…（掻っ攫うところだった）。」

「べ、ベルくん？」

「んー？あーぢえいしやん？」

「ゴフツ！」「ア、アーディ!?!」

「ルウ…、…お姉ちゃんか川の向こうで手を降っているよ…。」

「アーディ、アーディ!?!シャクティはまだ生きてます！そっちへ行つてはいけません！」

「んあー？みんなどちらなの？」

「……………なるほど、コレですか（美の女神の威厳に賭けても屈しません！ですが…、これはキツイです…）。あれ？ルーゼ？ルーゼ!?!何で倒れているの!?!」

「…シノス…ベルは恐ろしい子です…。まだ隠し玉があったとは…。ああ、何か光るも

のが見えます…あれは天界への道でしょうか…？ちよつと行つてきます…。」

「だ、駄目よ！天界へ行くのはまだ早すぎるわよ！戻つてー！」

「メ、メイさんの言つてた幼児退行とはこのことだったんだ…。」

「よーじたいこー？（コテン）」

「ぐっ！や、やばい…。強い上に可愛すぎる…。た、耐えて！私の理性！【狂化招乱】発動してー！」

「改宗組のほとんどが死屍累々です…。アイズさんは…目と瞑つて耳を塞いでますね。でも、こちらを何度も見ようとしていますね。」

「……（見ちやいけない。見たら理性が飛んで、エアリエルで攫つてしまふ…でも見たいー。）」

「ふむ、何とか無事なのはティオナさんとシノスさんとアリシアさんですか？おや？訂正しますね、ティオナさんとシノスさんですね。」

「「え？」」

「フーツ！フーツ！いい、いけません！エルフとしてはしたくないことは…！でも…（チラツ）、ううっ！…フーツ！フーツ！」

「うわあ…（エルフなのに獣化状態みたいなことになっているわ…）。

「アリシアつて…そつち系が好みだったんだ。」

「では、皆様方。坊ちやまをお風呂へ。」

「「はー！」」

「「え！」」

お、お風呂ですか!?

この状態のベルさんと裸の付き合いですか!?

ふ、不潔…いえそれ以前に私の理性が崩壊します!

それ以前に、今のベルさんは私にとつてどストライクです!

こんな気持になったのは初めてです!

風呂となつたら…完全に襲つてしまいます!

避けなければなりません!

…ですが、どうしても見たいです!

「こ、この状態のベルくんとお、お風呂!?!無理無理無理!今でもキツイのに、更にお風呂

!?!絶対に耐えられない!」

「ま、待つて下さい!まさか、皆さんはこの状態のベルの世話を每晚ですか!?!」

「はい、レフイーヤさん。最長で10日間以上ですね。」

「「10日間以上!?!」」

「ど、どうやって耐えたの!？」

「慣れました。」

「ず、ずるい! 皆さん、ずるいですよ!」

「しよがないわ…シノス。【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】の戦争遊戯が原因だもの（ドヤア）。」

「ぐっ!」

戦争遊戯がきっかけで、ベルさんはメイさんとセバスさんを解放したのでしたね。

それで、メイさんから疲れを取るためにあのドリンクを…。

複雑です…。

「この状態のベル様は無敵ですので、まず慣れた私達がお世話します。遠巻きに見て、慣れた方がいいですよ（慣れたりリも今のベル様は正直キツイです…。ランクアップしたことにより更にパワーアップしたのですか! 冗談じゃありません!）。」

「そ、そうさせていただけます…（アル兄さんの小さい頃はああでしたでしょうか…? せめてあの時代にあのドリンクがあれば…!）。」

「…耐えられる自信がない。でも見たい…早く慣れないとダメ…。」

「が、頑張ろー…いや、無理。こつちが昇天されるよ…。」

「お、襲わない自信がありません。」



慣れたら…考えないことにしましょう。

【ロキ・ファミリア】では有りえませぬね。

テイオナと同じく、戻れる自信がありません！

---

風呂へ入って、ベルさんの裸を見ましたがヤバいです。

アルフィアさんがにらみをきかせてくれなかったら、間違いなく攫っていました。  
これを毎日？

が、頑張りましょう！

## 第285話 暴喰、忠告。

ふう…いい湯だ。

ああ…疲れがとれるな。

【ゼウス・ファミリア】にはこんなのはなかったな。

作ればよかったな。

「あはははーくしゅぎゅつたいー！」

「べ、ベル様！う、動かないでくださいませ！あんつ…。」

……今日もか。

「叔父貴…、ちよつといいですか？」

「（叔父貴つて俺のことか？）何だ？小人族の…誰だ？」

「アルフリッグです。あの…女湯からベルの声が聴こえてくるのですが？気のせいでしょうか？」

「…おい、お前らちよつと集まれ。いい機会だ、忠告しておいてやる。」

「「え？」」

ベルの身内として、誤解があると面倒だからな。



それにあのドリンクの危険性も伝えておこう。

「お前から…ベルが夕食後にいつも飲んでる飲み物、知っているな？」

「あ、ああ。あれを飲むとベルが幼くなつたように感じるんだが…。」

「あの飲み物は一体何なのだ？」

「あれは…男にとつて危険な飲み物だ。」

「危険な飲み物!?!」

ああ…あれは男にとつても危険だ…。

【ゼウス・ファミリア】で特大の罰だった。

「あの飲み物は、状態異常を大体回復しエリクサー以上の回復力を持っているんだ。」

「え?じゃあ、危険な飲み物ではないんじゃあ…?」

「問題は、その副作用だ。…濃さと量によつては幼児退行するんだよ…。」

「幼児退行!?!」

「そうだ。何故かわからんが、男だけが幼児退行するんだ。女が飲むと幼児退行はないが、男ほどの効能は低い。」

「一体何が入っているんだ…。」

「知らん。…あのメイを作ったイカレ野郎が調合したやつだ。」

「……………」

メイといい、あのドリンクといい、余計なものを作りやがって！

俺らは生きた心地がしなかったぞ！

覚えていろよ！見知らぬ先輩！

おっと、続きを言わないとな。

「あの飲み物を飲んだ野郎は例外なく幼児退行する…。その時の記憶は人それぞれだ。ベルは記憶がないほうだな。」

「……叔父貴は？」

「……濃さによつては、あつたりなかつたりする。だから…覚えていると…わかるだろう？」

「「うわあ…。」」

「大怪我や重い状態異常がないようにはしろよ？でない…あいつは容赦なく飲ませるぞ。」

「「ひいつー！」」

ああ、あいつは絶対に飲ませる。

…公衆の面前でないだけ、まだマシかもな。

こいつらは多分一回は味わうことになるだろうな。

俺も…団長のマキシムも味わったからな…。

いい思い出だ…。

「ゼウス・ファミリア」ではそれが特大の罰だったな。効かなかったのは爺だけだった。」

「大神ゼウスが…?」

「そうだ。あの糞爺は、罰を受けた眷属が幼児退行しているのを見て、容赦なくゲラゲラと笑いやがった。俺らも当初は笑ってたが、自分たちも受けるハメになった。…レベルに関係なくな。」

「「ひでえ…。」」

「それだけじゃねえ…。そいつが元に戻った時に、糞爺はその時の所作を目の前で真似しやがった。」

「「外道か!？」」

「ああ…。あの時はマジで糞爺を送還してやる!と思ったぐらいだ。」

「「ご心中察します…。」」

やはり、あの糞爺は送還させるべきだった!

ベルは本当に大当たり中の大当たりを引いたな。

……神ヘステイア、感謝します。

「あと…この中でベルのスキルに知っているやつは…ヴェルフ、お前だけか。」

「一体、どんなスキルなんだ？」

「えーと…「俺から話す。一部だけだがな。」あ、はい。お願いします。」

そして、ベルのスキルと発展アビリティを伝えた。

「なるほど…それがオツタルに勝ったスキルであり、愚兎を後押ししているものですか。」

「……羨ましいようで、全然羨ましくない…。」

「姫…、頑張ってください。」

「姫…、勝利を祈っています。」

「姫…、せめて上位をもぎとることを応援しています。」

「姫…、メリルに頼んで際どいものを作ってもらいます…。」

そうだな。傍から見ると羨ましいだろうな。

だが…蓋を開けてみれば同情しかわかん。

「じゃあ、叔父貴。女湯から聞こえてくるのはベル本人なのはわかりましたが…、そもそも何故ベルは欲情しないのですか？」

「ああ…それは俺も不思議に思った。ヘスティア様とリリスケと春姫がわざと際どくボディタッチしても。恥ずかしがるだけだった。」

「フレイヤ様の添い寝を毎晩してたのに、ヤツたと聞いていない…。」

「ベルはもしかして、男好きなのか？」

「その白エルフやヴァンへ妙に懐いていたようだし…。」

「あ、そっちのケがあつたのか？それなら納得するが…。」

「やめろ、貴様ら。妙な勘ぐりするな。」

「やめて下さい…。本当にマジで。」

「こいつら、知らないのか？」

ベルのために誤解を解いておくか。

「あーお前ら、一応ベルの名誉のために言つてやる。ベルは女好きで…まだ未精通なんだ。」

「「は？」」

だろうな、そういう反応が普通だよな。

レベル6で、未精通は普通あり得ないからな。

「そういえば、そうだったな。あの愚兎はまだ14歳だった。」

「…友はどこまでも純粹無垢なのだ…。」

「道理で…納得した。」

「あの…ザルドさん。精通したらあの人数には困りませんか？」

「ん？ああ、まあ…困らないだろうな。」

「「え？」」

むしろ、足りないかもしれない…。

ベル…あの馬鹿のような甲斐性なしにはならないでくれよ。

「歓楽街へ行ったことある奴はいるか？」

「一応俺はあるが…酒飲みだけだ。」「……………」 本当だ！嘘じゃねえよ！」

「…歓楽街の伝説があつてな。一晩で100人斬りしたやつがいたんだ」

「「化け物ですか!?!」」

「…その化け物が『ゼウス・ファミリア』最弱のサポーターであり…、ベルの親父だ。」

「「ええええっ！」」

あの馬鹿の子なら、それも受け継いでいるはずだ。

「だからよ、そいつの遺伝子を受け継いでいるベルが精通したら、危険なのはあいつらの

方だ。…最悪壊れかねないぞ。」

「「うわあ…。」」

「まあ、メイとセバスがその時に備えて何かをしているようだが…俺は関わりたくね

え。」

「「我々もです…。」」

「それに…ベルの容姿と性格から考えると、逆に飲まれるのはベルかもしれねえぞ。」

「「あ、それはわかります。」」

「俺らにできることは…ベルへ対等に接して、今の強さに満足せず強くなつてベルを大いに助けて、そして…強く生きてくれることを願うだけだ。」

「「はい……同感です……。」」

…あの容姿は反則だろう…。

ベルが襲うというより、彼女たちによつて食い散らかされるだろうな。

だが、今回のはいい話し合いだった。

風呂場で裸の付き合いで、こうして話し合えるんだからな。

…やはり、「ゼウス・ファミリア」でもこういう大浴場を作るべきだったな。

団長が生きていたら、ずっと入り浸るだろうな。

それに…こいつらはいい奴らだ。

ベルのことを心から心配しているしな。

ベルは、本当にいい仲間に巡り会えたな。

あの幸運が、ベルを導いてくれたな。

安心しろ…、天へ昇つたお前ら。

俺らの最後の系譜を持つベルは、良き神に拾われ、良き仲間巡り会い、強くなつて

いるぞ。





『メイくん…彼女に何があつたんだい…?』

『恐らくあのドリンクを飲んだ後の坊ちやまが、アリシアさんの何かにストライクしたでしょう。』

『あー、あの時のベルくんかあ…。うん…まあ…気持ちはわかるよ…』

『他の皆様もダメージを受けておられました。恐らく坊ちやまがランクアップしたのと、魅了が5段階上がったのと関係があるのでしょうか。』

『あ…。』

『落ち着きましたでしょうか?アリシアさん。』

『す、すみません。はしたないところをお見せしてしまいました…。ですが、メイド親衛隊への志願希望は変わりません!』

『わかりました。アリシアさん、メイド親衛隊へ入る前に注意事項があります。』

『ち、注意事項ですか?』

そして私はアリシアさんへ【白兔眷属】についてお話ししました。

『なるほど…デメリットで、私の寿命がヒューマン並になるということですか…。』

『はい、そうです。貴女にその覚悟がありますでしょうか?』

『……団長、ベルさんは異端児と人類の共存に欠かせない方です。異端児はたしかにモンスターですが、心は私達と同じです。私は……闇派閥よりセイレーンのレイに庇われ、

救われました。もう私は彼らに対して剣も魔法も向けられません…。彼らがベルさんによつて救われたなら、私はベルさんに救われたのも同義です。ベルさんに死なれては、人類と異端児の共存はありえませんが。私は…ベルさんと共に、異端児との共存に全てを注ぎます！」

「アリシアくん…ありがとう…。彼らのことを思つてくれて。」

ふむ、やはりこの前の宴で異端児の方との交流がかなり効きましたね。  
良い兆候です。

改宗組で、異端児の方への思い入れが強いのはこの方だけですからね。

その前に確認しておきましょう。

「はい、わかりました。いいでしょう、その前にアリシア・フォレストライト。」

「は、はい！」

「貴女は坊ちやまへ身も心も捧げる気がありますでしょうか？」

『ちよ！ちよつと！メイくん、彼女もかい!?』

『ええ、間違いありません。既に堕ちています。』

『ぬあー！ロキからの改宗した子、全員じゃないか！まだ3日目だよ!』

「はい！私…アリシア・フォレストライトはベルちゃん「ベルちゃん!」い、いいえ！ベル・クラネルへ身も心も捧げ、共に生きることが誓います！」

『メイくん…さっきのベルちゃんって、まさかこの子…。』

『はい、シヨタコンですね。』

『あー…うん。まあ…ボクもそうだから…悪くいえないけど…。』

「分かりました。では、こちらを飲んで更新してもらいます。」

「こちらは…?」

「ベルちゃんの血です。」「ぶぶっ!」

「はい! 飲みます!…ゴクゴクゴク…。」

『この子…気付いてないよ。』

『一気に重症化しましたね。』

「…ふう。ヘステイア様、更新をお願いします。」

「あ、うん。わかったよ(レフィーヤくんのようにまたレアスキルが出ませんように

…。)」

「…うん。発現しているよ、おめでどう(おめでどうと言ったほうがいいのか判断に困るけどね)！」

「ありがとうございます! 次はベルちゃ、いえベルさんと同じレベル6を目指します!」

「はい、その意気でお願いますね。」



これで「ロキ・ファミリア」改宗組は完全に落ちましたね。

【勇者】へのつながりは完全に断たれ、情報漏洩の心配はありませんね。

また多くの貸しがありますから、早々と反旗をひるがえすことはないでしょう。

テイオナさんと【怒蛇】がやや不安でしたが、テイオナさんがそこまで坊ちやまへ入れ込んでいるのは予想以上でしたね。

全く最近は予想以上の成果で嬉しいですね。

さて、アイズさんの状況は…。



「はい、春姫さん！」

「ありがとうございます。うん…、揚げる前のじゃが丸くん、きれいにできましたね。」

「ううん、春姫さんの教えがうまくかったです。」

「いいえ、アイズさんの飲み込みが早かったですよ。」

「メイくん…アイズくん笑顔が増えてきたね。」

「ええ、春姫さんの大きな母性に包まれたのでしょうか。」

「春姫くんはお母さんの才能があるね！」

「ええ、お子様が生まれた時が楽しみです。」

「まだ早いよ！ダメだー！」

「アイズ：ロキのところに行った時より笑顔が増えたね。」

「ええ、テイオナさん。改宗してよかったと思いますよ。」

「春姫とエイナだけじゃないね、ヘスティア様も。」

「はい。それに：あちらではアイズさんは特別扱いされていましたから仕方がないかと。」

「うーん。複雑だね。：ところでレフィーヤは何か変わった？」

「え!? わ、私ですか？」

「うん、何か大人びた感じがするんだ。」

「(す、鋭いですね！さすがオルナさんが転生しただけではありませんね)ここにいますと、そうなりますよ？ テイオナさんもあちらより楽しそうですよ。」

「うん！ 楽しいよ！ アーデイも春姫もいるし、ベルくんも！ 至れり尽くせりだよ！」

「そうですね！（恐らくフィンさんは私達を間諜として送り出したかもしれませんが）」

「でもさー。アリシアまでも入団するのは予想外だったよ。」

「ええ：私もです（後でメイさんへ聞きますと、幼児退行したベルにやられたそうです）。まさかアリシアさんにそんな性癖があったとは：。」

「んー、まーいいか！」 「テイオナー！ どこー？」

「あ、いけない！ アーデイに頼まれたのを終えたことを伝えないと！ じゃあ、後でね！」

「あ、はい！」

「ロキからの改宗組が全員メイド親衛隊になるとはね…。」

「ええ、こんなに早くなるのは予想以上です。坊ちやまはすごいですね。」

「予想以上？」

「はい、【勇者】はこちらを探るために彼らを送り出したかもしれませんが入選ミスですね。」

「考えすぎじゃないかい？」

「そうだといいですが、念には念をです。」



…この内容でいいでしょう。

さて送りますか。気づきますでしょうか？

## 第287話 九魔姫、閲覧。

「ふう……あいつらがいなくなると寂しいものだな。おや……これはメイからのか。いつの間……いや、また忍び込まれたのか。はあ……どれどれ……。は？メ、メイド親衛隊へ全員入団だと？アリシアまでもか!?……そうか。ほう、アイズが料理を手伝うとはな。ふふ、今度行つてそれを食べたいな。それに、ダンジョンへは改宗してから行つてないのか……新記録だな。……他のやつも馴染めているようんだな。テイオナは……一番馴染めているのか。今、テイオネが寂しがつているというのにな。まあ、時間が解決してくれるだろう。レフィーヤはアルフィアに指導うけて……、メイド親衛隊で体捌きや回避を身に着けているのか……。アリシアもか?……次に行くのが楽しみになってきたな。彼女たちを改宗させて正解だったな。……明日にフィンとガレスへ教えるか。」

メイとセバスに任せて正解だったな。  
これで安心して寝られるな。

昨晚はよく寝られたな。

メイからの報告書は非常に助かるな。

「リヴェリア…何か上機嫌だけど何かあったのかい？」

「珍しいのう…。」

「ああ、メイからの報告書があつてな。ほら、これだ。」

「【最強侍従】から？…ホームの警護をいくら固めたつて意味ないじゃないか…。見させてもらうよ。………そうか。アイズがダンジョンへ潜らず彼らと楽しんでいるのか…。」

「よかつたのう…。」

「ああ、改宗させてよかつたと思うよ。」

うむ、アイズに笑顔が増えるのはいいことだ。

ここへはもう帰ってこないだろう。

まあ、いい。私から出向いたらいいだけのことだ。

「ちわー！三河屋でーす！」

「……………」

「いつは…。」

「ちよ！無口はやめてーや。ん？フィン、何見ているんや？」

「【最強侍従】からの報告書だよ。ホームへ忍び込まれリヴェリアの机上に置かれたみた



いだよ。ほら。」

「またかいなー警備に意味あらへんやんけ……。おー、どれどれ……。何やと！メイド親衛隊やと！ウチからの改宗組全員やんか！こうしちやおれん！ドチビんとこへ行くで！」

「何故だ……？」

どうせ、またくだらんことだろう……。

「全員のメイド姿が見れるやんか！ウヒヒ……ホームではセクハラ禁止やが、あつちでやつても問題ないやろ。では、行ってくるでー！」

「……」

「やれやれ、アイズたちがいないから大人しくするかと思つたが、相変わらずだ。」

「あれでも寂しがつているんだよ。」

「困つた神じやのう。」

しかし、あいつはわかっているのか？

【ハスティア・ファミリア】には彼らがいるというのに……。

それに、アイズはロキ接近禁止が言い渡されているからな。

コンコン

「ん？誰だい？」

ガチャ

……いきなり来るとは。

「……どうしたのだ？メイ？」

「返品しにきました。頼んだ覚えもありませんので。」

「……返品じゃと？」

「はい、こちらでございます。神ロキ詰め合わせセットです。」

「……！……！……！……！（開けてー！助けてやー！息しくいんやー！）」

そうか…。

この部屋を出て数分もなかったはずだが…。

「……早くないかい？」

「こちらへ来る気配を感じましたので、出向いてきました。」

「そうか。そこに置いといてくれ。」

「はい。では。」

手間かけてすまないな…。

メイもやること多くあるだろうに。

バタン

「……！……！……！……！（スルーせんといてやー！助けてやー！ママー！）」

「さて、仕事に戻るか。ライラがいるおかげで事務が非常に進むな。」

「ああ、彼女の助けは大きいよ。……ティオネとよくつるむからこちらとしては助かるよ。」

「他のやつらへもよく声かけとるわい、監査役としては、得難い人材を得たのう。」

全くだ。【アストレア・ファミリア】は何故か解散したようだが…。

まあ、ライラは正式に【ヘスティア・ファミリア】の監査役となつて派遣してきたが、色々と手伝つてくれてこちらとしては非常に助かっている。

ラウルとアキは新居探して忙しいようだしな。

「……………（フィン…ガレス…助けてや…）」

【ヘスティア・ファミリア】にメイとセバスがいるのに、外部からの神に好き勝手させるわけがないだろう…。」

「全くだよ。今の【ヘスティア・ファミリア】は難攻不落だというのに…。なのに、こちらへは簡単に忍びこまれてはたまつたものじゃないよ。」

「まあ、送還されないだけマシじゃのう…。」

送還されたら、ヘスティア様にお願いしよう。

「……………（ひどい！ウチはただアイズたんを心配しただけやのに…）」

「あいつらはもうこちらへは戻らないだろうな。」

「ほんのすこし彼らの動向を見てほしかったけど、やはり無駄に終わったね。…こんな

に早くなるとは思わなかったよ。」

「何じゃ、お主また何か企んでおったのか。呆れたやつじやのう。」

また企んでいたのか…。

だが、それはメイとセバスが許さんだろうな。

あいつらはもう完全に「ヘスティア・ファミリア」の団員となったのだ。

「……………」（いい加減に無視せんといてやー！そろそろ苦しくなってきたんやー！）

コンコン

「失礼します。団長。」

「よう、フィン。例のものをギルドへ提出したぞ。……………なんだこの箱は？」

「ああ、ありがとう。……………気にしなくていいよ。」

ああ、そうだ。

「そう言われると気にするぜ？どれどれ……………さて行くか。」

「どうしたのよ？ライラ？何よ、それ？見せて…よ。……………団長、そろそろ昼食です。食堂へ行きませんか？」

「む？そんな時間なのか。ふう…行くのでしょうか。」

「ああ。そうだね。」

「おい、こいつはどうするんだよ？」

「…ハア。仕方がない。開けてくれ。」

「わかったわ…。」

ビリビリ

「ぶはー！苦しかったわー！」

「反省しろ。ロキ。」

「何したんだよ…：…ロキは。」

「〔ヘスティア・ファミリア〕のアイズたちのメイド姿を見に行こうとしたんだよ。」

「何考えているのよ…。」

「じゃかあしいわ！メイドがいるのに行かんでどうするんや！」

「理解できん…。」

本当に神ヘスティアとの差を感じるな…。

## 第288話 女将、苛々。

アタシは苛々している。

「何やってんだい！早く取りにきな！」

「二、ニヤー！」

「ひい…ひい…。息つく暇ないよ…。」

「アレを置いてから母ちゃん、イライラしてるニヤ…。」

あのサド執事に、性悪メイドめ！

「おい…ミア。落ち着け。」

「ああ？」「お前が苛々してたら、客が来ないだろうが！」

『おお！サーが母ちゃんに口答えした！』

『凄いや！サー！』

アンタに何がわかるってんだ！

アレを見ないで苛々しない方がどうかしているよ！

「アレを見ないでおけと？ふざけるな！」

「だから、アレは一体何なんだよ！ただの石像だろうが！」

「五月蠅いよ！いいからさっさと仕事しな！」

「つたく…何なんだよ…。」

アイツらめ！

戦争遊戯で負けたからって、こんなモンを置くんじゃないよ！

店前だけでなく、ホールにも！

とんだ嫌がらせだよ！

「こんにちは。」

「み、みんな元気？ププツ…ここにも。」

「あの…シノス？何故、店前の石像にもこの石像を見て笑っているのですか？」

「ええ、何でしょうか？この石像は。ベル、じろじろと見ないで下さい。変態ですよ。」

「変態?!」

坊主にルウ、シノスにルーゼか。

何の用だい？

「フレ…いえ…、何の用だ？それに何だ、その格好は。」

「あ、ミア母さんに渡す件がありました…。この格好ですか？みんなが外へ出る時はこうしろ、と。」

（当然でしょう。今のベルは外へ出すだけで殲滅兵器並みですから。…これ以上、増や

してたまるものですか!」

「ミアにか?……あの通り機嫌が悪い。話しかける時は注意しろ。」

「あ、はい……」

「ププツ……ここまで再現しているなんて。」

あの糞女神は知っているね。

まあ、知っててもおかしくないが……笑うんじゃないよ!

「シ……ノス。これは一体何だニヤ?母ちゃん、コレを見て機嫌悪いんだけどニヤ?」

「え?ミア母さんから聞いてないの?」

「聞いたらさ、「埋められたくなかったら聞くな」と恐ろしい声で言われたんだよ……」

「シノスは何か聞いているニヤ?食べに来た【猛者】がコレを見てミア母さんに聞こうとしたら、すぐく睨まれて何も言えなかったニヤ……」

「んー、そうですね。オツタルさんも知っていますね。これはね「送還されたいんだね?」

シノス?」私は何も知りませーん。」

「「ひいっ!」」

アイツらめ!

破壊したら、更に際どいやつを作ると言いやがった!

だから破壊できないんだよ!



「それで、坊主？アタシに何だって？」

「えつと…セバスとメイがミア母さんにコレを渡してほしいって。あ、この手紙も。」

「フン…、何々…は？…そうだったのか。坊主とルウが…。」

……ちつ、坊主とルウが生きて帰って来たのは、アイツらの遺品だったのか。

しかもこんな遺書を残して…。

さすがに知らんぷりはできないね…。

「ベルさん、それは何ですか？」

「あ、はい。それは、僕とルウさんが深層へ落ちてその時に会った冒険者…いえ、亡くなった方々がおられました。その時の遺品です。」

「ええ、あの方々の遺品がなければ私達は死んでいたでしょう。なので、その遺品の遺族へお渡ししたいのです。ミア母さんなら絶対に知っているとメイさんが言っていました。」

「……………何かの因果かねえ。はあ…、坊主。それはわかったけど、その石像を何とかしてくれとアイツらへ言ってやってくれないかねえ？」

「その石像は一体何でしょうか？」

坊主は…聞いてないのか？

まあ、いい。それは置いておこ…

「やあ！ミア！店前と…おお！ここにもミアの若い頃が、ぶげえ!？」

あの糞神が！

バレちまつたじゃないか！

「「え？ミア母さんの若い頃？」」

「忘れろ。」

「「え」」

「忘れなきや埋める。」

「「イエス！忘れました！」」

絶対に埋める！

あの糞神は店前に埋めところかねえ。

いや…こつちが先だ。

『ミア母さんの若い頃だったんだ…アレ。』

『はい、ベルさん。ミア母さんの若かった頃です…。そこまで再現しているなんて凄いわ…。』

『それはミア母さんも怒るでしょうね…。』

『自分の若き頃の姿を置かれたら、恥ずかしい上に苛々するでしょうね…。』

聞こえているよ！

「おい、何か言ったかい？」

「いいえ！何も言ってません！」

「ちつ…。まあ、いい。アレン、アーニヤ。ちよつと来な…。シノスとルーゼもだよ。」

「ニヤ？ミヤも？」

「何なんだよ…ちつ。」

「私もですか？」「な、何でしょう？」

コイツらには見せなければならぬね。

アタシらの…やり残したことを。

「この旗には当然見覚えあるね？」

「！！」

「あ！【フレイヤ・ファミア】の団旗…。じゃ、じゃあ！あの人は…。」

「…何故、【女神の戦車】とアーニヤなのでしょう？」

それはコイツらが一番関わりのあることだからだよ。

「そ、それがどうしたのかニヤ？」

「それがどうしたってんだ！」

「…裏面を見な、アンタらの仕出かしたことへの証明だよ。」

「え？…！！」

そして、アレンとアーニヤは瞠目した。

そりゃ、そうだね。

「そ、そんな…ミヤーはミヤーは！」

「落ち着け！愚図1号！」

「……そう、あの子達の…。」

「シノス…？」

フレイヤは流石に覚えているようだね。

アレンがああなり、アーニヤを追放せざるを得なかったあの事件を。

カランカラン

オツタルか…タイミングがいいのか悪いのか…。

丁度いいね。

「…ミア。いつもの…シノス様？ルーゼ？…どうしたのだ？」

「……裏へ来な、オツタル。坊主、ルウもだよ。」

## 第289話 街娘、代弁。

ミアが神妙にし、アーニヤがパニックになりアレンも…。  
仕方がないわ。

この団旗は確かに私の…「フレイヤ・ファミリア」の団旗なのだから。

「ミヤーは！ミヤーは！」

「落ち着きやがれ！愚図1号！あれはてめえのせいじゃねえ！俺のせいだ！何回言えばわかるんだ！」

「ミヤーは！ミヤーは！」

かなりパニックになっているわね。

しようがないわ。この…遺書を見たらね。

「アーニヤ、すみません！」

ゴツ…！

「……………きゆう。」

今は、気絶させたほうがいいわ。

「ルウさん…。」

「ふう……。アーニヤがこんなにパニックになるのは初めて見ました……」

「ミア……。一体どうしたのだ？」

「オツタル、アーニヤがホームから出たきっかけは覚えてるね？」

「！……ああ。」

ええ、オツタルなら知っているはずだわ。

「そのきっかけのアイツらの遺品だよ。その団旗と……裏の遺書もね。」

「何……。これは！……。そうか、お前らが深層で会ったのは……。」

「はい……。オツタルさん。僕たちが会ったのは……『フレイヤ・ファミア』団員の方々でした。既に骨になっていました……。」

「すみません。あの時は私達は手負いのため、余裕がありませんでした。」

そう、それよ。

ベルとルウから聞いたけど、その子たちが死んだのが一ヶ月前ぐらいならわかるわ。

けど……。あの子達ならあり得ない、そう絶対にあり得ないのよ。

「いや……。聞いたただけだ。そうか、この遺書を持ってきてくれただけで感謝する。これは俺が……。」

「やめろ、オツタル。」

「アレン……。」

「アレは俺のせいだ。俺があいつらを殴り飛ばしてでも連れ戻さなければ、起こらなかったんだ。これは当時の責任者である俺が持つていく。」

「…当時の団長は俺だ。俺が全責任持つ。」

「だから！何が何でもてめえが責任負うんじゃないやねえ！これは俺の責任だ！…てめえを倒してでもだ！」

「アレン……。」

アレンもあの時を覚えているわね、いえ忘れるはずがないわ。

アレンがアーニヤを切り捨て、追放せざるを得なかった事件なのだから。

『ルウさん……』

『ベル、これは「フレイヤ・ファミリア」の問題です。私達が口出す問題ではありません。』

ええ、そうね。

……私が出張ったほうがいいわね。

「やめなさい。神フレイヤとしての言葉を伝えます。」

「「！」」

「これはオツタルの責任でもアレンの責任でもないわ。あの子達の責任よ。」

「「……。」」

「これは「フレイヤ・ファミリア」としてやり残したことよ。さつきからずっと気になっ

たことがあるの。ベル、ルウ、貴方たちに聞きたいわ。」

「あ、はい。」「神フレイヤ…、何でしょうか？」

ええ、聞かなければならないの。

あり得ないことを。

「貴方たちはこの遺品の持ち主、遺骨に会ったと言ってたわね？」

「ええ。」「はい。」

「なら、どうしてダンジョンに飲み込まれていないの？」

「!!」

「モンスターも例外なく、遺体もダンジョンに飲み込まれているはずよ？」

「…何があつたかわかりませんが、彼らが死んだのはいつ頃ですか？」

「10年程前かしら…？確かそのぐらいだったわよね？オツタル、アレン。」

「!!…はい。」

「なっ！あ、あり得ない！」

オツタルもアレンも気づいたわね。

そう、あり得ない。ダンジョンが10年も放置するなんて。

「そう、あり得ないのよ。10年も経っているのに、骨も遺品も残っているなんて。」

「……………」



「それは置いておきましょう。骨が残っているなら丁度いいわ。」

「フレイヤ様…何を？」

「かつての主神としてお願いよ…その子達の遺骨を持って帰ってほしいの。」

「！！」

それが…「フレイヤ・ファミリア」としてやり残したことよ。

そして、あの子達を弔わなければならない。

そしてあそこの子達にも…。

「場所は覚えているよね？ベル、ルウ。」

「あ、はい。覚えています。ルウさんもですね？」

「ええ、いつかは弔おうと思っていました。」

「なら、幸いね。オツタル、アレン。彼らと共に深層へ行つて回収してくれる？」

「はっ、かしこまりました！」

レベル9相当のベルと、レベル8のオツタルがいれば深層は楽に進むはずよ。

「待つ…ニヤ。」

「アーニヤ！気づいたのですか！」

「ミヤも…行くニヤ…。」

「てめえが来てどうするってんだ！足手まといだ！大人しくここにいやがれ！」

「兄様！これはミヤーが招いたことだニヤ！ミヤーが行かなければミヤーの悪夢は終わらないニヤ！」

「駄目だ！「アレン、連れていきなさい。ただしアーニヤ、ちゃんとみんなの言う事を聞きなさいね？」ちつ：勝手な行動をしたら轢き殺すぞ！」

「ありがとうございますニヤ！わかったニヤ！」

アーニヤにとつて、いえアレンにとつてもケジメをつけないわ。

その時が来たということね。

「ルウさん、僕らもホームへ戻つて神様へ伝えましょう！」

「ええ、そうですね（もう一つ気になることがある…魔石灯は長くても数ヶ月のはずだ…あの時の魔石灯は眩しいほど光っていた…あり得ない。ダンジョンだからでしょうか？）」

あら…？

ルウは何か引つかかっているわね。後で聞いてみましょう。

「おい…神々にはどう説明するんだい？」

「私から言います。依頼料は、ヘステイア様から借金します。」

「神デメテルにはアタシから言うよ…アタシも他人事じゃないからね。」

「私も行きます。神デメテルにも別件でお願いしたいことがあるんです。ルーゼも協力

してくれる?」

「もちろんです!」

あの子達を迎える準備をしないとイケないわ…。

どうしましょう…借金。

## 第290話 白兔、深層。

深層……。

ルウさんと落ちて以来だ。

うう……緊張する。

「ベル、落ち着いて下さい。」

「あ、はい。すみません……。」

「……ベル。今のお前の強さなら、深層は中層と同じぐらいだろう。自信を持って。」

「はい！わかりました！オツタルさん。」

経験豊富なオツタルさんに言ってもらえるなら、大丈夫だね！

あれ？メイ、ルウさんに……。

「ルウさん、こちらへ来てくれませんか？」

「あ、はい。」

『坊ちやまは深層のトラウマが未だに残っています。そのトラウマを払拭させるのも今

回の回収に含まれると思って下さい。』

『あ、はい。わかりました。』

???

…そろそろだね。

「…時間だ。行くぞ。アレンたちはバベルで待っているとのことだ。」

「はい!」「ええ、わかりました。」

バベルの下に、アレンさんとアーニヤさんが待っていた…。

何か…緊張している?

「…さつさと行くぞ。」

「行くニヤ…。」

「まず、24階層まで休憩なしで行くぞ。」

え?2、24階層まで一気に?

---

…:…こんなに早く着けたんだ…。

僕は本当に強くなったんだ…。

「…:…数時間でもう前回の遠征のキャンプ先…。」

「休憩は10分だ。下層へは『巨蒼の滝』を駆け下りるぞ。」

「ええっ!あの滝を!?!」

「何言ってるんだ、てめえ。ちまちまと降りるよりその方が早いだろうが!てめえ、冒険者



「はあ…アーニヤに対しては過保護なのに「なっ…てめえ！」では行きます。」  
「ミヤーも行くニヤ！」あ、おい！タイミングを考えろ！」ぐえっ、ニヤー！」  
「…よし、行くぞ！」ハイニヤ！」



一気に駆け下りたら、もう深層…。

「こ、こんなに数十分で深層へ…。」

「問題はここからだ。…この場所か。数日かかるな…。」

「ちっ…。面倒なところにいるんじゃないやねえ。」

「ベル、例の通路へ行ったほうがいいのでは？」

「あ、そうですね！」

「例の通路だと？」

「えっと…『獣の間』まで行ってみましょう。」

「「??」」

ジャガーノートと戦ったあの場所の先へ…。

「確かこの辺りに…、あ、ありました！」

ガコン！

うん、あの時の通路だ。

「なっ！……隠し通路があったのか……。」

「よし、ここからなら距離が短くなるな。」

「よくやったニヤ！白髪頭。」

「……喜ぶのはまだ早いです。問題はその通路の先です。」

「何だと？」

「行きましたよう……。行けば分かります。」

……まさか再びここを通ると思わなかったね。

そして、あの場所に……。

「川だと……。しかもモンスターも出ない……。」

「未到達エリアか……。」

「随分と楽だニヤー！」

「……………」

……聞こえる。

「……貴様らは、何を隠している？」

「オツタルさん、聞こえませんか？」



「何をだ……この音は。」

「ちつ、モンスターが大勢いやがる。待ち伏せかよ。」

「いいえ、違います。」

「ルウ、何だニヤ？」

「…闘技場です。」

「!!!」

やはり、再生してたんだ…。

僕が破壊したあの闘技場は。

「なるほど……この通路の先に闘技場か。」

「はい。彼らのいるところはこの先をずつと行つたところです。避けては通れません。」

「…むしろ、手間が省ける。一気にかければ問題ないだろう。」

「ウニャー！おミャーらはここを抜けてきたのかニャー！あの手負いでよ、よく生きてたニャ…。」

僕もそう思います…。

あの時のことを思い出すと、震えが…。

「ベル、貴方が先に行きなさい。」

「え？ぼ、僕ですか？」

「ええ、貴方はこの中で一番強い。自信を持って下さい。大丈夫です。」  
「わ、分かりました！」

そうだ…。僕はオツタルさんに勝ったんだ。

これぐらいで臆しては、【最強最高の英雄】にはなれない！  
今がリベンジの時だ！

「……そうか、この兔。深層のトラウマに。」

「ウニャー…。ミャーも数年苦しんだアレに？」

「そうだな。行け、ベル。俺を倒したお前ならできる。」

「わかりました！…3、2、1、行きます！」

そして僕は闘技場へ飛び込んだ。

遅い。

あの時速かったモンスターが遅すぎて見える。

こんなに遅くて弱かった…？

いや、僕が速くなっているんだ！

魔石を狙うんだ！強化種が生まれないように！

的確に、迅速に！

「なっ…！速ええ！」

「ニャー！周りのモンスターが瞬く間に灰になっていくニャー！」

「俺と戦った時より更に強くなっているな…まさかランクアップしたのか…。」

「(深層のトラウマを克服したようですね)【猛者】！壁を思い切り壊して下さい！」

「わかった！ヌオオオオオオッ！」

ガコオオオオオン！

「ふう…何とか切り抜けましたね。」

「切り抜けたで済むか…大抵のモンスターをてめえ1人で倒しやがって…。」

「ば、化け物ニャー…。」

「行きましょう。彼らはこの先です。」

いくら僕が速く、強くなったとしても油断は大敵だ…。

気をつけていこう。

## 第291回 妖精剣士、遭遇。

ベルはもう大丈夫ですね。

二ヶ月前に苦戦したというのに…早いですね。

「…このペースなら2日あれば帰れるな。」

「…あの通路がなければもつとかかってただろうな。…あの時にあの通路があれば…。」

「やめろ、アレン。たればを言えばキリがない。」

「うるせえ！わかってる！」

「に、兄様！あまり大声出すとモンスターが…。ウニヤー！スパルトイがうじゃうじゃ出たニヤー！」

…【女神の戦車】、いい加減にしてください。

まあ、気持ちはわからなくもないです。

そろそろですか…。

「まもなく、目的地です。」

「あ、ルウさん。あの明かりではないですか？」

「ええ、そうですね。」

やはりだ…、あの明かりは本来の魔石灯の明かりではない。

ダンジョン特有なのでしょうか…？

私達が装備を剥がし、丁重に吊つたままです…。

「…荒らされていませんね。」

それが妙です。既に一ヶ月以上たっているんです。

とつくにダンジョンに飲み込まれているか、モンスターによって食い荒らされているはず。

なのに…このルームにはモンスターも通つた後がない…。

手前まで行つて避けている足跡が目立ちます。

「彼らが…僕たちを助けてくれた方です。」

「綺麗にされているな…。確かに、モンスターにもダンジョンにも取り込まれていない…。」

「…さつさとこいつらを回収するぞ。おい！愚図！」

「は、はいニヤ…。……………済まないニヤ…。帰ろうニヤ…みんな。」

アーニヤ…。

カッ!

魔石灯がいきなり輝いた!?

「なっ! 魔石灯がいきなり輝いただと!」

「ちっ! 罨か!」

「やはり、あれは普通の魔石灯ではない! 皆さん! 下がりました!」

「な、何が来るんですか!?! ……え?」

「ニヤ! ……お、おミヤーら! …。」

な…幻…? 人型の…?

『お久しぶりです…団長、アレンさん。』

『アーニヤ…来てくれたのね。待ちくたびれたわよ…。』

『フレイヤ様は…元気ででしょうか?』

しゃ、喋った…!?

団長…アレンさん?

それに…、フレイヤ様…?

この方々は…まさか!?

「こ、この人達は…?」

「馬鹿な…こんなことが。」

【猛者】は知っているのですか？

「彼らは…誰ですか？」

「…死んだはずの…俺らの、アーニヤの仲間だ…。」

なっ…!?!

馬鹿な…幽霊!?

『…その2人…私達を丁重にしてくれてありがとう…。』

『装備とポーシヨンは役立ったかな？…お腹くださなかつた？』

『生きてくれてよかつたぜ。』

「あ、はい。あの時はありがとうございます（ペコツ）。」

「何故、普通に会話できてるのですか…。ベル。」

ベル…貴方は大物ですよ。

異端児だけでなく、幽霊までも…。

…そういえば、メイさんとセバスさんは常に言っていましたね。

『未知を既知へ変えろ』…と。

「お、おミャーら…。ミャーは…ミャーは…。」

『アーニヤ…あれは君のせいじゃない。』

『そうよ、私達の不注意よ。』

『あの時、ペルーダの毒に既にやられていた。いずれにしろ、手遅れだったんだ。』

「やはり、そうだったのですか。」

「ペルーダの毒か…それは助からないだろうな。」

彼らの持ち物には解毒剤がなかったはずです。

いずれにしろ、死んでいたでしょう…。

「ごめんなさいニヤ…ミヤが無理矢理言わなきゃ…。」

『アーニヤ…もう謝るな。』

『アーニヤちゃんは随分苦しんだのね…見たら分かるわ…。』

『お前のせいでも、アレンさんのせいでもないんだ…むしろあんたたちが生きてくれて

よかったぜ…。』

「てめえら…。」

これは私達が口を挟む状況ではありませんね。

アーニヤと「女神の戦車」の問題です。

『もう…時間だ。』

『悪いけど…私達の遺骨を…ダイダロス通りの』

『マ…リア…母さんへ…渡して…ほし…い』

「マリア…？マリアさんを知っているんですか！あなた達は、まさか孤児院の…！」



マリア母さん…？

ベルは何か知っているようですが…。

「ま、待つニャー！ミャーは…ミャーは！うあああああつー！」

アーニャ…。

その気持はわかります。私もアリーゼたちを失った時もそうでした。

しかし、アーニャは死んだはずの彼らの幽霊に会えました。

私はベルが連れてきたアリーゼたちが復活し、会うことができた…。

いずれにしろ、ベルがいなければありえなかったでしょうね。

「消えたか…。」

「魔石灯は…光らない。魔石灯に彼らの魂が宿っていたのですか…10年も。」

10年も魔石灯に宿り、モンスターを近づけさせずダンジョンから守っていたのです

か…。

誰か来るのを待ち続けるために…。

彼らを見つけたのが、ワームウエールによって連れてこられた私とベルだったのは、

妙な縁ですね。

「ダンジョンに取り込まれていなかったのは…そのせいか。見事だ…！」

「…アーニャさん。彼らを持ち帰りましょう。マリア母さんに…孤児院のみなさんへ返

「しましよう。」

「…グスツ…グスツ……。わかったニヤ…。」

「手伝いますよ、「不要ニヤ…これはミヤーがやらなければならぬニヤ…」分かりました。ベル、私達は周辺を見張りましょう。」

「俺も見張ろう…。アレン、アーニヤ、頼むぞ。」

「…さつさとしろ、愚図。」

「わかったニヤ…。」

魔石灯が消えた今、モンスターが近づいてくる気配を感じます。

アーニヤが回収する間は邪魔させません！

アーニヤが丁重に弔い、「女神の戦車」と2人で遺骨を抱えています。

この2人は戦闘できませんね。

「俺と愚図はこいつらを抱え込むから、モンスターへの迎撃は任せるぞ。」

「分かりました！ようやく深く深層に慣れてきました！」

「ベル、行くぞ！」「はい！」

「殿は私が努めます！アーニヤたちは走ることに専念して下さい！」

「わかったニヤ！何が何でも持ち帰るニヤ！」

行きよりスムーズでしたので、セーフティエリアへ早く着けました。

闘技場は【猛者】が壁を破壊したため、モンスターが出ませんでした。

「闘技場の下のセーフティエリアに何とか着きましたね。」

「ああ、かなりのハイペースだ。…それにこの場所があったのか。使えるな。」

「おい、脳筋。それは後にしろ。」

「……この場所を利用して、特訓ですか。」

まあ、気持ちはわかります。

「ウ、ウニャー……。さ、さすがに速いニャー……。ミャーは…少し寝るニャ……。」

「そうですね。ここで一休み……。」

「どうしました？ ルウさん？ ……あつ！」

「……何を赤面してんだ？ てめえら……。」

「ななな、何でもありません！」

「……そうか。少し寝るぞ……。」

……あの時を思い出すと、顔が熱くなります。

ベルも覚えているようですね。

……お互い、顔を見れません……。

一休みした後、向かいましたが。

【猛者】が『巨蒼の滝』を駆け上ると言ってます。

無茶苦茶を言うなど言いましたが、ベルが乗り気でした。

…仕方ありません。

「このペースなら、今日一日で帰れるな。」

「あんなに苦労した下層を一気に…。」

「滝を駆け上るなんて！ふざけるニヤー！」

「いいから、さっさと駆け上りやがれ！」

…何とか登り切れました…。

ベルが先着で、【猛者】が2着でした。

…私達は上り切ることとで精一杯でした。

アーニヤは途中で【女神の戦車】に抱えられました。

「ふう…なかなか実りがあつたな。」

「はい！オツタルさん！」

「はあ…はあ…。」

「ミヤーは…限界ニヤけど、…ここ、孤児院まで頑張るニヤ。」

「化け物共が…。…？…こんな朝早くに誰がいるぞ？」

あれは…！

「…メイさんの計算通りですね。」

「どこまで計算しているのですか…あの人は。」

「本当だよ…たった2日で深層を…。」

シノス…ルーゼ…ヘスティア様？

## 第292回 街娘、準備。

「こんなに早く来るなんて…。」

「あれ？神様…どうしてここに？」

「メイくんがそろそろ来る頃だと言ってたよ！」

「まさか36階層をたった2日で…。」

「…早いのはいいことだけ…。」

ベルとオツタルがいれば早くなると思ったけど、たったの2日で？

オツタルはともかく、ベルは冒険者になって半年すぎよ…。

「…彼らの遺骨を回収してきました。」

「…孤児院へ持っていかないとニヤ…。」

孤児院…どうしてアーニヤが知っているの？

いえ、それは後にしましょう。

「待つて、アーニヤ。その前に『デメテル・ファミリア』ホームへ寄りましょう。」

「何故、『デメテル・ファミリア』ですか？」

「行けばわかりますよ。」

ええ、この子たちへの餞として。

私の…フレイヤとしての責任として。

「もう来たのかい…。早くないかねえ。」

「あらあら、早いわね。みんな、用意はできている?」

「はい!デメテル様!」

「アーニャ…あの子達の遺骨を出してこの中に。」

「これは…棺桶?しかも花いっぱい…。」

「せめて形でもこう送りたいの。孤児院へ持っていくにしてもそのままでは…ね。」

「…感謝します。」

これだけでも足りないわよ。

本当はもっと豪華にしたかったけど、ミアが「やり過ぎだよ!バカ女神が!」と怒られたわ。

ダンジョンにもモンスターにも取り込まれていなかったのね。

骨がきれいだわ…。

「…骨がきれいに残っているねえ。モンスターに食い荒らされなかったのかい?」

「モンスターどころか、彼らがいた部屋そのものがきれいでした。」

「…どうということなの?」

「後で説明します、シノス。あり得ないことが本当に起こりました…。」

???

あり得ないことって…何が起こったの？

形だけは何とかなったわね。

そろそろ行きましようか。

「さて、行くかね。オツタルとアタシ、アレンはアーニヤ、坊主とルウで担いで行くよ。」

「「はい！」」

「私とルーゼ、ヘステイア様も同行します。」

朝早くだけど、マリアは起きているはず。

ほら、孤児院前を掃除しているわ。

…相変わらず真面目ね、マリアは。

「あら、ヘステイア様？…シルさん？」

「やあ、おはよう！マリアくん。」

「どうしました？こんな朝早くに…ミア…元団長。」

「「団長!？」」

「アタシはもう脱退したんだよ、アンタと同じさ。マリア。」

「お久しぶりです…マリアさん。」



ええ、そうよ。

マリアは、ミアと一緒に私の：「フレイヤ・ファミリア」を切り盛りしてくれたわ。大雑把なミアを補佐してくれる真面目な子だったわ。

「はい…ベルさん。私は元「フレイヤ・ファミリア」マリアです…。どうしたんですか？ 貴女とオツタルが自らここへ来るなんて珍しいじゃないですか？」

「コイツらのケジメさ…。」

「ケジメ…？ その3つの棺桶は…まさか。」

ええ…貴女が特に可愛がっていた子たちよ。

私のファミリアへ入ることに最後まで反対していたわ。

私も何度も確認したけど、強い意志だったから、仕方がなかったわ。

他のファミリアへ行かせて不幸な目に合わせるよりは、まだマシだと思ったからよ。

「そう…あの子達の…。」

「この度は本当に申し訳ありませんでした…。俺の責任です。」

「違うニヤ！ 兄様、ミヤールの責任ニヤ！ 「黙ってる！」」

「…ダンジョンは自己責任。なので、貴方たちの責任ではありません。それは元冒険者である私がよくわかっています。…10年も経っているのに何故遺骨が残っているのですか？ 何故あの子たちとわかったのですか？」

そうよね、そう思うのが普通よね。

元冒険者であるマリアなら疑問に思うはず。

「はい、実は……」

ベルは、深層へ落ち彼らの装備品のおかげで助かったことや遺書について話してくれたわ。

「そうでしたか……。ベルさん達の命を救ったのがあの子達の装備品でしたか。それにこの遺書も……」

「ところで、ルウ。さつき何か言いそびれたじゃないか。言いな。」

「信じられないと思いますが、私達は確かに見ました。実は……」

え？そんなことが……

魂が魔石灯に宿って……自分たちの遺骨を守っていた……？

搜索に行かなかったのがますます悔やまれるわね。

「何だつて……あり得ない。10年もダンジョンに留まっていたというのかい……」

「そう……魔石灯に魂を宿してずっと待ち続けていたのですね……」

……不覚だわ。

彼らを探しにいくようにと言わなかった私の責任ね。

「……馬鹿な子達。だから、私は冒険者にならないでと言ったのに……」

「マリア…、ごめんなさい。」

「マリアさん……。」

「……すみません。この子たちの遺族を呼んでできますのでお待ち下さい。」

…あの子達ね。

「マリアさんが元【フレイヤ・ファミリア】だったなんて……」

「色々あつてね……。アタシもマリアもコイツに辟易してたさ。」

!?

ミアはともかく、マリアは違うじゃない！

修正を！修正を求めるわ！

「ミア母さん！ひどいですよー！」

「事実じゃないか。」

「あー！兄ちゃんだー！」

「ベル…兄ちゃん。」

「お兄ちゃん！」

「ライ！フィナ！ルウ…まさか、この人たちの……。」

ええ……この子たちの縁者よ。

「ライ…フィナ…ルウ…貴方たちの義兄妹が帰ってきました。」

「……」

「この方たちが、深層から回収してくれました。」

本当によく回収してくれたわ。

ベルとルウが深層へ落ち、その先に彼らがいたのは縁を感じるわね。

「……兄貴……」

「……お姉ちゃん……」

「……骨だけ。」

「ごめんなさいニヤ！ミャーのせい……」

「おい！愚図！てめえのせいじゃねえと言ってるだろ！俺の責任だ！」

……アーニヤはここへ来なかったけど、アレンはマリアへ謝りに来ていたわ。

あのアレンがマリアの前で土下座して詫びていたわ。

マリアはもちろん許したけどね、内心は別にして。

「……俺たちはあんたたちを憎んじやいない……。ダンジョンは自己責任とわかっていた

から。」

「……持つて帰ってくれただけで感謝しています！」

「……ありがとう。」

「!!……ありがとうはこっちニヤ……ヒック。」

「泣くんじゃねえ！愚図が…。」

ようやく…アレンもアーニヤも一区切りついたわね。

せめて「フレイヤ・ファミリア」が健在の時にしておきたかったわ。

いえ…今でよかったかもしれないわ。

以前の私なら「そう」で終わりだもの。

## 第293回 音痴猫、前向。

ミヤーは…どうしたらいいニヤ…。

あいつらをここへ返せたのはいいとしても、ミヤーはこれからどうしたらいいのかわからなくなったニヤ…。

「シル…いえシノスさん…この子たちはこちらで吊います。」

「いいえ、もう既に埋葬場所は確保しています。今から行きますか?」

「それは…『フレイヤ・ファミリア』としてですか?しかし『フレイヤ・ファミリア』は解散したはずでは…?」

「ボクが許可したさ。やり残したことがあるのはよくないからね!」

「…ありがとうございます。ヘステイア様。」

そして、ミヤーたちは共同墓地へあいつらを担いで運んだニヤ。

今、埋葬の準備をしているニヤ。

「あの子達の魂が無事に天へ昇っていることを祈ります…。」

「昇っているさ!きつとね(天界の連中、ちゃんと仕事しろよ)!」

「大丈夫ですよ。マリアさん。」

……昇ってもらわなきゃ困るニヤ。

本来ならミヤールが行くべきだったニヤ…。

「準備完了しました！」

「[デメテル・ファミリア]からの花です。みなさん献花を。」

あいつらへの別れがきたニヤ…。

「兄貴たち…俺たちは元気でやつてるぜ…。」

「ベル兄ちゃんも、ヘステイア様も優しくしてくれているよ！」

「……ばいばい……。」

すまないニヤ…。

ミヤールがしつかりしていたら、あいつらも生きていたはずだニヤ…。

「お前たちは見事だ…。10年もダンジョンに取り込まれず魂だけで自我を保つとはな。俺でもできたかわからん。…無事に逝くがいい。」

「……てめえらの命で生き延びたこの命、大事に使わせてもらうぜ。」

「……ありがとうニヤ…。」

ミヤールはこれから…どうしたらいいニヤ…。

「ありがとうございます。貴方たちが残したものがなければ僕たちは死んでいました。」

「感謝します。生き延びたこの命は決して無駄にはしません。」

ルウと…白髪頭を助けてくれてありがとうニヤ…。

もう…失うのは懲り懲りだニヤ…。

「私とマリアさんで最後ですね。きやつ！」

「うわっ！魔石灯が！」

「…っ！あんたたち…。」

ニヤ!?

また出てきたニヤー！

『…フレイヤ様…マリア母さん』

『…このような形で帰ってしまって』

『申し訳ありませんでした…。』

「貴方たち…。」

「…馬鹿…あんたたちは大馬鹿よ！」

……………ごめんなさいニヤ…。

『ごめん…。ライ…スウ…ルウ…。』

『ごめんね、こんな形で帰ってしまって』

『元気で生きろよ…。』

「あ、兄貴たち…。」



「びえええええん！」

「ひつく…ひつく…。」

すまないニヤ…。

ミヤーは、どう償つたらいいニヤ…。

それも分らないニヤ…。

『みなさん…ありがとうございます。』

『アーニヤちゃん…強くなつて…』

『ライたちを…頼むぜ…。』

「!!」

おミヤーら…。

今のミヤーを…。

……わかつたニヤ！

このガキらはミヤーが…面倒みるニヤ！

ううん…私が…この子たちを守っていくニヤ！

だから安心してニヤ…。

『…安心して天へ帰れます。』

『皆さんの幸せを願っています…。』



「はい！パスタセット2名ですなー！」

「お待ちどー様！エール3つでーす！」

「アーニヤ…変わったね。」

「ウニヤー！あんなのアーニヤじゃないニヤー！シノスのパチモンじゃないかニヤー！ドジなアーニヤ、戻ってきてニヤー！」

「アーニヤちゃん、何か大人になったみてえだな。」

「ああ…今までガキみただったが、こう何かキレイになったよな？」

「胸もでかいし…俺、アタックして「あ？」…まだ早い「ああん？」…辞退します「チツ」怖えーよ…あの人。」

「あ、ミア母ちゃん。時間なので、これで上がります！」

「待ちな、今日も行くんだろ？これを持っていきな。」

「いいんですか？ライたちが喜びます！サー！行ってきましたーす！」

「ああ…気をつけろよ。…ハア。」

「どうしたんだい？アンタらしくないじゃないか。」

「うるせえよ…。」

「妹が成長したからかい？アンタもいい加減に妹離れしなよ？」

「まだだ！まだ早い！あいつはまだ愚図だ！後10…いや20年は。」

(こりやまだ時間がかかりそうだねえ……。アイツらには感謝しているよ、アーニヤはようやく前を向いて歩き始めたんだから。)

そして、エイナの魔法によりアーニヤはランクアップ可能と分かったため、更新によつてアーニヤはレベル5へランクアップしたのこと。

更に魅力的になつたアーニヤに群がる男が増えたため、兄であるアレンはそれを追っ払うことに専念するようになった。

## 第294回 正義神、稽古。

ふふふ、下界へ降りて剣を振るえるとは思わなかったわ。

レベル1だけど、全知零能だった時よりはマシね。

ベルの血が、神を封印できるのは驚いたけどそれも下界の未知ね。

いえ…ベルだけね。

本当に、5年前に眷属にするべきだったわ！

いえ…眷属にしたとしても、今のようなベルになってたかはわからないわね。

………。

結果オーライね！

それにベルに名前をつけてと請願したわ。

ベルがかなり戸惑っていたけど、名前をつけてもらったわ。

「ユーティス」と。

久々の素振りは気持ちいいわ。

天界以来ね。

ヒュン！ヒュン！

『ねえ…アストレア様がやる気満々だけど…。』

『団長様…いえアリーゼ、アストレア様ではなくユーティスでございますよ?』

『そうだったわね…未だ慣れないわ。』

『同感でございます…。』

「あら、アリーゼに輝夜じゃない。おはよう。」

「「おはよう」ございますー!」

「敬語は不要よ。一応、貴女たちの後輩なんだから。」

「まだ慣れないので、しばらくそのままお願いします…。」

「あの…アスト…いえユーティス、今の素振りを見ましたがかなりの剣の腕のようですか?」

「あら? 私はこれでも、天界で剣の達人よ?」

「「え」」

あちこちに首を突っ込んでいたけど、荒事になるのがほぼだったわ。

だから、自然と強くなっていたのよね。

そうだわ…。

この子たちの剣の腕を直に見たいわね。

「ちよūdいいわ。アリーゼ、相手してちよūdい。」

「わ、私はレベル5なので手加減できるかわからないわ！か、輝夜が適任だわ！」

「ア、アリーゼ！（私に押し付けるな！）……少々相手してもよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いするわ。輝夜センパイ？」

「…やめてくれませんかでしょうか？それは。」

…そんなに似合わないかしら？

そして輝夜と稽古をしたのだけれど…。

「（スピードとパワーがレベル1下位なので見切れるが…）くっ…！」

「どうしたの？輝夜、キレが悪いわよ？」

「（キレが悪いのは貴女が私の剣を寸前で殺しているでしょうが！）…失礼しました。

少々本気を出してもいいでしょうか？」

「ええ、いいわ。」

レベル5が本腰入れるとどうなるのかしら？

…何しているの？輝夜？

「では行きます…。『一せ……ユーティス、せめて技を出させてくれませんか？』

「何言っているの？そんな大振り、止めて下さいと言っているようなものよ？」

「な……！私の技……が大振り……？（これでもゴジョウノ家がかつて一番の腕だぞ!!）」

「はあ……貴女たちはステータスに頼りすぎね。技と駆け引きをもっと磨きなさい。」

「……はい（これではどっちが先輩なんだが……）」

ステータスにまだまだ頼り気味ね。

やはり、神だった時に指導すべきだったかしら。

「……勉強になりました（私もまだまだだということだな……。ユーティスがこれからレベルを上げれば……追いつかれますね）」

「ええ、いい運動になったわ。」

「い、いい運動でございますか……（こちらはもう疲れたのですが）」

「はあ……この子たちの視点で見たけど、まだあの子達でもステータスに頼りすぎね。」

「同感ですね、ユーティスさん。」

「あら？ シノス？ どうしたの？」

「春姫さんとエイナさん、ルーゼに相手してもらったですけどあの通りです。」

……全員、大の字になっているわね。

「……あら。もうへばっているわね。レベル2一人とレベル1二人を相手に？」

「ええ、けど。相手になりません。こう……なっていないとか棒切れをブンブンしているだけで……。」

「わかるわ。輝夜に相手してもらったけど、剣を握った初級者あたりね。」

そうね。



天界にいた時と比べたら駄目だけど、どうしても考えてしまうよね。

「ルウにお願いしようと思っただけど、ルウはやりすぎてしまうから…。」

「あら？アルフリッグさんたちは？」

「お願いしようと思いましたが、ベルさんのところへ一斉に逃げてしまいました…。」

「困ったわね。まさか、神からヒューマンになったらこんな弊害があるなんて…。ねえ、

シノス？」

「はい、ユーティスさん。戦りませんか？」

「気が合うわね。自慢じゃないけど、私、オリンポスでも結構の剣の達人よ？」

「奇遇ですね。私もアースガルドでも槍の達人ですよ？」

「ふふふ………戦りましょうー！」

「ねえ…。」

「何ででしょうか？」

「あれ…。」

「私は何も見えませんが？」

「現実逃避はよくないわ！」

「では、あれを見て自分の剣の腕に自信持てますか？」

「…ごめんなさい。私が悪かったわ！」

『あれを見ますと、今までの剣は何だったと凹みます。』

『アストレア様って…脳筋だったんだ。』

『貴女もでしょう。』

『輝夜もルウも脳筋じゃない!』

『私は脳筋じゃない!ポンコツエルフと一緒にするな!』

体が思うように動きにくいけど…、技はまだ大丈夫ね!

それに…フレイヤ、いえシノスもなかなかやるわね!

「はあああああつ!」

「やあああああつ!」

「やるわね!」

「そちらもですね!アースガルドでは剣で得意だった神ヴィーザルがいましたが、それに匹敵します!」

「そつちもじゃない!ポセイドンもやりあったけど同じくらいね!」

「神ポセイドンと並び立てるだけでも光栄ですね!」

「ああ!楽しいわ!」

「こちらもです!」

オリンポスであちこち暴れ…いえ仲裁した時が懐かしいわね!

『…………。』

『余所見とは余裕ですね！アイズ！』

『…すみません。あちらがどうしても気になって…。』

『…気にしたら負けです。あちらは神の域に達している方々です。』

『…わかつています。……参考にしたいだけです。』

『…一旦休憩しましょうか。』

『…賛成です。』

## 第295回 道化神、観戦。

ドチビヘアポとつて、稽古しにきたんやけど…。

「ロキと一緒にベルくんたちの稽古を見に来たけど…何やってんのさ、あの子達は。」

「な、何だ…あれは。力も速さも大したことないのに技と駆け引きが凄まじい…。」

「酒場の娘と…神…アストレアかろう？」

……あの色ボケ…いや…。

懐かしいわ…フレイヤのアレを見れるなんてな。

「……どうしたんだい？ロキ？」

「……元に戻りおった…あの脳筋…。」

「「脳筋？」」

「ドチビ…何故、ウチがフレイヤを色ボケと言ってるのは何故かわかるか？」

「さ、さあ…？」

「フレイヤは元々美の神じゃなかったんや…糞神オーデインによつて無理矢理魅了を植え付けられ、自らの魅了にやられよつたんや。」

「そうだったのかい…（だからオーデインが嫌いなんだなあ…）。」

「待て…あの酒場の娘は神フレイヤなのか…?」

「あ」

しもうた。

バレてしもうた。

しやーないから、あの脳筋と少年について話しおった。

でないと、納得せんからなー。

「……もう、ベルは神と祀られてもいいんじゃないかな? 僕もその恩恵にすぐくあやかりたいんだけど?」

「同感じゃ。」

「異性であることと、ベルくんへの想いがMAX近くじゃないと無理だよ?」

「……(スキルのことは知っているが…やはり魅力的だ。あの少年と数回話してみる必要があるな。)」

男は諦めるしかないわなー。

女は…アイズたんらがおるからそんな簡単に入れないわな。

リヴェリア…ええけど、あっちには「静寂」がおるんやで?

と話を戻そ。

「話は元に戻すけど、フレイヤは元々ああやったんや。オツタルたちを見たら納得いく

やろ?」

「ああ…なるほど。子は親に似るということだね。」

「それにしても…：双方とも技の凄い応酬だな。」

…：ステータスは低いんやけど、技と駆け引きはン億年モノやからな。」

「…あれで本当にレベル1のなりたてかい? しかも上がりやすくなる? ずるくないかい?」

「そやろ! ウチもなりたいのに!」

「「そつちか…?」」

「ふざけんな! これ以上増やしてたまるものか! ボクが一番なりたいのに!」

「…：彼らの恩恵が消えてしまうから、やめてほしいのですが。」

「むー!」

ううー、どうしてあん時うちおらんかったんやー!

そうすればベルたんはウチの眷属になってたのに!」

「しかし…：連れてきたベートやティオネ、アルガナがもう地に伏しているな。」

「ティオネはティオナにやられたね、改宗前までは互角だったのに…：まだ数日しか経ってないよ? 【白兔眷属】は凄まじいね…。」

「アルガナもだ。パーチェに触れるまでもなくやられているな。」

「ベートは…ザルドに挑んでワンパンでやられておるぞ。」

「ウチらもう全滅やんか！」

もうアカン。

今のドチビのファミリアはもう世界最強やん！

糞爺や最悪女んところにはまだ及ばんけど…、あの少年のスキルからして時間の問題やろな。

「でもね…やはりあの子達だね。神の技と駆け引きをフルに使っているよ…。」

「あんなに楽しそうなフレイヤ、久々に見るわ…。」

「そうなのかい？」

「そや、ドチビ。天界でウチんところは巨人のバカと争っていてな。ウチのホームと同じくらいどデカい巨人数人をフレイヤたった1人で相手にして全滅させよったんや…。」

「うわあ…骨の髄から脳筋じゃないか。」

「そや…その時のフレイヤもつまらなさそうやったんや。やから、あんなフレイヤは久々に見るんや。」

あんなに心から楽しんどるなんてな…。

ちくしょー！ウチもベルたんの眷属になりたかったわー！

「そうなんだ…。あ、お互いの武器が砕けたね。」

「ここまでだね……。…は？すみませんが、神ヘステイア……。彼女たちは何をやってるのでしょうか？取っ組み合いにしては、技のレベルが高すぎるのですが。」

「うわあ…。同郷のパンクラチオンじゃないか…。」

「あの脳筋…。ウチんとこのコマンドサンボを繰り返し出しとるやんけ…。」

「……。1ランク上ではもう相手にならないのではないか？」

「…参考にしたいが、技のレベルが高すぎて真似できんのう…。」

何やっとなねん…。あの脳筋らは。

けど…。何かこう…。血が騒ぐわな。

「…ロキ。ボク、ちよつと間近で見学したくなったよ。同郷のパンクラチオンをここで見れるとはねー。」

「ウチもやー。下界でこんな闘いをお目にかかれるとは思わなかったわー。」  
ドチビもやな。

下界でウチら天界の技を習得しとる子は早々おらんわな。

あ、いたわ。ボクシングを習得しとる子が…。

それより、こつちや！



「はあ…はあ…。」

「ぜえ…ぜえ…。」

「やりすぎです…。アスト…いえユーティス、シノス（二人とも片足、片腕が折れてるじゃないですか…）。」

「…すごかった。レベルーと思えない…。」

「全くやー！おもしろかったわー！」

「いやー！見応えあったね！」

「ホンマやな！コレ、神の鏡で公開したらええんとちゃう？金取れるで。」

パンクラチオンとコマンドサンボ対決は天界でもそない簡単には見れんからな。

「素晴らしかったです。ユーティスさん、シノスさん。」

「やりすぎじゃないかしら…？」

「まだ言っているのですか？だから、貴女たちはその程度なのです。」

「だが！これはやりすぎだ！」

「彼女たちは死力を尽くし、神技を多く繰り出しました。武器が砕けたら素手と。しかもハイレベルの技を。さすが神と言ったところですね。このメイ、感服いたしました。」

「ちよ！それは異議ありやで！」

「はいはい！異議あり！同じ神だけどき、そんなことができるのは武闘派の彼女たちだけだよ！」

「そや！この二人はホンマもんの脳筋や！一緒にせんといてや！」

「失礼しました。ですが皆さん、神が至れた彼女たちがいいお手本です。そのぐらいやりなさい。でないと、坊ちやまと同じ高みに至れませんか？」

「！」

そりや……まあ……、元神やからなー。

そこまで要求するんか？鬼やわー。

「ま……まだ、やれるわ。」

「わ、私もです。」

「「うわあ……本物の脳筋だ。」」

「私達のアストレア様が……脳筋になっちゃった。」

「「俺たちのフレイヤ様が……脳筋に……。」」

「ユーティさん、シノスさん、今日はそこまでです。ヘステイア様に更新してもらって今回の上昇幅を確認されてはいかがですか？」

「………お願いますー！」

「あ、うん……（かなり伸びているだろーな）。」

まー、一日だけではそない伸びへんやろーな。  
伸びていたら…チートやんけ！

## 第296回 侍従長、観察。

「……………」

「どうしたんや、ドチビ。精々20か30あたりやろ？」

「ハハハハ、そう思うかい？ そうだよね、それが普通だよね。」

「は？」

「二人とも…トータル600オーバーだよ…。」

「「は？」」

トータル600オーバーですか。

坊ちやまを想いながら戦うとそのぐらいでしょうか。

さすが、神ですね。

効率的に上げる方法を体感的に得ているようですね。

「たった一日の闘いで600オーバーですか…。今までの私の子の記録を超えましたね。」

「私もよ。…楽しい上にアビリティがこう上がるなんてね。シノス、明日もよろしくね。」

「ええ、早くAかSに至って、偉業を積まないといけませんね！」

「偉業って…どうするのかしら？ 私達、元神よね？ダンジョンへ潜るしかないのかしら？」

「うーん、ワンランク上の子たちを複数倒すとか？（チラツ）」

「でもレベル2は相手にならないから…レベル3あたりかしら？レベル3はアーディちゃんだけね。レベル4か5でもいいよね？（チラツ）」

「ひえっ…。」

「神口キの子はどうでしょうか？レベル3が多くいますけど？」

「何でアンタらの偉業のために差し出さなアカンのや！ふざけんなー！」

何も考えずに経験値を積むより、彼女たちへ献上した方がいいと思いますね。

それに、まさか神フレイヤも神アストレアもそこまで脳筋とは思いませんでした。

まあ、いいでしょう。

「残念です。モンスターなら…ミノタウロスかバグベアーでしょうか？」

「闇派閥の生き残りがどこかにいないかしら？」

「この方たち、怖い…。」

女神を眷属にした方が坊ちやまのためになりますね。

手頃な女神は、いないでしょうか？

神デメテルは兵糧確保、神ヘファイストスも武器防具のために必要ですね…。  
神ゴブニュだけでは荷が重いでしょう。

「…：…：…：たつた一日で？反則じゃないかい？」

「一日でトータル600以上なんぞ、今まで出たことないぞい…。」

「全く以て規格外だ…：…（検討に値するか…あの少年と話す必要があるな）。」

…：貴方たちはこの7年間何をやってきたのです？

リヴェリアさんは興味があるようですね。

さて、どうしましょうか。

「…：アイズ。」

「何でしょうか…：ルウ。」

「明日はギア上げませんか？」

「私もそう思いました…：よろしく。」

「ええ…：私たちも負けていません！」

彼女たちの死合はルウさんとアイズさんに刺激を与えていますね。

いい傾向です。

「あのぐらいいないと、いけないんだ…。」

「そうだな…。」

「ゲホッ（たったの数日間で、ティオナにここまで完敗されるなんて）…、いや待つてよ。おかしいでしょ？」

「そうだぞ。ティオネの言う通りだ。何故そんなに上がるのだ？」

「知りたかったら、あのメイさんを倒してみなよ。」

「ファミリアのトップシークレットだ、アルガナ。知りたかったら、メイさんを倒すんだな。」

「いや、無理。怖い（だって、こつちを見て笑顔で手をクイクイと招いている…）。「かかってらっしゃい。」

それにしても、互角だった彼女たちがこの短期間で差をつけられるとは。

【白兎眷属】の効果は凄まじいですね。

さて、ザル坊の方は…。

「ガハアツ！」

「ふん、あいつらよりは骨があるな。いいぞ、狼人。」

「この…野郎がッ！絶…てえ追いついてやる！」

【凶狼】をしごいていますね。

なかなか骨がありますね。

「叔父貴に齒向かうなんて愚狼が。」

「レベル6がレベル7に勝てるか。」

「ケツまくって出直してこい。」

「あのアマゾネスに慰めてこい。」

随分とザル坊と仲良くなりましたね。

それはそれでいいのですが、きっかけが非常に気になります。

「やめとけ、お前ら。こう歯向かってくるだけでもマシだ。」

「「サーセン！叔父貴！」」

「…………クラネルはどこまで強くなっているんだ？」

「俺の見立てではレベル9手前だな。先程までメイとセバスの全力連携に耐えて、そこ

で大の字になっているぞ。」

ええ、まさかあそこまで粘るとは思いませんでした。

早いといえば早すぎるのですが、それはそれで問題ありません。

ただでさえ、坊ちやまは経験が圧倒的に不足していますから。

「レベル9手前だど!?…ちっ、追いつかれた上でかなり差を開けられちまった…。糞

がっ!」

「その悔しさがお前を強くするだろうよ。折れるなよ? 狼人。」

「絶対折れねえ! 弱者に置いていかれてたまるかっ!」



「それでいい（中々骨のあるやつがいるじゃねえか。やはり7年前に俺らがやったことは無駄じゃなかったな）」

思った通り、「勇者」や「重傑」と違って「凶狼」はやはり素質がありますね。  
ザル坊に任せましょう。

：坊ちやまへ並々ならぬ気持ちがあるようですが、そのときになったら性転換を提案  
しましょうか。



「(ゾクウウウツ) な、何だ…この悪寒は。」

「おい、何を余所見してやがる！」

「グツ！寒気がしたただけだ！このデカブツが！」

「寒気か…メイがさつきからこつちを見ているが何か企んでいるな。…気にしないで  
おこそう。こつちにも飛び火が来そうだからな」

## 第297回 九魔姫、驚愕。

レファイヤはどうだ…？

「さっさとかかってこい、トロ子が。」

「いきますー！」

アルフィアと模擬戦か…。

だが、奴は例の魔法があるため、全ての魔法が通じん。

どうするのだ？

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪  
け三度の厳冬——我が名はアールヴ】

【ウイン・フィンブルヴェトル】！

「馬鹿の一つ覚えか…。面白味もない。」

【二重追奏】

【レア・ラーヴァティン】！

何だと!?

【ウイン・フィンブルヴェトル】が当たる前に、「レア・ラーヴァティン」で相殺しただ

と!?

そんな無駄な…いや!

バアアアアン!

「何だ?!?ぐつ!」

「どうですか!?!」

「…なるほど、考えたな。炎と氷を私の目前でぶつけ合って水蒸気爆発を引き起こして、私へぶつけるとは。トロ子にしてはやるではないか。」

「まだまだいきまます!」

水蒸気爆発…。

そうか、さすがのアルフィアでもそこまでは無効化できないか。

考えたな、レフィーヤ。…私ではそのようなことを思いつかんぞ?

誰に教えてもらったのだ?

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】

【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!

「…?何故そんなに高く…?」「てーいつ!」「何っ!」

なっ……。あれは!?

ドガアアアン!

「ゲホツゴホツ……。この小娘が……。火炎石を投げたな!」

「貴女に魔法が通じないなら、物理攻撃でやるまでです!」

「小細工を!」

「それも戦略です!」

「……ちっ、そこは褒めてやる。だが、じっとしているのも業腹だ。私からも動くぞ?」

「なら!これはどうです!」

……私の知っているレフイーヤの戦い方ではない。

……私が教えたことでもない……。

誰だ!?誰がレフイーヤに教えたのだ!?

あれは……百戦錬磨でなければできないはずだ!

それに……アルフィアが魔法で蹂躪されているとはな。

魔法は工夫次第とはよく言ったものだ。

魔法が効かないなら普通は諦めるところだ。

だが、レフイーヤはその魔法をいかに物理攻撃に変えられるかを考えている。

この短期間で一体何があったのだ!?

「えいつー！」

パンッ

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火花。 雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】

【ヒュゼレイド・ファラーリカ】！

「先程のは通じんぞ？ よければ…、何だ…これは？ 煙幕…いや小麦粉…？…!? 小娘、貴様！」

ドガガアアアアン！

………ひどすぎる。

魔法攻撃が効かないからと、そこまでやるか…？

今のレフィーヤと私が戦えば…レフィーヤが勝つかもしれん。

…なんというか…老獪さが見え隠れしているような気がする。

まるで人が変わったような…。

「ふう…今すぐこの場を…。！…回り込まれましたか…。」

「…よくもやってくれたな…この小娘が。いや、レフィーヤ。」

「(初めて名前を呼んでくれた!) ……よ、よくあの粉塵爆発から逃れましたね。」

「魔法で吹き飛ばして切り抜けた。…この戦い方は年増ハイエルフからではあるまい。」  
「私のやり方です！（古代での戦いでの経験ですが）」

「だが、これでいい。そうでなければならん。…だから、私も本気を出してお前を鍛えてやる。」

「え」

「覚悟しろよ？レフイーヤ。」

「ひいひいひい！（古代の時のみんなより怖い！この人！）」

アルフィアを本気にさせるだけでも大したものだ…。

もうレフイーヤは私の手元から離れたな。

それはそれで嬉しいのだが、複雑だ。

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

【二重追奏】

【ヴェール・ブレス】！

「ぐうううううっ！」

「ちっ…、あの年増ハイエルフの魔法か。厄介だな。」

上手いな…。

魔法の出し方も熟練じみている。

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。 雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】

【ヒュゼレイド・ファラーリカ】！

「火炎石も小麦粉もない。…何だ？この水たまり…いや！油か！」

ポオオオオオオオ

一気に火の海になったな…。

この状態でアルフィアの魔法は枷にしかならんな。

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

む、火の海を音魔法で消したか。

アルフィアも付与魔法を解除せざるを得なかつたな。

【解き放つ一条の光、聖木の弓幹（ゆがら）。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】

【アルクス・レイ】！

何だと!?

魔法を出し切ったところに打ち込んだ!?

アルフィアは短文魔法だから隙は非常に少ない。

そこを突いたか!

「なっ!」

【魂の平穩】

【静寂の園】!

アルフィアがあそこまで焦るのは初めて見たな…。

いや、妹のメーテリア関連以外と言ったほうが正しいな。

「それ、ずるくありません!?!」

「黙れ、お前に言われたくないぞ。魔法を使ってえげつない攻撃をするとは。」

「私はレベル4です! 貴女はレベル7です! 真っ向からやって勝てるわけないでしょう

!」

「……ふん。あの年増ハイエルフよりはマシだな。それは褒めてやろう。」

「え? あ、はい。ありがとうございます?」

「だが…。」

ゴッ!」

「いったー!」



「こう懐へやすやすと入れさせると、こうなる。」

「(早い！ユーリさんやエルミナさんより！) あ、貴女は魔道士じゃありませんよ！」  
「私をそこらの棒立ちの役立たず魔道士と一緒にするな。」

「なら！これはどうです！」

【契約に答えよ、森羅の風よ。我が命に従い敵対者を薙げ】

【ゲイル・ブラスト】！

何だと!?

精霊魔法だと！

そんなの…里の長老でさえも知らないはずだぞ！

【エルフ・リング】も使っていない…スロットも全部埋まっているはずだ！

一体どうなっている!?

「風魔法…？いや、精霊魔法だど!？」

「ふふん、間合いを取らせてもらいました。いかせていただきます！」

「そうはさせん！」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】！

【契約に答えよ、大地の焰（ほむら）よ。我が命に従い暴力を焼き払え】

【フレア・バーン】！

な…先程の1つだけではないだ…と？

火魔法であれほどの威力を…アルフィアの魔法を相殺…いや反らしたか。

それでも相当の技術だぞ!?

「また精霊魔法だと…。貴様はエルフの魔法しか使えないはずではなかったのか？」

「秘密です！」

「ちつ…昨日で何があつたのだ…。まあ、いい。そうでなければ困る。」

「はい！私は、貴女を…リヴェリア様を越えてベルと共に戦います！」

「ふっ…ほざいたな。なら証明してみせろ！」

レフィーヤは…もう完全に私の手を離れたな…。

【ヘスティア・ファミリア】へ改宗させて正解だったな。

ほんの数日でここまで強くなるとは…。

フィンやガレスの言う通り、引退の時が来たかもしれないな…。

## 第298回 正義人、突入。

やっとダンジョンへ潜れるわ。

エイナちゃんの勉強が長かったけど、すぐに理解できたからいいようなものね。  
神だからね。

「ダンジョンは久しぶりね。7年ぶりだわ。」

「ユートイスさん、ずるいですよ！神なのにダンジョンへ行くなんて…。」

「しようがないじゃない。7年前は勝ったからいいようなものでしょ。」

「まあ、そうですけど。…ところで、何故貴方たちがついてくるのですか？」

「そうよ…護衛なんていらないわよ？」

「アリーゼ、輝夜、【炎金の四戦士】の皆さん…。」

「いや、さすがに元神でもお二人だけでダンジョンには潜らせませんって。」

「ソロは駄目だけど、シノスと一緒にならいいじゃない？」

「シノスさんも元神でしょう…。」

「駄目です。」

「危険です。」

「無茶です。」

「無謀です。」

過保護すぎるわよ…。

レベル5が6人なんて…2人でもいいじゃない。

それに私達は普通のレベル1じゃないわよ？

「でも、私はレベル1，2を圧倒しましたけど？」

「あいつらは本来戦闘職ではないでしょうに…。」

「せめて我々とこの女達が護衛します。」

「レベル5が6人なんて戦力過剰と思うんだけど…。」

「念のためです。」

「ユーティスさん、ここで文句言っちゃって仕方がないですよ？さっさと潜りましょう。」

「そうね！」

「「不安だ…。」」

心配性ねえ…。

1～3階層

「1から3階層も容易いわね。」

「ええ、もう少し歯ごたえがほしいですね。」

つまらないわ…。

「ゴブリン十数人を1人で…。」

「コボルトの『怪物の宴』も1人で…レベル1の駆け出しがやれることじゃないぞ…。」

「ねえ…、私達いる？」

「黙れ、迷惑女。」

「五月蠅い、貧乳。」

「あー！言ったわね！これでもテイオナちゃんよりはあるわよ！」

「あの女と比べられる時点でアウトだろ。」

「目くそ鼻くそ。」

「むっかー！4つ子ちゃん、燃やしてあげるわ！」

「何やっているの？ございますか…。あの方々、下へ参りましたが…。」

「「え？は、早く追いかけるー！」」

さっさと下へ行きましょう。

4～8階層

「この程度なの？ウォーシャドウって…。」

「キラーアントも大したことありませんね。外殻の隙間を突くだけで灰になるって…。」

「「……………」」

「私達がレベルーの時に苦勞したモンスターを…あつという間に…。」

「キラアントは初ダンジョンに潜った方が、簡単に倒せるようなものではありませんが…。」

どんなに早くても先読みすればそれほどじゃないわね。

頑丈でも隙間さえあれば切れるでしょ？

「さあ、下へ潜りましょう！」

「ええ！」

「「え？ちよ、ちよつと待ってー！」「」

待ちません。

歯ごたえないんですもの。

9～12階層

「んー、こんなものかしら？」

「オークって…こんなに弱いんですしたっけ？」

「オークの群れを…。」

「インプの群れを…。」

「「たった二人だけで全滅させるなんて…。」」

まあ、それなりに歯ごたえあつたけど…足りないわね。

これも【白兔眷属】の効果の一つかしら？  
……もう少し検証したいわね。

シノスさんも同じ心境のようだし…。

行ってみましょうか！

「よし！」

「はい！帰りましょうか！」

「何言っているの？貴方たちの護衛はここからよ？」

「は？」

「まさか…」

「ええ、行くわよ。中層へ！」

「やめてー！！」

13→14階層

あ、このモンスターは無理だわ。

「アリーゼ、輝夜、やっちゃって！」

「はい、皆さん出番です。」

「ずるいわ！こういう時に押し付けるなんて！」

「アルミラージは…。」

「これはベルではないです。」

「これは異端児ではないです。」

「ただのモンスターです。」

「ただの雑魚です。」

ああ……ベルの同類？ごめんなさい……。

あら？……あれは。

「あ、ヘルハウンドだわ！ユーティス！シノス！下がっ……」

ヒュッ！

「いただきます！」

「ギャワン！」

「ああっ！ずるいですよ！ユーティスさん！」

「……………えー。」

早いもの勝ちよ！

早速下へ行きたいんだけど……。

「ねえ、アリーゼ。そこを通してくれないかしら？15階層へ行きたいんだけど。」

「アルフリッグさん、通して下さい。」

「ダメです！」



「ただでさえ、初ダンジョンで15階層まで来たのがイレギュラーです!」

「そうです。ベルが心配します。」

「泣くかもしれない。」

「じゃ、やめとくわ。」

「早っ! (最初からベルのことを出せばよかった...)」

ミノタウロスがどんなのかを試したかったけど、仕方がないわね。

ホームへ帰ったはいいいけど、エイナちゃんに報告したら何故か怒っていたわ。

アリーゼ、輝夜、「炎金の四戦士」たちを正座させて説教していたわ。

「もう一度言ってくれませんか?アリーゼさん?」

「えっとね...その...15階層まで...」

「初ダンジョンは1〜3階層までが基本。それは知っていますよね?輝夜さん?」

「それはもちろんだ。だが...本当に1〜3階層のモンスターでは相手にならなかったのだ。」

「だからと言って、更に下へ行かせることありますか?アルフリッグさん?」

「...はい。すみません。」

「貴方がたがレベル5であり、上層・中層は大したことはないのはわかっています。ですが、シノスさんとユートイスさんはレベル1になったばかりです。ドヴァリンさん、そ

うですね?」

「はい、その通りです!」

「シノスさんとユートイスさんは確かにレベル1の私と春姫さん、レベル2のルーゼさんを圧倒しました。で・す・が!ダンジョンは別です!それはわかっているはずです!ベーリンググさん?」

「はい!もちろん、わかっております!」

「しかも、お二方は元神であり貴方がたの元主神です。ダンジョンで死なれるとどんなイレギュラーが起るかわかりません!7年前の再来となる可能性だってあるんです!それは承知しているはずです!そうですね?グレールさん?」

「はい!そうですね!」

「だったら、何で14階層まで行かせるんですか!」

「二申し訳ありませんでした!」

そろそろ止めようかしら?

「まあまあ、エイナちゃん。そのくらいで。」

「そうですね。私達、怪我一つも負いませんでしたし。アルフリッグさんたちレベル5の6人に守っていただきましたので。」

「あ・な・た・方がそれをいいますか!自覚して下さい!」

「だって、弱かったですもの。」

「ええ、何故みなさんはあの程度で苦勞するんですか？わからないです…。」

「……………（あんたたちが神だからだよ！）」

「はあ…。無事なら無事でよかったです。貴女方が死なれるとベルくんが悲しみます。それだけはわかってください…。」

「ごめんなさい！」

ベルが悲しむのだけは避けないと！

その晩、初ダンジョンで中層まで行ったことをベルに言っていると、驚いていた。

「レアお姉ちゃんとしノスさん、凄い！」と褒めてくれた。

その後すぐ、ベルはエイナちゃんに怒られたみたいだけど。

思ったけど、クノツソス経由で18階層まで行ってモンスターを狩ればよかったわね

…。

まあ、どこまでやれるかわからないからちようどよかったけどね。

…………でも後衛がほしいわね。私達のような元神の。

まあ、そう簡単にいるわけがないよね。

ベルにベタ惚れの女神が。

## 第299回 月女神、読書。

「くしゅん！」

「風邪ですか？アルテミス様？」

誰が噂しているだろうな。

ヘステイアだろうか？

それよりこつちだ。

もう読み終わったのだが…。

やはりオリオンの自伝は何回読んでも飽きないな。

「いや、その兆候はないな…。…ところでレトウーサ、そっちの本はまだ終わらないのか？」

「待って下さい。遠征編が読み終わる頃なので…。」

「そうか…。こちらは異端児編をもう三往復も読んでいるんだが。」

「自分の…といつてもそれなりにするし、荷物になるから共有するしかないんですけどね。」

「そうだな…。金をもつとあればな。」

いや、私達は1つの場所にはいられない。  
荷物になるからな…。

「全くだ。あの戦争遊戯の後にオリオンのファンクラブ出張店があった時は喜んでしまったな。」

「あの時のアルテミス様、すごかったですね。視界に入るとすぐに駆け出しましたからね、私達レベル3や4が追いつけないほどに…。」

「仕方がないだろう？オリオンのファンクラブなんだぞ！」

「全部買おうとしましたよね？必死で止めるのに苦労しました。」

「す、すまない。」

「まあ、私達全員キーホルダーとベルくんの自伝をファミリア共有するだけで精一杯でしたし。」

「シルバー会員を取れたし…、しばらくは金策だな。」

それにしても、このキーホルダー凄いい出来だな。

オラリオにはしばらく行ってないが、今の技術はどのぐらい進んでいるのだ？

まあ、いい。行けばわかるだろう。

ヘステイアにも会いたいしな。

「それにしてもオリオンは凄いな、たったの半年でこれほどの偉業を成し遂げるとは

な。」

「凄いですね！ベルくんは！」

「そうだな！……だが、あの糞神共は許せん！」

「ええ……ひどいですね！神アポロン、神イシユタル、神アレス、神イケロスは。」

「特にアポロンめ！私の神友、ヘスティアをどれだけ貶せれば気が済むのだ！同郷として恥ずかしい。忌々しいことに……天界では隣の領地だから嫌悪感が消えん。」

「私、アルテミス様の眷属で本当によかったです！」

「……神にも色々いるがな……。はあ……本当に下界へ降りてよかったのかと思ってしまうよ。」

「そんなことを言わないで下さい！」

「ああ、すまない……アルテミス様……！新刊が出ました……！ついでに0巻もゲットできました……！でかしたぞ……！ランテ……！」

よくやった！なかなか手に入らないのだ、0巻は。

しかも新刊も手に入るとはな！

早速、皆で回し読みしよう。

新刊を見たが……、フレイヤめ何て羨ましいことを。

オリオンにエスコートしてもらいながらデートするなんて…。  
それだけでも足りんのか!?

「フレイヤめ…。やはりアフロディーテやイシユタルのように美の神はろくな神がい  
いな…。いや、アフロディーテはまだマシか。」

「え？な、何故ですか？」

「天界でな、アフロディーテは私に「恋や愛は素晴らしいものだ。知らないのは損だ！」  
と私に対して喧嘩売っていたんだ。今、思えばアフロディーテの言う事がわかったよう  
な気がする。会った時にお礼を言っておかないとな。」

「そ、そうですね。」

「結局、フレイヤとロキはどうなったのだ？あの後神の鏡ではホームでお仕置きを聞く  
ことになってたが…やはりオラリオへ行かないとわからないな。」

「ア、アルテミス様！この0巻を読んで下さい！とんでもないことが書かれています！」  
「何だと？」

冷静なレトウーサがここまで焦るとは、何が書かれているのだ!?

0巻には、オリオンがオラリオへ来る前のことが書かれていた。

特にゼウスのことを。

「……………」

「ひどい…。ベルくんを育児放棄するなんて…。」

「アルテミス様…神ゼウスをご存知でしょうか？」

「知っている？知らない神なんていないさ…。あの糞神があああ！」

「「ひいつ！」」

「ああ…オリオン、すまない。私の同郷の大神がオリオンにとんでもないことを…。」

「「同郷の大神!！」」

「そうさ。同郷の、まあリーダーみたいな奴でな…。語りたくない程ひどい神だ…。」

「そ、そうなのですか？」

ああ、そうだ！下半身しか考えていない神め！

何故あの神が同郷の大神なのだ!?

理解できん！

そういや、疑問に思ったのだが…。

「…ヘラは知っているのだろうか？一応あいつの義孫だが、オリオンはどう見てもヘラ好みだろう…。」

「あの一？アルテミス様？」

「…ヘラもあの戦争遊戯を見ているはずだ。オリオンが可愛くないはずがない…。何故



ヘラは動かないのだ？かえって気味が悪い。」

「もしもし？」

「……やはりオラリオへ行かないと始まらないな。ランテ、オラリオまで後どれぐらいだ？」

「え？あ、はい。えーと……あと3日ぐらいですね。」

「そうか！その前日にどこかで水浴びして清めないとな！あと、香水もかけておくか。」

「はい！（気合入っているわ……）」

当然だろう。初対面は大切だからな。

しかし……やはりオラリオの顔が見たい！

「ああ……オラオン。もう一度神の鏡で見れないだろうか……。」

「そ、送還されますからやめて下さい！あと数日でオラリオへ入れますから我慢して下さいー！」

「そうだな……。はあ……早く会いたい……。」

## 第300回 処女神、心配Ⅲ。

今日は臨時神会か。

前回よりまだ2ヶ月も経ってないんだけどなー。

だけど！今のボクはオラリオ最大派閥だ。

数ヶ月前のボクと違うんだ！

……普通に考えると凄いやね……。

それに……今のあの子たち、【白兎眷属】のスキル持ちの子、凄まじい速度でアビリティが上がっているし……。

まーた、ランクアップのラツシユが来そうだな。

まあ、最大派閥となったからには2つ名の心配はいらないうね。

今回は、ベルくんとサポーターくんと春姫くんとアリーゼくんと輝夜くんとライラクん……の6名かな。

「ヘステイア、調子はどう？」

「やあ、ヘファイストス！調子は、まあ……いいかな？」

「何で疑問形なのよ？」

「ヘファイストス：彼女たちの急成長でずつと頭痛めているんだよ！」  
「……まあ、気持ちにはわかるわ。」

毎日更新するたびに、伸びが三桁になっているのが当たり前なんだよ！  
特に、シノスくんとユートイスくんは！

神の全知をフル稼働して効率のいい特訓をしているからね！

「よー、ドチビ。」

「何だい、ロキ？」

「いやなあ、いちいちアポとらんとあかんのは何とかしてくれへん？」

「メイちゃんとセバスくんに言いなよ……。」

「言うど箱詰にされるんや……。」

「は？」

何で箱詰に？

キミ……何をやっただよ？

おっと、そろそろ始まるね。

「今回は私が司会を務めさせてもらおうわ。」

「今回はデメテルかー。」

「まあ、デメテルなら大丈夫やろ。……それにあの脳筋の眷属を一挙に抱え込んだからー

「気に大派閥になったからなー。」

「仕方ないだろ?」

フレイヤの眷属を一挙に抱え込んだおかげで、「デメテル・ファミリア」の生産能力が一気に上がったからねー。

野菜も毎日送ってくれるから本当に助かるよ!

「ええと、ギルドからの報告は…これね。ラキアがオラリオの周辺国を占領し始めてるわ。」

「「は?」」

「何で?アレスは何を考えているんだい?」

「…妙ね?私、アレスと同じ同郷だけど。アレスがこのような手口を使うんはあり得ないんだけど…。」

「どういうこと?」

「ヘファイストス、分かっていると思うけどアレスは力押し一択の超脳筋よ?この報告書によると…綿密な情報収集の上で弱点を突き、そこから一挙に攻め込んでいるとあるのよ?アレスの手口じゃないわ…。」

「ありえないわね…。頭でも打ってまともになったのかしら?」

「ひどいことを言うね…ヘファイストス。まあ、ボクも同感だけど。」

「それに：何で周辺国なの？オラリオへ直接攻め込んだらいいじゃないの？」  
「確かにアレスじゃないな。」

「アレスが追放されて別の神になっているとか？」

「それあり得るー。」

「あの脳筋にそんな知恵あるとは思えんわー。何かあるなー。」

ドタドタドタ！

バーン！

「あら？ヘルメス？どうしたの？」

「はあ…はあ…大変だ！」

「何だよ…ヘルメス。」

「オラリオは…滅亡する！」

「「な、なんだってー！」」

はあ？何言っているんだよ、ヘルメス。

「ンなノリはええから、さっさと座れや。」

「違う！マジで本当に滅亡するんだって！」

「ウケる。」

「ヘルメス、芝居うまいぜー。」

「違うって！」

……マジみたいだね。

一体何が起こっているんだろう？

変貌したラキアといい、ヘルメスといい…。

「ヘルメス、聞きたいんだけど。ラキアがオラリオ周辺国を占領し始めているって本当なの？」

「その情報…古いよ。既に占領している！」

「「はあ!」」

「ありえないわ！アレスにそんな脳持っているはずがないわよ。絶対に誰かが裏にいるわね。」

「ああ。それについての情報があるんだ…（ブルブル）。」

…?

震えているけど…、何に怯えているんだい？

「ええから、それをさつさと言えや。」

「ヘラだよ…。」

「「は？」」

「だから！ラキアを実質支配しているのはヘラだって！」

「「な、何だつてー!」」

ヘラが!?

ラキアを支配しているのがヘラだつて!?

「先程、情報が入つてさ…。ラキアの要求は次の通りさ。デメテル、これを。」

「あらありがとう、ヘルメス。どれどれ……………ヘルメス、これ本当なの?」

「本当だよ…。」

「何が書いてあるんや…。」

「読むわね…ラキアはオラリオへ従属する。周辺国も含めてだ。ただし、オラリオにいる神はオラリオの外へ出ることは許さず。オラリオの外へ出ようとするならひっ捕らえて、それなりの処理をして送還する」とあるわ…。」

「「はあ?!」」

それなりの処理…ヘラお得意のアレかい?

うわあ…。

「なるほど…私達をオラリオに閉じ込めるのが目的ね。でもそんなことをしてラキアに、いえヘラに何の得があるの?」

「ラキアの意思はヘラそのものだよ。…………ヘラはオラリオにいる神を逃す気がないということだよ。」

「何でそんなことをするのさ？」

「……俺の憶測だけ……この前の戦争遊戯で「ヘステイア・ファミリア」に特にベルくんに対して悪口雑言を浴びせた神がいただろう？」

（（ビクウツ！））

あーあー、いたね。

え？それだけのために？

「その神を一柱も逃さないのが目的だろう……そしてラクシアにはイケロスがいたという情報がある。」

「「あつ……。」」

「そして……ラクシアの軍事力を使って、ローラー作戦でゼウスやアポロンを探し出すだろう……。」

「「うわあ……。」」

イケロス……ラクシアに行ってたのかい。

ラクシアの力を使ってゼウスとアポロンを捕らえる気だね……。

うーん、ますますヘラらしくない。

「ヘラにとつて……ラクシアはただのツールに過ぎないということさ……。オラリオの周辺国を支配し兵糧も貿易ルートも全て閉ざすだろう……。」



「それは困るわね…。でもヘラが主導しているなら納得できたわ。」

「オラリオに従属するとあるから、今まで通りね。」

「そやな、ウチオラリオから出る気あらへんからどーでもいいけどな。…問題はヘラがオラリオへ来るということやけど。」

「来る、間違いなく来る。」

「お、俺は逃げるぞ！」

「どこへ？海路も陸路も全て把握されているよ？しかも空路もワイバーン騎士に見張られているし…。ヘラはラキアの軍事力・貿易力・外交力をフルに使ってオラリオを包囲しているんだよ…。俺たちはもう…袋の鼠だよ。」

「「あ…あ…あ…、終わりだ。」」

準備万端すぎる…。

あの子は几帳面だけど、ここまで用意周到にするかあ？

あの戦争遊戯を見て、ゼウスに対して思う所あるはずだから追いかけるはずだ。

そんなことする余裕あるかなあ？

「ヘルメス…何でヘラはそんなことをしたんだい？」

「分かるもんか！ヘラの考えていることなんか予想できない！天界でもそうだったから分かるだろう！」

「うん……まあ。そうだけど。」

「ヘステイア？どうしたの？」

「いや、あのヘラがそんなことをするかなーって。第一、キレたらゼウスだけを追っかけるんだろ？ラキアを支配したり、オラリオを包囲したり遠回しなことをするかなーと。」

「確かにそうね……。」

「だろー？  
そんな面倒なことをするぐらいなら、ゼウスを追っかけるはずだよ？」

「ドチビ……まさか、そっちの執事とメイドが絡んでいるということはないやろな？」

「ははは……そんなことは………あり得る。」

「……ファンクラブを世界進出すると言ってたよね？」

「ヘラに連絡をとるため……まさか今回のことに入れ知恵したのは彼らかい？」

「………ヘステイア、ヘラを何とかしなさい。オラリオでヘラをどうにかできるのは貴女ただ一柱よ。」

「え？マジ？」

「マジよ。」

「ええ、そうね。同郷の私達でも無理ね。ヘラを止めることができるのは天界でも同郷でも貴女だけよ。」

ええー？

あの子はいい子だから言えばわかってくれるはずだけどなー？

「「お願います！ヘスティア様！お助け下さい！」」

「ええー…。」

「一旦、神会は中止ね…。ヘラがオラリオへ来てからにしましょう。」

「「異議なし！」」

「お、俺のファミリアは今晚にでも逃げるぞ！あばよ！」

「あ、待てよ！俺もだ！」

「ヘラに捕まってたまるか！逃げ切ってみせるぞ！」

……ここまで仕上げてるなら、逃げられないと思うけどなー。

「ヘラ…一体何があつたんだよ？」

帰宅して、メイくとセバスクんに聞くとやはりヘラへ入れ知恵したらしい。

その内容は、神会で聞いたのと同じだった。

「予想より早いですね」と感心してたけどね。

数日後、オラリオを出た複数ファミリアが改宗可能で主神不在でオラリオへ戻ってきた。

主神は…ヘラに捕獲されたままとのことだつてさ。

合掌。

そしてそのファミリアは解散して、オラリオ連合の傘下ファミリアへそれぞれ改宗したみたい。

ボクのところには来てないけどね。

まあ、セバスくんとメイくんが何かしたんだらうね。

日常編（○○合流） ※○○は一柱または一人とは限りません。

### 第301回 義祖母、手紙。

私はヘラ。

愛する夫…大神ゼウスの妻である。

そして、あの子の…ベル・クラネルの義祖母でもある。

あの戦争遊戯は見事だった。

レベル8の糞猪をレベル5のあの子が倒すとはな…。

本当にメーテリアの子か？

あのポンコツでトロ子で…愛する娘の子なのか？

だが、どうみてもメーテリアに瓜二つだ。

あの子は本当にヘステリアの眷属なのだな。

ヘステリアなら私は安心して託せる。

他の神では駄目だ。

他の神なら送還させて、私が引き取る。

…義祖母と言っているが、あの子のことを知らなさすぎる。

なので、今オラリオへ向かっている。

「ふう…。結構遠くまで来てしまったな。オラリオまで後どのくらいだろうか？」

「おい！大変だ！」

「何だよー。お前はいつも大変だ、ばっかりじゃねえか。」

五月蠅い輩だ。

眷属がいたら、命令して消しているところだ。

「昨日の戦争遊戯で、こここの入り口付近に【白兔の脚】のファンクラブ出張店が来ているってよー！」

「へー、でも男だろ？興味ねーよ。」

何だと？

行かねばならん。あの子の義祖母として。

「ここか…結構賑わっているな。…ほとんどが雌豚ではないか。」

「きゃー！ベル様のグッズよ！」

「ああ…あの可愛い姿…。」

忌々しい…雌豚め。

あの子のためにも、消したい消したい消したい…。

「並ばないといかんな…面倒だ。」

『…！あの姿…この人相書きとそっくり…。それに佇まいが神そのもの…。』

『あの手紙はあるよね…？見せればわかるんじゃない？』

『私が行くわ。』

…？私を見て何をコソコソと話しているのだ？

気に入らんな…。

「失礼します…。女神様でしょうか？」

「そうだが？私に用か？」

「もしかして…ヘラ様ではないでしょうか？」

…！

何者だ？ファンクラブの店員が私を知っているとは。

「そうだ。貴様は私を知っているのか？」

「あ、いえ。気に障りましたらお許し下さい。貴女の人相書きを見てお聞きした次第です。」

人相書き？

「…【ヘラ・ファミリア】に恨み持つ者か？」

「とんでもございません！あの…こちらへ来ていただけませんか？」

「今、並んでいる。終わってからにしてくれ。」

「貴女がヘラ様なら…グズも全て提供します。」

何故だ？気になるな。

「…残念だが後にくれ。」

「…やはりヘラ様ですね。この手紙をさる御方より預かっております。」

「何だと？…これは！」

【ヘラ・ファミリア】のエンブレムだと!?

馬鹿な！私の眷属は全員死んだはずだ！

「…誰だ？このエンブレムを使う眷属はいないはずだ。よこせ。」

「はい、どうぞ。」

一体誰なのだ？

…なっ！このサイン…この筆跡…そして私と奴しかわからない目印…。

そうか、そういうことか。

セバスが解放されたのだな。

あの子の持つ…私の系譜によって。



ますます、あの子がメーテリアの子であることが証明できたな。  
会わねばならん、絶対だ。

「いいだろう、貴様を信用する。案内しろ。」

「はっ！こちらへ。」

そして、私はファンクラブ出張店の応接室へ案内してもらった。

「お初にお目にかかります。「ヘラ・ファミリア」主神のヘラ様。」

「うむ。セバスを知っているな？」

「はい。ですが、ファンクラブではセバス様よりメイ様と深く関わりがあります。」

メイ…だと？

愛する夫の…【ゼウス・ファミリア】の忌々しい【最強侍従】か。

あの女も解放されたのか…。

本当にあの子は…夫の【ゼウス・ファミリア】と私の【ヘラ・ファミリア】の系譜を受け継いでいるのだな。

戦争遊戯で旗のそばにいた二人組はメイとセバスか。

「では、しばらくおくつろぎくださいませ。こちらにベル様の自伝がございます。」

「自伝、だと？」

「はい、ベル様のごことが全て書かれております。」

ほう、好都合だ。

義祖母である私が義孫であるあの子のことを知らないのは、恥ずかしいからな。

「そうか、しばらく世話になる。」

「はっ！では失礼します。用がございましてらこの呼び鈴を鳴らしてくださいませ。」

うむ、まずセバスの手紙を読むか。

何だと？先にベルの自伝を読めだど？

…終わったら、この奴らに聞けど？続きの手紙があるだど？

まあ、セバスのやることだ。

何か理由があるだろう。

多いな…8巻もあるのか。

まあ、ここには飲食物も完備しているようだし…。

オラリオへ向かうなら時間つぶしに問題ないだろう。

それにしても…セバスとメイが解放されているとはな。

戦争遊戯ではセバスとメイが姿を見せなかったのは、糞神共にバレるのを防ぐためだ

ろう。

オラリオにいた時、あいつらに怯えていた糞神どもがうじやうじやいたからな。

さて読むか…0巻？

そこから…いや、セバスからの手紙では1巻から全部読んでから0巻を読めとあるな。

まあ、理由があるだろう。

セバスの言う事で間違いはほぼないからな。

何しろ「ヘラ・ファミリア」最高傑作の「最恐執事」だからな。



「ヘラ様がいらっしやったわ。方向を変更するわよ！」

「承知しました！計画どおり、ラキアですわね？」

「そうよ。まさか戦争遊戯の翌日に見つけるとは運がいいわ。」

「狼煙を上げて他の出張店へ知らせますわね。」

「ええ、お願いね。」

「ラキアの同志からの手紙が来るのは…次の目的地ね。」

「ラキア…オラリオの敵国に忍び込むのは厳しいかしら？」

「大丈夫よ。同志が引き込んでくれるわ。」

「もうベル様は世界の王となっても、おかしくないわね！」

## 第302回 義祖母、後悔。

……………。

ふざけるな…。

よくも…よくも…よくも…。

あの子を苦しませてくれたな…。

オラリオに着いたら、糞神共…覚悟しておけよ…。

だが…本当にあの子は半年でここまで来たのか？

本当に、あの雑魚とポンコツのメーテリアの子なのか？

信じられん…。

スキルだな…だがここまで急成長するスキルは知らん。

他にもありそうだが、会ってからでいいだろう。

強くなくても、あの子の容姿だけいい。

…あの子は半年前に、家族を失ってオラリオへ来たとあるが、あの人は生きているはずだ。

妻である私が言うのだから間違いはない。

一体あの人に何があつたのだろう。

いや、先にあの子のことだ。

「ふう……3日かけて読んだな。遠征編までか。よくもまあ、これだけの苦難を受けてきたのだな……。よく死ななかつたものだ。それに……私とあろう神が半年前まで正気を失っていたとは情けない……。会ったらあの子を甘やかしてやらないとな。鞭はセバスタたちがしてくれるだろう。」

ああ、楽しみだ。

それにしても……このぬいぐるみよくできているな。

「おっと、0巻だったな。一体何なのだ？」

そして私は0巻を読んだ。

私は自分が情けない。

何故、もつと早く正気を取り戻さなかつたのだ。

そうすれば……、アルフィアも余生をあの子と私と共に過ごせただろうに。

すまない……アルフィア……ベル。

許さん……許さんぞ……エレボスめ。

よくも私の愛する子を騙して、悪に堕としてくれたな……。

ザルドはどうでもいい。

他の邪神どももだ…。

糞神共を送還するついでに、奴らのいる天界へ言付けておかないとな。

くくく…覚悟しておけよ。

だが…、何故アルフィアが生きているのだ？

1週間前まではアルフィアの恩恵が切れていたはずだ。

それに病でそんなに長くはもたないはずだ。

恩恵が復活したのは…1週間前程だ。

それを証拠に…、あのエルフの魔法を無効化したのは間違いなくあの子の魔法だ。

あり得ないが、事実だ。

一体、1週間前に何が起こったのだ？

それに…あの人は何を考えている？

私を想った上であの子を育児放棄することはないだろうに。

まだ14歳ではないか。

あの子があまりにもかわいそうではないか。

あの人にもたっぷりとお仕置きをしないとな。

くくく。

あの子に会ったら、謝ろう。

…何と言ったらいのだろう。今からでも考えておくか。  
ヘステイアにもお礼言わないといけないな。

やることが多いな…。

む、そういうえば全巻読んだら、呼び鈴を鳴らすんだったな。

チリン チリン

「お呼びでしょうか？」

「ああ、全巻読んだ。読んだらセバスの手紙とあるが？」

「はっ！こちらです。」

「そうか、ご苦労。」

「では、失礼します。」

どれどれ…。

む、…何だと？

ベルのためにやってほしいことだと？

私に命令する気か、あ奴め。

ふん、読んでやろう。

……なるほど。

確かに理にかなってゐるな。

ちようどいい、アレスにはたつぷりとお礼しておかないとな。

敬愛するヘスティアを拉致し谷底へ突き落とし、ベルを手こずらせ泣かせた罪は重い。

同郷である分、余計に許さん。

私の恐ろしさを忘れたなら思い出させてやる。

ラキアを支配し、オラリオ周辺国を支配して防壁にするのはいい案だ。

数百年前からウザかったから丁度いい。

ここであの子のためにも掃除しておこう。

さて、そうと決まったらラキアへ向かわないとな。

ここには世話になったが、遠くなる前に降りるか。

チリン チリン

「お呼びでしようか？」

「ああ、すまないがここで降りる。オラリオへ向かっているとと思うが、用ができたからラキアへ向かう。」

「あ、それは不要でございませう。」

「なんだと？」



「へラ様を乗せた時に、ラキアへ方向転換しております。明日には着きます。」

「……なるほど、私を利用したな（あ奴め……）」

「も、申し訳ありません！」

「いや、いい。好都合だ。すまないが、また世話になる。」

「はっ！」

「思ったのだが、ラキアはオラリオの敵国なのだろうか？ すんなりと入れるのか？」

「ご心配いりません。ラキアにいる同志が手引きしてくれます。」

「同志、だと？」

「はっ！偉大なるベル様のファンです。」

「……………そうか。」

あの子のファンはどこまで広がっているのだ？

……まあ、いい。敵となるよりはマシだな。

私達の時は周囲が敵だったからな、その分反省しないと。

あの子なら……味方が多ければ多いほどいい。

糞神の露払いは私がしておこう。

だがラキアという国には入れても、アレスのいる王宮まではさすがに厳しいだろう。

まあ、私の全知と神威を使えば可能だろう。

一応、聞いてみるか。

「だが、同志たるものでもさすがにラキアの奥深くまでは不可能だろう？」

「いえ、実は……」

聞いた時は呆れた。

セバスとメイめ……やりすぎだ。

私の愛しい義孫を世界の王にする気か、奴らめ。

……かえって好都合かもな。

ベヒーモスとリヴァイアサンを討伐したのはあの人と私のファミリアが主で、他はパシリをしてくれたファミリアだけだ。

他の奴らは何もしてくれなかった、ただ称賛するだけだった。

ところが、黒竜討伐に失敗した途端手のひらを返しやがった。

あの時の悔しき、屈辱は私の神生で忘れることがないだろう。

だから私達の失敗を反省して、あの子が黒竜を討伐するなら世界を巻き込んでやる。

世界にも責任をとらせてやる。

私の愛しい義孫のためにも。

まず、ラキアを支配しておかないとな。



## 第303回 軍王子、降伏。

今、私はこの脳筋神を止めている。

「だから待てて！この阿呆神が！」

「な、何だと！私に向かって阿呆だと！」

「【白兎の脚】を神敵にするのは、阿呆だと言つてんだらうが！」

「黙れ！マリウス！わが神友のイケロスが、【白兎の脚】は【怪物趣味】で喋るモンスタ―を率いているというじゃないか！見捨ててはおけん！神敵【白兎の脚】を討伐しなければならん！ついでにグータラ女神も送還してやる！そして、クロツゾは私が有効に使つてやろう！フハハハハ！」

「いい加減にしろよ！それが目的だらうが！」

「何が悪い！」

「開き直るな！この馬鹿神が！」

くそつ！数ヶ月前にオラリオを攻めて大人しくなつたと思つたのに！

この神が来たせいで…。

「ひひひ、王子さまよ。アレスがこうなつたら止まらねえぜ？好きにさせとけよ。」

「うむ！さすが我が神友は分かっているな！」

「(クソツ！この神が来てから予定が狂った！やっとオラリオ侵攻癖が収まったというのに…)」

「ええい！マリウスは捨て置き！皆の者！出撃用意せよ！」

「二はっ！（えー、もういい加減にしてくれよ）」

「フハハハハ、オラリオはもう私の物だ！」

(いや、無理だろ)

また痛い目に合うだろうな…。

はあ…抜きたい。

---

数日後

「うむ！そうそうたる軍勢だな！」

「……………はあ。」

「司令官がそんなことでどうする！ほら士気上げんか！」

「数ヶ月前にオラリオへ侵攻したばかりで、しかも改宗済み。どう上げるんですか！」

「気合だ！」

「この脳筋神が！」

「脳筋とはなんだ！」

「アレス様、マリウス様、準備ができております。」

「うむ！では出発だ！」

「はあ…。…？父上はどうした？」

「はっ！門で待つと第二王女殿下が言っておられました！」

「門だと？今までは王宮からだったのに…何故だ？」

「さあ…そこまでは。」

「そうか…（気になるな…）」

あの妹が見送り？信じられんな。

どういふ風の吹き回しだ？

それに…父上も王宮からこの脳筋神を見送るのが習わしだったはずだ。

嫌な予感がする…。

「見よ！国民も我らを祝ってくれているぞ！皆、『白兔の脚』を討伐してくるぞ！」

「お、おー…。」

「うむ！」

「…（何故男ばかりなのだ？いつもは男女関係なくいたのに…それに棒読み…。嫌な

予感がする…。」

「ひひひ、面白えことになったな。この形でオラリオへ帰るとは思わなかったな。ま、大負けするのは確実だけだな。アレスが単純で助かったぜ。」

「皆の者！楽しみに待っておれ！」

…やはり気になる。国民の顔が…引きつっているような気がする。

気のせいかな？なら、疲れているな。

この出征が終わったら休暇を取ろう。

「さあ！門を開けよ！」

シー…ン

「む！どうしたのだ！」

「ア、アレス様！門番が開けようとしません！」

「何だと！」

「大変です！」

「何事だ！」

「お、王宮に反乱が…。」

「「はあ!?!」」

王宮だと!?

有りえない! 間諜がないことは確認したはずだ!

「な、何だとおおおお! 王宮へ引き返すぞ!」

「た、大変です!」

「今度は何だ!」

「こ、国民が我らに刃を向けています…。主に女性が。」

「「はあ!」」

「ふ、ふざけるなあああ!!」

馬鹿な! …いや、それならさっきの国民の中に女性がいないのがうなずける。

何故、我らに刃を向けるのだ!?

「何が起こっているのだ…。父上も門にはいないし…。」

「くっ! マリウス! 何とかしろ!」

「うるせえ! 今、考えているんだよ!」

「兵たちが混乱しています!」

「仕方がない! 私に神威で収めてやろう!」

「オオオオオ!」

「落ち着くがよい!」



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

「「ひいひいひいひい!」」

「な、何だ!この神威は…私よりも上…だと!」

馬鹿な…この脳筋神の売りである神威が無効化されたとは…。

一体どこの神だ!?

「くつ…士気が最低に…駄目だ。アレス様!この出兵は失敗です!」

「…ありやく、やばいかも。ここは逃げよつと…。」

「む!我が神友よ!手伝え!」

「えく…、無理だぜく。この神威は、大神クラスだぜ?」

「関係ない!我らが力合わせば不可能はない!」

「いや、無理だつてく。」

脳筋神にしてはナイスだ。

…いや、単に引き止めただけか。

部下に命じて逃さないようにしないと。

こいつが元凶だからな。

「おのれ!マルティヌスよ!私に刃向かうか!」

ポイ、コロコロ…。

「む！何……だ……。」

「ち、父上！」

「へ、陛下の首が……。」

「た、大変です！王宮が乗っ取られました……。」

「誰の仕業だ！」

「………女性全員です。」

「「は？」」

ど、どうということだ!?

女性全員が反乱を起こしたというのか!?

「どうということだあああ！」

「あ、あちらに第二王女殿下がおられます！」

「何っ！」

「アレス様、お兄様、降伏なさってくださいませ。」

「妹よ……どうということだ？」

「どうということだ！お前のオムツを替えてやった恩を忘れたか！」

「なっ!?!アレス様のそういうところが大嫌いです！」

「ぐはあっ！」

無視しよう。自業自得だ。

「お兄様…王宮は既に私達の手の内にあります。国民もこちらの味方です。」

「何…だと？」

「父上を討つとは…狂ったか！」

「狂ったのはそちらでしょう！アレス様を見てくださいませ！」

「ああ…。」

まあ…いつも狂っているしな。

「お、おのれ！王太后や女王、第一王女はどうした！」

「こちらの味方です。」

「「は？」」

「ついでに、兵士の皆様そして貴族の奥方、お嬢様もこちらの味方です。」

「「降伏します！」」

……ここ、ラクシアの首都で包囲されたらもう打つ手がない。

引くことも、進むこともできないな…。

「なっ！貴様ら！駄目だ！」

「ひひひ、アレスく。俺らの負けだぜく。」

「…降伏しましょう…。もう全ての手を打たれています。」

「お、おのれえええええ！」

せめて…冒険者になりたかったな。

## 第304回 軍神、恐怖。

どうなっているのだ！

数百年も治めた国に……こいつらに裏切られるとは！

「き、貴様らー！」

「姉上……貴女までもですか。」

「マリウス、貴方のせいではありません。そこの愚神のせいです。」

「な、何だと！」

なっ！長年可愛がっていたのに……

くそっ！誰だ！誑かした神は！

許さんぞー！

「母上……父上を討つのはやりすぎではないですか？」

「マリウス、仕方がないのです。愚神の言うがままになっていたあの人が悪いのです。」

「お祖母様……」

「マリウス……王位継承権を第一王女へ譲りなさい。」

「なっ！駄目だ……モゴモゴ……」

おのれ！長年面倒をみてやったというのに……！

「愚神は黙ってくださいませ。」

「マリウス、貴方に愚神の世話という大変な苦勞をおかけしましたね。もういいのです

よ。」

「母上……。」

「念願のオラリオの冒険者になりたいのでしよう？。」

「……！……！（駄目だ！この裏切り者共が！）」

愚神愚神と言うな！

マリウス！諦めるな！

「……わかりました。せめて、何故このようなことをしたのかを話してくれませんか？」

「別室でお話します。誰かおるか！その愚神共を玉座の間にいるあの方のところへ。」

「はっ！来い！愚神共！」

「ひひひつ、俺とこいつを一緒にしないでくれるか？」

「……！……！（おのれ！許さんぞ！）」

おのれ！いつか挽回してやるからな！

ラキアは、私の国だ！

私とイケロスが拘束され、目隠しされたままで玉座の間まで連行された。くそっ！こんなことをされるのは天界でもヘラの折檻以外、なかったぞ！  
屈辱だ！

「お連れいたしました。」

「入れ。」

「目隠ししなくてもいいじゃんかよ。」

「……！……！（この縄を解け！許さんぞ！）」

「…………」

「はっ！ここにへ置け。我らはこれにて退室します。」

「…………」

誰だ！私の国を……ラキアを陥れた神は！

「かしこまりました。では失礼します。」

「ぶはっ！誰だ！」

「ひひひ、アレスの神威を抑えるなんてよく。それに面白いことしてくれたのは誰なんだ。」

顔を見てやろう！

……え？

「私だ。久しぶりだな、アレス、イケロス。」

「……………」

「どうした？感動のあまりで声も出せぬのか？」

「へ、へ、ヘラあああああつ!?」

馬鹿な！何故何故何故、ヘラがここにいるのだあああつ！

はつ！これはチャンスだ！

かつて最恐の「ヘラ・ファミリア」を味方につけるための！

よし！私の話を聞けば、ヘラもわかってくれるはずだ！

「ヘラ！聞いてくれ！【白兔の脚】の愚行を！」

「ほう。」

「ば、馬鹿！やめろ！アレス！」

「神友よ！止めるな！ヘラならわかってくれるはずだ！」

「お、おまつ！忘れたのか！」

私に任せろ！

ラキアも、クロツゾも私の手に戻るのだ！

「あの兎はアルミラージから生まれたヤツに違いない！アルミラージとどこかの醜女が



交わり、生まれた子に違いない！」

「……………」

「ひ、ひいいいいいっ！」

「だから、卑しい心だからこそ【異端児】という汚らわしいものを匿うのだ！庇ったヘステイアも同罪だ！邪神そのものだ！」

「……………」

「（馬鹿アレスううう！俺は逃げるぞ！手足縛られているが窓まで逃げて飛び降りて、天界へ逃げよう！）」

「【猛者】に勝ったのも何か反則をしたに違いない！ヘステイアが反則して勝たせたのだろっ！」

「……………」

あの戦争遊戯はあり得ない！

レベル5がレベル8に勝てるわけがないのだ！

…あの猫人の歌に気絶させられたままで終わっていた、とは言えない…。

「（よし、ここまで…なっ！窓全部が塞がれている！扉は…ノブが壊されている…。に、逃げられない…。）」

「あの兎を捕らえて、髪ごと顔の皮を剥がして吊るしてくれようぞ！へら、手伝ってくれ

「！貴女の得意技だろう！」

「……………」

「所詮、母親は醜女だろうさ！せめてものの情けで火あぶりにしてやろうではないか！」

「……………」

「（これ以上刺激するなあああ!!!）」

「あ、クロツゾは私にくれ。有効に使ってやる！他はラキアの奴隸として使ってやろう

！」

「……………」

うむ！黙っていることは私の高説に感動しているのだろう！

これでヘラはこちらの味方だ！

さて、拘束を解いてもらわないとな。

「ということで、拘束を解いてくれないか？貴女にも手荒なことはしないことを約束し

よう！」

「言いたいことはそれだけか？」

「言い足りないが、それぐらいにするさ！続きは後でしょう！」

「そうか、そうか、そうか。」

「（ガクガクブルブル）」

「む？我が神友よ。部屋の隅で震えて…、どうしたのだ？」

何故、恐怖に怯えているのだ？

大丈夫だ！ヘラは既にこちらの味方なのだからな！

「アレス、私にはかつて「ヘラ・ファミリア」を率いていた。」

「おお、知っているぞ！」

「その「ヘラ・ファミリア」で一番愛していた子がいた。」

「うむうむ。」

ヘラでも愛する子がいるのは当然だな！

「その娘はメーテリアと言う。だが、私の夫のファミリアの雑魚がメーテリアに子種を植えた。」

「そ、そうか…。何て無謀なことを。」

「（無謀なのはお前だあああつ！）」

「そしてメーテリアは体が弱かった。命と引き換えに子を産んだ。」

「そうか…：心中察する。」

「（そこを察するなああつ！他のところを察しろおおお！）」

ヘラの子に手をだすとは…：さすがゼウスの子だな！

おっと、それを言うと折檻されるな。

「その子の名前は…ベル・クラネルという。」

「ほう！可愛らしい名前ではないか。…はて？どつかで聞いたことがあるな。」

「(名前くらい覚えろよおおおお！)」

「その子は今…【ヘステイア・ファミリア】団長となっている。」

「へ？」

「二つ名は【白兔の脚】という。」

「……………」

「そう、先程貴様が散々と貶した子が…私の可愛くて愛しい義孫だ。」

「……………」

ダラダラダラダラダラ…。

まずい不味いまずい不味い…。

忘れていた…アストレアの言っていたことを。

私…さつきまで…ボロクソに…。

しかも…ヘラの最愛の娘までも…。

やうあい。

あ、キれている…ゼウスが浮気した時より…。

「よくも、よくも、よくも…。」

「へ、ヘラ…、ちよつと待つてくれ…お、落ち着いてくれ…。」

「私の義孫だけでなく…愛する娘のメーテリアまでも侮辱したな？アレス？」

「べ、弁解をさせてくれ…。」

「それだけではない、私が天界で唯一敬愛するヘステイアを侮辱したな？」

「け、敬愛つて…あのグータラのどこが？」

グータラして火の番しているだけだろうが！

オリンポス十二神の座を蹴つたのは愚かといいいようがない！

「グータラだが、貴様よりはマシだ。貴様は邪神そのものだ。大神の妻である私が保証しよう。」

「そ、それはひどすぎる！私は善神だ！」

「善神？オラリオを数百年に渡つて、飽きもせず攻めて国民を苦しめた神のどこが

善神だ？」

……ハイ、ごもつともです。

イケロス！俺をフオローしてくれ！

「……………神友よ！助けてくれ！」

「(こつちへ振るなああああ！)」

「イケロス。」

(ビクッ！)

「貴様の子に私の義孫が大変世話になったな？」

「申し訳ありませんでした！」

「貴様の子はあの可愛い子に何と言ったと思う？」

「大変申し訳ありませんでした！」

「『偽善者』と。ふふふ、貴様の子に一番言われたくないな？ そう思わないか？」

「はい！ そう思います！」

「イ、イケロス、ずるいぞ！」

「得点を稼いだな！」

「そうか、貴様もそう思うか。…だが、許さん。私の義孫を貶し苦しませ追い込んだ貴様に、役目をやろう。」

「や、や、役目とは？」

「メッセンジャーだ。天界へのな。」

「天界ですか!? 喜んで！」

「ああ、貴様の体に直接、徹底的に刻んでな。喜ぶがいい。」

「……………」

「え？ き、刻む？ 文字通り体に…。」

ひいつ！…ヤヴァイ。

天界へ…送還されるのはイヤだ…。

ラキアが…私の国が…。

「アレス。貴様は生かしてやろう。」

「ほ、本当か！」

「ああ、この国の王族から嘆願されたのでな。」

「それならこの縄を解いてくれ！」

「解くさ。私の気が済んだらな？」

「……………」

「さて…そろそろ私の我慢も限界だ。楽になれると思うなよ？」

「ひいひいひいひいっ！」

助けてくれえええええっ！

マリウスでもいい！ヘステイアでもいい！

イヤダアアアアアアア！

## 第305回 義祖母、指示。

ふん、このぐらいいしておくか。

「このぐらいいにしてやろう。仲間がこれから増えるから楽しみにしとけ。」

「……………」

もう口もきけないか。

この程度で情けない奴らめ。

あの人は、この程度なら軽い口でも叩くというのに。

さて、奴らへ指示しておくか。

チリン チリン

「お呼びでしょうか？」

「ああ、これからの戦略だ。王族共はどこにいる？」

「はっ！王族のリビングにあります。」

「そうか、そこへ行く。」

「ご案内いたします。」

やれやれ、王族は面倒だな。



「はいか。」

「邪魔するぞ。」

「「へ、へら様！このようなところに！」」

「気にするな。いちいち呼び出すのも面倒だから出向いてやった。」

「「はっ！ありがとうございます！」」

「さて…その若者は第一王子か？」

「あの…へら様。どうか、息子には目こぼしを…。」

「わかっている。全てはあの馬鹿が悪い。そうだろうか？」

「「はい！」」

本来なら厳罰だが、こいつらがあまりにも庇うからな。

それに下々の者にも上層部でも評判がいいしな。

アレスの尻拭いといったところか。

「マリウス・ウィクトリクス・ラキアと申します。へら様、お初にお目にかかります。」

「へらだ。…ヘステイアを拉致したのは貴様か？」

「…アレス様と拉致したのは事実でございます。」

「奴の指示に従っただけだな？そうだな？」

「はい。」

「なら、貴様には罪はない。ところで…既に聞いていると思うが私の義孫について、どう思う？正直に答えろ。」

「…では、正直に申し上げます。異常です。半年過ぎでレベル5ではおかしくありませんか？いくら何でも早すぎます。それに…あの戦争遊戯は魂までも震えました。本当に14歳ですか？数倍はいつてませんか？英雄という枠を超えているんじゃないかと思いました。」

「ふむ、まあそうだな。私もかつて「ヘラ・ファミリア」を率いていたから、それはすぐ分かる。あの子は早すぎる。おそらくスキルだろうが…「ヘステイア・ファミリア」の守秘にかかわるから深くは踏み込むな。…英雄という枠というより「神工の英雄」からはみ出ていると言ったほうが正しいな。」

「そうですか…。」

オラリオの冒険者になりたいというのは嘘ではないようだな。

一応確認しておくか。

「貴様に王位継承権は既がない。私を恨むか？」

「父上に対して思うところはありますが、恨みはしません。念願の冒険者になれるのですから。」

「そうか。だが、その前にいくつか仕事をしてもらおう。そうすれば希望のファミリア

へ斡旋してやる。」

「仕事、ですか？」

「ああ、そうだ。まずオラリオの周辺国占領だ。その国らの情報収集をしろ。」

「…その国々には間諜を忍び込ませていますから、すぐに済ませられるかと。」

手回しがいいな。

アレスも馬鹿だな。

こいつを有効的に使えばオラリオ以外支配できたものを。

なら、私が有効的に使ってやろう。

「ほう、あの馬鹿にはもったいない奴だな。なら、弱点を調べろ徹底的にな。」

「かしこまりました。」

「調べたら一斉に攻めろ、迅速にな。反撃の時間も与えるな。」

「かしこまりました。」

「後、手の空いている奴に命じろ。アポロンと愛する夫、ゼウスの居場所を探し出せ。」

「神アポロンと神ゼウスのですか？ かしこ…どう探したらいいのでしょうか？」

「お話の最中、失礼します。ヘラ様。ファンクラブの情報網でその神々の情報を報告し

たいのですが、いいでしょうか？」

「許す。」

「はっ！神アポロンは神アフロディーテにまわりついて、オラリオへ向かっていきます。」

「…馬鹿なのか？アポロンは。「ハステイア・ファミリア」の戦争遊戯で負けて、オラリオを永久追放されたはずだろう？」

「はっ！その通りですが、何故かオラリオへ向かっているようです。」

「…まあ、いい。どうせ、馬鹿象神のファミリアによって入ることはできないだろう。オラリオ近くに着いたら知らせろ。」

「はっ！神ゼウスですが、「ヘルメス・ファミリア」の主神ヘルメス宛に手紙が送られており、その宛先がオラリオ周辺国にあることが判明しました。」

「さすがのあの人も、可愛い義孫が気になるようだな。予想通り、オラリオからそう遠くないところにいるな。ふむ…周辺国を占領し風潰しに探したほうが無難か。聞いたな？」

「はっ！今すぐ行動にかかります。」

「よし、行け。」

「では、失礼します。」

なるほど、なかなか優秀なやつだな。

ラキアで人気者というのもわかる。

まあ、私の義孫には及ばんがな。

ラキアをまともにするか。

面倒だが、義孫に齒向かわないようにせねばならん。

「さて、あの馬鹿のいいなりになっていた貴族は全員クビにしろ。文句言うなら斬れ。」  
「はっ！」

「王妃、貴様が女王になってまとめろ。王太后は外交担当だ。第一王女は宰相をやれ、第二王女は第一王女のサポートをしろ。」

「「かしこまりました！」」

「これで少しはマシな国になるだろう。」

「あの…アレス様はどうなるのでしょうか？」

「心配するな、貴様らの嘆願で生かしてやる。ただし、魔神にはするがな。それでも飾り程度には役に立つだろう。」

「か、飾り程度ですか…。」

「不服か？あの馬鹿に好きなようにさせるから駄目なのだ。見た目だけはいいから、飾り程度が丁度いいのだ。」

「「か、かしこまりました。」」

「さて、私は奴らへの教育の続きをせねばならん。この国をまとめるよう急げよ？」

「はっー」

うむ、思ったよりスムーズに進みそうだな。

そういえば…そろそろ数日経つがあの子はどうしているだろう？

戦争遊戯の影響で倒れてないだろうか？

聞いてみるか。

「おい、今のところあの子はどうなっている？」

「はっーあの御方はレベル6になったとの知らせがありました！後、新刊9巻が発行されました。」

「ほう、もうレベル6か…。いや、戦争遊戯ではレベル5でレベル8の糞猪と互角だったから、実力的にはレベル9あたりか。もう私の子「女帝」に並んだか、ふふふ。」

「レ、レベル9…。すごいわ…ベル様。」

「新刊は後でじっくりと読もう。奴らへの教育がまだ済んでない上、私の怒りも収まっていないからな。」

「はっ！新刊はあとで部屋に持ち込みます。」

「ご苦労。あの子のことについて情報収集を怠るなよ？」

「心得ております！」

「さて、戻るか。おい、数日間でもまとめろよ？」

「かしこまりました！全てはベル様のために！」

……セバスとメイめ。ファンクラブはやりすぎだろう…。

王族の全ての女性があの子の虜になっているぞ。

まあ、いい。あの子の敵は少ないほどいい。

敵は…私が取り除いてやる。

それが、あの子への14年間そばにいなかった、私のせめてものの償いだ。  
自己満足だな。

## 第306回 愛浮呂、疾走。

…もうすぐオラリオね。

それに…こいつらどこまでついてくるの？

「アポロン、貴方そろそろ降りなさいよ！」

「何故だ？一蓮托生だろう？オラリオまで仲良く行こうじゃないか！」

「何回も言わせないでよ！一蓮托生なんて冗談じゃないわよ！」

「恥ずかしからんでもいいだろう？」

駄目だ、こいつ。

何とか引き離さないと…。

よし…これでいきましよう！

「サンドロ、ベックリン！」

「はっ！」

「メレンに着いたら、全員で私を担いでオラリオへ全速力で直行しなさい！」

「かしこまりました！…神アポロンはよろしいのですか？」

「ヒュアキントスに聞きましたが、オラリオを永久追放されているそうです…。」



「はあ？何考えているのよ。まあ、いいわ：どうせ、入れないわよ。オラリオ連合の「ガネーシャ・ファミリア」がいるから大丈夫よ。」

第一級冒険者が揃っているんだもの。

【アポロン・ファミリア】では突破できないわ。

メレンに着いたわね…。

あ、ニオルズがいたわ。

丁度いいわ、アポロンの足止めをしてもらいましょう。

「ニオルズ、久しぶりね。アポロンと話をしてあげてくれないかしら？というか、しろ。」

「何だ：いきなり。アポロンはオラリオを永久追放されたはずだが？」

「知らないわよ！あんな変態神の考えていることなんて！頼んだわよ！ニオルズ！」

「あ、おい：。：アポロン、本当に来ているな（いいのか？あいつらがいるというのに）。」

さあ！全力疾走よ！

引き離さないと、あいつらはずっとまとわりついてくるわ！

「サンドロ！アポロンは!？」

「まだメレンにいます！」

「全員、そのまま全速力でオラリオへ行きなさい！」

「「かしこまりました！」」

よし…何とかうまくいきそうね。

オラリオに着いたわ…。

アポロンは…姿かたちも見えないわね。

今のうちに！

「【アフロディーテ・ファミリア】ですか…？目的はなんででしょうか？」

「観光よ。」

「そうですか。一応、検査のため全員確認していいのでしょうか？」

「ええ、いいわよ。あ、そうだね。【アポロン・ファミリア】がオラリオへ向かおうとしているわよ。ガネーシヤや第一級冒険者を呼んだほうがいいわ。強行突破するみたいだし。」

「は？【アポロン・ファミリア】ですか…？【ヘステイア・ファミリア】との戦争遊戯で負けて永久追放されたはずですが。」

「知らないわよ！あの変態神の考えていることなんて！責任を負いたくないなら、呼びなさい！」

「は、はい！」

呼ばないと、厄介なことになるわよ！

全員の確認が終わった後に、ガネーシャが眷属と一緒に来たわ。そしてアポロンも…。

「本当に来た…。」

「ガネーシャ…神アポロンは、馬鹿なのか？」

「ああ、だがここまで馬鹿と思わなかったぞ。」

「…皆、あのファミリアは絶対に入れるな。門を閉じろ！」

「「はっ！」」

ほーっほほほー！

私の勝ちだわ！

「おお！ベルきゅんがいるオラリオへ私は戻ってきたぞ！」

「「……………」」

「そこにいるのは神友ガネーシャではないか！さあ、門を開けて出迎えてくれ！」

「帰れ。後、お前と神友になつた覚えはない。」

「冷たいことを言わないでくれないか！同じ都市にいた仲間だろう？」

「お前は負けて追放されたはずだ。帰れ。」

「仕方があるまい…。ベルきゅんのためだ！ヒュアキントスよ！強行突破だ！」

「……………仕方ありません。行くぞ！」

「正気か……?」【太陽の寵童】。

「アポロン様の言うことは絶対だ。【象神の杖】、どけ。」

「やめとけ。大人しく帰った方が身のためだぞ?」

「問答無用!……っ!」

え? 横槍から矢が飛んできた?

どこよ!

あ……あのエンブレムは、まさか……。

「おい……あれは。」

「月に弓のエンブレム……まさか」

「【アルテミス・ファミアリア】!?!」

「何でアルテミスがここへ来るのよ!?!」

何でよ!

大樹海へ行つたんじゃないの!?!

「おお! 同郷の者が加勢に来てくれたぞ!」

「……………」

「アルテミスよ! 同郷のよしみで来てくれたことを感謝する……ぞ?」

「死ね。」

シユバババババ!

え?どうなっているの?

アルテミス:ひえっ。

「「ぎゃあああああ!」」

「なっ…、気でも狂ったのか!アルテミス!」

「気が狂ったのは貴様だろう!貴様と同郷というだけで虫唾が走る!我が子たちよ!仇敵【アポロン・ファミリア】を討ち滅ぼせ!」

「「はっ!」」

…【アルテミス・ファミリア】の子、妙に士気が高いわね。

「「仇敵!」」

「くっ!仕方があるまい!愛する子たちよ!迎撃せよ!」

「アフロディーテ:。」

「何よ、ガネーシャ。」

「アレ、キレてない?」

「キレてるわ:天界にいた時よりも。アルテミス:何があつたのよ:。」

あんなにキレているアルテミス、初めて見たわ:。

遠慮なくオリンポス武闘派の腕を振りかざしているわ。

あー、案の定馬鹿神たちがブヒブヒ騒いでいるわね。

「何だ何だ！何の騒ぎだよ！」

「アポロン・ファミア」と「アルテミス・ファミア」の抗争だ！」

「はあ？何で【アポロン・ファミア】が…？」

「戦争遊戯で永久追放されたはずだろ？」

「馬鹿なのか…？」

「それはいい！好カードだぞ！見なきゃ損だぞ！」

何が好カードよ。

まあ、私には関係ないわ。

それより、【白兔の脚】に会いましょう。

「ガネーシヤ、我々はどうするのだ？」

「……抗争が収まるのを待とう。巻き添えになりたくなければな。」

「わかった。だが…このままでは。」

「ああ、人数が多い【アポロン・ファミア】が優勢だ。」

知らないわ。私には関係ないわ。

そう…関係が…ない、のよ。

「アルテミス！降伏しろ！数はこちらが上だ！」

「黙れ！変態め！私が降伏だど！？貴様に降伏するなら死んだほうがマシだ！」

「ア、アルテミス様！多勢に無勢です！」

「…私も参戦しよう。」

ゴオオオオオッ！

「ぐっ…この神威は神アルテミスか！」

「そこの子、どくがいい。アポロンを討つ。」

「…どかぬ！ぐっ！この弓の腕は…本当に全知無能なのか！」

「私をアポロン如きと一緒にするな！」

アルテミス：自ら弓を取って出てくるなんて！

当たりどころが悪かったら、どうするのよ！

「アルテミスが押し返したが…やはり多勢に無勢だ。」

「ガネーシャ…。」

「このままでは不味いな…シヤクテイ、【アルテミス・ファミリー】へ参戦しろ。」

あーもー！仕方がないわね！

出るしかないわ！貸し一つよ！

「わかった「その必要はない、邪魔だ。どけ。」お、お前は！」

え？誰よ…あんたは。

ヒエツ…怖いわ！



## 第307回 処女神、招集。

「んー？オラリオの外が騒がしいね？」

「そうでございますな。」

「…ベルくんが里帰りして実家にある荷物を全部持つてくるのはいいけどさー。数日間いないだけでも、やはり寂しいなあ。」

「同行者で誰が行くかがすごかったですね。」

「あの時、煽つたのは君たちじゃないか…。」

ベルくんが半年も経ち、一段落したので故郷の村へ一旦帰つて荷物を持つて帰りたいと言ひ出したんだ。

当然、1人では行かせるわけいかなしい第一級冒険者を簡単にオラリオから出るのは難しい。

なので、同行者を何人か行かせることになつたんだ。

「いいですか？坊ちやまが里帰りなさいます。実家にある私物を持つて帰りたいのとです。」

「同行者は荷物持ちを考えて…、3人ぐらいでいいでしょう。」

「当然、ボクが「ヘステイア様は主神のため、ダメです」…ハイ、わかりました。」

うう…ベルくんと一緒に行きたい…。

ベルくんの故郷を、見たい！

「私が行く。」

「いいえ！私です！」

「ベルと旅するのは私です！」

「ベル様のサポーターはリリです！」

「あ、あの私は…べ、ベル様の…きゆう…。」

「小娘共が。義母である私がベルと一緒に行くのは道理だろう。」

「私に譲ってよ！みんなよりベルと一緒にいる時間が少ないじゃない？」

「アリーゼは黙ってくださいませんか？それは関係ないでしょう？」

「私はベルくんのアドバイザーですので、同行すべきかと。」

「エイナさん…さすがにレベル6のベルさんにアドバイザーは不要では…。」

「あたしも行きたーい！」

「……………（行きたいが、ここでは黙ったほうが吉だな）。」

「待ちなさい。新入りの私が同行した方がいいじゃない？」

「そうですよ！私たちに任せて下さい！」

やはり、こーなったね。

それにしても…すごい争奪戦だね。

今、ここにベルくんはいない。

ギルドへ外出許可申請と、故郷の村への土産を買いにいつている。

「叔父貴…。」

「やめろ、見るな、口出すな。こっちに火が飛んでくるぞ。」

「そうだ、黙っとけ。」

「我が友があまりにも不憫だ…。」

「ベルはどうした？」

「ギルドへの申請と村への土産をかうつてよ。」

「あれ、見なくて正解だな。」

「もういつそ、くじ引きした方がいいんじゃないか？」

おお！いい案だ！

「「それだ！」」

よーし、くじの用意するか。

ボクは行けないけどね！

「この馬鹿共が…、だから口出すなど言ったんだ。」

「…サーセン。」

男性陣、何か肩身狭くなっているね。

大丈夫だよ！ヘラのように極端な扱いはしないよ！

ベルくんには害なければ、ね。

そして…選ばれたのはサポーターさんと、アドバイザーさんにレファイヤくんだ。

三人はすぐくガッツポーズして、選ばれなかった子は全員凹んでいたね。

まあ、バランスがいいといえればいいけどね。

コンコン

「失礼します。」

「おや？ローリエさんですか？どうしましたか？」

「はっ！報告です！予想どおり【アフロディーテ・ファミリア】と【アポロン・ファミリア】が来ました！」

「本当に来たんだ…アポロン。」

何やってんだよ…。アポロン。

何も自ら死にに來なくてもいいじゃないか。

ん？アフロディーテ？

え？あの子も来ているの？ナンデ？

「ご指示の通り、神アフロディーテに神ヘファイストスを派遣しました。」

「え、もう？あー…妥当だね。あのアフロディーテを抑えるにはヘファイストスが一番だね。」

「それに何故か【アルテミス・ファミリア】と【アポロン・ファミリア】がいきなり抗争を始めました。」

「はああああああ？！」

アルテミスううう？

何でオラリオへ？しかも【アポロン・ファミリア】と抗争？

何があつたんだよ！

「ほう、面白い展開になりましたな。」

「ええ、そうですね。」

「な、何で…アルテミスが？はっ！そうしちやいられない！神友のアルテミスへ加勢しないとー！」

「あの…先程アルフィアさんが【ミアハ・ファミリア】の方へ向かっていきました…。」

「あつ……。」

……うん！大丈夫だね。

アルフィアくんが行くなら、ほぼ……いや完全に勝てるね！

間に合えばね。

「いけませんな。お嬢様がキレますと死者が出ます。」

「そろそろ、愚神たちへ姿を見せる時でしょうか？」

死者つて……、否定出来ないのがつらい。

アルフィアくんとベルくんのお母さんの思い出の場所が、ボクたち二人が過ごしていたあの教会なんて……。

神ながら運命を感じるね。

ん？誰か来るね。

「か、会長！大変です！」

「皆様の手前ですよ！何の騒ぎですか！」

「す、すみません！ラキアが動きました！神ヘラが大軍勢を率いてオラリオへ向かって  
います！」

「え？もう？早くないかい？」

タイミングがよすぎるよ！

「なるほど。さすが元主神ヘラですな、神アポロンに監視をつけていましたか。」

「相変わらず手抜かりないですね。」

「ま、まもなく到着されます。」

「ヘステイア様、向かいますしょう。」

「ええ、女神連合を率いて。」

「……………ベルくんがいないのにな？」

ヘラが来るなら、ベルくんを紹介できないじゃないか。

「大丈夫です。いいタイミングです。」

「そうですね。そろそろ帰ってくる頃でしょう。」

「うー……。」

なら、少し待つてもいいんじゃないかな？

「ヘステイア様、早く向かわないと神ヘラとアルフィアさんによつて多大な被害が生ま

すよ？ 最悪の場合、オラリオが半壊するかもしれません。」

「よし！ 向かおう！ すまないけど、デメテルたち女神連合へ招集かけてくれるかい？」

「かしこまりました。」

ヤヴアイ。

アルフィアくんがキレたら「アポロン・ファミリア」どころじゃない。

またあのヘラもだ。  
はあ、もう少しのんびりと過ごしたかったけどな。



## 第308回 象神、驚愕。

…彼女が出張る時点で、勝ったな。

「アルテミス様！まずいです！全員、負傷のため碌に動けません！」

「くっ…アポロン如きに…。」

「アルテミス、仕掛けたのはそっちだ！悪いが…」

アポロン、それも無駄だ。

彼女が出た時点で…終わりだ。

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「「ぎやあああああああ！」」

「な、何が…。」

「魔法…？」

い、一撃でほぼ全滅か。

さすが…レベル7と言ったところか。

「おい、こいつらを癒せ。」

「は、はい！」

「ヒュアキントスとやらはどいつだ？」

「あそこの背の高い人です！」

…元【アポロン・ファミアリア】の【月桂の遁走者】と【悲観者】か。

まあ、彼女には逆らえないのは仕方がない。

俺だって逆らいたくない！

「ダフネ！カサンドラ！この裏切り者が！」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「がああああああつ?!」

容赦ないな…。

まあ、ベル・クラネルを溺愛している彼女としては当然だな。

…【アポロン・ファミアリア】は今日で終わりね…。」

「うん…：本当に来るなんて…。この方たちを癒やさないと！」

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わり

に、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソール・ライト】

む、「アルテミス・ファミア」が全快したようだな。  
とりあえずは全滅はしのげたな。

「ふう…ありがとう！」

「助かりました！」

「ありがとう。すまないが、どこのファミアだろうか？お礼を言いたいのだが。」

「ミアハ・ファミア」です。」

「！オラリオ連合のか！」

「あ、はい。」

「そうか、後でお礼を言おう。…アポロンは、この私が討つ。」

「そ、そうですか（怖い…この女神様）。」

アルテミス…何故、そんなに殺す気満々なのだ？

アフロディーテの言う通り、一体何があったのだ？

【静寂】は…【アポロン・ファミア】と対峙、いや既に決着をつけているな。

「どうした？貴様ら、さっさと立て。」

「すまないが、その女性。アポロンは私に譲ってくれないか？」

「…私が神を討つとベルが悲しむ。変態神ならそこで尻もちついてるぞ。好きにし  
ろ。」

「ベル？お前はオリオンの何なのだ？」

「……オリオン？」

「は？オリオン？」

「ああ、オリオンだ。」

「ベルはオリオンではない。」

「ああ、すまない。私が勝手に言っていることだ。その……惚れたんでな。」

「ゑ？惚れた？」

「誰が？」

「……かつてヘラから聞いたのだが、神アルテミスは大の恋愛アンチではなかったのか？」

「？」

「数週間前まではな。ヘラ？君は「ヘラ・ファミリア」なのか？」

「（また増えたか……いい加減にしてくれ……）説明は後です。私はこやつらに復讐をしなければならぬのでな。」

「復讐？」

「ベルを傷つけただけでなく、私と妹……ベルの母が愛した教会を破壊したのだ、こやつら

は。」

「それは許せん。思う存分にやるがいい。」

「ああ、もちろんだ。ほら立て、貴様ら。私はまだ気が済んでないぞ。」

「「ひ、ひい…。」」

【アポロン・ファミリア】はどうでもいい！

今の発言は聞き逃がせん！

「さて…アポロン。覚悟はできているな？」

「な、何故だ！アルテミス！私はお前に何もしてないぞ！」

「何も？ああ、そうだ。お前は私にはしてない。私には、な。」

「な、何故だ!？」

「貴様は私のオリオンを傷つけ、悲しませ、苦しませた。それだけで万死に値する！」

「は？オリオン…だと？私はお前のオリオンに会ったことがないぞ！」

「よく言う…。戦争遊戯でオリオンを苦しませたくせに。」

「は…？べ、ベルきゆんのことか!?ま、待て！アルテミス！お前は大の恋愛アンチではなかったのか！」

「惚れた。」

「は？…ば、馬鹿な…。不純異性交遊撲滅委員長が…恋愛を？ふ、ふざけるなあああ！ベルきゆんは私のもの…（ヒュツ！）ヒエツ…。」

「もう一度言ってみろ、全身に風穴開けてやる。」

ば、馬鹿な…。

あの…アルテミスが？大の恋愛アンチのアルテミスが？

不純異性交遊撲滅委員長のアルテミスが？

あ、あり得ない！

「ガネーシャ…。今の空耳かしら？」

「い、いや…確かに聞こえたぞ。」

「大の恋愛アンチのアルテミスが…恋？う、嘘でしょ…？」

「……凄いな、『白兔の脚』は。会ってもいないのに、神の鏡越しでアルテミスまでも落とすとは。」

「……ふふふ、なら私が魅了して横取りを「何を？」そりや、ベル・クラネルを…。え？」

「久しぶりね。アフロディーテ。」

あ。

「へ、ヘファイストス!?何でここに？はっ！幻覚ね！目をつぶれば…。」

「……。」

「この感触…本物!?ど、どうして!？」

「どうしてって、オラリオは私が住んでいるところよ?。」

「しまったあああああ！忘れていたあああああ！」

…少しは考えれば、わかるだろうに。  
やはり馬鹿だな、こいつは。

「ところで、誰を魅了するですつて?」

「あの…その…、誰よ!ヘファイストスをここへ呼んだのは!」

「アフロディーテ。」

「ひつ…。」

「誰を魅了するですつて?」

「……………それは…ゴニヨゴニヨ。」

「まあ、いいわ。大人しくするならいいわよ。魅了を使いまくるなら…。」

「つ、使いまくるなら?」

「あの時よりひどい目に合わせるわ。」

「使いません!使いませんから、許してください!」

そういうえば、アフロディーテはヘファイストスと一時恋人の時があつたな。

アフロディーテが浮気した時、ヘファイストスが激怒したと聞いた。

一体、ナニをされたのだ?

む!モニーカが駆けつけているな?

「ガ、ガネーシャ様!大変です!」

「どうした！モニーカ！」

「自分はモダーカです！ラ、ラキアの大軍勢がものすごい速度でこちらへ向かっています！」

「ああ、動いたか（のね）。。。」「

「は？アレスのやつ、何を考えているのよ？」

「アフロディーテ…、今のラキアを支配しているのはアレスじゃないわよ？」

「は？誰よ！」

「ヘラよ。」

「……………え？」

ヘラだ。

お前と同じ同郷の、最強最悪女神だ。

「ベル・クラネルを魅了するとか言ったわね？彼の義祖母であるヘラへ言おうかしら？」

「止めて！ごめんなさい！魅了をしませんから言わないで！」

「アフロディーテはどうでもいいが「どうでもいいって何よ！」、ヘラがもう動いたか。」

「おそらく、アポロンがオラリオへ着くタイミングを見計らったでしょうね。」

「「アポロン…：終わったな（わね）。。。」「」

おとなしく、追放されたままで過ごせばよかったのに…。



「アルテミスが恋とはね……ここでも天界でも大騒ぎになるわね。」

「大丈夫なのか……？」

「今更よ。ヘステイアがやきもち焼くだけよ。……それだけでは終わらないような気がするけど。」

【ヘステイア・ファミアリア】でまた大騒ぎになるな。

ベル・クラネルのハーレムに1人、いや1柱追加か。

羨ましいようで羨ましくないな。

「オラリオへ来たのは失敗だったわ……。」

アフロディーテ……、だったら来るなよ！

## 第309回 月女神、再会。

「この時を待ちわびたぞ…。」

「アポロン、言い残すことはあるか？」

「ベルきゅんに会いたい！会わせてくれ！」

「よし、ないな。死ね。」

「ま、待ってくれ！話せばわかる！」

「問答無用だ。」

貴様の好きな弓矢にかかって死ぬることを幸運に思え。

「ア、アルテミス様！あちらを！」

「何だ、ランテ。…軍勢だと？あのエンブレムは…【アレス・ファミリア】!?」

「アレス…またオラリオ出征に来たのか。数ヶ月前に来たと聞いていたが。」

「……妙だな？アレスの神威を感じられん。」

「……そうだな、あの目立ちたがり屋が神威を隠す理由がない。」

「ああ…つて！何を自然に会話へ入っている！さっさと死ね！」

「ま、待て！アルテミス！」

「そ、それどころではありません！先にラキアの軍勢です！」

「…貴様の死刑は後だ、アポロン。そこにいろ。」

シユバババババ！

「……縫い付けるなんてひどいじゃないか。」

ふん。貴様のような変態神を野放しにしておけるか。

だが、私のファミリアだけではあの大軍勢に対抗できん…。

【アポロン・ファミリア】には協力を求めたくない。

なら…あの女性しかないか。

どこに…あ、いた。

「おい、癒やせ。」

「あ、ハイ。」

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソール・ライト】

「も、もう…やめてくれ。」

「いつそ…殺して…くれ。」

「ご、ごめんなさい…。」

「駄目だ。許さん。」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「「ぎやあああああああ！」」

回復させて、魔法でボコボコにして、回復の繰り返しか…。

えげつないな…。

「ふん、雑魚はこのぐらいにしておこう。…貴様だな？教会を破壊するという案をだしたのは。」

「が…は。当…然だ。あの妖夫如きが過ごしたところなぞ…」

妖夫だと!?

あのオリオンを妖夫扱いにするとは、許せん!

【福音】!

【サタナス・ヴェーリオン】!

「ぐあああああああつ!」

…あの女性も怒り心頭だな。

それにしても短文詠唱であの威力なのか。

強いな。

「如きだと？私と妹の思い出の場所を如きと言ったか？…気が変わった。切り刻んでやる。」

「「ひいつ！」」

「おい、さつさと癒やせ。」

「ハイ！」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

「貸せ、私が剣技というものを教えてやる。」

ヒューズバズバズバズバ！

「ぎやああああああつ！」

「「ひいつ！耳が…鼻が…うわあ…」」

やりすぎだ…。

それより、あのラキアの大軍勢への対抗に協力申請しないと。

「待て。その女性。」

「止めるな。神アルテミス。」

「気づかないのか？ラキアの大軍勢がそこまで来ているぞ。」

「何だと?……ちつ、ラキアめ。」

「ラキアの軍勢を片付けるのが先だ。手伝ってくれ。」

「……運がよかったな。後にしてやる。」

「ぐ……あ……が……。」

ひどい惨状だが、自業自得だ。

「多いな……5万人はいるな。」

「無駄な兵力だ。早速吹き飛ばして……。!!!」

「な……この神威は……!?!」

「……本当に占領したのだな。」

「……?そなたは知っているのか?」

「……この神威は私がよく知っている。貴女も知っているはずだ。」

「……まさか……。」

この神威は……あいつの。

軍勢が2つに分かれ、そこを……同郷のヘラが通っている。

相変わらず傲慢な女だな。

「久しいな、アルテミス。そして……我が娘、アルフィア。」

「アルフィア!?!オリオンの伝記に載っていた、ベルの母の姉か?!」

「(0巻までも読んでいたのか…) そうだ。」

「そうか…エレボスめ。何て酷いことを。同郷の神として謝罪する。」

同郷の男神にはろくな神がないいな！

全く嘆かわしい。

「あ、いや…(…あれは嘘だと言えないな)。」

「アルテミス。今、オリオンと言ったか？お前、まさか…。」

「ああ、貴方の義孫に惚れた。」

「……………」

「(ヘラが絶句するとはな…)。」

何故？黙るのだ？

いいじゃないか。私が…恋をしたって。

「それはそうと…何故ラキアを率いているのだ？」

「乗っ取った。」

「は？」

「それは後で説明する。私の義孫とヘステイアを苦しめたアポロンはどこだ？」

「あそこに縫い付けている。」

「そうか。ご苦労。」

む、折檻する気だな。

「待て、私も混ぜてくれ。」

「……いいだろう。」

「…私はある変態共を懲らしめてくる。」

死なさないようにしろよ。

そういえば…オリオンは来るのだろうか？

「や、やあ。ヘラ…久しぶりだ。」

「アポロン、久しいな。よくも私の可愛い義孫を、敬愛するヘステイアを傷つけたな？」

「ま、待ってくれ！」

「待たん。奴らと同じ目に合わせてやる。」

奴ら？

「奴らとは誰だ？ヘラ。」

「アレスとイケロス、そしてオラリオから逃げ出した糞神共だ。」

「ほう。」

既にヘラが捕らえていたのか。

アレスはともかく、イケロスはどこにいるかわからんがラクシアにいたのか。

運が悪いやつだ。



「悪いが、アルテミス。奴らにお前がやるところはない。送還一步手前だからな。」  
「そうか。こいつだけはやらせてくれ。」

神友のヘステイアへ身の程も知らずに求婚した変態だけはな！

「いいだろう。私の指示どおりにやれよ？」

「ああ、わかった。プロだからな、貴女は。」

「ひ、ひいつ！た、助けてくれ！我が神友のみんな！」

「こつち見んな。」

「助けてもいいぞ？但し、こいつと同じ運命になるがな。」

「助けません！どうぞ！」

相変わらずだな、あの糞神共は。

「だそうだ？いい神友を持ったな？アポロン？」

「神友は慎重に選ぶんだな。アポロン。」

「や、やめてくれええええええ！」

さて、始めよう。

オリオンが来る前に…。

## 第310回 愛浮呂、再会

うわあ…ひどいわ。

へらに、アルテミスが加わったら最悪じゃない。

本当にアポロンは馬鹿ね。

「ぎゃあああああああつ！」

「五月蠅い、喚くな。」

「アルテミス、それではダメだ。声帯を潰さないで。」

「声帯か。どこだ？」

「それは…ここだ。ここをこうするとな…」

「ぎゃあああつ…つ！…つ！…つ！…つ！」

「な？簡単だろう。」

「はあ…、さすがプロだな。貴女は。」

感心するところはそこじゃないわよ！

「「うわあ…。」」

「…：…へらを止めてくれないか？同郷だろう？」

「嫌よ！私を巻き込まないでよ！」

「私もごめんよ。」

冗談じゃないわ！

巻き込まれてたまるものですか！

「神アフロディーテ、神ヘラを止めていただけると嬉しいのですが…。」

「じゃあ、あつちを止めてよ！あつちの方がひどいじゃない！」

こつちはじわじわやっているけど、あつちは完全に死にかけているじゃない！

もう虫の息じゃない。

いっそ死んだ方がマシね。

「が…あ…。」

「おい、もうすぐ死ぬぞ。さっさと癒やせ。」

「は…いい。」

【一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【ソール・ライト】

治療士のあの子、精神疲弊寸前じゃない！

「カ、カサンドラ！マジックポーションよ！」

「ゴクゴクゴク……うう……キツイよう。」

「まだ8回目だ。あと92回残っているぞ?」

「ひゃ……100回もやるんですか?」

「……そうしたいが、まあ無理だろうな。そろそろ神ヘスティアが来るから中断するだろう。」

「……ほっ……」

「ふむ? 貴様らはまだ余裕ありそうだな?」

「……ま、待つて下さい! こ、降伏します!」

「待たん。降伏も許さん。」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「……ぎゃああああああっ!」

「さっさと癒やせ。」

「はい……(ヘスティア様! 早く来てえええええ!)」

早く来なさいよ! ヘスティア!

私達の精神の安寧のために!

というか、馬鹿象神の子の貴女!

「戦争遊戯でレベル6を倒したじゃない!あの女を止めなさいよ!」

「すみません:彼女はレベル7ですので、レベル6である私は止めることができません。」

「レベル7ですつて!?!そんなの:そう!ベル・クラネルを呼びなさいよ!」

「彼は3日前に帰郷しました。今日か明日には戻るかと。」

「タイミングがいいのか悪いのか:。いえ、「アポロン・ファミア」にとつて厄日ね。」

「団長!神ヘステイア様がまもなく来られます!」

「そうか!この公開拷問も終わりだな。:疲れた。」

こつちも疲れたわ:。

やっと来たわね!遅いわよ!

と叱りたいけど、ヘファイストスが隣にいるから言えないわ:。

「えーと:、ガネーシャ。この状況を説明してくれないかな?」

「見ての通りだ:。ヘラを止めてくれ:。」

「何で:ヘラにアルテミスが混ざってるんだい?」

「それはその:、どう言ったらいいか:。」

まあ、アルテミスが恋したベル・クラネルのためにヘラと一緒にアポロンを折檻して

いるとは言いにくいものね。

…女神をゾロゾロと引き連れているわね。

あら？見知った顔が多いわね。

「あらあら、アフロディーテ。久しぶりね。」

「デメテルじゃない！相変わらずね…（無駄にでかいおっぱいも）」

「どうしたの？オラリオには絶対に行かない！と言ったのに？」

「ベル・クラネルについて気になる事があったのよ。美の神としてね。」

ええ、そうよ。

あの子には間違いなく魅了を使っている。

美の神として見過ごせておけないわ！

「ププツ」

「誰よ！笑ったのは!?…あんたね？メイドの分際で生意気ね！」

「失礼しました、神アフロディーテ。美の神としては慎ましいと思ひまして（チラツ）。」

「むっかーっ！胸は関係ないでしょ！第一、美の神としてベル・クラネルに魅了があることが気になるのよ！」

「!!」

「他の神には誤魔化せても、このアフロディーテは誤魔化せないわよ！彼は魅了を持つ

ている…。だから確認しておきたいのよ！」

『驚いたわ…。フレイヤでも見抜けなかったのに…。』

『悔しい！アフロディーテ如きに見抜けるなんて！』

「何をコソコソと話してるのよ！」

この二人…どっかで見たことあるわね？

アストレアに似ているけど…完全にヒューマンだから違うわね。

もう一人は…？

「あーもー！やーめーるんだ！アルフィアくんもだ！」

やっど止めてくれたわね。

遅いわよ！天界でもグータラしてたけど、下界もね。

キビキビ動きなさいよ！

「む…もう来たのか。おい貴様ら、神ヘスティアに感謝しろよ？」

「い、癒やしますか？」

「そうだな、ここに放置したらベルの目が汚れる。癒やしておけ。」

「は、はい。」

「一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉の代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ」

【ソール・ライト】

……あの子、ベル・クラネルの何かしら？

それに、【太陽の寵童】死んでない？

あ、かろうじて息しているわね。

「む、ヘステイアか。」

「ふむ、今日はここまでにするか。」

「……………！」

アポロン…ひどい有様ね。

私に付きまとわなかったら、そういう目に合わずに済んだのにね。

ご愁傷様ね。

「…やあへら、久しぶりだね。相変わらずで安心したよ。」

（（相変わらず!?!））

まあ……同郷の、オリンポスの私達から見たら日常茶飯事なものね。

他の神々からだとは異常なものね。

「うむヘステイア、久しぶりだな。下界へようやく降りてきたのだな。」

「うん。数年前だけどね。」

「そうか、会えてよかったぞ。」



…そうだったわね。

ヘラは、ヘステイアへ妙に懐いていたわね。

私もアテナの折檻でヘラによく泣きついたけど、邪笑で済まされたわ…。

ひどかったわ…。

そしてヘステイアと神友のアルテミスと…。

「アルテミス、元氣そう…いや元氣すぎてよかったよ。」

「言い方に含みがあるようだが、アポロンが全部悪いぞ。ヘステイア。」

「まあ、そうだけど…。何もヘラと一緒にやることないじゃないか。キミ、そういうキラじゃないだろ?」

「オリオンのためだ。」

「オリオン?」

「ああ。」

「誰のことだい…? (すごく嫌な予感がする…)」

「ん? ヘステイアの子だが?」

「…は?…ベルくん…のことだよね?」

「ああ、神の鏡越しで…惚れた。」

「……………嘘だろ…あの大の恋愛アンチのアルテミスが…。」

まあ、神友の貴女でも絶句するわよね。

そりゃ、天界三大処女神の一角が崩れたんですもの。

「大丈夫か？ヘスティア。ああ、そうだ。久しぶりだな、アフロディーテ。」

「ふえ？え？ひ、久しぶりね、アルテミス（本神よね）？」

「お前に言わなければならぬことがあったんだ。…私に恋を教えてくれてありがとう。」

「……………？」

「アフロディーテえええええ！余計なことをおおおお！」

「う、うるさいわね！わ、私だって混乱しているのよ！天界であれだけ言っても無反応だったのに！」

あのアルテミスが…私にお礼？

嘘でしょ…。

これだけでも偉業に値するわよ！

「嘘でしょ…あのアルテミスが…。」

「え…貞淑を司るアルテミスが？」

「不純異性交遊撲滅委員長が？」

「……………信じられないわ。」

「……………天界も下界も揺るがしますね…、これは。」

あの子は一体何なのよ！

ヘステイアだけでなく…アルテミスまでも。

魅了だけでは説明できないわね。

## 第311回 義祖母、待望。

驚いたぞ、本当に。

あのアルテミスがな…。

しかし、それが私の義孫というのが複雑だ。

くそっ！14年前に…いや15年前に正気に返っていたら、あの子を保護していたのに！

今更言っても仕方がないことはわかっているが…。

「ところで、ヘステイア。オリオンは…その…いるのか？」

「あ…今は帰郷しているとところだよ。もうすぐ帰ると思うけど。」

帰郷、だと？

何故帰郷しているのだ？

「そうか、ならそれまでこの変態神に教え込んでやらないとな。」

「…まだ続けるのかい？もうポロポロじゃないか…。」

「まだだ。天界へ送還する一歩手前まで、じっくりやらないと駄目だ。」

「一歩手前!」

当たり前だろうが。

私の可愛い義孫を苦しませた罪は重い。

この程度で済ませるものか。

「そ、そうかい。…ねえ、ヘラ？アレスはどうしたんだい？」

「まだ生きてるぞ？イケロスも捕らえてある。」

「そ、そうかい（逃げ切れなかったんだね）…。」

…当然だろう。イケロスがいたのは幸いだったな。

手間が省けた。

丁度いい、オラリオの糞神どもへの見せしめになつてもらおうか。

「失礼します！ヘラ様、報告です！」

「許す。」

「はっ！ヘラ様の夫、ゼウス様を確保しました！まもなくこちらへ連行します！」

「「え？」」

意外と早かったな。

やはり周辺国のどこかに潜んでいたか。

「ほう、言ったことは守っているな？」

「はっ！マリウス様、レベル3の方を中心にゼウス様を包围し、麻醉矢を十数発打ち込ん

で眠らせました!」

「「うわあ…そこまでするのか…。」」

「そうか、ご苦労。逃さないようにしとけよ?」

「はっ!ご指示の通り、アダマンタイト製の鎖を二重三重に縛っております!」

「「……………(モンスターかよ!)。」」

「ご苦労だったな。ああ、そうだ。あの愚神共もついでにここへ連れてこい。」

「はっ!ゼウス様と共にこちらへ連行いたします!」

ああ、あの人に15年ぶり会える。

そして…ようやく送還できるな、イケロス。

「聞いての通りだ、ヘステイア。すまないが、愛する夫を「ヘステイア・ファミリア」ホームに運んでいいか?」

「えー…。ゼウスをベルクんに会わせたくないんだけどな…。」

む、何故だ。

ああ…。ヘステイアはあの子を一人にさせ、心に深い傷を負わせたあの人を許せないのだな。

…ヘステイアがあの子をどんなに大切にしているかわかるな。

『ヘステイア様、受け入れて下さい。クソバカ主神用の独房は用意してあります。』

『でもさー…。』

『ヘステイア様。坊ちやまの実の母、メーテリアさんの復活のために必要です。』

『…わかったよ。』

む？ヘステイアが何かを耳に？

…何だ？

「ヘステイア？」

「あつ…。うん。わかったよ。ただ…。うちの子たちは女性が多いんだ。ゼウスの手につけたくないんだけどな。」

「ならその雌豚たちを追放「ベルくんが悲しむよ？」…わかった、夫は私が管理しよう。」

仕方がない…。

あの子を14年間も放置した私はそこまで口出しする資格がない。

ただし、ヘステイアだけだ。

他の神なら送還させてでも追い出してやる。

『躊躇もなく、追放と言ったわね…。』

『ベルさんにまだ会ってもないのに、溺愛確定ですね…。』

…アルフィアは、何をしている？

ああ、この変態神の子を相手にしているのか。

そんなものさっさと殺せばよかろうに。

「おい、貴様。こいつらを牢に入れる。」

「はあ…最初からそうすればよかつただろうに…。」

「ほう。貴様ら、私の魔法でもがき苦しむのと【ガネーシャ・ファミリー】の牢屋に入るとどちらがいい？一秒で選べ。」

「「牢屋を希望します！」」

「だそうだ。【象神の杖】？」

「…お前たち、こいつらを連れて行け。」

「「はっ！」」

ふん、馬鹿象神の子か。

真面目なことだ。

「アポロンはどうするんだい？」

「私がやる。私の気がまだすんでいない。」

「程々にしときなよ…ヘラ。」

程々？ヘステイアでもそれは断る。

こいつはアレスやイケロスより苦しめないと駄目だからな。

送還はしないでやる。



「これでも…善神だからな。  
来たか…。」

「ゼウス様と愚神たちをお連れしました!」

「…!?…! (へ、ヘラああ!?何故ラキアを従えているんじやああ!)」

「ゼウス、簀巻きにされているわね…。」

「愚神たちって…石柱しかないけど?」

「まさか…あの石柱の中に?」

「そうだ。私が考案した。」

「きつと気にいるだろうさ。」

「ご苦労だった。…久しぶりね、貴方。」

「…。…? (ひ、久しぶりじゃのう。ところでこれを解いてくれんかのう?)」

「後でじっくりお話しましょう。…おい、麻痺毒をとりあえず10発打ち込め。」

「はっ!」

「ダダダダダダダダダッ!」

「…、…! (ちよっ…、アーーーーッ!)」

「…うわあ…容赦ない。」

「ヘラ、アレスとイケロスはこの石柱の中なのか?」

「ああ、そうだ。おい、開けろ。」

「「はっ!」」

「下がれ、溶けるぞ。」

「「と、溶ける!」」

ゴゴゴゴ…ブシヤアアア…ジュウウウウ!

ふむ…。内臓までは溶けてないな。

皮膚がかなり爛れるが大丈夫だろう。

送還されてないからな。

「「ひいひいひいっ!」」

「ふむ、仕上がりは上々だな。」

「「うわあ…。」」

「ア、アレスだよね?」

「…コロ…シテ…。」

「こつちは…イケロスか?」

「…ソウ…カン…シテ…。」

きける口があるだけ、まだ大丈夫のようだな。

「うむ。アルテミス、これで気が済んだか?」

「この手でやれないのが口惜しいが、まあ……いいだろう。」  
「……………」

アルテミスの奴、私の義孫にのめり込んでいるな。

……同郷でも私の義孫はやらん。

## 第312回 義祖母、見送。

さて……久々のオラリオだ。

糞神共へ挨拶しておこう。

「おい、そのポケっとしてる糞神共。」

「ひいつ！な、何でしょうか？」

「私の可愛い義孫、そしてヘスティアを散々といじめてくれたな？」

「「え、冤罪です！」」

「あの方々は、嘘を言っております、ヘラ様。」

「「(ビクウウツ!)」」

む？神の嘘を見破れるだと？

ヒューマンの娘……か？

「……お前は？」

「シノスと申します。ヘラ様、お久しぶりです。」

久しぶりだと？

お前のような雌豚に会ったことは、ないはずだ。

「……………久しぶり？私はお前に会ったことは…いや、待て。お前はまさか…。」  
「ヘラ様。私は嘘を看破できるスキルを持っております。それは神でも、です。」

「「え」」

……………変装か？

いや、それにしても神の力を一切感じない…。

だが…。

「…嘘は言っていないな。…貴様、よくも私の前に顔を見せたな？」

「あー、ヘラ。彼女はベルくんからの信頼が厚いぜ？駄目だよ？」

何だと？

このビッチにどれだけのことをされたのかを忘れたのか？あの子は。

…いや、新刊であつたな。

だが、糞神共は許さん。

「…ちつ、わかつた。おい糞神共、貴様らには逃げ場はない。震えて待て。」

「「た、助けて下さい！ヘステイア様！」」

「ボクは知らない。君らの自業自得じゃないか。」

ふん、当然だ。

そろそろ、頃合いだな。

「さて…イケロスを送還するか。」

「「え」」

「おい、イケロス。」

「…ソウ…カン…シテ…。」

「ああ、送還してやる。次に言う言葉を覚えて、天界にいる奴らへ言え。」

「「奴ら？」」

「そうだ…。」

私とあの人のファミアリアが出ていった後、オラリオを好き勝手にした奴らだ。

「まず、7年前の大抗争で関わった闇派閥の邪神共。そして私の可愛い義孫を傷つけ、悲しませ、苦しめたエレボス、ルドラ、イシユタル、タナトス、ディオニュソスだ。ついでにペニアもだ。」

特にディオニュソスは許さん。

同郷…オリンプス十二神の一神であることを汚し、ヘステシアの優しさを無碍にした罪は深い。

『イシユタル以外はベルに対して直接何もしてないはずだけど…。』

『少しでも関わりがあっただけでもアウトでしょうね…。』

そいつらには…。

「いいか？よく聞け。私が天界へ帰ったら貴様らと戦争だ。絶対に苦しませて殺す。何万年経って復活しても苦しませて殺す、とな。」

「「ひいひいひいひいっ！」」

「特にエレボスは、念入りに殺つてやる。私の娘アルフィアを騙し、悪に落として汚しただけでなく可愛い義孫を一人ぼっちにさせた罪は冥界より深い。」

「そうだ…。」

同郷での古くからの神であろうが、絶対に許さん。

自分の眷属でやれば慈悲ぐらいはかけてやったが、私の娘を利用したのは1万回以上殺つても許さん。

しかもあの子を一人ぼっちにさせたのは言語道断だ。

『一人ぼっち…ゼウスの存在を無視しているぞ…。』

『神ではなく、家族という意味でしょうね…。まあ、理解できるわね。』

『騙されたわけではないのだが…、まあベルのためだ。仕方がない。許せ、エレボス。』  
「わかつたな？」

「…ハ…イ。」

「そうか、約束通り送還してやる。その前に身を清めさせてやろう。おい、始めろ。」

「「ハッ！」」

「何をするのかしら？」

「…？石柱へもう一度入れて…上からお湯？」

「…何故、石柱の下に火を…まさか…。」

ああ、綺麗に洗ってやらないとな。

そうでなければ折角刻んだのが、見えにくくなるからな。

うむうむ…、いい湯加減だな。

「いい湯だろう？心地よいままで逝け。」

「うわあ…ゆだっているぞ。」

「えげつないわ…。」

「…！…！（助けて！助けて！）」

「遠慮するな。おい、どんどんくべろ。」

「ハッ！ハッ！」

まだまだだ…。

じつくりと浸かってやらないとな。

もはや、声すらも出なくなつたな。

さて、オラリオの糞神共に警告しておこう。

「糞神共、よく見ておけ。これが貴様らの最期だ。」



「(ガクガクブルブル)」「」

『ああんりたくないわ……。』

『ヘラは、未だ健在ということね……。』

む？何だ？

見知った顔……。くくく久々に見るな。

「よー！ドチビ、何や？この騒ぎ……。は。ウチ、ちよい用事を思い出したわ。」

「手遅れだよ……。ロキ。」

「くくく……。いいところへ来た。よくも私の義孫に色々としてくれたな？なあ、ロキ？」

「……………ヘラ。」

「ふむ、そろそろか。じゃあな、イケロス。」

ポチツ

「(ポチツ)」「」

最後の仕掛けだ。

シュバババババ！

「……………ツ!!!」

「(ひいひいひい)」「」

「な……。石柱から無数の針が……。」

「ゆだつて苦しめるだけでなく…串刺しか。」

ドーーーーー！

久々に見るな。

イケロス、奴らへよく伝えておけよ。

「うむ、いい天の柱だな。」

「えー…言葉が見つからないけど。」

「さすがヘラだ、プロの匠といったところか。おかげでかなり溜飲が下がったぞ。」

「アルテミス…貴女、かなり毒されているわよ…。」

さて、ラキアの奴らは帰してやろう。

ついでにこの馬鹿神も解放しよう。

「約束通り、アレスは解放してやろう。」

「はっ！ありがとうございます！」

「ああ、アレスが入っていた石柱と捕獲した糞神を入れた石柱は置いとけ。いや…アレス

を入れた石柱にそのアポロンを入れる。」

「「え」」

「かしこまりました！おい！その変態神を入れる。」

「「はっ！」」



左腕が使い物にならなくなった。治ったのは奇跡に近い。帰ったら貴様の両腕両足をちぎり燃やし生えないようにしてやる！」

「お、俺は知らねえぞ！勝手にやったジユラが悪いんだぞ！ちくしよおおお！……先に消滅することも考えるか……」

” タナトス、貴様は同郷の神として恥ずべきことをした。義孫にも危機が及ぶところだった。よつてオリンポスの、私の法に従つて極刑SSS級の名誉を与えよう。”

「り、理不尽だ！俺はヘスティアにも【白兔の脚】にも何もしてないのに！ディオニユソス！てめえが何もかも悪いんだ！」

” ディオニユソス、貴様はやはり十二神の座にも神の座にも相応しくない。特にヘスティアの優しさを無碍にした罪は重い。タナトスと同じくオリンポスの、私の法に従つて極刑SSS級の名誉を与えてやる。ついでに酒の神の座を取り上げてやる。ついでにペニアもだ。”

「……………」

「あ、コイツ立ったまま気絶しているぞ……」

「あたしは関係ないじゃないか！むしろ被害神の方だよ！理不尽すぎるよ！」

” イシユタルウウウ！貴様は許さん！絶対に許さん！私の義孫を魅了しようとしたな！しかも傷つけたな！貴様のご自慢の美とやらの目をくり抜き、皮をはぎ燃やしてや

る！美の神としてでなく醜の神としてやろう！覚えておけ！

「な、な、な……あいつは魅了されなかつたじゃないか！ひどい目にあつたのはこつちだ！ふざけんなあああ……上等だ！バビロニアの神々に招集かけて戦争だ！」

「いや、協力しないから。だって、ヘラが怖すぎるもん。」

「なつ……！」

” エレボス。わかっているな？ 貴様の極めて重い罪を。同郷の古き神といえども容赦はせん。私の娘を騙し悪という汚泥に塗れさせた上に、私の可愛くて愛しい義孫を泣かせ一人にさせてくれたな？ 絶対に許さん！ 貴様の声があの子に似ているようだが、喉そのものを潰し声を出させないようにしてやる！ 覚えておけ！ この中でお前は私が全身全霊をかけてでも苦しませて殺してやる！”

「あれ？ エレボスはどうしたんだ？」

「奥さんのニクスにめちやくちや絞られているぞ。」

「何で？」

「エレボスとニクス、【白兔の脚】にメッチャハマってさ。半年前からずっと覗き見してたつてよ。」

「あ……。」

「それで気になって2柱で神力を使って【白兔の脚】の過去を見たら、エレボスのやつが

誘った【静寂】と血が繋がった実の甥と知ったニクスのやつがガチブチキレてさ。エレボスに石抱きさせながら、説教中ってさ。」

「その時のエレボス、顔面蒼白の上涙目でウケる。『あの時言った言葉が真実となるなんて…』と。」

「コレ、見に行かせようぜ。」

「とかイケロス、息してる?」

「息しているけど、目が完全に死んでるぜ。」

「ナニしたんだよ…(ガクガクブルブル)。」

## 第313回 義祖母、驚愕。

これらの石柱がここにあると邪魔だな…。

かと言って、ダンジョンに放置するのも良くない。

仕方がない、ここは借りを返してもらおう。

「おい、ガネーシャ。」

「(ひいつ!) はっ! 何でしょうか!」

「この石柱をお前のところに置いといてくれ。」

「え…、でも…。」

「私の記憶が正しければ、私のファミリアはお前のファミリアに多くの貸しがあったな? 今ここで、耳を揃えて返してもらおうか? もし、踏み倒すなら…」

「わかりました! 喜んで管理させていただきます!」

うむ。

さて…私の義孫に対して色々してくれたな?

私達の後釜をろくにも継げなかった無乳め。

「…さて、ロキ。覚悟はできているだろうな?」

「ひいっ！」

「あー、へら。ロキんとこはオラリオ連合の1つだよ？」

「何だと？ 神の鏡ではそんなことを言っていなかったぞ？」

「あの後にそうなったんだよ。」

「ちっ…命拾いしたな。無乳め。私の義孫のためにキビキビと働けよ？」

「た、助かったわ…ドチビ。」

何が助かった、だ。

へステイアを散々と馬鹿にしていたやつが、ここで手の平を返すとは信用ならん奴め。

私が見張っておくからな？

「さて…へら。うちのホームへ案内するよ。」

「うむ、頼む。」

「へステイア、私は宿を取ったら数日後にそちらへ訪ねるが、いいだろうか？」

「もちろんだよ！ 歓迎するよ、積もる話も多くあるからね！」

「ああ、後でな。行くぞ、レトウーサ、ランテ。」

「はいー！」

………へ居付くつもりか。



……あのアルテミスがあの子に恋するとはな。

駄目とは言えないが……複雑だ。

『ヘステイア様、お待ちを。』

『え？メイくん、どうしたんだい？』

『坊ちやまが丁度戻られます。天の柱を見て焦って駆けつけています。』

『あ……。』

『計画を早めます。神ヘラとアルフィアさんとクソバカ主神と共にクノツソスへ向かって下さい。こちらにも愚者とアミッドさんを連れていきます。』

『わかったよ！』

さつきから気になるな？

誰と話しているのだ？

「あー、その前にヘラ、アルフィアくん。クノツソスへ寄っていくよ。」

「……何故だ？」

「(いよいよ、その時が来たな) おい、ヘラ。いいから従え。」

「相変わらず、不遜な奴だ。」

「ゼウスは……ヘラ、君が運ぶのかい？」

「当たり前だ。私の夫だからな。」

「そ、そうかい（引きずらなくてもいいのに…）」

（痛い痛い痛い！ハゲるんじやああああ！）

これも愛の形だ。

……ヘスティアが我らをたばかると思わないが、何を考えているのだ？

オラリオの端まで歩いたところ、悪趣味な門に着いた。

「よし、ここだよ。」

「ここがクノツソス…。私達でも見破れなかった人口迷宮か。」

ウラノスの眷属、ダイダロスが造った人口迷宮か。

ウラノスめ、眷属の管理をきちんとして。

どいつもこいつも怠惰なやつめ。

む…。セバスか。

本当に解放されているな。

セバスだけでも手に余るのに、【最強侍従】まで解放され手を組まれたら我々でも勝てるかわからんのだぞ？

「ようこそ、お越し下さいました。お久しぶりです、ヘラ様。」

「セバス、久しぶりだな。」

「ベルはどこだ？」

「アルフィアお嬢様、もうすぐこちらへ参ります。準備は整っています。」

「準備？何のことだ？」

「へステイアが考えていたことと関係あるのか？」

「へら様、その荷物が私が持ちましよう。：お久しぶりですな、クソエロ爺。」

「（セ、セバスうう！何故解放されとるんじやああああ！）」

「黙れ、よくも坊ちやまに深い心の傷を負わせたな？」

「セバス、抑えろ。：その償いは妻である私が背負おう。」

「わかりました。」

あの子が負った傷は、私が埋めなければならん。

あの子を一人にさせたのは私が正気に返らなかつたのが悪いのだ。

---

……幾度か見たあのシルエット。間違いないな。

こいつらが手を組んだ時点で終わってたな。

しかも誰にも気づかれず、にだ。

「お久しぶりです。神へら。」

「ふん、久しぶりだな。【最強侍従】。」

「はい。セバス、クソバカ主神はその簀巻きですか？」

「(メ、メイ!?!お主までも解放されとるのか!?!ベルううう!二人も解放せずともよかったではないかああ!?)」

「黙れ、ゼウス。殺したくて殺したくてたまりません。メイ、代わつてくれませんか?」  
「触るのも嫌です。そこへ投げつけてください。」

「承知しました。」

ドドン!

「(ぐえっ!?)」

「…私達をここへ集めて何をするのだ?」

こやつらが私達を始末するとは思えん。

ヘステイアもおることだしな。

「ヘラ様、何故アルフィアお嬢様が生きておられるのかを、知りたくありませんか?」

「ゼウス、どうしてザル坊の恩恵が復活して再接続されたのかを、知りたいでしょう?」

「なっ!ザルドまでもだど!?!」

「(やはり、気のせいではなかったのか!アルフィアも死んだと聞いてたのじゃが…何故そこにピンピンと生きておるんじや!?!)」

馬鹿な!

ザルドはベヒーモス討伐でベヒーモスの猛毒を体内で蝕まれ、余命いくばくも無かったのだぞ！

復活だ?! アルフィアだけではなかったのか！

一体、何があつたのだ!?

「へラ様、アルフィアお嬢様はまだ24歳でございます。」

「は? そんなはずはないだろう、あの時はまだ17だから今は…おい、やめろ。私の首に手刀をいれるのは。」

「へラ、その先を言うと言首をはねる。セバスの言う通り私はまだ24歳だ。」

「……嘘は言つてない。どういふことだ!?!」

「もうすぐ分かります。アルフィアお嬢様、へラ様に死なれては困りますので首から手刀を離してくださいませ。」

「こいつが余計なことを言いそうだからだ。」

「アルフィアさん、いいのですか?」

「………わかった。」

…何だと?

一体何が起こるのだ?

あの子が来るのとどう関係があるのだ?

「えつと…こつちに？」

「ああ、そうだ。ベル・クラネル。」

「あ、はい。ところで、先程の天の柱は何でしょうか？」

「…ベルさん、知らないほうがいいこともあります。」

「そうだな。知らないほうがいい。」

「お前は知らんでもよい。」

「気になるんですけど!? 一体何が起こっているのですか!？」



「あちらから聞こえるその声は…あの子か（とうとう…会える）。」

「はい、メーテリアお嬢様とあのクソザコサポーターの間に生まれた方でございます。」

「お前たちが解放されているのは、そういうことなのだな…。」

「はい。」

姿が見えた…。

…ああ、やはりメーテリアによく似ている。

メーテリア…お前はやはり死ぬべきではなかったのだ。

「え？また？あ！お義母さああああん!？」

「な！この穴は！まさか!？」

「(馬鹿な！時空の穴じゃと!?)」

「…うまくいってくれ。頼む…ベル。」

その穴は…クロノスの奴が開いた時空の穴そのものだ！

何故、今ここに開けるのだ!?

「愚者!」

「わかった。全力を尽くそう。」

【未踏の領域よ、禁忌の壁よ。今日この日、我が身は天の法典に背く。ピオスの蛇杖、サ  
ルスの杯。治癒の権能をもつても届かざる汝の声よ、どうか待っていてほしい。王  
の審判、断罪の雷霆。神の摂理に逆らい焼きつくされるというのなら、自ら冥府へと赴  
こう。】

な!?

お前は…ウラノスのところの…!

何をやっている!?

一体、何が起こっているのだ!?

第314回 白兔、発動VI / 執事長、介抱。

「うわあああああ！また、発動した!？」

セバスううう！メイいいい！

事前に言つてよおおおお！

『メーテリアを棺桶から取り出し、代わりのものを入れよ』

メ、メーテリア？

お義母さんがいつも言つてた…僕の本当のお母さん？

え？い、今がその時!?

いきなりすぎる！

心の準備させてよおおおお！

ドーーーーー

「(ト)は…、小屋?」

あそこにぼつんとあるのは…棺桶？

…本当のお母さんが眠っている…棺桶。

スー…ゴトン。



「この女の人…僕の本当のお母さん…。やっと…会えた。うううっ…。」  
はっ！そうしちやいられない！

早く取り出さないと…！

よいしょつと…うわっ軽い…。

…どこか懐かしい感じがする。

え、えーと…代わりとなるもの…。

あっ！女神様の木像がある！

うん…丁度同じ重さ。…ごめんなさい、女神様。

ゴトン…スー…バタン。

よし！本当のお母さんを担いで…

『ミツシヨンコンプリート！』

やった！



とうとう、この時が来ました。

坊ちやまのお母様…メーテリアお嬢様が復活なさいます。

「おい！どういふことだ!?何故、時空の穴が開くのだ!?!」

「落ち着きなよ、ヘラ。」

「五月蠅い、黙れ。」

「(馬鹿な…あり得ん。天界でもない上クロノスもおらんに、何故開くのだ!?)」

へラ様も、ゼウスも取り乱しているようですね。

あれほど取り乱しするのは初めてですね。

仕方がありません、目の前にしているのはそれほどあり得ない光景なのですから。

「目の前にすると驚くな…。」

「時空の穴を呼び出すとは規格外じゃぞ…。」

神ミアハと神ディアアンケヒトは初見ですね。

「セバス・メイ! 何故! あの時、あの子を救わなかったのだ! 時空の穴に飲まれたら、最

後だ! 戻ってこれないんだぞ!」

「大丈夫でございます。」

「落ち着いてくださいませ。」

「貴様ら、何故そう落ち着いているのだ! …何故頭上を見上げている? ……なっ! また

時空の穴が開いただど!」

「(!? どうなっておるんじゃああああ!?)」

後は…愚者と坊ちやまの運次第ですね。

お願いします…!

ドドーーーーーン！

「!?…大丈夫…か? なっ…!?…!?…ど、どうしてメーテリアが…!?」

「(何じゃと!? メーテリアは儂らが看取って火葬までしたはずじゃぞ!?)」

「愚者さん! お願います!」

(ああ! もちろんだ!)

【開け戒門、冥界の河を越えて。聞き入れよ、冥王よ。狂おしきこの冀求を。止まらぬ涙、散る慟哭。代償は既に支払った。光の道よ。定められた過去を生贄に、愚かな願望を照らしてほしい。嗚呼、私は振り返らない】

【ディア・オルフェウス】

「うまくいって! お願い!」

「頼む…。」

む…! これは。

「…! うまくいきましたよ。坊ちやま。」

「本当!?!」

「何だと? は?…何で恩恵が…? これは…メ、メーテリアの恩恵が、再接続…した!?! ありえん! ありえないはずだ!」

「(な、何じゃとおおおおお!?)」

成功できましたな。

さすがのヘラ様もこれには驚くでしょうな。

ですが、最後まで気は抜けません。

まだ死から逃れたわけではありませんからな。

「う…うう。」

「アミッド嬢！例の特効薬を！」

特効薬を作って正解でしたな。

不謹慎ですが、エイナ嬢に感謝しなければなりませんな。

「はい！こちらです！私の魔法は必要でしょうか？」

「お待ち下さいませ。…メーテリアお嬢様、口を開けてくださいませ。」

「…セ…バス？」

久々に聞きますな…。

「はい、セバスです。メーテリアお嬢様、あーん、でございます。」

「あ…ん。ムグツ…ゴクゴクゴク…」

「なっ！セバス！貴様、何を飲ませているのだ！」

「へら、黙れ。見ればわかる。」

取り乱すのも仕方がありません。

メーテリアお嬢様が時を越えて来ただけでなく、生き返っているのですから。

「…あら？体がかなり楽になったわ…。セバス？ここは…天界？」

「なっ!!？」

「メーテリア…。」

「メーテリアお嬢様、お久しぶりでございます。ここはまだ現世です。ただし、メーテリアお嬢様が死なれてから14年後ですが。」

「14年後？ええと…わからないわ。あら？姉さん？…義母さん？」

「!!メ、メーテリア！」

「ば、馬鹿な…。私は、夢でも…見ているのか？」

「(あ、ありえん…。だが、嘘は言っておらん…。)」

そう思うのも仕方ありません。

私でも…アルフィアお嬢様が時を越えてきた時でもフリーズしたくらいですから。

そして、ずっと寝たきりだったメーテリアお嬢様が少し元気になられていますから、夢と思われるのも当然です。

ですが、これは夢ではありません。

坊ちやまが…坊ちやまの想いが手繰り寄せた奇跡であり、現実なのです。

「きゃっ、姉さん痛いわ…：んー、温かいわね。まだ生きているのよね？…私達。」

「ああー！ああー！ああー！」

「アルフィアお嬢様がああ泣くのは初めて見ました。仕方がありません。」

あれほど愛していた妹、メーテリアお嬢様がこうして復活なさっているのですからな。

「もう、姉さんたら…そんなに泣いて…。落ち着いてよ。ああ、そうだ。義母さん？」

「…メーテリアなのだな？本当に、あのポンコツのメーテリアなのだな？」

ヘラ様…ここでポンコツと言わないでくださいませ。

メーテリアお嬢様はそれを大層気になされていますから。

「もう！お義母さんたら！ポンコツと言わないでよ！でね義母さん…、あの子を、むぐつ！」

「……あああ…うあああああああ…」

「(馬鹿な…こんなことが起こるとは…。はっ！ザルドの奴の恩恵がいきなり復活し、再接続したのは…これか！)」

…メーテリアお嬢様は坊ちやまをヘラ様へ託すつもりでしたでしょうな。

ですが、ヘラ様はあの娘たち…「女帝」たちを失ってから自失していましたからね。

止むを得ず、クソエ口爺…ゼウスへ預けるしかなかったでしょう。

ヘラ様のあのような姿、初めて見ます。

そして、ゼウス……。ザルド殿が復活したことと先程の現象と結びつき気づかれたよう  
ですな。

…再びお目にかかれて嬉しく思います。

坊ちやま……、ありがとうございます！

## 第315回 白兔、号泣Ⅱ

目の前に…アルフィアお義母さんが、本当のお母さん…メーテリアさんに抱きついて号泣している。

アルフィアお義母さんの泣き顔、初めて見る…。

キツそうな女神様…も泣いて抱きついてる。

誰…？

そんなことより…

…どう声をかけたらいんだろう…。

…どう話したらいいんだろう？

「もう、どうしたのよ…二人とも。…あら、貴方は…。」

そう思っていたら、メーテリアさんと目が合った。

(ビクッ)

その時、僕はこの人が本当のお母さんと何故か理解できた。

えっと…えっと…。

「!!……………まさか……………まさか…べ…ルなの？」



「!!」

「(一目でベルくんと…。さすが母親だね。)」

「……………はい。」

僕だと…わかってくれた。

本当に…お母さんなんだ。

「!!…14年後…、そんな…そんなことって…。」

「……………は、初めまして…いえ、えぐっ…お、おひしやし…」

声が…うまく出せない。

僕がこう育ったことをお母さんに見せたいのに…。

「!?姉さん!お義母さん!どいて!邪魔よ!」

「あ、ああ。」「ぐべっ!」

「(うわあ…あのヘラとアルフィアくんを邪魔者扱いに…。メーテリアくん…凄いや。)」

「え?うわっ…!」

わぶっ!え?だ、抱かれている…。

あ…先程でも思ってたけど…懐かしい。

「ああ……間違いない。この温かみ…この匂い…。私の子…こんなに大きくなって…。」

もう……駄目だ。

カッコつけようとして、涙をこらえていたけど…無理。

「うっ…うっ…。」

「ごめんね…ベル。貴方を独りにさせた私を…許して。」

「えぐっ…えぐっ…。」

「ごめんね…ごめんね…ベル。」

もう限界…だ。

「うああああああああん！」

「ああああああああん！」

そして僕とお母さんは、14年の時を経てお互い泣いた。



「(半年前まで僕も一緒にいたのがのう…ぐへっ!)」

「黙れ、ゼウス。」

「そもそも貴様が元凶だろうが。」

「ちよ…ミアハ…ディアンケヒトも落ち着きなよ。気持ちは分かるけどさ。」

「愚者さん…大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。彼らを見て、疲れが吹き飛んだよ。この魔法を習得してよかったと改めて思ったよ。」

「ええ…。ベルさん、よかったですね…。」

「アルフィア…お前もか？」

「いいや、私は死ぬ直前に…7年前からこの時代へ来たのだ。あの子の…開いた時空の穴によってな。」

「…そうか、すまないな、私が早く正気に返っていたら…。」

「…仕方がない。あいつらを一齐に失ったらお前がそうなるのは必然だ。…だが、15年は長すぎるぞ？」

「…すまない。アルフィア。…エレボスは天界へ帰ったら殺し、消滅させてやるからな。」

「……………」



お母さんは僕に抱きついたまま泣き疲れて、寝てしまった。

「スー…スー…」

「ぐすつ…。よかった…本当によかった…。愚者さん、本当にありがとうございます。」

「礼を言うのはこちらだよ。ベル・クラネル（この魔法は本当に意味があった。君がいなければ絶対にその価値を見いだせなかっただろう）。」

いいえ、ウィーネだけでなく…お母さんを生き返らせたのは愚者さんです。

僕はその恩を絶対に、絶対に忘れません！

「ふむ、薬のせいもありますが、泣き疲れたようですね。」

「ベル、メーテリアは私が運ぼう。」

え？む、息子子である僕が運んだほうがいいんじゃない？

そう言おうと思つたら…。

「あ…僕が「おい、へら。ベルへの挨拶がまだだろうが。」え？」

「あ、ああ。」

「へ、へら様!？」

ヘルメス様が言つてた…最強のファミリアの一角〔へら・ファミリア〕の主神!？」

そして…アルフィアお義母さんとお母さんの主神。

あわわ…どう言えればいいんだろう。

「初めまして…だな、ベル。お前の…義祖母だ。」

「え？ええええええ!？お、お祖母ちゃん!？」

ええええええっ!？」

「うむ…。義孫からお祖母ちゃんと呼ばれるのは新鮮だな…。こう…心に響くな、悪くない、うむ。」

「(あ、孫馬鹿が今生まれた気がする。)」

「え？あれ？ヘラ様？……お、お祖母ちゃんって、神様だったの!？」  
待つて……ということは。

お、お祖父ちゃんも……？

「……まさか、知らなかったのか？お前を育てた人の妻だ。当然、夫も神だ。」

「ええええええええっ!」

「そろそろ、明かす時ですな。」

「ええ、そうですね。」

え？

セ、セバス？メイ？

「坊ちやま、今の今まで黙ってて申し訳ありません。」

「坊ちやまを育てたお祖父様は、『ゼウス・ファミリア』ですが団員ではありません。」

「え？……まさか？男ならハーレムを指せとか、女はいいぞとか言っていたり、村で女の人のお尻を触りまくっていたり、いつも女風呂を覗いていたお祖父ちゃんが……最強の『ゼウス・ファミリア』主神のゼウス様とか？ははは、あり得ないよね？」

そんなことをするわけないよね？

最強の『ゼウス・ファミリア』の主神ゼウス様なわけないよね？

ザルド叔父さんも、カッコいいし！

「（ベルううう！こ奴らの前でそれを言っではいかんのじゃああああ！）」

「……………（怒）。」

あれ？お祖父ちゃん悲痛な声が聞こえた気がする。

「坊ちやま、残念ですが事実でございます。坊ちやまを育てたお祖父様は、かつて最強を誇った【ゼウス・ファミリア】の主神ゼウスでございます。」

「えええええええっ！」

嘘でしょおおおお！？

僕の…ゼウス様のイメージが…完全に崩れた。

ミアハ様のように清廉潔白で、タケミカツチ様のように男気があって、ヘファイストス様のように頑固一徹で、神様のように慈悲深く、今まで会った神様より威厳がある方と思ったのに…。

ミアハ様とティアンケヒト様、神様に希望をすぎるように見ると…。

「ベル…事実だ。」

「事実を受け入れろ。納得できない気持ちはわかるがな。」

「残念だけど…ベルくん。キミを育てたお祖父さんはゼウスだよ（チラツ）。」

嘘だ……。

お祖父ちゃんの馬鹿あああああ！

僕の畏敬を返してよおおおおお！

## 第316回 義祖母、対面。

「この子に…メーテリアの愛息子につ！」

「(そうじゃ！儂偉いんじゃぞー！ぐべええつ！)」

『この狒々爺・ベルへ教育悪いことをよくも散々と吹き込んだな！許さん！』

『アルフィア、止めなさい。貴方…後でお話があります。ええ、じっくりとたつぷりと。』

「(ひいひいひいっ！)」

ふふふ、この子にどういふことを吹き込んだのかを全部聞かないとな。

…セバスに聞けばわかるだろう。

私の…「ヘラ・ファミリア」の系譜を持つなら記憶を全部読み取れるはずだ。

そう、くまなく。

いかん。この子と話をしなければな。

一語一句聞き逃がせん。

「は、初めまして。お祖母ちゃん。ベル・クラネルと言います！」

ぐはっ!?

曇りなき目でそれを言われると、かなり心に突き刺さるな…。



あの人に長年育てられたのに、純真で礼儀正しすぎる…。

おのれ！アポロン、イシユタル、イケロスなどの邪神共め！

この子の純真な気持ちをよくも弄んだな！

イシユタルとイケロスは送還されてしまったが…アポロンはじつくりとやってやる

！

エレボスめ！この子をよくも一人にさせてくれたな！

絶対に絶対に滅ぼしてやる！

塵一つも残さん！

いかんいかん。

この子から怯えた目で見られるのは御免被りたい。

「すまないね、私が…もつと早く正気に返っていたら…ベルを迎えにいつていたのに。」

「(うわ、ヘラじゃない。何だよ、その口調は。)」

『…誰だ？あいつは。』

『それは農の台詞じゃ…。』

ヘステイア、その目で見られるのはやめてもらいたい。

この子が不審に思うだろうが。

ミアハ、ディアンケヒトもだ。

『信じられん…あれは本当に神ヘラなのか?』

『私は初めてお会いするのですが…、本来はどのような女神なのでしょうか?』

『アミッド…あれは本来のヘラではない。』

『もうベルに対して溺愛確定ではないか…。早すぎるぞ。』

何をコソコソと話している?

この子の声がかうまく聞き取れんではないか。

「お祖母ちゃん…気にしないで。僕はお祖父ちゃんがいたのでそんなに…寂しくは…うん。やはり寂しかった。けど、こうしてお祖母ちゃんにアルフィアお義母さんに、僕の本当のお母さんにメイ、セバスに会えて…よかった。」

…：…本当に、うちの夫によって14年間も育てられたのか?

嘘は言っていないから、心からの声なのだろう。

先程の言葉を何かに取り込めないだろうか?

もう一度聞きたい…。

「(ベルううう! 儂を忘れておるぞおお!)」

お黙り!

貴方なんか、忘れて当然なのです!

『ゼウスは死んだことになっているから、仕方がないだろう…。』

『ふん！自業自得じゃ！』

「お祖母ちゃん…ごめん、お祖父ちゃんが半年前に死んじやつて…。僕がもつとしつかりしていたら…死なずに済んだかもしれない。ごめんなさい！」

……………いい子すぎる。

……………尊すぎる。

何も、こんな掃き溜めみたいなオラリオに来なくてもよかろうに…。

ああ！過去の私め！

何故さつさと正気に戻らなかったのだ！

はっ！

いかんいかん。愛しい孫との会話に集中しなければ！

「気にしなくてもいいんだよ。あの人はそうなるのが運命だったのよ。」

「(!? 儂、ここに生きとるぞおおお!!?ヘラあああ！ベルううう！)」

『『うわあ…。』』

知りません！

死んだふりしてベルの前から姿を消したのは、貴方じゃないですか。

ここからは私のターンです。

うふふふ。

「あれ？何故だろう？お祖父ちゃんの声が今、聞こえた気がするけど？」

「ふふふ、私達が会うのを天界から見て嬉しいのだろう。見守ってくれているさ。」

「うん…、そうだね！」

「(儂はまだ送還されとらんぞおおお!?)」

「(うわあ…ゼウスが死んだことにしているよ。こんなヘラ、初めて見るよ…。)」

自業自得です。

「こんな可愛い義孫がいるなら、話は別です。」

「ベル…本当にお前はいい子だね。ん？アルフィアお義母さん？こいつはお前のお…アルフィア、私の首に手刀を添えるのはやめる。ベルが怯えるではないか。」

「……ベル。私はお前の何だ？言ってみろ。」

「ア、アルフィアお義母さんです。」

「だそうだ。わかったな？ヘラ。」

「お前…。はあ、すまないね。ベル、この子はどうでもいいことに意地を張るんだ。困った子だね。」

「……誰だ？こいつは。」

『『アルフィアでもそう思うのだな。気のせいではなくてよかった。』』

全く…伯母さんと呼ばれるぐらいで過剰にならなくてもいいのにな。

ベルが怯えているではないか。

だが、メーテリア以外には無関心のアルフィアがここまでベルに対して心を開けてるとは驚いた。

……エレボスの誘いに乗らずこの子のところへ行くべきだったのではないのか？ それ以前にお義母さんだと？

メーテリアにどう呼ぶつもりなのだ？

先程のメーテリアの反応から見て、この子に対して溺愛確定だろう。

……私は知らんぞ。

「い、いえ。お祖母ちゃん……あ、ヘラ様と言ったほうがいいのかな？」

「お祖母ちゃんと言っておくれ。ベルだけの特権だよ？」

「あ、はい！お祖母ちゃん！」

「よしよし。」「えへへへ。」「

ずるいですよ！貴方は。

ベルが赤子の頃からずつと見てきたのを。

『ヘラの皮を被った何かではないのか？』

『ミアハ様……それは神ヘラに対して失礼なのでは？』

『残念だが、アミッド・テアサナーレ。私もそう思うよ……。』





『そうだね……。ところでアルフィアくん、メーテリアくんは大丈夫かな?』

『ああ、大丈夫だ。呼吸も安定しているようだし。しばらくは特効薬を飲ませないとな。』

『僕らも確認したが、かなり収まっておる』

『ああ、特効薬がここまでとはな。もはや死の病は死の病でなくなったな。』

『まずは一安心ですな。』

『あとはベルくんの父親だね!』

『いらん。』

『不要でございます。』

『残念ですが、却下させていただきます。』

『な、何でだい!?!』

『ヘスティア様、困ったあの子はゼウスそのものです。よろしいのですか?〔ヘスティア・ファミリア〕の風紀が完全に乱れますよ?』

『(別にいいのではないかのう。減るもんじゃあるまいぐほおっ!?)』

『あー……理解したよ。』

『なので不要でございます。』

『うん。わかったよ。そうだね……。ベルくんには悪いけど、ボクのファミリアには要らな



『いよね！』  
『はい。』

## 第317回 侍従長、警告。

坊ちやまのお母様が復活なさったのは本当によかったです。

後は…【女帝】とマキシムですね。

今のところ、条件は揃っているようですが段取りを踏まなければなりませんね。タイムミングを見計らなければいけません。

予想どおり神ヘラは「ヘステイア・ファミリア」へ居着くようですね。

アルフィアさん、メーテリアさん、坊ちやま、そしてヘステイア様がおられますから。彼女たち…いえ団員全員へ注意と警告をしておきましょう。

神ヘラとメーテリアさんについてはセバスとアルフィアさんに任せましょう。

付き合いが長いのはセバスですから、扱いには慣れていてでしょう。

リリさんを通して全員招集させました。

「メイ様、全員招集しましたが何かありましたでしょうか？」

「はい、皆様。ご承知の通り神ヘラがオラリオへやってきました。元主神ゼウスもおられます。」

「ゼウスはどこにいるのかしら？みじん斬りにしたいんですけど？」

「待つて下さい、ユーティスさん。私も神ゼウスをメツタ刺しにしたいんです。」

「この人たち、怖い…。」

ユーティスさんもシノスさんも困ったものです。

送還されてはもつたないので、後で嚴重に注意しておきましょう。

「本当にやりやがった…。こんなに早く。」

「ラキアを支配して、オラリオの周辺国を占領するなんてな。あいつら…生きているかな。一応俺の故国だからな。」

そうでしたね。ヴェルフさんの故国でもありましたね。

まあ、大丈夫でしょう。

まずメーテリアさんですね。

「また、坊ちやまのスキルによつて実の母、メーテリアさんが14年前より連れて来られ復活しました。」

「「ええっ!」」

驚くのも無理ありません。

今までの最長記録ですからね。

…よく考えれば、メーテリアさんは17歳で亡くなりその歳で復活したということですね。

坊ちやまと2つしか離れてないのですが、いいのでしょうか？

…本人は喜びますが、坊ちやまとしては複雑でしょうね。

「ほぼ確定ですが、神ヘラはこちらに居着くようです。アルフィアさんもメーテリアさんもおられますから。」

「マジかよ。勘弁してくれ……。あの時のように怯える毎日は二度とはゴメンだぜ。」

「ザルド殿、神ヘラはどのような神なのですか？ フレイヤ様に以前聞きますと「一切合切話したくないわ」と、オツタルに聞くと「……………聞くな。」とのことでしたので（チラツ）。」

「（コクツ）」

「…………一言で語り尽くせないぐらいだ。レベル9だろうが関係なく暴虐を振るう女神だった…。深層でモンスターを数百匹相手にした方がまだマシだ。」

「「そんなに!?!」」

「まあ…そうね。」

「あの時代を生きた人、そして神々しかわかりませんからね…。」

ザル坊の気持ちもわからなくもないですね。

仕方がありません。

特にユーティスさんとシノスさんはご存知ですからね。

ここで皆さんの不安をほぐしてあげたほうがいいですね。

「皆様の不安もごもつともです。ですが、今の神ヘラなら大丈夫でしょう。」

「「は？」」

「おい、メイ。どういう意味だ？」

「今の神ヘラは坊ちやまに対して溺愛しています。多少の罪悪感はあるようですが。」

「え？もう？早くないかしら？」

「私達…大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です。セバスが坊ちやまのスキル等を含めてこれまでのことを説明してくれ  
ます。皆様へ危害が及ばないことはこのメイが保証しましょう。」

「「ほっ…。」」

「ただし、抜け駆けや坊ちやまへ襲うようなことあれば…。」

「「あ、あれば？」」

「かつてオラリオにいた時よりも、さらに最凶最悪になるのは間違いありません。」

「「ひいつ！」」

ええ、坊ちやまへのあの様子を見たら間違いありませんね。

ずっと目を光らせるでしょう。

ただ、セバスが言っていましたね。

ヘステイア様がおられるなら神ヘラが暴走することはない、とのことでした。

どういう意味かわかりませんが。

ただ、これだけは言えますね。

「ヘステティア様、メーテリア様、坊ちやまがおられる限り、神へらはかつての最強最悪女神になることはないでしょう。」

「「ほっ…。」」

ええ、ですがあの神へらのことです。

予想以上の行動に出る可能性が高いですから、油断はできませんね。

「あの…質問です。メーテリア様はどのような御方でしょうか？」

「そうですね。私も指で数えられるくらい数回しか会ってませんが、アルフィアさんが唯一愛した存在であり、才禍の怪物とも称されたアルフィアさんの様な才能は全くないと聞き及んでいます。」

「ああ…アルフィア本人もそう言ってたな。」

「そ、そうなのでございますか？」

ええ、随分と偏っていますからね。

他にもありそうな気がするのは気のせいでしょうか？

クソバカ主神、ザル坊の記憶を見る限りは恐らくこうですね。

「優しい性格をしており、誰からも愛される人物だったらしく、神へらでさえ彼女の病氣

をどうにかする方法を探していたぐらいです。」

「ベル様にそっくりですね！」

「ヘラ様がオラリオであちこち駆け回って薬の原料などを集めていたのは、そういうことだったのですね…。」

ええ、私も驚きました。

あの神ヘラがそこまで必死になって救おうとしていたのが、メーテリアさんなのですから。

また、クソバカ主神もこう言っていましたね。

「又聞きですが、彼女を怒らせてはいけません。神ヘラもアルフィアさんも、【女帝】も死を覚悟するぐらいのことです。」

「ええっ！あのアルフィアが!？」

「嘘でしょ…。天界でも怖いもの知らずのヘラが?」

「さっきの説明とは真逆ではないですか…。」

私も初めて聞いた時は絶句しました。

【女帝】以上の化け物が【ヘラ・ファミリア】にいるということに。

怒らせないように、彼女たちにも言っておきましょう。

「メーテリアさんは大の甘味好きです。彼女の甘味には一切手を出してはなりません。」

逆鱗に触れます。」

「「わかりました!」」

「…そうか。一応、甘味となるものを常備しておこう。俺らの身の安全のためにな。」

「「ザルドさん、ありがとうございます!」」

ザル坊が作っておいてくれるなら、大丈夫でしょう。

万が一、私も手助けした方がいいですね。

そして、これも念押ししておきましょう。

「後は…坊ちやま関連ですね。」

「「え?」」

「メーテリアさんが目覚めてすぐ、坊ちやまを自分の息子と直感で感じたそうです。抱きつかれていた神ヘラとアルフィアさんを押しのけて、です。」

「「うわあ……。」」

「今は、坊ちやまと泣き合って疲れて寝ています。しばらく様子見をお願いしますね。」

「「はい!わかりました!」」

ええ、あの様子では神ヘラ以上に溺愛することは間違いないでしょう。

坊ちやまのこれまでのことやスキルなどを知ったらどうなるのでしょうか?



## 第318回 侍従長、傍聴。

そうそう、坊ちやまの帰郷について報告を聞きましようか。

「ところで、リリさん。坊ちやまの里帰りはいかがでしたでしょうか？」

「はい！報告します。ベル様が第一級冒険者になられていたことに、村の皆様は大変驚かれていました。それに納得されてない方々が多くおられてベル様と戦われました。まあ、当然ですが数秒で叩きのめされて、畏怖されていました。」

「そうでしたか。」

「その後、ベル様とゼウス様が半年前まで住んでいた家へ行きました。ベル様が読んでいた本を全て回収しました。その他にもいくつか持ち帰りました。：メイ様、ザルド様、こちらを。」

「ん？俺らにか？これは…。」

「【ゼウス・ファミアリア】の団旗と、エンプレムの看板ですか。」

やはりありましたか。

坊ちやまの記憶を見る限り、堂々と飾られてましたからね。

「あの爺が持っていたのか…。よくベルに見つからなかったな。」

「いえ…堂々と部屋に飾られていました。ベル様はそれが「ゼウス・ファミリア」とは知らなかったようです。ただ、かつこいいマークとしか思ってたようです。」

「まあ、見た目はそうだな。…あの爺め、ベルには伝えなかったな。」

「いいえ、ザル坊。賢明な判断です。もし、坊ちやまへそれを言うとか好奇心旺盛な坊ちやまです。とことん調べようとするでしょう。そうしますと、黒竜だけでなく「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」特に「アストレア・ファミリア」、そしてオラリオそのものを憎んでいたかもしれない。」

坊ちやまの想いは強力ですが、同時に危険です。

今は純真無垢な方向ですが、もし恨みや憎しみが絡めばそちらへ行っていたかもしれない。ません。

そうなると、神時代で最強最凶最悪の反英雄が産まれた可能性があります。

黒竜より危険な存在になっていたでしょう。

ないと思いますが、あくまでも可能性の問題です。

「…：…そうだな（俺の恩恵が切れたことでヘルメスの野郎から、大抗争について聞いているはずだ。…それを分かっててあえてベルへ言わなかったな。爺にしては賢明な判断だ。）。」

「「……………」」

皆さん、大変複雑な表情をしていますね。

まあ、仕方がありません。

ここ7年を見れば分かるでしょう。

特にシノスさんとユートイスさんは。

おや？リリさんからまだ報告があるようですね。

「ゴホン、他には…村の方たちからリリたちをナンパしていましたが、興味ありませんでしたのでスルーしました。あまりにしつこかったので、レフィ様の魔法を一回見せたら一目散に逃げ出しました。…報告は以上です。道中は何も問題ありませんでした、オラリオで天の柱が昇ったこと以外は。」

「ご苦労様でした。リリさん。元主神ゼウスはこの一番地下の独房に入れています。私が設計したものです。用もなく近寄らないで下さいね？言葉巧みですから簡単に丸め込まれ…孕みますよ？」

「「ひっ！」」

「さすがのあの爺もそこまでは………する。否定できないのがつらいな。」

「坊ちやまに捧げたいなら、一切近寄らないことをおすすすめします。どうしてもなら、私とセバスが同行するついでなら問題ありません。」

「「一切近寄りません！」」

そのくらいでいいでしょう。

おや？

「先程、メーテリアさんが目覚められました。セバスとの話もありますからしばらく部屋に入らないでくださいね。ザル坊、体に良い食事と簡単な茶菓子でも作っておいてください。」

「わかった。」

「皆さんへの連絡は以上です。いつものように過ごしてください。神ヘラについて何かあればセバスと私、またはヘステイア様へ連絡してください。」

「はい！わかりました！」

とりあえず、忠告はしておきました。

後は、神ヘラの動向次第ですね。

とりあえず解散しましたが、シノスさんとユーティスさんが晴れない顔をしていますね。

「私はまだ不安だけど…。みんな、あのヘラの本性を知らないから…」

「同感です、あの神ヘラが大人しくしているでしょうか？」

まあ、気持ちはわかります。

「ところで、ゼウスは殺していいかしら？」

「串刺しにしてもいいですよね？」

クソバカ主神に対して殺意満々ですね。

まあ、坊ちやまにしたことを考えるとそう思うのも無理もありません。ですが、その気持は抑えてもらいたいです。

「シノスさん、ユーティスさん、その殺意は抑えてください。」

「…メイさんが設計したというのはどういうものですか？」

ふむ、やはり気になるようですね。

あのクソバカ主神の行動手段は全て把握しています。

「クソバカ主神の逃亡手段はわかっていますので、それを全て防止しています。」

「ヘラの折檻に耐えたゼウスのことだから、それぐらいは抜け出せるんじゃない？」

「ええ。ですが、さすがのクソバカ主神はそこまでして去勢はしたくないでしょう。」

アソコを中心に拘束していますからね。

クソバカ主神に対してはそこまでしないと、スルリと逃げてしまうからです。

ここ数百年での経験です。

「きよ、去勢ですか…？」

「はい、逃げ出そうとするとアソコが…ブチッと。」

「そうなら安心ね！」

「ええ、逃げられません。逃げ出せたとしてもトラップが何重も仕掛けられています。行けるのは私とセバスだけです。同行したいならいいですよ？」

「んー…機会があつたらお願いしてもいいですか？」

参考にするつもりですか？

それはいいですが。

「興味津々ですね。坊ちやまにはしないで下さいね？せつかくの子種が途絶えますから。」

「ベルの子種っ…！」

「べ、ベルさんの子種…。」

「しますと、他の皆様が激怒なさいますよ？」

「『そんな恐れ多いことはしません！』」

でしょうね。

クソバカ主神はもはや封印同然ですからね。

あとは、神ヘラとメーテリアさんだけですか。

あちらはどうでしょうか？

## 第319回 白兔母、起床。

……心地よいわ。

あの病気特有のだるさもない…。

もうちよつと寝ていたい……。

……？

だるさもない…？

!?

「ベル!？」

「起きたか、メーテリア。」

「む、起きたようだな。」

「おはようございます。メーテリアお嬢様。」

「……は……ど……？」

それより、ベルよ！

さつきまでベルに抱きついていたので！

あれは…夢？

ううん、まだ……あの子のぬくもりと匂いがある。

「義母さん……姉さん……セバス……。ベルはどこ!?」

「落ち着け。ほんの少し前にギルドへ行つたところだ。」

「心配するな、また会えるぞ。」

「大丈夫でございませす。」

ほっ……。え?ギ、ギルド!?

「ここは……オラリオなの!?!」

た、大変!確認しないと!

「姉さん……。ここは……オラリオなの?」

「そうだ。」

ベルが冒険者に!?!と、止めないと!

「駄目よ!駄目!冒険者になつては駄目!」

「……………」

「…………手遅れだ。メーテリア。」

…ナンデスツテ?

どういふこと?

「はっ。」



「ひっ！」

「落ち着いてくださいませ。メーテリアお嬢様。今までのことを説明いたします。」

「……セバス……いつ解放されたの？」

「数週間ほど前でございます。どうぞ、水でございます。」

「ゴクゴクゴク……ふう……少し取り乱したわ。ごめんね。義母さん、姉さん。」

「い、いや（メーテリアの怒りは全く衰えんな、いや前より強くなった気がする）。」

「う、うむ（甘味だけでなく、あの子のことも悪く言えなくなつたな）。」

いけないわ……。

つい、感情的になつてしまつたわ。

ようやく落ち着いたわ。

「ふう……、どうなつているの？」

「それも含めて説明いたします。落ち着いて聞いてくださいませ。」

「ええ、わかつたわ。」

そして、私はベルが14歳になつたことと半年前にお爺ちゃん……神ゼウスによつて育児放棄され、オラリオへ来たことを知つた。

……許せない。

よくも私のベルを……。

託したのに…。

「……ふふふ。お爺ちゃんがベルを育児放棄したですって？」

「ひっ！」

「セバス…お爺ちゃんはどこかしら？おハナシしたいけど？ねえ？」

「メーテリアお嬢様。それについてはヘラ様へお任せくださいませ。」

「……そうね。義母さんはプロだもの。お願いね？」

「あ、ああ。任せておけ。」

義母さんは最強最悪の女神と言われたぐらいだから。

あのお爺ちゃんを折檻できるぐらいだから。

生半可じゃ許さないわよ？

半年前…。なら、まだ間に合うわ。

ベルは冒険者になつたら駄目！

あんな危険な職業に就かせてたまるものですか！

「半年前…ということはベルはまだレベル1ね。なら、まだ取り返しはできるわ！ダン

ジョンに潜らせずに私と一緒に住まないと！ふふふ。」

ギルド職員…いえ、駄目だわ。

あの豚ちゃんの狗になつたベルは見たくないわ。

となると…酒場…いえ、駄目だわ。

私の可愛いベルが喰われるわ。

…花屋あたりかしら？

…無難ね。

うー…。

他にないかしら？

「……メーテリア。その…怒るなよ？」

「え？」

「今のベルは…レベル6だ。」

は？ナンデスツテ？

ダン!!

「ひっ！」

「どういうこと…？ たったの半年でレベル6？ あり得ないわ！ 姉さんは何してたのよ！  
あの子の面倒をお願いしていたのに！」

「何だと？ アルフィア…お前、ベルの面倒を頼まれていたのか？」

「ま、待て！ わ、私は頼まれていないぞ！ あの狒々爺に頼んだらう！」

「何言ってるのよ？ 言わなくても姉さんはベルの面倒を見てくださいと信じていたもの。」

「い、言わなきやわからんだろう!」

言わなくてもわかるでしょ!

私達は双子だから言わなくてもわかって当たり前だ、と言ったのは姉さんじゃない

!

あら…今はあの時から14年後よね?

「…何で生きているの?姉さん?」

「今ごろ気づいたのか…。」

「それはまあ、後で説明してくれるんでしょう?」

「はい、メーテリアお嬢様。なので最後まで聞いてくれませんか?」

「わかったわ…。」

ベルのこの半年間をよく聞かないとね。

まあ、たったの半年だから大したことないでしょうね。

……何でレベル6になれるの?

オラリオへ来る前からレベル5はあったのかしら?

『おい、アルフィア。7年前のことを知ったらどうするのだ?』

『あつ…。』

『私は知らんぞ。間違いなく…キレるぞ?』

『……か、覚悟はできている（ザルドを巻き込もう）。』

『震えているぞ、お前。…まあ気持ちはわかるが、まだ冒頭だぞ…。』

あら？ 姉さんが珍しく震えているわ？

病気が発現したのかしら？

「まず、坊ちやまは神ゼウスから育児放棄されたたの一人でオラリオへやってきました。」

「一人…？（チラツ）」（ビクツ！）

「アルフィアお嬢様についてはまた説明しますので、今は抑えてくださいませ。」

「わかったわ。」『ホツ…。』

何で、姉さんが一緒にいなかったのかしら？

何かありそうね…ゆっくりとじっくりと聞かないと。

「そして、坊ちやまは神ヘステイアの眷属となり成長を促すスキルが発現しました。」

「神ヘステイア？ 義母さんが言っていた、ヘステイア様のこと？」

「ああ、そうだ。私が天界で唯一敬愛するやつだ。」

「そう…。それでも、会ってみないとわからないわね。ベルの母として。」

「大丈夫だ、メーテリア。私から見ても、慈愛がありベルを大事にしている女神だ。」

「姉さんがそういうのなら…。」

「メーテリアお嬢様、私から見ても善神中の善神でございます。」

「わかったわ。でも、やはり私が直接会って話したいの。」

神ヘステイアが、義母さんと姉さんとセバスが太鼓判を押すぐらいの女神？

どんな女神かしら？気になるわ…。

ベルは襲われてないかしら？

## 第320回 白兔母、口喧嘩。

それにスキルですって？

「成長を促すスキル…それが、たった半年でレベル6に至ったものなの？」

「もちろん、それだけではありません。ランクアップするには偉業が必要なのはご存知と思います。」

「ええ…：知っているわ。え？その偉業も5回も積んできたの…？ああ…私のベルが…。何てことなの…。」

目眩がするわ…。

…先程の話のショックで病がぶり返したみたい。

…気怠いわね。

思ったより治りが早いけど少々無理をしすぎたかしら？

元気になったと思いい、はしゃいだせいね。

「無理はするな。お前はまだ完全に病気が治っていないんだ。ベルのためを思うなら先に治すことを考えなさい。」

「わかったわ…：義母さん。」

「さて、話の続きですな。この半年間、多くの出会いや多くの神の試練や多くの戦いもあり、坊ちやまはレベル6に至りました。詳しいことは、こちらの坊ちやまの自伝にございます。」

は？自伝ですって？

『おいセバスの奴、ほとんど省いたぞ。』

『あれを全部説明すると、メーテリアは間違いなく卒倒するぞ。』

『……何回卒倒するだろうな。』

1, 2, 3……10巻もあるじゃない！

しかも分厚い……。

「あの子はこの半年で何をやったの!？」

「一言では語り尽くせないほどですな。」

「ああ……そうだ。濃すぎるほどな。ハア……。」

義母さんと姉さんは知っているみたいね。

この二人がため息つくぐらいなんて……あの子は何をやったの!？」

……そもそも、お爺ちゃんがベルを育児放棄しなきゃよかったのよ!

「……義母さん。」

「な、何だ?」



「お爺ちゃんど……徹底的にオハナシしてね？」

「あ、ああ。もちろんだ。私も思うところあるからな。」

「……よろしくね。」

ええ、本当に許せない！

グ……。

「……何かお腹空いてきたわ。久々だわ、この感覚。」

「そろそろ、夕食ですからな。お持ちしましょう。メーテリアお嬢様はしばらく寝てくださいませ。坊ちやまもお見舞いに来られます。」

「……前よりは歩けるけど、ベルが見舞いに来るなら大人しくしているわ。そういえば、あの時飲んだのは何なの？」

(今頃か……)

「はい、死の病の特効薬でございます。数週間前にできたものでございます。」

「そう、私は14年間も眠っていたのね……。」

「「ん？」」「「え？」」

え？

私は14年間眠っていたと違うの？

どういうこと？この14年間で何が起こったの？

「メーテリアお嬢様、それも含めて説明いたします。まず、そちらの坊ちやまの自伝を完読してからでございませう。」

「わかったわ？ 読書は得意だから、このぐらいは…2日あれば読めるわね！」

10巻もあるなら何度でも読めるわ。

ふふふ。ベルの自伝…非常に気になるわ。

今晚でも夜通し読みましょう。

『いいのか？ アルフィア、0巻があるぞ。』

『…今のうちに抜き取ろう。非常に不味い。』

『お前…。遅かれ早かれバレるぞ…。』

あら？ 1冊減っているような気が…。

気のせいかしら？

コンコン

「どうぞ、坊ちやま。」

「お、お母さん。だ、大丈夫？」

「ベル！ さあさあ！ こつちへおいで！」

「あ、うん。」

ふふふ、可愛いわ。

たくましくなっても、私の息子…。

これでレベル6？

信じられないけど、みんなが言うなら事実なのよね…。

よく…(こ)こまで強く…。

「ふふふ、こんなに大きく…強くなって…。うっ…うっ…。」

「お母さん…。」

「ほら、メーテリア。ハンカチだ。」

「ありがとう、姉さん。ごめんね、泣き虫で。」

「その辺りは坊ちやまとそっくりですな。」

「セバス、違うぞ。全部だ。」

「もう！アルフィアお義母さんったら！」

は？

今の…聞き逃がせない言葉があったわ。

もう一回聞かないと。

「…待って。ベル、今何て言ったの？」

『やはり聞いてきたな。今のうちに部屋の隅へ退避しよう。』

『そうですな。』

「え？…あの、お母さん…ここ、怖いんだけど？」

「ベル、私はベルの何？」

「お、お母さんです。」

「じゃあ、姉さんは？」

「ア、アルフィアお義母さんです。」

「何で？」

「そ、それは（チラツ）…アルフィアお義母さんがそう言えと言ったからです。」

……は？

「…姉さん、どういうこと？」

「メーテリア、私達は双子だろう？だからだ。」

『無理がありすぎるだろう…。』

『無理なこじつけですな。』

そういうえば…私が妊娠した時、姉さんはシヨック受けていたわね。

あの時は私が妊娠したのがシヨックだと思ったけど、その時の姉さんの言葉を思い出したわ。

『私が…16歳の私が…もう…伯母さん…だと？』

そう、確かにそう言ってたわ。

確認してみましょう。

「ええ、そうね。私達は双子ね。ベル、覚えておきなさい。姉さんは伯母さんと呼ばなきやいけないのよ?」

「え（あ、やつぱり。…でも。）」

「おい、メーテリア。いくらお前でもそれは許さんぞ!」

「事実じゃない!」

やつぱり! そうなのね!

自分が伯母さんと呼ばれるのが嫌なだけじゃない!

そのぐらいは甘んじて受け入れてよ!

「そもそも、何故あの雑魚に体を許したのだ! それほど好きじゃなかったはずだろう!」

「ええっ!」

「当然よ! 子種をもらうためよ!」

「えええっ!（知りたくなかった…そんな事実）」

何で、あんな性欲化け物に惚れなきやいけないのよ!

『久々に見ますな。姉妹喧嘩を。』

『あの子、シヨックを受けているぞ。』

『坊ちやまは、ロマンチストです。熱愛の上で産まれたと信じていましたからな、クソエ

口爺によつて。』

『あの人は本当にもう……。』

## 第321回 静寂、感動。

何…だと。

子種だけを欲しがるために、あんな雑魚に体を許したのか!?  
ベルのような可愛い子が産まれたからよかったようなもの…。

納得できん!

「もう一度聞く…。何故、あの雑魚に体を許したのだ!」

「…私も姉さんも病で余命いくばくもなかった。姉さんはレベル7で多少は生き延びれる。けど、私は姉さんほどは強くない。病のせいで姉さんより早く死ぬ。それはわかっていたはずよね?」

「…ああ…。」

「私はそのまま死ねることが怖かった。だから…残したかった。自分の生きた証を…ベルを。」

「メーテリア…。」

「お母さん…。」

…そこまで思い詰めていたのか。

当時、ベヒーモスやリヴァイアサン討伐で疲弊していたから、そこまでの余裕はなかった。

もつと話をしておくべきだったな。

「…ごめんね、ベル。私は良い母じゃないの…。貴方を一人にさせただけでなく…私のエゴによって…。」

「お母さん！違う！僕は、お母さんから産まれてよかったと思っっている！」

「！」

「だって…産まれなかったら…、神様やみんなに、アルフィアお義母さんやお祖母ちゃん、セバスとメイに会うことができなかつた…。だから…自分を責めないで下さい。」

ベル…。

本当にいい子に育ってくれた…。

まあ、当然メーテリアはそれを聞いたら…。

「ベル！」

「わぷっ！」

ほらな。抱きつくだろう。

「…ありがとう、ベル。本当にいい子に育ってくれて。…でも、それはそれ。これはこれ。」



「え」

いい形で終わったのに…、まだ蒸し返すのか。

容赦はせんぞ。

「ということで、姉さんは伯母さんと呼びなさい。さあ、早く。」

「メーテリアー！」

「何よ！当たり前のことじゃない！」

「ま、待って！僕は…二人のお母さんを持って嬉しいんだ。」

「！！」

…二人の、お母さんだと？

「僕は…半年前お祖父ちゃんを…ゼウス様を失った時に…ううん。それよりもっと前からずつと寂しかったんだ。」

「ベル…」

すまない…ベル。

7年前にお前を…いや狒々爺が引き取る前にお前を引き取るべきだった。

『……………悔やまれるな、正気を取り戻さなかったことを。』

『あの時は仕方がありません。』

「だから…僕と血が繋がっている、本当の家族が二人いて嬉しいんだ。だから…その

「…お母さんとアルフィア義母さんと呼んだら…ダメかな？」

「姉さん……。私の子、いい子すぎるわ。どうしてあのお爺ちゃんに育てられて、ここま  
でなれるの？尊すぎるわ…。」

「それは私も同感だ。あまりにもいい子すぎる…。」

本当にいい子すぎる。

そこからへんの糞神よりもよっぽど神らしいぞ。

『セバス…本当にベルはメーテリアとあの雑魚の息子なのだな？』

『疑うのもごもつともです。ですが、事実です。』

『私は神だが、あの子の方が神に見えてしょうがないのだが…。天界も含めて全ての神  
は、あの子の爪の垢を煎じて飲ませたほうがいいのではないか？うむ、そうするべき  
だ。』

『お気持ちはずごく分かります。』

「わかったわ。ベルがそういうならいいわ。た・だ・し！」

「た、ただし…？」

「私をお母さんと呼んで、姉さんをアルフィアお義母さんと呼ぶのはややこしくないか

し」

「おい、メーテリア。お前は何を…。」

「ということ、私のことはママと呼んで？」

「ええっ！は、恥ずかしいよお…。」

「(うぐっ！わが息子ながら、か、可愛すぎる…) お、お母さんからのお願いだけど、ダメ？」

「ううっ…：マ、ママ…。」

「!!きやあああああ！可愛い！ああ！本当に可愛すぎる！」

「むぐうううっ!!」

「…：まあ、それぐらいならいいだろう。」

「(僕の尊厳は!?)」

諦める。こうなったメーターは止められん。

甘んじて受け入れろ。

その方がメーターも私も嬉しい。

WINWINというやつだな。

『言われるメーターとしては嬉しいだろうな。』

『まだ初日ですが、この程度では先が思いやられますな。』

『そうだな。セバス…ベルのステータスについて聞かせろ。』

『神へステイアと同席した上なら。』

『それは同然だ。それと…何故あのビッチがヒューマンとなっているのだ？また、アス  
トレアと似すぎている雌豚がいたぞ？』

『その前に、アルフィアお嬢様を更新なさってくださいませ。そしたら分かります。』

『更新？まあ、いいが？』

そういえばそうだな。

メーテリアのことで更新のことをすっかりと忘れていた。

後で更新してもらおうか。

コンコン

む、誰だ…家族の団らんを邪魔するやつは。

ガチャ

何だ、メイか。

「失礼します。坊ちやま、夕食の時間でございます。」

「あ、もうそんな時間？」

「ええー!?一緒に食べてくれないのー!?」

「うっ…!」

「メーテリア、あまりベルにワガママ言うな。」

「だってー!」

…本来なら逆だろう。

「メーテリアさん、お久しぶりでございます。私を覚えていらつしやいますでしょうか？」

「え？あー！お爺ちゃんところのメイド…確か「最強侍従」だったわね！」

「はい、今後はメイとお呼びくださいませ。坊ちやまは「ヘスティア・フアミリア」団長でございますので、皆様と一緒に食事をする必要があります。」

「団長!?…わかったわ、メイさん。ベル、もうちよつと待っててね？お母さん、全快してみんなと食事したいわ。」

「うん、わかったよ!…マ、ママ。」

「……絶対に治すわ!ええ、絶対に何が何でも!」

『こんなに気合の入ったメーテリアを見るのは初めてだな…。』

『母は強しというが、これは極端だろう…。』

『いいではありませんか。私としては微笑ましいですな。』  
そうだな。

今までのメーテリアは病の苦痛に耐えながらずっと無理矢理笑顔してたからな。

こんなにはしゃぐメーテリアは初めて…いや子供の時以来だな。

このような時が…いやこんな夢のようなことが現実に見られるとは思わなかった。

ベルに……私の甥に……いや、私達の息子に感謝しなければならん。

## 第322回 執事長、説明。

よかったですな、メーテリアお嬢様。

坊ちやま…本当に、本当に感謝します。

メーテリアお嬢様のあのような元気な笑顔を。

アルフィアお嬢様のあの困ったような笑顔を。

坊ちやまたちを見守る、あのヘラ様の慈愛に満ちた笑顔を。

このような光景を見れるとは、このセバス夢にも思いませんでしたぞ。

コンコン

む…？ザルド殿ですか？

ああ、三人分の夕食をお持ちいただいたのですな。

あのクソエロ爺の眷属にしては、非常に気の利いた方ですな。

「邪魔するぜ。」

「む、【暴喰】…ザルドか。久々だな。」

「(ひっ！ほ、本物だ…)へ、へラ。久しぶりだな。」

おや？ああ、そうでしたな。

【ゼウス・ファミア】の小童共はヘラ様を異様に怖がっていましたからな。

メーテリアお嬢様はお会いしたことがありませんでしたね。

病のため、ずっと自室にこもっていましたからな。

「あら……どこかでお会いしたかしら？」

「メーテリア。狒々爺の【暴喰】のザルドだ。」

「そうなの？初めまして、ザルドさん。」

「お、おう……（アルフィアの言っていた通りの娘だな）。ほら、飯だ。体にいいのを作っておいたぞ。ヘラ、アルフィア、お前たちの分も持ってきてある。今日は【ヘラ・ファミア】の身内だけで食ったほうがいいと思つてな。」

「そうか。そこに置いとけ。」

「うむ、ご苦労。」

「あら、ありがとう……甘味もあるわね！」

「【ヘラ・ファミア】がお礼……だど!?ベルがいるから機嫌がいいかもな。……じゃあ、俺は行くぜ。食器はセバスに持って来させろ。」

「承知しました。」

バタン

「坊ちやま、そろそろ行かれませんか。」



「うん！マ、ママ…、明日ね。」

「ええ、ベル。また明日ね。」

さすがの坊ちやまも「ママ」と呼ぶのは恥ずかしいでしょうな。

メーテリアお嬢様はかなり嬉しそうですね。

バタン

「……最恐の「ヘラ・ファミリア」もお前と私と二人だけとなったな。」

「団長たちは本当に死んだのね…。」

「ああ、そうだ（本来ならお前たちも死んでいて、セバスもずっと封印されたままのはずだが…ベルに感謝しなければならんな）。」

ええ、そうですね。

ヘラ様の思ってる通り、本来ならアルフィアお嬢様もメーテリアお嬢様もおられませんでしたからな。

坊ちやまの想いが時空を超え、死者の国から引つ張り出したのです。

今頃、天界は本来あるべき魂がないことに大慌てでしょうな。

「では、いただきます。……モグモグ…おいしいわね！」

「うむ。」

「さすが【暴喰】のザルドだな。」

メーテリアお嬢様は病のため、あまり食事できませんでしたからな。

甘味以外は。

完食しましたか…。

【ヘラ・ファミリア】におられた時は毎食残していましたからな。

死の淵から中期あたりに戻されたので、多少は元気になられたのでしょうか。

坊ちやまの血の半分はメーテリアお嬢様のですから、アルフィアお嬢様より治るのは早くなるでしょう。

食後に特効薬を飲んでいただきましょう。

「では、メーテリアお嬢様。こちらを飲んでくださいませ。」

「ええ、わかったわ。……ゴクゴクゴク。ふー…かなり楽になったわね。」

「私も飲んで、数日ぐらいで治った。お前は一週間もあれば治るだろう。」

「え？ そうな…の。……うーん…。眠くなったわ、ちよつと寝るわね。」

「はい、メーテリアお嬢様。ゆつくりとお眠りくださいませ。」

「じゃ…お休みー…すー。」

……穏やかな寝顔ですな。

「寝たか…。こんなに穏やかな寝顔のメーテリアを見るのは久々だな。…いや、再び見れるとは思わなかったと言ったほうが正しいな。」

「ああ…。さて、セバス。この特効薬は何故もつと早く作れなかったのだ？」

「では、アルフィアお嬢様の部屋で説明いたします。ここは静かにしたいと思います。」

「そうだな。あの様子では大丈夫だろう。」

「うむ。」

そして私たちはメーテリアお嬢様の部屋を出て、隣のアルフィアお嬢様の部屋へ移動しました。

「さて、説明しろ。セバス。」

「この特効薬は大聖樹の枝とカドモスの泉、そして坊ちやまの血でございます。」

「何だ?! ベルの血だと! いや…。そうか。メーテリアの病があの子へ遺伝している可能性が高かった…。ということはそれをかき消したのがあの雑魚の血か…。」

「ご明察でございます。坊ちやまは産まれてすぐ、死の病の抗体ができていたのでございます。それを元にし、【ディアンケヒト・ファミリア】の【戦場の聖女】アミッド嬢と【ミアハ・ファミリア】の【医神の忠犬】ナアーザ嬢によって調査されたものです。」

「そうか。奴らにはお礼を言わなければならんな。」

「彼らにとつて、死の病は倒さなければならぬ共通の敵ですから、それは願ったり叶ったりでしょう。」

「そうだな。ただし、あの雑魚には感謝したくない。メーテリアが企んだことであつて

も、メーテリアを孕ませたことは絶対に許さん。」

「同感だ。」

困った方々ですな。

せめて小指ほど感謝してもいいと思いますがな。

「ヘラ、更新しろ。セバス、用意してあるな?」

「はい、こちらに。」

「何だ?これは…水?」

「いいから、更新しろ。…ゴクゴクゴク…。」

数週間前に特効薬を飲んだとしても、いつまでも効き目があるかわかりませんからな。

「不遜な奴め。…15年ぶりか。」

「せめて改宗可能にしておきたかったぞ。」

「駄目だ。私のファミリアは私のものだ。だから、お前は誰も改宗させん。…本来ならベルもだが、私の不覚もあるし敬愛するヘステイアなら安心して託せる。」

「相も変わらぬ嫉妬深い奴だ。さっさとしろ。」

「やれやれ。………は?それに何だ、このスキルは…?な!?き、消えている…病のスキルが…その後に出たこのスキルは…。」

やはり、驚くでしょうな。

前代未聞のスキルですから。

消えている？

まさか、死の病となつていいるスキルが消えたのですか!?

「終わったか？見せろ。」

「ま、待て……。何だ、このスキルは……。」

「……よし、発現しているな。ん？ランクアップしてるのか。そうかレベル8か……これであの子の力になれるな。…忌々しいスキルが消えているだ!?!…何だ、このスキルは。」

「見てもよろしいですか？」

「ああ。」

ほう、レベル8ですか。

大抗争までの8年間にしては遅いほうですが、ダンジョンにも潜つてないのでまだマシな方ですね。

【義母献愛】

- ・ 対象を愛すれば愛するほどアビリティ高補正。
- ・ 対象にもアビリティ高補正と共に経験値増加。

・副次作用として無病息災。

・対象が死亡するとスキル消失。

これは…。

坊ちやまを愛するあまり、死の病であったスキルが消失したということですか。

冗談抜きで、坊ちやまは神と祀られてもいいかもしれませんな。

このスキルはメーテリアお嬢様にも発現しているかもしれないな。

だとすると、皆様からの愛で強化されている坊ちやまはお二方による母の愛で更に強化されるということですか？

私とメイで対抗できるかが不安になりましたな。

オラリオの第一級冒険者全員を坊ちやまへぶつけましょうか。

いえ…ダンジョンのイレギュラーを利用して神殺しのモンスターと戦い合わせますか？

いけませんな、今は様子見としましょう。

「おい、待て。何だ！このスキルもそうだが、『白兔眷属』とは何だ!!」

「五月蠅い。セバス、説明しろ。」

「はっ。ヘラ様、見ての通りレアスキルでございます。」

「それはわかっている！ここにある白兔とは…ベル、なのか？」

「ご明察でございます。詳しくはヘステイア様と同席した上でお話します。」

そして、私はヘステイア様を連れてきてヘラ様に、坊ちやまのスキルとアビリティについて説明しました。

## 第323回 義祖母、御礼。

私はヘステシアとセバスから、あの子のスキルとアピリテイについて聞いた。

…立って続けに予想外のことが起こりすぎた上に、ベルのステータスのことを聞いて…  
頭も胃も痛い。

こんなスキル、「ヘラ・ファミリア」でもなかったぞ！

「……………水をくれ。」

「……………ボクもー。」

「こちらへどうぞ。」

「ゴクゴクゴク……………ふう。」

ヘステシアといると、何故か安心できる。

天界でもオリンポスでもそうだった。

ベルはヘステシアに拾われて、本当に幸運だったな。

「ヘステシア…すまない。私をもっとしっかりしていれば…。」

「気にするなよー。仕方がないさ、君の子供たちを一斉に失ったらそうなるのは当然さ。

キミは優しい子だからね。」



「私をそう言うのは天界でもお前だけだぞ？」

「そうかなー？みんな誤解しているんだけどな。」

下界へ降りる時、お前をめぐらから無理矢理引つ張り出して一緒に行くべきだったな。

お前がいないと私は終始イライラし、あの人はあちこち粉かけたせいで私は怒り続けて、オラリオでも最強最悪女神と言われるようになった。

ヘステイアがいれば、そう言われることはなかっただろう。

『…あのヘラを本当に優しい子とか言っているぞ。』

『ヘステイア様は本当に器がでかい女神…いえ大女神ですね。』

『胸だけでなく器も本当に大きいんだな…。ベルは本当に大当たりの神を引いたな。』

『全くですな。』

ああ、私もそう思う。

メーテリアを物心が出る前に失い、アルフィアとザルドに見捨てられ、あの人に育児放棄されたあの子が、私の敬愛するヘステイアに拾われて本当によかった。

そうしなければ、あの子は糞神に弄ばれて壊れていただろう。

そう思ったら、イケロスとアレスはまだ苦しませるべきだったな。

送還したが、邪神の糞神共はどう思っているだろうな。

せいぜい怯えておけ。

ヘステイアは良くも悪くも平等で、誰にでも慈愛を与える女神だからな。

本来ならオリンポスの主神にさせたかったが、本神が「面倒だから」で拒否したのは本当に困った。欲のない神だった。

そして、あの人がその座についたのは失敗だった。

思い出すだけで腹が煮えくり返るな。

そして、オリンポス十二神の1柱にしたかったが、ディオニュソス如きのキチガイ神に譲るのは予想外だった。

いや、ディオニュソスのやろうとした狂乱を本能的に気づき、自ら席を譲ったのだからうな。

そのことをわかっている神はどれだけいるのだろうか…。

また、ディオニュソスの狂乱を見抜けなかった、デメテルやヘルメス…私達十二神の責任だ。

天界へ帰ったら、あの面汚しのディオニュソスを苦しみ、完全消滅させてやる！

ああ、絶対のだ！

「私の義孫を眷属にしてくれて、本当に感謝している。貴女に保護してもらわなかったら、あの子は…私達の不始末のせいで寂しい思いをさせ、糞神に拾われたら間違いない

壊れていただろう。」

『不始末……そうだな、それは言える。だが……、ヘラがあそこまで誠心誠意で本心から頭を下げて居るのは初めて見たぞ。』

『私もでございます。メーテリアお嬢様の薬をかき集める時でもああはありませんでした。』

「ヘラ、勘違いしないでくれよ？アルフィアくんやセバスくん、メイくんにも言ったけど……キミの義孫、そしてゼウスの義孫だからじゃない。ベルくんだからこそ、眷属にしたいんだ。まー、ボクも下界へ降りて数年眷属を作らなかつたのも悪いけどね！……ベルくんが最初の眷属で本当によかつたよ。……ここまでバグってるのは予想できなかつたけどね！ハハハ……」

「感謝する……。バグってるか、確かにそうだな。」

【憧憬一途】？ 【英雄願望】？ 【猛牛殺し】？ 【兎囿女達】？ 【時駆白兎】？ 【陸王者】？

私の眷属でもここまでのレアスキルが揃つた子はいなかつたぞ……。

あの子の想いが、このスキルを産んだのだな……。

【ヘラ・ファミリア】がまだあつたとしても、恐らく発現しなかつただらう。

あの子への過酷な環境、試練、闘いがあの子を強くさせたのだ。

それに……【兎囲女達】だと？

雌豚達がベルを後押ししてるのが、非常に気に入らない本当に気に入らない絶対に認めたくない。

……認めたくはないが、認めるしかないだろう。

14年間にあの子を放置した私には、そのことを責める資格がないのだから。

あの子を溺愛しているアルフィアも、それはわかっているだろう。

ただ……あの子によからぬことを吹き込んだあの人のことは許せない。

メーテリアからの依頼もあることだし、徹底的に天界より本気でやるとしよう。

ふふふ。

「……非常に複雑だ。私が正気を失っている間にアルフィア、お前達がベルのところへ行かず、あの人やベルを育児放棄した結果が……ベルの純粹な想い、悲痛な想いがベルを強くさせたとはな。しかも、雌豚たちがぞろぞろと……。正気を失ったことが悔やまれる！」

「……同感だ。」

「（一応念押ししておくか。そうしないと、ヘラはあの子達に何かと危害を加えるかもしれないね！）ヘラ、言つとくけどあの子達はボクの眷属だ。嫌がらせや折檻は許さないよ。」

「わかっているとも。あの子のためだろう?…貴女が見定めているなら大丈夫だが、私も見定めなければならぬ。特にアイズという子はな。」

「(あー…孫馬鹿もここに至れりか。アイズくんへのフォローをアドバイザーくんと春姫くんへ念入りをお願いしよう)…言つとくけど、手出し無用だよ?メイクくんが指導しているんだから。」

「あの【最強侍従】が?」

「はい、ヘラ様。手抜きなくやっております。メイド教育と共に花嫁修業もさせております。」

「は?花嫁修業?ボク、初耳だけど?」

「何だと?私は聞いてないぞ。」

花嫁修業だと?なら、私の出番だな。

「花嫁修業は、結婚を司る私が担当すべきだと思うが?」

「ヘラ…キミの物差しで計るのはやめてくれないかい?天界でもキミの指導についている神は一柱もいなかっただろう?」

「それについては同意する。お前の指導はうんざりだった…最後までいけた奴はいなかっただろうが。」

「ヘラ様、それは控えていただけるとありがたいのですが。」

そこまで反対するのか？だが、私の義孫だぞ？

「…私の義孫には幸せになつてほしい。駄目なのか？」

「それはボクも同じだよ。ベルくんは戦いから離れて、ゆつくりと過ごしてほしかったんだけどな。けどね、ヘラ。ベルくんは自ら選んだんだ、【最強最高の英雄】の道だね。」

「……………ヘステイア。」

「ヘラ、ボクらは神だ。不変の時を生きる神だ。あの子達の紡ぐ物語に口出すことは、あの子達を侮辱するのと同然だ。せめて見守つてあげようよ？それが下界へ降りたボクたちの役目だろ？」

「……………お前がそこまで言うのなら…わかった。」

『!?ヘラが…納得した、だと!?』

『驚きましたな…。こうなつたヘラ様は誰にも止められないと思つたのですが、ヘステイア様がおられましたか。本当に大当たりの中の大当たりですな。』

当然だ。

私が敬愛する大女神なのだからな。

## 第324回 義祖母、決心。

それより気になることがある。

アルフィアに発現しているスキルの「白兔眷属」だ。

聞けば、ここにいるヘスティアの眷属の女性のほとんどが発現しているという。

もはや、レアスキルじゃないだろ。

あのフレイヤやアストレアに似たようなヒューマンがいたというのは…。

「あのビッチやお転婆がああなヒューマンになったのは…。」

「はい、彼女たちが坊ちやまの血を飲んでヘスティア様の眷属になったからです。最初は神フレイヤが発現しました。」

「神がただのヒューマンとなり、ヘスティアの眷属となったのか…。笑えるようで笑えん。」

「同感だよ…神を封印できるなんて…。」

「ええ、坊ちやまの血は神力を完全に封印できるようですな。」

「…さっきあの子の爪の垢を煎じて飲ませたいと言ったが、前言撤回する。本当に封印しかねないぞ…。あの子は、もう神と祀られてもいいのではないか?」

「お前にそう言われたら終わりだな…。」

「本当だね…。」

…そうか。

あの子への償いをする前に、やらなければならないことをやらないとな。

償いについて考えたが、先程の話で奴らが教えてくれたからな。

くくく…楽しみだ。

だが…ベルがここまで来たというのは、私達のやってきたこと…いやこれまでの道は間違いではないということだ。

皮肉な話だ…。

【神工の英雄】を多く作り出した私達が、たった一匹の黒竜によって全滅寸前まで追い込まれ、生き残った子たちはオラリオの糞どもの肥やしとなった…。

そして、メーテリアの企みによって偶然授かったあの子が【最後の英雄】の最有力候補とはな。

メーテリアは自分の生きた証を残したかっただけかもしれないが、それが救界の”要”となるとは神の誰でも、世界の誰でも予想できないだろう。

というか、予想できてたまるか！

そうなる、今があの子にとって最良ということになる。



認めたくはないが、認めるしかないだろう…。

「……言い方が悪いが、黒竜によつて私達が全滅したのはあの子にとつてよかつたかもしれん。」

「そうですね。」

「ヘラ……。」

「……考えようによつては、今が最良かもしれない。ベルの想いによつてアルフィア……前とザルドを救い、メーテリアが復活できたのだからな。セバス、あの子……【女帝】は復活できるだろうか？」

「ええ、条件は揃つております。後はタイミングでございます。」

「そうか。ふうー……。あの子にはつらい思いをさせてしまったな。義祖母として情けない限りだ。」

「ヘラ、それは私もだ。」

「だが、ここからは糞神共の好きにはさせせん。私があの子を守る。それはヘラとしてではない、あの子の義祖母としてだ。」

「あ、うん……（ヘラがここまで孫馬鹿になるとは思わなかつたね……。まあ、ヘラが動くなら少しは楽になるかなー。神会、荒れなきやいいけどね！）。」

神会が楽しみだ。

くくく……。特に二つ名の儀式ではな。

「セバス、『ガネーシャ・ファミリア』にいるヒュアキントスとやらを攫って徹底的に改変しろ。思い出したら腹が立ってきた。やはり、許さん。」

「既にクノツソスで監禁しております。メイと共に徹底的に改変してみせましょう。」  
「私もアポロンを折檻せねばならん。やれやれ、忙しくなったな。だが、悪くない。」

「(アポロン……オラリオへ来なきや無事に生きていられたのに……)」

アレスやイケロスにヤツた時より念入りにじつくりとヤラねばならん。

「いつまでもいるんだ、貴様らは。いい加減に部屋を出ろ。ここは私の部屋だ(ベルがあのドリンクを飲んでる頃合いだからな。奴らが襲わないという保証がない)。」

「全くせっかちな娘だ。私の部屋はあるな？セバス。」

「はい、ヘスティア様の許可はもらっております。隣でございます。」

「家族が固まっていけないとダメだからね！」

「私は風呂へ入る(ベルが心配だ……早く行かねば)。」

「ふああああ……、ボクはもう寝るよー。お休みー。」

「ああ、お休み。ヘスティア。」

バタン

「……………セバス。」

「わかっております。メーテリアお嬢様の更新でございますな?」

「ああ、アルフィアがランクアップしたなら早急に更新する必要がありますがある。」

特に、メーテリアのあのスキルは…。

せつかく病が治りそうなのに、ぶり返してはたまらんからな。

特にアルフィアには知られてはならん。

「はい、では参りましょう。」

「うむ。寝ている隙にやるとしよう。」

「ええ、今は坊ちやま、アルフィアお嬢様、ヘラ様にお会いして安心なさって熟睡しております。」

「ああ……痛みに耐えて笑顔を絶やさなかつたあの子が、今は心からの笑顔を浮かべている。私はそれがすごく嬉しい。」

「はい。」

アルフィアに「義母献愛」があるなら、メーテリアにも発現しているはずだ。

初日であればベルに対して溺愛しているからな。そして「白兔眷属」も…。

やれやれ…手間のかかる子たちだ。

だが…アルフィアを7年前から連れてきて、メーテリアを14年前から連れてきたのは今でも信じられん。

復活はウラノスの狗：いや今はベルの専属魔導具師がやったとしても、ベルなしでは確率を引き上げられることができず復活できないからな。

あの子は下界の可能性：いや希望そのものだ。

そして、私達が求めた救界の”要”だ。

守らなければならん、何としてでもだ。

女神ヘラとしてでも、義祖母としてもだ。

---

その後、「ヘステイア・ファミリア」団員に紹介してもらった。

ベルは、何故か寝てしまったようだ。

仕方がないな、時空の穴を開いたからな。

「はい、皆様。こちらにいるのは、「ヘラ・ファミリア」主神のヘラ様です。」

「ヘラだ：。おい、「最強侍従」。「ヘラ・ファミリア」主神ではない。ベルの義祖母だ。間

違えるな。」

「失礼しました。」

分かっているくせにわざと言ったな、このメイドは。

まあ、いい。ここで奴らへ釘をさしておこう。

「…うちのベルが大変お世話になっている。だが、その前に言っておこう。貴様ら、私の義孫によくも色々としてくれたな…。特に元【フレイヤ・ファミリア】と元【ロキ・ファミリア】だ！」

「「ひいつ！」」

「本来なら貴様らは火炙り串刺し極刑「そこまで!」だが、ベルを助けベルとともに戦うことを誓っていることをヘステイアから聞いた。それに免じて許してやる、仕方なくない！」

「「ありがとうございます！」」

ちっ…、私らしくもない。

だが、ベルのためだ。やむをえん。

…ああ、そうだ。こいつらにも言っておこう。

「……おい、元アストレアと元【アストレア・ファミリア】の雌豚共。」

「…何かしら。」

「7年前、よくも私の娘のアルフィアをよってたかっていじめてくれたな？」

『異議あり！異議ありよ！いじめられたのはこっちよ！』

『アリーゼ、面と向かって大声で言ってやって下さいませ。』

『無理に決まっているじゃない！あんな恐ろしい神威の前で言えるわけないでしょう』

！』

『アリーゼ…。』

「何をブツブツと言っている？ その小娘共が。文句あるなら聞くぞ？」

「「何でもありません！」」

だがな…。

「だが、私の不覚とエレボスの詐術によってアルフィアが謀られたのもまた事実。よつて、免除してやる。ありがたく思えよ？」

(謀られたわけではないのだが…、まあ仕方がない。)

「…わかったわ。ただ私は5年前のベルの寂しさから来る、苦しみ悲しみを知っている。

それはヘラ、貴女も罪あるのよ？」

「百も承知だ。だから、私はお前たちに手を出す気はない。非常に不本意だがな。義孫のためなら、私は天界でも下界にいる神々全てを敵に回してやる！」

「それを聞いて安心したわ。今の私はただのヒューマンだけど、ヘスティアをよろしくね？」

「当然だ。貴様こそさっさとランクアップして、義孫の踏み台となれよ？」

「ふふふ、わかつているわ。」

ちつ…相も変わらず食えん女だ。

さて、こつちもか。

「おい、フレイヤ。」

「今の私はシノスです。間違えないでください。」

「ふん、そうか。何か言う事あるか？」

「ありません。今の私はベルさんのために生きています。」

「……変わったな、貴様。」

「変わります。ベルさんのためになら。」

「それをよく覚えとけよ？それなら、今までのことは全て白紙にしてやる。」

「ありがとうございます。」

「ふん。」

…神は不変というが、ここまで変わるものなのか？

まあ、いい。

私がここにいる限り、貴様らを見張っておくからな？

ベルと共に生き、ベルを愛するのに値するかをな。

## 第325回 月女神、訪問

よし…。

服の乱れなし、髪の乱れなしと…。

『ねえ…あれ、何回目?』

『朝早くからやってたから、13回目かしら?』

『単に挨拶へ行くだけでしょう?』

何を言うか!

愛しのオリオンに会えるんだぞ!

初対面は大切だろう!

「…ランテ、服はおかしくないだろうか?」

「アルテミス様…昨日、多くの服屋を巡って多く試着して、結局元の服のままになったのですが…。」

「そうだな…だが、これでいいのだろうか?」

「いくら着飾ってても中身はアルテミス様ですので、ありのままを見せるのがいいかと…。」



「ありのままだと!? そ、そんなの…まだ早い!」

「あーち、違います! アルテミス様の普段の姿という意味です!」

「ま、紛らわしいぞ。」

つい、勘違いしてしまったではないか…。

そろそろ、行くか。

「さて…行くぞ。」

「「はい!」」

---

ここだな。

あの変態神のホームを改造したと聞いたが、なかなか悪くないな。

ヘステイアらしい温かみがある。

ああ…やつとオリオンに会える。

『あの…アルテミス様が、数分間に門の前に突っ立ったままですが…。』

『しっ…心の準備しているのよ。』

よ、よしノックするぞ。

コンコン

ガチャ

「お待ちしておりました。神アルテミス及び「アルテミス・ファミリア」の皆様方。」  
早くないか!?

ノックして1秒しか経ってないぞ!

「先日、ヘステイア様におつしやつたでしょう?こちらへ参られることを。」

「あ、ああ。」

「そういうことでございます。ヘステイア様のところへ案内いたします。」

「う、うむ。お願いする。…その…オリオンはいないだろうか?」

「夕方に戻られますので、お待ちくださいませ。」

「そ、そうか…。わかった。」

オリオンがいないのは残念だ…。

「自己紹介が遅れました。私は「ヘステイア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイドのメイと申します。」

…こいつ、ヒューマンではないな?

…人形? いや…魔導人形か!

「その通りでございます。神アルテミス。」

「!?…神の考えていることを読めるのか?」

「いいえ、メイドの嗜みでございます。」

「……メイドって凄いな。」

『アルテミス様……まともに信じているわ……』

『そんなメイドなんていないでしょ……』

そして、私達はヘステイアのところへ案内してもらった。

コンコン

「んー？誰だい？」

「神アルテミス及び【アルテミス・ファミリア】をお連れいたしました。」

ガタガタツ！

「え？は？昨日の今日だよ!？」

「数日後と言ってたが、一日しかないな……。」

おや？ヘステイアだけではないな……。

その声はヘラか。

ヘラもここへ居付くのか。

まあ、義孫のオリオンがいるから道理だな。

「では、どうぞ。」

「ああ、ありがとう。」

「アルテミス！改めて、久しぶりだね！」

「ああ、ヘステイア。久しぶりだ、元気そうよかったぞ。」

「うん、まあご覧の通りさ。」

うむ、天界にいたままのヘステイアだな。

変わらず安心したぞ。

ヘラもいつになく大人しく冷静だな。

まあ、ヘステイアが側にいるからだな。

「…アルテミス、何の用だ？まさかベルに会いに来ただけではないだろうな？」

「そうだが？」

「ふえ？」

「……………まだ直接会ってないのか？」

「神の鏡で見た。一目惚れだ。」

「……三大処女神が崩れたな。アテナだけとなったな。」

「…何故だろう。アテナも来るような気がする。」

「奇遇だな。私もそう思う。」

「何故、アテナが来るのだ？」

「何となく。」

あのアテナがまさかオリオンに？

……あり得るな。あの戦いはアテナ好みだ。

一対一のがチンコ対決で、お互い死力を尽くした戦いだっただけだからな。

「それはいい。何故オリオヘ来たのだ？」

「オリオンに会いに来たのだが？」

『アルテミス様、アルテミス様、本来の目的を忘れております！』

「!!そ、そうだった。オリオヘ来たのは救援のためだ。」

「ねえ、ヘラ。ベルくんに会いに来たついでに聞こえるのはボクの気のせいかな？」

「いいや、私もそう思う。」

「ほ、本当なんだぞ！」

その救援がメインなんだ！

そのためオリオヘ行くこうとしたら、あの記者会見を見たんだ！

「天界最強の弓のアルテミスが助けを求めるとは、何があったのだ？」

「茶化さないでくれ、ヘラ。…もう私達の手になんか負えなくなったからだ。」

「…何があったんだい？」

「私達は大樹海の奥深くにある遺跡を調査していた。そこには…古代で私の精霊が命と引き換えに封印されていた、古代のモンスターがいる。」

「!!」

「そのモンスターは…私達神を抹殺しに来た漆黒のモンスターだ。名はアンタレス。」  
「そうだ。」

古代で、私の精霊が力を尽くしたがアンタレスを倒すには至らなかった。

だから、遺跡まで誘い込み彼女たちは命を代償にアンタレスを封印したのだ…。

彼女たちは勇敢で気高い精霊だった。

私の自慢の子たちだ…。

ヘラにとって、漆黒のモンスターについては知らんぷりはできないだろう。

特に「ヘラ・ファミリア」にとってはな。

「ベヒーモス…リヴァイアサン…黒竜の他にもいたのか。」

「ああ、だが封印されていたから三大クエストには入らなかっただろう。」

「でも、封印されているんだろ？なら大丈夫じゃないか？」

「ヘステイア、そうであれば私はここにいない。…その封印にほころびが出て力づくで解かれた。」

「!!」

そうだ。アンタレスは長い時間をかけて、私の精霊を取り込んだのだ。忌々しいやつだ。

そして精霊の力を自らの力に馴染ませ、エルソスの遺跡の力を弱らせたのだ。

エルソスの遺跡の力が弱まろうとすると私に知らせるよう、精霊たちは仕掛けをして  
おいたのだ。

そのため、「アルテミス・ファミリア」は調査に赴いたのだ。

調査に赴いた時は、もう既にエルソスの遺跡はアンタレスの住処となっていた。

貞淑を司る私は激怒した。

私の精霊を汚し取り込んだだけでなく、精霊たちが命をかけ封印したエルソスの遺跡  
も汚したからだ。

嘲笑うかのような！

レトウーサたちがいなかったら、感情に任せて特攻していただろう。

…それがよかつたかもしれない。

アンタレスは、既にレトウーサたちが対抗できるようなレベルではなかった。

## 第326回 月女神、請願

私はヘステイアとヘラに、大樹海へ出張ってきた時のことを話した。

「私達が出張ってきた時、遺跡にはもうアンタレスの眷属で一杯だった。せめてものの抵抗としてエルソスの遺跡の力を利用して封印したが、所詮付け焼き刃だった。私達が救援を決意した時は大樹海の1/3はアンタレスの眷属で占められていた。」

「……………」

「今のアンタレスは私の精霊だけでなく、遺跡の力を喰らい更に強くなっている。やつは遺跡の奥で悠々と力を蓄えている。私達、神々を抹殺するためにな。」

「ふむ……由々しき事態だな。」

「今頃、大樹海はアンタレスの眷属によって支配されているだろう。大樹海に住んでいた人は私達が避難させたが…全員までは無理だった。」

「アルテミス……」

ヘステイア、ありがとう…。

さすがのヘラも考え込んでいるな。

住民たちの大半を何とか避難させるのに精一杯だった。



助けられなかった子は多くいた…。

そのため、レトウーサたちは今も陰ながら泣いているし、悪夢にうなされているのを知っている。

目の前で、住民たちがアンタレスの眷属の餌となってしまったのを見てしまったのだから…。

私達がそんな絶望に落ちる前に…アレを見たんだ。

白き光を。

「そんな時だ。あの記者会見を見たのは。」

「ああー…」

「ヘステイア、無理なお願いというのはわかってる。どうか、オリオンにアンタレスを討伐してくれないだろうか？あのアンタレスを殺れるのはオリオンしかない！」

「待て、アルテミス。私の義孫に全て背負わせる気か？」

「……………」

「あの子は冒険者になってまだ半年すぎだ。そんな無茶は義祖母としてはさせられん。」

「ヘラ…。」

ヘラ…義孫のオリオンを大切に想っているのはわかっている。

だが！私達はするしかないんだ！

それをヘラへ言おうとすると。

「だから、かつてのファミリアと同じようにいや、オラリオ連合に強制クエストをさせる。」

「！！」

「そのため、近日中に開かれる神会で奴らの協力を得なければならん。アルテミス、お前も出席しろ。」

「ああ、わかった。ありがとう、ヘラ。」

「貴様のためではない。」

オラリオ連合に強制クエストか。

それならオリオンが動く理由にもなれるし、オリオンの仲間たちも協力してくれるだろう。

さすが、かつて最恐を誇った「ヘラ・ファミリア」主神だな。

そう考えていると、魔導人形のメイドがつぶやいた。

「むしろ、これはチャンスですね。」

「チャンス？」

「話を遮って失礼しました。今のオラリオ連合は、かつての私達のファミリアのような功績がありません。そうですね、神ヘラ？」

「ああ。」

「アンタレス討伐をオラリオ連合の、最初の功績とするのです。」

「ま、まだ成立したばかりだよ!？」

「だからこそです。烏合の衆と見られないよう、早くも功績を立てなければなりません。」

「うー…。」

…なるほど。

今のオラリオ連合はファミリアが集まっているただの集まりと見られてもしようがない。

アンタレスを討伐することによって箔をつけるわけか。

不謹慎だが、アンタレスを討伐するなら何でもいい!

それだけあのモンスターは規格外なのだ!

「ハスティア様、彼らの特訓の成果を見せる時なのです。」

「それだけではないだろう? 【最強侍従】 いや、メイ。」

「ええ。」

「へ?」

何だと?他に狙いもあるのか?

「ヘスティア…。私とあの人の子達はレベル9や8に至りながら、黒竜になすすべもなく敗れた。」

「…うん。」

「ダンジョンにちまちま挑むのもいいが、時間が足りなさすぎる。」

「まさか…。」

「そうです。アンタレスを彼らの経験値、偉業の糧となつてもらおうのです。」

「!!」

「あちらからやってくるのは都合がいい。それに…ダンジョンでイレギュラーが起こるよりはマシだろう?地上なら、まだ私達の目は届く。」

「…わかった。アルテミス、キミからの依頼受けよう。」

「ありがとう!ヘスティア。」

偉業…経験値か。

確かに今のアンタレスはその塊だろう。

私達ではもう対抗できない。

無力だ…。

「それはそうと、『アルテミス・ファミリア』はどこを拠点にしていますでしょうか?」

「む?昨日来たばかりだから、宿屋にいるが?」

「好都合ですね。」

「へ?」「何だと?」「どういう意味だ?」

「ここはまだ部屋が多くあります。幸いなことに【アルテミス・ファミリア】に女性のみのようですね。」

「メイくん…まさか。」

…? どういう意味だ?

わからんぞ?

「見たところ、彼女たちは坊ちやまのファンクラブの一員のようですね(チラツ)。」

(「サツ!」)

「どうです? 神アルテミス、ここを間借りしてみませんか? 家賃は宿屋で長期間いるよりは安くしますよ? 三食特訓付きでどうです?」

素晴らしい案ではないか!

オリオンの近くにいられるし、オリオンと一緒に過ごせる上に私達を鍛えられる! 何という好環境だろうか!

だが…先程無理なお願ひしてしまった。

さすがに厚かましすぎるだろう…。

そう思い、断ろうと思った。

「しかし…私の依頼をお願いした上にこれ以上厄介になる「坊ちやまと毎日会えますが？」…には心苦しいが、それを受けようと思う！レトウーサたち、いいよな？（いいと言ってくれ！）」

「「は、はい！（こ、怖い！）」」

これは受けない！いや、受けなければならぬ！

「た、頼む！ヘステイア！」

「アンタレス討伐の時より必死だぞ…。」

「…神友のキミがいてくれるなら嬉しいし頼もしいし…、いいよ…。」  
「ありがとう！持つべきものは神友だな！」

ヘステイアが快諾してくれた！

これでオリオンと一緒にいられる…いやいやいやいや！

アンタレス討伐が先だろう！

…いや、オリオンも捨てがたい。

むむむ…。

『ヘラ…。ボク、こんな葛藤するアルテミスを初めて見るよ…。』

『私もだ。…何故義孫なのだ。まだ会ってもいないだろうに…。』

『ああ…大の恋愛アンチのアルテミスはどこへ…。』

『あきらめろ、ヘステイア。アレはもう恋する乙女の目だ。結婚を司る私が保証しよう。』

『そんなー!』

## 第327回 月女神、愕然。

そして私達は、「ヘステイア・ファミリア」ホームで間借りすることとなった。  
「ヘステイア・ファミリア」団員に紹介してもらった。

夕方になったが、オリオンは母君の話し相手になっっているそうだ。  
残念だが、仕方があるまい。

はて？

自伝では……オリオンの家族は全員死んだのではなかったのか？

ゼウスの奴は除いて。

アルフィアという子も何故かいるし…。

どうなっているのだ？

「ということで、『アルテミス・ファミリア』がここへ泊まることになりましたので、皆さん仲良くしてください。」

「またですか…。」

「彼女たちもでしょうか…。」

「もう打ち止めにして欲しいです…。」



「仲間が増えるのはいいけどさー、ライバルが増えるのはちよつとなー。」  
「……………多い。」

『こんな早く来るなんて…。』

『あの優等生のアルテミスが…。』

女性が大半だな…………。

全員がオリオンに恋しているかどうかではないよな？

…そうだとしたら、多いな。

誰がオリオンの本命なのだ？

男性は…少ないな。

まあ、いいだろう。下賤な奴なら討つまでだ。

「また、ベルか…。あいつらがこれを見たら間違はなく血の涙を流すだろうな…。」

「いい加減にしろ。あの罵愚兎が。」

「友よ…自重してくれ。」

「「端から見ると羨ましいようで、全然羨ましくない…。」」

…何故か黄昏れているな。

「そして、皆さんには近いうちに遠征へ出てもらいます。」

「「ー」」

「ダンジョンではなく地上です。」

「メイ！まだ、早い！早すぎる！こいつらでは黒竜を倒すことはできん！」

「ザル坊。早とちりはいけませんよ？誰も黒竜とは言ってません。」

「「は？」」

あの大男、できるな…。

ザル坊？…はてどこかで聞いたことが…。

「対象は大樹海の奥深くにあるエルソスの遺跡に潜む、古代のモンスターのアンタレスです。」

「まだ…古代のモンスターがいたのか？」

「言っておこう。今のアンタレスは私の精霊を喰らい、遺跡の力も取り込んで更に強くなっていく。古代の時より何倍もの思ってくれ。確証はないが…精霊の魔法も使えるかもしれん。」

「！」

あの子達は命を賭けてアンタレスを封じ込めたが、奴はそれを逆手にとって取り込んだのだ。

…仇は取ってやる。だから待っていてくれ。

お前たちを解放するのを。

「…メイ。お前、こいつらの経験値や偉業の足しにするつもりだな？」  
「ザツツライト。」

「…なるほどな。おい！てめえら、丁度いい獲物がいるじゃねえか。気合入れやがれ！」

「「おー！」」

ありがとう…。

理由はどうあれ、アンタレスを討つことについて協力してくれて感謝する。

それに…さつきから気になっていることがある。

彼女がアストレアに似すぎている。

ヒューマンなのは確かだ。

だが…身のこなしや癖がまるでそっくりなのだ。

確認してみるか。

「…さつきからずつと思ってたが、そこのお前。ユーティスとか言ったか？お前…もしやアストレアか？」

「あら？よくわかったわね？」

「ああ、完全にヒューマンだとわからなかったが…。身のこなしや癖でお前だとわかった。」

「はあ…やっぱり同郷にはバレちゃうわね。特にオリンポス武闘派二大最強の二柱の貴

女には。」

「ふん、私を見くびるな。……何故、神威を完全に抑えられヒューマンとなっているのだ？」

「それはね……。」

そして、アストレア：いやユーティスはヒューマンになった経緯を話してくれた。

私は驚いた。

これは驚かない方がどうかしている。

「何……だと。オ、オリオンの血が神力を封印……。ということとは……その娘は……フレイヤ？」

「はい、お久しぶりですね。神アルテミス。」

「驚くのも無理はないわ。あの子は本当に下界の可能性を多く秘めているわ。」

「……そこまでなのか。それはそうと。」

「？」

ああ、アストレアに聞かなければならない。

あの0巻のことが本当なのかを。

「ゼウスの奴を谷底へ突き落とすのはいい。き、9歳のオリオンと二人きりで過ごし

たのは事実なのか？」

「ええ、そうよ。あの時のベルは可愛かったわ！ふふふ。」

「くそっ！何て羨ましいことを…！」

「同感です…。」

は？

お前もだろうが！

私としてはそっちが羨ましい！

「おい…フレイヤ「今はシノスと言います」…シノス。お前が言うか？」

「え？」

「女神祭でベルにエスコートしてもらって、デートしたけど？そっちが羨ましいぞ！」

「そうよ！」

「…あの時のベルさんは、カッコよかったです…。うふ。」

新刊ではそういうイチャイチャが書かれていたぞ！

私もそういうことをしたい！

しかも眷属になるなんて！

「くそっ！二柱とも羨ましいぞ！しかも、オリオンの眷属になるなんて！」

「わ、私の場合は不可抗力です。ユートイスさんは故意で飲んだんですよ！」

「いいじゃない！ダンジョンにも潜れるし、貴女とサシ合えるんですもの。」

「それはそうですが…。」

「待て。ダンジョンに潜れるだと？禁忌ではなかったのか？」

「どういふことだ？」

『…アルテミスも巻き込みましたよ？』

『…後衛がほしいと思ってきましたが、こんなに早く…。しかも弓は天界最強ですね。誘ってみましょう。』

『そうね。』

「ええ、神はね。私達はベルの血によって完全に神力を封印されているの。だから、ヒューマン並に行動できるわよ？…アルテミス、貴女も入ってみない？」

「その話、詳しく。」

そして、私はそのことについて聞いた。

これは願ったり叶ったりだ。

バイトをせざとも冒険者の真似事ができて、金も稼げる。

そしてオリオンの眷属にもなれる！

本当に願ったり叶ったりだ！

だが…その前に。

「…私の一存では決められない。レトウーサたちに相談してみる。」

「その方がいいですね。ユーティスはアリーゼさんたちに黙ってましたからね。」

「…ユーティス、お前は…。」

「し、しようがないじゃない！シノスが第一号になるのが羨ましかったのよ！」

「まあ…気持ちにはわかる。情報を教えてくれて感謝する。さっそく相談してくる。」

そして私はレトウーサたちが戻ったら招集かけた。

ユーティスから聞いたことをレトウーサたちに話した。

呆れられた。

私に対してそうだが、オリオンの規格外にだ。

まあ、私もそう思う。

「……ということだ。そ、その……すまない。お前たちを切り捨てるわけではないが……私はオリオンの眷属になりたいのだ。」

「……ベルくんはすごいですね。神を封印できるなんて。」

「アルテミス様、ヘステイア様は今日会ったばかりですがどのような神でしょうか？」

「そうだな…。良くも悪くも誰にでも平等に接する神だ。私が天界で一番親しくしてい

るのが、ヘステイアだ。…少々グータラなのがネックだが。」

「わかりました。私は異存ありません。ただ、私はアルテミス様がヒューマンになろうとアルテミス様が一番です。」

「私もです!」「私達もです!」「」

「…ありがとう。お前たちのような眷属を持って私は幸せ者だ。」

ああ幸せ者だ、私は。

遺跡に特攻せず、オラリオへ引き返してよかった。



## 第328回 月女神、恩恵。

そして、レトウーサたちを率いてヘステイアの神室へ向かった。

当然、メイというメイドもいた。

「どうしたんだい？ぞろぞろと…（嫌な予感がする…）」

「ヘステイア、頼む。神友としてお願いだ。」

「…何だい？」

「レトウーサたちを改宗してくれないか？」

「ええっ!?（あ、この流れは…まさか）」

「そして、私を…オリオンの眷属にしてほしい。」

「（やつぱりかああああ！）アルテミスうううう！キミもかあああああ！」

仕方がないじゃないか！

オリオンに…恋をしてしまったのだから。

そう言った私に、メイは水を差し出した。

「では、神アルテミス。こちらをどうぞ。」

「これは？「坊ちやまの血が入っている水です」（バツ！）ゴクゴクゴク…。」

「何をさらつと出しているんだい！メイくん！アルテミス、キミもだ！」

「すまない！だが…こんな気持ちになったのは初めてなんだ。」

「あー…うん。気持ちはわかるけど…ボクもなりたい！」

「ハステイア様、坊ちやまのこれまでの努力を無駄にするおつもりでしょうか？仮にハステイア様が飲んだとしても、誰を坊ちやまの主神にするおつもりでしょうか？」

…そうだな。

あのヘラが納得できる神選が必要だぞ？

あ、私は駄目だからな。

「え、えーと…ヘファイストスやタケミカヅチ、ミアハとか？」

「神ヘラが許すと思いますか？」

「思えないな。」

「思わない…。あーもー！…いいんだね？アルテミス、キミたちも。」

「ああ。」

「「はい！」」

「はあ…。…キミなら問題ないと思うけど気をつけてくれよ？本当に。」

「わかった。オリオンのために力を尽くそう。」

「そつちじゃない！」

…？違うのか？

「よし、キミで最後だね…。」

「「よろしくお願いします！ヘステイア様！」」

「無理にボクへ仕えなくてもいいんだよ？今まで通りアルテミスでいいからね？」

「そういうわけにはいかないだろう。お前が送還されるとヘラの暴走が始まるぞ。お前たち、ヘステイアを頼んだぞ。」

「「はっ！」」

「えー…、そこまでしなくてもいいんだけどなー。」

あのヘラが大人しくしているのは、お前がいるからなんだぞ。

お前が送還されると、ヘラは容赦なくオリオンを独り占めにしオリオンに関わる者たちを容赦なく滅ぼすぞ。

天界でも、あの糞ゼウスに対してそうだったようにな。

さて、私の番だな。

「では、ヘステイア。頼む。」

「本当にやるのか…。はああ…。」

恩恵とはこういう感じなのか…。  
なるほどな。

「…発現したよ（ああ…ボクの神友のアルテミスが…ベルくんに落とされた。まだ会ってもいないのに…）」。

「そうか…これが私のステータスか。スキルが3つもあるのか…。」

レベル1

アルテミス

力：0

敏捷：0

器用：0

耐久：0

魔力：0

<スキル>

【一見必中】

・狙ったものは必ず当たる

・弓矢を装備するとアビリティ高補正

【月下女神】

・月の満ち欠けによってアビリティ高補正

・月が照らしている間は更にアビリティ超高補正

【白兔眷属】

・血をいただいた相手への忠誠または愛が強ければ強いほど、早熟する。

(ただし相手が異性のみ)

・血をいただいた相手が強ければ強いほど、ステータス高補正。

・血をいただいた相手が死ぬまで、神威・神力は完全に封じられる。

なるほど…私らしいと言えば、らしいが。

「うむ、魔法が出てこないのは残念だな。…レトウーサたちの気持ちが変わるな。」

「え？」

「あの子達がアビリティが上がるのを一喜一憂していたからな。そういう気持ちがようやく理解できた。これはやりがいがあるな！」

「うわー…燃えている。アストレアよりバンバン上げるような気がする…。」

無駄を省いて効率的上げる方法を探さないとな。

闇雲にやるだけでは駄目なのだ。

今の調子を確かめてみたいな。

「まず手合わせしてみるか。ランテ、頼むぞ。」

「は、はい！」

「…やりすぎないでくれよ？本当に。」

「え？レ、レベル1のアルテミス様にそんな大人気ないことはしませんよ！」

「あ、キミじゃないよ。アルテミスの方さ…。」

「え？ははは、そんな馬鹿な…。」

「では、クノツソスへ案内しましょう。」

「ボクも行くー！」

クノツソス？

ああ…閨派閥の豚共が根城にしていたところか。

そして、私はランテと手合わせをした。

しかし…。

「きやあああああ！矢、矢がどこまでも追つてくるううう！弾いてもダメえええええ！」

「何している、ランテ。切り落せばいいだろう。」

「速い！速くて落とせませえええええん！」

「追加いくぞ？」

「やめてくださいさああああいいい！いやあああああ！怖いいいいい！」

私の射た矢がランテを追ってどこまでも追いかけていた。

たったの3矢だぞ？あと7矢を打ち込もうと思ったのだが。

「「……………」」

「うわあ…アルテミスが終始圧倒しているよ。ランテくんはレベル3のはずだよね？」

「そうですね。しかも、懐に入られようとするパンクラチオンの餌食になりそうですね。」

「そうだね、しかもアルテミスはパンクラチオンの免許皆伝を持っているよ。同郷の女神の中でアテナとチャンピオンを争うぐらいだよ？」

「ほう、それは楽しみですね。」

パンクラチオンか…。

レトウーサたちに学ばせようとしたが、「痛いです無理ですごめんなさい許してください」と言われた。

何故だ？女性が身を守るのに最適だというのに。

ランテはまだ逃げ回っていた。

私はまだレベル1のなりたてだぞ？

「降参！降参しますからやめてええええええ！」

「全くだらしないぞ…、ランテ。この分ならレトウーサたちでも大丈夫だな。」

（（ビクウウウウ！））

「胸を借りさせてくれ。」

（（胸を借りるのはこつちと違います！））

さて、レトウーサたちの力を直に知りたいな。

---

レトウーサたちは第二級冒険者のため、矢を全部打ち落とした。

…時間はかかったがな。

「さすがレトウーサたちだな。矢を全て切り落とすとは。」

「はあ…はあ…。」

「怖かった…。」

「普段自らモンスターを討伐する方が、恩恵を受けたら更に強くなるよね…。しかもそれが神なら尚更…。」

む？ただの狩りだろうか？

「あのアルテミスがこうなるのは目にみえていたよ…。」

「同じ武闘派である神アストレアのどちらが上でしようか？」

「それは間違いなくアルテミスだね。神格も戦績も上だし。」



「明日の稽古が楽しみですね。」

「そうだね（ヘファイストスやデメテルを誘ってみるかなー）。」

稽古か……。ふふふ、楽しみだな。

アストレアと同門対決か。

あいつ、鈍っていないだろうな？

フレイヤは……確かアースガルドはコマンドサンボだったな。

天界でコマンドサンボの使い手と何度かやり合ったのが懐かしい。

久々にやり合うのも悪くないな。

下界へ降りてまでして、そういうことをするとは思わなかったぞ。

異性であること、オリオンへの絶対の愛を捧げているのが条件だがな。

まあ、女神の中にはそんなにはいないだろう。

……いないよな？

おっとそんなことを考えている場合じゃないな。

「これでオリオンの力になれるな！まずレベル2に上げねばならんな。……ユーティスた

ちと効率的な方法について話してみるか。ふふふ、楽しくなってきたな。」

「（ベルクんの記録より短くなるような気がする……。あーもー！どーにもなーれ。）」

そしてその後オリオンによく会えた。

感激のあまりについ抱きついてしまった。

オリオンは硬直していたが、周囲の女性が喚いていた。

ほぼ全員じゃないか！オリオンを慕っているのは！

その後すつたもんだがあつて、ある意味で彼女たちと仲良くなれた。

オリオンとは最初はお互いたどしかなかったが、ウマが合ったため意気投合した。

その勢いで、名前をつけてもらった。

「エルピス」と。

いい名だ。

## 第329回 処女神、観戦。

ボクはヘファイストスとデメテルと歩いている。

何故か、アフロディーテもついてきた。

「ヘステイア、アルテミスが貴女のところに居候しているって本当なの？」  
「そうだよー。」

「あらあら、本当なのね…。あのアルテミスが兎さんに恋したというのは。」  
「私が言うのもなんだけど、未だに信じられないわ…。あのアルテミスが。」  
「本当だよ…。それだけじゃないけどね。」

「「？」」

三柱の女神は怪訝な顔でボクを見つめた。

すぐにわかることだよ…。

そしてクノツソスに着いた。

「ふーん、ここがクノツソスね。閨派閨の豚たちがいたところって。」

「ヘステイア、私達をここへ連れてきてどうするの？」

「見せたいものがあるって、何かしら？」

「見たらわかるよー。お、いるね。」

まだ稽古は始まってないね。

ちよーどよかったよ。

目ざといアフロディーテがアルテミス…エルピスに気づいた。

「え？何…アルテミスに似たヒューマンがいるんだけど？」

「似たヒューマンじゃないよ…。」

「まさか…アルテミスも、なったの？」

「え？…また増えたの？」

「どうなっているのよ！説明しなさいよ！」

まー、そー言うよね。

ボクはもう慣れてしまったよ…。

---

そしてボクは彼女たちに事のあらましを説明した。

「……救界の”要”どころじゃないわよ！完全なイレギュラーじゃない！」

「まあ、気持ちはわかるわ…。それで何が始まるの？」

「稽古だよ。ほら…。」

「え?……ユーティスとアルテ……いえエルピスと試合?」

うん、これを見せたかったんだ。

同郷にとってはエキサイトするだろうからね!

「あら……アルテミスの剣捌き、久々に見るわ。」

「うわ……あの剣捌きはトラウマだわ……。」

「貴女が悪いんじゃない……アルテミスをからかうから。」

「からかっているじゃないわよ!恋についてアドバイスしただけよ!」

「キミのせいだぞー!おかげでベルくんに惚れてしまったじゃないか!」

「知らないわよ!まさかこうなるなんて……。」

余計なことをアルテミスに吹き込むから……。

ああ……ボクの神友のアルテミスが、ベルくんのものになるなんて……。

ボクもなりたい!

稽古を見ている内に、エルピスが徐々にユーティスを追い込んでいる。

聞けば、アルテミスは下界へ降りてもずっと狩りを絶やさなかったらしい。

まあ、神格や経験、年季が違うよね。

あ、ここからだね。

「エルピスが優勢ね。……え?」

「あらあら、久々に見るわね。パンクラチオンを。」

「うげ…私、アレ苦手なのよねー。」

「ユーティスもパンクラチオンで対抗しているけど、無理ね。」

「そうね。エルピスは同郷ではパンクラチオンでアテナと一、二を争うぐらいなもの。」

「貴女もパンクラチオン得意じゃない…。」

「兎さんのことは好きだけどねー。ヘステイア、大丈夫よ。私はフレイヤの子たちも抱えているもの。それに彼女たちほど兎さんに惚れているわけではないからね。」

「…安心したよ。」

デメテルはこう見えてもパンクラチオン得意だからなー。

やはりデメテルとヘファイストスの予想通り、エルピスがユーティスくんを関節技で極めている。

ああなつたら、もう逃げられないよね。

「うわー…。圧倒的に負けているじゃない。正義の神が。」

「…ちよつといいかしら？子どもたちにお願いでワインとおつまみをもってきていいかしらっ。」

「では、こちらをどうぞ。」

「あら、メイちゃん。ありがとう。」

お、気が利くね。

久々のパンクラチオンを見て、みんなテンション上がっているね。

「(グビ…)ふう、久々に血が騒ぐわね。かといって、全知零能の私が参戦できないし…。」

「美しくはないわね…。あら、ユーティスがギブアップしたわよ?」

「年季が違うから仕方がないわね…。」

「けど、ほらシノスくんと連戦するようだよ?」

「美の神が何やってんのよー…!」

知らないよ。

彼女に聞きなよ。

そしてシノスくんvsエルピスの稽古が始まった。

フレイヤと思えないほどの槍術だね…。

「フレ…いえシノスもなかなかやるわね。」

「けど、ポセイドンの馬鹿には及ばないわね。本気を出したアイツは強いわよ?そのポセイドンとアルテミスは何回か殺りあったからエルピスが有利ね。」

「ええ、そうね。あら?武器がお互い砕けたわね。」

「またかい…。あ、ここからだね。」

「あら？…コモンドサンボ？数千年ぶりにみるわ…」

「美の神が…美の神が…肉弾戦…」

「あーあ、やっぱりエルピスには敵わないか。あつさりと組み伏せられたね。」

シノスくんが関節技を仕掛けようとしたけど、エルピスがそれを取って極めてしまった。

…さすが、パンクラチオンの女神チャンピオンだね。

シノスくんがギブアップし、ユーティスくんと共に説教しているね。

そりゃ、天界でも有数の武闘派だからね。

……ステータスの伸びがまたとんでもないことになりそう…。

「はあ…彼女たち用の武器を作った方がよさそうね。」

「いいのかい？」

「達神は武器を選ばぬというけど、彼女たちの技に耐えうる武器は別よ。」

「あの子達も喜ぶだろうね。」

「私は逆に血の雨が降らないかが心配だわ…」

ますます強くなるだろうね。

最初からそうすればよかつたんじゃないかな？

そもそも、神がヒューマンの眷属になるなんて前代未聞だからなあ…。



あれ？まだ続けるみたいだ。

あの三人…、かなり楽しんでないかい？

ずるいぞ！

「まだやるみたいね？これ…見世物にならない？」

「ええ、なるわ。けど、男神は別の意味で興奮するかもね。」

「逆にあそこへ上げたらどう？」

「あの胡散臭い神はどう？」

「いいわね。」

……ボクの知らないトコで話が進んでいる。

ヘルメスについてはセバスくんときくんの精算で納得したけどねー。

さらば……ヘルメス。

## 第330回 万能者、観戦。

私は今、クノツソスにいます。

そして何故か、ステージの上にクッションを敷き詰めて濃い青い髪の女性とヘルメス様が向かい合っている。

神デメテルと神ヘファイストス、神アフロディーテが、先程オラリオ外の調査から帰ってきた私達を捕らえて連行されて、ここにいます。

何故こうなったのでしょうか…？

「何で俺が…。や、やあ。アルテ…ミスじゃない？」

「いいや私だ。この豚が。喜べ、私に触れられるのだから。」

「ど、どうなっているんだい!?!神が…ヒューマンになるなんて!…ア、アストレアもフレイヤ様も!」

ヒューマン…？

あそこにいるのは…アストレア…様？

雰囲気が何か…神威を感じない？

どうなっているのですか!?

「エルピス、私の分も残しといてね。」

「エルピスさん、うっかり送還させないでくださいよ?」

……彼女たちはヘルメス様からどんな恨みを買ったのでしょうか?

いずれにしろ、責任は取って下さい!

そして神アルテミスと似たような女性が準備運動をしています。

「…何をするんだい? ……まさか…パンクラチオンを? や、やめてくれ! 送還されてしまおう!」

「問答無用だ。天界であったことやオリオンの件も含めて、だ。」

「オリオン…? え? あの噂は事実だったのかい!? アルテミスがベルくんに惚れたというのは!」

「そうだ。よくもオリオンに色々としてくれたな?」

また、ベル・クラネルですか…。

もう関わりたくないのですが、どつぷりと関わってしまったような…いえ関わってまずね。

聞けば、ラキアが神ヘラによって率いられ、神イケロスが送還されたと。

もう、神ゼウスと神アポロンが囚われているのですね…。

ということは…あそこにいる女神は、まさか神ヘラ?

「ちよ、ちよつと待って！それは既に精算済みのはずだ！」

「だそうだ。ヘラ、どう思う？」

「却下だ。」

「へ、ヘラああああ!!? (早くないか!?) 見立てでは三ヶ月後ぐらいと思ったのに……)」

「あの人もいるぞ。ただし封印されているがな。」

「(ゼウス、あつさり捕まるなよおお!)」

「さて、時間だ。パンクラチオンの稽古を始めよう。なまつてないか確認してやる。」

「ちよ、ちよつと待って！俺はパンクラチオン得意じゃ……、アー……ツ！」

さつきから気になったのですが、パンクラチオンって何ですか？

というか、リオンと「劍姫」が隣でじゃが丸くんを食べながら観戦しているのが非常に気になるのですが。しかも何故、二人ともメイド姿なのですか！

シニールすぎます！

……ツツコミどころが多すぎて、ついていけません……。

なるほど……パンクラチオンとは、天界でヘルメス様がおられるところに伝わる徒手空拳ですか。

……打撃技、関節技、投げ技もあるのですか。

勉強になりますね。

それにしても……。

「折れる折れる！それは曲がらないって！あつ！今、グギツと言った！言ったって！痛い痛い！」

「……………（ふふつ）。」

「えーと…アスファイ。いいのかい？」

「いい気味です。ええ、本当に。」

「アレ…マジで死ぬぞ。」

「ルルネよね？」

「え？アスト…レア様？」

…離れましょう。巻き添えになりたくはありません。

嫌な予感がします。

先程のヘルメス様の発言で、神がヒューマンになったというのが気になります。

「今はユーティスだけだね。ルルネはレベル3よね？」

「う、うん？」

「そう…手合わせしましょう。いいよね？アスファイ？」

「え!?!」「はい、どうぞ。」

「ちよ、ちよつと！全知零能がレベル3の私に勝てるはずが…。」

もし、ヒューマンになったとしたら…。

「痛い痛い痛い！死ぬ死ぬ死ぬ！」

なるほど、こうなるのですか。

「あらあら、レベル3でしょ？もう少し頑張つて。」

「ア、アスファイ！助けて！肩が外れる！」

「ルルネ…、甘んじて受けなさい。」

神の技と経験ですか…。

冒険者並の力が合わさったら、勝てるわけないでしょう！

何故、ヒューマンになれるのですか！

しかし、それはそれでいい機会です。

この駄犬には多少のお仕置きは必要ですから。

特に神アストレアにとっては。

「いいのですか？アンドロメダ。」

「いい薬になるでしょう。…リオン、貴女こそいつの間にも「剣姫」と仲良くなったのですか？」

「…仲良くしていません。たまたまです。アイズ…口に食べカスついてますよ。」

「あ……うん。ありがとう。」

「……そうですか（めっちゃ仲良くなくなっていませんか!?）」

戦争遊戯ではお互い仲が悪かったと思いますが……。

「助けて! 【劍姫】!」

「ルルネさん……ガンバ。」

「なおざりすぎる!? ギャーーーーー! ぐへえっ!」

おや、頭上に上げて一気に下へおろしましたか。

……生きていますね? 生きてるならいいです。

しかし、それでも立たせようとするあなたの方は……本当に神アストレアだった方ですか?

「……リオン。私の中のアストレア様が完全に崩れました……」

「私は戦争遊戯の一週間前とつづくに崩れました……。今更です。」

「ルルさん……あの技……パワーボム? できそう?」

「ふむ……ユーティスかエルピスに教授願いますよう。」

「うん。」

「……私も学んだ方がいいでしょうか。」

ヘルメス様とルルネへのお仕置きのためにも。

おや? ヘルメス様の方は終わったようですね。

先程から関節技しかしていませんが…。

「…死…ぬ。」

「ふん、なまっているぞ。この豚め。」

「では、次は私ですね。」

あの人は…シル？と言った方？

いえ、確か改名されましたね。

!!

神アストレアがあの子の人なら…。

…まさか、神フレイヤがいきなり消えたのは。

「や…めて。」

「では、ヘラ様に委ねますか？」

「私は一向に構わんぞ？エルピス、ユーティス、シノスの稽古に付き合わせるだけでチャラにしてやると言ってるんだぞ？それが嫌なら、アポロンと共に…」

「やめてください！それだけはやめてください！受けます！受けるからやめてください！」

「なら素直に受けろ。」

「ハイ…。」



イケロスが送還されたのは言伝により知ってましたが、実際に見た神々や人々は顔面蒼白だったそうです。

一体何があつたのでしょうか？

「あ、ヘルメス様。私は天界ではコマンドサンボを習得していますので。」

「こまんどさんぼ？」

「え」

「エルピスさんは関節技だけでしたが、私は打撃技でいきますね？」

「え」

「では…いきますよ？よくも、イシユタルの時は色々としてくれましたね？」

「ま、待つて！私怨入っている！入ってるって！それは異端児の時にチャラ…ゲフウツ

！」

やはり…イシユタルの時というと神フレイヤしかいません…。

シノスという方は神フレイヤ？

何でヒューマンになつてゐるんですか！

しかも恩恵を受けて？

………生きて下さい、ヘルメス様。

先程新団員が入つたばかりなので、死なれては困ります。

ラキアの元王子で、何故か神ヘラの紹介状付きでやって来ましたから。

## 第331回 侍従長、手筈。

あの神にはいい薬でしょう。

神へラ自ら、手をくださないだけマシと思いなさい。

それに彼女たちもあの神に対してフラストレーションが溜まっているようですし。

いい機会でしたね。

それにあちらも騒がしいようですね。

「ホーツホツホツホ！見てよ、あの無様な豚を！グビツ、ゴクゴクゴク…ぷはあく！」

「アフロディーテ…お行儀が悪いわよ。まあ気持ちは分かるわ。」

「ヘルメスがかわいそうに思えてきたわね。ところでヘファイストス、タケミカヅチは何故ヘステイアに土下座しているの？」

「……ベル・クラネルの眷属にしてくれって…。」

「「ああ……そりゃアレを見たらね。」」

ああ、神タケミカヅチですか。

仕方ありません。

「頼む！ヘステイア！」

「いや、だから…それは女神限定でベルくんへの想いが最大まで近くないと発現できないって…。」

「ずるいぞ！アレを見せられて、武神として収まりがつかない！」

「まあ…気持ちわかるよ。けど、無理なものは無理だつて。」

「くっ……、全知零能が恨めしい！俺の持つ武術を試してみたい！」

もし異性関係なくでしたら、坊ちやまの眷属に喜んでなつたでしょう。

しかし、命さんがいますからね。

諦めていただくしかありません。

そもそも、そのスキルが反則なのですから。

「命ちゃん…。」

「春姫殿…タケミカヅ様のあのような姿、見たくありませんでした。」

「神が軽々しく土下座ですか…。」

「故郷にいた時は毎週でした…。」「毎週!?!」

「もしタケミカヅ様がベル様の恩恵を受けられましたら、どうなっていたでしょう?」

「レベル2の私と千草殿を二人がかりで相手にする方ですから…。」

「恐らく、あの方々以上の脳筋になるのは間違いないでしょうね。」

「……今のままでいいと思います。ええ、本当に。」

そうですね。神タケミカツチがなったとしたら、ザル坊や【猛者】に自ら手厳しい指導を与えていたでしょう。

それはそれでいいのですが、命さんの嫉妬を買われては困ります。さて、その【猛者】はどうでしょうか？

「……………」

「名誉顧問、どうした？」

「その言い方はやめてくれ…。」

「大丈夫ですか？ オツタルさん。先程までザルドさんと戦われてたようですが。」

「問題ない…やはり強いな、ザルドは。」

「7年前は、オツタルが勝ったじゃないか？」

「あれは勝ったと俺は思っていない。勝ちを譲られた。毒に侵されてなければ勝ってたのはザルドだ。」

勝ちを勝ちと素直に受け止めておけばいいものを…。

不器用な漢ですね。

「ザルドさんは神ゼウスに更新されて、レベル8になりましたよね？」

「ああ…だが、年季が違うから簡単に勝てん…。俺もまだまだ未熟ということだ。」

「だが…神フレイヤ、いやシノスは…。」



「…この程度なら問題ない。さっさとランクアップしてこい。ベルの力になりたいだろう?」

「…ああ!」

「もう、桜花もオツタルさんも…。男って本当に…。」

同感ですね。千草さんに少し褒められただけで上機嫌になりましたね。

シノスさん曰く、「フレイヤ・ファミリア」より表情が柔らかくなった上、魂がより輝くようになったと言っていましたね。

こちらとしては、「猛者」に言う事を聞かせる方がいることに気づいたのは僥倖です。面白くなってきました。

さて、ザル坊はどうでしょうか?

「…ふん、糞餓鬼が。」

「今の【猛者】はどうでしたか?ザル坊。」

「まだまだだな。だが、以前よりも動きや太刀筋がかなりマシになっている。神タケミカツチの指導のおかげだな。俺もレベル8になったからといってもマキシムにはまだ及ばないがな。」

「特殊条件下なら貴方が勝つでしょう?」

「特殊条件なら、な。」

ええ、今の貴方なら【神饌恩寵】を使えばマキシムどころか【女帝】を負かせるでしょうね。

そうそう、伝えなければいけませんね。

「ああ、そうそう。貴方のあのスキルを最大限まで生かす環境を建設中ですので待つて下さいね。」

「…建設中？おいメイ、何する気だ？」

「貴方を強くするためですが？それとオラリオには名物が必要と思いませんか？」

「いや、だから説明しろよ…。面倒事はゴメンだぜ。それに俺の顔が知られると不味いだろうが。」

「大丈夫ですよ。仮面をつければいいんです。」

「……だから説明しろって！」

「はあ…これだけヒントを与えているのに何故わからないのですか？」

これぐらいは察してほしいものです。

「は？あのスキル…建設中…名物…仮面…。おい、まさか。」

「ザツツライト。」

「……………バレたらどうするんだ？」

「問題ありません。手は打ってあります。」



「……場所はどこだ？」

「ふふふ、知りたいですか？」

「……ああ。」

「そこは……\*\*\*\*\*です。」

「メイ……悪趣味だぞ。まあ、いい。奴とは一回会っておきたかつたんだ。」

「ええ、それにしてもあのスキルが出るとは。クソバカ主神には感謝しなければなりませんね。」

「ああ、だが爺の再会は疲れたぜ……。」

同感ですね。

あのクソバカ主神の相手を数百年もしてたのが信じられません。

……私も坊ちやまから完全に毒されているようですね。

## 第332回 暴喰、回想。

メイの奴…、まあいい。

あのスキルを最大限まで生かすにはそれが都合いいだろうな。

試作品を作っておくか。

昨日の爺の相手は久しぶりだったが、疲れた…。

カツ…カツ…。

随分と奥深いな…。

それにこの匂い…：トラップがそこらへん中にありやがる。

まあ、それぐらいいしないとあの爺は脱出するからな。

「ここです。ザルド。」

「嚴重すぎるぞ…。まあ、仕方がないだろうな。さすがのあの爺も…ん？」

「♪♪♪」

「…メイ、まだまだ余裕そうぞ。あの爺。」















## 第333話 暴食、納得。

何だか疲れてきたぜ…。

帰ろうか……。

「それはどうでもいいです。さて、ザルドを更新してもらいましょう。」

「む？お主、ベヒーモスの毒はどうなったのじゃ？」

「完全に解毒した…。ベルによつてな。」

「は？」

そりや驚くだろうな。

当時、どんな手を使つても解毒できなかったからな。

あつさりと解毒したときは呆れたぜ。

---

そして、メイはベルの血について説明した。

「……なるほどのう。冬に川へ落ちても風邪引かなかったし、これという病気にもかか  
らなかつたのはあやつの遺伝子か。」

「ああ……。」

「…ベルは才能がない。それはメイ、お主も分かるとるはずじゃ。」

「ええ。ですが…「想いじやろう?」やはり、気づいていたのですね。」

「儂はベルと14年間いたんじやぞ? そのぐらいは見抜けて当然じゃ。じゃが…、あそこまで純真無垢なのはさすがに驚いたがのう。」

やはり気づいていたか。

そうでない【ゼウス・ファミリア】の主神として1000年も君臨しなかつたからな。

だが、次の発言で台無しにしやがった。

「だからといって、色々と下ネタなことを吹き込むのはよくないかと。」

「それじゃよ。【ゼウス・ファミリア】でやっていたこと全てをあの子に吹き込んだのじゃ。」

「何やってんだ…爺。」

「お主にも教えたはずじゃがのう…。何故そんな堅物になったのか理解できん。はあ…。」

「てめえや他の奴らがそんなんだから、そうせざるを得なかつたんだろうが!」

この糞爺! 山にこもって大人しくしてたと思つたら、変わらねえ!

…ベル、本当にまっすぐに育つてくれてよかつたぜ。









## 第334話 暴喰、更新。

そして俺は爺に15年ぶり更新してもらった。

片手でな。

「せめて両腕ぐらいいは開放してもいいんじゃないや、と農思うんじゃないが。」

「ダメです。ほら、片手でもできるでしょう。さつさと更新しなさい。」

「むう…。ほう、ランクアップじゃぞ。マキシムと並んだのう…。スキルは…またお主らしいのう。」

「は？」

「レベル8ですか。まあ妥当でしょう。」

「スキルか…何だコレは。」

……………俺らしいと言えはらしいが。

【料理鉄人】

- ・料理を作ること経験値獲得
- ・多くの者に食べてもらえるほど経験値中補正
- ・喝采するほどの料理であればあるほど経験値高補正



































「映像は出してませんが、音声はあちらに筒抜けです。」

「うわあ……（心の声を出さなくてよかったぜ）。」

「……てへっ☆今までののは冗談じゃわい。お茶目な爺を許してくれい☆」

『『うえっ……。』』

「……気味悪いぞ、爺。」

今更ぶりっ子ぶっても手遅れだ。

ぞまあ見ろ。

「さて、何かコメントありませんでしょうか？ヘステイア様？」

『今の今まで聞かせてもらったよ……。ゼウスううううう！』

「久しぶりじやのう、ヘステイア。」

『何をなかつたように、真面目ぶっているんだー！というか、誰がロリシヨタ巨乳だ！』

……間違つてないじやないか？

おっと、それを言うと怒られるな。

「じゃが、事実じやろう？」

『……それは置いといて。ベルくんがここまで成長するとは予想外だったよ。』

「さすが俺の義孫じやな！特にハーレムはな！」

『キミが余計なことを教えるからだろー！……キミが単に育児放棄したわけではなかった

「ということとはわかった……納得したよ。」

「なら、解放してくれんかのう?」

『そうだね。』

「おおっ!」

『解放するのはヘラに任せるよ。』

「ゑ」

うわ……終わったな、爺。

『ヘラ、天界でキミがゼウスにしたことの中でボクが禁じたことを全て解くよ。任せたよ。』

「!? ままま、待つんじやああああ! それを解かれたらマジで送還されるんじやああああ!」  
『貴方、ちゃんと手加減をしますからご心配なく。ヘステイア、わかった。メーテリアの依頼もあるので私に任せてくれ。』

『頼んだよ、ヘラ。ゼウス、少しは反省しろ!』

「ま、待つてくれええええ! 反省しとる! しとるから! せめて、それだけはやめとくれえええ!」

『貴方……今からそちらへ行きます。』

あのヘステイア様が、ヘラに対して禁じたこと……だと!?







「……爺、自業自得だ。」

送還されないことを祈ってるぜ……。

だが、相変わらずで安心した。

ヘラの折檻に耐えろよ、爺。

ベルと再び会えるためにもな。

……会えるよな？

ヘラの嫉妬で会わせないとかはないよな？

帰ったら、何故か女性陣から優しかった。

あのヘラでもだ。

……複雑だ。

## 第337話 白兔母、対面。

うーん…いい朝ね。

そんな心地よい朝を連続で迎えられるなんて、いつ以来かしら。

コンコン

あら？誰かしら？

ベルかしら？

「誰ー？」

「私だ。入るぞ」

ガチャ

「あら、姉さん。おはよう。」

「ああ、おはよう。調子はどうだ？メーテリア。」

「すごく体が軽いわよ。今日こそベルの自伝を全部読むわ！」

「そ、そうか…。」

あれから2日経っているけど、なかなか全部読破しないわ…。

だって！

ベルが、私の愛しい息子が危険な目に合うたびに読んでいられず、そのまま気絶してしまうんだもの。

しかも食後に特効薬を飲むから、そのまま寝てしまうから時間がなかなかないのでね。

せつかく体の調子がかかなり良くなったと言うのに…。

「今は、どの辺りだ？」

「ええと中層へ初挑戦する前ね。冒険者になってまだ一ヶ月半で中層なんて早すぎるわよ！本当にもう…。」

心臓に悪いわ。

過去に起こったからって、これは駄目ですよ！

ダンジョン禁止にさせたいわ！

これでまだ一巻目なのよね…。

ああ…読むのが怖いわ。

「そ、そうか。ゆつくり読んでおけ。まだまだ…残り8巻あるからな。」

「はあ…危険なことはやらないでほしいわ…。だから私は冒険者になるのは反対だったのに。」

そのベルが今はレベル6なのよね…。

そんなにポンポンと上がらなくてもいいのに…。

コンコン

ガチャ

あら？セバス？

「お嬢様方、おはようございます。朝食でございます。」

「あら、セバス。おはよう…：ベルは？」

「坊ちやまはダンジョンへ潜るとのことです。ダンジョン制覇をするために慣れなければいけませんから。」

「危険なことほしないでほしいんですけど…。」

「メーテリアお嬢様、ご心痛は理解できます。ですが、それは坊ちやま自身が望んだことなのです。」

「うーん…。」

でも、母として心配なのよね。

私としてはまだあの時の赤子のままなんだけど。

コンコン

ガチャ

「私だ、入るぞ。」

「あら、義母さん。おはよう。……そこのお嬢ちゃんは誰？」

ツインテールで可愛らしい女の子ね！

それにしても……で、でかいわね。

なんで紐で支えているの？

ベルの教育に悪いわ。

「おはよう、メーテリアくん！面と向かって話すのは初めてだね。ボクはヘステイアさ  
！」

「あらあら、お嬢ちゃん。嘘はダメよ？」

「……ホ、ホントなんだぞー！」

「うふふふ。」

自分を神と言うなんてね。

可愛い子ね。

でも、姉さんが微妙な顔しているわ。

どうしたの？

「メーテリア……お前。」

「メーテリア、本当だ。お前の息子の主神がこのヘステイアだ。」

「へ？……本当？姉さん、セバス？」

「事実だ。」

「メーテリアお嬢様。この方が坊ちやまの主神ヘスティア様でございます。」

ええーっ！イメージが違うじゃない！

いえ、待ってよ。

どう見ても女の子じゃない。

雰囲気が同世代とかなり違うけど…、そういう子だっているんじゃない？

「……私の想像とは違うわ。だって、義母さんより年上なんですよ？」

「…ボクはこれでも、ゼウスとヘラよりはるかに年上だよ？」

「そ、そうなの…。た、大変失礼いたしました！この姿勢ですみません！つとと…。」

「あーあーいいよ。そのまま。まあ、仕方がないよ。誤解されるのは慣れてるし。」

「だから、もつと威厳を持つてほしいと私は言っているのだ。」

「ヘラ、ボクはそういうのは好まないと天界にいた時から何回も言っているだろう？」

…本当に神様なのね。

あの最強最悪の義母さんに対してフレンドリーに話しているわ。

お爺ちゃん以外の神はヘコヘコとして話しているか、遠巻きにして話すかのどちらかなのに。

それに義母さんいつもより嬉しそうで、落ち着いている。



本当に義母さんが敬愛しているヘステイア様なのね…。

「え、えーと…。」

「あー！ごめんね。食べながら話をしよう！キミの病状も落ち着いたしね。」

「そ、そうですね。」

そして、私はヘステイア様を中心に食事した。

ヘステイア様は話しやすかった。

義母さんが敬愛しているのも分かる気がするわ。

「ふう…。」馳走様。」

「うむ、なかなか美味かったな。」

「本当だね。半年前とは大違いだよ…。」

「では、お下げいたしますね。メーテリアお嬢様、薬は後で飲んでいただきます。」

「あ、お願いね。」

バタン

ベルの主神に対して、先程失礼なことをしてしまったわ。

ヘステイア様は気にしないようだけど、お詫びとお礼を言った方がいいわね。

「…ヘステイア様、先程は大変失礼しました。私の息子…ベルを拾い、眷属にしていただ

き本当にありがとうございます。」

「いいや、感謝するのはこつちさ。キミの息子には色々世話になってるからね！ここに住むようになったのも美味しい料理を食べられるようになったのも、ぜーんぶベルくんのおかげさ！」

「いえ、あの子には私が長い眠りについてる間に「ん？」大変寂しい思いをさせてしまいました。姉さんがそばにいないのは（ビクッ）、何故かわかりませんが。あの子にとつてヘスティア様に拾われて救われたと思います。」

「そ、そうかい。」

あら？どうして微妙な顔をしているの？

私、変なことを言ったかしら？

『ねえ、ヘラ。メーテリアくんは自分が死んだことを知らないのかい？』

『そうだ…。言わなければならんが、どういうタイミングで言えばいいのかからん。』

『あと、アルフィアくんについてはどうするんだよ？7年前の大抗争、0巻に載っているはずじゃないのかい？』

『まだ、一巻しか読んでないらしい…。』

『は!?!』

『ベルが危険なことに合うたびに気絶するんだ…。』

『…気持ちわかるけど、まだ序の口だよ？この調子では3桁ぐらい気絶してしまうよ？』

『……………。』

ヘステイア様と義母さんが何か話しているみたいだけど、どうしたのかしら？

そうだよ。あの娘についてメツとしないと。

「そうそう、姉さん。お願いがあるけど。」

「何だよ？」

「リリルカ・アーデという小人族を探し出してほしいの、ちょっとオハナシしたいんだけど？」

「……………メーテリア。まずベルの自伝を全部読め。話はそれからだ。」

「えー？」

気が済まないんだけど…。

ベルを騙し、この方へステイア様が身を削ったナイフを盗むなんて…。

事情があつたかもしれないけど、私の息子を騙すなんて。

『へー、オハナシって…。』

『文字通り、お話するだけだ。だが…。』

『だが？』

『その内わかるが、メーテリアのオハナシは私とアルフィアに死の恐怖を味わせるものだ。』

『は!?!』

『この分では、多くの奴らがオハナシすることになるな…。』

『キミとアルフィアさんに死の恐怖を感じさせるって…。』

『ヘスティア…。私のファミリアは「女帝」を中心に、かつて最恐と呼ばれていた。』

『う、うん（具体的に何をしたのかをみんな教えてくれないんだけどな）。』

『最強最悪と呼ばれた私があえて言おう、真の最恐はメーテリアだと。』

『……………ベルくんの自伝を全部読んでから、彼女たちに会わせた方がいいね。』

『その方がいい。死者が出るぞ。』

『死者!?!』

あら?。ヘスティア様が目を瞠目してこちらを見ているわ。

何があつたのかしら?。

ヘスティア様がこちらへ来て優しく言ってくれた。

「メーテリアくん。ベルくんの自伝はどこまで読んだんだい?」

「それが…まだ一巻なの。」

「ええと…読書が苦手なのかい?」

「ううん、得意な方なの。ただ…あの子が危険な目に合うと、その気絶してしまうの。」  
「あー…。なるほど、なら一緒に読んでみるかい？ボクもその気持をリアルタイムで味わったからね…。」

「ご、ごめんなさい！うちの息子が本当に…。」

「いやいや、もう終わったことだしね。どうかな？」

本当にいい女神だわ…。

ベルは本当にいい女神に拾われたのね。

「…うっ…うっ…。」

「ど、どうしたんだい!?いきなり泣いて…（ああ、本当にベルくんの泣き顔とそっくりだ。）」

「ベルを眷属にしてくれた神が貴女で本当によかったです。ああ、本当に神様はいるんですね…。」

「（一応ヘラも神だけど…話してみてわかった。この娘、アイズくんと同じかそれ以上の天然だ。…ボクと一緒に読んで逐一教えた方がいいね。そうしないとあの子達にオハナシしてしまうことになるね…）一緒に見るかい？ボクもバイトがあるから毎日というわけじゃないけどね。」

「お願いします…。」

ここまで優しくしてくれる女神はいないわ。

よかったわ…本当に。

『おい、ヘラ。お前の存在を無視しているぞ。』

『後で叱る。』

『まあ…当時のメーテリアに会った神は全員ろくでもない神だったからな。』

『それは言えるが…納得できん。』

## 第338話 受付嬢、驚愕

私はセバスさんと一緒にメーテリアさんの部屋へ向かっている。  
リリさんたちに大変羨ましがれました。

コンコン

「誰だ？」

「セバスでございます。」

ガチャ

「失礼いたします。エイナ嬢をお連れいたしました。」

「失礼します。」

「ん？どうしたんだい？アドバイザーくんまでも…。」

朝食の場にはいないと思ったら、こちらにいらしてたんですね。

あの方が…ベルくんの実母メーテリアさん。

髪の毛だけでなく、こう雰囲気はベルくと本当にそっくり。

「はい、エイナ嬢の魔法でメーテリアお嬢様の状態を確認したためです。」

「そうか、2日も経っているからな。エイナ、頼むぞ。」

「はい。メーテリアさんですね？息子さんのベルくんの元アドバイザー、エイナ・チュールと申します。」

「あらーアドバイザーのエイナさんね（すごい美人だわ…）！あれ？ギルドじゃなかったの？」

自伝を読んでもくれたのですね。

…私は大丈夫ね。

あ、異端児の時に平手打ちした時以外は。

大丈夫よね…？

いけない、気を取り直して…。

「はい、ギルドで色々とありまして辞めました。「ええっ！」今はこちら「ヘステイア・ファミリア」に所属しています。」

「ど、どういうことなの!？」

「メーテリア。まず自伝を全部読め。」

「まあまあ、アルフィアくん。メーテリアくん、一緒に全部読もう。ボクが知る限り教えていくから。それからだよ。」

「わ、分かりました。」

「では、エイナ嬢。よろしくお願ひします。」



「はい、わかりました。」

【開け 秘密の扉】

【鑑定】

「……………」

死の病は…まだあるね。

2日で初期になるぐらいかかるなんて、最初はどのくらいひどかったの!?

生命力…精神力はかなり充実しているね。うん、順調だね。

ほかは…え？

「ええと？エイナさん？」

「メーテリア、待て。…どうだ？エイナ。」

「はい。メーテリアさんにはまだ死の病が残っています。今、死の病（初期）となってい

ますので数日ぐらいは必要かと。生命力は大丈夫です。あと、その…。」

言ってもいいのかな？

ここに男性はいないし…。

うん、やはり言おう。

同じ女性としては非常に気になるからね。

「正直に言ってくれ。」

「…肥満気味と出ています。」

「ええっ!」「何だと?」

「は?」「へ?」

だよね。

そういう反応になるよね。

「ふむ、ずっとここにいましたからね。毎食残さず食べている上に甘味も結構お代わりしていますからね。ヘラ様とアルフィアお嬢様がいない間に。」

「お前、いつの間に…。」「(サツ)」

メーテリアさんは、甘味が大好きなんですな。

気持ちはわかります。

ベルくんは甘味が嫌いなのに、そこは違うんですな。

でも、寝込んでいるのにそれはしようがないかと思っただら。

「ザルド殿にお願ひして、食事を野菜中心にしてもらいます。甘味も甘さ控えめに変更して量を減らします。」

「ええっ!そんな!野菜はちよつと…。」

「お前、ぶくぶくと太ってベルにどんな格好して会う気だ?」

「うっ……。だ、だって!気怠いだるさや嘔吐がなくなつて、食べるもの全て美味しいん

だもの！以前は食うもの全て苦いものばかりだし寝ているのが苦痛だけど、今はすごく快適なの！」

ああ…なるほど。

それにあの表情のメーテリアさんは、ベルくんが困った顔の時に本当にそっくり。

アルフィアさんが、ベルくんがメーテリアさんに似すぎているというのもわかります。

「あ…気持ちわかるよ。グータラしたくなるのは。」

「ヘスティア、この子をあまり甘やかさないでくれ。グータラ癖をつけさせるのは非常によくない。」

「この部屋の中だけでいいから運動しろ。」

「え…。」

「そうか。ベルにそのこと「わかった！わかったからベルには言わないで！母としての威厳が！」なら、やれ。」

「むー、わかったわよ。」

本当にアルフィアさんと双子なんですわね。

アルフィアさんがお姉さんぶるのも初めて見ます。

「…ベルくんは甘味が嫌いなのに、キミは好きなんだね？」

「え？あの子甘味が嫌いなもの？ダメだわ、好き嫌いは。」

「お前が言うな。」

「あうっ。」

同感です。

逆にベルくんは甘味以外は問題ないみたいだけどね。

「では、まずメーテリアお嬢様にはこの特効薬を飲んでいただきます。」

「わかったわ。ヘスティア様、この特効薬を飲んだら寝てしまうので起きたらお願いし

ていいですか？」

「もちろんさー！」

「では、ゴクゴクゴク……。では、お休み……。スー……。」

すぐに寝ましたね……。

あの特効薬は一回しか飲んでないけど、凄い睡魔が来るよね。

寝顔も……ベルくんこそつくり。

「寝付きがいいね……。」

「いいや、死の病がひどかったときは3日以上寝られなかった時が多かった。」

「強い睡眠薬を飲ませてようやくだが、副作用がひどくてな。」

「だから、こんなに穏やかで寝ているメーテリアは本当に久しぶりなんだ。」

「(死の病…。もしその特效薬がなければ私も母さんも妹も…。)」

あの時、セバスさんが気づいてくれなかったらゾツとするよ。

アルフィアさんが私に向けて頭下げている!?

「エイナ、感謝する。おかげでメーテリアが動き回れる目処がたった。」

「いえ、そんな!」

「だが…肥満気味はさすがに予想外だった。喜ばいいのか嘆けばいいのか…。」

「セバス、お前何故止めなかった?」

「申し訳ありません。メーテリアお嬢様が心からの笑顔を浮かべながらお話ししますと、つい出してしまいました。まさか、肥満気味になるとは思いませんでした。」

「一旦は中止だ。いいな?」

「心得ました。」

……アルフィアさんのあの表情、初めて見る。

ヘラ様も。

お二方がメーテリアさんをどんなに大事に思っているかがよくわかるね…。

でも肥満になるということはよく食べることよね。

アイナ母様も食が細いけど、父様に聞くと以前よく食べてたらしい。

「肥満気味かー。逆に言えばそれだけ元気になったということかな?」

「それはそうだが、死の病が治り肥満が原因で別の病気になったら目も当てられん。」  
「全くだ。…だが、よかった。」

そろそろアイナ母様を呼んだ方がいいかな…？

そしてセバスさんに話しかけられた。

「ああ、エイナ嬢。この部屋への入室許可を出します。今のところ、メーテリアお嬢様のエイナ嬢に対する感情はかなり高いです。」

「え？（本当！やった！）」

「そりゃ、まだ一巻だからね…。」

「まだ、一巻!?!」

「実はね…。」

ヘステリア様より、メーテリアさんの自伝読解状況を教えてもらった。

それは仕方がないと思う。

「なるほど…。メーテリアさんの気持ちはすごく分かります。あの時…いえ今もですが、ベルくんは本当に無茶をしますから…。」

「うちの義孫が本当にすまん。」

「あ、いえ！それでも五体満足で帰ってきてくれたからよかったです。」

「…合格。」

「え?」

「いや、こちらのことだ。」

以前、アルフィアさんもそう言ったみたいだけど、何だろう?

あれ?ヘスティア様がメーテリアさんを見て、ため息ついている?

何だろう?

「全部読み終えるまでは、みんなには会わせない方がいいね…。」

「あの…何故でしょうか?」

「エイナ、その方がいいんだ。そうしないと死者が出る。」

「死者!」

「まだ中層へ潜る前で止まっている。私に、あの参謀に会わせると言ってきたんだ。」

「ああ…その時点のリリさんの印象はあまりよくないですね。」

「そうだ。恥をさらすようだが、メーテリアの怒りは私とヘラに死の恐怖を味わせるぐ

らいのものだ。思い出すだけで恐ろしい…。」

「ええっ! (神ヘラとアルフィアさんに!?)」

「だからだ。あの自伝でベルへ危害を加えた奴ら全てに及ぼすぞ? レベルや性別だけで

なく神に関係なくな。」

「ひっ!」

「今のところ、お前は確実に安全地帯にいる。その他の奴らはまだ駄目だ。自伝を全部読破するまではな。」

「わ、わかりました。」

なら、メーテリアさんは自伝を全部読み終えるしかないね。

リリさんたちを連れてこなくてよかったよ！

『どれどれ、ベルくんの自伝はつと。あれ……？ねえ、へら。』

『何だ。』

『自伝で0巻がないけど？』

『…アルフィアが抜き取った。』

『へ？ああ…なるほど。けど、いつかは絶対にバレるよ？』

『そうだ。どうする気だ？あいつは…。』



## 第339話 九魔姫、衝撃。

エイナがこちらに訪ねてきた。

一息つこうと思つたから、ちようどいい。

いいお茶の葉が手に入ったからな。

「リヴェリア様。数日ぶりです。」

「うむ、そちらはどうだ？大丈夫か？」

「はい、問題ありません。皆様によくしていただいています。アイズさんたちも元気で  
す。」

「そうか、それならよかつた。…で、用件は何だ？ああ、その前にお茶を飲もう。故郷の  
茶葉が手に入ったんだ。」

「リ、リヴェリア様にそのようなことは！」

「私もたまにはしたいんだ。座つて待て。…そういえば、この茶葉もアイナは好きだつ  
たな。」

「……………っ。」

む、どうしたのだ。



単に空気が悪いだけではなかったのか…？

私がそう考え込むと、エイナから話しかけてきた。

「リヴェリア様、今のアイナ母様の状況をご存知でしょうか？」

「うん？ いや、あまりな…。手紙が来ることは来るが、世間話ぐらいだな。」

「2年前に帰郷した時、アイナ母様は寝たきりになっていました。」

「何だ?!? アイナはそんなことを…いやあいつはそれを言う奴じゃなかったな。…許可をもらって、アミッドを連れてアイナのところへ行くぞ。費用は私が払おう。」

あいつめ！ 私に黙っているとはどういう料簡だ！

寝たきりだ?!? 重病ではないか！

会ったら、久々に叱ってやらんといかん。

いつもあちらが小言言っていたから、今度はこっちだ。

そう考えていたら、

「あ、あの！ それについてアイナ母様の病がわかったんです！」

「何…!?!」

病がわかっただと？

今頃にか？

「戦争遊戯前に、セバスさんが私の咳をたまたま聞いてわかったんです。」

「セバス殿が…?」

「…死の病と言われました。」

「なっ…!? 【静寂】と同じ…。」

「…はい。私も気づかない内に死の病の前兆が出ていました。」

「そんな…アイナとお前が。…大聖樹の枝が必要なんだな? 私の命令でかき集めてくる  
!」

「いえ、その必要はないんです。治りましたから。」

「は…?」

いかん…あまりの衝撃で取り乱してしまった。

…エイナの話を最後まで聞こう。

アイズのことを悪くいいえないな。

そして紅茶を入れて一服し、落ち着いた。

親友に死の病が出たのがここまで自分に衝撃を与えるとはな。

「すまん、取り乱した。」

「い、いいえ。」

「ふう…。落ち着いた。話を最後まで聞こう。」

「はい。今だから言いますが、ベルくんがアルフィアさんの甥と知ったのはその時なん

です。」

「…続けてくれ。」

「死の病は遺伝します。それはアルフィアさんもメーテリアさんも受け継いでいます。」

「まさか…ベル・クラネルもか!？」

馬鹿な…!

それでは…彼女たちが…。

顔面蒼白している私に、すぐエイナは話してくれた。

「はい。しかし、セバスさんはベルくんの記憶を読み取れます。それはご存知ですよね？」

「ああ。」

「ベルくんは死の病の兆候がないんです。」

「なっ!？」

「ベルくんは死の病の抗体を持っているんです。その抗体を『ディアンケヒト・ファミリア』のアマッドさん、『ミアハ・ファミリア』のナーザさんに渡し、大抗争の時に残った大聖樹の枝、カドモスの泉、ベルくんの血で、死の病の特効薬ができたんです。」

「……………」

そうだったのか…。

彼のおかげで…死の病の特効薬ができたのか。

はっ、だからエイナはそのことを言ってくれたのは…。

「そのため、私は先程言った特効薬で完全に治りました。アミッドさんのお墨付きです。」

「…：…：そうか、あの時点でアイナは死の病にかかっていたのか。気づかない私が愚かだな。」

「リ、リヴェリア様のせいではありません！」

「エイナ、私はアイナの親友だ。あの時の私は余裕がなかったとしても気づくべきだったのだ。」

「リヴェリア様…：…。」

そうだ。

当時暗黒期やアイズのことと視野が狭くなっていた私が、アイナの体調まで気を配るべきだったのだ。

里を出た同志だということにな。

親友失格だ…。

…：…：そうか。先日会った【静寂】が妙に強く感じたのは死の病が治ったということなのか。

「…なるほど、今更だがわかった。今の【静寂】はその特效薬で完治したのだな？」  
「はい、そうです。」

「そうか、【静寂】の双子の妹もその薬があればな…。」

「あの…その…。」

「ん？ああ、【静寂】には双子の妹がいたのだ。名前はメーテリア…。待て、お前は先程メーテリアと言ったな？」

「…先日ベルくんのスキルによって、この時代へ連れてきて復活して今は治療中です…。」

「……………」

頭が痛くなってきた…。

そうか、彼の実の母もこの時代へ来たのか。

しかし、何故今頃なのだ？

条件が足りなかったのか？

「すみません。先に言うべきでした。」

「いや…何故今頃…。ああ、そうか。神ヘラと神ゼウスが帰ってきたからか。」

「はい、2日前です。」

「そうか、それはよかった。……話がかなり脱線したな。それでアイナをここへ連れて

くるのはそれが理由なんだな？」

「はい、ただセバスさんに言うのと、私よりアイナ母様と親しかつたりヴェリア様が呼び寄せた方がいいとのことでした。利用するようで申し訳ありません！」

「いや、いい。よく言ってくれた。アイナの性格上、娘のお前よりアイナの上司でもあり親友でもある王族妖精の私の方が強制力があるだろう。早速文を作る。待ってくれ。」

「あの…そんなに急がなくても。」

「いや、急ぐ。」

何故か知らんが、それを聞いたからには急がなければならぬ気がするんだ。

それに…先日の戦争遊戯によるオラリオ連合で、オラリオが1つにまとまったことにより余裕が出てきた。

アイズやレフィーヤが改宗したからかもしれないが、アイナのことがよく浮かぶようになった。

もつと早くすべきだった！

「今はオラリオ連合で、オラリオ全体がかなり安定している。それに…。」

「それに？」

「私が久々にアイナと会いたいからだ。」

「リヴェリア様…、ありがとうございます！」



「礼を言うのはこちらだ。…死んでからでは遅いからな。ああ、そうだ。家族ごと呼び寄せよう。その方がいいだろう?」

「…はい。妹もかかっている可能性が高いです。」

「では、尚更だ。早ければ早いほどいい。」

ああ、そうだ。

親友の死なんぞ遭いたくないからな。

お前の亡骸なんか、見たくもない。

空気のいいところへ行つて、寝たきりになるなんて意味がないではないか!

オラリオへ戻ってきてもらうぞ。

【戦場の聖女】 がいる上、死の病の特効薬があるからな。

「あの…ロキ様に許可はいいのでしょうか?」

「問題ない。アイナも夫であるウイナも【ロキ・ファミリア】だからな。」

「ありがとうございます!」

「先程言つたが、礼を言うのはこつちだ。…いや、セバス殿とベル・クラネルに言うべきだな。私の親友の病を見破り、救うきっかけをくれたのだからな。」

ああ、そうだ。

セバス殿を解放したのはあの少年だ。

本当に借りが多くできてしまったな。

いつかは返さなければならぬが、今回は特に大きい。  
私のかげがえのない親友なのだからな。

どう返すべきだろうか…。

## 第340話 道化神、呆然。

ウチはリヴェリアから、アイナたんのことを聞いた。

死の病と聞いた時、心臓が止まるかと思ったわ。

ディアンケヒトとミアハ、そしてヘラの気持ちがちよつぱりわかったわ…。

キツイわ、コレ。

「…ということだ。ここに印押ししてくれ。」

「わかった。…まさか、彼女が死の病にね。」

「あのアイナがのう…。」

「糞爺と最悪女に感謝する時が来るとは思わなかったわ…。いや、ベルたん感謝せなあかん。」

…恩恵があるからまだ生きとるはずや。

頼むから、オラリオへ来るまで生きとれよ。

しかし…アイナたんがオラリオから出る時に何で気づかなかったんや！

ウチの責任や…。

あの時、ディアンケヒトとミアハに診てもらわうべきやったんや！

「全くだ。聞けばこの特効薬はエイナの咳がきつかけだそうだ。」

「【最恐執事】が気づかなかつたら、【静寂】も復活できなかっただろうね。」

「例えおらんかったとしても、あの二人が手を組んだら勝てる気がしないのう。」

そやな…。

【静寂】やベルたんの母ちゃんをずっと見てきた【最恐執事】でなきや気づかんわな。

【最強侍従】と【最恐執事】が解放された時点で終わっとつたわ。

だが、それが良かったかもしれないわな。

こうして今のような結果になつとるんやから。

…やから、ウチは今ビビつとるんや。

「はあああああ〜最悪女がおるだけで気が休まらんわ。…それにしても大人しゅうしとるな?。」

「僕もそれが疑問だよ。いつ【ロキ・ファミリア】へ来るか戦々恐々しているよ。なのに、来ないのが妙だよ。」

「同感じゃ。そろそろ、警戒態勢解いてもいいじやろう? ベートたちが愚痴言つとつたぞ。」

「そうだな……。嵐の前の静けさなのか?。」

やめてや! 怖いねん!

イケロスの馬鹿を送還した時を思い出したら、ブルつと来るんや！  
ん？何かうるさくないか？

ひっ…どうとう来たんか…。

「…？何だか騒がしいね。」

「倉庫の方からじゃな。」

「最悪女がどうとう来たんかいな？」

「行ってみよう…。」

ウチを置いていかんといてー！

そこには…狼と猫がおでこコツツンコしとった…。

「ああ？糞猫が何でここにいやがるんだ？」

「あん？野菜を持ってきたというのに何だ？その態度は？」

「ベートさん…やめましようよ。」

「兄様！そろそろいい加減にして下さい！」

「「……………」」

…何やねん。

それにアーニヤたん、口調変わつとらん？

その光景にウチは呆れとつたら、デメテルがおつた。

「あら、ロキ。」

「あ、ああ。デメテルか。どないしたん？」

「いえね、野菜を運んでいる時に、【凶狼】とうちのアレンがかち合ってね…。」

「「ああ……。」」

…人選、間違うたかなあ…。

そしたら、デメテルが心配そうな顔見せとつた。

「それにどうしたの？ 厳戒態勢をとつて…今はまだ平和よ？」

「いや、だつて…ヘラが来とるやん。」

「ああ、なるほど。大丈夫よ。」

「「は？」」

え？ 何でそんなに断言できるねん！

ヘラやぞ！ヘラ！

あの最強最悪女やぞ！

「デメテルも知つとるやろ…。ヘラがこのまま大人しゆうしとるわけがないということ。」

「そうね、15年前までのヘラならね。でも、今のヘラなら問題ないわ。」

「…神デメテル、その根拠は何だろうか？」

「ヘステイアよ。」

「「は？」」

「なんで、そこにドチビが出てくるねん…。」

「そーいや、こないだヘラはドチビの言葉で大人しゅうしとったな。」

「オリンポスでは暗黙のルールとなってるけど、ヘラに会いに行く場合はヘステイアを連れて行けというのが常識なの。」

「…何故じゃろうか？」

「ヘステイアはヘラが唯一対等に話せる女神でもあり、ヘラの感情全てを受け止められる、ただ一柱の女神でもあるの。」

「…：…そうだったのですか（アイズたちを改宗させて正解だったな。あそこは安全地帯だからな）。」

「信じられへんわ…。」

「どう考えても、なんであのドチビがヘラを制御できるねん…。」

「なんでやねん…。あのドチビが…。」

「ヘラはね、同郷の私達でも心を許していない。むしろ敵意を向けている方ね。」

「貴女でもなのか…。」

「ええ、それだけ嫉妬深く感情が激しい。でも、ヘステイアは別。分かると思うけど、ヘ

スティアはあらゆるものに対して平等に接する…そして天界で悠久の聖火を管理できる唯一の女神でもあり、処女神でもある。正直に言くと、オリンポスはスティアありきと言っても過言ではないわ。」

「…そうだったのか。」

…それはわかるねん。

あのヘラをどうやったら手懐けられるのかを知りたいねん！

そやったら、簡単な話と思っとつたら。

「まあ、そもそもヘスティアを連れて行くのが難易度高いけどね。」

「…は？」

「ロキは知っていると思うけど、ヘスティアは天界でもかなりのグータラよ？一度寝たら800年は当然ね。行っても「寝ていますから」で門前払いよ。タイミングがわかるのはアルテミスとアテナだけね。」

「「……………」」

寝すぎやろ…。

それに何でタイミングがわかるねん！

ツッコミどころが多すぎるわ…。

「話がそれたわね。とりあえずヘスティアがヘラのそばにいる限り、15年前までのへ



ラのようになることはないわ。それは断言できる。」

「何故、神ヘラが降臨する時に一緒にいなかったのだろうか？」

「ヘステイアがまだ寝ていたから。」

「……………」

15年前までのウチらの苦勞は、ドチビのグータラのせいやったんか！

ドチビいいいい！

その時、ヘステイアのツインテールが何かを感じたようにビビツと動いた。

「??？」

「どうした？ヘステイア。」

「いや、ね。何か髪の毛がビビツと感じたんだ。気のせいかなあ…。」

「糞神どもだな？よし…今からでも」

「やめなよ、言わせたい奴には言わせときなよ？キミはメーテリアくんたちのことを考えなよ。」

「むう…。」

ウチが心の叫びをしている間に、デメテルが言いおった。

「わかりやすく言うなら、ヘラは猫ね。ヘステイア以外には絶対には懐かない。だから、オリオにいるオリンポスの神のみんなは、ヘラが「ヘステイア・ファミリア」にいるので安心しているの。」

「そうやったんか…。はあああ〜うちの取り越し苦労やんけ!」

「更にヘラの義孫である兎さんにも溺愛しているっぽいから、天界にいた時よりかなり穏やかなね。それ以前にあの兎さんがここまで活躍しなかつたら、あり得なかつたでしょうね。」

「…ベル・クラネルにあらゆる意味で感謝しなければならんな。」

「借りがどんどん膨らんできて返せないよ…。」

「がははは! いいではないか。儂等オリオ連合の中心がそうではなくてはならん!」

それはそうやが…。

あまりにも規格外やねん!

どんだけ秘めとるんや!あの少年には!

「ベルたんが神に思えてきたわ…。ウチ、神やけど。」

「…それは同意するわ。」

全くや!

ん?あー、狼と猫の喧嘩が収まったかー。

「デメテル様、そろそろ他のところへ行かないと……。ミア母ちゃんを待たせると怒られますので。」

「あら、ごめんね。じゃあね、ロキ。」

「おー、ありがとさん！」

デメテルのおかげやな。

は……。疲れたわ。

「……みんな、厳戒態勢を解くよ。今日はくつろいでくれ。」

「ちっ……。ダンジョンに潜ってくる！あの糞猫のせいだ！」

「私も行きますー！」

「……遅れるんじゃないぞ。」「はい！」

……リーネたんもベートに積極的になっとなー。

そういや、レナたんはどうしたんねん？

---

その頃、レナは【ヘルメス・ファミリア】のアイシャによってこき使われていた。

「ベートおとおお！」

「うるさいよ！キリキリ働きな！」

「ふぎやー！」

ふー、安心しとったわ。

「さて、アイナへの手紙を速達便で送らないとな。…馬車も手配しておこう。」

「そうだね。僕も彼女とウイナと久々に会いたいね。」

「酒を用意しておこう。ロキ、お主は飲むんじゃないぞ。」

「何でやねーん！外でええやん！」

あいつら、元気でいるかなあ…。

頼むからオラリオへ来るまで持つとつてくれよ。



〈数日後〉

「アイナ…、リヴェリア副団長から手紙が来たぞ。」

「ケホツ…ケホツ…：あら。どうしたのかしら。」

「…：オラリオへ来いとのことだ。上等な快速馬車も手配済みだそうだ。…：どうする

？」

「…：もう体が動かないわ。…：けど、最期にリヴェリア様には会っておきたいの。怒ら

れるだろうけどね。」

「…：そうだな。エイナにも会いたいな。」

「…ええ、オラリオで息を引き取るのも悪くないわ。」  
「母様…。」

## 第341話 九魔姫、蒼白。

速達便で送ると同時に馬車を手配したからな。

さすがにあいつらでも拒否はできない。

宿も念のため予約しておいた。

「そろそろ、着くと思いますけど……。」

「そうだな。む、見えてきたな。」

「ええ。久しぶりです、みんなと会うのは。」

……そうか。エイナはギルド嬢で忙しい毎日だったな。

最初に出てきたのは、ウイナ・チュール。

「エイナの夫であり、『ロキ・ファミリア』団員でもある。

私と並ぶぐらいの古株だ。

む、エイナに似ている子がいるな。

手紙だけだったが、確かイーナ・チュールだったか？

「エイナ！久しぶりだな！リヴェリア副団長もお久しぶりです。」

「父様もお久しぶりです。イーナも元気……そうね。」

「姉様も久しぶりです。初めまして！イーナ・チュールと言います。」

「うむ。ところで…アイナは？」

「(トト)よ…。」

!?

馬鹿な…：死の病がここまでお前を蝕むとは…。

「お前…：そこまで…：そんなに、やつれて…。」

「ごめんなさい…。リヴェリア様、ずっと黙ってて…。」

「この…：馬鹿者が！エイナ！」

「…：っ！危険です！」「ディアンケヒト・ファミリア」へそのまま運んでください！」

「エイナ？」

「わかった！御者！そのまま「ディアンケヒト・ファミリア」へ向かってくれ！至急だ！」

くそっ！もつと早く呼び寄せるべきだった！

【ディアンケヒト・ファミリア】治療院の前にはアミッドが待つててくれていた。

「お待ちしておりました。エイナさん、どうですか？」

「危険です！死の病（死期）になっています！」

「…：っ！わかりました。こちらへ！」

なっ！（死期）だと！

ウイナとアイナ、そしてイーナはそんな私達を見て慌てていた。

「お、おい…：エイナ。」

「父様は黙ってて！至急だから！」

「ちよつとエイナ…：。」

悪いが、邪魔はさせせん。

「黙れ、アイナ。霊薬実はどうした！送ったはずだろう!?」

「あの霊薬実のおかげで…：ここまで命永らえたのです…：。感謝しています…：。」

「感謝するなら、治してから言え！こんなになるまで何故言わなかった！」

「申し訳ありません…：。リヴェリア様の…：足手まといには…：なりたくありませんでした。」

「大馬鹿者が！親友に足手まといもあるものか！」

アイナにそう言っているが、私は自分が悔しい。

親友がこうなるまで、私は自分のことしか考えていなかったのだ。

不甲斐なさすぎる！

『エイナさん、ベルさんには会っていませんね？』

『はい、ベルくんは稽古にいるはずです。』

『なら、問題ありませんね。』



そして準備がようやく整った。

「さて、アイナ・チュールさん。これは死の病の特効薬です。」

「…えっ!」

「まずは飲んでください。」

「私が飲ませよう」「あの…」 黙れ、これは罰だ。」

アミッドから受け取った特効薬を無理矢理アイナに飲ませた。

どうせ、言い訳とか作って延ばす気だろう。

そうはさせん。

「ちよっ…ぐえっ…ゴクゴクゴク。」

「あ、あのリヴェリア副団長…?」

「待て。…どうだ? エイナ。」

「…死の病(末期)です。先程よりはマシになっているはずです。」

…エイナの魔法は有用すぎるな。

非常に惜しい。

…いや、彼がいなければ発現しなかつただろうな。

様子を見ると、アイナの血色が少しよくなった。

「ぶはっ…ちよっ」とリヴェリア様…。あら?…かなりマシになったわ。」

「危機は切り抜けたか…。すまないがアミッド、診察をお願いできないか？」

「わかりました。男性は外へ出てください。」

「え？あ、はい。」

そして、アイナはアミッドによって診察してもらった。

最初は険しい顔していたが、ホッとした顔になった。

…何とかなったか。

「エイナさんの見立ての通り、末期ですね。当分は特効薬を飲んだほうがいいですね。」

「ねえ…どうなっているの…？…つ、すごい眠気が…。」

「そのまま寝て下さい、アイナ母様。起きたら説明しますので。」

「わ…かった…わ。」

そしてアイナはすぐ眠りに落ちた。

安心したような、穏やかな寝顔だった。

…こつちが安心したぞ、馬鹿者め。

「寝たか…。危機一髪だったな。」

「ええ…もつと早く呼び寄せるべきでした。」

「いや、仕方がない。お前の手紙では来なかつただろう。私でなければならなかつた。」

「あ、あの…姉様？一体、どうなっているのでしょうか？」

「そうね……どこから説明したらいいのかしら？」

そうだな……。

かなり紆余屈折した内容になりそうだ。

そしてウイナが様子見に来た。

「アイナは……無事なのか？」

「はい、父様。今はぐっすり寝ています。」

「寝ている？……本当だ、こんなに穏やかな寝顔は久しぶりだ。」

……今までは苦痛に耐えて寝ていたのか……。

あとでウイナにも叱らねばならんな。

エイナがウイナに向かって、怒ったような顔で話した。

「……死の病と知ったのはいつですか？」

「……二年前だ。お前がオラリオへ戻った後、病状がいきなり重くなつてな。医者に診て

もらつたら死の病だった。」

「何故！その時に言わなかったのですか！」

「言おうと思った……。だが、アイナが反対した。お前の足手まといになりたくはないとな。」

「親友である私にも娘にも足手まといか。全く……起きたら、再び怒ってやらないとな。」

お前もだぞ。」

「ほ、程々にお願ひします…。リヴェリア副団長。」

駄目だ。

私にも知らせず、こうなったのはお前の責任でもあるのだぞ。

「そういうや、仕事はどうだ？」

「アイナ母様が起きたら、話します…。父様、今のオラリオがどうなっているのか知っていますか？」

「いや、情報が全く入らないからな。お前が帰郷した時しか知らない。あのアイズちゃんレベル5になつたぐらいな。」

「そこで止まっているのか…。」

「へ？」

二年…。半年前までは大したことはあつたが、ここ半年と比べると大したことはない。

ここ半年が非常に濃厚すぎるのだ。

どう説明したらいいだろうか…。

## 第342話 受付嬢、安堵。

よかった…本当に。

まさか…死の病（死期）があるなんて。

危なかった…。リヴェリア様に感謝しないと。

あ、いけない。

やっておかないと。

「ああ、そうだわ。イーナ、貴女も飲みなさい。」

「え？な、何で？」

「死の病は遺伝するの。私もかかったから。」

「な、何だと!？」

「そしてイーナ、貴女にも死の病（前兆）が出ている。」

「何で…そんなことがわかるの？」

「視えるから。」

「「え？」」

「詳しいことは後で説明します。」

私の魔法だから、と言うのは簡単だけど。

問題は発現したきつかけなのよね…。

ギルドを辞めて、「ハスティア・ファミリア」に入団して、ベルクんの血を飲んで発現しました…なんて、簡単に言えるわけじゃない！

特にウイナ父様は…。

アミツドさんから特効薬を受け取った。

本当は希少なんだけど、私の魔法で色々とお手伝いしているからとのこと。

ベルくんにはあらゆる意味で感謝しないとイケないよね！

「はい、こちらです。」

「…グビ、ゴクゴクゴク…。」

「…。ほっ…消えました。」

「では、確認します。」

よかった…。

これで家族全員助かった…。

死の病に苦しんでいる他の方には悪いけど…。

アミツドさんにもう一度診察してもらった。

「はい、確にかかっていますね。まずは一安心ですね。」

「はい。」

「……何がどうなっているんだ？せめて状況ぐらいは説明してくれ。」

「……アイナが起きたら説明しよう。旅で疲れただろう？宿を用意しておいたからそこへ泊まってくれ」

「あの……私が説明しますが……。」

「アイナの性格上、お前が説明すると激昂するのは間違いない。私にした方がいい。」

「……お手数をおかけします。」

「何があつたんだ……。」

ウイナ父様。本当に色々とあつたんです。

そして翌日。

母様はあの数時間後に起きて、すぐ夕食を食べて薬を飲んでまた寝たらしい。

そして朝食を食べて薬を飲んで寝て、今起きたばかり。

ものすごく血色がよくなっている。

すごいね……この特效薬。

「おはよう！かなり楽になったわ！」

「……確かに死の病（中期）になっています。」

「そうか、昨日は昼、夜、そして今朝に飲んだからな。…何とか越えたか。」

「それより、どうなっているの？ エイナ、説明して頂戴。」

「私がする。」

「え？ リヴェリア様に説明していただかなくても…。」

「いいから、聞け。お前たちもだ。」

「は、はい。」

まだ怒っているわ…。

そして、リヴェリア様は半年前までのことを話してくれた。

「…と、それが半年前の話だ。」

「なるほどー！でも、それが今とどうつながるの？何で、この半年間のことを省いているの？」

「…この半年間は、私の人生でもかなり濃かった。お前と里を出た時より数百倍ほどな。」

「ええっ?! そんなに!?!」

まあ、そうだよな。

濃すぎるのも限度あるよね。

リヴェリア様は一旦考えた後、意を決して話してくれた。



「結論から言おう。今のオラリオ最強は【ヘスティア・ファミリア】の一強だ。私達【ロキ・ファミリア】は敗北し、【ヘスティア・ファミリア】を中心としたオラリオ連合に組み込まれた。かつて敵対した【フレイヤ・ファミリア】は解散した。」

「は？」

うん、まあそう反応するよね。

「今、エイナはギルドを辞めて【ヘスティア・ファミリア】にいる。」

「はあ!」

…あのギルド長が悪いもん。

まあ、今となつては感謝しているけどね。

今のギルド長を知つたら、どう思うんだろう…。

「お前たちが飲んだ特効薬はオラリオ連合で作られたものだ。特に【ヘスティア・ファミリア】団長のベル・クラネルによつてな。」

「誰!」

…ちよつとムカツと来ちやつた。

あー私、もうベルくんにも心も落ちているわ…。

やはり、父様も母様もパニックっているわね。

「突っ込みどころが多すぎるわ! 【ヘスティア・ファミリア】って聞いたことないわよ!

オラリオ連合って何!?!「ロキ・ファミリア」が何で傘下に入ったの!?!あのレベル7の【猛者】がいる【フレイヤ・ファミリア】が解散した!?!ありえないわ!」

「……そんな…団長たちが…、あの【猛者】が負けた?」

「お前たちがそう思うのも無理もない。だが、事実だ。」

まあ、そうだよね。

当時二大最強ファミリアが両方とも陥落したからね。

誰も予想できないよね、私達以外は。

そしたら、イーナがとんでもないことを言った。

「あの…ベル・クラネルって…【白兔の脚】ですか?」

「!?!イーナ!何で知っているの!」

「え?う、うん。その…村のお祭りで吟遊詩人が語ってくれたの。」

「おい、イーナ。あの詩人の言ってたことか?フカシ話だろ?」

「…父様、フカシではありません。」

「ひっ!」

フカシですって!?!

ベルくんの立ててきた苦労や痛みを何だと思ってるんですか!

落ち着いて…それよりイーナがどこまで知っているかだわ。

「イーナ、それはどこまで聞いているの?」

「えつと…冒険者になったばかりのレベル1がミノタウロス強化種を倒してレベル2になつて、レベル3の強い人を一対一で倒してレベル3になつたり、ぐらいかな? 時間がそんなにないからそれしか聞けなかつたから…。」

「ははは、ありえないでしょ? レベル1の駆け出しがミノタウロス強化種を倒すつて、そんなの記録をごまかしていると思えないわ。」

「アイナ母様、それは私を侮辱しているのですか?」

「ひっ…な、何で貴女が怒るの?」

アイナ母様に対して、こう怒るのは初めてかもしれない。

でもそれだけは譲れない。

もう明かしてもいいよね?

「…ベルくん、いいえ【白兎の脚】…【ヘステイア・ファミリア】 団長ベル・クラネルのアドバイザーが私だからです。」

「「えええつ!」」

うん…まあ、驚くよね。

…イーナまでも。

## 第343話 側近（母）、勘付。

私は娘の言う事に驚いた。

信じられない！

たったの…一ヶ月半でレベル2？！

「ま、待って！じ、事実なの!？」

「う、嘘だよな！」

「残念ですが、事実です。ベルくんはたった一ヶ月半でレベル2となりました。」

「く、来る前に経験値を積んでいたとか？」

「いいえ、あり得ません。私が確認しました。全てアビリティが0からスタートしました。」

…この娘が確認し、そういうなら確かなのでしようね…。

でもね…。”咆哮”を使うミノタウロスにレベル1は耐えられない。

その強化種でも尚更よ！

「…だといって、ミノタウロス強化種はあり得ない！そ、そうだ！大勢でやっつてとどめを刺したのがそいつだとか？」

「それよ！」

ええ、それしかないわ。

と思っただけ……それを否定されたわ。

これ以上ない御方に。

「それはない。」

「へ？」

「私が証人だ。いや、フィンもアイズも証人だ。あの少年はレベル1で、1対1でミノタウロス強化種と戦い、そして勝ったのだ。目の前で見た私が保証しよう。見事な戦いだったぞ？」

リヴェリア様が……直接見た？

自他と共に厳しいこの方が嘘や誇張をするわけがないわ……。

それは私が一番よく知っている。

死の病とは別に、頭が痛くなってきたわ……。

「……………リヴェリア様がそう言われるなら事実でしょうね。その子のアドバイザーが貴女？」

「はい。」

「ど、どんな奴なんだ？賢そうなエルフか？いかついドワーフか？または屈強な獣人か

「？」

「ただのヒューマンです。」

「エイナ、説明が足りないぞ。たったの14歳の少年だろう？」

「ええっ！14歳!?!」

「え？わ、私と同じ年？」

それなりの経験を積んできた戦士あたりと思つてたのに、まだ子供じゃない！

しかもイーナと同じ年!?!

受け入れましょう。

ええ、一ヶ月半でレベル2になるなんて。

「凄いわね…。リヴェリア様とエイナが言うなら確かね。たったの1ヶ月半でレベル2になるなんて。」

「ああ…。レベル3と1対1はさすがにないですよね？」

「あつたぞ。」

「……………」

勤弁してよ…。

私がない間に何が起こつたのよ…。

何がそうになったら、レベル3とタイマンするのよ…。

「レベル2になって1ヶ月後に、「アポロン・ファミリア」と戦争遊戯がありました。100を超える団員たちと「100人!」、レベル2以下の4名と助っ人1名「たったの5名!」で攻城戦がありました。なお、それは神の鏡で公開したはずですが、そちらは見えないのですか?」

「私達のところには神様がいないから…。」

「そうか。だがその戦いで彼らは制し、ベル・クラネルは団長の【太陽の寵童】レベル3と1対1で戦い、勝ったのだ。それは世界中が知っているぞ。」

何でうちの村に神様がいなかったのよ!

見たかったわ!

……リヴェリア様の言うように濃いわ。

「頭が痛くなってきたわ…。…え?それは二ヶ月半前?今はまだレベル3よね?」

「も、もう俺たちの1レベル下…。」

「違います。」

「「え?」「」

……まさか、もうランクアップ?

私達に…並んだ?

そしたら、リヴェリア様がため息つきながら衝撃の事実を明かしてくれた。

「…三週間ほど前に「ヘステイア・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯があった。」

「「ハア!?!」」

な、何で…最強派閥が二つがかりで…。

でも…さすがに敵わないでしょうね。

あれ？

さつき…今のオラリオ最強は…「ヘステイア・ファミリア」と言わなかった…？

「ベル・クラネルは、その時レベル5だ。「レベル5!?!」レベル8にランクアップした【勇者】と一対一で戦い、勝ったのだ。今、彼はレベル6だ。実力的にはレベル9に相当するだろうな。」

「…二ヶ月半で何があったのよ…。濃すぎるわ。」

「すげえ…。」

「す、すごい…。レベル9…。」

…レベル4どころでなくレベル5にランクアップ？

リヴェリア様がオラリオへ来て数十年苦勞してレベル5になった、というのに…。

しかも、レベル8にランクアップした【フレイヤ・ファミリア】の【勇者】をタイムンで倒した!?!それで、レベル6にまたランクアップ!?!



何て子なの…。

「…え？待って。エイナは今、その【ヘステイア・ファミリア】にいて…。その前は、彼のアドバイザーをやっていた？貴女、まさか…。」

「アイナ母様、父様、イーナ。私はその時のギルド長の決定に納得できずギルドを辞めて【ヘステイア・ファミリア】に入団したのです。」

「…ギルドの豚のことは後で聞いわ。貴女、彼に惚れたわね？」  
「な、なんだと!？」

ええ、エイナの今までの反応…間違いないわ。

この娘がさっきまで怒っていたのは、それしかないわ。

「……はい。アイナ母様、私はこの半年で彼のアドバイザーとなり、彼の成長ぶりをずっ  
と見てきました。私は彼と共に生きたい…彼を愛しています。」

「わあ…姉様、本気だ。」

「だ、駄目だ！許さん！」

「貴女は黙ってて。…本気なのね？」

「はい。例え勘当されても、です。」

…本気だわ。

エイナにようやく春が来たわ！

死の病どころじゃないわ！

ウイナがかなり焦っているわね。

「ま、まず会わせろ！話はそれからだ！」

「そうね。会った方がいいわね。でもエイナ、私はエイナを応援するわよ？」

「アイナ!？」

「貴方、エイナはこれでも人を見る目はあると思うわよ？そのエイナが惚れた彼を見てみたいのは確かだけど、私は異存ないわ。だって、私達も同じようなものでしょ？」

「ぐっ!?だ、だが…。リ、リヴェリア副団長はそいつを知っていますよね!?どんな奴なんですか!？」

「一言で言うなら…：純粹無垢だな。」

「「は?」「」

じ、純粹無垢?!

え?14歳なら…：それなりの子と思うんだけど。

堅物のリヴェリア様が純粹無垢と言うほどなんて…：どんな子なの!?

半年過ぎでレベル6になったのに、純粹無垢!?

想像できないわ!

エイナの件は別にしても、会いたくなかったわ。

## 第344話 側近（母）、謝罪。

そう思っていた私に気づいたのか、リヴェリア様は言った。

「私がどうのこうというより、お前たちが会ったほうが早いだろう。だが、私があえて言う。彼はオラリオで：いや世界で一番純粹無垢な少年と言つてもいい。アイナ、お前が会えば一目で気に入るはずだ。私が保証しよう。」

「リヴェリア様がそこまで言うなんて：、ますます会いたくなつたわ。」

「(!?) 治つたらすぐに帰つてほしいんですけど：。」

あら：：？

ふふふ、あのエイナがヤキモチ焼くのを初めて見たわ。

でも、駄目よ。

どうしても会わなければならないわ。

だって、ねえ？

「：へえ〜ふーん、なるほど。貴女がそこまで熱入っているんだ。義息子との対面は必要でしょ？」

「義息子だと!？」

「義息子!？」

「え？ 私のお義兄様？」

当然でしょう。

ここまでの有望株なら婿として申し分ないわ。

義息子と聞いて何かを妄想しているわね、この娘。

「えへへ……はっ！ ま、まだ早いです！ 彼はまだ14歳です！」

「エイナ……遅かれ早かれ会うことになるだろうが。諦めろ、このアイナに火が付いてしまった以上はな。」

「そ、そんな……。」

リヴェリア様はよくわかってるわね。

でも、リヴェリア様は私に向き直して厳しい顔をした。

「アイナ、まずは病を治せ。話はそれからだ。」

すっかり忘れていたわ……。

そういえば、飲んだ特効薬は義息子のよね？

……何か背徳感を感じるのはいかいら？

イーナが興奮気味にアイナと話しているわ。

「姉様、姉様！ 私はお義兄様に会ってみたいです！」

「(お義兄様!?) 駄目よ!…イーナ、貴女は母様と父様の面倒を見てほしいの。仕送りは今まで通り私がするから。ね?」

「ずるいです!」

「ずるくありません!」

まあ、私はイーナに賛成ね。

だって、半年過ぎでレベル6になったのはあの最強と最恐にもいなかったもの。

その子のアドバイザーだけでなく、同じファミリアとして側にいるから羨ましいわ!

……義母として同居もありね!

「ここでは静かに願います。さつきからずっと黙っていました。我慢の限界です。」

「申し訳ありませんでした!」

「ここが治療院であることを忘れていました!」

申し訳ありません!

あ、肝心なことを聞かないと。

「アミッドさん…、私はどのくらいで治るかしら?」

「(チラツ…) そうですね…。様子見も含めて一週間ほどすれば大丈夫でしょう。」

「…あっさりと治るのね。エイナ、この特効薬のお礼もしたので会ってもいいでしょ?」

う?」

「私がしますから、不要です。」

「…どうしても会わせたくないのね？」

でも手遅れよ。

リヴェリア様を焼き付けて、森から出た私を舐めないでね！

「そう言われると会いたくなかったわ。イーナ、そう思わない？」

「はい！母様！私も会いたいです！」

「と、父様！」

「お前も知ってるようにアイナとイーナが言った以上、今の俺には権限ないんだ…。許せ…。」

「お前…今もなのか。」

まあ…ウイナの性格上はね。

「三人の一週間の宿泊費用は私が持とう。呼び出したのは私だからな。」

「あの…私が払いますが…。」

「エイナ、私は親友としてアイナを呼んだんだ。なら、そのぐらいはいいだろう？」

「ありがとうございます…。」

リヴェリア様…感謝しかありません。

「私、オラリオへどうしても来たかったです！父様！」

「10年以上前だからなあ…。当時と比べるとかなり変わっているからなあ。」

「じゃあ、姉様！」

「イーナ、私は今【ヘステイア・ファミリア】にいるの。大人しく宿にいて？」

「ぶー！」

そうね…かなり雰囲気が変わっちゃっているもの。

…暗黒期が終わったのはいいんだけど…それが同胞の手によるものと聞いたら複雑ね。

リヴェリア様も悔しかったでしょうね。

ここにいたら退屈ね、と思っていたら。

「なら、ベル・クラネルの自伝でも見たらどうだ？」

「『自伝?!』」

「リ、リヴェリア様! 待って下さい!」

…自伝?

まあ、半年過ぎでレベル6に至ったら物語が出てもおかしくはないわね。

それに…エイナのこの反応。

何かあるわね?

「ああ、そうだ。オラリオではベル・クラネルのファンクラブの店が多くあるぞ? ベル・

クラネルのことを知れたかったらそっちへ行つたほうがいい。」

「わあ……、行きたいです！」

「駄目だったら駄目！」

「ぶー！」

フアンクラブもあるのね……。

病が治つたら行つてみましょう。

義息子となるからにはね。

そうウズウズとしていたら、アミッドさんが教えてくれた。

「あの……ここには彼の自伝を貸し出していますので、いかがでしょうか？（ディアンケヒト様が彼の宣伝のため、数部買いすぎたのがあるだけです。）」

「!?」

「あら、ちようどいいわね。イーナ、よかつたわね？」

「はい！」

ふふふ、レベル3になつてからの二ヶ月半すごく気になっていたの。

丁度いいわね。

更にダメ押ししましょう。

「それに、エイナが世話になつているヘステイア様にも挨拶しておかなくてはならない



わ。」

「そ、それは!」

「あら? 娘がお世話になつてゐる主神様に、親が挨拶するのは当然でしょ?」

「ぐっ!」

よし、勝つたわ。

あ、肝心なことを聞いておかないと。

「リヴェリア様、神ヘステイアはどのようなお方でしようか?」

「わかりやすく言えば、ロキと対極に位置するお方だな。」

「とりあえずは安心ね!」

「(ロキ様は変わらないということだな...)」

ええ、そうね。

よ。だから、ロキのようなセクハラ酔っ払い神のところに愛娘を行かせたくなかつたのよ。

その対極...なら、非常に安心だわ!

「そろそろ、お薬の時間です。昼食を出しますので食後に飲んで下さい。」

「わかつたわ。イーナ、あまりうるついでには駄目よ?」

「はい、わかりました!ここでお義兄様の自伝を読みます!」

「……………」

「あの…リヴェリア副団長、神口キと団長たちに会いたいです。」

「なら、丁度いいな。私は一旦戻るから一緒に来い。アイナ、お前は大人しく治すことに専念しろ。」

「はいはい、わかったわよ。」

そして、私は昼食を食べた跡に特効薬を飲んで寝た。

義息子の出会いを楽しみにしていながら…

## 第345話 側近（父）、激昂。

俺は…先程の話を受けて多くの衝撃を受けている。

1ヶ月半でレベル2？

その1ヶ月後にレベル3？

……2週間前にうちと「フレイヤ・ファミリア」とやり合つて勝利？

更に…レベル8の「猛者」とタイマンで勝利？

そして…団長達と同じレベル6？

ありえねえだろ！

あの最強の「ゼウス・ファミリア」と最恐の「ヘラ・ファミリア」を軽く凌駕しているじゃないか！

いや、それ以前にうちの愛娘がそいつに惚れたというのが問題だ！

「エイナ…。そのベルという奴に惚れたのは本当なんだな？」

「…父様、その奴はやめて下さい。」

「ひっ…す、すまん。」

怖え…。

アイナの怒った雰囲気になります似てきたな。

「はい、ベルくんを愛しています。」

「そうか…。やはり俺としては、いや父親として会っておきたいんだ。」

認めたくねえ！

けど…アイナがエイナ側に回った以上、俺に口出す力がねえ…。

だから団長たちに助けを求めよう！

「彼はレベル6ですよ？」

「半年間でレベル6はどう考えてもあり得ないだろう…。」

「お気持ちは分かります。ですが、事実です。私もギルド嬢として、彼の急成長ぶりには毎回頭を痛めたものです。」

「そ、そうか。」

…：…：そうだったな、エイナはそいつのアドバイザーだったな。

逆に考えると…、うん。

まあ、わかる。

だが！認めたくねえ！

どんな奴なんだ！

そう思っていたら…。

「さて、私達はホームへ行く。お前は？」

「私も【ヘステシア・ファミリア】ホームへ戻ります。母様は今のペースで、2日後に完治すると思います。」

「は？一週間じゃなかったのか？いや、それ以前に何故わかるんだ？」

「…私の魔法です。詳しくはリヴェリア様へお聞き下さい。」

「え？は？お、おい…。」

「ウイナ、行くぞ。」

「あ、はい。」

…どうなってるんだ？

エイナに魔法が発現したのか？

---

そして俺は十年以上も訪れなかった、【ロキ・ファミリア】ホームにいる。

当時の団員は…団長達だけだ。

他は見えない顔だった。こちらを訝しんでいた。

まあ、仕方がないな。

そして俺は団長たちと対面した。

「やあ、久しぶりだね。ウイナ。…老けたね。」

「団長、ご無沙汰しております。10年以上もたちあそうなりますよ。ガレスさんもお変わりなく。」

「うむ。久々に酒でも飲むかのう。」

「ははは、アイナが完治してからにします。神ロキもお久しぶりです。」

「久しぶりやわー！10年間もここへ来なかったのは冷たいでー。」

「仕方がないだろう、ロキ。当時はアイナの治療と暗黒期で治安が悪かっただからだろう。」

「そうだ。」

アイナが急に原因不明の病にかかり、よく咳するようになった。

だから、山奥の空気がよく治安のいいところを探し出し、引っ越ししたんだ。

当時は…かなり危なかったからな。

あの、最強と最恐が黒竜討伐に失敗したときだった。

信じられなかった。

理不尽ほど強かったあの最強の人たちが。

思い出すだけで震えるほどの最恐の方々が全滅したなんて…。

そのため、闇派閥が活性化したんだ。

病人のアイナをそんなオラリオに置けるわけがなかった。

俺はアイナを愛していたが、そんなオラリオも放っておけなかった。

そんな俺に一喝したのがノアールの爺さんたちだった。

問答無用でボコボコにのされた上に簀巻きにされ、アイナと共に馬車で追い出された  
…。

懐かしいな。

しかし、そんなノアールの爺さんたちも暗黒期の大抗争で散った。

リヴェリア副団長からの手紙で知った時は、アイナと一緒に数日間大号泣したものだ。

それを引き起こしたのが…あの「暴喰」と「静寂」だったなんて…。

信じられなかった。

長年オラリオを守り、俺らに檄飛ばしていたあの豪傑たちの一人が…。

長年オラリオを恐怖に陥れ、俺らをビビらさせたあの女性たちの一人が…。

いけね、つい回想に浸ってしまった。

「そやな…。でも、アイナたんも完治の見込みが出てきたやろ？」

「はい。それより…本当なんですか？団長たちが負けて、名前も聞いたことない「ヘステイア・ファミリア」を中心としたオラリオ連合に組み込まれたというのは。」

「…事実だよ。彼には完敗さ。」

「あの若造には脱帽じゃ。」

負けず嫌いのこの方々がそう言うなんて…。

だけど、俺は納得できなかつた。

「そんな！ガレスさんまでも…。…たつたの半年すぎでレベル6になつたのも本当なんですか？」

「本当やでー。」

「何だ、疑うのか？」

「リヴェリア副団長を疑うわけじゃありません。普通に考えれば半年でレベル6になることも、レベル7

いえ8の【猛者】に勝つこともあり得ません！」

「普通はそう思うね。けど、事実だよ。僕は彼と一戦交えることもなく、いの一に一番に負けたださ。」

「今の若造には儂等が一丸となつても勝てんのう。」

「……………」

そんな…。

最強と最恐でも屈しなかつたこの面々にそう言わせるなんて…。



追い打ちをかけるよう、リヴェリア副団長が言った。

「事実を受け入れろ。…愛娘が取られたのはシヨックなのは分かるが。」

「あー、エイナたんかー。しゃーないやろ、諦めや。」

「あの野郎!どんな手を使って、うちの娘を誑かしたんだ!」

「あー、ウイナ。彼はそういう人じゃないよ?むしろ、最大の不得手と言った方がいい。」

「は?」

「ウイナ、よく聞きや。」

「は、はい。」

「ベルたんの相手はエイナただけやないで…。アイズたんもや。」

「はああああああ?」

何なんだ!そいつは!

ますます、許せねえ!

「…:何者なんですか!ベル・クラネルという奴は!」

「おい、ウイナ。またエイナに怒られるぞ。」

「この場にはいないんだから許して下さいよ!俺の愛娘だけでなく、アイズちゃんまでも

!完全な女たらしじゃないですか!」

「ウイナ、彼はその事実を知らないんだ…。」

「は？」

「ベルたんは、自分のハーレムが築かれているのを知らないんや。」

「へ？な、何で知らないんですか！というか、ロキ様はこの馬の骨も知らない奴にアイズちゃんを取られて何も思わないんですか！」

「しゃーないやろ！ウチだってやりたくないんや！それにどこの馬の骨とかちやうで？ちやんとした血統あるで。」

「え？」

け、血統？

リヴェリア副団長が、沈痛な顔をして教えてくれた。

衝撃の事実を。

「ウイナ……。『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』を覚えているか？」

「あ、はい。忘れるわけがありません。あの化け物どもは。」

「彼はその両方の系譜を受け継いでいるぞ？」

「ええっ！」

なっ!?

## 第346話 側近（父）、葛藤。

エイナの担当冒険者が…あの最強と最恐の系譜を持つ奴だと!?

それならこれまでの偉業もうなずける。

……いや、早すぎないか? 異常すぎる。

だが、その前に俺はエイナとそいつを引き離す手を見つけたと思った。

そんな危険な奴に愛娘を近づけるわけにはいかねえ!

「じゃあ…尚更です! 大抗争を引き起こした犯罪者の系譜に、エイナをやるわけには行きません!」

「ちよ…。ほつ、誰もおらん…。ウイナ、それをよそでは言ったらあかんで? 間違いない殺されるで。」

「え?」

「ウイナ。彼は大抗争の最初の被害者であり、最大の被害者でもあるんだ。」

「…詳しく話して下さい。」

そして、俺は…そいつが赤子の時に母をアイナと同じ病で失い、【暴喰】と【静寂】に見捨てられたことを聞いた。

彼らが大抗争を引き起こした、本当の目的も。

神ゼウスによって14年間育てられたが半年前に育児放棄され、家族を求めにオラリオへやってきたことを。

多くの戦いに巻き込まれ、多くの試練を乗り越え、多くの強者を倒してきたことを。

衝撃の事実を聞いた俺は、そいつを責められなかった。

「そうだったんですか…。」

「彼は両方のファミリアにも似ても似つかない子だ。…もし、オラリオへ来て「ロキ・ファミリア」に入団したら、私が彼を養子にしてもいいぐらいだ。」

「リヴェリア…。」

「お主…。」

「今やから言えることやんけ…。」

「当然だ。あの時の門番を探し出して、一年間ほど説教したいぐらいだ。…まだ見つからないのか、全く。」

「「ガチだ…。」」

リヴェリア副団長にそこまで言わせるなんて…。

……アイナが病にかかっておらず「ロキ・ファミリア」にいたら、俺たちは間違いな

くそいつを可愛がってただろうな。

俺達には息子がいないからな。

…そいつを偏見で見ちやいけねえな。

確か…自伝があると云ってたな。

アイナとイーナと一緒に読んでみるか。

今、思えば自伝を読むことにエイナはかなり焦っていたな。

「……わかりました。彼の自伝が治療院にあるとのことなので、アイナとイーナと一緒に読みます。」

「ウイナ、思い込みは捨てるんだ。いいね？」

「そうじゃ、あの若造を甘く見るではないぞ？」

「エイナに絶縁されるぞ？」

「ウイナ、無謀に挑んだらあかんで？瞬殺されるで？」

「わかつてますよ！父親の葛藤ってやつですよ！」

ちくしょう！

俺の味方がいねえ！

敵対していたのに…。この人達にここまで認められるなんて。

やはり、会ってみたいとわからないな。

そして、俺は治療院へ戻ろうとした。

戻る途中で街並みを見ると、俺らが出た時よりかなり明るくなっていた。道端で子供が笑顔で遊んでいる。

あの時の暗黒期では絶対にあり得なかつたからな…。

戻ると、アイナとイーナは本を読んでいた。

そいつの…ベル・クラネルの自伝を。

「あら、お帰り。団長達は元気だった？」

「ああ…ほとんどが見ない顔だった。ノアールの爺さんたちは本当に7年前に死んだみたいだ。ここにいる間に墓参りしないとな。」

「そう…。私も行きたいわ。」

ああ、そうだな。

あの爺さんたちにはお世話になったものだ。

あの爺さんたちはいつも言ってたな。

「死に場所を見つけない。次代の英雄に引き継げるのをな。」と。

何も…大抗争で自爆して死ぬことはなかつたでしょうに…。

そう思っていた俺は、その本を手を取った。

「…この本が、ベル・クラネルの自伝か？」

「ええ。まだ途中だけど、凄いわ…。エイナやリヴェリア様の言ったことは事実だったわ。この患者たちに聞いたけど、嘘ではなかったわ。」

…そうか。

そいつがオラリオへ来る前のことを知った今、それは些細なことだ。

そいつは家族を求めにきただけなのだから。

横目でイーナを見ると、かじりつくように自伝を読んでいた。

ページを捲る速度が半端ねえ…。

「そうか…。イーナは…すごい勢いで読んでいるが？」

「すつかり、ベル・クラネルのファンになっちゃったみたい。」

「……………そうか。」

駄目だ！と言いたいが、言えねえ…。

だが、絶対にそいつのところにはやらねえ。

エイナもやりたくないが、エイナもそいつのことを全部知っているだろうな。

…困った。

沈痛な顔をしていた俺にアイナは心配して話しかけてきた。

「どうしたの？怒鳴り散らすと思つたのに？」

「ああ…。これが0巻か？」

「ええ、アミツドさんが全巻よんでから見た方がいいと。」

「…その方がいい。」

「…何があつたの？」

「0巻を読んだらわかる。はあ…。」

あの団長達からそんなことを聞かされたらな。

自伝を読んで一段落したイーナを見ると、とんでもないことになっていた。

虚空を見て、頬が赤らんでいた。

…嘘だろ、この短時間に？

「はあ…お義兄様…。」

「イーナ？エイナの相手よ？」

「…どんな方なんだろう…。」

「おい、イーナ？」

「ああ…お会いしたい…。」

「駄目だわ…。」

「まだ会つてもいないんだぞ…。」



…そりや、そうなってもおかしくないな。

いや！なんとしても止めなければ！

エイナだけで十分だ！

いやいやいや、エイナも引き離さないと！

でもなあ…。

やはり会ってみないとわからないな。

## 第347話 崇拜妹、危機。

「はい、かなり治っていますね。」

「ありがとうございます。すごいですね、この特效薬は。」

「ええ。ですが、数に限りあるのでそう簡単ではないのですが。」

「す、すみません！そのような貴重品を！」

「いえ、大聖樹の枝についてはリヴェリア様の仲介やベルさんのこともあり、あちらから提供がありました。また、カドモスの泉もオラリオ連合により定期的にとつてきてくれます（主に異端児の方ですが）。後はエイナさんがちよくちよく手伝ってくれているのもあります。」

「そうですか…。エイナと義息子には感謝しなければなりませんね。」

「（もう認めている…。早くないですか？）とところで、もう一人の娘さんは？」

「ウイナと一緒に観光に行っていますね。迷子にならなきやいいけど…。あの娘、エイナと違い好奇心旺盛だから…。」

私は迷子になった。

興味あつて、あちこち動き回つたのが駄目だった。

いつの間にか、暗い路地道に入つてしまつていた。

「ど、どこのの……ここは。父様……。」

「おやおや? どうしたのかな? お嬢ちゃん?」

「ひっ!」

こゝ、怖い人たち……。

世間知らずの私でも分かる、この人達はよくない人達だと。

「へー、半妖精か。ひひひ、高く売れそうだぜ?」

「おい、さつさとずらかるぞ。オラリオ連合のせいでやりづらくなつてんだからよ。」

「ちつ……半年以上がりのインチキ・ルーキーめ……。」

……インチキ・ルーキー?」

そ、それよりここから逃げ出さないと……。

痛っ! 捕まえられた……。

「うちの主神サマも齒噛みしているらしいぜ? その内、奴らへ襲撃かけるつてよ。」

「おい、聞かれてるじゃねえか。わりいな、嬢ちゃん。聞かれた以上、帰すわけにはいか

ねえぜ? 運が悪かつたな?」

「安心しろよ？殺しはしねえよ。俺らが楽しんだ後に、大事な大事な金に変えてやっくらよ？」

「「ギャハハハハ！」」

「あ、あ、あ…。」

私は絶望した…。

父様の言うことに従って行けばよかった…。

誰か…助けて！

「何をしているんですか？」

え？

い、いつの間に…。

さっきまで誰もいなかったのに。

「何だあ？仮面にフード被りやがって…どつかへ行きな。邪魔だ。」

「でなきやあ、死ぬぜ？【ラシャプ・ファミア】の俺らによつてな？」

「【ラシャプ・ファミア】？知らないですね…。」

「おおつと、言っちゃいけねえことを言っちゃまったなあ。生かして帰すわけにはいかねえぜ？」

「あばよ、運が悪かった…ゲフウツ！」

「え？」

気がつくつと、私を捕まえた人を気絶させその人の腕の中にいた。

温かい…。

その人はフードを被っている上に、白い仮面をしていた。

仮面には…鈴と炎のマークがついていた。

その人達から離れて大通りに近いところへ下ろしてくれた。

「大丈夫？」

「あ…。は、はい。」

「い、いつの間に!? て、てめえらやっちなまえ！」

「ここで待つてて? 動かないでね？」

「は、はい。」

そして、1つの瞬きで数人いた怖い人を気絶させていた。

つ、強い…。

父様より…遙かに。

最後の一人となった人があんなに強気に出ていたのに、今はすごく怯えている。

「て、てめえは何もんだ…。レベル3の俺らが…。」

「【ガネーシャ・ファミリア】の人が来るまで寝て下さい。」

「あがつ…。」

「はあ…凄いい…。」

「…こういう人たちがまだいるんだ。みんなにも知らせないと…。あ、ちよつと待つてね?」

その人は大通りに出て、変な仮面をしていた人を見つけ話しかけていた。

変な仮面をしていた人はその人から聞いて、慌ててどつかへ行つたみたいだけど…。  
いけない! お礼を言わないと!

母様から礼儀を叩きこまれているんだから。

「あ、あの! ありがとうございました!」

「ごめんね。オラリオにはああいう人ばかりじゃないんだ。」

「い、いえ。昨日オラリオへ来たばかりなんです!」

「あ、そうなんだ。ええと、宿まで…いや【ガネーシャ・ファミリア】の人が来てからにした方がいいね。」

「?」

「あ、【ガネーシャ・ファミリア】はオラリオの治安を収めているファミリアのことなんだよ。僕が君のいる宿まで送ってもいいけど…【ガネーシャ・ファミリア】の人に送ってもらったほうがいいかもしれない。」

え…嫌だ。

今は、もう周りの人が怖い…。

目の前の人しか頼れない…。

礼儀を欠くのはわかってはいるけど…失礼を承知でお願いしよう！

「お、お兄さんに送ってもらいたいです！母と父がいますから。」

「お母さんとお父さんに？それはまずいね、かなり心配されていると思うよ。」

「お、お兄さんのことを聞きたいです！」

「僕？僕はね…「すまん！待たせた！」あ、シャクテイさん。」

わ…凛々そんな女の人。

何かと親しげだけど、どういう関係かな？

そう思っていたら、その女の人がお兄さんの背にいる私に気づいた。

「む…その娘は？」

「あ、はい。こちらの方々に襲われかけたそうです。そうだよね？」

「は、はい！すごく怖かったです！お兄さんに助けてもらわなかったら、どうなっていた

ことか…。」

本当に怖かった…。

お兄さんが気づいてくれなければ、どうなっていたことか。

ぶるっ……

シャクテイさんという人は、お兄さんが気絶させた人の顔を一人一人覗き込んだ。

「……こいつらは見えない顔だな？」

「【ラシャプ・ファミリア】とか言っていました。」

「聞かぬファミリアだな……。クノツソスの鍵を利用して入り込んできたか……。ガネーシャたちに確認しよう。」

「あの、シャクテイさん。こちらの女性に聞かせるのはちよつと……。」

「……お兄さん、優しい。」

「あ、何かときめいたかも。」

シャクテイさんは私を見て、気まずく思い周りの人へ話しかけようとしていた。

「む、すまん。宿まで送ろう。おい、お前たち「お、お兄さんに送ってもらいたいです！」……。」

「え、えーと。」

「……わかっていると思うが？」

「わかっています！送ったらすぐに帰ります！」

「それならいい。お前たち、こいつらを捕らえて牢へ連れて行け！」

「「はっ！」」





## 第348話 崇拜妹、気付。

私はお兄さんと一緒に歩いている。

うん…やはり心地良い。

「そうなんだ。お母さんの治療でオラリオへ来たんだ？」

「はい！母が危ないところでした！姉と母の友人の紹介がなければ死んでいたかもしれない。」

「それは危なかったね。…失礼だけど、助かりそう？」

嗚呼…やっぱり優しい。

やはりこの人かも。

仮面をとってくれないかな…。

でもさっきの女の人が言ってたから、何か訳ありだよな。

「はい！特効薬のおかげだそうです！」

「特効薬？どこかで聞いたことが…。」

「あ、ここです！」

「え？」「ディアンケヒト・ファミリア」の治療院？」



「父様、やめて！この方が私を助けてくれたの。」

「え？」

父様は武器を手にしようとしていたから慌てて止めた。

そして、私は先程までのことを説明した。

「…ということなの。」

「すまない、ありがとう！助かった！」

「ありがとうございます！この体勢で失礼と思いますが。」

「いえ、無事でよかったです。」

「すまないが、名前とファミリアを教えてくださいだろうか？お礼に伺いたいが。」

「あ、はい。僕は…「父様！イーナは…ベルくん!」え？」

「え？」

え？…姉様、今何て言ったの？

ベルくん…まさか、伝記に載っていた方…ベル・クラネル!?

えええええっ！

姉様はいつもの冷静な姉様でなく、慌てていた。

まるで、見られてはまずいものでも見つかったような…。

「べ、ベルくん！どうしてここに！」

「あ、はい。こちらの女性が襲われかけていたので、助けてこちらに送ったんです。」

「そ、そうなの……。イーナ！気をつけなさい！」

「ご、ごめんなさい！姉様。」

「姉様!?!」

その人は驚いた声を出していた。

そして姉様は私を叱った後、慌ててその人を連れて外へ行こうとした。

だ、駄目！

「それならいいのよ。じゃあ、私達はこれで「待ちなさい」……何でしょうか？アイナ母様  
?」

「母様!?!」

「まだ、私達のお礼が済んでないわ。」

「私からお礼しますので、不要です。」

「あらあら、お礼って何かしら？お母さん、気になるわ。」

アイナ母様！

足止め、ナイスプレーです！

その人は気づいたように姉様と話していた。

「あの…エイナさん。こちらの方々はエイナさんのご家族でしょうか？」

「それは…「初めまして。エイナの母のアイナ・チュールと申します。この体勢で失礼だけど…。」母様…。」

うわあ…母様。

アレは…逃がす気はないという顔だ。

父様はずっと仏頂面をしていた。

「というか、仮面とフードを何故かぶっている？」

「父様は口を出さないで下さい。」

「いや、どう見ても怪しいだろうが。何故わかるんだ？」

「私達がしたからです。」

「あの…エイナさん。失礼なので取ったほうが…「ダメ！」ええー…。」

「エイナ、彼氏を縛るのはよくないわ。「彼氏!」」

「ま、まだ!彼氏じゃないです!」

「「え?」」

え?彼氏…じゃない?

母様は更に追い打ちかけた。

「彼氏じゃないなら、別にいいじゃない。」

「ヘステイア・ファミリア」のトップシークレットなんです！」

「え？トップシークレット？」

「ベルくんは黙ってて！」

「ア、ハイ。」

「……………」

こんな姉様、初めて見る。

母様が父様に対して叱る時にそっくり。

……………すぐく気になる。どういう関係だろう？

「改めて…、うちの娘が大変お世話になっております。」

「あ、いえ。こちらもエイナさんには大変お世話になってます。」

「あらあら、でもイーナの恩人である貴方と主神のヘステイア様へお礼に伺いたいわ。」

「あ、はい…。え？どうして僕の神様がヘステイア様だとわかったのですか？」

「べ、ベルくん！帰ろう、ね？」

「姉様、話を中断させるのは失礼ですよ？」

「ぐっ！」

逃しませんよ！

絶対に！

お兄さんはやはり、私が会いたかったベル・クラネルだった。

「ということは、貴方がベル・クラネルね？」

「あ、はい。〔ハスティア・ファミリア〕団長のベル・クラネルです。…エイナさん、やはり失礼なので仮面とフードを取ったほうがいいのでは…。」

「ダメよ！」

「そうだ、取れ！」

「父様は黙ってて！」

「貴方は黙ってて！」

「ぐう…。」

ベル様に何て口を聞くのですか！

「やはり、取りますね。このままでは失礼ですよ。」

そしてベル様は、フードと仮面を外そうとした。

ど、どんな顔なんだろう…。

あ、髪の毛が雪のように白い…。

「ああっ！」

「あら、可愛らしいじゃない。」

「はわあ…。」



「は？軟弱っぽいやつだな（（ギロリ！））……何でもないです。」

どう見てもカツコいいじゃないですか！

父様……キライです！

姉様は慌てて仮面を元に戻そうとした。

「も、もういいでしょ！」

「改めて、『ヘスティア・ファミリア』団長のベル・クラネルです。エイナさんには大変お世話になっております。」

「……思ったより礼儀正しいわね、リヴェリア様の言う通りだったわ。ふふふ、気に入っちゃった。」

「!?!」

よし！母様が太鼓判を押しした！

リヴェリア様の言う通り、やはり母様のお目に叶った！

ここで攻めます！

「お兄さん、お兄さん、名前を言い忘れていました。イーナ・チュールと言います。姉のエイナ・チュールが大変お世話になっております。」

「あ、妹さんでしたか。お姉さんには大変お世話になっております。」

「いえいえ、これからもお願いします。…姉妹と共に。」

「……………」

姉様はかなり複雑そうな顔をしていた。

…やはり気づいているよね。

私がベル様に惚れたということ。

ベル様は父様にも挨拶しようとしたけど…。

「そちらはエイナさんのお父さんですね？」

「貴様にお父さんと呼ばれる筋合いはない！」

「えーつと…娘さんには大変お世話になっております。」

「……キミはうちの娘とはどういう関係だろうか？」

「あ、はい。最初はアドバイサーと冒険者でしたが、今は同じファミリアです。」

「「え？（チラツ…）」」

「うう…こんなに早くバレるなんて…。」

……彼氏でもない上に、深い関係でもない？

やった！私にもチャンスある！

『……エイナ、エイナ。ちよつと来なさい。』

『何でしょうか…。』

『貴女、あの方とお付き合っているんじゃないの？』

『…まだです。』

『はあ…何やっているのよ。それでも私の娘？ダメよ。』

『…はい。』

『私がヘステイア様に取りもつてあげるわ！』

『それがその…ヘステイア様を含めてライバルが多いんです。』

『は？……でしょうね。彼なら何人いてもおかしくはないわ。ウイナがいなかったら彼に求婚したかもしれないわ。』

『だから、紹介したくなかったんです…。』

『でも、イーナを見なさい。』

『(チラツ) ……はあ。』

『あれはもう恋する乙女の日よ？』

『わかっています…毎日鏡の前で見えていますから。』

## 第349話 側近（母）、説教。

まさか、こんなに早く会えるなんて。

しかもイーナを助けてくれたとは思わなかったわ。

もうイーナは彼しか見てないわね。

エイナがあそこまで言うから彼氏かと思ったわ。

…もつたいない！

さつさと捕まえておかないと！

ウイナが取り繕って話しかけていた。

今更強がっても…、ねえ？

「ゴホン！だ、だが…キミはレベル6なのは本当かね？」

「はい、何故か成長期とのことです。」

「「え？」」

「え？」

「ゴホン！……キミの実力を試したいがいいだろうか？」

「あ、はい」「ダメ！」「え？」

当然でしょう！

何を考えているの！

私、ううん私達はウイナを叱った。

「いや……レベル6だろ？なら、問題ないだろ……？」

「貴方、娘たちいえ私達の恩人を傷つけるのですか？」

「父様、見損ないました。」

「父様、身の程を知って下さい。」

「……………」

もうイーナを敵に回したわね。

……一人増えても二人増えても同じね。

そしたら、彼……ベルくんはウイナさんを見て察したように話しかけた。

「あの……ウイナさん？手合わせしましょうか？」

「ベルくん!?!」「お兄さん!?!」

「あ、ウイナさんの気持ちも分かります。この……僕はこういう見た目なので仕方がないかと。それに僕の実力を知ればウイナさんも安心できるかと。」

「……………」

……いい子だわ、本当に。

え？この子が…レベル6でオラリオ最強？

何が何でも捕まえておかないと！

私はベルくんの気遣いに感動しながら、ウイナに向けた。

「ベルくん、ちよつと待つててね？…貴方、こつちへ来なさい。」

「…ハイ。」

そして三人でウイナを囲んで、叱った。

『貴方、恥ずかしくないのですか？14歳の子にああ言われて。』

『……思います。』

『父様、ベルくんはああいう子なんです。』

『……よくわかった。』

『父様、お兄さんは私を襲おうとした方…レベル3の数人を一瞬で倒したんです。』

『!?!』

え？……イーナを囲んだ人たちはレベル3!?

…レベル3数人でも手間取るのに…。

一瞬で？めちやくちや有望株じゃない！

その時、リヴェリア様が見舞いに来た。

「失礼する……どうしたのだ？お前たちは。ベル・クラネルも…。」

「あ、リヴェリア様。ご無沙汰しております。」  
礼儀もバツチリ…。

逃さないようにしないと！

エイナでもイーナでもどっちでもいいわ！

……これほどの子なら、二人でもいいわ！

---

そして事のあらましを説明した。

主にベルくんが。

「……なるほど。イーナくんを襲った奴らが気になるな…。ロキへ聞いてみよう。」

「あ、はい。すみません。」

「ベル・クラネル、お前はもう、オラリオ最強なんだ。そう軽々しく頭を下げるな。…と  
言っても、それがお前の美德だから仕方がないな。」

「あ、はい。気をつけます。」

『うわあ…リヴェリア様。保護者の顔をしているわ。初めて見たわ。』

アイズちゃんが目覚めてから困った顔ばかりだから、初めて見るわ。

あの温かい目は明らかに母の目だわ。

まあ……気持ちにはわかるわ。

そしてリヴェリア様は提案してくれたわ。

「さて……手合わせの場所だが、『ロキ・ファミリア』でやらないか？ どうせ、ロキに報告するんだ。」

「お願いします！」

「何故、お前が言うんだ……ウイナ。」

「ここには俺の味方がいないんです……。」

「言つとくが、私はベル・クラネルの側だぞ？」

「……そんな、リヴェリア副団長までも……。」

まあ、当然ね。

……体調もよくなったことだし、私も行くわ！

その前にアミッドちゃんへ許可もらわないと。

---

アミッドさんに許可もらって、6人で「ロキ・ファミリア」ホームへ向かった。  
久々ね……。ローンは終わったのかしら？

団長とガレスさんに、ロキと久しぶりに会った。



ロキたちへ事のあらましを説明し、ウイナを見て呆れた様子だった。

「…それで、ここへ来たというのかい？」

「何をやつとるんじや、ウイナ…。」

「だから、ウチ言うたやろー。無謀なことはやめーや、と。」

「ハイ…すみません。」

ベルくんはレベル6よ？

でも、まあ、この容姿でレベル6と聞いたら疑うけど…。

いけない、いけない。

「団長、ガレスさん、ロキ、久しぶりです。」

「アイナ、久しぶりだね。もう外へ出てもいいのかい？」

「はい。アミツドさんに許可もらいました。」

「思ったより元気そうじゃのう。」

「アイナたんも変わらんや。病気はどないや？」

「ええ、あと6日もすれば大丈夫だろうと。」

「それはよかつたよ。知り合いに逝かれるのは辛いからね。」

ノアールさんのことですね…。

私も後数日したら、ノアールさんのところへ行っていたかもしれないわね…。

でも、それもベルくんのおかげで元気になったわ！

そして先程までのことを団長たちへ説明した。

「それで、イーナた人を襲った奴らは『ラシヤプ・ファミリア』と言つとつたん？」

「はい、確かにそう言つてました。イーナさん、そうだよね？」

「はい！確かに言つてました！」

「ロキ、神ラシヤプはどんな神なんだ？」

「コソコソしてかき回すだけかき回して、とんずらするチンチケな神や。…クノツソスの鍵がまだ出回つてたとちゆうことやな。」

「闇派閥なんですか？」

「闇派閥に近いな…。…ベルたん、それをドチビたちへ言うてみい。きっと解決してくれるで。」

「あ、はい。もちろん、そのつもりでした。」

『『ラシヤプ・ファミリア』、終わったな…。』』』

え？団長達が小声で言つてたみたいだけど、どういう意味かしら？

## 第350話 側近（父）、対決。

ちくしょう！

古巣でも俺の味方がいねえ！

こいつの性格が悪くないのはわかっている！

こつちが恥ずかしくなるぐらいだ…。

だが、俺にも父親の意地というものがあるんだよ！

そういう俺を見て、団長はとんでもないことを言った。

「それで、ウイナと模擬戦かい？…ちようどいい。僕ともやらないかい？」

「え？フィンさんと？」

「君はレベル6だろ？僕ともやり会えるはずだよ？」

「あ、はい。お願いします。」

「ずるいぞ！フィン！儂ともやろうぞ！」

「あ、はい。」

「ベルたん…人が良すぎるで…。ドチビの苦勞がよくわかったわ…。」

同感です…。

何でもかんでも引き受けるんじゃない…。

実の息子じゃないのに、心配になってきたぞ…。

そして、久々の鍛錬場へ来た。

あいつと手合わせしたという希望者が何人か出た。

いずれもレベル6だ。

……有望な若者が入ってきて嬉しいは嬉しいが、相手があいつとはな。

「さて…かなりの希望者がいるね…。いいのかい？」

「あ、はい。大丈夫です。」

「そうか、まず。ウイナだ。…彼はレベル4だ。本気は出さないでくれよ？」

「あ、はい。僕はここを動きません。なので、ウイナさんから来てもいいです。」

「なっ…！…団長、始めて下さい！」

「…彼のそれは挑発じゃないよ？素で言っているはずだよ…。始め！」

糞っ！相手にならないってか！

だが、俺だつて「ロキ・ファミリア」のレベル4なんだよ！

そう思っていた時があつた…。

「はああああああ！」

「……………」

「やはり当たらないね。」

「当然じゃな。」

「時間の無駄だ！ さっさと下げろ！」

「まあ、そうね。」

「あのバグ兔…何やってんだ。」

全部…見切られている！

足払いも…。

チラツ…。

「相手にならないわね…。」

「当然です。」

「ああ…ベル様。」

「……………」

家族でさえも…応援してくれねえ！

ただ…目の前のこいつだけが気遣ってくれるような目をしてきている…。

舐められていないのはわかっている！

もう…観念しよう。

「ゼー…ゼー…、当たらねえ…。」

「あの…気はすみましたか？」

「……ああ。エイナを守れよ…何としてでもだ。」

「はい、もちろんです！」

「……さっきまでの非礼は詫げる。飯でも食い行こうぜ！今も続いている美味しい飯屋を知っているんだ。」

「！はい！喜んで！」

……。

いい笑顔だ、こういう息子が欲しかったな…。

家族より癒されるのは何とも皮肉だ。

そして、あいつ…いやベルと手合わせするやつらでくじ引きしていた。

かなりの人気者だな…。

大丈夫なのか？レベル6にランクアップしたばかりだというのに。

「まずは僕からだね。」

「ちつ…くじで負けやがった。最後か。」

「私は二番目ね。」

「僕は三番目か。」

「あたいはやらないぜ？あんなバグ兔に勝てるかよ！」

「私もだ（アイズたちに何か言われるかわからんからな。わかっているのか？こいつらは。後で報復があつても知らんぞ）」

バグ兔…。

それはまあ、そうかもしれないんが何か腹立つな。

……俺もかなり惹かれているな。

「では、さっそく行かせてもらおうよ？」

【魔槍よ、血を捧げし我が額を穿て】

【ヘル・フィネガス】

!?

団長…、本気だ！

「はあああああああつ！」

「！」

ベルも目の色を変えたな。

まあ、団長がああなつたら…レベル7に匹敵するんじゃないか？

「！！！！」

「フィンをやつ、早速飛ばしやがる！」

「でも…当たらないわ。」

「完全に見切ってるのう…。」

「しかもギリギリだな。」

マジかよ…。

本当に、レベル9に匹敵するのか…。

「レベル6の団長を相手に…余裕そうだ。」

「ベルくんなら、当然です。」

「お義兄様、すごい…。」

「たった半年で団長を手玉に…。」

……それであの性格？

普通なら傲慢になったりするんだが…。

団長の怒涛の連撃が一段落した。

それでもかすりはしなかったがな…。

「ふう…そちらから来ないのかい？」

「えっと…ウイナさんの気が済むまででは？」

「ああ…彼は別だよ。そうだね、ウイナ？」

「あ、はい！」

「ということ、遠慮なく来ていいよ。」



「では。」

「!?がっ…、ここまでと…は。」

へ? 団長が…崩れ落ちた。

び、秒殺!?

「クラネルのやつ、瞬時にフィンの懐へ移動して鳩尾に肘入れやがった…。見えなかつたぞ…。」

「あれでは、フィンの魔法も役立たないのう…。」

「あまりにも圧倒的すぎて、怒りさえも沸かないわよ…。」

「だから言ったんだ…アレはバグってるってな。」

「見事だな…。」

「ここまで…圧倒的に強くなっているのか。」

しかも本気になっていない…。

エイナがドヤ顔で言ってきた。

「わかりましたか? 父様。」

「よくわかった…。父さんが悪かった。」

「ああ…ベル様。」

「困ったわね…、エイナだけでなくイーナもベルくんのところへ行くかもしれないわね

（それはそれで一考の余地はあるわね）。」

「!? イーナ！ イーナ！ しっかりして！ ダメよ！」

「ベル様……。」

「……………逆に、俺はあいつのことが心配になってきたぞ。」

あの強さであの性格であの容姿？

エイナやイーナよりあいつの方が気がかりになってきたぞ。

……………いずれ、義父となるかもしれないんだ。

せめて、俺だけは味方になってやらないとな。

## 第351話 道化神、観察。

あー、フィンが瞬殺されよったかー。

わかっとなつたけど、やはり目の前にするとはなー。

ベルたん…規格外やわ。

それに…何や。

アイナたんたちが騒がしいな？

死の病で寝込んでいたとは思えないわ。

…それもベルたんの血による特效薬のおかげと聞くと、笑えないわな。

もう…神でええんとちゃう？

「さて、次はあたしね。ティオナは元気かしら？」

「あ、はい。アーデイさんとよく一緒に行動していますよ。」

「そう…あの子にも構ってほしいけどね。」

「え？」

「まあ、いいわ。行くわよー！」

ティオネかー。

フィンが瞬殺されたら、テイオネも瞬殺されよるわな。

と思つとつたら、ヤヴアイ奴が来よつた…。

「お待ち下さい、【怒蛇】。坊ちやま、何をやっているのですか？」

「あ、メイ。」

「「げえっ！」」

：もうウチの奴らはメイたんにとらウマ刷り込まれているな！。

まあ、性転換すると言われたならビビるわな。

これまでの流れをエイナたんがメイたんへ謝りながら、説明しとる。

「すみません…：メイさん。こんなことになってしまつて。」

「いいですよ、エイナさん。これは予想範囲です。ですが、【ラシャプ・ファミア】については流石に予想外でした。早急に対応が必要ですね。」

ラシャプ：あの戦争遊戯を見たはずやろ。

馬鹿やろ？

アイナたんもウイナもメイたんを見て、怯えとる。

まあ、そやな。

あの時代を身を以て知っているから、メイたんは恐怖の対象やからな〜。

「さ…【最強侍従】…。」

「な、何で…【ゼウス・ファミア】が…。」

ここの状況を理解したメイたんはとんでもないことを言いよった。

「中断させてすみません。このままでは勝負にならないでしょう。」

「何をするつもりだ…?」

「坊ちやま、これをつけて下さい。」

「え?ぐつ…!」

「一つで50キロはあります。これを手足につけてもらいます。」

「なっ!」

「これと…目隠しをしてもらいます。」

「ええっ!」

ちよ…いくら何でも舐めすぎとちやう?

ベルたんの持ち味の敏捷を殺し、更に視覚まで?

そんなことをしたら…、ティオネがキレルやんけ。

「坊ちやまは坊ちやまが思っているよりかなり強くなっています。これぐらいのハンデがなくてはレベル6は相手になりません。」

「てめえ!?…いえ、何でもありません。」

「【怒蛇】、怒りなさい。それが貴女の売りでしょう?」

「……。」

うわー…メイたん、ティオネを挑発しとる。

けどなー、ティオネはもうメイたんに対して恐怖感を持つとるからそれは効果ないっちゃう?

「そういえば、ティオナさんが言っていました。「ティオネ? あー、もー相手にならないよー。雑魚だよ雑魚。ハハハ。」と。」

「あのクソ妹!…ぶっ殺してやる!」

「それでいいのです。」

「「……やはり、あのメイドには逆らつてはいけない。…怖い。」」

……嘘を言つとるわな。

それに引つかかるティオネもティオネや。

単純にも限度あるやろ…。

ブチキレとるティオネがベルたんに怒涛のラッシュを仕掛けている途中で、メイたんはアイナたんに挨拶へ行きよつた。

「ど、どうして…【最強侍従】が。」

「これはこれは、お久しぶりですね。アイナ・チュールさん。」  
「ひっ！」

「貴女の娘さん、エイナ・チュールさんは中々優秀ですね。良い教育をされていますね。」  
「……そ、それはどうも。」

そりゃ、怯えるわな。

メイたんによつてウチ……「ロキ・ファミリア」が何度も蹂躪されよつたからな。  
今では笑い話やけどな。

「エイナさんがいなければ、今の坊ちやまはいませんでした。お礼を申し上げます。」

「は？あ、いえ……坊っちゃん？え？あの……彼は「ゼウス・ファミリア」ですか？」

「いいえ、違います。系譜だけは受け継いでいますが。」

「そ、そうですか（なら、安心ね）。……系譜？」

あー知らなかつたんか。

そりゃ昨日来たばかりやからな、しやーないわ。

そしたらウイナが何か気づいたみたいやった。

「あ……まさか、あの紅い瞳はあいつ……サポーターの？」

「正解でございます。」

「嘘だろ！全然似てないぞ！紅い目と足の速さだけじゃねえか！」

「ええ…あの助平の？嘘でしょ…どこをどうしたらあんないい子になるの…。」

「それは私も同意します。」

それはわかるわー。

けど、母親を知ったらどうなるんやろか？

「そう…母親は…誰なの？白い髪をもつ人って【ゼウス・ファミリア】にはいなかったよね？」

「母親は、【ヘラ・ファミリア】の団員です。」

バターーン！

あ、倒れよった。

「!?母様、母様!?しっかりして下さい!」

「しっかりしろ!アイナ!大丈夫だ!【ヘラ・ファミリア】はもう全滅したんだ!」

「おや、知らなかったのですか?神ヘラもあの【最恐執事】も今オラリオにおられますよ?」

バターーン!

まあ、しゃーないわな。

「と、父様!」

「それはそうなるだろうな…。あの時代を生きた奴が聞けばそうなるのは道理だ。特に



こいつらはあのファミリアの、神ヘラの恐ろしさを身をもって知っているからな。」  
そやな、ホンマにあの時代は理不尽やった。

最強の「ゼウス・ファミリア」と最恐の「ヘラ・ファミリア」によつて蹂躪されまくる毎日やった：。

やけど、おかげでウチらはここまで強くなれたんや。

あいつらがまさか黒竜討伐に失敗して全滅寸前、とは思わんかった…。

あいつらの系譜を受け継いだベルたんが、ウチらを従えろとはな！。

ホンマに：下界は面白いわ！

特にベルたんが来てからや。

やはりウチへ入ってほしかったわー！



「「なっ!?!」」

「ちっ…! 差がどんどんつけられやがる…糞がっ!」

「ベートさん…。」

俺たち獣人の十八番を奪いやがった!

一気に…成長いや飛躍してやがる!

だがな…それでいい。

「糞があああああ!」

「こっこだ!」

「あがつ…。…こ…の…バグ兔が…。」

ふん、バカゾネスの顎を揺さぶったか。

甘え奴だ…!

次は爺か。

勝てるとは思えないがな。

「さて、俺の番じやのう。」

「待ちなさい、【重傑】。私の予想より早く掴んだようですので、もはや貴方では相手にな

りません。」

「待つんじや! 俺はまだその若造とやりあっておらんぞ!」

「ええ、だから貴方にとってかなり有利な方法でやります。」

「「え？」」

かなり有利な方法だと？

床に縄を大きく輪にして敷いている。

これは……ロキが言っていたやつか。

そして、爺とクラネルは半裸でズボン履いたままだ。

「えつと……これは？」

「坊ちやま、それは“スモウ”というものです。ルールは簡単です。この輪から相手を  
出せばいいのです。」

「まさか、スモウをやるとは思わなかったのう。」

「メイたん、メイたん！酒を解除してやー！こんなの、飲まなきや損やん！」

「いいですよ。」「ホンマか！」

「フリユネの「イヤ、ケツコウデス。ハイ。」

……思い出させんな！

糞っ！あのヒキガエル……いやバケモンが！

絶対にリベンジしてやるからな！



ここ最近の坊ちやまは非常に吸収率が著しいです。

やはりメーテリアさんが復活されたからでしょう？

今の坊ちやまはもう私達の連携についていつています。

あの【女帝】でも手こずらせるぐらいなのに…。

指摘したらそれを数回反復し、すぐ習得しています。

現に先程の【怒蛇】の模擬戦でも課題をクリアしました。

聴覚だけで把握するのをたったの一戦で？

才能がないどころではありません。

想いだけでここまで強くなるとは。

おや？アイナ・チュールが起きたようですね。

「母様…大丈夫ですか？」

「…ええ、大丈夫よ。まさかあの子が【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の系譜を持っているなんて…。エイナ、大抗争の件は知っている？」

「はい、知っています。母様…ベルくんの伝記の0巻は読みました？」

「え？ただだけど…？」

「そこに書いてあります。ベルくんが系譜を持つていることも、大抗争の裏側が。」  
「わかったわ…。読むわ。」

まだ、読んでなかったのですか？

まあ仕方ありません。昨日の今日ですからね。

ウイナ・チュールは起きて早々、怯えていますね。

「殺される殺される殺される（ガクガクブルブル）。」

「と、父様？」

「イーナ…、どうしたの？」

「父様の様子が…。さっきのメイドさんが神ヘラと【最恐執事】という人がオラリオにいと聞いて…」

「ひっ！そ、そんな！神ヘラだけでなく、あの【最恐執事】も!?（ガクガクブルブル）」

まあ、この二人はかつて三首領と共に「ヘラ・ファミア」へ殴りこんだことがありますからね。

その時のことを思い出しているのでしょうか。

エイナさんはお二人を落ち着かせていますね。

「母様！落ち着いてください！」

「エ、エイナ！一緒に帰りましょう！貴女は、神ヘラの恐ろしさと【最恐執事】のえげつ

なさを知らないのよ！」

「あの…私はその方々と今、一緒に暮らしています。」

「え」

まあ、そうですね。

恐怖を与えた方々が愛娘のエイナさんと一緒に暮らしているのですから。

「神へらは確かに厳しい方ですが、優しい方ですよ？」

「USOだろ…。」

「セバスさんもいいお方ですよ？」

「……エイナ。騙されていない？」

「アイナ母様、その方々に失礼ですよ？」

「ここで助け舟しますか。」

「アイナさん、ウイナさん。」

「ビクッ！」

「今の神へらは、貴方がたが知っている神物ではありません。」

「え？」

「その方のお気に入りがエイナさんです。よかったですね？」

「マジ？」

「お気に入りなのは嬉しいんですが…、両親のことを考えると複雑です…。」  
まあ、そうですね。

家族団らんもいいのですが、坊ちやまを放置するのはどうかと思いますが。

「それはいいのですが、アレは見なくてもいいのですか？」

「はっ！べ、ベルくん!?!え？何で…半裸で【重傑】と組み合っているの!?!」

「はわわわ、ベル様の肌…。」

「…かなり鍛えているな。筋肉がもつとあれば【ダメ】」え？」

「父様、ベルくんはあのままでもいいんです。」

「ベルくんにアレ以上の筋肉は必要ないわ。」

「あれがちようどいいんです！父様と一緒にしないで下さい！」

「……………」

すっかり、チュール家の女性は坊ちやまに染まってしまうましたか。

父親の背中に哀愁が漂っていますね。

ポンポン

「女系家族の父親は辛いですね？」

「……………（ガクッ）。」

頑張って下さいね。



## 第353話 狡鼠、賭博。

あのメイド…。

何てことをバグ兔にさせんだよ。

あのガレスと力比べなんてよ。

「ふんぬううう！」

「ぐうううう！」

「のこつたー！のこつたー！」

「「うおおおおお！すげえええ！」」

……ロキもちやつかり審判、いや行司と言つてたか？

かなり盛り上がっているな…。

まあ、ここんとこ刺激がないからちようどいいけどさー。

…やるか。

「…ガレスが優勢としても。これは彼にとってはかなり不利だろう…。」

「あの爺の力に粘つてやがる…。」

「あたしはバグ兔に賭けるぜ？お前らは？」

「ガレスさん！」

「ベル・クラネル！」

「……いつの間に賭け事を。まあいい、私はベル・クラネルに賭けよう。」

へっ、このハイエルフさんはわかかってんな。

……まさか、いやそんなことはないよな？

絶対にはいとはあのバグ兔に限ってありえないからな。

それにしても……。

「ぬおおおおっ！」

「うぐうううっ！」

「のこったー！のこったー！」

結構粘っているな……。

賭けは置いといて……どんだけ力を上げてんだよ！あのバグ兔は。

ん？フィンがいつの間にか起きているな。

呆れているな、まあ目の前の光景を見ればな。

「ライラ……。何でガレスが彼と組み合っているんだい？」

「起きたか？あのメイドが提案したとよ。あまりにもバグ兔が強いから、こつちが有利な面でやるとよ。」

「それほど圧倒的な差があるか…はあ…。」

「今のところガレスが優勢な分、賭けもガレスが多いな。フィンはどっちへ賭ける？」

「ガレスには悪いけど、僕はベルに賭けるかな。」

「だろうな。」

妥当だな。

本当にバグってやがる…。

おつ、ガレスが勝負に出たか。

位置取りは…ありやあガレスの勝ちか。

さすがのあいつも…。

「これで終わりじゃああああああ！」

「……だ！」

「のこつ…？え？ば、バックドロップ!？」

「「うおおおおお！」」

そんなことはなかったか…。

うわあ…、ガレスがとんでもないことになっているぞ。

「やはりシノスさんとユーティスさんの稽古を見ましたか。」

「【重傑】の半身が地面に埋まっているね…。」

「凄いわ……ベル様。」

「ガレスさんのあの姿……初めて見るぞ。」

「それ以前にガレスさんの力をねじ伏せるなんて……。エイナはすごい子……いえ、これ以上ない媚を捕まえたわね。」

稽古……？ユーティスってアストレア様だよな？

アストレア様は何やってんだよ！

あのアイナってエルフ、何か怖え……

ガレスの奴を引っ張り出さねえと、窒息死で死ぬぞ！

「おい！力のあるやつはガレスを……もう助け出したか。」

「……ライラ姐さんの言う通りバグっています。」

「だろうな。あ、だからと言って元金は返さねえからな。あのバグ兔に賭けたやつの勝ちだ。」

「「やったー！！」」

「「そんなー！！」」

やれやれ。

バグ兔がガレスを引っ張り出したが……完全に気絶しているな。

あの【重傑】がな。

「うわー…すごいわ。ベルたん…。バックドロップを間近で見ると迫力あるわ…。」  
「ちっ！おい、さっさとやるぞ！」

「あ、はい。服を着ますので待って下さい。」

「「ああっ！」」

「え？」

「いや、いい。着てくれ。全くお前達は…。」

……見惚れるのはいいんだけど、競争相手を考えろよ？

ん？あのメイド、ベートんとこへ向かったか。

「待ちなさい、【凶狼】。」

「ああ!? 邪魔すんじゃねえ！」

「このままでは貴方は勝てません。勝つ方法を知りたいですか？」

「…言ってみろ。」

へえ、今のベートがあのバグ兔に勝つ方法ねえ。

何であのメイドが教えんだ？

「彼女たちに聞きましたが、貴方は魔法を使えるようですね？」

「あのアバズレどもが！喋りやがって！」

「その魔法を使いなさい。いえ、使いこなしなさい。」

「……………」

魔法？あのベートに魔法なんかあったのか？

何で…使わないんだ？

「意地はつているようでは、また…失いますよ？（チラツ）」

「!!……………っ。」

「ああ、傷が足りないのですね。なら、こうしましょう。」

「ぐああああああっ！」

「!!?」

はあ!?いきなり、ベートを隠しナイフで切り刻みやがった!

み、見えねえ…。

あつという間に血まみれになったぞ…。

それは置いといて…こいつらはどうするんだ？

「…ベートに「ハティ」を使わせる気か？」

「そうだね。それしか彼に勝てる可能性はない。」

「おい、お前ら。ティオネとガレスの身を心配しろよ。完全に気絶してるぜ？」

ティオネは脳を揺さぶられて気絶しているし。

ガレスは脳天直撃で気絶しているし。

死んでいないのが救いだけだな。

大丈夫か…あいつ。

あのバグ兔と戦うどころじゃねえぞ。

「が…あ…。」

「これぐらいでいいでしょう。今の坊ちやまに勝てるのはそれしかありません。」

「この女が！ やつてやろうじゃねえか！」

【戒められし悪狼の王、一傷拘束、二傷痛叫、三傷打杭】

【飢えなる涎が唯一の希望、川を築き血潮と交ざり涙を洗い】

【癒せぬ傷よ忘れるな、この怒りとこの憎悪汝の懦弱と汝の烈火】

【世界を憎み摂理を認め涙を枯らせ、傷を牙に慟哭を猛叫に】

【喪いし血肉を力に、解き放たれる縛鎖、轟く天叫、怒りの系譜よ】

【この身に代わり月を喰らえ数多を飲み干せ、その炎牙をもって平らげろ】

【ハテイ】

なっ!?

あいつにこの魔法があつたのか!?

…傷が消えるごとに炎が大きくなっている？

損傷吸収魔法か!?

「付与魔法!？」

「いいえ、坊ちやま。魔力吸収と損傷吸収魔法です。」

「なっ!？」

「ちようど、月が出ています。坊ちやま、目の前にいるのは【ロキ・ファミリア】の真の最強ですよ?」

「…行きます! ベートさん!」

「来やがれ! クラネル!」

ベートの獣化にあの魔法なら…あのバグ兔に対抗できるだろうな。

あのメイド、更にバグ兔を追い込んで強くさせるつもりか?

経験が足りないからって、そこまでするかよ…。

あのバグ兔を敵にしたら、命がいくつあっても足りねえぜ。



## 第354話 勇者、観戦。

ベート…本気だな。

ベートがああなつたら、僕でも勝てるかわからない。

条件が厳しいけど、それを「最強侍従」が揃えた…。

ベルを鍛え上げるのはわかるが、性急過ぎないかい？

それに…ベートは内心嬉しいかもしれない。

あの戦争遊戯で、ベートはベルと戦いたかっただろうね。

それを見抜いたのかな？

「きやつ！あ、熱い…。」

「あの狼人…強いわ。」

「ああ、とんだ新人が入ったものだな…。」

「ベルくん…。」

アイナとウイナにとってはベートは後輩にあたるんだつたな。

…いい機会かもしれない。彼の本気を見るためにはね。

…やはり相手にならないな。

ベートの炎による攻撃を紙一重で避けて反撃している。当たれば彼でもひとたまりもない。

それはわかってるだろうね。

「…ベートの炎をギリギリで避けているな。」

「さすがの彼もアレはキツイだろうね。」

「う…私は…負けたのね。は？何よ。アレ…。」

「む…僕は負けおったか…。この熱気は…ベートめ、「ハティ」を使いおったか。」

ティオネとガレスがようやく目を覚ましたか。

まあ、この熱気じゃあね。

けど、いくらベートでもハティを使ったとしても…。

「がああああああつ！」

「……っ！」

「がはっ！……っ！」

レベル9に近いベルの相手にはならない。

もうベートの炎に慣れて、反撃しているね。

「……やはり、ベルが優勢だね。ベートの炎がないところを攻撃している。」

「ああ。」

「それでも…アイツの炎はより猛っているわ。」  
「うむ…。」

ダメージを喰らえば喰らうほど、ベートの炎は大きくなる。  
彼はそれをわかつているはず。

なら…持久戦になるか？

「逃げんじゃねえ！」

「！」

「また…あん時と同じように逃げるのか!? また酒場のように逃げるのか!？」

「貴方は…あの時、僕に気づいて…。」

「もう一度…見せてみる！吠えてみせろ！てめえの…弱者の咆哮を！」

「！」

リン リン

何だつて？

酒場…まさか半年前のあの場に彼もいたのか？

ベートは…彼がいるのを分かつてあの暴言を？

何てことを…。

…ベートの言葉に應える気かい？

甘いね、彼は本当に。

だが、それが皆を惹きつけるだろうね。

…思い知らされるな、自分が未だ『神工の英雄』であることに。

「む…溜めおつたぞ。あやつ。」

「真つ向からぶつかる気か？」

「困るね…ここが吹き飛ばされるけど？」

「ちよ、ちよつと！止めないとまずいわよ!?!」

「やめてーや！せつかくローンが終わったのにいいいい！」

リン  
リン

…吹き飛ばされるのは確定だけど、邪魔はしたくないね。

彼らの魂のぶつかり合いなのだから。

……ローンは苦しいけど、また建てればいいだけの話だし。

「…それでいい。俺もただでは喰われてやれねえ！」

「…あの時、貴方のおかげで僕は奮起しました。」

「！」

「あの時までには適当に頑張ればいい、と思っていました。…でもあの時、貴方の言葉で目が覚めました。強くなりたいと。」

「……………へっ、それでいい。」

リン リン

皮肉な話だね。

当時最強派閥の僕らが弱小派閥の彼を罵倒したきっかけが、彼を『英雄』の道へ歩ませることになったということに。

そして、アイズも…。

「え？あの時って？」

「……………リヴェリア。あの時のベートの暴言吐いた場で、彼もいたのかい？」

「ああ、言ってなかったか？」

「聞いておらんぞ…。アイズがあの時凹んでいたのは、あの若造に聞かれてしまったからか…。」

「それはいくらでも謝るから、ここでやらんといてー！」

「手遅れだ、ロキ。」

「そんなー！」

リン リン

ベートは…彼のように弱者から這い上がってくるのを待っていたのか。

全員がベルのようにはいかないだろうに。

あのミノタウロスの戦いは、ベートに自ら吐いた言葉を逆にぶつけられたか。

そして…彼の立ち上がった姿にベートは待ち焦がれていたただだろうね。

「ふむ…頃合いですね。」

「え？メ、メイさん？コインを…？」

ピンツ……………カラン

「！」

「正面激突!？」

「がははは！あやつららしいのう。」

ああ、そうだね。

そうでなくては困る。

「があああああああつ！」

「うあああああああつ！」

相打ち…いや。

ドゴオオオオオン！

「「うわああああああ！」」

「うん、やはり吹き飛んだね。」

「やれやれだ。」

「あ…。」

「やはり、あやつが勝ったか。」

ベルも多少タメージを受けたけど、それほどじゃないね。

はあ…。ベートの言う通り差がどんどん開いていくよ。

「はあ…はあ…。」

「お見事です、坊ちやま。【凶狼】を…あの時のお礼を返しましたね。」

「うん…。べ、ベートさんは!？」

「大丈夫ですよ、彼女が介抱してくれるでしょう。」

「あ…。リーネさん。そうだね…。って！あわわわ、鍛錬場が吹き飛んじやった…。べ、弁償しなくっちゃ…。」

「リヴェリアさんから誘ったのですから、こちらには非はありません。」

「ええー…。」

それはそうだけど…。

また資金を貯めないといけないね。

ベートは…。彼女がいるから大丈夫か。

随分と積極的になったね。

「大丈夫ですか？ベートさん？」





「エイナ。」

「あ、はい？」

「彼を逃したらダメよ？絶対に捕まえておきなさい！（あのファミリーアの系譜は確かに問題だけど、今を見れば些細な問題ね。これ以上ない娘婿だわ。しかも私好みだし：ふふふ、理想の義息子そのものね！）」

「はい！もちろんです！」

「何とかしてでも、「ヘスティア・ファミリーア」に入らなくっちゃ…。ベル様にお仕えしたい…。」

「(チラツ) ……………本気であいつが心配になってきた。」



ベルが「最強侍従」を連れてこっちへ来たか。

案の定謝ってきたね。

本当に彼は「ゼウス・ファミリーア」と「ヘラ・ファミリーア」の系譜を持っているのかい？

彼らなら、至極当然のように去っていくというのにね。

「す、すみません！こんな有様になってしまつて。」

「いや、私から誘つたからな。気にするな。といつても、これはさすがにな…。」

「そうじゃな。だがのう…。」

「そうだね。吹き飛んだのが一部だけヨシとするけど、その跡はどうするか…。」  
「では、提案がありますか聞きますか？」

「「え？」」

提案？何だろう…。

いい予感もいやな予感もするんだけど？

## 第355話 九魔姫、疑問。

破壊された鍛錬場の跡をどうするかについて、メイがわけわからないことを言った。

「劇場やと?」

「ええ、今オラリオはこれから発展していかなければいけません。神ロキ、もしダンジョンに魔石が枯渴したらどうなります?」

「それはあり得ないじゃないかな?」

「……ダンジョンが制覇したら、の話やけど今のオラリオ連合ならあり得るかもなあ……」

「ロキ?」

「どういう意味だ?」

ロキはハツとして、別の話題に移ろうとした。

ダンジョンを制覇すると、魔石がなくなるのか?

そうなると……オラリオは間違いなく衰退する。

「メイたん、それは置いといて。劇場という案はええで!おもしろくなってきたわー!」

「はい、神ロキの手腕に期待しています。」

「待て、話が読めない。説明してくれ。」

「わかりました。」

いかん、つい魔石がなくなることに考えがシフトしてしまった。

劇場を建てるのと同じような関係があるのだ？

「こちらには、美男美女が多いです。それを利用しない手はないでしょう。」

「まあ、自慢じゃないけどね。」

「しかも、天界のトリックスターと言われる神ロキもおられます。禁酒にセクハラ禁止で悶々としている毎日でしょう。」

「ああ、五月蠅いんじや。酒飲みたいだの、おっ〇いもみみたいだの…。」

「しようがないやんかー！ガレスが目の前で飲むからやろー！」

なら、自粛しろ。

へスティア様を見習え。

そうするとメイがロキをフォローするかのようにつた。

「なので、それを脚本作成や服飾デザイン等で解消してもらいましょう。」

「さすが、メイたん！ウチの生かし方、わかっとなるやんけ！」

「メンバーは自分のファミリア内でやってくださいね。他のファミリアに依頼する場合は派遣料がかかりますよ？またはギルドを通す手もありますよ？」

「んー、そやなあ。考えてみるわ。」

……本気でやるのか？

改宗も検討するか。

フィンは困ったかのようにメイへ言った。

「ロキにはメリットあるけど、僕らには？」

「当然あります。【勇者】、貴方の目的は？」

「当然、一族再興……。そういうことか。」

「リヴェリアさん、貴方の目的は？」

「お前も知っているだろう。まだ見ぬ世界を、だ。ここにいる限りは……。なるほどな。」

「ガレスさんは熱き戦いですが、それは先程のスモウでわかりましたでしょう？」

「ふむう…悪くないのう。あの若造に力比べで負けるとは思わなかったわ。他の者ともやってみたいのう。」

「ええ、いずれも満員御礼になると思いますよ。当然、入場料などの儲けが入りますでしょうね。」

「フヒヒヒ、メイたん。お主も悪よのう…。」

「神ロキほどではございません。」

……オラリオには世界中の名士などが集まるが、ほとんどギルドが中心にして対応する。

私は「ロキ・ファミリア」副団長としての建前もあるから軽々しくはできません。

だが、「ロキ・ファミリア」内のホームでやるなら話は別だ。

ギルドも簡単に口は出せまい。

……今のギルド長なら問題ないだろう。

フィンは考え込むように言った。

「なるほどね。劇場を通して名前が売れば、それを追ってくる同胞や後進もいるかもしれないか……。」

「私もだな。ここにいないだけでは未知の情報が入らないが、劇場なら多くの人が来る。そこを通して交流して情報収集か。悪くない。」

「儂はただ、戦うだけでいいがのう。先程のスモウは燃えたわい。」

「では、こちらに押印を。既に予算案や提案書、劇場設計図はできております。」

「「は？」」

……早くないか？

アイナをオラリオへ来るのも計算の内なのか……？

「メイたん……、まさかこうなるのは計算の内やったんか？」

「いいえ、ただ場所が問題でした。今回の件は渡りに船でした。」

「…この書類、数日預かっていいかな？目を通してみんなと意見交わしたいんだ。時間はそんなに取らせないよ？」

「いいでしょう。3日以内にお願ひします。既に〔ゴブニユ・ファミリア〕へ打診済みです。」

「早すぎるで…。」

「ふむ…人出が足りんな。せめて、アリシアがいれば非常に助かるのだが。」

「いるでしょう。そこに貴方のもっとも信頼する方々が。」

「何だと？…：…確かにいたな、ちようどいい。」

そうだな、ああ元気なら問題ないだろう。

昔のアイナ以上に活発になっているならな。



「エイナ、いいわね？絶対にベルくんを放しちやダメよ！」

「何回も言わなくてもわかっていきます！…：…あ、べ、ベルくん！怪我はない？」

「あ、はい。ほんのかすり傷と火傷ですが、ライラさんよりいただいたポーシオンですぐに治りました。」

「レベル6と4連戦やって、その程度なのか…。すごいな…。」

「あの、すみませんでした。こんな展開になってしまつて…。」

「いや、俺が言い出したことだからな。…エイナを頼むぜ? (色々と苦労すると思うが、うん…マジで)」

「あ、はい! エイナさんは僕が守ります! 任せてください!」

『聞いた? エイナ。こう言い張る子は絶対にいないわ! 負けちゃダメよ! ……: 既成事実でも許可するわ。』

『……: アイナ母様! ……: それは、まだできないんです。』

『は? 何ですよ? こーんな立派なイイモノを持つているくせに!』

『きやつ! ア、アイナ母様! 違うんです! ……: こつちへ来てください。父様も。』

『え? 何かしら?』

『何だ? あー…: ベル、イーナを見てやつてくれ(さつきからずっとベルしか見てないからな)。』

「あ、はい。」

『うん…: 聞かれています様子はないね。…: いいですか?』

『『は、はい。』』

『ベルくんは、まだ未精通なんです。』

『え? まだだど!?! ……: 14歳は遅い方だが、それでもまだなのか!?! しかもレベル6で!?!』



『…うわあ、レア中のレア中のレアじゃない。レベル6…そしてあの容姿。極めつけにまだ未精通？リヴェリア様の言った通り、世界一の純粹無垢な子だわ。…放しちやダメよ！絶対によ！（めちやくちや理想の義息子じゃない！）』

『わかっています。』

『それで他のライバルって…どうなの？』

『甲乙つけがたいほどの美人ばかりです…。その…コレより大きい方も。』

『…羨ましく思ったらいいのか、哀れむべきなのか…』

『貴方？』『父様？』

『すみませんでした！』



## 第356話 侍従長、勧誘。

提案書が無駄にならずにすみましたね。

まさか、ここまでトントン拍子で進むとは思いませんでした。

坊ちやまには感謝ですね。

リヴェリアさんがアイナさんのところへ行きましたね。

「何をやっているのだ…お前たちは。」

「あら、リヴェリア様。」

「リヴェリア副団長！」

「すっかり元気になったな…。昨日の今日だというのにな（それだけあの少年の血は規格外ということか。なら一層支えなければならんな）。」

「そりやもう！義息子の活躍を見たからにはね！」

「義息子…早くないか？それに、一応負けたのはお前たちのファミリアでもあるのだぞ？アイナ。」

「それはそれ、これはこれ。」

「はあ…お前は変わってないな。だが、元気になったのならちようどいい。」

「え？」

もうチュール家は坊ちやまを受け入れましたね。

エイナ・チュールから、アイナ・チュールと関係があると思いましたが、母娘だったのは幸いです。

彼女たちなら坊ちやまに対して偏見なくしてくれるでしょう。

おや、イーナ・チュールですか。

「ベル様！私も「ヘステイア・ファミリア」へ入りたいです！」

「えつと……ちゃんとご両親とエイナさんにお話しした？家族と離れ離れになるのはよくないよ？」

「それでもです！」

「イーナさん……ダメだよ。僕は……半年前まで天涯孤独だったんだ。でも、ここへ来て神様……みんなに会うことができたんだ。イーナさんは、ご立派な両親とお姉さんのエイナさんがいるんだよ？それを捨てて来るのは……僕は認めたくないな……。あ、ごめんね。キツイことを言っちゃったみたいで。」

「ベル様……。ごめんさい。」

ふむ……エイナさんと違い、活発で好奇心旺盛な方ですね。

それにさつきから思いましたが、坊ちやまに対して並々ならぬ想いがあるようです

ね。

…彼女も引き込みましょうか。

チュール家の血統を丸ごといただきましょう。

「お話しの中で、失礼します。」

「あ、メイ。」

「〔ヘスティア・ファミア〕 団長ベル・クラネル専属メイド長のメイといます。イーナ・チュールさん、それは本気でしようか?」

「エイナ・チュールの妹、イーナ・チュールと言います! はい、〔ヘスティア・ファミア〕へ入りたいです!」

礼儀正しい娘ですね。

「いいでしょう。」

「メ、メイ!」

「坊ちやま、エイナさんがこちらにおられます。離れ離れになることはないでしょう。」

「で、でも! アイナさんとウイナさんは治療が終わったら帰るかもしれないんだよ?」

「大丈夫です。チュール家の皆さんは、全員オラリオに住むことになりましたから。」

「え?」

ええ、リヴェリアさんが彼らを説得してくれからです。

：坊ちやまとしては、赤の他人ですが家族が離れ離れになるのは見ていられないでしょう。

なので、いつそ丸ごと取り込んだほうが無難です。

あちらはいかがでしょうか？

「えつと…私達に復帰してほしいということ？」

「そうだ。ここが吹き飛んだ以上、劇場を設立することになったのでな。」

「劇場!?!」

「ああ、今でも人出が足りないんだ。そこでだ、お前たちに復帰してもらおうぞ？ 空気がいい場所でもそうなたら意味ないだろうが。」

「うっ!」

そうですね。

死の病はその程度では軽減できません。

なので、アルフィアさんもメーテリアさんもその環境に身を投じなかったのです。

それに、オラリオ以上に死の病対策となったところはありません。

「オラリオなら、オラリオ一治療士のアミッドもいるし。娘のエイナも〔ヘスティア・ファミリア〕にいるなら問題ないだろう。」

「あの…イーナは？」

「いいわ、病気が治ったらね。久々にリヴェリア様と組めるわね！」

「ああ、お前なら信頼できる。ウイナもだぞ？」

「いや、それはもちろんですが。イーナが…。」

「貴方、あちらを見なさいよ？」

(ニツコリ)

「え？あー…。」

(ああ…やっぱり。そうなっちゃった…。)

イーナさんにも言っておきましょう。

彼女としては予想通りですから。

「エイナさん、こちらへ来てくれませんか？」

「あ、はい！」

「イーナさんを「ヘステイア・ファミリア」へ入団させます。」

「…：…わかりました。イーナ、いいのね？」

「はい、姉様！」

姉妹仲は悪くなさそうですね。

「イーナは私が見ると言うことですね？」

「いいえ、他の方にやってもらいます。」

「え？」

「エイナさんは大事な役目があることを忘れましたか？」

「あ、はい……。でも、この子は私の妹ですが。」

「ええ、同じ屋根の下に住んでいます。もちろん、隣の部屋にします。ですので合間に話ぐらいいはできるでしょう？」

「……わかりました。イーナはどなたに面倒を見てもらうんでしょうか？せめて挨拶ぐらいいはしておきたいので。」

「はい、それは……。」

ええ、あの方々をお願いします。

これ以上ない経験をお持ちの方々です。

---

一旦解散し、チュール家で話し合っているようです。

「イーナ？いいわね？私は当分治療院で治療を続けるけど、イーナは「ヘステイア・ファミリア」に入るのよ？」

「はい、母様！」

「俺は先に「ロキ・ファミリア」へ行く。10年以上の空白もあることから、色々と確認しないといけないことがあるからな。」

「父様、リヴェリア様の足を引つ張らないでくださいね？」

「ああ、もちろんだ。…「ヘスティア・ファミリア」へはアイナが全快してからお礼に行  
くぜ？…心の準備や覚悟もしておきたいんでな。うん、マジで（ガクガクブルブル）。」

「そうね…（ガクガクブルブル）。」

「大丈夫と思います…。」

大丈夫でしょう。

坊ちやまのハーレムの中に、エイナさんもイーナさんもいるのですから。

当然、人妻のアイナさんはダメですよ。



## 第357話 月女神、指導。

メイに呼ばれてきてみると、ヘステイアとエイナとメイ、そしてエイナによく似た半妖精がいる。

何事なのだ？

「それで……この子がキミの妹かい？」

「はい。すみません、そのようなことになってしまつて。」

「いや、いいんだよ。ベルくんの帰りが遅いから気になつてたけど、そのようなことがあつたんだね。」

そうだな、オリオンの帰りが遅すぎるからオラリオ中を探そうとしたところだ。

まさか【ロキ・ファミア】でそのようなことがあつたとは…。

チユール家もオリオンによつて救われたとはな。

それにその娘をみると…。

「ふむ……エイナと違い活発そうだな。それで、メイ。私を呼んだのは？」

「はい。エルピスさんたちにイーナさんの指導役になつてもらいたいです。」

「……それはいいが、彼女は入つたばかりだろうか？」

(キミもじゃないか。)

…？

へスティアからも言いたげな視線を感じるのは気のせいだろうか？

「ええ、そうです。なので、都合がいいんです。余計な知識がないため。」

「え？」

「…なるほど。彼女にパンクラチオンを教えろ、ということだな？」

「ええ、基本は体術ですからね。」

(うわー…。アルテミス直々の指導で？)

「え？え？」

なるほどな。

…それにその娘もオリオンに対して並々ならぬ想いを持つているな。

あのスキルも発現しているに違いない。

一応、確認してみるか。

「ふむ…君は何か体を動かすようなことは？」

「あ…特には。」

「なら変な癖がない分、好都合だな。いいだろう、彼女は私が預かった。」

「…エルピス、やりすぎないでくれよ？」

「ハスティア、私を何だと思っているんだ。ああ、そうだ。イーナ、今まで好きになった人はいるか？」

「…べ、ベル様だけです。」

（また増えたー！ストップ！ストップにして欲しいよー！）

「そうか、オリオンか。私もだ。お互い、頑張ろう。」

「あ、はい！（オリオンって誰？）」

レトウーサやランテはアストレアの元眷属とダンジョンで経験を積んでいるな。

なら、私…いや私達が直々に指導するのも悪くない。

ヒューマンになってからの指導は初めてだな。

そして私達はイーナを指導した。

「はあ…はあ…」

「ふむ、このぐらいか。」

「ねえ、彼女入ったばかりでしょう？キツくない？」

「何を言っている？私達で話し合っただろう？ダンジョンに潜る以外に効率的な方法は、と。」

「それはわかりますが。私達は、元神ですよ？イーナさんはまだ若輩の半妖精ですよ？」

何を言っている？

私達も数週間前まではレベルなりたてだろうが。

そこに神だろうがヒューマンだろうが、関係ない。

…ただ、経験が違うだけだ。

イーナはもうへばっているか。

…卑怯だが、ここで気合入れさせるか。

「私たちもステータスはほぼ変わらないだろう…。そこまでにするか？君のオリオンへの想いはその程度か？」

「!!いいえ!ま、まだやれます!」

「良い返事だ。いいか？オリオンのことを想い続けろ、いつでもだ。そうすれば君は強くなれる。まずはアビリティをある程度上げよう。」

「はい!」

うむ、レトウーサやランテたちと違い吸収率が著しいな。

…メイが言ってたが、チュール家の血統が関係しているかもな。

そしてイーナがランニングしに行った後に、ユーティスが話しかけてきた。

「……そりゃ、そうだけど。まさか、彼女にも【白兔眷属】が出るなんて…。」

「何でベルさんは無意識にあちこち粉をかけてきたり、フラグを立ててくるんですか…。」

ベルさんにフードや仮面では足りないかもしれないかもしれませんが。ホームとクノツソスとの直通通路を作ったほうがいいのでは？」

「それだと彼女がひどい目にあつたわよ？」

「うーん……。ひどい目と言えば、『ラシヤプ・ファミリア』ですか。どこかで聞いたことが……。」

ラシヤプ：聞かない名だな。

オリンポスにもアースガルドにもいないなら、他のところだろう。

…邪神、滅すべし。

特訓が終わり、イーナはヘステイアに更新してもらっている。

その時にメイがやってきた。

経過確認だが、マメなことだ。

それが【ゼウス・ファミリア】の強さの秘密だろうな。

「失礼します。どうですか？エルピスさん、イーナさんは？」

「先程、更新に行っている。なかなか筋は悪くない。」

「そうですね。」

「ねえ、メイ。イーナをどう育てるつもりなの？」

「パンクラチオンマスターになってもらいたいかと、格闘家エルフはロマンあると思いませんか？」

「…エイナさんが泣くと思います。」

「そうか？悪くないと私は思うぞ。」

「前々から思っていたのだが、なぜエルフは魔法種族なのに遠距離攻撃だけなの？」

「近距離でやれば、一気に火力も強くなるだろうに。」

「もちろん、パンクラチオンだけではありません。彼女にはエルフらしく、貞潔を叩き込んでほしいのです。」

「ふむ、なるほど。それは私の管轄だな。」

「あと、ユーティスさんにも。」

「え？私？」

「はい、彼女には凝り固まった視点を持つてほしくないのです。そこも指導していただければと、正義を司る貴女に。」

「そうね…。わかったわ。」

「シノスさんもお願ひします。」

「私もですか？」

「女性としてのしたたかさや狡猾さ、そしてお洒落や程よい色気をお願いします。お手  
の物でしょう?」

「お任せ下さい!一流の女性にしてみせましょう!」

……私達、元神として司るものを教えるのはいいが、混乱しないだろうか?

聞いてみるか。

「メイ…、お前イーナをどうするつもりだ?」

「多様な視点を持ち、女性としての美と狡猾をもち、貞潔を守る格闘家エルフ?突っ込み  
どころが多すぎるわ…。」

「彼女は山奥の村で神々にも触れず生きてきました。いわば、真つ白の紙です。そして  
チュール家の血統。それを生かさない手はないでしょう?」

「さすが【最強侍従】ですね…。」

全く、抜かりがないな。

ゼウスは放任主義だからメイに全て任せていただろうな。

【ゼウス・ファミリア】の影の支配者と言っても過言ではないな。

む?ヘステイアが戻ってきたか。

「どうだ?ヘステイア。」

「キミたちが考えた効率的な方法は確かにすごいよ…。今日だけでももう600オーバー」

だよ。」

「やはりね。」

「よし、その調子で続けるか。…イーナはどうした？」

「更新したままで寝てしまったので、エイナさんに頼んで運んでもらったよ。」

そうか。初日だから仕方がないだろう。

いや、あそこまで粘るのはイーナ以外にいなかったな。

ふふふ、先が楽しみだ。



## 日常編（ほのぼの？）

## 第358話 街娘、反省。

イーナさんへの指導内容を考えないといけませんね。

元神フレイヤとしての威信に賭けて！

アリーゼさんと輝夜さんが、元「アルテミス・ファミリア」の方々と一緒に戻ってきました。

そして、先程のイーナさんに絡んだ「ラシャプ・ファミリア」について話し合いました。

「ラシャプ・ファミリア」って、聞いたことないわ！

「闇派閥でも聞いたことないわ…。恐らく外から来たのでしようね。」

「だが、やり口が闇派閥そのものですね。コソコソして気に入らせんねえ。」  
ええ、同感です。

それに本当にどっかで聞いたことあるんです。

そう…最近のような。

ユーティスさんがそんな私を見て話しかけてきました。

「どうしたの？シノス。ずっと考えていたみたいだけど？」

「聞いたことがあるんです……どこかで……。あ！ヘディンさん、ちよつといいですか？」

「はい、どうしましたか？シノス様？」

「様はいいと言っているんですが……。『ラシャプ・ファミリア』って聞いたことないですか？」

「……そのファミリアがどうしたのですか？」

「実は……」

ヘディンさんなら知っているでしょう。

「フレイヤ・ファミリア」と関係あるなら知っているはずですから。

一連のことを話した後、ヘディンさんは険しい顔をしていました。

「……シノス様、すみませんが後で少々時間をいただけませんか？」

「え？いいですけど、知っているんですか？」

「はい、知っています。これは我々の不手際です。」

「え？」

不手際？

……クノツソスのことかしら？

そして、数十分後に私はヘーデンさんに呼ばれて来てみた。

そこには…。

「えと…何故ヘグニさんとガリバー兄弟の皆さんがそろっているのでしょうか？」

「そうだ。用件を言え。」

「姫から連携の打ち合わせがあつたのに。」

「姫がまた拗ねられたらたまらん。」

「姫の連携稽古、毒舌もサイコー。」

「友が心配だ…。」

「黙れ、貴様ら。…シノス様、いえフレイヤ様。この度のイーナ・チュールは我々の不手際は。」

何ですって…!?

「…続けなさい。」

「フレイヤ様は覚えているかもしれませんが、1年前のアライイ王女をご存知でしょうか？」

「…ええ。」

忘れるわけがないわ。

あの暇の中で楽しかった日々を。

「あの時、フレイヤ様の持ち物を汚したのが【ラシャプ・ファミリア】です。」

「……思い出したわ。あまりの小物だったから忘れていたわ。そのファミリアがオラリオへ忍び込んだのね。」

「はい。」

「逃亡せし邪神か……。」

「確かに……俺たちの不手際ですね。」

違うわ。

これは、私の責任よ。

【フレイヤ・ファミリア】主神として。

彼らの罪悪感を消すかのように、言った。

「いいえ、あなた達のせいではないわ。追うように言わなかった私の責任よ。」

「……皆様へは私が言います。そこで、だ。【ラシャプ・ファミリア】について調査しろ。」

そうね。

その方がいいわ。

と思つたら、やってきたわ。

「不要ですな。ヘデイン殿。既にこちらにあります。」

「!!!（気配を絶たないで欲しい…。心臓に悪い。）」  
「セバス殿…。この度は申し訳ない。」

「いえいえ、そのようなことは「ヘラ・ファミリア」の時でも幾度かありましたからな。それ以降、敵対したファミリアは即座に滅ぼし、神をヘラ様へ引き渡し処理なさいましたからな。」

「「……………」」

「そうね…。」

「当時は本当に抗争ばかりだったわ…。」

「話を戻しましょう。」「ガネーシャ・ファミリア」へ赴いて、「ラシャプ・ファミリア」の

方々へヘラ様直伝のご…尋問をなさいましてな。」

「拷問と言おうとしたよな…?」

「オイバカヤメロ」

「俺らを巻き込むな!」

「分かっているなら言うな!」

「それで、構成がわかりました。どうやら、クノツソス侵攻戦に逃げ出した闇派閥の方々を眷属にしたようです。」

「！！！！」

「なので、シノス嬢…そして「フレイヤ・ファミリア」の責任ではありません。まあ、ヘラ様に言わせれば「詰めが甘い」でしょうな。」

「…それでも神ラシヤプを取り逃がした私の責任です。」

ええ、あの神を逃さなければイーナ・チュールはベルさんのハーレムに入ることはなかったのに…。

そんな私を慰めるかのようにセバスは言った。

「いえいえ、これはチャンスなのです。」

「「チャンス？」」

「はい、アビリティを上げてから偉業を溜める必要はありません。それは皆様がご承知と思います。」

「まさか…セバス殿、貴方は…。」

ヘディンはハツとしてセバスを凝視したわ。

…何かしら？

セバスはそのヘディンさんの視線を切って、私を見た。

「シノス嬢。ヘステイア様に聞きましたが、もう既にアビリティがCに入ったとか？」

「「え？もう？」」

「はい！」

「ユーティス様も同様にアビリティを上げておられるとか？」

「ええ。エルピスさんが入ってから、かなり上がりました。エルピスさんもCに入っています。」

「「早すぎる…。」」

いや、でもね。

あのスキルもそうだけど、エルピスさんとユーティスさんと競い合うのが非常に楽しいのよ！

神力も神威もなしに、純粋な技だけでガチンコするというのがね。

……結局楽しんだのが勝ちということよね。

まあ、ステータス上昇速度が「フレイヤ・ファミリア」でもないほど早いんですもの。それが自分というのは皮肉な話だけだね。

そしてセバスはようやく本題へ入ってくれた。

「ラシャブ・ファミリア」は真っ向から来ないでしょう。神ロキ曰く、コソコソするチンケな神と聞いております。なので、第二級冒険者以上に対しては出て来ないでしょう。」

「…わかりました。私達を囮にするのですかね？」

「いいえ？ 違いますよ？」

「「え？」」

え？ 違うの？

レベル1の私たちをおびき寄せて、そこを一網打尽するんじゃないやなかったの？

セバスは生徒へ教えるかのように言った。

「逆です。偉業にするのです。聞けば、今回の捕縛でレベル3の半分は捕らえましたが、その他のレベル3やレベル2が大勢おられます。貴方がたの偉業の生贄には丁度いいでしょう？」

「「うわあ……生贄と言ったぞ……。」」

「なるほど……うふふふ。あちらからネギをしょつて鴨がくるということですね？」

「その通りでございます。」

「そうですね。できるだけ、アビリティを上げますね。やる気が湧いてきました！ ユーティスさんたちに伝えますね！ 情報ありがとうございます、セバスさん。」

「いいえ。坊ちやまに感謝するべきかと。おかげで、チュール家を完全に取り込むことができました。」

そうですね、そうよね。

偉業を積む相手は高レベルでないといけないよね！



「ヘステイア・ファミリア」またはオラリオ連合の誰かにしようと思っただけ、戦力ダウンしたら目も当てられないわね。

闇派閥なら躊躇しなくてもいいわ。

イーナさんにはある意味感謝しなければいけませんね。

「ラシヤプ・ファミリア」に初めて同情したぞ。」

「何もこんな時に来なくてもいいだろうに。馬鹿なのか？」

「俺はエイナさんが可哀想に思ったぞ。」

「しかも家族丸ごと…。」

「それ以前に、ここに神ヘラがいるのを知っているのか？神ラシヤプは。」

「[「……………」]」

知らないでしょうね。

知っていたら絶対にオラリオへ来るわけがないわ。



↳ 「ヘステイア・ファミリア」イーナの部屋↳

「くしゅんー！」

「んにゃ…ベル様…。」

「はあ…、だから家族のみんなに紹介したくなかったのよ。イーナがベルくんを見たら確実に惚れるということに。だって、姉妹と共に好みが同じなんだもの…。しかも、アイナ母様がいつも言っていた理想の息子が、ベルくんそのものなんだもの。」

「【ディアンケヒト・ファミリア】治療院のアイナ病室」

「大抗争の真実はそうだったのね…。あの子があまりにも可哀想じゃない！グスツ…。神ゼウスがそんな神と知ってたけど、そこまでなんて…。それでなんであんなに真つ直ぐで純粹無垢に育つの？奇跡だわ。…。エイナは本当にいい子を捕まえたわね。…私が母というのを教えてあげるわ！ふふふ、楽しみになってきたわ。」

## 第359話 絶対悪、回想Ⅰ

俺は今、妻からめぢやくちや怒られている。

まあ、当然だな。

間接的に、あの子を独りにさせてしまったからな。

「貴方、聞いているのですか!？」

「はいはい、聞いているよ。」

「…あとトトン石を抱かせますよ?」

「聞いているって! 本当に!」

「でも…あの子がここまで来るなんて。」

「ああ…まさかここまでとはな。予想外にも限度があるぜ。」

今でも思い出せるぜ。

半年前のことを。

—————

※ベルがオラリオへ来た時

「はあああああ〜。」

「どうしたのですか？ 貴方。」

「どうもこうもないよ。こんなんじやダメだよ、ダメダメ。」

「ああ…下界のことですか。」

「そうだよ！ あいつらが…命を賭けて名を落としてまでやったというのに！ こんなんじや…あいつらが浮かばれねえぞ…。」

「そうですね…。このままでは滅びますね。」

「そうだよ！ ああ、もう！ わかっているはずだろ！ フレイヤもロキも！」

「貴方…。あら？」

「どうした？ ニクス。」

「……………」

「おーい？」

「あ、いえ…。珍しい光を持った子だなと思って。」

「へえ？ どれどれ？ どの子？」

「ほら…、あの白い髪の子。」

「ん？ へえ、可愛いじゃん。兎みたいだな。どんな光なんだ？」

「なんと言ったらいいか…、澄み切っているというより透明？」

「…オラリオにふさわしくないなあ…。でも、ちよつと興味あるわ。」

「ええ。何となく…目が離せないというか。」

「ふーん、オラリオに初めて来たばかりみたいだな。大丈夫か？」

「…見守りましょうか？」

「そーだな、リオンもああなっっちゃったしな。…ルドラめ、余計なことをしたな。」

※ベルがファミリアを入団申請をしたが、次々と追い出された時

「あ…また追い出された。」

「あの神はダメダメ。」

「ひどいわ、話すらないで門前払いなんて。」

「あいつはそーいう神だからな。」

「ゴブニュ、受け入れたっていいのに…。」

「どーみても鍛冶士に合わないだろ…。」

「…：オラリオにいる神って皆あなの？」

「大抗争の時に一斉送還を多くするべきだったかな…。ケチるんじやなかった。」

「ああ…あの子が可哀想…。」

「俺は降りることできないからな。ニクス、行ってみるか？」

「そうね…、あら？」

「お？」

※ベルが「ヘステイア・ファミリア」に入団した時

「ヘステイアか。まともな神に拾われたな。」

「ええ、ヘステイアなら大丈夫だわ。：グータラがネックだけどね。」

※ベルがダンジョン初突入時

「ダンジョンへ潜るみたいね。」

「よし！俺に任せろー！権能を生かす時が来たぞ！」

「そこよ！よし！」

「まったくのド素人だなー。」

「あらあら、ゴブリン一匹倒しただけで帰ったわ。」

「…14歳だよな？10歳とかではなく？」

※ベルがヘステイアへ髪飾りをプレゼントした時

「ヘステイアへプレゼントするために頑張るなんて、健気だわ…。」

「眩しいなー。オラリオでもっと合わない子じゃないかな？」

「何故かしら？他にも優秀な子がたくさんいるのに、どうしてもあの子から目が離せないわ。」

「俺もだ。…だけど、どこかで見たことあるんだよな。あの横顔…。」

※ベルがミノタウロスの追いかけて回され、アイズに惚れた時

「ちよ、ちよっと！ミノタウロスよ！倒してきて！」

「無理だつて！俺、もう権利ないもん！」

「声と同じならでできるはずよ！」

「無茶言うな！…お？あれ見ろよ。」

「あらあらあらあら。」

「ははは、甘酸っぱいな！」

※ベルがシル（フレイヤ）に会った時

「ねえ…あの娘。」

「フレイヤめ…目をつけたな。その前にやることをやれよ！」

※ベートが『豊穰の女主人』でベルをけなした時

「あの狼人、呪つていい？」

「見逃してやれよ…。あの狼人、いるのをわかつてて言ったな。」

「え？」

※ベルが八つ当たりでダンジョン大暴れした時

「あの子、やけになつてゐるわよ！貴方の権能でダンジョン閉じれない!？」

「無茶言うなつて！」

※ベルのステータスが爆上がりした時

「……………」

「ニクス？どうした？」

「より輝いた…。」

「へえ？」

※ヘステイアがヘファイストスに土下座し、ナイフ制作してもらった時

「ヘステイア…あの子に本気で惚れたわね。自ら借金してまでナイフをヘファイストスに依頼するなんて。」

「三大処女神が崩れたな。ますます興味持ったぜ。」

※『怪物祭』でフレイヤが魅了でモンスター騒動起こした時

「ねえ、フレイヤは何を考えているの？しばいていい？」

「まあ待てよ。フレイヤめ、放し飼いさせて後で回収するつもりだな。ただ、シルバーバックをソロで倒すなんて…冒険者になって1ヶ月もないぞ？」

※リリに会ってサポーターしてもらった時

「あの小人族…ソーマは何しているの？」

「天界と同じく酒づくりだろ。ソーマも送還リストに入れるべきだったかな…。」

※キラーアント全滅後、リリから本音を聞いた時

「……………」



「何て子だ……。全てを許し受け入れた上に改心させるなんて。聖者と名乗ってもいいんじゃないか？」

「同感だわ。」

※ギルドでアイズに捕まった時

「あらあらあら。」

「うわー、甘酸っぱー。」

※アイズと特訓中

「だんだんと輝きが強くなっているわ……。」

「マジ？ そういえば、1ヶ月で10階層まで行くとは……。」

「ねえ、私あの子たちの特訓より、バベルで彼らを見ているフレイヤが気になるけど？」

「怪物祭と同じく、何かを仕掛けてきそうだなー。」

「フレイヤのあの表情……。嫉妬よ。」

「マジ？ あのフレイヤが？」

※ミノタウロス戦前のステータス時

「ねえ、SSってあるの？」

「あるわけないだろ！ Sまでのはずだ……。純粋な想いが限界を超えるのか？」

※リリを逃した後、ミノタウロスに廻られ中

「み、見てられないわ。」

「……厳しいな。」

※ミノタウロスとガチバトル中

「……ねえ、貴方が見てきた子であそこまでの子っているの？」

「……見つけた。」

「え？」

「俺らが求めて来た…英雄を。ニクス！お前が見つけた子は当たり前だ！」

※レベル2にランクアップ時

「1ヶ月半でランクアップ…。」

「宴会だ！祝うぞ！」

※中層初突入時

「おいおい！中層初突入で死の逃避行とはな！」

「止めて！ダンジョン閉じて！」

「だから無茶言うな！」

※ヘルメスに覗きに誘われた時

「貴方…神友を選びなさい。」

「いや…その…俺も同じことしたかも？」

「貴方？」

「ハイ、ゴメンナサイ。」

※神威により黒ゴライオス襲来時

「あーあ、俺と同じことしてるぜ？」

「はあ…。」

※ベルの英雄願望で黒ゴライオス撃破時

「…すごいわ。」

「…マジかよ。レベル2であの神殺しのモンスターを消し去るなんて…。」

「あら？ヘルメス、何か喚いているわよ？」

「何言ってるんだ、あいつ…。え？…ゼウスの遺した子？」

「え？」

## 第360話 絶対悪、回想Ⅱ

※『火鉢亭』で「アポロン・ファミリア」から挑発された時

「ゼウスの遺した子？じゃあ、あの子は…あの時あいつらが言っていた…」

「ちよ、ちよっと！アポロンの馬鹿があの子へちよつかい出しているわよ！」

「あー…あの変態かー。」

※アポロンの宴で、ヘルメスと談話中

「三大クエストね。ゼウスとヘラの子は惜しかったわね。」

「ヘルメスめ…確認したな。」

「え？」

※ヘルメスによって、アイズとダンス時

「あらあらあら。」

「かーつ、甘酸っぱー！ヘルメス、ナイス！」

「フレイヤを見てよ。ざまあよ、ざまあ。」

「……………」

※「アポロン・ファミリア」によって教会破壊時



じゃんー！」

※命を追って歓楽街潜入、ヘルメスから精力剤を渡された時

「歓楽街はまだ早いわよ！やはり、神友は選びなさい。」

「いや、でも一度はやったほうが…。」

「あの子にはまだ100年早いわ！」

「それだと、寿命で先に死ぬぞ…。」

※朝帰りしてヘステイアから説教中

「ははははは！逃げ切るとはなな！」

「ヘステイアに怒られる姿を見ると、とてもレベル3とは思えないわね。ふふふ。」

※ヘルメスから殺生石情報提供時

「ヘルメス…、わざと情報を与えたな。」

「ヘルメスの領地へ行って破壊してきていい？」

「やめろって！」

※逃亡中にアイシャからネタバレ時

「殺生石…。なるほど、あの狐人の妖術か。」

「レベルブーストって…チートじゃない！」

※歓楽街炎上時

「フレイヤ、ガチギレしているぞ。」

「どんだん燃やして！あの子の教育によくはないわ。」

「そこかよ！」

※アイシヤ撃破時

「さすがにレベル4は無理かー。でも……」

「えええ！宴会よ！」

※ウイーネ保護時

「貴方……あれの存在知っていた？」

「知っていた……。さて、どうするんだ？【未完の英雄】」

※異端児との宴会中

「さすが【未完の英雄】だ。受け入れやがった（あの子……無意識に未知を既知に変えていく）。蛙の子は蛙といったところか。」

「大丈夫なの……？」

※ディックス戦闘中

「やはりこうなったな。あのイケロスの子はヤバイからな。」

「偽善者？あつちが偽善者じゃない！」

※【ロキ・ファミリア】からウイーネ庇った時

「はははははは！」「ロキ・ファミリア」でも引かないか！【勇者】よ！これが本当の【勇者】だ！どんな気分だ？ねえ？どんな気分？」

「言っても聞こえてないわよ…。」

※愚者の魔法によりウィーネ復活時

「そ、蘇生した…？」

「嘘でしょ…。」

※オラリオでベルの悪評蔓延時

「貴方、今から降臨してもう一度大抗争起こしてきて？」

「だから、俺に権利終わったってば！」

※【ヘスティア・ファミリア】で一致団結した時

「いい仲間ね…。」

「ああ…。」

※ヘルメスの罠により、グロス戦闘中

「やはり神友は選びなさい。」

「ヘルメス…、本気なんだな？あの子を英雄と認めたから、この舞台を？だがな…。」

※アステリオス戦闘中

「ええー…。」



「ははははは！壊しやがった！ヘルメスの秤を！間違いない！ベル！お前は【最後の英雄】だ！」

※レベル4にランクアップ時

「もうレベル4かー。宴会の準備しなきゃな。ん？どうした？」

「今までの光より、さらに強く輝いているのに透明のまま…。」

「マジかー。というか、まだ4ヶ月半もないぞ…。」

※モス・ヒュージによって川へ引きずり込まれた時

「水を止めて！」

「だから、できないってちゆうの！」

※モス・ヒュージを聖火英断で撃破時

「か、かつこいいわ…。」

「この土壇場で必殺技を編み出すのか…。どこまで俺の予想を超えてくれるんだ！」

※ジュラとリユーとベル対峙

「あの子ね？貴方が目をかけてた子って。」

「ああ、また復讐の炎に焼かれるのか…？頼むぜ？リオンの闇を晴らしてやってくれ。」

※ジャガーノート降臨時

「あ、あれは？」

「再び出たのか…。【アストレア・ファミリア】を壊滅に追い込んだ破壊者が。」

※深層からの逃避行

「ま、まずくない…?」

「まずい、めっちゃまずい…。手負いで深層だぞ…。」

※闘技場でリユーを助けにベル救援時

「も、戻ってきた!?!」

「リオン、お前は忘れていたな。そいつが超下級のお人よしだということ。」

※セーフティエリアで休憩時

「何でそこで振り向かないのよ!」

「あーあーあー! せっかくのチャンスが…。ヘタレポンコツエルフ!」

※変異したジャガーノート撃破時

「乗り越えたな…。リオン。」

「あの娘を纏つてた闇が消えたわ…。貴方、私はあの子に全てを賭けるわ。」

「賭けにならねーじゃねーか。何故なら俺はとづくに全てを賭けているからだ。ハハッ!」

※シルデートのため、ヘディン特訓中

「ねえ、フレイヤは何を考えているの?」

「そろそろ収穫を始めたか…。だが、何でこんな回りくどいことをするんだ？」

※シルとデート中

「あらあら、見事なエスコートね（私もして欲しいわ）。」

「何で、あの子はフレイヤの魅了が効かないんだ？…まさかあのスキルの副次効果か？」

※フレイヤがオラリオ丸ごと魅了した時

「振られたからといって、アレはやりすぎない？」

「まさかフレイヤが振られるとはなー。さすがは【英雄】と言ったらいいのか…。しかし、オラリオ丸ごと魅了するとはなりふり構っていられなくなつたな。」

※【フレイヤ・ファミリア】洗礼中

「…えげつないことをするわね。」

「自分の眷属に死ぬ手前まで甚振って、そこをフレイヤが慰めるか…。完全なマッチポンプじゃねーか。」

※フレイヤと口喧嘩中

「フレイヤのあの表情、初めて見るわ…。」

「あのフレイヤに対して啖呵きれるのは、天界も含めてあの子だけだろうなー。」

※ヘスティアとフレイヤの戦争遊戯合意した時

「やはり、戦争遊戯か。絶望的なほど不利だな。」

「ええ……。貴方、下界へ今すぐ降りてきて大抗争をもう一回……。だから、俺は権利を失ったって！」

## 第361回 絶対悪、回想Ⅲ

——ここから本作品の流れになります——

※ベル気絶中（第1話）

「うん……決めた。」

「え？」

「あの子のことをもっと知りたくなつたわ。手伝つて。」

「何をするんだ……？」

「過去を見てみたいの。彼の親は誰なのか、どのようにして育てられたのかを。」

「……ストーリーじゃねーか。まあ、俺もだが（本当にアルフィアの甥かを確認したいな）」

※ベル、オラリオへくる1年前

「ええと……1年前つと。あら？かなり辺鄙な村ね。」

「そーだな。……ああ、やはりか。」

「え？あら、お祖父さんかし……ら。ぜ、ゼウス!？」

「ゼウス……こつちへ帰つてきてないよね？」

「ああ。恐らくだが、死んだふりしてたんだろうな。」

「つまり…育児放棄？」

「そういうことになるなー。」

「…ちよつとゼウスの領地へ行つてくるわ。」

「おいやめろ。」

※ベル、オラリオへくる3年前

「更にさかのぼつて…平和に暮らしているわね。あの助平爺は相変わらずだけどね。」

「オラリオを出ても変わらないなー。よく染まらなかったな…。」

「本当ね…。」

※ベル、オラリオへくる5年前／アストレア同居

「え？何でアストレアが？」

「何やってんだ…。リオンのところへ行かず、何であの子とイチャイチャしてんだ？」

「ああ、なるほど。子供を多く失つたため、あの子で慰めてもらっていたのね（…羨ましいわ）。」

「それはわかるけどなー（この時点でわかつただろうな、あの子がアルフィアの甥であること）。」

※ベル、誕生時

「更にさかのぼつて…あら、やはり母親そっくりね。」

「ああ…確定か。」

「え？…あの子の母の隣にいるあの娘は…？え？姉さん…？まさか、貴方についた女性  
は…。」

「ああ。あの子の血が繋がった、正真正銘の伯母だ。」

「……貴方、正座。」

「え？」

「正座」

「ア、ハイ。」

「貴方！わかつているのですか！あの子を…一人にしたのは貴方なのですよ！」

「いや、それは…。アルフィアが決めたことだから…。」

「そんなの、突っぱねてあの子のところへ行かせればよかったですでしょう！」

「それはそうだが…。」

「あの子が家族をみて、寂しそうで泣きそうな顔になっているのは貴方のせいじゃない  
ですか！」

「ハイ、仰る通りです…。」

「とりあえず石抱きね。」

「え」

※メイ、解放時（第8話）

「痛い痛い痛い痛い！」

「これぐらいの苦痛、あの子が味わった痛みに比べればどうってことはないでしょう？」

「…あの子の様子はどうかしら？え？メイド？」

「え？…あ、あれがザルドが心底恐れた、魔導人形…【ゼウス・ファミア】の影の支配者【最強侍従】か。」

「え？【最強侍従】？」

※セバス、解放時（第14話）

「ちよ、ちよつと待て！マジ？【ヘラ・ファミア】の立役者【最恐執事】までも!?ヤバ

イヤバイヤバイ！」

「あの子にとつて家族ならいいじゃない？」

「あいつらが心底から恐れたやつらだぞ！大抗争時に解放しようとしたが、あいつから聞いてメチャクチャヤバイことをしそうだからやめたんだぞ！」

「…まだ反省していないわね。更に1トン追加。」

「ちよ、ちよつと待てー！痛い痛いって！」

※フレイヤ、やけ酒中（第45話）

「そういえば…フレイヤは？え？」



「……………ええー。」

「ぶくくく…、やけ酒して八つ当たり…。」

「うわー…ただのヒューマンが美の神を狂わせやがった…。」

※セバスとメイ、暗躍時

「あのメイドと執事、えげつないことをするな。大抗争時に解放しなくてよかつた…。」

「それがよかつたかもしれませぬ。今、あの子の助けとなっているのだから。」

「ああ…………。」

※ファンクラブ設立時（第77話）

「あら？ファンクラブ？…行きたいわ。貴方行つてきて？」

「いや、だから権利を失つたって！」

「1トン追加ね。」

「理不尽だ！」

※アストレアとベル再会時（第107話）

「あらあら、あのアストレアがあの子を取り合っているわ。」

「何やってんだ…正義の女神が。大抗争の時の凛々しい姿はどこへ行つた!!」

※記者会見時（第122話）

「うわーえげつないことをするなー。」

「見てよ、あの【勇者】のすまし顔が真っ青になっているわ。」

「自業自得だなー。ゲラゲラ。」

※ポーカールール時（第124話）

「は？ぜ、全チェンジでファイブカード…。」

「凄いわ！」

「ステータスに幸運とあつたけど、それか。運がよすぎないか？」

※アーディ救出時（第139話）

「あら…、ガネーシヤは協力しないつもりね。」

「あの【勇者】に圧力かけられたんだろうなー。…え？」

「え？じ、時空の穴!？」

「ク、クロノスは何やってんだ!？」

「待って…。クロノスはまだ寝ているはずよ。先程従者に確認したわ。」

「はあ!?!じ、じゃあアレはあの子が開いたというのか!?!…え？また開いた!？」

「え？青い髪の子…?？」

「ば、馬鹿な…。時をさかのぼって…アーディちゃんを救ってきたというのか!？」

「待って待って！洒落ならぬぞ！」

「……いいじやありませんか。天界にも下界にも影響ないようですし。」  
「時空の法則が乱れるって！」

「確認したけど、問題ないわ。恐らくそれも込みなのでしようね。」

「マジかよ……。【英雄】どころじゃねえぞ。」

※アリーゼ、輝夜、ライラ復活時（第143話）

「……………」

「あら？ 貴方のお気に入りの「アストレア・ファミリア」の子も連れて…蘇生させたみたいね。」

「もう勘弁してくれ…。何なんだ…あの子は。」

※アルフィア救出時（第145話）

「嘘…だろ。アルフィアまでも…。」

「あらあら、貴方のせいで死んだはずの伯母も救ったみたいね。」

「頭が痛くなってきた…。」

※ヘステシア、アルフィアを叱った時（第148話）

「ヘステシアの本気、初めて見たわ。」

「ブチ切れるのも仕方がないなー。」

「…あの子を溺愛しているヘステシアが天界へ帰ってきたら、それが貴方に向けられる

のですよ?。」

「あ」

「私は助けませんからね。」

※ベルとアルフィア対面時（第157話）

「アルフィアの奴、メチャクチャ溺愛しているな。」

「いいじゃありませんか。ようやくあの子にとって血のつながった家族が戻ってきたのですから。」

「それはそうだな…。ああ!もう、ヤメヤメ!どーにもなーれ、だ!。」

※アルフィア完治時（第188話）

「そういえば…何でアルフィアに病が発病していないんだ?。」

「ええと…あら?ええ?あの子の血に病の抗体があるみたいね。」

「マジで何なんだよ…。神を超えてないか?。」

## 第362回 絶対悪、回想Ⅳ

※戦争遊戯開始時（第127話）

「よっしゃー！いよいよ、戦争遊戯が始まるぞー！あいつらによって、もう勝利確定だけだな。…だから、この石解放してくれないか？」

「ダメです。最低でもあの子が苦しんでいた7年間は。」

「長っ！」

※ベル・オツタル激突時（第133話）

「なるほど、あいつらは旗から動かない気か。あいつらを鍛えるためかー。」

「レベル8の【猛者】と互角になっているわね…。レベル5が。」

「冒険者になって、半年すぎしかないのになー。」

※フィン脱落時（第135話）

「ハハハハ！あの【勇者】がいの一番に脱落か！あの小人族のリリって娘、やるなー！」

「凄いわね…。ホームから指示して動かしているなんて。」

「ああ、だが一朝一夕でできることじゃない。【勇者】の頭脳を超えているな。」

※アーニヤ、歌唱後（第162話）

「……神託を下していいか？あの猫人に二度と歌わせるなど。」

「……同感ね。まさか、ここまで届くなんて……。貴方が神の鏡ですぐに音声オフにできなかったらやばかったわ。」

「ああ…見ろよ。アレをまともに聞いた神々が悶絶しているぞ。」

※アレン、脱落時（第196話）

「ハハハハ！【ロキ・ファミリア】も【フレイヤ・ファミリア】も散々とやられているな！」

「そうね！いい気味だわ！」

※ベル覚醒し、オツタルを押ししている時（第204話）

「レベル5がレベル8と互角か……。見てるか、ザルド。お前が押し上げたやつがお前たちが遺し俺が見捨てさせた子と互角に戦っているぞ……。」

「何を偉そうに言っているのですか。反省してないようですので、1トン追加。」  
「ちよ!?!」

※ベル、『聖火の英断』でオツタル撃破時（第206話）

「ハハハハハハ！これだ！これが見たかったんだ！7年前とは比較にならない！レベル差を覆し、犠牲を最小限に抑えて、立ち続ける英雄の姿を！」

「凄いわ…【最後の英雄】を否定し、【最強最高の英雄】を目指すなんて……。」

「それでいいんだ！そうでなくては、救界なんてできっこない！」

※【フレイヤ・ファミリア】ホーム、セバスによって爆破された時（第217話）  
「ロキのところはまだ無難だなー。だけど：。」

「あの【最恐執事】、えげつないわね。フレイヤのホームを爆破するなんて。」

「…大抗争時に解放しなくてよかつたぜ。」

※フレイヤ、神力封印時（第235話）

「は？」

「え？ 神剥奪？…いえ、神力を封印…された？」

「…え？ どういうこと？」

「待つて……。なるほど、あの子の血があの子を想う女神なら封印されるのね。」

「…時を超えて、死の病を克服させ、神力を封印できる？ マジで神じゃね？」

「…ちよつと待つてくるわ「待つて待つて！」」

※ザルド復活時（第237話）

「……………」

「また時空の穴を開いたわね…。」

「ザルド…お前もか。…これで俺のやったことが無駄にならなかつたわけだ。という

ことこの石どけてくれないか？」

「ダメです。それはそれ、これはこれ。」

※リーネ復活、ラウルとアキ結婚式中（第234話）

「ロキんとここに返しきれない借りができたなー。」

「ええ。死んだ仲間を復活させた上に結婚式の仲立ちをするなんてね。」

「あの魔導人形たち、やりすぎだろ…。」

※アストレア、神力封印時／シノス、模擬戦（第294話）

「…………アストレア、お前もか。」

「羨ましいわ…。神力も神威も抑えることなく暴れられるなんて。」

「うわー…パンクラチオンとコマンドサンボの模擬戦だ。」

※ヘラ、ファンクラブと共に行動中（第302話）

「貴方、覚悟しておいて下さいね？」

「へ？何を？」

「あの子はヘラ好みの子であり、義孫であるのよ？」

「あ」

「私は助けませんからね。今のヘラは…え？ラキアに向かっている？」

※ヘラ、イケロスとアレスを折檻中（第304話）

「（ガクガクブルブル）」



「イケロスとアレスは自業自得ね。目を背けたくなるぐらい悲惨なことになっているわ……。」

※アルテミス、ヘラとヘステイアに再会した時（第310話）

「あらあら、アルテミスまでも……。」

「この分じやアテナもあの子に惚れそうだなー。」

※ヘラ、イケロス送還した時（第312話）

「イケロスにあれほどしたのに、容赦ないわね……（チラツ）。」

「（ガクガクブルブル）」

—— イケロス、天界へ帰った直後 ——

「「エレボス！助けてくれ！」」

「くそっ！あいつら、俺様を見捨てやがった！」

「……………てめえらも道連れだ。」

「ふざけんな！何故だ……この私が！エレボス、何とかしろ！」

「邪魔する……ぞぞ？」

「「え？何で……石抱きしているの？」」

「ぞろぞろと来るなよー。恥ずかしいじゃないか。」

「お前の悪知恵で何とかならないか！」

「あるはあるけどな。」

「マジ!?」

「ああ、それはな……。」

「確かに妙案だ……。」

「それしか、あたしたちが助かる道はないよ!」

「仕方がない……いや、やるしかない!」

「貴方……そんなことをしても、あのヘラの怒りは収まりませんよ?」

「百も承知さ。だから、あいつらには犠牲になつてもらおう。」

「貴方は?」

「俺は……ヘラよりあの子に殺られた方がいいだろ?あの子はその資格がある。」

「……貴方、あの子の性格をわかつて言ってますね?」

「あ、わかっちゃった?」

「……100トン追加しますね。」

「ぎゃあああああああ!」

※メーテリア復活時(第315話)

「ぐすつ……よかったわね。ようやく親子が出会えたんですもの。」

「ああ（出会ったんじゃない、死に戻りだけだな）」

「…ゼウスは相変わらずだね。とりあえず1トン追加。」

「ちよ！八つ当たりじゃないか！」

※アルテミス、神力封印時（第328話）

「……………やりすぎだろう。」

「あのアルテミスが…信じられないわ。」

「アンタレスか。確か、エルソス遺跡だったな。どれどれ…、確かに厄介だ。」

「これは…かなりの精霊を取り込んでいるわね。しかも遺跡のわずかに残った、アルテミスの力を吸い続けているわ。」

「それでもオラリオへ危機を及ぼすほどじゃない。あの子の敵としては役不足のような気がするけどな。」

「…それでもオラリオ連合の箔としては十分だわ。」

「…そうだな（うーん、あと一、二押しが欲しいな）。」

※ザルド、ゼウス面会時（第332話）

「相変わらずだなー、ゼウス。」

「ゼウス…、全部気づいていたのね？」

「あいつはアレでも大神だぜ？」

「でも、あの子の功績よりハーレムを重視するのは…万死に値するわ。」

「おい…神器を持ってゼウスの領地へ行こうとするんじゃないかねえ！」

※ヘルメス、フルボツコ時（第330話）

「友よ…生きているだけでも御の字だぞ。」

「ああ！スカツとしたわ！」

「やりすぎだろう…。パンクラチオンの関節技に、コマンドサンボの打撃技に、パンクラチオンの投げ技のコンボ？俺でもドン引きだぞ。」

「それでも加減はしているからまだいいでしょう。」

「それはそうだがなー。」

※チュール家、回復時

「よかったわ…死の病を克服できて。」

「もう神と崇めてもいいんじゃないか？」

「でも一般的には知られていないわね？」

「知られたら、干からびるぞ…。」

※【ロキ・ファミリア】ホーム鍛錬場破壊時

「あのメイド、えげつないことをするなー。」

「…ダンジョンを制覇したら魔石は枯渇するの？」

「あくまでも仮の話だけ？だが、そうなたらオラリオは間違いなく衰退するな。」

「だから、劇場ね……。ワクワクしてきたわね！」

「天界からの見物料はタダかなー？」

「生で見られない分、残念ね。」

## 第363話 静寂、予感。

いい天気だ。

ベルはダンジョンへ、か。

メーテリアも復活できて、元気でリハビリ中だ。

久々：いや、初めてかもな。

こんなに満ち足りた気分はな。

「うむ：平和だな。」

「あら！アルフィアじゃない！おはよう！元気!? 私はバツチゴよ！」

【福音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「きやあああああ！」

せつかくの気分が台無しだ。

この学習しない小娘のせいだ！

「ア、アリーゼ！アルフィア、何をするのです！」

「せつかく平和に浸っていたのに、騒がしくするからだ。普通に声をかけれないのか、貴

様は。」

「ここ、これが私の売りよ……。」

「そんなの買わないから、普通にしろ。」

「アリーゼ……。」

そのこのルウとやらは仕方がないが、なぜ私はこの小娘に託したのだ？

……前向きな性格は買うが、騒がしくしろとは言つてない。

少しイライラしてきたな……。

む？何だ、セバスか。

「アルフィアお嬢様、少々よろしいですか？」

「何だ？セバス。」

「はい、メーテリアお嬢様が中庭でお茶会でもどうかとのことです。」

「中庭でか？わかった。今から行く。」

「あら、私も入ってもいいかしら？」

「アリーゼ、先程メイさんから招集かけられたでしょう？」

「そうだったわね！また今度ね！」

「騒がしいやつだ……。」

ふ……私もかなり甘くなったものだ、

昔の私なら容赦なく吹き飛ばすというのにな。

それも…ベルの影響か。

#####

〜巨大なスクリーンのある部屋〜

「あら？…みんなも？」

「はい、全員招集と聞きましたが…、後はアルフィアだけです。」

「え？アルフィアはメーテリアさんの茶会へ行っただけど？」

「え？」「え？」

「メイさんが来るのを待ちましょう…（すごく嫌な予感がします）。」

「この…ガラスみたいなのは何？」

「メイさんに頼まれて愚者様とミユラー様に作ってもらったものです。どんなものかは

リリはまだ聞いていません。」

「何でしょうか…？」

#####

中庭へ向かおうとすると、ホールケーキを持ったザルドとかち合った。

…あいつ、丸ごと食うつもりか？



エイナの魔法によって、せっかく肥満気味が消えたというのに。

「ザルド。どうしたのだ？」

「いや、メイが俺にこのホールケーキをお前の妹のところへ持っていけ、と。」

「珍しいな。いつもはメイが持っていくのに、か？」

「ああ。ここを開けてくれ。」

「わかった。」

珍しいこともあるものだ。

コンコン

「誰かしら？」

「メーテリア、私とザルドだ。」

「…いいわよ。」

…？

いつものメーテリアじゃない。

病が再発したのか？

いや…この感じは。

#####

く 巨大なスクリーンのある部屋 く

「よー、ドチビ。どないしたんや？」

「僕とガレスとリヴェリアとライラを呼んで…どうしたんだい？」

「メイから来るようにと言われたのだが…。久しぶりだな、アイス。」

「うん。リヴェリアは元気？」

「(かなり変わったな…) ああ。これは何の集まりなのだ？」

「さあ…わからない。」

#####

「……？」

「どうした？」

「いつもと違うように感じるが…気のせいかな。」

ガチャ

!?

この…重い空気は何だ。

「…何だ。この感じは。」

「…まるで深層、いや…70階層以降に入った感じだな。」

「あら、どうしたの？そこで立ち止まって。こっちへ来ないの？」

「いや……、行く。」

「すごく嫌な予感がするぞ…。こう…ヘラの折檻を目の前にする感じと似ているんだが…。」

メーテリアがキレているのか？

何故だ？

何がメーテリアを怒らせたのだ？

#####

く 巨大なスクリーンのある部屋く

「何だ…この面子は。」

「オツタル、キミもかい？アレンもいるね。」

「ああ…【最恐執事】がな（来ないなら過去にあつたことを全部バラすと言われたら、行くしかないだろうが）。」

「ちっ…何なんだ…（来ないなら『豊穣の女主人』であの愚図の”こんさーと”をやるとか抜かしやがった。ミアに蹴飛ばされ、行くしかないだろうが！）」

「…この面子は、【ヘステイア・ファミリア】と私達三首領と元【フレイヤ・ファミリア】幹部か。何の集まりなのだ…？」

「すみません…遅れました。」

「一体、何の用だい？」

「うわあ、ヘルメス…。全身ギブスになったんだ。しかも車椅子で。」

「しょうがないだろ？全身骨折だから、当分ホームだよ。アハハハ。」

「自業自得だ。」

「まだやり足りないわ。」

「同感です。」

「ひいっ！」

「もう許してあげなよ…。」

#####

やはりいつものメーテリアじゃない。

何があつたのだ？

「メーテリア、空気が悪くないか？」

「そう？至って普通でしょ？」

「…ん？何故、ヘラが隅っこに座っているんだ？」

「おい、ヘラ。何しているんだ？」

「うるさい。そのまま続けろ。」

…妙だ。あのヘラが部屋の隅に？

メーテリアが怒っているのと関係があるのか？

それに…あいつらもこちらへ来ようとはしない。

「セバスもメイも何故、扉付近にいるんだ？」

「おい、セバス…。何があつた？」

「大丈夫です。そのまま続けてくださいませ。」

「こちら大丈夫です。」

「ああ、私達はしばらく退席させていただきます。ごゆつくり。」

「??？」

ごゆつくり、だと？

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「皆様、おまたせしました。こちらを御覧くださいませ。」

「あら？ガラスに絵が…：…中庭？」

「これは…以前の盗聴したものを応用でしょうか？」

「はい、こちらは中庭の様子を写したものです。」

「…？【静寂】と【暴喰】と…女性？」

「あの女性は…ひっ！そ、そんな…彼女までも…（ガクガクブルブル）。」

「お、オツタル!？」

「な、何で!? 何故、彼女が生きているんだい!? 死んだはずだよ!」

「あー…ヘルメスは彼女を知っているんだね?」

「ヘルメス様、彼女は誰ですか?」

「あの女…あの坊やに似ているね?」

「何じゃ…あの女からものすごいプレッシャーを感じるぞい…。」

「彼女は…ベル・クラネルに似ているようだが。実母なのか? エイナ。」

「はい、そうです。」

「「えええええっ!」」

「でもあんな凶々しい感じではないはずですよ! ベルくんに似ている感じのはずですよ!」

「あのヘラが…あんなに離れて怯えているわよ…。」

「初めて見たぞ。」

「…何が起こるんでしょうか?」

#####

## 第364回 静寂、正座。

メーテリアはニコニコしているが、私にはわかる。

あれは…かなりブチキれている。

ザルドが何かメーテリアを怒らせたのか？

「今日のホールケーキはいちご生クリームのショートケーキだ。」

「あらあら、おいしそうね。その前にオハナシしましょう？」

「……メーテリア、何を怒っているんだ？」

「身に覚えはないの？」

「いや…なくはないが。」

「じゃあ、これは？」

!?

ば、馬鹿な！

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「あの本は若様の自伝0巻ですか？」

「あー…、やっぱりバレたじゃないか。」

「「え？」」

「アルフィアくんはね、メーテリアくんが読もうとした自伝からあの0巻を抜き取ったんだ。メーテリアくんから怒られたくないためにね。」

「えええっ！あのアルフィアが!？」

「こんな遠くからでもすごいプレッシャーを感じますが…、近距離だと想像したくありませんね。」

「…怖い。階層主と対峙した時の数百倍…ううん、それ以上。」

「アイズ、それを彼女へ言うなよ？ 一気に嫌われるぞ？」

「わかっている。」

#####

あ、あり得ない！

「……ば、馬鹿な！抜き取ったはずだ…。」

「何だ？それは…。ベルの自伝0巻？」

「あら、ザルドさんは読んでないの？」

「ああ、メイから口頭で聞いただけだからな。」

「読んでみてくれる？」



「……………（ガクガクブルブル）」

「アルフィア…何で震えてんだ？まあ、読んでみるか。」

…セバスとメイだな。

…こういう時が来るのは覚悟していたが、かつてのメーテリアよりプレッシャーが半端ない。

ヘラが隅へ行ったのも、あいづらがこの部屋を出たのもコレが理由か。

#####

く巨大なスクリーンのある部屋

「「終わったな…ザルド（さん）」

#####

ザルドはベルの自伝を読み進めることに、青ざめているな。

私達が仕出かしたことはどんな理由でも、あの子を一人にさせ苦しませてしまったことだ。

「……………（ダラダラダラ）」

「ふふふ、わかったかしら？なら、二人とも座る場所を間違っていない？」

「……………ああ。」

「……………ハイ。」

とうとう、この時が来たか…。

プレッシャーが…どんどん膨らんでいる…。

#####

〜巨大なスクリーンのある部屋〜

「うわあ…あのアルフィアが正座している…。」

「それだけではありません。先程のプレッシャーがどんどん膨らんでいますが？」

「やべえぞ…。バグ兔はどこへ行つた!?!あの女を止めろ!」

「坊やはどこだ!?!洒落ならないよ!」

「坊ちやまなら、お一人で異端児の方へ会いに行かれましたよ。」

「早く帰ってきてえええ!」

〜異端児の隠れ家〜

「あれ?」

「どうしたの、ベル?」

「いや…、みんなから助けを求められているような気がするんだけど。」

「私二ハ、聞こえませんガ…気のセイでハ?」

「我が好敵手よ。戦ろうぞ。」

「はい！アステリオスさん！」

「アステリオスが独り占めはズルイ！」

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「膝が笑つてきたけど…？これほどの恐怖は初めてだよ。」

「儂もじゃ。…ロキ、離れるんじゃ。暑苦しいぞ。」

「ウチ…もう立ってられへん。無理や…。」

#####

あの時のメーテリアよりプレッシャーが数百倍も凄まじいことになっている…。

そろそろ、来るな。

「さてと…。どうして！どうしてなの！7年前に、ベルのところへ何で行ってやらなかったの！」

「…すまん。」

「…申し訳ない。」

「ベルは、その時まで7歳なのよ…何でよ！オラリオの有象無象より、ベルの方が何億倍も大切に決まっているでしょう！」

「……………」

有象無象…。

まあ、メーテリアからすればベル以外は有象無象だろうな。

#####

～巨大なスクリーンのある部屋～

「やはり怒ったわね…。見てよ、ヘラも正座しているわよ。」

「うわあ…ヘラのあの様子、初めて見るよ。」

「私もだ。」

「(私…フレイヤの時にベルへ色々としたことは知られているよね…?…送還、いえそれで済んだほうがまだマシかも…。どうしよう…。)」

「怖えぞ…。駄目だ…真っ直ぐに立てねえ。」

「私も立つことできません。春姫殿は…?」

「命ちゃん…もう最初から座っています。お義母様…怖いです(ぶるぶる)。」

「これが…メーテリアさんの怒り。ヘラ様もアルフィアさんも死の恐怖を感じたくらい…。」

「もうとつくに感じています!ベル様と似ても似つかないじゃないですか!」

「メイさんとセバスさん以外の全員、正座されていますね…。【女神の戦車】までも。」

「帰して！頼む！帰してくれ！」

「へ、ヘルメス様……？」

「アスファイ！マジで殺られる！間接的に！」

「そうだねえ……、遠征ん時のアンフィス・バエナと対峙した時より数百……いや数千倍の恐怖を感じているよ。」

「「同感です！」」

#####

その間もメーテリアは怒りの嵐を吹き荒ぶいていた。

キツイ……まともに向き合えん。

あの時は竜の息吹のように思えたが、数百倍を超えているな。

天の怒りとはこのような感じかもしれんな。

「姉さんが病で余命いくばくもないのはわかっていた……。それも何もそんな人達に命を捧げることも、姉さんの名前を汚すこともなかったでしょう！」

「……………」

私としてはどうでもよかったのだが、メーテリアからすれば許しがたいだろうな。

「ザルドさんもよ……ザルドさんの料理はおいしかったわ。それを！どうして！ベルへ食べさせてあげなかったのよ！聞けば、かなり質素な料理ばかり食べていたじゃない！」

「おじいちゃんのせいぞろい！」

「……………」

ザルドは下を向いて、何も言えないな。

仕方があるまい、メーテリアの怒りを受けたことがない奴はそうなくても同然だ。私でも未だに慣れないのだから。

#####

巨大なスクリーンのある部屋へ

「怖すぎる…（ガクガクブルブル）。」

「逆らってはいけない…（ガクガクブルブル）。」

#####

怒りの嵐が十数分続いた。

かつてのメーテリアなら、数十秒だったがあの時はそれが数日のように感じたものだ。

これは数週間…いや数ヶ月ぐらいだな。

ザルドはもつとだろろうな。

「はあ…はあ…。」

「すまない…メーテリア。私はあの子のために剣をとらない世界にしたかったんだ…。」

「言い訳はしない……。ただ……俺らが黒竜に敗れたため、あいつらはずっと停滞したままだったんだ。希望を託され失敗した俺らに、あいつらは自分自身に絶望したんだ。だから、俺らが責任を取らなければならなかったんだ。」

「その結果がこれ!? 結局闇派閥は生き残り、姉さんが託した『アストレア・ファミリア』もリユーちゃん、いえルウちゃんを除いて全滅したじゃない! ……そのおかげでベルはルウちゃんに多く助けられたけど……他に手があつたでしょう! 『アストレア・ファミリア』を鍛えるとか!」

「……………」

……そうだな。あの小娘共との決戦の前に闇派閥を蹴散らすべきだったな。

まさか、生き残りがベルに危害を加えるとは思わないだろうに。

……いや、あの時の私はベルのことを微塵も思わなかった。

あの小娘共を鍛えるのは、決戦より骨が折れそうだ。

やるとしたら、そうだな……。

モンスターに凌辱させるまで疲労させるか?

または「巨蒼の滝」の滝壺でアダマンタイトを背負わせて沈ませるか?

#####

〈巨大なスクリーンのある部屋〉

「停滞か…否定せんのう。」

「自分自身に絶望か。そうだね、どこかで思っていたかもしれないね。」

「返す言葉もないな。」

「面目次第もない…。」

「え？アルフィアが…私達を鍛える？」

「大抗争の時よりひどい目に合う気がするのは、私だけでしょうか？」

「奇遇だな、あたしもそう思うぜ。」

「…私もです（生き残った私がベルを助けたのはいいのですが…そう言われると複雑です）。」

#####



## 第365回 静寂、転換。

先程、息をついたためまた怒りの嵐が襲ってきた。

元気になったメーテリアはこんなにも恐ろしかったのか……。

「ロキ・ファミリア」もレベル6止まりじゃない！しかも有望なのは大抗争とはあまり関わってない人ばかりじゃない！彼らが望めば、教えて鍛えればよかったじゃない！」

「……………」

あの三首領共め、7年も怠惰をむさぼりやがって。

レベル7，8に至っていれば私達がこうなることはなかっただろうに！

……いや、その程度だからこそベルの偉業の礎になったのか。

複雑だな。

「フレイヤ・ファミリア」もよ！神フレイヤ、いえシノスちゃんを崇めていたとしても、へタレばかりじゃない！最強の「ゼウス・ファミリア」、最恐の「ヘラ・ファミリア」は名ばかりなの!? オツタルさんは、ほぼ毎日負け続けても来たじゃない！あの人を二人がかりで鍛えればまだマシになったでしょう!? 四肢を砕かれようとも！」

「……………」

へタレは認める。

さっさとあいつらの誰かがフレイヤをものにしていれば、ベルがああなることはなかっただろうに！

【猛者】を？

【女帝】がなければあの女にまかせていたのだが。

私なら…丸腰でバロールに放り込んだ後にダンジョンを破壊しまくって、ジャガーノート数体を出させるな。

うむ、それぐらいは最低限必要だな。

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「「……………」」

「痛いことを突いてくるわなく。まあ、でもあいつらがフィンたちを指導する光景が思いつくかばへんけどな。」

「同感だよ…ロキ。でも、土下座して言うことじゃないよ？」

「「グハアツ!!」」

「へタレ…ぷくくく。」

「おい、色ボケ。笑ってる場合じゃないやろ。お前のファミリアやんけ。」

「そうだね、世間ではオツタルは『猛者』と言われてるけどね。」

「そういうやつは分かつたらんのか。オツタルはあいつらに挑んでようやく一勝できたがのう。」

「その負けたサポーターが彼の父親か。凶らずもベル・クラネルは父親のリベンジを果たしたわけか。」

「は？せ、『静寂』とザルドが…二人がかりで俺を鍛える？（ザルドはともかく『静寂』は…絶対に死ぬ）」

「四肢を砕かれようとも、と言われてるな…。」

「オツタル…：…死す。」

「本当にベルの母親なのか？」

「どこがそつくりなんだ…。」

#####

メーテリアの怒りの嵐はまだ続いていた。

「【闇派閥】を皆殺しにして、オラリオへ手土産にすればよかつたじゃない！その後、ベルのところへ行けばそれでよかつたじゃない…：そうすれば彼らはずっと停滞したかもしれない。または刺激を受けて強くなるうとしたかもしれない。何もそんな手を選ばなくてもいいじゃない！」

「……………」

皆殺しか…。そうすればよかったな。

だが、私が行ったとしても今のよう生き長らえるのは不可能だっただろう。

ベルに悲しみを与えるだけだ。

…それを言っても、今のメーテリアには油に火を注ぐようなものだからな。

「結果閻派閥が生き残って、ベルへ多くの危害を加えたじゃない！ベルが剣をとらない世界にするなら、先にそのクズ共を皆殺しにすればいいでしょう!？」

「…だが、ベルは英雄を目指していた。いずれ、ベルはオラリオへ来ていただろう。」

よしザルド、ナイスプレーだ。

「ええ、そうね。確かにそうね。なら！先に掃除すべきでしょう！何で…エレボスという軽薄チャラド畜生糞邪神の言う事に乗らなくてもいいじゃない！私達のファミリアが健在の時に、軽薄チャラ神ヘルメスの言う事を、あっさりスルーした姉さんたちならわかっていたはずよ！」

「……………」

反論できん…エレボスはヘルメスを神友と言ってたからな。

類は友を呼ぶ、というが…。

軽薄チャラド畜生糞邪神…。

そこまで言わなくても…あ、いや。

今のメーテリアにそれは悪手だ。

黙っていよう。

#####

↳ 巨大なスクリーンのある部屋↳

「皆殺し!? ベル様が絶対に言わない言葉をあの方は言っていますよ!」

「「うわあ…。やはり「ヘラ・ファミリア」の一員…。」

「だが、まあ彼女の言う事にも一理あるな。何も大抗争のような手を使わなくてもいいだろうにな。」

「エレボスを、軽薄チャラド畜生糞邪神と言ってるわよ。」

「間違っていないな。実に正確だ。」

「ヘルメス様が軽薄チャラ神…。似合いですね。」

「(ガクガクブルブル)」

「ヘルメス様が軽薄チャラ神…。ププツ。」

「間違っていないねえ。」

#####

メーテリアの怒りの嵐が多少収まったか…。

「だけど…姉さんたちが犠牲になったおかげで、今のオラリオがある。それは確かだわ…。そしてそのオラリオでベルは、心身と共に強くたくましく勇ましく育った…。」

「ああ…。」

そうだな、皮肉な話だ。

……決戦前のエレボスとの会話は絶対に出不さないようにしよう。

あの「数多の英雄が子の前に立ちはだからんことを」を。

絶対に今以上に怒る、間違いなく。

さらなる怒りの嵐が吹き荒ぶからな。

そしてさつきまでの怒りを超えるように、悲痛で心に突き刺さることを言われた。

「でも…あの子は今もずっと家族に飢えて泣いているのよ！母である私にはわかる…。」

…ヘステイア様、リリちゃん、ヴェルフさん、命ちゃん、春姫ちゃん、ルウちゃんがいなければあの子とはとくに折れていた！せめて…せめて…姉さんたちがベルを少しでも一緒にいて、鍛えていけば…！」

「すまない、メーテリア。」

「すまん…。」

ベルは強がっているが、あの子はどこか私達に遠慮している。

あの狒々爺を失ったことで家族を失うことを怖がっている。

甘えてこないのが証拠だ。

神ヘステイアには感謝しなければならぬ…。本当に、本当に。ヘラが気軽に対等に話せる神がいるとは思わなかったぞ。ベルを鍛えるか…。

今まで修行したことがないからわからんな。

…モンスターに凌辱させる…。

いや、メーテリアが更にブチ切れる。

…石を抱かせて水の底に沈める…。

駄目だ、メーテリアに怒られるのが目に見える。

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「反論する気が起きないよ…。」

「同感じゃ。」

「だが、ベル・クラネルはたったの半年でここまで駆け上ってきた。反対にいうなら我々の怠慢だな。」

「リリ達、大・勝・利です！」

「ええ！」

「やりました！」

「あの…3日前にメーテリアさんはリリさんにオハナシしたいと言ってましたが…。」

「!?（ガクガクブルブル）」

「どうかさー、ヴェルフくん以外オハナシしたいとメーテリアくんが言ってたし…。」

「!?（ガクガクブルブル）」

「あ、今は全部完読して感謝しているから、大丈夫だけどね！」

「無事なのは俺だけか…。複雑だな。」

「アルフィアとザルドがベルを鍛える？ 反対よ！」

「同感です。ベルさんが壊れます！」

「さすがに、そこまではひどくはしないだろう？」

「「エルピス（さん）は、ザルドとアルフィアの恐ろしさがわかってない（ません）！」」

#####



## 第366回 静寂、反省。

ようやく、メーテリアの怒りが収まりそうだ。

「…終わったことは仕方がないわ。その結果、ベルはその悲痛な想いの強さで多くのレアスキルを産み出し、多くの命を救い、多くの心を救い、多くの人の心を奮い立たせた。異端児ちゃんたちでもね。…それだけでなく、ベルは時を越えてこの時代へ連れてきた。私達をね。」

「ああ。」

そうだな、あのスキルには驚いた。

だが、それは私達があの子を見捨てたことによつて悲痛な想いから産まれたスキルだ。

よくやった、とはとても言えない。

言えるわけがない！

私達に…言える資格がない！

「ひっく…。私は…ベルが英雄のようにならなくてもよかつた…。姉さんのいうように剣を取ってほしくはなかつた…。ただの一農民として平和に暮らしてほしかつた…。」

…けど、あの子は自ら取ってしまった、剣を。英雄の道を…【最強最高の英雄】の道を走ってしまった…。」

「……………」

そうだ、あの狒々爺が語った英雄譚でベルは英雄を目標にしてしまった。もつと他になかったのか！

あの娯楽のない村では…仕方がないか。

狒々爺やあの雑魚と同じ道を歩まないだけでもまだマシだな。

…………ベルはもうあの戦争遊戯で公言した。

【最後の英雄】ではなく、古代の英雄達や私達【神工の英雄】を超える【最強最高の英雄】というとてもなく険しい道を選んでしまった。

【ヘラ・ファミリア】としては不服ないが、あの子の身内としては失格だ。

特に私はな。

「私達が時を越えて連れてこられたのは、あの子が独りになってしまったがためよ！【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】が黒竜に敗れ！私は病に倒れ！姉さんとザルドさんはオラリオの犠牲になった！…………その集大成が今なのよ。」

「ああ……………」

本当に皮肉な話だ。

ベルがここまで来れたのは、私達が犠牲になったためだ。だが、そのためベルは独りになってしまった。

#####

↳ 巨大なスクリーンのある部屋↳

「…ベルを支えるしかない。それしかない。」

「そうだね！アイズ。」

「ええ、あの人は傷ついても他人のために、例えモンスターでも立ち上がる人です。」

「（…何で一緒に同じ場所で生まれ変わらなかったでしょう。そうすれば兄さんと一緒にいられたというのに）」

#####

怒りが徐々に収まっていく…。

収束しそうだな。

「死んだはずの私達が生き返ってできることは、ベルをずっと支え続け、側にいてあの子に愛というのを教えることしかないわ。」

そうだな、あの子は未だ私達に遠慮している。

…ほんの数週間で14年ものの空白、いやあの子の悲痛な想いを埋められるとは思っていない。

「それはもちろんだ。私はあの子に救われた。今の私は「ヘラ・ファミリア」でもなく、オラリオのためでもなく、あの子のために生きる。」

あの子は「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が、世界が待ち望んだ英雄としても、私の：甥でもあり義息子でもあるのだ。

どうせ7年前で死んだ身だ。

何が何でもあの子を守らなければならん。

「ああ、俺もだ。あいつは俺のペヒーモスの毒を取り除いてくれた。なら、俺はあいつの障害となるものを取り除いてやる。」

「(チラツ)」「(コクツ)」

ヘラに確認せんでもよかろうに…。

まあ、7年前にあの子を見捨てた私達が言える義理ではないがな。

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「以上が、メーテリアお嬢様の怒りです。よくわかりましたでしょうか？」

「「大変理解いたしました！」」

「私は初見ですが、ここまでとは思いませんでした。【女帝】を地にふれさせたのは本当ですか？」

「『あの【女帝】を!』」

「はい、事実でございます。【ヘラ・ファミリア】の【最恐執事】である私が明言しましょう。【ヘラ・ファミリア】は最恐といわれているのはご存知ですね? その頂点が団長の【女帝】ですが、真の最恐はメーテリアお嬢様です。それはヘラ様公認です。絶対に怒らせてはいけません、いいですね?」

「『はい! 大変理解いたしました!』」

「まあ、この中で至近距離で理解しているのは小僧と神ヘルメスだけです。ね。」

(ビクッ!)

「……………」

「オツタルさん? 何故、この大事なことを言わなかったのですか?」

「言ったら…、【ヘラ・ファミリア】総出でフレイヤ様と【フレイヤ・ファミリア】を媾ると言われました…。」

「『媾る!』」

「その脅迫より…あの人の怒りが怖かったです。今はあの時より数十倍はあると思います。この距離で理解しました。シノス様…あの人には逆らわない方がいいです。」

「絶対に逆らいません! 見てくださいよ! あの神ヘラを怯えさせ、正座させるくらいですよ! 逆らいたくないです! (ガクガクブルブル)」

「ヘルメス、彼女を怒らせたことがあるのかい？」

「あるよ……。思い出したくないぐらい……。恐ろしかった。ヘラの折檻よりもだ。」

「ヘルメス様……。」

「何をやったんだい……。」

「アスファイ……アイシャ……、ルルネを彼女の前に出すなよ？アレ以上の怒りの嵐が吹き荒ぶぞ……。」

「わかりました。しかし、ルルネはユーティスさんの投げ技によつて複雑骨折で入院しましたので、それどころではないかと。」

「そうだったな……。」

「ユーティス……やはり、やりすぎだよ。」

「あれでも手加減してあげたのよ？まあ、おかげでアビリティがかなり上がったけどね！アスファイちゃん、また派遣してくれる？」

「勘弁してください……。」

「もうあの駄犬を許してやってもいいんじゃないかい？」

「「まだ足りない（わ）」」

#####

## 第367回 静寂、安堵。

やっと…終わった。

メーテリアはまだレベル1のはずだがな。

レベル8の私達を圧倒し恐怖に陥れるとは。

…本当にレベル1なのか？

ようやく落ち着いたメーテリアは、先程までの怒りが嘘だったかのように微笑んだ。

「……わかったわ。これでおしまい。さあ！ケーキを食べましょう！」

「ああ、そうだな。」

「俺が切り分けてやろう。下手に崩れるといけないからな。」

「ありがとう！あ、私はいちごが多く大きいところをね！」

ふう…いつものメーテリアに戻ったか。

もう味わいたくないな、気をつけるとしよう。

#####

く巨大なスクリーンのある部屋く

「あれです！あの感じがベルくとそっくりなところですよ！」

「エイナ殿、それはわかりますが…先程の恐怖がまだ残っているため、そっくりとは言い難いです…。まだ手が震えています…。」

「まー、気持ちは分かるよ。でも、あの子と話したけどすごくいい子だよ?」

「何故、ヘステイア様は平気なのですか…?」

「怖かったよ?けど、それはベルくんを想うがためだからねー。それにヘラで慣れている…。」

「…あつ…。」

「皆様…、立てますか?」

「先にお義母様とお話してからにしたかったです…。腰が抜けて立てません…。」

「懸隔が激しすぎるだろ…。アレがベルに引き継がれていなくてよかつたと思うぞ。」

「…同感です!」

（でも…異端児のレイさんが闇派閥に捕らわれて色々と言われた時のベルの怒りは、先程のメーテリアさんの怒りに似ていた…。やはり親子。あ…、異端児騒動でベルをボコボコにしたの…知っているよね…。お、怒られる…（ガクガクブルブル））

#####

ようやく一息つける…。



長かった。

「ん〜♪おいしい〜このいちごは最高ね!」

部屋の隅に逃げていたヘラがこつちへ来た。

…あの怒りをまともに受けられるわけがない。

『……かつてのメーターリアより数十倍は怖かった。元気になった分、ここまでとは思わなかったぞ。』

『……ベヒーモスとリヴァアイアサン、黒竜と対峙する時よりも怖かったぞ。道理で「ヘラ・ファミリア」がベヒーモスやリヴァアイアサン、黒竜を前にしても平然としたわけがわかったぞ……。あの怒りを受けたことがあるからだな?』

『ああそうだ。メーターリアの怒りは奴らより恐ろしいからな。』

『だから、キレると言っただろう……。遠く離れた私でも怖かったぞ。』

14年前のメーターリアは病弱だったからな。

今のメーターリアは健康そのものだ。

怒りも更に倍増するだろう。

#####

く 巨大なスクリーンのある部屋く

「では、解散して下さい。皆様、お疲れ様でした。」

「…遠征から帰る時より疲れたよ。」

「儂もじゃ。」

「だが…彼女がいかにベル・クラネルを大事にしているかがよくわかるな。」

「ベルたんは愛されとるな。ま、これからもっと愛されるわな。」

「ちつ…顔合わせたくねえぜ。」

「俺もだが…、挨拶に出向かわなければならぬだろうな（手土産を買っておかないと）。」

#####

「♪」

メーテリアはケーキに集中している。

…もう3個目か。そろそろ止めるべきか？

いや、あの怒りの後だ。好きにさせよう。

下手に藪を突くこともないだろう。

「神ヘステイアにも誓ったからな。ベルのためにも。」

「待て、誓った？お前…ま、まさか、ヘステイアを怒らせたのか？」

「ああ、そうだが？その後すぐに謝罪したから、問題ないぞ？」

「お、お前は大馬鹿か！あのヘステイアを怒らせるとは！謝罪してくる！」



「記者会見時点で同郷のオーディンより上だったのですが、あの時より更に上があったのですか……。ヘステイア様を天界の大神の頂点にしてもいいのではありませんか？ 神フレイヤとして推薦しますよ？」

「同感だ。しかし、ヘステイアが嫌がるんだ……。実力も性格も神格も神望も申し分ないのにな。」

「そうね……。でも、それがヘステイアでしょ？」

「そうですね。」

「全く同意する。」



## 第368回 白兔母、昇天。

今、私はエイナちゃん魔法で診察を受けているわ。

「…はい、肥満気味がとれました。全て異常なしです。」

「やったわ!」

「そうか…（この前、ワンホール丸ごと食ったためリバウンドしたからな）。」

さて、ようやくみんなへ挨拶できるわね!

そして私は、団員のみんなと会った。

……何で、震えているの？

「メーテリアお嬢様がようやく病から復帰しましたので、皆様と合流されます。」

「初めまして!ベルの、実の、母のメーテリアです!うちの息子がお世話になっていま  
す。」

「おい、メーテリア。実の、を強調しすぎてないか？」

「当然でしょ!」

「「よ、よろしくお願いします…。」「」」

姉さんがお義母さんと言わせていたら、ベルの母は姉さんと間違われるんじゃない！  
実の、と強調しないと！

私の存在感を出さないと！

そして、私達はみんなと食事をした。

今までベッドの上で食事していたから、新鮮ね！

「ふふふ、こうやってみんなと食事するのは「ヘラ・ファミリア」でもなかったわ。」

「いや、あつただろう。入団して間もない頃だったが…それ以来だな。」

「随分前じゃない！」

そっか、あれから……随分経つわね。

団長たちは無事に逝ったかしら？

『確かに話しやすそうな方ですね……。』

『そうですね、1つ1つの仕草がベル様と瓜二つです。』

『あれで17歳ですか。…事情を知らなかったら、ベルさんと姉弟にしか見えないのですが。』

『とても一児を産んだ母に見えません……。』

うんうん、みんな一人一人話したけどいい人でよかったわ！

「みんな、いい人ね！…伝記で仕出かしたことをやるような人たちには見えないわ…。」

(（ビクウウウツ！）)

「おい、メーテリア。」

「わかつているわよ。オハナシなんてしないわよ。私の息子がお世話になったもの  
！」

「メーテリアお母さ「つーん」こ、ここでも言わなきやいけないの!?」「そうよ」うう……  
マ、ママ……「なにになに!?ベル！」わわわっ！み、みんなが見ているよ！」

ベルにママと言われるなんて、サイコーね！

うふふふ。

『ママと言っているぜ……。』

『ある意味、拷問だな。』

『まあ……まだ14歳だしな。しかし、この場で言わせなくても……。』

『おいやめろ、察して差し上げろ。』

『あれはあれで、懸隔を感じるのですが。』

『あ！わかるわ！』

『わかりますが、あの方は17歳でママと呼ばれるのはいいのでしょうか？』

何かコソコソと言っているようだけど、何を話しているのかしら？

まあ、いいわ。みんなとの食事に集中しないとね！

やはり、多人数で食べる食事は一味違うわね！

ヘステイア様の神柄もあるから、すごく居心地がいいわ！

【ヘラ・ファミリア】は義母さんの影響もあり、厳肅でガツチガチだったから…。

【ご馳走様！】【ヘラ・ファミリア】より居心地がいいわね！

「……………」

「まあまあ、ヘラ。落ち着きなよ。」

あら？義母さん、どうしたのかしら？

『うわあ…神ヘラの目前で喧嘩売っていますよ。』

『ベルと違い、度胸あるわね…。』

『いや、単に何も考えていないと思うぞ？』

メイさんがベルに何かを渡そうとしているわ。

何かしら？

「では、坊ちやま。久々にこちらを。」

「「!?」」

「あ、そうだね！メイ。今日はアステリオスさんと手合わせしたから、結構ボロボロなん



だ。」

アステリオス…？

ああ！異端児で、ベルのライバルね！  
会ってみたいわ。

そのドリンクが出てから、いきなり周りが騒々しくなったわ。

「エルピス！気をしっかり持って！」

「そうです！」

「な、何だ？あのドリンクはそんなに危険なものなのか？」

「レトウーサ、ランテ、みんな！耐えて！」

「「え？」」

耐える？

「…それはまさか、あの人のファミリアで…。」

「そのドリンクは一体何かしら？」

「ヘラ、メーテリア！気を引き締めろ！」

「「？」」

「あ…。」

引き締める…ってどういう意味なの？

そ、そんなに危ない飲み物なら飲まなくても…。

「ゴクゴクゴク……………」

か、確認しないと！

「べ、ベル？だ、大丈夫なの？」

「んあ？だいじょうぶゆだよ？まま？」

その言葉を聞いた時、私の意識は飛んだ。

「……………」

「!?いけません！メーテリアお嬢様！息をなさってください！」

「な、何だと!?おい！メーテリア！息をするんだ！」

「た、大変だー！」

「ままー？」

それを聞いた時、意識が戻った。

「はっ!?はあ…はあ…」

あれは夢だったかしら…。

いえ、妙にリアルだったわね。

「メーテリア！大丈夫か！」

「あ、危なかったわ…。【ヘラ・ファミリア】のみんなが川の向こうにいて私に石を投げ

てきたわ…。」

「奴らに感謝しなければな…。」

…みんなの墓参りをしておきましょう。

また死ぬところだったわ。

「危ないところでしたな。危うく昇天しかけるところでした。」

「だから、気を引き締めろと言ったんだ…。」

ごめんね、姉さん。

これほどの破壊力とは思わなかったわ。

我が息子ながら、すごいわ…。

「ふう…危ないところだったね。へ…ラ?」

「おのれ…おのれ…これをあの人は独り占めしていたというのか…。何故、私は早く正

気に返らなかつたのだ! 嗚呼、口惜しい…。」

「「ひいいっ!」」

「へ、ヘラ! 落ち着きなよ! 禍々しい神威がめちやくちや出ているよ!」

そうね…。それは同感だわ。

お爺ちゃん、あの子の笑顔や仕草を独り占めにしたのね!

ずるいわ!

「ひっ…おばーちゃん…こあいよ?」

「はっ!? す、すまん! ああ、愛しい義孫! 大丈夫か!」

「うん? だいじょうびゆだよ? おばーちゃん?」

「うむうむ、何かあつたらおばーちゃんに言いなさい。オラリオを…【ヘステイア・ファミリア】以外を全て滅ぼしても…ヘステイア以外を送還したっていいんだぞ?」

「「ひいつ!」」

あ…、義母さんまでも。

【ヘラ・ファミリア】がまだ健在なら、絶対にベルを監禁していたわ。

…そんなことは許さないけどね!

「こらっ! ヘラ!」

「ヘステイア、仕方がないだろう! こんな…こんな…可愛い義孫にこう言われたら…世界を、天界を敵に回したってもいい!」

「まあ、気持ちにはわかるよ…。」

すごいわ…ヘステイア様。

あの状態の義母さんを普通に叱るなんて。

ベルの主神がヘステイア様で本当によかった…。

「尊い、尊すぎる。」

「わかります…アルテミスさま…いえエルピス様。」

「何故、私達はベルくんにもっと早く会わなかったのでしょうか…。」

「「わかります。」」

貞潔を司るアルテミス…いえエルピスさんもあそこまで言わせるなんてね。

「やはりこうなつたわね。」

「仕方がありません。あれは…天然の魅了そのものである上、ベルさんの魂がそのままむき出しになっていますから。…ルーゼ、大丈夫？」

「な、何とか…。」

みんなも、この状態のベルにはメロメロね。

やはり私の息子は最強ね！

## 第369回 処女神、暴露。

やれやれ、メーテリアくんが逝きかけるのは驚いたよ。

折角この時代へ連れてきて、生き返ったというのに…。

こんなんで死んだら、ベルくんが本当に泣くよ？

「ベル？ほーら、こっちへおいで？」

「あーい！」

「はうっ！嗚呼…愛しいわ（スリスリナデナデ）。」

「はははーくしゅぐつたいよー、ままー。」

……これ幸いと、メーテリアくんはベルくんを甘えさせているね。

まあ、ベルくんの赤ん坊から育てたかっただろうね。

「……姉さん。」

「何だ。」

「死の病が本当に憎いわ。赤ん坊からこの子の成長を…ずっと見届けたかったわ。」

「同感だ。」

……そうだね。

それは彼女たちにとって悔やんでも悔やみきれないからね。

でも、それはベルくんのスキルによって彼女たちをこの時代へ連れてきて解決するとは…。

時空の法則は大丈夫かな？

そしてメイくんが驚くべきことを言った。

「では、かなりの多人数となりましたので2グループに分けます。」

「え？」

「メーテリアお嬢様、お喜び下さいませ。坊ちやまと共に入浴できますよ？」

「!？」

「ふろー?ままー、一緒にはいろ?」

「ええ!入りましょう! (はあはあ)」

「メーテリア…、落ち着け (襲いかねないな…見張っておこう。実の母なのにな)。」

一緒に入浴?

え?分けます…というのは、今までやっていたということ!?

待って待って待って!

「ボク…聞いてないけど?」

「申し訳ございません。ヘスティア様に言いますと反対されると思いました。」

「は、反対するに決まっているだろうー!…まさか、今までずっと?」

（（サツ!））

まさか…君たちは、もう既に?

な、な、何てことだあああああー

「（ポンポン）ヘスティア、もう手遅れだ。諦めろ、（ニツコリ）ベルはまだ未精通だからいいではないか?」

「へ、へら…。君までもそつちに回るのかい?」

そんな!へらまでも敵に回るなんて!

というか、キミがベルくんと一緒に入りたいただけじゃないか!

ううー…。

今更、仕方がないかあ…。

「では、今日はご血縁の方と【ヘスティア・ファミリア】初期メンバーと元【アストレア・ファミリア】、ヘスティア様とへら様となります。」

「え?今日は?…どうということ?」

「メーテリア、風呂で話す。」

…ああ、あのスキルか。

そうだね、あのスキルを最大限まで引き出すのはそれが効果的かもしれないけど…。



ベルくんの意識がない内に、どうにかするのはどうだと思っただ。

「ああ、そういうことか…。ずっと独占したいが、ベルのためならやむをえまい。……やはり口惜しい。」

「ぐぬぬ…。そういえばボクはずつと気絶してたか寝ていた…。しまったああ！折角のチャンスをおおお！」

と、時を戻せないかな？ベルくんのスキルで。

あ、ダメだ。本人でない。

「明日は、元【ロキ・ファミリア】と元【フレイヤ・ファミリア】と元【アルテミス・ファミリア】となります。」

「仕方がありません…。私達は戦争遊戯で負けたのですから。」

「そうですね。」

「…だから、あの時改宗するべきと言った。おのれ、フィン…。」

「アイズ…、フィンを責めたって仕方がないよー。」

「分かっている…（ぶすつ）。」

………傍からみると、ハーレムのようにだけどハーレムじゃないよね。

一人の男の子をボクら女性が貪っているように見える…。

そしたらアルテミスが、思い出したかのように言った。

「待て。ユーティス、お前は戦争遊戯前にずっとオリオンと入ってたのか？」

「い、一週間ぐらいよ！」

「いえ、違います。ベルさんが9歳の時に2ヶ月間も2人きりで入っていたことも含みますよ？」

「(サツ!)」

そうだった！

先にやったのはアストレア、いやユーティスくん！

キミかー！

ヘラが、邪笑みならユーティスくんへ近づいた。

ボクも便乗させてもらおうよ？

「そうだったな。その辺り、ゆっくりと聞かせてもらおうか？ん？アストレア？」

「へ、ヘラ……。ま、待って。」

「あらあら、実母である私も聞きたいわ。0巻に載っていたことについてね。」

「私もだ。」

「ボクもだね。」

「……………」

「(づ)愁傷様」

更に、メイくんが爆弾発言した。

「添い寝について報告します。ヘステイア様。」

「は？そ、添い寝？」

「はい、坊ちやまが入団されてすぐ、坊ちやまが熟睡したのを見計らってこつそりと坊ちやまと一緒に寝たアレでございませう。」

「わああああああ！何でそれを今言うんだい!？」

「ヘステイア、処女神としてあるまじき行為だぞ。駄目だぞ？」

「確かに。あの子の義祖母として見過ごせん行為だ。」

「ううー！」

仕方がないじゃないか！

ベルくんが一緒に寝ようとしなから、ボクから行くしかないだろー！

『リリは初耳です！』

『ずるいです……。』

『あの時から？（……もつとアプローチすればよかったかな？）』

知らない。

あの時はボクとベルくんの2人だけの時間だったからね。

……それも2ヶ月半しか保たなかったけどね。

「坊ちやまのスキルを最大限まで生かすため、今日からローテーション開始します。」

「「やったー！」」

「ふえ？え？まさか…ベルくんがあのだリンクを飲んで、みんなと風呂入って、その後…

添い寝していたのかい？ボクは…気絶か寝ていた…。何てことだああああー」

ローテーションって…何でボクは参加できなかったんだ！

道理でみんながベルくんがドリンクを飲む時にソワソワしてたわけだよ！

不覚だああああ！

「ということ、今回はアルフィアお嬢様とメーテリアお嬢様となります。」

「ええー？毎日じゃないの？私はベルの実母なのに…。」

「メーテリア、気持ちはわかるがベルのスキルを最大限に生かすためだ。それについては風呂で話す。」

「むー！」

まあ、気持ちはわかるよ。

実母なのに一緒に寝られないというもどかしい気持ちは。

でもね…、それ以前にベルくんはもう14歳なんだよ？

「明日は、ヘスティア様と神ヘラです。」

「…まあ、添い寝できるならいいけどさー。いの一発でボクに報告してほしかったよ。」



『いや…バラしたら俺ら消されるぞ。』

『『空気読めよ！アルフリッグ！』』



## 第370回 側近（母）、挨拶。

大・復・活！

ああー！こういう気分になったのは何年ぶりかしら？

全ては義息子のおかげね！

「アイナ、調子はどうだ？」

「ええ、ほぼ完全に治ったわ。アミッドさんから退院してもいいと言われたわ。けど、数日間は様子見のため通院するようになって。」

途中から特効薬をかなり薄めたものを服用してから順調だったわ。

「そうか。…ウイナ、何故そんなに緊張している？」

「き、緊張しないほうがいいですよ！神ヘラですよ！それに【最恐執事】も（ガクガクブルブル）。」

「貴方、もう観念しましょう…。リヴェリア様、0巻読みました。」

ベルくんは母というのを教えてあげないと！

「そうか…（私は神ヘラより実母のメーテリアが一番怖いのだが）。」

「ベルくんは私達の義息子…いえ実の息子同然として接します。いいわね？貴方。」

「ああ、もちろんだ。」

「いや…それは不要だ。既にいるからな。」

「え？」

どういう意味なの？

ベルくんを産んだお母さんは、死んだんじゃないの？

「…行けばわかる。」

そして私たちは「ヘステイア・ファミリア」へ向かった。

---

門を叩いた時に、一気にトラウマが蘇ったわ。

だって…。

「これはこれは、お久しぶりですな。」

「ひいつ！（本当に【最恐執事】だ！）」

「セバス殿、すまないが神ヘステイアヘアポイントをお願いできないだろうか？」

「既にメイより聞いております。こちらへどうぞ。」

そして【最恐執事】が案内してくれた。

コンコン

「お連れいたしました。」



「お、来たね。いいよー。」

この声が…ヘステイア様。

ガチャ

「失礼します。」

「ようこそ！『ヘステイア・ファミア』へ！」

…イメージと違うわね。

かなり人懐っこいし…、身長が低いわりに大きい…。

エイナよりは上ね。

はっ！いけないわ。

挨拶をしておかないと。

「うちのエイナが大変お世話になっております。」

「いやいや、彼女にはかなり助けられているよ！いい子じゃないか！」

「そう言ってくださって嬉しく思います。あの…エイナとイーナは？」

「あー、エイナくんは仕事だからね。セバズくん、今日ぐらいはいいじゃないかな？」

「私もそう言いましたが、先日仕事休みをいただいたから遠慮したいとのことです。貴方がたにしては優秀な娘ですな。」

「ぐっ！」

ぐうの音も言えないわ…。

特にこの【最恐執事】の前にはね。

そういえば、イーナはどうなっているのかしら？

入ったばかりだから、心配なのよね…。

「イーナくんはエルピスたちが指導しているよ。ステータスがとんでもないことになっているよ…。」

「え？お、一昨日入団したばかりですよね？」

「…もう、Gに入ったよ。」

「はあ!？」

た、たったの二日で!?

ど、どうなっているの!?

リヴェリア様はわかったかのように言った。

「…彼女にも発現したのか？」

「はい、その通りでございます。」

「ど、どういうことですか!？」

「あー、落ち着いて聞いてくれよ?」

そして、ヘステイア様は【白兔眷属】について説明してくれた。

そのデメリツトも…。

ウイナは怒るより呆れるかのようだった。

そりやそうよね、そのスキルをベルくんが知らないんだもの。もし、知ったらあの子はきつと罪悪感に襲われるわ。

「……親としては複雑だ。せめて、ベルが長生きしてくれることを祈るしかないな…。  
実の娘より義息子の長命を願うとは思わなかったぞ。」

「……義息子は神かしら?」

「……強く否定できないよ。主神のボクでもね。…つて、義息子ってなんだい!? まだ早いぞー!」

もう、エイナもイーナもたらしこんだんだから責任は取ってほしいです。

あの娘たちはもうベルくんしかいないのだから。

なので、許してください。ヘステイア様。

リヴェリア様は確認するかのよう「【最恐執事】へ聞いたわ。  
「イーナくんもリスクをわかった上のことなのか?」

「はい、もちろんです。何回も説明しましたが、覚悟の上だそうです。」

「なら、母としては言うことはないわ。」

「…もうイーナも離れたか…。」

そうね、こんなに早くひとり立ちするとは思わなかったわ。

それ以前に、病が治るとは思わなかったけどね！

いけないいけない、当初の目的を忘れてはダメだわ。

「ヘステイア様、エイナとイーナをよろしくお願いいたします。」

「よろしくお願いされるのはこちらなんだけな。わかった！任せてくれよ！」

「…【最恐執事】、うちのエイナとイーナをお願いします…。その15年前までは色々ありました。」

「もちろんでございます。イーナ嬢はまだこれからですが、エイナ嬢は既に【ヘステイア・ファミリア】で欠かせない方となっております。」

「え？入ったばかりなのに？」

「おや？まだ知りませんでしたか？エイナ嬢の魔法を。」

「「え？」」

そういえば、そうだったわね。

何故、私の死の病の状態を見抜けたのかしら？

そして私たちは、リヴェリア様と【最恐執事】よりエイナの魔法の詳細を聞いた。

「かなりのレア魔法じゃない…。」

「戦力にはならないが、補助としては規格外だな…。せめて【ロキ・ファミリア】へ入っ

ていればな…。」

「おいお前たち、その魔法はベル・クラネルによって引き出されたものだ。うちへ入ったとしても発現しなかっただろう。」

「もう一度言うわ…。義息子は神かしら？」

…規格外だわ。

エイナとイーナにベルくんを放さないよう強く言っておかないと…。

## 第371回 九魔姫、考慮

アイナとウイナとヘステイア様の顔合わせは済んだな。

まあ、元々危惧してなかったがな。

…問題はここからだ。

ヘステイア様はアイナとウイナに優しく言った。

「いつでもうちへ来てもいいからね？ロキのところに行ったとしても、同じオラリオ連合だし。親子を引き離す気はないよ。」

「ありがとうございます。ヘステイア様がロキより慈愛のある女神様でよかったです。」

「同感です。」

「…褒め言葉として受け止めておくよ。」

おい、お前たち…。

それはヘステイア様にとっては馬鹿にしているのも当然だぞ。

あのロキの破天荒を見慣れていたら、そう思うのも仕方がないが。

それに今回が初対面だからやむを得まい。

後でお詫びしておかなくては…。

アイナとウイナはほっとしたかのようだった。

だが…、お前たちは忘れていないか？

「ふう…とりあえず一安心ね。」

「ああ。」

「では、行きましょうか？」

「「え？」」

お前たち…すっかり忘れていたな。

そのの【最恐執事】がお前達を逃すわけがないだろう。

そう…あの女神のファミリアに合わせるために。

丁度いい、彼の血縁者と顔合わせた方がいいだろう。

…ベル・クラネルの実母とはまだだったな。

あれから…15年以上も経つのか。

コンコン

私達はセバスに先導され、ある部屋の前にいる。

「誰だ？」

「はい、エイナ嬢とイーナ嬢のご両親をお連れしました。」

「ま、待つて…まさかこの扉の向こうには…。」

「心の準備がまだ…。」

「諦めろ、お前たち。」

アイナとウイナは察したかのように、怯え始めた。

覚悟はしたのじゃなかったのか…？

まあ、仕方があるまい。

あいつらの恐ろしさを骨の髄まで覚えられているのだから。

ガチャ

そこにはアルフィアが…メーテリアを運動させていた。

…何故、運動させているのだ？

「何だ、年増ハイエルフか。何用だ。」

「ぜえ…はあ…。」

「アルフィア、少しは休ませろ。病み上がりにはキツイぞ、それは。」

…先日皆を怯えさせていた女性とは思えないな。

…当たり前のように受け入れている自分が恐ろしくなったな。

いや、諦めよう。

未知を既知に変えなければ…。



…果たして、これは未知なのか？

考え込んでいる私をよそに、セバスが用件を述べてくれた。

「エイナ嬢とイーナ嬢のご両親をお連れしました。」

「ほう、お前たちがエイナの両親か？……どこかで会ったことあるな？」

「せ、【静寂】!?な、何で!？」

ああ、そうだったな。

アルフィアが7年前よりベル・クラネルによって連れてこられたことを、まだ知らなかったな。

改めて思えば、ありえないな。

「か、か、神ヘラも……。」

「ふむ？……思い出したぞ、貴様ら。無乳のところだな？」

「ひいっ！」

……まあ、思い出させて当然だな。

当時、私達は「ヘラ・ファミア」へよく殴り込みをしていたからな。

あの時は若気の至りだったな。

そして私たちは、「ヘラ・ファミア」と対面した。

「貴様らが、エイナとイーナの親とはな……。」

「は、はい…（ガクガクブルブル）」

「貴様らにしては良い教育をしているな？褒めてやろう。」

「そ、それはどうも…（ガクガクブルブル）。」

…：堂々としろ。

覚悟を決めたのだろう…。

そんな雰囲気の中、彼女が言った。

「もう！義母さんも姉さんも、そんなに怖がらせてどうするのよ？ベルのアドバイザーの両親よ？」

「え？（誰？）」

…：エイナの言った通りだな、彼と本当によく似ている。

こう穏やかな性格なのに、怒るとああなるのか…。

懸隔が激しすぎるだろう…。

彼女はともかく、彼は本当に「ヘラ・ファミリア」の系譜を受け継いでいるのか？

両親のいいところだけをとったかのような。

そんな奇跡的なことはあるのだろうか？

…いや、いい。

そんな彼だからこそ、アイズは惹かれたのだろうな。

…本当にあの娘で大丈夫なのだろうか？

エイナやレフィーヤ、アリシアなど増えているが。

心配になってきた…。

おつといかんいかん。

こつちに集中せねば。

彼女は自己紹介した。

「紹介が遅くなりました。ベルの実の母のメーテリアです。エイナちゃんにはお世話になっていきます。リヴェリアさんもお久しぶりです。」

「ああ、久しぶりだ。」

ベル・クラネルを産んだ直後に亡くなったと聞いたから、17歳のままか。

…ほぼ姉ではないか？彼の年齢で計算が合わない時に、どう言い訳する気だ？

それに…死んだ時の年齢で連れてくるとはな。

本当にとんでもないスキルだ。

「あ、はい。エイナとイーナの母のアイナ・チュールと言います。…母？」

「わ、若すぎないか？」

「…それは私が老けていると言いたいのか？あ？」

「ちちちちち、違います！」

「一旦落ち着け、お前たち…。説明する。」

まあ、アルフィアの言うこともわかる。

恩恵で老化が遅延していると言っても、彼女…メーテリアは若すぎる。

複雑なのはアルフィアだろうな。

双子なのに死んだ年齢が違うため、ズレが生じて本当に姉になったからな。

さて…どうい話になるのだろうか？

## 第372回 側近（父）、愚痴。

そして俺たちはベルのスキル【時駆白兔】について聞いた。  
規格外だろ……。

「……息子さんは神でしょうか？」

「そう言われちゃうと、強く否定出来ないわね……。」

「私でも神ではないか？と思う時もある……。」

「神ヘラにそう言わせるとは……。」

「すげえ……時を越えてくるなんて。」

「言つとくが、これはトップシュークレットだ。オラリオ連合内は知っているが、他は知らん。漏らすなよ？漏らしたら……わかつているな？」

「はい！もちろんです！」

当然だな。

悪用しようとするやつが出てくるに違いない。

俺らで、守らないと！

あ、そうだ。

礼を言っておかないと。

「私も死の病にかかって死にかけました。あと数日もしたら死んでいただろう、と言われました。息子さんのおかげで助かりました。深くお礼を申し上げます。」

「ありがとうございます！」

「私もお礼言わせてくれ。親友のアイナが助かった、ありがとうございます。」

「私も助かったほうだけどね、お礼はベルへ言っておあげてね？」

「待て、メーテリア。ベルはその事実を知らん。」

「「え？」」

……何で知らないんだ？

ハーレムのことといい、大丈夫なのか？

全てを知ったら、あいつどうなるんだ？

……エイナたちに任せよう。

味方であるベルにここまで悩むとは思わなかったぞ。

「…息子さんが知らないことが多いのは、問題ではないでしょうか？」

「そう思うが、言おうと思ったら次々とな…。どう説明したらいいのか…（ハア…）」

「そ、そうですか（あの【静寂】がこんなに悩むのを初めて見るぜ…）」

「私はほぼ完治しましたが…、メーテリアさんはまだでしょうか？」

「ええ、アイナさんと同じぐらいだけど…今はリハビリ中ね。ずっと寝たきりだったから。」

「だから、こうして運動をさせているのだ。わかったか？」

「はい！」

そうか…メーテリアさんはアイナと違い、死の病に長年苦しみ寝込んできたんだ。

そしてベルの血によって克服し…現在に至るわけか。

本当にベルとよく似ているな、この人。

「それにしても…、他の娘の親に会うのは初めてだわ。よろしくね？」

「あ、はい。」

「義母さんと姉さんはああだけど、私は至って普通だからね？」

「「え？普通？」」

「何よ…、リヴェリアさんまでも。」

…？

どういう意味だ？

この人も「ヘラ・ファミリア」の一員として何かあるのか？

とてもそう見えないな。

街娘と言われても違和感ねえぞ。

「アイナさんとリヴェリアさんとは仲良くしたいわ。ママ友というのかしら？」  
「あ、そうですね。」

「ママ友……。まあ、アイズの養母であるのは確かだから間違ってるないが。」

「ええ。だから、そんなに敬語にしなくてもいいのよ？」

「あ、じゃあ遠慮なく。」

え？ アイナにそう言ったら……。

ああ……長くなりそうだ……。

やはり、そうなった……。

「なるほど、エイナにそんな時が……。」

「それであの娘だったらね……。」

「へー……！」

「ほう。それはよく今のようには賢明に育ったな？」

「だが、あそこまで私にへりくだるのは問題だろうか？ お前は自分のことを棚に上げて……。」

「言わないでよ……！」

俺の割り込むところがねえ。

暇だ……、相談しよう。



「あの…【最恐執事】、いえセバスさんと言ってもいいでしょうか？」

「構いませんよ。もう、身内確定ですから。何でしょうか？」

「私は…その、場違いではないでしょうか？」

「では、こちらへ。」

そして俺はセバスさんに案内してもらった。

そこには、あり得ない人がいた。

「ぼ、ぼ、ぼ、【暴喰】うう!？」

「あ?…お前、無乳のところなのか?懐かしいな、あのドワーフによくくつついていたな」

「何で…あー…ベルのか。」

「…聞いたのか。他言無用だぞ?」

「こんなの、他で言っても笑われるだけですよ!はあ…あんたまでもこの時代へ来て、復

活しているとは。」

「ふん。まあ、ちようどいい。試作品だ。食べ。」

「へ?」

「店を出すつもりでな、感想を聞きたいんだ。」

「…あんたが作ったものなら大抵美味いじゃないですか。では、久々にいただきます。」

懐かしいな、【ゼウス・ファミリア】へ乗り込んでポコポコにされ、飯を食わせてもらっ



「まあ、気持ちちはわかるぜ。…ん？おい、奥さんが来てるぜ？」

「…ぼ、【暴喰】…。」

「おん？おー、アイナ。話は終わったか？」

「え、ええ。その…お久しぶりです。」

ん？

ああ、ザルドさんが生きていることに驚いているか。

まあ、無理もないわな。

「おう。お前らの娘共、なかなか優秀だな。いやその、二人ともこっちが取ってしまったがな。」

「あ、いえ。義息子以上の子はいないし、ヘステイア様も良い女神なので。私としては願ったり叶ったりです。」

「ベルのような義息子が欲しかった…。」

「ウイナ…お前までもか…。」

「それは同意するわ。ほら、帰るわよ。」

「おー。じゃあ、ザルドさん。また。」

「ああ、また来いよ。」

…まさか、ザルドさんとうこう話す時が来るとは思わなかったな。

ベヒーモスの毒に侵されていたなかつたら、ベルと一緒にいたのだろうか？  
いや…、黒竜戦で戦って死んでいただろうな。  
複雑だ。

俺たちは「ハスティア・ファミリア」ホームを後にし、帰り道についている。

「……私達の取り越し苦労だったわね。既に実母とそのお姉さんがいるとはね。さらに【暴喰】も。」

「あん？【静寂】はお……その先は言わない方がいいわ。吹き飛ばされるわよ？」……わかつた。ベルは自分の想いで家族を取り戻したんだな……。」

「ああ、そうだ。」

よかつたな、ベル。

もうお前は独りじゃない。

でも、アイナの顔は晴れないままだった。

「ええ……。でもあの子はまだ飢えているわ、家族の愛に。」

「十分じゃないのか……？」

「(アイナは気づいたか……。)」

「気づいてなかった？私達家族が話しているのを、あの子は遠くから羨ましそうに見て

たのよ？」

「…知らなかった。」

「14年間もずっと神ゼウスと二人だけだったから、仕方がないわ。それに…恐らく甘え方も上手くはないはず、でもこれからね。あの子の周りにはどんどん家族が増えていく。私達もその中に入るのよ？」

そうだな、ベルは14年間も神ゼウスと二人きりだったんだ。

甘え方もゼウス相手しか知らないだろうな。

だが、これからだ。

ベルにはどんどんと家族が増えていくだろうな。

ハーレムがあるしな。

本人が知らないのはどうかと思うんだが、本人のためなら仕方がない。

「ああ、もちろんだ。…やはりベルのような息子が欲しかったな。」

「そうね。でも、【静寂】…いえアルフィアさんと神ヘラと今日みたいにママ談話するとは思わなかったわ。神ヘラのあの落ち着いた様子は初めて見るわ。」

「神デメテルが言ってたが、神ヘラが落ち着いているのは神ヘステイアがいるからだそう。多くの神々の中でも、神ヘステイアのみが神ヘラを大人しくさせることができるそう。うだ。」

「そう…、エイナとイーナは本当にいい女神に仕えたわね。母としては一安心だわ。これでもリヴェリア様の方に集中できるわね。」

「頼りにしているぞ？ウイナもフィンとガレスをフォローしてやってくれ。」

「わかりました！…ロキ様へは？」

「知らん。」

「ほつといても勝手に動くわよ。あれでも結構やり手だから。」

そうだな。

「ここまで「ロキ・ファミリア」を大きくしたのは、ロキの手腕によるものも大きいからな。」

「ぶえつくしよん…ん…、もうこんな時間かあ。フヒヒヒ、まだまだアイディアが浮かんでくるぞー。アイズたんたちがいないのは痛いけど、今いるあの子たちでも十分やな。まずは、メイたんの作ってくれた提案書のアイドル計画からやな。やったるぞー！」



## 第373回 暴喰、開店。

よし…。メニューはあらかじめ決まったな。

準備は問題ないな。

「ザル坊、こちらへ来なさい。」

「何だ？メイ。」

俺は、メイの後をついていった。

そこには…女性が数人いた。

「おはようございます！店長！」

「……店長？」

「察しが悪いですね。店が出来たから店員を募集しました。」

「…毎回言っているが、事前に言ってくれ。それにこいつらは俺のこと知っているのか？」

「はい、知っています。彼女たちは坊ちやまのファンから私が厳選して募集した方です。情報漏洩対策は問題ありません。」

「そ、そうか。」

……気のせいかな？

こいつら…俺の好みに入っているんだが。

まさかメイのやつ、店だけでなく…。

いや、考えるのはやめよう。

ろくなことになりやしない。

「ゴ、ゴホン！あー、メイから聞いていると思うが、よろしく頼む。」

「はい！」

「それではオープン開始ですね。」

「はい！」

「え？お、おい。まだ仕入れと仕込みが…私がそれを見逃すと思いますか？…そうか。いきなりですまないが、今日からよろしく頼む。」

「かしこまりました！店長！」

俺がメニューが決まった矢先に、これか。

少しは心の準備させろよ…。

といつても、メイには通じないだろうな。

そういうや思っただが、元々俺は「ヘステイア・ファミリア」の料理長じゃなかったか？



「ああ、ザル坊。ホームでの昼食は私たちが請け負います。メイド親衛隊で料理の腕が上がっていた方々が何人かおられますのでやってもらいます。ただ、朝食と夕食は仕込みを終えて下さい。」

「今からやる…。少し待っている。」

「わかりました。彼女たちへ接客について教えますね。」

ちつ…お見通しかよ。

まあ、ここ数日あいつらに料理させてその都度指導していたからな。

これを見込んでいたのか？

いや、後にしよう。

先に仕込みを終えておかないと。

そして、俺たちは開くお店のところへ行った。

ふむ、場所は悪くない。

ただ、向かいがな…。

「店名は「暴喰麵」か。そのまんまだな。ただ…、向かいはいいのか？」

「問題ありません。ほっとけばいいのです。」

「奴の性格上、ここへ殴り込んでくるぞ？」

「おや、ビビっているのですか？」

「そんなことは言っていないだろ！」

「大丈夫です。あちらもそんなに器量が狭い方ではないでしょう。」

「まあ、そうだな。さて…店内を確認するか。」

いずれ、殴り込んでくるだろう。

その時は返り討ちするだけだ。

さて、俺の戦場を確認するか。

ふむ、想像通りだな。

「厨房での位置取りは悪くないな。ほぼカウンター式か。」

「ええ、回転も早くすませられるでしょう。」

「ふむ…いつでもはじめてもいいな。」

よし、仕込みはあるし店員もいるしな。

ずっと前から考えていたやり方も…問題ないな。

始めようと思った矢先に、メイが俺にあるものを渡してきた。

絶句した。

「では、これを被りなさい。」

「……こいつらの服装から見て何となく理解したが……何でベヒーモスなんだ？」  
「貴方にはピツタリでしょう？」

「いや、待てよ。こいつらは可愛らしい角だけつけているじゃねえか！俺は何でベヒーモスの首丸ごとなんだよ！」

「お黙りなさい。これも異端児の方への布石です。」

「……くそっ！わかったよ！」

ちっ……嫌がらせだろ。これ。

異端児のやつらのためと言われたら、やるしかないだろ！

さて、店員へ指示するか。

「洗い場は頼むぞ。」

「はい！店長！」

店長……聞き慣れないな。

まあ、いいか。

厨房は狭いから俺一人でいいだろう。

「厨房は俺一人がいい。オーダーを手伝ってくれ。ああ、呼び込みは最初だけでいい。後は匂いで寄ってくるだろう。ちよっかい出してくる神々や冒険者がいたら俺に言え。ひねり潰してやる。」

「はい！店長！（頼りになります！）」

ちよっかい出す奴らは絶対にいるからな。

こいつらが怯えたら意味ないだろうし。

せつかくメイが雇ってくれたからな。

厨房は…いつの間にかホームでつくったのを持ってきているな。

ちっ、お見通しというわけかよ。

仕込みを今日から考えないとな。

「仕込みはホームで作ってあったのをそのまま持ってきたのか…。まあ、最初は種類が少なくていいだろう。今晚か明朝にダンジョンへ仕込みへ行つてこないとな。」

「それは不要ですよ。」

「何だと？」

どういう意味だ？

仕込みができねえと店を開けねえぞ！

「異端児の方々が持つてきてくれるそうです。」

「……メイ、お前。あいつらをパシリ使いするんじやねえよ。」

「あちらの方々も乗り気だそうです。その代わり、文化等の提供やここの代金は無料にします。」

「まあ、そのぐらいはな。それではオープンするか。」

「ああ、そうですね。ただし、お客第一号は決まっています。」

「あ？誰だ？「ザルド叔父さん！」：ベルたちか。」

「はい、今からダンジョンへ潜るのでその前にということです。」

「：わかった。ベル、ここでは店長と言え。」

「え？あ、うん！わかった。店長！」

「よしよし、俺のオススメを食うか。」

「「はいー」」

さて、作るか。

よし、こんなものか。

「ベルは、こつちだな。『暴喰ちゃんぼん』だ。」

「わあ、野菜がこんもりだ！いただきますー！」

：好き嫌いが甘味以外ないだけ、マシだな。

あの馬鹿と嗜好が同じだからわかりやすい。

さて、エルフの奴らはこつちがいいだろう。

「ルウはこつちだ、アルヴの聖水を素にした『暴喰塩ラーメン』だ。」

「ああ、それは美味そうです。」

口に合うかどうか確認しないとな。

こいつはいつもいつもじゃが丸くんだからな、それに合うスープはつと…。

「アイズはこれだな。『暴喰味噌ラーメン』のじゃが丸くんトッピング付きだ。」

「さすが…わかつている。」

醤油などもあるが、俺にとっては味噌がじゃが丸くんに合うと思うんだ。

こいつはこれだな。

ホームで辛いものをよく食べているのを見るからな。

「テイオナは、『ピリ辛暴喰醤油ラーメン』のチャーシュー2枚追加だ。」

「わかつてるー！わー、美味しそー！」

ガツガツと食べているのを見ると、作りがいがあるな。

こいつはルウと同じでいいか。

「レフィーヤは、ルウと同じでいいな？」

「はい！問題ありません（本当はベルのと同じにしたいのですが、今度にしましょう

！。）」

ん？何で食わないんだ？

ああ、そうか。

「伸びるからさっさと食べえ。」

「「いただきます！」」

はっ、礼儀正しい奴らだぜ。

全員、完食したか。

スープ全部飲まなくてもいいのにな。

「どうだ？」

「「めちやくちや美味しかったです！」」

そうか。

ほっとしたぜ。

よし、気合も入ったし。

「後は客が来れば……問題ないな。」

「ええ……ベルが入った時点で、人だかりが既に出来ていました（場所が本当にここでいいのですか？向かいが……。メイさんが手配したと知っているのですが、明らかにあちらへ喧嘩を売っていると思えません。……まあ彼なら大丈夫でしょう。）」

「そうか、おい！お前から位置につけ！ベル、お前たちはダンジョンへさっさと行け。」

「かしこまりました！店長！」

「わかった！行ってきます！」

ベルたちは元氣よく行ったか。

ふっ、俺も結構甘くなつたものだ。

さて、戦いを始めるか。

「よし、開始だ！客を入れろ！」

「はい！いらっしやいませー！」



## 第374回 女将、突撃。

アタシは不審に思っている。

「妙だねえ……」

「どうしたの？母ちゃん？」

「この時間帯だと混雑してもおかしくないのに、少なくともいいかい？」

「ニヤ？…本当だニヤ。ミヤーは楽できていいけどニヤ。」

「あ？何か言ったか？愚図二号。」

「ニヤンでもニヤイニヤ…。」

サボるよりはマシだけど、客が少ないと儲けも減るんだよ！

一体、何なんだい？

…ん？この匂い…。

「…何かいい匂いがしない？」

「…向かいからだね。こちらへ挨拶に来ないとはいい度胸じゃないか？」

「ウニヤー！ミヤーが確認してくるニヤ！」

「あ、私も。」

「じゃあ、私も「駄目だ。」何ですか！兄様！」

「三人で一斉に行くんじゃねえ。一人でいいだろ。店の名前は何だ…「暴喰麵」？（…まさか）」

「ちっ！死んだあいつの二つ名を使うんじゃないよ！あたしが行く！」

（生きているけどな…。あいつらから「言うな」と言われているからな。）

気に入らないね！

あいつの二つ名を売り物にするとはいい度胸だよ！

かなり賑わっているね。

冒険者がこう、行儀正しく並んでいるのは…。

ああ、そうか。

そこで積まれているのが馬鹿やった奴らか。

…神もいるね。

「随分と繁盛しているねえ。…この匂い、かなり色々と仕込んでいるね。」

「いらっしやいませ！こちらのアンケートに記入して下さいね。」

「アンケートだって？…：…麺の硬さ、スープの種類、スープの濃さ、トッピングの有無…。

ふん、面白いじゃないか。客に合わせて作るってわけか。…（カキカキ）……ほらよ。」  
「ありがとうございます！しばらくお待ち下さいませー。」

ふん、アンケートに書くのはいい案だよ。

…そういえば、それについて言ってたねあいつが。

『暴喰麵』を開いた奴は、あいつの話を実現したのかねえ。

席は少ないけど…、食べたらずぐ金を払って去るか。

確かにこの方法なら早いね。

ウチもカウンターにいる客は大体早いからね。

「カウンター式か。回転も早いようだし…考えているねえ。」

「おまたせしました。こちらの席になります。」

「店員が何でヤギみたいな角をつけているんだい？まるでベヒーモスじゃないか…。ま

あ、いい。店長の顔を……。」

……何でベヒーモスの被り物をしてんだい。

インパクトはあるんだけどね。

そいつはアタシが注文した内容のものを出した。

「……麵普通に、豚骨暴喰ラーメンにチャーシュー、ニンニクたっぷりだ。」

「……………」の声…その覇気。はあああ…、何やってんだい！あんたは！」

「うるさい。伸びるからさっさと食べ。」

「……後で話は聞かせてもらうよ。どれ…スープも麺もかなり凝っているね。問題は味さね。(ジュール…)!!! (ジュールジュールジュール)」

くそっ！美味い！

料理ではまだ敵わないねえ…。

なかなか美味かったよ。

繁盛するのも納得だし、『暴喰麵』の名前もあの性悪メイドと思うと理解できる。

けど…アンタはオツタルによって死んだはずだよ！

説明してもらうよ。

「ふう……、ごちそうさん。逃げるんじゃないよ？」

「詳しくは、そっちにいる【女神の戦車】と【戦車の片割れ】へ聞け。」

「あの馬鹿兄妹が！」

あいつら！よくもアタシに黙っていたね！

ズシン！ズシン！

「母ちゃんが怒っているニャ…。」

「に、逃げるよ！」

「それ以前に何があつたの!」

「……………」

あの馬鹿兄妹め!全部吐いてもらうよ!

あの馬鹿猫共はそこに突つ立っていた。

「アレン!アーニャ!どういふことか、聞かせてもらうよ!」

「うひい!」

「ちつ…。」

そしてアタシは、【暴喰】だけでなく【静寂】、その妹も生きていることを知った。

あの坊やのスキルによって…。

だから、【アストレア・ファミリア】のあの女共も7年前から連れてきて蘇生されたのか…。

そういうえば昨日、【象神の杖】がフード被った奴を連れてきたね。

チラツと見えたが、あれは【象神の詩】だった。

他人の空似と思つたけど、このことを知つた今、本人だつたんだねえ。

アタシは呆れた。

やりすぎだ!と言いたいけど、済んだことは仕方がない。

特に「静寂」と妹はね。

「あの坊やの仕業か。はあ…、とんでもないことをしてくれたね。…まあ、いいや。」

「ニヤ!? 母ちゃん、食べてきたニヤ?」

「ああ、そうだよ。」

「ど、どうなの?」

「…店が閉まつてから食いに行きな。ただ、悪くないね。」

「!!? (あの母ちゃんが「悪くない」!?)!!」

ふん、腕がなまつてないか時々見に行つてやるよ。

今日の予約団体は…ちつ、あのひょうろく玉のファミリアか。

うるさくなりそうだねえ。

「ミア母ちゃん、来たでー!」

「ふん、来てやったぞ。」

「やれやれ…。」

「やあ、ミアにアレン。今日もよろしく。」

さっさと食つて飲んで、金をたっぷり落として帰りな!

相も変わらず、食って飲みやがった。

「はー！飲んだ飲んだ！…何か、ええ匂いするな？」

「……店に入る前から非常に気になってたのだが、向かいに新しい店が出来たのか？非常に心当たりのある店名なのだが（チラツ）。」

「ふん、行ってみりやわかるよ。」

ああ、行けばわかるさ。

どうせ、こいつらは知っているんだからね。

喧嘩仲間のガレスが向かいの看板を見ようとしている。

「何じゃ？新しい酒場かの？どれど………れ。」

「ガレス、どうしたんだい？」

「看板を見てみい……。」

「看板？………ああ。」

「暴喰麵……明らかにメイさんの作業やな。みんな、あつこヘシメに行くでー！」

「ベートさんがもう行きましたが……。」

「「は？」」

だろうね、入る前からあの狼人はソワソワしてたからね。

あまり飲んでないのが証拠だよ。

「(ジュルジュルジュルジュル)。替玉でバリカタを1つくれ。」

「ほらよ。」

「(チャブ……ジュルジュルジュルジュル)。」

「あんた、何を抜け駆けしてんのよ!」

「おい、単独行動してんじゃねえぞ。」

「(ジュルジュルジュルジュル)。てめえらもちやつかり注文してんじゃねえか。」

「あんたねえ、『ピリ辛暴喰醤油ラーメン』2人前、おまちどう様!」……後で覚えてなさい!」

「(ジュルジュルジュルジュル)、はー!うめーな!こいつが作ったのを毎日食ってるのか……あいつらは。贅沢な奴らだぜ。」

「やあ、店を開いたんだね。……何でベヒーモスの被り物なんだい? 『暴喰チャンポンのピリ辛風です!』」

「メイへ言え。」

「ふむ……これはアルヴの聖水をつかったものか。塩とダシだけで素材の味を見事に引き出している。エルフにとつて非常に好みだな。……トッピングで煮玉子があるならくないか?」



「はいよ。」

「儂はこの、背脂マシマシのこつてりが好みじゃわい。これは行きつけになるのう。」

「ウチもやー！ここでラーメン食えるとは思わんかったで！ミア母ちゃんのところへ飲みに行った後にここでシメる…。最高やでー！」



店を閉めた後、片付けを置いて馬鹿娘共とアレンを引き連れて向かいへ行つた。

「へえ、こういう料理なんだ。(ジュールジュールジュール)はー！美味しい！疲れがとれるよー！」

「(ジュールジュールジュール)。くううっ！魚のダシがこれでもか、ときいているニヤ！」

「(ジュールジュールジュール)。ライたちへ食わせてあげたいな…。」

「(ジュールジュールジュール)。：替え玉でバリカタを1つくれ。「ほらよ」」

「昼のと別のを選んだけど、悪くないねえ…。腕が前より上がってないかい？」

「まあな。ミア、店はいいのかわ？」

「さつき閉めたところだよ。……ここはいつ閉めるんだい？」

「あと30分ほどだな。」

「そうかい。また来るよ。」

「おう。」

ああ、来るさ。

積もる話もたくさんあるからねえ。

ウチにも来て、自慢の料理を食わせて唸らせてやりたいからねえ！

## 第375回 白兔、赤面

僕は何故ここにいるのだろうか？

早く強くならないといけないのに。

でも……どうしてもママたちが……。

この茶会に参加してほしいというから……。

【最強最高の英雄】へ一歩でも早く近づけないというのに。

「……でね。うちのエイナとイーナったらね……。」

「アイナ母様！それは言わないでください！ベルくん！耳塞いで！」

「ベル様！聞かないで下さい！」

「えっ！」

「あらあら、小さい時はみんな同じだから気にしなくてもいいのに。」

「全くだ。」

……聞いて得したような。

エイナさんってキレイだしカッコいいけど、小さい頃はそんなだったんだ。

イーナさんはまだわかるよ。

えっと…この場にいてもいいのかな？

そういえば…アイズさんの幼い頃ってどうだったんだろう？

聞いてみたい！

リヴェリア様なら知っているはず。

「うちのアイズもな…。こうなるまでどんなに苦労したことか…。」

「!!待って、リヴェリア…。」

「何だ。」

「私は最初からこうだった…。」

え？そうだったんですか？

と思っていたら、神様たちからダメ出しされた。

「嘘だな。」

「嘘はダメだぜ？アイズくん。」

「うぐっ！」

「え？そうだったんですか？」

「…ベルは聞いたらダメ！」

「ええっ！」

で、でも…聞いてみたい！

リヴェリア様がアイズさんが止めるのを無視して話していた。

……7歳から冒険者で、ファーストアタックがゴブリンを爆散？

……血まみれになるまでダンジョンへ潜っていた？

……初めての負傷が、乳歯がとれた？

最初の2つはともかく最後の1つはか、可愛い！

次々と暴露するリヴェリアさんの肩にアイズさんが赤面してポカポカしていた。

……こういう茶会も悪くないね！

あ、アイズさんが顔を覆って悶絶した…。

アイズさんが悶絶しているのをよそに、アルフィア義母さんとリヴェリアさんに同情していた。

「やはり苦労したのだな…。」

「ああ、本当に。副団長としての仕事よりこちらが苦労した…。」

「それはわかるわー。育児より、オラリオで好き勝手に過ごしていた時が楽だったわ。」

「その好き勝手とは、うちへ殴り込んだ時のことか？ん？」

「その節は大変申し訳ありませんでした！」

……最恐の「ヘラ・ファミリア」に？

「ロキ・ファミリア」って、そんなに血気盛んだったんだ…。

アイナさんたちが和気あいあいしていたところ、ママが溜息ついていた。どうしたんだろう？

「いいわねー。みんなは子供の小さい頃から全部知っているなんて…。私は14歳より前のベルを知らないのに…。」

「仕方がないだろう。私達は今のベルしか知らないんだから…。」

……。

えつと、僕はどう言えばいいのだろうか？

神様が空気を変えるかのように言った。

「ベルくんの小さい頃を知っているのはゼウス様と村人だけだね？」

「はい、そうです！」

「いや、知っている奴が少なくともここに2人はいるぞ？」

「ええっ！誰?!」

お祖母ちゃんがそう言っているのを驚いた。

お祖父ちゃん：ううん、ゼウス様と村の人しか知らないはず！

誰なの!?

そう思っていたら、メイとセバスが横から話してきた。

「坊ちやま、私達をお忘れですか？」

「!?」

「では、坊ちやまの小さい頃をこのスケッチブックで説明しましょう。」

「ま、待って！メイ！」

「しまった！メイとセバスは僕の記憶を読み取ることができなんだった！」

「と、止めないと！」

「そしたら、エイナさんとイーナさん、アイズさんが僕を取り囲んだ。」

「ベルくん？ダメだよ？さつき私たちのを聞いたでしょ？」

「ベル…一方的はズるい。」

「私はベル様の全てを知りたいです！」

「……僕は聞きたいとは言ってないですよ！」

「は、恥ずかしい！止めないと！」

「そしたら、セバスが僕を光速の如きで縛った。」

「猿轡も。」

「坊ちやま、失礼します。」

「……（ちよっ！）」

「では、メーテリアお嬢様。坊ちやまを抱いてくださいませ。」

「わーい、ベル♪（すりすり）」

「……（ママ、恥ずかしいよー）」

ママに抱え込んだら、暴れないじゃないですか！

み、みんなの目の前で：特にアイズさんには聞かれたくない！

：どうして、ママを見て羨ましそうにしているんですか？

僕がそう思っていたら、メイがスケッチブックを開いた。

そこには：赤ちゃんだった僕がいた。

ハイハイして微笑んでいる…。

絵がうますぎる！

リアルすぎるよ！せめて、もう少しボカして！

他人ならともかく、自分のを見るとめっちゃ恥ずかしい！

絵はやめて！せめて言葉だけにして！

心の悲鳴を上げている僕を無視するかののように、その横にセバスが解説していた。

解説しないで……！！

ママたちもワクワクして見聞きしないでください！

「こちらは0歳のころの坊ちゃまです。」

「あらあら、髪の毛が生えたばかりね。」

「まだ歯が生えていない時か。それでも可愛いな。」



「……！（恥ずかしい！）」

「おおー、ベルくんの赤ちゃんの頃ってこんな感じだったんだ。」

「これをあの人は独り占めしたというのか……。許せんな。」

「恥ずかしすぎる！」

「先程までのエイナさんたちの気持ちがよくわかりました！」

「だから、ここでやめて！」

## 第376回 白兔、羞恥。

僕が心からの悲鳴を上げてまくっているのをよそに進めた。

「続きまして、こちらです。」

うう、恥ずかしい。

次の絵は…？

地面の上に座って、泣いている？

え？どういう状況？

「…何で、泣いているの？」

「…何かを食ってて泣いているのか？」

「はい、坊ちやまは雑草を野菜と思って食べて、あまりの苦さに泣いたのがこちらです。」

!?

そんなの…覚えていないよ！

「……………！（やめて！メイ！）」

「よくあることね。…後ろにゼウス様っぽいのがボロボロになっている絵があるけど

？」

「はい、泣いた坊ちやまを見て大笑いし、村の女性達がタコ殴りにした後です。」

「「グツジヨブ！」」

ええっ！僕、初耳だよ！

お祖父ちゃん…ゼウス様が毎日のようにボコられているのは日常茶飯事だけど、僕が  
こういう目に遭っているのは全く知らないよ！

そして…また次の絵が…。

「こちらは、ようやく立ったばかりでございます。」

今度は…僕が膝を震えながら立っている絵が…。

他人なら微笑ましいけど、自分のだためっっちゃ恥ずかしい！

ママたちは…好評だった。

「あらあら、ふるふるだと震えているわ。」

「うむ。可愛いな。」

「本当だね！」

メイがその反応を見て、次のページを開いた。

!?

どうして…村のお姉さんの胸に埋めているの!?

覚えていないよ！

「こちらが、その後もろに顔をぶつけて大泣きした後に村の女性の胸に埋もれて慰めてもらっています。」

知らないよ！そんな小さいことは全く覚えていないよ！

そんなことをアイズさんたちの前で言わないで下さい！

チラリとアイズさんたちの方を見ると…。

「この頃から○つばいに興味あつたんだ…。」

「……………！（違います！エイナさん！）」

「（私は…あれほどじゃないけど、これから。）」

「（お姉ちゃんほどじゃないけど、これから成長するんだから！）」

弁解したくても口を塞がれているので言えない！

……何でエイナさんはこれみよがしで、それを持ち上げているんですか？

アイズさんもイーナさんもそれを僕の目の前で、も、揉まないでください。

目の毒です！

僕が色々と赤面している間に、ママたちは進めていた。

「後ろであの人が倒れているが？」

「はい、坊ちやまが胸に埋もれているのを見て「ワシも埋もれたいぞい☆」と飛びかかって来たところを箒で打ち落とされた姿です。」

「何故その神と14年間一緒にいたというのに、全く染まらなかつたのが奇跡だ……。」「同感だ。」

お祖母ちゃん…、恥ずかしいよ。

お祖母ちゃんというきれいな奥さんがいるというのに…。

染まるといつても…、お祖父ちゃんは僕が寂しくならないように色々と楽しませてくれたけど…。

…でも、毎日のように僕を女の人へけしかけたり覗きに誘うのはあまり好きじゃなかつたなあ。

それをいうとお祖母ちゃんだけでなく、ママもアルフィア義母さんも怒るよね？  
間違いなく。

そして僕が葛藤している隙に進められた。

「まだまだ、ありませんぞ。スケッチブックは残り9冊ですな。」

「………！（本当にやめて！僕の知らないことまで暴露するのはやめて！）」  
本当にやめて………！

---

数時間だけど、僕にとっては数ヶ月のように感じられた。

僕の知らないことまで暴露させられた。

半分はお祖父ちゃんのみせいだけど。

「あら？もう夕暮れだわ。」

「まだ3歳までしか来てないぞ。」

「ええー。ベルくんのことをもっと聞きたいのに！」

「不謹慎だが、なかなかおもしろかったぞ。」

「またやりたいわ！」

「そうだな。」

ママたちはいいいんですが、僕の心はもう精神疲弊寸前です。

やっと拘束を解いてくれた。

「……もう、ママ友茶会はいいです。ぐすん……。」

「私もだよ……。ベルくん。」

「私も……。」

「全部知られてもいいけど、さすがに絵付きで説明しながらはキツイです……。」

うん、イーナさん。

それは本当にキツイ。

しかも絵が綺麗だし、色付きだからリアルに見えました……。

自分のことだから笑えない。

そして、メイはスケッチブックとノートをママへ渡していた。

あれは…まさか。

「では、メーテリアさん。こちらを。」

「え？スケッチブック？あら…ベルの絵ね。ああ、成長記録ね！」

「そして、こちらが先程の0歳から13歳までの坊ちやまの様々なことが書いてあります。」

「!?ママ、ごめんなさい！」

しよ、証拠隠滅しないと！

【ファイアボルト】

その前にアルファイアお義母さんが立ちふさがった。

危ない！あつ…。

「無駄だ。」

「無効化?!ア、アルファイア義母さん!ずるい!どいて!」

「ベル、知られてはまずいことでもあるのか?」

…あるようでないような…。

そんな小さい頃、覚えていないよ!

だからと言って、全部知られるのは恥ずかしいんです！

僕は絞るような声で言った。

「……………ないです。ないですけど！恥ずかしいものは恥ずかしいんです！」

「諦めろ。他には漏らさないから大丈夫だ。」

「ママ友茶会では？」

「……………あちらもそれぞれの娘のことを出すだろう？情報交換だ。」

「「!？」」

さっきまで微笑んでいたアイズさんたちも、こちらを振り向いて絶句していた。

リヴェリア様、アイナさん、お祖母ちゃんが同意した。

「うむ、ここ以外は漏らさないと約束しよう。」

「そうね！」

「安心しろ。」

ま、待つて下さい！と言おうとしたら、ママがスケッチブックとノートを交互に見ながら嬉しそうにしていた。

あんな姿を見たら、とても言えない…。

けど、それだけは言わせて下さい！

「「ちつとも安心できません！」」



僕たちはその時、心が1つになった気がした。

## 第377回 白兔、発動Ⅶ

ホームの前で…誰かが揉めている声が聞こえる。

迷惑だなあ、と思つて行つてみたら、ベートさんとどこかの神様だった。

い、急いで止めないと！

「………何でここにいやがる。ヴィーザル！」

「…久しいな、ベート。元気そうで何よりだ（あのチョコカーは…まだセレニアのことが忘れられないようだな。私もセレニアからプレゼントもらったものを持っているから、ベートのことを言えないな）」

「あの……、ホームの前で喧嘩しないでくれますか？」

…お知り合い？

ううん、知り合いというよりそれ以上の関係のように感じる。

何故ならヴィーザルという神様が、荒だっているベートさんを優しい目で見つめていたからだ。

神ヴィーザルという方が僕を見て話しかけてくれた。

「…お前が【白兔の脚】か。」

「あ、はい。ベル・クラネルと言います。あの…ベートさんと知り合いでしょうか？」  
「知らねえよ！こんな神は！」

「嘘はいかんぞ。…ベートの元主神だ。」

「ええっ！」

えっ…ずつと【ロキ・ファミア】じやなかつたんですか？

ベートさんは舌打ちして、心配するかのようにつた。

「ちっ…。あいつらはどうしている？」

「元氣だぞ？あれから誰も死んでいない。お前を心配していたぞ。」

「うるせえ！心配する暇あるならさっさと強くなりやがれ！」

「ああ。強くなっているぞ？レベル3だがな。」

「まだレベル3かよ！だっせえぞ！」

「…：…その【白兔の脚】と一緒にされては困るのだが。」

「…：…こいつはバグっているから別だ！」

「ベートさん、ひどい！」

みんな、バグつてると言っているけど…。

ちよつと早いだけだよね？

あれ？…その気配は愚者さん？

(む？神ヴィーザルか？懐かしいな。)

「あれ？え？今ああああ!!」

「なっ！この穴は…時空の穴!!」

「…は？」

(これは…私に魔法を唱えろということだな？わかります。)

【未踏の領域よ、禁忌の壁よ。今日この日、我が身は天の法典に背く。ピオスの蛇杖、サ  
ルスの杯。治癒の権能をもつてしても届かざる汝の声よ、どうか待っていてほしい。王  
の審判、断罪の雷霆。神の摂理に逆らい焼きつくされるといふのなら、自ら冥府へと赴  
こう。】

「またなのおおお!!」

『セレニアを棺桶から出し、代わりのものを入れよ。』

「え？セレニアって…誰？」

ドローン

「ふう…もう慣れてしまったね。あれかな？」

ギイイイゴトン。

「わ…美人。…この女の人を持ち帰らないと僕、帰れない…。仕方がないよね…ごめんなさい。」

女の人を棺桶から出し、代わりのものを探した。

「えっと代わりの物…、あつ！木製の防具と剣…。うん、同じぐらいの重さ。これを入れてつと…。」

ヒョイ、トコ。ヒョイ、トコ。

ギイイイバタン

『ミツシヨン！コンプリート！』

「よしっ！」

---

「…何でだ？」

「…何が起こっているのだ？」

「おやおや、神ヴィーザルではありませんか？」

「ひっ！さ、【最強侍従】…何で…。」

ドドーン！

よし帰れた！

後は愚者さんの魔法だけだ！

「おい！クラネル！誰…を。」

「ば、馬鹿な！セレニアは…埋葬したはずだ！」

【開け戒門、冥界の河を越えて。聞き入れよ、冥王よ。狂おしきこの冀求を。止まらぬ涙、散る慟哭。代償は既に支払った。光の道よ。定められた過去を生贄に、愚かな願望を照らしてほしい。嗚呼、私は振り返らない】

【ディア・オルフェウス】

「ちよ、ちよつと待て！そいつはまずい！」

「え？」

「ぐっ…。何だ？今の光は。…は？恩恵が増えた？これは…セレ…ニア？」

「成功したようですね。」

「……………マジかよ。」

え？まずかったの？

……………悪い人じゃなかったらいいけど…。

あ、目が覚めた。

「う、ううん…。あれ？ここは…？あ、ヴィーザル様に…ベート！」

「セレニア…なののか？」

「え？私を忘れたの？ひどい！あんなに熱い夜を何度も過ごしたというのに！」

「ええっ！」

「お、おい！馬鹿！」

ベートさんの…恋人？

じゃあ、リーネさんは…？

あ、レナさんも。

「何が…起こっているのだ？」

「見られた以上は仕方ありませんね。神ヴィーザル、選択してください。」

「…な、何をだ。」

「オラリオ連合へ入るか、神ヘラによって送還されるのかを。」

「入る！入るから、それはやめてくれ！入るから、これについて説明してくれ…。」

「では、こちらへどうぞ。」

「ああ…（オラリオへ来るんじゃないやなかった。だが…何故セレニアがこの時代へ来て生き返ったのだ？）」

セレニアさんという人がベートさんに抱きついていてる。

わわわっ！こ、これが…大人の恋愛…。

リーネさんはいいのかなあ…？

「あれ？ベート、何か変わった？…他の女の匂いがする。」

「て、てめえは獣人じゃねえだろ！」

……女の人って、五感も敏感なの？

セレニアさんの目がめっちゃ怖い！

こ、この場を離れよう…。

そう思ったら、聞き覚えのある声がやってきた。

「ベートさん、先に行かないでください！貴女は帰ってください！……その人は誰ですか？！」

「嫌だー！ベートと二人きりにさせるもんかー！……誰？その雌は。」

「!?」

「……ねえ、ベート？あの女の人二人はだくれ？」

「……（ダラダラダラ）」

うわあ…リーネさんとレナさんだ。

これ……やばくない？



あ、ベートさんがものすごい脂汗を流している。  
すごく嫌な予感がする。

今すぐこの場を離れよう！

「じ、じゃあ僕はこれで…」

「だ、ダンジョンへ行くぞ！クラネル！」

「え？うわあ！」

「あ、ベート！」

「ベートさん！説明してください！」

「ベーーーーー！」

ひいひいっ！

狼に連れ去られるうううう！

## 第378回 凶狼、謝罪。



「……………」

「よしっ！まずは自己紹介かな。私は〔ヴィーザル・ファミリア〕副団長のセレニアです！」

「あ、はい。私は〔ロキ・ファミリア〕のリーネ・アルシエです。」

「……………〔ヘルメス・ファミリア〕のレナ・タリー…。アンタは誰？ベートは私のだよ！」  
「何言っているのですか。レナさんは他派閥でしょう。ベートさんは〔ロキ・ファミリア〕ですよ？」

「え？改宗した？」

「え？」

「……………いつの間にかオラリオの雰囲気も変わっているし。どうなっているの？」

「まさか…あの…貴女の知っているベートさんは何歳ですか？」

「え？16歳だよ。」

「…6年前…もしかして、25階層のモンスター大量発生に遭いませんか？」

「そうだよ！それで私死んだはずだけど…。どうなっているのかわからないんだ。」

「リーネ…まさか【白兔の脚】のアレ？」

「それ以外、考えられないでしょうね…。説明しますので【ロキ・ファミリア】ホームへ来てくれませんか？」

「…そうだね。ヴィーザル様もどこかへ行つたし…どうなっているのかわからないから、いいかな？」

「はい、こちらです。ベートさんとの関係について情報交換しませんか？」

「いいよー！」

「ちよ、ちよつと！リーネ！いいの!？」

「レナさん…諦めましょう。【白兔の脚】に文句言えません、特に私は絶対に言えませぬ！」

「あ、うん…。私はめちやくちや文句言いたいけど、周りの人が…特にあのメイドと執事がめつちや怖いから言えない（ヘルメス様もアイシヤも絶対に逆らうな、と言われたし）。」

「わかります。」

「???」



よし……ここまで来れば大丈夫だろう。

「はあ……はあ……」

「く、首がしまるところだった……。あの……大丈夫ですか？あれ？ここは……五階層？」

ここで、こいつに謝らなければならぬんだ！

俺の……ケジメだ！

ガバアツ！

クラネルは、驚いていた。

「え？べ、ベートさん、どうして土下座を……」

「すまねえ！あの時は笑っててすまなかった！」

「……ベートさん。頭を上げてください。ここでアイズさんとベートさんに助けてもらわなかったら、僕はミノタウロスに殺されていました。そして、あの時の酒場で僕は強くなりたいたいという気持ちを強くもつようになりました。お礼をいうのはこちらです。」

「……それでもだ。これはケジメってやつだ。」

「……いいえ、それは既に受け取っています。2つもです。」

「は？」

どういうことだ？

クラネルは、微笑みながら言った。

「1つは、『火鉢亭』で「アポロン・ファミリア」団長ヒュアキントスさんからの諍いにはいつてくれましたよな？」

「…あの状態がうるさかったただけだ。」

「2つは、『異端児』の件で。僕とアイズさんが戦った時、貴方は近くにいましたよね？」

「……………気づいてやがったのか。」

「僕は何故か視線には敏感なんです。…あの時、あなたはウィーネを追いかけて殺すこともできたはずだ。なのに貴方はしなかった。」

「……………てめえらの覚悟を見たからだ。それに…あんな弱っちい童女を手にかけたら俺の手が汚れるだけだ。」

「それでもです。…なので、これでおあいこにしましょう？」

「……………そうだな。これとは別に、てめえに絶対追いついてやる！」

「はい！僕もそう簡単には追い越させません！」

…言いやがったな。

それでいい。

ああ、それでいいんだ。

フィンやクソ猪なんかと違う。

こいつは本当の『英雄』であり、…のし上がった強者だ。

弱者の癖に多くの強者を倒し、多くの試練を越え、多くの奇跡を引き起こしやがった。だからといって、指をくわえて見ていられねえ！

こいつの足手まといになつてたまるか！

…いや共に戦いてえ！

そして…こいつの友に…。

まずは、飲みだな。

「へっ！抜かしやがるぜ！…一旦戻つて酒飲みに行くぜ！…ベル！」

「はい！ベートさん！」

ようやく…心から笑えるかもしれねえ。

と、思っていた時があつた。

この時までには…。

「お帰りー。ベート。」

「お帰りなさい、ベートさん。」

「ベート！お帰りー！」

「……………」

何でてめえらがいやがる！

特にセレニア、レア！お前らは別のファミリアだろうか！

帰れ！

ヴィーザルがロキと一緒に部屋から出てきた。

「ベート。セレニアは〔ロキ・ファミリア〕に改宗させた…。」

「はあ!?ヴィーザル！てめえ、勝手に何してんだ！」

「…諦めろ、」

「諦めるんや、ベート。もう詰んどるで（ほぼベルたんが原因やけどな）。」

ふ、ふぎけるなああああ！

俺がヴィーザルに怒鳴っている間に、セレニアがベルに何か言っていた。

「貴方が〔白兔の脚〕ね？私はセレニアと言います。」

「は、はい！ベル・クラネルです！」

「ありがとう！私を過去から連れてきて生き返らせてくれて。」

「い、いえ！」

……すごく嫌な予感がする。

ベルをここから逃したほうがいいか？

いや、それよりベルと一緒に飲みに行ったほうがいいな。





「あ、ライラさんとティオネさん。どうしましたか?」

「どうしたもこうもないぜ。ここはあたしたちに任せて帰っつけ。かなり面倒くさいことになるぜ?」

「その方がいいわよ…(チラツ)。」

「(チラツ)……そ、そうですね。一言声をかけてきます。」

「やめたほうがいいぜ?…あいつらに取って喰われるぜ?」

「ひいっ!…か、帰ります!」

「ああ、帰っつけ(そうしないと、あいつらがうるさいんだよな)」

「ティオナをよろしくね?」

「あ、はい。わかりました。」

「おい、ティオネ。あのバグ兔、わかってねえぞ?」


「でしようね…。はあ、あの馬鹿妹にもっと押すように言っただほうがいいのかしら?」

「やめとけ。あの化け物共に何されるかわからねえぞ?」

「そうね…。あの馬鹿狼はどうなるのかしら?」

「さあな、少なくとも死んだ奴が2人蘇ったんだ。願ったり叶ったりじゃねえの?」

「…そうね。」



キャンキャン五月蠅いこいつらをのしのけて、ベルを探した。

「てめえら、うるせえ!……おい、ベルはどこへ行った?」

「あたしが帰らせた。」

「あんた、覚悟した方がいいわよ。後ろを見なさい?」

何だと?

後ろを見ると同時に、なんかの鎖でがんじがらめにされた!

「こんな鎖……ち、力が入らねえ!」

「なっ!こ、これは……ミスリルの鎖……。てめえら!何のつもりだ!」

「何のつもり? 円満解決するためよ。ベート。」

「は?」

「ベートさん、私達は争うことをやめました。」

「はあ?」

「何も一人じゃなくてもいいんだー!なら二人、三人でもいいよね?」

「はああああ!」

な、何を言ってるやがる!

俺が青ざめているところに、フィンたちが通りかかった。

「糞っ!これを解きやがれ!フィン!爺!ババア!助ける!」

「諦めろ。」

「ベート。観念しなよ。彼女たちは…本気だよ。」

何…だと？

「それよりフィン、『暴喰麵』へ行くぞい。『背脂マシマシチャーシュー山盛りニンニク たっぷり暴喰ラーメン』を食べたいぞい。1日に1回は食べないと気がすまないのう。」

「そうだね。僕は『激辛味噌暴喰ラーメン』が食べたいかな。癖になるんだ。」

「私も行こう。新作の『柚子塩暴喰ラーメン』ができたと聞いたのでな。」

「あ、待てよ！あたしも行くぜ。」

「団長！お供します！」

「てめえらああああ！」

俺より暴喰麵を選ぶのかアアア！

俺が喚いている間にこいつらは俺を担いで、歓楽街の…【イシユタル・ファミリア】の  
焼け跡へ運んだ。

ま、まさか…。

「本当に歓楽街は炎上したんだ…。レナちゃん、場所は？」

「こつちだよー！声が外へ届かないところだよ。私オススメ☆」

「只今戻りました！【ミアハ・ファミリア】へ寄つてきて3ダースの精力剤を買つてきま

したー！」

「ありがとう、リーネちゃん！食糧よし、水よし…。二人共覚悟はいいわね？」

「はいー！」

やべえ！

鎖は…ダメだ！何重にも縛られてやがる！

早く逃げねえと…喰われる！

こいつは、ニツコリと笑い服を脱ぎながらこつちへ来た…。

こんなに女…いや雌が恐ろしいと思っただのは初めてだ。

「て、てめえら！何をするつもりだ！」

「何って…ナニに決まっているじゃない。」

「わ、私は初めてなので…。」

「大丈夫！元【イシユタル・ファミリア】のテクニシヤンのレナちゃんが手ほどきしますー！」

「ひ…よ、よせ…。来るなあああ！」

そして…俺は。

「ここは、『ヘステイア・ファミリア』のベルの部屋だ。  
…ベッドがでかいな。」

「あの…、大丈夫ですか？」

「(ゲツソリ) …大丈夫に見えるか？」

「いえ…すみません。」

「てめえが謝るな。…俺のツケだ。」

隙を見て、何とか全速力で逃げた。

あの女ども…底なしかよ！

コンコン

ガチャ

「あ、メイ。どうしたの？」

「いえ、『凶狼』。お迎えですよ？」

「(ビクツ!) ……いないと言え。」

……もう、嗅ぎつけられたか。

((ヒョコ))

「残念だけどー、それはダメ☆」

「そうですよ。疲れたら私が癒やしますからね。」

「レナちゃん、まだまだ元気ダゾ☆」

「助ける…ベル。」

…屈辱だが、助けてもらうしかねえ。

ベルはそんな俺に同情して、セレニアたちを諫めようとしたが…。

「えつと…あの、皆さん…。」

シユバババツ！

なっ！てめえらは！

「ベル、そつちを見たらダメ…。」

「ベル！その盛った狼に近づいてはいけません！」

「ベート、観念しなよ？」

「諦めた方がいいですよ。貴方はもう詰んでいます。」

「(囲まれた!?) ……ごめんなさい、ベートさん。」

な、な、てめえらあああ！

「てめえら、元は同じファミリアだろうが！おい！また縛るんじやねえ！」

「失礼しましたー！」

「放せえええええええ！」

そして俺は再びこいつらに抱えられ、運ばれた。



## 第380回 静寂、吃驚。

うむ、平和だな。

メーテリアも元気になり、義息子のベルもいて非常に充実している。

しかしメーテリアが元気になったのはいいが、その分五月蠅くなった。ベルの方が大人だぞ…。

と、思っていたらメーテリアがあるお願いをしてきた。

「姉さん。」

「…何だ、メーテリア。」

「そろそろ、運動はいいと思うの。ダンジョンへ行きたいわ。」

「ダメだ。」

当然だろう、お前はレベル1なんだから。

お前というトロ子はダンジョンの第一層でゴブリン共にやられるのがオチだ。

やめておけ。

そしたらメーテリアが膨れ面でタダこねた。

…昔なら可愛いなと思ったが、今はベルのほうが数倍可愛い。



なので、それは通用せんぞ。

「なんでー？」

「危ない目にあうからだ。」

「ベルは行ってるじゃない！」

「お前はレベル1だろうが。」

「え？違うわよ？」

「何だと？」

レベル1ではなかったのか？

…確かに、先日私達を叱った時はどう考えてもレベル1ではなかった。

いぶがる私を見て、ヘラは言った。

「アルフィア、連れて行ってやれ。」

「大丈夫でございます。上層や中層程度なら問題ございません。」

「……………」

…こいつら、何か隠しているな？

まあ、私一人ならどうにかなるがダンジョンはダンジョンだ。

イレギュラーが起これないとは限らないからな。

そして開店準備をしていたザルドを強引に引つ張つてきた。

「で、俺を連れてきたわけか？」

「そうだ。」

「あら？あれがゴ布林ね。」

「下がれ、私がやる。」

ふん、雑魚共が。

【福…】ゴスベル【凶音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「グギヤ!？」

「ゲブパ!？」

「…は？私は魔法をまだ唱え終えていないぞ…。今のは…メーテリアか？」

「ゴ布林が…内部から破裂した？」

「あらあら、結構エグいわね。」

「待て。お前…魔法が使えたのか？」

「え？知らなかったの？」

知らんぞ！

それに…何だ？今の魔法は。

内部から…破裂した？

いや…内部の魔力…音を増幅させた？

ザルドが不思議そうな顔で私を見ながら言った。

「アルフィア…お前の妹、お前と同じぐらい強く感じるんだが？」

「お前の悪食でか？…待て、メーテリア。お前のレベルはいくつなんだ？」

「この前義母さんが更新してくれたから、8ね。」

「は!？」

8だと!?

そんな馬鹿な!

お前はダンジョンにさえ潜らなかつただろうが!

疑問で頭一杯の私をよそにメーテリアは先へ進んだ。

「さあ、サクサク行くわよ。」

「ま、待て!」

「俺、いらんじゃねえか…。」

気持ちはわかる。

だが、あのメーテリアだぞ？

見てやらないといかん！

案の定、メーテリアはモンスターの群れへ散歩するかのようにつつまんだ。

「ま、待て！何も無防備につつまむな！」

「……………」

「ちっ！危ねえ！ウォーシャドウが後ろから…は？」

「攻撃が…遅くなっている？」

「なるほど、そういう感じなのね。ふふふ。」

……………どうなっている？

モンスターも戸惑っているようだ。

よくよく見ると…………。

「周りのモンスターがメーテリアへの攻撃が…鈍い？」

「違う…。メーテリアのまわっている魔法が…モンスターの攻撃を鈍らせているんだ

！」

「何だと!？」

「じゃあ、お邪魔しましたー。」

は？…お邪魔しました？

【凶音】

ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

これはひどい……。

群がってきたモンスターを……たった一唱で絶命させた。

その血の海を悠々と笑顔で渡って来たメーテリアが……怖い。

ザルドが引きつった顔で言った。

「……モンスターが哀れに思えてきたぞ。」

「……どうなっているのだ!？」

「帰ったら説明するわね。」

……二つの魔法を持っているだと!？」

聞いてないぞ！

その調子で、中層の13階層まで来た。

当然モンスターにも遭遇したが、全匹悲惨な最後を迎えた。

「ブモオオオオオオ！」

メーテリアがミノタウロスを発見した途端、怒りの表情を見せた。

「ミノタウロス……！よくも私のベルを……。」

「いや、あれはベルを傷つけたやつじゃ……。」

そう言ったが、メーテリアは聞かなかった。

【凶音<sup>ゴスベル</sup>】

【サタナス・ヴェーリオン】

「ブモオツ!?!」

「え?」

「……股間を破裂させた。」

「ひいっ!」

私の魔法はピンポイントで当てれるが…、メーテリアはそれ以上だ。

ピンポイントで…破裂させた。

これはひどい。

ザルドも内股になるぐらいだ。

それでもメーテリアは怒りの表情を崩さず、連発した。

【凶音<sup>ゴスベル</sup>】

【サタナス・ヴェーリオン】

「ブモオオオオツ!?!」

「うわ…今度は右腕を…。」

「……………」

これはひどい。

明らかにいたぶる感じだぞ、あのメーテリアが。

それでも…表情を崩さないのか？

【凶音】  
ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

「ブモ……」

「……もう許してやれよ。」

「今度は目を……」

「このぐらいいにしてあげるわ。」

いや、十分すぎるだろうが！

こんなの……ベルには見せられんぞ！

【凶音】  
ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

「ブ……」

「んー？まだ魔力のコントロールが微妙ね。さあ、行くわよ！」

「……俺、帰っていいか？いろんな意味で。」

「……私もだ。」

十分すぎる。

魔力のコントロールが明らかに私よりも上だ。  
一体、どうなっている!?



## 第381回 静寂、看破。

私達が精神的に疲れていても、メーテリアは元気だった。

……寝込んでいた方がよかったかもしれない。

17階層に着いた。

「グオオオオオオオツ！」

「かかれー！かかれー！」

騒がしいな、雑音共か。

ゴライアス如きで何をさえずっている。

「お！あんたら、手伝ってくれ！……あんた、【白兔の脚】に似ているな？」

「あら？そうかしら？ふふふ、ベルの、実の、母のメーテリアです。」

「お、おう…若すぎないか？それは後だ！あのゴライアスを何とかしてくれ！」

「任せてちょうだい！」

「……いいのか？」

「……様子見る。」

……本当にレベル8なら、ゴライアスを難なく倒せるはずだ。

そう思っていた私がいた。

そして、後悔した。

【凶音】  
ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

「グオオツ!!?…グオオ…」

「…え?短文詠唱!?!」

「ば、爆発?」

「いや…中から破裂したぞ…しかも股間。」

「…ひいっ!」

ミノタウロスと同じか…。

巨大な分当てやすいからな。

だからといって、そこを先にすることはなかりうに。

【凶音】  
ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

「グオオオオオツ!!?」

「今度は両足の親指…。」

「ひでえ…。」

ピンポイントで嫌なところを破裂しているな。

いや……練習しているのか？

「グオオオオオオオオオッ！」

「うるさいわね。」

【凶音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「グオッ……………！」

「の、喉も……？」

「んー。やはり義母さんのようにうまく潰せないわね。」

「『潰す!』」

へらめ、何てことをメーテリアへ教えているのだ。

余計な知識を持たせてしまったではないか！

ゴライアスがメーテリアへ目掛けて拳を振り下ろした。

丁度いい。先程まではモンスターが弱すぎてわからなかった。

こいつ相手なら、あの魔法の正体がわかる。

「あ、危ねえ！」

「…は?え?遅い…?」

「あれじゃあ、パンも潰せねえぞ……。」

「あらあら、そんな攻撃じゃ私を倒せないわよ?」

……そうか、そういうことか。

そこまで私と似なくてもよかろうに。

嬉しいといえば嬉しいが、それはあまり嬉しくないな。

ザルドが答えを教えろという視線を向けた。

あれではすぐに看破できないから、仕方がない。

「……あれは物理の無効化だ。」

「は? お前の魔法とは別なのか?」

「ああ、私のは魔法の無効化だが、メーテリアは物理の無効化だ。」

「……………」

ザルドは絶句していた。

当然だろうな、ほとんどの冒険者の攻撃が効かないと同義だからな。

続けて私は言った。

「魔法攻撃に特化していないやつらにとって天敵だな。ザルド、お前もだ。」

「やりあいたくねえ…『レーア・アムブロシア』しかねえじゃねえか。しかもあのえげつない魔法を連発されたら何もできねえぞ!」

「戦士殺しだな。……ヘラとセバスメ、黙っていたな？」

何故、そのようなことを黙っていたのだ！

そういうのは姉である私へ真っ先に報告すべきだろうが！

カンカンに怒っている私をよそにメーテリアは、ゴライアスをいたぶっていた。

いや、ゴライアスで練習していた。

【凶音<sup>ゴスベル</sup>】

【サタナス・ヴェーリオン】

「……………」

「もう…許してあげて下さい…。」

「…いっそ、楽にさせてやって下さい。」

「あの【白兔の脚】に似ているのは容姿だけなのか…。」

容姿だけでなく性格もだが。

このような一面はベルには皆無だ。

ない方がいい。

セバスの言った通りだ。

両親のいいところだけを凝縮しているのだ、ベルは。

本当に奇跡的な組み合わせだ…。

帰ったらベルをナデナデしよう。

うん、そうしよう。

この惨劇を見た私が癒やされたい。

【凶音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「……………っ！」

「あれ？破裂しない？」

「この音は…、まさか。」

「いや……………体内で破裂しているぞ。」

「「え？た、体内？」」

「恐らく…今のは肺の片方だな。」

「「ひいっ！」」

もうそこまで魔力のコントロールをつかんだのか…。

相手の内臓の位置までも。

【凶音】

【サタナス・ヴェーリオン】

「……………。」

「もう…ピクリとも動かねえぞ。」

「ゴライアスを可哀想と思ったのは初めてだ…。」

異端児ではないが、こんな複雑に思ったのは初めてだ。

そしたら、メーテリアが不満そうに言った。

「なるほど、魔石を破壊するだけなら一回だけでいいのね。でも面白くないわね。」

「「え？お、面白くない？」」

「……………もう【女帝】より怖いぞ。俺は。」

「私もだ。名実と共にメーテリアは「ヘラ・ファミリア」の真の最恐となったな。」

【女帝】でも私でもそこまでやらないぞ。

笑顔で何故そこまでいたぶれるのだ？

ヘラを超えているぞ…。

【凶音】  
ゴスベル

【サタナス・ヴェーリオン】

「……………」

「や、やっとなんだな…。」

「見ろよ…ほっとしたような顔だぞ…。」

「安らかに逝けよ…。」

貴様ら、メーテリアを心配しろ！…とは流石に言えない。

ゴライアスのこの様を見せつけられたらな。

ゴライアスに黙祷してもいいぐらいだ。

メーテリアは背伸びしながら言った。

「んー！コツはつかんだわ。さあ、サクサク行くわよ！あ、リヴィラってどんな街かしら？」

（（ビクッ!?!））

……今までののは準備運動だったのか？

我が妹ながら恐ろしく思ったぞ。

むさ苦しい奴らから、眼帯した大男が慣れない笑顔をしながら手を揉みながら出てきた。

「あ、あのー？お嬢様、ほ、本日は定休日ですて…。」

「あら？そうなの？仕方がないわね。姉さん、18階層を見て回りたいわ。」

「…そうだな。」

リヴィラに定休日ってあったのか？初耳だぞ。

いや、違うな。

メーテリアを恐ろしく思ったんだ。



メーテリアのその発言を聞いて、こいつはすぐ先程の集団へ駆け戻って呼びかけた。  
『て、てめえら！至急帰って店じまいしろ！』

『『わかった！』』

「リヴィラの連中を初対面でこんなに怯えさせるとは…。」

…嬉しいようで全然嬉しくない。

嗚呼…あの儂い妹はどこへ行ったのだろうか…。

そんな私達をよそにメーテリアははしゃいでいた。

「あー！楽しかった！」

「…そうだな。」

「次は深層へ行きたいわ。」

「…そうだな。」

私は…疲れた。

ザルドもモンスターの成れの果てを見ながら、胸焼けしたかのようにだった。

## 第382回 静寂、衝撃。

そして、20階層まで来てお腹が空いたと言ったため、引き返した。

本当は20階層にあるものでザルドが料理して食べれるが、私もザルドもそんな気になれなかった。

「ただいまー!」

「お帰りなさいませ。いかがでしたかな?」

「ダンジョンって楽しいのね! ずるいわ、みんなは。」

「そうですね。」

私は疲れたぞ。

ザルドは疲れた体に鞭打って、外へ出ようとした。

「俺は店を開いてくる…。」

すまん…、本当にすまん。

そして私は本題へ入ろうとした。

「…セバス、貴様ら何故、黙っていた?」

「こちらへどうぞ。説明いたします。」

…そんな簡単に明かせない内容なのか？

ヘラが読書していた。

「帰ったか。」

「ええ！あー、スッキリしたわ！」

「…そうか。」

「さて…、説明しろ！メートルアがレベル8の上に、あんな魔法があるとは聞いてないぞ！何故、姉である私に言わなかったのだ！」

「…これを見ろ。」

ヘラは、メートルアのステータスが書いてある羊皮紙を私へ渡した。

その羊皮紙を奪い取るかのように見た。

そこには…。

「何だど？…本当にレベル8だな。アビリティが私と全く同じ？いや、魔法とスキルが違うな。…魔法はさっきの2つに、最後は詠唱こそ違うが、私の魔法と同じか。スキルが3つ？【白兔眷属】…【実母溺愛】これは私の【義母献愛】と同じか。もう1つは【双子同期】…？これは!？」

「お前に見せたくなかったのは、それが理由だ。」

……馬鹿な、このスキルは。

【双子同期】

・双子の一方が強化すれば、同時に強化される。

・ただし病の進行速度が数倍早くなる上、痛みも数倍となる。

「……………まさか。メーテリアが姉である私より苦しんでいたのは…私が強くなったからなのか…。」

「残念ながら、そうでございます。」

「私の…せいだったのか。」

私は罪悪感がこれまでにないほど、のしかかった。

メーテリアは笑顔で私へ話しかけた。

「違うわ、姉さん。私の病は元々姉さんよりひどかったの。」

「…私がランクアップすることにお前がより苦しんでいたのは、事実だろうが！」

「ええ、そうね。けど、それを言ったら姉さんは強くなるのをやめたでしょう？」

「当たり前だろう！」

当然だ！

当時、お前は私のただ一人の肉親だったのだぞ！

激昂する私を見て、メーテリアは冷静に言った。

「…姉さんは私と違って才能が豊富。姉さんは私から才能を奪ったと言っているけど、

それは違うわ。私が姉さんに才能を与えたのよ？母さんの胎内でうつつすらと記憶があるもの。」

「な!?!」

「だから才能を腐らせてほしくなかったの。義母さんとセバスにオハナシして黙ってもらったの。」

驚愕した私はヘラとセバスを睨みつけたが…。

そこには目を背けたヘラとため息ついたセバスがいた。

「……………（あの時は怖かった。）」

「……………はい、そうでございます。」

「…そ、そうか。」

……………想像したくないが、かなり脅されたようだな。

「私は、まあみんなが知っているようにちよつとドジっ子だけど。」

（（ちよつと？））

ちよつとどころじゃないだろうが。

かなりだ、かなり！

ヘラもセバスもそう思っているはずだ！

私達が心中からそう言っている間に、メーテリアは言った。

「そんな私が強くなったとしてもたかがしれている。だから姉さんには強くなってほしかった。」

「そのせいでお前は！」

「でも、私は強くなっていく姉さんが何よりも誇らしかった。」

「！」

「まあ、姉さんが強くなればなるほど私も強くなる、というのはズルいかもしれないけどね。」

「……。」

「でもね、姉さんがランクアップしたり強いモンスターや冒険者を倒したりしたのが、あの時病で苦しんでいた私にとっては、一番の楽しみだったのよ？」

「メーテリアっ……。」

…メーテリア。

私もだ、いかなる強敵と戦っても満たされたなかつたが、帰って笑顔で迎えてくれたお前を見ただけでそれで満たされたんだ。

私にとってはそれが一番の楽しみだったんだ。

今はベルだな。

それはメーテリアも同様だろう。

そしてメーテリアは胸を張って言った。

「今は大丈夫。ベルの血による【白兔眷属】に、ベルへの愛による【実母溺愛】によつて病は完全に克服できたわ。これで姉さんと真正正銘、並び立てるわね！」

「それはまだ無理ですな。メーテリアお嬢様は坊ちやまより戦闘経験が圧倒的に不足しております。」

「えー。」

「そうだな、いくらメーテリアが強力な魔法を持つていても経験豊富な冒険者に翻弄されるのがオチだ。」

「いや、それでも捕捉して殺るだろうな。」

間違いない。

だが、これ以上ない戦力だ。

私と同じレベル8であれば、足を引つ張らないだろう。

とりあえずは一安心だ……安心か？

「…そうだな。ここを守つてほしい。」

「むー、わかつたわ。でも時々でもいいからダンジョンへ行きたいわ。」

「……程々にしろ。」

「何があつたのだ……。」

「それはだな……。」

私は、ダンジョンでのメーテリアの活躍を全て言った。

聞いたヘラとセバスは……。

「ね？大したことないでしょ？」

「メーテリアお嬢様も『ヘラ・ファミリア』の一員ですな。安心いたしました。」

セバスは嬉しそうに言いやがった。

全然安心できん！

「ヘラ・ファミリア」で唯一、一般と同じ普通の子だったメーテリアが「ヘラ・ファミリア」最恐だと安心できるわけがなからう！

「嬉しいようで嬉しくないんだが……。」

ヘラはかなり複雑な表情をしていた。

それはそうだろう。

たよやかなメーテリアが笑顔でモンスターを虐殺する子だったとは思えなかっただろう。

……犠牲者を増やすわけにはいかない。

奴らへ警告しておこう。



## 第383回 静寂、説明。

その日の夕方、メーテリアがベルと散歩するために席を外した後に奴らへ注意した。「…ということだ。いいな？メーテリアを絶対に怒らせるな。木端微塵になりたくなければな。」

「物理無効…：ずるくありません!？」

だろうな、魔法が使えない冒険者にとっては天敵だ。

「私はそれより、一番目の魔法が怖いでございます（ぶるぶる）。」

「内部から破裂するなんて…アルフィアと違って防御も回避も全くできないじゃない！」

「心臓を破裂させたら、終わりでございますねえ。」

そうだ。正に即死攻撃だ。

私の魔法は単に音をぶつけるだけだ。

なので貴様らでも魔道具とかで防げるだろう。

しかし、メーテリアは体内の魔力や音を増幅させて破裂するのだ。

いかなる魔道具でも防げないし、効かない。

私の【静寂の園】ぐらいでなければな。

ルウというエルフが顔面蒼白していた。

「接近戦をしようにしても物理攻撃を無効させられ、超短文詠唱で内部から破裂される？ 対処するには超遠距離で魔法しかないのですが、レベル8なのであつという間に間合いを詰められますね…。どうしろと？」

「無理ね。」

「弓でも無理だな。」

「組技なら…あ、無理ですね。掴む前にやられますね。」

どうもしない。大人しくやられるだけだ。

だから、メーテリアを敵にするべきではないと言っているのだ。

「はいはい！ 質問です！」

褐色の貧乳娘…ティオナと言ったか。

「何だ。」

「リヴィラのあのごうつく連中を震え上がせるなんて…。どんなふうにもゴライアスを殺つたの？」

「…：股間、両足親指、喉、両目、左腕、肺、腎臓、小腸、胃、心臓、そして脳の順に破裂させた。ゴライアスを哀れに思つたのは初めてだったぞ…この私が、だ。」

「「ひいひいっ！」」

そう怯えるのも道理だ。

リヴィラのならず者共が震え上がるくらいなのだ。

「あの怒りの上に、その魔法ですか…。幸いなのは戦闘経験が乏しいことでしょうか？」

「そうだね、でも…敵にしたくない。ベルくんの実のお母さんだもの。」

「うん…、ベルに嫌われるのはもつと嫌…メーテリアさんに嫌われるのも嫌…仲良くするしかない。」

「「同感です…」」

よし、これでいい。

メーテリアは私と違い、見た目があだから舐められやすいからな。

ある程度の畏怖を持ったほうがいいのだ。

…：不本意だが、味方で犠牲者を増やすわけにはいかない。

ベルが悲しむからな。

特に、ベルにそのことは絶対に知られてはならん！

「いいな？ベルはそのことを知らない。もし…知ればベルはメーテリアに近づかないかもしれない。そうになったら、メーテリアは…」

「「そ、そうだったら？」」





「?ああ、単に敵を倒したただけでしょ?義母さんも姉さんもいつも言ってるじゃない、やられる前にやれと。」

「間違つてはいないだろう?…おい貴様ら、何だその目は。」

「何でもありません。」

当たり前のことだろうが。

「…今日は八宝菜定食とオニオンスープにする。」

「「わーい!」」

「えー?」

よし、いいチョイスだ。ザルド。



「へら…。」

「ヘスティア、仕方がないだろう。あの時のメーテリアは本当にか弱かったのだ。まさか、病が治つてここまで回復し、そこまで強くなるとは思わなかったのだ。」

「いや、それはいいんだよ。むしろ、喜ばしいよ。ただ、「やられる前にやれ」というのはちよつと…。」

「間違つていないだろう。そもそも、ヘスティア。お前が優しすぎるんだ。だから、アポロンのような変態に好きなようにされるのだ。」

「むー、それを言われるとなー。∴そういえばアポロンはどうしているんだい？」

「まだまだしぶとい。厄介な変態だな、全く∴。」

「そ、そうかい（すごいなー、アポロンは。ヘラの折檻に耐え、屈しないとは∴。）。」



## 第384回 白兔母、研修。

何だかみんなとの距離を感じるわ。

ダメね、自分から行かないと。

なので、ヘステイア様に聞いてみた。

「それはいいんだけど、体調は大丈夫なんだね？」

「はい！大丈夫です！エイナちゃんの魔法でも異常なしと出ていましたので！」

「私は心配だ…（メーテリアもそうだが、あいつらが逆鱗に触れないかが気がかりだ）。」

姉さんたら、心配性ね。

「もう！姉さんつたら！あ、メイさんと呼んでくれる？」

「お呼びでしようか？」

「あら、早いわね。ええ、実はね…。」

私はメイさんへ、あるお願いをした。

そして私はメイド服を着ている。



「メーテリアさんが一時的にメイド親衛隊へ入ることになりました。」

「皆さん！うちのベルが大変お世話になっていきます！」

「「よ、よろしくお願ひします…。」」

何で？みんな震えているの？

寒くないはずだけど？

メイさんはそんなみんなを無視するかのよう、淡々と言った。

「メーテリアさん曰く、皆さんと仲良くしたいためメイド親衛隊へ入って交流したいそうですね。」

「うちのベルがお世話になっているもの。色々聞きたいわ。」

「まずは、ヘスティアファミリア初期組…、リリさんと春姫さんとエイナさんですね。」

(（ビクウツ！）)

「あら、よろしくね！」

「は、はい…。」

ベルのサポーター…ううん参謀ね。

そして、狐人ちゃんは妖術師。

2人とも、思ったよりめつちや可愛いわね！

イメージとは違うわ。

うん！見た目は合格！

あとは話してみないとわからないわね。

『へ、ヘステイア様…私達は死ぬのでしょうか…？』

『大丈夫だよ。ベルくんの自伝を全巻を何回も読ませてボクと話したから。…多分。』

『多分!?!』

『少なくともメーテリアくんは君たちには感謝していたよ。嘘じゃないよ?』

『それでも…あの怒りを思い出すだけで手の震えが止まらないのですが…。』

あら?ヘステイア様と何か話しているわね。

まあ、いいわ。

リリちゃんと書類整理しながら話しているわ。

…うーん、何か怯えている感じね。

私、何かしたからしら?

いけないいけない。ベルのことでお礼を言っておかないと。

「うちの息子が無鉄砲でごめんなさいね、リリちゃん。」

「い、いいえ。リリはベル様によって助けられていますからそれぐらいは…。」

「そうね。けど、リリちゃんは気負いすぎね。ベルに対して償いたくてもベルはそれを受け入れないでしょう?」

「!!…はい、そうです。それがリリにとつてもどかしいです…。」

やはりね。

わたしはリリちゃんを励ました。

「でも、リリちゃんは十分にベルへ償っているわ。リリちゃんがいなければ中層または18階層の神災で死んでいたかもしれないし、変態神に好きにされていたかもしれないし、遠征でベルは仲間達を失っていたかもしれないわ。」

「…メーテリア様…。」

よし、距離が少しは縮まったかしら?

やはり気になるわね、それ。

「それね。様づけをつけることによって、リリちゃんは自分を傷つけて慰めているでしょう?」

「!」

「ダメよ。そんなことをしたら、ベルは悲しむわ。かといって、長年染み付いた習慣は取れないでしょうね…。」

「…はい（見透かされている…）」

うーん…。

ちよつと卑怯だけど、突いてみようかしら？

「でも、ベルとの間に子供が産まれたら子供の前で様づけするの？」

「こ、こ、こ、こ、こ子供!？」

「あら？嫌なの？」

「いえいえいえいえいえ、むしろ望むところです！」

い、意外と乗り気ね…。

まあ、いいわ。

そうでなきゃ困るわ。

「じゃあ、様をとりましょうね？まず私からね、メーテリアと呼びにくいならお義母さんでもいいのよ？」

「……お、お義母さん。」

「はい、よくできました。」

「(やはり、この方はベル様…いえベルさんの母ですね。…先日のと懸隔がありすぎませんか!?)」

よーし、リリちゃんの距離は縮まったわ。

…何で怖がられたのかしら？

次は春姫ちゃんね。

先程まで一緒に掃除していたけど、かなり怖がられたわ…。  
どうしてなの？

そして今、休憩している。

この隙に距離を縮めないと…。

「あの…お義母様。お茶です…（ぶるぶる）。」

「えーと？どうしてそんなに震えているの？」

「そ、それは…。」

あ！ひよつとしたら…。

「あー…もしかして姉さんとザルドさんを叱った時を見た？」

「!?は、はい…。」

「あれはどう考えても姉さんとザルドさんが悪いでしょう。」

ベルを独りにさせたという罪は重いわ。

オラリオの何億人と比較にならないに決まっていますでしょう！

「…あの、お義母様は私を責めないのでしょうか？」

「え？どうして？」

「だ、だって…私のせいでベル様は「イシユタル・ファミア」に…」

「何を言っているの？ベルが望んだことじゃない。春姫ちゃんは一切悪くないでしょう？悪いのは神イシユタルでしょう？神フレイヤも神イシユタルを突き落とさなくても、お義母さんに引き渡したらいいのにねー？」

「（イシユタル様はある意味、運がよかつたかもしれません…）それはそうですが、私は娼婦です…。」

うーん…これはリリちゃんより重傷ね。

…ここは心を鬼にして言わないとダメね。

「ダメよ？そう思いこんでいたら。それは春姫ちゃんを助けたベルを侮辱することになるのよ？」

「！」

「それに子供が産まれたら、その子に対しても侮辱することにもなるわよ。私はそれを絶対に認めないわ。」

「お、お、お子様…!?!」

「え？は、春姫ちゃん？」

パニックになっている？

いえ…違うわね。

先程までしておれていた尻尾が振り切れないほどに振っているんだもの…。

「はわわわ…お子様…。七人は欲しいでございます…。」

「あ…、なるほどね。ヘスティア様から聞いていた通り、妄想癖が凄いわね…。まあ、いいわ。春姫ちゃん春姫ちゃん、戻ってきて?」

「はうつ!? す、すみません!」

「自信を持つて? 春姫ちゃんが娼婦であろうが、ベルが助けたんですもの。汚れてないわ。」

「…お義母様…。」

リリちゃんと違い、意外と肉食かもしれないわねこの子。

それに様づけ…。

ああ、春姫ちゃんは極東の貴族出身とセバスが言っていたわね。

「リリちゃんと違って育ちが育ちだから仕方がないわね。それに…七人も産みたいのね?」

「はうつ! き、聞かれましたか…。」

「七人も生むなら、娼婦ということは忘れなさい。いいわね?」

「…はい。」

七人は多いわね。

まあ、孫が多いに越したことはないわ。

ベルは大丈夫かしら？

あ、大丈夫ね。あの性欲お化けの子なんですもの。

「七人かあ……まあ、ベルなら大丈夫でしょう（あの人の子なんだし）。ええと、春姫ちゃんには絶縁されたよね？」

「……ええ、父様に追い出されました。」

「……そう。会ったら私がメツとしてあげるわ。」

「えっ」

「任せてちょうだい！義母さんと姉さんと一緒に怒ってあげるわ！」

「（父様……、強く生きてください。）」

「七人の孫の名前、考えなくちゃね！協力してね！」

「はい！（嗚呼……やはりこの方はベル様のお母様です。……この間のお義母様との懸間  
が激しすぎます……。）」

よーし！極東へ行ってガツンと叱ってやらないとね！

私の義娘なんだし！



## 第385回 白兔母、期待。

最後にエイナちゃんと事務作業をしたわ。

うん、三人の中でエイナちゃんが一番距離が近いわね。

…みんながあんなに怖がれているのは、姉さんとザルドさんとのオハナシを見たからなのね。

見せなくてもいいのにねー。

「はい、そこをお願いします。メーテリアさん。」

「もう、エイナちゃんったら。お義母さんでいいのに。」

「ま、まだ先の話じやないですか！」

「え？ベルから乗り換えるつもり？」

「ち、違います！その…心の準備が。」

あらあら、春姫ちゃんと違い奥手なのね。

でももう決定事項なのよ？

「もうアイナさんと話し済みだけど？」

（アイナ母様あああ！）

「今は孫の名前について話しているわよ？」

「孫!？」

「アイナさんの実家は由緒あるエルフでしょ？それなりの名前を考えなきゃいけないのよ。まあ、その辺りは王族妖精のリヴェリア様と話し合っているわ。」

「リヴェリア様までも…（ベルくんとの子供…うふふふ）。」

「まあ、そういうことでお義母さんと呼ぶようにね？アイナさん許可済みよ。」

「は、はい。お義母さん…（アイナ母様…後で覚えてください!）」

ふふふ、早く孫の顔が見たいわ。

……メイド親衛隊をチラツツと見たけど、みんな美人ね。

ますます期待できるわね！



『どうだい?』

『懸隔が激しすぎます……。』

『ベル様そのものですが、リリ様と同意見です…。』

『アイナ母様とかなり仲良くなったのは予想外でした…。』

『メーテリアくんと話しているとね…、こう…ベルくんと話しているような感じなんだ。うまく言えないけどね。』

『『わかります!』』

今日でリリちゃんと春姫ちゃんの距離がかなり縮まったわ。

明日からも頑張りますよ。

「おい、メーテリア。どうだった?」

「まだリリちゃんと春姫ちゃんだけ、いい義娘たちじゃない。かなりの美人だし、先が楽しみね!」

「先…?」

「え? 孫に決まっているじゃない!」

「孫だ?!? ま、まだ早い!」

何を言っているの? 姉さんは。

私は何歳でベルを産んだと思っているの?

「姉さん、忘れてない? 私、17歳でベルを産んだのよ?」

「それとこれとは別だ!」

「…待て、メーテリア。お前、知らないのか?」

「え? 何を?」

「ベルはまだ未精通だ。」

「ええええええつ！あの人の血を受け継いでいるのに!？」

「……そうだ。」

「そんな……。」

あの人はかなり精通が早かったので、期待していたというのに……。

「そんな……じゃあ、私はいつ孫の顔が見れるの!？」

「まだずつと先だ！ベルはまだ14歳だぞ！」

「……なら、今のうちに準備しておかなくっちゃ。」

「何をするんだ……。」

え？姉さんは知らないの？

だって、お祖父ちゃんがくれた本に書いてあったもの。

「え？私が筆下ろしをするためだけど？」

「!？却下だ！お前はベルの實の母なんだぞ！」

「筆下ろしは母がすべきだと本に書いてあったけど？」

「……メーテリア、それは間違っているぞ。」

「そんな!？」

「メーテリアお嬢様。残念ですが、間違った情報でございます。」

お祖父ちゃん！

騙したわね!

『へら様、その知識を植え付けたのはあのクソエロ爺でございます。』

『……よくも、私のメーテリアに不必要な知識を教えこんでくれたな……。後で折檻だ。』  
仕方がないわ……。

なら、アレを考えましょう。

「……むー、楽しみにしてたのに。なら、今のうちにあれを作っておかないと。」

「……一応聞くが、何を作るんだ?」

「孫の名前一覧だけど?」

「ほう、それは面白い。義曾祖母になるから、私も入れる。」

「いいわよ。」

そうね、義母さんも入ったほうがいいわね。

姉さんは打ちしがれたかのようにだった。

「!?わ、私は……義祖母になるのか……。メーテリア!お前はその年でお祖母ちゃんと言わ  
れてもいいのか!?!」

「いいんじゃない?だって、義母さんも受け入れているじゃない。」

「アルフィア、それぐらいはどうってこともないだろう。意外と悪くないぞ?」

「し、しかしだな!」

あー…なるほど。

なら、姉さんが乗り気になるようにしましょう。

姉さんが私をよく知っていると同じように、私も姉さんのことをわかっているのよ？

「姉さん、考えてみて？」

「…何をだ。」

「孫からお祖母ちゃんと言われて、知らない人が私を見てお祖母ちゃんと思う？」

「……………思わないな。」

「そして、「お若いですね」と言われるのよ？」

「!?メーテリア、お前は天才か！」

姉さんは目をカッと開いていたわ…。

そこまで気にしなくてもいいのにねー。

義母さんが首をかしげていた。

「…伯母さんも同じじゃないか？」

「違う、全然違う。そうだな、そう考えたら確かに楽しみになってきた。」

「でしよでしよ！」

「よし、私も混ぜろ。」

「……………現金な奴だ。」

(メーテリアお嬢様が元気になられてから、かなり「ヘラ・ファミリア」の雰囲気が変わりましたな。団長の「女帝」が戻られるとどうなるのでしょうか?)

楽しくなってきたわね!

明日は…元「アストレア・ファミリア」のアリーゼちゃんと輝夜ちゃんとルウちゃんね。

病死寸前の姉さんを倒した3人とセバスから聞いたわ。

姉さんを止めてくれたお礼を言っとかないと。

会ってすぐ土下座したのは驚いたわ…。

まあ姉さんを倒したというのは、妹としてちよつと思うところあるのよね。

その二年後にはあつさり死ぬのはどうだと思うのよ。

少しオハナシしようとする前に即座にされるなんて…。

特にルウちゃんにはお礼を言っておいたわ。

ベルをいろいろと助けてくれてありがとう、とね。

…その後、2人に対してドヤ顔したのはちよつと笑えただけね。

この調子でどんどん距離を縮めていきましょー!

## 第386回 義祖母、面倒。

ふふふ、ひ孫か。

……あれだけいるなら、二桁は確実だな。

十数年後の「ヘステイア・ファミリア」は一気に大派閥になるな。

うむ、将来が楽しみだ。

……ベルが精通したらの話だな。

まさかずっと精通しないままではないな？

と思つたら、メーテリアが思い出したかのように言った。

「ああ、そうそう義母さん。」

「何だ。」

「春姫ちゃんのことだね、春姫ちゃんを追い出したところへメつてしにいきたいの。」

「極東ですな。確か、『アマテラス・ファミリア』でしたな。」

ああ、あそこか……

あの神は辺境の僻地に引きこもって何をしているのだ？

「ふん、あの世間知らずが。利用されていることも知らん女神め。」



「後雇の憂いを断つためにも行つたほうがいいか…。」

「面倒だな。極東の神全てを送還するか。」

「お待ち下さいませ。神タケミカツチと懇意な神々もおられます。神タケミカツチを通してはいかがでしょうか?」

ああ、そういえばオラリオにいたな。

…何故、極東ではなくオラリオなのだ?

特にタケミカツチはアマテラスの側近中の側近だったはずだ。

何かあるな?

情報が足らん…。

タケミカツチをここへ呼ぶか。

いや、待て。

【アマテラス・ファミアア】はともかく『朝廷』について知っているのか?あの神は。

「ふむ…。そうだな、だが、あの神は今の『朝廷』を知っているのか?」

「知っている方がいるではありませんか。」

「春姫ちゃんは世間知らずよ?」

「いや、いる。もう一人がな。」

ああ、お前を追い詰めた奴らのうちにいたな。



「それは貴様がよくわかっているだろう？あそこに慈悲はいるか？」

「…いいですね。行かれるタイミングはどうされますか？」

「近々にだ。…ヘラは極東にいる神々を全員送還させると言っているぞ？」

「!?…それはやめたほうがいいかと。あそこでも多少マシな神々はおられます。それはタケミカツチ様がよくご存知かと。」

貴様もか？

選別が面倒だな…、タケミカツチへ押し付けよう。

【アマテラス・ファミリア】如きに我が「ヘラ・ファミリア」は戦力過剰かもしれんがな。

そして、セバスはこいつらを連れてきた。

「ヘラ様。命嬢と「タケミカツチ・ファミリア」の神タケミカツチ、小僧、桜火殿、千草嬢をお連れしました。」

「!?（早くないか…）」

「ヘラ、何の用だ？春姫のことで話があると聞いたのだが。」

「では、私が説明いたしましょう。」

そして、セバスは先程までのことを説明した。

タケミカツチは厳しい顔つきで私へ言った。

「……………確かにあの極東でもマシな神はいる。極東全柱の送還はやりすぎだぞ、ヘラ。」

「じゃあ、貴様が選べ。ヘステイアとは違い、私はそこまで優しくしない。」  
「…わかった。」

本来なら全柱送還させたい。

そもそも、神が降りすぎなのだ。

そうすると、命という娘が言った。

「わ、私も行きます!」

「…お前は『ヘステイア・ファミリア』の一員だ。お前が行くとなると、ベルも行きかねん。」

「……ですが!」

そうだな、お前は連れて行きたくない。

ベルはこういったことには不向きだ。

義祖母として、汚濁を目にさせたくない。

輝夜という娘が一旦考え込み、意見した。

「お待ち下さい。……命。お前、いやお前たちは『朝廷』の恐ろしさや卑劣さを知らん。甘さがあるお前たちを連れて行くのは足かせになる。だが…、あちらにお前達の知り合  
いがあるな?」

「あ、はい。ツクヨミ様たちと仲間がおられます。」

「……二手に分かれたほうがよろしいかと。」

「何故だ？」

「どういう意味なのだ？」

輝夜は気に入らないかのように言った。

「奴らは卑劣で反吐が出る畜生共です。我々が極東へ攻め込むという知らせは必ず『朝廷』へ入るでしょう。そうなると、神ツクヨミたちファミリアを神質や人質にしかねません、いえ絶対にします。」

「……そこまで腐っているのか？」

「はい、間違いなく。先に『朝廷』外にいる善神のファミリアを保護し、不意打ちで『朝廷』の本部へ一気に攻め込み、神アマテラスを確保した方がよろしいかと。かの神は善神のほずです。」

「ただの世間知らずの女神だろうが。」

「二応、天界では同郷の大神なのだが……。」

知るか。そんな奴らをまとめきれんで何が大神なのだ。

やはり全柱を送還するか。

輝夜は一旦とりまとめ、流れを言った。

「流れとして『タケミカツチ・ファミリア』は神ツクヨミたちのファミリアを保護し、我々

は『朝廷』へ攻め込み、イチジヨウ・ニジヨウ・サンジヨウ・シジヨウ・ゴジヨウ・ロクジヨウ・シチジヨウ・ハチジヨウを皆殺しにします。」

ほう、思い切ったことをやるな。

命がそれに対して反対した。

「ま、待つてください！春姫殿の父君は…。」

「そいつは春姫と絶縁しただろうが。」

「…私はその絶縁が理解できないのです。」

「どういう意味だ？」

絶縁に何かあるのか？

## 第387回 毒舌女、暴露。

あのアルフィアが私に声をかけて、何事かと思つたら…。

極東へ攻め込む？ 思わず絶句してしまいました。

聞くと、若様の母上が春姫を追い出したサンジヨウノ家に激昂しているとのこと。

…それだけで攻め込む？

恐ろしいですね、さすが最恐と言われるだけがありますね。

まさか、神ヘラ：いや「ヘラ・ファミリア」が極東へ攻め込むとは思いませんでしたね。

いずれは私自ら行こうと思つたのだが、これ以上ない援軍ですね。

…奴らにとっては天災以上の何者ではありませんねえ。

ざまあ。

だが、丁度いい。

皆様には申し訳ありませんが、この機会を利用させてもらいましょう。

その前に…春姫について語らねばならん。

あの娘と特に親しかったこいつら、「タケミカツチ・ファミリア」にはな。

「……春姫には言うな。いいな？」

「「は、はい！」」

「サンジヨウノ家は祭具を司ります。それだけではなく…呪具もです。」

「まさか…。」

「そうだ。」

あの殺生石なのだ。

「数ヶ月前に起きた『イシユタル・ファミリア』騒動のきっかけとなった殺生石は…恐らくサンジヨウノ家で作ったものでしょう。」

「馬鹿な！じゃあ、あの殺生石は…。」

「…恐らくサンジヨウノの一族あたりから造られた可能性が高いです。」

「…胸糞悪いな。」

奴らはそれぐらい日常茶飯事でしょう。

だが、私は春姫の現状について理解できない。

あのサンジヨウノ家が。

何度も春姫やこいつらに確認したが、どうしても理解できなかった。

「だからこそ、腑に落ちないのです…。確認しますが、サンジヨウノ家は15年前から代替わりしていませんね？タケミカツ子様。」



「あ、ああ。少なくともそうだ。」

「やはり、そうですねか……。」

「おい、もったいぶるな。」

「前もつて言いますが、私の憶測です。……サンジヨウノ家当主は春姫が不始末を犯したため、絶縁し追放したとなっておりますが、恐らくわざと濡れ衣を着させてあの極東から引き離したのでしよう。」

「!!」

ああ、それしか考えられない。

あのサンジヨウノがそんな遠回しなことをするか？

始末しようと思えば、睡眠薬を飲ませてその間に殺生石なり何なりとすればいいだけの話だ。

命が疑問に思ったかのように言った。

「……何故、そんな面倒なことをするのですか？」

……どうせ、いつかは言わなければならぬだけだ。

その時が来たようだな。

「命……お前たち下々の者が知らないことだが、ジヨウノ家にはある責務がある。」

「ある責務？」

「……」

タケミカヅチ様はさすがに知っているようですね。

【アマテラス・ファミア】の主神アマテラスの元側近でしたからね。

「タケミカヅチ様、貴方は知っているはずですよ。その責務だけでなく、極東のどこかに古代のモンスターがいることを。」

「……ああ、知っている。」

「……何だと？まだいたのか？」

「古代のモンスター……ヤマタノオロチ。それを鎮めるのがジヨウノ家の役目です。」

ああ、忌々しい役目だ。

今は既に形骸化しているというのにな。

アルフィアは首をかしげていた。

「それと春姫とどう関係があるのだ？」

「……まさか、春姫は選ばれたのか？」

「恐らく、その可能性が高いかと。『朝廷』はジヨウノ家の本家・分家から選んでヤマタノオロチを鎮めるために生贄の……生娘を毎年8体捧げるのです。」

「「なっ!?!」」

そうだ、奴らは……ヤマタノオロチに屈したのも同然なのだ。

そしてその選ぶ方法も胸糞悪い。

「選出方法は神アマテラスによるくじ引きですが、そもそもそのくじが不正だらけです。」

「……。」

「恐らく、他のジョウノ家によって春姫が選ばれるよう細工したのでしょう。」

「そんな…春姫ちゃんが。」

「なら、何故サンジョウノ家は春姫を差し出さなかったのだ？ いや、それ以前に何故極東から引き離れたのだ？」

「……恐らく、春姫の命を助けるためかと。」

ああ、そう考えれば辻褄が合う。

春姫に罪を着させれば生贄どころではないからな。

…問題は何故あのサンジョウノがそこまでするのが疑問だ。

「何故そこまでするのだ？ サンジョウノ家で守ればよかろうに。」

「過去にそういうことをするジョウノ家はいました。その家は…謀反といういわれのな  
い罪で全員殺されました。」

「！！！！」

「当初は二十八家はいたそうです。今は八家のみになっています。」

主神アマテラスは善神だが、取り巻きどもは反吐が出るぐらいの邪神共だ。

そいつらが…主神アマテラスの言葉を歪曲して眷属に命じて始末したのだ。

神ヘラが虫けらを見るような目で神タケミカヅチを睨んでいた。

「おい、タケミカヅチ。お前は知っていたのか？古代のモンスターや生贄のことを。」

「…知っていた。」

「ほう、それをわかってて、か？アマテラスもツクヨミも貴様も同罪だな。」

「……………」

…まずいですね。

「ここは神タケミカヅチをフォローした方がよさそうですね。」

「ヘラ様、お待ちを。発言をお願いします。」

「許可する。」

「ありがとうございます。聞いた話ですが、神タケミカヅチと神ツクヨミは、生贄を出すというやり方に反発して主神アマテラスの側近から外され、『朝廷』から追放されたとのことです。」

「何？…嘘は言っていないな。タケミカヅチ、本当か？」

神ヘラは神タケミカヅチへ確認した。

神タケミカヅチは意を決したかのように言った。

「……そうだ。ツクヨミと俺は生贄を出すやり方は反対だった。当時のオラリオにいた最強の【ゼウス・ファミリア】と最恐の【ヘラ・ファミリア】にミッション依頼した方がいいと言ったのだ。」

「ほう、賢明だな。だが、来ていないぞ?」

「…アマテラスがそれを嫌がった。理由は単にゼウスとヘラが嫌いなだけだ。いやヘラ、お前をアマテラスが怖がっていた。」

「ふん、あの小娘め。…側近と言えば、お前たちの他にいたな? スサノオはどうした? あの脳筋が性格上、それを認めないはずだ。」

「そうだ、あいつも反対していたはずだ。同じく側近を外され、追放されたはずだが…どこにいるのかは知らん。」

「……………とうとう、この時が来たか。」

## 第388回 毒舌女、自供。

下唇を噛んでいる私をアルフィアは見て、聞いてきた。

「おい、知っているのか？お前は。」

「…はい。よく知っています。」

「何だと？何故輝夜、お前が知っているのだ？」

「タケミカヅチ様、お忘れですか？ゴジョウノ家は『朝廷』の暗部を司っていることを。」

本当に忌々しい家だ。

神タケミカヅチは瞠目して私を見た。

「…まさか。お前たち、ゴジョウノは…。」

「そのままかです。『スサノオ・ファミリア』は神スサノオの目の前で、主神アマテラスの命令を偽って眷属を皆殺しにし、全滅しました…私達ゴジョウノによって。」

「…何ということを出かしたのだ！あの神共は！」

「なお、主神アマテラスはそのことを存じ上げません。流行り病で死んだと伝えられています。」

「馬鹿か？あの小娘は。…よくあのスサノオが大人しくしていられたな？」

いいえ、神スサノオがその場に入った時は全員死んでいました。

そして……当時感じた神威で、一番恐ろしく感じた。

私がかぶりを振って言った。

「いいえ、怒り狂った神スサノオは私達ゴジウノでも押さえるのに一苦勞でした。〔スサノオ・ファミリア〕の眷属の死体を見て嘲笑っていた邪神共も、神スサノオの神威に触れ、送還寸前までポコポコにされていました。」

「だろ？、あのスサノオを押さえるのに俺でも苦勞するのだぞ？」

「はい、ですが、流石に私達ゴジウノでも神スサノオを殺すわけにはいきませんでした。何人が犠牲者が出ました（そのまま死ねばよかったものを）。数刻でようやく押さえられました。それでもあの凄まじい怒りの神威は忘れられません。」

「……当然だ。あのスサノオだぞ？……そいつはどうしたのだ？」

「確か、神スサノオは『朝廷』本殿のどこかに幽閉されているはずですよ。」

極東を出たのも色々なこともあったが、それも大きな一つだった。

神ヘラが呆れたかのように神タケミカツチへ吐き捨てた。

「……おい、タケミカツチ。お前のいる極東の神々はクソばかりか？」

「……お前のところもだろうが。」

……私から見ますと、どっちもどっちですよけどねえ。

アルフィアは神々のソレを無視して、私へ話しかけた。

「輝夜。古代のモンスター、ヤマタノオロチについて詳しく聞かせろ。」

「直接目にしてないからわかりませんが、盗み見た古文書の言い伝えでは…名の通り蛇のモンスターで8匹に分かれているとのことですよ。」

「アンフィス・バエナのようなモンスターか?」

「似たようなものと思います。純粹な蛇のモンスターで、頭の角から尾の先まで漆黒に染まっており、合体・分離が可能とのことですよ。しかも1尾をかるうじて殺つたとしてもすぐに再生します。」

「なるほど…。面倒だな。」

古文書の言い伝えが正しければ、ですが。

ダンジョン下層のアンフィス・バエナを初めて見た時は、ヤマタノオロチかと思つたぐらいですよ。

あれが…8匹で1体で分離可能となるとレベル6…いや7を優に超えているかもしれないですね。

「…極東にいる最高レベルは?」

「私が出する前なら…3、4が数人かと。当然、今のオラリオとは比べ物になりません。」



「…何故、オラリオに助けを求めないのかわかるか？」

「くだらないプライドの問題です。」

「…：助けなくてもいいのではないか？」

アルフィアが呆れたかのように言った。

私もそう思います。

善神ツクヨミたちを保護した後、引き返せばいいかと思えます。

置き土産は当然しますがね。

神ヘラが気づいたかのように言った。

「なるほど…：ようやくわかった。おいタケミカツチ、あの小娘の側近だったお前がオラリオに来たのはヤマタノオロチを討つためにそいつらを鍛え上げるためだな？」

なるほど…：武神らしいですね。

確かにランクアップを早くするには、オラリオ以外に適したところはありませんからね。

だから私も、ここへ来たのだ。

『朝廷』とヤマタノオロチを討つために。

「…：そうだ。それだけではないがな。」

「っ！…：まさか、平民までもですか!？」

馬鹿な！それは…主神アマテラスの主意を無視しているのではないか！

あの糞邪神共！

神タケミカヅチはため息をつきながら言った。

「…ああ。5年ほど前からそういう予感があった。生贄をジヨウノ家で済ますところを拡大して、平民までも標的となった。特に孤児をな。それを『朝廷』でまだ繋がりがあつた善神から聞いた。俺は…こいつらを生贄にしたくなかつた。」

「タケミカヅチ様…。」

「ツクヨミたちと話し合い、素質のあるお前たちを連れてオラリオへ来たのだ。他の者は神社にこもつて出させないようにしている。出れば、ジヨウノ家によつて囚われるからな。」

あの下衆以下の奴らめ！

それでは…我々ジヨウノ家が今までやってきたことが水の泡ではないか！

何のために…何も知らぬ彼女たちは誇りを持って、ヤマタノオロチへ身を捧げたのだ

…！

神ヘラは憤怒の表情で言った。

そうなるのも仕方ありません…。

「決まりだな。アマテラスも送還だ。私の手でギリギリまで責めぬいて送還してやる

！」

「ま、待ってくれ！恐らく、アマテラスは知らないはずだ！」

「無知は罪という言葉を知らんのか？それでも大神か？よく主神をやっつけていられるものだ。馬鹿アレスの方が何倍もマシだ。」

「……………」

本気ですね…。

さて、どうしたらこの状況を収めたらいいのですかねえ。

さっきまでずっと黙っていたセバス殿が声をかけてくれた。

「皆様。一旦、ここで休憩になさいますか？頭を冷やす時間が必要かと。」

「……………そうだな。」

助かりました…。

レベル5となった私ならともかく、「タケミカヅチ・ファミリア」の皆様にはこの神への怒りの神威にはキツイでしょうからね。

## 第389回 絶†影、質問

まさか、春姫殿が追放された背景にそのようなことがあったとは…。

タケミカツチ様が「アマテラス・ファミリア」主神アマテラスの側近であることも知りませんでした。

そして、私達をオラリオへ連れてきた目的が、ヤマタノオロチを討つためとは知りませんでした。

…なら、期待に応えなければいけません！

タケミカツチ様は孤児であった私達を拾い育てた目的が、そのためであったとしても。

家族同然で育てていただいた恩は絶対に忘れません。

ただ、どうしても気になるのです。

「あの…輝夜殿。」

「何でしょうか？」

「先程の話ですが、何故サンジヨウノ当主は春姫殿をそのような形で追い出したのでしょうか？」

「…わからん。ただ、今日までお前たちの話を聞いて疑問があった。」  
「疑問…ですか？」

そういえば、輝夜殿は私達の馴れ初めを聞いて啞然としていましたね。  
それと関係があるのでしょうか？

「そうだ。春姫は世間知らずで大事に育てられたそうだな？」

「ああ、そうだ。」

「は、はい！」

「…それはジヨウノ家にとって、絶対にあり得ないのだ。あつてはならないことだ。」

「「え？」」

あり得…ない…？

ど、どういふことでしょうか？

輝夜殿は苦虫を噛み潰しように話してくれた。

「私の家…ゴジヨウノは物心ついた時…いや、つく前から暗殺まがいのを無理やりやらされた。」

「「！！」」

輝夜殿が…暗殺まがい？

「他のジヨウノ家も同じだ。サンジヨウノもまた例外ではない。」

「……。」

そんな…あのサンジヨウノ家が。

とてもそんな素振りには見えなかったのに。

輝夜殿は更に語ってくれた。

「聞いた話だが…サンジヨウノ家は、物心ついた時から呪具や魔道具などの危険物の扱い方を無理やり体で覚えさせるそう。1つの部屋に閉じ込めて、数多くの魔道具・呪具などを使いこなさせるのが当たり前、と聞いている。…だが、春姫からでもお前達からの話でもそれがない。」

「……。」

そんなことを春姫殿はされていない！

あの家に魔道具や呪具などはありませんでした！

…いや、あの家がサンジヨウノ家ではなくあの家そのものが春姫殿のための家だとしたら…？

そうだと思います、うなずけます。

輝夜殿は首を傾げながら、腕を組みました。

「サンジヨウノ当主は、かなり春姫を大事に育てて甘やかしていたということがわかる。だが、それはジヨウノ家にとっても…『朝廷』から見ても、怠慢なのだ。」

怠…慢？

あれが怠慢というのですか！

じ、じゃあ何故！あの方は春姫殿を大切にした上でどうして！

「……な、何故！春姫ちゃんに罪を負わせて追放したのですか！」

「わからん。」

「わからん、とはどういうことだ…？」

わからん？

ジョウノ家の考えていることが…いえ、サンジヨウノ家当主の考えていることがますます分からなくなってきました…。

輝夜殿は自嘲するかのように話してくれた。

「サンジヨウノは…ジョウノ家の中で狡猾で冷酷無比としても有名なのだ。」

「！！！！」

「我が子であろうともな。…だからこそ、春姫の扱いがわからんのだ。」

…あの方は一体、何を考えていたのでしょうか？

「ゴジヨウノは残虐無比と言われているがな、ふふふっ。」

「！！……。」

輝夜殿…。ゴジヨウノ家が忌まわしいと言っていたのはそういう意味でしたか。

いや…他にも何かありそうな気がします。

かぶりを振りながら輝夜殿は言った。

「だからこそ、理解できないのだ！何故そこまで大事に育てて、『朝廷』の命令から逃れさせるためにわざと罪を負わせて追放したのかを！」

「何だ。お前でもわからんのか？」

……いつの間にそこにいたのですか、アルフィア殿…。

「…貴女にはその理由がわかるのでしょうか？」

「ああ、わかるとも。…その当主にはいたのだろう、愛していた人が。」

「…どういう意味でしょうか？」

愛していた人？

それとこれがどう結びつくのでしょうか？

「…私はベルを見て、メーテリアと見間違えたのだ。愛する妹と生き写しのあの子をな。」

「！！！！」

「おそらく…そいつがかつて愛していた人の生き写しが春姫だったのだろう。だからサングジョウウノの運命とやらを押し付けなかったかもしれん。」

「そういえば…私達が春姫と関わるのをよしとしていませんでした。」



あの時の当主の顔は春姫ではなく、私達に威嚇しているようでした…。

「近寄るな!」という感じで…。

「相当箱入り娘と育てられたのだろうな。そこへ貴様らのような虫が「虫!」紛れ込んできたらいい顔しないだろう。私ならそうする、うむ(あの狒々爺はでっかい害虫だな)。」

「は?つまり…ただの親馬鹿ということでございますか?」

「そうなるな。」

「[[……………]]」

いつもしかめっ面しているあの当主が…親馬鹿ですか?

輝夜殿は腹を抱えて、笑いをこらえていました。

「くくっ…あのサンジョウウノが親馬鹿でございますか。くくくっ…。」

「おい、お前の標的からそいつは外せ。メーテリアが直々にオハナシしたいそうだ。」

「なっ…!わかりました、喜んで外しましょう。ええ、本当に。」

「うわあ…。今からその方が哀れに思えてきました…。」

「[[??]]」

あの方…ベル殿の母上のメーテリアさんの怒りに触れましたか…。

…強く生きて下さい…。

めちやくちやです…。

【アマテラス・ファミリア】に、ヤマタノオロチに、生贄、ジヨウノ家、そしてサンジヨウノ家。

…：貴族に産まれず、タケミカヅチ様に拾われたことが私達にとって幸運でした。  
ええ、本当に！

## 第390回 執事長、提案

なるほど。極東の、「アマテラス・ファミリア」はそのような事情でしたか。

大神アマテラスは善神のようですが、ヘラ様から見ると世間知らずのようですね。

…ヘステイア様とはどのような関係にあるのでしょうか？

確認してみましようか。

「ヘラ様。神アマテラスはヘステイア様とつながりがあるのでしようか？」

「ある。むしろ、アマテラスはヘステイアによく懐いていた。」

「ああ…。アマテラスはヘステイアの神殿へよく行つてたな。俺もよくお供していたから、ヘステイアと面識があるんだ。」

なるほど、天界では同郷でもないのに親しいのは何故かと思いましたがそのような事情がありましたか。

ふむふむ…。

「それではヘステイア様も同席なさった方がよろしいではないでしょうか？」

「…正直言うと、これはヘステイアに不向きだ。ヘステイアはこれを聞くと絶対に行くだろう。どんなに腐つていてもヘステイアは絶対に手を差し伸べる。…あれはそうい

う大女神なのだ。私としては行かせたくはないのだが。」

「…ああ、そうだな。」

「それでは、こうなさつてはどうでしょうか？ 神質として神アマテラスをここへ拉致するのです。」

「は？。」

ええ、あちらに引きこもつていては周りの糞神どもが邪魔してくるでしょう。

なら、こちらへ引つ張ればいいだけのことです。

少々手荒な手段となりますが、根本的に洗うには根こそぎする必要があります。

つまり…極東の洗濯ですな。

「まず極東に忍び込み、神アマテラスを拉致し神スサノオを救出します。神ツクヨミも含めて善神のファミリーアごと保護します。その後は一気に掃除します、ヤマタノオロチも含めて。綺麗になった極東は神ツクヨミを中心とした善神を極東の主神にします。」

「お、おい…。」

「タケミカヅチ、黙れ。…続ける。」

「神アマテラスは神質として、『ヘステイア・ファミリー』に謹慎させて、女神とは何たるかをしっかりと学ばせます。」

ヘステイア様が大神アマテラスと仲がよろしいのであれば、色々と学べるでしょう。

ヘラ様は私の案について驚いていましたが、納得しました。

「ふむ、なるほど。アマテラスがここにいさせるといふのは癪だが…、ヘステイアは絶対にアマテラスを庇うだろう。どっちみち同じことか。」

「……………ツクヨミが大変と思うが、それが最善の手だな。」

そうですね。まあ、それについての案はメイと話し合っただけで練っておきましょうか。

ヘラ様は難しい顔をして私と向き合いました。

「…古代のモンスター、いや漆黒のモンスタアのヤマタノオロチはどうするのだ？猪とアルフィアだけでは流石にキツいぞ？」

「もう一人をお忘れでしょうか？」

「まさか…メーテリアも出させるのか？」

そうですね。

経験などはアルフィアお嬢様がフォローして下さいますからな。

「ヤマタノオロチがどのような能力をもっているかは、『朝廷』から聞き出せばいいですからな。」

「……………メーテリアはアルフィアがついているから大丈夫だろう。しかし、レベル8が3枚だけで大丈夫なのか？『朝廷』の肅清も必要なのだぞ？タケミカツチのところでは弱いから心細い。」

「弱くて悪かったな…。」

ええ、レベル2が最高ランクの「タケミカツチ・ファミリア」には最初から戦力を期待していません。

なので、いいタイミングです。

「ええ。そろそろ、呼び出してもよろしいかと。」

「…そうか、そうだったな。くくく…。」

(ひっ！)

へら様が喜んでおられますな。

そうでしょうね、メーテリアお嬢様とアルフィアお嬢様に次ぐ、愛する義娘…自らの分身とも言えるあの方を連れてこられるのですから。

極東の神々は何柱いるのかわかりませんが、忙しくなりますな。

へら様が。

「この件で忙しいのはへら様でしょうな。」

「ああ、そうだな。極東の神ほとんどを責め抜かないとな。」

「…程々にしてくれ。」

「貴様らがそんな体たらくだから、足元をすくわれるのだ。徹底的にやらねばならん。くくく…腕が鳴るな。」

「……………」

そうですね、ここには坊ちやまやハステイア様がおられますから、ヘラ様は自制しておられます。

なので、お二方がおられないところならヘラ様は本領発揮をなさるでしょう。

おや、あちらも話がまとまったようですね。

では、説明しましょうか。

---

そして私はお嬢様たちへ説明しました。

「……ということでございます。」

特に輝夜嬢はこめかみに指を当てていますな。

そんなに悩むようなことですか？

『朝廷』に忍び込んで、神アマテラスと神スサノオを拉致？その間に神ツクヨミや命の仲間たちを保護？その後にヤマタノオロチを含めて、掃除ですか？……随分と無茶苦茶を言ってくれますね。」

「掃除って……そういう意味だよな？」

「怖い……。」

ああ、そのお二人は「ヘラ・ファミリア」についてはあまりご存知ないようですな。仕方がありません。

小僧の方は「だろうな」という感じですか。

「ヤマトノオロチか……。レベル8が2枚で足りるのか？」

「おや？聞いておりませんでしたか？メーテリアお嬢様もレベル8ですよ？」

「なっ！……………そうか（ますます逆らえなくなつたな）。」

項垂れるのも仕方がありません。

メーテリアお嬢様の恐ろしさを身をもって知っていますからな。

それにその小僧は、坊ちやまのスキルと条件が既にそろっていることを忘れてい  
な。

「それに小僧、忘れていませんか？「ヘラ・ファミリア」団長を。」

「まさか…あいつを連れてくるのか!?ベルで十分ではないのか？」

「確かにそうでしょう。ですが、こういうのは坊ちやまには不向きです。」

「それは同意いたしますね。若様はあまりにも綺麗すぎる。こういったことには向いておられません。だが、それでいいのです。汚れ仕事は私だけで十分です。」

そうですね、ですが汚れ仕事は輝夜嬢だけではありませんぞ。

私とメイ、そしてヘラ様がおられます。



坊ちやまを遮る障害は私達が払ってみせましょう。

「〔アマテラス・ファミリア〕が気の毒になつてきたな）……わかつた。極東へどう忍び込むのだ？」

「それについては後日にいたしましょう。移動手段には時間がかかりますからね。」

「「??」」

ええ、アレが出来上がれば遠征なぞものではありませんからな。

ダンジョンで使用できないのが残念ですが。

そして解散した後、女神たちで集合して今回のことを説明しました。

「……ということだ。」

「アマテラス……あの子は何をやっているんだよ。はあああ、あの子は世間知らずだから仕方がないけどね。」

「仕方がなくはないぞ、ヘスティア。だが、取り巻く豚共が許せんな。」

そうですね。

降臨してくるなら選別ぐらいはして欲しいのですが。

ユーティス嬢は頬に手をあててため息をつかれていますな。

おやしノス嬢もですか。

「うちのオリンポスでも神のことは言えないけどね…。」

「そうですね…アースガルドもロキ様とか癖のある神揃いですからね。」

「この件については私達「ヘラ・ファミリア」が指揮をとる。ヘスティア、お前では不向きだ。」

「わかった…。ボクにとつては不向きだということだね。ヘラ、極東の神々については君に任せるよ。ただし、子供たちは子供たちで手出し無用だよ?」

「百も承知だ。」

ヘスティア様が納得されてよかったです。

さて、極東をいかに洗濯するかをメイと話し合わなければいけませんな。

…どう洗濯するかが楽しみですな。

## 第391回 疫病神、待伏。

よーし！

【ヘステティア・ファミリア】へー泡吹かせる時が来たよ！

レベル3の馬鹿がへまやつて【ガネーシャ・ファミリア】へぶちこまれたのを聞いた時は、呆れたよ。

時間がかかってしまったじゃないか！

だけど、ようやく準備が整った。

標的は…新入りのレベル1の三人の女だ。

容易く倒せるだろうね。

さて、始めるかー。

「いいね？手筈どおりに行くよ？」

「ああ、わかっているぜ。主神様よ。」

「ひひひつ、レベル1の女三人かあ。体がもつといいけどな。」

「おいおい、『白兔の脚』がブチキレちまったらどうすんだ？」

「そんな時はとんずらよ。ハハハハッ！」

馬鹿な子たちだなー。

まあ、だからこそボクの眷属になったんだけどね。

――――

夜になったか…。

あのヘステイアは前から気に入らなかったんだ。

泣きつ面を見るのが楽しみだよ。

「情報屋ではここを毎晩通ると聞いているよ?」

「ああ、俺らも確認したぜ?中々の上玉だぜ?ああ!楽しみだ!」

「甚振って、マワして、売るか。俺らも悪だな。」

「何言ってやがる?俺は闇派閥だぜ?」

「ちげえねえ、ハハハハッ!」

はあ…もうちよつと品のある子はいないのかなあ…。

まあ、かと言って贅沢は言えないけどね。

1年前の戦争で、ほとんど失ったからね。

そして、その分補充したからいいけど。

何でも「タナトス・ファミリア」からだけどね。

本当に馬鹿な子たちだよ?

お、来たね…。

さあ、宴の始まりだよ。

「おい…来たぜ。」

「おおお…、すげえ上玉だぜ。」

「俺は真ん中だ。」

「おいおい、俺もだぜ？」

「ひい…ふう…みい…。一人当たり5人ぐらいかよ。あんな華奢じや壊れちまうぜ？」

「レベル1なら大事にしとけてんだ。」

三人かあ…。

体もつといいけどね。

お気の毒様。

「さて、行くぜ。」

「「おう！」」

はいはい、いつてらつしやうい。

どんな子かな？あれ？

「…？どこかで見ただことある気がするんだけどなあ…。うーん…。」

どこだっけ…？

しかも三人とも…。

ボクがそう悩んでいる間に、あいつらはその娘たちを取り囲んだ。

あー、詰んだな。

「あら？どちら様でしょうか？」

「そこを通してくれないかしら？」

「すまないが、急いでいるんだ。」

へー、結構可愛いじゃん。

こいつらの餌食になると思うと、勿体ないよね。

…あれ？やはりどっかで…。

「悪いな。ここは通行止めさ。いや、お前らの人生のな！」

「へへへっ、逃げられねえぜ？お嬢ちゃんたち？」

「俺らを恨むんじゃないやねぞ？お前らの団長の『白兔の脚』を恨みなよ？」

そうだね、団長ならこの娘たちを守りなよ。

【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】に戦争遊戯で勝ったからといっても、隅々まで守れないだろう？

自分の非力さを恨みなよ？

その娘たちは俯いていた。

「……………」

「どうしちまつたんだ？怖くて声も出せねえってか？」

「安心しなよ。俺らが可愛がつてやるからよ。」

「壊れちまうかもな？」

「ギャハハハハ！」

「ふふふふつ……」

え？わ、笑った？

「え？」

「ノコノコと来るなんて……。何てお馬鹿さんなのかしら？」

「こんな下劣共には過ぎた頭だろう。時間かかりすぎだ。」

「仕方ありませんよ。主神が主神なんだから。親は子に似るものというでしょう？」

「違うない。」「そうね。」

「何だと？」

なっ!?

こ、こいつらとボクが同レベルだと!?

頭きた!

「何やってんだよ！さっさとやれよ！」

「言われるまでもねえ！覚悟…あぎやつ！」

「「え？」」

え？しゅ…瞬殺？

今の太刀筋は…かなりの腕だよ！

「峰打ちよ？レベル2って…この程度なの？」

「拍子抜けですね。」

「そんなものだろう。アンタレスの眷属とは比べ物にならない。」

アンタレス？

「…アンタレスの眷属だって？」

それって、古代のモンスターだろ？

何でこの場が出てくるんだ？

すごく嫌な予感がする。

こいつらは激昂して襲いかかった。

冷静になれよ！相手はレベル1なんだぞ！

「こ、このアマア！てめえら！やつちまえ！」

「おう！あぐつ！」

「え？お、おい！魔導士のお前がやられてどうするんだ！」



「馬鹿な！こんな細い路地であの弓の腕だと?!」  
なっ!?

…ボクも弓を扱うけど、アレは…並大抵じゃない！  
達人…、ううん神…もつと…達神、いやそれ以上だ。

けど、あの娘はヒューマンのはずだ。

スキル…？

ボクがそう思っていたら、茶髪のポニーテールの娘がつぶやいた。

「…これじゃ、偉業にならないじゃない。」

「ええ、弱すぎます。」

「ふむ、では縛りプレイでもしてみるか？」

は？し、縛りプレイ？

何で下界の子がそんな言葉を…。

三人の二人は赤面して、水色の髪の子を一斉に見つめた。

「え？そ、それはちよつと…。」

「エルピスさん…その趣味が？」

「…？ち、違う！素手でやってはどうだということだ！」

素手だっ!?

ふ、ふざけやがって！

「素手…？なるほど、丁度いいわね。」

「ヘルメス様相手じゃ、手応えなかったからちようどいいですね。」

「決まりだな。おい、豚ども。喜べ、私達に触れることをな？ただし、駄賃はいただくがな。」

ヘルメスだつて？

…駄賃？何のことだよ？

「「偉業をよこしなさい（せ）！」「」

は？い、偉業？

まさか…これはボクたちがこの娘たちを待っていたのではなく、ボクらが罠にかかるのを待っていた？

ははは、まさか…レベル1がそんなことを…。

## 第392回 疫病神、包囲。

「な、なめんじゃねええ！」

ボキッ！

は？い、今のはまさか…。

「ぎゃあああああ！腕が、腕があああ！」

間違いない…あれは。

「うるさいわね。ええと、ここかしら？」

「ぐげっ！……。」

「あ、首の骨が折れてしまったわ。ホッ…、まだ生きているわ。」

ひ、ひどい…。

「何やっているんだ…。声帯はここだ。」

「やめ……！……！」

「な？」

「なるほど。勉強になります。はい、一本いただきますね？」

ゴギッ！

「ぎゃああ……！……！……！」

「コ、コマンドサンボ……。」

「て、てめえら！落ち着け！遠巻きにして一斉にかかれ！」

「無駄よ。」

「ええ、無駄ですね。」

「言う暇あるなら、さっさとやれ。」

「は、速い！」

「レベルじゃないよ！」

「……いや、レベル1だけど経験が段違いだ。」

「ひつ……こ、こいつら！ただのレベル1じゃねえ！」

「気づくのが遅いよ！」

「早く対応しろよ！」

「ふう……さすがレベル2だ。一筋縄ではいかんな。」

「それでも隙が大きいわね。」

「そうですね。遠慮はいりませんね。」

「何なんだよ！……こいつらは！」

「それにあれは……。」

この娘たちもどこかで見たことがある…。

「やはりだ…どこかで見たことがある。それにあれ、パンクラチオンじゃない？鈍色の娘も…コマンドサンボ…。なんで使えるんだ？教えてもらったにしても…達神級だよ？特にあの水色の髪の女は…。」

もつと前だ…下界へ降りてすぐ？

いや…。

ボクが考え込んでいるうちに、もう残り少なくなつた。

「……………」（もう許してくれ！二度としない！）

「ユーティスさん？妙に強くありません？」

「ふふん、私のスキルでこいつらを悪と見定めたからよ。」

「残り少ないな。ふう…さすがに疲れてきたな。」

ヤバイね。

よし、逃げよう。

「ち、ちくしょう！このアバズレ共が！」

「あのインチキ・ルーキーのせいだ！」

うん、そうだね。

たったの半年すぎでレベル5になるなんてありえないよ！

と想像していたらこの娘たちからとんでもない殺気を出してきた…。

「はっ！」

「ひっ！」

「っ、怖い！」

絶対にただのレベルじゃない！

「何て言ったのかしら？この悪党たちは？」

「ベルさんのことをインチキ・ルーキーと言っていましたよ？」

「慈悲はかけてやろうと思っただが、やめだ。死よりつらい苦痛を与えてやろう。」

ひっ…。

「ぎゃあああああー！」

うわあ…さっきの動きよりもっと洗練され、倒した奴までも追い打ちとして骨という骨を全部折っているよ。

しかも、わざと痛いようにしている。

あつ…更にあそこまでも踏み潰して…踏みにじっている。

ちっ、逃げよう。

「駄目だな…。ちっ、【ハスティア・ファミリア】へ一矢報いてやろうと思っただのにね。【フレイヤ・ファミリア】が解散したことからホツとしたからオラリオへ来たけど、散々

だよ。さて、ここは逃げ…ぎゃあああああ！膝が、膝が砕けたああああ！

なっ！あの…水色の娘が投げた小石がボクの膝を的確に…砕いた。

なんて正確な投擲術なんだ！

つて、分析している場合じゃない！

ああ…囲まれた。

「こいつがラシヤプか？神威を感じるから間違いないと思うが？」

「ねえ、答えて？この神があなたの主神？」

「…！…！（はい！そうです！）」

「声ぐらい出して下さいね？」

「ぎゃあああああ！…！…！」

「あら？声帯が切れたみたいだわ。」

ひどすぎる…。

つぶしたのはそつちなのに…。

「潰し方が甘いからだ。こいつで最後か…。」

「これでランクアップできるの？不安だわ…。」

「レベル3が3人に、レベル2が12人ですか。」

「…こいつをギリギリまで痛つめるのはどうだろうか？」

ひいつ！本気で言っている！

よし！恥など捨てて…。

「ま、待つて！ボクはただの通りすがりの仮装した子供だよ。お姉ちゃんたち！」

「嘘はだめですよ？」

「なっ…なぜ分かるんだよ！」

「私は嘘看破のスキルを持っているんですよ？神ならわかりますよね？これが真実であることを。」

!?

畜生！何て厄介なスキルを持っているんだ！

「……嘘じゃない……。くそっ！だ、だがボクは神だぞ！お前らがボクを送還したら、お前らは神殺しだからな！」

これを言えば大抵の子はビビるからな。

その隙に逃げよう！

と思っただけど、逃げられなかった。

むしろ、笑われた。

「私達が…神殺し？ふふふっ！」

「笑えますね！」



「ああ、本当に笑える。」

「なっ……何がおかしいんだよ！お前らは大罪人になるんだぞ！」

「こ、こいつら怖くないのかよ！」

神殺しの大罪が！

茶髪の娘がニツコリ笑いながら言った。

「神が神を殺したら神殺しなの？」

「はあ？……え？……神？」

「ええ、そうですよ？」

「下界で神を殺しても単に天界へ帰るだけだろう？」

……え？

神？そんなバカな……

あ、ありえない！

神威をどんなに隠したって、違和感は必ずあるはずだよ！

どう見たって……ヒューマンのはずだろ！

「…………お、お前らはヒューマンのはずだぞ！」

「どうか、ラシャプってどこの神なの？」

「さあ……。」

失礼な奴らだな！

どーせ、そんなに有名じゃないよ！

「どうでもいいが、こいつはどうするんだ？」

「プロに任せましょう。」

プロ？

## 第393回 疫病神、絶望。

物陰から見覚えのある神が覗き込んできた。

あつー！あいつは！

「何だ……。聞き覚えのある声が聞こえたと思ったたら……。」

「あら？セト様とセテイさん？」

「……シノスさんか。どうしたんだ？」

「ところで、セト。この神はどここの神かしらないか？」

「この神……？……お前、ラシヤプか！」

「セ、セト！助けて！」

気に食わない神だけど、この際仕方がない！

自称神と言った茶髪の娘がセトへ話しかけた。

「あら、セトの知り合い？」

「ああ、同郷のどうしようもないやつだ。……周りのやつらが気絶しているようだが、こいつが何かしたのか？」

どうしようもないやつで悪かったな！

だから、こいつは嫌いなんだ！

「ああ、こいつらを使って私達を襲おうとしたぞ？」

「な!? お、お前は馬鹿か! 下界で…いや天界でも絶対にやってはいけないことを! 何てことをしたんだ!」

「な、何だよ! セト、助けてくれよ!」

ど、どういふことだよ?

下界だけでなく天界までも…。

こいつらが自ら神と言ったことと関係があるのか?

セトは可哀想な子を見る目で僕を見つめた。

「……そうか、お前は知らなかったんだな。この人たちは…元神だ。何故か知らんがヒューマンとなっているんだ(オラリオの不思議がまた増えたんだ…どうなっているんだ…。)」

「は?」

「ええ、そうですよ? ラシヤブ様? いえ、ラシヤブ…1年前はよくも私の持ち物を汚してくれたわね?」

「(あ、終わったな…。)」

は? 1年前?

ふ、雰囲気が何か変わった？

まるで、神のように。

え？マジで神？

いやいや、そんなことより今の発言だよ。

確かその頃は、僕ら【ラシャプ・ファミリア】の最盛期だった頃だ。

「1年前……？その時はシャルザードを玩具にした時だから、お前なんか知ら……。  
ま、さ、か、フレイヤ……様じゃないよね？」

「ふふふ、当たり前です。」

「ひ、ひいいいいっ！」

そ、そんな！

な、何でヒューマンになっているんだよおおお！

そしたらフレイヤ……様はニツコリと笑った。

「ですが、私は貴方を送還しませんよ？プロに任せます。」

「ほっ………プロ？」

「なっ！お、お前！知らないのか！今の【ヘステイア・ファミリア】には……」

「セト。」

「ハイ。」

「ちよつと黙りましょうね？」

「ハイ。」

(セト様…、何と不憫な。すみません…未熟な私では助けられません。)

プロつて…何？

さつきから言つてたけど、どういう意味だい？

しかもあのセトが怯えるなんて…。

茶髪の娘が飽きたかのようにフレイヤ…様へ言つていた。

こいつは…まさかアストレア？

「シノス、ちやちやつとやつて。早く帰つてベルに会いたいわ。」

「そうですね。セト様、私はコマンドサンボを習得しています。ラシヤブ様はなにかを？」

「同郷ではクラヴマガがあるが。こいつは怠け者だから全然やつていないぞ？…おい、まさか。」

そんな面倒なことはしないよ！

だつて神だから。

そう思つていた時があつた。

そして学ぶべきだったと深く後悔した。

「そうですか。手加減はしないといけませんね。気をしっかり持って下さいね？」

「ひ…ま、待つて…こ、来ないで…グハッ！ガハッ！ぎやあああ！腕があ…！」

そして、僕はボコボコにされ手足をへし折られた。

フレイヤ…様は一仕事したかのようにだった。

「ふう…、スツキリしました。」

「……あ……う……。」

「セト様……。」

「セテイ、言うな、何も言うな。」

セトは見ていられないと目を伏せていた。

そんな僕を無視するかのように、水色の髪の娘…いやアルテミスが言った。

「さて、あいつに引き渡すか。」

「そうね。」

「そうですね。」

「………セ…ト、た…すけて…。」

販されてもいいから…、同郷のよしみで助けて…。

お願い…。

「あの…もう言ってもよろしいでしょうか？同郷として、せめてものの情けをかけた

「いんです……。」

「……仕方がないわね。」

「まあ、これだけやれば十分だろう。」

「いいですよ？ふふふ。」

何だよ……。

送還するならいつそやってくれよ……。

そしてセトは優しそうな声で言った。

絶望の事実を。

「ラシャプ……。今の【ヘステイア・ファミリア】には……天界最恐のヘラがいるぞ？」

「……あ？」

「そのヘラの義孫が……【ヘステイア・ファミリア】団長の【白兔の脚】だ。お前、この前の戦争遊戯を見てなかったのか？」

「……見てない。」

「ラシャプ……同郷として、せめて楽に逝けることを祈っているぞ。（ポンポン）じゃあな。

行くぞ、セティ。」

「あ、ハイ！」

終わった……。





## 第394回 処女神、達観。

ボクは今、更新をしている。

彼女たちの…。

まず…アストレア。

「ユーティスくん…ランクアップだよ。」

「やったわ!」

本当にランクアップできるんだ…神なのに。

いや、ヒューマンなのはわかってはいるけどね。

そして…フレイヤ。

「君もか…おめでとう。ランクアップだよ…。」

「やりました!」

!?

魔法が…発現している。

神なのに…。

最後に…神友アルテミス。

「はああああ。アルテミス……いやエルピス……ランクアップだよ。」  
「そうか！」

アルテミスにも……魔法が発現している。

コレ、鬼に金棒じゃない？

ボクは頭を抱えてしまった。

「これ、どう説明すればいいんだい……？……よし！ベテランのヘラに任せよう。うん、そうしよう。」

1000年も最恐の座にいたヘラなら、きっと何とかしてくれるはず！

ボクは下界へ降りてまだ数年だしね！

そして三人ともベルくんへ報告していた。

「え？も、もう、ランクアップ？す、すごいですね！」

「そうよ！もつと褒めて！撫でて！」

「ああつ、ずるいですよ！ユーティスさん！ベルさん！私もです！」

「……まあ、私達は例外だろうな。オリオン、撫でてくれ。」

「わわわわっ！」

……君たちは犬か！

女神としての誇りはどこへいったー！

アルテミスの元眷属達も呆れて…いや羨ましがっていた。  
ボクもそうしたい！

「アルテミス様までも…。ランテ、貴方まで便乗しようとするんじゃないやありません。」

「ううー！アルテミス様を応援したいけど、私もされたい！」

「気持ちばかりですが、今は駄目です。」

アストレアの元眷属達は疲れているようだった。

「あれだけ連日ギリギリまで殺り合っていたらねえ…。ダンジョンも私達が止めなければ下層まで行こうとしたぐらいなもの。」

「参考にしたくても、ステータスはともかく技と経験についていけませんのでできませんねえ。」

「閨派閥が哀れです…。先程、シャクティから「やりすぎだ！」とのクレームが来ました…。」

「え？やりすぎ？」

「うん、私もお姉ちゃんと同場へ行つたよ。全員の全身が複雑骨折で…アソコがめっちゃくちや潰されて泣いていたよ？枯れた声で「殺してくれ…」、と泣きながら言っていた…。」

「イーナ殿を襲わなかったら長く無事に生きていられたというのに、哀れでございます

ねえ……」

……そうだね。

イーナくんの件がなかったらラシャプたちも少しは長生きできただろうね。

ロキの元眷属は……」

「闇派閥はこれで終わり……?」

「うーん? どうかかなー?」

「いい加減に終わって欲しいです!」

「同感ですね。」

うん……」

ベルくんは「イケロス・ファミリア」によって、ひどい目に合わされていたからね。

そのイケロスはもう送還されたけどね、ヘラによって。

チート侍従たちは何かをつぶやいていた。

「丁度いい駒が見つかりましたね。」

「ええ、腕がなりますね。今晚にでも攫いますか?」

「そうですね。問題ある神を次々拉致していますが、使えませんかね。空きはありま

したか?」

「まだ空きがあつたはずです。クノツソス……いいえ、ダイダロスに感謝ですね。」

「ええ、自分たちのアジトが自分たちの絶望の檻となるとは思わないでしょうね。」  
「全くですね。」

「……………ボクが言えることじゃないけど。」

「強く生きてくれよ…、どんなになっても。」

「ボクの眷属はつと…。」

「あ、さっきのを聞いたんだね。」

「……………(ぶるぶる)」

「……………今のは聞かなかったことにします。ええ、リリは何も聞いていませんとも！」

「……………ベルくんのためになるなら、もう何でもいいよ。」

「「エイナ様！悟らないで下さい！」」

「まあ、気持ちはわかるよ。」

「あのチート侍従たちに対しては、達観した方が早いからね。」

「男性陣たちは…食堂のカウンターで固まっているね。」

「フレイヤの元眷属たちが黄昏れているね。」

「まあ、気持ちはわかるよ。」

「……………。」

「もうランクアップか。ベルの血はすごいな。」

「フレイヤ様が…。」

「本当に脳筋となつてしまわれた…。」

「神ラシヤプが哀れに思えてきたぞ…。」

（だが…フレイヤ様のあの表情、『フレイヤ・ファミア』の時にはなかった。…ある意味正解だったかもしれないが、自重しろ！罵愚鬼が！）

あれ？ザルドくんが何かを作っている？

また、新作かい？

「もうアレは諦めろ。それよりこの『暴喰牛の卵かけラーメン』を試食してくれ。」

「ククク…黒い海に浮かぶ赤い龍に、金色のオーラ…（ズルズルズル）う、美味い！」

「ふむ…シンプルだが、悪くないです。この麺は…肉から練ったものですか？」

「ああ、そうだ。クズ肉を集めて麺状にしたものだ。粘りは脂身を、歯ごたえがあるよう骨を砕いて入れてある。」

「…（ズルズルズルズル！）…」

「この様子じゃ、メニューに入れておくか。今は量が少ないから50食限定になるな…。」

…お腹が空いてきたな。

ボクもごちそうになつてもらおうつと。





これで満足か？」

「はい、ありがとうございます（やりすぎといえればやりすぎだけど…、自業自得ね）。」

……。

運が悪かったというしかないよ。

そこにはラシヤプを逆さ宙吊りしていて…真下には肥溜めがあった。

ロキたちが可哀想な子を見る目でラシヤプを見ている。

気持ちはわかるよ…。

「いくらなんでも肥溜めに落とすなんて…。」

「疫病の素で疫病の神が溺死するなんて、めっちゃ皮肉やん…。」

うん、まあでもヘラだからね。

これでも…優しい方と思う。

ラシヤプは、声を潰されボロボロになっても泣いていた。

「………（臭い！…こんなのはあんまりだよ！せめて別のやり方してくれよ！）」

「じゃあな、ラシヤプ。」

チヨキン

ちよ…そんなあつさりと。

ポトントン！



「クソ神だー！」

「疫病の神が疫病の素で溺死するなんて、洒落がきいててサイコーだぜ！ラシヤプちゃん！」

「うわああああああん！」

「…それで、ラシヤプはどうしたの？」

「泣いて神殿に引きこもったみたいだぜ？送還原因を聞いた時は笑えたよ。」

「貴方、他神ごとのように言っていますがアレで軽い方と思えますよ？」

「え」

「あの子の悪口を一言だけでアレですよ？あの子に一番深い傷を負わせた貴方はどうなるのかしら？」

「（ガクガクブルブル）…ニ、ニクス！助けてくれ！」

「嫌ですよ、自業自得でしょう。」



## オラリオ連合の初クエスト（前兆） 第395回 義祖母、神会。

私はヘステイアと並んで、バベルへ向かっている。

神会に参加するためだ。

…15年以上ぶりだな。

神にとっては瞬きのようなものだが、長く感じるな。

「…久々の神会だな。15年ぶりだ。」

「そうなんだ？ボクは…1ヶ月ぶりかな？中断してしまつてね。」

「中断だと？何があつたのだ？」

「……キミがラキアを支配したからだよ…。」

「その程度で中断するのか？オラリオの神共も軟弱になつたものだ。」

「……………」

全く…、たるんでいる奴らだ。

（こゝは引き締めておくか。

---

神会が始まったか。

司会は別の神だったが、ちよつとお話ししたら快く譲ってくれた。  
うむ。

よし、進めるか。

「さて…私が進行をやる。問題ないな？」

「ハイ！」

「一応、ギルドへ通してオラリオの全ての神々へ招集をかけたのだが、全柱いるな？」

「ハイ！」

…結構いるな。

まあ、入りきれない神は立っているから大丈夫だろう。

さて…議題へ進める前に、私達オラリオ連合に対して敵意あるかどうかを確認しない  
とな。

「議題はいくつかある。まずオラリオ連合に対して異議あるやつは？」

「異議はありません！（あつたら、アンタに殺られるだろうが！）」

ふん、意気地ない神どもめ。

本当に軟弱になったものだな。

まずは、アンタレスの話か。

アルテミスめ、お前が説明するはずだっただろうが。奴へそれを言おうと。

『すまない…、すっかり忘れていた。オリオンの眷属になれることを有頂天になってたんだ。』

『お前は一応、オリンポス十二神の1柱なのだぞ？ 自覚を持って！』

『すまない。ヘラ、代わりに説明してくれないか？』

『…これは1つ貸しだぞ。勘違いするなよ？ 義孫のベルのためだからな。』

『ああ！』

ベルの眷属となりヒューマンとなったからには、仕方があるまい。

だが、…後先を考えろ！

アルテミスの代わりに私が説明することとなった。

まあ、進行役をやるのだから丁度いいがな。

「さて…、本来ならここにアルテミスが説明すべきだが、古代のモンスター『アンタレス』がエルソス遺跡の封印から復活した。大樹海の状況を知るやつはいるか？」

「ハイ！」

「ヘルメスカ。虚偽の報告をするなよ？ 前のように模擬戦に出すぞ？」

「『模擬戦？』」

「ああ、アレね。」「アレは面白かったわ!」

「勘弁してくれよ! あー、ゴホン。…今の大樹海はアンタレスの眷属に支配されている。一步踏み出せば、たちまち囲まれるだろうね。」

「そうか。いざれ討伐せねばならん。オラリオ連合としてアンタレスを討つ。文句あるやつはいるか?」

「「いいえ! どうぞ! どうぞ!」」

全くこいつらは…、オラリオ連合に押し付けるんじゃない。

…その内、貴様らにも責任とってもらうからな。

私達のような二の舞い、あの時のような思いをヘステイアとベルにはさせん。

よし、アンタレスの問題はこれでいいだろう。

他にないか、確認しないとな。

極東の件は…後でいいだろう。

「次だ。報告はないか?」

「ハイ!」

「…セトか、何だ?」

「俺の伝手だが、ラキアの同盟国でもあるシャルザード王国からオラリオへ救援依頼の使者がくるそうだ。」

「救援だと？何のだ？」

「それがわからん……。ただ、デタイン砂漠の方向から原因不明の黒い嵐が襲いかかって、見逃せない被害が出ているとのことだ。その黒い嵐を、シャルザード王国の軍勢で囲み大きな被害を出した結果、見たこともないモンスターだったらしい。それが数百……いや数千もいるらしい。」

「「数千!?!」」

「デタイン砂漠だと？」

あそこは私達が討伐したベヒーモスが根城にしたところだ。

……何か関係あるのか？

黒い嵐というのも引つかかるな。

「あ、それも俺聞いたことあるぜ。まあ概ねセトの言った通りだが。」

「ふむ……使者の話の話を聞かない限りわからんな。他には？」

ヘルメスも聞いているなら、確かだろうな。

使者か、セバスを通してギルドの豚へ確認するか。

もし……ベヒーモスに関する問題なら後始末をせねばならん。

そう思っていたら、暑苦しい奴が手を上げやがった。

「俺がガネーシャだ！」



「潰すぞ?」

「すみませんでした!えーと、ギルドからの連絡だが、「アマテラス・ファミリア」が「ヘステイア・ファミリア」に用があるため近日中に来るそうだ。」

「へ?このタイミングで?」

「ほう…(都合がいいな。クッククック…)」

飛んで火に入る夏の虫とはこのことだ。

くくく…どう料理してやろうか。

ああ、楽しみだ。

「「ひっ!」」

「へら、へら。邪笑みんでいるぜ?」

「む、いかな。」

つい、顔に出てしまったな。

これで終わりかと思っただが、筋肉馬鹿が更に言ってきた。

聞きたくない事実を。

「あ、もう一つある!…:オリンピアから使節団が来る。」

「「!!」」

「オリンピアからだど?」

「ああ。友好とオラリオ連合設立のお祝いだそうだ。」

お祝いだと？

…絶対に嘘だな。

「…建前ね。」

「ええ、そうね…。プロメテウスが自ら来るのかしら？」

「いや、来ないだろうな。同郷の私達でも姿かたちも性別も知らないのだ。…知っているのは夫だけだ。臆病クソ神が…さっさと吊るせばいいものを。」

「…あつ…。」

オリンピア…。厄介な問題が来たか。

単なる祝いの言葉ではないだろうな。

…もう限界なのか。

ヘステイアが悩んでいるな。

絶対にお前を派遣しないからな！

## 第396回 義祖母、疑念。

ますます、おかしい…。

こう、立て続けに起こるのか？

私達の時でも…あったが、オラリオ内だけだった。

おっと、いかん。

神会へ集中せねば。

「他にはないか？」

「ハイ！」

「…：…またヘルメスか、何だ？」

「本格的に活発化しそうだよ？…：…闇派閥が。」

何だと？

闇派閥とはどこのファミリアだ？

大抗争や、ディオニユソスの馬鹿で全滅したんじゃないのか？

「「はあ!?!」「」

「闇派閥だと？」「タナトス・ファミリア」で終わりじゃなかったのか？」

「ラシャブ・ファミリア」も悲惨な目におうたからなあ…。どこや?」

知るか。そんなチンチケな奴のことなんか。

どこのファミリアだ? 今更いきがっているのは。

「忘れたのかい? 闇派閥の中で一番の武闘派で『ゼウス・ファミリア』と『ヘラ・ファミリア』に真つ向からぶつかった彼らを。」

「ああ、奴らか…。壊滅したじゃなかったのか?」

「奴らつて?」

「オシリス・ファミリア」や…陰湿な「タナトス・ファミリア」や「ラシャブ・ファミリア」のような小悪党とちやう。ホンマもんの武闘派や。」

20年前以上前に、私達「ヘラ・ファミリア」とあの人のファミリア「ゼウス・ファミリア」と抗争を引き起こした奴らだ。

奴らの第一級冒険者は壊滅し、オシリスは追放されたはずだ…。

…そういうえば、あいつらが言ってたな。

「オシリス・ファミリア」団長と副団長を含めて第一級冒険者たちは行方知らずと。死体を見つけてないから、と。

あいつらが「奴らがそうそう簡単にくたばるわけがない」と言ってたからな。

そいつらがあいつらの言う通りに、生き延びていたとしたら?」

そいつらが活性化してオラリオへ攻めてくる？

：アルフィアまたは、セバスとメイの存在は戦争遊戯で隠されていたから知らないはずだ。

！

そうか、ベルか！

あの子の存在が：「ヘラ・ファミリア」と「ゼウス・ファミリア」の交じりし最後の生き残りが、奴らの目に止まったか。

私達への復讐をあの子へ？

許さぬ。

絶対に許さん！

今度こそ、皆殺しにしてやる！

あの子に手出しなんぞさせてたまるか！

「……！……ヘラ、ヘラ！」

「はっ！……どうしたのだ、ヘスティア。」

「禍々しい神威を放って……どうしたのさ？」

「気にするな。ちよつと考え事をしてただけだ。」

『『え？ちよつと？』』

いかんな、つい考え事をしてしまった。

15年前にオラリオを出た私は状況を知らない。

だから、ヘルメスへ聞いた。

「私達がオラリオを去ってから、『オシリス・ファミリア』残党はオラリオにいたのではなかったのか？」

「残党たちは『アパテー・ファミリア』へ改宗したよ。でも、7年前の大抗争で『フレイヤ・ファミリア』と『ロキ・ファミリア』の『勇者』によつて全滅したよ。」

「…なら『オシリス・ファミリア』は、何故活性化しているのだ？」

「…まだ確証は出ないけど、『オシリス・ファミリア』団長のメルティ・ザーラを見かけたという目撃証言があつたんだ。しかも1つじゃない、複数もだ。」

ちっ…奴か。

【女帝】も【傑物】もちやんと止めを刺しておけてんだ。

「何で、ゼウスとアンタがいない時にオラリオへ来なかつたんやろ？」

「オシリスの性格上、真つ向から殺り会える相手がいらないからだろうな。」

「あん？ウチらでは役不足だと言いたいんか！セト！」

「ロキ、仕方がないよ。彼らは…【オシリス・ファミリア】は正々堂々と最強と最恐に真つ向からぶつかった唯一無二の闇派閥なのだから。」

「ロキとフレイヤのところでも不服だったみたいね。」

「ぐぬぬ…。否定はせえへんわ。あんところは、レベル7や6がゴロゴロおったからなあ。」

「ふん、失望したのだろうよ。オラリオと貴様らに。」

「うぐ…。」

オシリスめ、あの脳筋が。

恐らく、エレボスと同じ役目を果たそうとしているのだろうよ。

…奴だけではないな、第一級冒険者も生き延びていると見てもいい。

再び大抗争を引き起こそうというのか？

ベルを標的にするだけでなく…。

ヘステイアが騒いでいる神々を収めている。

「まあまあ、それはそうとして。ヘルメス、詳しいことを教えてくれるかい？」

「了解したよ。壊滅したはずの【オシリス・ファミリア】が暗殺系ファミリアの【セクメト・ファミリア】と共に動いていると報告があつたよ。」

「…厄介な糞女神と手を結んだか…。」

あの女神か。

ヘルメスは更に話し続けた。

「ただ、すぐにオラリオへ攻めてこないだろうね。オシリスはともかくセクメトの性格上は。」

「あんの糞女神、クノツソスの件でウチは忘れてへんで！」

知るか、貴様の事情なんか。

だが、奴はオシリスと違い慎重で執拗で狡猾だ。

オラリオがよほど弱っていないければ、来れはしないだろう。

…大部分の勢力がオラリオを出ていなければな。

オラリオ内にも奴らの間諜が何人かいるに違いない。

…これで、5つ。

もう私達の時と違いすぎる。

偶然にしてはおかしい。

いや…これはチャンスかもしれない。

「(アンタレス…データイン砂漠の異常…極東…オリンピア…闇派閥連合か…) 報告は他に

ないか？」

「「……………」」

「ないようだな。この件はオラリオ連合預かりとする。解散。」

「「おっ。」」



「何だ？他にあるのか？」

「いや、あの…命名式は？」

「全てが終わってからだ。こんな気がかかるようでは、私の愛する義孫の二つ名をつける神聖な儀式に集中できません。…文句あるのか？」

「いいえ！ありません！」

「では、さっさと帰れ。」

「ハイ！」

「こちらもさっさと帰って、考えをまとめなければならん。神会へ参加しておいてよかった。」

「このような貴重な情報を得ることができたのだからな。」

## 第397回 処女神、説教。

神会が終わり、みんなはさっさと帰っていった。

ガツカリしている神もいれば、ホツとしている神もいた。

そして、ボクとヘラは帰路へついている。

ヘラはずっと考え込んでいたようだった。

…この子は思い詰めるととんでもないことをするから、今のうちに聞いておこう。

ボクは、考え込んでいたヘラに話しかけた。

「ヘラ、どうしたんだよ？ あんなに、命名式を楽しみにしてたのに？」

「ハスティア、妙だと思わんか？ アンタレスだけでなく、デタイン砂漠、極東、オリンピ

ア、閻派閥連合が同時発生していることを。」

「へ？」

同時発生？

たまたまじゃないの？

ヘラはかぶりを振って言った。

「私の時でもそんな異常なこととはなかった。……これは危機なのか、好機なのか……。」

「好機？」

「ああ、オラリオ連合の名を私達と同じく高めるためのな。」

すごいなあ…ヘラは。

さすが、1000年も最恐の座にいたことはあるね！

…確かにボクたち、今のオラリオ連合の力は弱い。

というか、「ヘステイア・ファミリア」は数ヶ月前に立ち上げたばかりだよ！

1000年も最強と最恐の座にいたキミたちと一緒にしないでくれよー！

でもヘラの言う通り、この同時発生を解決すれば確かに最強と最恐を超えられる。

…何でこんなことになったのかなあ。

ボクは自信なさそうな顔で言った。

「…ヘラがいてよかったよ。」

「な、なんだ。いきなり。」

「ボクはね、ベルくんと一緒にふつーに暮らしてふつーに楽しめればよかったんだ。けど、今の「ヘステイア・ファミリア」はそれをする余裕がない。グータラのボクでは無理だよ。」

…ボクは数年前に降臨し、ファミリアも数ヶ月前に立ち上げたばかりだよ？

せめてベルくんとしばらくイチャイチャしながら過ごしたかったなあ。

今となつては……もうオラリオ最強派閥だけどね！

ヘラは、いつになく優しそうな顔を見せて言った。

「ヘステティア、それは間違つてゐるぞ。」

「ふえ？」

「今の『ヘステティア・ファミリア』は確かにオラリオ最強だ。しかしな、あのファミリアにはヘステティアの司るあの『不滅の炎』と同じ温かみがある。みんな笑顔だろう？それはあの人のファミリアにも、私のファミリアにもなかつたものだ。お前がいてこそそのファミリアなのだ。自信を持つてくれ。」

「……ヘラ。ありがとう！うん！」

さすが、最恐の座に1000年もいた神の言う言葉は違うね！

……いつも優しい状態なら、みんなが恐れることはないのにね！

でも、アレだけは。

ボクたちが償わなければならないんだ。

ヘラはそれを察して、先んじて言った。

「……特にオリンピアにはお前を渡さん。」

「ヘラ……オリンピアは……天の炎はボクたちの罪だよ？それは、ボクの……やめてくれ！それ以上言わないでくれ！」……ヘラ。」

「ヘステイア、お前はそれをあの子の前で言えるのか？」

うぐつ！

それを言われると弱いよ…。

あの子には…、言うのがつらいなあ。

「…言えないなあ。最後まで言いそうもないよ。」

「あの子に再び家族を失うという悲しみを、傷を再び負わせるのか？」

「！」

「それは許さん…絶対に許さん！お前の神友としても、あの子の義祖母としても！」

「…ごめん、ヘラ。」

そうだね、ベルくんがここまで来れたのはあの悲痛な想いによるものだ。

だから、この短期間でオラリオ最強となったんだ。

それだけじゃない、ベルくんの家族や失われた英雄候補を過去から連れてきたんだ。

ヘラが青ざめた顔で言った。

ど、どうしたんだい？

「それに…それをやるとメーテリアがお前を…。」

「あつ…。うん、そうだね！それはダメだね！」

アレは怖い！アレはダメだ。

一緒にベルくんの自伝を読んだんだけど、その度ヘラ以上の凶々しいオーラを出して  
いたんだ。

最初は、タケのこの子が怪物進呈を行ったところ、そのオーラを出したんだ。

アレはビビったよ、何とか宥めて先を読ませただけだね。

漆黒のゴライアス戦で、タケのこの桜花くんがベルくんを庇ったところで「まあ、そ  
れで許してもいいかしら？」と。

よかつたよ…でないよ、アルフィアくんと同じようにオハナシするところだったよ。

運がよかつたね！タケ！

あの子は本当にベルくん第一主義だね…。

実母として行きすぎないかい？

まあ、ベルくんが赤ちやんの時で亡くなったから仕方がないけどね。

その後、ベルくんが危ない目に合う毎に凶々しいオーラをしょっちゅう出すからもう  
慣れてしまったよ。

慣れてって怖いね…。

おっと、ヘラとの話に戻らないと。

「だが…使節団がくるということは天の炎は限界寸前と言ってもいいだろう。」

「そうだね…。」

使節団がくるということは…、ボクを迎えに来たんだろうね。つたく、プロメテウスつたら少しは説明してほしいよ！

そしてボクらは「ヘステティア・ファミリア」ホームへ着いた。

早い帰りだったけどね。

「お帰りなさいませ。いかがでしたかな？」

「あら？ 早いわね？」

「命名式が長引くと思ったのですが…。」

「私達の二つ名はどうなった？」

キミたち…、第一発言がそれかい？

「あー、「ヘステティア、私から話す。」…あ、うん。任せるよ。」

「課題が多く出た。命名式どころじゃなくなった…アストレア、フレイヤ、アルテミス。今から女神緊急会議だ、出る。」

「!!!」

「セバス、メイ、お前も出席しろ。…ベルは？」

「まだダンジョンにおられます。」

「なら、都合がいいな。他の奴らは適当にしてろ。」

女神緊急会議かあ…。

まさか、ボクのファミリアン中でそれをやるとは思わなかったよ。



## 第398回 正義神、会議。

私達は女神緊急会議を行ったわ。

ヒューマンで、それをするのは初だけどね。

命名式をやらないぐらい、一体何が起こったのかしら？

聞くと……とんでもないことになってたことがわかったわ。

ヘラが考え込むのも無理ないわ。

アンタレス……デタイン砂漠……極東……オリンピア……闇派閥連合……

これが同時発生？

まず1つずつ話し合うことにしたわ。

アンタレスは、アルテミス担当ね。

「そうか……、大樹海は既に……。」

「ああ、アンタレスは大樹海を完全に支配した。行くなら戦力を万全にせねばならん。」

「エルソス遺跡まで着くのにどれだけかかるのかしら……。数年はかかりそうね。」

「それについては考えがあります。しばらくお待ちくださいませ。」

「考え？」

考えて…何かしら？

そして、デタイン砂漠ね。

確かあそこは…オラリオ、いいえ特に「ゼウス・ファミリア」と深い縁が…。

「デタイン砂漠ですか。まさか…。」

「デタイン砂漠といえば、ベヒーモスよね？」

「アンタレスにも眷属がいたんだ、ベヒーモスにもいてもおかしくないだろう？」

「いいえ、神アルテミス。当時のベヒーモスには眷属はいませんでした。」

「義娘たちの報告によれば、天を覆うほどの巨大さだったそうです。」

そう聞いているわね。

漆黒のモンスター、私達への殺意はどれほどなの…？

確かベヒーモスは、ザルドによって討たれたはずよね？

「ベヒーモスはザルドによって討たれたはずよね？」

「皆様、私は当時気になったことがあります。それかもしれない。」

「何だ？」

「リヴァイアサンは『リヴァイアサンの骨』をドロップしました。では、ベヒーモスは？」

「なかったはずなのがあったということ？」

そのドロップアイテムが今回の異常の原因？

なら、討った当時にドロップアイテムを見つかなかったの？

「あの子達の報告によれば、巨大なベヒーモスが粉になつて砂漠となつたと聞いています。その中に埋もれたかもしれません。それに、参加したあの子達は重症でした。特にザル坊は。」

「そうね…それが原因でザルドはベヒーモスの毒に侵されたのね」

「なるほど。そのドロップアイテムがデータイン砂漠の異常か。」

「ええ、私はそう考えます。そして…それによりベヒーモス復活の可能性が高いです。」

「だろうな。」

最悪だわ…。

そのドロップアイテムが、モンスターまたは人に寄生してベヒーモスが復活したというの？

【アマテラス・ファミリア】がうちへ訪問してくる？

ヘラの思うどおりじゃない。

「極東…。」

「これは私たち【ヘラ・ファミリア】がやる。」

「そうですね。」

「けど、極東はかなり遠いわよ?」

「それもアンタレスの件と合わせて解決できるかもしれません。」

「「??」」

「どうということなの?」

闇派閥連合…。

また厄介なのが復活してきたわね。

「オシリス・ファミリア」…。あの脳筋たちが生きていたのは納得できるわ。」

「彼ららしいですな。長年私達といがみ合っていたのに関わらず、オラリオを支配しようと思えばできたはずです。」

「彼らもまた、私達がいなくなつたオラリオに失望したのでしようね。恐らく報復しようと思つたところで、私達が壊滅してしまつたのですからな。」

「…大抗争には何で加わらなかつたのかしら?」

「アルフィアお嬢様の記憶を見たところ、糞神エレボスは神オシリスのところへ行つたそうです。話を少しだけ聞いただけで門前払いされたそうです。」

「加わつていたら、間違いなくオラリオは滅亡していたな…。」

ええ、そうね。

あの武闘派の第一級冒険者が加わっていたら、間違いなく私達は蹂躪されていた。ある意味、脳筋で助かったかもしれないわね。

そして、あの暗殺系ファミリア…。

「しかも【セクメト・ファミリア】も…。」

「オシリス・ファミリア」の性格上、真つ向から攻めてこないのは【セクメト・ファミリア】が【オシリス・ファミリア】を養っているからでしょうな。」

「オラリオが弱っていなければ、恐らく来ないでしょうね。」

「…困ったわね。」

今の状態では間違いなく、来ないわね。

【オシリス・ファミリア】の構成はどうなっているのかしら？

「【オシリス・ファミリア】は当時レベル7が団長で、6が数人いたかしら？」

「はい、その通りです。今はレベル8か9になっているかもしれないません。」

「【オシリス・ファミリア】単独なら今頃、正々堂々とオラリオの門を突き破ってこつちへ挑戦してくるはずです。【セクメト・ファミリア】が食い止めているでしょうね。」

「エレボスやタナトスよりも、厄介ね…。」

武闘派の【オシリス・ファミリア】に、暗殺系ファミリアの【セクメト・ファミリア】  
…。

お互いの長所と短所をうまく補っているわね。

おびき出すには、オラリオを空にするぐらいでないとダメね。

「以上でしようか？」

「いや、もう一つある。フレイヤにとっては別問題だが、オリンピアからの使節団が来る。」

「!!」

「恐らく…もう限界かもしれないよ。」

何ですって…。

そっちが死活問題じゃない!

何でこうも、問題が…世界を左右にするほどの危機が5つも同時発生するのよ!

## 第399回 月女神、決心。

オリンピア…だと？

プロメテウスが天の炎を落としたところか？

あの炎は…私たち神、特にオリンポスにとって、大罪の1つだ。

私たち神の予定では、漆黒のモンスターを全て討ち果たした後にオリンピアの問題を解決するはずだった。

それは…私達が神力を使ってまでもな。

神時代の終焉となり、新たな時代を拓けるために。

しかし…「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の黒竜討伐失敗のおかげで計画が頓挫してしまった。

予定が1つ繰り上がってしまった。

先見を司るプロメテウスにとっては、大きな誤算だったのだろう。

天の炎は年を増して汚染されていると聞いている。

そしてその暴発は…下界を滅ぼすほどのエネルギーを持つ。

それだけは防がなければならない。

外交の全てを断っているオリンピアからの使節団が来たというのは、とうとうその時が…来たのか。

天の炎が抑えられなくなった時が。

プロメテウスは…、天の炎をヘステイアに浄火してもらうために迎えに来たのか？

それは駄目だ！

絶対に駄目だ！

「ヘステイア、私は認めないぞ。絶対に。」

「ベルを再び傷つけるつもり？」

「あー…それはもうヘラに言われたよ。他に方法がないかなあ…。」

「それ以前に情報が足らん。臆病神のプロメテウスが自ら来て説明すればいいものを…。」

そうだな。

だが、プロメテウスは誰も…同郷も知らない。

性別も姿かたちもだ。

…いや、ゼウスだけだな。

天の炎を落としたプロメテウスを激怒したゼウスが取り押さえられた時に、だ。

…思ったのだが、男神に厳しく女神に甘いゼウスがプロメテウスを捕らえ、吊るさな



かったのは…、まさかプロメテウスは…女神なのか？

だとすると、ヘラがイライラするのもわかる。

ヘラは一息ついて、私達へ話しかけた。

「コレで終わりだ。妙だろう？これらが同時発生するのは。」

「確かにそうですな。」

「これも坊ちやまの幸運の導きでしょうか？」

「ははは、それはないじゃないかな…とは言えないね。」

幸運か…。

ヘステイアの言う通り、あなたがちそうではないとは言い切れんな。

フレイヤが察したかのように言った。

「まさか…ヘラ、貴女は。」

「ああ、そうだ。これらを同時解決する。」

「なるほど、妙案ですな。」

「それなら、私達のファミリアを凌駕できますね。」

なっ…そんな無茶苦茶を…。

いや、今のオラリオ連合なら…いや無理だ。

戦力が足りなさすぎる。

メイが私へ確認しに来た。

「神アルテミス、貴女の精霊は貞潔を司りますか？」

「ああ、当然だろう？」

「では、アンタレス討伐は女性だけとなりますな。」

む？ そうだな、女性しか傷つけることができないな。

「…ああ、そうだな。女性か、男ならオリオン並の純粹無垢でなければアンタレスに傷を負わせるのは不可能だろう。アンタレスが私の精霊を取り込んでいたら、な。」

「となると、オラリオ連合の女性陣ということになるわね。」

「そうだな、アンタレスが大樹海を侵食してくるということは私の子…精霊を食らったからだろう。」

つくづく私を怒らせるのがうまいモンスターだな。

絶対に消滅してやるからな！

私はその決心をしている中で、アストレアが危惧したかのように言った。

「極東は、「ヘラ・ファミリア」単独で？ 厳しくない？」

「ええ、ヤマタノオロチがどんなモンスターなのか臆気にしかわかりませんからな。」

「【アマテラス・ファミリア】はどうでもいいが、確かにそれが厄介だな。」

確かに、「ヘラ・ファミリア」のアルフィアとメーテリアの二人だけでは厳しいな。

「タケミカヅチ・ファミリア」の「猛者」がいたとしても。

あと…レベル8がもう一人いればな。

フレイヤは眉をひそめて言った。

「【オシリス・ファミリア】と【セクメト・ファミリア】ね…。居場所はさすがに無理でしょうね。」

「ええ、『ヘルメス・ファミリア』でも無理でしょうな。」

「恐らく、私とセバスがオラリオにしていると動きにくいと思つたでしょうね。」

「ちつ…オラリオにいたら蹂躪してやったものを。」

まったくいけ好かない奴らだ。

天界へさつきと帰れ！

しかし、やはり大きな問題はこれだな。

「問題はオリンピアだ。これは天の炎、すなわち…神を相手にするようなものだ。」

「そもそもオリンピアは周囲を結界で囲まれているから、入れないけどね。」

「使節団は…恐らくヘステイアへ助けを求めてきたのだろう。ヘステイアに天の炎を浄化してもらうためにな。」

「炎の神である、ヘファイストスやプロメテウスではダメなの？」

「できないことはないよ？でもヘファイストスたちでは全てを…下界を含めて吹き飛ば

してしまおう。浄化できるのは『不滅の炎』を司るボクだけだよ。」

「…厄介ね。」

全くだ。

だが、天の炎をプロメテウスが落とさなかつたら下界は…更にひどくなっていたらう。

それほどあの時は危なかつたのだ。

これらを同時解決だと？

全てがオラリオにあるなら可能だが、明らかにオラリオから離れすぎている、

無茶苦茶だ！

別々にすればいいのだが、それだと他の問題が活性化してしまう。

私達がそう悩んでいる中で、セバスとメイが微笑みながら言った。

何か考えがあるのか？

「オリンピアの件以外は解決できそうですね。」

「「は？」」

「ええ、そうですね。」

「あ…、説明してくれるかい？」

「かしこまりました。」

オリンピック以外なら、解決できるのだと？  
そんな方法があるのか？

## 第400回 美神、同情。

どうということなの？

そんな解決できる都合のいい手段つてあるの？

「現在、愚者とミユラー殿、神ニヨルズの協力の元である物を作ってもらっています。」  
「ある物？」

「後で「ヘルメス・ファミリア」団長のアスフィ姫にも加わってもらいます。少々納期を早めなければいけませんからな。」

「おい、勿体ぶるな。一体何を作ろうとしている？」

「はい、それは……。」

セバスとメイは、驚くべき魔道具を教えってくれた。

…そんな魔道具を作ろうとしているの？

ふふふ、神に抗い神と同列に並ぼうとしている子供達の執念つて、恐ろしいわね。

私達はその魔道具を聞いて、納得した。

そりゃ、そうね。それができれば…。

「…確かにそれが出来上がれば、大深林や極東の距離問題が一気に解決できる。」

「そうね。デタイン砂漠…ベヒーモスは？」

「それは男性陣に任せましょう。アンタレスが女性陣なら、ベヒーモスは男性陣がやるのが妥当でしょう。」

「ザルドやオツタルに？」

「いいえ、レベル6止まりの【勇者】たちに任せましょう。」

……引つかかる言い方ね。

その程度で止まるなら、ベヒーモスに喰われてしまえと言っているようなものじゃない。

シャルザード…。

アリイは元気かしら？

私が思いにふけっている間に話が進んでいた。

「もう一度言うが、極東は、『ヘラ・ファミリア』と『タケミカツチ・ファミリア』が担当する。」

「レベル8が3枚ね…。」

「戦力過剰かもしれませんが、ヤマタノオロチが輝夜嬢のおっしやるとおりのモンスターなら、足りないかもしれません。また、『朝廷』を掃除することも考えなければいけません。」

「…輝夜だけでは心配ね。」

ええ、そうね。

最恐の「ヘラ・ファミリア」で「アマテラス・ファミリア」が相手なら、あの姉妹の片方だけでも大丈夫だけど。

問題は、漆黒のモンスター…古代のモンスターのヤマタノオロチ。

オツタルとあの姉妹だけでは厳しいわ。

そして、穢れた天の炎…。

「オリンピアですか…。どのような状況なのかつかめないのではありませんな。」

「問題はレベル9相当となっている坊ちやまをどちらへ派遣するかですね。」

何を言っているのかしら？

「私たちのところに決まっているだろう。」

「そうね。」

「五月蠅い。まずは全ての状況を把握してからだ。ベルについてはそこからだ。」

む…。

それに、今の冷静で分析しているヘラも初めて見るわね。

ヘステイアが私達美神のストッパーとなっているのもわかるけど、ヘラのストッパーが大きいと私は思うの。



それに：数百年以上前からオラリオにいる私にも大いに関係しているあのファミリアにも…。

「闇派閥連合はどうするのかしら？」

「先程の4つのクエストで戦力が分散し、戦力が少なくなつたオラリオへ攻めてくるでしょう。神セクメトの性格は知りませんが、いかがでしょうか？」

「くる、絶対に来る。奴はそういう女神だ。」

「復讐を司る女神だったわね…。あの女神にそんな復讐の気持ちなんか欠片もないのにな…。」

「レベル8や9がいたら、『小巨人』では太刀打ちできないわよ？」

「それだけでないぞ、あの『セクメト・ファミリア』の暗殺者共が跋扈するだろう。」

そうね。ミアでも厳しいわ。

あの執拗な女神の魔の手から逃れるには、多くの冒険者の協力が必要ね。

いえ、それ以前に【オシリス・ファミリア】団長、副団長を相手にするには少なくともレベル8が2人以上は必要ね。

最後の闇派閥で、厄介なファミリアが手を組んだわね。

アストレアがこめかみに指を当てて言った。

「ねえ、いくら何でも同時解決することはないんじゃない？1つ1つこなしたらいいん

じゃない？」

「そうだ、いくら何でも無茶すぎるぞ。」

ええ、私もそう思うわ。

へらはそのアルテミスの言葉をはねのけると同時に、言った。

「アルテミス、私は言ったな？ベルに全てを負わせる気かと。」

「!!!」

「オラリオ連合の真価を試されているのだ。今がその時なのだ。」

「「……………」」

確かにそうね…。

ベルに頼りきりだったわ、私達は。

クノツソスの戦いでも、「ヘスティア・ファミリア」…特にベルの介入がなければ、私

の子たちや【勇者】も負けていたわ。

へらの言う事もわかる。

けど、同時にやることはないと言っているのよ？

「だけど！それじゃあ、戦力が非常に足りないわ！」

「ええ、足りませんな。このままでは死者が出るのは確定です。」

「ですが、それでは坊ちやまが悲しみます。」

「…じゃあ、どうするんだよ？」

ヘステイアが我慢できないように言った。

ええ、同感よ。

ヘラには何か考えがあるの？

ヘラはそんな私達を見て、余裕そうに言った。

「決まっているだろう？あいつらをこの時代へ連れてくるのだ。」

「ヘラ…まさか、貴女。最強と最恐の頂点だった彼らを？」

「ああ、このような事態になったのも私達の責任だ。なら、その責任者を連れてくるのは道理だろう？」

「そうですね、既に条件は揃っております。」

「タイムリングが今、その時期なのです。」

あの子たちを…ベルのスキルによって連れてくる？

確かにあの子達はオツタルたちと戦い、そしてオツタルたちが勝った…。

瀕死の彼らを相手にね。

それでもあの子たちは死ななかつた。

レベルがあまりにも高すぎるため、オツタルたちでは致命傷を与えることができなかった。

そして、彼らはオラリオを出ていった。

きつと…自害するために

もし、彼らが入ってきたら…。

「確かに…彼らが入ってくれば5つのクエストを同時解決できるわ。」

「ええ、オラリオ連合の名は一気に上がる。かつての最強と最恐を超えるほどね。」

「ふむ…だが、問題はオリンピックだな。天の炎をどうにかしないと下界は滅びるぞ。」

「ああ、そうだ。だから使節団が来るのを待つしかない。もどかしいがな。」

「プロメテウスが来たらしいろと分かるのになー。」

ええ、そうね。

けど、これで光明が見えてきたわ。

へらは、「これで話はまとまったな。」と言い、セバスへ命令した。

「おい、セバス、メイ。これらをまとめてオラリオ連合へ通達しろ。」

「では、オラリオ連合の第一回定期総会と行きましようか。」

「そうですね。まずはリリさんですね。」

あの子が大変だけどね。

同情するわ。

さて…私達もランクアップしたことだし、より稽古に励まないと！



## 第401回 砂女王、再会

私は、アラム・ラザ・シャルザードだ。

1年前、「フレイヤ・ファミリア」の助けによつてシャルザード王国を救ってもらい、女王に即位した。

あの時：私はフレイヤの眷属になることより、シャルザード王国を選んだのだ。

この1年間、家臣の皆のおかげで何とかつがなく治めることができた。

神ラシャブがオラリオへ入ったという情報もあったが、こつちが重大だった。

2ヶ月程前デタイン砂漠から黒い砂嵐が来て、我が国民が多く犠牲になった。

私自ら、軍隊を出撃させなんとか黒い嵐を収め、それを引き起こしたモンスターを仕留めた。

犠牲は大きかったがな。

だが、このモンスターは見ることがなかった。

幸い、ドロップアイテムを落としてくれた。

オラリオの熟練とした冒険者たちならわかるだろうと思う。

なので：私が来た。

経験豊富な「フレイヤ・ファミリア」なら知っているだろうと。

「フレイヤ・ファミリア」との面識がある私なら、会ってくれるだろう。

…フレイヤやアレンたちに会いにきたというわけではない！

ほ、本当だぞ！

そして、私はボブマンの手引きによってオラリオへ入った。

すごい塔だな…すごい人だな。

いかんいかん、田舎者ではないのだぞ。

あの塔にフレイヤが…いるのだな。

……あの女神らしいな。

そして私は今、オラリオのギルド長、ロイマンと対面している。

あり得ない衝撃の事実を知った。

「…何だと？フレイヤ…いや神フレイヤがない？」

「そうでございませう。『フレイヤ・ファミリア』は『ヘスティア・ファミリア』との戦争  
遊戯で解散されており、神フレイヤは行方不明となっております。」

「それは…困る！私達はどうしても神フレイヤに会わなければならないのだ！」

「そう仰れても困ります。私共も、神フレイヤの行方を知らないのです。」

「……………くっ！」

「シャルザード王国の使者アリュイ殿。神フレイヤへのご用件をお教えいただけますでしょうか？」

「…神フレイヤの面前でないと話せない。【ヘステイア・ファミリア】へ問い合わせれば教えてくれるのか？」

「難しいですな。1ヶ月前に敵対していたファミリアですから、そうそう簡単に教えてくれるかわかりません。」

「くっ…！」

【フレイヤ・ファミリア】が戦争遊戯で負けた!?

あり得ない!

あの岩山の如く屈強なオツタルが!

あの砂嵐の如く駆けたアレンが!

あの雷の如く明敏なヘディンが!

あの影の如く多くの命を狩ったヘグニが!

あの無限の連携を誇ったアルフリッグたちが!

…負けた?

彼らの強さは私がよく知っている。

その彼らが…【ヘステイア・ファミリア】に負けた?



「フレイヤ・ファミリア」の武名は未だに世界でも届くぐらいなのだ。

「ヘスティア・ファミリア」の名は全く聞かないぞ！

私がそう葛藤している間に、目の前の、ボフマンとダブるぐらいのロイマンが目を鋭くしながら、助言をくれた。

「アライ殿……。どうしてもなら『フレイヤ・ファミリア』の改宗された方々へお会いなされてみますか？ 知っているかもしれません。」

「!? お、教えてくれ！」

アレンたちが!?

…フレイヤ以外に改宗する奴らとは思えないが、会わなければならぬ!

「わかりました。ただし、アライ殿一人でその場所へ向かわられて下さい。」

「「なっ! それは!」」

「やめろ。…わかった、私一人で向かおう。」

1年前の時と違い、私は慣れている。

あいつらへの対応を間違えると、お前らは殺されるぞ。

そして、私はロイマンに教えてもらった『豊穡の女主人』へ向かった。

ここに……いるのか？

想像もできん……。

あいつらがこういうのをすることができるとか？

想像してみよう……。

……。

……うえつぶ。

やめよう。

まあ、いい。

入ればわかるだろう。

「失礼する……。」

「いらつしやいませー！お一人ですか？」

む？猫人か。アレン……じゃないな？

……？

気のせいかな、似ているな？

何となく。

「あの一？」

「ああ……。その……人探しをしていてな。」

「はい？どなたでしようか？」

「ええつとな…。!?」

…あのウエイターは…アレン？

…ま、間違いない！

あの無愛想ぶりは！

「あ…？てめえは！」

「アレン！会いたかった！」

私は恥も外聞も捨てて、アレンへ抱きついた。

「え？…：兄様？に、兄様に春が！」

「おい！愚図1号、てめえ何言ってやがる！おい、このアマ！離れろ！」

「ニヤー！サーに女が!？」

「スクープだよ！」

「轢き殺すぞ？（チャキ）」

「「サーセン（ニヤ）！」」

ああ、間違いない！

アレンだ！



「おい…何だ。アレは。」

「知らないよ。それよりアタシのシチュウの感想を聞かせな。」

「悪くない。だが…ぼやけてないか？俺は白味噌とに入れて、コクを引き締めているぞ？」

「白味噌？極東のアレかい…試してみるよ。はあ…まだまだアンタには敵わないね。」

「他にも色々あるぞ？温度や湿度、天気によって入れるものを変えているぞ？」

「料理にこだわりすぎだよ！」

「いや、ここは料理屋だろ…。」



## 第402回 砂女王、相談。

久々の再会でつい泣いてしまった。

アレンは相変わらず迷惑そうな顔をしていたがな。

…ああ、懐かしい。あの時の旅が。

「ぐすつ…すまない。アレン。」

「…てめえ、国はどうした？」

「ちゃんと治めているぞ？今回は使者としてオラリオへ来たんだ。」

うむ。私自ら、オラリオを見ないと始まらないからな。

まあ、女王自らが来るのは前代未聞だ。

家臣たちも猛反対していたからな。

なので、使者の一人と無理やりすり替わった。

旅の途中で使者団で顔見せた時、あいつらは顔面蒼白していたな。

Uターンして帰ろうとしたが、女王権限で押し通した。

ふふん。

みんな、胃を押さえていたな。

悪いことをしてしまったな…。  
帰ったら休暇を与えておこう。

おっと、いかんいかん。

「女王自らかよ…。それで何の用だ?」

「フレイヤに会いたい。どうしても頼みたいことがあるんだ。…本当なら「フレイヤ・ファミリア」に依頼したかったのだが、解散してたとは知らなかったんだ…。」

もつとオラリオと友好を深めるべきだったな…。

大使でも置くか…。

アレンは俯いて話してくれた。

「…フレイヤ様はもういいねえ。送還はされてないのは確かだ。」

「何故…「ヘステイア・ファミリア」と戦争遊戯をしたのだ?」

「てめえも知ってるだろ。フレイヤ様は伴侶を探していた、その伴侶が「ヘステイア・ファミリア」にいた。俺らは負けたんだ。それだけだ。」

「伴侶が「ヘステイア・ファミリア」に…? あ、貴方もか!?! あのオツタルでも…ヘディングもか?」

「そうだ。」

馬鹿な…。

圧倒的な力を見せた彼らが…。

信じられない…。

あの侵略してきたワルサ、「ラシャプ・ファミリア」を一蹴した彼らが…。

負けた？

いやいやいや！特にオツタルはレベル7じゃないか！

それを超えたレベル8が出てきたとは聞いてないぞ！

それに、伴侶だと？

フレイヤがいつしか言っていた伴侶が「ヘステイア・ファミリア」にいたのか？

……百聞は一見に如かず、だな。

戦争遊戯の勝者である「ヘステイア・ファミリア」なら、フレイヤの行き先を知って

いるはずだ。

「……【ヘステイア・ファミリア】へ取次願えないだろうか？」

「てめえ一人で行け。俺は行きたくねえ（あんな恐い女がいるところにはな！）」

「アレン！頼む、一緒に行ってくれ！」

「お、おい！服をつかむな！放せ！」

初顔で「ヘステイア・ファミリア」へ行っても入れるわけないだろう！

「うわー…あの兄様にあそこまで迫るなんて。」

「サー、なんで【ヘスティア・ファミリア】へ行きたくないんニヤ?」

「あのメイドと執事がいるからじゃない?」

「納得した(ニヤ)。」

メイドと執事?

何のことだ?

アレンは私の手を服から無理やり放した。

「と、とにかく!何の用なんだ!」

「…デタイン砂漠を中心に周辺へ黒い嵐が襲っているんだ。その原因が…見たこともないモンスターなんだ。軍勢1000人で囲んでようやく一匹を仕留めたんだが、他にも数千匹いて手に負えなくなったため、助けを求めにきたんだ。」

「見たこともないモンスターだど?」

ああ、あれは厄介なモンスターだった。

毒を撒き散らすわ、黒い風を纏って暴れまわるわ…。

しかも、攻撃を受けた相手がミイラ寸前になるぐらいだ。

1000人の兵士で遠巻きにして、弓矢で体力を削り槍で傷つけてようやく倒せた。

ドロップアイテムが出たのは僥倖だった。





その大男は驚いたように言った。

「……………これは！」

「てめえは……。」

「馬鹿な……そんなはずがない。いや、まさか……（ガリッ！）」

「なっ！そ、それは食べ物じゃないぞ！」

それは劇物なんだぞ！

触るだけで兵士たちが毒に侵されて倒れるぐらいだ！

だが、その大男は平然としていた。

そして悔しそうな声で言った。

「……間違いない、この味は。糞っ！仕留めたはずだ！……あの時、ドロップアイテムがあったというのか!？」

「落ち着きなよ、アンタ。」

「ミア！落ち着けるか！これは俺らの失態だ！」

「……………まさか、そうなのかい?」

……?

どういふことだ?

そのドロップアイテムについて何か知っているのだろうか?

それにこの大男……オツタルと同じぐらい強いかもしれない。少なくとも、只者ではないのは確かだ。

アレンへ聞いてみるか。

「ア、アレン……。こちらの只者ではない方はどなただろうか？」

「てめえは黙ってろ。……解決してくれるかもしれねえ。」

え？か、解決？

そんな馬鹿な……こんなにあつさりと？

そのフードの大男は私へ振り向いて言った。

「おい。小娘。」

「ここ、小娘!？」

「【ヘスティア・ファミリア】へ面貸せ。紹介してやる。」

「え？」

え？この大男は……【ヘスティア・ファミリア】なのか!?

ミアという女将がその大男へ言った。

「……いいのかい？」

「ああ、これは俺らの失態だ。今から単独で行ってもいいが、ベルを置いていくわけにはいかねえ（メーテリアに殺されるからな……）」

「……その方がいいよ。」

「さっさと来い。」

「あ、ああ！」

私はその大男へついていった。

渦中の「ヘステイア・ファミリア」へ接近できる！

そして…フレイヤに会う！

## 第403回 侍従長、質問。

ザル坊が定休日に、女性を連れてきたのは驚きました。

しかもまだ、小娘ではありませんか。

ザル坊の嗜好が変わったのでしょうか…？

折角集めたというのに。

聞けば、ソレではありませんでした。

一安心しました。

無駄にならなくてよかったです。

そしてザル坊がドロップアイテムの件から、デタイン砂漠の異常を知りました。

思ったより早いですね。

まあ、手間が省けたようで何よりです。

証拠と共に、女王陛下が来られましたので。

トントン拍子なのが怖いですね。

「なるほど。こちらの方がシャルザード王国の使者であり、女王ですか。」

「あ、ああ、アラム・ラザ・シャルザードだ。」

「これは失礼しました。「ヘスティア・ファミリア」団長ベル・クラネル専属メイド長のメイと申します。お見知りおきを。」

「う、うむ。」

まだまだ若輩者ですネ。

女王になりたてですから、仕方がありませんネ。

ザル坊は私に向かって言いました。

「メイ、俺はこの失態を拭わなきゃいけねえ。ベルを頼むぞ?」

「だが、断る!」

「おい!冗談じゃないんだぞ!」

言ってみただけです。

全く冗談の分らない子ですネ。

冗談はさておき、本題に入る前にザル坊を落ち着かせましょうか。

この子は責任感が強いから、一人でも復活したベヒーモスを葬りに行こうとするはず  
です。

ですが、そんな勿体ないことはさせません。

「ザル坊、落ち着きなさい。それはこちらで把握しています。私はあの時何度も言いましたね?」「ドロップアイテムは本当になかったのか?」を。」

「……………」

「まあ、仕方がありません。巨大が故で砂漠となったため、見つからないのは止むを得ません。それに、貴方も重傷だったのですから。」

「……………」

ようやく落ち着いたようですね。

痛いところ突かれてしまったのですから。

さて、そろそろ本題へ入りますか。

「さて、アライさん。いえ、アラム女王陛下。このミツシヨン、オラリオ連合が引き受けましょう。」

「え？あ、ああ。お願いします。」

こちらの責任かもしれませんが、これでシャルザード王国に貸しができたと思うと上々ですね。

この女王が知っているかわかりませんが、情報はできるだけ集めておきたいですね。他に何か気づいたことありましたら、教えてください。」

「1つある。……兵士の世迷い言と皆は言っているのだが、私としては気になるのだ。」

「ほう、何でしょう？」

「データイン砂漠に斥候の兵士を向かわせたのだが、10人行かせて帰ってきたのは1人

「ただだった。その兵士が言うには…砂が喋った…と。」

「!!」

「あり得ないと思つたのだが…、その、私は女王になるまで色々あつたのでな。経験上、引つかかるんだ。」

ほう、興味深いですね。

あの子達からは、ベヒーモスが喋つたというのは聞いていません。

ザル坊も驚いていますからね。

異端児がダンジョン以外にいないという保証はありません。

ですが、一応確認しておきましょう。

坊ちやまが討伐されたモス・ヒュージ強化種のような知性を持ったモンスターかもしれないからね。

「砂が喋つただと…?」

「なるほど、貴重な意見をありがとうございます。ちなみにどのような事を喋つたかわかりますでしょうか?」

「こう言つてたらしい。『足りん、足りん、もつとよこせ。さらなる命を、さらなる魂を!』と…。」

「なるほど、なるほど。大変興味深いですね。さらなる貴重な意見をありがとうございます。」



ます。ご安心を、この件はオラリオ連合が引き受け、グティン砂漠にいる元凶を討伐してみせましょう。」

ベヒーモス復活ですが、ザル坊たちが倒したベヒーモスではないかもしれません。

知性を持ち、砂を操り、わざわざ兵士を一人人生かし逃したという狡猾さを持ったベヒーモスですか。

いずれにしろ、容易ならない相手なのは確かです。

ふふふ、その相手ならあのレベル6止まりには最適でしょうね。

「ああ……よろしく頼む。できることあれば言ってくれ、報酬は出す。」

ほう、なかなか強かな女王様ですね。

依頼をし、報酬を提示する…。

それによつて私達「ヘスティア・ファミリア」と誼を深めようとしていますね。

例え、「フレイヤ・ファミリア」寄りでも国のことは忘れてませんね。

では、現状で不足してて前からほしかったものを要求しますか。

「では、早速。香辛料などの仕入れを直接こちらへお願いします。」

「え?…そんなことでいいのか? ヴァリスとか宝石とか…。」

「いいません。」

「あ、ああ。…あと一つお願いがあるのだが。」

「何でしょうか?」

女王の顔から只の娘の顔になりましたか。

さて、どんな要求なのでしょうか?

「フレイヤ…いや神フレイヤの居場所を教えてください。」

「ふむ…いいでしょう。ただし」

「た、ただし?」

「この件は「ヘステイア・ファミア」のトップシークレットです。もし漏らせばシャルザード王国は砂塵になると思いなさい。」

「ひいっ!」

たかが背後を取って頸動脈にナイフを立てただけで、怖がらなくてもよいでしょうに。

ザル坊が気の毒そうな顔で私と女王へ話しかけてきました。

「おい、メイ…。怖がらせすぎだ。」

「いかがでしょうか?」

「わ、わかった。私一人の胸の内に秘めて墓場まで持っていく。」

「重畳です。今、出かけておられますのでお待ちくださいませ。」

「出かけている…?え?ここにいるのか!」

「はい、そうです。」

戦争遊戯勝利での坊ちやまの要求なのでから、ここにいて当たり前でしよう。

「そ、そうか……。なら、待たせてもらっても？あ、オラリオ名物の『暴喰ラーメン』を食べたいのだが。シャルザード王国まで噂が広まっているんだ。店を教えてくださいませんか？」

「ほう、それはそれは。こちらがその店長です。」

「え!?て、店長!?!」

「ああ。いいぜ、食わせてやるぞ?（この短期間でもう広まっているのか……）」

「よ、よろしく頼む!」

計画より広まっているようですね。

ですが、問題ありません。

そろそろ、支店でも出しましょうか。

ザル坊のいる本店で連日行列なのでから、広めないといけませんね。

そのために、やや高価な香辛料が必要なのです。

女王様は食堂の椅子に座って、ウキウキしていますね。

まさか、それが本命でオラリオへ来たのではないでしょうね?

まあ、どうでもいいことです。

国へのつなぎと共に手がかりを持ってきたのですから。  
おや、ザル坊が話しかけてきましたね。

まだ、ベヒーモスに関して気にかけているようですね。

『おい…メイ。何のつもりだ？』

『経験値と偉業がやってきました。』

『…俺としては複雑だ。』

まあ、気持ちはわかります。

ですが、喋ったというのが気になりますね。

どのぐらいの知性を持っているのかが。

『当時のベヒーモスほどではないと思いますが、喋ったというのが気になりますね。』

『俺が向いて『ダメです』…何故だ？』

『レベル8の貴方が行くより、下に譲りなさい。』

貴方が行って討伐しても、大した経験値や偉業にならないでしょう。

『…何か考えがあるのか？』

『ええ、安心しなさい。』

『俺としてはお前が言うのと、ちつとも安心できねえぞ…。』

全く失礼な子ですね。

## 第404回 街娘、再会。

レベル2に上がったけど、なるほどレベル1と違うわね。  
結構違和感を感じるわ。

まあ子どもたちにとって戸惑うのも仕方がないわ。

けど、元女神である私達にとっては些細なことね。

神としての力にいつも振り回されているのだから、このぐらいのズレは問題ないわ。  
ということ、今日もいつも通りの模擬戦をやったわ。

【象神の詩】アーデイ・ヴァルマも巻き込んでね。

エイナと春姫、リーゼではもう相手にならないから、仕方がないわ。

けど、ガネーシャはこの子を大分甘やかしているみたいね。

関節を極めただけで「痛い痛い痛い！ギブ！ギブだつて！」と泣き言うんですもの。  
でもダメよ。

大抗争のように、また死んでは目も当てられないわ。

なので、レベル2となった私達で徹底的にしごいたわ。

アストレアの子たちは遠巻きに同情の目をアーデイへ向けていたわ。

けどね…、私達がレベル3、4になったら貴女たちの番なのよ？

そして私達は帰路についている。

…何故かしら？胸騒ぎがするんだけど。

気の所為ね。

「ふう…、レベル2となると違うわね。」

「ええ、本当ですね。」

「確かに技の冴えが違うな。だが、ズレを戻さないと鈍るな。」

そうね。まあ、ズレは私達女神にとっては簡単なことね。

「……あれだけお互いボコボコにしたというのにですか？」

「三人とも片腕、片足が折れた上に土埃だらけなものね…。その後、「ミアハ・ファミリア」によって治してもらったけどね！」

「うう…アビリティがCに入ったけど、もうボロボロだよ…。私の方がまだ上なのに…。まあ、おかげでステータスが今までより爆上がりだけどね。レベル4ランクアップも近いね！」

ええ、けど。

アンタレス討伐までに早く上がってもらわないと。

レベル5間近がベストね。

「何言っているの？ さっさと上がってもらわないとダメよ？」

「え」

「そうだぞ。ガネーシャは甘いな。」

「本当ですね。ガネーシャ様のいたところは確かカヤリパヤットでしたね？ なんで教えなかつたでしょう？」

カヤリパヤットはコマンドサンボやパンクラチオンと同じ総合格闘技よね？

ガネーシャも結構やりこんでいるはず。

私もコマンドサンボをオツタルたちへ教えようとしたけど、「フレイヤ様は我らが守りますので、それは不要でございませう」と言うんですもの。

「まあ、私達も教えなかつたから神のことは言えないけどね。」

「私は教えたぞ？…けど、あの子達が嫌がるんだ。「痛い」って。」

「エルピス…貴女の教え方がスパルタすぎるのよ？」

「む…。」

「まあまあ。…ガネーシャ様が見物に来られましたら稽古をつけますか？」

「あ、いいわね。」

「ふむ、ヘルメスと違いあちらは鍛えているから大丈夫だろう。」

そうね。楽しみだわ。





「私に、ですか？」

「はい。あちらの食堂でお待ちしていますよ。その前に……」

「……え？」

あの娘が？ここに？

---

そして私は久々にアライイに会いに行った。

けど……アライイは……

「……………」

「（ズルズルズル）。ふう……もう少し刺激が足りないな。」

ラーメンを食っていたわ。

「これでも激辛なんだぞ？」

「シャルザードには、ほんの少量でこれより辛い香辛料があるぞ？」

「ほう、それは試してみたいな。」

何やっているの？アライイは。

【暴喰】……いえザルドのラーメンを食っているのはわかるわ。

問題は横にある丼の数よ。

3杯はあるじゃない。

「ああ、ぜひ試してみてくれ！帰国したら、家臣たちへ命じて【ヘスティア・ファミリア】へ直接送るよう指示しよう！」

「おい…：職権乱用じゃないか？」

「いやいや、香辛料だけで現世界最強の【ヘスティア・ファミリア】と縁結べるなら、原価でも問題ない！むしろ、それによってシャルザード王国の背後にいと勝手に誤解してくれるさ…：ただでさえ、ラキアの圧力が強いんだ…。」

「つたく、したたかな女王様だけ？そんな悪どいことは一体誰に教えてもらったんだ？」

「ああ…：フレイヤさ。」

「あー、納得した。」

!?

私は教えた覚えは…：…あるわね。

訂正しないとイケないわ。

「ねえ、アリイ。私のせいにしないでくれる？」

「いや、あんたが私を変えた…：んじゃないか？え？…：フレイヤ？え？」

「久しぶりね、アリイ。」

「フ…：フレイヤ？」

まあ、戸惑うのも無理ないわね。

…もう少し感動の再会を期待していたけど。  
井が背景になったら、意味ないじゃない。

## 第405回 砂女王、呆然。

私はフレイヤと久しぶりに会った。

あの時のフレイヤから何か険がとれて、さばさばとしていた。

【白兔の脚】という伴侶が見つかり、そばにいることになったからなのか？

……嫉妬してしまうな。

フレイヤをここまでさせた【白兔の脚】に。

私が何もできなかったフレイヤを。

そしてフレイヤはあの日から、今日までのことを聞いた。

【白兔の脚】との出会い…彼の偉業…そして【フレイヤ・ファミリア】の戦争遊戯…。

ほぼ惚気話だった。

途中で激辛ラーメンの残り湯を飲まないと、聞いていられないぐらいだった。

フレイヤがヒューマンになったのを聞いた時は驚いた。

あのメイドがトップシークレットと言った理由がよくわかった…。

神をヒューマンにするのが、彼の血？

もはや、神じゃないか…。

「……………その【白兔の脚】が貴女の伴侶なのか。」

「ええ、そうよ。」

「彼の血によつて…ヒューマンに？」

「ええ、そうよ。」

「彼は…ヒューマンなのか？神ではなく？」

「間違ひなくヒューマンよ？…まあ、神と崇められてもおかしくないわね。」

「そ、そうか。」

フレイヤがそこまで言うとはな。

ますます興味を持った。

そしてフレイヤから話を切り出された。

「それでアライイ？詳しくはメイから聞いたわ。」

「ああ、これで私の肩の荷が下りた。安心して帰れる。」

「そう…それならいいわ。…ねえさつきから気になってたけど、何で井から手を離さないの？それに横の井の数は何？食べ過ぎよ。」

「いや…『暴喰ラーメン』にハマつてしまつてな…。なあ、ここの支店をシャルザード王国へ出さないか？家賃や税金は無料にしよう！」

うむ！これほどならシャルザードで流行るだろう！

いや、絶対に流行る！

ザルドという大男はそれを聞いて呆れた。

「あんななあ……。」

「はあ……まあ、気持ちはわかるわ。デタイン砂漠のモンスターを討伐してからにしなさい？」

「ううむ。ここの大使に立候補するか……。」

「……貴女、女王でしょ？」

「仕方がないな……。」

……しばらくの間滞在期間を長くするか。

あいつらは当分胃を痛めてもらうが、こここのラーメンを食べばわかるだろう。  
うむ。

フレイヤは心配するかのようにつた。

「それでアライイ？王国はどう？」

「何とかつつがなく治まっている、とりあえずはな。あ、神ラシヤプがオラリオに潜んだという情報があった。気をつけろよ？」

「もう送還したわよ？」

「そうか……え？送還？もう？」

「ええ。」

「…早くないか？」

まあ、いい。

ざまーみろ、ラシヤプ！

さて、そろそろ切り上げるか。

その前に…。

「それはよかった…。ところで、その【白兔の脚】に会ってみたいのだが。」

「ダメよ。」

「え？」

「ダメよ。」

「…あのフレイヤが開口一番で「ダメ」というのは珍しいな。

疑問に思った私は聞いた。

「いや…何故だ？」

「ダメだったらダメ。さあ、帰りなさい。部下が待っているでしょう？」

「…：…そう頑なにすると会いたくなるな。私の性格を忘れたのか？」

「力づくでも帰らせ「ただいま！」…：…。」

「（ニマア）なるほど、今の声が彼なのか。」

苦虫をつぶしたフレイヤのこの顔は、初めて見るな。

…フレイヤに勝ったと思うのは、この場が初めてかもしれん。さて、どんな奴なのだろうか？

あの屈強なおツタルたちを伏れさせ、

傲慢な美の女王フレイヤを見惚れさせ、

世界最強となった男は一体どんなやつなのだろうか？

え？

その場に現れたのは…どこでもいる少年だった。

いや…、白い髪に赤い目…兎みたいだな。

…この子が？

冒険者になって半年あまりで、レベル6となった？

【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】を敗北にまみれさせた？

嘘だろ…。

しかし…何となくだが、どっかに惹かれるな。

いや…見るだけで心が洗われるような感じがする。

その少年は大男を見て声を出した。

「あ、ザルド叔父さん…こっちにいたんだ。店しまっていたから。」



「ああ、ちよつと野暮用だな。」

「ちようどよかった！いつもの『暴喰ちゃんぽん』をちようだい！人參多めで！」

「ああ、いいぞ。待ってろ。」

……ふむ。そんなに悪いような人間ではないな。

人參多め？ふふふ、つい微笑んでしまったぞ。

その少年は私に気づき、挨拶してきた。

「あ、お客様ですか？初めまして！〔ヘスティア・ファミリア〕団長のベル・クラネルです。」

「あ、ああ。シャルザード王国の女王である、アラム・ラザ・シャルザードだ。」

「ええっ！じ、女王様!?あわわわ……た、大変失礼なことを。」

ふむふむ。礼儀正しいな。

言つては悪いが、冒険者に合っていないような子だな。

……いや、だからこそ合っていないから【英雄】に合っているかもしれん。

気に入った。

国へ連れて帰りたい、と思うぐらいだ。

そして私はその少年に急接近した。

「いやいや、気にしないでくれ。無礼講と思ってくれ。さあさあ、横に座ってくれ！」

「あ、はい（近い近い近い！何か当たっている！）」

「……………（惚れたわね、アライ）」

「ほらよ。」

「ありがとう！ザルド叔父さん！し、失礼します。」

「いやいや、麵が伸びない内に食べなさい。」

「はい！いただきます！（ズルズルズル！）」

ふふふ、可愛いな。

『また…増えたか。しかも女王サマだぞ？マジで、ベルを世界の王にするつもりじゃないだろうな？あいつらは…。いや、俺は何も見てねえ何も知らねえ。強く生きろよ…べ  
ル。』

？

何故、その大男は涙ぐんでいるのだろうか？

フレイヤがしびれを切らしたように言った。

『アライ…、もういいでしょ？ほら、帰りなさい。』

『なるほど、彼か。…若いな（それに…私好みだ）。』

『アライ？』

『頼みがあるのだが…』

『ダメよ。』

『まだ何も言っていないぞ。』

『言わなくてもわかるわ。ダメだったらダメ。』

ははーん。

この少年に私が惚れたということに気づいたようだな。

いいではないか。

そもそも私をこんなにしたのはお前なのだぞ？

『……私を無理やり抱いたくせに。彼も奪っただろう？』

『……まだよ。』

『は？まだ？』

『……ベルはまだ未精通なのよ？』

『何……だと？』

『どうせ、子種が欲しいとか言うんでしょ？ダメよ。』

『ううむ、私に男児がないから……。よ、予約はできないだろうか？』

『ダメ。』

ううむ、シャルザード王家の血に【英雄】の血が入れば今後のシャルザードは益々栄えるというのにな。

私がそう思っていると、先程のメイドが気配を出さずに現れた。

「失礼します。それはいいのでしょうか？王家の血が薄れても？」

「うわっ！」

「メイ……」

フレイヤがこうまで警戒するのは初めて見たな。

メイドの質問に私は答えた。

「今更だ。それに……『英雄』の血なら誰も文句は言わないだろう？」

「それでしたら、しばらくお待ちくださいませ。予約は受け付けますよ？」

「そうか！」

「ちよつと！メイ！」

やった！予約できてよかった！

フレイヤが今まで見たことないほど、慌てているな。

メイドはすました顔で言った。

「いいではありませんか。その代わり産まれたらその子を徹底的に守りなさい。そうし

ないと……」

「そ、そうしないと？」

「シャルザード王国を砂塵にします。」

「……覚悟の上だ。」

あの子と出来た子なら、私が全身全霊をかけて守って育てよう。

そう覚悟した私を見て、メイドは満足したかのように言った。

「そうですか。では予約しておきましょう。」

「むー！」

「そうか！うむ！来てよかった！」

「稽古から早く帰るべきだったわ…。」

家臣の目をくらまして来た甲斐があつたな！

さて、これで帰るか。

少年はまだ食っているか。ならシメに…。

「では、最後に…『暴食激辛マシマシ味噌ラーメン』を食って帰るか。」

「貴女…ハマリすぎよ。」

仕方がないだろう。

美味しいのだから。



「ここを『アマテラス・ファミリア』の別荘にするのもありだな!」  
「そうですね!」

あまりの無礼ですね。

アルフィア殿が不快そうな顔をしています。

あの使者の狐人は…サンジョウウノの関係者でしょうか?

「ちっ…、あの馬鹿狐か。『アマテラス・ファミリア』は使者の選択を間違えているだろうが。」

「輝夜?知っているの?」

「ああ…よく知っているとも。ウザかった奴らの一人だ。私の記憶のままなら…サンジョウウノの次期当主だ。」

「サンジョウウノ次期当主!?まさか、春姫殿の…?」

「ああ、春姫の兄上だ。腹違いのな。」

あの方が…春姫殿の兄上!?

全然似ていません!

「思ったけど、何でタケミカツチ様がないの?同郷よね?」

「ええ。前日に同席すると言ってきました。しかし、ヘラ様がお断りされました。」

「…ヘラが?何故だ。」

「『邪魔だ』と。」

「取り付く島もありませんねえ。」

「何か理由があるのですか?」

「さあ…。タケミカツチ様は『同郷の神として見届ける必要がある!』と言い張ったのですが、ヘラ様が『五月蠅い。これ以上抗議するならアマテラスを送還することを検討するぞ?』と言われ、引かざるを得ませんでした。」

タケミカツチ様は同郷の神なので、何かと助言をいただけると思うのですが…。

け、決して懸想を抱いている方なので肩入れしているわけではありません!

「うーん、何かあるの?」

「でしようね。その後、セバス殿がタケミカツチが何か耳打ちされて、青ざめていました。『そこまでするのか? 奴らがさすがに不憫だぞ…。いや、情けをかけるようではないんだが。…そもそもうまくいくのか?』と言っておられました。」

「…セバスが? だからか、『使者が何か無礼なことを言っても耐えて下さいませ』と私に言ってきたのか。」

「…:…:すごく嫌な予感がします。」

「…:…:リオン、私もよ。」

同感です。



しかし、彼らの無礼ぶりは同郷として恥ずかしい限りです。

中央の「アマテラス・ファミリア」について輝夜殿から聞いたのですが、ここまでとは思いませんでした。

「【アマテラス・ファミリア】はああいうクズ共ばかりなのです。」

「…吹き飛ばしたいな。」

ホームが半壊しますので、やめて下さい。

そしてヘステイア様と面会しました。

それでも先程の無礼はそのままでした。

…つまみ出したいですね。

「それで…何の用だい？」

「口を慎め！ 炉の神ごときが。」

「では、神ヘステイア。私はサンジヨウノ家の次期当主です。我が家の落ちこぼれの春姫を引き取りに参りました。」

「タダでよこせ！」

今、何と？

春姫殿を…落ちこぼれと？

春姫殿を…タダで？

もう…許しません！

と、思っていましたら。

「何だと？」

ヘステイア様が…、かつてアルフィア殿を叱責した時と同じぐらいの神威を出しました。

ヘステイア様は結構春姫殿を叱っています、あれでもかなり可愛がっていますからね。

その春姫殿をけなすとは…、ヘステイア様が怒るのも当然です。ちよつと嬉しいのは内緒です。

ベル殿？

ベル殿はザルド殿との稽古のためクノツソスへ行っています。

もしおられましたら、ベル殿でも怒るのは間違いありません。

私でも「フツノミタマ」で彼らを押しつぶし、土下座させたいぐらいです。

何故、このような無礼者を「アマテラス・ファミリア」は派遣したのでしょうか？

明らかに喧嘩を売っているとしか思えません。

私が言うのもなんですが、現世界最強の「ヘステイア・ファミリア」に喧嘩を売るのは愚かと思えません。

…馬鹿なのですか？

案の定、彼らはヘステイア様の神威に怯えていますね。  
当然です。

「ひ…ひいっ！」

「な……、この神威は…アマテラスより…上だとお!?」

……アマテラス様を呼び捨て？

輝夜殿のおつしやる通り、「アマテラス・ファミリア」は邪神の方々によって巢食っているようですね。

ヘステイア様からの怒りはまだ続いていました。

「もう一度問おう。」

「主らは今、何と申した？」

「答えよ」

「き、聞いておられません！これほどの神威…神格をお持ちとは！あの宿の主人、『神ヘステイアはヘボ神だから強く押せば大体言う事を聞く』と言つたのに、騙したな！」

『宿…?』

『…嘘情報を掴まされたということ?』

『神ヘステイアがそのような神なら、ベルがとつくにビッチ神に攫われているだろうに』

…。」

『そうですね…。何故宿の主人がそのようなことを?』

何故でしょうか?

彼らの泊まる宿にそのような嘘情報を…?

使者の方々は狼狽していますね。

いい気味です。

「ま、待つてくれ…ヘステイア…。いえ、ヘステイア様!ど、どうか。お怒りを鎮めて下さい!」

「主らは我が眷属のサンジヨウノ・春姫を落ちこぼれといい、タダでよこせと申したな?」

「許さぬ。我が眷属のサンジヨウノ・春姫は、我が眷属で我が思いを一番受け継ぐ子である。」

『ベルは?』

『多分、ヘステイア様は母性のことを言っているのではないのでしょうか?』

『ああ!それは確かにベルにはないものね!むしろ、逆に母性をわき立てるよね。』

『『わかる。』』

『ゴホン、確かに春姫は私達の中で一番母性が高いですねえ。』

『アレもヘステイア様に次いで大きいからですね…。はあ…。』  
『リオン…、気持ちにはわかるわ…。』

確かに…春姫殿はあのウィーネ殿をベル殿に次いで懐かれていますからね。

リリ殿が調教師になれるのでは？と言っていましたか…。

調教師ではなく、誰にでも慈愛を授けることができる“母”ではないでしょうか？

そういう意味では、春姫殿はヘステイア様の意を最も受け継ぐ方ということになります。

ヘステイア様は寛大なお方です。

…かつてベル殿に怪物進呈をした私達を許したぐらいです。

その寛大な心に近いのは、ベル殿と春姫殿と思います。

そして…深層のトラウマに苦しんでおられたベル殿に気づき、落ち着かせたのは春姫殿だけです。

ヘステイア様のおっしゃる通り、春姫殿はベル殿を除きヘステイア様の眷属に一番相応しいと私は思います。

## 第407回 絶†影、同情。

私がそう考えている間にも、ヘステイア様の怒りは続いていました。

「—私の愛する子をよくも愚弄してくれたな？それは「アマテラス・ファミリア」からの宣戦布告と聞き入れよう。」

『せ、宣戦布告!?!』

『かなり怒っていますねえ…。いつものヘステイア様では考えられないことですね。』

『まあ、あそこまで愚弄されれば喧嘩を売っているのも同じですね。』

宣戦布告とは…。

まあ、そう受け止められても仕方がありませんね。

それを聞いた使者の方々は更に青ざめて、焦っておられました。

「せ、宣戦布告!?!ち違います!お、お待ちくださいませ!タダでというのは言い間違いです!こ、こいつからの案です!」

「な!?!貴方様が申したことでしょう!」

「黙れ! 貴様のせいでヘステイア様の怒りを買ったではないか!…じゅ、十億ヴァリスあります。それで…サンジヨウノ・春姫を身請け願います。」

『じゅ、十億ヴァリス!』

『…春姫を戦争遊戯で見て、生贄の標的にまた選ばれた可能性が高いですねえ。』

『現最強の「ヘステイア・ファミリア」から改宗させるには、それなりの移籍金が必要と考えたからでしょうか?』

『随分と安くふっかけられたものだな。妖術師としての真の価値からしたら安すぎる。最低でも一兆ヴァリスだな。』

『『一兆ヴァリス!』』』

それ以前に、私は身請けというのが非常に気に入りません。

春姫殿は、もはや娼婦ではありません!

ヘステイアの神威が更に上がりました。

当然ですね、火に油を注ぐようなものなのに…。

「身請け、だと?」

「…まずまず許せぬ。其の者に罪をなすりつけたことも含めてな。」

「…また我が眷属は娼婦ではない。処女であることをこの処女神であるヘステイアが保証しよう。」

「え? まだ処女?」

『え? まだだったの!』』

『…アイシヤ様いわく、殿方の鎖骨をみただけで気絶するからそうです。』

『よく娼婦になれたものだな…。』

『あのおぼこ妄想狐が、そんなことできるわけないでしょうに…。』

まあ、そうですね。

今のところは、それが可能な相手はベル殿だけです。

……ベル殿が幼児化し、共に風呂へ入り共に寝ることでもかなり耐性がついたと聞いています。

アレはかえって春姫殿のためになったのでしよう。

…ベル殿は一生気づかない、いえ知らない方がいいと思います。

知ったら絶対に憤死します。

「去れ。主らがいることにより我が館が汚れる。」

「失せよ。二度と顔を見せるではない。」

『……これほどの怒りとはな。』

『ヘステイア様の眷属でよかったです…。』

『あの人たち馬鹿なの？輝夜。』

『…あれでまだ序の口です。』

『『『序の口!?!?』』』



「アマテラス・ファミリア」はどれだけ魔境なのですか！

：ツクヨミ様と仲間のみんなが非常に心配です。

早くも確保しなければいけません！

使者の方々はかなり焦っていますね。

それはそうですね、自分たちのせいで現世界最強の「ヘステイア・ファミリア」と敵対することとなり、抗争するきつかけとなったのですから。

「お、お待ちくださいませーい、今一度機会を！」

「ー我は失せよ。と申した。」

「ーどうしてもなら、主の後ろにいる女神へ縋れ。それによつては聞いてやらんこともない。」

『『あ』』』

…終りましたね。

何せ、彼らの後ろには…最恐の女神であるあの方がおられますから。

「へ？後ろ？（クルツ）………ひ………そ、そんな…。」

「…お前は大馬鹿神だな（ヘステイアをあそこまで怒らせるとは。天界でも私も見たことないぐらいだぞ？あの神威…あの神格の高さ…、やはり、大神にしたい…。」

「そ、そちらの女神様は？」

「へ……う。」

「へ？」

「さて……。ヘステイア、この神は私に一任してくれないだろうか？」

『終わつたな、あの神。』

『……まさか、ここまで計算していたのですか？』

『恐らくセバス殿ですね。宿の主人の件も含めて。』

『よくその宿の主人が協力したわね！……恐らく脅したわね！』

『「ガネーシャ・ファミリア」が知ったら、黙つていられないと思います……。』

ええ、そうですね。

しかし、そのような強引な手段をとるとはメイ殿とセバス殿らしくありません。

……まさか、ベル殿に何かをしたのでしょうか？その宿の主人は。

だとしたら、うなずけます。

あの方々は、ベル殿へ何かをした人たちに対しては容赦ありませんから……。

フリユネ殿のように……。

ヘステイア様はヘラ様へ返事しました。

「一任す。」

「一そちの好きにするがいい。」

「ーただし、楽にさせるな？そちの腕を見せてみよ。」

『…ヘラに対して命令…だと!?!』

『ヘラ様は怒って…おられないようですね。』

『むしろ、喜んでいるわね！何というか…母親からお手伝いを頼まれて頼りにされて喜んでいる女の子とダブるわ！』

『…何度も言いますが、ヘステイア様の眷属でよかったです…。』

『おい、命。お前は半年後に「タケミカツチ・ファミリア」へ戻るのだろうが。』

『…迷っています。居心地があまりに良すぎるんですよ…ここは！』

『『『わかる。』』』

1年限定の改宗といっても、ここ半年で多くありすぎです！

春姫殿と会えたのも助けられたのも「ヘステイア・ファミリア」ですが、それ以前に雰囲気が非常に居心地が良すぎます。

母を知らないこの身ですが、大いなる母性に包まれている感じなのです。

ヘステイア様と話しているだけでも、満たされるのです。

母というのはこのような感じなのかと。

…半年後になったらヘステイア様は改宗する私を止めないでしょう。

仮に改宗したとしても「ヘステイア・ファミリア」、いいえヘステイア様とベル殿に対

しての恩は絶対に忘れません。

ちよくちよく顔を見せに行きましょう。

……風呂という目的も兼ねて。

ヘラ様はアリーゼ殿の言う通り、どこか喜んでいました。

「（嗚呼……いい！……やはり大神にしたい！）わかった。来い……？」

「……………」

「ちつ……気絶しているか。おい、セバス。」

「はい、連れて行きます。」

!?! ！いつの間……。

気絶した邪神の首襟を掴み、引きずっていきました。

ご愁傷様です……。

残されたのは、春姫殿の兄上ですか。

呆気にとられていますね。

仕方がありません。

彼はハツとし、ヘステイア様へ向き直しました。

「あ、あの……？」

「――まだいたのか。我は失せよと言った。」

「帰ってアマテラスへ伝えるがいい。」

「貴様らの宣戦布告は確かに受けとった。戦準備をしておけ、とな？」

うしっ！

とうとう【アマテラス・ファミア】との抗争…ヤマタノオロチ討伐ですか。

気合を入れなければいけませんね。

「ひいひい！ さ、去らせていただきますすううう！」

彼は顔面蒼白し、バタバタとし去っていききました。

ヘステイア様は神威を収め、ため息をつかれていました。

「ふう…アマテラスは何をやっているんだよ…。」

「申し訳ありません。私の同郷の神と無礼者が失礼しました。」

「キミのせいじゃないよ。はあ…ボクとしたことがついカツとなつてしまつたよ。…こ

こにベルくんがいなくてよかつたよ。見せたくない。」

「お気持ちはわかります…。私でも切り刻みたくなくなってきました。」

「先程の人はいいの？」

「ほっておけ。何もできやしない。」

そうですね。

春姫殿は、部屋から出ないよう輝夜殿に言われていますから大丈夫ですね！

と思っていた自分がいました。  
まさか、あのようなことが起こると思いませんでした。

## 第408回 狐姫、逃亡。

私はセバス様に呼ばれて、部屋へ向かっています。

すると、角で殿方とぶつかりそうになりました。

「きゃっ！あ……お、お兄様!？」

「!?春姫……。この…役立たずが！来い！私と一緒に帰るぞ！（目的の1つはこれで達せられるだろう!）」

「きゃっ！い、痛いでございます…。」

「五月蠅い！来い！」

私は、お兄様に手首を掴まされ引つ張られました。

まずいでございます。

このままでは…ベル様とヘスティア様に迷惑をかけてしまいます！

た、戦わなくては！

と思いましたが、その必要はありませんでした。

最強の…、いえ最恐の義母様が立ちふさがってくれました。

「何をしているのかしら？セバスに呼ばれて来てみれば…どなたかしら？」

お義母様はこちらへ向かっていました。

私と同じく、セバス様に呼ばれていたようです。

お兄様に注意を促そうとしましたが、お兄様は何かに怯えており興奮なさっていました。

一体、何があつたのでしょうか？

「どけ！私の妹を取り返しに来たのだ！」

「妹？それが妹に対する扱いなの？」

あ、お義母様が顔を曇らせました。

お兄様を落ち着かせようとしたのですが、駄目でした。

このままではお義母様の怒りに触れるかもしれせん！

「黙れ！神に供える菓子を盗み食いをして死罪のところを情けで追放したというのに、娼婦ごときに落ちて迷惑をかけるとは妹とは思わん！」

「…手を放しなさい。」

あ、不味いです。

眉をひそめました。

お義母様を落ち着かせようとし、声をかけましたが。

それが駄目でした。



「お、お義母様…。」

「お義母様だと？ふん、貴様はあの薄汚い兎の母か！」

あ、不味すぎます！

よりにもよって、お義母様の一番大事にしておられるベル様を侮辱するようなことを…。

「駄目でございます！お兄様！今すぐ…。」

その時、「ヘステティア・ファミリア」ホーム全体にあの時と同じプレッシャーがかかりました。

「何ですって?。」

嗚呼…、遅かったです。

再びあの時が訪れました。

「ぐっ！このプレッシャーは…メーテリア!?」

「まさか…あの馬鹿狐は義母上とお会いましたのですか!？」

「……これも計算ずくかい？へら…。」

私にそのプレッシャーがかからないよう、お義母様は気を遣って下さいました。

そうでなかったら…、私の手首をつかんだままで断末魔を上げる寸前のお兄様のようになっていたでしょう。

「あ…が…」

「手を放しなさい」

お義母様が地獄の底より聞こえてくるような声でお兄様に言ったところ、放してくれ  
ました。

うつ…、強く掴まされたため痣ができています…。

お義母様は悲しそうな顔で、その手首をとって優しくさすってくださいました。

嗚呼…本当にベル様にそっくりです。

いけません、お礼を言わないと。

「あ、あのお義母様、ありがとうございます！」

「いいのよ。大丈夫？ ああ…きれいな手首に痣が…。よくも私の義娘を…許さない（ギリリ）」

「ひ…」

義娘!?

はわわっ！ベル様の嫁と認められています…と喜びたいところですが、お義母様がお兄様に向けられている眼差しを見ますと、とてもそのような気分になれません。

お兄様は目を合わすだけで腰が抜けています。  
お気持ちはすぐわかります。

階層主と対峙した方がまだマシでしょう…。

そしてお義母様は私にベル様と同じ笑顔を向けてくれました。

「(ニツコリ) 春姫ちゃんは、みんなのところへ行ってきた？ ちゃんと治療してもらおうよ。…私はこの人とちよーつとオハナシがあるの。」

「は、はい…。失礼します…。(ああ、お兄様。おさらばでございます)。」

これから起こるであろうことを思うと、同情を禁じえません。

ご達者でございます、お兄様であつたお方…。

私は皆様がおられる部屋へ向かおうとしたところ、私の狐耳に入りました。

「さて…オハナシしましょうか？ うふふふ。」

「あ…だ、誰か…。」

申し訳ありません…。

春姫は助けることも、止めることもできません。

不甲斐ない妹で申し訳ありません…。

今のお義母様は、恐らくこの地上では…いえダンジョンを含めて無敵でございますよ  
う。

お兄様は…、本当にここへ来るべきではなかったのです。

部屋へ着かれますと、輝夜お姉様から怒られました。

「春姫！部屋から出るな、と言ったはずだ！」

「はうっ！も、申し訳ありません！セ、セバス様に呼ばれたのでございますが…？」

「なるほど…：こうなることを計算していたな？セバス。」

「申し訳ありません。一番、アメリカットが少ない方法でございます。」

「やれやれ…、本当に何をやっているんだよ。アマテラス。」

ヘステイア様はため息をつかれていました。

一体何が起こったでございましょうか？

話を詳しく聞きますと、驚きました。

【アマテラス・ファミリア】の使者の方…お兄様たちが、ヘステイア様へ無礼な言葉放ったとのことです。

私の引き渡して、ヘステイア様は大層お怒りだったそうです。

それを聞いて、私は嬉しく思いました。

私はレベル1なのに、【ヘステイア・ファミリア】で一番下だというのに、ヘステイア様から大事に思われていることを。

春姫は、【ヘステイア・ファミリア】に入団できたことをこの時以上嬉しく思ったこと

はありませんでした。

使者の神様は、ヘラ様が連れて行かれたことには同情しますが仕方ありません。

いいのでしょうか？【アマテラス・ファミリア】の宣戦布告として…。

私がそのような暗い顔をしていますと、ヘステイア様が優しく話しかけてきました。

「春姫くん、キミが気にすることないぜ？…むしろ、こつちが本命なんだ。キミのことで怒ったのは確かだけど【アマテラス・ファミリア】へ攻め込む理由が欲しかったんだ。…まさか彼らがあのようなことを言うとは思わなかったけどね！」

ア、【アマテラス・ファミリア】へ攻め込む!?

理由を聞きますと、ツクヨミ様たちを助けるのと古代のモンスターであるヤマタノオロチを討伐するためとのことでした。

……お父様はどうなるのでしょうか？

## 第409回 狐姫、恐怖。

私がそのような心配をされていますと、アルフィアお義母様が私へ話しかけました。恐らくメーテリアお義母様のことでしょうね。

「それで…その…メーテリアに会っただろうか？」

「…はい。」

「どうした？大方予想はつくが…。」

「はい…お兄様を連れて、近くのお部屋へ入りました…。」

「そうか…。」

暗い顔をして頂垂れました。

お気持ちはずごくわかります…。

メーテリアお義母様がお怒りになられたことで、皆様は取り乱しています。

仕方がありません。

また、あのようなことが起こるのですから。

「ど、どうするのかしら？」

「アリーゼ、「アストレア・ファミリア」の元団長の腕の見せどころです。止めに行つて

「下さいませ。」

「嫌よ！輝夜！貴女こそ、行ってきなさいよ！同郷の人でしょ！」

「はて？同郷の者でございますか？同郷の者なら、そこに春姫と命がおりますが？」

「え？」

「…輝夜。先程で誰もいなかったような発言はやめて下さい…。」

「黙れ、静かにしろ。」

「…はい…」

……元「アストレア・ファミリア」の方々はアルフィアお義母様と絡むのが多いですね。

大抗争の件もあるからでしょうか？

命ちゃんが恐る恐るとアルフィアお義母様に話しかけました。

「あの…アルフィア殿。よろしいのでしょうか？その…メーテリア殿と先ほどの者と二人きりにさせても？」

「メーテリアはレベル8だ。しかもあの魔法がある。奴程度ではどうしようもできません。年増ハイエルフ以上の使い手でもない限りな。」

「絶対に無理じゃない！」

「【九魔姫】でも無理と思えますが？」

「深層以降の階層主のルームへたった一人放り込むような感じでしょうね…。」

「お、お兄様は無事で帰ってこられるでしょうか？」

「……恐らく傷つけないだろうが、奴程度では精神は壊れる、確実に。」

「「ひいつ！」」

嗚呼、お兄様…。

輝夜お姉様が、残酷なことを言いました。

「…しかしあの馬鹿狐の精神が壊れたら、多少まともになるのではないのでしょうか？」

「輝夜…、貴女ひどいことを言っている自覚があります？」

「アリーゼ、リオン、お前たちも見ただろう？あの馬鹿狐がこれ見よがしに私達を舐め回すよう見ていたことを。」

「やめて下さい。斬りたくありません。」

「同感ね！燃やしたくなるぐらいだったわ！」

「……まともになつたらまだいいかもしれないが、それを行き過ぎるとどうなるかはわからん。」

「「行き過ぎる!?!」」

あのお兄様が行き過ぎるとどうなるのでしょうか…？

知りたいようで知りたくないような気がします…。



それ以前に、なぜお父様はお兄様を使者として派遣なさったのでしょうか？

お兄様の性格上、使者に合わないということは一目瞭然と思えますが…。

アリーゼ様が話題を変えるように言いました。

「え、えーと？〔ヘラ・ファミリア〕ではどうだったの？」

「お前たちは大馬鹿か？私達はあのヘラの眷属だぞ？怯えるこそはあつても行き過ぎるようなことになったことはない。…思い出すだけで震えが来たではないか。」

「……………絶対に怒らせないようにしよう。」

「それが正解だ。特にベルのことは気をつけろ。」

「「はいー」」

そうですね。

ベル様に関してはメーテリアお義母様の逆鱗そのものですから。

ベル様第一ですから、あの方は。

ルウ様が思い出したかのように言いました。

「話を戻しますが、どうしましょうか？」

「……………終わるのを待とう。巻き添えになるのはゴメンだ。」

「「同感です…。」」

「お、お兄様は大丈夫でございましょうか…？」

「……殺しはしないだろう。ベルはそういうのを嫌うからな。……ただ。」

「「ただ?」」

「メーテリアはヘラほどの調整技術がないから…、どうなるかはわからん。」

「「調整技術!」」

調整技術とは何ですか!?

怖すぎます!

その数時間後、お兄様は解放されました。

数時間前のお兄様とは見る影も微塵もありませんでした…。

「コノタビハ、タイヘンモウシワケアリマセンデシタ。イダイナルヘステイアサマ。」

「「……………」」

『うわあ…。』

『もう壊れているではありませんか…。』

『あの馬鹿狐の片鱗がこれっぽっちもありませんねえ…。』

メーテリアお義母様は一体何をやったのでしょうか…?

怖くて聞けません。

続いて、お兄様は片言で話していました。

「ワガヤノ、ハルヒメヲケンゾクニ、シテイタダキ、マコトニカンシャノイにタエマセ

ン。」

「「……………」」

『稽古から戻ってみれば…一体に何があつたのかしら？』

『メーテリアお義母様の怒りに触れたと聞きましたが…。』

『これはひどい。』

元女神の方々も呆れています。

仕方がありません。

そしてお兄様は大金のヴァリスが詰まった箱を差し出しました。

十億ヴァリスですね。

春姫にそのような価値があるとは思えませんが…。

「ソノオレイトシテ、ジユウオクヴァリスヲ、ケンジョウイタシマス。」

「「……………」」

『金はいくらあつても困りませんから、よかったです！』

『姫、よかったですね！』

『姫、棚からぼたもちですね！』

『姫、「アマテラス・ファミリア」は太っ腹ですね！』

『姫、とりあえず軍資金が増えてよかったですね！儲かりましたね！』

『おいお前ら、現実逃避はやめろ…。気持ちにはわかるけどな。』

リリ様方も喜んでいますが、笑顔が引きつっています…。

お兄様のあの様な様を見ますと、大体予想してしまいましたね。

現実逃避したがるのもわかります。

ヘステイア様に向けて、深く謝罪しました。

「ブレイヲハタライタドウコウシタカミハ、ニクナリヤクナリスキニシテクダサイ。」

「そ、そうかい。」

『あの人…：神様を見捨てたよ。』

『見捨てたのではなく、見捨てさせたのではないですか？』

『私は…：それより…：ああさせた人が怖い（チラツ）』

『アイズさん…：私もです（チラツ）』

同感です。

メーテリアお義母様はベル様と同じく優しいお方なのに、逆鱗に触れますと「ヘステイア・ファミリア」の最恐と化してしまいます。

そして何も知らずニコニコとしているベル様へ挨拶しました。

「イダイナエイユウ、ベルサマ。ワガヤノハルヒメヲ、ナニトゾスエナガクオネガイイタシマス。」

「あ、はい。わかりました！春姫さんは僕たちが守ります！」

『本来なら両手を上げて嬉しいのですが…、お兄様がこうなつては大変複雑でございます…。』

『春姫殿…わかります。』

ベル様のそのお言葉を聞いて、本来の私なら赤面し尻尾を激しく動かしていたでしょう。

ですが、お兄様のあの様子を見ますと…。

おいたわしや…お兄様。

アルフィアお義母様が、メーテリアお義母様を軽く叱っていました。

『メーテリア…、やりすぎだ。』

『うーん？調整を間違えたかしら？あとで調整し直さないといけないわね。義母さんに教えてもらわないと。』

『あ、ああ（知らなくてもいいことなのだが…、いや、こうなるのがこれからどんどん起こるかもしれないから一応教えておくか…。【女帝】の次に教えるのがメーテリアとは思わなかったぞ。）』

『『…『…『ヘラ・ファミリア』、怖い。』』』

同感でございます。

ベル様がまだ生まれていなかったとはいえ、メーテリアお義母様の逆鱗に触れるのが多かつた〔ヘラ・ファミリア〕は凄いでございます。

あのお怒りに耐えるというのが。

ヘスティア様はヘラ様へ確認なさいました。

恐らく、使者に同行していた神のことでしょうね。

「それで、ヘラ。彼は？」

「待つてくれ。情報を全て吐かせていないんだ（じっくりたつぷりと痛めてからな）。」

「そ、そうかい（楽にさせるな、と言うんじゃないかな）。」

……。

本当に〔ヘラ・ファミリア〕は怖いでございます！

## 第410回 象神詩、反省。

私は「アマテラス・ファミリア」の使者の話を聞きながら、あることを思っていた。

古巢：「ガネーシャ・ファミリア」として聞き流せないことがあるんだ。

なので…、勇気を持って元「ヘラ・ファミリア」の「最恐執事」のセバスさんへ聞いたんだ。

「あの…、セバスさん？いいですか？」

「どうしましたかな？アーディ嬢？」

「質問があるんです…。宿のおじさんを脅して嘘情報を流したとのことですけど、何故、一般人に対してそのようなことをしたのでしょうか？」

うん、冒険者相手ならいいんだ。

けど、一般人はダメ。

それをどうしても聞きたかったんだ、どうして脅して言うことを聞かせたのかを。

そしたら、セバスさんは笑顔で答えてくれた。

「さすが、元「ガネーシャ・ファミリア」ですね。お答えしましょう。」

「「ゴクリ…。」」





お姉ちゃんとイルタに言っておかないと…。

もーっ！あの宿場町の人たちはごうつくばりなんだから！

べ、ベルくんに謝らなくっちゃ…。

私がそう思っていると、セバスさんは更に言葉を重ねた。

「いえいえ。私とメイがご主人に坊ちやまがお世話になったというお礼で挨拶しました。今回のことを持ちかけると快く引き受けてくださいました。しかし、それ以前にご主人は大変後悔なさっておられたようです。」

「「え？」」

え？や、宿の親父さんが自ら乗った？

ど、どういふことなの!?

セバスさんは思いにふけるように話してくれた。

「あの宿のご主人は坊ちやまの純粋な想いに打たれ、ぼったくった金を返金しようかか  
なり迷っておられたようです。半年間も罪悪感に悩まされて、その金にどうしても手  
付けることができなかつたようです。私どもへ返した上、土下座でお詫びをいただきま  
した。その時の顔は呪詛が解かれたかのように、晴れ晴れとしておられましたよ。」

「「……………」」

え？あの…宿場町のごうつくばりが？

嘘……その時のベルくんはまだ恩恵もらっていないはずなのに……。

セバスさんはかぶりを振りながら話してくれた。

「今回の件は、むしろあちらから協力させてほしいとのことでした。私共も予想が外れて驚いたぐらいです。坊ちやまは恩恵なしでも、宿のご主人にも影響を及ぼしていたようですね。」

「すごい……ベルくん。」

「恩恵もないのに改心させるなんて、『アストレア・ファミリア』に欲しかったわね！」  
「アリーゼ、それ以前にその時点で『アストレア・ファミリア』はリオンを除いて全滅しましたか？」

「笑えない冗談はやめて下さい……アリーゼ、輝夜。」

うん、本当に笑えない。

7年前に死んだことになっている私が言えることじゃないけどね！

まさか、リオンを除いた『アストレア・ファミリア』が全滅してたなんてその時はわからないよ！

更にセバスさんは教えてくれた。

「今回はうまくいったため、謝礼金を出したのですが拒否されました。むしろ坊ちやまが泊まった宿として有名となったため、儲かっているそうです。今回のようなことがあ



て、多少楽になってきた。」

「そうだな！これもそれも【白兎の脚】のおかげだな！…まだ冒険者になって1年もないのにな！」

「アーデイの件も含めても、我々【ガネーシャ・ファミア】は彼に対して本当に足を向けて寝られないな。…規格外にも限度あるだろう、はあ…頭と胃が痛い。」

「同意する！…アーデイが戻ってきてくれたのは今でも夢ではないかと思っっている！とここで姉者、アーデイの様子を見に行かないか！」

「…近々にガネーシャと一緒に行くつもりだ。お前も来るか、イルタ？」

「行くとも！」



## 第411回 毒舌女、苦悩。

馬鹿狐は精神が壊れ、本当にまともになりましたね。

同情はいたしません、自業自得なのですから。

そして、私達は彼らの荷物を探りました。

「ヘスティア様に献上した箱には、確かに十億ヴァリスが入っていましたね。リリルカ・アーデが確認しましたので間違いないようです。」

「恐らく、奴らはネコババしようとしたのでございませぬえ。相も変わらず浅ましいです」と。

「あんたが出たくなる気持ち少しわかったわ…。」

それだけでならまだマシだったのですがねえ。

奴らは更にもっと浅ましいことをしていますから。

私たちは奴らの荷物を漁った。

…色々と入っていますね。

特に地図が多い。

しかも軍に関する資料もある。

軍機密のほずでございませうがねえ。

ただの使者なのに、何故このような機密書類があるのだ？

腑に落ちん…。

…箱？随分と粗末な箱だな。

奴らにしては珍しい。

派手で高級な箱ばかりだというのに。

何が入っているのだ？

「む？……これは、まさか!？」

「どうしたの？輝夜？」

「馬鹿な…持ち出し禁止の『朝廷』本殿の間取図がここにあるとは!？」

「うっかり入れてしまったのではないですか？」

「そんなはずがない!これは「アマテラス・ファミア」の上層部の神、ジヨウノ家当主でも多くの手続きを踏まないと手に入らないものなのだ!奴ら如きが手に入るようなものではない!」

あり得ないのだ!

しかもこんな粗末な箱ではない!

もつと重厚で金箔が張り詰めたもので、呪詛がかけられている箱に入れていると聞

く。

私がそう思い出したところ、アリーゼが言った。

「でも……ここにがあるよね？」

「……そこまで情報がただ漏れになるほど腐っているのか？」

もし、そうなら「アマテラス・ファミリア」は末期状態にあるということだ。

最悪の場合、闇派閥になっていることもありうる。

私が考え込んでいる間に、命が何かを発見したようだ。

慌てて私のところへ持ってきた。

あり得ないものを。

「あの……輝夜殿。これは……ヤマタノオロチについての資料ですか？」

「な、なんだと!? 見せてみる! ……確かに、私が昔盗み見したヤマタノオロチの古文書

だ。これも同じく、持ち出し禁止のものなのだぞ!」

間違いない!

……何故このような物が末端にすぎない奴らが持っているのだ!?

あり得ない!

多くの地図といい……。

『朝廷』本殿の間取図といい……。

ヤマタノオロチの古文書といい…。

まるで、どうぞ「アマテラス・ファミリア」へ攻め込んで下さいという意味を感じるのだが…。

気のせいだろうか？

いや、気のせいに違いない。

奴らの中でそのようなことを思うような者はいないはずだ。

私がそう思っている時に、リオンが言った。

「…こう立て続けに、持ち出し禁止の資料が入っているとは何者かの意を感じますね。」  
「確かにね！」

やはり貴女達もそう思いますか。

あり得ないはずだが…、こうも機密書類が多くあるとあり得てしまう。

特に外国へ持ち出す物は厳重に確認するはずだ。

いや、これは罨なのか？

攻め込むなら攻め込んでこいというメッセージなのか？

いや、あり得ない。

弱きをくじき強きに媚びる、というのを形にした奴らだ。

こんな手の込んだようなことをするはずがない。



…もし、攻めてくれというメツセージなら。

奴らのような無礼な使者を差し向けたのもうなずける。

奴らがヘステイア様を怒らせるようにするならば？

宿の親父が嘘情報を流したのはかえって確信をもたせたのであれば？

そして若様の性格上、春姫に対して侮辱したことを怒らせるようにするならば？

馬鹿な!?

そんなことをして何になる？

【アマテラス・ファミリア】が壊滅してもいいという輩がいるとこののか!?

まさか…主神アマテラス自らがこれを？

いや、あり得ない。

主神アマテラスは邪神共の手によって、政治に口出しさせず何もできないようにされ

ているはずだ。

特に、使者の指名や荷物などは一切何もできないはずだ。

では、誰だ？

誰がやったというのだ!?

私がそう苦悩している時に、アルフィアが言った。

「構わないだろう？ 罨なら罨で食い破ればいい。」

「！確かにそうですね…。すみません。気弱になっていたようです。」

「ふん、たるんでいる証拠だ。無心で稽古に励め。」

「…リオン、手合わせをお願いする。」

「はい！輝夜！」

いかな、私としたことが。

そうだ、アルフィアの言う通り私達が乗り込んで、そのような企みを砕けばいいだけだ。

いけませんねえ…。古巣のこととなると弱気になってしまいます。

特に…妹のことを考えると。

いけません。

こういう時はリオンを見習わなければいけません。

「……何か侮辱されたような気がします。」

「気のせいです。潔癖ポンコツエルフ様？」

「私はポンコツではない！」

クスクス。

…リオンがいてくれて、助かった。

いや、皆がいてくれてだな。

まさか、アルフィアに助けられるとはな。

これらも…若様による幸運でしょうか？

アルフィアはそんな私の考えていることをよそにして言った。

「これについては私が直接奴へ聞いてみよう。……メーテリアと一緒にな。」

「だ、大丈夫なの？」

「……仕方がないだろう、メーテリアが調整したんだからメーテリアしかできないんだ

……」

「『……………』」

……そうですね。

アルフィアより恐ろしい義母上がおられましたね。

あの時…、義母上がアルフィアとザルドを叱った時は忘れられません。

怖かったですねえ。

アリーゼがアルフィアに聞こえないよう私達へ言った。

『大抗争の相手がメーテリアさんでなくてよかったですわ！』

『それ以前にベルを溺愛しているの、まずオラリオへ来ないと思いますが。』

『そうだな。もし邪神エレボスが若様を攫つて、義母上に言うことを聞かせていたら

……』



## 第412回 義祖母、準備。

セバスから聞きたくないことの報告があった。

とうとう来たか、私達の罪が。

「ギルドより、オリンピアの使節団が間もなく着かれるとの連絡がありました。」

「そうか……。とうとう来たか。」

「ヘラ、みんなもそんなに身構えなくても……。」

身構えるな？

それは無理があるぞ、ヘステイア。

そもそも、お前自らが生贄となり神殿を降臨させるかもしれないんだぞ！

何で……そう冷静なんだ！

私達のことはいい、ただベルのことを考えろ！

同席していた元女神共も同じ気持ちだろう。

特にアルテミスはな。

「身構えなくなるわよ。私達の罪なのだから。」

「言つとくが、私達は絶対にお前をオリンピアに向かわせないぞ？」

「わかってるよ……。」

…これは、行くな。

荷物に紛れ込んででも行くだろう。

ヘステイアはそういう女神だ。

セバスとメイに見張っておかなくてはな。

もう「ヘステイア・ファミリア」は弱小派閥ではない。

世界最強となつた派閥なのだ。

お前が送還されると、ベルは無力な子供に成り下がるし。

私は、最強最悪の女神に戻ってしまう。

自分で言うのも何だが、ヘステイアがいてこそ私は大神の妻であり続けることができ  
る。

それに…ここ数週間での居心地は悪くなかった。

だからこそ、困るのだ。

…奴らには使節団の様子を見てもらっているが、まあ意味ないだろうな。

ベルはダンジョンに向かわせている。

余計な心配をかかせたくないな。





「嘘でしょ…。」

「マジかよ…。」

まさか…奴が自ら直接乗り込んでくるとはな。

だが、これはチャンスだ。

奴を捕らえて問い詰めるいい機会だ。

「どうなさいますか?」

どうするだと?

決まっているだろうが。

…くくく、舞台を作ってやるか。

奴が言い逃れできないのをな。

『…何か企んでいますね?』

『間違いないな。』

『怖くなってきたわ…。』

「ヘラ、ヘラ、邪笑みんでいるぜ?」

む、いかなな。

私の悪い癖だ。

…ここに…集結してやる。



天界を：我々の同郷を再現させてやろう。

「：ヘステイア。デメテル、ヘファイストス、アフロディーテ、ヘルメスに緊急招集かけてくれ。ここにだ。」

「う、うん。」

「セバス、あそこからアポロンを連れ出せ。あとメイに命じてあの人を連れ出せ、嚴重にな？」

「かしこまりました。」

オリンポス十二神を全柱集結させたいが、十分だろう。

ヒューマンとなった元女神の馬鹿雌たちが話しかけてきた。

お前たちも出席してもらおうぞ？

「私達はどうする？」

「エルピス、いやアルテミス。お前もオリンポス十二神の一柱だ。そしてアストレア、お前も一応オリンポス出身だ。：シノス、お前のスキルを使わせてもらおうぞ？」

「ああ、そうだな。特に私はな。」

「十二神じゃないけど、同郷の責任でもあるしね。」

「はい、存分にお使いくださいませ。」

：…癪だが、シノスのスキルは非常に有用だ。

神の嘘を見抜くのだからな。

だが、奴は先見を司る神だ。

念には念をいれておこう。

逃さんぞ…。

よし、集結したな。

セバスから更なる報告があつた。

「ギルドより、「ヘステイア・ファミリア」主神ヘステイアにオリンピア使節団がお会いしたいとの連絡が入りました。間もなくこちらへ来られます。」

「そう…：わかつたよ。」

うむ、こちらの準備は大体完了した。

集結した奴らは不平不満をほざいていた。

「ヘステイア、いきなり招集かけてどうしたのよ。仕事中のよ?」

「そうね、理由は後で説明すると言つてもね…。先程まで収穫中だったのに。」

「そうよ! 観光でいいところだったのに!」

「えーと、説明してくれるかい?」

「来てくれてありがとう! ごめんよ、これが終わったら説明するから。」

ヘステイア、謝らなくてもいいんだぞ？

こやつらにも責任があるのだからな。

エルピス…アルテミスが奴らを宥めていた。

甘い…。

「ヘフアイストスとデメテルはすまない。アフロディーテ、お前は暇だからいいだろう。

ヘルメスはしばらく。」

「アルテ…エルピス！暇じゃないわよ！」

「しばらくって何?!」

模擬戦に再び出すということに決まっているだろうが。

私はまだ許していないぞ？

後は、あの人と変態神か。

「セバス、連れてきたか？」

「はい、こちらに。」

ガラガラ

「……………」

「うわあ…アポロン。物言わぬ屍になっているよ…。」

「ひいっ！」

アレスより、手こずらせてくれたな。

その辺は、さすがオリンポス十二神だと褒めてやる。

最後にあの人が。

「お待たせしました。」

うむ、嚴重に保管しているな。

奴らは怪訝な顔をしてそれを眺めているな。

「…ねえ、その人形みたいな棺桶つてまさか…」

「おお！ 久々じゃのう！ ヘファイストス！ デメテル！ アフロディーテも、ヘルメス…  
アポロンもお互い苦労しておるのう。十二神が半分勢ぞろいじゃな！」

「ゼウス!？」

「あらあら。」

「は!?! 何よ、そこから出てきなさいよ！」

「あー…。」

「……………」

黙れ、アフロディーテ。

あの人はその穴から顔と声を出してきた。

「出てきたくても出てこれないんじゃないか？ アフロよ。」

「アフロディーテよ！代わるなんて冗談じゃないわよ！」

「神アフロディーテ、もしそれでクソバカ主神が逃げ出したら…」

「し、したら？」

「イロイロと余っていますので、ボン・キュ・ボンの高身長にして差し上げます。」

「ひいひいっ！わかりましたっ！二度と言いません！」

…なるほど、それも一考の価値あるな。

元恋人のヘファイストスが呆れて言った。

「アフロディーテ…、貴女は神でしょ？どんなことをされても不変でしょ？」

「さすが、メイちゃんね！美の女神でも恐れないわね。…ちよつと見たい気がするわ。」

「本気で言っているから怖いよ…。」

「何じゃ、お主の得になるのではないかのう。真の美の女神を目指すんじゃないわああ！」

「冗談じゃないわよ！嫌よ！」

性格はともかく、容姿はフレイヤやイシユタルより非常に劣るだろう貴様は。

一回改変してもらえ。

おっと、そんなことを考えている場合ではない。

最後のツメをしておかないとな。

## 第413回 処女神、確信。

来たか…。

まさかねー、ここまで乗り込んでくるとはね。

クソ度胸があるというか…バレないというたかを括っているか…。または絶対的な自信を持っているか、だね。

「では、こちらになります。レア様、イリア様。」

「はい！失礼します。」

「やあ、よく来たね。オリンピアの諸君。ボクがヘステイアさ。」

「はい、ヘステイア様…?!」

……え？まさか彼女かい？

うわあ…神威が全くないじゃないか。

おっと、ヘラとの打ち合わせ通りにやっておかないと。

「ん？どうしたんだい？」

「い、いえ…。その…何故、神様方が多くおられるのでしょうか？」

「イリアー！失礼ですよ！」

「いや、天の炎つてね。ボクたち同郷のものなんだ。みんな、その様子を聞きたくてね。」  
「そうでしたか。私は使節団団長のレアと申します。先程はイリアが失礼しました。本当は他の者もおりますが、そちらの希望により私とイリアが参りました。」  
「うん、こちらの希望を聞いてくれてすまないね。」

そりや、驚くよね。

何せ、キミと同郷の神が…オリンポス十二神が勢ぞろいしているんだから。

それに彼女…アルテミス達を見て神と言ったよね？

つまり…顔を知っているわけだ。

『あの娘…初対面である私達を見て神と言ったわよ？』

『ヒューマンとなった神がいるのね？顔見ただけですぐ神とよくわかったわね？』

『まさか…』

『どこかで見たことあるのう…』

『オーツホツホツホ！私の美に恐れをなしたわね！』

『『……………』』

アフロディーテはブレないな。

彼女は一步先に踏み出して、ボクたちへ言ってきた。

「あ、あの！差し出がましいですが！「んん？お主、プロメテウスじゃろ？」……………」

あー、そうだったね。

プロメテウスの顔を知っているのは、天界でもゼウスだけだからね。当然、ヘファイストスたちは驚いている。

「え？」

「ええっ！この娘が…プロメテウス!？」

「違和感ないわよ!？」

「何だって!？」

そうだよね。

それにアドバイザーくんの魔法は凄いな。

「エイナの鑑定通りか。」

「ええ、まさか神でも見抜くなんてね…。」

そうだね！でも、それはベルくんへの想いによって生まれたんだ。

人の想いか…。

はあ…ボクの眷属たちは何故みんなレアスキルなんだー！

当然、彼女…イリアいやプロメテウスは顔面蒼白していた。

いや…フリ？

んー、よくわからないけど神威を完璧に隠しているなー。



「…な、何を言うのですか！私はプロメテウス様に仕える巫女です！プロメテウス様であるわけがありません！」

「何言つとるんじや？どう見てもプロメテウスじやろ、お主。儂にはわかるぞい☆」

「イリア！失礼ですよ！すみません！」

「…す、すみません。」

『どう？シノス？』

『間違いなく、嘘を言ってますね。』

『あそこまで神威を隠せるものなのか…？』

あー、フレイヤ…いやシノスくんの魔法は嘘を見抜けるんだったね。

ここまでわかってても、彼女自ら明かさない限り意味ないと思うけど。

どう追いつめるんだい？へら。

ボクがそう考えていると、ゼウスが話してきた。

「あーあーあー、そういうことかいのう…。理解したわい☆」

「は…？」

「それにしても、お主。いつからキャラ替え…いや単に猫かぶつとるだけかあ。」

「どういふことだい？ゼウス？」

「………！」



うん、ゼウスのソレは日常茶飯事だからね。

「見てよ…あの娘、化けの皮がはがれ始めているわ。」

「ええ、怒りと屈辱と恥辱がごちゃ混ぜになっているわね。」

「さすが、煽りにかけてはゼウスが一番だなー。」

「あ、神威が漏れているわ。」

「確定だな。」

「ええ。」

そりゃ、あそこまで馬鹿にされていたらねえ。

レアくんがイリアくんを見て瞠目していた。

そうだね、従者が実は主神だったということを知ったらね。

「イ、イリアが…プロメテウス様?」

「!?ち、違います! 私はプロメテウス様ではありません!」

ポンポン

「「あ」」

ここで動くんだね…。

夫婦としてのコンビネーションは変わらないなー。

イリアくんは肩を叩いた彼女へ振り向いた。

「だから……………」

「どうした？だから、の続きを言え、なあ？プロメテウス。」

「へ、へ、へ、ヘラあああああ!?!」

「ほう、先程まで一目でわからないように変装したのだが、よく私がヘラだとわかったな？」

「……………これ以上は時間の無駄か。こんなに早くバレるとは…想定外だ。」

うん、ここでヘラが出てきたら叫ばざるを得ないよね。

ボクだつて驚くよ。

さて、もういいよね？

「…やはり、キミがプロメテウスなんだね？」

「ああ…そうだ。何故、私がプロメテウスだとわかったのだ？」

「そりや儂が「黙れゼウス死ぬ」くくこれじゃ、これがプロメテウスじゃ!」

…ゼウス、キミはもう黙っていなよ。

プロメテウス、ガチギレじゃないか。

アルテミスは悶えているゼウスを無視して、プロメテウスに話しかけていた。

「ヘステイアの眷属で「無視!」相手のステータスを見抜く子がいる。彼女がお前の種族に神と出て、名前もプロメテウスとあつたからだ。」

「何だと？お前は…アルテミス…か？私のように神威を隠して…いや、ヒューマン？」  
「そうだ。」

「……フツ、先程の私はお前たちから道化に見えただろうな？」

まあ、ボクたちはね。

へフアイストスたちは知らないんだよ？

「いや…私達は知らなかったわよ？」

「ええ、いきなり連れてきて…。そういうことだったのね。」

「(ジロジロ) いやー、なるほど。だから吊るさなかったんだな？ゼウス。」

「え？そ、そりゃあな。天の炎を落としたのは儂等の責任じゃからのう？」

ん？何故、そこでもるんだい？ゼウス。

そこをシノスくんは突いた。

「嘘です。」

「ほ？」

「へら様、この方は嘘を言っています。」

「ちよ、ちよい待つんじゃ！お主は…まさか、フレイヤか？」

「ええ、久しぶりね。ゼウス。」

「ど、どうなつとるんじゃあああ!? ヘルメス！」

「それは俺が知りたいよー！」

あ、そうか。

ゼウスとヘルメスは知らなかったんだ、フレイヤとアストレアとアルテミスがベルクの血によりヒューマンとなったことを。

そろそろ教えてもいいかな？

シノスくんが胸を張ってプロメテウスに話しかけていた。

「私は神であろうが、嘘を見抜くスキルがあります。それは貴女もですよ？プロメテウス様？」

「アルテミスとアストレア…そしてフレイヤがヒューマンになっているとは。はあ…、ここまでは読めなかった。」

「儂もじゃ…。」

「俺もだよ…。」

「何故、貴様らが言うのだ…。」

そうだね、本来ならゼウスとヘルメスは此方側なんだ。

まあ、それはヘラやアルテミス達がベルくんのものでまだ怒ってて、情報遮断しているんだ。

もうそろそろ教えてやってもいいんだけどねー。

## 第414回 先見神、想定外。

はあ…本当に想定外だ。

あの戦争遊戯の後に、好々爺と最悪女があの子のところへ行くとは思わないだろうに。

いや…想定はできたがこんなに早くとは。

ヘラの子の少年への思いを甘く見たな。

…想定するというのが無理というものだ。

ちっ…戦争遊戯前にオラリオへ駆けつけるべきだったな。

今となっては詮無きことだがな。

本当に想定外だ…。

よりもよってこの好々爺がいて、見抜けられるとはな。

ゼウスとヘラはともかく、フレイヤとアストレアとアルテミスが完全なヒューマンとなっているのはどういうことなのだ？

こんなの読めてたまるか！

しかも、ヘステイアの眷属で神である私の正体を見抜くことができる魔法を持ってい

るだと？

ふざけるな！そんな規格外の魔法を持つ子がいるなんて聞いてないぞ！

!? そうか！

だからか、あの時の戦争遊戯でタイミングが際どかったのはその子の魔法か！

……奴が言ってたな。

「まるで机上でチェスしているようだな。」と。

…レアが動揺しているな。

やむを得ん。

数百年も奴を、レアを、皆を、プロメテウス教団を、オリンピアを騙してきたのだから。

ら。

レアが泣きそうな顔で話しかけてきた。

「イ、イリア…。貴女が…いえ、貴女様がプロメテウス様だったのですか…。」

「…そうだ。長年騙すようなことをしてすまなかつたな、レア。」

レアは巫女長をお願いしていた。

奴の目から逃れるためにな。

そして悲痛な表情をして私へ怒鳴った。

気持ちはわかる。



恨んでいるのだろう、私を。

憎いのだろう、私を。

お前たちの娘たちを…見殺しにした私を。

「だったら何故！あの時、シオンたちを助けなかったのですか！」

「…あの時点では手遅れだったのだ。あの暴発は下界を滅ぼしてもおかしくはなかった。あの程度ですんだのは不幸中の幸いなのだ。それはレア、お前もわかっているはずだ。」

レアには悪いが、天の炎の暴走があの程度で済んだのだ。

だが…天の炎があのようなことを行うのは本当に想定外だった。

レアは怒りを収めたような顔をして、呟いた。

「……っ！それはわかっています…。そしてあの人が…。」

「そこまでだ。それも私の罪だ、レア。」

「プロメテウス様…。」

そうだ。奴がああなったのは私が奴を任命したのがきつかけなのだ。

お前は何も罪もないのだ。

お前は奴にああ言わなくても、奴はいずれああなっていた。

それは間違いない。

ヘラはその私を察して、話に入ろうとした。

全く見事な変装だった、入った時から見抜くべきだったな。

いや…ヘラが来ているとわかっていたら、絶対にオラリオへ来なかつただろう。

「さて、本題に入ろうか？」

「うまい変装だったな、ヘラ。一目では見抜けなかつたぞ？」

「この人が変装の名神なら、妻である私も変装の名神でなければならぬだろう？」

「それはいらんのじゃがなあ…。」

「何か言いましたか？」

「いや、何も。」

「相変わらずだな…お前たちは。」

この2柱は天界でもここでも本当に変わらんなあ…。

レアに見せるだけでも、同郷の私でも恥ずかしいぞ。

少しは慎め！

そんなやりとりを後に、ヘラは再度私へ話しかけた。

「天の炎はどうなっている？」

「私がここに来た時点でもうわかっているだろう？…限界寸前だ。」

「それでヘステイアをオリンピアへ連れて行って、ヘステイアを犠牲にして浄化するつ

もりか?」

「そうだ、アルテミス。…だが、解決できる方法がもう一つ最近できた。」

戦争遊戯までは、ヘステイアを生贄に出しヘステイアの神殿を降臨させるしかないと思っていた。

しかしあの戦争遊戯を、あの少年の勇姿を見て、新たな解決方法が見つかったのだ。

ヘファイストスは片目をひそめて私を睨んだ。

「何ですって? 貴女、自分を犠牲にして天の炎を消滅させるつもり? そうなったら下界は…」

「早とちりするな、ヘファイストス。オリンピアだけですむなら、とつくにやっている。

最近と言っただろう?」

「…どういう意味なの?」

だから、新たな解決方法が見つかったと言っているだろう。

いや、それだけ言ってもわからないな。

私の悪い癖だ。

「…戦争遊戯。」

「…まさか、ベルの…あの炎なの?」

「そうだ、アストレア。〔ヘステイア・ファミリア〕 団長、〔白兔の脚〕 ベル・クラネルが

「フレイヤ・ファミリア」団長、「猛者」オツタルの必殺技を打ち破ったあの炎だ。」

「あの炎が…天の炎を浄化いえ消滅させられるの?」

「そうだ、デメテル。ヘスティア、聞くがあの少年がチャージできるのは最大1分か?」

「…いいや、違うよ。今は6分が最大かな?」

「ギリギリだな。いずれにしろ、あの炎は天の炎を消せる…そう私は確信した。」

6分か、微妙だな。

…だが、ヘスティアを生贄に出すよりまだ確率は高い。

奴が邪魔しければ、な。

狒々爺は考え込みながら言った。

「…ふむう。あの炎なら可能じゃろう。」

「お前もそう見るか。」

「賭けじゃな。」

「ああ、賭けだ。少なくともヘスティアを生贄にだすよりはまだマシだろう。」

「そういうことか…。プロメテウス、キミがここへ来たのは…」

「ああ、ベル・クラネルをオリンピアへ派遣してもらいたい。」

「そうだ、そのために私はここへ来たのだ。」

まさか、ゼウスやヘラそしてヒューマンとなったフレイヤ、アストレア、アルテミス

が  
いるとは思わなかつた。

いや、ヘスティアの眷属で私の正体を見抜くことができる子がいた時点でやられたな。

## 第415回 先見神、庇護。

ヘステイアは私の言葉を聞き、うなずいた。

しかし…邪魔が入った。

「そうか、わかった「待つんじや、ヘステイア」…ゼウス？」

「何だ？邪魔するのかわ？ゼウス。」

厄介な好々爺がな。

好々爺は私に対して真剣な表情で言った。

…嫌な予感がする。

「いいや。その前に…プロメテウス、聞きたいことがあるんじや。」

「何だ。」

「大英雄は、いるんじやな？」

「!!…ああ。」

やはり聞いてきたな。

この英雄主義の大神め。

ヘファイストス達はゼウスの発言を聞いて、首を傾げていた。

「大英雄？」

「オリンピアに神時代以降の大英雄がいたのか？」

「初耳だけど……」

「……………」

そうだろうな。

私が…奴を、オリンピアにほぼ幽閉したようなものだから。

好々爺は続けて言った。

聞いてほしくないことを。

「では……かの大英雄は今、下界を救おうとしとるのか？……または逆なのか？」

「……………お前が見た通りだ。ゼウス。」

「では、ベルを派遣するわけにはいかんわい。」

「何故だ？」

貴様の自慢の義孫だからか？

それとも……奴が稀代の大英雄だからか？

ヘステイアは首を傾げて好々爺へ聞いた。

「ゼウス？大英雄でもプロメテウスでも無理だから、ベルくんを派遣するしかないんじゃないか？」

「ヘステイア。お主はベルを壊すつもりか？」

「…どういうことだい？」

「待ってくれ、ヘステイア。…貴方、説明をお願いします。」

ヘステイアが微かだが、怒っているな。

自慢の眷属を悪く言われたらいい気がしないだろう。

…だが、それは違うような気がする。

なのでヘラが止めて、聞いたのだろう。

好々爺は目を閉じながら言った。

「…ベルは英雄譚を全て見とる。儂が見たもの全て記した英雄譚をな。」

「うん、それは知っている…。」

好々爺は目をゆっくりと開きながら、衝撃の事実を言った。

その事実は私にとって、いや私達にとって非常に不利な内容だった。

「その中の英雄で一番ベルが尊敬し、憧れた英雄がおる。」

「まさか…。」

「そうじゃ、オリンピアの…下界を滅ぼそうとしてる大英雄エピメテウスの、そやつがベルの、尊敬と憧れの英雄じゃ。」

「「！！」」



何…だと。

あの少年の憧れの英雄が…奴だと!?

私がそう驚いている時に、アルテミスたちが好々爺へ聞いた。

「待て、ゼウス。エピメテウスはヒューマンのはずだな?」

「そうじゃ。」

「エピメテウスは古代の英雄のはずよ?今も生きているはずがないわ。」

そうだな、普通に考えるとそう思うだろうな。

だが…奴は違う。

ヘステイアが勘づいたように言った。

「…天の炎かい?ゼウス、プロメテウス。」

「…そうだ、ヘステイア。エピメテウスは天の炎と強く結びついている。…ここにいるレアも天の炎により数百年も生きている。もつとも、エピメテウスは最初に天の炎を受けとった奴だから、天の炎の分身と言っても過言ではないな。」

「それ以上ないほど相性がいいということね…。けど、下界を滅ぼすというのはどういうことなの?」

アストレア、お前の疑問はもつともだ。

だが…奴は。

レアが慌てて、アストレアの発言をかき消すかのように言った。

「お、お待ちくださいませ！エトン様…いえ、エピメテウス様は下界を滅ぼそうとはしておりません！」

「嘘はいかんで、2児の母レアちゃん☆」

「なっ…！」

ちつ…この好々爺め。

あの時を全部見ていたな？

悪趣味な覗き大神め。

わたしはレアを庇い、話をそらすかのように言った。

「やめろ、レア。…それは事実なのか？ゼウス。」

「うむ。ベルは全ての英雄譚を全て読ませた。その中で、エピメテウスが一番じゃ。屈せず立ち上がった英雄の姿にベルは憧れたんじゃ。…他にも英雄はたくさんおるんじゃが、ベルはエピメテウスを選んだんじゃ。儂はアルゴノウトを勧めたんじゃがなあ…。」

アルゴノウト…喜劇の英雄か。

私はオリンピアへ降臨した時と同じ気持ちで好々爺へ言った。

「……………奴は私が抑える。その間に天の炎を浄化すればいい。」

「お主…死ぬ気か？」

「神時代が始まった時、私はすぐにオリンピアへ下りた。その時に既に覚悟しているさ。天の炎を落としたのは私だ。そして、奴がああなったのも私だ。責任はとる。」

「プロメテウス様…。」

「そうだ。天の炎を落としたのは私だ。」

「奴へ天の炎とアレを託したのは私だ。」

「天の炎がああ穢されたのも私だ。」

「そして奴が堕ちたのも…私だ。」

「責任はとらねばならないのだ。」

「私がそう言ったところ、小癩な神…ヘルメスが言った。」

「…大英雄までになった子が、どうして下界を滅ぼそうとするんだい？」

「…エピメテウスの物語は知っているな？」

「ああ、もちろん知っていると、プロメテウス。けど、あれはほとんどが脚色されたものだろう？俺ら神々は知っているぜ？」

「ああ、私達はな。だが…下界の子どもたちは残酷だ。些細な失敗でも尾ひれをつけて面白おかしくあいつの悪評を広められた。」

「…ひどいわね。」

そうだ、奴の些細な失敗でさえも下界の子供たちはそこを突いたのだ。

…大英雄となり多くの命を救った奴に対して嫉妬したのだろう。

いや、失望したと言ったほうが正しいな。

漆黒のモンスターを…討てないのは仕方がないのだ。

天の炎の特性なのだから。

そして私は懺悔するかのように言った。

「それだけならまだいい。だから私はエピメテウスを休ませるために外界との関わりを断たせて、オリンピアを守らせた。…それがいけなかった。」

「…天の炎の暴走ね。」

「あれは仕方がなからう。それにあやつの豹変は天の炎の暴走だけではないじやろう？  
(チラツ)」

「…(ビクッ!)」

「ゼウス、全ては私の先見のなさが原因だ。」

…やはり気づいているな。

奴が落ちたきっかけを。

ヘルメスがそれを確かめるかのように言った。

ちっ…この2柱が関わると面倒くさい。

「…彼がそうだったのは何故だい？」

「あいつは…世界を憎んでいる。私達神々をもだ。自分を見下した連中を見返す…いや見下すためにだ。」

「そこまでか…。エピメテウスの強さはどうなのだ？」

奴は…強い。

三千年も天の炎とつながりがあり、生き延びたのもあるが…、厄介なのはその想いだ。それが奴を強くさせている。

恩恵がなくても、な。

好々爺はかつての…最強の「ゼウス・ファミリア」主神として言った。

「下界からずっと見とったが、それでもあやつは大英雄じゃ。この儂が認めるぐらいな。」

「…！」

「恩恵を受けておらんでも…天の炎のつながりを含めると、恐らくレベル9…いや10はあるじゃろう。」

「…！」

「それに…あやつは自分が誹りを受けるのは承知しとったはずじゃ。だが…あやつは許せなかったのだろう、自分以外の者が貶されるのを。自分以外の者がただの駒扱いにさ

れたのを。」

「……………」

そうだ……。奴は自分が悪く言われてもいい、石を投げられてもいい。

そういう……不器用な奴だからこそ、私は天の炎とアレと……オリンピアを託したのだ。だからこそ……奴は世界を許せなかったのだ。

しかし、それでは奴は堕ちなかった。

あの時が起こる……いや、かつての伴侶の言葉を聞くまではな。

「それだけではなからう。天の炎の暴走がきっかけで変わったのじゃろう？のう、レアちゃん？」

「……っ！」

「やめろ！ゼウス！私だ！私に全責任がある！」

そうだ、天の炎の暴走を防げなかった私にあるのだ。

オリンピアの……特にお前達の愛娘たちの命を見殺しにしたことの、な。

## 第416回 先見神、心配。

ゼウスめ…。

あいつの変貌したきっかけがレアというのを知っているな。

覗き魔爺め。

雰囲気殺伐としたところに、メイドが入ってきた。

!?

あいつは…。

「ご歓談の最中、失礼します。お茶をご用意しました。」

「お前は…【最強侍従】。」

「おや、お初にお目にかかりますが？」

「ふん、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の戦争遊戯で全て出ていただく。うが。」

「ほう、それはそれは光栄ですな。」

「!!【最恐執事】…なるほど、そういうことか。」

こいつらが【白兔の脚】についていたなら、納得できるな。

いや…【白兔の脚】がとんでもない奴でなければならなかったな。

私がそう考えている間に【最強侍従】が言い出した。

「皆様方、先程の話を聞いて坊ちやまの派遣先が決まりました。」

派遣先？何のことだ？

「お主！」

「はい、坊ちやまはオリンピアへ向かわせます。」

「ならぬ！ベルが壊れるぞ！」

珍しいな、女以外興味ないこの好々爺が【白兔の脚】にそこまでこだわるとは…。

【最強侍従】は呆れたかのように好々爺へ言った。

「それがどうしました？貴方らしくないですね、ゼウス。」

「……………」

「孫馬鹿なのはヘラ様だけでなく、クソエロ神もでしたか。」

孫馬鹿…。ヘラもか？

何なんだ…あの少年は。

いや、それ以前に派遣先というのはどういう意味なのだ？

ヘステイアが【最強侍従】と【最恐執事】へ話しかけた。

「…どうということが説明してくれるかい？」



「坊ちやまはもうオラリオ最強と言ってもおかしくありません。レベル6に既にステータスが激高となっています。」

は？レ、レベル6？

ランクアップしたばかりと聞いているが…。

しかもステータスが激高？何故わかるのだ？

ああ…私を神と見破った子の魔法によるものか。

いやいやいや、それ以前にあの戦争遊戯から一ヶ月もないんだぞ！

…そういえばヘステイアが言ってたな、チャージの最大は6分だと。

「「え？…もう？…」」

「はい、もう私達の連携が効かなくなっています。どうやら、メーテリアさんが復活したことで坊ちやまは一層やる気を出しており、一気に才能が開花し始めました。」

メーテリア？誰のことだ？

いやいや、それ以前に才能が開花？今になってか!?

化け物か…あの容姿で。

ヘルメスが呆れたかのように言った。

「嘘だろ…。あれで、まだ開花してなかったのかい…。」

「ええ、オラリオ中の冒険者が全員かかっててももはや坊ちやまが負けることはないで

しよう。ですが、坊ちやまはまだ14歳です。精神面はまだまだ子供です。」  
「そうね……」

……まだ14歳だったのか。

……その点は奴の方がはるかに上だな。

私がそう考えているところに、「最恐執事」は言った。

「世の中には理不尽なことがあります。坊ちやまはそれへ立ち向かってもらいます。」

「それがエピメテウスか……」

「はい、貴女は天の炎を坊ちやまの手によつて浄化させたい。大英雄エピメテウスは坊ちやまの邪魔ををすると思いますか？」

「する。あいつは、私が与えた『炎鷲の剣』で神……特に『悠久の聖火』を司るヘステイアを突き刺し、穢れた天の炎を操るつもりだ。」

「「なっ……」」

そうだ、奴の目的はそれだろう。

奴は……オリンピアにヘステイアを招き、殺し、穢れた天の炎を確実にものにする気なのだ。

黒竜を……いや下界を滅ぼすためにな。

アフロ……ディーテが私を糾弾してきた。

「あ、あんた！何てものを与えているのよ！」

「…それでもあやつは、ベヒーモスやアンタレスを倒せなかったがのう。」

「漆黒のモンスターは私達、天の力は効かないからね。『炎鷲の剣』でも。」

「しようがないだろ？あれはダンジョンから俺たちへの刺客…後出しなんだから。」

そうだな。

エピメテウスは間違いなく奮闘したが、漆黒のモンスターには何も敵わなかった。

それが…奴の凋落の原因なのだ。

天の炎に頼りすぎなのだ。

神の力にな。

アルテミスが「最強侍従」と対峙して言った。

「…何故、ベルを派遣するのだ？」

「神アルテミス、坊ちやまは向き合わなければなりません。英雄という重みに。」

「その重みに耐えきれないようなら、ダンジョン制覇や黒竜討伐など夢のまた夢です。」

…こいつらは【白兎の脚】を徹底的に追い込んで更に強くさせる気か。

【白兎の脚】はまだ14歳なのだぞ？

そこまでするのか…。

「…厳しいな。お前たちは。」

「当然です、神プロメテウス。その相手が三千年も苦悩し続け、堕ちた大英雄なら不足ありません。」

「かの大英雄なら、坊ちやまへ英雄の陰を教えてくださいましょう。」

「それ以前にあの子の精神は保つの？憧れの大英雄閣下が堕ちたとすると衝撃は半端ないわよ？」

そうだな、奴は三千年も生きて、闘い、苦しんできた。

14歳のがきが到底敵うようなものではない。

しかもそれが自分の憧れの英雄だとしたら…。

ヘステイアがしつかりとした目でアフロディーテに言った。

「アフロディーテ、ベルくんの心はボクが守る。ボクとベルくんがオリンピアへ向かう。それでいいかい？メイクン、セバスクン。」

「そうですね、ヘステイア様がおられば大丈夫でしょう。多分。」

「坊ちやまとヘステイア様次第ですね。」

「不安になるようなことを言わないでくれるかい？」

「失礼しました。」

……慈愛では天界でも上位に入るほどのヘステイアなら大丈夫だろう。

いずれにしろあの少年次第だ。

## 第417回 侍従長、考慮。

坊ちやまの派遣先が決まって良かったです。

アンタレス、ベヒーモス、ヤマタノオロチ、「オシリス・ファミア」が相手でも今の坊ちやまがほぼ勝つでしょう。

ですが、それでは駄目なのです。

坊ちやまはもつと困難な壁を超えてもらわないといけません。

それが、あの大英雄エピメテウスです。

クソバカ主神の言うことが本当なら、レベル100以上で三千年も生き、神造兵器の【炎鷲の剣】を持っている。

そして、坊ちやまの尊敬と憧れの英雄…。

相手にとっては不足どころが上々ですね。

もし、彼を倒すことができれば坊ちやまはより強くさらなる頂きへ届きます。

ですが、彼を倒したとしても穢れた天の炎が相手では厳しいですね。

ここは、オリンポス一の鍛冶神へ依頼しましょう。

「ヘファイストス様。」

「…何かしら? メイ。」

「代金は払います。坊ちやまのあの炎を増幅できる剣の作製をお願いします。」

「…: そうね。ヘスティア・ナイフだけではあの天の炎を消滅させるのは無理だわ。貴女が言うように増幅できるものが必要ね。」

「(明察で)ごいいます。」

「(理解が早く)非常に助かります。」

いえ…: 同郷のしでかしたことをぼつちやまへ押し付けることに対して、何か思うところがあるのでしようね。

神へファイストスはヘスティア様へ顔を向けて言った。

「わかったわ。報酬は1億ヴァリスよ? ヘスティア・ナイフとは別よ。」

「ふえっ!?!」

「当然でしょう。あのナイフは貴女だけが払うべきよ。例えば、ベル・クラネルがその数倍を払ったとしても私は受け付けない。これでも結構割り引いたのよ?」

「そ、そんな〜。」

「働きなさい。キビキビと。」

「では、早速1億ヴァリスをお支払いいたします。」

あのナイフはヘスティア様と神へファイストスの契約上で作られたナイフです。

それは仕方ありませんね。

神ヘラがホツとしたかのように言った。

「…オリンピアも解決できそうだな。ベルとヘステイア次第だがな。」

…神ヘラらしかぬ失言ですね。

ここに、クソバカ主神や油断ならない神ヘルメス、神プロメテウスもおられるのですから。

クソバカ主神はそれに反応して言いました。

「も、じゃと?」

「ちつ…:…口が滑ったか。おい、メイ。この人を元に戻せ。」

「了解しました。」

「ちよ!今の詳しく聞かせるんじゃないやああ!」

「後で言います。それまで待つて下さい。」

ええ、あとで神ヘラと共に説明いたします。

…大人しくそこで待つている、クソバカ爺め。

クソバカ主神を早々と壁に塗り込んだ後、引き返しました。

神ヘラが神プロメテウスへこれまでのことを説明していました。

神プロメテウスは呆れているようですね。

「プロメテウス、お前もオラリオ連合へ入ってもらうぞ？」

「わかった…。そこまでお膳立てをしているようではな。しかも私の正体もバレたことだし。やむを得ん。レア、いいな？」

「はい…。…お願いです！あの人を…救って下さい！あの人命はお助け下さい！」

あの人？まさか、この方は…。

私の疑念をヘステティア様が聞いてくれました。

「レアくん…キミはまさか。」

「そうだ…エピメテウスと結ばれた娘だ。…離婚はしたがな。」

「ゼウス様が仰った通り、私のせいなんです！あの人がああなったのは！」やめろと言っただろう。それは私の罪だ」プロメテウス様…。」

…クソバカ主神がこの方をチラチラと見ていたのはそれが理由でしたか。

大英雄エピメテウスが堕ちたというきっかけは一体何なのでしょうか？

私がそう思っているところに、神ヘラが神威を放ってその方へ話しかけました。

「待て、聞き捨てならないことを言ったな？」

「ヘラ…。」

「レアとか言ったな？私は結婚を司る神だ。何故、お前がエピメテウスと離婚しなければならなかったのかを言え。」



「ヘラ！それは私の…」

「黙れ！未婚のやつは。別れる痛みは別れる者しか知らない。それを聞く権利は結婚を司る私にある。」

そうですね、それは神ヘラしかできませんね。

プロメテウスは観念したかのように言いました。

「…わかった。天の炎は一回暴発し、オリンピアを包んだ。」

「そして私とあの人の娘…シオン、シアテは炎に包まれ…死なれ、囚われました。」  
「囚われた…？」

まさか!?天の炎は！

私の危惧の通り、ヘステイア様はそれを察して言いました。

「まさか…天の炎は死んだ者の魂を還さず、彼らの魂を縛っているのかい？」

「そうだ…。オリンピアの国民ほぼ全員がな。」

「何てことなの…。そこまで天の炎は…。」

…縛っている？

……これはもしかしたら…。

私があることを考えている最中に、神ヘラが催促しました。

「…話がそれたな？言え。」

「娘達を燃やされ囚われ、娘達を助けられなかつた私はあの人に言ったんです。…あの人の苦しみを痛みをわかつているはずなのに、決して言つてはいけない言葉を。」

「それは？」

「『英雄のくせに！』と…。言つた後あの方は…豹変しました。そしてすぐに後悔し、撤回しましたがダメでした…。」

…エピメテウスが三千年も生き、闘い、苦しんでいたのを知っている上で愛妻からそれを言われると変貌するのも仕方がありません。

いえ、そこで自分が壊れてしまったのでしようね。

自分の名を地に落とされ、故郷を自らの炎によつて焼かれ、愛娘を焼死させ魂を束縛され、愛妻から自分の存在そのものを否定された…。

よく耐えてこられて…今を生きてきたものです。

…いえ、ある意味あの時…ウィーネさんを失つた坊ちやまの成れの果てかもしれないません。

## 第418回 侍従長、期待。

私がそう考えている時に、神プロメテウスがレアさんへ謝罪するかのようには言いません。

「レア、お前が責めるのは奴…エピメテウスではない。天の炎を…落とす火を間違えた私だ。」

「いや、プロメテウス。貴女が落とさなかったら当時の下界の子は半分も生き残らなかった。」

「そうよ。貴女は間違っていない。」

「ええ、私達が尻込みしてたのを貴女は率先して落とすただけ。」

「そうだ。胸を張るがいい。」

「!?!」

ほう、生き返りましたか。

さすがオリンポス十二神だけはありますね。

その場にいる神々、神プロメテウスまでも声を揃えて言いました。

「アポロン！生きていたのか！」

と。

変態神アポロンはこれまでのことを反省してないかのようには言いました。

「ひどいな！君たちは。プロメテウスまでも！それはさておき、ここはベルキゆんのホームだろ？ベルキゆんの匂いが私を復活させたのだ！くんかくんか。」

「なら、思い残すことはないな？よし、死ね。」

「切り刻むわよ？ベルの匂いを少しも残さずにね？」

「どこを串刺ししてほしいんですか？大丈夫ですよ、ベルさんの目に触れさせないようにしますね？」

「ひいひいっ！」

……その程度では屈しないでしようね。

メーテリアさんへチクってけしかけましょうか？

私が変態神をいかに廃神させるにはどうすればいいのかを考えているときに、神ヘラがレアさんを慰めていました。

珍しい光景ですね。

「…アレは無視しろ。お前は間違っていない。愛娘を一気に2人も失ったら誰だつて気が狂う。この私でもな。本来、そこをフォローするのが夫…エピメテウスの務めだがな。辛かっただらう？」

「う…ああああああああああーっ！」

レアさんは愛する娘を失った悲しみ、自分の失言による後悔、愛する人が堕ちていくのを見ることしかできなかつたもどかしさ、ヘステイア様を欺き神プロメテウスを従者とした罪悪感を全て吐き出すかのように慟哭し、泣き続けました。

レアさんが泣いている間に、神プロメテウスは神ヘラへお礼を言っています。

「ヘラ…すまない、私の代わりに。」

「気にするな。ベルにはますますオリンピアへ向かわせるしかないな、あらゆる意味でな。」

「そうだね…。」

そうですね。

坊ちやまは…大英雄いえ反英雄となったエピメテウスを倒すことができるでしょうか？

強さも…技も…経験も…メンタルさえも全てを上回っている彼に…どこまで食いつけるでしょうか？

これもリリさんへ課題追加ですね。

そして…彼女へ確認しなければなりませんね。

リリさんへこれまでのことを報告しますと、リリさんは頭を抱えていました。

仕方がありませんね。

「……頭が痛くなってきました。」

「リリさん、仕方がありません。私達もここまでとは思いませんでした。ですが、それを乗り越えれば一気に解決できます。」

「……あのドリンクを毎晩、お願いします。」

「もちろんですよ。ご用意します。」

早速そのドリンクを差し出したところ、一気に飲みし私が提供した資料を一気読みして  
いますね。

頼りになる小人族、いえ坊ちやまの嫁候補ですね。

そして私はレフィーヤさん……いえエピメテウスと同じ古代の英雄であるフィーナさんの生まれ変わりであるレフィーヤさんに話しかけました。

「レフィーヤさん。」

「あ、メイさん。どうしましたか？」

「少々お話があります。」

「あ、はい。」

フィーナさんはエピメテウスを知っているでしょうか？

それによつては……。

レフィーヤさんと私と二人きりになるところへ連れてきました。「どうしましたか?」

「単刀直入に言います。オリンピアの大英雄、エピメテウスを知っていますね?」

「……はい。知っています。古代の時、彼の方に助けを求めて力を貸してもらったことがあります。その助力のおかげで勝つことができました。」

ほう、そのような縁があつたのですね。

これも…集結する縁なのでしょう?」

私は念のため確認しました。

「ということは、面識がありますね?」

「え、ええ? 私が直接交渉しましたので。」

「それはそれは、これ以上ない生き証人ですね。実は先程、オリンピアの使節団が来られました。内容は…」

私は、神プロメテウスのことや大英雄…いえ反英雄となつたエピメテウスのことを話しました。

話した後、フィーナさんは顔面蒼白していました。

「そんな!? あり得ない! あの方が下界を滅ぼす!? 誰よりも自分より世界を優先した方が!?」

「神プロメテウスが言うには、世界への復讐に凝り固まって墮ちたそうです。」

「…そんな、あの高潔な方が…。」

これは面と向かっていない方しかわかりませんね。

私はそれを聞き、方針転換を考えてレフイーヤさんへ言いました。

「レフイーヤさんは今のところアンタレス討伐隊に入っていますが、オリンピックア救援隊に入りますか？」

「…アンタレス討伐軍には私がいなくても大丈夫なんでしょうか？」

「わかりません。彼女たち次第です。」

ええ、彼女たち次第です。

レフイーヤは一呼吸を置いて一瞬考えて、しっかりとした目で私を見て言いました。

「オリンピックア救援隊に入らせて下さい。私は…みんなを信じています。」

「わかりました。リリさんへ伝えましょう。」

「(エピメテウスさん…風評に負けず、世界を優先した気高い貴方に…一体何があつたのですか?)」

これで何とかかなりそうですね。

後は…リリさん次第ですね。



## 第419回 栗鼠、補給。

リリは疲れ果てました。

もうたくさんです！

羊皮紙のよも見たくありません！

ですが：オラリオ連合の総司令としてやらなければなりません…。

…ふざけないで下さい！

よくよく考えれば、半年前にはしががないサポーターだったりリリが：何でオラリオ最強となつた「ヘステイア・ファミリア」を中心としたオラリオ連合の総司令をやっているのですか！

波乱万丈にも限度がありますよ！

一ヶ月前の「フレイヤ・ファミリア」との戦争遊戯に勝つて、色々と：本当にイロイロとあつたのですがようやく一安心できるかと思つたら、でかいクエストが一気に5つも来しました。

何なんですか！

リリたちは悪いことを何もやっていないというのに！

ですが、そのクエストについての情報や対策も整理でき、本日の総会で説明するまでに至りました。

あのドリンクを毎日飲んでもキツかったです…。

それでメイ様とセバス様の承認をいただいたのはよかったです。

ですが…リリはもう限界です。

説明する前に、燃え尽きそうです…。

「……………」

「リ、リリ？大丈夫？」

これが…大丈夫に見えますか？

毎日、稽古やダンジョンを楽しんでいるベル様には分かりませんかでしょうね！

…でもリリはそんなベル様をどこまでも助けると決めたのですから…。

少なくとも泥水をすすったサポーター時代と比べたら、まだマシです！

……ええ、マシ…ですとも！

ベル様へ愛想笑いしようとしたところ、メイ様がベル様へ話しかけました。

「坊ちやま、リリ嬢を膝枕してくれませんか？かなり疲れていますから。」

「!？」

「あ、うん。大丈夫？リリ、おいで。」

「ベルしやま〜！」

ああ……癒やされます。

一緒にお風呂や添い寝もいいですが、こういったのもいいですね！

ぐんぐんとベル様成分が補給されていきます！

でもこういう場面にはあの方が目を吊り上げて来るんですよね…。

「おいきさ」「まあまあ、姉さん。リリちゃんも大変だったからね？」…仕方がないな。」

メーテリアお義母様ああああ！

感謝します！

……この優しいお方の逆鱗に触れれば、「ヘステイア・ファミリア」いえオラリオ連

合一の最恐であることは誰も想像できませんよね…。

何度言いますが、懸隔があります！

そう思っている15分間もベル様に膝枕してもらいました。

今のこの時間はベル様とリリだけの時間です！

遠巻きにこちらを羨ましそうに見つめている方々を尻目に、ベル様とこうしているの

は非常に優越感を感じます！

ふふん！



「…ずるい。」

「ずるいです、リリ様…。」

「ずるいよ…リリさん。」

「ずるいわ！リリちゃん！」

「仕方ありませんねえ。」

「ええ…、多くの情報をたった一人でまとめているのですから。…やはりずるいですね。」

「ベルの膝枕つて、私もしたことないのに！」

「あ、私はしてもらいましたよ♪」

「「え」」

「……ベルを膝枕したのは私が最初（ふふん）。」

「「な!？」」

「…（ベルを膝枕したことがあるとは言えない…。とつくにシノスが奪っていたのですか。いや、それよりベルを膝枕したことがあるのですか!?アイズは!）」

「後でベルくん膝枕してもらおうと。」

「あ!私もー!」

「待て、貴様ら。義息子の膝枕を何と思って「むー!私もしたことないのに!」…メーテ

リア。」



…頃合いですね。

やる気が出てきました！

むふー！

「ふう！満足できました。」

「あ、うん？」

「ゴホン、皆さんは既に会議室にいますね？」

「僕たちで最後だよ。」

「では行きましょう！」

ええ、行きましょう！

オラリオ連合初の定期総会…リリの戦場へ！

皆様は集まっていますね…。

最前列は…「ロキ・ファミリア」ですか。

まあ妥当ですね。

【ヘスティア・ファミリア】に次ぐ最強のファミリアですから。

おや、何か雑談をされているようですね。

聞き耳を立ててみましょう。

「オラリオ連合の定期総会か。初めてだね。」

「ちつ…鍛錬中だったというのに。」

「あんた…かなりやつれているわよ。」

「誰のせいと思っているんだ！」

「うるせえぞ、発情狼。」

「てめえ！」

【凶狼】は…三人の女性に囲まれてハーレムを築いていると聞きました。

…かなり絞られているのがよくわかりますね。

それにしても、フィン様はライラ様と【怒蛇】とよく一緒に行動されていますね。

いえ、付き纏われているとの間違いですね。

…リリはベル様を選んでよかったと思います！

「お前たち騒がしいぞ。…オラリオの名だたるファミリアが一同に集まるのは大抗争以来だな。」

【九魔姫】がそんな彼らを注意していますね。

アルフィアお義母様とメーテリアお義母様とエイナ様の母であるアイナ様と2日に1回はお茶会をされているようですね。

…独身のはずですよね？

「うむ…。それに、集まる理由は何じや？ただの挨拶かのう？」

おっと、フィン様がこちらを見えています。

「単なる社交辞令だけではないと思うよ。見なよ、リルルカ・アーデの鬼気迫る顔を。」

「勘弁してくれよ…。」

ええ、社交辞令ではありません。

オラリオにとって死活問題ですから。

【猛者】が改宗した【タケミカツチ・ファミア】も前方に來ていますね…。

一ヶ月前まで弱小派閥だったのが、【猛者】が改宗したことにより中堅派閥…いえちよつと上になっていますね。

「オツタル、何の集まりだと思う？」

「わからん。だが、何があつても堂々としている、それが団長というものだ。武神であるタケミカツチ様の名を汚すな。」

「あ、ああ。わかった。」

【猛者】は桜花様を指導されているようです。いいことです。

【タケミカツチ・ファミリア】へ改宗されたのを聞いた時、大丈夫ですか？と思ったのですが杞憂でしたね。

……あそこまで相性がいいとは思いませんでした。

「桜花……（オツタルさんのおかげで桜花もだんだんと強くなっているし……私も頑張らないとー）」

【猛者】は最近入ったと思えないほど、【タケミカツチ・ファミリア】に馴染んでいますね。

特に桜花様と千草様とは、旧知であったかのように見えます。

その影響で、桜花様も千草様もはりきっているようです。

……何故でしょうか？



## 第420回 栗鼠、観察。

あちらは『豊穰の女主人』の方々ですか。

他はともかく、「女神の戦車」が働いているのは予想外でした。

連携取れているのかと思いましたが、意外とうまく行っているようです。

妹のアーニヤ様がいるからでしょうか？

「店を午前閉めて呼ばれたからには、何かあるんだろうね。」

「ちつ…店が気になるぜ。」

「ニヤ…かなりの強者がいるニヤ。ミヤーたちはいらないじゃないのかニヤ…。」

「いやな予感がするよ…。」

「ライたち、ちゃんとご飯食べているかな…。」

個性が強い方々ですね。

それを束ねているミア様はすごいですね。

さすが、「フレイヤ・ファミリア」元団長ですね。

そして「ヘルメス・ファミリア」ですか。

ベル様にもっと関わってほしくないファミリアです…。

ですが、ヘラ様、メイ様、セバス様がいる以上簡単にこちらへ手出しできないようです。

メーテリア様がおられるなら尚更ですね。

あ、【泥犬】が来ていますね。

アストレア様：いえ、ユーティス様のおしおきから復帰したようですね。

いい気味です！

「うひひくやつと治ったぜ。アストレア様：怖いよ。」

「ルルネ、大人しくしていなさい。でないと、また派遣しますよ？」

「やめてくれよ、畜生！これもそれもあの疫病神：【白兔の脚】のせいだ！」

「あ？処すぞ？処されたいんだな？」「ひいつ！」

「や、やめなさい！ローリエ！」

…ローリエ様がおられるなら大丈夫でしょう。

まさか、メイ様が戯れに出した案がここまで大きくなるとは想定以上でした。

そして…新たな副団長ですか。

前の副団長はファルガー様でしたね。

確か入団して間もなくして副団長になったとのことですが…。

「団長、何の集まりでしょうか？こういうのはよくあるのですか？」

「いいえ、マリウス副団長。オラリオ連合では初めてです。…もう私の頭がズキズキと、胃がキリキリと言っています。もうやだあ…。」

「…どうぞ、常備している頭痛薬と胃薬です。かつて馬鹿アレスのせいで、ひどい頭痛と胃がよく荒れたため効きます（数週間前に入った私が何で副団長なのだろうか…。先輩方が「どうぞどうぞ。というか、やれ」と言うから…。）」

「頂戴します…。」

「（こいつら…似た者同士だねえ。）」

…ラキアの元王子が「ヘルメス・ファミア」副団長ですか。

似た者同士のようですし、意外とくつつくんじやありません？

おや？アーディ様が古巣に挨拶しているようですね。

「ガネーシヤは別室か…。」

「お姉ちゃん、元気…？？」

「アーディ、お前もげん…疲れているのか？」

「連日ボロボロになるまで稽古しているよ…。あの…元女神様たちのしごきで。キツイ…。」

「そ、そうか。後でお礼を言わないといけないな。」

…そうですね。

あの方々は、『鍛え直してあげるわ』と。

大抗争で真っ先に倒れたことがいけなかったようです。

闇派閥の自爆攻撃の最初の犠牲者と言っても、レベル3が耐えきれないようでは話にならないと。

特に体捌き…パンクラチオンを叩き込んでいるようです。

アーデイ様はシャクテイさんへ文句言っていました。

「お姉ちゃん、ひどい！」

「いつもサボリ気味だったお前には丁度いいだろうが。ああ、今度ガネーシャとイルタとお前の稽古を見に行くからな。」

「え」

「何だ？見られてはまずいことでもあるのか？」

「う、ううん。お姉ちゃんとイルタはいいんだけど…ガネーシャ様までも？」

「そうだが？」

「…：…：そう（ガネーシャ様…強く生きて）。」

「??？」

ああ…。

あの元女神たちの稽古に付き合わされるのですね。

ヘルメス様のようにはならないと思いますが、ご愁傷様です。

「ミアハ・ファミリア」と「ディアンケヒト・ファミリア」、「デメテル・ファミリア」ですか。

二大医療派閥がついたのは大きいですね。

「フレイヤ・ファミリア」の元構成員のほとんどは「デメテル・ファミリア」と「ミアハ・ファミリア」に吸収されたと聞いていますが、かなり馴染んでいますね。

「あの方々の目論見がうまくいったようですね。」

「そうだね…。こんな短期間にここまで…。」

「私としては、「フレイヤ・ファミリア」のホームを爆破したあの執事が恐いんですが…。」  
「その程度ならまだいい方です」「その程度!?」。あの方が戦争遊戯までにやったことを知れば、絶句しますよ。いえ、絶望すると言ったほうが正しいですね。」

「絶望!?!?!」

「わかる」

ええ、わかりますとも。

「ダ、ダフネちゃん…。アポロン様とヒュアキントスさんはどうなったのかな…?」

「……知らない!知りたくもない!恐いことを聞かないでよ!」

「ごめ〜ごめん!」

あの方々がやるからには、おぞましいことが起こっているでしょうね。

あのザニスがああなっているのですから…。

「ですが、ベルさんがあそこまで強くならないとここまで来れなかったのは事実です。」

「そうだね…。…まだ1年も経ってないんだけど？」

「同感です…。私達がやってきたことは何なのかと思います…。」

それは同意しますね。

普通数年もかかってランクアップするのが、数ヶ月もないのですから…。

しかも連続で。

「私はもう知りません。ええ、知りませんとも。」

「現実逃避はやめなよ…とりたいけど、私もそうしたいよ…。」

「同感です。」

「そういう時は風呂へ入って、のんびりしますと忘れますよ?」

「そうするよ…。」

「そうします…。」

現実逃避したくなるのもわかります。

ベル様だけで規格外なのに、メイ様、セバス様がベル様の手によって解放された時点で規格外が一気に増えました。

…そうでもしないと、「フレイヤ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」を相手取ることもできなかつたでしょうね。

何故でしょうか？ほんの一ヶ月前なのに数年前のように感じられます。

ベル様、何をキョロキョロしているのですか？

オラリオ連合のリーダーなので堂々としてほしいのですが。

「あれ？神様たちは？」

「ベル様、別室でヘステイア様とヘラ様を中心に会議しています。間もなく来られます」

ヘステイア様たちの全会一致がないと進められませんからね。

……ヘラ様、メイ様、セバス様もおられるのでまずは大丈夫でしょう。

はあ…皆様へ説明するのに気が重い。

## 第421回 義祖母、決議。

私はこれまでのことをこいつらへ説明した。

私なら本来不要だが、ヘスティアが必要というから仕方がない。

説明した後、啞然とした顔、爆笑している顔、笑いをこらえている顔、引きつった顔、慄然とした顔、いつもと変わらない顔、そして笑顔…。

神々がこう百面相を見せるのは壮観だな。

おっと、確認をしておくか。

「…ということだ。文句はないな？」

「…無謀すぎる。1つずつでは無理なのか？」

「タケミカツチ。私もそう思ったんだけど、時間が非常に足りないわ。時間をかけると悪化していくわよ？」

ヘファイストスの言う通りだ。諦めろ。

無乳が笑いを収めた後、言った。

「ひーひー、あーおもしろかったわ。んー、ウチのカンやと同時にやった方がええと出ているわ。それに…ベルただけが英雄というわけとちやうやろ？」





「そうだわさー！みんなにもうつさないだわさー！」

「は、はい！」

「……………」

「レア様？」

「え？あ、そ、そうですね。」

「すみません！レア様！（ペコペコ）あつ！（ドンッ！）すみません！」

「あつ…。」

『おい、レア。いつもの通りにしろ、不自然だぞ。』

『…無理です。事実を知った今、プロメテウス様を侍従扱いにするなんて…とんでもないですー…とところで、いいのですか？あの子たちには言わなくても？』

『…お前もわかっていると思うが、私は奴だけでなくプロメテウス教団までも欺いているのだ。私、いや私達はオラリオ連合…ヘスティアと「白兔の脚」に賭けるしかないのだ。…エピメテウスを救うこともな。私の正体を知る子が少なければ少ない方がいいのだ。』

『…わかっています。これしか方法がないということも。』

『…お前の娘たち、いやオリンピア国民全員の魂を解放するためなのだ。そのため、最後まで隠し通さなければならん。お前が漏らせば計画は破綻すると思え。』

『はい…承知しました。』

『よし、ではいつも通りやれ、』

『…それが一番難しいです。といたしますか、猫かぶりすぎなのでは…』

『何か言ったか?』

『い、いいえ!何でもありません!』

『何か、レア様とイリアの距離がものすごく近くなっているような気がするけど?』

『気のせいだわさ?』



神々共がようやく決心したような顔を見せた。

「わかった。「ヘルメス・ファミア」はそちらの提案通り動こう（それしかないよなあ…だが、これはチャンスだ。今の今まで停滞していたのが一気に動き出したからな。…動きすぎだろ!）」

「【ガネーシャ・ファミア】はシャクティ以外、オラリオを守ろう（うむ!ようやくまとまってきたな!…そのきっかけがベル・クラネルか。新たな時代の幕開けが見えてきたかもしれない。）」

「【デメテル・ファミア】も同様よ（ふふふ、テンション上がってきたわ!戦いへ参加出来ない分、みんなへ新鮮で美味しい野菜や果物を届けたいとね!）」

「うち、〔ロキ・ファミリア〕も全面協力したるで！（フィン、名誉挽回やで！ここで一気に抜き出て…いや無理やろ。あのウルトラスーパーバグにチート侍従コンビがおるからなあ…。となると、あの少年の寿命が尽きて…子供もそれを受け継いでいたらどないしよ…。そうなつとつたら、無限ループやんけ！」

「〔タケミカツチ・ファミリア〕は〔ヘラ・ファミリア〕に同行する（ヘラがやりすぎないように見ておかないとな。…え？止められるのか？俺に？…送還されるのも覚悟しておこう。」

「〔ヘファイストス・ファミリア〕はオラリオ連合の武器を調達するわ（きて、忙しくなってきたわ。椿、腕が鳴るわね。なら、探索系ファミリアに素材収集クエストを多く出しておかないとね。」

「…あまりにも賭けじゃな。いいだろう、〔ゴブニユ・ファミリア〕もじゃ（総合商店も建てなければならぬというのにな。まあ、7年前と比べるとマシじゃろう。やりがいがあるものが多ければそれでよい。」

「ククク…ハハハ！血が騒ぐわ！〔カーリー・ファミリア〕も協力じゃ！（ハハハ！この前の戦争遊戯に引き続き、闘争じゃ！全部のクエストを見たいのう！…見れるかのう？）」

「〔ミアハ・ファミリア〕も薬などを調達しよう（ふむ、ヘイズなどの人手は足りている

な。ダフネとカサンドラたちにまた中層まで行ってもらって素材を集めてもらわないとな。以前：いやそれ以上の忙しさになるな。」

「ふん！無茶苦茶を言いおるわ！『ディアンケヒト・ファミリア』もアミッドの派遣を含めて、全面協力する！（アミッドをそこへ派遣するのか？まあ、別にいいのだが…文句言われるだろうな…）」

ちつ…この神々、内心で何かを抱えているな。

これだから神々は信用ならんのだ。

ヘルメスが恐る恐る私へ聞いてきた。

「その…いいかい？そろそろ、教えてほしいんだ。何故、彼らが復活しているのとフレイヤ様たちがヒューマンになっているのかを。」

「「え？まだ知らなかった？」」

「え？待って！知らなかったのは…俺だけ？」

「安心せよ。妾もじゃ。」

「えー…カーリーと一緒にされても…。」

「あー…説明するよ。」

ふん、もういいだろう。

我が義孫の偉大さを思い知るがいい。

ヘルメスが珍しく頭を抱えていた。

まあ、そうだろうな。

私も知った時はそうしたものだ。

「……………ベルくんを神と認定してもいいんじゃないか？と俺は思うんだ。というか、時を遡つて？ベルくんの血が女神を封じれる？もう神を越えているんじゃないか！（ゼウス、貴方はそれを予想していたのか？いやできるわけない！というか、できてたまるか！）」

「ハハハ！無茶苦茶な子じやな！妾もなりたいのじやが、無理じやろ？」

「ええ、貴女はベルを異性として見てないでしょう？」

「そうじやな…惜しいのう。ああ！妾自らの手で、神力なしで闘争したい！」

「それは俺もだ。この武技を振り回してみたい。」

「…この脳筋どもめ。」

タケミカツチ、お前は男神だから無理だろう。

カーリー、お前にはシヴァという夫がいるだろうが。

さて、もういいだろう。



## 第422回 栗鼠、進行I

さて、始めますか。

やりたくはないですが、ここまで来たら腹をくくるしかないでしょう。

「ゴホン……。皆様、お集まりいただきありがとうございます。大変お待たせして申し訳ありません。先程、定期総会の議題について皆様の主神による会議で全柱一致となりましたので、始めます。改めて、オラリオ連合の盟主「ヘステイア・ファミリア」参謀のリリルカ・アーデです。よろしくお願いします。本来なら全員を紹介させていただきます」と思います、既に見知った仲なので割愛させていただきます。」

「まあ、そうだね（ロキも賛同したのか。なら大丈夫だね）。」

「けっ！省いてくれるのはありがたいぜ！」

ええ、面倒ですからね。

それにもう初対面同士ではないでしょう。

続けましょう。

「オラリオ連合はご存知の通り先日立ち上げたばかりで、まだ無名です。かつての最強の「ゼウス・ファミリア」と最恐の「ヘラ・ファミリア」には全く及びません。それは





「ヘスティア・ファミリア」の皆様は驚いた顔をしていますね、特にベル様…。

「なお、その全ての情報は混乱を招かないために私、リルカ・アーデの胸の内に秘めています。【ヘスティア・ファミリア】の団員は未だ知りません。その辺りは皆様と同じです。」

「うん…：毎日リリはずつと資料とにらめっこして考えていたんだけど…、なんだろう？」「ベルくん、最後まで聞こう？」

ええ、情報は一部隠しているところがありますからね。

特にベル様は、オリンピックの真実を…：大英雄エピメテウスのことを知られてはなりません。

メイ様とセバス様に厳命されていますから。

あとは皆様にも情報がまちまちです。

オラリオ連合の中核である【ヘスティア・ファミリア】は特に共有しなければいけません！

さて、本題に入りましょう。

「単刀直入に言います。皆様には新五大クエストに参加していただきます。」

「新五大クエスト…：だと？」

「黒竜ではないのか？」

ええ、黒竜はまだ後です。

最恐と最強が全く歯に立たなかったからです。

準備は万端にしなければいけません！

特にベル様は…最後の希望なのですから。

新五大クエストについて説明しなければいけませんね。

「新五大クエストと言っても、かつての最強と最恐が制覇した二大クエストには及びません。ですが、それはいずれもオラリオの危機であると思っております。」

「危機…？」

「桜花、動揺するな。常に沈着冷静でいろ。」

「ああ、すまん。」

…桜花様は堂々としてほしいものです。

まあ、仕方ありません。

一ヶ月前までは弱小派閥でしたから。

1つ目について説明を進めましょう。

これは五大クエストの中でも神が深く関わっていますからね。

「1つ。大森林のエルソス遺跡の奥に、ベヒーモスとリヴァイアサンと同じ古代のモンスターアンタレスが巢食っています。かつて「アルテミス・ファミリア」が挑みまし



でしよう。」

「そうだね…。」



## 第423回 栗鼠、進行II

「ここはフィン様たちにとっては何人事ではないでしょうね。」

フィン様たちも関わったことがあるのですから。

「2つ。現在、データイン砂漠を中心に周辺諸国へ大きな被害が出ています。その内の1つシヤルザード王国より使者が来られて、王国軍勢が囲んで討伐したモンスターのドロップアイテムで、こちらが調べたところ、あるモンスターが特定しました。かつての三大クエストの内、ベヒーモスが復活している可能性が高いとわかりました。」

「何じゃと!？」

「馬鹿な…。いや…メイとザルドが確認した上なら…確定ではないか。」

「厄介だね…。眷属を産むという新たな能力を身に付けたのか?」

リリはかつてのベヒーモスを知りませんが、メイ様とザルド様が見たところベヒーモス復活確定と言っていました。

仕留め損なったのでは?と思つたのですが、その場合もつと復活していたはずです。

ベヒーモスのドロップアイテムを人またはモンスターが食らつたことによつて、復活を果たしたのでしょうか。

メイさんの危惧通りとなりましたが、その時はもう全滅寸前だったので引き返したそうです。

まさか、このタイミングで復活するなんて…。

やはりざわついているようですね。

仕方がありません。

グランド・デイとなったモンスターですからね。

「静粛に！ 動揺する気持ちはわかりません。ベヒーモスに対する新たな情報が入り次第、報告しますので他言無用です。」

「「……………」」

…まあ、こんなところでいいでしょう。

さて、進めましょう。

3つ目は…相手がお気の毒でしょうか思えません。

マツチポンプに近いですが、仕方がありません。

「3つ。先日、オラリオ連合の盟主である〔ヘステイア・ファミリア〕に宣戦布告を仕掛けたファミリア〔アマテラス・ファミリア〕の討伐です。〔アマテラス・ファミリア〕の使者が我が主神ヘステイア様に無礼を働き、団員であるサンジヨウノ・春姫を無理矢理拉致しようとした。」





想像もしたくありませんね！

まあ、それはそれとして10億ヴァリスが入ってきたのはいいことです。

色々と先立つ物が多くありますからね！

………それでも相殺するのですが。

続けましょう。

「幸い拉致は防止できましたが、ヘステイア様が大層お怒りで宣戦布告と受け止めました。それについて調査したところ、極東にも古代のモンスター、ヤマタノオロチがいることが判明しました。極東だからといって関係ないかもしれないかもしれませんが、オラリオの冒険者として捨て置くことはできません。【アマテラス・ファミリア】討伐と共にヤマタノオロチを討ちます！」

「また…古代のモンスター。」

「アイズ、落ち着きなさい。」

「落ち着いて下さい、アイズさん。」

「うん……めん。」

…アイズ様は古代のモンスターに対して並々ならぬ気持ちをお持ちのようですね。

何かあるのでしょうか？

おっと、いけません。



「ああ、もし大抗争に参加していたら間違ひなく僕たちは負けていた。」

「そうだな……。何故、今なのだ？」

「恐らく……彼の台頭じゃないかな？彼は良くも悪くも皆を奮い立つからね。それがあのファミリアの琴線に触れたんじゃないかな？」

「ああ……、あの脳筋たちなら納得じゃ（だ）。」



## 第424話 栗鼠、進行Ⅲ

やっと最後の課題です…。

これは緊急性と難易度と厄介度が非常に難しく、慎重に進めなければいけません。

「最後です。このクエストは今回の5大クエストの中で一番緊急性をはらみ、難易度と共に厄介度が非常に高いです。…数千年前、天界より下界のオリンピアに天の炎が降り立ったことは皆さんご存知と思います。ですが、その天の炎が下界の汚濁に汚染され、暴発寸前だそうです。「なっ！」先日のオリンピア使節団の真の目的は穢れた天の炎の浄化です。その浄化のため、我らが主神ヘステイア様と団長ベル・クラネルが現地へ趣きます。」

ふう…：ようやく全てのクエストを説明し終えました。

まだ前座ですがね…。



「なるほど…：そうだったのか。急に使節団が来るから、きっと何かあるな、と思っていたよ。」

「天の炎が汚染されるとは…、そもそも浄化できるのか？」







フィン様が何か考え込んでいるようですね。

「…気になるな。」

「何がだよ？アタシはもういっぱいいっぱいだぜ。」

「何故、最後のクエストにベルをわざわざ指名するんだい？他のクエストへベルはいないのかい？」

「…そういえばそうだな。わざわざ5つのクエストをそれぞれ説明したのが気になる。まさか…。」

「嫌な予感がするのう…。」

はい、正解です。

皆様は1つずつと書いていますが、それは間違いです。

1つずつやるならわざわざ5つも説明しません。

ここからが本番です！

「以上が、五大クエストです。先程も言いましたが、それらのクエストはどれも緊急性をはらみます。時間をかけると厄介なことになります。なので…、我々オラリオ連合で五大クエストを同時攻略します！」

「『同時攻略!』」

「…これほどの規模が同時発生か。」

「…なるほど、そういうことか。」

フィン様は気づいたようですね。

そうでなくては困ります。

…やはり皆様はざわついているようですね。

全てのクエストに、ベル様が入ると思いこんでいるようですね。

ですが、ベル様だよりでは困るのです。

私達…皆様への試練でもあり、ベル様にとっては最大の試練でもあります。

「何故一つずつやらないんだ？」

「恐らく…どれも緊急性を要するものだろうね。」

「ぬう…あの坊主が全部行くと思っただがのう。」

「いや、これは私達にもチャンスだ。ベル・クラネルに頼り切りでは私達の面子が立たない。」

「ああ、オラリオ連合はベルだけじゃねえ。俺らもいる！雑魚に負けてたまるか！」

「そうね！」

「あいつ、無茶苦茶を考えやがる！だが、その方法なら一気に名は上がるし、アタシらも強くなれるし、大抗争よりはマシか…。はあ…、せつかく生き返ったというのにコレか



よ…。」

「『……………』」

ライラ様には気の毒ですが、【凶狼】の言う通りです。

大抗争よりはマシです…いえ、ある意味大抗争よりは難易度が高いかもしれません。  
大抗争では一丸となりましたが、今回は分散するのですから。

## 第425話 栗鼠、進行IV

「ここからが本題です。」

「なお、それぞれのクエストのメンバーはそれぞれのクエストの条件に合わせて、勝手ながら決めさせていただきました。」

「「え？」」

でしょうね。

そう思うのも無理はありません。

まずはアンタレス討伐です。

中心メンバーとしてはエルピス様：元「アルテミス・ファミリア」になります。

「まず、アンタレス討伐です。アンタレスは神アルテミスの精霊：貞潔を司る精霊を取り込んでいます。神アルテミスが言うには、女性または団長ベル・クラネル並の純粹無垢な男性でなければ、アンタレスを傷つけることはできないだろうとのこと。なので、一部を除いた女性陣となります。現場指揮官は「ロキ・ファミリア」副団長リヴェリア・リヨス・アールヴ様にお願いたします。」

「む、私か。了解した。謹んで受けよう。」

「…ベル並の純粹無垢？世界中を探しても、同世代の男性で純粹無垢なのはベルだけと思っよう。」

「…同感だ。」

「あのバグ兔がそこらへんにゴロゴロといてたまるか！ふざけんな！」

「…まあ、そうね。」

女性だけのメンバーの戦力を見ると問題ないようですね。

問題はアンタレスがどれほどの強さになっているかがです。

…精霊の魔法が使えるかもしれない、とエルピス様が言っていたのが非常に気になります。

次はベヒーモスですね。

「2つ目のベヒーモス調査及び討伐です。当ファミリアにはベヒーモスを討伐された立役者の【ゼウス・ファミリア】【暴喰】ザルド様がおられます。本来ならザルド様が行かれるべきですが彼には他のクエストを担当してもらうため、現場指揮官は【ロキ・ファミリア】団長のフィン・ディムナ様をお願いします。メンバーは一部を除いた男性陣です。」

「了解したよ。彼らには後で話をしたいけど、いいかな？」

「はい、彼らからも希望がありました。」



冒険者ではなく、「ヘラ・ファミリア」主神のヘラ様が自ら務めるそうです…。」

「「うわあ…『アマテラス・ファミリア』、終わったな。」」

まあ、その反応は仕方ありませんね。

オラリオに長くおられる冒険者、特に神ヘラを知っている方々にとつては。

「おい、桜花返事しろ（女帝）についてはここでは言わないんだな。神ヘラが指揮官か

…『アマテラス・ファミリア』が気の毒に思えてきたな。」

「あ、ああ！了解した！」

「〔アマテラス・ファミリア〕討伐なんて…使者はヘステイア様と春姫ちゃんに一体何を  
したの!?!後で聞かないと…!」

ヘラ様自らが率いるとは…。

リリのフオローは要らないかもしれません。

…そういえば、ヘステイア様が言っていました。

「やりすぎなければいいけど…。え？ああ、そうだね。あの子、やる気が出る時に限つて  
かなり…いやめちやくちやりすぎてしまうんだよ？あの時もそうだったな。あ、エ  
ルフの戦士くん。キミのことじゃないからね！」

…フオローではなく歯止めと言ったほうが正確かもしれませんね。

そして、闇派閥ですか。

大抗争を引き起こし、オラリオに混沌をもたらした派閥ですか。

ベル様が関わったのは「イケロス・ファミリア」だけですね。

まあ、そのファミリアは既にありませんし主神も神ヘラによつて送還されましたからね。

さて、その闇派閥についてですね。

「4つ目の『オシリス・ファミリア』と『セクメト・ファミリア』ですが、オラリオにいる冒険者及び『ゼウス・ファミリア』の『暴喰』ザルド様が対応します。現場指揮官は一旦リリが預かります。」

「質問いいかな？」

「はい、フィン様。」

やはり来ましたね。

「『オシリス・ファミリア』は15年前、レベル6、5がゴロゴロいた。今はレベル8：いや最悪の場合、レベル9になっているかもしれない。レベル8になったばかりの『暴喰』ただ一人では厳しくないかい？また、先程の3つ目もそうだ。『アマテラス・ファミリア』だけならともかく、古代のモンスターのヤマタノオロチに対してそのレベルと人数は少なくないかい？」

リリの予想通りの質問ですね。

癪ですが、最近フィン様の言動が手にとるようにはわかりません。

…何故でしょうか？

おっと回答しておきましょう。

「はい、フィン様の懸念の通りです。それについては後日解決します。」

「そうかい？それがわかったら、教えてくれないかな？」

「もちろんです。恐らく、身をもって知ることになります。」

「身をもって…？」

ええ、そうです。

まだ未確定ですが、彼らがいまいましたら作戦は五分五分となります。

要は彼ら次第です。

## 第426話 栗鼠、進行V

さて、最後のキモとなるクエストです。

「では、最後の5つ目のクエストです。先程も言いましたが、メンバーは「ヘステイア・ファミリア」主神のヘステイア様、団長のベル・クラネル様。そして、アイズ・ヴァレシユタイン様、レフィーヤ・ウイリディス様、「ディアンケヒト・ファミリア」団長のアミッド・テアサナーレ様の少人数で向かいます。」

「え…私はそっち？…ベルと一緒になのは嬉しいけど、古代のモンスターを討ちたい…。」

「（私は会わなくちやいけない。私達を救ってくれたあの人に…確かめる!）」

アイズ様は不満そうですね。

レフィーヤ様は逆にやる気に満ちていますね。

何があつたでしょうか？

おっと、いけません。

私の…いえ私達の役目を伝えなければいけません。

「私、リリとエイナ・チュール様はオラリオのここ、「ヘステイア・ファミリア」ホーム



で各部隊へフオロー及び指示を飛ばします。よろしくお願いします！」

「ここが司令部です！」

リリはまだレベル2です。

5大クエストへ出るよりここで情報提供や指示をした方が有意義でしょう。

本当ならベル様へ同行したいのですが、観光ならともかくクエストですからねえ…。

エイナさんも鑑定魔法と「白兔眷属」がある限り、ステータスが上がり続けるでしょう。

……リリがレベル1で四苦八苦していたのは何だったのだと改めて思います。

そのエイナさんはどうでしょうか？あ、ご家族と一緒にいますね。

「よし！今まで以上に頑張らないと！」

「10年以上も現場にいなかったが、戦術が大きく変わったんだな。」

「エイナの魔法がより活用できるわね！離れ離れにならずにすんでよかったわね。…ま

さか一家まるごと参加するとは思わなかったわ。」

「よし！私も頑張るぞー！ベル様のために！」

イーナ様は元三女神たちにしごかれ、メキメキと上達しているようです。

もうレベル2間近とか…。早くないですか？

アーデイ様とイーナ様の模擬戦で、レベル3のアーデイ様がタジタジになるくらいと



…それを言うなら、今のベル様は大丈夫なのですか？

………今気にしたって仕方ありませんね！

さて、一旦終わりますか。

皆様が気にされている、クエストごとのメンバーについて公開しましょうか。

「以上です。メンバー表はそちらの命様がかざした羊皮紙に（パッ！）書いてありますので、各自見て下さい。なお、【ゼウス・ファミリア】の【暴喰】ザルド様と【ヘラ・ファミリア】の【静寂】アルフィア様は、オラリオへ周知していませんのでまだ公開はしないで下さい。」

「了解！」

「各部隊についての打ち合わせについては各部隊へおまかせします。では、解散して下さいー！」

あー…、やっと終わりました。

おや？アイズ様がこちらへいらっしやるようですね。

先程の人事に不満があるようですね、

予想通りです。

---

5 大クエストメンバー

○司令部（オラリオ「ヘスティア・ファミア」ホーム）

目的：各部隊への情報提供と指示、フォロー。

・総司令官 リリ

・サポート エイナ

○アンタレス討伐部隊

目的：古代のモンスター「アンタレス」討伐

・指揮官リヴェリア

・戦闘担当

バーチェ・アルガナ・テイオナ・テイオネ・シャクテイ・アリシア・ルウ・アリーゼ・

椿・アイシャ・アーディ・レトウーサ

・フォロー

ライラ・ルルネ・ユートィス・シノス・ルーゼ・エルピス・ランテ等、主に女性陣。

○データイン砂漠の異常（ベヒーモス）調査部隊

目的：データイン砂漠の異常調査及び異常（ベヒーモス）の討伐

・指揮官フィン

・戦闘担当

フィン・ガレス・ベート・アレン・ヘディン・ヘグニ・炎金の四戦士

・フオロー

マリウス・ファルガー・ヴェルフ他、男性陣

○【アマテラス・ファミリア】&ヤマタノオロチ討伐部隊

目的：【アマテラス・ファミリア】壊滅および古代のモンスター「ヤマタノオロチ」討

伐

・指揮官 神ヘラ

・戦闘担当

オツタル・アルフィア・メーテリア・輝夜

・フオロー担当

命・春姫・【タケミカヅチ・ファミリア】の眷属

・同行神

神ヘラ・神タケミカヅチ

○オラリオ防衛部隊

目的：オラリオの防衛及び闇派閥の撲滅

・指揮官（仮） リリ

・戦闘担当

ザルド・ミア・アーニャ・クロエ・ルノア・アイナ・ウイナ・ラウル・アキ、他

・フォロー

オラリオ連合の各ファミリア（主力以外）及びその他のファミリア

○オリンピア救援部隊

目的：天の炎の浄化

・指揮官 ベル

・戦闘担当

アイズ・アミッド・レフイーヤ

・フォロー担当

プロメテウス教団、他

・同行神

神ヘステイア

以上

## 第427話 侍従長、観察。

リリさんの進行はうまくいきましたね。

【勇者】が何か考え込んでいますが、今更無駄ですね。

さて、あの部隊表を見た後の反応はどうでしょうか？

あちらは：アイシヤさんとアリーゼさんとアリシアさんですか。

珍しい組み合わせですね。

「アンタレス討伐か。あたしも春姫へ付き添いたいんだけどねえ…。仕方がないね。」

「全員、女性ね！」

「リヴェリア様为中心なら大丈夫でしょう。」

王族妖精のリヴェリアさんを据えて正解でしたね。

まあ予想通りですね。

彼女は神ヘラ、アルフィアさんとママ友会によく出ていますので、考え方等が変わってきていますから大丈夫でしょう。

おや、あちらはティオナさんたちですか。

「おー！アルガナとティオネも一緒だー！」





「大丈夫かよ…。」



さて、男性方はどうでしょうか？

「俺もフィンとガレスと一緒にか。」

「ちつ…糞狼と一緒にかよ（愚図共はオラリオか…ミアもいることだし大丈夫だろう）。」

「あ？こつちのセリフだ！シスコン糞猫が。」

「ああん？」

「ああ？」

「やめんか！はあ…こやつらの面倒を見ないといかんのか。憂鬱じゃのう。」

似た者同士ですね、「女神の戦車」と「凶狼」は。

あの二人を競わせたら面白そうですね。

…【戦車の片割れ】と【道化の侍者】、【欄花】、セレニアさんにも声をかけておきましょうか。

(?!)( )

「どうしたんじや…二人とも。キョロキョロしおつて。」

「いや…何か獯猛なやつに狙われているような…。」

「てめえと同じなのは癪だが、同感だ…。」

「お主ら…気が合うのか合わないのかわからんのう。」

「気が合わないに決まっているだろうが！どこが合うんだ！こんな奴と！」

「あ？」「ああ？」

「そういうところじゃ。」

あれは後でいいでしょう。

あちらは…「豊穰の女主人」ですか。

「ふん、あたしたちはオラリオ防衛で、アレンはベヒーモス討伐か。」

「か、母ちゃん！私は…ライ達の家を守りたい！」

「いいよ。それ以外はサボるんじゃないよ！（マリアもいることだし、大丈夫だろう）」

ふむ、「小巨人」がいるなら防衛は大きく割けるでしょう。

……………一点に集中させるのもアリですね。

「ちっ…あの人形め、何か企んでいるね…。」

「あの人形？誰…。か、母ちゃん、アレはダメダメ…ミヤ…私は苦手…。」

「わかってるよ！はあ…従業員を増やすか。…これも計算の内かい？癩だねえ。」

「ふえ？新入りが入ってくるの？」



「あちらは『万能者』ですか。部隊表を何度も読み直して首をかしげていますね。それはそうですね。」

「リルルカ・アーデ、お疲れ様です。あの…あちらに私の名前がありませんか?」

「あ、はい。お疲れ様です。それについて、あの方々からアスファイ様への言付けがありません。こちらです。」

「え…?あの方々から?…怖くて見たくないのですが「諦めて下さい…直接連行しに来ますよ?」失礼します…(ペラペラ)これは…!?…なるほど、わかりました。喜んで行かせていただきます!」

アスファイ姫にとっては朗報でしょうね。

いえ、場合によっては今より過酷になるかもしれません。

軽いスキップで「ヘルメス・ファミリア」が集まっている方向へ向かっていますね。

「アスファイ団長?」

「マリウス副団長、私はオラリオ連合の魔道具作製に専念します。かなり大掛かりなので、しばらく留守にします。その間は副団長である貴方へ任せます。」

「ちよ、ちよつと待つて下さい!私は入団してまだ数週間もないのですが!?いきなり、副団長もおかしいでしょう!?今更ですが!ファルガーがいるんじゃないやありませんか!」

「いやいや、有能な新入りがいるから副団長がおすすめでさあ。」

「諦めて下さい。何かあればファルガーとルルネ…(チラツ…)いえローリエへ聞いて下さい。私はこれからずっと働き詰めですから。お互い様です。」

神へらは、本当にいい拾い者をしましたね。

あの奔放な神アレスの手綱を握り、ラキア王国を取りまとめた元王子を。

それに：苦労者という意味でも、アスファイ姫とはあらゆる意味でいい組み合わせです。

アスファイ姫の故国とマリウス王子のラキアと合わせれば、面白いことになりそうです。

まだ、粘っていますね。

マリウス王子はかなり焦っていますね。

何しろ、自分に多くの仕事が一点集中で降りかかってくるのですから。

念願の冒険者になったというのに、ラキア王国にいた時とあまり変わっていないようでは意味ないですからね。

「いや、働き詰めなのに何で満開の笑みなんですか！一体何が…(チラ…)あつ！好きな魔道具作製に集中できるからでしょう!?絶対にそうでしょう!?ずるいですよ！」

「(ちつ、見破られましたか)仕方がありません。オラリオ連合の意思ですから。では、【ヘステイア・ファミリア】の魔導製作部へ行ってきました(ルンタツタ♪)。」

「ちよ、ちよつとー!?せめて最後のスキップは抑えてください!」  
まあ、いいでしょう。

さて…私もそろそろ我慢できません。  
いい加減に調教しなければなりませんね。

## 第429話 侍従長、拉致

「アスファイ、逃げ切ったなー。」

「仕方がない…マリウスの奴を手伝ってやるか。」

それは困りますね。

貴女が手伝うのはしばらく先になりますよ。

「新入りに任すのも罪悪感がわくなー…。ファルガー、あたしも…(ガシツ)…へ?だ、誰だよ。アンタは!」

「あつ…:ファルガー、アタシはちよつと春姫のところへ行つてくるよ。じゃあね(ルルネ、生きろよ…)。」

「え?あ、ああ。」

アイシャさんは察したようですね。

「口を慎め!無礼な駄犬め!…申し訳ありません。我が神よ。こちらの駄犬が失礼しました。」

「我が神!?(ヘルメス様はどうした!?)」

本当にローリエさんは使い物になりますね。

いえ、裏の立役者と言つても過言ではありません。

たつたの数日でファンクラブを取りまとめ、オラリオだけでなく世界へ轟かせるほどの組織を作り上げたのですから。

神ヘルメスはもつとローリエさんを重宝するべきでしたね。

「いえいえ。先程耳に入ったのですが、坊ちやまを疫病神と言いましたね？」

「そ、それがどうしたんだよ！あいつに関わるとアタシがろくな目に合わないんだよ！はい、有罪。」

そもそも貴女が余計なことをしなければよかつただけの話です。

さて、連れていきますか。

「鼻がきく方が欲しかつたところです。ローリエさん、ルルネさんが抜けて支障はありませんか？数日後にお返ししますよ。」

「え？いや…それは「はい！ありません！煮るなり焼くなり刺すなり刻むなり好きにしてくださいませ！」ローリエえええええ！」

「では、行きましょうか？」

「じよ、冗談じゃない！私は逃げ…ガフウツ!?」

レベル3にしては弱すぎますね。

命さんの方がまだ齒ごたえがありますよ。









ええ、オリンピックがアイズさんへの試練に最適な場所はありません。  
アイズさんは戸惑っていますね。

「どう…という意味ですか？」

「アイズ嬢。リヴェリア嬢に聞きましたが、貴女の心を覆っている復讐の炎は未だに消えていませんね？」

「！」

本当に厄介な炎です。

できれば坊ちやまに悪影響を与えたくないため近づいてほしくはないのですが、坊ちやまの憧憬の相手なので無下にはできません。

なので、その炎の真の意味をアイズさん自身が必要があるのです。

「オリンピックには、それを極めた方がいます。貴女はそれを一部始終見てきなさい。」

「……………わかりました（極めた…？どうということ？）。」

「不満そうですね？それ次第では、貴女を今後の戦力から外すかもしれません。」

「そんな!!」

「それは嫌ですよ？それを踏まえた上で、しっかりと見てきなさい。いいですね？これは貴女のためでもあるのです。」

「はい…（私のため？どうということなんだろう…？）。」

ええ、貴女のためでもあり坊ちやまのためでもあるのです。  
さて、ルルネさんをどう料理しましょうか。ふふふ。

## 第430話 愛浮呂、激怒

ここ数日は面白かったわね！

アポロンの無様な姿、イケロスの送還、ヘルメスがボコられる姿、そしてプロメテウスの正体……。

いえ、……濃かったと言ってもいいわね。

ヘファイストス、アルテミス、ヘラがいるから魅了は使えなかったけどね。

それを差し引いても問題なかったわ！

関わらなければいいのよ！関わらなければ！

それにあの子……【白兎の脚】ベル・クラネルをちらつと見たけど、間違いないわ。

微弱……だけど魅了を無意識に放っているわ。

私達、美の神ほど瞬時ではないけど数回重ねているうちに取り込まれてしまうたちの悪いもの。好意を持ってば持つほど、飲み込まれやすいわ。

でもわかかってしまえば、どうってこともないわね！

こちらと同じようにすれば問題ないわ。

そのせいで、眷属が増えたけど……まあいいわ。



はっ!?

そうだったわ。それも目的の1つだったわね。

けど…あのメイという魔導人形というメイドが恐ろしいわ。

不変の神を創り変えようとしているのだから。

ゼウスの子はなんてものを作ったのよ!

まあ、いいわ。もう会うこともないだろうし。

救界はヘステイア…いえオラリオ連合に任せましょう。

それまで私達はのんびりさせてもらおうわ!

オーツホツホツホ!

さて、不安そうなの子たちを安心させないとね。

「…忘れていたわ。もういいわ、害がないとわかったからいいわ(あのメイドが怖すぎる

し…関わりたくないわ!)」。

「そ、そうですか。」

そして私たちはメレンへ戻った。

しかし…あるべきものがなかったわ。

どうなっているのかしら?





「痛い痛い！シノス！折れる、折れちゃうって！」

「それぐらい抜け出て下さい。アーデイさん、この前教えたはずですよね？」  
「えっ…。え、えーと…。」

「はあ…忘れてはいけませんよ。体に叩き込んだ方がいいので折りますね♪」

「ちよ、ちよつと待って！お、思い出したって！」

「ならさつさとやって下さい。」

「ふ、ふんぬううううう！」

「…違いますよ。罰です♪」

「ギャーーーーーッ！」



サンドラは申し訳無さそうにしているわ。

まさか…盗まれたの!?

そんなはずはないわ！アルテナの魔導船ですもの！

仕組みを知らない限り、錨を上げることもできないはずよ！

起動キーはベックリンが持っているはず！

「アフロディーテ様…。その…船ですが。」

「は？何よ！はつきり言いなさい！」



「ヘステイアアアアア！」

「五月蠅い。いい加減に送還するぞ？」

「ひっ！」

な、何でヘラがいるのよ！

ヘステイアはお菓子をくわえながらこつちを見ていたわ。

のんきな子ね！

「何だよ？アフロディーテ、忘れ物かい？」

「しらばつくれたことを言わないでよ！わ、私の船をどうしたのよ！」

「へ？」「は？」

「え？…知らないの？」

え？じゃあ、誰が盗んだのよ？

そこへ呆れた顔をした恐ろしい魔導人形が近づいてきたわ。

怖い怖い怖い！

「今頃気が付いたのですか？神アフロディーテ。」

「ひっ!?あ、あんたの仕業ね！」

「はい、そうでございませぬ。」

「そうでございませぬ、じゃないわよ！か、返してよ！私の船を返してよ——！」







## 第431話 愚者、打合。

神アフロディーテの船を調査しろ、とメイが言うから「アフロディーテ・ファミリア」  
がない間にガサ入れした。

驚いたな…確かに、これはアルテナで作られた魔導船だ。

製造国しか知らない起動スイッチを使って、メレンにあるオラリオ連合用のドックへ  
停めた。

…パクったりしないから許してくれ、神アフロディーテ。

しかし…これは、私の記憶が確かなら国家機密ではなかったのか？

神アフロディーテが言うには、アルテナの商人を魅了して譲ってもらったというが  
…。

あのアルテナが？

今のアルテナは一体どうなっているのだ…？

いやいや、私はもうアルテナとは関わりがなかったな。

さて、この船の構造をミユラーと「万能者」と一緒に調べてみるか。

…思えば、これが三人による初めての共同作業か。

さて、見てみるか。どれどれ…。

ふむ？見覚えのある魔道炉だな。この文字は…私のじゃないか！

「…なんだ、この魔道炉は私が設計したままじゃないか。私のサインもあることだし…（あいつらは何をやっているんだ？設備は真新しいのに、全く進んでないじゃないか）。」  
「部長、そうなのですか？」

「アルテナは貴女の故郷と聞いたのですが…、そこまで深く関わっていたのですか？」  
うむ、ガツツリとな。アルテナの首脳部ではなかったがそれに近かったな。

かなり奥深く関わっていたのは確かだ。

それもあの賢者の石事件がきっかけで離れてしまったがな。

おっと、こちらに集中しなければな。

「うむ、まあな。それはまたの機会に話そう。さて、どれどれ…うわあ、これは恥ずかしいな。若気の至りで一気に作ったままだから、効率が悪い。」

「この複雑な構造の魔道炉を若気の至りで…？部長はすごいですね…。」

「それほどでもないさ。…ううむ、一から作り直した方が早いかもしれない。大分前だからどんな設計か忘れたな…。」

「設計図があればよかったかもしれないね。」

「設計図？あつ！確か…設計図が必要になった緊急時に、解説書や設計図をしまう仕掛



「けが魔道炉まわりにあつたはずだ。確かこの辺に（ゴソゴソ：ガチャ）：ああ、あつた！」

「ええー…。アルテナは何故、貴女を放逐したのですか？アルテナの国家機密がただ漏れじゃないですか…。」

まあな、ほぼ脱走というか放逐されたというか…このあたりは複雑なんだ。

その話は面倒だから今度にしよう。

こちらに集中したいからな。

「まあ、それは話すと長くなるのでな。どれどれ（ペラペラ）…：ああ、少しは改良しているが根本的に直していないな。何やっているんだ、あいつらは…。だが私の神秘がSになった以上、効率がいい最強の魔導炉が作れるな！」

「そ、そうですか（アルテナはこちらの賢者を放逐するなんて…馬鹿なのですか？）。」

「ふむふむ…よし！一から設計し直す手間が省けたな。私はこの設計図を元にして新たな魔導炉を作り上げるので、君たちは例のモノを進めておいてくれ。」

「わかりました。」

ふむ、久々の感覚だ。

今まで数百年は一人でやっていたから、部下を持つのは本当に数百年ぶりだ。

ミユラーは…まあ、改変されているからやましいことは考えないだろう。

【万能者】はどこまで食らいつけるか、これでお手並み拝見といくか。

彼女は神ヘルメスがある海国からさらって来たときは驚いた。

彼女がランクアップし神秘が発現した後、魔道具を次々と作るのは目を見はった。

才能があるに違いない。

ただ、神ヘルメスにこき使われているのは同情を禁じえないな。

見麗しい美人だというのに、目の隈が台無しだ。

…せめてここにいる間はたっぷり寝かせてやるとしよう。

「早く進められるということは…、納期までは何とかかなりそうですね。」

「きつう…（まあ、一人でやるよりはまだマシですね）」

「うむ、私はこの体だから不眠不休が可能だが生身の君たちにはきついだらう。十分な

栄養を取って十分に寝て、時間に集中して取り掛かってくれたまえ。」

「かしこまりました。」

「それは本当にありがとうございます。本当に嬉しいです。本当に来てよかったです。」

「……………【ヘルメス・ファミリア】はどれだけブラックだったのだ？」

「聞かないで下さい…。」

「そ、そうか。」

あの神ヘルメスのことだ、さんざんと無茶振り言われているんだらうな。

こちらでもウラノスから無茶言われているが、それほどでもなかった。分野外の斥候まがいはいはやはり難しかったな…。

しかし…。

「今更だが…、メイたちはとんでもないものを思いつくな。」

「ええ、相手からすればそれは正に悪夢そのものですね。」

「全くだ。いや、あの2人を解放した時点で敵に回った者たちにとっては悪夢だろうね。」

…戦争遊戯までの「フレイヤ・ファミリア」を見たまえ。まさに道化だったぞ？笑えるように笑えなかった…あの「フレイヤ・ファミリア」だぞ？」

「わかります。」

「それはさておき、すぐに取り掛かろう！私はこの古い魔導炉の設計書を元に書き直すことから始める。君たちは例のモノを仕上げておいてくれ。…彼らの言葉を借りるようではないが、時間は有限だからな。」

「はい！部長！」

ふむ、いい部下たちだ。

…アルテナに残された弟子たちは元気…いや数百年すぎた今は死んでいるかもしれんがどうなっているのだろうか…。

## 第432話 道化、愚痴。

今、ウチらはドチビんとこへ向かっているねん。

上の命令やからしやーない。

その命令は…ドチビからでなく、メイたんからやけどな。

あのチート侍従コンビにドチビのファミリア、ほぼ乗っ取られているやんけ！

まあ…あのチート侍従コンビにかかれれば、神力を解放したウチでもヤバイからなー。

…大抗争時にエレボスのバカがもし、あの二人を解放したらヤバかったわ…。

それはおいといて。

…ようやく、ようやく、フィンたちがランクアップしよったああああ！

クノツソスの事後処理やあの色ボケのせいで、更新できるヒマもあらへんかったからな。

せめて戦争遊戯前前に更新しとけば、あんなボロ負けすることはなかったのに！

いや…チート侍従コンビがおる限り、負けていたのは間違いないあらへんけどな。

はあ…、行くのに気が重いわー。

おっとウチが暗くなっとならアカン、アカン。

見栄でも明るくしとかないとな!

「何やろうな? いきなりお茶会やろうというなんて…。ウチらはフィンたちがようやくレベル7ヘランクアップしたお祝いをやりたいんやけど。」

ミア母ちゃんともいいけど、久々にホームで宴会やりたいんや!

そう思つとつたら、メイたんがきよつた…。

「久々に古参同士で茶会でもやりましょう。わかりましたね?」と。

アレ脅迫やろ、変換すると「つべこべ言わず来い、来ないとわかっているだろうな?」  
と。

…行かなかつたら、どんな目にあうかわからへんからな。

それにウチの子らメイたんを見るたびに、めちやくちや怯えるんやで…。

そのせいで、ウチらを追い出すかのような勢いで見送られたんや。

あのベートでも回れ右をするぐらいやからな。

そしてセレニアとリーネとレナたんに捕まるんや。

ますます痩せ狼になるのを見て、同情を禁じえないわ…。

けど、それはそれでありや。

何故なら子ができるのも、そう遠くないやろな。

フヒヒ、楽しみやわ。

おっと、この子らの相手をしとかないとな。

「まあ、後でいいじゃないか。…茶会とは建前だね。僕たちが集まることに意味があるかもしれないね。」

「そやかー。アレ？リヴェリアはどこへ行ったん？」

「…アイナと一緒に先へ行っているよ。ママ友会とね。」

「ママ友…そやか…。はあ…リヴェリア、ここんとこ2日に1回行つとるやないか…。」

「あやつ、独身じゃろう…。」

リヴェリアはアイナさんの付き添いで、よくドチビんどこへ行っているんや…。

最初はアイズたんも一緒に行つてたけど、最初ん時だけや。

理由を聞いたら「恥ずかしいから」って…。

何があつたか、非常に気になるやん！

ママ友会で一体何を話しとるんや、あの子らは。

それは置いといて、ママ友会かあ…。

アイナさんとメーテリアさんはわかるねん。

ホンマに子供がおるんやからな。

でも…アルフィアとリヴェリアはちやうやろ！

アルフィアは甥というベルたんが。

リヴェリアは：「養女?というアイズたんが。」

どっちも結婚してない行き遅れやん!

それを言うとはどんな目にあうか予想できるから、黙るしかないや。

言うたらリヴェリアから打撲程度ですむけど：、アルフィアは絶対打撲程度じゃすまへんやろ。

あのヘラやぞ?あのヘラの眷属やから、絶対に生半可じゃないはずや。

最悪送還されるかもしれん：、怖いわ。

いや、送還ですめばまだいい方かもしれんなあ：。

お?あの後ろ姿：和服：タケミカツちゃんどこ?

あつこにいった大柄なヒューマンって、確か桜花やつた?

あ、ちやうわ。ケモ耳があるから：。

何や、オツタルやん。

「む：お前たちか。」

「やあ、オツタル。君も呼び出されたのかい?」

「ああ、奴らから：行かないと過去のアレヤコレをバラすと言われたら、行くしかないだろう。」

「「アレヤコレ?」」

「……言いたくない。察しろ。」

「「あつ……」」

おおよそ、助平爺と最悪女のところへ通つていた時に散々な目に合わされたことやろな。

やから、よほどのことがない限りウチは行かんやつた。

けど……行かんやつたらあちらさんがアポなしで勝手に入られるんや！

……特にあの助平爺や！どさぐさまぎれに酒を勝手に持つていきよつて！

へらは面合わせたら、即ビンタされるんや。

ウチ悪いこととしてへんのに、何でやねん……。

それに……オツタル、変わったなー。

「ンー、オツタル……なんか雰囲気変わったかい？」

そやな、前はずっと怒っているという感じやったわ。

今はこう……落ち着いているというかどっしりと構えているというか。

「お前たちからもそう見えるか？タケミカツチ様より手ほどき受けて、歩き方から全て指導された。……難しいものだな、長年染み付いた癖を直すというのは。」

「だが……以前より隙がないのう。それに力が抜けて程よくなっているわい。」

うんうん、わかるわ。



色ボケんところにおる時は、常に気を張っていたからな。

まあ、無理もないわ。むしろ、こつちが素とちやう？

「…『フレイヤ・ファミア』団長の責務から解放されたからな（かなり…いやめちやくちや楽になった。あいつらと比べて『タケミカツチ・ファミア』の奴らは素直に聞いてくれるからな。…何故だろう？ ずっと前から知っていたような気がする、特に桜花と千草は。）」

「ああ…、うん。」

あー…、うん。

ある意味、色ボケんところは解散してよかったかもしれないわな。

ざまあして、笑ろうたるわ！